

東方万能録

オムライス_

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何気ない生活が一変。

神の不幸で不幸な死を迎えてしまった一人の青年

不思議な空間で神から告げられたのは東方Project への転生だった

これは全く新しい自分として第二の人生を歩む事になった、終 隼斗の物語

※途中までは地の文と心情描写を分けて書いていない為、それが気になる方には読み辛いかも知れません。

70話からは分けて書いていますので、多少は読みやすくなると思います。(。――。)

目次

1話	転生	1
古代篇		
2話	防衛軍	7
3話	新たな家族	14
4話	月面移住計画	18
5話	人妖大戦（前編）	22
6話	人妖大戦（中編）	26
7話	人妖大戦（後編）	30
8話	大和の国	33
9話	諏訪の国の小さな神	39
10話	土地神 洩矢 諏訪子	44
11話	諏訪大戦 前	48
12話	諏訪大戦	52
13話	八雲 紫	57
14話	銀髪の少女	60
15話	西行寺	67
16話	西行妖	73
17話	避けられない運命	76
18話	弔い合戦	81
19話	封印	86
20話	弱体化	91
21話	V S 四季のフラワーマスター	97
22話	妖怪の山訪問	103

23話	V S	怪力乱神	109
24話	京へ		117
25話	月の使者		125
26話	再開		130
27話	幻想郷訪問		135
28話	もう一人の不老不死		139
29話	妹紅 弟子入りする		144
30話	妹紅 修行編		149
31話	支配された村		153
32話	V S 牛鬼		156
33話	V S 妹紅 (憑依)		159
34話	別れ		163
35話	手負いの大妖怪		167
36話	V S 安倍 泰親		171
37話	八雲の式		175
38話	月面戦争		180
39話	V S 綿月 依姫		186
40話	月の神		195
41話	防衛軍勤務①		203
42話	防衛軍勤務②		207
43話	防衛軍勤務③		213
44話	地上へ		218
幻想郷 過去篇			
45話	幻想郷巡り 人里 ①		226
46話	幻想郷巡り 人里編②		232

47話	幻想郷巡り	永遠亭 ①	238
48話	幻想郷巡り	永遠亭 ②	242
49話	幻想郷巡り	太陽の畑	245
50話	幻想郷巡り	妖怪の山	251
51話	柊 隼斗の楽しい木造建築		257
番外編	幻想郷縁起		263
52話	博麗		267
53話	舞い降りた龍神		272
54話	V S 龍神	目覚めた狂気	278
55話	龍神 V S 西行妖		284
56話	決着		288
57話	激闘の末に		294
58話	小さな魔法使い		302
59話	香霖堂		307
60話	博麗を継ぐ者		313
61話	不吉な噂		318
幻想郷 現代篇			
62話	移りゆく幻想郷		324
63話	紅魔館		328
64話	悪魔の妹		334
65話	数奇な運命		338
66話	孤独の月		345
67話	気高き月		352
68話	紅い月の終わりに		356
69話	異変の後は		363

70話	宴会	367
71話	異変の兆し	371
72話	終わらぬ冬	378
73話	冥界の姫君	386
74話	死を呼ぶ桜(前編)	390
75話	死を呼ぶ桜(後編)	396
番外編2	妖夢の憂鬱	402
76話	繰り返す宴	408
77話	旧友との再会	414
78話	V S 小さな百鬼夜行	418
79話	○年△組 隼八先生く!!(前編)	426
80話	○年△組 隼八先生く!!(中編)	433
81話	○年△組 隼八先生く!!(後編)	441
82話	月の陰謀	453
83話	水面下の脅威	460
84話	太古の月	466
85話	誰を殴りましょうか?	474
86話	それぞれの戦い(前編)	477
87話	それぞれの戦い(後編)	486
88話	夜明け	493
89話	百花繚乱	499
90話	楽園の閻魔	504
番外編3	笠地蔵	510
91話	もう一つの社	515
92話	V S 現人神	521

93話	守矢の神々	527
94話	異常気象く博麗神社倒壊く	532
95話	天界へ	537
96話	天界の我儘娘	542
97話	もう一つの企み	550
98話	地底の底から	558
99話	地底の奥へ	562
100話	鬼の住む町	567
101話	地霊殿	574
102話	古明地 さとり	580
103話	八咫烏を宿した少女	585
104話	沈静化	591
105話	お騒がせな神様	597
106話	空を漂う船	609
107話	法界に囚われし僧侶(前編)	617
108話	法界に囚われし僧侶(後編)	624
109話	魔界の獣	632
110話	聖輦船の守り人	641
111話	大脱出	654
112話	銀髪の剣豪	666
113話	隼斗の魔界探索記・序章	675
114話	隼斗の魔界探索記 ①	680
115話	隼斗の魔界探索記 ②	685
116話	隼斗の魔界探索記 ③	693
117話	隼斗の魔界探索記 ④	698

1 1 8 話	隼斗の魔界探索記	⑤	703
1 1 9 話	隼斗の魔界探索記	⑥	709
1 2 0 話	隼斗の魔界探索記	⑦	717
1 2 1 話	隼斗の魔界探索記	最終章	724
幻想郷 激動篇			
1 2 2 話	不吉の再来		737
1 2 3 話	拡散する凶変		745
1 2 4 話	遭遇		751
1 2 5 話	悪魔の姉妹		757
1 2 6 話	悪魔の猛威（前編）		764
1 2 7 話	悪魔の猛威（後編）		769
1 2 8 話	魔法の可能性		781
1 2 9 話	悪魔との決着		790
1 3 0 話	死の天使		799
1 3 1 話	いざ、倒れ逝くその時まで		812
1 3 2 話	死地		826
1 3 3 話	二人の師匠		838
1 3 4 話	反撃の狼煙		851
1 3 5 話	V S 死の天使		858
1 3 6 話	死闘の幕開け		868
1 3 7 話	幻想郷首脳会議		879
1 3 8 話	それぞれが背負うモノ		886
1 3 9 話	嵐の前の静けさ		891
1 4 0 話	暗躍する英雄		897
1 4 1 話	引いた波は再び迫る		903

142話	甦る喧騒	913
143話	統率者	923
144話	猛威との対峙	936
145話	蹂躪	949
146話	不死鳥の焰	959
147話	夢幻の狭間に咲く花	977
148話	スカーレット・デビル	998
149話	包容する大空	1021
150話	神と人 (前編)	1040
151話	神と人 (後編)	1055
152話	心理と真理 (前編)	1073
153話	心理と真理 (後編)	1086
154話	剣豪 VS 武神 (前編)	1141
155話	剣豪 VS 武神 (後編)	1124
156話	戦闘の背景で	1153
157話	三ツ頭の竜	1173
158話	魔を払う	1181
159話	穢れと浄化	1193
160話	神の魔剣	1206
161話	博麗を担うと言う意味	1214
162話	月の増援 ①	1226
163話	月の増援 ②	1240
164話	月の増援 ③	1254
165話	蘇る月光	1273
166話	背負った重み	1280

167話	一騎打ち	1292
168話	干渉不能の隔離空間	1303
169話	使命がもたらすモノ	1309
170話	墮落した天使	1317
171話	それは『天使だった者』	1324
172話	滅びの『目(まなこ)』	1331
173話	絶望の果てに	1338
174話	終戦、残るは……。	1344
175話	異変の傷跡	1352
176話	生じた空白	1363
177話	英雄の末路	1373
178話	託されたもの	1382
179話	幻想郷巡り 一步目	1398
180話	幻想郷巡り 軌跡	1406
番外編4	誰も知らない『彼』のお話	1414
181話	幻想郷巡り 再開	1419
182話	おいでよ 博麗神社	1427
183話	一新! 博麗神社	1433
184話	一つの切っ掛けで	1439
185話	『彼』の帰還を信じる者達	1446
186話	前を向く者達	1457
187話	繋がる一步	1464
188話	此岸と彼岸と……	1467
189話	闇の果てから	1471
190話	その者は	1481

1505 191話 その能力(ちから)は――。
192話 妖怪)よくよく考えたら参拝のやり方わからなくね?
1491

1話 転生

「えっ?どこだここ…」

あれ?確か今まで自宅のリビングでテレビ見てたよな?

んで、もの凄い轟音と同時にトラックが突っ込んで来て……

「…ひよつとして俺死んだ?」

「うん、こっちのミスでね」

突然後ろから声が掛かった

振り返るとそこにいたのは見た目小学生位の女の子

「…誰?」

「私は君の世界を担当していた神だよ」

カミミ?髪?紙?

「…言っておくがGodのほうだぞ」

「その歳で早くも中二病か?大変だな」

「いやいや本物の神だよ。それに私は君よりも大分歳上だよ」

「はいはい」

さてこんな子供に付き合ってる場合じゃない。これからどうするか決めなきゃな

「だから子供じゃないってば」

「えっ、何でわかったんだよ」

「神なんだから心を読む位造作も無いことよ」

「…」

(バーカ、チービ、アホ毛、貧n…)

「誰が貧乳だ!!」

「あ痛ーっ!?!」

頭を叩かれた。気にしてたのか

つてかコイツ本当に心を…

「えーと…マジで神様?」

「だからそう言ってるでしょ!」

「なんか大分イメージと違うな」

神様つてもっと髭もじやの仙人みたいな爺さんがやってるのかと

思った

「んじやあ神様、さつき言つてたこつちのミスつてのは？」

「言葉通りの意味。本来死ぬはずのなかった君が死んでしまったのは、君の住んでた地域の担当だった私の部下がコーヒーを零して命の火を消してしまったから」

「命の火？」

「まあ寿命のようなものかな」

「ええ。じやあ何、実質俺はコーヒーが原因で死んだのか？」

「まあ、そう言うことになるね」

「おいおい不幸ってレベルじゃねえぞ」

「でもその割りにはあんまり凹んでないね」

「そりやいきなり死んだって言われても実感湧かないし。つてか俺はこれからどうなるんだ？」

「やっぱり地獄の閻魔の所に行つて天国行きか地獄行きか決められるのか？」

「いやいや地獄には行かないよ。なんて言つたつて此方のミスで死なせてしまったんだ。だからお詫びと言つてはなんだけど、君には第二の人生をプレゼントしよう」

「第二の人生？」

「転生つて聞いたことない？全く別の自分として新しく生まれ変わる事なんだけど」

「ああ、転生ね。聞いたことあるわ」

「確かO☆T☆A☆K☆Uな友人が最近転生モノのssが熱い！とか、騒いでたな」

「余りにもテンション高くて鬱陶しかったから殴つといたけど」

「記憶とかはどうなるんだ？」

「君が望むなら残したままでも可能だよ」

「でも生まれ変わるつて事はまた赤ん坊からやり直すつて事だろ？面倒臭くないか？」

「大丈夫よ。物心つく頃に記憶も蘇るようになるから」

「そりやいいや。少なくとも中学生に上がるまでなら勉強で困るこ

とはないな

「で、その転生先はどこになるんだ？」

「うん。公平に行われた抽選の結果。君の転生先は『東方Project』の世界に決まった」

「東方……ああ、あいつが言ってたヤツか」

あいつとは勿論O☆TA☆KUの友人の事だ

確か妖怪やら神やらが沢山出てくる世界だったか？

「それに伴って君には能力を授けようと思う」

「能力？なんの？」

「それは後々のお楽しみ。まあでも、大体君が3歳位まで育った時には解るはずだよ」

「そりやぐ親切にどうも」

「じゃあ最後に君の名前を教えてくださいかな？元いた世界での名前を消して転生先での名前に使うから」

「使い回しかよ！それに神なんだから聞かなくてもわかるだろ？」

「そりやそうだけどこれは一種の契約の様なものだからね。君の口から言ってもらわないと駄目なんだよ」

「…終 隼斗」

「では終 隼斗。2度目の人生、十分に謳歌してね！」

神が言い終わると同時に俺の意識は途切れた

地上を恐竜が支配するよりも遙か昔。

とある場所には文明の発達した都市が存在していた。

数々の高層建築物が建ち並び、外を走る車は空を飛び、排気ガスなど一切出さない

都市を囲う様に設置された防壁はこの地に存在する妖怪等の侵入を防ぐ役割をもつ

巡回する兵士がもつ銃は弾丸は発射せずレーザーを射出するものだ

どれもが近未来を思わせるものばかり。

そんな都市に今日、新たな命が誕生した

「おぎやあ！おぎやあ！」

「産まれたのか!？」

「ええ、元気な男の子ですよ」

「…ほら、パパだぞ〜わかるか？」

「はあはあ…アナタ」

「春奈、よく頑張ったな！」

「はーい、お母さんですよ〜」

「う〜」

「まあ、なんて可愛らしいのかしら。…アナタ、この子の名前は考えてくれた？」

「ああ」

産まれたばかりの赤子を抱き上げその名を告げる父親

「お前は…」

ー

3年後

「あつ、物心ついた」

そんな3歳児にあるまじき言葉を発した人物。はじめまして！前回神の不手際により転生することになった柗 隼斗（3歳）です

いや〜何かあれだな。マジで生まれ変わったんだな俺

近くにあった鏡で自分の姿を見てみると確かに赤子の姿をしている

暫くして部屋の扉が開き、女性が入ってきた

「あら〜隼斗ちゃん、鏡で遊んでるの？」

俺の意識が戻ったのはついさつきだから記憶に無いが、恐らくこの人が俺の母親だろう

「まーまー」

まあいきなり悠長に喋り出す訳にはいかないので赤ん坊っぽく話してみたが、今の俺は見た目3歳児、中身二十歳なので正直恥ずかし

い

「はい、それじゃあご飯にしましょうね」

そう言っただけで母さんが持ってきたのは、離乳食かと思いきや、トレイにのった普通の朝食だった

「はいアーンして」

「えっ…」

スプーンで飯を掬って此方に差し出してきた母さんをみて、若干顔がひきつる俺

この歳で（3歳だけど）母親からアーンは恥ずかしい

「…」

俺は無言で母さんからスプーンを奪った

「えっ…!?!」

今度は母さんが驚いた顔をした

「凄いわ隼斗ちゃん！自分で食べられるの!?!」

「…うん」

「まあ偉いわね！パパが帰ってきたら教えてあげなくちゃ」

「…」

こんな事でこんなに喜ぶなんて、子供は楽でいいな

あまり味の濃くないハンバーグを頬張りながらそう思う隼斗であつた

ー

「そう言えば能力」

ある日ふと思ひ出した

転生前あの少女神が言っていた能力を授けると言う言葉。そしてそれは物心ついた時にわかるとも言っていた

そんな事を考えていると、頭の中に能力のイメージが浮かび上がってきた

『超人になる程度の能力』

超人？抽象的過ぎてよくわからん。

つまりあれか？スーパーマン的な超人的戦闘力を得るとかそんなのか？

だとしたら俺最強じゃね？

試しに軽く壁を殴ってみた

ゴツ!!

ズ……ズズンツ

つと言う音と共に部屋の一角崩壊

わ、わーお……やちちまつたぜベイビー……

おっとベイビーは俺か……じゃなくてやべえ!!と、とにかく寝たふりしよ

その後音を聞きつけて部屋に飛び込んできた両親が現場を見て啞然

だがスヤスヤと寝たふりをする俺をみて安堵の息を漏らす

愛されてんなあ、俺

パパ、ママごめんなさい

古代篇

2話 防衛軍

「ん……夢か」

部屋に響く目覚ましのアラーム音によって俺は目を覚ました

「ガキの頃の夢を見るなんて老人みたいだな」

あれから数百年。

長いようで、時間はあつという間に過ぎた

この世界では元々寿命という概念がないらしく、人々は老いる事はなかったが、百年程前に突如妖怪の数が急増

それと同時に穢れと呼ばれるモノが見つかり、これが原因でこの世界にも寿命が存在する様になってしまった

この世界基準では若く、又超人である俺は大丈夫だったが、元々長い時を生きてきた両親は寿命により30年程前に他界。

当時は悲しみにくれ、何も手につかないほどだったが、友人など周りの支えにより立ち直る事ができた。

現在俺はこの都市を防衛する軍の部隊長を勤めている

まあ超人になってしまった俺が力を発揮できる所と言ったら軍しか無かったからなんだが

超人の力も大分コントロール出来る様になり、何より強すぎる力をセーブすることを覚えた

「あら、やっと起きたの？」

居間に降りた俺にそう話しかけてきた女性は八意 永琳。

この都市の科学者で、トップレベルの頭脳を持つ存在だ。

俺との関係は、遡ること数百年前。

俺がまだ5歳のガキだった頃にお隣さんに産まれた子だった。

お隣さんということもあり、よく遊んだりしていた

俗に言う幼馴染と言うやつで、この世界における俺の大事な親友だ。両親が死んで塞ぎ込んでいた俺を一番気にかけてくれて、元氣付けてくれたのも永琳だった。

「おはよう永琳」

「ふふ、おはよう隼斗」

朝の挨拶を交わし一緒に食事をとる。

1日はいつもこうして始まる

と言つても別に同居してるわけじゃ無い。

軍に入り、食事を疎かにしていた俺を見兼ねた永琳が「私が作つてあげるからちゃんと食事をとりなさい」と言ってきたのが始めだ

なので朝昼晩の食事はいつも永琳が作ってくれる

「いつも悪いな、飯作ってもらつて」

「私が好きでやってることだもの。気にしないで」

そんな何気ない朝食を終えると、永琳が真剣な顔になった

仕事の話だろう

「最近また妖怪の量が増えてきてるわね」

「みたいだな。昨日も都のゲート付近に向かってきていた妖怪とウチの部隊が交戦したけど、隊員は苦戦したらしいし。強い個体も現れはじめてる」

「ここ最近になって妖怪の動きが活発化し始め、徐々に勢力を増してきている」

「まあ、今のところ都市内に被害は出てないし防衛も万全な状態だ。そこまで心配することも無いだろ」

「だいたいいいけど」

「おつと、もうこんな時間か。今日は部隊長の会議があつたんだつた」
「あらあら、時間は大丈夫なの？」

「まあ、少し急げば間に合うから大丈夫だ。じゃあ永琳、ご馳走様。いつもありがとなー！」

そう言つて居間を出て行く隼斗

「いつもありがとう…か。」

一人居間に残る永琳は隼斗の出で行った扉を見つめる

「こちらこそよ隼斗。いつも一緒にいてくれてありがとう」

ー

「ふう、やっと終わったか」

時刻は丁度昼を回ったところ

今俺は会議を終えて防衛軍本部の屋上にいる

「つたく、半日全部を会議に費やすとか、かつたるいったらねえな」

「仕方ないですよ。最近妖怪が活発化してますし、何が起こるかわかりませんから」

そう俺のグチに応えたのは、俺が指揮する部隊の副官を務める 春

雨 麻矢 だ

成績優秀に加え、まだ若いながらも誰からも頼れる存在で、ぶつちやけ俺よりも隊長らしい

「まあ、そりやそうだけどさ」

相変わらず気だるそうに答えながら昼の弁当を開いた。永琳の手作りだ。

ハンバーグに唐揚げ、卵焼きや(野菜↓)ポテトサラダ(↑野菜)まで入ってる。：勿論野菜もあるよ？

「相変わらず隊長のお弁当は豪華ですね。しかも八意様の手作りなんて羨ましいです」

「まあな。どうだい一つ」

「えっ！いいんですか!?!」

俺が一つやろうかと聞いた瞬間、嬉しそうに近づいてくる麻矢

「ほれ、口開けろ」

卵焼きを一つ箸で掴んで麻矢の口元に持っていくと、麻矢は顔を赤くして

「い、いえいえ！じ、自分で食べられますか…むぐっ!?!」

つと身振り手振りをダイナミックにしながら断ってきたが、いちいち面倒臭いと思つた俺は半ば無理やり卵焼きを押し込んだ

「どうだ？美味いだろ」

「……はい」

さつきより顔を赤くさせながら頷く麻矢。

そんなに恥ずかしかったか？
そんなこんなで昼休憩終了。

今日は午後から外回り（都の壁外の見回り警備）がある。
本来外回りは外周警戒員がやるのだが、週に一度は隊長クラスが見
回って不測の事態が起きてても対処出来る様になっている

「んじゃ、行きますかね。準備いいか麻矢」

「はい！行きましょう」

――

「…これで、南ゲートから北ゲートまで異常無しと」

「うしっ、じゃあ最後に西ゲート行って終わりだな」

「はい。それにしても今日は平和ですよ、不気味なくらい」

「…そうだな」

南ゲートから、反時計回りに巡回してきたが、まだ一匹も妖怪と遭
遇していない。

麻矢の言う様に気味が悪いほど何もなかった。

「麻矢、西ゲートまでは警戒を強めて行くぞ」

「了解」

なんだろう。嫌な予感がする

――西ゲート

「…特に何もありませんね」

「だな」

唯の思い過ぎしだったか。

そう思った矢先、俺の鼻に入ってきた独特の鉄くさい臭い

丁度この先。森の方角

「麻矢、戦闘準備」

「えっ?」

「…すぐ近くから血の臭いだ」

俺の言葉に直様戦闘態勢に移る麻矢。

次の瞬間前方の茂みから何か出てきた。

全身血だらけで、体のあちこちには何か鋭利な物で斬りつけられた様な生々しい傷。

息も絶え絶えにゆっくりと此方に近づいてくるそれは、見覚えのある格好をしていた。

「嘘っ……人!？」

「しかもあの服はウチの軍支給のものだな」

「だ……だずげっ……」

最早話す事もままならないその兵士は、いい終える前に地に倒れ伏した

「だ、大丈夫ですか!? しつかり……」

「げほっ! がっ……はあ、はあ……よ……妖怪……が……」

「麻矢!!」

俺は叫ぶと同時に駆け出していた。

麻矢の背後には。今まさに飛びかかるとしている妖怪の姿があつたからだ

「おらあっ!!」

妖怪の牙が麻矢達に届ききる前に、俺の拳が妖怪を吹き飛ばした

「くっ! すみません、隊長」

「気にするな。それより兵士は?」

「……っ!」

俺の質問に首を横に振る麻矢

ふと、兵士の方に視線だけ向けると大きな血溜まりの中で息を引き取っていた

「……そうか」

一言そう返して直ぐに前方の茂みを睨む

「グルルルっ!」

先程ぶっ飛ばした奴とは違う。

数にして十五、六匹の狼の群れだった。

だが普通の狼とは違い、体毛は白く、瞳は紅、そして何より体長3mはある妖狼だった

その真っ白な毛並みは返り血で赤く染まっている

「囲まれたか。ざっと見て十匹以上。麻矢、いけるか？」

確認のために首だけを動かして麻矢に問う俺に麻矢も頷く。

「うしっ、行くぞー！」

そう言っただけは妖狼の群れに突っ込んだ。

「先手必勝だ！」

俺は一瞬で間合いを詰め、妖狼を殴り飛ばした。

何故ここまで科学の発達した世界でレーザー銃等を使わないのかと問われれば、俺には必要ないからだ。

『超人になる程度の能力』により、俺の身体能力は常人を遥かに凌駕している。

その威力はご覧の通り。

殴り付けた部位は爆散し、その勢いのまま十数メートル吹き飛ばした

これでも大分加減してる方だ

「…8、9、10っ」と

あつという間に10匹の妖狼を殲滅して麻矢の方を向くと、あつちも丁度終わった様だ

「よお、怪我してないか？」

「問題ありません。これでも副隊長ですからね！」

麻矢の倒した妖狼に視線を落とすと、一匹一匹的確に眉間や急所を撃ち抜かれていた

これは麻矢の銃の腕前もそうだが、能力によるものでもある。

『相手の体感速度を下げる程度の能力』

これは相手が感じている体感速度を操り自分より遅くする。(〃この能力は〃遅くする〃、〃これは〃遅くする能力だ〃)

そうすることで相手は知らず知らずの内に自分の速度に制限をかけてしまい、麻矢の動きについて来れなくなる。

つまり、普段通りの速度が途轍もなく速く感じてしまうということだ。

「麻矢、先に本部に戻り今回の事を報告書にまとめて上層部に報告してくれ」

「隊長はどうするんですか？」

「俺は引き続き警戒して安全が確認できてから戻る」

「わかりました。お気をつけて」

――

あの後動哨を続けたがこれと言って目立った事は無し。妖怪もあれ以降見ていない。

一つ腑に落ちない点を挙げるなら、普段はもっと活発なはずの妖怪達を、西ゲート付近でしか見かけなかった事。

ただ身を潜めていた訳でもない。それなら俺が気配を感じ取れるからだ。

気配すらしなかったと言うことは、その付近には居なかったと言うこと

……何故だ？

「どうしたの？食事中に難しい顔して」

昼間の事で考え込んでいると、正面に座っている永琳から声がかかった

「いや、何でもない」

何だか考ええるのも面倒臭くなったので、一旦思考をストップさせる
「そう？ならいいけど」

そう言つて永琳は話題を変えた

「ねえ、貴方明日から休暇に入るわよね？」

「まあな。なんだ？どっか連れてってほしいのか？」

「うーん、是非お願いしたいところだけど生憎と仕事なのよね」

ありや、休暇の予定を聞いてくるもんだからてつきりそう思ったが大変だな科学者は。

「じゃあ何で聞いたんだ？」

「貴方に一つお願いがあつてね」

お願い？永琳にしては珍しいな

「私が研究以外で請け負ってる仕事は知ってるわよね？」

「ああ、確かどっかの名家で勉学とか教えてるんだっけか？」

「綿月家よ。それでお願いって言うのはね？」

3話 新たな家族

「おいおい、すげえ屋敷だな」

今俺はこの都でも随一の名家、綿月家に来ていた。綿月家と言えば武家としても有名で、現当主の綿月 信玄は防衛軍の上層に位置する最高幹部の一人らしい（昨日永琳から聞いた）。

昨日永琳から頼まれた内容はこうだ。

今自分が教えている綿月家の姉妹の武術指南をしてくれないか

何でもその姉妹は将来防衛軍のトップを請け負うことになるため、学問だけでなく戦闘技術も必要なのだそうだ

「だからって俺にフルか？…ったく」

仕事より休日命の俺には休み返上は辛い。

相手が永琳じゃなけりや断ってたところだ

「止まれ。ここに何の用だ？」

屋敷内に入ろうと近づいた途端、門番らしき兵士に止められた

「八意永琳の紹介で来た。綿月姉妹への武術指南役としてな。これ、紹介状」

「八意様の？…確かにあの方の印もある。…失礼だが身分を証明できる物をお持ちか？」

「えーと、軍の身分証でいいか。ほれ」

「どれ…って部隊長!?!」

俺が部隊長だとわかった途端心底驚いた顔をする門番。

確かに自分でも柄じゃないってのは思ってるけどそんな意外か？

「し、失礼しました。ではお通りください」

ー

「八意博士から話は聞いている。よく来てくれた柊隊長。私はこの当主の綿月信玄と言う。よろしく頼むよ」

「此方こそ、柊 隼斗です」

屋敷に入ると、家政婦っぽい人に客間へと通された。

しばらく待っていると目の前の綿月家当主、綿月信玄のお出ましと

いうわけだ。

一応最高幹部という事で敬語を使っているが、普段使わないだけあって違和感が半端ない

「では柊君に指南していただく娘達を紹介しよう。入りなさい」

そう信玄が言うと、声を飛ばした方の襖がスツと開き女の子が2人入ってきた

「お初にお目にかかります、綿月豊姫と申します」

「は、はじめまして：綿月依姫といます」

初めに落ち着いた物腰で自己紹介したのが姉の豊姫で、次に少し緊張しながらも挨拶してきたのが妹の依姫だ

「此方こそ、柊 隼斗です」

最初に信玄に名乗った時と全く同じことを言ってしまった。

つとそこで信玄が会話に入る

「さて自己紹介を終えたところで早速始めていきたいと思う。二人とも準備はいいか？」

「はい」

「では私は仕事に戻るとする。柊君、後は頼めるか？」

「わかりました」

そう言つて部屋を後にする信玄

なんだ、初日くらい娘達の稽古姿を見ていけばいいのに。

案外素っ気ないんだな。

まあでも最高幹部ともなれば仕方ないのか？

「じゃあ始めようか：つてどこでやればいいんだ？」

俺の疑問に豊姫が答えた

「それなら屋敷の裏手にある道場はどうでしょう？」

「よし、ならそこに行こう」

――

その日はまだ初日という事で軽めの稽古にしたのだが、二人とも予想していたよりかなり才能があり、豊姫は幼くして既に能力を開花させ、依姫は能力こそまだ使いこなせていないが剣術には目を見張るものがある。

そこでこれからは其々の得意分野に分けて稽古を付けていく事にした。

二人ともまだ子供なのに大したもんだ

――

綿月家の武術指南役を請け負ってから五年程過ぎた頃。

ある日永琳が俺の家に小さな女の子を連れて来た。

「…隠し子か？」

ゴチンツ

殴られた。

しかもグーで脳天を

「そんな訳ないでしょ？あんまり巫山戯てると殴るわよ？」

「次からは殴る前に言ってくれ」

などといつも通りの掛け合いが始まるうとしていたが永琳がゴホンツと咳払いをして話を戻した

「この子は蓬萊山 輝夜。新しく私が担当する事になった姫様よ」

「姫？そりやまた凄いな。で？何で俺のところに来て来たんだ？」

「上から言われたのよ。教育係として預かってほしいと。これから一緒に住むんだもの、だから貴方にも紹介しておこうと思ってるね」

「成る程。俺は柘 隼斗だ、好きに呼んでくれていいぞ。よろしくな」
簡単な自己紹介をしながら手を差し出すと姫はオズオズとその手をにぎり返してきた

「よ…よろしく、隼斗」

「じゃあ自己紹介も終わった事だし久しぶりに外食しましょうか」

「えっ、いいのか？姫何だから下手に外出すと危ないんじゃないか？」

「あら、危なくなったら貴方が守ってくれるでしょ？」

「…まあそんな時はな」

〜二年後

俺が自分の部屋で寛いでいると、襖が勢いよく開け放たれた。

「隼斗くゲームやる！」

今日永琳と遊びに来ていた輝夜だ。

「んー？もう勉強は終わったのか？」

「まだだけど早く遊びたくって」

すると再び襖が勢いよく開き、怒りの教師永琳登場

「こーら姫様！お勉強も終えてないのにゲームなんて許しませんよ！」

「やーだー！隼斗と遊ぶー!!」

まるでオカンの様に叱る永琳と駄々っ子の如く手足をバタつかせる輝夜の囃

仕方ない、助け舟出してやるか

「まあまあ永琳、輝夜はまだ子供なんだから毎日勉強勉強じゃストレスも溜まっちゃまうって。な？一時間だけ遊ばせてやってくれよ。そしたら俺が責任もって勉強させるからさ。どうだ輝夜」

「うん！隼斗と一緒になら勉強する！」

「ほら、輝夜もこう言ってるし頼むよ」

「…はあ、わかったわよ。その代わり一時間経ったらちゃんと勉強する事！約束ですよ姫様」

「はーい！隼斗、早く早く!!」

「わかったわかったって」

嬉しそうにゲームの入った箱を引っ張り出す輝夜。

俺は普段ゲームとかはやらないんだが、何度か輝夜が遊びに来る様になってから一緒にやる様になった

「はい、隼斗のコントローラ」

「そんなに慌てなくてもまだ時間はあるぞ」

4話 月面移住計画

翌日の防衛軍本部は間近に迫ったある計画に向け慌ただしかった
「月面移住計画」

これは数年前から計画されているもので、その名の通り今住んでいる地を捨てて月に移り住むという大掛かりな計画だ

ここ地上では数十年前から続く妖怪の活発化と穢れによる寿命の発生。

そして数年前から穢れがより濃くなってきた事により、これ以上地上に住むのは危険だろうという事で発案された

今科学者を総動員して進められているのは、月までの足となるロケットの製作だ。

勿論その中には永琳もいる

「完成まで後一月だったか？もう直ぐだな」

「はい、何だか実感湧きませんね。月に移住だなんて」

「…ああ」

「隊長？」

「いや、何でもない」

〜一月後

「もうすぐロケットの搭乗時間だ。二人とも準備はいいか？」

「ええ。さつ、姫様行きますよ」

「隼斗は一緒に来ないの？」

「心配するな、後から行く。輝夜は永琳と先に乗っていい子にしてろ。な？」

不安そうな輝夜にそう言って優しく頭を撫でると少し表情が和らいだ

ロケットに搭乗する人物には優先順位があり、まず第一便が主に都市の重役やその関係者・科学者など

次に一般市民、そして最後が兵士だ。

永琳に輝夜、綿月家も第一便に乗っている

「じゃあ引き続き警戒に行ってくる。永琳、輝夜を頼むぞ」

「ええ。貴方も気をつけて」

「ああ」

――

「あつ、隊長お疲れ様です」

「麻矢、どうだ外の様子は」

「今のところ異常はありません。このまま何も無ければいいんですが」

「念のため次の外部動哨組が帰ってきたら全てのゲートを封鎖してくれ。俺は各部隊長にその旨を伝えてくる」

「了解」

『隊長、たった今全てのゲートの閉鎖が完了しました』

『ご苦労さん。引き続き警戒にあたってくれ。俺も直ぐ行く』

『了解』

「さて…」

「あら、隼斗？」

麻矢との無線を切り配置場所に戻ろうとした時後ろから声がかかった

「永琳に輝夜？どうした、もうすぐロケット発進時間だろ」

「実は姫様が忘れ物したって言うから取りに戻っていたのよ」

「忘れ物？」

「これ！隼斗のゲーム」

「おいおい、態々俺の家まで取りに行ったのかよ」

「まあいいじゃない、時間はまだあるんだし」

「まあ何でもいいや。とにかく二人とも早くロケットに…」

そう言いかけた瞬間だった

ビー！ビー！ビー！

けたたましいサイレンの音が響き渡った

『た、隊長！！春雨です！応答願います！！』

それと同時に無線から麻矢の慌ただしい声が飛んだ

「どうした？このサイレンが鳴ったって事は何か異常事態か？」

『妖怪です！南西方向から妖怪の大群が押し寄せて来ます！！』

「何だどっ!?数は！」

『不明です！少なくとも景色が埋まる程は確認できます！』

って事は百や二百じゃないな

「とにかく迎撃準備だ！他部隊と連携をとって防壁の砲門を起動させろ！」

『りよ、了解！』

ピッ

「は、隼斗？」

「永琳、ここは危険だ。輝夜を連れて急いでロケットに乗り込め」

「待って！大丈夫なの!?妖怪が大群で攻めてきたんでしよう!？」

「心配するな、二人は必ず守る」

「そうじゃないわ！私が心配してるのは貴方の…!」

「永琳!!」

「っ!」

「しっかりしろ永琳。今ここでお前が取り乱したら輝夜はどうなる？」

お前がそばでしっかり守ってやらねえと駄目だろうが！」

「!」

ふと輝夜の方に視線を向けると、永琳の手をギュツと掴んで震えていた

「え、永琳…」

それを見た永琳はハツと我に帰り、直ぐ様しやがんで輝夜と目線を合わせると優しい口調で言った

「大丈夫ですよ姫様。どんな事であろうと姫様には私が付いてますから。それに隼斗だって」

そう言つて此方に顔を向ける永琳

輝夜もつられて此方を向く

「心配するな輝夜。どんな怖い奴らが襲って来たって俺が必ず守ってやる。約束だ！」

先程と同様に、安心させる為優しく頭を撫でた

「…うん」

「よーしいい子だ」

「隼斗…」

「なんd…おっと」

急に永琳に抱き寄せられた

「約束して。必ず帰ってくるって…お願い！」

俺を抱きしめる腕に一層力を込める永琳。

不安なんだろう。どうしようもなく。

自分がこの世で一番愛する人物が自分を残して戦場に行ってしまう事が。

堪らなく悔しいのだろう。自分も一緒になって戦えない事が。

だから俺は一言。たった一言添えて抱き返した

「必ず戻る、だから待っていてくれ」

「…ええ」

そして俺は戦場に駆けた

5話 人妖大戦（前編）

「待たせたな、状況は？」

「隊長！……アレです」

麻矢の指差す方角を見ると、都市から南西方向の大地が黒い影で覆い尽くされていた。

「あれ全部妖怪か。レーザー砲の射程まで後どれ位だ！」

砲撃手に向け声を飛ばす

「約1キロ程です！」

「よし、妖怪が射程圏内に入り次第一斉照射だ。絶対に都に入れるな！」

「了解！」

「アレだけの数……レーザー砲だけで大丈夫でしょうか」

「……多分難しいだろうな」

「そう……ですか」

「麻矢、もし砲撃でも駄目ならお前達は「撤退はしませんよ」むっ……」

「隊長お一人で戦うつもりなんでしょう？そんな無茶はさせられません」

「いやしかし……」

「私だって防衛軍副官なんです。市民の危機に尻尾巻いて逃げるだなんて事したくありません」

「……はあ、こうなるとお前は頑固だからなあ」

「流石、よくお解りで」

「隊長ー！！妖怪、射程圏内に入りました！」

「！……では一斉照射を開始する！砲撃班長号令の元、照射用意！！」
号令と同時にレーザー砲の砲門にエネルギーが凝縮される。

そして赤く点滅。発射準備完了のサインだ。

「撃てエエー！！」

砲撃班長の合図で一斉に発射されるレーザー砲。

その威力は凄まじく、妖怪の群れを跡形もなく消し飛ばした

「…やはり駄目だったか」

だが消し飛ばせたのは全体のほんの一部。

妖怪の数が余りにも多過ぎた

「総員撤退ー!!」

他部隊から次々と撤退命令が降された。

皆一斉に配置を離れ、ロケットに向け走り始める

中にはウチの兵もどさくさに紛れて何人か逃げ出している

「仕方ない……総員退避！早急にロケットに乗り込め!!」

すると待つてましたと言わんばかりに兵は走り出した

残ったのは

「結局二人になっちゃいましたね」

「ああ。本当にいいのか？今なら逃げて誰も文句は言わないぞ？」

「逃げませんよ。隊長が戦うなら私も残ります」

「…麻矢」

「隊長、この際だから言わせていただきますね」

「なんだよ、改まって」

「…隊長、いえ、終 隼斗さん。私は貴方の事が以前から好きでした」

「…」

「返事を返して頂く必要はありません。唯伝えておきたかっただけですので」

暫しの沈黙。

前を見れば妖怪の軍勢が2000の位置まで迫って来ている

「…死ぬなよ、麻矢」

「…お互いに、健闘を祈りましょう」

そうして二人の戦士は駆け出した。

後ろにいる人々を守る為に。

隣にいる相棒を死なせない為に

――

『緊急事態発生、緊急事態発生。妖怪の襲撃により予定時間を繰り上げて出発致します。繰り返します……』

「永琳……」

「大丈夫、隼斗を信じましょう」

「おい急げ！早くロケットに乗り込むんだ！」

「あれは……防衛軍の兵士!?ちよつと貴方達！」

「なんだこんな時に……っ八意様!?!」

「何故防衛の任務に当たっている貴方達がここにいるの?」

「撤退命令が、出たんですよ。レーザー砲の砲撃を持ってしても効果は薄かったので」

「っ!そこまでの数なんて……!」

「ねえ、隼斗は?」

「貴方達隼斗を見てない!?!」

輝夜の言葉にハッと我に帰り兵士に掴みかかる勢いで尋ねた

「隼斗……って柘隊長の事ですか?そう言えば撤退命令が出てから見てないな」

「そう言えば春雨副長もいないな。どこ行つたんだろ」

「!……まさか」

――

「おおおらアア!!」

次々と突っ込んで来る妖怪に対して俺は防戦一方だった。

超人の体を持つ俺が拳を振るえば一気に妖怪の一角が、吹き飛ばす妖怪を掴んで地面に叩きつければ地鳴りと共にクレーターができる

妖怪の猛攻にも耐えることができる強靱な肉体

――ならば何故攻めあぐねているのか?

「麻矢アア!っっかりしろ!!」

「……」

麻矢の背中からは夥しい量の血が流れていた

当初は優勢に立ち回っていた麻矢だったが圧倒的な数の波に飲まれ、背後から爪で斬りつけられてしまったのだ

出血量から見ても傷は決して軽くない。

寧ろ瀕死の状態と言える

手当しようにも群がる妖怪が邪魔でそれもままならない

「クソが!!てめえ等邪魔だアア!!!」

周囲に纏わり付く妖怪を薙ぎ払うが、後から後から湧いて来る

ドオオオオン!!

つとその時都市の方角から爆音。

月に向けて第一便のロケットが飛び立った

6話 人妖大戦（中編）

轟音と共に飛び立つロケット

「やつと出発したか…」

あの第一便には永琳や輝夜、綿月姉妹が乗っているはず

一番気がかりだった仲間の安否を確認出来たことでホツとしたいところだが、大怪我を負い意識もない麻矢を見て歯を噛み締める

「このままじゃ麻矢は助からない。何とかしねえと…!」

ザザー

無線からノイズ

誰かが無線で俺を呼んでいる

「誰だ?」

『あつ! 柊隊長ご無事ですか!?!』

はつきり言つて無事ではない

こうして応答している今も群がる妖怪から麻矢を守っているのだから

「悪いが話してる暇はない! 用件だけ簡潔に言え!」

怒鳴り気味に言う相手は兵士は若干吃りながら

『で、では。八意様が隊長の安全を確認しろと…』

「永琳が…? だが既に飛び立った後だろ?」

『それが…今隣にいるのですが…』

「!?!」

馬鹿な…

第一便に乗ってなかったのか!?

いや、今はそんな事よりも!

「永琳に代わってくれ! 直ぐにだ!!」

無線の向こうに叫ぶと何やら会話した後永琳が出た

『隼斗っ!! 無事なの!?! 今どこ?!?!』

俺に負けず劣らずの音量で叫ぶ永琳

「永琳! 一旦そつちに戻る、直ぐに治療の準備をしてくれ!」

『治療ってまさか貴方怪我を!?!』

「俺じゃない麻矢だ！背中を斬られて出血が酷い！頼む!!」
『：わかったわ。こっちは準備しておくから戻って来て!』
「了解」

無線を切り今一度麻矢を見る

「うっ…」

「麻矢、もう少し踏ん張れ。直ぐ永琳の所に連れてってやる!…ふんっ!!」

麻矢を片手で抱え、もう一方の腕を地面に突き入れる

「おらあああつ!!」

そして一気に力を込め、岩盤をひっくり返し、思いつきり掬い上げた

足場ごとひっくり返された妖怪たちは上空へ投げ出され、一緒に舞い上がった岩盤に巻き込まれる形となった。

辺りを砂塵が包み、晴れた時には二人の姿はなかった

――

「永琳!!」

「隼斗！麻矢ちゃんをここに寝かせて」

「わかった」

基地へ戻ると永琳と複数の兵士がロケットの中で治療の準備を整え待っていた

もう残ってるロケットはこれ一機で後は全て飛び立った後だ

「助かるか？」

「任せて！」

即席で用意された簡易治療室で治療は行われ

、その間俺は外で防衛にあたっていた

――時間にして30分程で治療室から永琳が出てきた

「永琳！麻矢は!？」

「大丈夫、峠は越えたわ」

それを聞いてホッと胸を撫で下ろすも東の間

ズズウウンツ!!と物凄い轟音が響いた

「なんだ…?」

「大変です!妖怪が基地を攻撃し始めました!!」

「っ!」

先程まで壁の外で戦っていた妖怪達が、一旦離れた間に基地の目の前まで侵入して来ていた

「まずいな、このままじゃロケットが潰される…!」

「隼斗!」

「来るな!!」

「っ!」

後を追って来ようとした永琳に叫ぶ

「永琳、お前は輝夜と一緒にロケットに乗り込め。俺が時間を稼ぐ」

「そんな…!貴方はどうするのよ!」

「すまん…恐らく一緒には行けない」

「!?そんなの駄目よ!!貴方もいつs…」

「ふっ…!」

「あっ…」

俺は高速で永琳の背後に移動し、手刀で意識を刈り取った

「なあ、2番隊部隊長さん居るか?」

「あ、ああ…」

そしてその場にいた他部隊の隊長を呼び止める

「永琳を頼む。中に居る輝夜と麻矢もな」

「…いいのか?」

「どの道俺が戦わなきゃロケットは発射できない。これでいいんだ」

これでいい。永琳や輝夜、麻矢に綿月姉妹。俺の大事な人達が無事でいられるなら喜んで犠牲になる

「さあ、もう行ってくれ。この基地も長くは保たない」

「………終 隊長」

「…なんだ?」

「(武運を…!」

その場にいる全員が俺に向けて敬礼をした

「……ああ。達者でな」

――

基地の外に出ると既に周りは妖怪に包围されていた。

どうやら本能的に人間の居る場所を感じ取ったのだろう

「ニンゲン……クウ……タラフク……クウ!!」

「喰うだど?……やってみろよ」

もうさつきみたいに庇う対象もない

――本気で暴れてやる

刹那、前方に溜まっていた妖怪が纏めて粉々になった。

超人に寄って繰り出された突き……

……の余波によって

「こっから先は行かせない。一切手は抜かねエ!死にてエ奴だけかかって来い!!」

俺の怒号と同時に一斉に向かってくる妖怪達

7話 人妖大戦（後編）

拳を振り下ろせば大地が割れ

蹴りを放てば周囲に嵐の様な突風が巻き起こる

――超人VS：

人成らざる存在にして、圧倒的数と力で人間を喰らう

――妖怪

個体の戦闘能力で言うならば妖怪すらも圧倒する力を持つ超人。

現にその一撃を受けた妖怪は原型を留めず粉々になった

だから妖怪は数で攻めた

量より質とも言うが、その逆もまた然り。

数百万数百万いる妖怪の波が続々と押し寄せる。

「くそっ、こいつらゴキブリか！倒しても倒しても霧がねエ……！」

だが確実に数は減って来ている。

今では最初に比べて四分の一程に減った………と思う。

それに後方の基地内からカウントダウンが聞こえるから飛び立つまでもう少しだ！

「そらっ、最後の仕上げだ!!」

近場にあった戦車の砲塔を掴み、野球のバットの様に構えると、思いつきりフルスイングして周囲の妖怪を一層遠くに吹き飛ばした

そして漸く轟音と共にロケットは飛び立った。

妖怪の内何匹かは撃ち落そうと攻撃を仕掛けるが全てはたき落とされた

「…行ったか」

ロケットが遙か上空まで行き米粒程の大きさになったのを確認した俺は、先程から振り回していた戦車を投げ捨てた。

獲物である人間が隼斗一人になったことで、妖怪達の矛先が一斉に隼斗に向く。

多数の獲物を取り逃がしたことで怒りを感じているのか、瞳は赤黒く光り、妖怪の放つ気配が一層強くなっていく

「なんだよ？食事を取り逃がしてご立腹か？ザマアみやがれってんだ！」

隼斗の言葉を理解してか知らずか、咆哮と同時に突っ込んでくる妖怪達。

隼斗が迎え討つ為に構えをとった時だった

突如、轟音と共に上空から何か近づいてくる

「アレは…!?!」

地上までの距離約2キロ。

隼斗が超人の視力をもって見たもの。

それは軍で極秘に開発されていた核弾頭だった。

成程、上層部は始めからこの都市諸共消し飛ばすつもりだったのか

自分達の技術が盗まれない様にする為に

先程まで猛然と襲いかかって来ていた妖怪達も核弾頭を見た瞬間、

危険を感じ取り退避行動をとり始めていた

だが無駄だ。今からでは俺の足でも間に合わない

核弾頭は地上から数百メートルの位置で炸裂。

凄まじい爆発と衝撃波によって爆心地一帯が真空となる。

こうして人の文明は地上から姿を消した

爆心地から遠く離れた森の中。

その場に似つかわしくない鉄の塊が突き刺さっていた。

正確には鉄の塊ではなく人工物。

折れ曲がった筒のようなもの。

あちこち凹んでめくれ上がった外装

移動する為に用いられたであろう、帯状に取り付けられた鉄板。

それは戦車という乗物だった

「…はあ、何とかなったか」

戦車の中からため息交じりに現れたのは

――終 隼斗

核弾頭が炸裂する瞬間、隼斗は転がっていた戦車を掴み適当な方向へ向け投擲。

今度は自身が跳び、猛スピードで飛んでいく戦車にしがみつく。

そしてハッチを開け中に入り込み、爆発から身を守りつつ爆風や衝撃波に煽られて、この森まで飛んできたという訳だ

「我ながら無茶したもんだ。こりやハリウッドデビューも夢じゃないな」

さて、これからどうしようか……

8話 大和の国

「……あれから途方もない年月が経ち俺の歳も1億歳を超えた。あの後あった事を簡潔に述べるなら、核爆弾が落とされた地上に残ったのは俺一人だけだった。」

「当時の妖怪達は全滅。と言うことは、あの日妖怪達は全勢力を掛けて都に襲撃して来たってわけだ。」

そしてここからは皆も知つての通り恐竜が姿を現し始めた。

やがて隕石衝突による異常気象により恐竜は絶滅、氷河期に入った。

因みに俺は能力のお陰で恐竜が襲つて来ようが撃退できたし、氷河期に入っても少し肌寒いと感じる程度だった

そして現在。

俺は人間の集落を発見して涙腺が緩んでいた。

だって1億年ぶりの人だぞ？今まで途方もない時間を一人で過ごしてきてやっと意思を通わせられる存在に巡り会えるんだと思うと、そりゃ感極まるってもんだ

早速人里に下りようとした瞬間、背後から声が飛んだ

「そのの者止まれ!!」

「……」

「神奈子様、見張りの神が人里に続く山道で侵入者を捕らえたそうです」

「侵入者だと？複数か？」

御付きの巫女の言葉に眉を顰めて確認する、此処 大和の国を治めている神、八坂 神奈子

「いえ、一人のようです」

「ほう、随分と大胆な侵入者だな。で、そいつは何処に？」

「間もなく此方に連行されて来るかと」

「つとそこで外が騒がしくなる」

「来たか。どれ、たった一人で侵入したという阿呆の顔でも見るとす

るか」

そう言つて立ち上がり、部屋を後にする神奈子。

「神奈子様、侵入者を捕らえました！」

神奈子の姿を確認した神の一人が姿勢を正して報告する。

一言「ご苦労」と言おうとした瞬間、

「神奈子様、侵入者として捕らえられました！」

何故か侵入者である男にも報告された

「貴様！侵入者の分際で軽々しく神奈子様の御名前を呼ぶなど無礼であるぞ!!」

「いいじゃん別に。お前だつて呼んでたんだから」

「私は神奈子様直属の部下だからいいんだ！」

「固いこというなよ。ほら本人もああ言つてることだし」

「指を指すな!!それに神奈子様はまだ何も仰つてないだろうが!!」

つと部下の指摘を受けハツと我に帰つた神奈子は口を開く

「ゴホンツ。さて侵入者よ、一体何の目的があつて此処に来た？」

凜とした声で問いかける神奈子

「いいや、間違いなく聞こえた！寧ろ「様」もいらん！友達だろ？的なのりだった」

「んな訳あるかアア!!貴様巫山戯るのも大概にしろよ!!」

しかし当の本人は部下と何やら議論をしていて聞いてない。

今度は咳払いを強調し、もう一度同じ問いをする

「ゴホンツ、ウオツホン！あー、侵入者よ、一体何の目的があつて…」

「いや！確かに、多分恐らく、あいつの心はそう言つてた気がする！」

「じゃあそれ聞こえてねエンじゃねえかアア!!しかもどんどん自信無くなつてるし！」

「おい…」

「大体お前さつきから何だよ。アレか？もしかして俺と友達になりた
いのか？」

「んな訳なーぶう!？」

「なんーおっ」

突如飛来した柱が顔面に直撃する両者

「貴様ら人の話を聞かんかアアア!!!」

今日、大和の国に神の怒号が木霊する

「いやー悪い悪い、久しぶりについ熱くなっちゃって」

「それはもういい。と言うよりもお前は何故ピンピンしているんだ？
加減したとはいえ私の御柱を顔面に貫つたというのに」

現に同じ目にあつた部下である神は数メートル吹き飛んだ後、意識を失つた

「まあ頑丈にできてるからな」

そう言う問題か？つと首を傾げる神奈子だったが、考えるのが面倒になったのかどうせ当たりどころが良かったのだらうと勝手に結論付けて話を戻す

「で？お前は何の目的があつて此処に侵入した？」

「目的？そんなモンないけど」

「嘘をついても無駄だ。大方他国の神の間者か何かだらう？」

「いや、だからさつきから何言つてんだ？」

なんだよ間者つて。神同士でそんな敵情収集みたいな事するのか？

此処に来たのだから偶々だし

「ほう、飽くまで白を切るか。見上げた忠義心だな」

「いやだからさ…」

「ならば此方も力尽くで聞き出すとしよう」

おーい、会話のキャッチボールしよう！

ドツジボールじゃなくつてさ

ー

「で、何か闘技場っぽい何処に連れて来られたわけだが…」

今俺が立ってるのは古代ローマで言うところのコロシウムみたい

な所だ。

まあ実際のものより遥かに小さいだろうし、客席もなければ武器を持った対戦相手がいるわけでもない。

いるのは神奈子含む複数の神と何やら神官みたいな奴が俺と向かい合って立っている

「人間よ、今一度お前に弁明の余地をやろう。侵入した目的はなんだ？」

「だから偶々だって」

「そうか……ならば致し方ない。始めろ」

神奈子の合図に目の前に立つ神官が頷くと、右手を前に翳して槍の様な物を生成した。

「人間、口を割らねば命を落とすことになるぞ」

「んな事言ってもな……」

そうこうしている内に槍を構えた神官が目前に迫り、鋒を俺の顔面に突き立てようとしていた

「まあ当たらないけどな」

軽く首を動かして躲すと、神官は少し驚いた顔をする

「ほお、少しは出来る様だな」

神官は改めて構え直すと槍に力を込め始めた。

「はあ!!」

掛け声と同時に連続の突きを放ってくるが、正直俺にとっては遅すぎて欠伸びが出るくらいだ。

俺は槍による連撃を避けながら神奈子に話し掛けた

「なあ、もうやめね?言ってるじゃん。俺は偶々此処に立ち寄っただけで、侵入したつもりはなかったんだ」

その光景に神奈子は驚いていた。

先程まで唯の人間だと思っていた者が、神官の攻撃を躲している。更には此方に話しかける余裕さえある。

「ぜえ、はあ、はあ」

見ると神官が息を切らしている

「ありや、大丈夫か?」

対する侵入者は息どころか汗一つかいていない。

「……そこまで。お前はもう下がってよい」

「なっ!? 人間相手に引けと言うのですか!？」

神奈子の命令に食い下がる神官

「その人間に一撃も与えられなかったのは誰だ? もう一度言う。下がれ」

「くっ……!」

神官は渋々といった感じで下がっていった

「…信用して貰えんのか?」

「良いだろう。ただし」

フワツと俺の前に降り立つ神奈子

「私に勝つことができたらな!」

瞬間、無数の御柱からレーザーが放たれた

「結局戦うのかよ」

それをサイドステップで躲しながら距離を積めて拳を引く

「甘い!!」

今度は俺を取り囲む様に御柱が設置され四方八方からレーザーが射出された

「ほいっ」と

「なにっ!？」

だがこれも上に跳ぶ事で回避。

流石に避けられると思っていなかったのか、驚きの声をあげる神奈子

「猪口才な!!」

次に来たのはレーザーによる薙ぎ払い。加えて無数の照射。

空中で身動きの取れない相手には良い手だが、それは常人での話。

「秘技! 空中マトリックス!」

次々と襲ってくるレーザーを空中で身体を捻りながら回避して着地。

うーん、最近平和で体鈍ってんな

少し裾の先が焦げちまった

「…お前ホントに人間か？」

神奈子が顔を引きつらせながら問いかけてきた

「残念。俺は超人だ」

「ちよう…じん？」

聞いたことのない単語に怪訝な顔をする神奈子だが、今説明するのは面倒臭いので強引にに話を終わらせるとしよう

「うしっ！そろそろ仕掛けるぜー！」

「…くっ！」

得体の知れない相手の攻撃宣言に一瞬たじろいだ神奈子だったが、直ぐに迎撃体制に入る。

神奈子の頭上に八つの御柱が円を描く様に配置され、そのまま回転。

円の中心には莫大なエネルギーが溜まっていく

「超人だか何だか知らんがこれで終わりだ!!」

御柱から放たれた極太レーザーは隼斗の眼前まで迫る

「ふっ！」

短く息を吐いた隼斗から繰り出されたのは小さなジャブ

それだけ

たったそれだけの攻撃で大和の神の本気は掻き消された

「はっ……？」

それを見て素っ頓狂な声を漏らし、立ち尽くす神奈子

「…満足したか？大和の神様よオ」

俺はキメ顔でそう言った

9 話 諏訪の国の小さな神

「本当にこの国を攻める気はないんだな？」

「なんか話が半分飛躍してるが、そんなつもりはサラサラないよ」

神奈子との激戦？の後、暫く放心していた神奈子が急に顔を蒼くして

「わ、わかった。話し合いの場を設けよう」

と言ってきたので承諾して着いて行き、現在に至る

まあ話した内容って言っても俺がこの国に害を成す存在ではない事を説明した上で納得してもらったんだけど

「しかし、隼斗は何者なんだ？神官のみならず私でも勝てないなんて本当に人間なのか？」

「だから言ってるだろ？俺は超人だって」

「その超人？…って言うのがわからないんだけど」

「簡単に言えば人知を超えた物凄い力を持つ人間、ってところかな。基本的には身体能力がアホみたいに高い人間と思ってくれている」

「しかし身体能力が高いだけでは神力で作られた閃光は破れないだろう？」

閃光…ああ、レーザーの事か

「それは拳を霊力で覆ってたからだ。って言っても俺は霊力の使い方が下手くそだから強化とかは出来ないけど」

「じゃあアレ素の力なの…？」

げんなりした様子でそう訪ねてくる神奈子

「大体5割位だ」

」

今度こそ完璧にフリーズした神奈子

「あ、アレで半分か!？」

「超人だからな！」

なんか此れからも同じ様な質問されそうな気がするけど、この言葉だけで乗り切れそうな気がする

「うーん。断片的には何と無くわかった様な…」

「心配するな。実のところ俺もよくわかってない」

「いいのかそれで!？」

まあこんな感じで大和の神と打ち解けていき、その日の晩は酒を飲み交わした

――

俺が大和の国を訪れてから三ヶ月が過ぎた頃

見張りの神達が話していたことだが、近々大和は諏訪の国と呼ばれる国の神、洩矢諏訪子から信仰を奪い自国の勢力を上げる動きに出るのだとか

「神でも戦争するんだな。意外だ」

「信仰は神にとって謂わば神力の源だからな。致し方ない」

神奈子が、言った神力と言うのは人間で言う霊力、妖怪の妖力の事だ。

「それで相手国は何て？」

「…どうやら素直に応じる気は無いらしい」

って事は戦うのか、この大国と。

戦力的にも勝負は目に見えてるが

「戦力差で考えれば相手国が戦力総動員させても勝ち目がある様には思えないけど?。」

「いや、洩矢は国の民を戦で傷付ける訳にはいかないから一人でウチに挑む様だ」

「マジで?。」

そりや尚の事無理だろ…

聞く限りじや洩矢諏訪子は土地神の中でも最高位に位置する神だが、神奈子も風神と呼ばれる程名の通った神。加えて配下には幾人もの神々が付いている

「…よし」

「ん?どこに行くんだ?。」

「ちよつちね」

俺もお人好しなんかねエ…

ー

「えーと、村人に聞いた話だとあの神社か？」

村外れにある山。その上の方に大きな神社が見えている。

麓から山頂までザツと見て1000メートルもないから助走なしで行けるかな

「ほっ！」

地面に足型が残る程の脚力で一気に山頂まで跳んだ

風を切りながら徐々に近づいてくる神社

だが此処で問題発生。

着地地点に賽銭箱がある

「あつ、やべ…」

ドオオン

ガシヤーン

「…」

さて、マズいことが三つある

・ 豪快な音を立てて着地

・ 賽銭箱粉々

・ 賽銭箱に気を取られて着地時に衝撃を殺すのを忘れた為、神社の石畳粉碎

以上の事から導き出される答えは一つ

「おいおいコレやべえよ。何か完全に襲撃しに来たみたいになつた…」

「誰だ!!」

キタ——orz——!!

「ああつ?!神社が…!貴様何て酷いことを!!」

出て来たのは金髪でヘンテコな帽子を被った幼女。

神奈子と同じ神力を感じるからこの子が洩矢諏訪子で間違いないだろう。

とりあえず謝らねば

「いや、その…すみません」

「さては大和の手の者か！合戦前に襲撃とは姑息な！」

おいおいおい話か！とんでもない方向に向かっているんだけど！

何か刃物みたいなもの出してきたし、戦う気満々じゃねえか

ヤバい！早く軌道修正しないと

「ま、待て。子供がそんな物振り回しちや危ないぞ？それに俺は大和の国とは関係が…」

「子ども…気にしてやることをよくも…!!ゆるさん!!」

しまったアアア!?修正するどころかロケットブースター点火しちまったアアア!!

「いや本当ごめn…」

「問答無用!!」

両手に持った円形の刃物を構え突っ込んでくる洩矢の神

「…結局こうなるのかよ」

幼い見た目とは裏腹に、人間を遥かに超える速度で斬りかかって来る刃り、やはり最高位の土地神と言うべきか

「くっ、この…なんで当たらないんだ！」

まあ当たらなければどうと言うことはない

俺が斬撃をスイスイ避けていると、それにイラついたのか洩矢の神は一旦距離をとり地面に手をつけた

「串刺しになれ!!」

次の瞬間地面が勢いよく盛り上がり、無数の突起が襲いかかってきた

「おおっ！ハガレンで見たことある技だ!!」

俺は生前憧れた某漫画に登場する技を目の当たりにして感激した。

勿論躲しながら

「な、なんで当たらないのー!?!」

この技に余程自信があつたのか知らんが、全て躲しきつた俺を見て
啞然として技の発動を解いてしまっている

「スキあり！」

「ふぐうー!?!」

そのスキを見逃さず素早く背後に回り軽く手刀を落とした。

大分加減したつもりだが、くらった洩矢の神は叩きつけられた蛙の
様なポーズで地面にめり込み目を回して気絶した

「あちやくやり過ぎた。悪い事しちやつたな」

この状況に呆然と立ち尽くす超人と目を回している神

10話 土地神 洩矢 諏訪子

「うう…ん…ん？」

「おっ、気がついたか」

「ここは……ってお前は!!」

暫く辺りを見渡した後、俺に気がつき勢いよく飛び退く少女もとい
洩矢諏訪子

「意識が戻って早々騒がしい奴だな」

「誰のせいだ！それにここは…！」

まだ頭が混乱してるのかイマイチ状況が飲み込めていない様子だ

「落ち着けて。ここはお前の神社の寝室だ」

「えっ…？」

あの後俺は気絶した洩矢諏訪子をそのまま放置しておく訳には行
かず（大半は俺のせいだし）、一先ずこの神社内に抱えて行き寝かせて
いた。

「…何故助けた？」

「えっ？」

「理由はどうあれ私はお前を殺そうとした。そんな私を態々神社まで
運び入れ介抱した理由はなんだ？」

洩矢は一斎警戒を緩めようとせず鋭い瞳で尋ねてきた

「いやだって悪いのは俺だしさ、神社の床割ったり賽銭箱壊しちまっ
たり」

「だからって敵国である私を助ける理由にはならないだろう？」

ああそうか。そういやそっちの誤解も解かないとな

「初めに言っただろう？俺は大和の手の者じゃないし、そもそも何処にも
属してない。だからお前と敵対する気も無いんだ」

「…それが本当だと何であんな真似を？」

それはゴメン。完全に俺が悪いわ

「それについては悪かったよ。何て言うかその、此処に向かって跳ん
で来たんだけど丁度着地点に賽銭箱があつてさ…」

どうしようか焦ってる間に勢いを殺すのを忘れててそのままガ

「シャーンっと」

「…」

「…」

「……？」

「えっ、そんだけ？」

「そんだけ」

ガクツとコケる洩矢。

うーむ、ナイスリアクションだ

「なんだ…私はてつきり奇襲を掛けられたんだとばかり思ってたよ」

「ごめんなさい」

「…もういいよ。悪気があった訳じゃ無いんだろう？」

「そりゃ勿論。神に誓って」

いるけどね、目の前に

「じゃあ許すよ。こっちこそゴメンね？いきなり襲いかかっちゃって」

「気にしないでくれ、お互い様だ。」

それより自己紹介がまだだったな、

俺は終 隼斗だ」

「私はこの国の神、洩矢 諏訪子。諏訪子でいいよ。私も隼斗って呼ばせてもらおうし」

「よろしく諏訪子。ところで大和の国と信仰を巡って戦争を起こすって話だが…」

「ああ、その事…」

俺の質問に声色を暗くしながら懐から一枚の文を取り出す諏訪子
「先日大和から届いてね。内容は要約すると、この国の信仰を渡せ。さもなければ攻め入るぞって事が書かれてる」

ん？聞いてた内容と少し違うな。これじゃ交渉どころか脅迫もい
いところだ

「それ差出人は誰になってる？」

「記述はされてないね。全く失礼な奴だよ！」

おかしいな……

神奈子はその辺の事はしっかりしているタイプだったが

「まあ何方にせよ私は戦うよ。民を奪われる訳にもいかないし、私だって黙って消えるつもりもない」

「…消える？…どういうことだ？」

「私は土地神。人々の信仰があつてはじめてその姿形を保つ事が出来る。ならその信仰を奪われたら？」

「…そういう事か」

このまま大人しく従つても、戦つて負けても結果的に信仰は失うことになる。

「なんかゴメンね？会つて間も無い隼斗にこんな話しても困るよね…」

「い、いや…そもそも聞いたのは俺だし…」

ヤバい…予想以上に深刻な事態だった

俺個人としては助けてやりたいけど、部外者が手を出すのはなあ…
神奈子にも言われてるし

「…もしも、もしもだぞ？相手が八坂神奈子だけだったら勝率はどれ位ある？」

「えっ、どうしてそんな事…」

「いいから！ほれ、言ってみ」

すると諏訪子は暫く考え込んだ後

「正直それでも厳しい。

でももしかしたら可能性はあるよ」

よし！それだけ聞ければ十分だ

「わかった。ちよつと待ってる！」

思い立ったら吉日

俺は早速立ち上がり神社の外に出る

「ちよ、ちよつと隼斗？…急にどうしたのさ!？」

「八坂神奈子と交渉して来る。戦いを一騎討ちにしてもらえる様にな」

「そ、そんな無茶な!？」

「いや、案外何とかなるかもしれないぜ？」

「それってどう言う…」

諏訪子が聞き返した時には既に隼斗は跳び立った後だった

11話 諏訪大戦 前

俺は諏訪の国から帰ると、直様神奈子の部屋に突撃した

「神奈子オオオ!!」

「うわっ!?は、隼斗?帰ってたのか。どうした急に」

「神奈子、お前に聞きたい事がある」

「何だと言うんだ藪から棒に」

「先日洩矢諏訪子に文を出したよな?」

「ああ。いきなり戦争を仕掛けるのは酷な話だから交渉の為に」

「…これはその交渉の為に洩矢諏訪子に送りつけられた文だ」

そう言って神奈子の目の前に文を置く

「なっ!何で隼斗がそれを持つてるんだ!」

「細けエ事は気にするな。…それより読んで見ろ」

「あ、ああ」

最後の方若干低めの声で言うと言索をやめて文を読み始める神奈子

「な、なんだコレは!?!これじゃまるで脅迫文じゃないか!!」

「やっぱり知らなかったのか。誰に命じて書かせたんだ?」

「…部下の神官だ。前に隼斗と戦った」

「…あの野郎か」

こりや一発拳骨をくれてやらないとな

指をボキボキ鳴らしながら部屋を出て行こうとする俺の肩を神奈子が掴んで止めた

「なんだよ神奈k…」

俺は止めないでくれと言おうとして途中でやめた。

理由は簡単

「部下の不始末は私の責任だ…!」

神奈子から自分以上の憤怒を感じたからだ

ズカズカと廊下を歩いていく神奈子の背中を見ながらそつと部下の神官のこれからの思い、静かに合掌する隼斗だった

その後例の神官が大和の国から叩き出されたのは言うまでもない

――翌日

「交渉上手くいったぞ」

「マジで!」

俺は今洩矢神社に来ている

あの後神官をしばき倒した神奈子が戻ってきて、俺に大和の使者として諏訪子に言伝を頼めないか? つと言ってきた

内容は、諏訪の神には申し訳ない事をした。お詫びに此度の戦は私一人で相手をしよう

つと言ったモノだ

この事を諏訪子に伝えると心底驚いていた

何がって俺が八坂神奈子と知り合いだっただことがだ

「それならそうと先に言え! 心配したんだぞ!!」 つと見事なドロップキックを顔面に見舞ってくる諏訪子。

成る程、下着も蛙なんだなと言ったら今度は股間を蹴り上げられたまあ何はともあれ部外者の俺がしてやれるのは此処までだ。

後は当事者次第

「それで期日と場所だが、一月後に此処と大和の国の間にある平原で行うらしいぜ。それなら何方の国にも被害は出ないだろうってさ」

「わかった、一月後に平原だね! ありがとう隼斗」

「じゃあ俺は報告の為に戻るよ」

再び神社を後にしようとする諏訪子に袖を掴まれた

「もう言っちゃうの? もう少しいいじゃん……」

うーん、まあ早急に帰って来る様には言われてないし、いいのか?

「わかった。じゃあ今日泊まっていてもいいか?」

「本当! うん! すぐ寢室を用意するね!」

すると満面の笑みで駆け出して行く諏訪子

やっと見た目相応の反応を見た気がする

「嬉しそうにしやがって、ったく」

まあそんな微笑ましい状況は嫌いじゃない
別にロリコンじゃないぞ？

ー

「おらあ、飯できたぞー」

「うわあー見事な男飯だね。特に盛り付けとか」

「黙らっしやい。腹に入れば皆一緒だ」

では二人揃っていたきます！

うむ、この川魚の塩焼き。我ながらナイス塩加減だ

「そう言えばさ、隼斗って独り身なの？」

「何だよ突然」

「いや、料理とか出来るみたいだし長いこと一人で生活してたの
かなーって」

「まあ、そうだな」

かれこれ一億年ほど独身ですが何か？

「ねねっ、私が嫁になつてあげようか？」

「…いや何でそうなるんだよ」

「だって隼斗お嫁さんいないんでしょ？」

「それとコレとは話は別だ。子供が何言ってるんだ」

「だから子供じゃないってば!!此れでも隼斗より年上なんだよ？」

そう言えば神様ってのは外見と年齢が一致しない奴多いよな。

転生させてくれた神然り、諏訪子然り

「ほう、じゃあ幾つなんだ？」

「二百万歳」

「何だ、やっぱ子供じゃねエか」

「なあっ!?じゃ、じゃあ隼斗は幾つなのよ!」

えーと、転生してから大体五百年ぐらい都で過ごして、そっから更
に一億とちよつとだから……

「…一億歳以上だな」

「……はっ？」

「正確にはそれ足す五百年位なんだけど、数えんの面倒臭い」
「えっ……隼斗人間だよね？」

「まあ種族は人間で間違いないけど俺は超人だ」
「ちよう……じん？」

ハイ出ました説明タイム
つて一々面倒臭いから端折るか

「超人つてのは、斯く斯く然々……」

「へえー、凄いだね」

おおっ！斯く斯く然々って言葉便利だな。

よっしゃー！今後はコレでいこ

〜

「んん？何で布団が一つしか無いんだ？」

「だって元々この神社には私一人しか住んでないから布団が足りないんだよ」

「わかった、じゃあ俺はどつか適当に……」

「駄目。一緒に寝るの」

「布団一つじゃ狭いだろ。俺身体デカいし」

「大丈夫、くっ付いて寝るから」

「いや俺が狭いんだよ！」

——そんなこんなで一ヶ月

12話 諏訪大戦

大和と諏訪の間に位置する平原

「来たか。洩矢の神よ」

「ああ。お前が八坂神奈子だね？」

何も無い殺風景な平原に立つ二柱
と付き添いの神々と人間

この場に俺がいるのは、万が一不正行為があった場合どちらにも属しておらず、公平なジャッジが出来る者が必要になる。

だから両者から頼まれたと言うわけだ

そして二神による、国を賭けた戦いが始まった

諏訪子は弾幕を飛ばし、その中でチャクラムを飛び交わせて神奈子を翻弄しようと試みる

だが神奈子は戸惑うどころかその場から動かず御柱と弾幕を操りそれを撃ち落としていく

「やっぱり、大和のトップだけあって戦い慣れてるな」

今まで色々な国との戦争に打ち勝ってきた神奈子とそうではない諏訪子とは、戦闘経験に差がありすぎる

「くぐってきた修羅場が違うか…」

だが諏訪子も負けてはいない

能力を使い、土を盛り上げ、地割れを起こし、そこから溶岩を噴き出させる

これには神奈子の顔にも焦りの色が見える。

…
確か『坤を創造する程度の能力』だったか？改めて見ると凄いな

それからこの戦いの決着が着くまでそう時間は掛からなかった。

勝者は八坂 神奈子

あの後諏訪子による攻撃は続いたが、徐々に技を見切っていく神奈子に押され始め、最後には武器であるチャクラムでさえも神奈子がかざした蔓によって忽ち錆び付いてしまった。

これが決め手となり諏訪子自身の口から神奈子の勝利が告げられた

「あ、あはは負けちゃった……」

「ああ。立派だったぞ諏訪子」

俺は力無く笑う諏訪子を優しく撫でた

「さて、神奈子。信仰の件だが」

「隼斗。気持ちにはわからなくも無いけどこれは正当な戦いの末に決まった事なのよ。今更取り消すわけには……」

「違うそうじゃない。唯少しばかり妙案が浮かんでな」

「妙案？」

「実はな、最近住民から聞いた話なんだが、洩矢では崇りの影響で他所の神を信仰しては崇られてしまうって考えの奴らが多いらしいんだ」

「祟りって、ミシヤクジ様の？」

「ああ。だからこのままじゃ神奈子は信仰を得られないかもしれないかもしれない」

「……ならどうすれば良いのよ」

「それはな……」

俺の考えた案は至って単純。

新たに神奈子とも諏訪子とも違う架空の神を創りだし、その実務を諏訪子が行うことで対外的に神奈子が国を支配した様に見せかけることができ、尚且つ信仰が得られると言うものだ。ついでに名前も洩矢改め、守矢とすることで信憑性を高めることができる

結果は見事に成功。

信仰も今まで以上に集まる様になった

ーあれから100年程経ち此処、守矢神社には現在二人の神が住んでいる。

大和の頭、八坂 神奈子

土地神、洩矢諏訪子

諏訪大戦の後、神奈子は守矢神社の神として密かに君臨する形になった。

最初は些細な事で喧嘩も多かった二人だったが、今ではお互い仲良
く……

「あつ！諏訪子！今私のオカズ取ったでしょ!!」

「へっへーん。ボケっとしてるのが悪いんだよーだ！」

「巫山戯るな！このチビ蛙!!」

「何をウ!?このガンキャノン!!」

ギャーギャー

…まあ以前よりかは多分恐らく仲良くなってねエなこりや

つと此処で神奈子と諏訪子、どちらかの足が卓袱台を蹴飛ばし、卓上の夕飯が宙を舞う。

ガシヤーン

「あつ……」

同時に声を漏らす二柱

味噌汁を頭から被る隼斗

「……………」

「は、隼斗……?」

「ち、違うんだ！今のは諏訪子が……!」

何やら必死に弁明してるみたいだが、

……取り敢えずお前ら

「表出ろ」

「す、すいませんでしたー!」

このやり取りが大体3年程前の話。

あれから暫くして俺は再び旅に出る事にした。

二人との生活も悪くなかったけど、いつまでも同じ場所に留まるのはつまらない。いい加減刺激が欲しかった

出て行くって言った後二人を説得するのが大変だった。

諏訪子は愚図るし、神奈子も寂しそうな目をして「そうか……寂しくなるね」とか言うもんだから俺の決心が鈍った。

あれ？これ手を焼いたの諏訪子だけじゃね？

まあ色々あつたが人生まだまだ長いんだ、楽しまにや損々

「……で？きつきから覗いてるお前は誰だ？」

何も無い空間に声を飛ばす。

すると目の前の空間が裂けた。

裂け目の両端にはリボンが付いていて、中からは多数の目玉が覗いている

「……いつから気づいていたのかしら？力は抑えてた筈なんだけど」

中から出てきたのは長い金髪に、白と紫で彩られたドレスが特徴的な美女、もとい妖怪だった

「初めから。生憎と妖怪の気配には敏感でね」

「ふふ、流星は人妖大戦で唯一生き残っただけはあるわね」

「！……お前何モンだ？」

人妖大戦。それは遙か昔に起きた人間と妖怪が存亡を掛けて繰り広げた戦争の事だ。

今や伝説として語り継がれ、大抵の者は知っていてもおかしくない。

だがコイツは俺がその生き残りだと言うことを知っていた。

「そんなに警戒しなくてもいいでしょう？心配いらないわ、貴方に危害を加えるつもりはないから」

まあ加えようとしても返り討ちだけだな

「私は八雲 紫と申します」

「…俺に何の用だ？」

「では、単刀直入に言わせて頂くわ」

八雲と名乗った妖怪は薄く笑う

「柊 隼斗。貴方には私の式になってもらいたい」

13話 八雲 紫

——終 隼斗。貴方には私の式になってもらいたいの

式……って式神の事だよな？

「一ついいか？何故妖怪のお前が人間の俺を式にしたがる？」

「あら、貴方程の実力者なら種族なんて関係無いんじゃない？」

「そう言うことを聞いてるんじゃない。人間と妖怪は本来、相容れない存在のはずだろう」

「……それは、私の夢と関係しているわ」

「…夢？」

少女から出た意外な言葉に思わず聞き返してしまった

「願望……とも言おうね」

すると少女は一拍置いて

「終 隼斗。貴方は人と妖怪が共存することは可能だと思う？」

…また難しい質問がきたな。

人間と妖怪の関係を考えりや誰もがNOと答えるだろう。

少なくとも人妖大戦の妖怪達は人間を獲物としか認識していなかった

「恐らくそれは難しい。人は妖怪を恐れ、妖怪は人を襲うものだ。これは両者が存在し続ける限り変わることはない事実だ」

「……」

予想していた答えだったのか少女は扇子で顔を隠してしまったが、なんとなく表情が暗くなったのはわかった

「でも良いよな、そんな世界も」

「えっ……？」

若干俯きがちだった顔を勢いよく上げる少女。

これは予想外だったらしい

「昔はさ、お前みたいにくこうして向かい合って話してくる妖怪なんて居なかった。皆理性があるのかどうかもわからない獰猛な奴らばかりでな」

「……バツタリ出くわせば、有無を言わさず襲いかかる。ギラギラと爪をチラつかせて、牙を鳴らして。

だから俺たち人間も武器を持って戦うしかなかった。

互いにわかり合おうなんて考えた事もなかった

「俺は正直、そんな世界にウンザリしてた」

「でも……それは私も同じかもしれないわよ?」

「いいや。こうして意思疎通を図る事が出来るんだ。なら後はお互い歩み寄るだけだろ?」

「!」

「そりや中には悪意を持って人を殺す妖怪だっているだろうな。でもそれは人間にだって言えることだ」

以上の事から俺個人としては努力次第で何とかなると思います??

あれ、作文?

「なあ、八雲」

「……紫でいいわ」

おっ、なんかさっきまでの胡散臭い雰囲気は抜けて素直になった感じだ

「じゃあ、紫で。」

紫はさっき俺に式になれって言ったけどさ……」

スツと右手を紫に向けて差し出す

「友達つてのは駄目か?」

「!!……いいの?」

思わず手に持っていた扇子を地面に落とす紫

「俺は紫の夢に賛同する。素晴らしい夢だ。だから俺にも協力させてほし」

だからこそ同じ立場でありたい。

上下関係なんて作らず対等な立場でスタートに立ちたい

「…ありがとう！とても嬉しいわ…!!」

差し出された右手を感極まって両手で握り返してきた

友達ができてそんなに嬉しいのか？

もしかしてこの子友達居ないのか？

「し、失礼ね！友達位いるわよー！」

なっ!?!心を読まれた…だと？

まあそれは置いといて

「まっ、よろしく頼むよ。改めまして、柊 隼斗だ。隼斗でいい」

「ええ、よろしくね隼斗」

これが俺と紫の初めての出会いだった

――

紫と出会って半年程。

俺は相変わらずのゆつたり一人旅を謳歌しとりましたとき

このまま平和な旅に…

「ぎゃああああ」

ならないんだよなー、これが…

突然聞こえた悲鳴。

声色からして女の子か？

「あっちか」

ほっとく訳にもいかない俺は地を蹴った

14話 銀髪の少女

「はあ、はあ」

森の中を一人の少女が息も絶え絶えに走っていた。
何故そんな事をしているのか？と問われれば、そうしなければ命を落とすからと答えるしか無い

「待てよ人間ツツ!!」

少女の後を猛スピードで追いかけるのは鋭い牙と爪を持つ、爬虫類型の妖怪。

RPGに風と言うならばリザードマンか：

「あっ…!？」

追ってくる妖怪達に気をとられ、足下を見ていなかったためか、突き出していた木の根に足を引っ掛けてしまう

「ゲヒヒ…観念しなお嬢ちゃん」

「いや…！来ないで…!」

ニヤつきながらジリジリと詰め寄る蜥蜴妖怪

「いきなり喰ったりしねエって。まずは楽しまなきやな…!」

「ひい…！…や、やあ」

恐怖からかまともに悲鳴すら出てこない
そうしてる間にもにじり寄ってくる妖怪

「それじゃあ早速…誰だお前？」

「…?」

急に妖怪の注意が他に向いた。

正確には少女の後ろ…

いつの間にか立っていた一人の男に

「趣味でヒーローをやっている者だ」

「なんだその適当な設定は……。」「えっ……。えっ?」

突然の乱入者に少女は状況を飲み込めないでいる

「気にすんな。言ってみたかったセリフベスト10の内の一つが言えて余は満足じゃ」

「巫山戯てるのか?それとも舐めてるのか?」「ん?…両方」

妖怪の問いに軽く笑いながらそう答えた瞬間、額に青筋を立てた妖怪が牙を剥き出しにして飛びかかって来た

「死ねエエエ!人g…:ホゲエエエ!」

なのでワンパンで沈んで貰いました

殴られた妖怪は辺りの木々を薙ぎ倒しながら体操選手も吃驚の空中回転を決めつつ地面にめり込み、ピクピクした後動かなくなった

「大丈夫か?」

「……」

放心したまま動かない少女

「おーい」

「へっ?わわっ!ひゃ、ひゃい!!」

目の前で手を振ってもう一度呼びかけると少女はパニクリつつも返事をした

「怪我とかないか?って膝擦り剥いちまってるな……」

見ると転んだ為か片膝から血が出ている

「だ、大丈夫です!こんな直ぐに治りますから!!」

「何言ってるんだ。そう言う過信が取り返しのつかない事に繋がるんだよ。ホレ、包帯巻いてやるから診せてみな」

本当は絆創膏があれば手軽でいいんだけど。

まだこの時代は不便な事が多い

「ほ、本当に大丈夫ですから…」

「…妙に嫌がるなあ。」

「ハッ！まさか……」

「そ、そうだよな……見ず知らずの男に手当てしてもらうとか気持ち悪いよな……ごめん」

別に下心とか無いんだけどなあ……

マジで心配だっただけに些かショックだ

「ち、違います！別にそう言う訳じゃ……！」

「いやいいよ……今更気を使わなくて。」

なんかゴメンな？」

「あーもう!!そうじゃ無いんですってば！」

「…ならどうしてあそこまで嫌がったんだ？」

「それは……！私が……う……だから」

「えっ?」

「私が半獣だからです……！」

――

「へえ、白沢ね」

「……はい」

目の前の少女、上白沢 慧音は人間と妖獣が合わさった半獣と呼ばれる存在らしい。

つと言っても生まれつきと言うわけではなく、後天性のものらしい。

半獣ならばちよつとした怪我なら直ぐに治る。先程手当てを受けるのを拒んだのも、半獣だと知られなくなかったからだそうだ

「それで?なんでこんな所に一人で居たんだ?この辺はタチの悪い妖怪が多いってのに」

「私……帰るべき場所が無いんです」

「ん?そりやどういう……!」

そこまで言っただけで理解した

追い出されたんだ、慧音は。

突然半獣として覚醒し、その姿を村人にでも見られたんだろう。

人間は自分達と異なる存在を排除しようとする。
理由は怖いから。身を守る術を持たない人間は集団になって身を
守ろうとする。

異端を消し去る事で安心を得ようとする。

この時代の連中なら尚更か……

「柘さん、先程は助けて頂いてありがとうございます」

それでは……と立ち去ろうとする慧音を呼び止めた

「慧音……「ついいか？」」

「はい……」

「お前は、人間と妖怪が共存する世界ってのがもしあったら……どう思
う？」

「人間と妖怪が……共存？」

「そうだ。この際あり得るあり得ないは置いて、考えてみてくれ」
突拍子もない質問。

だが半獣である慧音だからこそ聞きたかった

「………私は」

「住んでみたいですね。そんな世界なら」

少女は微笑みながら答えた

「……そうか」

それだけ聞ければ十分だな

俺は何も無い空間に向けて叫んだ

「紫！」

「はぁーい」

すると目の前の空間が裂け、中から（ry

「話は聞いてたな？頼めるか？」

「ええ。歓迎するわ」

「えっ？何も無い所から女の人が……えっ？」

慧音はまだ状況が飲み込めていない

「慧音、よく聞け」

俺はまた思考がショートしそうな慧音の肩に手を置き向かい合っ
た

「わわっ!!ひ、柊さん!？」

「さっき言った世界なんだが……実は実際にあるんだ」

「……えっ?」

　　半年前

「でもそんな世界創るなんて本当に出来るのか?さっき自分で言っ
てナンだけど」

すると

「ふふっ、よくぞ聞いてくれたわね」

　　っと、得意げに胸を張る紫

「実は土台となる世界自体は殆ど完成しているのよ。後は生活出来る
様に環境を整えたりするだけ。それと……」

「そこに住む住民か?」

「ええ。そこで隼斗にお願いがあるんだけど……」

「お願い?」

「もし隼斗の知り合いで私の創った世界に住んでもいいって方がいた
ら誘ってもらいたいなのよ」

「ふーん、まあそれくらいならいいぞ」

「でね?その世界の名前なんだけど」

「おっ、そういや聞いてなかったな。なんて言うんだ?」

「ふふ、人と妖怪が共存出来る理想郷……称して……」

　　くく

『『幻想郷』と呼ばれる場所だ』

『幻想郷……』

「今はまだやっと土台が出来たばかりの場所だが、此れからも住民はどんどん増えるだろう。だから慧音には主に人間側の長になって貰いたい」

此れにはちゃんとした理由がある。

幻想郷とて人間は人間。万が一に備えてその身を守るには強い存在が必要だ。

そこで半獣でありながらも人の心を持つ慧音に人里の守護者を担って貰おうと考えた

「はつきり言って無茶な頼みをしてるのはわかってる。だが敢えて問おう。上白沢 慧音。お前が必要だ、幻想郷に来てはくれないか？」

暫しの沈黙

「……私は、自分という存在が嫌いでした。あんなに仲の良かった皆が揃ってこう言うんです。「人の皮を被った化け物」って」

「…っ」

「だから思っただんです。村の皆が変わってしまったのも、こんな悲しい気持ちになるのも、全部私自身のせいだって」

「慧音それは…」

「いいんです。それでも……それでもね？さつき隼斗さんから幻想郷の話がされて、必要だって言っただけで貰えて凄く嬉しかったです。ああ、私でも役に立てることがあるんだなって」

「…」

「柊さん！そして……えっと…」

「八雲 紫。紫でいいわ」

「では紫さん！先程の件、謹んでお受け致します。私を幻想郷へ連れて行って下さい」

「いいんだな？本当に」

「はい！」

決意の籠った真っ直ぐな瞳。

久々に見たな

「紫、頼む」

「ええ。では一名様ご案内」

紫が空間を指でなぞると、スキマが展開される

「さあどうぞ。この先が幻想郷に繋がってるわ」

「ありがとうございます。紫さん、柊さん。」

「隼斗でいい」

「えっ?」

「俺だけその呼び方だとアレだし。名前がいい」

少女は「では、」っと言いつつ最後に此方に向き直り、

「隼斗さん!お世話になりました。このご恩は決して忘れません。い

つかお礼は必ずします」

「ああ。達者でな、慧音」

俺はスキマの向こうへ消えていった少女に小さく呟いた

「……また会おう」

15話 西行寺

「友達イイ!?だ、誰の?」

「何でそんなに驚くのよ!?私よ!私の友達!!」

俺が開幕早々声を上げて驚いたのは、紫が友達を紹介したいと言ったからだ。

だって紫だけ?あの初対面の相手に対する胡散臭い雰囲気も去ることながら、人をおちよくった様な薄ら笑いを考えr:「幾ら何でも言い過ぎでしょ!」:心を読むな

「ゴホンツ。もう一度言うわね?私の友人がこの近くに住んでいるの。是非貴方に紹介したいから一緒に来てくれないかしら」

「ええー……」

「な、何よその反応」

「めんどい」「さあ!行くわよ!!」

っと半ば無理やりスキマに落とされ向かうことになった

ー

「おおつ:でつかい屋敷だな」

スキマの先は立派な和風の屋敷が広がっていた

庭には見事な盆栽があり、ちゃんと手入れがされて居て雑草一つない。池には此れまた鮮やかな鯉が泳いでいる

そんな風景に見惚れていた俺はある事に気付く

「あれ?紫は?」

ここに連れてきた当の本人がいない。

どこ行ったんだ?

「お主何者だ?」

「えっ?」

ヒュッ

背後から声がかかったので振り向いた瞬間、目前には刀の鋒が迫っ

ていた

「おおっ、吃驚した」

「……ほお、私の突きを素手で掴み取るか…」

俺が驚いたのは常人離れした神速の突きに対してじゃない。こんなもの霊力で手を覆い、掴んで止めればいい。

この爺さん、気配を全く感じなかった

「アンタ誰？」

「ふむ……それは此方の台詞だが？」

ん？つてことはこの人が紫の友人か？

おいおい紫……幾ら友達が出来ないからつてこんな爺さんじゃないか？
くても…

「ここは白玉楼。西行寺家の由緒正しき御屋敷だ。お主の様な者が来る所ではない」

いやそもそも連れて来られた訳であつて、帰ろうにも連れて来た本人がいないんだけど

「わかったわかった。とりあえず自己紹介といこうぜ？俺h…」

ヒュッ

「うおっ!？」

やべっ…

さっきの突きとは段違いの剣速だ。

流石にあんなので突かれたら痛いぞ!？」

「名乗るならば剣を交えながらも良かろう?」

「いや何でだよ!？普通にすりゃいいじゃん!？」

「スキあり!!」

「!？」

一瞬の虚を突いた刺突が隼斗の腹に命中し、大きく吹き飛ばされた

「………終いか。他愛ない」

ブチッ

やべっ…少しキレちまった

俺は速攻で起き上がると一瞬で爺さんの前まで詰めより、敢えて大振りに拳を引いた

「なっ!?…っ!」

一瞬驚愕した爺さんだったが直ぐ様刀で受ける構えを取る辺り流石と言うべきかな

——まあ防御なんて関係ないけど

「ふんっ!!」

「がっ…!!?」

俺の拳は防御した刀ごと爺さんを吹き飛ばし、石造りの塀に叩きつけた

「どうだ?初めてだろ?素手の相手にぶっ飛ばされたのは」

「ぐっ…油断したか」

刀を杖代わりにしながら立ち上がる爺さんだが、瞳にはまだ闘志が宿っている

頑丈な爺さんだ

「ならば私も本気で行くぞ!」

「上等だ。来いよクソジジい!」

爺さんは刀を鞘に納め居合いの構えを。

俺は拳を顎の高さで構え敢えて握り込まず肩の力を抜く。

暫く睨み合いの沈黙が続く

カコンツ

「!!」

庭の鹿威しが落ちる音を合図に両者が動く

爺さんが繰り出したのは神速の抜刀術

俺が繰り出したのは右ストレート

両者の武器が迫る

「待ちなさい!!!」

「!?!」

ビタアツ

突如響き渡った怒号ともとれる女性の声

その声に爺さんの刃は俺の首筋に、俺の拳は爺さんの眉間手前で止められていた

「…幽々子様?」

「…紫」

声のした方を向けば屋敷の縁に紫と、声の主であろう桃色の髪をした女性が立っていた

「妖忌、刀を納めなさい。その人は敵ではありません」

「幽々子様!…しかし…!」

「貴方もよ隼斗。拳を引きなさい」

「……」

正直今俺は機嫌が悪い。話を聞かず斬りつけてきた爺さんもそうだが、そもそもこうなったのは紫のせいだ。その元凶である紫にとや

かく言われたくない。

でも爺さんも意固地になって刀を降ろそうとしないし、埒が明かないのは事実か……

「……俺が大人になろう」

素直に拳を引いた

「……」

するとあっさり爺さんも刀を納めた

俺は紫の元まで歩いて行き、耳打ちで低く呟いた

「は、隼斗……?」

「……後で俺ンとこ来い」

俺が去った後、紫は顔面蒼白で苦笑いしてたそうなの

ー

ゴツチーン!!

「いったー……い!?」

あの後此処の主である西行寺幽々子に屋敷の中へ招かれ茶の間に通された

で、お仕置きタイム。

可哀想だから拳骨は一発で済ませて殺った

まあ紫は頭から煙を上げて悶絶してるけど知らん、反省しろ

「御免なさいね?妖忌の早とちりで攻撃してしまっただけ」

「いや、いいよ。元はと言えばちゃんと言えなかったコイツが悪いから」

未だ倒れている紫を指して言った

「つつ……!仕様が無いじゃない!隼斗だって最初私の事バカにしてきたからちよつと仕返ししてやろうと……!」

「もう一発いくか?」

「ナンデモゴザイマセン」

ふと紫を見ると俯いてしまっている。

まあ元々からかった俺も悪いか……

「ん、ならもう仲直りしよう。俺も悪かったな、からかったりして。後殴って」

そう言って紫の頭を優しく撫でた。(一応殴った所は避けて)

「ううくもういいわよ〜」

紫もホツとしたのか俯きつつ呟いた

「あらあら仲睦まじいわね〜、もうそこまで進んだのかしら」

「な、な、何言ってるのよ！そ、そんなんじや無いわよ!!」

「ふふ、紫ったら照れちやって可愛い。ねえ、貴方もそう思うでしょ？」

「なあお茶ももらえる？」 ↑聞いてない

「緑茶でよろしいかな？」

「……………紫も大変ね」

16話 西行妖

「なあ妖忌」

「む、何かな？」

「あの桜の木はなんだ？」

俺と紫が白玉楼を訪れて一月

今俺は庭で妖忌と組み手をしている

最初は妖忌が日課の鍛錬にもっと磨きをかけたいと言うことで手伝ってたんだが、やってるうちに俺も楽しくなってきた。今では俺から誘うほど

…話を戻すと白玉楼には大きな桜の木がある。

唯の桜の木なら俺もそこまで気にしないんだが、どうもあの木からは嫌な感じがする。

「ふむ…やはり気になりますか」

「まあ、な」

「スキあり」

「痛て!？」

見事な兜割が脳天に入った

「それで？アレは一体何なんだ？唯の桜じゃないんだろ？」

組み手後、縁に座って休憩。妖忌は相変わらず素振りしてるが…

「…西行妖」

「西行…『妖』？」

「…少々長い話になりますが宜しいか？」

「…ああ。話してくれ」

——昔、この白玉楼には春になるとそれは見事な花を付ける桜の木があった。

白玉楼前当主にして歌聖でもある西行寺 富士見様はその桜を大層気に入っておられた。

娘である幽々子様が産まれてからも同様に大事にしてきたそうだ。

だがある日悲劇は起きた……

アレは今の様な春の季節。

病を患われていた富士見様はある願いを口にした。

「あの桜が満開になった時、我命も尽きよう。ならば桜の木の下で眠りにつきたい」っと……

富士見様が息を引き取られたのはその三日後の事だった。

満開になった桜の木の下で永遠の眠りついたのだ。

富士見様が亡くなられてから数日後、この白玉楼内で新たな死亡者が出た。富士見様を慕っていた者達だ。

後を追うように、次から次へと。

満開になったその桜の下で死んでいった。その桜は死んでいった者達の生気を次々と吸い取っていき、ついに妖力を放つ様になってしまった。

そしてこの事から妖怪桜、『西行妖』と呼ばれる様になり、毎年のように死亡者が後を絶たない

・・・

「そんな事が……」

「時に柊殿、幽々子様の能力をご存知か？」

「…いや、知らないけど。何でまた？」

「死に誘う程度の能力」

「!？」

「元々は死霊を操る程度だったはずの能力が西行妖の誕生と共に変化したのです」

「じゃあ、毎年出る死亡者ってのは……幽々子が？」

「……断定は出来ませぬ。唯、死亡者は幽々子様能力が変化する前から出ている。単にそう決めつける事は出来ませぬ」

「……その妖怪桜をどうにか出来ないのか？切り倒しちまうとか、燃やすとか」

「西行妖は今や人の生命力を吸収し過ぎたせいで莫大な妖力を蓄えている状態。下手に刺激を与えればその力を放出してしまうかもしれない。よって手が出せないのです」

つまり死のエネルギーを持った爆弾ってところか。

厄介だな。いざとなったら力尽くで破壊してやろうと思ったのに

「あら〜？二人して何の話をしているの？」

「!?!」

急に声がかかり振り返ると幽々子が歩いてきた

「いや、まあアレだ。妖忌の剣術が凄いもんだから俺にも教えてくれよって頼んでたんだよ！なっ？」

「コホンッ。ええまあ、柊殿程の実力があればその必要は無いと申したんですが」

「あらあら貴方達最初と比べて随分仲良くなったのね〜」

「ま、まあな」

「じゃあ私は紫の所に戻るわね〜」

・
・
・

「聞かれてたか？……俺らの話」

「どうでしょう……何分掴み所の無いお方ですから」

今思えば俺は気付くべきだった……

いや、薄々気付いていたのかもしれない。

俺たちが最初に此処を訪れた時よりも西行妖の気配が強くなって
いることに

再び西行妖が満開になったのは、それから三日後の事だった

17話 避けられない運命

ある晴れ渡った日の夕暮れ

俺たちは何時もの様に夕飯の準備をしていた。

食事は妖忌が作り、俺も手伝っている

紫と幽々子は食卓に座り談笑しながら料理が運ばれて来るのを待つ。
つ。

これが何時もの食事風景。

「ねえ、幽々子見てない?」

それは紫の何気ない一言から始まった

「幽々子?居間にいないのか?」

「それがいないのよ。全くどこにいるんだか」

「珍しいですな。幽々子様が食事時におられないとは…」

何と無く嫌な予感がした

「紫、幽々子を探せ」

「えっ?でも食事が出来ればその内出て来るんじゃない?」

「柊殿、どう言うことでしょう?」

「珍しく胸騒ぎがする。とにかく、俺と妖忌は屋敷の中、紫は庭だ。」

「承知しました」

「…わかったわ」

何と無く状態を察したのか直ぐに動く二人

外は不気味な程静かだった

――

「妖忌!居たか?」

「いえ、屋敷内隅々まで探しましたが影も形もありません」

「じゃあ一体どこに……?!?」

「柊殿? どうs……………!?!」

屋敷内に光が漏れていた。

時刻は既に日も沈み、暗くなりつつあるにも関わらずだ

月明かりとは違う。鮮やかな赤桃色の光

庭先から妖力

「っ!!」

俺は妖忌に声を掛けるのも忘れ、庭に飛び出した。

向かう場所は西行妖

「…なっ?! 西行妖が…!」

そこには見るものを魅了する程美しく、色鮮やかに咲き誇った西行妖があつた

桜から視線を落とすと紫が立っている

「紫!」

「…」

呼び掛けるが返事が無い

「紫? どうし……………」

異変を感じ、そばまで駆け寄った俺は何故紫が呆然と立ち尽くしていたかわかった。わかってしまった

「幽々……………子?」

満開になつた西行妖の下。

そこで横たわる幽々子の姿があつた

「幽々子!?!」

直ぐ様駆け寄り抱き上げる

「おい! 幽々子! しっかりしろ!! おい!!!」

返事は無い。何時ものおちやらけた返事が返ってこない

「幽々子様!!」

遅れて妖忌も駆け付けた

「ああっ… 幽々子様…! そんな…」

変わり果てた幽々子の姿に膝を折る妖忌

幽々子の手には短刀。

胸の部分から血が滲み出ている

「自分で刺したのか…？幽々子…なんで…：…なんでだよ!!」

幾ら叫んでも、体を揺すっても幽々子は目を開けない

「！…：…つ柊殿!!」

「!?」

妖忌の言葉に顔を上げた

西行妖が不気味な光を発し、途轍もない量の妖力が溢れ出ている

「何だよこの妖力…：…そうだ、紫!!」

「…」

紫はあまりのショックのためか虚ろな目で座り込んでいる。

手に持ったナイフを首筋に当てながら

「っ!!」

幽々子を妖忌に渡し、半ば飛び掛かる程の勢いで紫からナイフを弾いた

「おい、紫…！っっかりしろ!!聞こえてるか!?!」

「…」

見るといつの間にかスキマを開き、再びナイフを取り出そうとしている

「この…！…やめろってんだろぅがア!!」

怒声と同時に紫の頭に拳を振り下ろした。以前の拳骨よりも少し強めに

「…：…!?…：…っ!!?」

最早言葉が出ない程痛いらしい

「おい紫!!」

「っう…：…な、何よ」

「お前、正気に戻ったんだな？」

「えっ？私……何やって……っ！幽々子!？」

妖忌の腕の中で眠る幽々子に駆け寄る紫

「そんなっ……幽々子……いやっ！いやああああ!!」

「落ち着け紫！今は……っ！」

幽々子の亡骸を見て半狂乱になっている紫を落ち着かせようと近付いた途端、長年妖怪達と戦ってきたことで培った第六感が警報を鳴らしている

「……ヤバいのが来る

「っ!!」

考えるよりも先に体が動いた。

その場にいる全員を抱えて後方に跳ぶ。

「ありやヤバいな……！」

先程まで俺たちが立っていた地面

まるで生気を吸い取られたかのようにそこら一帯の草木は枯れ、土は腐敗している。

西行妖から伸びた枝によって

「妖忌、戦えるか？」

「無論です……！」

「そうか。……紫」

「……」

「こんな状況で酷な事を言う様だが、あの妖怪桜をどうにかしなきゃならねエ……」

このままほっとけば更に犠牲者が出る。そしたらお前の夢も叶わなくなるんだ」

「……」

「……これは俺の推測だな。幽々子は自身の能力に責任を感じてい

たんだ。そのせいで数多の人々を死に追いやってしまったのだと。
だから……

弱った心を西行妖につけ込まれた」

「……！」

「あいつはこう思ってたんじゃないか？この悲劇を自分で終わらせてほしいって」

「幽々……子……！」

「なあ紫。もしこれ以上犠牲者を出しちまったらあいつが浮かばれない……違うか？」

「………そうね」

「……落ち着いたらでいい、決心が着いたらでいい。力を貸してくれ。

……妖忌、行くぞ！」

「承知！」

暴走した西行妖を止めるため、数百年前より続く呪いを断ち切るため、二人は地を蹴った

18話 弔い合戦

俺と妖忌は禍々しい力を放つ西行妖の猛攻に防戦一方だった。攻撃自体は単調で、急速に枝を伸ばす事での刺突のみ。

接近戦が得意な俺や妖忌にとって避けるのは難しくない。

だがその枝は避ける事は出来ても、受けることが出来なかった

「妖忌、絶対に枝の一撃は受けるなよ！生命力を吸い取られるぞ！」

「心得ております！」

生命力を吸収する程度の能力

この妖怪桜の力を能力名で表すならこんなところだろう。

受ける事が出来ない分此方からは迂闊に近寄れず、向こうは一方的に攻撃出来る

だが此方もやられっぱなしって訳にはいかない

「舐めんじゃねエ!!」

拳を握りしめ目の前の空間に向けて拳を突き出す。

これにより生じた衝撃波が空気の弾丸となり迫ってくる枝を粉碎した

「はあアアっ!!」

妖怪も紙一重で枝による突きを避け、すれ違い様に切り落としていく。触れるのが一瞬ならば生命力を奪われる心配がない

触れるのが一瞬ならば生命力を奪われる心配がない

「駄目だ！キリがない…」

だが幾ら潰そうとも無尽蔵に湧いてくる枝に対して此方は徐々に体力を消耗するだけだった。

「隼斗！妖忌！」

つと、ここで紫から声が掛かった

俺と妖忌は一旦西行妖と距離を取るため後退した

「紫！もう大丈夫なのか？」

「ええっ…ごめんなさい。私としたことがみつともない姿を晒して

しまつて」

「いや、気にしなくていい。それより何かいい案は無いか？」

「……あるわ。一つだけ」

「紫殿、その案と言うのは？」

紫の発言に妖忌が尋ねる

「いい？二人とも心して聞いて頂戴。あいつを……西行妖を封印するわ」

「封印？そんな事出来るのか？」

「私一人の力ではあの莫大な妖力を抑え込むことは出来ないわ。だから力を借りるの」

「借りるつたつて、俺も妖忌も封印術なんて使えないぜ？」

「……そうね。だから……幽々子の身体を使うの」

「なっ！幽々子様の!!」

「妖忌、貴方が驚くのも無理はないわ。我ながら最低な方法だもの」

「……でもそれしか方法が無い。そうだな？」

「……ええ」

「……どうすればいい？」

「いいの……？こんな方法なのに……！」

「やるしかねエ……それでコイツが止められるなら!!最低だろうが何だろうがな」

「……妖忌は？」

「……もし幽々子様が生きておいでなら今の腑抜けた私を叱るでしような」

「……妖忌」

「やりましょう紫殿。今は西行妖を止めなくては……！」

「……わかったわ」

「二人とも頼むわよ」

「任せろ」「お任せを」

紫は封印の為の術式を組み上げる間は完全な無防備状態になる為、俺と妖忌で西行妖の攻撃から紫を守り抜く必要がある

「……来ましたぞー！」

再び西行妖の枝が伸びる。

しかも先程とは違い無数に枝分かれし、俺たちを取り囲む様に枝が展開された。

「ちっ！一箇所に固まった所を纏めてってハラか……！」

だが離れるわけにはいかない。

西行妖を封印するには紫を死守しなければ……！

「妖忌、向かってくる枝は全て打ち落とせ！何としても守り抜くぞー！」

「御意！」

そして一斉に枝が四方八方から襲いかかって来た

「シッ!!」

「ふっ!!」

短く息を吐き伸びてくる枝一つ一つに連撃をぶち込んでいく。

妖忌も同様に枝を斬り捨てる。

西行妖の猛攻は止まらない。

寧ろ段々と勢いを増してきている

「くそっ！紫まだか!？」

「もう少し！もう少しだけ粘って!!」

ピクッ

ここで西行妖に変化が生じた。

コイツに明確な思考能力や意思があるかなんてのはわからない。

西行妖にとって紫の組み上げる封印術式は脅威となるだろう。

それを理解したのか………

標的をこの場の全員から紫に絞った

俺たちに分散する形で動いていた枝が蛇の様に巻きつけられる。枝は一つの束になり、一本の巨大な蔓を形成した。

「!…紫、伏せろ!!」

「きゃあっ!!」

俺は横薙ぎに振るわれる蔓から紫を上から抑え込む形で回避した。幸い術式も途切れたりしていない。

「くそっ!紫、無事だな?」

「え、ええ…助かったわ」

「妖忌、無事…!!」

「ぐっ…ふ、不覚…」

妖忌だけは避け切る事が出来ず吹き飛ばされてしまっていた

「妖忌!?大丈夫か!」

「心配は無用です…咄嗟に…半霊を盾にした故…ぐっ…!」
だがどう見ても重傷だ。

とても戦える状態じゃない

「妖忌、まだ動けるなら出来るだけ離れてろ」

「し、しかし…!」

「いいから下がれ」

「っ!」

「!…隼斗、出来たわ!!」

「!」

ここでついに紫の術式が出来上がった

「ひ、終殿!西行妖が…!」

妖忌の言葉に反応して前方を見ると、西行妖が更に輝きを増し、蔓の先に妖力を集中させている。

「!」

そして蔓は俺諸共紫を串刺しにすべく突き出された。

アレを凌げば俺たちの勝ちだ…!

拳に有りつ丈の靈力を流し込み、迎撃態勢をとる

「はあッ!!」

此方も前に踏み出し全力で殴り付けた。

「!？」

だが最後の最後で西行妖は予想外の動きを見せる

結果から言えば拳は空を切った。

突き出された蔓は一本一本の枝を収束させたもの。

拳がぶつかると瞬間西行妖は収束させた蔓を再び分散させることで、
俺を避けつつ紫を狙ったのだ

「……クソツタレがアアア!!!」

ザシユウウツ!

19話 封印

「……隼斗の拳を躲し、命を刈り取る無数の枝が紫へと向かう
「……つつつクソツタレがアアア!!!」

ザシユウウツ

・
・
・
・

無数の枝が突き刺さり、鈍い音が響く
鮮血が飛び散る

八雲 紫は手で顔を覆い、来るべき衝撃に備えていた。
無論そんな事をして防げる訳が無いのだが殆ど反射の様なものだ。

術式の展開中でなければ、能力を使い防げたかもしれない。

しかし幾ら経っても衝撃は来ない。

痛みすらない

紫は瞑っていた目を開けた

「えっ……っ？」

紫の目に飛び込んできたのは、身体の彼方此方を無数に貫かれながらも西行妖から自分を守る様に立ち塞がる隼斗の姿だった

「う、そ……隼斗、そんな……！」

思わず駆け寄ろうとする紫に声が掛かる

「つつっ！紫……!!」

「！」

「俺ごとでいい……封印を掛ける!!」

「!?…そんな事したら貴方が!」

本来なら対象を定めた封印術は他者を巻き込むことはない。飽くまでその対象のみを封じる為に組まれた術式だからだ。

だが隼斗は西行妖の枝に捕まり生命力を吸われている

つまり今隼斗は一時的に西行妖とリンクしている状態

そんな状態で封印術を掛ければ、隼斗にまで影響が出してしまうかもしれない

隼斗もそんな事は理解している

「……俺は大丈夫だ」

「でも「躊躇うな!!」…っ!」

「……今この妖怪桜を止められるのはお前しかいないんだ!だから躊躇うな、紫…!」

「……………一つ、約束して」

「…」

「貴方は……貴方だけは居なくならないで……!お願い……!」

もう二度と友を失いたくない。

もうこんな思いはしたくない。

だから……!だから…!!

「安心しろ。俺は死なない」

「…ありがとう」

紫が封印術式を発動させると幽々子を媒体に術式が浮かび上がり、眩い光が西行妖を包んだ

そして光が消えたと同時に辺りを包んでいた禍々しい妖気も消えていた

「終わっ…た？…ハッ！隼斗！どこにいるの!？」

「…落ち着け紫、此処だ」

「隼斗…!!よかった…って酷い怪我！直ぐ治療しないと…!」

「…心配ねエって…俺は…大丈夫…」

「隼斗!…と!…!!」

此処で意識は途切れた

――3日後

「ん…うん？」

目を覚ますと見覚えのある部屋に寝かされていた。

「おや、気がつかれましたかな？」

「…妖忌か」

襖が開き、妖忌が入ってきた

「あの後俺はどうなった？」

「…まだ詳しい事はわかりませんが、恐らく過度な出血と封印による影響で一時的に昏睡状態に陥ったものかと」

「…そうか。紫は？」

「居間で談笑しておられます。それでは私は此れで」

そう言っつて部屋を後にする妖忌

――談笑？

妖忌は今し方此処に来たのだから紫は今一人の筈だが…?」

「まさかアイツ今回のショックで頭がパーに…!」

俺は勝手な推測を立て急いで寢室を飛び出し居間に向かった
ダダダダダダッ

バンッ!

「紫!!」

「隼斗…!? 貴方目を覚まして…」

「馬鹿野郎！ 気をしっかり持て!!」

「は、はあ?」

「幾らシヨックでもお前！ おま……え?」

「あらあら随分賑やかな方ねえ」

「……………はっ?」

「もう！ 人が折角心配していたのに開口一番馬鹿野郎とは何よー」

そう言っつ膨れる紫だがちよつと待て

「何で幽々子が此処に……!?」

今俺の目の前には死んだ筈の幽々子が茶菓子を頬張りながら不思議そうに此方を見つめている

「あらく? 私貴方に会った事あったかしら?」

「……………紫、どう言うことだ? 簡潔明瞭に二十文字以内で教えてくれ」

「無理よ」

――

さて紫から話を聞いたが理解が追いつかないので箇条書きで纏めてみよう

・ 幽々子は間違いなく一度死亡している

・ あの世では閻魔が幽々子の今後の処遇を決める際、幽々子の魂は肉体ごと封印されている事に気付く

・ 死者は肉体から魂が離れる事である世に送られ、初めて裁く事が出来る。つまり現状幽々子を裁く事が出来ない

・ 閻魔は亡霊となった幽々子を冥界と呼ばれる場所の管理者にする事で現世に留まる事を許可する。

・ その際幽々子の能力を『死を操る程度の能力』に変化させる事で安定させた

・ 亡霊として蘇った幽々子に生前の記憶はない

・紫は友達が少ない

「成る程、なんとなくわかった」

「ちよつと！最後のは可笑しいでしょう!？」

お約束のボケに紫がツツコミを入れてみると、幽々子は微笑みながら俺に話しかけてきた

「ねえ、貴方の名前を覚えて頂けるかしら？紫のお友達なのでしょう？」

「……」

ああ、そうか。記憶が無いんだもんな。

西行妖の一件も、俺達の事も……

「俺は終 隼斗。よろしく頼むよ」

「ふふ、西行寺 幽々子よ。此方こそよろしくね」

20話 弱体化

白玉楼を後にして直ぐの事。

俺は偶々入った森で妖怪に襲われた。

なんてことは無い、軽くあしらえる相手だった。

異変に気付いたのはその妖怪との戦闘中。

いつも通りの力が出ない

妖怪撃退後、試しに岩を殴ってみた。

いつもはこの程度の岩なら全体の一割も出せば粉々にできる

「……！」

結果的に岩は砕けた。

しかし粉々には程遠く、亀裂が走り割れたという表現があっている

次に脚力。

今度は脚に力を入れ、全力で跳躍した。

昔都で計測した時は積乱雲の高さ(約1万m)まで跳んでしまい、雷に打たれた事がある

結果は下層の雲にも届かず、推定500m程

最後に靈力を試したが、元々能力一本で戦っていた俺は靈力が余り高くなく、現在も此れと言って変化は無かった

「……やっぱり封印の影響だよなー」

西行妖に封印術を施した際、一時的に西行妖とリンクしていた俺は大なり小なり封印の影響を受けてしまっていた。

その代償が能力の弱体化。

超人になる程度の能力は以前とは比べものにならない程劣化してしまっただ。

「まいったな……こんな事ならマジで妖忌に弟子入りすりゃよかったか？」

此れからは霊力を使った戦い方も習得していかねエと駄目か……

ん？待てよ？今迄は能力に頼り切って全く霊力を強化して無かったけど、修行次第では俺、あのオサレな技とかも出来るんじゃないやね？

やべエ！一時はどうしようかと思っただけど案外それでも無いぞ……

!!

「よっしゃー！そうと決まりや修業だ修業!!」

――

〓百年後

霊力の強化・コントロール・応用、

併せて劣化してしまっただ能力の向上。

とにかくこの100年メツサ修業した

最初は少ないと思っただ霊力も実は体の奥底に眠っただけで、修業でコントロールを覚えてからはそれを引き出せる様になっただ。

霊力量に関しても大妖怪クラスとタメ貼れるレベルの霊力を持っただ事には驚いた

そこから更に伸ばし念願の某オサレ漫画に出てくる鬼道を若干ではあるが習得した

寧ろ此れだけのことをたった100年で習得する辺り、俺もまだまだ落ちぶれちやいないな！つと自惚れてみたり

でも此処まできたらどっかで腕試しでもしたいな。
久々に白玉楼に顔出して妖忌に勝負して貰おうか

この何気無くボヤいた事は、数時間後叶うことになる

――

「うおっ……これ全部向日葵か？」

特に目的地も無くのらりくらりと歩いていると、視界が埋まる程の大きな向日葵畑に出た

「これは君が育てたのか？」

向日葵畑に見惚れていると、後方から気配がしたので尋ねてみた

「……あら、気付いていたなんて随分勘の良い人間ね」

「ん、まあ気配には敏感なんですね」

気配の正体は、緑色の髪に真紅の瞳、赤いチェックのベストにロングスカートが印象的な女性だった。

日中の為か日傘をさしている

「ふうん。それでどうかしら？向日葵畑は」

「見事なもんだよ。俺も花に詳しい訳じゃないけど、此処まで大きく立派に咲く向日葵を見たことがないからな」

「そう、ありがとう。……ところでアナタ、此処に来るまでに幾つか立て札があつたと思うけど、ちゃんと見て入ってきたのよね？」

「立て札？いや見てなかったけど、何て書いてあつたんだ？」

「あらそうなの？なら教えてあげるわ……!!」

「！」

一気に女性から殺気が溢れ出したのを感じた俺は反射的に身を捻った

ブオンツと風切り音が鳴り先程まで俺の心臓があつた場所を日傘が通過した

「貴方の身を持ってね♪」

「随分手厚い持て成しだな、妖怪」

俺が初めに感じ取った気配、それは妖力だった

俺は一旦距離を取る為後方に大きく跳んだ

「逃がさないわよー」

女性も日傘を構えながら追って来る

「縛道のハ！『斥』!!」

そのまま振り下ろされた日傘の一撃を、手の甲に出現させた楯状の靈力で弾いた

「……貴方妙な術を使うのね、久しぶりに楽しめそうだわ……!!」

「そんな邪悪な笑顔見たの始めてだぞ俺」

余程の戦闘好きなのか知らんが紅い瞳が一層紅く輝き、口角が吊り上がっている

正直ゾクツと鳥肌が立った

「ハアツ!!」

「……」

連続で振るわれる日傘を体捌きのみで躲す。

確かに速いが、これ位なら妖忌の剣術の方が遥かに上だ。至極読みやすい

「この……」

そして再び大振りの突きが来たので前に出ながら躲し、女性の腹部に指先を向け、

「破道の……『衝』！」

小さな衝撃波を浴びせて吹き飛ばした

だが女性は空中で直ぐ様体制を立て直し着地する

「……貴方は私をナメているのかしら？この程度じゃ人間も殺せないわよっ。」

「元から殺す気はない。それに本気を出してないのはお前も同じだろ

う」

「……殺す気がない？人間風情が言ってくれるじゃない」
女性から笑みは消え、纏う妖力も段違いに濃くなる。

次の瞬間、隼斗の足に何かが巻き付いた

「！……蔓か!？」

足元を見ると地中より飛び出した蔓が足を拘束していた
「何処を見てるのかしら？」

前方から声が掛かりハッと顔を上げると女性が目前まで迫って
おり、回し蹴りが側頭部に直撃した

「がっ……い！」

「まだよ」

通常なら吹き飛んでもおかしく無い威力だったが足に絡みついた
蔓がそれを許さない。

次は拳が鳩尾に入れられた

「ぐっ……い！」

肺の空気が吐き出され一瞬呼吸が止まる。

更に追撃で拳を貰ってしまう

「……マズい……！このままじゃサンドバックになる……！」

とにかくこの拘束を解かねえと……!!

「破道の三十三……『蒼火墜』!!」

隼斗は掌を足元に向け、爆炎を発生させて地面ごと蔓を吹き飛ばし
た。

当然至近距離にいた両者も吹き飛ばされる

「ゴホッゴホッ……！……つたく人の事ボコスカにしゃがって……!!」

「ケホッ……！……あら？貴方の御指摘通り本気で殺しにいつてあげた
だけよ？」

「誰もんな事頼んでねえよ！」

そう言っ地を蹴って突っ込んだ

幾ら相手が女でもやられっぱなしは気に食わねえ……！

「真っ直ぐ来る気？また捕まえて袋叩きにしてあげる」

「縛道の二十一！『赤煙遁』!!」

俺は走りながら掌で地面に触れ、靈力で作り出した煙幕を発生させた

「煙幕…!?何処に…!?」

「上じゃボケエ!!」

「…っ!」

煙幕で視界を奪い、俺を見失ったところで回転を加えたかかと落としを上空から放った。

何とか反応した女性も日傘で受けたが、上からの強い圧力に思わず片膝を着く

「……貴方ホントに人間?術は良いとしてこの身体能力は普通じゃないわよ?」

「普通の人間か?つて聞かれれば違うな。俺は超人だ」

「超人?……まあいいわ。どの道殺すから」

おおっ……!超人についての説明をしなくて済んだのは初めてだ。

21話 VS 四季のフラワーマスター

前回までのあらすじ!

ー向日葵畑を見ていたら縛られてボコられた。

「うおっ……なんだよそれ!?なんで向日葵が回転しながら襲ってくるんだよー!?」

現在俺は芝刈り機の刃の様に回転しながら飛翔してくる向日葵に追いかけていた。

ってかあれホントに向日葵か!?さっき岩が両断されてたぞ!?

「ゴチャゴチャ言ってるんでジツとしてなさい」

「嫌に決まってんだろ!!大体お前花好きな癖に向日葵武器に使うなよ……!!」

「これは私の能力で創り出したモノだからいいのよ!!」

「つたくラチあかねエ……!!」

破道の三十一 『赤火砲』!!」

此方に向かってくる向日葵に手をかざし火塊を飛ばして消し飛ばす

「へっ、どうだ!困った時の赤火砲だ……ぜ……!?!」

向日葵を迎撃したのも束の間、今度は巨大な食虫植物みたいなのが生えてその口を開け、まるで砲門の様に此方に向けた

「消し飛びなさい……!!」

放たれたのは巨大レーザー。

最早どういう原理で植物がレーザー撃ってるのか知らんが、とりあえずヤバイ……!

「縛道の三十九! 『円閘扇』!!」

円形状の楯を展開してレーザーを防いだが、予想以上に威力がある為か長く保ちそうにない

「破道の四! 『白雷』!!」

楯が壊れると同時に隼斗は素早くレーザーの射線から外れる為横

に跳ぶと、食虫植物に向け指先から雷の光線を放ち食虫植物を射抜いた

「……」

「…なあ、そろそろやめにしないか？こんな事したって無意味だろ」
食虫植物が飛散していく中黙ったまま立ち尽くす女性に、ここらで終戦を提案してみた

「……そうね、確かに無意味……」

おっ？ 案外あっさり引いてくれそうだぞ？

「だろ？ だつたらここd…「次で終わらすわ」…あれ？」

「全力でね…!!」

女性は再び日傘を此方に向けてきた

その先端には莫大な量のエネルギーが溜まっていく
ー！ーあれをぶつ放すつもりか!? 俺の後ろには向日葵畑もあるつてのに

「おい落ち着けて！ そんなもん撃つたら向日葵畑ごと吹っ飛んじまうぞ!!」

「殺す…殺す…クロス…」

うっわー完全に目がすわってますわー

理性飛んできますやんヤダー……

…じゃなくて！

あんなもんまともに喰らったら流石に唯じゃ済まんぞ…!

「やるしかねエかチキショー」

ならこつちも今撃てる最高火力で迎え撃つてやろうじゃねーか！

そして掌を前にかざし、霊力を集中させる

…つと同時に彼方もエネルギーを溜め終えたようだ

「マスタースパーク!!」

日傘の先端から極太のレーザーが放たれた。

先程の食虫植物のレーザーとは比較にならない程高出力だ。

だが、隼斗は焦る様子などなく、術の名称を口にした

「破道の八十八！ 『飛竜撃賊震天雷砲』!!」

隼斗の掌からも女性のレーザーを上回る超極太の閃光が放たれ、レーザーを掻き消しながら女性の視界を覆い尽くした

――

「夜の花畑もまた乙なモンだなあ」

時刻は日もくれて丁度月が真上に来たあたり。つまり深夜だ。

月明かりに照らされて咲き誇る花々を眺めながらそんな事を口に出している俺は昼間戦った女性の家にいる。

あの時俺は女性に勝った。

いやーあの極太レーザーを打ち破る辺り流石は八十番代の破道だなーと感心するが、まあそれは置いて。

破道はレーザーを消し飛ばし、そのまま女性を呑み込む。

流石にやり過ぎたと思った俺は、直前に破道を止めようと靈力を一気に弱めたがギリギリ間に合わず。

女性は数十メートル吹き飛び大木に打ち付けられる形で止まった。

慌てて駆け寄ると既に意識は無くボロボロだったが息はしてたし大丈夫かなと思って簡易的な治療術を施した。

でも意識のない女を野外にほっぽり出しとくのは気が引けて（理由はどうかあれ、やったのは俺だし）意識が戻るまでは看病しようと思った。近くに女性の住まいと思わしき家を見つけたのでお邪魔させてもらい現在に至る

「おーい、いい加減起きてくれよ」

特にすることもなく暇だった俺は額に濡れたタオルを乗せて寝ている女性に呼びかける

「……返事がない。唯の屍のよ」「誰が屍よ」

――起きとつたんかい

心の中でツツコミを入れ、容体を確かめる為に尋ねた

「よお、調子はどうだ？」

「最悪よ。今すぐ貴方を八つ裂きにしたいわ」

いや、心情じゃなくて体調の方を聞いたんだが

「…そつちじゃなくて怪我の具合は？」

「それなら殆ど塞がってるわ。何をしたの？」

あれだけの大怪我を負ったにも関わらず、傷が無いどころか、包帯一つ巻いていない自分の身体をみて怪訝な表情をする女性

「治した。得意じゃねエけど治療術は使えるんでな」

「…わからないわね。私は貴方を殺そうとしたのよ？」

「……だから？」

「だから！殺そうとした相手を態々助ける道理が貴方には無いでしょ！？」

何でコイツはこんなに怒ってるんだ？いいじゃん別に。助かったんだから

「だってお前本当は殺す気なかったろ？」

「なっ…!？」

まあ最後の方は理性が飛んでたせいか、はたまた妖怪としての本能を呼び起こしちまったのかは知らないが、マジで殺しに掛かって来たけど

「…何故そう思ったのかしら？」

「何故もなにも、お前初撃は態々殺気を出して感知させてから攻撃してきたし、蔓で拘束した後も日傘を使わず殴打してきたる？もし俺が殺す側だったら迷わず日傘でぶち抜くね」

「……それだけじゃ判断材料には…」

「決定的なのはお前が立てた立て札。あれにはこう書いてあったな。」

『この先太陽の畑。命が欲しくば近寄るなかれ』。

殺す事を目的とする奴が注意喚起なんかするか？」

「……」

「まあ正直言うと半分以上は罪悪感からなんだけどな」

「はあ？」

「お前覚えてないか？最後の攻撃の時、俺の後ろに何があったか」
「!!」

「おい落ち着けてっ！そんなもん撃つたら向日葵畑ごと吹っ飛んじまうぞ!!」

「向日葵……」

「あれだけ大事に育ててた向日葵すら瞳に写らなくなるほどだったんだ。理由はどうかあれそうだったのは俺の所為でもある」

でもよくよく考えるとやっぱり俺悪くなくね？今更どっちでもいいけど

「……そう」

「だからお前m「幽香」……えっ?」

「お前じゃなくて 風見 幽香よ。好きに呼びなさい」

あっ、そーういや名前聞くの忘れてた

いつまでも 女性表記じゃやり辛いもんな。

おっとメタっちまった、自重自重。

「じゃあ俺も名乗るよ。柊 隼斗だ」

「あら、良い名前を持ってるのね」

「?……どゆこと?」

「名前に花の名前が入ってるじゃない」

柊……か。

前世じゃそこまで珍しい名前でもなかったから気にして無かったけど、確か秋に咲くやつだよな

「ふふ、貴方の事気に入ったわ」

昼間の狂気染みた笑みとは違い、大人の女性らしい優しい笑顔を見せる幽香

「なんだ、そうやって笑うと可愛いじゃないか」

「か、かわっ……!!?」

俺の発言に急に顔を赤くして吃る幽香。

ん?何かマズイ事でも言ったか?

「どうかしたか?」

「な、何でもないわよ馬鹿！」

まあ馬鹿だけれども。

この後幽香の意外な一面が見れてニヤけていたら、怒った幽香にキレのいいアツパーカットをもらい天井に突き刺さった

22話 妖怪の山訪問

幽香とは半年程一緒に暮らし、その間に畑仕事の手伝い、組手、優雅なティータイム、組手、組手、と言う様にまあ大半は組手に付き合わされた。

まあ俺自身も経験値積むにはいい機会だったし存外嫌では無かったけど。

そんな生活を半年程続けた後、再び旅を再開したわけだ。

幽香からは「貴方なら歓迎するからいつでもいらっしやい」と言われた。

……友達としてだよな？

それで現在山の中。

なんでもここは妖怪の山と呼ばれているらしく、強い妖怪がゴロゴロいて、その中でも代表的なのが天狗や鬼と言った種族だ。

勧誘がてら戦えたらいいなーなんて思ってたりする

んー昔はこんなに戦闘好きじゃ無かったんだけどな。幽香のが移ったか？

「そこの人間止まれ！」

「ん？」

突如上空から声が掛かり見上げて見ると、白い羽を生やしたこれまた白い天狗が見下ろしていた

頭には犬の耳が付いている

「この山に何の用だ？」

「天狗か、なら丁度いいや。あんたらの長と話がしたいんだ」

「…天魔様と？」

成る程、天狗達のトップは天魔って言うのか

「悪いけど案内してもらえないか？」

「何を馬鹿な事を……貴様の様な怪しい奴を天魔様に会わせる訳にはいかん」

「なら菓子折りでも持って出直せばいいのか？」

「出直す？馬鹿を言うな。貴様はこの山に侵入した時点で排除されるのだ」

マジで？ちよつと入っただけで？

ってかコイツさつきから馬鹿馬鹿言い過ぎだろ。態度もやたらデカイし、段々腹立ってきたので少し悪態ついてやろ

「排除？少なくともお前には負ける気しないけどな？そんな強そうじゃ無いし」

「な、な、なんだとおく!!」

おいおいこれ位の挑発に乗んのかよ

どんだけ煽り耐性低いんだコイツ

「良かろう。ならば直ぐにでも消してやる！」

白天狗はそのまま刀を抜くと同時に一気に突っ込んできた
見た目下っ端とはいえ、腐つても天狗。スピードは中々だ

「だが、まだ遅い」

俺は横薙ぎに振るわれた刀を片手で白刃取りのように掴む

「な、何っ!？」

「こんなナマクラじゃ俺は斬れないぞ」

そのまま力を込めて刃を折った

「おのれえ！貴様覚えていろ!!」

すると白天狗は脇役の様な捨て台詞を吐いて退散していった

「…何だったんだアイツ」

俺はため息を吐きつつ再び山を登り始めた

そして歩き続けること10分後

「アイツです！あの男が侵入者です!!」

さっきの奴が戻ってきた

仲間を沢山引き連れて

「ご苦労、お前は下がっている」

「はっ！」

そう言っただけで下がらなかつたこちらを見てニヤつく白天狗

あーなんかアレだ。ドラマのワンシーンでよく見るイジメっ子がイジメられっ子から予想外の反撃を受けて退散したはいいが、宛も自

分が被害者であるかのように親とかに報告した後、親の後ろでニヤついているクソガキみたいだ。マジぶん殴りたいアイツ。

「貴様か、突然山に侵入し不意打ちで部下を傷つけた不届きものは！」
ほら聞いた？なんか俺不意打ちした事になってるらしいよ？

「いや、確かに突然お邪魔しちゃったのは事実だけど、アンタの部下には不意打ちどころか攻撃すらしてないぜ？」

寧ろ攻撃してきたのはそっちだって言ったらあの白天狗が出てきて、どこで付けてきたか知らんが一丁前に包帯を巻いた腕を見せてきた

あの野郎オ…

「はあ…もういいや」

ここに来て二度目のため息を吐き、気だるそうに頭をかく隼斗

「どうせ天魔様とやらが居るのはこの山の頂上だろ？」

「…だったら何だ？」

「押し通る」

刹那、隼斗の姿が消失する

「なっ、消えた!？」

「ぐあっ!？」

戸惑う白天狗の隊長の背後で悲鳴が聞こえたので振り返ると部下が次々と倒れていく

「お、お前達!」

「心配するな、殺してねエ」

「うっ…」

その言葉を耳にした直後、隊長の意識は途絶えた

次に隊長が目を覚ました時は救援が来た後の事で、部下を含め死傷者は一人もいなかったと言う

因みに例の白天狗だけは簀巻きにされて木の天辺に吊るされていたらしい

「おっ、何かこっつぽい」

あの後気配を消しつつ移動し、頂上付近に着いた隼斗は、一際大きな屋敷を見つけた

「さて、とりあえずノックするか」

屋敷の入口と思われる扉に近づき、戸を叩こうとした瞬間

「私に何かようか？」

不意に後ろから声が掛かった

振り返るとそこには他の天狗とは明らかに妖力も格好も違う天狗が立っていた

金色の瞳に腰まで届く黒髪を一つに纏めたポニーテール

手には立派な扇をもっている、モデル体型の女性だ

「アンタが天魔？」

「いかにも。この山の天狗達を束ねておる天魔。名は陽高 彩芽（ひだか あやめ）という」

「そうか、俺は隼斗。少し話したい事があるんだけどいいか？」

「ふむ。まあ、そう言うことなら立ち話も何じやし中で話そう」

「いいのか？俺一応部外者だぞ？」

「問題なからう。お主からは敵意を感じんからの。それにこれから害をなそうと言う者が態々戸を叩いて家に入ろうと思わんじやろ」

「そりや、どうも」

流石種族の長だけあつて器が広い

あのアホ天狗が部下だつてのが信じられないな

――

「――って訳なんだけど」

「成る程。確かに悪い話では無いな。で、その世界はなんと呼ばれておるのだ？」

「幻想郷だ」

「幻想郷……そこは我々も受け入れて貰えるんじゃない？」

「ああ。歓迎するよ」

「そうか、感謝する。期日はいつになる？」

「まだ完成したわけじゃないからもう少し先かな。まあその辺の報告とかは責任者である八雲 紫が来てくれると思う」

「そうか、では楽しみにしている」

つと、ここで勧誘の話は切り天魔にある事を尋ねてみた

「なあ彩芽、この山に鬼がいるって聞いたんだけど、どこにいるかわかるか？」

「鬼じゃと？そんな事聞いてどうするのじゃ？」

「鬼って言えば喧嘩っ早くて有名だろ？ちよつと戦ってみたくてさ」

「…正気か？」

「俺がここに来た目的は勧誘兼強い奴と戦うことなんでね」

「うーむ、あまり勧めんが…それならこの山の反対側にある溪谷に行くといい。そこが鬼の集落になっておる」

「へえ、流石この山の長なだけあつて詳しいな」

「…いや」

「ん？」

「この山を治めておるのは鬼じゃ」

「えっ、そうなの？」

意外だった。俺はてつきり腕っ節の強い鬼を指揮して、天狗が妖怪の山を統括しているのだと思つていたからだ。

「それだけ強いと言うことじゃ、鬼は。」

「…へえ」

俺は自然と笑みを零していた

期待以上の強さを持つ鬼と戦えると思うと楽しみで仕方ない。

全く、いつからこんな好戦的な性格になつちまつたんだか

「そろそろ行くよ。情報ありがとな」

早速そこへ向かうため立ち上がり出口に向かう俺に彩芽から声が掛かった

「隼斗」

「ん？」

「出来れば死ぬなよ？私としても友人に死なれては寂しいのでな」

「友人って、俺たちさつき会ったばかりだろ？」

「何を言うか。友になるのに時間など関係無いわ」

お堅いイメージのあつた彩芽から意外な言葉が出てきて少し笑み

が零れた

「ははっ、確かに」

目指すは鬼の住む溪谷

23話 VS 怪力乱神

「よし、着いたな」

彩芽に言われたとおり山の反対側まで飛んだところ、大きな溪谷があり、したの方に幾つも洞窟が出来ている

「うん？何だありや」

見ると溪谷の中心に闘技場？みたいな者が出来ていてそこに何人が集まっている

「…あれは、人間か？」

更に近づいて見てみると、闘技場の上では鬼と人間の男が向かい合っていた

「た、頼む…勘弁してくれ…！」

「何を今更怖気付いてる？私達を退治しに来たんじゃないのかい？」

「お、俺が悪かった！だ、だから…」

「悪いけど、売られた喧嘩は買うのが鬼の性分だね。見逃す訳にはいかないんだよ」

成る程な。つまりあの男は退治屋か何かで、鬼を討つためやって来たはいいが鬼の圧倒的な力を前に仲間全滅。アレが最後の一人か

つと、闘技場の端で最早原型をとどめていない退治屋の残骸を眺めながら推測する

「まあ、今回は退治屋が無謀だったって事で助ける義理もないんだけどな」

だが流石にまだ生きてる人間を見殺しにするのは目覚めが悪い

仕方ないと呟き、闘技場に歩み始める隼斗

「うん？誰だお前は」

先程から男と話していた周りの鬼より一際妖力の強い額に大きな角を生やした女の鬼が、此方に気付いて尋ねてきた

「唯の流浪者だ。部外者の俺が言うのもなんだけど、その人見逃してやってくれないか？」

「なに？」

睨まれた。そりやそうか

「アンタらだつて戦意喪失した相手と喧嘩したつて面白くないだろ？」

「そういう問題じゃない。この人間共は私達を退治するためにここにやって来た。私達はその挑戦を受けたんだ。殺されたつて文句言えない筈だよ？」

今度は二本の角を生やした見た目少女の鬼が言い放った

「まあ一理あるな。じゃあさ……」

ここで霊力を5割程解放する

「俺がそいつ等の代わりにアンタらと戦うつて言つたらどうだい？」

その瞬間、長と思われる二人の鬼とそれ以外の鬼達が身構えた

「……へえ。中々イイものを持つてるねえ」

俺の霊力をその肌を感じ、嬉しそうに笑う鬼

「さあ、どうする？」

因みに生き残つてた人間の男は俺の霊圧に当てられて失神していった

もう帰れお前

「……いいだろう、その喧嘩買った」

どうやら納得してくれたようだ

——計画通り

「一応名前を聞いておこうか」

「柊 隼斗だ」

「隼斗か……いい名前じゃないか。私は星熊 勇儀。鬼達を束ねる長の

一人だ」

「同じく長の一人、伊吹 萃香だよ」

—————

「勝負場所は闘技場の上。勝敗は相手を殺す若しくは気絶か、降参するかで決まるものとする。いいね？」

「わかった。それで誰が戦うんだ？」

「私から行くよ」

名乗りを上げたのは長い金髪で額に大きな角の生えた女の鬼、星熊 勇儀

「隼斗って言ったかい？アンタ変わってるね」

「変わってる？何で？」

「鬼つてのはその圧倒的な強さ故に周りからは恐れられてるのさ。なのにアンタは恐縮するどころかこうして勝負まで挑んできた。人間を助けるって建前まで付けてね」

「…バレてたか」

「くくっ、久しぶりに楽しめそうだよ！」

そう言つて構えを取る勇儀

豪快な構えだが隙がない

対して俺も身構える

「アンタ素手でやり合う気かい？」

「一応術も使えるがそれじゃあフェアじゃないだろ」

「ふえあ？」

「公平じゃないってこと」

「ふーん。その心意気は嫌いじゃないけど、あまり舐めてると怪我するよ！」

一気に駆け出す勇儀

「うらあっ!!」

掛け声と共に繰り出された勇儀の拳。

隼斗はそれを紙一重で躲す。

すると後方にあつた木の中心が拳の形で抉れていた

「…おおっ、どんな拳圧だよ」

「まだまだこれからだよ！」

予想以上の怪力に若干驚いた隼斗だったが、直ぐに切り替えて勇儀の乱打を躲していく

「ちいっ、ちよこまかとー！」

ここで少し大振りのこぶしが放たれた。

隼斗はそれを見逃さず体を捻ることで躲し、その勢いのまま勇儀の横腹に拳を叩き込む。所謂レバーブローと言うやつだ

「ぐっ…」

肝臓部分に鈍い衝撃が走り、顔を顰める勇儀

「もういっちょよ!!」

続け様に右ストレートをぶち込むが今度は両腕を交差してガードされてしまった

「つつつ…中々重い拳だね。少し効いたよ」

いや、霊力も込めてたし割と強めに殴ったから普通は少しじゃ済まないんだけどな。

タフだね、鬼ってのは

「今度はこっちの番だ!」

ドンツと勢いよく地面を蹴り一気に間合いを詰めてくる勇儀
見ると地面が抉れて足型が残っている

「そらっそらっそらあっ!!」

「うおっと…!」

先程とは比べものにならない速度で連打が放たれる

一発一発が重い

そして一発の突きが隼斗の捌きを掻い潜って鳩尾に打ち込まれる

「…っ!」

一瞬怯んだ僅かな隙に回し蹴りが入った

ズドオオンツ!!

大砲をぶつ放したと思わせる程の炸裂音が辺りに響く

回避が間に合わずモロにくらった隼斗はくの字に折れながら吹っ

飛び、競技場の外に投げだされた

「しまった…!やり過ぎちまったか?」

「…ありやー、少しは骨のある奴だと思っただけどね」

勇儀も萃香も周りの鬼達までもが隼斗の負けを確信した直後

「あく、痛ってえ!くそっ…!」

一同が声のした方を見ると、闘技場の場外からのそりと立ち上がる
隼斗の姿があった

本人は痛がっているがまだ大分余裕がありそうだ

「…くくっははははっ!やるじゃないか!最高だよアンタ!!」

それが余程嬉しかったのか笑いながら隼斗を褒め称える萃香

勇儀も同じ様でそばまで駆け寄り闘技場へ引っ張り上げてくれた

「どうも。って言うかさつきまで本気じゃなかったんだな」

「まあアンタの力がどんなものか気になったんでね。そしたら思いのほかやるからつい力が入っちゃったよ」

「さいですか」

つとここで萃香から声が掛かった

「さて、隼斗。このまま続けるか？ 私達としちゃあ大分満足出来たしそっちが降参するならそれでも構わないよ？」

その言葉に隼斗の眉がピクツと動いた

「降参？ 冗談言っちゃいけねエな。やられたままじゃ終われない。勝負はまだまだこれからだろ？」

「ふっ、そうかい」

まるでそう返ってくるのがわかってたかのように笑う萃香と勇儀

「なら試合続行だ。勇儀！ 遠慮はいらないよ、本気で行きな!!」

「…いいんだな？ 隼斗」

「ああ、俺もちつとばかし本気ですからな」

そう言つて霊力を八割解放。

同時に両手両足に霊力で形成した籠手を装備する

これは幽香との組み手中に思いついた新しい技だ。

唯籠手なので、装着すればパンチ力が上がるわけでも炎などを纏えるわけでもない。

飽くまで腕の防護が目的だ

「…：…ほう」

最初こそ驚愕していた勇儀だったが、隼斗から発せられる霊力をその身に受け歓喜する

「いいね！ この身体にひしひしと伝わる緊張感。久々の強者だ！」

拳を握り込み、一層妖力を高める勇儀

「そりゃ、どうも」

力を失つて以降、過去にここまで霊力を出した相手は幽香だけ。果たして今回はどうかかな？

「ふっ！」

短く息を吐き、一気に霊力を跳ね上げる

「…はっ、面白いじゃないか。行くよ!!」

地に足が付くたびに地鳴りが起こる程の爆発的な加速力で突っ込み、拳を放ってくる勇儀

隼斗はそれを籠手を使い地を踏みしめる形で受け止めた

その余波で衝撃波が発生する

「なっ!？」

「お前の本気はこんなもんか?」

「くっ!…うおおおおおっ!!」

勇儀は咆哮を上げ、怒涛のラッシュを打ってきた

その咆哮により大気が震え、木々が激しく揺れる。繰り出される拳や蹴りの一発一発が空圧だけで大地を抉る程の威力だった

それでも隼斗はその一つ一つを捌き、受け、躲していく

そして勇儀の拳を弾き、大きく空いた腹に拳を叩き込んだ

「こんなもん……がっ!？」

一瞬耐えたかに見えた勇儀だったが次の瞬間には凄まじい衝撃をその身に受け、吹き飛んだ

「ぐっ…!…何が起こった?」

一瞬呼吸が止まるも、なんとか起き上がる勇儀

流石鬼なだけあってタフだ。

普通なら意識がぶっ飛んでもおかしくない一撃だったのに

「異国の武術でな、発勁と呼ばれる技だ。これの前では頑丈さは関係ない。内側にまで衝撃を伝えるからな」

「成る程。耐えられなかったのはそう言うことか。…なら打ち合いは些か分が悪いね」

「でも…」そしてゆっくりと構えをとり、呼吸を整える勇儀

「だからって引くわけにはいかないんだ…!」

「上等っ!」

再び始まった打ち合い

だが明らかに勇儀の勢いが増している。

隙をついて隼斗が発勁を叩き込むが、血反吐を吐きながらも勇儀の

ラッシュは止まらない

「つつつ…まだまだあ!!」

「ぐっ…!!」

勇儀の拳が入り、後ろに仰け反る

その反動を利用しお返しと言わんばかりに頭突きをかます隼斗

「おおおおおらあああ!!」

「はあああああ!!」

お互い倒れてもおかしくない程の打ち合いが暫く続き、双方の拳が顔面に入りクロスカウンターの形になる

お互い数メートル後退ったところで息も絶え絶えの勇儀が口を開いた

「ハア、ハア…隼斗、次が最後だ。私の持つ力の全てをぶつける。付き合ってくれるな？」

「ふうー、ああ」

俺はその問いに即答した

「ふっ、そうかい」

勇儀は短く笑い拳を握り込む

『奥義・三歩 必殺』

一歩、その瞬間高密度の妖力が拳に収束される

二歩、その踏み込みにより大地が割れ、更に妖力が跳ね上がる

三歩、勇儀の姿が消え、一瞬で目の前に現れる

そして莫大な妖力が込められた拳を打ち込んだ

…隼斗はそれに合わせて一層霊力を込めた籠手を突き出した
ゴパアアアアッ!!

その衝撃波により、大気は弾け飛び、周りの木々を薙ぎ倒され、闘技場の石畳みは全て吹き飛んだ

砂塵が巻き上がった闘技場に影が二つ

「…」

「…」

両者は拳を突き出したまま動かなかった

隼斗の籠手は余りのダメージを受けた為か、ひび割れ飛散。

覆われていた腕も皮膚が裂けたのか出血している

勇儀の拳も無事ではないらしく血が垂れている

そして勇儀が膝をつき、力なく倒れた

技の威力は互角。負ったダメージも互角。勝敗を決めたのは余力の差だった

お互い互角だったとは言え、武術の心得がある隼斗と、怪力を持つも全てが力任せの勇儀。

当然体力を使い果たした勇儀に立ち上がる力は残されていない

「はぁ…負けたか…」

「立てそうか？」

「悪いけど自力じゃ無理だね。肩貸してくれるかい？」

「勿論」

肩を貸り、なんとか起き上がる勇儀

「いい拳だったぜ、勇儀」

「アンタもね」

24話 京へ

勇儀との激闘の後、続けて見た目幼女の鬼、伊吹萃香とも戦った。萃香の『密と疎を操る程度の能力』には最初こそ苦戦したものの、霧になったところを結界で囲い捕獲。堪らず元に戻った隙をつき、『縛道の六十一・六杖光牢』で動きを奪い、暫く暴れた後無理だと悟ったのか降参してきた。

あつさりし過ぎと思うかもしれないが俺だつて疲れてたんだもん

「隼斗オ〜！飲んでるか〜!!」

今俺は鬼たちの大宴会に参加している

戦いに勝った後勇儀・萃香を初めとする鬼たちにエラく気に入られて、そのまま半強制的に宴会の席に座らされた。

で、その辺の鬼たちと適当に飲んでたら勇儀が話しかけてきた

「ああ、いただいてるよ」

「そうかそうか！よし、こっち来いこっち！」

やたら上機嫌な勇儀は席に着くと自分の隣を叩きながら俺に隣に来るよう言ってきた

「ああ、可哀想に……こりや吐くまで飲まされるぞ」

「まつ、がんばれ」

などと哀れみを込めて肩をポンつと叩いてくる鬼

まあでも俺結構酒に強いから大丈夫だろ

少なくとも酒豪の神奈子よりは飲める

「じゃ、行ってくるわ」

そう言つて立ち上がり自分の杯を持つて勇儀の隣に座った

「来たね。じゃあとことん飲もう！」

「おっ！飲み比べかい？私も混ぜてよ」

萃香も加わり、いつの間にか飲み比べに発展したまま、時間は過ぎていった

――

勇儀達と飲み始めて2、3時間経った頃には周りの鬼達は皆酔い潰

れて眠っていた。

勇儀と萃香も大分酔いが回っている様で、此方に体を預けてきた
「そろそろお開きにするか?」

俺はまだ余裕があるが、今にも潰れそうな二人を心配して尋ねてみる

「なあ隼斗」

すると勇儀は俺の体を支えにしながら此方に向き直った

酒のせいなのか表情がトロンとしてる

「なんだ?」

「アンタ私の旦那にならないかい?」

「…は?」

思わず間抜けな声が出た

「勇儀、私『達』だろ?一人占めは駄目だよ」

「わかった、わかった。私達な」

「いやいやちよつと待て!急にどうした!」

勝手に話を進めようとする二人を慌てて止める

「どうしたもこうしたもないさ。私達はアンタに惚れた。だから夫婦の契りをだな…」

「惚れたって、俺達今日会ったばかりだろ!?!さっきまで戦ってたし」

「戦ったからこそだよ。私達鬼はね、強い奴に引かれるのさ。特に私と勇儀なんかは今まで自分達より強い男がいなかったから今日の戦いで見事に持っていかれたよ」

萃香がそう言ったと同時に、勇儀に背後を取られてロックされた。

背中に気色良い感触が二つ

「ちよつ、落ちつけお前ら!一旦冷静になれ!!」

「心配するな。悪い様にはしない。アンタは唯受け入れればいい」

「くっ!!」

このままだとやられると思った俺は拘束を振りほどこうとするが、流石は鬼。体制的に不利なものもあってか中々外れない

「さあ隼斗、観念しな」

更に萃香が服を脱ぎながら迫ってきた

「くっ！こうなったら破道で!!」

破道で脱出を図ろうとした瞬間、二人は眠った

「…はあ。全く困った人ね」

「ゆ、紫?」

いつの間にか背後にスキマが開いていて中から紫が出てきた

「えーと、この二人は?」

「心配ないわ。意識の境界を弄って眠らせただけだから」

「そ、そうか。助かった。で、ここにいるって事は俺に用事か?」

「あら、用が無ければ会いに来ちゃいけないの?」

「いや、ンな事は無いけどよ」

「さつきこの山の天狗の長に会って来たの。そのついでよ」

「ついでって…:まあいいや。って事は天狗達は幻想郷に?」

「既に迎え入れる準備は出来ているわ」

「じゃあ出来たのか?幻想郷」

「つい先日ね。やっとここまで来たわ」

「へえ、凄いじゃないか!夢の実現まで後一步だな!!」

「ふふっ、当然よ!何て言ったってこの私ですもの」

褒められたのが嬉しかったのか表情を緩ませながら自慢気に胸を張る紫

それから夜が明けるまでの間酒を飲み交わし、夜明けと同時に「引き続きお願いね」と言う言葉を残して紫は帰っていった

「もう行っちゃうのかい?」

「別にゆっくりしていてもいいんだよ?」

宴会を終えてから3日後(と言っても3日間毎日宴会だったが)、また俺は旅立つ事にした。

勇儀と萃香はああ言ってるがいい加減俺の貞操が危ないため、早々に離脱せねば。

「また会いに来るから、そんな時はまた飲もうぜ」

まあでも実際3日とはいえ楽しかったのは事実だ。鬼は見た目強

面が多いし、喧嘩っ早いところもあるけど、話してみれば気さくな奴が多くて、気兼ねなく接する事が出来る。

「やれやれ、その時までちゃんと籍は開けときなよ?」

「アホか」

――

さて、鬼と別れて再び旅路へ

次はどこに行こうかなと言いたいところだが、実はもう決めている。

風の噂で聞いたんだが、今京には絶世の美女と噂される姫がいるらしい。

求婚者は後を立たず、位の高い貴族なんかが毎度会いに来るほど。

そんな美女なら一目見てみたいと、興味本位で行き先を決めた訳だが「そしてやって来ました平安京。流石、田舎とは違い現代で言う大都会と言った感じですね!人が多い!」

などとりポーター紛いな事をやっても仕方がないので、一先ず情報収集のため団子屋へ。

決して団子が食べたかったからとかじゃないからな?

「へい、みたらし団子お待ち!」

やっべ、このみたらし団子超美味え。団子はモチモチだしタレもまったりとしてて、えーと…アレだ。

うん、美味え。

どうせグルメリポートなんて出来ませんよーっと

「なあおっちゃん、この都には絶世の美女がいるって聞いて来たんだけど何か知ってるか?」

団子を頬張りつつも店主に尋ねた

「そりゃあ勿論。何てったって貴族の方々が毎日の様に挙って押し掛ける位ですからねえ」

「へえー、名前は何て言うんだ?」

「確か、『かぐや』とか言いましたかね?」

「かぐや?」

その名前に聞き覚えがあった。

今より遙か昔。まだ永琳と暮らしていた時代。

ある日永琳が、連れて来た小さな女の子の名前もかぐやだった

「…まっ、唯の同姓同名か」

輝夜は永琳と一緒に月に居るはずだ。地球に居るわけがない

「ありがとなおっちゃん。お代(こ)置いとくよ」

「まいどー」

ーその日の晩俺はかぐや姫が居る屋敷に忍び込んだ

別に何か良からぬ事を仕出かそうなんて事は思っていない

一目かぐや姫の顔を見るだけだ。

因みに俺は鬼道を使い姿を視認できなくしている

「さて姫様は何処かなって」

屋敷の廊下を進んで行くと奥に他の部屋とは違う立派な造りの部屋があった

「(こ)か?」

ゆつくりと襖を開け、気配を殺して中に入る

中に居たのは、腰よりも長いストレートの黒髪、就寝前だからか、十単の様なものは来ておらず、寝間着を着ている少女が此方に背中を向けて座っていた

顔が見えなかつたのでそつと少女の正面まで回り込んで改めて拝見した俺は驚愕した

容姿こそ成長しているが、そこに居たのは数億年前永琳と共に月に移住したはずの蓬莱先 輝夜その人だった

「輝夜…?」

「えっ?」

思わず声が出てしまった。

姿を視認できなくしているとはいえ、声を出せば聞こえてしまう
「誰っ?!誰かいるの?」

何も無い空間から発せられた声に困惑しながら辺りを見渡す輝夜
こうなったら仕方が無い。

俺は術を解いた

「久しぶりだな。輝夜」

「……………誰？」

ズコッー!!!

コケた。そりやあもう盛大にズッコケた

そりやそうだろ！こちとら数億年ぶりの感動の再会を期待してたのに、俺を見た時の感想が「誰コイツ」だぞ？

「…おいおい、そりや無いだろ。ほら、隼斗だよ。柊 隼斗。よく遊んでやってたろ？」

「隼斗……………ええっ!!？」

少し考えた後、やっと思いついたのかややオーバー気味に驚く輝夜「えっ、嘘……………本当に隼斗？」

「だからそうだってば。…久しぶりだな」

「…まさか生きていたなんて」

「えっ？何、月では俺死んだことになってんの？」

「え、ええ。それどころか、身を呈して妖怪の大群から皆を守った英雄として語り継がれているくらいよ？」

「マジか」

「マジよ」

それは些かショックだ。いやまあ薄々気になってはいたよ？月での俺の立ち位置はどうなってんだろう、とか

もしかしたらヒーロー扱いされてんのかなーとか、期待した時期もあつたさ。

でも死んだことにするのは酷くね？

……………もしかして核爆弾落としたのはそう言う事か？

「つてか、輝夜こそ何で地球にいるんだ？」

「月でちよつと重罪を犯して地上に落とされたのよ」

重罪なのにちよつと、とはこれいかに

「重罪つて……………仮にも姫だろ？何やらかしたんだよ」

「不老不死になったの。蓬莱の薬っていうのを飲んでね」

——蓬莱の薬

飲めば不老不死となり、老いる事はなく例えその身が消失しようと

も、魂が残っている限り再び肉体が蘇生される禁薬だそうだ。

肉体が消失しても戻るって凄くね？

セ○や魔○ブウもビックリだよ

「しっかしそんな凄い薬どうやって手に入れたんだ？」

「あら、薬と聞いて心当たりがない？」

「んん？」

薬？

薬↓病院↓医者↓白衣↓研究者↓頭がいい

↓……………!!

「まさか…永琳が？」

「ふふ、正解よ」

そうだ、永琳なら出来る。

『あらゆる薬を作る程度の能力』。それが永琳の能力だからだ
「でもなんで重罪を犯した罪が地上に来ることになるんだ？」

「月では穢れの溜まった地上は地獄の様な環境なのよ。だから地上へ
流す事は最も重い形とされているわ」

成る程、確かに不死相手に死罪を宣告したところで無意味。ならば
生き地獄でって事か

「なあ輝夜、永琳の事なんだが…」

俺はふと永琳の事を思い出し恐る恐る尋ねた。

無理やり気絶させてロケットに乗つけたからなあ…………怒ってるだ
ろうなあ

「やっぱりその…………怒ってたか？」

すると輝夜の顔から笑みは消え、真剣な表情になる

「そうね。毎日の様に責めていたわ」

やっぱりか。はあー、次会った時なんて言ったら「自分をね」……
えっ？

「地上に隼斗を一人残してしまっただこと、私がすっかりしていたら、あの時無理やりにもロケットに乗せていればって」

「……永琳」

「ホント、立ち直るまで相当苦労したのよ？ずっと元気付けてた私の身にもなつて欲しいものだわ」

「…すまん。ホントに」

「クスツ　まっ、それは本人に会った時言うことね。何はともあれ無事で良かったわ、隼斗」

「輝夜は最初俺のこと忘れてなかったか？」

「……………テヘツ☆」

25話 月の使者

「月から迎えが?」

「ええ。三日後にね」

ある日何時もの様に夜中屋敷へ忍び込み輝夜と密k：ゲフンゲフンツ

話をしていると輝夜がふと呟いた

犯した罪の償いが終わり、三日後の夜に月から輝夜を迎えに月人がやって来るのだと言う

「……輝夜は帰りたいのか?」

「そうね、月に帰っても大方碌な扱いは受けないだろうし出来れば残りたいわ。

でも無理ね。現代の武力では太刀打ち出来ないもの」

「なら俺がなんとか」

「だから無理よ。隼斗が強いのは知ってるけど流石に月の兵器には敵わないわ」

アレってそんなに強かったか?俺には必要なかったからよくわからん

「あーあ。此処での暮らしも悪くなかったわ」

そう言って何処か寂し気に窓の外を見つめる輝夜

「……」

く屋敷外

「……話は聞いてたろ?紫」

すると空間にスキマが開き紫が顔を出す

「…あら、気付いてたのね」

「頼めるか?」

「お安い御用よ。他でもない貴方の頼みですもの」

……3日後か

――

そして3日後の夜。

この日、屋敷の周りは嚴重に固められていた
何故なら今日の晩、月から使者が現れて輝夜姫を月に連れて帰って
しまうという。

そこで翁は月の使者から輝夜姫を護るため、各国から腕利きの猛者
達、そして帝から兵士二千人送ってもらい警護に当たらせた

屋敷に集まった兵士は各々の武器を持ち、我先に手柄を立てようと
躍りになっていた

輝夜はその様子を窓から眺めながら一言呟く
「無駄なのに」っと。

やがてその場に変化が起こる。

月の光が異様に輝きを増し、まるで昼間の様に明るくなる。
そして現れたのは雲に乗った月の使者

……ではなく武装された複数の宇宙船だった

「何だアレは!?!」

「空を飛んでいるぞ……!?!」

兵士達が口々に言う中、指揮官らしき男が声を張り上げる

「相手がなんだろうと関係ない! 姫をお守りするのだ!! 弓矢隊射
てエエエ!!」

指揮官の号令で一斉に放たれる矢

しかし船の装甲には傷一つ付けることは出来ず、今度は兵達にその
砲門が向けられる

カツと光ったかと思えば、放たれた閃光は一瞬で兵達を灰に変え
た。

次々に殺されていく兵士達。

逃げ惑う兵もいれば勇敢にも戦おうとする者もいる。

だが武力の差は絶望的、瞬く間に兵士は全滅した

屋敷の庭に宇宙船が降り立つ中、輝夜姫は一人外に出てきた

「姫、お迎えに上がりました」

「……永琳」

船から降りてきたのは複数の兵士と、八意永琳。

そして輝夜が永琳に何かを伝えた後、

「八意様、時間がありません。お急ぎをお〴〵お〴〵!?!」

兵士の一人が永琳に話し掛けた瞬間、眉間を矢が貫いた。

「悪いわね、こういう事よ」

いつの間に取り出したのか、その手に弓を構える永琳が冷めた声色でそう言った。

頭部を吹き飛ばされた兵士は血を吹き出しながら力無く倒れる。

「なっ!?!永琳様!?!」

「姫、走って下さい!!」

「ぐえっ…!?!」「ぎゃ…!?!」

今度は同時に複数の矢を放ち、至近の兵士を片付けた永琳は輝夜と共に森に向かって駆け出した

「くっ…追うんだ!両方捕らえろ!!」

他の船から降りてきた兵士も光線銃を持ち追跡を開始した

「八意永琳…!まさか裏切るとはな」

――

「くっ…!困まれたか…!」

輝夜を連れ、森へと逃げた永琳だったが追っ手を振り切れず囲まれてしまった

ざっと数えても30人は居り、全員がレーザーを射出するライフルを装備している

「くっ、月の頭脳と呼ばれた貴方が馬鹿な事をしたものですな。

我々を裏切るなど」

「え、永琳……」

「…姫は下がっててください。大丈夫、なんとか隙を作りますから」
「貴方まさか……駄目よ！一緒に逃げなきゃ……!?!」

「此処で二人捕まるわけにはいかないんです。わかってください……!」

「でも……!」

「輝夜様ご心配には及びませんよ？月に帰ったら永琳様も実験体になつて頂きますから」

「……!?!」

「この……!?!……ぐっ!?!」

弓を引き絞る永琳だが、それよりも早く銃を抜いた指揮官の男に肩を撃たれてしまった。

熱線が肩を通過し、傷口に奔る焼ける様な鋭い痛み思わず弓を落としてしまう

「永琳……!?!」

「下がって……!?!」

「射撃用意」

指揮官の号令で一斉に銃口が向けられる

「両方不老不死だ。両手足を撃つて達磨にした後拘束具を付けて連行する」

「!?!」

その言葉に顔を蒼くする輝夜を、庇う様に抱く永琳。

肩口から血が滲み出しておりとても痛々しく、それでも尚指揮官の男を睨みつけている

「……撃」

今まさに発射号令が下される瞬間、それは現れた

ヒュウウウウ………スタンツ

上空より飛来し、目の前に着地したのは一人の男

「な、何だ貴様…!?!」

「えっ……?」

此方に背を向け、まるで自分達を護る様に立ち塞がったその男の背中を彼女は知っていた

「……ごめんな、少し遅れた。もう大丈夫だ」

ゆっくりと此方を向き優しい声色で語り掛けてくる男の顔と声を彼女達は知っていた

「あ、ああ……!」

忘れもしない

忘れるわけが無い

「隼斗……!!」

頬を涙が伝い、彼の名前を呼ぶ

「…はいよ」

そこには以前と変わらぬヒーローがいた

26話 再開

3日前、輝夜から月に月の迎えが来ることを知った俺は森の中を駆け
ていた。

輝夜の居た屋敷……

惨殺された兵士の数々を目にした俺は肝を冷やした。

だがその中に輝夜が居ないことがわかり、ホツとしたのも束の間。
恐らく月の兵士であろう死体が幾つかある。

どれも急所を貫かれており傍らには矢が落ちている。

「此れを輝夜か？」

「うう……」

呻き声が聞こえ、その方向を見ると屋敷を護っていた兵士の一人が
虫の息ながらも生きていた

「おい、しつかりしろ！何があつたんだ？」

「ぐっ……と、突然……空から鉄の船が……ゴホッ……あつという間
だつた……」

大方予想はついてた。

輝夜を護るため、無謀にも月人に挑み、圧倒的な兵力の前に敗れ
去つたと……

だが今はそんな事よりも

「輝夜は？輝夜姫はどこに行つた!？」

「…鉄の船から降りてきた……女と一緒に逃げた……ゲホッ……ハア
ハア……銀色の髪をした女だ」

「!？」

「……永琳か……!!」

「おい！どつちだ!?!その二人はどつちに逃げた!？」

「も、森……へ……」

以降兵士が話す事はなかった

「……ありがとよ」

俺は直ぐに森へ向かった。

暫く進んでいると前方より複数の気配を感じ取った

「見つけた……！」

足に力を込め、一気に跳躍した俺の目に飛び込んできたのは、30はいるであろう月の兵士を前に身を呈して輝夜を庇おうとする永琳の姿だった

「マズい……！」

俺は兵士と永琳達の間割って入る形で着地した。

突然の介入にその場にいる全員が動揺して兵士の指揮官らしき男が何か言っているが全く耳に入っていない。

「……こいつ等は許さん」

身体から言いようの無い怒りが湧き上がり、目の前の敵をぶっ飛ばすため動こうとした瞬間

「えっ……！」

「！」

今俺の背後にいるであろう永琳と輝夜。

その2人の存在を再び感じ取った瞬間、不思議と穏やかな気持ちになれた。

俺はゆっくりと振り返り、2人を安心させる言葉を掛ける。

振り返った先。

そこには昔と変わらぬ家族がいた

「隼斗……！！」

永琳が俺の名前を呼ぶ。涙を流しながら。

俺は一言返事をして月の兵士達に向き直った

「やってくれたなテメェら……！」

永琳の肩口の傷。恐らく銃で撃たれたんだろう。

輝夜の着物が泥々に汚れている。必死に逃げ回ったんだろう。

「……こいつ等のせいだ」

「チツ、誰だか知らんが関係ない！射撃用意！！」

号令と共に一斉に向けられる銃。

それから発射されるレーザーは岩盤をも焼き焦がし貫く程の威力

がある月の兵器だ

「――!!」

「――!!?!」

後ろで永琳達が何か叫んでいる。

恐らく逃げろと言っているんだろう

だが今の俺にはそれすら耳に入らない

「撃てェ!!」

そして照射されるレーザー。しかしそれが俺たちに届く事はなかった

「縛道の八十一 『断空』」

俺の目の前に展開された防壁。

その壁が目前に迫る全ての熱線を遮断した

「はっ…?」

指揮官含め兵士達も目を丸くする

「えっ…隼斗…?これは…?!」

どうやら永琳達も驚いている様だ

「お前ら誰に手エ出したかわかってんのか…?」

「な、何をやっている!もう一度だ…!」

撃て…」

「破道の三十二 『黄火閃』」

隼斗の掌からでた放射状に広がる靈力の波が、兵士を吹き飛ばした

「なっ…?!」

「破道の五十八 『凶嵐』」

今度は竜巻が発生し、残りの兵士を呑み込む。呑まれた兵士は業風によりバラバラになり、その場残ったのは指揮官の男のみとなった

「ば、バカな…私の隊が全滅…!」

「後はお前だけだ」

いつの間にか接近していた隼斗は指揮官の胸倉を掴み上げた。

隼斗自身の体格が大きいせいもあってか指揮官の足が宙に浮く

「は、放せ…!何をやる気だ…!」

「歯ア食いしばれ…!!」

そして拳を握り込み、思いつきり殴り飛ばした

「ちよっ…待っ…げぶうっ?!」

殴られた指揮官は回転しながら大木に頭からめり込んだ後動かなくなつた

「お仲間とあの世で反省会でもするんだな」

「…隼斗」

「永琳、こつち来て傷診せてみ。今治療術を…おっと！」

言い終わる前に永琳に抱きつかれた

「馬鹿っ!今までどこに居たのよ…!!私がどれだけ心配したか…!」

「…すまん」

「…………無事で良かった!!」

「…現状じゃこつちのセリフだ。輝夜も」

「あつ、やっと出番来た」

「はあ?」

「ここに来るまで私ずっとセリフ無かつたし。完全に空気だったもの」

メタいぞ輝夜

「でもありがとう。ホントに来てくれるとは思わなかつたわ」

「何言つてんだ、都で約束したろ?」

——心配するな輝夜。どんな怖い奴らが襲つて来たって俺が必ず守つてやる。約束だ!

「…………ふふ、そうね」

「しっかし輝夜の怯え顔はレアだったな。写真撮つときやよかつた」

「……ここで場の空気を和ませるため輝夜をからかってみる

「なっ…………!?わ、忘れなさい!」

普段見せない一面を見られたと知った輝夜は此れまた珍しく顔を

赤くしてポカポカと叩いてきた。

「先ず退散退散」

「毛程も効かぬわー。ホレ、逃げるぞ永琳。お姫様がご立腹だ…！」

「あらあら大変ね」

「待ちなさい!!」

うん。あの頃に戻ったみたいで懐かしい

それはさて置き2人の今後について考えますか

「さて、そろそろ行こうぜ」

「行くってどこに?」

永琳の質問に俺は一言で答えた

「幻想郷だ」

27話 幻想郷訪問

「はい到着。ようこそ、此処が幻想郷よ」

「此処が……」

「へえ、俺も初めて来たけどホントに創っちまうとはなー」

「当然よ！何せ私なんですもの！」

ふんすつ！つと胸を張る紫

ちな最初に喋ったのは俺じゃなくて紫な。

俺達はあの後、紫と合流してスキマを通り幻想郷へと来た。

スキマが開いた先は所謂竹林で、事前に紫と相談して永琳達には此処に住んでもらう事になっていた

「で、紫。肝心の住まいはどこにあるんだ？」

「此処からもう少し進んだところよ」

紫に案内されて歩いて行くと和風建築の屋敷が見えてきた

「立派な屋敷じゃないか。どうしたんだ？」

「向こうから持ってきたのよ。勿論空屋からね」

「此処に私たちが？」

「ああ。此処なら追手も来ないだろうし安心だろ？」

「ええ。ありがとう隼斗、八雲さん」

「紫でいいわ。隼斗の友人なら私の友人ですもの」

「あら、ありがとう。改めて八意 永琳よ。此れからもよろしくね紫」

「蓬莱山 輝夜。輝夜でいいわ。よろしくねゆかりん」

「ええ、よろしく……つてゆかりん!？」

「あら、気に入らなかった？可愛い響きじゃない？ゆかりんつて」

「いや恥ずかしいわよ！」

「おつ、新しい友達が増えた上にアダ名まで付けて貰えるなんてよかったですじゃないか『ゆかりん』」

「隼斗まで…!？」

暫く紫を俺と輝夜でからかっていると何やら考え込んでいた永琳が顔を上げ、

「紫がゆかりんなら私はりんりんかしら」

つと真顔で言い放った

お前はパンダか

――後に此処が輝夜の能力と永琳の張った結界により、未来永劫古びる事のない屋敷『永遠亭』と呼ばれるのもう少し後の話

――

「本当に行っちゃうの?」

「ああ。此処に住むのもいいけどまだ外でやることがあるからな。」

「もう少しゆつくりしていけばいいのに……」

あれから一週間程永琳達の屋敷に留まり、そろそろ旅を再開するつもりだ。

永琳も輝夜も此処で一緒に暮らそうと言ってくれるが、そうもいかない

「心配すんなって。時々顔出しに来るし、幻想郷がある程度落ち着いてきたら俺もこつちに住むからさ」

「全く、貴方は相変わらず自由奔放な性格してるわね」

「無鉄砲なところもね」

失敬だな！俺だつてちゃんと考えて行動しとるわ

「……」

「いってらっしゃい、隼斗！」

「…いってきまーす」

・
・
・
・

紫のスキマを抜け再び外界へ訪れると、京は

突如月へと帰ってしまった輝夜の話で持ち切りだった。

帝から出された兵は壊滅し大きな損耗を出してしまった事や、天より現れた天人の乗った船の目撃情報（その日のうちに俺が処分済み）

などだ。

更に聞くとところによると、輝夜姫は月に帰る際世話になった夫婦に『不死の薬』を置いていったらしい。

まあ十中八九 蓬菜の薬だろう。

だが夫婦はその薬を使う事はなく、帝の命令により富士の山にて燃やす事になった様だ。

帝の使いが薬を持って富士に向かったのは5日前

「んーまあ処分する分には問題ねーか」

いざとなったら俺が処分しようと思ったけど手間が省けて何よりだ

「さて、じゃあ旅を続けますかね」

ー

京を出て今日で2週間。

……駄洒落では無い。偶然だ

現在偶々入った山で絶賛迷子中である。

此処に来て俺が方向音痴だと言うことが露見してしまったと思うだろう？

だがそれは間違いだ。

俺は基本的に初めて訪れた場所であっても地図判読が面倒なので自分の勘を頼りに進む。その為軍にいた時も地図を持った事がない。まあそのせいで3日くらい森の中を彷徨う嵌めになったが。

あの後の麻矢の怒りっぷりときたら……

況してや碌に地凶もないこの時代じゃ尚更だ

話を戻そう。そんなこんなでこの山を抜けようとしたのが3日前。可笑しい……何故目の前に断崖絶壁が広がっているんだ？

呆然と上を見上げれば高さ2、300m位ありそうだ。落ちたら溜まりもないなー(棒

おっと現実逃避してる場合じゃない。

早いとこ山を抜けないとな

最悪紫を呼べばいいんだけど普段からかつてる手前頼み辛いな

……

「あつ、そうだ。高い所登って周り見てみりやいいじゃん……！」

流石、俺ってば天才だな！

そう思っつて再び崖の上を見上げた俺の目に飛び込んできたのは

「……なんだありゃ？人か？」

いや間違いない人だ。しかも見た目からして女の子

……が落ちてくる。

親方！空から女の子が！をリアル体験した瞬間である

「やべつ、助けねーと……！」

うっかり傍観していた俺はハッと我に帰り、女の子を受け止める為術を発動する

「縛道の三十七 『吊屋』」

空中に靈力で出来た衝撃を防ぐネット上の床を出現させ、女の子を受け止めた

「おい大丈夫か……っつて気絶してるな。それにこの髪は？」

その少女の髪は一見老人と見間違えてしまう程の白髪だった

28話 もう一人の不老不死

太陽が沈み、辺りはすっかり暗くなった山中。パチパチと焚き火の炎が川魚を焼く。

「んー、もうちよいかね」

焼き加減を見ながら串の刺さった魚を回していく中、傍らで眠る少女に目を向ける

「白髪に紅の瞳か……」

少女の髪はまるで色が抜け落ちてしまったかの様に真っ白で、瞳孔確認した際に気付いたが瞳も紅い。

一瞬アルビノか？と思っただけ、何処か違う感じもするし……

見た目15歳前後だろうか、若干幼さの残る顔立ちで、服装は着物で、軽装ではあるが山の中を歩く格好ではない。

「う……ん……」

あれこれ考えていると少女が目を覚ました様なので声をかけてみた

「おう、気がついたか」

「……………えっ?」

俺を見て固まる少女

「覚えてるか?お前崖から落ちたんだぞ?」

「崖から落ち……………!」

俺の言葉を反復するとハツとして自身の身体を確かめる少女

「心配するな、怪我は無い。ちゃんと受け止めたからな」

「……………貴方が助けてくれたの?」

「まあ、偶然だったけど」

「……………」

あれ?ヤケに暗い表情になっちゃったな……

助かったんだからもっと喜べばいいのに

「どうした?命が助かったんだ、嬉しくないのか?」

「……………から」

「ん？」

「私……死なないから……」

消え入りそうな声で確かに少女はそう言った。

「……死なない」

それはどういう意味か？

あれ位落ちてても平気という意味か？

いいや、それは無いだろう。

あの高さの崖から落ちれば例え妖怪だとしても唯では済まない。況してや少女からはそんな力は感じない。人間の其れと変わらないはずだ

ならば能力か……恐らく此れも違う。

何故なら少女はあの時気を失ってたからだ

それ以外の方法であの状態から助かるには、そう。不死でもない限り不可能だ

「その死なないってのはさ、死なない身体を持つてるからって事か？」
「!？」

「……凶星か」

核心を言い当てられた少女は驚きの表情を見せた後、再び俯いてしまった。

「……ほれ」

「……えっ？」

だから俺は焼けたばかりの魚を差し出した

「食え」

「えっ……でも」

「いいから食う……」

「は、はい……」

尚も遠慮する少女に半ば強引に焼魚を手渡した。

少女は少しの間焼魚を見つめ、一口齧る

「……ハグツハグツ」

それ以降は夢中で食べ始めた

「慌てて食うと骨が刺さるぞ。心配しなくてもまだあるから」

よっぽど腹が空いてたのかあつという間に3匹の魚を平らげた少女。

「落ち着いたか？」

「うん、ありがとうございました」

空腹が満たされて余裕が出来たのか落ち着きを取り戻した少女はさつき程とは違い言葉を正しながら更に続けた

「……貴方の言った通り私は不死の身体を持つてる……ます」

「……それはお前の能力か何かか？」

死なない能力。

此れならば例え意識がなくなっても死ぬことはない

「……ううん、私に能力はないから」

「えっ？じゃあどういう事だ？」

すると少女は少しの沈黙の後、意を決した様に口を開いた

「蓬莱の薬………ってという物を飲みました」

「!？」

蓬莱の薬………永琳と輝夜が作り出した不老不死になる薬だ。

でも何故彼女が？

確か地上に残した薬は帝の命令で焼かれた筈だ

「確かその薬はとつくに処分された筈じゃなかったか？」

「!………知ってたの？」

「巷じゃ有名だからな」

「………実は」

以降少女の話を纏めると

・少女の父である藤原不比等は輝夜に求婚したはいいが出された条件をクリア出来ず、恥をかかされた。↓娘である少女は、月に帰った輝夜が迷惑をかけたとして帝に残した蓬莱の薬が処分する為運ばれることを知り、薬を奪うことで復讐をしようと考えた。

しかし不慣れな登山に行き倒れた少女は偶然にも帝の使いの者に助けられ一緒に行動することに。

そしてチャンスを見計らい薬を強奪、当然兵士達に追われる身となった少女は取り返されない様にあるうことか薬を飲んでしまう

服用直後、全身を耐え難い激痛が襲い意識を失う。↓目が覚めた少女は自身の髪が白髪になっている事に気付く

んー、何やら波乱万丈な人生だなこの子
にしても薬飲んで見た目が変わったってのはどうしてなんだろう
……

輝夜と永琳は変わってなかったのに。

……副作用には個人差があります的な？

「崖から落ちてきたのはどうしてなんだ？」

「それは……兵士の人に見つかって追われているうちに足を滑らせて

……」

「……そうか」

「……」

「……」

……気まずい

「……そ、そういやお互い自己紹介してなかったな。俺は柊 隼斗って言うんだ。お前は？」

「あつ、えつと……藤原 妹紅……です」

「よろしくな妹紅。それと別に普通に話してくれていいぞ。敬語、苦手なんだろ？」

「わ、わかった。よろしくね、隼斗さん」

さん付けか……まあいいや

「それでどうする？家に帰りたいなら送ってやってもいいけど」

「……っ」

少女は首を横に振った

「……追い出されちゃったから」

「!?」

震えた声でそう続けた

「……薬を飲んだ後自力で家に帰ったんだけど……この姿見た途端お前は化物だ、出て行けって……!」

ついに妹紅の目に涙が溜まる

「は、ははは……馬鹿だよね……私。お父さんの仇を取ってやろうと息巻いて家を飛び出したのに……こ、こんな……こんな姿で……!これじゃあもう化m「もういい」……!」

俺は泣きながら自虐的な言葉を発する妹紅を強く抱きしめた

「これ以上自分を責めるのはよせ……少なくとも俺の目に映るお前は化物なんかじゃない、父親想いの立派な女の子だよ……!」

「!……あ……」

「この場にお前を責める奴なんていない。だから思いつきり泣いたって構わない。俺が全部受け止めてやる」

「うっ……ひぐっ……うええ……」

ボロボロと大粒の涙が妹紅の頬を伝う

「……」

「……………!……………!」

虫のさざめきすらも聞こえない静かな山地で、少女の泣き声が響いた

29話 妹紅 弟子入りする

妹紅と出会ってから3日が経った

「ねえ待ってよ隼斗ー!」

「早くしろー」

旅の連れが1人増えた。

ー妹紅だ

「そんな格好してるから歩きにくいんだよ。山舐めんな」

「だってこれしか持ってないんだもん」

「…ったく。次の人里でもっと動きやすい服買ってやるよ」

「えっ! ホントに!? やった!!」

服が買ってやると言った途端嬉しそうに駆け寄ってくる妹紅

「何だよまだ元気じゃねーか」

溜め息を吐きつつ駆け寄ってくる妹紅を見る。

3日前とは違い、元気を取り戻せた様だ。

元々活発な性格だったのか、何にせよ良かった

「人里まであと少しだ。さっさと行くぞ」

「うん!」

妹紅は俺の隣に並ぶと同じ歩幅で合わせてくる

「ぬっ…くっ…わっ…!」

ぬくわ?

ただ身長差があり過ぎるし、歩幅も大分違うから初っ端からほとんど合わなくなっていく

「無理して合わさなくていいって。体の大きさが違うんだから」

大体妹紅の背丈がギリギリ160あるか無いか位だから、俺とは20センチ位違う。

「ぐ、ぬぬ…!」

それでも無理に合わそうとしてくる妹紅を見て、ふと思ったことを口にする

「なあ妹紅」

「んー?」

「修行しないか?俺が教えてやるから」

「…は?」

ピタツと妹紅の足が止まる

「修行?どうして?」

「これから俺と旅を続けるなら今の体力じゃ持たないだろ。幾ら不老不死って言っても、ある程度は戦闘技術もあった方がいい」

「まあ確かにそうだけど…隼斗って強いのか?体はがっしりしてるけど、武器も持って無いみたいだし」

「んん…?」

ああ、そういや妹紅には戦う所見せたことなかったな

「…いいぜ。ならちよつと見せてやる」

そう言うのと隼斗は辺りを見渡し、少し離れた所にある大岩を見つける

「妹紅、あの岩見えるか?」

「岩?ああ、アレね。アレがどうしたの?」

「よく見とけ」

俺は掌に靈力を集中させて詠唱を始める

「――君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ

焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

そして溜め込んだ靈力を解放する為掌を大岩に向ける

「破道の三十一 『赤火砲』!!」

ズツ…………ドオオオオオン!!

放たれた巨大な火塊は、あつと言う間に大岩を包み、その辺り一帯ごと消し飛ばした

「どうだ?中々凄いだろ?」

「……………」

妹紅を見ると啞然として固まっている

「な、何今の……………」

「鬼道って言う靈術の一つだ。今みたいな詠唱…まあ言霊だな。と術

名を唱えるのが発動条件で、攻撃する為の破道・防御とか相手を捕縛する為の縛道の二つに分かれている。ここまで理解したか？」

「う、うんまあ……なんとなく……？」

「で、鬼道にはそれぞれ番号があつて数字が大きい程強力な術が出せるつて訳だ。その分消費する霊力も多くなるけどな」

まあ応用すれば治癒術とかにも使えるけどこれは高度だからな……

何より俺が苦手だし

「……私に出来るの？」

「修行次第ではな」

どうする？ つともう一度聞いて見ると、妹紅は暫く考え

「うん。私も強くなりたい」

ハッキリとした口調で答えた

「決まりだな」

「よし、じゃあ何からやる？」

早速やる気なのかやや興奮気味に聞いてくる妹紅を一旦落ち着かせる

「慌てんな、どの道その格好じゃ修行なんて出来ないだろ」

と言うわけで一先ず人里へ

～人里

「いらつしやいませ。何をお探しでしょうか？」

人里に着き、適当な呉服屋に入ると愛想のいいおばちゃんが出てきた

「この子の着物を買ってきたんだけど動きやすいヤツないか？」

「そうですか、では少々お待ちください」

注文を聞いたおばちゃんは店の奥へと入って行き、5分程で出てきた

「此方なんて如何でしょうか？」

おばちゃんは持つてきた着物の幾つかを妹紅に見える様に前に出

した

「うーん」

「じっくり選んでいいぞ」

「決めた！」

早いな

「…袴か」

妹紅が選んだのは指貫袴の様な形状の赤い袴だった

「ホントにこれでいいの？」

「うん、これがいい」

「よし。おばちゃん、此れをくれ」

「ありがとうございます。此方で着ていけますか？」

「あつ、でも上に着るヤツが無い」

此処で妹紅が、ふと呟く。

確かに袴だけじゃ半裸の変態だ

「しゃーねーな。俺ので良ければ替えの服やるよ」

そう言つて隼斗が巾着から取り出したのは白いYシャツだった

「えつ、いいの？」

「ああ。まあ嫌なら別のでもいいが、如何せんそんなに金は無いから高いのは無理だぞ？」

「ううん、それ…それがいい！」

すると引つ手繰るようにYシャツを抱く妹紅

「まったく何を必死になつてんだか

「おばちゃん、悪いんだけど此れの仕立ても頼めるか？袖の丈合わせるだけでいいからさ」

「これはまた変わった着物ですね。わかりました、ではお嬢さんこちらに」

「……待つこと20分

「お待たせ致しました」

「どう隼斗、似合う？」

着替えを終えた妹紅が回りながら訪ねてきた

「中々いいんじゃないか？似合ってるぞ」

「ホントに!?……へへっ」

褒められたのが嬉しかったのテレ顔で小さく笑う妹紅

「よし行くぞ」

「うん！」

「ありがとうございました〜」

店を出た後改めて妹紅の格好を見ると、年相応の物とは言えずどちらかと言うと男らしい雰囲気の出ている服装だった

「ホントに俺の服なんかで良かったのか？別に他のもつと可愛いのも良かったんだぞ?」

「だから良いの！可愛いなんて柄じゃないし、……は、隼斗の服の方がいいし……」

最後の方だけ声が小さくなる妹紅。

普通なら「え？最後の方よく聞こえなかったんだけど?」つとなるだろう。

だが俺は能力のお陰で五感が鋭い

「一応言つとくが、バツチリ聞こえたからな?」

「なっ……／＼／えっ、その……!」

妹紅は何やら顔を赤くしながら手を目の前でワタワタしている。

ん?この光景前も見たことある様な?

「何だー?可愛いとこあんじゃねーかコイツー」

その反応が可愛らしく思い、ワシヤワシヤと頭を撫でた

「わっ……は、放してよ!恥ずかしいなあ……!」

「はは、照れるな照れるな」

「だ、だから照れてないってば!」

そんな馬鹿をやりながらその日は宿に泊まり、修行は明日から開始する事にした

30話 妹紅 修行編

「……んっ」

「力み過ぎだ。もつと体の力を抜け」

「こう…?」

「そうそう。時期に慣れてくるから心配するな。続けるぞ?」

「う、うん…」

一体何をやってるかって?

——座禅に決まってるんだろ

座禅をする事で集中力が高まり、内に眠る靈力を引き出す事が出来る。俺で実証済みだ

「大事なことはイメージを強く持つことだ。体中に散らばってる力を中心に集めるイメージをしろ」

「いめーじーって何?」

ああそうか、この時代には横文字は伝わってないのか

「イメージってのは……まあ心の中で思い描いた姿や形って意味だ」

「むむ……いめーじ、いめーじ」

「だから固くなるなって。リラックスしろリラックス」

「り、りらつく…?」

だあーもう!

「緊張をといてゆったりとしろって事」

「わかった」

グデーっとその場に寝そべる妹紅

「誰が寝ろっつったー!!」

こんな感じで始まった修行

「おら、集中途切れてんぞ！深呼吸しろ」

「スウゥ、ハー」

「はい、イメージ！」

「むっ…！」

「よし安定してきた。そのまま感覚を掴んでいけ」

「ホントに!? やったー！」

「あつ、コラ！集中解くな馬鹿」

「あつ…今何か掴めたかも」

「それが靈力だ。その感覚を忘れるなよ？」

「うん…！」

「うー、集中…集中…」

「少し休んだらどうだ？休むことも修行だぞ？」

「…：ううん、まだ大丈夫だよ」

「…：そうか、無理はするなよ？」

――半年後

「はあああ〜!!」

修行を続けて半年が経ち、妹紅は大分靈力をコントロール出来るようになった。

今では靈力で体を覆い、微弱ながらも身体強化が可能になっている「よし、その状態を維持したまま組手に移るぞ」

今妹紅には靈力の修行と同時並行で、組手も行っている。

実戦では靈力だけ使っても意味がない。

当然肉弾戦も考えられる為、俺は自分の戦闘スタイルでもある徒手空拳を教えることにした

「やあつー!!」

「まだまだ！もつと重いの打ってこい!!」

・
・
・
・

――5年後

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ」
掌を中心に霊力が溜まっていく

「焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

溜まった霊力は詠唱と同時に炸裂する

「破道の三十一！『赤火砲』!!」

ズドオオオン!!

「で、出来た……!」

「ああ、上出来だ」

このたった数年の修行で妹紅は霊力の扱いが驚き程上達し、ついに赤火砲を打てるようになった

「やったー!!ついに念願の赤火砲が出来たー!!」

妹紅は余程嬉しかったのか子供の様に燥いている

「おいおい、赤火砲つつつても三十番代だから術自体は然程強くないぞ?」

「いいの。私炎系の術好きだし、此れからは炎系を極めていくよ」

「確かにイメージとは合ってるけどよ」

まあ何はともあれ此処まで頑張った妹紅に何か褒美をやらな
いな

「妹紅」

「んー?なに師匠」

因みに妹紅は俺のことを師匠と呼ぶ様になった

「ほれ、頑張ったからやる」

そう言って妹紅に渡したのは、白地をベースに赤ラインの入った大きめのリボンだった

「わあっ…！えっ、いいの？」

「当たり前だ。俺がそんなん付けてたら気持ち悪いだろ」

「で、でも私に似合うかな…」

「じゃあ似合うかどうか見てやるから付けてみる」

「…うん。よっ…と……ど、どうかな？」

若干照れながら髪にリボンを付けて尋ねてくる妹紅

「ふっ」

思わず小さく笑う隼斗

「や、やっぱり似合わなかった？それとも付け方が悪かったかな…？」

隼斗は珍しくオドオドしてリボンを取ろうとする妹紅の手を止めた

「待て待て、誰も似合っていないなんて言っていないだろ？」

「だ、だって笑ったじゃん…」

「そりゃ予想以上に似合ってたからだよ。まったく何を心配してんだか」

隼斗が呆れ半分、微笑ましき半分でそう言うと妹紅は再び顔を赤くする

「あ…うう…」

「おやく？もこたん また照れてんのかー？」

「なっ、違っ…！…！…っつか もこたん て何

っ!？」

「気にすんな、もこたん！」

「それやめろー!!」

31話 支配された村

「おつ、村が見えてきたぞ」

「ホントだ……此れでやっと休めるよ」

あれから時は流れ、100年程経った

旅を続けていた俺と妹紅は一週間ぶりに人里を見つけ、そこで休む事にした

「さーと、まず泊めてくれるとこ探さねーとな」

まだこの時代には宿屋が広まっていない為、一泊するのも交渉から始まる

「ねえ師匠。此処の村何か変じゃない？」

「ん？」

妹紅に言われて改めて村全体を見渡してみると、何と言うか活気が無く、ドンヨリとした空気が漂っている。

更に言うなら外を歩いている人も少ない

「確かに変だな。……ちつと聞いてみるか」

丁度近くを歩いていた村人を呼び止め、事情を聴いてみた

「ちよつといいか？」

「な、何だアンタ達は…!？」

話しかけた村人は明らかに怯えた反応をした

「別に怪しいもんじゃないよ。旅の途中で偶然この村に来ただけど、随分村の雰囲気が高く感じてさ。何でかなーっと思って聞いてみただけ」

「そう言うことか……だったらマズイ所に来ちゃったな」

「マズイ……って言うと？」

「……この村は妖怪に支配されているんだ。……月に一度やって来て食料や若い娘を差し出せと要求してくる」

「妖怪……」

よくある話だった。こういった大きな都市から外れた場所にある小さな村は妖怪の標的となる

「退治屋とか陰陽師は雇わなかったのか？」

そう言った場合、大抵腕の立つ退治屋や陰陽師を雇う事で解決することが多いが…

「勿論雇ったさ、其れなりに腕の立つ退治屋をな……でも駄目だった。翌日には皆、変わり果てた姿で村の入り口に放られていたよ」

退治屋でも倒せないとなると其れなりに名の知れた妖怪かもしれない

「その妖怪の名前は？」

「……牛鬼だ」

――

牛鬼……牛の頭に鬼の体、蜘蛛の様な八本の手足を持つ残忍な妖怪

俺たちは牛鬼討伐を条件に村での滞在を提案した。

村人は皆止めたが終いには承諾。

現在牛鬼がいると言う住処に向かっているといるところだ

「ねえ師匠、牛鬼ってどんな妖怪なの？」

「そうだなー、牛と鬼と蜘蛛が合わさった様な妖怪だ」

俺はざっくり説明した

「…何それ気持ちわるっ」

妹紅はそう吐き捨てると、俺より前に出て此方向き

「今回は私がやってもいい？ソイツの討伐」

自ら牛鬼討伐を買って出た。

確かに妹紅とは100年余り一緒にいるがまだそういった強者との戦い、所謂実戦を余り経験させたことがない。

まあ俺が過保護なせいもあるかも知れないが、妹紅としては自分の実力を試してみたいんだろう。

そういった意味でも今回の一件は良い機会なのかも知れない

「……いいぞ、やってみな」

「うん……」

そう返事をする妹紅に「ただし」と付け加え、

「牛鬼は其処らの妖怪とは違って実力のある妖怪だ。油断するなよ？」

「……始めから全力で行け」

そう釘を刺し、万が一の時は俺が助けに入る事を条件に今回の討伐を妹紅に託した

暫く歩いて行くと、そう遠くない場所に大きな妖力を感じ取った

「牛鬼の住処まで後少しだ。集中だぞ妹紅」

「はい……」

森を抜け、拓けた場所に出た。

目の前には洞窟があり、中から異形の怪物が姿を現した

「……誰ダ、才前ラハ？」

32話 VS牛鬼

「誰ダ、才前ラハ？」

洞窟から姿を現したのは牛の頭部に鬼の身体、蜘蛛の様な八本の手足を持った異形の妖怪、牛鬼だった

「いいな妹紅。危なくなったら素直に下がるんだぞ？」

「大丈夫だつてば。あんな奴に負けないよ」

別に妹紅の実力を信用していない訳じゃない。寧ろ妹紅はこの100年で相当な力を着けている。少なくともその辺の妖怪程度軽くあしらえる程に

「……だからこそ心配だった。

「再三言うが油断だけはするなよ？ 相手も相当な手練れだ」

「わかったつてば」

妹紅は此方に手をヒラヒラと降ると牛鬼に向かって歩き出した

「お前が牛鬼だな」

「如何ニモ。ソウ言ウ才前ハ村ノ連中ガ差シ出シタ娘力？」

牛鬼の質問に妹紅は小さく笑うと掌に力を溜め始める

「馬鹿言え、退治屋だよ……！」

言葉と同時に靈力で作り出した炎を牛鬼に向け放った

「ヌツ……!? 貴様……!!」

突然放たれた炎に驚いた様子の牛鬼だが発達した強靱な腕を振るう事で其れを掻き消すと、怒りの形相で妹紅を睨んだ

「そう怒んなよ、挨拶代わりだ」

対する妹紅も余裕を崩さない。

余談だが妹紅は普段、特に戦闘になると男勝りな喋り方になる。

昔は見た目相応の少女らしい物腰だったのに………多分俺の影響だろうなー

「ホザケー！ 小娘風情ガ……!!」

牛鬼は妹紅を捕らえるべく、複数の腕を伸ばすが、妹紅は其れをステップで躲しつつ反撃に出る

「そんなんじや一生掛かっても掴まんない……よ!!」

掌から複数の火球を放ち、突っ込んでくる牛鬼に当てる

「ヌルイワ!!」

牛鬼は其れを物ともせず徐々に間合いを詰めてくる

「縛道の三十 『嘴突三閃』!!」

妹紅が放った縛道。

目の前に3つの嘴型の霊力を出現させ、伸びてくる腕に向け飛ばす。

被弾した腕は地面に固定され牛鬼の動きを制限した

「クツ……動カヌ……!」

「縛道の九 『崩輪』!」

更に指先から霊力の縄を作りだし牛鬼本体を縛り上げる。

動きを封じて強力なのをぶち込む気なんだろう。

本当ならもっと強い縛道をかけて完璧に動きを封じてからの方がいいんだが、妹紅は縛道が得意じゃないらしく、あまり高い数字の縛道は使えないらしい

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

詠唱が始まり妹紅の掌に炎のエネルギーが溜まっていく

「破道の三十一! 『赤火砲』!!」

完全詠唱による赤火砲。

恐らく今の妹紅が打てる最大火力だろう

火塊は牛鬼の頭部を吹き飛ばした

「ふうー、案外呆気なかったな」

頭部を失い力なく崩れ落ちる胴体を見て、勝利を確信する妹紅

「おーい師匠ー終わったよー!」

此方に手を振り俺を呼ぶ妹紅だったが、俺はある違和感を感じていた

頭部を失い、絶命した筈の牛鬼から微かにだが妖力を感じる
違和感は胸騒ぎへと代わり、俺は咄嗟に叫んだ

「妹紅！そいつから離れろ!!」

「…えっ?」

ゾワッ

周りが嫌な空気に包まれる。

俺は直様妹紅の元へ駆け出した

「……刹那……」

牛鬼の亡骸から黒い靄の様なものが噴出し、妹紅を呑み込んだ

「ぐっ!?!」

「妹紅!?!」

「……俺は間に合わなかった」

33話 VS妹紅（憑依）

「ぐっ……むっ……が……あああ!!」

黒い靄に包まれた妹紅からは苦悶の声上がる

「くそっ！離れろコイツ!!」

必死に引き剥がそうとしても、まるで実態がないかの様に擦り抜けてしまう

「つつっ！こうなったら縛道で……!」

駄目元で縛道を掛けようと構えた瞬間俺は頭部に衝撃を受けて後方に大きく吹き飛ばされた。

「……未だ靄に包まれている妹紅によつて

「なっ……妹紅?」

「……」

やがて靄が妹紅の身体に吸い込まれる様に消えていく。
そして目に飛び込んできたものを見て隼斗は驚愕する

「……禍々しい邪気を放ち、瞳を赤く光らせる妹紅

「グルルル……!」

まるで獣の様な唸り声を上げながら此方を睨みつけてくる

「おい妹紅!どうしちまつたんだ!?!俺だ…隼斗だ!わからないのか!?!」

「ガアアアッ!!」

必死に呼びかけるも咆哮と同時に襲いかかってくる妹紅

「クソツタレが……!」

炎を纏わせた腕を力任せに振るってくるが、隼斗はそれを最小限の動きで避けつつ再び呼びかける

「やめろ妹紅……目エ覚ませ!!」

「ギッ!!」

やはり声は届かず、妹紅は地面に向け拳を打ち付ける。

打ち付けた箇所を中心に爆炎が上がり、隼斗ごと周囲のものを薙ぎ払うつもりだった様だが、コントロールが出来ていないのか妹紅自身も吹き飛ばされていた。

隼斗は一早く察知して後方に跳ぶことで回避する

「グツ…ガ…」

「おい妹紅大丈夫か!？」

身体中に火傷を負いながらも立ち上がろうとする妹紅を一先ず縛道で縛った

「くっ…縛道の四 『這繩』」

「ガアッ…!？」

靈力で出来た縄で妹紅の手足を拘束した

可笑しい…アイツが術のコントロールをしくじる何て事は無いはずなのに……

それに戦い方だつて技もクソも無い唯の力技だ

「……こりゃ、あの靄みたいなのに操られた的な展開か？」

「半分正解よ」

突如俺の疑問に背後から応答があった。

敢えて後ろは見ない。声の主はわかってる

「……いつから見えた?……紫」

「最初からよ。貴方が気付かないなんて珍しいじゃない」

よく言うよ。能力使つて気配を完全に遮断してたクセに。

……いやそれよりも

「妹紅がああなつた原因を知ってるのか？」

「ええ」

「ならどうして黙って見てた!!」

俺は思わず紫に対して声を荒げた

「貴方それ本気で言ってるの?」

「何っ?」

「あの娘があんな状態になったのは隼斗、貴方の責任じゃなくって?」

「!!」

「理由はどうあれ、貴方は危険を承知であの娘を戦わせた。予想外の事態に対処出来ない様なら初めから貴方が戦えば済んだ話よ。隼斗、私が何を言いたいかわかるわよね?」

「……」

「……そうだ。弟子であり実戦経験の少ない妹紅に戦うことを許可したのは師である俺だ。」

「実際俺は直前にアレに気付いていた。俺なら回避出来たかも知れない。」

「いや違う。もっと根本的な問題。」

「妹紅をこの場に連れてきてしまったのは俺だ。」

「連れてきてしまった以上何が何でも守らなければいけないかったのに、俺は間に合わなかった。」

「其れなのに紫まで責めてしまった」

「……怒鳴ったりして悪かった、紫」

「……それで?」

「紫は片目だけ開けて此方を見た」

「出来れば……いや。頼む……アイツを正気に戻す為に力を貸してくれ……!!」

「俺は紫に頭を下げた。地面に頭を擦り付けて。所謂土下座だな。」

「最早意地やプライドなんてどうでもよかった。唯自分の不甲斐なさに怒りを覚えたのは確かだ」

「やめて頂戴。貴方のそんな姿見たくないわ」

「でも……!」

「元より協力するつもりだったわよ。そんな事しなくてもね」

「クスツと意地悪く笑う紫だが、いつもの様に扇子で顔を隠しておらず、その表情には優しさが込められていた」

「……ありがとう」

「俺は立ち上がり妹紅の方へ向き直った。」

「グッ…ガアアアッ!!」

先程まで妹紅を拘束していた縛道が力任せに引き千切られ、妹紅の手首からは血が滴っている。

「待ってる妹紅。すぐ元に戻してやるからな」

34話 別れ

く回想

(「それで？妹紅はどうやったら戻るんだ？」)

「あの娘は今、牛鬼に体を乗っ取られている状態。なら私の能力であの娘と牛鬼の境を切り離せば元に戻るはずよ。唯あのままだとそれも難しいわね」

「俺は何をしたらいい？」

「簡単よ。あの娘の体力を極限まで削った状態で拘束して頂戴。そうすれば後は私がやるわ」

く

……極限まで削った状態って結構難しくないか？

「ガアアアッ!!」

「おっと……!」

まあでもやるしかねーな!

「大分痛エかも知れんが我慢しろよ!」

妹紅の力任せによる乱打を躲し一瞬で懐に接近、そこから首、胸、鳩尾、肩口、太ももに突きを叩き込んだ

「ガッ……!アア……!?!」

吹き飛ばされ苦しそうに悶えるも、何とか立ち上がる妹紅

「どうした?……来いよ」

「カッ!」

跳び上がり、踵に炎を集中。

そのまま振り下ろしてきた

「……少しは使える様になってきたか……だがな」

俺はそれを片腕で受け、防いだ

「!?!」

「アイツの……妹紅の技はこんなもんじゃねエ!!」

未だ空中にいる妹紅の足を掴み、地面に叩きつける

「ガッ……」

更にバウンドした身体を前蹴りで吹き飛ばした

「とつとつその娘の身体から出て行けクソ野郎ツ…!!」

「ギャ…ウウ…!」

今度は隼斗が急速に間合いを詰め、両拳を合わせる様に構える

「六 王 銃」

「!!?」

身体を貫通する程の衝撃が襲い、ついに妹紅は血反吐を吐きながら倒れこんだ

すかさず縛道を掛けるため詠唱を行う隼斗

「鉄砂の壁 僧形の塔 灼鉄熒熒 湛然として終に音無し」

「縛道の七十五『五柱鉄貫』」

倒れ伏した妹紅の上空から五つの五角柱が降り注ぎ、妹紅の四肢と頭部を拘束した

「今だ紫! やつてくれ」

「わかったわ…!」

紫は妹紅の頭に手をかざし、境界を弄り始めた

「…:…:凄いや拘束術ね。アレだけあばれてたのに」

「七十番台の完全詠唱だからな。大妖怪クラスでもそう簡単には解けんさ」

「ふーん。…あつ、見つけたわよ」

「よし、じゃあ切り離してくれ。出てきた後は俺がやる」

「じゃあ…いくわよ?」

次の瞬間妹紅の身体から先程と同じように黒い靄が噴き出した
「グウ…:…:キ、貴様ラアア!!」

激昂した声と共に最後の悪足掻きなのか此方に突っ込んできた
今までの礼だ。とっておきで滅してやるよ

「破道の九十」

「オオオオオオッ!!」

――『黒棺』

靄となった牛鬼を囲い込むように現れたのは黒い直方体の箱。

その中で牛鬼は叫び声すらあげる間も無く重力の奔流に吞まれ消滅した

「……終わったわね」

「ああ、って妹紅は…!?!」

「心配ないわ。でも怪我は酷いから治療してあげたら?」

「うっ……そうだな」

あちやー、流石に六王銃はやりすぎたか?

衝撃員の数倍の威力だっけ? やっべ

まあそれは置いといて

「なあ紫。甘えついでにもう一個頼んでもいいか?」

「何かしら?」

「……妹紅を幻想郷に送ってほしい」

すると紫は少し驚いた顔をする

「いいの? この娘貴方の弟子なんでしょ? 今まで一緒に旅だっけしてきたのに」

「……まあアレだ。コイツも十分強くなったし、そろそろ師匠離れしてもらおうと思ってた所なんだよ」

ハハハッと笑うがやがてはあーと溜息を吐く隼斗

「つとまあ、ホント言ううとそれは本音の三割位でさ………わかったんだよな。俺もまだまだ未熟者だっけ」

今回の事だっけ紫が居なかつたら取り返しのつかない事態に陥っていたかも知れない。

俺の判断ミスで妹紅を危険な目に合わせてしまった

「……恐れているの? 誰かを失う事を」

「……かもな」

俺は急に自分が情けなくなり、紫に背を向けて答えた。

幽々子の事や月面移住計画の出来事が鮮明に思い出され、悔しさがこみ上げてくる

握り込んだ拳からは血が滲んでいる

するとゆっくり此方に歩み寄ってきた紫に後ろから抱きしめられた

「…気にするなどは言わないわ。それは貴方が一番わかってる筈だから」

「…ああ」

「でも忘れないで。貴方には沢山の繋がりがあつて……貴方がいなくなつたら悲しむ人がいることを」

「……ああ」

「貴方は一人じゃない。だから一人で思い詰めないで。いつだって私を頼りなさい」

「……」

不思議と心のモヤがとれた気がした

何年振りだろうな……

こうして慰められたのは……

「ありがとな。紫」

我ながらいい友人を持ったもんだ

いつの間にか拳を握る手は緩んでいた

35話 手負いの大妖怪

妹紅を紫に預けて早数年、俺は偶然立ち寄った茶屋である噂を耳にした

「九尾の狐？」

「…はい。知らないんですかい？」

「ああ、初めて聞いたよ。教えてくれ」

〽

茶屋の主人が言うには、以前宮廷には玉藻前と呼ばれる絶世の美女（なんか輝夜の時と被るな）がいたそうだ。

玉藻前は鳥羽とか言う上皇に寵愛されていて、彼女自身も大変な美貌と博識の持ち主であり、国一番の賢女として有名だったらしい。

でもある日玉藻前の正体に感づいた、上皇御付きの陰陽師・安倍泰親が上皇に報告。

それを聞いた上皇の命により安倍泰親含む数人の陰陽師で討伐に向かったところ、既に姿をくらました後だった

〽

「でも九尾って言えばかなり強い力を持った妖怪だろ？陰陽師とはいえ人間に遅れをとるか？」

「まあなんせ安倍泰親殿はあの安倍晴明の子孫ですからねえ」

「あー、聞いたことあるかも」

まあ会ったことも見たことも無いんだけどね

「相当優秀な術師だとかで、他の町でも名が通ってるくらいですよ」

へえ、人間が大妖怪をね……

幽香が聞いたら喜びそうだ

「オヤジ、お代ここ置いてとくな」

「まいどー」

さて、一回その安倍泰親つてのを一目見てみたいんだけどこの町には居ないんだよなー

「九尾が逃げたつていう山に行つてみるか」

・
・
・
・
・
・

「はい、迷つたー」

やっぱりな。山に行つてみようつて考えた辺りから既にこうなる予感はしてたもん。

可笑しいな…俺つてこんな方向音痴だったけ？山限定の？町では迷つたりしないもん…段々自分を弁解出来なくなつてきた

「ああ、もう日が暮れる…」

既に太陽は半分程沈んでいる。

辺りは徐々に暗くなつて…つて前もこんな感じだったじゃん

「ハア…こんな事ならもつと食糧調達しとくんだった」

そーいや近くに川があつたな。

こうなりや完璧に暗くなる前に魚でも取つ捕まえねーと

く川

「さーて川に着いたわけだが……」

既に辺りは真つ暗け…

月は登っているが今は雲で隠れてる

「……俺は間に合わなかった」

「つつか川に行くまでで迷った。こりや重症かもな」

「ハア：今夜は実質飯抜きか。ツイてないな」

「そう言っ立ち去ろうとした時だった」

「ん？」

川の畔に何かある

暗くて全体的なシルエツトしかわからないが、人よりも大柄だ。

獣でも横たわってんのか？と思いつつも近寄って行くと、丁度隠れていた月も出てきてその正体がわかった

この時代の日本には珍しい金髪の子。

頭には狐の様な獣耳。

そして腰辺りから伸びる九本の尾

大柄に見えたのはこの九つに分かれた大きな尻尾のせいだった

「九尾か」

見ると身体中傷だらけで、矢も何本か刺さっている。オマケに破れた着物の下は火傷を負っていた

「やれやれこのままじゃ死んじゃうな。まったく仕様がな」

「とりあえず見殺しにするのもアレなので鬼道による治療を行おうとした時だった」

「その女から離れろ」

冷たく鋭い声

「…誰お前？」

「その妖怪を退治しに来た者だ」

「ああ、じゃあお前が安倍泰親か」

「だったら何だ？」

「別に？」

なんか気に入らないな、コイツ。態度とか雰囲気とか

「お前は人間だな？今消えれば見逃してやる。その妖怪を此方に渡せ」

「…もう良いんじゃないのか？コイツは十分ボロボロだし、聞いた話じゃ別に悪い事してた訳じゃないんだろ？」

すると泰親は鼻で笑った

「そんな事は関係ない。そいつは妖怪で、妖怪はその存在自体が罪だ。善悪は関係ない」

「…ますます気に入らねーなお前」

コイツには俺が今までやってきたことを全否定されてる気分だ

「決めた」

俺は倒れている九尾の前に立ち塞がった

「…何の真似だ？」

その言葉には殺気が籠っている

「九尾は俺が預かる。お前には殺させねエ」

「…いくら人間と言えど邪魔立てするなら殺すぞ？」

今度は明確な殺気。アイツの言うように俺が唯の人間だったらそれだけで意識を持ってかれるであろう凄まじい圧力だ

「やってみろ糞ガキ」

そういや久しぶりだな。

人間相手に殺意を覚えたのは

36話 VS 安倍 泰親

殺意……？

可笑しいな……今までこんな感情滅多に出なかった。

僅かではあるがそれが少しムカついた、それも人間相手に湧き上がっている

——何だこの感情は？

「陽術・『炎玉』」

「……」

不可解な感情に意識を向けている間に相手の攻撃が始まっていた。手に持った札から印が浮かび上がり火球が打ち出される

「…縛道の三十九 『円閨扇』」

避ければ九尾に当たるので霊力の盾で防いだ

「ほう、面白い術を使う。だが九尾を庇いながら戦えるか？」

「その必要はねえよ」

隼斗は九尾に向き直り、外部からの攻撃を反射する結界、『鏡門』を掛けた

「これで九尾への攻撃は通らない。さあ、やろうか？」

「貴様ツ……」

とにかく今は切り替えて目の前の敵に集中だ

「陰術・『土槌』」

「破道の五十七 『大地転踊』」

泰親からは巨大な槌が、

隼斗は周囲の岩石を浮かせ飛ばした

「そんなモノでは破れんぞ！」

飛来する複数の岩石は槌に寄って薙ぎ払われ隼斗自身にも振るわれた

「ふんっ！」

隼斗はそれを素手の一撃で叩き割った

「なっ…!？」

「……そんなモノで、何だつて？」

手をコキコキと鳴らしながらそう返すと、泰親は眉間に皺を寄せ怪訝な表情を見せた

「貴様…唯の人間じゃないな？」

「ああ、少なくともお前よりは強いぜ？」

「……」

……挑発は効果なしか。思いの外冷静だな

「まあいい。貴様が何者だろうと滅してしまえば同じこと」

「滅する？ 上等だよ。やってみな」

泰親はフンツと鼻で笑うと、懐から札の束を取り出した

「貴様が大口を叩けるのも此れまでだ」

そして札の束を空中に投げた。宙を舞う札は一枚一枚光を帯びている

「秘術・『屍妖』」

宙に浮かぶ無数の札が一箇所に集結し、一つの形を形成していく

獣の頭部に鬼の身体。背中からは鳥類の翼が生え、尻からは爬虫類の尾が生えた異形の怪物だった

「…随分キモいのが出てきたな」

「コイツは私が今まで滅してきた妖怪を札の中に封じ込めそれを複合させた傀儡だ。その力は二百を優に超える妖怪を合わせたモノ。貴様に勝ち目は無いぞ！」

「たった二百か…」

「何っ…?」

……生温い

一億年前、都を襲撃してきた妖怪達は一体その何百倍だったか

……

「話にならねーぞ。そんな数じゃ」

「ツツ！ならば死ぬがいい!!」

泰親が手で印を結ぶと同時に異形の怪物が牙を剥き出しに爪をギラつかせ、突っ込んできた。

だがその速度はそこらの妖怪では比較にならない程速く、ほぼ一瞬で隼斗の目の前に到達した

「ゴアアアアツ!!」

怪物はそのまま隼斗の体を引き裂くため爪を振り下ろした

ゴパアアアツ

怪物の頭部が吹き飛んだ。

「!」

「……ほらな、話にならねエだろ?」

「……」

だが泰親は特に慌てた様子はない

「成る程。確かに私は貴様の事を甘く見ていたよ。まさか一撃、しかも拳一つでやられてしまうとはな」

「…の割には随分余裕だな」

「…はて、何のことやら」

背後から殺気

「!」

「ガアツ!!」

今し方頭を潰したはずの怪物が立ち上がり攻撃を仕掛けてきた。

しかも頭が元に戻っている

「…どうなってるんだ?」

「ふっ、残念だったな。ソレにどれだけ傷を負わせようと無駄だ」

再生能力でもついてんのか?

だとしたら少し厄介だな。

頭部を失つても再生出来るって事は実質死なないって事になる

「…まっ、やり様によってはそうでもねーか」

「ガアアアッ!!」

爪や牙、尾による連続攻撃を躲していく。

この速度といい、抉れた地面を見る限りじゃパワーも相当あるな。

「……」

だが所詮知能の無い獣だ。同じパワーファイターでも勇儀の方が段違いに強かった

「ハッ！」

腕を靈力で覆い、手刀で怪物の両腕を斬り落とした

「ギャッ…!?!」

「縛道の六十一 『六杖光牢』」

更に六杖光牢で動きを奪う

「ギ……!?!」

「なっ!?!」

「…幾ら再生出来るつつつても動けなきや意味ねーよな?」

「この……!?!」

泰親は掌から靈力で編んだワイヤーの様な物で隼斗を拘束した

「ふっ、はははっ!油断したな。下手に動けば身が裂けるぞ!待って

いろ、直ぐに傀儡の拘束を解いて……!?!」

「はあ……破道の十一 『綴雷電』」

「…はっ?」

バチチツと閃光が走り、ワイヤーを伝ってきた電撃に感電する泰親
「がっ……なん……だと……!?!」

その言葉を最後に泰親は意識を失い同時に靈力の供給が切れたのか怪物も消失して唯の札に戻った

「勝負を急ぎすぎだ青二才。修行して出直せ」

気絶した泰親にそう吐き捨てる隼斗だった

37話 八雲の式

「さーて、取り敢えず治療しないとな」

安倍泰親との戦いを終え、俺は九尾を洞窟まで運んだ。

目的は周囲の安全を確保する為と雨が降ってきたからだ

泰親？知らないな。丁度頭冷やせていいじゃねーか

「そもそも俺は治療術が得意じゃねーってのに、なーんか毎度毎度治療してる気がするなあ。……いい加減極めたほうがいいのか？」

でも面倒臭いしなーと愚痴を漏らしていると九尾の意識が戻ったようだ

「……………ここは…?」

「ん、気がついたか。ここは洞窟の中だ」

「ハッ！人間…!?!…………痛っつ!」

俺の姿を見るや否や飛び起きて距離を取る九尾だが、傷が痛むのか顔を顰めた

「おいおい、治療中なんだから下手に動くなつて。折角閉じかけてたのに開いちまうぞ?」

「えっ…………治療…?」

改めて自分の身体を見るとあれだけ酷かった出血も止まり傷も塞がりかけている

「……………お前が治してくれたのか?」

「正確には治し中だ。ほれこつち来い」

「あ、ああ」

九尾はオズオズしながらも言われた通り目の前に座った

「…………」

「……………お前名前は?」

「……………えっ?」

「名前だ、名前。まさかそのまんま九尾ってんじゃないだろ?」

以前（妹紅の時）のようにまた沈黙が続きそうだったので先手を打って自己紹介に入る隼斗

「名前は特にない。だが都では玉藻前と呼ばれていた」

「そうか。俺は柘 隼斗。一応人間だ」

「そーいや俺って何に分類されるんだろうな。」

「前までは超人って名乗ってたけどよくよく考えたら変じゃね？つて事に最近気づいた」

「……柘殿、どうして私を助けてくれたんだ？」

「そりやお前、目の前に傷だらけの奴が倒れてたらほっとく訳にもいかんだろ」

「だが……私は……妖怪だ……」

「最後は消え入りそうな声だった。」

「……それでもだ」

「……えっ？」

「俺から言わせりゃ人間も妖怪も大した違いはない。いい奴もいれば悪い奴もいる。そんなもんは助けてからテーマで判断すりゃいい」

「……」

「俺はお前を助けて良かったって思ってるぞ？お前程人間に歩み寄ろうとした妖怪は見たことないし、それが間違った事だなんて思わない」

「コイツは案外紫とウマが合うかもしれないな」

「まっ、理由としちゃそんなところだ。ほれ、治療終わったぞ」

「隼斗が翳していた手を下げると、玉藻前の傷は完全に塞がり火傷の痕も消えていた」

「柘殿、貴方は命の恩人だ。本当にありがとう。……先程の言葉も、胸に響いたよ」

「玉藻前は深く頭を下げるとニッコリと微笑んでそう言った」

「おう、気にすんな」

「それで……何かお礼をしたいんだが、その……生憎と持ち合わせが無くてな……」

「……と、何故か恥じらいながらも着物を脱ぎ始めた」

「……えっ、何やってんの？」

「何って、お礼に閨事の準備を……」

「待—て、ウエ—イト。いきなり早まったことすんな。ったくコレだから最近の若い子はすぐそっち方向に持つてくんだからく下品ザマス」

俺が漫画とかに出てくるオバハン風に言うと、下品つて言葉に反応したのか顔を赤くして反発してくる玉藻前

「なっ…!?わ、私だつて簡単に股を開く女じゃないぞ!!惚れた男だけだ!!」

「えっ…?」

「あっ…：／／!?」

ここでまさかのカミングアウトだよ

取り敢えず玉藻前が落ち着くまで待つか。なんかショートしちまってるし

く玉藻前が落ち着いた頃

「ゴホンツ…!じゃあ私は何をしたらいい?」

「だからイイつてば」

「そういう訳にはいかない!それだけの事をしてもらつたんだ」

尚も食い下がってくる玉藻前に俺はしばらく考えた後ある事を思い出す。

———そーいや紫の奴以前に式神がどうか言つてたな

「じゃあさ、一回会つてもらいたい奴がいるんだがいいか?」

「?…：それは一体?」

「俺の友達だ」

———

雨が上がり、俺と玉藻前は紫の家に向かった。

まあ紫の家が何処にあるかなんて知らないから本人に迎えに来て

貰わなきゃいけない。

「縛道の七十七 『天挺空羅』」

これは霊力を張り巡らせて対象を捕捉し、伝言する事が出来る便利な術だ

これにより、伝言から10秒たらずで紫は来てくれた。

大まかな事は天挺空羅を通して伝え、細部は家で話すと言って現在に至る。

今俺は茶の間で煎餅を齧り、紫と玉藻前は別室で対談している

「暇だなく、紫の年齢当てゲームでもしようかな」

「こらー！」

ペシツと扇子で頭をはたかれ後ろを向くと、対談を終えた二人が出てきた

「よお、話の方はどうなった？」

「話し合いは終わったわ。彼女も私の意見に賛成してくれて、後は…」

紫の言葉に玉藻前が付け足す

「私が八雲殿の式になるかどうかだ」

そこで二人が俺を見た

「……つまりお互いの実力を図りたいと？」

コクツと両者が頷き、俺も立ち上がり外に出た。

二人も黙って付いてくる

「じゃあ勝負はお互いのどちらかが負けを認めるまで。流石に危ないと思ったら止めに入るからそのつもりでな」

両者距離をとって向かい合い、俺の合図で戦いは始まった

流石、二人共大妖怪の中でも上位に位置するだけあって初っ端から激しい攻防が繰り広げられた。

妖力弾の密度、身のこなし、技への応用から見てもその実力が伺える。

玉藻前も此れだけの実力があつたら安倍泰親なんかには負けなかつたろうに……

勝負は意外に早く着いた

「勝者・八雲 紫」

妖力弾の打ち合い・肉弾戦においては玉藻前も善戦していたが、紫の能力の発動により全て無効化され勝敗が決まった

この日を境に九尾の玉藻前改め、八雲紫の式・八雲 藍となった

38話 月面戦争

「駄目だ。ぜえーたい駄目」

「何でよー」

朝から八雲家ではちよつとした口論が起こっていた。

コトの発端としては紫が突然俺に、月の技術を手に入れたいから月に戦争を仕掛ける、協力して欲しい　　つと言ってきたのが始まりだった

月の技術力は数億年前から発達しており、現代ではレーザー兵器から宇宙艇まである。更に防衛軍各隊長を初めとし、月の神・ツクヨミまで居るとなつては妖怪が幾ら束になつて掛かっても勝ち目は無い。俺はそれを見越してさつきから反対してるんだが紫が納得してくれない

「だから言つてんだろ？月の技術力は俺達が想像してるよりも強力なんだよ。簡単に勝てる様な相手じゃない」

「そんなのやってみないとわからないじゃない！」

「ふ、二人共、一旦落ち着いた方が…」

その傍で藍がオロオロしている

「わかるから言つてんだらうが!!」

「……っ！」

隼斗が珍しく怒鳴り声を上げると、紫も藍も驚いた顔をして隼斗を見るが、当の紫はまだ納得しない様だ

「……そう、ならいいわ。貴方の力は借りないから」

「おい、紫!!」

呼び止めようと名前を叫ぶが、紫は藍と共にスキマの中に消えてしまった。

去り際に藍が申し訳なさそうにこちらを見ていた

「くそ、勝手にしやがれーどうなつても知らねえぞ……!!」

そんな悪態も虚しく響くだけだった

――
満月の夜、湖の周りには数にして千体近い数の妖怪が集まっていた。

どれも自分の腕に覚えあり、尚且つ戦いに飢えている妖怪ばかりだった

「お集まりいただき感謝致します」

その中心に立ち演説をしているのは、今回妖怪達を集めた張本人である八雲紫

「……………!!」

「……………」

その傍には式である藍も立っている

「今宵は満月。私の能力でここ、湖に映った満月を月へと繋げます。さあ、今こそ月に我々の力を知らしめる時です！」

妖怪達が雄叫びを上げる。

紫の本来の目的は月の技術力を手に入る事だが、ここに集まった妖怪達が望むのは破壊・侵略などの暴虐行為。

だからこそ紫は今回の戦争のため地獄より呼び寄せたのだった

「では参りましょう！」

紫が扇子を水面に映った満月に向けて降ると、湖全体が輝き月への道が開かれた。

一斉に雪崩れ込む妖怪達

「…さあ行くわよ、藍」

「はい、紫様」

――

地獄絵図。

そんな言葉でしか言い表せない惨状が此処、月で広がっていた。

地に倒れ伏す死体の殆どは五体満足の者が無く、辺りには最早誰のものかわからない手足が散らばっている。

唯、一つだけわかる事があるとすれば…

「……そこに人の死体は一つも無かった

「くっ……こんな筈じゃ……!」

「紫様……!」

その中心で全身ボロボロで膝をつくのは今回の首謀者である八雲紫と藍だった

「……所詮は妖怪、大したことありませんね」

「ですが油断してはいけません。妖怪は時に我々の予想を超えた行動をとります」

その前に立ち塞がる二人の女性

防衛軍総帥及び月の使者 リーダーの一人

「……綿月 依姫

現防衛軍・一番隊 部隊長

「……春雨 麻矢

「貴方の仲間は我々が殲滅しました。これで終わりです」

依姫が刀を振り上げる

「…藍!!」

「ハアッ!!」

「!」

合図と共に紫は結界で依姫と麻矢、そして藍が妖術で出した炎を閉

じ込めた

「藍……今のうちに態勢を……」

「そう言いかけた瞬間、結界が両断され依姫が紫に斬りかかった
「ぐう……」

「ギリギリで身を捻って急所を外しましたか……でも同じことです」

紫の首筋に刃が突きつけられる

「紫様ア!!……っっ!」

「動くな」

助けに向かおうとした藍もいつの間にか背後を取っていた麻矢に
捕縛されてしまった

「……此処まで……なの……?」

「残念ながら、そうなりますね」

依姫が刀を持つ手に力を込めた瞬間だった

「縛道の六十一 『六杖光牢』」

突如6つの光の帯が出現し、依姫の身体に刺さった

「なっ……依姫様!」

藍を拘束していた麻矢が驚きの声を上げる

「これは……身体が動かない……何者だ!!」

依姫は気配を感じ取り眼前にいる人物に叫んだ

「頭は冷えたか?紫」

「えっ……?」

この局面で助けに入ったのは、紫も藍も見覚えがない男だった

「(紫、聞こえるか?)」

「!」

紫の脳内に声が響く

「(貴方……隼斗なの?)」

「(ああ、訳あって姿を変えちゃいるがな)」

な、なーんと…謎の男の正体は鬼道により姿を変えた柊隼斗本人
だった……!!

結局心配になり着いてきたはいいが、よくよく考えると月には顔見
知りがいるのでバレたらマズい

↓出るに出入られず身を潜めたまま傍観

↓紫と藍が危なくなつたので、姿を変えやむを得なく登場

「(つて訳だ)」

「(そう……ごめんなさい隼斗……私が愚かだったわ……)」

「(その話は後だ。今は脱出する事に専念……!!)」

ここで鬼道による念話が途切れる

「貴様……依姫様に何をした!!」

いつの間にか急接近していた麻矢がナイフと銃を構えていたから
だ

「つつとおー」

隼斗はナイフによる斬撃を身を屈めて躲し、次に突きつけられた銃
に手を添えて軌道をズラした

「縛道の一『塞』」

「!」

麻矢の手足を拘束するため縛道を使用するが、瞬時に距離を取った
麻矢には届かなかつた

「縛道の二十一『赤煙遁』」

隼斗を中心に煙幕が発生する

「目眩まし……!麻矢、周囲を警戒、不意打ちに気をつけなさい!」

「了解!」

依姫と麻矢はその場で動かず不意の攻撃に備えて意識を集中した

「…」

「…」

「…」

「…」

「……………」

「……………」

攻撃が……来ない？

やがて煙が晴れ二人が周囲を見渡すと、妖怪と男の姿は無かった

39話 VS 綿月 依姫

「ふう……一旦安心だな。紫、地上までのスキマは開けそうか？」

「はあ、はあ……直ぐには無理だけど、少し休めば大丈夫よ」

依姫と麻矢の隙をつき、その場を離れた俺たちは物陰で身を潜めていた

本来なら紫のスキマを通って早々に地上に帰った方がいいのだが、二人とも満身創痍。

紫は傷も深かった為直ぐには動けず、藍は今気を失っている

「とにかく傷をみせろ、治療してやる」

「そんな時間があるとでも？」

「!？」

声のした方を見ると、依姫が刀を手に立っていた

「チツ、まさかこんなに早く探知されるとは思わなかったよ」

「私も伊達に防衛軍を率いていませんので」

「もう一人がいないようだが？」

「麻矢には本部に戻ってもらいました。貴方は妙な術を使うので」

そりや好都合だ。麻矢の能力は厄介だからな

後は依姫をどうにかしねーと

「…紫、力が戻り次第藍を連れて地上に戻れ」

「な、何言ってるのよ!?! 貴方を置いて行けるわけないでしょ!」

「…おい、何を勘違いしてやがる?」

俺は紫の胸倉を掴み上げた

「うっ……は、隼斗………」

「俺は今怒ってんだよ、紫。こうなったのは誰の責任だ? 言ったはずだ、月を甘く見るなど」

「……っ!」

「今のお前に誰かを心配する余裕があるのか? 誰かを助ける余力があるか? 感情論だけで動くような浅はかな真似はするな、今できる最善の行動を取れ! それ以上に立つ者の務めだ:!!」

「……………うっ…ぐ…」

悔し涙か、紫の頬を涙が伝い悲痛な表情を浮かべている

「泣く程悔しけりや生き残ってみせろ。俺だって死ぬつもりはない」

「……………ぐんっ…」

「……よし」

俺は紫をゆっくり降ろして頭にポンツと手を置いた

「……話は終わりましたか?」

此処で漸く依姫が口を開いた

なんだ、何もしてこないと思っただら待っててくれたのか

「ああ、悪いな」

「では……参ります」

依姫が抜刀の構えに入る

「行け!紫:!!」

「っ!」

俺は依姫に、紫は倒れてる藍に向かって走った

「逃がしません!!」

「いいや、逃がす!!」

依姫の抜刀した刃を霊力の籠手で受け止めた

「慌てんなよ、俺が相手になってやる」

「…っ!」

そのままお互い距離を取り睨み合う

紫は藍を連れスキマを展開、必ず迎えに来ると言い残し、消えた

「わかりませんね。何故人間である貴方が妖怪を助けようとするのか」

「そりやお前、偏見ってヤツだぜ。妖怪にも良い奴はいる」

「現にあの妖怪は月を襲撃しましたが?」

「ホント、手の掛かる奴で困っちゃうよ」

「……………我々は過去に妖怪の所為で文明を一つ失っているんです。故に妖怪を嫌悪している」

「ん?」

確かに元を辿ればそうかも知れないが、都を跡形もなく消し飛ばしたのは人間だ。

依姫達はそう聞いてないのか？

「…お喋りは此処までです。出来れば命を奪いたくない。降参して頂けると有り難いのですが」

「折角だがお断りだ」

「……残念です」

依姫はそう言い終えると一足跳びで隼斗の前まで詰め、刀を横薙ぎに振るった

「速エな！」

隼斗は横薙ぎに振るわれた刀を大きく体を反る事で躲し、そのままバク転で後方に下がった

「愛宕様の火」

隼斗の後を追う様に踏み出した依姫の腕が炎に包まれる。

これは依姫の能力『神霊の依代となる程度の能力』だ。

八百万の神を自身に降ろす事で、その力を振るう事が出来る腕に宿った炎は次いで刀を包み込み炎刀を創り上げた

「ハアッ!!」

「ぐっ…!」

炎刀による一撃を籠手を使い受け流す隼斗だが、そのあまりの熱に籠手は一瞬にして溶け、腕の表面を焦がした。

その激痛に一瞬動きを止めてしまった隼斗の隙を逃さず、返す刃でもう一太刀を高速で繰り出す依姫

「縛道の三十七 『吊星』！」

「!」

隼斗は吊星を自身の目の前に展開。

それにより依姫の視界が一瞬奪われギリギリで斬撃を躲す事が出来た

「破道の一 『衝』」

そのまま依姫の額に軽い衝撃波をぶつけ、距離をとった

「ふうー。こりゃヤバいかもな」

何とか殺さないように気絶させる予定だったが、手加減してたらこつちがやられちまう…！

ここは一気に強力な縛道で動きを止めるしかないな

「縛道の六十三『鎖条鎖縛』!!」

蛇のように伸びる太い光の鎖が依姫に向け飛んでいく

「…甘いー」

「ぐあっ…!?!」

嘘だろ…? 六十番台の縛道を斬りやがった…! しかも一撃で効力を失って俺ごと斬りつけるとは

「…驚いたな、神降ろしってのはそんな事まで出来ちまうのか?」

「?…何を言ってるんですか? 今のは能力を使用していません」

「!?!」

「いいですか? 光を斬る事は水を斬る事よりもずっと容易いものなのです」

「いや、その理屈はおかしい」

おいおいマジか。しばらく見ない間にどんだけ強くなってんだよ

…!

師匠の面目丸つぶれなだけど!?

「はあ…参ったなマジで」

ーこれじゃ本当に本気出さなきゃいけないなっちまうじゃねーか

隼斗の中でドス黒い感情が渦巻いた。

以前安倍泰親と戦った時にも出た、自身でも違和感を感じた感情だ

「祇園様の力」

依姫が刀を地面に突き刺したと同時に周囲から刃が飛び出し隼斗を取り囲んだ

「動けば自動的に刃が貴方を斬り刻みます。そして……」

依姫は跳躍し、隼斗の頭上より刀を上段に構えながら宣言する

「これで幕引きです……！」

ガシッ

隼斗が振り下ろされた刃を掴み取った

「ふう……」

「なっ!?!」

依姫は驚きの表情を見せた。

「やっば調子戻ると違うなア」

隼斗は笑っていた。

今し方振り下ろした刀を握り込みながら、口角を吊り上げ不気味な笑みを浮かべていた

「馬鹿なっ!?!刃が通らない……!?!」

見ると依姫の刀だけじゃない。周囲に配置した無数の刃が隼斗の動きに反応し、対象を貫くべく飛び出しているが、鋒は隼斗の皮膚で止まっていた

「時間が無エからよ、さっさと終わらせてもらうぞ」

「むぐっ……!?!」

隼斗は言葉と同時に依姫の顔を掴み前方へ放り投げた。

音速に近い速度で投げられた依姫は何とか態勢を立て直し前を見ると、既にそこには隼斗の顔があった

「おら、避けねエと死ぬぜ?」

「!?!」

悪寒を感じ、咄嗟に依姫は身を屈めた

ゴオツ

凄まじい風切り音が鳴り、繰り出されたのは回し蹴り。

隼斗の脚は身を屈めた依姫の頭上を通過し、その風圧だけで月の表面を抉り取った

「もう一丁!」

「くっ…!」

続いて拳の振り下ろし。地面を転がり回避する依姫

「何だア? 急に逃げ腰になっちまってどうした?」

当然の様に地面に突き刺さった腕を引き抜き手首を揺らしながら問い掛けてくる隼斗

「…っ! 火雷神!!」

依姫は天高く刀を掲げると、突如スコール並の大雨が降りだした

「ほお、月にも雨って降るんだな」

だが隼斗に大して警戒する様子はない
すると隼斗目掛けて雷が落ちてくる。

その雷は途中で七頭の炎の龍へと変わり、隼斗を飲み込もうと口を開け……………

ゴパアアアンツ!

隼斗の拳の拳圧により掻き消された

「なん…だと…!?!」

「で? まだやるか?」

首だけ依姫の方へ向けそう語りかける。

「…:…いいでしょう。ならば此方も全力で行かせて頂きます」

「はっ、とつくに全力だと思ってたけどな。そういう事なら遠慮なくどうぞ?」

「建御雷之男神」

依姫の体からバチバチと青白い雷が走り、同時に持っている刀が光

り始めた

「…参ります」

一瞬で姿を消し、音速を越える速度で隼斗の背後に回り込み袈裟斬り。

隼斗もそれに反応し腕で防ぐ

「！……常人なら腕ごと焼き斬れているのに……どんな身体の構造してるんですか」

「生憎と常人じゃないんでね」

「その様ですな……！」

今度は二人とも姿を消し、辺りには空気の弾ける音が連続で響く。

どちらも音速を越えた速度での攻防を繰り返している為、常人ならば視認する事は疎か近づいただけで巻き込まれ大怪我を負ってしま

「天津甕屋！」

依姫の背後に空間を埋め尽くす程の高密度な弾幕が配置された

「良いな、そう言う必殺技的な」

「そうですか？」

「俺もやっていい？」

「どうぞ御勝手に……!!」

依姫が刀を振るうと配置されていた弾幕が一斉に隼斗の元へ打ち出された。

弾と弾の間がほぼ無く弾幕の範囲外へ逃げなければ被弾してしまう程の量だ

「じゃあ遠慮なく」

隼斗は避けるどころか弾幕に向け突っ込み

「連続普通のパンチ」

その名の通り両手を使った連続パンチで弾幕を掻き消していく

「まんまじゃないですかっ!？」

「いいだろ別に」

そうこう言ってる間に弾幕を全て打ち落とした隼斗が依姫に迫る

「っ!?!……天宇受」

「遅エ……!!」

依姫の頭部に隼斗の裏拳が振り抜かれた。

ノーバウドで数十メートルぶっ飛んだ依姫は近場に停めてあった宇宙艇数隻を巻き込みながら漸く止まる

「ぐっ……あ……」

「刀を盾にしたか。随分頑丈な刀……って違うな。この場合は咄嗟に刀を出したお前を褒めねーとか?」

「負ける……わけには……」

刀を杖代わりにしてなんとか立ち上がるが頭部からは出血し、左腕は裏拳を受けた衝撃で骨折していた

「……やめといった方がいいんじゃない?」

誰が見ても満身創痕な依姫にそう言うってみるが依姫は首を縦に振らない

「そういう訳にはいかない! 私は月の使者のリーダーだ! 私が皆を守らなければいけないんだ!!」

「……」

「さあ来い! 例え首だけになろうと戦ってやる!! 今は亡き柊先生の為にもお前を倒す!!」

右手だけで刀を構えフラフラになりながらも此方に突き付けてきた

「……………息巻いてるとこ悪いんだけどさ」

「……………」

「時間切れだわ」

ドサツとその場に倒れる隼斗

「……」

「……」

「……………はっ?」

啞然として素っ頓狂な声が出る依姫

近づいて鞘の先で突いてみるが目の前の男からは一切反応がない

「……………えっ?」

戦場に一人取り残された兵士の如く、冷たい風が辺りに吹いた

40話 月の神

「ん……どこだ……」

気がつく俺は冷たい床の上で寝かされていた

「くっそ……頭痛てく。あれ、俺何してたんだっけ？」

目を覚ますと同時に偏頭痛の時みたいな痛みが走った。頭痛が痛い。

「えーと……月で……戦つ……ああ思い出した」

そうだそうだ。紫達を逃がす為に依姫と戦ったんだ。

「で、アレを使ったんだっけな」

アレとは、急激なパワーアップの事だ。まあ正確にはパワーアップじゃなくて一時的に元の力を取り戻したって言った方が正しい。

だがその代償として自身の霊力を全て犠牲にする禁じ手みたいなものだからその反動でぶっ倒れちゃうし、下手したら死ぬ。

これはまだ紫にも見せたことが無かった最終手段だったんだけどまさか使うことになるとはな

「あつーなんか動きずれーと思つたら手錠掛けられてんじゃねーか」

辺りを見渡すが全体的に薄暗くて狭い部屋、オマケに鉄格子がある。

誰が見てもわかることだが敢えて言おう

「捕まって豚箱にぶち込まれたんですね、わかります」

そりやそうか。敵の本拠地で意識失ったんだもんな。そりや捕まるわ。

「一番最悪な状態で捕まったな」

今俺は霊力の類が一切使えない。

理由は言わずもがなアレを使ったせいだが、普通霊力は暫くすれば自然に元に戻る

だが今回俺が消費したのは霊力を溜めておく器そのもの。

例えるなら器がタンク、霊力が水だ

タンクさえあれば水は溜まっていくが、何もなければ水は一向に堪

らず、タンクを用意しなければならぬ

つまり俺はまずタンクを修復する事から始めなければならず、暫くは霊力が使えないという事になる。まあ怪我と同じで時間が経てば自然に治るんだがもう一つ問題があった

「くそ、能力まで封じられてやがる」

今俺を拘束しているこの手錠。恐らく月の科学者が作ったもんだろうけど、多分能力封じの細工がしてある。

霊力が使えない+能力が使えない

||俺、唯の人間と変わらない

今ならタンクトップタイガーにも負けちゃう

「冷静になってみると絶体絶命の大ピンチじゃねーか!!なんとか手錠だけでも外さねーと……!!」

必死にガチャガチャやっている、扉が開く音がして誰か入ってきた

や、ヤバい……! 執行人か? 俺を処刑するための斧マジニとかinしちゃったか!?

「やあ、調子はどうだ?」

「ぎゃああああああ!! チェーンソーだけは勘弁し………えっ?」

部屋に入ってきたのは1人の女性だった

――

「落ち着いたか?」

「あ、はい……」

あの後俺は牢から出され取調室みたいな部屋に連れてこられた。

正面には先程の女性、つまりマンツーマンだ。依然手錠は掛けられたままだが

「そう固くならなくていい。もっと楽にしろ」

「だって先生、僕昔から授業参観とか苦手だ「誰が先生だ!」

怒られた(・ω・)

「つつーかアンタ誰？」

「私か？そう言えばこれが初めての顔合わせになるか。なら仕方ないな」

ん？随分意味深な言い方だな

「私は月読命。此処、月の都を治めている神の石柱だ」

「……」

「ん？どうした急に黙って」

「……えっ、マジ？」

「おう、マジマジ」

マジってマジかよー!?

俺さつき先生とかアンタって呼んじやったよ!?

どうしよう!?!……そっか、どうしようもないか。じゃあ諦めよう

「……それで？その月読様が見ず知らずの罪人の為に態々出向いてきたのか？」

「見ず知らず？何を言ってるんだ？……お前柎 隼斗だろう？」

「!?……いや人違いだ」

「隠さんでもいい。既に変装は解けている」

「あっ……」

そうかしまった！霊力がカラって事は当然鬼道の効果を維持できる訳もなく元の姿に……！

「……この姿をアイツらは見たか？」

「んん？綿月姉妹や春雨麻矢の事か？……心配いらん。お前を回収したのは別の兵士で依姫はあの後気を失った為に見てはいないだろう。春雨の方もな」

「やけに詳しいな？」

「見ていた。やはり伝説の英雄だけあって強いな。あの依姫を倒すとは」

「じゃあ解放してくれよ。どーせ俺の事情も知ってるんだろ？」

「まあな。だが残念ながらそれは無理だ。今お前は月に襲撃を仕掛けた重罪人という事になっている。個人的には出してやりたいがそれでは下の者達が納得せん」

「じゃあ俺どうなんの？」

「明日の朝、刑が執行される。勿論死罪だ」

あ、詰んだ

「はっはっは！そんなこの世の終わりみたいな顔するな」

いやするだろ。つーか罪状は仕方ないにしてもいきなり過ぎんだろ…！何だ明日って！せめて霊力が戻るまで待っててくれてもいいじゃん

「お前には選択肢がある。一つはこのまま罪を償って刑を受ける。もう一つは今一度防衛軍に戻るかだ」

「…何？」

「はつきり言って今の防衛軍は軍備こそ強化されているが兵士の方がまだまだでな。古参の連中はともかく、特に新米兵士育成に難儀している」

「別に古参だけでいいじゃねーか、あんだだけ強けりゃ」

「そういう訳にはいかん。それでは防衛軍である意味が無くなってしまふ」

「でも軍に入るから許してくれてんじゃ、今回の場合通らないだろ」「いいや通る。二億年前、人妖大戦で民を救った英雄・柊 隼斗としてなら十分お釣りがくる」

「…俺はもう過去の人間だ。此処には必要ない」

「ふむ。余程地上との縁を切るのが嫌と見える」

「…あいつらはほっとけない。今の俺が生きる場所をあそこなんだ。悪いがその条件は呑めない」

「綿月姉妹や春雨麻矢の事はいいのか？」

「…あいつらの中じゃ俺は死んだことになってる。今のままが良いんだ」

「だがこのままではお前は明日をもつて死刑。更にはその刑を執行するに当たって見届け人に各部隊長並びに綿月姉妹も加わるからどのみちバレるぞ？」

「!？」

「さぞかしショックを受けるだろうな。かけがえのない恩師とも呼べ

る男を自分達は…

ガシッ!!

その言葉に俺は自分の感情が抑えられず気が付いた時には月読の胸倉を掴み上げていた。

手錠がされていなければそのまま殴っていたかもしれない

「てめエ……!!」

「…何だこの手は?」

対する月読は先程のおチャラけた態度が一変し、途轍もない殺気を放っている

「上等だよーアイツらにそんな思いさせる位なら今此処でお前に噛み付いて今此処で殺されてやる……!!」

その前に頭突きの一発でも叩き込んでやるけどな

するとフツと部屋を包んでいた殺気が消え、先程の様な穏やかな顔になる月読

「その状態で私の殺気にも耐え、更に覚悟あり…か。本物だな」

「…あつ?」

「本物の馬鹿だ」

「ああんっ?!」

コイツっ!馬鹿にしてんのか?

ああ、馬鹿にしてんのか…

「悪かったな。お前の覚悟を試したかったんだ」

「……」

えっ?何がどういう事?

「とりあえずそろそろ放してくれないか?いい加減爪先立ちは疲れ」

そう言や掴み上げたままだった。身長差もあつて月読がピン立ちになつてる

「あつ、悪い」

急いで放すと、月読はやれやれと言った感じで身なりを整えある提案をしてきた

「ならば先程の選択肢にもう一つ加えよう。だからもう一度考えてみてくれ」

「その選択肢ってのは？」

「1000年だ。防衛軍に戻っては貰えないか？その後はちゃんと地上に帰すし、それ以降は月への出入りを許可するから」

「へっ？」

「どうだ？これならば正体を明かしたところでまた会えなくなる事もないからアイツらを悲しませる事も無いし地上へも戻れるから良いだろ？」

「いや、まあ確かに願ってもない条件だけど……いいのかそんな勝手に決めて」

「いいに決まってるだろ。此処のトップは私だぞ？文句を言える奴なんていないさ」

「あ、そうっすか」

もう何でもいいです

「では改めて聞こうか。お前の答えは？」

「……わかったよ。それでいこう」

「死刑の方で？」

「な訳ねーだろ!?1000年防衛軍で働く方だよ!!」

「はははっ、冗談だ」

「まったく。後頼みがあるんだけどいいか？」

「んん？私のスリーサイズが聞きたいのか？えーと上から90の……」

「マジで!?凄え……って馬鹿ア!!ちよつと食い付いちまったじゃねーか！」

「怒るな怒るな。で、何だ？」

「アンタは見てたからわかってると思うけど、近々八雲紫って妖怪が俺を助けるために乗り込んでくるかも知れないんだ。だから何とかして今の事を伝えたいんだけど」

「ああ、なら私が直接出向いて伝えてやろう」

「軽っ!?いやいや流石にそれは色んな意味でマズいだろ。そんな事し

なくてもアイツが月に現れた時に会う許可をくれればおれが直接伝えるよ」

「月に入った瞬間迎撃されるかも知れんぞ？なんせこんな事があつたばかりだからな」

「ま、まあ確かに……」

ホントなら天挺空羅で伝えるのが手っ取り早いんだが今使えないしなー

「わかった。じゃあ頼むよ」

「ああ、任せておけ……つと言いたい所だが私だけでは信憑性に欠けるだろう。その八雲とか言う妖怪宛に手紙を書け。出来ればお前だと目でわかる内容のものをな」

そう言つて予め用意していたのか紙とペンを渡してきた月読

おつ、おちやらけてる割には先々の事考えてるんだなくとは言わない

「よし……ならこれで」

「ん？随分早いな……つてこんな内容でいいのか？」

手紙に書かれた内容を見て怪訝な顔をする月読

「ああ、間違いなくそれで俺だつてわかる筈だ」

「ん、では確かに。……よし一先ずお前は釈放だ。外にいる看守にこの事を伝えるから手錠を外してもらつて防衛軍本部に向かえ。1番大きな建物だ。そこの最上階にいる相手にこの事を伝えろ。話は通しておく」

「ああ、わかった。ありがとう月読」

「ではよろしく頼むぞ隼斗」

互いに握手を交わすと月読は部屋を出て行った。

「さて、じゃあ向かいますかね」

・
・
・
・

「……では確かに伝えたぞ」

地上に降りた月読は早々に紫を見つけ事情を説明。予想通り全く信用されず警戒されてしまった為、あの手紙を手渡し姿を消した

「……」

「若作りしないで友達作れよ b y 隼斗」

「……………馬鹿っ」

41話 防衛軍勤務①

「確か最上階だったな」

俺はエレベーターに乗り込み最上階のボタンを押した。最新のエレベーターなのか、あの独特の浮遊感もGも感じない

「……しっかし月読はいつの間にか手配したんだ？まさか入口の警備を名前言っただけで通れるとは思わなかったよ」

月読に言われた通り最上階にいる奴に会いに来たはいいけど、何て言おうか……

「こんちわっす、新しく配属されました新兵Aです……とか？」

いやそもそも俺はどういう立ち位置になるんだろう。月読の話を聞く限りじゃ兵士の育成係り的な感じだったけど……

「……って考えてる間に着いちまったな」

「えーと、確か奥の部屋だよな」

「まあいいや。後は流れに身を任せてね」

「失礼しまーす」

「……」

「もうじき月読様の言っていた新しい教官の方が来る時間ね」

「はい。何でも過去に前線で何度も活躍した実績がある方らしいですよ」

「それなら安心ですね」

防衛軍本部の最上階にある一室。

月読の命により、此処にある人物が集められていた

月の使者のリーダーである綿月姉妹。

そして防衛軍・一番隊部隊長 春雨麻矢

「でも何で態々私と依姫、麻矢ちゃんまで呼んだのかしら？」

「さあ……？月読様は絶対に来るようにと仰っていたので何か理由があるのだとは思いますが」

「御二方はわかるんですが何故私まで呼ばれたんでしょう？」

すると扉の外から声が聞こえてきた

「失礼しまーす」

「あつ、来たみたいよ」

「どうぞー！鍵は開いてます」

依姫がそう促すとドアが開かれ一人の男が入ってきた

「どうも、初めまし……………て？」

男は挨拶を言い終える前に此方を見て固まった

「!?」

だがその男の姿を見た3人も同じように固まる

「先生…………!?!」

「隊長…………!?!」

「…………月読の奴、ハメやがったな」

実質これが、師と弟子・上司と部下の一億年ぶりの再会となった

—————

「…………」

「…………」

机を挟んで向かい合うように座る四人。

と言っても隼斗の向かい側に三人座ってるので、なんと言うか面談の様な空気になっている

———気まずい。しかも今まで味わった中で一番空気が重く感じる。チキショー、コイツらと会うのにまだ心の準備が出来てなかったってのに何てこった…!!

えーと何から話せばいいんだ？

よ、よお〜久しぶりー!

…………流石にそんな軽くいけねーよ!!

そんな沈黙を1人が破った

「お久しぶりね、先生」

豊姫だった

「あ、ああ。お前たちも変わらず元気そうで何よりだ」

次に左腕を三角巾で吊っている依姫が口を開く

「今までどちらに？ご無事なら無事と言っただけであればすぐに迎えに行きましたのに」

「まあ、色々あったんだよ。地上でな」

そして最後が麻矢。でも若干俯いている

「……」

「どうかしたのか？」

気になつて声をかけてみた。すると……

「……うつ……！ぐすつ……あああ」

泣いたアアアアア!!?

「ま、麻矢？どうした？あ、あーアレか？久々に俺に会えて嬉しかったか？そーかそーか！それなら戻ってきた甲斐があった……」

ああ……多分恐らくきつと俺の所為だよな？なんかマズい事言っちゃまったか？いやいやまだそんなに喋ってないから！

「ひつ……良がっだ……！本当に……柊隊長だああ……！」

「麻矢……」

「麻矢はずつと先生の事で思い詰めていたんです。最後まで一緒に戦えなかった自分を責めて、悔やんで」

「それが此処に来て安堵に変わったから溜め込んだ感情が決壊したのね、きつと」

依姫が麻矢の背中を摩り、豊姫が頭を撫でて落ち着かせている。側から見れば大変微笑ましい光景であるが、当事者である俺の瞳にはクラスで女子を泣かせた時みたいなのシチュエーションが浮かんできて素直に喜べない

「麻矢、心配掛けたな。でも俺はこの通り元気で此処にいる。だからもう心配いらないぞ？な？」

出来るだけ優しい口調でそう語りかけると、麻矢は涙を拭って顔をあげた

「は……」

……

それ以降も特に仕事の話をする訳でもなく俺たちは談笑していた。俺の今までの経緯や妖怪の事。月の都の文化とか、兎に角思いつく限りの事を話し合った。

そうそう。月の襲撃の時にいた謎の男の話になったから正体を明かした。すると麻矢と依姫が顔を蒼くして謝ってきた。元々襲撃したのはコツチだして事で俺も平謝り。ちよつとした懺悔大会みたいになって唯一豊姫はこの状況に笑っていた

途中から部屋の外で月詠が盗み聞きしているのに気付き、壁ごとぶち抜いて飛び蹴りを喰らわせてやった

「な、何をするか!」

「るせー!!お前の所為で最初の方大変だったんだよ!!」

ギャーギャー

「あらあら見て依姫。月詠様の頬があんなに」

「ははは…あれは痛そうですね」

「いいなー、柊隊長に抓って貰えて」

結局俺の仕事について説明を受けたのは次の日の朝だった

42話 防衛軍勤務 ②

「教官？俺が？」

「はい。その様に伺ってますが」

次の日、月読に言われ今日は依姫と一緒に仕事をする事になった俺は歩きながら内容を確認していた

「先生には兵士たちに戦術指南をしていただきます。私も同じ仕事を請け負っているんですが最近別件で動く事も多くて人手不足だったんです」

「ふーん戦術指南……厳しめでもいいの？」

「はい。ビシバシッお願いします」

「了解♪」

暫く歩いて行くと巨大な建物が見えてきた

「ここが訓練場です」

「随分デカいな。札〇ドーム以上あるんじゃないの？」

率直な感想を述べながら中に入ると、訓練生と思われる面々が整列して待っていた

『おはようございます!!』

訓練生達は依姫の姿を確認すると正対し、声を揃えて挨拶をした。依姫もそれに返す

「ええ、おはようございます」

「おっ、流石月の姫。威厳たつぷりだな」

「依姫様、そちらの方は？」

訓練生の長と思われる兵士が隼斗に気づき質問してきた

「今日からあなた方の戦術指南を担当して頂く方です。先生、自己紹介を」

依姫に促され前が出る隼斗

「柀 隼斗だ。月読に頼まれて新しくお前達の担当になったからよろしくな」

軽く挨拶を済ませ一歩下がると訓練生達は何やらヒソヒソ話して

いる

「なんか随分適当な人だな」

「しかも月読様を呼び捨てだったぞ？大丈夫なのか？」

「やたら態度デカいし、依姫様より強いのかな？」

「それは無いだろww」

などなど

「こ、こらー！先生に失礼ですよ……！」

慌てて依姫が叱るがザワつきはおさまらない

「いいよ依姫。新参者の扱いなんて最初はこんなもんさ」

「しかし……」

「まあ任せとけ………ツツ！」

「!?」

シンツ………

隼斗は騒つく兵士達を、大声を出すわけでも無くただその場に立つただけで黙らせた

霊力を解放した訳ではない。今隼斗は霊力を使えないからだ

「……っ」

訓練生は動けない。依姫でさえ冷や汗をかいている

「……それは殺気だった

達人クラスになれば殺気だけで相手を制圧することができる。

圧力を強めれば気絶させる事も可能だ。

隼斗は敢えて加減していた

それでも呼吸が上手くとれず過呼吸になる者もいる

「はっ……はっ……はっ……」

フツ

……ここらでイイか

「ん、静かになったな。じゃあ早速訓練始めようか」

「……」

「よし、次の奴！」

「はい！お願い致します！」

訓練を始めて一年。今は訓練生一人一人に武器を使った実戦訓練を行っているとところだが…

「すぐ武器を下げるな。ほれスキあり」

「うわっ!？」

打ち込みの際構えを乱したスキを突き武器を弾き飛ばした

訓練生は全員が新兵と言うわけでは無く、寧ろ其れなりに長く軍にいる兵士の方が多い。

月人の兵士から玉兔と呼ばれる人型兎もいるが、その殆どが実戦経験が少ないらしく、今の様に実戦なら死に直結する様な行為を平気でやってしまう

「いつも言ってるだろ、もしこれが実戦だったらを想定して動け」

「は、はい！ありがとうございます」

礼をして下がっていく兵士。時計を見ると丁度昼に差し掛かるところだった

「もうこんな時間か。よし、午前中の訓練は終わりだ！午後の訓練まで各人自由にしていいぞ！」

・

・

兵士達は汗を拭いながらその場で休んだり、水を飲んだりしている俺もその場に座り水を一口含む。

手元には兵士たちのデータが纏めてあるタブレット

まだ一年とはいえ此れからの課題も多いな

データと睨めっこしていると入り口の扉が開き、豊姫とサービスワゴンを押した麻矢がやって来た

サービスワゴンってのはホテルとかで料理を運んでくる台車みたいなヤツな

兵士達は一斉に立ち上がり、挨拶と敬礼を行う。

豊姫は和かに手を振り、麻矢も答礼した

「よお、二人揃ってどうしたんだ？」

「月読様から先生の調子を見てくるよう言われたの。だから差し入れを持ってきたわよー」

「どうぞ隊長」

そうやって差し出されたのは、大きなバスケットに入ったサンドイッチと紅茶だった

「態々ありがとな。アイツらも喜ぶよ」

因みに麻矢が今でも俺を隊長と呼ぶことについて以前、「今はお前が隊長なんだから普通に呼んでくれて構わない」と伝えたところ

「いえ、私にとつて隊長はいつまで経っても隊長ですから！」

つてな具合でそこだけは譲れないそうだ

「おーいお前ら！二人から差し入れ貰ったから欲しい奴は取りに来いよー!!」

「うおおおおおお!!」

「豊姫様と春雨隊長の差し入れだー!!」

一気に群がる訓練生達。

お前ら元氣じゃねーかとツツコミを入れておく

余談だが豊姫と麻矢は下の奴らに人気がある。別に依姫が嫌われている訳ではないが、基本的に依姫は訓練に手を抜かない真面目な性格な上、やや天然が入っているのか平気で準備運動でフルマラソンを走らせようとする。その為苦手意識を持つ輩もいる。

豊姫の場合はその反対で、自由気まままで楽観的な性格をしている。真面目な依姫をサポートする傍らこうして差し入れを持ってくることもしばしば。

麻矢も性格こそ真面目だが気立てが良く基本的に部下にも優しい
もう一度断っておくが依姫は嫌われてはいない。性格が真面目すぎるだけだ。

事実彼女の強さはそこからきているものが強く、その風格故に憧れる兵士は多い

俺？俺はまあ半々ってとこ。

強さを認めてくれているものもいれば、怖くて近づき難いという奴もいるらしい（麻矢情報）

みなまで言うな。俺の評価が一番悪い

「そう言えば先生は依姫と戦ったのよねー？」

「ん、まあな」

「どうだった？あの娘、強くなってたでしょう？」

まるで自分の事のように瞳を輝かせて聞いてくる豊姫

「ああ。あそこまで苦戦したのは依姫が初めてだったよ」

「隊長が苦戦…!?地上にいた時も苦戦のくの字もなかった隊長が!?」

驚き過ぎだろ麻矢よ……と思つたと同時にしまつたつ！とも思つた。

俺はまだ力の大半を失つた事を豊姫達に言つてない。余計な心配をかけたくなかつたからだ、口が滑つた

「ま、まあ依姫もそれだけ強くなつたつて事だ。でもまだ俺のが強いけどな！はははっ…」

「へえーやっぱり凄いですね！隊長も依姫様も…！」

麻矢が思いのほか単…素直な子でよかった
すると豊姫がある事を口にする

「ねえ、折角だし麻矢ちゃんも先生にお稽古つけて頂いたらどう？」

何が折角なのかわからんがあんまりボロが出そうなこと提案する
のやめてもらえます？

「いえいえそんな！とても隊長には敵いませんよ…！」

相変わらぬのダイナミックな身振り手振りで遠慮する麻矢。

俺も便乗しとこ

「ソウダソウダ！イッテヤレ麻矢ー！」

「あら、だからこそそのお稽古でしょう？それにそんな後向きな考えじゃ先生には近づけないわよー？」

「！……………確かに…！」

…………orz

「隊長……!!」

「はい？」

グイグイ来た

「是非！一手御指南お願いします!!」

「……はい」

43話 防衛軍勤務 ③

「勝負は先に相手から一本取ったら勝ちよ！審判は私がするわー！」
「はい！」

「……おう」

なんで豊姫がそんなにノリノリなのか知らんが、どうしたもんか
隊長と組手するなんて久しぶりですね！私頑張りますよー！」

何だかんだ麻矢は乗り気だし

「おい！春雨隊長と柊教官の組手試合だつてよ！」

「マジで!?どっちが強いんだ!?!」

「私、柊教官に二千！」

「俺は春雨隊長に三千！」

外野もなんか勝手に盛り上がってるし……

「じゃあお互い見合つて見合つて、はっけよーい……」

豊姫、それ相撲や

「残ったー!!」

どうしてこうなった？

「行きますー！」

「！」

試合開始と同時に麻矢の姿が消失した。

否、高速で動いて（正確にはそう見えた）俺の背後に回っていた

「やっぱ能力ありかよ……！」

反則ではない。これは実戦に基づいた訓練だ

※ここで麻矢の能力をお濼いしとく

『相手の体感速度を下げる程度の能力』

く相手が普段感じている体感速度を下げることで、相手は普段通りの速度がとんでもなく速く感じてしまい、自分自身で動きにセーブをかけてしまうく

ゴムナイフが首筋に触れる直前で往なしが間に合い、バックステツ

プで距離をとる

「逃がしません！」

続いて麻矢がナイフを投擲。能力のせいか、メチャ速く感じる

「つとおー！」

だが簡単にやられちゃ俺の立場がない。

首を横に振り躲す。

「まだまだあ!!」

次の瞬間には新たなナイフを持った麻矢が目の前に迫っていた

斬撃からの打撃。実戦ではここに銃撃が入ってくるが、これが麻矢の戦闘スタイルだ。

武器はどれも取り回しやすいものを使用し、能力と合わせて相手を攪乱しつつ戦う。

受け、捌き、いなす。俺は衰えているとはいえ能力による身体強化で麻矢の連撃に対応していく。今の俺の速度は周りから見れば人間でも出せる範囲なので、訓練生でも通常の状態ならば出せなくはない。だが麻矢の能力がそれを許さない。俺ですら能力を使って何とか反応出来ている

——だが俺相手に打ち合いを選んだのは悪手だ

「捕まえた」

「あつ……！」

打ち合うと言うことはそれだけ相手に触れる数が多くなると言うこと。麻矢の能力は速度は下げられても力を抑えることはできない。

妖怪とタメ張れる程の力で掴まれたら人間の力で逃げることは不可能。

俺は麻矢を投げて組み伏せ、拳を顔の手前で寸止めた

「一本………だよな？」

審判である豊姫に確認を求める

「一本！勝者、柊 隼斗く!!」

豊姫の宣言と同時に周りから歓声が上がった

「ほれ」

倒れている麻矢に手を差し出す

「ありがとうございます。やっぱり隊長には敵いませんね」

「いやいや。お前もイイ線いつてたぞ？前よりも格段に強くなってる」

「そう言つて頂けて光栄です。また機会があればよろしくお願いします」

相変わらず謙虚だなあ……

輝夜もこれくらい礼儀正しけりや風格も現れるだろうに

麻矢は一礼すると未だテンションの高い豊姫を連れて訓練場を後にした

「よし！お前ら！今日の午後の訓練で気合いを見せた奴は明日休んでよし！集中していけよー!!」

「ウオオオオオオオ!!」

その言葉を聞いた訓練生達が一気に湧いた

まっ、偶には飽もやらないとな

その日を境に、兵士たちの中で隼斗の株は急上昇したと言う

訓練を始めて半年程経った頃には俺の霊力が戻っていた。

霊力が使えるようになった事で戦術の幅が広がり、訓練にも霊力コントロールを加えた

しかし霊力を意識して使ったことのない奴が其れを習得するのは難しく、霊力を教え始めて数十年経った今でもまともに使える兵士は少ない。そう考えると妹紅は才能があったんだろう

唯一使いこなせる様になったのは綿月姉妹と麻矢だけで、特に麻矢は霊力の習得が三人の中で一番早かった

「……」

月に居るのも残り5年を切った。でもまあ、霊力の扱いが可能になれば戦力の強化にも繋がるし徐々にはあるが霊力の理解も広まっている。結果としては上々だろう

そんな事を思い返ししながら、訓練を終えて誰もいなくなった訓練場に人影

「何一人で黄昏ているんだ？隼斗」

「月読か。珍しいな、アンタが本部から出てくるなんて」

「失礼な。私は引きこもりでは無いぞ」

何故だろう？今引きこもりと聞いて真っ先に輝夜の顔が浮かんだのは……？

「お前がここに居るのもあと少しだな」

「ああ。いい加減帰ってやらねーとまた怒られちまう」

「そっぴいや紫達は何してんだらうな。」

幻想郷の様子も気になる

「はははっ、それは仲の良い事だ」

「…それで？月読はここに何しに来たんだ？」

「ふむ、何か用が無ければ来てはいけないのか？」

「じゃあ用は無いのか？」

「ある」

「あんのかよ」

お互いが軽口をたたく。俺と月読の普段通りの掛け合いだった

「その前にこれからどうだ？一杯」

「おっさんか」

――殴られた

く居酒屋

俺と月読はカウンター席に座り、注文した酒がくると月読が酒瓶を手を取った

「まあ飲め」

「サンキュ」

「何だー？この私がお酌してやってるんだ。嬉しくないのか？」

「確かに言われてみりや凄エ事だな」

「まあいいや。今日は私の奢りだからどんどん飲め！」

「月読って神って言うより気の良い部長みたいだよな」

月読にも酒をつぎ、暫く雑談した後本題に入った

「今日は隼斗に礼を言おうと思ってるな」

「礼？別に大したことはしてないけど」

「いいや。隼斗のお陰で兵士達の士気は向上し、以前より訓練にも積極的に取り組むようになった。コレだけでも大きな成果だ」

「まあ幾分かはマシになったわな」

「それに気付いているか知らんが豊姫や依姫、特に春雨はお前に心酔している。隼斗が戻った事であるの三人は以前より笑う様になったんだ」

「……」

「……なあ隼斗。ここに残る気h「駄目だ」……」

「前にも言ったろ。俺は既に過去の人間だ。今を生きるアイツらが此処を引っ張っていかなきゃ意味が無い。……だから駄目だ」

「しかし……現にこうして皆成長出来たのはお前の……」

「俺はきつかけを与えただけだ。頑張ったのはアイツらのほうだよ」

だからこそ、新たに俺からしてやる事はもう無い。後はアイツら次第だ

「……そうか。無理を言ってるすまなかった」

「いや、嬉しかったよ」

「……えっ？」

月読が思わず聞き返すと隼斗は席を立ち

「明日も早エしこの辺にしとくわ。ありがとな。それとご馳走様」

月読に礼を言ってる店を後にした

「……ありがとう、か。」

一人残った月読は自分で酒を注ぎ飲み干す

「すまん。私では引き止められなかった」

44話 地上へ

「隼斗、忘れ物は無いか？ちゃんとトイレは済ませたか？」

「お前は俺の母ちゃんか」

母親の様なセリフを吐く月詠にツツコミを入れる。

今日が約束の100年目だ

「本当に行つちやうのね、先生」

普段は天真爛漫な豊姫もこの日だけは しおらしかった

「悪いな。でも今生の別れじゃないんだ。また会いに来る」

ポンつと豊姫の頭に手を置き、そう答えた

「先生。大変お世話になりました。また何時でもいらして下さい。その時を楽しみにしてますから」

依姫が深々とお辞儀をしてから右手を差し出してきた

「此方こそな。困ったことがあったら何時でも呼んでくれ。力になるぜ」

此方も手を出し握手をした

「……」

見ると麻矢だけ黙ってしまっている

そんな麻矢を見た依姫が心配して声をかけた

「麻矢、どうしたのですか？」

すると麻矢は顔を上げた

「隊長……どうしても行ってしまうんですか？」

小さく消え入りそうな声だった

「麻矢、俺は……」

「いいんです。わかってますから。でも…何だか不安で……」

今麻矢の頭の中では人妖大戦の記憶が鮮明に思い出されていた。

飛行中のロケット内で意識が戻り、隼斗が地上に一人残って皆を逃したと聞いた時は頭が真っ白になった

——正に絶望の淵に沈んだ感覚だった

再び俯く麻矢を見て何だかこっちまでモヤモヤしてきたので、此処らで喝を入れる事にする

「スウ〜ウ、一々ナヨナヨするんじゃねエエ!!」

「!？」

急に声を張り上げた隼斗に、麻矢だけでなく綿月姉妹や月読まで目を丸くした

「麻矢ア!!」

「は、はいイイ!？」

「お前の今の立場は何だ!!」

「!……一番隊…部隊長です…!」

「そオだろオ!!お前はもう隊長なんだぞ!もう俺の下じやねエ!お前が隊を率いていかなきゃ駄目なんだよ!なのにそんなザマで良いと思ってるのか馬鹿野郎オ!!」

「す、すみません隊ちよ…あつ、いえ、その……」

至近距離で怒鳴られた麻矢は涙目になりながらアタフタしている。

豊姫は今まで見たことがない隼斗の一面に軽い放心状態で、依姫も止めようにも隼斗の剣幕に押されてこれまたアタフタしている。

……月読はニヤけているが

「……いいか麻矢」

「は、はい!!」

俺は一拍おいて麻矢の頭を掴み引き寄せ、目線を合わせる

「…俺はいなくなったりしねーし、これから先死ぬつもりもない。お前が心配してる様なちっぽけな不安なんざ さっさと取っ払っちゃまえ。いいな?」

目を真っ直ぐ見てそう言うと、麻矢もそれに答えた

「……はい!」

「……ふっ」

隼斗は納得したように笑い、背中を向けた

「よし帰ろ」

「「ええエエ…!?!」」

思わず声を揃えて驚く月読以外の3人。

……月読は笑っている

「なんだようるせーな」

自分の事は柵に上げて悪態をつく隼斗

「えっ…先生、そんなあっさり……?」

啞然とした豊姫が聞き返す

「あっさりも何も、さつきから帰るつつつてんだろ」

「いやいや、そんな『何言つてんだコイツ?』みたいな顔されましても…!?!」

「そんな顔してねーよ。これは『察しろよ』って顔だろーが」

「何を?!」

隼斗が自分のペースに引き込み、周りガツツコミを入れる、まるで漫才の様な掛け合い

麻矢が最も尊敬するいつもの隼斗だった

「……」

先程のモヤモヤが嘘の様に晴れ、不思議と心も落ち着いていた。

麻矢は改めて礼を言う為隼斗の方を見た

「隊長……ありがとうございm……」

「……でな? 宴会中に麻矢の奴酔っ払って他部隊の隊長のカツラを引っぺがしちまってよ、それを自分の頭に乗っけ……」

「ちよつとオオオ?!? 何で急に私の話になってるんですか!?!」

「クスクス、麻矢ちゃんって意外とお茶目なのね」

「麻矢……まだ酒癖悪いの治ってないんですか……?」

「うわあああああああ」

隼斗のカミングアウトに豊姫は笑い、依姫は引き気味。麻矢は頭を抱えて絶叫し、月読は笑い転げている

「……じゃあマジでそろそろ行くわ。月読」

「ん、そうだな」

月読は何事もなかったかのように立ち上がると豊姫に指示を出す

豊姫の能力は『海と山を繋ぐ程度の能力』

名前の通り、海と山の様な本来距離が離れている様な場所を瞬時に繋げることで、その場所に瞬間移動や転送する事が出来る

「先生、転送先は地上でいいかしら？」

「ああ、頼む」

「お世話になりました。お元気で」

「隊長、ありがとうございます。私これからも頑張ります」

「隼斗、我々はいつでもお前を歓迎する。此処が恋しくなったらいつでも来い」

各々が別れの挨拶を述べる中、隼斗が言ったのはたった一言

「またな」

言葉を言い終わると同時に隼斗の姿は消えた

「……行つたな」

「はい、寂しくなりますね」

「まあ私と月読様はいつでも会いに行けるけどね」

「あつ、ズルいですよ豊姫様！私も連れて行つてくださいよ！」

「お姉様、地上には危険が多いと聞きます。私がお供しましょう」

「はいはい、その時は連れてってあげるから2人してそんな迫って来ないでくれる？」

「…また来いよ、隼斗」

横で3人が騒いでる中、月読は小さく呟いた

く地上

「おっ、懐かしっ！」

一瞬で景色が変わり、100年ぶりの地上だ

「……さて、と」

隼斗は歩き出した

〜八雲家

「……」

「……」

「……ふう」

「……あの、紫様？」

「……何かしら？」

「いえ、先程から中身の入っていない湯呑みを口に運んでいるので……入れてきましようか？」

「へっ……？あ、ああっそうね……！お願いするわ！」

紫から湯呑みを受け取り台所に向かう藍

「……相当緊張しておられるな。あんなにソワソワした紫様は初めて見た」

茶葉を入れて茶菓子を器に盛りながら、そんな事を呟いた

「……今日が100年目か」

再び茶の間に戻り襖を開けるとガタツと姿勢を正す紫

「……なんだ藍かあ」

「……紫様。お気持ちはわかりますがもう少し落ち着いて下さい。約束した以上隼斗は帰って来ますから」

「そうだけど……ねえ藍、第一声はどうしたらいいと思う？」

「それ、昨日も同じ事聞いてますが」

「だっ……！！」

「……素直に謝りましょう。きっと彼なら許してくれます。私も一緒に謝りますから」

「……そ、そうね」

相変わらずソワソワしている紫と、それを慰める藍。

この場に隼斗が居たら「普通逆じゃね？」とツツコミを入れていたかもしれない

「普通逆じゃね？」

――居た

「!……は、隼斗!?!」

「いつの間に:?!?」

「よっ、久しぶり。コレ土産な」

驚く二人に対して軽く挨拶をした隼斗は、手土産の団子を卓上に置いた

「どうした?二人とも黙っちゃまって」

「……いつ帰ってきたの?」

「さっき」

「…そう」

紫が視線を向けると、藍も頷いた

「隼斗……あの時は……!」

そう言いかけた紫を隼斗が制した

「気まずい」

「えっ……?」

「この重苦しい空気とかドヨーンとした空気とか、なんて言うか……居た堪れない。帰っていい?」

「いや、良い訳無いでしょう!?!」

思わず紫がツツコミを入れる

「いや、俺としてはな?『祝!隼斗さんおかえり大宴会!!』的なもつとこう明るい展開を期待してた訳ですよ!それがどうだ?これじゃまるでお通夜じゃねーですかい?」

「お、落ち着け隼斗……口調が定まってないぞ?」

藍も興奮した隼斗を宥めようとしている

「だったらー!その!辛気臭え顔をなんとかしろー!!」

「いひゃいッいひゃいィィ!?!」

隼斗は紫の頬を掴み上に下にグニグニ抓った

「ゆ、紫様!?!」

「お前もじゃー!?!」

「むぎゅっ!?!」

止めようと近づいてきた藍の両頬を片手で掴み、紫も同じ様に掴み直す。

「……………」

「……………」

……タコみたいだ

「ぶっ、だっははははははー!?!なんだその顔ww」

「……………」

その後、二人がブチ切れたのは言うまでもない。哀れ、隼斗は二人のマジの妖力弾を至近距離で喰らい、家から締め出された

「反省なさい」

「そこで頭を冷やせ」

ピシヤツと戸が閉められ、両者から冷たい一言を貰い、地面の上に転がる隼斗

「はあ、床つめてえ…」

まっ、少なくとも場の空気は軽くなったろうし結果オーライだな
「もういいや。このまま寝よ」

地面の上に寝そべり寝息を立てる隼斗

・
・
・

次の日、中々家に入って来ない隼斗を心配した二人が外に出てみると未だ倒れたままの隼斗が!?! (当人は寝てるだけ)

仕置きとは言えやり過ぎたか!?!と大慌てする二人を他所に呑気に欠伸をしながら起きる隼斗

「あ、おはよ」

早朝から妖力弾が飛び交った

幻想郷 過去篇

45話 幻想郷巡り 人里 ①

俺が月から帰ってきてきて2日が経った。

そろそろ長かった旅を終えて幻想郷に住居を設けようと思う

「なあ紫、自分の家を建てたいんだけど使っているいい土地とかある？」

「何言ってるのよ。此処が貴方の家でしょ？」

「グスッお、お母さん……！」

「誰がお母さんよ！」

涙交じりのボケに紫がツツコミを入れる。

うむ、今日も幻想郷は平和だ

「大体家を建てたいなんて急にどうしたのよ？」

「別に急になって訳じゃないけど。いいか？マイホームを持つのは男の夢なんだよ。土地選びから始めて、物件探しとか楽しいだろうが」

「よくわからないわね」

「でも建てるにしたって今すぐじゃ無理だろう？大工にアテはあるのか？」

「丁度茶を持ってきた藍も話に加わる

「いいよ、自分で建てるから」

「隼斗が？…驚いたな、過去に家を建てたことあるのか？」

「いや全然？」

「……やめといたら？休日には小屋作ろうと張り切ったは良いけど、最終的に歪な形のナニカを作ってしまった時のお父さんみたいになるわよ？」

「失敬だな、此れでもガキの時粘土で作った『僕の動物園』では優秀賞を飾った程だぞ？」

「知らないわよ。何よそのほのぼのエピソード」

「それよりどうなんだよ。良いのか？それとも宜しいのか？」

「どっちも同じじゃない……はあ、良いわよ。好きにしなさい」

「おつ、マジで…!？」

「ただし住居が決まったらちゃんと報告するのと、偶には顔出しなさい。いいわね？」

「勿論だぜお婆ちゃん」

「…あ？今なんつった？」

額に青筋を立てて持っていた日傘の柄を握りつぶす紫。

うーむ、背後に修羅が見える

「…まあまあ紫様。ところで何処に住むかは決めているのか？」

「いやまだだ。適当に幻想郷をぶらついた後適当な場所見つけて適当に住むつもりだからな」

「いや、せめて場所くらいは真面目に探せ」

「わーつてるよ。で、紫」

「……」

あつ、そうだった

「……麗しの紫お姉さん（棒）」

「何かしら？」

……何だコイツ

「最初に人里行ってから色々回るつもりなんだけどその他の土地には何があるんだ？」

これはちゃんと聞いとかないとな。

また迷ったら洒落にならん

すると紫はスキマを開き中から何かを取り出した

「はいコレ。今わかってるだけの幻想郷の地図よ」

「へえ、そんなのあるんだな」

どれどれ…つと

ほお、意外に広い………んん？

「なあ、この妖怪の山つて…」

「ええ。以前貴方が訪れたあの山よ」

「そっか、なら一回顔出しに行くかな」

「あつ、でも此処から人里までは遠いわね。スキマで送ってあげましょうか？」

「いいのか？じゃあ頼む」

隼斗は地図をしまい立ち上がると出掛ける支度をする。

と言っても隼斗は基本手ぶらなので上衣を羽織っただけだが

「もう行くのか？」

「ああ、思い立ったが吉日って言うだろ？」

「いつてらっしゃい。家が建ったら遊びに行くわ」

「おう、茶菓子くらいは出してやるよ。んじゃあお二人さん、世話になっただな」

一言そう言って紫の開いたスキマを通って人里に向かった

――

「結構賑わってんなー」

スキマを抜けると木造平屋建ての家が建ち並び、多くの人間で賑わっている場所に出た。

幻想郷では唯一妖怪の脅威から逃れられる人間の生活の場、其れがここ人間の里だ

店もそこそこあり、藍も時々買い出しに来てるらしい

「さて、先ずは団子屋だな」

紫の家に向かう前にも寄った団子屋。

持ち帰る前に店内でお召し上がりして来たが、中々美味い

「団子3本くれ」

「はいよー」

店の外にある長椅子に腰掛けると、早速団子が運ばれてきた

「うん、やっぱり美味しいな」

此処の常連になろうかな。だとしたら人里の近くを候補に入れてもいいか

などと考えながら道行く人々を眺めていると、ある女性が目にとまった

青色のワンピースの様な服装で頭には学者の様なヘンテコな帽子を被っており、青みがかった銀髪の髪をしている女性

八百屋で買物する為か手には買物籠の様な物を持っている

「おばさん、こんにちわ」

「あら慧音ちゃん、いらっしやい」

「慧音…?」

やっぱりか。道理で見覚えがあると思った。

昔と違つて少女からすっかり大人の女性へと変わつていた為一瞬わからなかった

俺は早々に団子を突っ込むと、代金を払つて団子屋を出た。

そのまま慧音のところまで歩いて行き、声をかけた

「久しぶりだな。慧音」

「えっ?」

声をかけると慧音は大根を片手に持ちながら振り向いた

「……………あつ」

俺の顔を見た瞬間小さく声を漏らし、持っていた大根が手からスルリと落ちた

「おっと」

でも地面に落ちる直前でキャッチしたので品質上問題ありません

「ほれ大根落ちたぞ?」

「えっ…!?は、隼斗さん!?!どうして此処に!!?」

大根を手渡すと驚きの声を上げる慧音

「どうしてつて、俺も最近幻想郷に来てな。幻想郷を見て回る為に先ずは人里に寄つたんだよ。そしたら偶々慧音を見つけてさ」

「そうなんですか…?でも、本当にお久しぶりです隼斗さん!」

「だな。暫く見ねー間に大きくなつちまつて、最初誰かわからなかったぞ?」

「そー言う隼斗さんはあまり変わっていませんね?」

「俺はこれ以上デカくなる必要ねーからな」

「ふふ、そうですね」

「買い物か？」

「はい、夕飯の材料を買いに。良かったら隼斗さんもどうですか？私の家この近くなんですが」

「いやなんか悪いしいいよ」

「そんな事ありませんよ、それに話したい事もありますし」

「そうか？ならお邪魔してもいいか？」

「はい！歓迎しますよ」

「へえー寺子屋の教師か」

「まだまだ新米ですが」

「いやいや大したもんだ。凄いじゃないか慧音」

慧音の家でご馳走になりながら今慧音は何をしているか聞いたところ、人里にある寺子屋で子供達に勉強を教えているらしい

「そう言えば隼斗さん、幻想郷を回ってるって言ってましたが」

「ああ。実は自分の家を建てようと思ってな。その下見も兼ねてるんだ」

「では人里に？」

「いや、候補には入れてるんだけどまだ他を見てないからな」

「そうですか…」

少し残念そうにする慧音

コンコンツ

つと、ここで戸を叩く音が聞こえてきた

「ん？誰か来たみたいだぞ？」

「ああ、アレは多分…」

慧音が戸をノックした人物を言おうとした瞬間、戸が開け放たれた音がする

「慧音ー約束通り来たぞー」

同時に聞こえてきたのは口調が男勝りな女の声。

「ー気のせいかな？どつかで聞いたことある様な？」

「来たか。居間にいるから上がってきてくれー!」

慧音が玄関にいるであろう人物に自分の居場所を叫ぶ。

時に慧音よ…お主そんな中性的な喋り方口調だったかね? 地味に驚いたんだけど

するとドタドタと足音が近づいてきて居間の襖が開かれた

「おつす慧音、玄関に見慣れない履物があったけど誰か来て……………る
…?」

そこまで言って固まった

「!?」

俺も言葉を失った

腰まで届く長い髪に大きなリボン。紅の袴には幾つかお札の様な物が貼ってある

「……そして白い髪

「……妹紅」

「……師匠?」

46話 幻想郷巡り 人里編②

「…妹紅」

「……師匠？」

目の前に立っていたのは100年程前に紫に預け、一方的に別れたっきりの藤原妹紅だった

予想していなかった展開に隼斗は言葉が出ず、ただ一言妹紅の名を呼んだ

妹紅も同様に目を丸くしている

「なんだ妹紅、隼斗さんと知り合いだったのか？」

二人の反応を見た慧音が妹紅に質問する

「いや…知り合いつて言うか……えっ、ホントに師匠……？」

「あ、ああ」

ヤバい……何て声掛けたらいいかわかんね

いや……色々言う前にまずやる事がある……！

「でもどうして「悪かった！」うわっ」

妹紅のセリフに割り込んでの鮮やかなモーションで土下座に移行する隼斗

「ちよ、ちよつと隼斗さん!？」

突然知人に土下座をかます隼斗に驚きの声を上げる慧音

「妹紅、あの時俺は自分の勝手な事情でお前を置いて旅に出た。長年一緒に旅をしてきたお前を裏切る様な真似を俺は……」

そこまで言つて今度は妹紅が口を開いた

「頭上げてよ、師匠」

その声色に怒りや憎しみといった感情は込められていなかった

「あの後八雲紫から聞いたよ。どうして師匠が私の前から消えたのか、その理由をね」

「……紫が？」

意外にフオロー入れてくれたのか。今度差し入れ持つてこ

「妹紅は恨んでないのか？俺の事」

「まっさか、私を救ってくれた大恩人を恨むはずないじゃない」

当然の様に笑い飛ばす妹紅。

何だか逆に此方が肩透かしをくらった気分だ

「あの、そろそろ話に入ってもいいか？」

さつきから話に着いて来れなくなっていた慧音が咳払いをしながら聞いてきた

「ああ、悪い悪い。とりあえず座って話そうぜ。妹紅も入ってこいよ」

「じゃあ久々に師匠の隣に座ろつと」

「ははっ、三人が円になって座るんだからどの道隣になるだろう？」

それからは慧音に俺と妹紅の関係について説明した後、妹紅が幻想郷に来てからの今までの経緯を聞いた。

あの後妹紅は人里近くに送られ、倒れているところを慧音に助けられたそうだ。

つまり二人は100年来の親友という事になる

「でも師匠100年間も何処にいたんだ？」

「月」

「は？」

「ちよいと野暮用で月に行ってたんだよ」

「月って……餅でもついていたの？」

「いや、勤務にはついてたな」

「？」

うん、別に上手いこと言えてない

「さて、そろそろ帰るかな」

「えっ、もう帰るんですか？ てつきり泊まっていくなのだと…」

帰ろうと腰を上げた隼斗を慧音が引き止め、妹紅もそれに続く

「そうだよ、私も泊まるつもりで来たし折角久々に会ったんだからもつとゆっくりしてればいいじゃん」

いや尚更マズイだろそれ

「そうは言ってもな」

「それにもう日も暮れています。隼斗さんなら問題ないかも知れませんが、この時間帯は妖怪が活発になるので危険です」

「此処も襲われたりしてんのか？」

「はい、滅多にない事ですが。でもその時は私や妹紅が対処しているのでそれ程酷い被害は出ていません」

「まっ、私の敵じゃないけどな」

自信満々に胸を張る妹紅を尻目に隼斗は人里を襲う妖怪の存在に疑問を抱いていた

共存を目的とした幻想郷内で外の世界と同じ事が起きている。つまり、幻想郷の掟を受け入れていない輩も存在するというのか…

ドンドンドンッ

突然玄関の戸が激しく叩かれた。

外からは男の声が聞こえる

「慧音さん居ないか!? 慧音さん!!」

何やら切羽詰まった様子で慧音を呼んでいる。

俺たちは顔を見合わせると玄関へと向かった

「どうしたんですか?」

慧音が戸を開けると息を切らした里の男数名がいた。

男達は慧音の顔を見ると鬼気迫った表情で口を開いた

「よ、妖怪…妖怪が出たんだ!! 今里の東側が襲われてる!」

「何だって…!?!」

「しかも一匹や二匹じゃない、確認しただけでも十匹以上いて俺たちの手には負えないんだ!」

「慧音…!」

「わかってる! 妹紅は私と来てくれ。……すみませんが途中まで案内を頼めますか?」

「わ、わかりました」

「……俺も手伝おうか?」

現場へ向かおうとする慧音に声を掛けるも、慧音は首を横に振った
「いえ、里の問題に隼斗さんを巻き込む訳にはいきません。ここは私達に任せて待っていてください」

そう言っって妹紅と共に駆けていった

「……まっ、ある意味正しい判断かもな」

慧音達が向かった方向とは反対の方角に視線を向けながら一言呟く隼斗

――

「ふう、これで全部か」

「案外大したこと無かったな」

里に襲撃してきた妖怪の群れは慧音と妹紅により打ち倒されていた。

飽くまで撃退なので倒された妖怪はどれも死んでおらず、地面に倒れ伏している

「此れに懲りたら二度と里を襲撃しようなんて思わない事だ」

慧音が警告の意味を込めて近くの一匹に言うと、その妖怪は口角を吊り上げて笑った

妹紅がその反応に眉を顰めた

「…何が可笑しいんだ？」

「ひひっ、まさか……こんなにも上手いくとはな」

不敵に笑う妖怪を前に胸騒ぎを覚える二人

「上手く？何を言っているんだ、お前達の襲撃はこうして……!!？」

そこまで言い掛けてある可能性が脳裏をよぎった

「まさか……!!」

「ひひひ」

「慧音、どういう事？」

まだ事情が掴めない妹紅が慧音に質問する

「…単刀直入に答えろ。お前達の襲撃は……」

「ああ、 囧さ」

「!!」

この返答で妹紅も気付いた

この妖怪達は飽くまで自分達を引きつけるための囧役。本命は別にいる

「ひひっ、今頃里の西側からどんどん雪崩れ込んでるだろうなあ。もう向かってても手遅れだぜ？なんせ俺たちの5倍はいる。お前達が最初に目にするのは変わり果てた人g…ごぼあ!？」

妖怪はセリフを最後まで言うことはなく妹紅に蹴り飛ばされた

「下衆が……!!」

「西側って事は此処と真反対だ…！妹紅！すぐに戻るぞ!!」

「ああ!!」

行きの時とは違い一気に人里西部まで全力で飛翔する二人。どんな規模の妖怪がいるかわからないが、余力を考えてる場合じゃない。一刻も早く到着しなければ里の皆が殺されてしまう

「頼む…！間に合ってくれ…!!」

「!……見えてきた!!」

里の上空を突っ切り、ものの数分で到着した。

だが辺りは妖怪どころか襲撃を受けた形跡すらない

怪訝に思った二人は里の外まで出て、驚愕の光景を目の当たりにした

「これは…!？」

そこには先程の妖怪が言っていたように、ザツと見ても50体はいるであろう妖怪の群れがいた。そこらの雑魚なら兎も角、ある程度力の強い妖怪にこの数で攻めて来られたら、幾ら慧音や妹紅と言えど簡単には退けられないだろう

だが妖怪達が里を襲うことはなかった

何故なら………

「……」

——妖怪達は全て倒され、纏めて山積みになっていたからだ

その山の前で気怠そうに立つ隼斗によって

「おう、其方も終わったみてーだな」

「し、師匠……いつの間に？」

妹紅が尋ねると妖怪達を顎で指しながら答えた

「二人が出て行った後、妙な気配を感じてな。念の為里の周囲を探知してみたらこいつらが釣れた訳だ」

隼斗は自身の霊力を波に変えて周囲へ拡散、そして拡げた波を再び自身へ戻す事で、波が通過した場所に潜んでいた妖怪達を捕捉していた

「此れを一人で……？」

「こんなもん数の内に入らん。朝飯前だ」

慧音はまんまと妖怪の策略にかけられてしまった自分を責めていたが、隼斗が最も簡単に解決してしまった為、それも取り越し苦労に終わった

「うしつ、帰ろうぜ」

呑気に欠伸をしながらスタスタと歩いて行ってしまいう隼斗に、ワントンポ遅れて続く二人

「取り敢えず大事にならなくて良かったな」

「そうだな。隼斗さん、ありがとうございます」

「ん？……ああ」

「どうかしましたか？」

「いや………何でもない」

この時隼斗は他の事に意識を向けていた

妖怪による人里の襲撃………

何かきな臭いな

47話 幻想郷巡り 永遠亭 ①

人里から南西に位置する場所に迷いの竹林と言われる場所がある。濃い霧が林内部を覆い、竹も急速に成長している為、すぐに景色が変わり目印にするものも無い

故に迷いの竹林

そんな場所を隼斗は歩いていった。

理由は此処の奥に永遠亭がある為、人里を出た後地図を頼りに此処まで来たというわけだ

「あれー？此処さっき通ったか？」

まあ案の定迷って立ち往生している訳ですハイ…

何度も同じ所をぐるぐる回り、一向に前に進めてる感じがしない為、一層の事竹を全部吹っ飛ばそうかマジで考えた時だった

隼斗の足に何かワイヤーの様なもの引掛かり、何処からともなく何本もの竹槍が飛んできた

「…よつと、トラップか？」

飛来する竹槍を難なく躲し、改めて辺りを見渡してみると至る所に同じ様な仕掛けが張り巡らされていた。寧ろよく今まで引掛からなかったなと思える程だ

「……その、出て来い」

同時に藪の方から僅かだが気配を感じ取り声を飛ばした。

しかし応答は無い

「……縛道の四 『這縄』」

「うわっ!？」

藪に向かって霊子の縄を飛ばし、気配の主を引き摺り出した

「く、くそー！油断した」

「何だお前?..」

出てきたのは兎耳にワンピースの子供、基妖獣だった

「どうしてわかったの…?」

「上手く気配は消してたみたいだけどな。俺からすりやまだまだ甘

い」

「ぐぬぬ……」

余程自身があつたのか、はたまた人間に駄目出しをくらつたのが納得いかないのかは知らないが、悔しそうに歯をギリギリしている

「で？見てたつて事はこの罨仕掛けたのお前だよな？」

「な、なんの事かわからないね〜」

隼斗はあからさまに目を逸らして口笛を吹き誤魔化そうと必死の兎娘を上から掴み上げ、ジタバタ暴れる兎娘を無視して目線の高さまで持つてきた

「わっ…!?降ろせ！」

「…お前此処の地理詳しいか？」

「当然…！此処は私の庭みたいなものだからね」

「その状態で威張んな。なら丁度いい、案内してくれ」

すると兎娘はニヤリと笑い

「待てよ人間。「案内して下さい」だろ？ちゃんと敬語を使えよお前」
「！」

「私の助けが必要なんだろう？しっかり頭を下げてお願いしなよ」

……………何だコイツ、急に豹変しやがって。

しかも頭下げろだア？

「……………土下座でいいか？」

「そうそう。上下関係をはつきりさせておかないとね」

「……………わかった。じゃあ、いくぞ？」

「……………ん？」

俺は兎娘の襟から手を離し今度は両腕を掴んだ

「はい！土下座アア！！」

「なんっ…ぶう!!」

「はい土下座アア!!」

「ぶぐうっ!?!」

隼斗は兎娘の両腕を掴んだまま勢いをつけて姿勢を低くした。

その為兎娘は地面に叩きつけられる形になる。
ビターン、ビターンと間抜けな効果音がなり兎娘の小さな悲鳴が聞こえる

「これで関係ははつきりした筈だ。早く案内しろ」

「はい。い、嫌だなあ冗談ですよ」

今度こそ観念したのか素直に応じる兎娘

「うう……鼻が痛い」

「心配するな。此れから行くところで診てもらえる」

「……くう、今に見てろ……!」

兎娘は密かに復讐を誓い、永遠亭までの道のりでワザと罨の所に誘導するも、落とし穴では地面が抜ける前に回避され、竹槍は先程と同様に躲され、決め手の竹のしなりを利用した鞭も素手で受け止められた

「……お前ワザと罨にかけてないか?」

「ま、まさか(……掛かってないじゃん)」

――

案内通りに進み、暫く歩いていると永遠亭が見えてきた

「やっと着いたな。ご苦労さん」

「……ねえ、此処に何の用?」

「別に特別用がある訳じゃないが親友に会いに来た」

「ふーん」

兎娘は素っ気なく相槌を打った

「そーいや名前聞いてなかったな」

「因幡 てる、好きに呼んでいいよ。アンタは?」

「終 隼斗。てるは此処に住んでる連中を知ってるのか?」

「まあね。なんせ契約相手だし」

「契約?」

「そ。部下の兎達に知恵を付けて貰う代わりに、人間をこの場所に近づけないようにするって条件でね」

「でも俺を通しちまったな」

「うん、だからどう言い訳しようか考えてんの」

態とらしく頭を悩ませてるとこ悪いが、もし俺を追い返しちまったら多分永琳がキレルぞ?」

「まあ良いんじゃないやね?逆に俺を追い返して無くて」

「そうなの?ならイヤ。先入ってるね」

「あん?お前も此処に住んでんのか?」

「うん。部下共々ね」

そう言っつてそそくさと中に入っつていった

「忙しい奴だな」

俺も後に続き玄関の扉を開けると丁度永琳が部屋から出てきた所だった

「よお」

「隼斗…!久しぶりね。いつこつちに来たの?」

「ちよつと前にな。こつちに住む事になって何処に家を建てようか幻想郷を見て回ってるんだ」

「そうなの?だったらウチに来ればいいのに」

「折角だけど俺はマイホームを持ちたいんでな」

「あら残念。お茶を用意するから居間で待ってて。姫も呼んでくるから少し話しましよ」

「ああ、悪いな。お邪魔しますよつと」

……②へ続く

48話 幻想郷巡り 永遠亭 ②

「へえーあのてゐるが気配に気付かれるなんて。流石ね隼斗」

「いや、実際巧妙に隠れてはいたけどな」

先日妖怪を探知した時にも使った技だが、此れならば俺の霊力に触れた瞬間居場所が特定出来るから近場に潜んでいると一発でわかる

「てゐはいないのか？俺より先に入って行つたのに」

「あの子は神出鬼没なのよ。私でもいつ現れていつ消えてるかわからないもの」

「罨仕掛けたり色々忙しい奴だな」

「うくん……」

輝夜が眠そうに目を擦っている

「どうした輝夜、寝不足か？」

「うん……ちよつと夜更しし過ぎちゃつたわ」

「もう、だから言つたのに。姫、ゲームも良いですけど程々にしないと」

何だ夜通しゲームしてただけかよ。

つてか何でこの時代にゲームが……つて月から持つてきたのか。

……いやいや、そもそも電気とかきてんの此処？

「相変わらずゲームばっかしてんのか？偶には外出て体動かさねーと身体に悪いぞ？」

「大丈夫よ。週に何回かは運動してるから」

「ほお、どんな事やってるんだ？」

「殺し合い」

「何やってんだよ」

即座にツツコミを入れるが取り敢えず聞くとしよう

「だつて父親の仇だとかで毎回喧嘩吹っかけてくるんだもの」

ん？父親の仇……どつかで聞いたな

「でもソイツと毎回会つてるなら殺し合いつてのはい過ぎだろ。輝夜は兎も角死んじまつたら喧嘩出来ねーんだし」

「言ってなかった？相手も不老不死よ」

「……は？」

不老不死……父親……輝夜に恨み……

チツチツチツ……チーン

「……それ妹紅じゃね？」

「あらよくわかったわね、正解よ」

あー、そういや言ってたわ…輝夜に求婚した親父が恥をかかされた
だどうだって。

しまったなー、その辺も含めて説明しとくの忘れてた

「輝夜？妹紅は…」

「知ってるわ。最初に会った時間いたもの。彼女も此れが逆恨みだっ
てわかってるみたいだったし。唯このままじゃ納得出来なかったん
じゃないかしら」

あれ？だったら話し合えばまだ仲直りする見込みあったんじゃ…

「まあ、そんな事知った事じゃない。貴方の父親が勝手に自爆しただ
けでしょって言っちゃったけどね」

「お前何言ってるのオオ!？」

「それからと言うもの何かにつけて喧嘩吹っかけてくるのよね。やん
なっちやうわ」

「いや当たりめエだろ!!」

そんな二人の会話を黙って聞いている永琳。

会話も弾み、日が丁度真上に来た頃

「あらもうこんな時間ね。そろそろ寝てまたゲームの続きしなきゃ」

「生活リズム無茶苦茶じゃねーか」

「いいからいいから。じゃあ隼斗、またね」

「程々になー」

ヒラヒラと手を振って自室に戻っていく輝夜。すると輝夜が部屋
に入るのを見計らった永琳が先程の話題について話した

「ねえ隼斗。姫がさつき言ってた話だけど…」

「ん？話って？」

「ほら、妹紅さんの話になったでしょ？父親がどうこうって」

そこまで聞いて永琳が何を言いたいのか理解した

「ああ、そゆことね。心配するな、アレが本心じゃない事くらいわかってるさ。多分妹紅の奴もな」

「えっ、そうなの?」

「大方妹紅を氣遣つての事だろ。逆恨みとわかっていながらも、その事だけを思つて今日まで生きてきた妹紅が生きる意味を見失わない為にな」

「そう……なら良かったわ。ありがとう隼斗」

「どういたしまして」

「ぶっ、『いたしまして』でしょ?」

「そうとも言う」

カグヤアアア!!キョウコソハ カクゴオ!!

チョット!コレカラ ネルトコナンダカラ クウキ ヨミナサイ

ヨ!!

「噂をすれば何とやら。可愛い弟子のご到着だ」

「あら。だったら貴方も混ざってきたら?」

「おっ、それ面白そうだな。よっしゃ!」

勢いよく立ち上がり外に出て行く隼斗を微笑ましく見送る永琳

ウラアアア!オレモマゼロイイ!!

ワツ!?シシヨウ!?

チョット ハヤト!サスガニ アナタハ シヤレニ ナラナイワ

ヨ!?

「ふふ、まるで子供とはしゃぐお父さんね」

49話 幻想郷巡り 太陽の畑

迷いの竹林より南に位置する草原。

此処には数多くの花々が咲き誇り、特に夏には一面に立派な向日葵畑が咲く事から『太陽の畑』と呼ばれている

此処を管理しているのは花の妖怪、四季のフラワーマスターの異名を持つ風見幽香だ

幽香とは以前からの知り合いで半年ほど一緒に暮らしてた時期もあった

向日葵畑を抜け、奥の方に進んでいくと幽香が此方に背を向けて花に水やりをしているのが見えた

「……」

実は此処に来るまでに気配を消してきた。

理由は不意に現れて幽香を脅かしてやろうと考えたから

「~~~~♪」

鼻歌混じりに水やりをしている幽香の背後に抜き足差し足で忍び寄り後三步の位置に差し掛かった時だった

「……ッー」

「うおっ!?!」

突如幽香が物凄い勢いで振り向き、同時に日傘で一閃。上体を逸らして回避はしたが日傘は鼻先数センチ上を風切り音と共に通過した

「チツ……!外したわ」

「待て待て……!俺だ、隼斗だ!」

「!」
早くも次の攻撃に移ろうとした幽香に何とか自分の名前を告げると、再び振るわれた日傘が首筋手前で止まった

「……………久しぶりね、隼斗」

「お久しぶりでござーます」

幽香は日傘を突き付けたままニコやかに続けた

「ところで、何故気配を絶って近付いてきたのかしら?」

「いや、まあ……………ちよいと脅かしてやろうかなーと」

「あらそう♪」

すると漸く日傘を降ろしてくれた

「つつーか振り向きざまに日傘振るうなよ。俺じゃなかったら頭吹っ飛んでたぞ」

先程の攻撃に対して異議を申し立てるが、幽香は特に悪びれる様子はない

「気配を絶って私にあそこ迄近づけるのは今まで会った中じや貴方位しかないわ」

「じゃあわかっててやったのかよ…」

「人聞きが悪いわね。急に背後から気配を消して近付かれたから反射的に身体が動いてしまっただけ」

「成る程、お前は風見13だったのか」

「何訳わからない事言ってるのよ。それよりも私の家に行きましよう。久々に話もしたいし」

「用件を聞こう…つてか？」

ボスッ

「さっ、行くわよ」

「……はい」

――

「相変わらず小綺麗だな、幽香の家は」

「淑女として当然よ」

「お、おう」

「…何よ」

「アレだろ？幽香はサイヤ人の中でも淑じよぼおっ!？」

「いい加減にしないと殴るわよ？」

「…それは殴る前に言うセリフだ」

そのまま席で待つてるように言われ、暫くして紅茶とクッキーが運ばれてきた

「なんか悪いな、いきなり押し掛けたみたいになっちまって」

「へえー貴方でもそんな事思うのね」

「そこまで不躰じゃねーよ」

幽香も席に着き優雅なティータイムが始まった。幽香は振舞いから雰囲気までこの空間に合っているが、どうにも俺の場違い感がハンパない。いつもの俺のティータイムは寝転がって煎餅を齧り茶を啜るスタイルだから尚更だ

「此処へはいつ来たの？」

「その質問されたのこれで3回目なんだけど」

「だから？」

「……わかったよ。ほんの数日前だ。ついでに何をしているかも先に答えとくぞ？ 幻想郷の視察がてら住居を何処に設けるか下見してんだ」

「あら、だったらウチに……」

同居を申し出てくれた幽香だが、俺は首を横に振った

「ありがたい申し出だけど遠慮しとくよ。いや実際嬉しいんだけどな？ やっぱり男としては誰かに厄介になるのは気がひけるっつーか……まあ俺の意地だな」

「ふーん。面倒なものね」

「そう言うもんさ、男はな」

暫く談笑した後徐に幽香が席を立ち、隼斗の横にきた

「ん、何だ？」

「ね、久しぶりにヤらない？」

「はっ？」

「はあ!!」

「つと…!」

ムフフな事だと思ったか? 残念! 組手でした!!

幽香の振るう拳、蹴り、日傘を的確に躲していく隼斗。

威力は申し分ないが、如何せんスピードが足りず、先程から打ち込みは空を切るばかり

「この…当たりなさい!!」

「ふはははっ! 掠りもせんわー!!」

「マスタースパーク!!」

痺れを切らした幽香が至近距離でマスパを撃った。

隼斗はこれを軽く横に跳んで回避。放たれたマスパは遥か遠くに見える『妖怪の山』の一部を撃ち抜き、地平線の彼方へ消えた

「惜しかったな」

「……どこがよ」

幽香は不機嫌そうに剥れる

「そう怒んなって。火力は十分なんだ。後は動きに一工夫入れれば完璧だぞ?」

「……何よ一工夫って」

「ほれ、お前スピード無いじゃん?」

「うっ…」

グサツと幽香の胸に突き刺さる言葉だった

「……そんなにハッキリ言わなくてもいいじゃない」

おっ、幽香にしては珍しい涙目頂きました……は置いといて
「んな顔するなよ。大丈夫、改善策はある」

「?」

「例えばこんなのだ」

刹那、隼斗の姿がブレた

然程スピードの無い動きで幽香に接近するが不思議な事に目の前の隼斗からは気配を感じず、歩を進める足からは足音が聞こえない。更にはその独特の歩法の為か残像すら見える。

「こっちだ」

「!？」

気がつくとも隼斗は幽香の背後を取っており、幽香の手元から日傘が消え、隼斗の手に握られていた。

「いつの間に…!？」

「別に高速で動いた訳じゃないぞ？これは暗歩の応用だ」

「…暗歩？」

暗歩とは暗殺者が使う無音の歩法技術の事。

一切音を生じさせない＋気配を絶つ事で、ターゲットに勘付かれずに接近できる。

隼斗がやったのはその応用であり、動きに緩急をつけて残像を見せ、敵を翻弄させる。

「更に気配を感じ取れないって事は次にどんな攻撃が来るか予測し辛くなる。マスタースパークみたいな大技は撃てないが攻撃はずっと当てやすくなるんだ」

「成る程、歩法に一工夫ね……じゃあやり方を教えて」

「慌てんな。コレをやるにはまず暗歩を完璧にマスターする必要がある。取り敢えずはそっからだな」

「わかったわ。この歩法の名前は何て言うのかしら？」

「名前？まあ使い手によってそれぞれ違うけど、俺は肢曲って呼んでる」

「肢曲？いまいちパツとしないわね。他には？」

別に名前なんてどうでも良いと思うけど……

幽香って形から入るタイプなんかね

「そうだな……じゃあ桜舞は？」

「決まりね。私は桜舞を習得してみせるわ」

「……お前やっぱ凄エわ」

「あらそろう?」

教え始めてからたったの3時間で暗歩を習得し、その一時間後には独自の方法で肢曲まで習得した幽香に素直な感想を述べる隼斗

幽香は能力を使い周囲に花の香りを散布し、此方の勘を鈍らせる事でより効果的に死角を突いてきた

「ふう、危うく一発貫うとこだつ……あ痛エエっ!?!」

更には自身の分身を生み出し其れに敢えて気配を残す事で相手の意識を自分から外す手法まで使ってきたのだからビックリ仰天。初見では流石に対応しきれず一発貫ってしまった

「ふふっ、漸く貴方に届いたわ。あースッキリした」

幽香は日傘をフルスイングした姿勢のままほくそ笑んでいる

「にやろっ……!油断したとは言えあんな大振りで当てやがって!もう

一回勝負だ!!」

「望むところよ!!」

幽香との激闘は日が暮れるまで続いた

50話 幻想郷巡り 妖怪の山

幽香との激闘(組手)を終え、結局その日は幽香の家に泊めてもらった。

今俺が歩いてるのは人里から見て太陽の畑の真反対にある妖怪の山。此処には天狗の長である天魔の彩芽や鬼の勇儀、萃香がいる筈だ
「取り敢えず先ずは彩芽のところに挨拶に行こうかね」

向かうは天魔の家がある頂上。

進路を決め再び歩き出そうとした時だった

「その人間、止まれ」

突如凜とした声が聞こえ、視線を上げると上空から犬耳のついた白毛の天狗が見下ろしていた。手にはやや太めの剣と紅葉の描かれた盾を装備している

「此処は我ら天狗の縄張りだ。他所者を入れるわけにはいかない」

ん？前にもこんな展開あったな。あの時のクソ生意気な天狗とは違うみたいだけど

「他所者って……俺一応天魔と友達なんだけども……」

「天魔様と……嘘を言うな。そんな訳がないだろう」

やはりと言うか何と言うか……相変わらず融通が効かないところは変わってない

「今すぐ立ち去るならこのまま見逃そう。怪我をしないうちに帰れ」

おつ、でもいきなり排除するとか言わない辺りこの天狗は良心的だ
あの時もこう言う感じだった俺も大人しくしてたのになあ

「じゃあさ、天魔に確認取ってみてくれよ。柊隼斗が来たって言えば通じるから。それまで俺はこれ以上進まないし、必要なら出直すからさ」

「柊 隼斗？何処かで聞いたことがあるような……？」

俺の名前を聞いた白狼天狗は暫く考え込んだ後目の前に着地した

「幾つか確認したい。天魔様の御芳名は？」

「陽高 彩芽」

「先程隼斗と言ったがそれを証明する手立ては？」

「さつきも言ったじゃん。彩芽に聞けって」

「悪いが素性がハッキリするまでお前から目を離す訳にはいかない。それ以外では？」

「じゃあ俺を拘束するなりして天魔のどこまで連行してけば？」

「…何？」

「……」

山の頂上に向けて山道を歩く白狼天狗と隼斗。

白狼天狗の手には荒縄が握られており後方を歩く隼斗に伸びている

「いや、確かに拘束しろとは言ったけども……なんで簀巻き？」

簀は足首辺りまでしっかり巻かれているため隼斗に出来る歩法は精々ヒヨコヒヨコ歩きか両足跳び位しかない。

それを前から引つ張られている為此処に来る迄にも何度かツンのめり顔面ダイブを決めている

「人間とはいえ方が一のことがあったては困るからな。暫く我慢して歩け」

「いや超歩き辛いんだけど……」

結局隼斗の文句も聞き入れてもらえず相変わらずのペンギン歩きで頂上へと向かっていると、頭上から声がかかった

「あややくそこに居るのは椀と……誰？」

見上げると、背中から黒い羽を生やし、頭に山伏風の赤い帽子を被った天狗がいた

「……文さん、何か用ですか？今侵入者を連行しているところなんです」

「連行？侵入者は山に入れない掟の筈でしょ？」

「この人間、天魔様の友人だと言うんですよ」

「はあ？」

文と呼ばれた天狗は、呆れながら隼斗に視線を向けた

「……とてもそうは見えないけど」

「だから連行という形で天魔様に確認を取りに行くんです」

「ちよ、天魔様のトコ連れてく気なの!？」

「仕方ないじゃないですか！確かに信憑性は薄いですけど、万が一の事があつては大変でしょう!？」

何やら口論が始まった。

……会って早々仲悪いなコイツら

「なあ、行くならさっさとしてくれよ。いつまでもこんな格好御免だ」

「大体文さんは担当区域が違うでしょう!!此処は私の管轄なんですから口出ししないで下さい!!」

「アンタこそ！先輩の意見には耳を傾けなさい!!」

聞いちゃいねーし

「……しゃーねー、先行こつと」

ギャーギャー騒がしい二人を置いて一人頂上を目指す隼斗

・
・
・

「……でな？俺そつちのけで喧嘩しだしちまってよ、一人で来ちまった」

「な、成る程……それはすまんかったな、隼斗」

あの後特に他の天狗と出くわすこともなく彩芽のいる頂上に到着。

彩芽は最初簀巻きのまま現れた隼斗をみて持っていた湯呑みを落と
とした

「兎に角その拘束を解こう。こつちに来てくれ」

「ああ、大丈夫大丈夫……よつと」

隼斗は軽く力を入れて簀巻を強引に解いた

「な、なんじゃ……自力で解けたのか」

「まあな。一応信用してもらおう為に縛られてたけどその必要も無くなつたし」

「お主意外と律儀なんじゃな」

「失敬だな。俺はいつでも誠実な好青年だぞ？」

「どこがよー！つと天の声が聞こえた様な気がしたが気のせいだろう
「まあ上がってくれ、茶でも出そう」

彩芽に促され後に続こうとした時だった

「待てエエ！侵入者アア!!」

叫びながら此方に猛スピードで向かってきたのは先程まで喧嘩していた白狼天狗と黒天狗だった

「なんだやつと来たのか。勝敗はついたか？」

「はあ…はあ…そんな事より何故勝手に動いた！しかも拘束まで
……!!」

「全く、櫂が噛み付いてくるから面倒な事になったじゃない！」

若干息を切らしている白狼天狗に対して、余裕の表情の黒天狗

「一応声掛けたろ、先行くぞって」

「ええい！やはり人間は信用できない！直ぐに追い出して…!!」

「やめんか二人共」

「ここで彩芽が止めに入った

「て、天魔様…!?!」

「犬走、それに射命丸。この人間は私の友人じゃ。無礼は許さんぞ
!?!」

「えっ…！ホントだったの!?!」

彩芽から直接友人である事を明言された二人の天狗は目を丸くして驚いた

「まあまあ、誤解は解けたしいいんじゃねーの？いきなり来た俺も悪いしや」

「むう…お主がそう言うならば」

「じゃあ仲直りしようぜ。俺は終 隼斗ってんだ。お前たちは？」

「あやく何だか申し訳ないですね…：：：ゴホンツ 鴉天狗の射命丸 文
です。先程は失礼しました、よろしくお願いします」

射命丸 文と名乗った天狗は初めの頃と打って変わって礼儀正し

くなつた。

隣の白狼天狗の方も何だか申し訳なさそうに犬耳が垂れている

「……犬走 椀です。先程はとんだご無礼を……申し訳ありませんでした」

「ああ気にすんな気にすんな。さつきも言つたけど突然お邪魔した俺も悪かつたんだ。寧ろ任務を全うしようとした犬走に非はねーって」
頭を下げて謝罪する犬走に対して隼斗がフォローを入れた

それにしても犬走は真面目だな。射命丸くらい軽くてもいいのに。
依姫タイプだなこの娘。射命丸は豊姫タイプか？

「和解は済んだようじゃな。ならばお茶にしよう」

――

彩芽の家にながらせてもらい俺の持ってきた差し入れの饅頭をツマむ面々。

何故か文と椀も一緒だ（苗字だと長いので下の名前を呼ぶことにした）

「えっ！あの鬼と戦つた事あるんですか!？」

「ああ。流石に強かつたよ」

「人間が鬼を……これはネタに使える！隼斗さん、是非！詳しくお話を聞かせてください！」

「別にいいけど……何か記者みたいだな」

「文さんは主に報道が担当ですからね。一度喰いつくとしつこいですよ」

……それから小一時間は質問攻めだった

「ではこれで終わりです。ありがとうございます！」

「はあーこんな喋つたの久々だ」

流石に喉が渴いたので茶を啜りながら彩芽にある事を訪ねた

「そーいやさ、勇儀達は元気にしてんのか？さつきから気配を感じなくしてよ」

文と質疑応答している時にチョロつと山の気配を探ってみたが、勇儀達の気配を感じ取れなかった

「……鬼はおらん。山から出て行ってしまった」

「!?……何で?」

彩芽は一拍置いて話し始める

「鬼が勝負事が好きなのは知っているな? 数百年前より鬼達は人里から人間を攫っては勝負を仕掛けておったのじや。初めは成すすべが無かった人間もやがて對抗勢力が出来上がり始め、あらゆる手段を使って鬼を退治しだした。その多くが鬼達の嫌う卑劣なものだったと言う」

「…それで山を?」

「ああ。今となってはどこにいる事やら」

正々堂々を好む鬼にとつて人間のとつた手段が許せなかったのか

……

でも鬼と人間の力量差を考えれば偏に人間が悪いとは言えないか

「そうか……そりや残念だなー」

隼斗は茶を啜りながら、あの日鬼達と飲んだ酒の味を思い出ししていた

51話 柎 隼斗の楽しい木造建築

「ふん、ふん〜っ」と♪」

鼻歌を歌いながら木材、基丸太をいくつも運ぶ。なるべく大きさは同じものを揃え余分な枝等をカットしていく

見ての通り家造りだ

造るのはログハウス。簡易的なものなら丸太を組むだけで造れるが、折角のマイホームだ。色々工法にも拘ろうと思う

結局幻想郷を見て回ったけど、イマイチ此処だ！って場所が見つからず、人里の東にある森の中に決めた。此処なら材料にも困らなそうだしな

「よし、丸太はこんなモンでいいだろ。さて組み立てますかな」

手元にある工具は鑿のみ……洒落ではない、偶々である。

切るのは手刀、杭は拳骨で打てる。基本的に俺は道具を使わなくてもいいから楽だ

鑿で溝を掘りながら丸太を組む地道な作業、でも此れがまた楽しい

作業を開始してから半日足らずで概成した

外装は二階建てのログハウス。

内装は一階が吹き抜けになっていて、二階と繋がっている。部屋と部屋には特に隔てる壁を作らず一つの空間に全て揃っている、正に家全体が一つの部屋の様な感じだ（ただし風呂とかは別）

居間と台所は一階。寝室は二階に造る予定だけど、客間も造るべきだろうか？

……めんどいからイヤ

「家具とかどうしようかな……木で造るか？……それくらい買っていくか」

人里近くに家を構えただけあって買い物が楽だ。

近くて便利、セブン○レブン いい気分♪

結局この日は家造りに1日費やした為特に知り合いと会う事は無かったけど、明日には紫のところに報告に行こうと思います??

あれ、作文？

……前にも言ったな

――

隼斗が住居を構えた森、又は人里から大凡北東の方角に紫の家はある。

森を抜け、ひたすら続く獣道を進んでいると、何やら騒がしい

「何だ？獣同士が喧嘩でもしてんのか？」

獣道の脇にある茂みの奥から獣と思わしき気配と唸り声が聞こえた

微量ながら感じる妖力

「……一応見に行くか」

茂みを掻き分けて進んでいくと、一匹の化け猫に対して三匹の妖獣（何れも山で見かけるような獣）が攻撃していた

「――…キャッ!?ウウ…」

他の三匹と比べ、化け猫の方は人間の子供の様な見た目だ

既に化け猫の方は戦意喪失しており身体を庇うように蹲っている

「……」

・
・
・
・

「隼斗が此処を出て一週間。そろそろ場所に目星を付けた頃でしょうか」

「案外とつくに決めて、建築に取り掛かってるんじゃないかしら？彼って案外適当だから」

「まあ、確かに……」

強ち間違っていない指摘に一緒に肯定してしまう藍

「まあどうせ素人に家なんて建てられるわけないし、その内諦めて戻ってくるんじゃない？」

「オイ、ユカリー ラアアアアン！イルカー？」

玄関先から隼斗の声

「あら、噂をすれば」

「何だか私の呼び方だけ違和感が……？」

藍が戸を開けると、其処にはまだ見た目幼い少女を抱えた隼斗が立っていた

「……隼斗、お前そんな趣味が……？」

「シバくぞ」

一瞬隼斗の性癖を疑う藍だが、よく見るとその少女には猫の様な耳と二股に分かれた尻尾が付いており、なにより疲弊している事に気付いた

「……兎に角中に入れ。布団の用意もしよう」

「ああ頼む」

「……それで？あの娘はどうしたのよ？」

少女を寝室に寝かせた藍が居間に戻ってくると、早速紫から質問された

「此処に来る途中で他の連中から袋叩きにされてるのを見かけてさ、ほっとくのもアレだし助けて来た」

「あんな小さな子を寄ってたかって甚振るとは……！許せん奴らだ！」

尾を逆立たせ怒りを露わにする藍を一先ず宥める

「落ち着け藍、その連中は俺が叩きのめしといた」

「……う、うむ。……あの娘に怪我が無いようだったが、隼斗が？」

「一応治療術はかけといた」

「そうか……良かった」

ホツと息を吐く藍。案外子供好きなんかね

すると頬杖を付いていた紫が思い出したかの様に口を開いた

「そう言えば隼斗が本来此処に来た目的は何だったの？」

その問いに俺もハツと思いつく

「ああ、そうだった。家がさ、完成したんだよ。その報告にな」

「へっ?……も、もう?」

紫は掌に乗っけていた頬をカクンと落としながら驚き、間抜けな声を出した

「言つたら?俺はガキの頃から手先の器用さには自信があるのだ」

「いや、たった数日で家建てるって器用とかの問題じゃないでしょ!」

「驚いたな……てつきり諦めて帰ってきたのだとばかり思っていたぞ」

「ふん、俺のモットーは有言実行だからな!」

「あんまり思いつきで話さない方がいいわよ?」

「ほっとけ!」

この後暫く談笑し、俺は気になっていた疑問を紫にぶつけてみた

「なあ紫、此処に住んでる妖怪の事んだけどさ、最近ヤケに多くないか?この前も日本じゃ見た事ない妖怪とかいたし」

「あー、その事ね」

対して紫は特に疑問視する様子もなく、寧ろ原因を知っているようだった

「その通りよ隼斗。最近という程じゃないけど確かに妖怪の数は増えているわ」

「……って言うത്?」

「私が外の世界から引き入れたのよ」

「お前かい」

ビシッとチョップをいれた

「きゃんっ!?な、何すんのよ!」

「お前な、増やすなら増やすでちゃんとそいつらに説明しとけよ。この前だって人里が襲撃されて（慧音達が）大変だったんだぞ?」

「そ、それは悪かったけど……説明しても聞かない連中が多くて困ってるのよ」

「隼斗、あまり紫様を責めないでくれ。此れも私達を思つての事なんだ」

「?」

俺が説明を求めると藍に次いで紫も話し出した

「実はお前が月に行つてゐる間に外の世界では人間の勢力が増大していったんだ。文明もどんどん進み、徐々に妖怪達とのバランスも崩れ始めた」

「それを防ぐ為に私は結界を張つたわ。『幻と実体の境界』をね」

「幻……幻想郷の事か?」

「ええ。幻を幻想郷、実体を外の世界と定める事で勢力の薄れてきた妖怪を此方に引き込む事が出来るわけ。それが異国の妖怪だろうと例外なくね」

「成る程な。いよいよ幻想らしくなってきたわけだ」

だとしたら今後も妖怪達は増え続ける。

まだ大した被害が出てゐるわけじゃないが、なんとか対策とらねーと

「まだ課題が山積みだな」

「そうね、でも乗り越えて見せるわよ」

「私も及ばずながら助力します」

改めて気を引き締めたところで、懐から手土産を取り出す

「紫」

「なーに?」

「ありがとな。妹紅の事」

「あら、隼斗がお礼なんて珍しいわね。明日は雪でも降るんじゃないかしら」

「よし土産の茶菓子はやらん」

「あーん冗談よ冗談」

「まあまあ」

二人の掛け合いに藍が微笑みながら宥める。
そんな日常。

偶には平和も悪くない

因みに俺が助けた化け猫は藍が自身の式にしたいと言っていた。
式の式なんて可笑しな話だが、これでもう他の奴に襲われはしないだ
ろう。でめたし、でめたし

番外編 幻想郷縁起

く幻想郷縁起く

人里にある『稗田家』の当主が代々記す、妖怪、又は幻想郷の記録や啓蒙を目的とした書物である

一般的には妖怪についての実態や出会ってしまった時の対策について書かれており、人間が妖怪を過剰に恐れたり、無闇に手を出したりしないようにと活用方は様々

まあ何故冒頭から幻想郷縁起について説明したかと言うとだ……

「本日はよろしくお願いします」

「ああ」

俺がその幻想郷縁起に載る事になったからだ

くちよつと前

「お婆ちゃん、いつもの」

「ハイよー」

時は昼時、場所は人里。

私こと終 隼斗は週に何度か人里を訪れてはこうして甘味処で茶菓子を食べている。

特別甘党とかではないが、趣味みたいなものかな。

甘いモン食べた後の茶が美味いんだコレが

「あれ、隼斗さん？」

「ん？おう、お前らも来たのか」

隣から声が掛かり、顔を向けると慧音と妹紅が丁度席についたところだった

「意外だなー、師匠も甘味処来るんだ」

「そうか？昔から割と来てるぞ」

「でも丁度良かった。実は隼斗さんを訪ねようとしていたんですよ」
「俺を？」

「隼斗さん幻想郷縁起つてご存知ですか？」

「えーと、確か妖怪とか幻想郷について詳しく書いてあるヤツだな」

「はい。著者は稗田家現当主の稗田 阿弥。私の知り合いなんです
が、彼女が一度隼斗さんに会ってみたいと言っていたんです」

「つまりその稗田 阿弥つて子に会ってくれないかって事？」

「……お願いできますか？」

「イイよ、どうせ暇だし」

で、慧音に詳しい場所聞いて稗田家を訪れた…と。成り行きは大体
こんな感じ

「まさか御本人に会えるだなんて思ってたんですけど。光栄です！」

阿弥は瞳をキラキラ輝かせながらそう言うが、そこまでとは思えな
いな

「光栄は言い過ぎじゃないか？俺なんか別に大した奴じゃねーぞ」

「とんでもない！幻想郷の賢者の御友人にして生命の恩人。過去には
妖怪の山で鬼と殴り合い、最強と謳われた陰陽師・安倍泰親を打ち倒
し、さらには嘗ての人妖大戦でたった一人で妖怪に立ち向かった英雄
じゃないですか!!つい先日にも妖怪の襲撃から人里を守っていただ
いとか!!」

やや興奮気味に自身の功績を挙げる阿弥を一先ず落ち着かせた。

寧ろここまで詳しいと怖いんだけど

「わかったわかったって。ってか誰から聞いたんだよ」

「紫さんや慧音さん、他にも色々な方から聞きました」

「マジで？」

紫とも知り合いなのかよ。この娘意外と顔広いな

「隼斗さんは英雄伝の章に記述させていただきますね」

「妖怪の欄でもいいぞ」

「では早速始めましょう！」

……スルー

【幻想郷縁起】

◎英雄伝

↳ 柎 隼斗↳

種族 『人間』

能力 『超人になる程度の能力』

二つ名 『超人』『人妖大戦の英雄』『ハゲマント』

主な活動場所 『魔法の森（住居）』『人里（甘味処）』

好きな食べ物 『団子』

人間・妖怪友好度 『高』

↳ 能力↳

◎『超人になる程度の能力』

人知を超えた、その名の通り超人的な身体能力を發揮する。拳の一撃は風圧だけで強大な衝撃波を巻き起こし、巨大な岩盤を遙か上空まで放り投げる程。また圧倒的な頑強さを誇り、大抵の物理攻撃は効果がない。

五感も鋭く、視力は山の麓から山頂にある家の表札を読める程。更にはあらゆる毒や病原体にも耐性を持ち、生物が住めないような過酷な環境にも耐えられる

追記

◎『靈術を扱う程度の能力』

攻撃を目的とした《破道》、防御・束縛等を行う《縛道》に分かれる靈術を扱う能力であり、定められた詠唱、術名を口にする事で発動する。各術の一つ一つに番号が存在し、数字が大きい術程扱いが難しく強力である。

又、傷の治癒に使用する《回道》もある

↳ 容姿↳

短めの黒髪を後ろに流しており瞳の色は茶。筋骨隆々の体格・背丈もある（本人曰く、背は約六尺・体重は約二十貫）格好は肌着の上に濃い藍色の羽織を羽織っている

く人物像く

軽口、楽観的で自由奔放。

人をおちよくるのが趣味

意外にも面倒見がよく悪態をつきながらも誰かを助けることがしばしば

基本的に誰に対しても友好的にいこうとするが、やられたらやり返す精神で、攻撃を加えてきた相手には容赦しない為、唯一してはいけない事を挙げるならば、彼を敵にまわさない事

「出来ました！」

「……人物像の前半がなんか引つかかるけどまあいいや」

この際内容が若干pixiv風だとか、二つ名にハゲマントが入っているのもツッコまない方がいいんだろうな

後から聞いた話だが、二つ名の一部や人物像は紫情報らしい

52話 博麗

俺が幻想郷に家を構えてから凡そ300年。

外の世界では既に明治時代に入り、人間の文明も発展していつてい
る。

だがそれと同時に妖怪と言う存在、更には霊術や妖術と言った非科
学的なものは迷信とされ、徐々に世の中から消えていつている

そろそろ『幻と実体の境界』効果も追いつかなくなり始めてるし、新
たに手を打たないといけない

そんなある日の事。俺がいつもの様に朝起きて、顔を洗い、適当に
作った朝食を食べようと席に着いた瞬間だった。

唐突に浮遊感に襲われ、次の瞬間には外の景色へと変わり、椅子に
座り損ねた俺は手に持っていた味噌汁入りの椀を頭から被っていた。

何を言っているのか（ry

まー要するに突如開いたスキマに落とされて、外に放り出されたわ
けだ

「はあーい、隼斗。ご機嫌いか……が？」

すると後ろからスキマを開いた張本人である紫が陽気な感じで挨拶
してきた

「……」

「あは、あははは……大丈夫？お、お食事中だったかしら？」

俺は無言で立ち上がり顔や頭に着いた味噌汁を拭いながら踵を返
した

「待って待ってえ!!ごめんなさい!謝るからせめて何か言って!!無言
で立ち去ろうとしないで!?!」

「放セ潰スゾ」

「ひいっ!?!」

「まったく！朝っぱらから何しやがんだオメーは」

「ほ、本当にごめんなさい。悪気は無かったのよ?」

割とガチ謝りしてくる紫をこれ以上怒る気にはなれず、一先ず本来の目的を聞く事にした

「……で?何の用だよ」

「そうそう、外の世界で起こってる問題を解決する方法を思いついたのよ」

「マジで?どんな方法だよ」

「それにあたっては中で改めて話すわ。貴方に紹介したい娘もいるし」

「中?」

そう言えば此処はどの辺なのか聞いてなかった。

辺りを見渡すと前方には森、振り返れば簡素な造りの神社が建っていた

「此処は幻想郷の東の端にある場所。名は博麗神社よ」

神社って……いつの間に建てたのやら

「で、会わせたい娘ってのは?」

「中にいると思うから行きましょう」

神社に向かって歩き出す紫に俺も続く。

向かいに見える森、よく見りや俺の家がある森じゃん。

地名としては魔法の森なんて呼ばれてる。幻想郷で森と言ったらこの場所だが、何故か森内部は瘴気の様なものに充滿していて、人間の体には毒なんだと。

俺は能力の恩恵で平気だったから、紫に改めて言われるまで気づかなかった

話が逸れたが、自宅からそう離れていない場所に神社が建っていたなんて気が付かなかったな

鳥居を潜り、神社内部に入ると、一人の少女が境内を箒で掃いていた。

見た目12、3歳の少女は此処の巫女だろう。紅白の巫女服を着

ている

「あれ、紫さんお早うございます。それと……そちらの方は？」

此方の存在に気付いた巫女が挨拶をしてきた

「隼斗、この娘は博麗 鏡花。貴方に合わせたかった人よ。鏡花、挨拶しなさい」

鏡花と呼ばれた少女は此方に駆け寄り深々とお辞儀をした後自己紹介を始めた

「初めまして、博麗 鏡花です。この神社の巫女をやらせて頂いてます」

「俺は終 隼斗、コレの友人だ。よろしくな鏡花」

「ちよつとコレって何よ！」

「味噌汁」

「ぐぬぬっ……！」

悔しがってる紫は置いといて、鏡花と握手を交わし、いよいよ本題に入る

「コホンッ。さて、自己紹介も終わった所で本題に入るわね？隼斗、貴方にはこの娘に霊力の扱い方を教えて貰いたいのよ」

「はあ？いきなり何言ってるんだよ」

「まあ聞きなさいな。これからの幻想郷を変えていく為に必要な事なのよ」

「必要な事？」

「貴方も知ってるの通り、外の世界では妖怪と言った所謂非科学的な事情は姿を消し始めている。何れは此処にも影響が出てくるわ。だから新たな手段として幻想郷に大規模な結界を張ろうと思うの」

結界……って事は外とこつちを遮断しちまうって事か？随分思い切った事を考えたな

「でも結界を張った位で解決するもんなのか？」

「勿論唯の結界じゃないわ。此処と外の世界の常識を分ける結界よ」

常識を分ける……ってどゆこと？

流石にピンと来ない

「えーと、つまり？」

「外の常識を此方の非常識に、此方の常識を外では非常識に置き換える事よ。そうする事で外の世界で存在の消えた妖怪や物が幻想郷に辿り着くと言うわけ」

まだ頭の中を???が駆け巡ってる俺は独自の解釈を口にしてみた

「要は『幻と実体の境界』の強化版って事?」

「……ちよつと違うけど、まあそんな感じよ」

「それで俺が鏡花に霊力の扱いを教える理由は?」

別に教える事自体は全然構わない。問題はその目的だ。紫の口振りからして単に護身の為だけではなさそうだからな

「結界を張るなら、それを管理する役職が必要になってくるわ。私は幻想郷の賢者としてその事だけに構っていられない。だからその管理者として『博麗の巫女』と、この『博麗神社』を造ったわけ」

「でもそれを人間である鏡花にやらせるってのは些か荷が重くないか?」

「前提として巫女は人間でなければ務まらない。それに彼女は私が選んだ才能を秘めた人間よ。それだけでも『唯の人間』じゃないわ」

「……鏡花、お前はどう思ってる?」

「は、はい?」

ここで先程から紫との会話を黙って聞いていた鏡花に尋ねた

「もし紫が無理を言っていて、お前が本当はやりたくないのであれば俺が紫を説得してやる。ハッキリ言って危険も伴うだろうからな」

だが鏡花から返ってきた言葉は意外なものだった

「心配して下さってありがとうございます。でも私は自分が巫女に選ばれた事が嫌だなんて思っていません。寧ろ私でもお役に立てるなら喜んでお力になる所存です」

鏡花のあまりに献身的な姿勢に違和感を感じ、紫に耳打ちして尋ねた

「……紫」

「……なあに?」

「お前と会う前の鏡花がどうしていたか知ってるか?」

「……孤児よ」

「……」

「……やっぱりか」

「これが決め手となった」

「はあ…わかった、引き受けよう」

「ありがとう隼斗。貴方ならそう言ってくれれば信じてたわ」

「調子いい事言いやがって全く……」

「紫の和かスマイルを尻目に鏡花に向き直る隼斗」

「やるからには生半可な事はしねーぞ？いいいな？」

「はい！お願い致します!!」

53話 舞い降りた龍神

鏡花と出会って数年。先日鏡花は16歳になり、晴れて博麗の巫女となった。

霊力の扱い方を一通り教えたが、飲み込みが大変早く、メキメキと力を付けあつという間に一人前だ

そして今日は遂に幻想郷を覆う大規模な結界、『博麗大結界』を張る日

直接術式を展開するのは紫と鏡花。藍と俺は力を流し込み結界を安定させる役目だ

「いよいよね。皆準備はいいかしら」

「いつでも大丈夫です！」

「此方はお任せ下さい」

「気張っていこうぜー(棒)」

「皆さん頑張ってください!!」

上から紫・鏡花・藍・俺の順でそれぞれの意気込みを口にする

因みに最後にエールを送ってきたのは、前に俺が助けて以降藍の式神となった化け猫。名前は『橙』という。

式神になってからは人間の子供程度の智慧を有し、よく紫達と行動を共にしている

「鏡花、私に合わせなさい。いくわよ……」

「はー」

横に並んだ紫と鏡花を中心に術式が組み上がり、幻想郷の上空からドーム状に結界が広がっていく。

そして幻想郷全体に結界が展開されたところで、俺と藍が力を流し込み安定をさせつつ結界の歪みや綻びを修正していく

「これは……思ったよりキツいな」

「そんだけ大掛かりな作業って事だろ」

結界が完成するまでの間絶えず力を流さなければならぬ為、補助といっても楽な仕事じゃない

「もう少ししょー!」

紫の掛け声と同時に結界が徐々に安定していくのがわかった。

後はこの状態を維持するだけだ

・
・
・

「ふう……皆お疲れ様」

「っ、疲れた〜」

「そうか? まだ1時間も経ってねーじゃん」

「流石にお前と一緒にするのは酷だと思っぞ?」

意外にも早く博麗大結界は完成したが、皆疲労の色が見える。だが同時に達成感もあった

「これで外界と此処は遮断されたんだよな?」

「ええ。簡単に幻想郷への出入りは出来なくなっただわ」

「はー、いよいよ幻想って感じがしてきたな」

「鏡花、此れからは貴方が博麗の巫女として此処を護っていくのよ」

「はい、任せて下さい!」

ーーーこうして『幻想郷』は『外の世界』から結界により隔離された土地となった

そんな記念すべき瞬間に皆は心なしか口数が多くなる

「記念にこの後宴会でも開きましょうか」

「あつ、それイイですね!」

紫の提案に鏡花が食い付く

「藍様、私お魚が食べたいです!」

「よしよし、今日は私も腕を振おうじゃないか」

橙の要求に藍も張り切っている

「……」

——隼斗だけ

隼斗だけが空を見上げたまま……いや、正確には睨みつけたまま動かない

「隼斗?..どうかしたの……?..」

怪訝に思いながら紫が尋ねるが隼斗は依然虚空を睨んでいる。

額には一筋の汗が伝う

「ちよつと隼斗……どうしたのよ!」

流石に不穩に思ったのか強めの口調で隼斗を呼ぶ紫。鏡花や藍・橙もその声に気付き隼斗を見た

「おい、隼斗……?..」

「隼斗様?..」

藍と橙は異常とも取れる隼斗の様子に困惑している

鏡花と紫は何か勘づき隼斗と同様に空を見上げた

「「……!?!」」

空には何も無い。

何も居ない。

それなのに其処には間違いなく『ナニか』がいた

——異変が起こったのはそれとほぼ同時

雲の切れ間から突如激しい白光。

光の柱が隼斗達に向けて射出された

「ツツツ!!..全員伏せろオオ!!..」

光は隼斗達の立っていた場所をピンポイントで呑み込み、閃光と共に

に炸裂した

「ハア、ハア……」

砂塵が晴れ、謎の光の着弾点から現れたのはボロボロの隼斗と、先の衝撃で意識を失った鏡花と紫・藍・橙だった

隼斗達の目の前に展開されている防壁『断空』はその強度を保てず崩れ落ちた

「……咄嗟だったとは言え、八十番台の破道で削ったのにコレか」
光が直撃する瞬間、隼斗は高火力を誇る破道『飛竜撃賊震天雷砲』を光に向け放ち、同時に『断空』で防ごうとした。

だがそれでも光の威力を殺しきれず防壁越しだったとは言え、多大なダメージを受けてしまった

「ふう……取り敢えずコイツらは無事か」

最も痛手を被ったのは隼斗だけで後ろで倒れている4名の怪我自体は大した事はない

隼斗は紫達の安否を確認すると、再び上空を睨みつけ、思いっきり跳んだ

向かうは光が飛んできた雲の切れ間。

一足跳びでは足りず、途中霊力で足場を造っては跳躍を繰り返した空に近づくにつれて段々と強まる気配

その力の質は神力

「見つけたぞ」

霊力で足場を造り着地する。

雲を突っ切った所にそいつは居た

一見すると鹿の様な角を生やし、真紅の髪と瞳。首からは宝玉を下げている女

「おや、てっきり死んだと思っていたが……生きていたか」

「お陰様でな。随分上等な事してくれたじゃねエか」

「……ほう？」

女は紅く輝く瞳を隼斗に向け、薄ら笑いを浮かべる

「私相手に大層な口を聞くとは大した度胸だな、人間」

「生憎と神には詳しくないんだ。ぶっ飛ばす前に名前くらい聞いてやるから言ってみな」

「ふっははははは！ 熟々面白い人間だ。いいだろう、お前たちの様に個々を区別する名前は無いが、私が何者であるか位は教えてやる」

「どちらも軽口を叩き、会話だけ見ればお互い冗談を交えた愉快的掛け合いに聞こえるかもしれない」

「……ここまで殺伐とした空気であれば」

「私は『龍神』。この世界を統べる者だ」

「龍神……」

龍神って言えば世界の創造神、創造と破壊を司る神だとか呼ばれる神だ。

それが何故幻想郷に……

「……龍神様よ、俺が聞きたい事は一つだ。何故あんな事をした？」

「先程の挨拶の事か？ なに、私の世界を奪った者たちがどれ程のものか試してみただけだ」

……奪った。

それはつまり元々世界の一部であった幻想郷に結界を張り、隔離した事を言ってるのか……

「そうかよ」

成る程、相手が龍神なら確かに文句を言われても仕方がないかもしれないな。

昔から言うだろ？ 勝手に人様の物を取ってはいけませんって

「そりゃ悪かったな」

だがこうも教わらなかったらどうか？

「……誰かを傷つけてはいけませんって」

「……解放」

俺の中を今迄に無い怒りが支配していた

54話 VS 龍神 目覚めた狂気

依姫と戦闘時にも使った解放状態。

自身の霊力を貯める器を犠牲に全盛期の力を取り戻す禁じ手。

制限時間があり、発動中は霊力の類が一切使えない為、霊力で形成していた足場は消失。

だがそんなもの空中を蹴って進めば大した問題はない

「！」

龍神まで一瞬で詰め寄り拳で下から突き上げるが、龍神はいとも容易く受け止めた

「…………ふふ、惜しかったな」

「余裕こいてんじゃねエよ」

受け止められた拳に更に力を込め、振り抜く事で龍神を大きく吹き飛ばす。

龍神は直ぐに体勢を戻したが追撃として放たれた拳の衝撃波が既に目前まで迫っていた

「これも惜しい」

軽く指を鳴らすと同時に龍神の目の前に風の防壁が展開され衝撃波は飛散した

「そら、お返しだ」

龍神が目の前の空間を手で払う様な動作をすると、何も無い空間から竜巻が発生。

隼斗に向けて真っ直ぐ放たれた

「ふっー」

迫る竜巻に対して身体を大きく捻っての回し蹴りを行い空間の破裂する音と共に竜巻が掻き消された

「出鱈目な力だな」

「お前が言うな」

両者笑い合い、次の攻撃に移る。

龍神は指を曲げ爪を立てるように構えると、指先から風を纏った巨大な4本の鉤爪を形成。それを横薙ぎに振るうが隼斗は空中で身を

捻り爪の間を潜って躲すと、そのまま突進して龍神の首筋を貫手で狙った

「……正直驚いてるよ。ある程度力を持った妖怪ならいざ知らず、人間であるお前が私に傷を付けるとは」

「俺もこの状態で血を流したのは2度目だ」

龍神の首筋には貫手を躲した際の擦り傷、同様に隼斗も鉤爪を躲しきれず脇腹を掠めていた

「それと間合いを詰めてきた相手に対して油断し過ぎだ馬鹿」

「なんっ……がっ!？」

隼斗の繰り出した『発勁』により吐血しながら吹き飛ぶ龍神

「……痛み分けだな」

「!？」

龍神が隼斗のいた場所から『離れた』瞬間、それまで不可視にしていたのか突如白光の球体が複数現れ、隼斗を包み込むように大爆発を起こした

直様爆発範囲から逃れる隼斗だが、追尾してきた龍神に足を掴まれる

「ビリビリっとな♪」

バチチチチツツ!!

凄まじい閃光が迸り、零距离で雷撃を食らう隼斗

「ぐっ……!」

「……これも耐えるか」

再び距離を離れた龍神がそう呟く

「……マズいな、コイツ予想以上に強い……」

この状態もそう長く続かない。一気に畳み掛けねエと……!!

「ツツ!」

「なっ!？」

未だ雷撃を受けた身体から煙を上げながらも、急速に間合いを詰めてきた隼斗に一瞬驚いた龍神が僅かに体を強張らせた

「おおおおオオオ!!」

顛顛・顎・首・肩・心臓・鳩尾・脇腹……

急所や神経の集中している部分に連撃を叩き込んでいく

「がっ……ああ!?!」

——何でもいい。兎に角コイツを止めねエと……!!

そして龍神が衝撃で後方に仰け反ったのを見計らい拳を固める隼

斗

「これで終わりだ……!」

空気が弾け、音速を超えた速度で打ち出された拳が、『文字通り』龍神に突き刺さった。

力無く崩れる龍神に最早宙に浮かぶ力も残されていないかった

「……悪く思うな」

「ああ、気にするな」

「!?!」

声は背後から聞こえた

「しっかし容赦が無いなお前は。一応私も女だぞ?」

其処には何事も無かったかのように龍神が浮いていた。

未だ隼斗の手元には腹を貫かれた龍神『だったもの』がいる

「どういう事だ……これは!」

「なんだ、珍しく動揺するじゃないか。……分身だよ。驚く程のものでも無いだろう?」

やれやれと言った感じで種明かしをする龍神。

珍しく動揺していると言った指摘ものを射ていた

普段の隼斗なら相手が分身か否か、更には戦いの最中に入れ替わる瞬間を見逃しはしないだろう。

だが今回は相手の力量が『解放状態』の隼斗と互角に渡り合う強敵であり、尚且つ時間が迫っている。

更には相手の能力も未知数。

こうした幾つもの要因が隼斗に焦りを生じさせていた

「私の力はあらゆる現象を起こす事が出来る。光を爆発物に変えたり身体能力を向上させてお前と打ち合う事も容易い」

ガシツと腕を何かに掴まれた。

視線を腕に向けると今し方倒した龍神の分身がニタリと笑いながら腕にしがみ付いていた

「……勿論、分身を爆弾にすることも出来る」

「!!」

分身は白光に包まれ爆発した

「クソっ……」

片腕を焼かれながらも何とか爆炎から抜け出し、龍神に向かっていく

「……残念だよ」

「!?」

しまっ……

『時間切れ』

身体から力が抜け、反動からか激しい頭痛が襲い意識が薄れる。

龍神まで後一步届かず、逆に頭を鷲掴みにされた

「てめエ……」

「頭が高いぞ人間」

そのまま急降下し、隼斗は地上に叩きつけられた

「がふっ……!?!」

凄まじい衝撃が身体全体を襲い、口からは血反吐が溢れ出た。

既に龍神の手を退かそうとしている腕にも力が入らない

「どうやらこれ迄だな。まあ、この龍神相手にあそこ迄戦えたんだ。

あの世で自慢出来るぞ、良かったな」

トドメと言わんばかりに隼斗を持ち上げ、貫手をつくる龍神

「さようなら、柊 隼斗」

……畜生

ドクンツ

「!？」

——この瞬間、隼斗から発する力の質に変化が現れた

「……」

「これは……妖力……」

人間である筈の隼斗から感じる妖力。

それは並大抵の妖怪では出すことの出来ない禍々しい妖気を孕んでいた

やがて隼斗の体から黒い邪気が溢れ始め、龍神の腕を掴んでいた手に桁違いの力が加わる

メキメキツ

「ぐっ……!」

「……」

思わず掴んでいた手を離し後方へ下がった龍神は驚愕した

「貴様……!」

隼斗の身体からはハッキリ視認できる程の邪気が溢れ、瞳からは生気が感じられず瞳孔が無くなっていた

「……」

意識があるかさえも定かではない状態で確かにそこに立ち、龍神と対峙している

「漸く出てきたな……『西行妖』!!」

.....
T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

55話 龍神VS西行妖

龍神と対峙する者

外見は柊隼斗。

しかし中身は全く別の存在となっている

『西行妖』

嘗て周囲の者を死へ誘い、次第に莫大な量の妖気を溜め込み妖怪桜と呼ばれた桜の木。

幻想郷の賢者である八雲 紫を始め、柊 隼斗・魂魄 妖忌の奮闘の末に封印された『筈だった』

「貴様は完全に封印された訳ではなかった。その人間の身体に力の一部を潜伏させる事で長年力を溜めていた」

隼斗が過去に安倍泰親や依姫、龍神との戦いで感じていた殺意や狂気は、内に潜む西行妖の影響だった

「常人なら何もせずとも肉体・精神共に衰弱していき終いには死に至る。だが貴様の宿主は能力の恩恵により弱る事はなかった。尤も月では一部能力が抑えられていたようだがな」

当然乗っ取る前に宿主が死んでしまえば一体化している西行妖も消滅してしまう。だから待っていた。宿主が弱る瞬間を。

そしてついに龍神との戦いで覚醒してしまったのだった

「私が此処に来た本当の目的を教えてやろうか？」

既に臨戦体制をとっている龍神がその言葉に殺意をのせる

「貴様を消す為だよ、西行妖!!」

「……!」

龍神の怒号に反応して西行妖が手を前に翳した

強大な妖力が蓄積されていき、赤黒い球体を形成、龍神に向け一気に解き放った

「…醜い」

赤黒い閃光を横に跳んで躲す龍神。

斜め上に放たれたソレは大気を揺るがしながら空の彼方へ消えて

いった

「……」

「妖風情が誰を睨んでいる?」

龍神を中心に炎・水・雷・白光の弾幕が配置され、西行妖に向けて打ち出された

「……」

弾幕の範囲外へ逃れようと駆け出すが龍神が更に範囲を広げる
ヒュンツ

そして弾幕の一部が当たる瞬間、突如西行妖の姿が消失した

「何っ……がっ!?!」

背中に衝撃。

西行妖は弾幕の一部が自信に重なり死角となった瞬間、高速で背後に移動していた。

龍神が後ろから妖力弾で撃たれたのだと気づいた時には視界一面を埋め尽くす程の弾幕が放たれていた

「舐めるな!」

振り向きざまに『風の鉤爪』で一閃。目の前の弾幕を掻き消した

「!」

「……」

攻撃直後の一瞬の隙を狙い、一気に距離を詰めた西行妖が龍神の鉤爪を模った様な『妖力の鉤爪』を振るう動作に入っていた

「コイツっ……!」

咄嗟に龍神も爪を合わせるが、出遅れた分後方に押しつけられてしまふ

「……」

西行妖が妖力を込めると、両の爪の色が変化し赤から青に。更には当初2・3メートル程だった爪も5倍近くに巨大化した

「さっきの弾幕といい、鉤爪といい。コイツ一度見ただけで私の技を……」

「……」

そして容赦なく振り下ろされた8本の爪を回避する為に地を蹴る

龍神だが、爪は西行妖の僅かな手首の動きだけでその方向を変え襲いかかる

だが龍神に焦る様子はない

「……詰めが甘い」

次の瞬間、西行妖の背中を白い剣が貫いた

「……!!?」

「中身は違うとは言え、二度も同じ手にかかるとはな」

西行妖が背後に目を向けると、背中に剣を突き立てる龍神の姿があった

「……どこを見ている?」

今度は正面から声。

背後の龍神と同じ姿、同じ白い剣を振りかぶっている

「分身だ、阿呆」

二人の龍神は正面から袈裟斬り、そして背中に刺さった剣を抉り抜いた

「……!!」

夥しい量の血が流れ、膝を付く西行妖

「やはりまだ身体が馴染んでいないようだな。柎 隼斗の方がまだ強かったぞ」

「……!」

脚に力を込め龍神との距離を離すために跳躍する西行妖。

傷口部分がゴボゴボと音を立てて塞がりかけている為、完治するまで時間を稼ぐつもりだと言うことは明白だった

「はあ……私の隙を突くわけでも無しに、そんな行為を見逃すと思うか?」

呆れつつも龍神（分身）は西行妖に向けて手を翳す

「!?」

突然身体に掛かる重力が増大し、空中にいた西行妖は地面に落ちた。

それでも圧力は増し、地面にめり込んでいく

「終わりだな」

ミシミシと陥没していく地面からなんとか逃れようと暴れる西行妖は、一層強く妖力を解放した

「アッアッアッ……！ガアッアッアッアッアッ!!!」

其の咆哮は大気を揺るがし空を覆う雲を吹き飛ばした。

力尽くで重力の中立ち上がった西行妖は龍神を睨みつけると、掌に先程と同様に赤黒い妖力を溜めていく。だが出来上がっていく球体は西行妖の姿が隠れるほど巨大で、あまりに強力なエネルギーの為に空間が歪み始めている

「……醜く足掻くな、潔く散れ」

今度は本体が前に出て、掌に黄金色の炎を収束させる

「特別に、龍の炎で滅してやる」

同時に西行妖の禍々しい閃光が放たれた

――

「……」

何もない真っ暗な空間を隼斗は漂っていた

『……ハッハッハッ……』

辺りを見渡すが何も見えず、気配も感じない

『俺はどうなった?』

まるで夢の中にいるような感覚で、手足も思うように動かない

『……案外精神世界ってヤツか?』

『察しがいいな』

『!』

目の前に現れたのは先程まで戦っていた龍神だった

56話 決着

謎の精神世界で隼斗の前に現れた龍神

『お前の仕業か?』

『こら、せめて龍神様と呼ばんか』

『いやだ!!』

『子供か!』

・

・

『西行妖が?』

『はあ……この事を伝えるのにこれ程疲れるとは』

龍神の呼び方についてどちらも譲らず早一時間。

結局龍神が根負けして本題に入った

『西行妖は危険だ。元が植物だけに西行寺から離れなければと思っていたが、それが体を手にして歩き出したとなれば話は別。世界中に死をばら撒く事になるからな』

『それを止めに来たってか? だったら本体を叩けよ』

『私が動くのは飽くまで世界のバランスが崩れる危険がある時のみだ。動かない分には問題無かろう?』

『屁理屈じゃねエか』

『だが事実だ』

『……ッ!』

――殺すぞ

そう口にしかけて隼斗は自身を押し殺した。

当然精神世界の為、肉体がこの場に無い隼斗は殴りかかるところかその場から動くことすら出来ない。

だが隼斗が躊躇したのはそう言う問題では無かった

『お前もわかつてる筈だ。この世界で起こる事象全てはお前達の問題。本来私は干渉すべき存在ではないのだから』

『……だがこうして出てきた以上、俺ごと殺すんだろ？ならさっさと殺れよ』

『……何を言っている？もう済ませたぞ』

『!?!』

言っている意味がわからなかった。

ならば何故自分はこうして龍神と話せているのか。これも龍神の能力が関係しているのか。あれから幻想郷はどうなったのか。

紫達は？

『……っ！』

考えれば考えるほど疑問が生まれる。

隼斗が苦悶の表情を浮かべていると、龍神が思考に割って入ってきた

『まあ当然の反応だろうな。何が聞きたい？』

『……あれからどうなった？紫達や幻想郷、それに俺の中の西行妖は消えたのか？』

『……お前自身がどうなったかは聞かないんだな』

『今回の件は少なからず俺にも責任がある。テメエの事なんざ二の次でいい。大体お前の口から殺したって言ったじゃねエか』

『えっ？』

『あア？』

……

『いや、済ませたとは言ったが殺したとは言っていないんだが』

『……じゃあ俺生きてんの？』

『生きてるぞ』

『なんだよ!!』

……

『はあ……無駄に覚悟決めちまったじゃねーか』

『「テメエの事なんざ二の次でいい」』キリッ

『殺すぞ』

今度こそ目を血走らせる隼斗

『まあそう怒るな。質問には答えてやる』

瞳孔ガン開きの隼斗を宥めながら龍神が続ける

『まずお前の仲間は無事だ。そもそもお前が守ったんだからわかるだろう？それに幻想郷とやらもな』

『そういや「私の世界を」とか言ってたな。それは建前なんだろう？』

『無断でつてところは気に食わん部分があるが、まあ良いだろう』

とりあえず幻想郷の存亡をかけた戦いはしなくて済みそうだ

『そしてお前に寄生していた西行妖だが』

『！』

ある意味一番重要な事だ。

本体じゃないとは言え危険性は変わらないからな

『結論から言えば消滅した。かなり梃子摺らせてくれたがな』

『消滅……俺の体に乗った状態でどうやって？』

『知らないのか？龍の炎には浄化の力があるんだ。それを使ってお前の身体から西行妖を滅したと言うわけだ』

何だよ随分あっさりだな……

そう思った隼斗に龍神から衝撃の一言が

『まあ3／4殺しまで追い込んだけどな』

『それ殆ど死んでんだろうがアア!!大丈夫なのか俺の体!?!』

慌てふためく隼斗を他所に、飽くまでドライな龍神

『まあ大丈夫だろ。私が此処に来る前にお前の仲間が近くまで来てたし』

紫達か。

アイツら驚くだろうなー、瀕死の俺見たら

『なあ、そろそろ戻りてーんだけど』

『んー。確かにこれ以上肉体から精神を切り離しておくのはマズいか。外も大分騒がしいしな』

『えっ、どんな状況だよ』

『聞いてみるか?』

龍神は指をパチンと鳴らすと現実世界の音声が入ってきた

~~~~~

「こんなに血が……!? 治療術が間に合わない……!!? 隼斗さん!!」

「諦めるな! 私も手伝う!! …おい隼斗! しっかりしろオ!!」

「隼斗様! 隼斗様アア!!」

「お願い……お願いだから目を開けて……! 約束したじゃない! 貴方は居なくならないって!! 隼斗オ!!」

~~~~~

『……』

『ふふっ、随分愛されてるな色男』

『龍神、戻してくれ。今すぐだ』

『!』

紫達の反応を聞いて隼斗を茶化す龍神だが、当人の反応は冷めたものだった

『やれやれ。やっと名前を呼んだと思ったら。仕方がない……ほいっ
と』

龍神が隼斗の額に指を当てると真っ暗だった世界が白く染まっていく

『恐らくお前とはもう会うことも無いだろう。だが……そうだな。何かの縁があればまた会おう、終 隼斗』

その言葉を最後に目の前が一気に晴れた

――

ザアアアアア

冷たい雨が降り注ぐ中、隼斗は目覚めた

「……う……」

意識が戻った途端体の異常に気がついた。まず身体が動かせない。視界も霞んでいる

只、身体が冷たかった

「隼斗……っ?」

耳に入ってきたのは聞き覚えのある声

「……」

漸く焦点が定まると、そこには自分を心配そうに見下ろす紫達の姿があった

「ああっ……隼斗！良かった……気がついた……！」

紫が涙を流しながら手を強く握ってきた

「わ、悪い……心配……がけだ……な……ゲホッ」

肺が損傷しているのか上手く声が出てこない。それでも何とか絞り出す

「いいのよ……！貴方が生きててさえくれれば……それで……！」

「は、はは……流石に……体は動かねエけどな……」

「馬鹿者……！こんなに成るまで無茶をして……!!」

よく見ると藍も……いや、この場にいる俺以外の全員が涙を流している

「隼斗さん……大丈夫ですよ？すぐに……傷を……塞ぎますから……！」

傷口からドクドクと流れ出る血を必死に止めようと治療術を施す

鏡花

「心配すんな……鏡花。お前の師匠は……これ位じゃ……くたばらねエって」

「隼斗様……傷は、痛みますか？」

オズオズと橙が聞いてくる。

だが既に感覚が麻痺してるのか痛みは感じなかった

「大丈夫だ……橙」

感覚が無いままの腕を何とか上げて、橙の頭をぎこちなく撫でる

良かった……紫達も幻想郷も、俺の守りたいものはちゃんと残ってる

「良かった……」

——そろそろ本格的に意識が遠のいてきた

「隼斗!?!」

「隼斗さん(様)!!」

ゆっくりと俺は瞼を閉じた

57話 激闘の末に

カコーンツ

庭の鹿威しが響き、目を覚ました

「……」

見慣れない天井。いつもより若干低めの枕。

視線を下げれば体の至る所に管の様なものが付いている

「……………生きてたか」

再び視線を天井に戻し呟く。

障子からは陽の光が漏れている、外は快晴だ

「！」

目覚めの余韻に浸っていると、廊下から足音が聞こえ、部屋の襖が開いた

「!? 隼斗……!」

部屋に入ってきた人物は起きている俺を見て驚いている

「永琳?……………って事は此処永遠亭か」

段々頭がクリアになってきた俺は一人納得した。

まあ冷静に考えりゃあんだだけ怪我して自分家で寝てるわけがないよな

「……………良かった。脳への後遺症も無いようね」

俺の反応を見て安心したのか、永琳は手に持っていた薬品や書類を

一先ず部屋の机に置いて枕元に座った

「早速だけど身体に異常はあるかしら?」

「…あり、動かしにくいって事以外は特に無いな」

「多少は仕様がないわ。アレだけの怪我ですもの」

「……………因みにどんくらい?」

「えーと……………はいコレ」

そう言っ手渡されたのは診断書?カルテ?的な書類

「態々書類で見せんでも……………げっ」

少し面倒に思いながらもパラパラと流し読みしていくと、何故書類

で渡されたかわかった

用紙の端からビツシリと診断結果が記述されている

「永琳、これ俺にもわかるようにザツクリでいいから教えてくんない？」

「こんな医学的用語やら何やらじゃ、よくわからん

「そうねえ……まず胸部と背中に大きな裂傷・内臓破裂・頭蓋骨にヒビ・身体中、特に左腕全体に重度の火傷、e t c……右の肺に至っては一部抉られた様な傷まであったわ。よく生きてたわね」

「それを治したお前さんも大概だよ」

とても医者と患者の会話とは思えない内容だけど、まあ何にせよ助かったんなら良しとするか

「俺はどれ位寝てた？」

「半年」

「マジ？」

「精々3日とか一週間とか思ってた

「全く、大変だったのよ？あの紫が全身ずぶ濡れになりながら此処に駆け込んで来た時は流石に驚いたわ。貴方は……身体中血だらけで動かないし、貴方が重体だって……知った娘達が一斉に押しかけてくるし。……それに……私、だって……」

「……」

先程まで呆れながら話していた永琳の表情が変わった。声も段々とくぐもっていく

「……馬鹿っ！心配させて……!!」

「……永琳は俺の手を握りながら泣いている

滅多に泣かない彼女の泣き顔を見たのはこれで3度目だった

「……ゴメンな」

それはその場にいる永琳に向けられたものか、はたまた自身を心配して駆けつけてくれた人達に向けられたものなのか

それは隼斗本人にしかわからない

――

俺が目を覚ましてから更に3日。

永琳からは暫く安静にする様言われたけど居ても立っても居られず俺は外に出た。

他にも心配を掛けた奴らのトコに報告も兼ねて茶菓子でも持つて顔出しに行かなきゃな

「えーと…八雲家・鏡花・妹紅・慧音・幽香・彩芽…あと永琳達もか。…こりや高くつきそうだ」

・
・
鏡花 side

「申し訳ありませんでした!!」

「うわっ、吃驚した。どうしたんだよ急に」

「博麗の巫女でありながら、共に戦う事も出来ずに隼斗さんに怪我を…!」

「なんだそんな事か。仕方ねーだろ、相手は龍神だったんだ。それに鏡花だって結界張ったばっかで消耗してたんだからさ」

「で、でも…!」

「ああ、わかったわかった。とりあえず中で菓子でも食べよう。お前の好きな御萩もあるぞ」

「御萩…!!…あっ、いやその／＼」

「ほれ行くぞ」

・
・
妹紅 side

「師匠! 一体誰にやられたんだ!? ソイツの特徴さえ教えてくれればすぐに私が…!!」

「待てい」

ビシッ

「ふぎやつ!? な、何するんだよ!？」

「アホちん! お前こそ何する気だ。仇討ちなんて馬鹿な真似やめろ」

「だ、だって師匠がこんな目に遭わされて私、黙ってられないよ!」

「そう思ってくれるのは嬉しいけどな、もう済んだ事だ。ヘタに首突っ込んでお前に怪我して欲しくねーんだよ。わかってくれ」

「……っ!」

「ありがとな。妹紅」

「……うん」

・
・
慧音 side

「隼斗さん……!」

「よっ、久しぶり」

「怪我の方は大丈夫なんですか?」

「ああ。心配かけて悪かったな」

「とんでもない! 御無事で本当に良かった」

「うーむ。最初に慧音のトコ来ればよかったか……?」

「はい?」

「ああ、いやホラ。反応がね?」

「?」

・
・
幽香 side

「貴方もう出歩いて大丈夫なの?」

「ああ。流石に戦闘は厳しいけど」

「馬鹿ね、幾ら何でもそんな状態の人に勝負なんか挑まないわよ」

「まあ暫くは大人しくしてるさ」

「だったら治癒力を高める薬草を分けてあげるわ」

「いいのか? 偉く優しいじゃん」

「……それは私が普段優しくなくて事かしら？」

「んな事思つてねーつて。昔からの付き合いだ。お前が本当は優しいヤツだつて事くらい知つてるよ」

「な、何よ急に……」

「見舞いにも来てくれたんだろ？ありがとな幽香」

「……どういたしまして」

彩芽 side

「隼斗ではないか……！一体どうした？」

「先日意識が戻つてき、その報告も兼ねてこうして足を運んで来たわけだ」

「と言うことはその身体で山を登つてきたのか？そんな無茶をせずとも便りさえ寄越せば迎えくらい出したというのに」

「いいよコレぐらい。ここ最近まで寝たきりだったから身体が鈍つてんだ」

「……お主いつか死ぬぞ？」

「そりやそうさ。俺は不死じゃねーからな」

「隼斗……真面目な話じゃ」

「……」

「お主は私の大事な友人じゃ。前にも言ったがお主が死んでしまったらとても悲しい。その事を忘れないでくれ」

「……わかつてる」

・
・
・
・
・

「で、ここが最後つと」

今日一日幻想郷を歩き回り、今俺は紫の屋敷の前まで来ている。

屋敷内の気配を探ると、紫や藍の他に普段は妖怪の山で暮らしてる
橙も一緒にいることがわかった

玄関前に付いているノッカーを叩く。

考えてみると紫の家に丁寧に入るのは初めてかもしれない

「隼斗!?!」

「おおっ!?!」

それから5秒と経たず背後から紫がスキマを開いて出てきた。

油断してただけに思わず声が出た

「脅かすなよ。つてかよく俺だつてわかつたな」

「それはスキマで確認したから……つて違う! 貴方身体は大丈夫なの
!?!」

「おう、こうして出歩けるくらいには回復したぜ」

ホント言うのと完全に回復したわけじゃない。

能力のお陰で多少は治癒力も高まつてるが、ベースが人間なだけに
それもたかが知れてる

「そう……良かった……! とにかく中に藍も橙も居るから入りなさい
な」

「じゃあお言葉に甘えて」

紫と共に中に入る

「紫様! 急に出て行かれて一体どうし……隼斗!?!」

「はははっ、なんか皆同じ反応するなあ。狙つてんのか?」

「そ、そんなわけあるか! それよりも……!」

「怪我ならもう大丈夫だ。だからこうして会いに来たんだからな」

「そうか……無事でなによりだ。居間で寛いでいてくれ。すぐに茶を
煎れる」

「ああ、悪いな」

襖を開け、居間に入ると座布団の上で橙がちよこんと座っていた

「!……あっ」

「よっ! 元気だったか橙」

「うう……隼斗様あ!」

橙は俺の顔を見た瞬間目に涙を溜めて飛びついてきた。それに応

えて俺も抱き寄せる

「よーしよし、どうした?」

「怖かったです……あのまま隼斗様が目を覚まさなかったらどうしようって……私……!」

「馬鹿だな、大丈夫って言ったろ?」

俺は泣きじゃくる橙の頭を撫でながら笑い飛ばした

「よっしゃー!橙、土産で買ってきた菓子があるぞ。食うか?」

すると橙はガバツと顔を上げ、涙ぐみながらも笑顔になって食いついた

「お菓子!?食べたいです!」

「貴方いつも訪ねてくる時はお菓子を持ってくるわね」

「ん?なんか変か?」

「ふふつ、良いんじゃないかしら?そういう律儀なところも貴方の魅力の一つなんだから」

「な、なんだよ突然」

「……好きよ、隼斗」

「……へっ?」

普段は聴覚のいい俺も流石に聞き返してしまった。

これってそゆこと?いや別に初めてじゃないけど………マジっすか?

つと此処で襖が勢いよく開け放たれ、藍が血相を変えて飛び込んできた

「ゆ、紫様!抜け駆けはズルいです!!」

「あら藍。恋愛は早い者勝ちなのよ?襖の向こうで覗き見している暇があつたら貴女も頑張らないと」

「くう……!負けませんよ!!」

……なんか彼方のお二方は勝手に熱くなってるし

「…隼斗様」

「ん?」

クイクイツと橙に袖を引っ張られ、目線を合わせる為しやがみ込むと、橙が耳打ちで

「私も隼斗様が大好きです！」

と言って駆けて行った

「……………家族的な意味で……………だよな？」

今日も幻想郷は平和です

58話 小さな魔法使い

幻想郷に博麗大結界が張られて凡そ100年。
外の世界では平成に入っているだろうから、やっと転生前の俺が生まれ時代になった訳だ

そんなある日のこと

「うしっ、こんなもんでいいだろ」

薪に使う為に回収した丸太を肩に担ぎ帰路に着こうとした瞬間だった

ガサガサツ バツ

突然背後の茂みから何かが飛び出してきて隼斗にぶつかった

「わぶっ!」

「…あん?」

尤も其れは質量的に隼斗より小さく、不動だった隼斗に対して、ぶつかった衝撃で後方に倒れ込んだ

「痛てて……」

「おい、大丈夫か?」

ぶつかったのはまだ見た目幼い少女だった。

尻餅をついたままの少女に手を差し出しながら安否を確認する隼斗

「ご、ごめん。急いでたから」

少女は謝りながらそう言ったが、こんな年端もいかない女の子が森の中に一人でいる事自体不自然だった

「なんかあつたのか?」

気になった隼斗が事情を聞こうとした時、背後の茂みから気配が複数現れる

「……そゆことね」

その正体を見た隼斗は一人納得する。

茂みから出て来たのは、如何にもガラの悪そうな二匹の野良妖怪だ

「ひひっ、見ーっけ！」

「もう逃がさねーぞガキンチョ」

「ひっ……！」

少女は怯えながら隼斗の後ろに隠れた。

裾を握る手は震えている

「はあ……またこのパターンか」

溜息を吐きながら少女に下がるよう促すと、担いでいた丸太を片手に持ち替えた

「どんな経緯でこの娘を狙ってんのか知らんけど、まだ子供なんだ。勘弁してやってくれ」

「ひひっ、勘弁してくれってさ」

「馬鹿言っちゃいけねーぜ人間。そのガキは俺たちの縄張りを荒らした上に盗みを働いたんだからよ」

「盗み？」

改めて少女を見ると果物だろうか、両手で木の実らしき物を抱えていた

「違うー！これは木に生つてたのをとっただけで……」

怯えつつもそう訴える少女を見て大体察しがついた。

縄張りに入ったってのも、盗みを働いたってのも唯の言い掛かりだ。この娘を襲うためのな

「うるせえ!!兎に角お前は俺らの晩飯になる運命なんだよ！」

「ついでにその男も食い出がありそうだぜ！」

勢い付いた妖怪二匹が牙を剥き出しに突っ込んでくる。

少女は恐怖から動けずその場で蹲った

「……みんな丸太は持ったな!!」

「はい、ドーンー！」

「ぶへっ!？」

俺は向かってくる一匹の顔面を丸太の先端で突き飛ばした

「なっ!?!テメエ……!？」

「はい、こつちもドーン！」

「だつぱんぷウウ!!」

続いてもう一匹そのままスイングして殴り飛ばす

「つたく、相手の力量みてから来いバカタレ」

丸太を担ぎ直して未だ蹲っている少女に歩み寄り声をかける

「おい、もう大丈夫だぞ」

「へっ……?」

隼斗の言葉にゆつくりと顔を上げ辺りを見渡す少女

「やつつけたの……?」

「ああ。だからお前も早いところウチに帰れ。この森も身体に良くないしな」

「……」

しかし少女は首を縦に振らなかった

「……どうした?」

「私は……家を出たんだ!魔法使いになる為!!」

魔法……使い……?

「ナニ?お前名前を呼んではいけないあの人と戦うつもりなの?」

「?……誰それ」

なんだ違うのか。丁度癖のある髪してるからハー○イオニー的な奴かと思つたのに

「お前名前は?」

「……魔理沙。霧雨 魔理沙」

――

「ほれお茶」

「……あ、ありがとう」

取り敢えず家に連れて来た。

他人の家で緊張しているのかさつきから魔理沙はソワソワと落ち着かない

「で?お前これからどうすんの?」

「……この森で暮らして魔法の練習する」

暮らすつたつて……あんな雑魚二匹も追い払えない様なガキが？

いくら何でも無理だろ

「家どうすんだ？」

「が、頑張つて建てるよ……！」

「飯は？」

「き、茸とか？」

「妖怪に襲われたら？」

「そ、それは……うう……」

はあ……課題が山積みじゃねーか

「悪い事は言わねーから素直に家帰れ。そうじゃなくたつてこの森は瘴気やら胞子で身体に毒なんだからな」

「……本で見たんだ。この森の茸や瘴気には魔法を扱うための力が秘められてるつて」

「……それだけで魔法使いになれるとは思えないけどな」

此処の瘴気にそんな作用があつたら100年以上暮らしてる俺がとつくになつてる筈だ

「それでも諦めきれないよ。私は魔法使いになりたい……！」

「……その理由だとか想いなんてモンには毛ほども興味ねーけどよ、お前自分がどれだけ過酷な選択をしようとしてるかわかつてんのか？」

十分に自衛するだけの力を持たない未熟なガキが、親元離れて危険の多い里の外で暮らすどころか、誰に学ぶ訳でもなく魔法使いになりたいと言う。

最早無謀としか言いようがない

「大変なのはわかるよ……もう何度も死にかけてるし」

「……」

「実際は自分で勝手にわかつてるだけで本当は全然わかってないのかもしれない。……でも！」

魔理沙は思わず立ち上がり隼斗に向け叫んだ

「それでも諦めないのは私がガキだから……！ガキならガキらしく夢見

たっつていいじゃないか!!」

「……言ってる事は無茶苦茶。

自身でも言ったように具体的な逆境なんてモノは半分も理解してないはずだ

「お前周りからよく馬鹿って言われるだろ」

でも長年生きてきた俺は経験上知っていた

「な、何でそれを……」

「見りゃわかる」

「……馬鹿は馬鹿でもコイツみたいに真っ直ぐな馬鹿は、努力次第でいくらでも成長する事を……」

「いいぜ、そういう事なら少しくらい手を貸してやる」

「えっ……っ？」

このガキが何処まで出来るか興味が出てきた

「行くぞ」

俺は魔理沙の手を引いて家を出た

「ちよっ……ちよっどー!行くつてどっ!?!」

「香霖堂だ」

59話 香霖堂

魔法の森の入り口付近。

此処に一軒の和風の家が建っている。

『香霖堂』

幻想郷だけでなく、時には外の世界から異世界の道具まで取り扱っている道具屋だ

色々な道具が所狭しと並べられた店内で、此処の店主である『森近霖之助』は本を片手に寛いでいた

「ふう……もう昼過ぎか。相変わらず客足は無し……っと」

頬杖をつきながら本から目を離し窓の外に目を向けた霖之助は、そこに見覚えのある顔を見つけた

六尺以上あるであろう長身の男と、金髪の髪の少女

「オッス、霖之助いるかー?」

「此処にいるよ。今日はどうしたんだい?」

「ああ、実はな……」

「香霖!」

隼斗が訳を話そうとした瞬間、魔理沙が霖之助に飛びついた

「やあ魔理沙。君が此処に来るなんて珍しいね」

無言でくつつく魔理沙を宥めながら、視線を俺へと向ける霖之助。どうやら説明の続きを求めているようだ

「家を出たらしいぜ。魔法使いになる為に」

「……はっ?」

霖之助は目を丸くした

「ははっ、まあそうなるわな」

「ど、どういう事だい?」

~~~~隼斗説明中~~~~

「……って訳だ」

「大分ハシヨったね」

「うるせ」

説明を終え、魔理沙の方を見ると霖之助に貰った煎餅を齧っている俺と霖之助の関係については数年前に知り合った友人ってところかな。

丁度この道具屋が出来たばかりの頃に偶々立ち寄ったのがきつかけだった。つまり俺がお客第1号ってことになる（買ってないけど）んで、さつき魔理沙から此処に来る途中で聞いたけど、霖之助は昔、魔理沙の親父さんが経営してる店で修行してたそうさ。

魔理沙の事は赤子の頃から知ってるらしい

「しかし驚いたよ。まさか魔理沙が魔法使いになりたいだなんて」

「いいんじゃない？アイツの人生だ。好きにやらせてやれよ」

「君は相変わらずノリが軽いね。まあ、反対する気は無いけど」

「でき、此処って確か魔法道具も扱ってたよな？」

魔法道具とは使用者の魔力を使う、又は物自体に魔力が込められた道具の事で、所謂魔法が使える様になる代物だ

「……ああ、そういう事か。わかった、用意しよう。ただし作成には

2、3日かかるよ？」

「ああ。それまでは魔理沙の面倒は見てやるよ」

「ありがとう。君なら安心して任せられるよ」

「そっちも頼むぜ」

依頼を済ませて踵を返し、未だ煎餅を齧る魔理沙に帰ることを伝えると、霖之助の前まで駆け寄り

「香霖、かつこいいの……かつこいいのがいい！」

話を聞いていたのか、作ってもらおう魔法道具の希望を言った

「わかった、わかった。とびきりカッコいいのを作ってあげるよ」

「ホント!？」

「ああ」つと頭を撫でる霖之助に別れを告げ店を出ると、ウキウキ気分の魔理沙は足取りが軽い

「楽しそうだな」

「うん！はあー楽しみだなー」

「浮かれるのはいいけど生活する場とか決めたのか？」

「あつ……」

魔理沙はピタつとその場に止まった

「お願い隼斗ー！作るの手伝ってえええ!!」

「ああ？手伝うって家作りをか？面倒くせーな」

「そんな事言わずにお願いく！2、3日面倒見てくれるって言ったじゃんー！」

「何で 面倒見る＝家建てる に繋がるんですかねエ」

・  
・  
・

「これでいいかしら？」

「ああ、十分だ。態々ありがとな紫」

結局魔理沙の家については紫に頼むことにした。外から都合良く空き家になった西洋風の一軒家をスキマで送ってもらおう簡単な作業である

「貴方も世話焼きねえ。いつも誰かの面倒見てない？」

「そんなんじやねーって。成り行きでこうなっちまうだけだ」

「クスツ、あらそう。それじゃ私は戻るわ。引き続き子守頑張ってね」

それだけ言っつてスキマへと消えていった

「…さて、早速魔理沙に見せてやるか」

〜3日後

「霖之助ー、来たぞー」

「来たぞー」

「やあ、お二人さん。待っていたよ」

「出来たのか？魔法道具」

「今朝漸くね。少し待っていてくれ」

霖之助は店の奥に消えると、すぐ戻ってきた



「これが頼まれて作った魔法道具だ」

そう言って差し出されたのは小さな八角形の物体

「なんじゃこりゃ?」

「ちよつ、隼斗!私のなんだから早く見せてよ!」

手にとつてマジマジと見ていると、魔理沙が下でピョンピョンと跳ねだしたので仕方なく渡してやる

「わかったわかった。で?これは何だ?」

「それは八卦炉。と言つても普通の物より大分小さいから『ミニ八卦炉』つてどこかな?」

「八卦炉?そんな凄いモンには見えねーけどな……アレで何ができるんだ?」

「これは見た目に反して強力だよ?最大で山一つ焼き払う程の火力があるからね」

「魔理沙すぐにそれを捨てるオオ!!」

俺は急いで魔理沙から八卦炉を引っ手繰った

「わあつ?!返してよー!」

「バーロー!!こんな危険なモン子供が持つンじゃねエ!死にてエのかアア!!」

「はははっ、大騒ぎだね」

「オメーのせいだよ!!」

隼斗のツツコミもどこ吹く風。霖之助は落ち着いた面持ちで説明を始めた

「心配ないよ。飽くまで最大火力がつて話だから、魔力をある程度コントロールできなきや使えないんだ。つまり今の魔理沙が使つても料理に使う程度の火しか起こせない」

「……それを先に言えよ」

それを聞いた魔理沙が声を上げた

「ええーっ?!それじゃあ魔法っぽくない!」

「それはお前の努力次第だ。早く魔法が使える様になりたきや必死で鍛錬するこつた」

すると何故か魔理沙が俺に詰め寄ってきた

「よ、よーし!!隼斗、早く教えて!」

「いや、俺魔法使えねーし」

「えっ……」

そんな落胆した顔されても困るんですけど

「霊術とか体術なら兎も角、魔法は専門外なんだよ。大体魔法の事ならそこでニヤついてるアホ毛に聞きな」

俺の目線の先、魔理沙の背後で微笑ましように笑っている霖之助を顎で指した

「あ、アホ毛って……」

「香霖、魔法使えるの?」

「うん、まあ基礎的な事なら一応はね」

「よし!隼斗は使えないから教えて!」

「おい」

「はははっ、まあまあ」

――

↳ 帰路

「なあ隼斗」

「なんですか魔理沙さん。使えない私めに何か御用ですか?」

「もー、冗談だつてば」

「……つたく。で、なんだよ」

魔理沙は隼斗の真横まで来ると、若干俯きながら呟いた

「…ありがとう」

「おう」

俺は照れ臭そうにする魔理沙の頭に手を乗せて、そう返した

「まあ、アレだ。なんか困った事があつたらいつでも来い。ご近所の

「誼みで『がんばれー』って言うから」  
「言うだけ!?!」

グウー

魔理沙のリアクションと同時に腹の虫も鳴いた

「あっ…／＼／＼」

「そーいや夕飯まだだったな。よっしゃ、偶には外の店で食うか!」

「えっ!?!隼斗の奢り!?!」

隼斗の提案に魔理沙が今まで以上に食いついた

「仕方ねーから今日ぐらいは出してやるよ」

「やったー!?!隼斗ってば太ももー!」

「太っ腹な」

真っ先に人里に向け駆け出す魔理沙をやれやれといった感じで後  
に続く隼斗

## 60話 博麗を継ぐ者

↳博麗神社↳

「はあく最近異変って言う異変も起きないわね〜」

境内にある本殿の縁に腰掛け空を見上げる一人の女性

「昔はもつと刺激があったのに……ねえ霊夢?」

「いや、私に振られても……」

その傍でお茶を啜る十歳位の霊夢と呼ばれた少女

「それに異変が無いって事はそれだけ平和になってきたって事でしょ?じゃあいいじゃない」

「そうは言ってもやっぱり暇な日がこうも続くと身体が鈍っちゃうわ」

「……変なの」

と、ここで本殿の外から声が掛かった

「暁美く霊夢く邪魔するぞー」

「あつ、隼斗お兄ちゃんの声だ」

「……ナイスタイミングね!」

そう言つて縁から腰を上げたのは、現博麗の巫女である『博麗 暁美』

その様子を「……またか」と呟く少女、『博麗 霊夢』は同時に溜息を吐いた

「おつ、いたいた。よお、久しぶりだな」

「おはよう隼斗。大体半月ぶりじゃない?何してたのよ」

「まあ、色々とな。霊夢もちよつと見ない間に背伸びたか?」

「うーん……多分。隼斗お兄ちゃん、今日はどうしたの?」

「特に用があつたわけじゃねーけど。偶々近くまで来てたから様子見がてら寄つたんだ」

それを聞いた暁美が含み笑いをした

「つて事は暇なのね?」

「まあな。……急にどうした?」

「じゃあ久々に相手に付き合ってくれない？最近身体が鈍ってきてちやつて困ってたのよ。どう？」

口では一応提案と言う形で言っただけだが、身体の方は既に闘気を漲らせている

「来て早々相手に誘われるって珍しいパターンだな」

「良いじゃない。偶には弟子の修行に付き合うのも師の勤めよ？」

「弟子ならもうちよい敬意を払いなさい。……まっ、偶にはいいか」

「流石♪じゃあ、庭にいきましょうか」

「今からやんの!？」

――

「なあ、境内で戦ったりしてバチ当たっても知らねーぞ？」

「戦うだなんて大袈裟ね。唯の相手じゃない」

「よく言うよ」

暁美はああ言ってるが、別に大袈裟なんかじゃない。アイツにとつての唯の相手は普通の人間が見れば戦そのものに見えるだろうからな

―― 『博麗 暁美』

七代目・博麗の巫女にして、その実力は歴代最強。

巫女の修行は代々、俺もしくは先代の巫女が教えてきた。個人差はあれど皆博麗の巫女として相応しい実力を付けていったが、暁美だけは群を抜いていた。

特筆すべきは、己の肉体を駆使した体術だ

これは俺の戦闘スタイルを取り入れたらしく、内臓破壊と称して『発勁』すら習得してみせた。元々持っていた霊力も高く、霊術や肉体強化はお手の物

今やこの幻想郷で暁美と戦えるのは、ほんの一握りだと言われているくらいだ

「張り切りすぎて神社壊すなよ?。」

「だから考え過ぎだつてば」

……いや、割とマジで言っただけど

「よし、行くわよー!」

言葉と同時に予備動作も無く一瞬で間合いを詰めた暁美。足裏に霊力を溜めて爆発的な加速力で移動した訳だが、地面にはその形跡が残っていない

「随分しなやかに動ける様になったじゃねーの」

「どー……もッ!!」

隼斗は間髪入れずに放たれた正拳突きを横に流しながら入り身で躲し、カウンターのストレートを打った

「!」

「はあっ!!」

暁美はこれを左の掌底で打点をずらしながら回転。そのまま後頭部に向け裏拳を放つ

「あーらよつと!」

隼斗は裏拳に合わせその場で前方に空中回転する事で器用に躲した

「まだよ!」

「へっ……!」

立て続けに繰り出された暁美の回し蹴りと隼斗の後ろ回し蹴りが交差し、均衡する

「相変わらずいい動きするなア暁美」

「貴方もね」

お互い直様距離を離し、間合いを切る。

両者は自然と笑みをこぼし構えをとった

「はあアア!!」

先に動いたのは暁美。

同じ様に高速で間合いを詰め、突きによる連撃を叩き込む。

一発一発が空気を弾く程の速度で繰り出されているため、まるでマシンガンの様な音が響き渡る。

隼斗はその拳一発一発を正確に捌いていく

「そこっ！」

「！」

急速に身を屈めた暁美の足払い。

俺は反射的に空中へ逃れた

「あつ、しまった…！」

「…ふううう」

空中で一瞬動きの制限された隙を突き、暁美が拳を構えた

「やあっ!!」

拳から爪先まで捻りを加えた正拳突きが隼斗の身体に突き刺さる

「!?…隼斗お兄ちゃん!」

吹き飛ばされた隼斗を見て、近くで観戦していた霊夢が思わず立ち

上がり隼斗に駆け寄ろうとしたが、即座に暁美が制止させる

「待ちなさい霊夢。まだ終わってないわ」

「だ、だって…暁美お姉ちゃんに殴られたのに…！」

「大丈夫よ。きつちり『躲されてる』から」

「えっ？」

暁美が向けた視線の先。社殿の屋根の上に何事も無かったかのよ

うに隼斗が腰掛けていた

「はっはっはー！惜しかったな暁美」

高らかに笑う隼斗。

先程まで羽織っていた羽織が宙を舞い暁美の足元に落ちた

「はあ…まさかあの一瞬で変わり身まで使うなんてね」

隼斗は攻撃が当たる瞬間、羽織を脱ぎ捨て自身は高速で移動し、そ

の場に残像を残しつつ回避していた。

その様は殻から脱した蟬の如く。

故に『空蟬』と呼ばれている技だった

「どうする？まだやるかお嬢さん」

「当然でしょ！最低一発は決めなきゃスッキリしないもの」

「…なら俺も少し上げてくぜー！」

こうして組手と称した戦は昼頃まで続いた

「おっ、この味噌汁誰が作ったんだ？」  
「私だよ」

俺の質問に、隣に座っている霊夢が答える。

今は組手も終わり、昼飯タイムだ

「霊夢かく、お前料理上手くなったなあ。まだ十歳だったのに大したもんだ」

「…へへっ」

頭を撫でて褒めてやると、霊夢は嬉しそうに微笑んだ

「あーあ、惜しかったのに」

焼き魚を解しながらそうボヤク暁美。

結局有効打を当てる事が出来ず組手は終わった為、今も若干不機嫌だ

「俺だつて意地があるからな。まだまだ弟子には負けられん」

「オマケに内臓破壊まで外されるなんて…」

「知らなかったのか？アレは打点さえズラしちまえば唯の打撃になるんだZ E?」

「く・や・し・いー!!」

「ははっ、ドンマイ（笑）」

「殴るわよ!」

「おお?やってみろ!」

「二人とも食事中は静かに…!!」

「あっ、はい」

十歳児に怒られる大人二人の図



## 61話 不吉な噂

く人里

――最近人里ではある噂が流れていた

「なあ、聞いたか？最近此処らで化物が出るって話」

「化物？それって妖怪の事だろ？大して珍しくもねえ」

「いやそれがよ、違うんだってさ」

「違うって何が？」

「何でも姿形が異形なんだと。ほれ、妖怪ってのは人間離れた形しててもある程度は人なり獣なりに似た姿してるだろ？だけどその化物は違うらしいんだよ」

「へえー、どんな風に？」

「俺も人に聞いた話だからわかんねーよ。でも妖怪よりおっかないらしいぜ？」

「どーも嘘臭えなー。見間違いか何かじゃないか？」

「まっ、飽くまで噂だしな。でも実際妖怪より恐ろしい化物なんていたら一大事だよな」

「全くだ」

く紫の屋敷

「……」

「…失礼します、紫様」

「……どうだった？」

「噂は人里外部にも広まっている様です。しかし、当の目標との接触はありませんでした」

「…そう、報告ご苦労様。貴女は引き続き調査に当たって頂戴」

「はっ。では失礼します」

「……………イヤな予感がするわね」

「……」

「慧音先生さよーならー」

「ああ、また明日な」

時刻は夕暮れ。

人里で寺子屋の教師を務めている上白沢 慧音は、別れの挨拶をして駆けていく生徒を見送っていた

物騒な噂が立ち子供達を一人家に帰すのは心配という事で、ここ最近はこうして引率しているのだ

「すまないな妹紅。付き合わせてしまった」

「いいって。私が好きでやってるんだし、護衛くらいお安い御用だよ」

慧音の隣では方が一の護衛も兼ねて、妹紅も同行していた

「そう言ってもらえると心強いよ。……………それにしても噂とはいえ困ったものだ。これでは安心して子供たちが寺子屋に通う事ができない」  
「どうせ噂が広まるにつれて尾鱈がついただけだと思うけどね。実際私も見たことないし」

「だと良いんだが……………つと、もうすっかり日が暮れてしまったな。

おーい皆、少し急ぐぞー！」

「はーい」

慧音の号令に子供たちは元気に答えた

そして子供たちの家がある、住宅地手前まで差し掛かった時だった

カサッ

「ん？」

「どうした妹紅？」

「いや、今何か聞こえなかった？」

「……………何か？」

カサッ カサッ

「……………皆止まれ！」

異変に気付いた慧音が後ろを歩く子供たちを止める

「先生ーどうしたのー?」

「シッ! 静かに…」

カサツ…カサカサカサカサツ

まるで何かが這いずる様な音。

それは次第に慧音達に近づいてきた

「…慧音は子供たちに付け。来るぞ…!」

言葉と同時だった

「ギイイイ!!」

茂みから此方に目掛けて勢いよくナニかが飛びたした

「はああ!!」

逸早く察知した妹紅が炎を纏った蹴りを見舞った

「ギ…!」

飛びだしてきたナニかは怯んだようで、数歩程後退する

「妹紅…!」

「下がってる!!」

妹紅は掌に炎を収束すると、一気に弾幕にして撃ち放った

「ギ…ギツ!!」

弾幕は次々と炸裂していくが、倒すまでには至らないようで、喰らいながらも此方に向かってくる

「!」

闇夜の中、弾幕の炎で微かに見えたその姿は、巨大な蛇の様に長い体をしていた

「何だか知らないが此れで終わりだ!!」

向かってくる化物に手をかぎす妹紅

「破道の三十一! 『赤火砲』!!」

掌から打ち出された紅蓮の火球は一瞬で対象を呑み込み、吹き飛ばされた化物は暫く炎上した後動かなくなった

「ったく、急に襲ってk…!」

亡骸を確認した妹紅は驚愕する。

蛇かと思われた長い胴体には幾つもの体節がありその一つ一つに

一対の歩肢。

まるで『百足』の様な風貌の化物

「……何だ、コイツ……!!」

だが、妹紅が驚いたのはその頭部だった

「……妹紅？大丈夫か？」

「慧音、一先ず此処を離れよう。気味が悪い」

「あ、ああ」

子供たちを連れ、早急に住宅地へ向かう二人

——その場に残された亡骸の身体は百足、頭部はまるで、『髑髏』を思わせる異形の姿をしていた

・・・

～同時刻 博麗神社

「はあツツ!!」

「ギツ……!?!」

内臓破壊により、一撃で絶命する百足

「ふう……漸く一段落ね」

博麗神社の巫女、博麗暁美はゆっくりと構えを解いた。

辺りには巨大な百足や、獣、更には鳥の死骸が転がっている

「全く、頭だけ『髑髏』だなんて気色悪いわね……!」

自身が倒した化物の群れを見てそう悪態づく

「暁美お姉ちゃん……」

本殿から恐る恐る顔を覗かせる少女

「霊夢、危ないから中に戻りなさい」

暁美は少し強めの口調で促した

「で、でもやつつけたんでしょ?」

「……暫くすればまた集まってくるわ。『大本』を叩かない限りはね」

神社の東、正確にはその裏の方角にある湖を睨みながら、そう答え  
た

「霊夢、貴女は此処に居なさい。結界を張っておくから」

暁美は懐から札を何枚か出すと、神社の四隅に設置し、結界を張った

「明日の朝までには戻るわ。それまで大人しくしていること。いいわね？」

「う、うん……気を付けてね」

――

――

――

↳翌日

「最近また物騒になってきたね。此処の近くでも出たらしいよ？」

「例の化物か？……いよいよ異変っぽくなってきたな」

香霖堂にて雑貨を買いに来ていた隼斗は最近噂になっている異変について霖之助と話していた

「人里では寺子屋の教師と生徒が帰り道襲われたらしいし」

「慧音が……!?大丈夫なのかよ……!」

「同伴していた……確か藤原妹紅って言ったかな？彼女が撃退した為に被害は出ていないようだよ」

「そ、そうか」

……知らなかった。俺自身化物と遭遇した事は無かったし、その内治るだろうと軽く見てた……

こりゃ本格的に調査した方が良さそうだな。この後暁美のところに行ってみるか

「とりあえず俺の方でも原因を探ってみるよ。またな霖之助」

「ああ、気をつけてね」

別れを済ませ踵を返した時だった。

突然隼斗の目の前の空間が裂け、中から紫が顔を出した

「紫、どうしたんだ？」

「隼斗……」

『曉美が異変解決に向かったまま帰ってこない』

――

「なあ聞いたか？博麗の巫女さんが行方不明になったんだってよ」

「ああ。何でも異変解決に向かったまま戻らなかったとか………まだ若いのに気の毒にな」

「巫女さんが居なけりや異変が起こった時どうすればいいんだ？」

「一応後継ぎはいるみたいだぞ。まだ十かそこらの少女らしいが」

「子供……!?おいおい大丈夫なのか？またやられちまうんじゃない？」

「おい、不謹慎だぞ」

「だってよー」

「……」

あの異変から3日。

異変解決に向かった曉美は未だ見つからず、曉美が行方不明になった次の日には異変は嘘のように治っていた

紫から話を聞いた後博麗神社に向かったが、其処には泣きじやくる霊夢と無傷のままの神社。そしてその傍には効力の切れた結界用の札が数枚落ちていた

俺はすぐに幻想郷中に霊力の波を拡散して探知を試みたが、曉美の気配を感じ取る事ができなかった

「どこ行っちゃったんだお前は……」

――再び平和になった幻想郷

しかしそこに平和を取り戻した人物はいない

幻想郷 現代篇

62話 移りゆく幻想郷

「はぁー暇ね〜」

神社の縁にて、足を投げ出しながらボンヤリと空を見上げる少女。傍には竹箒が立て掛けてあり、掃除中だったようだ

「平和なのはいい事だけど………こうもやること無いと飽きがくるわ〜…平和に」

脇の開いた紅白の独特な巫女服に身を包んだ少女は、ため息を漏らす

「そんなため息ばかり吐いていると幸せが逃げるわよ?」

背後から唐突に掛かった声にも、特に驚いた様子はない

「そんな乙女チックな迷信気にする歳じゃないわよ、紫」

「……何言ってるの、真っ盛りじゃない」

飽くまでドライな返答に呆れつつも指摘したのは、幻想郷の賢者である『八雲 紫』だ

「それで、何しに来たのよ?」

「冷たいわね〜。折角会いに来てあげたのに」

「お帰りはあちらです」

少女は本殿の正面入口を指しながら紫から視線を外した

「ちゃんと用件ならあるから聞きなさいな」

「?」

「貴方の考案した決闘ルール、早速流行りそうよ」

「!………へえ、暇つぶしで考えた制定が通るなんてね」

紫の言葉に少女は一瞬反応を示したが、平静を装うかのように表情を戻した

「暇つぶし………ね」

「………何よ?」

「何でもないわ」

紫はスキマを展開し、自身の身体を中に入れた

「貴方も素直じゃないわね、『霊夢』」

スキマは閉じ、再び境内は静寂に包まれる

「……………はあ」

――

『スペルカード・ルール』

現・博麗の巫女、博麗霊夢の考案した幻想郷内での揉め事・紛争等を解決する為の、所謂決闘で用いられるルールの事。

人間と妖怪では力に大きな差があるのでそれを公平にする為に『スペルカード』に自身の技や弾幕をのせる事で戦う

飽くまで『遊び』の範囲だが、当然当たりどころが悪ければ死ぬ事もある

決闘内容を大まかに言うならば、攻撃手段はカード宣言による技もしくは弾幕のみで、それ以外の攻撃は無し。

どちらかの体力が尽きるか、技全てが攻略されれば負けとなる

他にも技より美しさに重点を置くなど変わった風潮もある

・

・

「…………昔で言う殺し合いが今ではお遊びか。平和になったもんだ、幻想郷は」

俺がスペルカードルールについて聞いたのは、つい先日家に訪ねてきた紫からだった。

何故突然こんなルールを設けたのかは知らんが、確かに幻想郷で浸透していつてる

俺も今さっき『お遊び』と称したが別に反対している訳じゃない。寧ろ平和的？に揉め事が片付くならいい事なんだろう。

唯、戦うことが嫌いではない奴からすると少し物足りないのかも知れん

「やれやれ、変わりゆく時代に追いつこうと必死になるのは年寄りの宿命かね」



などと言っているが、実際ノリノリな隼斗。

既に大量のスペルカードを製作中である

「んー、技らしい技が鬼道くらいしかないから必然的に破道か縛道に別れちまうな。鬼道使う時も詠唱してるし結局何時もと変わらんなー」

そして出来上がったのなら試してみたいのと言うもの。早速試し打ちにいいこうかな

「ん？」

その時隼斗はある異変に気づいた

「……やけに暗いな？まだ昼時だつてのに」

外から入ってくるはずの日の光が極端に弱まり辺りが薄暗くなっている。

隼斗は窓から外の様子を見て驚愕した

「な、なんだコリヤ!？」

今日の天気は朝から快晴。

だが、雲一つ無かった空は紅い霧のようなものに覆われており、日光が遮断されていた

――

「紅い霧……つてどう考えても自然現象じゃないわね」

徐々に空を侵食しつつある紅い霧を睨みながら博麗 霊夢は確信を持ってこれを異変と認知していた

「どこの馬鹿か知らないけど面倒な事してくれるじゃない」

このままでは幻想郷どころか、外の世界にまで影響が出てしまうと踏んだ霊夢は準備を整える

「おーい霊夢ー!!」

すると霊夢を遠くから呼ぶ声。

声のした方を見ると、そこには黒と白を強調した服と帽子、金髪の髪をした少女が箒に跨り飛んで来た

「あら、魔理沙。久しぶりね」

「呑気に挨拶してる場合じゃない！空を変な霧が……!」

「そんなの見ればわかるわよ。此れから其れの解決に行くところ」

「そうか、なら私も行くぜ!!」

「…別にいいけど、足引つ張らないですよ?」

こうして異変解決に向かう二人の少女

博麗の巫女『博麗 霊夢』

普通の魔法使い『霧雨 魔理沙』

目指すは霧の発生源と思われる霧の湖

・  
・  
・  
・

——隼斗が人里を訪れると、早くも紅い霧の影響が出始めている。

妖気を孕んだその霧は、人体に悪影響を及ぼし体調を崩すものが続出。

人々は家に閉じこもるしかなかった

「なん……だと……!?!」

『臨時休業』

そんな立札が掲げられた団子屋の前で一人項垂れる隼斗

「……………試し打ちの的は決まりだア」

静かに憤怒の炎を滾らせながら、彼も（理由はどうあれ）異変解決へと乗り出した

## 63話 紅魔館

霧の湖上空を飛ぶ霊夢と魔理沙

「あつ！きつっきの妖精が言つてた館ってアレじゃないか？」

「そのようね」

先程霧の湖にいた氷の妖精他一名（何れも瞬殺）の情報から、この先にある館から異変の現況である紅い霧が出ている事を知り得た二人は一直線に向かつていく

「きつさと終わらせて帰りましょ」

「うわっ…目に悪そうな色だ」

やがて見えてきたのは、全体的に紅い配色の館。それを見た二人は思わず目頭を抑えた

「目がチカチカするわ。全面真っ赤ってどう言うセンスよ」

「霧も紅いし、意外とここの主は吸血鬼かもな」

〽ー！ー！ー！ー！！

「ん？やけに騒がしいな」

「！…彼処に誰か居るわね」

近づくにつれて何やら館の方が騒がしい。

最初に魔理沙が気づき、霊夢が辺りを見渡すと、館の門前に誰か立っていた

二人は怪訝に思いながらも、高度を下げ館付近に降り立った

ー！ー！そして二人は目を丸くする

「くらアアアア!!責任者出さんかいワレえええええ!!!」

「だから駄目ですつてば!!」

彼女らが見たもの…それは、仁王立ちの姿勢から巻き舌気味に怒声を上げる男と、恐らく此処の門番であろう赤髪の女性

二人とも男の方には見覚えがあった

「おどれ等の出した霧の所為で団子が食えんのじやアアア!!今すぐ

止めんかいコラアアア!!」

「……その男は博麗霊夢の顔馴染みであり、霧雨魔理沙のご近所さんだった」

「……………」

二人はそつと浮かび上がり門を越えて館の中へと向かった

「……」

「……」

「随分表が騒がしいな」

「はい、どうやら人里の者が責任者を出せと捲し立てているようで……直ちに追い返して参ります」

「放っておけ、人間一匹美鈴だけで十分だろう。其れよりも館に鼠が二匹紛れ込んだようだ。お前は其方の処理に向かえ」

「畏まりました、お嬢様」

・  
・  
・

く 門前

未だ続く葛藤に一步も譲らない両者は互いに睨み合ったまま動かない

「…………どうやっても責任者を出す気は無いんだな？」

「当然です。貴方の様な人にお嬢様を会わせるわけにはいきませんか」

お嬢様…………此処の主は女か

「だったら仕様がねエ…………こつちから乗り込んで直接クレーム入れてやるよ」

「させると思いますか？」

門番の声色が変わり、辺りを覆っていた空気が重くなる。

そしてゆつくりと『構えた』

「……へえ、お前武闘家か」

「そうですけど、それが何か？」

「いや、珍しいなってよ」

対する隼斗も構えをとる

「！……貴方も」

「……原則として幻想郷の揉め事はスペルカードルールに則って解決する決まりだ。だがそんなもんは飽くまでお遊びの範疇に過ぎない。肉弾戦が得意な者同士それじゃあ些か物足りないだろ？」

「ルール無用……という事ですか？」

『お遊び』か『闘い』か……好きな方を選びな」

隼斗は敢えて挑発的に問いかけた。

その事を理解してか目の前の門番は微笑を浮かべ、答えた

「上等ッ！ならば手加減は出来ませんよ！」

「決まりだな。精々後悔がない様に本気で来な！」

両者の距離は互いに一步で踏み込める間合いのギリギリ外。どちらかが内に踏み出せば即座に迎撃されても可笑しくない。

それ程空気は張り詰めていた

「紅魔館が門番、紅 美鈴！参ります!!」

「団子愛好家、柊 隼斗。受けて立つぜ！」

美鈴が後ろ足で地面を蹴り付け一気に前に出ると、その勢いのまま拳が放たれる。

隼斗は一步も動かさず重心を前にかけて受け止めた

「見た目に反して重い拳だな」

「それはどうも」

突き出した拳を引き戻し、その交換作用で打ち出されたアッパーを隼斗は上半身だけずらして躲し、胴目掛けてフックを打ち込んだ

「…っ！」

美鈴は腕を挟んでガードしたものの、その衝撃に顔を顰めた

「いい反応だ！」

「はあっ!!」

隼斗の首目掛けて放たれた回し蹴り。隼斗は当然反応してガードに移るが、途中で蹴りの軌道が変わり、首ではなく側頭部に打ち込まれた

「ぐっ…!?!」

「まだまだ!!」

回転の勢いそのままに、下から上へ隼斗の顎を蹴り上げたが、咄嗟に上体を反らすことで直撃は免れた

「痛つつく…!器用な真似しやがって……!」

「側頭部に食らって痛いので済む貴方も大概です！」

今度は両者同時に動き、拳や蹴りを打ち合う。だが互いに武闘家であり捌きや入り身といった動きを常に行う為、決定打はそう簡単に入らない

繰り出された蹴りを捉え、攻撃に移ろうとすればもう片方の蹴りが飛んでくる。

単発で繰り出された拳には必ずカウンターが入れられる。

ある程度パターンの決まった連撃など瞬時に見切ってしまう。

そんな攻防戦が人外の速度・力で繰り広げられていた

当然踏み込みの起点となる地面は大きく抉れ、闘いは地上だけでなく空中にまで及んだ

「ふっ…!」

隼斗の打ち出した拳は真っ直ぐ美鈴の顔面に入る。しかし美鈴はそれでも前に出ながら衝撃が伝わり切る前に打点をズラし、隼斗に己の背面部を添える

「なっ!?!」

「ふう……」

美鈴は短く息を吐き、次の瞬間には強い衝撃を受けて吹き飛ばされる隼斗

「がはっ……!」

震脚から肩と背中による至近距離からの突進。所謂『鉄山靠』とい

う技だった

「腹を支点に内蔵の幾つかに痛手を与えました。暫くはまともに動けないでしょう。医者に行けば助かります、諦めて帰って下さい」

「……くっはは、帰れだア？生意気言ってくれるじゃねエかこの野郎……！」

隼斗は咯血した血を吐き捨て立ち上がった

「……まだやる気ですか？死にますよ？」

「……言ってる」

ブンツ

「……!？」

刹那、隼斗の姿がブレ始める。

決して高速で動いた訳ではなく、極めて緩やかに、しかし美鈴は隼斗の動きを目で追えなかった

「お返しだ」

「ぐうっ……!？」

気付いた時には急接近していた隼斗に吹き飛ばされる美鈴

「身体引いて衝撃を逃したか。最初反応出来てなかったのにやるじゃねエか」

「ゲホッ……！……確かに目では追えませんでしたがね。私の能力は『気を使う程度の能力』なので」

気……ってドラ○ンボール的な？コイツひよつとしてかめ○め波とか打てんのかな

「……とは言え決して無視できないダメージを負っちゃいましたからね。次で決めさせていただきます」

美鈴は構え、身体から視認できる程の闘気を漲らせる。

身体を赤い気が包み込み、彼女から感じる力が飛躍的に上昇した  
「じゃあそれに打ち勝ったら通っていいんだな？」

「いいでしょう……！」

それを聞いた隼斗は小さく笑い、この闘いで『初めて』拳に靈力を纏わせる

「いぎゃー！」

「尋常に!!」

『勝負!!』

互いの拳がぶつかり合った

・  
・  
・  
・

門前で横たわる人物。

相変わらず空は紅く、視線を館へと向けると開け放たれた門が風に揺られてギシギシと鳴っている

「はあく負けちやったなあ」

身体から走る痛みに満足に動くことができず、ただ一言呟いた  
「申し訳ありません……お嬢様」



## 64話 悪魔の妹

「迷った」

冒頭からこの一言。

毎度お馴染み終 隼斗による『初見迷い』が発動し、今自分がどの辺りにいるのかわからず彷徨い歩いていた

「どーなってるんだよこの館……明らかに外観より広いじゃねーか」

最早どの扉から入ってきたのかわからず同じ場所を行ったり来たり

「まいったなー。こんな事なら霊夢達と一緒に入るんだった」

隼斗は霊夢達の存在に気付いていたが、美鈴と小競り合いをしていた為に敢えてスルーしてしまっていた

「一応気配はするんだけど其処に辿り着けない歯痒さとききたらもう……」

などとブツブツ文句を垂れながら歩いて行くと、目の前に一際大きな扉を見つけた

「おっ……この先から魔理沙の気配を感じる……!」

知り合いの気配まで辿り着けた喜びから、心なしか歩速が速くなる隼斗。

そしてドアノブに手を掛けた時、改めて中の状況に気が付いた

「……戦ってるのか?」

この部屋の仕様なのか戦闘音などは聞こえてこないが、強い魔力を二つほど感じた。

片方は魔理沙、もう一方は知らない気配だから此処の住人だろうか  
隼斗は一応様子見という事で室内に入った

「おおっ……でけー図書館だな」

室内はこれ又だだっ広い空間が広がっており、莫大な量の書物が棚に並んでいた。

どういう訳か漫画の様な物まである

「さーて魔理沙の奴はどこ行ったかなと」

特に本に関して興味の無い隼斗は図書館の奥へと進んでいく。  
すると中央ホールの様な場所に金髪の後ろ姿を発見した

「なんだよ！ちよつと位見たつていいじゃないか！」

「ええ、見ることで自体は構わないわよ？唯、貴女さつき無断で持ち出そうとしたでしょ？」

「失敬だな！少し借りていこうとしただけだ!!」

「……貴女自分が侵入者だつて自覚ある？」

なんか揉めてんなー。聞き取った内容から察するに魔理沙が悪  
いっばいけど

魔理沙と対峙してる髪も服装も全体的に紫の女性は溜息を吐きな  
がら手に持っている本を開いた

「正直侵入者なんてどうでもいいのだけれど、図書館内の横行は黙  
認出来ないわ」

「私とやる気か？怪我しても知らないぜ……」

互いにスペルカードルールに基づいたカード宣言を行う

「金符『シルバードラゴン』」

「魔符『スターダストレヴァリエ』!!」

両者の弾幕がぶつかり合い、図書館内だけあつて爆発音が大きく響  
く。

一瞬館内の書物が無茶苦茶になるのではと気に掛けた隼斗だつた  
が、本には術式の様なもので障壁が展開されており傷一つ無い

「……まっ、アイツらの問題だしほつといても大丈夫だろ。部外者は  
退散退散と」

彼も侵入している時点で部外者ではないのだが、そんな事は御構い  
なしに弾幕飛び交う図書館の更に奥へと歩いて行った

すると下の階に続く階段を発見。

此処が既に地下なので、最深部か？くらいにしか考えていなかった

隼斗はそのまま下っていく

「……」

其処には術式の施された扉があり、中からは強い魔力を感じ取れた。

恐らく何かを閉じ込める為に組まれた術だろうが、扉は半分程『開いている』

「随分粗末な管理だな。これじゃあ術の意味無いじゃん」

隼斗は興味本位で部屋の中を覗いた

「…誰？」

部屋の奥から聞こえてきたのは幼さの残る少女の声だった。

「誰かいるんでしょ？隠れてないで出てきたら？」

「……」

別に隠れてる訳でも、隠れるつもりも無い隼斗は堂々と扉を開けて入った

「貴方誰？食事にしては早いと思うけど」

「俺は飯じゃねーよ」

中に居たのは、見た目十歳にも満たない金髪の少女で、背中からは宝石の様な羽が生えている

「じゃあお客様？」

「ん〜客でもねーな。クレーム言いに来ただけだし」

「ぶっ、何それ」

少女は小さく笑うと、隼斗の目の前まで近づきマジマジと見つめた

「……なんだよ」

「貴方は人間？」

「ああ、そうだよ」

「人間って飲み物の形でしか見たことないの」

「そりゃ世間知らずなこった。外歩いた事無いのか？」

「無いよ」

「あ？」

皮肉で言ったつもりなのに肯定されちゃった……まずったか？

「生まれてから495年間……一度もお外には出してもらえなかったもの」

「幽閉でもされてたのか？」

先程の術式を施された扉を思い出した

「どちらかと言うと軟禁かな。結界も自力で抜けられるくらい柔だし」

ああ、じゃあアレはコイツが開けたのか

「人様の家庭事情に口出しする気は無いけどよ、難儀なもんだな」

「今更いいよ。情なんてかけて貰っても何も変わらないし」

声のトーンは変わらないが、明らかに表情が曇った

「……お前h「フラン」……あん？」

「お前じゃなくて私の名前はフランドール。フランドール・スカーレット。フランでいいよ」

「ああ、ハイハイ自己紹介ね。俺の名前は柊 隼斗、適当に呼んでいいぞ」

「じゃあ隼斗だね。それで何？」

「お前……フランを軟禁してたっつうのは此処の主人か？」

一拍置いてフランは答えた

「そうだよ。この家の当主であり実の姉でもある、私を閉じ込めた張本人。『レミリア・スカーレット』」

## 65話 数奇な運命

『この家の当主であり実の姉でもある、私を閉じ込めている張本人。レミリア・スカーレット』

「……って事は空を覆ってる紅い霧を発生させてるのもフランの姉ちゃんって事か？」

「私は外に出られないから知らないけど、多分そうなんじゃない？」

「他人事かよ」

一応身内の起こした異変なんだから少しくらい気にかけてもいいと思うけどな。

姉妹仲は良くないのかね

「薄情だっと思う？仕方ないのよ。例えば私が止めたところで聞き入れてもらえないのは明白なんだし」

どこか諦めているかの様な表情のフランに対して、俺はふと感じた事を聞いてみた

「それはお前が長年外に出られない事に関係してんのか？」

「……」

フランは一度俯き、部屋に置いてあるテーブルへと歩き出した

「まあ座ってよ。今紅茶淹れるから」

特に此方の返事は聞かず卓上にあるティーカップへと紅茶を注ぎ始めた。

俺としてはさっさとお姉様とやらに文句言いに行きたいとこなんだけど……

何となく流れで席に着いてしまった

「はいどうぞ」

「態々ありがとよ」

「意外……お礼言うんだ」

「……」

前にも幽香に言われた事あったけど俺ってそんなずぼらに見える

か？

「冗談だから。そんな真顔で考え込まないでよ」

「……………それで？こうしてお茶に誘うくらいだ。それなりに複雑な事情でもあんだろ？」

茶も出してもらってるわけだし、こうなりや最後まで話聞いてやるか

「……………隼斗はさ、もしも家族や知人に強大な力を持った人が居たとして、もしその人が自身を制御出来なかった場合どうする？」

「？」

俺は唐突な質問に首を傾げた

「私ね、生まれつき精神が不安定らしいの。自分だと全く自覚が無いんだけどね」

……………情緒不安定って事か？今の所そんな感じはしねーけど

「知ってる？全ての物には最も緊張してる部分があるの。それを『目』って呼んでるんだけど、私はその目を手元に引き寄せて握りつづす事で、対象を破壊する事が出来る。これだけでも十分危険でしょ？それでお姉様のとった行動は、私を此処に閉じ込める事だった」

「……………成る程な」

詰まる所、フランの力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。

更には精神が不安定でその力を制御しきれないともなれば迂闊に出歩かせる事は出来ない……………って事か

「それで500年近くも家の中か。俺だったら暇過ぎて廃人になりそうだ」

「まあ確かに退屈だったけど、でもそんな時はお姉様のくれたオモチャで遊んだりしてたわ。それももう飽きちゃったけどね」

「オモチャ？」

何だ、見た目相応の遊びもしてんだな。

そう思った俺は次のフランの言葉を聞いて、その思考を撤回する事になる

「そつ。魔法で召喚した魔物なんだけど、それを能力で壊して遊ぶの」

「……ッ」

「……魔物を遊びで壊す。」

一般的な思想で考えるなら誰もが口を揃えて異常だと言うであろう行為を、フランは当たり前前のように言い放った。

よく見ると部屋中の壁には抉ったような跡が幾つもあり、ベッド上に置かれている人形は所々もげている。どれも偶然出来た傷ではなく、明らかに故意である事がわかった

「……フラン、その何かを壊す・傷付ける行為についてお前はこう思ってる？ 例えば罪悪感とか、そういった感情は感じるか？」

「罪悪感？ どうして？ 別に構わないでしょ、『物』なんだし」

「……物」

根本的な価値観の相違。

それがフランの抱える精神異常の正体なのかも知れない。だってらまだコイツを救える可能性はある。俺は確信を試してみることにした

「じゃあフランの姉ちゃんの場合ならどうだ？ もし遊んでた魔物や人形みたいに壊しちまっても何とも思わないか？ 例えお前が手を出さなくても他の誰かが手を出したとしたら？」

これで肯定するならコイツは危険因子。能力と相俟って今後の幻想郷に悪影響を及ぼす可能性のある者として、ブラックリスト入りだ………気は進まないがな

「そんなの駄目に決まってるじゃない……！ 私のたった一人の家族なのよ!!」

「！」

これでハッキリした。

フランは生まれた時から閉じ込められていた為にそれが当たり前になり、精神的に成長した今でも自身の異常性に気付いていないだけなんだ。

多分フランの姉ちゃんもそれに気付いてねエな

「ハッ……そういえばさつき隼斗はクレームがどうか言ってたけど、そういう事なの…!?!」

後は互いの誤解を解くだけ。

要はフランに危険がない事を証明出来ればいい。

丁度いい感じに誤解が生まれてる事だし、利用しない手は無いな

「フラン……お前の姉ちゃんはやっちゃならねエ事をしたんだ。理由は知らんが幻想郷に悪影響を及ぼす異変を起こしちゃった。悪い事をしたら仕置きが必要だろ？」

「…それは……」

「弾幕ごっこは飽くまでお遊びだ。だが『運悪く』、場合によっては『死ぬ』可能性だってある。でも仕方ねエよな？俺だって加減し損ねる事はある」

「っ!!」

俺の手元にあったティーカップが粉々に割れる。部屋の壁に亀裂が入り、同時にフランを覆っている空気が変わった

「…お姉様に手を出したら、殺すよ？」

明らかに目付きの変わったフランは本物の殺気を放ちながら隼斗を睨み付けている

「やってみろチビ」

対して隼斗は全く動じずそれを嘲笑った

「禁忌『レーヴァテイン』」

部屋は爆炎に包まれた

・  
・  
・

く少し前

「アンタが此処のお嬢様？想像してたのと随分違うわね」

「……開口一番失礼な奴だ。おい人間、此処に来る前に私の従者に



会った筈だ。どうした?」

「さっきのメイドの事? なら早々にご退場して頂いたわ」

「……あらそう。で? 貴様は此処へ何をしに来たのかしら?」

「理由なんて一つしか無いでしょうが。外の霧を止めなさい。邪魔だから」

「そういう訳にはいかないわ。吸血鬼にとって日光は天敵なの。これじゃあ満足に外も歩けないのよ」

「知らないわよ、日傘でもさせば?」

「うるさい人間ね。圧倒的な実力差を見せつけければ黙ってくれるかしら?」

「私を黙らせたければマネーを出しなさい」

「ふふつ…: こんなに月も紅いから、本気で殺すわよ」

「こんなに月も紅いのに」

「楽しい夜になりそうね」

「永い夜になりそうね」

――

「禁忌『クランベリートラップ』!!」

フランの周りに複数の魔法陣が浮かび上がり、二色の弾幕が隼斗に集まるように放たれた

「よつと」

弾速自体は然程速くない。

これなら余裕で躲せる

「どうしたー! そんな鈍弾幕じゃ掠りもしねエぞ!!」

「舐めるな……!」

弾幕の間を縫って接近してくる隼斗にフランが飛び掛かる。

幼い見た目に反して彼女も吸血鬼である為、ほぼ一瞬で隼斗の前に躍り出ると、拳を握りしめ一気に振り抜いた

「!?!」

隼斗は受け止めようと手を出したが、予想以上のパワーに空中で踏

ん張ることが出来ず吹き飛ばされた

「……まったく、忘れてた。吸血鬼も一応『鬼』だったな」

激突した衝撃で穴の空いた壁からムクリと起き上がりボヤク隼斗の掌は僅かに痺れていた

「禁忌『フォーオブアカインド』」

宣言と同時にフランから新たに三人の分身が生まれ、弾幕や接近戦を挑んできた

「げっ、そんなのありかよ……!」

うんざりしながらも弾幕を避け、向かってきた1人を迎え撃つ。

だが分身と言っても本体同様の怪力を誇るようで、そう簡単に振り払うことが出来ない

「うおらああ!!」

しかし動きは素人、直ぐに見切った隼斗が捌きからの胴突きを入れてカチ上げた。

攻撃を受けた分身は残像の様に消失する

「はあ…厄介だな、吸血鬼つてのは」

「なら諦めて負けを認めたら?」

「そう言うセリフは負かしてから言えクソガキ」

隼斗は跳躍し、自身初めてのスペルカード宣言を行う

「破道『三ノ火』」

隼斗から放たれた赤・黄・蒼の3種類の弾幕。

それぞれ『赤火炮』『黄火閃』『蒼火墜』の特性を持った弾幕は、一斉にフランに襲いかかった

「こんなもの……っ!?!」

フランは飛んでくる弾幕を弾幕で応戦しながら回避し、すぐに隼斗へと視線を移すが肝心の姿を見失ってしまった

「こっちだ」

「えっ……」

声は背後から掛かり、振り向いたフランが目にした物は、二体の分身を片付け此方に手刀を振おうとしている隼斗の姿だった

「くっ……！」

フランは手刀が首に入るギリギリのところまで自身の身体を蝙蝠に変化させ分散、回避が間に合った

「……分身と言いい形状変化と言いい、便利なモンだな吸血鬼ってのは」  
「その分弱点も多いけどね」

対峙する両者だが、その場に留まったのは一瞬だけ。次の瞬間には互いの拳をぶつけ合っていた

「禁忌『フォーオブアカインド』!!」

再び現れた分身。本来一度の戦闘において同じスペルカードの使用は禁止であるが、それは飽くまで勝敗に妥協が許されるスペルカードルールでの話。つまりこの行為はフランにとってそれだけ譲れない戦いである事の証明だった

「「はああアア!!」」

四対一による接近戦。技術を補うのがむしやらかな手数勝負だが、吸血鬼の力を持ってすれば十分脅威になる

「チッ……！」

このままでは部が悪いと判断し、止むを得ず後方に跳ぶ隼斗。しかしこれはフランの目論見通りであった

「禁忌『クランベリートラップ』!!」

「禁忌『レーヴァテイン』!!」

「禁忌『カゴメカゴメ』!!」

「禁弾『スターボウブレイク』!!」

「!？」

四人同時による一斉攻撃。

地下室は凄まじい衝撃と共に爆炎に包まれた

## 66話 孤独の月

くく

そこは日の光が入らない地下室。

地下室と言っても埃や蜘蛛の巣に塗れた汚らしい場所ではない。しつかり手入れがされていた

『お姉様？此処はどこ？』

『……今日から此処が貴女のお部屋よ』

『えっ……？』

ギイイイと鈍い音が響き扉は閉ざされた。

少女を部屋に残したまま

『お姉様っ!!開けて!開けてよ!!』

小さな手で必死に戸を叩くが、不思議なことに木製の扉はビクともしない

『……フラン、今はこうするしかないの。わかって頂戴』

『どうして!?!私何か悪い事した?だったら謝るから……!だからお願い!』

『……明日また会いに来るわ。お休みなさい、フラン』

やがて扉の向こう側の足音は遠ざかっていった

『お姉様……!!』

くく

「……」

半壊した地下室の一角でフランは昔の出来事を思い返していた

「……少し本気を出せば物なんて簡単に壊れるのに……こうやって破壊しちやえば幾らでも外に出られるのに……」

未だ砂塵の立ち込める視線の先を見つめる。

先程まで自分と『遊んでいた物』は壊れてしまったのか……

フランは途端に込み上げてくる感情に表情を曇らせる

「……馬鹿みたい」

自然とそう呟いていた

「そりや自分に対して言ってるのか？」

「!？」

声のした方を見据える。

煙の向こう側に人影が一つ、ゆっくりと此方に近づいて来るのがわかった

「……アレだけ攻撃したのに……何で……」

「アレだけ？あの程度の間違いじゃねーの？」

ようやく姿の見えた終 隼斗に致命的な傷は見られない。それが単なる強がりでない事は戦闘経験の少ないフランでも理解できた  
「っ!!」

フランはすぐに身構え、首を掻っ切る為爪を振るった

「碌に隙も作らず当たる訳ねエだろ」

「なっ…!？」

隼斗はいとも容易く受け止め、掌をフランに向ける

「縛道『嘴突三閃』」

敢えてスペルカード仕様による縛道を放つ。

フランは縛道を受け後方の壁に礫となった

「くっ…!う、動けない…!？」

両腕と腰を嘴型の霊術に固定され、地に足を付いていない為か上手く力を入れられずジタバタともがいている

「そこで大人しくしてな。俺は本来の目的を果たしに行くからよ」

「ま、待って!!」

フランの制止も虚しく隼斗は踵を返し地下室を後にした

――

紅魔館上空にて、異変解決に來た博麗靈夢と今回の異変を起こしたレミリア・スカーレットは睨み合っていた。

当初は館内で行われていた弾幕戦も、その戦況の激しさから屋外戦

へと移行していた

「チツ……まさか人間がここまで戦えるとはな」

「見た目がお子様でも吸血鬼なのね。逃げ足だけなら相当なものだわ」

「ほざけ!!」

霊夢の挑発にレミリアが動いた。

障害物の無くなった上空を高速で縦横無尽に飛び回り攪乱しつつ弾幕をばら撒く

「鬱陶しいわね!!」

霊夢も弾幕で応戦、更には両者カード宣言を行う

「夢符『封魔陣』」

「神罰『幼きデーモンロード』」

霧の所為で薄暗い紅魔館の上空を幾つもの光弾が飛び交い、辺りを明るく照らす様はまるで打ち上げ花火の様だった

弾幕戦は更に激しさを増していき、お互い次々と大技を繰り出していく

「霊符『夢想封印』!!」

「紅符『スカーレットマイスタ』!!」

そしてここぞとばかりに強力な弾幕を放とうとした瞬間だった

「縛道の二十一『赤煙遁』」

目の前に突然煙幕が発生し、霊夢とレミリアは同時に動きを止めた。

霊夢は不機嫌そうに呟く

「今度は何?」

「……すまん霊夢。ちつと俺と変わってくれ」

「!」

背後から声が掛かり霊夢の肩を誰かが軽く叩いた

「!?……身体が……!」

「縛道の三十七『吊星』」

途端に身体が自由が利かなくなり落下する霊夢を、衝撃緩和の床が受け止めた。

床の上で仰向けのまま空を見上げた霊夢は、そこにいた人物に声を荒げた

「な、何のつもりよ！隼斗……!!」

「選手交代だ。ちよいとやる事が出来たんでな」

「…はあ？」

何訳わからん事言ってるんだ！と怒鳴り散らしたい霊夢だったが、隼斗の掛けた縛道により身体を動かす事が出来ない

「そんなおっかない顔すんなよ。後でちゃんと埋め合わせはするから」

すると霊夢の肩がピクツと動いた

「ウチの御賽銭に100万は入れときなさい。明日までよ」

「高っ!?ケタ2つくらい可笑しいだろ！」

「奪るか奪られるかなら、私は奪る方を選ぶ！」

何処ぞの闇金融の社長みたいな事言いだした霊夢は置いていて、あちらさんも痺れを切らしてる様だ

「茶番は終わったかしら？」

「……馬鹿言え、寧ろこっから始まるんだ。N議員も吃驚な大茶番劇がな」

互いの間合いは10メートルにも満たない僅かな距離。飛ぶことが出来ない俺としては地上で戦う方がいいんだけどな。霊力で足場作るのも面倒だし

「よオ、この霧止めろや」

「断る……つと言ったら？」

「あア？悪ガキにする仕置きなんて昔から決まってるんだろ」

相手の出方を見る必要はない。直前だろうが何だろうが反応して避ければいいだけだからな。俺は空中を蹴り付けて前に出た

「問答無用で拳骨じゃボケえええ!!」

「野蛮ね……!」

俺の接近に合わせてレミリアは距離を開け、飽くまで間合いを保ちつつ弾幕を打ち出してきた

直感で接近戦は分が悪いと判断したか？

足場を作りながら回避していく俺をレミリアは嘲笑った

「あらあら、貴方空も飛べないの？」

「誰でも得意不得意はあるもんだろ」

とは言うが流石は吸血鬼だけあって速い。地上なら兎も角、空中じゃ足場を作らなきゃならねエ分どうしてもラグが発生してあと一歩追いつけない

「罫符『炸裂ネット』」

蜘蛛の巣型の霊力打ち出す破道『伏火』を使い、ネット状にして打ち出した

「くだらないわね！」

レミリアは爪を構え飛んでくる伏火を斬り裂いた

「はいドカンッ」

「!？」

その瞬間バラバラになったネットが赤く点滅し、一気に炸裂した。

伏火に赤火砲を練り合わせた起爆網だ

「…ッ！」

そして爆炎の煙から勢いよく飛び出したレミリアの頭上では既に隼斗が掌を翳していた

「縛道『嘴突三閃』」

「チツ、こんなもの……っ!？」

レミリアは射出された三つの嘴の内、二つを何とか躲すが一発が左腕を捕らえ地上に打ち付けられてしまった

「くっ……しまった、油断を……！」

「これで戦いやすくなった」

左腕と地面を固定している嘴を何とか引き抜こうと力を込めるレミリアの目の前に隼斗が降り立った

「ちよつと……！視界の外に消えるならせめて動ける様にしなさいよ！」

霊夢は仰向けの姿勢のまま上空で身動きが取れない為、地上に降りた隼斗達の様子を見る事が出来ない。

そんな霊夢の怒声も虚しく隼斗はスルーした



「縛道『塞』」

俺は未だ地面に縫い付けられたレミリアに近づき、その翼に縛道を掛けて動きを封じた

「このっ…!!」

それと同時に嘴を引き抜いたレミリアが拳を固めて殴り掛かってきた

「モーションがデカすぎ。此処の門番に武道でも習ったらどうだ？」

「ぐっ…!？」

突き出された拳を最小限で躲し、レミリアの額に小さな衝撃波（破道の一『衝』 ※弾幕としては余りにも弱いため、通常攻撃として使用）を当て軽く吹き飛ばした

「!?翼が……貴様何をした……!!」

体勢を立て直そうと飛翔の姿勢に移ったレミリアは、自身の翼の異常に漸く気がついたらしい

「一々飛ばれちゃ面倒だからな。動きを封じさせて貰った」

「人間風情が……!すぐに戻s……」

バシユウウツ!!

激昂したレミリアの顔のすぐ横を高威力の弾幕が通過した。

弾幕ごっこ用ではない莫大な霊力が込められた光弾は、後方の壁を消し炭に変える

「よそ見してていいのか?後ろ取ってるぞ」

「!？」

弾幕により倒壊していく館の壁に思わず視線を移した一瞬の隙に背後を取られ、驚愕の表情を浮かべるレミリア。

眼前には既に彼女の頭部を吹き飛ばすだけの霊力を込められた指先が向けられている

「……叫ぶ暇があるならもう少し集中しろ。今の、死んでたぞ」

「……ッー!」

レミリアは初めて感じる強者の圧力に身を強張らせていた。

彼女とて吸血鬼の末裔、実戦による戦闘経験が無いわけではない。

だが此処まで圧倒された事は今までなかった

だからこそ慢心していた。所詮人間程度、自分の足元にも及ばない存在だと思っていた

先程戦った巫女も予想以上に強かったが、勝てない相手だとは思わなかった

「どうした、このまま動かずに死ぬ気か？」

「あっ……ああ……」

声を出そうにも言葉が上手く出てこない。

動こうにも殺気に当てられ身体は思うように動いてくれない。

レミリアは戦意を喪失していた

「……消えろ」

「うっ…!!」

レミリアは思わず目を瞑った

「禁忌『レーヴァテイン』!!」

レミリアに矛先を向けていた隼斗目掛けて、真紅の剣が突き立てられた。

直前に反応して後方に跳んだ隼斗は突然の乱入者を見て笑う

「ふっ……やっとお出ましか」

「えっ……っ？」

金髪のサイドテールに特徴的な翼。

そして彼女の代名詞とも言える真紅に燃え盛る大剣

「お姉様、大丈夫……？」

「フランド……っ!？」

495年の時を経て、フランドール・スカーレットは外の世界に降り立った

67話 気高き月

「フラン……！貴女がどうして此処にいるの！すぐに部屋に戻りなさい……！！」

「……残念だけどそれは聞けないよ、お姉様」

「何を言ってるの！あれ程外は危険だから出るなど言ったはずでしょう!?!」

レミリアは本来この場に居るはずのない妹の存在に驚きつつも叱りつけた。

一刻も早くこの『危険』な場所から遠ざける為に

「今危険なのはお姉様の方でしょ!!」

「……!」

しかし妹であるフランもまた激昂する。

自身に、そして姉に迫った脅威はまだ目の前にいるのだから

「来て早々姉妹喧嘩か？お前ら随分余裕だな」

二人の吸血鬼の脅威。

単身で紅魔館に乗り込み、主であるレミリア・スカーレットを大した被害を受けることなく追い詰めた男

「……フラン、下がりなさい。私の獲物よ」

「碌に空も飛べない状態でどう戦う気？下がるのは寧ろお姉様でしよ」

「フラン……っ!!」

こうなれば力尽くで。

そう考えたレミリアは直ぐに行動を起こそうと動く

「……私にも守らせてよ」

「!?!」

レミリアは言葉を失った。

フランが言ったその一言はそれだけ予想だにしていなかったものであり、自分の知っている妹の印象とは異なっていたからだ

「……495年。私はその時をずっと地下室で暮らしてきた。外の世界を知る事も出来ず、誰かとの交流なんて必要最低限。ハッキリ言つてとてもいい暮らしとは言えないね」

「……ッ」

苦虫を噛み潰した様な表情で瞳を閉じるレミリア。恨まれて当然の事をした。

しかしそれを本人の口から聞く事が辛かった

「でも私は知ってたよ。それも全部私を守る為にしてくれてた事だつて」

「……えっ?」

思わず固く瞑っていた目を開け、背を向けているフランに視線を移した

「私は危険な能力を持って産まれて来た。元々吸血鬼つてだけでもその存在は危ぶまれてる。それ故に私は特に危険因子として狙われるのは火を見るより明らかでしょ?」

「フラン貴女……どこでそんな知識を……」

「そんなもの図書館に行けば幾らでも手に入るよ。実際『パチュリー』からもそれとなく聞いてるしね」

『パチュリー・ノーレッジ』

レミリア・スカーレットの友人であり、隼斗が紅魔館地下にある大図書館で見かけた紫カラーの女性。

種族は魔女で、魔法の知識や技術に於いては相当の実力者である。

フランの地下室の結界は彼女が張った術式で、当然その『強度』も調節できる

「私はずっと守られてきた。それがどんな方法だろうとお姉様達に守られてきたの……だから今度は、私が守る為に戦う番。此れだけは譲れないわ!!」

フランは再び紅い大剣『レーヴァテイン』を構えた。剣が纏っている魔力はフランの感情に呼応するかの様に強力になり、炎は激しさを

増す。

そんな彼女の背中をレミリアは唯見つめていた。その表情に苦悶や悲しみといった様子は無い

「待ちなさい、フラン」

その足で妹の隣に立つ

「お姉様……？」

「此処を支配すれば貴女を安心して外に出してあげられると思っていった。……私は……変に力が入りすぎていたのかも知れないわね」

紅い霧に覆われた空を見上げ、今一度目の前を見据える

「フラン、やはり貴女を戦わせる事は出来ないわ」

「……でもっ!!」

「『二人で』。戦うわよ、フラン」

「!!……………うん……!」

お互い手を取り合った姉妹は再び隼斗と対峙した。隼斗は微笑を浮かべながら語りかける

「溝を埋めた二人が共闘か。お前ら少年誌で主人公やれるぞ」

「残念、私はラブコメの方が好きなの」

「生憎と少女漫画は苦手なんだ。絵のタッチとか乙女チック過ぎるべタベタな展開とかな」

「あら、面白いわよ？今度パチエに頼んで貸してあげましょうか？」

「いや、遠慮しとく」

まっ、此処らで茶番は終えてもいいんだけどな。折角燃える展開になってきたんだ。

最後まで楽しまにや損々♪

「いいぞ。二人纏めてかかって来い」

「フラン、気を抜かないように。私に合わせなさい」

「わかってるよ、お姉様」

両者睨み合いが続く中、紅魔館の時計台の針が重なり、正午を報せる鐘が鳴り響いた

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」

「禁忌『レーヴァテイン』!!」

同時に魔力を帯びた真紅の槍が、紅く燃え盛る真紅の剣が隼斗目掛けて振るわれた

「破道『双蓮蒼火墜』!!」

隼斗は両掌に靈力を収束させ、より一層強力になった蒼火墜を二人に向け放った

## 68話 紅い月の終わりに

「はああアア!!」

レミリアを中心に魔法陣が浮かび上がり、地上にいる隼斗に向け弾幕が射出されていく

「闇雲に打ったって当たんねェよ!」

隼斗は前後左右に駆け回り、その一瞬後に弾幕が地面に着弾していく

「じゃあコレは!」

迫り来る弾幕を躲しながら徐々に距離を詰める隼斗の頭上にフランが現れ幾つもの魔法陣を形成し、レミリア同様に弾幕を文字通り雨の様に降らせた

「残念、Speed up!」

しかし隼斗は此処で足裏に力を込めて地面が抉れ飛ぶほどの脚力で一直線に駆け抜けた。

当然弾幕は既に誰もいない地面に落ちていく

「速っ!」

「吸血鬼を振り切るなんて……どんな生き物よ……!!」

フランが驚きレミリアが呆れ気味にツツコミを入れる。それと同時に振り向き背後に魔法陣から形成した盾を展開する

「いい反応だ!」

直後に後方から隼斗の放った弾幕が盾に着弾した。いつの間にかレミリア達と同じ高さまで跳躍して次の攻撃に移ろうとしている

「予報『嵐 時々 雷』」

隼斗の翳した掌から竜巻状に広がる広範囲弾幕。更にはその台風の目とも言うべき中止からは雷撃が大量に飛んでくる。

大きく動けば竜巻が、かと言って中心に逃れば雷撃が襲う鬼畜弾幕だ※

※破道の五十八『嵐』 + 六十三『雷吼炮』

「迷惑な天気ね、……フラン!」

レミリアがフランに指示を出すと、フランは急いで後方に下がった  
「神術『吸血鬼幻想』!!」

そしてレミリアもスペル宣言。

大玉弾幕から徐々に拡散していく弾幕で、隼斗の攻撃を相殺していき。

しかも相殺するのは自身に向かってくる弾幕だけに絞り、同じ直線上に移動したフランにも弾幕は当たらない

「フラン今よー!」

「禁弾『カタディオプトリック』!!」

隼斗の弾幕終了と同時にフランが飛び出し、辺りに小弾幕を撒き散らす大玉を連射する

「チツ……!」

攻撃直後のインターバルの隙を突いて打ち込まれた弾幕に、止むを得ず地上に避難する隼斗だが、着地地点にレミリアが既に待ち構えていた

「必殺『ハートブレイク』」

「破道『廃炎』」

レミリアは魔力を帯びた光の槍を隼斗の心臓目掛けて投擲、隼斗は円盤状の炎を打ち出し両者の攻撃は相殺……

「なっ……!?!」

だが相殺した筈の槍の影から全く同じ軌道のもう一本が飛び出し隼斗を捉えた

「あつつぶねッ……!」

ギリギリ反射が間に合い胸の数センチ手前で槍を掴み取ることに成功した隼斗は、直ぐさま着地し、後方から迫って来ていたフランの弾幕から逃れた

「ふう………今のは割とヤバかったな」

疲労とは別の汗を拭いながら上空のフランと距離をとったレミリアを見上げる

「……結構本気で攻撃してるつもりなのに此処までやるなんてね」

「ホント、博麗の巫女が可愛く見えるわ」



彼女等の方も流石に息が上がってきているのか、疲労の色が見える  
「こうなったら余力が無くなる前に一気に強力なのを打つしかないわ  
ね。…フラン！」

「うん、行くよお姉様！」

二人はお互いの距離を離し其々の頭上に巨大な魔法陣を浮かべる。

魔法陣からは眩い光が発し、霧の影響なのか紅い閃光が辺り一帯を  
照らし始めた

「ちよつとおおっ!!なんかエラク光ってない!?何が起こってるのよ  
!!」

「うおっ!なんだこりゃあ!?!」

上空で身動きが取れないままの霊夢が叫び、同時に紅魔館の窓から  
魔理沙が驚きながら顔を出した

「おい魔理沙!?!上に霊夢が転がってるから一緒に離れてろ。彼方さ  
んも本気らしいからな」

「隼斗!?何がどうなってるんだよ…!それに霊夢が転がってるって…  
!?!」

「ああ、俺が術掛けたから身動き取れねえんだ」

「いやマジで何やってんだよ!?!」

「いいから行け。あの二人が空気読んでくれてる間にな」

魔理沙が上空を見上げると、見た目幼い少女二人がその姿とは不釣  
り合いな魔力を発しながら魔法陣を展開して此方の様子を眺めてい  
た

「つつ!……ああもうわかったよ!その代わり後でちゃんと説明しろ  
よな!!」

魔理沙はぶつくさ言いつつも箒に跨がり一気に飛翔、言われた通り  
霊夢を担ぎ上げて此処を離れた

「魔理沙!?!アンタ今まで何処にいたの!?!…ってかどこ行く気よ!」

「私もよくわかんねーよ!」

遠くから軽い口論が聞こえるが、まあそれは置いておくことにした  
隼斗は、着ていた羽織を脱ぎ捨てた

「人間ってとことん騒がしい連中なのね」

「賑やかでいいだろ？アイツらといると毎日が飽きないよ」

「ふふっ、ますます外に出るのが楽しみになって来たわ」

朗らかな目で霊夢と魔理沙を見送った三人は再び意識を戦闘へと戻す。

既にレミリアとフランは魔法陣への供給を終え、いつでも技を放てる状態にあった

「これが最後よ。精々足掻いてみなさい、人間」

「隼斗、中々面白かったわ。でも勝つのは私達よ！」

「ガキンチョが一丁前に上から言ってくるじゃねエか。なら遠慮なくやってやるよ！」

隼斗の身体から爆発的に高濃度の霊力が溢れ始め、着ている衣服の肩口から背中側に掛けてが弾け飛んだ。

やがて身体を覆っていた霊力は手足へと移り、その圧縮された霊力を纏った

レミリア達が技を放ったのはそれと同時に

『『レッドマジック』!!』

『QED』495年の波紋』!!』

二人の放った弾幕は波紋状に広がり、視界一面を埋め尽くすほどに高密度・高濃度の魔弾が一斉に襲いかかる

「っ！」

隼斗は跳躍し、自身に吸い込まれるように向かってくる弾幕に向け拳を振り抜いた

「奥義『瞬間』」

ゴオオオツ!!

極限まで圧縮された靈力は拳の一撃に合わせて一気に炸裂し、目の前の空間ごと弾幕を掻き消した

「おらっ、宣言通り拳骨いくぜ……!」

「ツツ!!」

自分達の全力が破られたのも束の間、あっという間に距離を詰めた隼斗が拳を振り上げてそう宣告する。

フランは反射的に顔を手で覆い、レミリアは妹を庇うように抱き締めめた

コツンツ                      コツンツ

「……っ!」

頭を軽く小突かれた二人が瞳をゆっくり開けると、溜息交じりに隼斗が立っていた

「これに懲りたらちゃんとして反省しろよ? 悪ガキ共」

「えっ……?」

呆気にとられている二人を他所に、隼斗は身体を覆っていた靈力を解除して踵を返えそうとした

ハッと我に返ったレミリアが叫ぶ

「ちよ…ちよつと待ちなさい！」

「ん、どした？あつ、自己紹介か？俺は終 隼斗だ」

「いや聞いてないわよ?!そうじゃなくてどういうつもり?!」

「何が？」

「だ・か・ら〜!!」

イマイチ話が噛み合わず不思議がる隼斗に腹を立てたレミリアが、空中にいなながら地団駄を踏む。先程までのカリスマ性は何処へやら「隼斗、どうして止めを刺さなかったの？折角のチャンスだったのに」カリスマブレイクした姉に代わり、フランが尋ねた

「お前らなんか勘違いしてない？なんで止めを刺す必要があるんだよ」

「?…隼斗つて霧を止めるためにお姉様を討ちに来たんだよね？」

「ああ、文句を言いに来た。そしたら拒否されたから弾幕勝負した。此処までOK？」

「う、うん」

「いいか？弾幕ごっこつてのは飽くまで揉め事が起こった時の解決策の一つだ。お前らはそれを受けて俺に負けた。この時点でこれ以上お前らを痛めつけても不毛な争いにしかならねーんだよ」

「じゃ、じゃあお姉様をどうこうするって言うのは……」

「お前らの勘違い」

まあ半分以上は隼斗が意図的に仕組んで持っていた事だが、当の本人に悪びれる様子はない

「……良かった……」

フランは安心すると同時にプツリと意識を手放し崩れ落ちた

「フラン……」

慌ててレミリアが抱き抱えると、フランからは静かな寝息が聞こえた

「……緊張が解けた事と力の出し過ぎによる疲労だな。暫く休ませりや問題ねーだろ」

容態をみた隼斗がそう答えると、レミリアは胸を撫で下ろした

「……一つ聞いていいかしら？…こうなる様に仕向けたのは貴方ね？」

「……妹には後で謝っとけよ。それと力のコントロールも教えてやれ」

「！……ええ、そうね」

今度こそ背中を向けた隼斗は地上に降り、館の外へ歩き出した

「……礼を言うわ。 柊 隼斗」

## 69話 異変の後は

紅霧異変から一夜明けてまたも昼時。

此処紅魔館では朝から倒壊した壁や、内装の復旧作業が行われていた。

作業にあたるのはメイド長をはじめとする妖精メイドやホフゴブリン、召喚された下級悪魔など

「よし、こんなもんか」

その中に1名、この住人ではない男の姿が

「こんな事なら霊夢と魔理沙も連れて来るんだったな」

言うまでもない、今異変の解決者である柊隼斗である。

何故この面々に混ざっているのかと言えば、今朝隼斗は紅魔館を訪れていた。

理由は異変解決後に行われる『宴会』の話をするため

幻想郷の新しい取り決めとして、異変が発生し、それが解決に至った場合はそれまでのいざこざを水に流すと言う意味で宴会が行われる。そして異変を起こした者が宴会の酒持ちを担う事になる

しかし紅魔館では異変から1日と経っていないとはいえ、未だ復旧作業中であり人手が足りない状態だった。

そこでメイド長である『十六夜 咲夜』から『お前も壊しただろ、手伝え』的な事を言われ現在に至る

「そーいやあのメイドも涼しい顔して結構容赦ないって霊夢が言ってたな」

「霊夢といいメイドといい、最近の娘は凶暴だn…」

「誰が凶暴よ」

突然真横から飛来したナイフをノールックでキャッチする隼斗。

噂をすればのメイド長がにこやかな笑顔で現れた

「いきなりナイフ投げんなよ危ねーな」

「作業の進行具合はどうかしら？」

「スルーかよ……作業つつつても瓦礫運びだろ？とつくに終わって

るよ」

※隼斗は修復術が使えない為、瓦礫撤去などの重作業

「あら意外に早いわね。なら次は庭の掃き掃除でもして貰おうかしら」

「えっ、俺一人で？」

「心配ないわ、何名か妖精メイドを寄越すから」

「……心配なだけで」

・

「あつ！馬鹿ゴミ集めてるところに着地すんな!!」

・

「おいそこさつき掃いたぞー」

・

「チャンバラすんな！男子中学生か!!」

・

「はあ〜やっとな終わった」

裏庭にある花壇の淵に腰掛け溜息を漏らす隼斗。妖精メイド達はとつくに何処かに行ってしまった、完全放置状態だった。

すると不意に後方から気配が一つ

「……フラン」

「よくわかったね」

「昼間なのに動いてていいの？」

「直接日の光を浴びなきゃ大丈夫だよ。それに今までのこともあつて決まった生活サイクルがないからね」

フランは陽気に笑いながら隼斗の隣に腰掛け、世間話が始まる

「まだ昨日の今日だけど、どうだ？ここの奴らとの仲は？」

「あはは、なんか初登校した日のお父さんみたいな質問ね」

「少なくともお兄さんって歳じゃねーからのう」

見た目は二十代前半だが、恐らく幻想郷内じゃ年長者の一人である隼斗は、やや貫禄を意識して答えた

「うん、思ってたよりも良好だよ。お姉様やパチュリーに咲夜、後門番の美鈴も気さくで面白かったし。あつ、でも他のメイド達からは若干怖がられてるかな？」

他にも聞けば聞くほど出てくる話、経った1日でそこまで進歩があったのなら大したもんだと感心する隼斗に、今度はフランから質問がきた

「そう言えば隼斗は何しにここへ来たの？」

「……それが聞いてくれよフラン」

隼斗は今朝からの経緯を話した。

成り行きで手伝えと言われ、渋々承諾するもやる事は雑用並に地味な作業。それでもコキ使うメイド長、妖精メイドに振り回されたのだ、自分は宴会の話を持って来ただけなのにと、少しばかりの尾ヒレもトツピングして説明した

「ぶつ、それは災難だったね」

「……吹き出してんじゃねーよ。まあ、それもあと少しで終わりそうだし別にいいか」

隼斗は腰を上げ軽くストレッチしながら側に立て掛けてある竹箒を掴んだ



「そろそろ戻るわ。これ以上サボっているとまたナイフが飛んできそうだからな」

「…う、うん」

若干寂しげな声色で返事をするフランに、隼斗は「…それから」と付けたし、

「今日の宴会、お前も来いよ？場所は博麗神社って所でやるから」  
「！」

——さつきまで無風だった裏庭に一陣の風が吹く

それはフランの髪を靡かせ、隼斗の集めていた塵を天高く舞い上げた

「ぬわ————っ！」

## 70話 宴会

日が沈み辺りがすっかり暗くなる頃、宴会は開始された

此処、博麗神社に集まったのは巫女である博麗霊夢を始めとし、隼斗・霧雨魔理沙と紅魔館組、そして何故か八雲紫とカメラを持った烏天狗まで出席している

卓上には宴会料理とレミリアの用意したワイン入りの酒樽が並べられ、宴会参加者の面々（特に霊夢）がそれをかつくらう

「私ワインって初めて飲んだかも。結構イケるわね！」

「こら、程々にしないと後で痛い目見るわよ？」

「あはははは！霊夢お前顔真っ赤だぞ」

ワインをガバ飲みする霊夢を紫が叱るが、本人は忠告を聞く気がないらしい。魔理沙も大分酒が回っているのか、いつもより声量がデカ

「貴方達相変わらず喧しいわね。もう少し優雅に出来ないの？」

「なんだよパチュリー。いいか？宴会に必要なのはなくくく！」

標的をパチュリーに変更した魔理沙がクドクドと宴会たる何かを説き始めた。

パチュリーは『しまった…！』という表情を浮かべたが、部下に絡む部長と化した魔理沙のマシガントークは止まらない

そんな様子を横目で静観している隼斗は少し離れた席で他の面々と呑んでいた。

向こうと違ってこっちのメンバーはパチュリーの言う『優雅』と言うものがある

その一人であるレミリアがやや瞳を細めて尋ねた

「本当に騒がしい連中ね。いつもこういうの？」

「いつもあんなテンションだったらこっちの身が保たねーって。まあ酒の席くらい勘弁してやってくれ」

なんだかんだ素面の隼斗が答え、それを見たフランも

「隼斗は全然顔に出ないわね。お酒強いの？」

「……そこそこだ」

(ホントは能力が働いて、酔う感覚はあつても『酔っ払う』って事が無いんだけど)

「いや〜貴方方方といるとネタに困りませんね〜」

さも当たり前のように混ざっている烏天狗にここでやっとな隼斗から指摘が入る

「……で、何でお前もいるわけ?」

「そんなツレないこと言わないで下さいよー。今回の異変の事を記事にしたいので取材に来たんです!」

「帰れ」

一蹴するも一度火のついた記者は引き下がらない

「そんな事言わずに、ちよつとくらい良いじゃないですかー……あや?」

隼斗はネタ帳片手にグイグイくる射命丸文の頭を鷲掴みにし、向こうの大荒れゾーンへ放り投げた

「おつ、天狗んトコの記者か!なんだ?お前も私の話が聞きたいか?」

「い、いや……私が聞きたいのは異h……」

「そうかそうか!よし、座れ!!」

「いやだからそうじゃn……」

「こらー!!境内は無許可での撮影はお断りよ!どうしてもと言うなら然るべき手続きを済ませなさい!!(※金払え)」

「あややー!」

文の最期を見届けた隼斗は何事も無かったかのように話題を戻した

「そう言やメイド長は?」

「咲夜なら裏で料理の追加や後片付けをしてるんじゃないかしら?」

「…あのなーレミリア。いくらメイドつつつても宴会くらいゆっくりさせてやれよ」

「失礼ね、私が命令した訳じゃないわよ。アイツが『自分から』やってるのー!」

(……アイツ職業病じゃね?)

「あつ、そう言えば私も隼斗に聞きたい事あるんだけど」

「ん？なんだフラン」

「隼斗は私の能力知ってるよね？」

フランの力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。

対象の最も緊張している『目』を引き寄せ、握りつぶすことで対象を破壊することが出来る

「それがどうかしたか？」

「…実は異変中何回か使ってるんだよね、隼斗に能力」

「ああ、そゆことね」

隼斗も質問の意図を理解し納得する。レミリアは未だ首を傾げているが、つまりフランが言いたいのは『能力を行使したのに何故お前は無事なんだ？』である

「俺さ、効かないんだよそう言うの」

「？…って言うとな隼斗の能力が関係してるの？」

「興味深いわね。確か『超人になる程度の能力』だったかしら」

「ああ。大まかに見ればこの能力は『異常なまでの身体強化』が目立つけど、細かく見れば色々特典が付いてんだ」

「特典？」

「まあそれは病に掛からなかったり、毒が効かないだとか色々なんだけどさ、その中の一つに『自身に直接干渉する能力の無効化』がある。多分それがフランの能力が効かなかった原因だな」

わかりやすく例を挙げるならば、仮に相手に『催眠をかける』能力者がいたとしよう。

催眠をかけるには対象の脳に能力特有の波を送り、干渉させる事で眠らせたり、意のままに操ったりできる訳だが、隼斗はこれを無効化する。

同じ様に『相手の身体に憑依できる』能力者がいたとしても結果は同じ。要は隼斗自身に直接影響の出る能力は全て無効化されるという事になる

「じゃあ咲夜の『時間を操る程度の能力』も効果無いわけか……貴方何

でもありね」

「逆に間接的な能力は普通に効くぞ？能力によって打ち出された炎とかは流石に無効果できねーからな」

「ふふーん、でも良いの？そんな簡単に手の内バラしちゃって。次は負けないかもよ？」

フランは悪戯を思いついた子供のように笑みを浮かべ、レミリアもそれに続こうとするが隼斗は次の言葉で一蹴する

「俺のパンチ喰らいてーか？」

「ナンデモナイデス」

「ったく」

隼斗は立ち上がりその手にワイン入りのグラスを二つ持って宴会場を後にした

＜アノ…ソロソロ シュザイ ヲ…

＜イイカ？エンカイ ツテ イウノハナ？

＜アナタ サツキカラ ナンカイ オナジコト イツテルノヨ！

＜アツ！ソウイェバハヤト カラ オサイセン モラツテナイ！！

＜ハイハイ ワカツタカラ…

「…：…本当に騒がしい連中ね」

「はは、そのセリフは今日だけで何回聞いたか」

裏の調理場に避難した隼斗は、咲夜と共に愚痴を漏らす

「一息入れたらどうだ？ほれ」

「一息入れるのにワインってどうなの？」

「折角の宴会なんだ。一杯くらい味わっとけ」

「…：…ずぼらな召使いにしては中々気がきくようになったじゃない」

「あんなトコこつちから願ひ下げだ」

カツンッ

「お疲れ」

## 71話 異変の兆し

紅霧異変から半年が経ち、季節は冬真っ盛り。幻想郷は白銀の世界に包まれる

「やつぱ雪積もると景色が変わるなー」

魔法の森にて隼斗は薪に使う手頃な木を求め歩いていた。夏と違い冬の木々は葉が付いていない為、一々筆らなくていい分楽ができる訳だ

「おつ、これなんか良いな。よっしゃ」

お目当ての木を見つけ早速切り倒す。

この行為が森林伐採に該当するかは定かでは無いが、無闇に行っている為ではないのでセーフと言えばセーフなのだろう  
しかしここでまさかのアクシデント。

切られた木の倒れる方向に誰か歩いて来ていた

「!？」

「やつべ……!」

隼斗は急いで間に滑り込み、倒れてくる木を支えた

「悪い、大丈夫だったか？」

「え、ええ……」

危うく下敷きになりかけたのは、ブロンドの髪にまるで西洋人形のような格好をした少女だった。

何故か肩付近には似た様な格好の人形が浮いている

「完全に配慮不足だった。ホントごめんな」

「いいわよそんなに謝らなくても。実際何も無かったんだし」

謝罪に対し快く許した少女は、大木を片手で支える隼斗を一見した  
「貴方随分力持ちなのね。妖怪って感じはしないし人間かしら？」

「まあ人間かって言われると怪しいトコあるけど一応人間だ」

「ふーん……私はアリス・マーガトロイド。貴方は？」

「柀 隼斗だ。『マーガリン』って変わった名前だな」

「……私はバターの代用品か何かかしら？『マーガトロイド』よ……! それに長いからアリスでいいわ」

「(……マーガトロイドの方が変わってると思うけどな。いや西洋の名前なんて知らないけど)そうか宜しく。アリスはこの近くに住んでるのか?」

「ええ、少し前からね」

「ならご近所さんだな」

「あらそうなの?こんな瘴気の濃い森に住んでる変わり者は私か白黒の魔法使い位かと思ってたけど」

(魔理沙か)

すぐに該当者を頭に浮かべる隼斗。

魔法使いは兎も角、色を言われただけで誰だかわかる人物もそう居ないだろう

「隼斗って言ったわね。貴方この後時間あるかしら?」  
「?」

・  
・  
・

「はいどうぞ」

「どうも」

お洒落なカップに注がれた紅茶と手作りクッキー、部屋を見渡せば数多の西洋人形が並べられている

「やけに人形が多いな」

「人形作りが趣味なの。どうかしら、可愛いでしょ?」

「夜に子供が見たら泣きそう」

「失礼ね!」

怒るアリスに合わせて隣で浮いている人形も怒ったような仕草をする。先程からその手に持っている槍の様な武器は戦闘用だろうか。

だとするとコイツは人形で戦うのか?と疑問視する隼斗

「さつきから隣で浮いてる人形も手作りか?」

「ええ、そうよ。魔法で操る事で人間とほぼ同じ動きも出来るし、複数の人形を同時に操る事も可能なの」

「魔法……って事はやっぱり魔法使いか」

「魔界出身のね」

「魔界？」

隼斗はいきなりファンタジックな言葉が出てきたと言いかけたが、自分が今いる世界こそそれを体現した場所だと言うことを思い出し引っ込めた

「じゃあアリスは魔族って訳？」

「広い意味で取るならね。でも私は魔界人と言われる人間の系統よ」

「へえ、魔界か。どんなトコなんだ？」

「種族や造形が異なっている以外は此方とあまり変わらないわよ？強いて言うならやたらと好戦的な連中が多い位かしら」

「そりや毎日退屈せずに済みそうだ」

「かと言って行きたいとも思わねーけど」と付け加え、紅茶を啜る隼斗に今度はアリスから質問がきた

「じゃあ私も聞いていい？貴方が唯の人間じゃない事はわかるけど、幻想郷はそれなりに永いのかしら？」

「まあな。創造以前から知ってる」

「!?……創造以前って貴方幾つよ？」

「おっ、なんか懐かしい質問だな。少なくとも一億と数百年は生きてるよ」

「はっ……？」

今度こそ目が点になるアリス。目の前のおちやらけた男が自分より遙かに年上だった事もそうだが、自身の知っている知識と大きく相違があった

「ちよ、ちよつと待って……人間って精々80年余りしか生きられない種族じゃなかったかしら？」

「そうだな。だから俺はちよいと特別なんだ」

「……何者なの？貴方」

「別に？何処にでもいる団子好きの好（高）青年だよ」



――

霧の湖

「あつーカエル発見!!」

魔法の森と隣接している大きな湖の岸辺で巣穴から出てきた蛙が氷漬けになる

「チルノちゃん、無闇に凍らせたなら可哀想だよ」

「平気平気。すぐに水に浸ければ元通り……ありや?」

凍った蛙を掬い上げたものの、手を滑らせ地面に落としてしまった。

勿論蛙は粉々に砕け散った

「あーあ、またやつちった。蛙は弱っちいからな……おっ!」

特に悪びれる様子もなく辺りを見渡す『チルノ』と呼ばれた妖精は、目の前の森の中で大きな丸太を担いでいる男を発見する

「よーし、次の標的はアイツに決めた!」

「や、やめた方がいいよ。あの人強そうだし」

「最強のアタイに敵はないわ!」

相方の忠告を聞くことなく男に向けて氷の弾幕を放った

「あん?」

男は動く事なく弾幕は着弾した

「あ、当たった?」

「よーし!命中ー!!やっぱりアタイってば最強ね!」

トンツトンツ

歓声をあげる少女の肩を誰かが叩いた

「おっ?誰だーアタイの背後を取るのは!!」

少女は勢いよく振り返る

「最強だったら簡単に背後取られんな」

そこには身の丈が六尺を越え、眉間に皺を寄せた男が立っていた  
「のわっ!?お、お前どうして…!?」

驚いたチルノは慌てて自分が攻撃した方向を見ると、先程までこの男が担いでいた丸太だけが転がっていた

「か、変わり身!さてはお前忍者だな!」

「もし俺が忍者なら後ろ取られた時点で首飛んでるぞ。……そんで?いきなり攻撃してきた理由を聞こうか」

「こ、こうなったらアタイの必殺技で!喰らえ…!凍符『パーフェク…』」

ゴチンツ

再びチルノが弾幕を放とうとすると、間髪を容れずに拳骨が飛んできた

「~~~~!~~~~!」

「ち、チルノちゃん!」

「一度弁解のチャンスをやったのに更に攻撃しようたあい度胸だ」

「くうく!よ、よくもやっ…」

「もう一発いくか?」

「ひっ…!」

再び振り上げられた拳を見て思わず両手で頭を覆うチルノ。傍では相方の大妖精がどうしていいかわからずオドオドしている

「…………お前名前は?」

「…………へっ?」

「俺は隼斗って名前だ。はい君の名前は?」

「ち、チルノ」

「…………そうかチルノ。腕白なのは結構だけどな、いきなり攻撃つてのは良くねーぞ?今みたいに痛い思いするのはお前だし最悪殺されたって文句言えねーからな」

「…………うん」

「…………なんか言うことあるか?」

「……ん」

「ん？」

「……………ごめん」

消え入りそうな声だったが確かに隼斗の耳には入った

「よーしよく言えたな。ほれご褒美だ」

「わっ！ 飴!!」

隼斗は懐から飴玉を取り出しチルノの手に乗せ、ついでに隣の大妖精にも投げ与えた

「ほら、お前さんも」

「あ、ありがとうございます」

菓子を与えてからというもの、隼斗の人柄もあつてか意外と打ち解けるのに時間は掛からず、三人揃って岸辺で座り、飴玉を転がしている

「お前らいつもこの辺で遊んでんのか？」

「うん。他の友達と遊んだり蛙を凍らせたり」

(……蛙を?……子供って時々エグい遊びするよな)

「隼斗さんはあの森に住んでるんですね? 妖怪に襲われたりはしないんですか? 昼間でも暗いし」

「まあ彼処の環境は妖怪にとっても余り宜しくないらしいからな。滅多な事じゃ襲われねーよ」

「もし出てきてもアタイが蹴散らしてやるわ!」

「お前のその自信は何処から出て来るんだ」

そこまで言うとな隼斗は口の中の飴玉を噛み砕き立ち上がった

「あれ、隼斗もう行くの? 遊ばないの?」

「いい加減日も暮れそうだからな。また今度遊んでやつから」

空を見上げればいつの間にか日が大分下にあり、雪まで降り出して  
いた

「そんじやあな、二人とも」

「はい、ありがとうございます」

「次は負けないからね！」

別れを済ませ、丸太を担ぎ直した隼斗は自宅へ向け歩き出す

(雪道って歩き辛いよな……溝とか見えねーし。まっ、春までの辛抱か)

・  
・  
・  
・

――数ヶ月後の五月現在。幻想郷は未だ白銀に染まったまま、春が訪れる事はなかった

## 72話 終わらぬ冬

幻想郷に冬が訪れてから数ヶ月。  
年も開け、春となり段々と気候が穏やかになっていく季節だ。……  
『通常ならば』

——未だ幻想郷に春は来ない

それは即ち『異常』であり、この幻想郷ではそう言ったことを総称して『異変』と呼ぶ。

異変が起こればそれを解決する者が現れる

その一人である博麗 霊夢は前回同様、己の勘を頼りに進んでいく  
「あーホント嫌になるわ。なんでこうも寒いのかしら」

「そりゃ冬だから仕方ないぜ」

「とつくに春でしょうが！」

ぶつくさ文句を垂れる霊夢と行動を共にしているのもう一人の  
解決者、霧雨 魔理沙だ

「アリスに聞いた話だと春度が風上から流れてきてるそうさ。それを  
辿れば春に行き着くんじゃないか？」

「……その話本当？」

「うわっ!? アンタ何処から湧いたのよ！」

魔理沙の証言と同時に何処からともなく、紅魔館のメイド長・十六  
夜 咲夜が現れた

「湧いた言うな、虫じゃないんだから……いい加減館の燃料が尽きそ  
うなの。お嬢様方が寒い思いをしない為にも、早急に事態を收拾する  
必要があるわ」

「吸血鬼って寒さにも弱いのか？」

「別段弱いという訳でもないと思うけど。そもそも人間より体温が低  
いから余計に寒く感じるんじゃないかしら」 テキトー

「まあ何にせよ目的は同じな訳だな。さっさと終わらせて花見でもし

たいぜ」

「首謀者から酒代ふんどくってやるわ！」

三人は各々の目的の為、異変解決に向け春度が流れて来ていると言う風上を目指す

――

「春度？なんじゃそりや」

「簡単に言えば春の一部だね。これを集めることで春そのものを手に入れることが出来ると言われているんだ」

霊夢等が異変解決に向かう中、隼斗は香霖堂を訪れていた。そこで霖之助から春度の事を聞いた訳だが、飽くまで偶々であり、隼斗自身が異変解決の為の情報収集に訪れた訳ではない。そもそも彼は環境の変化をあまり受けない為、今回の様に長く続く冬についても軽視していたのだった

「じゃアレか？このヤケに長い冬ってのは……」

「ああ。何者かが幻想郷中の春度を集めて春を独り占めしている……って言うのが濃厚じゃないかな」

「って事は異変だな。霊夢達に声掛けて俺も行こうかな。暇だし」

「霊夢なら多分もう向かってるんじゃないかな？ついさっき魔理沙が「異変だー!!」って飛び出していったし」

「それを先に言えよ！」

隼斗は椅子から跳び上がり、粗末な挨拶を済ませると出入口の戸を開いた

「まあ、何にせよこのままじゃ桜を拝めず花見も出来ない。解決に向かうなら僕からも宜しく頼むよ」

「……………」

――『桜』

その単語を聞いた隼斗の頭に、数百年前の記憶が蘇る。自身含め、

多くの犠牲を払った忌まわしい記憶

途端に胸騒ぎを覚えた隼斗は、急ぎ足で店を出て走り出す

(……まさかとは思うが……ちよいと急ぐか)

そして森から一気に跳躍すると、霊夢達の気配を辿って空を駆けた

・  
・  
・

異変解決組・霊夢御一行は道中出くわした雪女及び騒霊三姉妹を打ち倒し、ある場所に辿り着いていた

『冥界』

死して尚、魂魄となつた霊達が行き着く場所であり、本来ならば生者は立ち入ることが出来ない世界である。

その奥には白玉楼と呼ばれる屋敷があり、そこには冥界を管理する姫が住んでいるという

さて、今異変である『奪われた春』、そして春度はその屋敷から流れており、そこへ続く長い階段を越えなければ辿り着けない

「アンタが此処の番人ってわけ？」

「…一応役職は庭師よ。そんな事より生きた人間が此処に何の用？」

その階段の先で待ち構えるは、長刀と短刀を腰に差した銀髪の少女。傍には白玉の様な霊体を連れている

「単刀直入に言うわ。とつちめられたくなければみ今すぐ春を返しなさい。こっちは寒くてウンザリしてるのよ……！」

「そうはいかない。あと少しで幽々子様の望みが叶う。だから貴方達が持っている僅かばかりの春度も頂くわ」

「随分勝手な言い草だな。親の顔が見てみたいぜ」

「……魔理沙。貴方がいつもウチの図書館来て何してるか覚えてる？」

どちらも引く気はなく、銀髪の少女は刀の柄に手を掛けていている。霊夢はお祓い棒を構え、魔理沙・咲夜も八卦炉とナイフを手に取った

「ちよつと待った」

ー!!

その場の全員が声のした方を見遣る

「漸く追い付いたぜ。まさか冥界が発生源とはな」

奥に続く長い階段の先を眺めると、幻想郷中の春が其処へ集約されている様だった

「隼斗……アンタ何しに来たのよ!」

霊夢が此処一番に反応して声を上げる。理由は言わずもがな、目の前の男にはイトコ取りの前科がある

「……お前ら先行け」

噛み付く霊夢に反応する訳でもなく、隼斗は先に進む様促した。

香霖堂を出てから現在進行形で感じている『悪い予感』は、長年培ってきた第六感と相俟って昔からよく当たるからだ

「!………はあ、二人とも行くわよ」

「へっ? いいのか?」

「いいから……ここは隼斗に任せて私たちは大本を叩くわ」

「……一体なんだって言うの?」

霊夢はそんな隼斗の心境を瞬時に読み取り、先程とは打って変わって素直に従った。これも偏に博麗の名を継ぐ巫女として、隼斗の元で修行した者として、同じ様に鍛えられた『勘』がそうさせていた



「待て！此処を通す訳には……！」

『白雷』

先に進む霊夢達を追おうとする少女目掛け、指先から一筋に伸びる雷を放つ隼斗。

飽くまで威嚇の為、少女の足元を小さく吹き飛ばしたに過ぎなかったが、お陰で矛先が隼斗に向いた

「!?……邪魔を……！」

「悪いけどお前さんは此処で俺と留守番だ。アイツらが戻ってくるまでな」

「……怪我するわよ？」

「おいおいその刀は飾りか？役に立たねえ脅し文句並べる前に鋒くらいこつち向けてみる。それでやっと迫力の『はの字』位は出るだろうぜ、お嬢さん？」

「……貴様ツ!!」

隼斗の挑発にまんまと掛かった少女は腰の長刀を抜刀して構えた

「お前が使うにや偉く長い刀だな。ちゃんと振れるのか？」

「妖怪が鍛えたこの『楼観剣』に斬れぬものなど、あんまり無い！」

イマイチ締まらない決め台詞と共に斬りかかってくる少女。

見た目に反して速度は速く、鋭い斬撃を繰り出してきた

「直線じゃ当たらねえぞ」

振るわれた刀の刃先数センチ手前まで下がり紙一重で躲す。続いて繰り出される斬撃も同様に、完全に見切った動きで躲していく

「はあっ！」

「……っ」と

しかし急激に斬撃の軌道が変わり、隼斗の上着の襟を掠めた

「……今のを躲しますか」

(初太刀は囷か……それにこの太刀筋どつかで……?)

「ならばッ！」

少女はもう一本の短刀『白楼剣』に手を掛け長刀の斬撃に合わせて抜刀、十文字からの連撃に移った

(さつきより動きが速くなった……こつち(二刀流)が本命か)

「逃さない！幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』!!」

一旦刀の間合いから外れようと大きく距離を離れた隼斗へ、追撃としてスペル宣言を行う少女。横薙ぎに振るわれた剣閃から弾幕が打ち出された

「ッ！」

隼斗は飛んでくる弾幕に対し、拳を固め振るうことで全て打ち落とす。

これには少女も驚き一瞬刀が止まる

「お返しだ！」

「ぐっ?!」

少女は急接近した隼斗の回し蹴りを刀を使いガードするも、勢いを止めきれず軽く吹き飛んだ。

その衝撃に顔を顰めるが、ジンワリと痺れが広がる腕に再度力を込め、着地と同時に斬り掛かった

「人符『現世斬』!!」

「フー……ッ！」

二刀による連続斬りを、常人には目視出来ない速度で繰り出す。隼斗は一度息を吐いてから止め、少女の短刀の鏝付近を掴み、もう一方の長刀の背の部分足裏で地面に抑えつけた

「なっ?!馬鹿な?!」

(この剣術……やっぱりそうか……)

驚愕の表情を浮かべる少女を他所に隼斗はある確信を抱いていた

「なあ、お前に剣術教えたのって『魂魄 妖忌』って名前じゃなかったか?」

「!……おじい……お師匠様を知ってるの!」

「ビンゴか……って事は今異変を起こしてるのは幽々子で間違いないな」

尤も隼斗は、場所が冥界であるため大凡の見当は付けていたものの、その動機がわからなかった。精々春を奪って出来ることなど気候を穏やかにするか、『桜』が咲く位だ

「!?」

「……………」

ある仮説を立て、一人狼狽する隼斗を怪訝に思う少女だが、此処で刀を抑えている力が抜けていることに気がつく

「はああああッ!!」

楼観剣を抑えつけている脚を、同じく足裏でズラし、一気に引き抜くと同時にその勢いのまま回転斬りを行った

「……………」

刃は隼斗の顔を軽く斬りつけ、頬からは赤い血が流れた

「……………」これが最後よ。今すぐ此処から「おい」……」

少女の忠告に割って入ったその声は、今までのおちやらかした声色とは大きく違っていた

「……………」お前達が春を集めた動機は何だ?」

「……………」ツツ!!」

頬を伝う血を拭う事もせず、しかしその圧力に少女はたじろいだ

「……………」白玉楼にある『西行妖』を満開にするため……よ」

「!!」?

少女の口から出たその名前。

過去の記憶がフラッシュバックし、次いで先に行かせてしまった霊夢達の事を思い出す。

色々な感情が渦巻く中、一つ確かな事があった

——もう一度あの妖怪桜が満開になれば、再び惨劇が起こる

「……………」お前には悪いが、もう時間は掛けられない。進ませて貰うぞ」

「何を……………」がつ!!」

次の瞬間には隼斗の姿を見失い、一瞬で少女の視界が暗転する

「間に合えよ……！」

隼斗は一気に階段を駆け上がり、白玉楼を目指した

## 73話 冥界の姫君

冥界に建つ広大な屋敷『白玉楼』。

庭には桜の木が大量に植えられており、春が冥界に集約されている今、桜の海が広がっている。

しかし数ある桜の中で一本だけ、その枝に花を咲かせていない一際大きな桜の木があった

「うふふ、中々頑張るじゃない貴女達」

その桜の前で優雅に舞いながら弾幕戦を繰り広げているのは、白玉楼の主・西行寺 幽々子だ。彼女は亡霊の身でありながら、此処での永住を許された冥界の管理者であり、今異変である春を奪った首謀者でもある

「ゴイツっ……何て弾幕の数よ!!」

「しかもやたら読みにくい軌道で飛んでくるぜ……うわつと!」

「だからってこのままじゃジリ貧よ。こつちからも仕掛けないと……!」

相対している霊夢・魔理沙・咲夜の三人は空間を埋め尽くさん勢いで飛んでくる弾幕に苦戦していた。

まるで桜の花弁の様に美しく、独創的な弾幕は霊夢達に中々反撃の隙を与えてくれない

「くっそー!やらつればなしは性に合わないぜ……!　　ー魔符『ミルキーウェイ』!!」

弾幕の間を縫って魔理沙は星型弾幕を放ち、幽々子の弾幕を相殺していく

「それには同意。　　ー幻符『殺人ドール』!!」

続いて咲夜も能力と併用したナイフを弾幕として飛ばす。

二人掛かりの弾幕で幽々子の弾幕は徐々に薄くなっていく

「今だ霊夢!!」

「わかってるわ!!」

直ぐさま魔理沙が声を飛ばす。

霊夢は正面に空いた突破口を猛スピードで突き進み、幽々子の前に躍り出た

「終わりよー……霊符『夢想封印・集』!!」

「……あらまあ」

近距離、しかも追尾型の弾幕が放たれる。

幽々子は回避行動を取ることなく、弾幕は一箇所に固まり炸裂した

「どうよ……これで春を返す気に………っ!」

霊夢は途中で言葉を切り、身構えた

「ちよつと油断しちゃったわね」

煙の向こうから声、そして何事も無かったの様に幽々子は浮いていた。

自身の周りには妖術で形成した障壁が展開されている

「久々に本気だしちやおうかしら♪」

「!？」

ゾワツと霊夢の背中に寒気が走った。

幽々子は笑っている。いや、寧ろ上機嫌に微笑んでいると言ってもいい。

だが彼女から放たれる殺気のような圧力は、『そういつた経験』を積んでいない霊夢の動きを遅らせるのには十分だった

「桜符『完全なる墨染の桜』」

「しまっ……!」

霊夢がハツとなった時には目前まで弾幕が迫り、咄嗟に結界を張って防ごうとする

「恋符『マスタースパーク』!!」

迫り来る弾幕を後方から射出された巨大レーザーが薙ぎ払い、気がつくくと自身が居た位置より遙か後方に移動していた。

目の前には魔理沙の背中があり、隣では咲夜が霊夢の肩を抱いていた

「二人とも……」

「霊夢、大丈夫?」

「油断するなんてお前らしくないぜ!」

霊夢は初めてその身に受けた本物の殺気に、内心戸惑っていた。別に相手を怖いとは思わない。

しかし身体は、本能はそれを恐れてしまっていた。

自分の手に視線を落とすと、僅かに震えが残っている。拳を固く握り締め、もう一度目の前の敵を見据える

「……何て事は無い。自分は博麗の巫女だ

震えは止まった。

霊夢は立ち上がり再び臨戦態勢をとった

「アンタをぶっ飛ばすわ。決定事項よ!」

その言葉に若干の怒りを含ませながら、その身に霊気を纏わせ、境界陣を形成した

「……あらあら、それは楽しみね〜♪」

飽くまで余裕を崩さない幽々子は、扇子を手に舞う。背後に陣が浮かび上がり、其処から大量の『死蝶』が出現した

両者引き金に指を掛けた状態。

そんな緊迫した局面に呼応するかの様に、巨大な桜の木は淡い光を帯び始める

『西行妖』が反応している……満開までもう一押し、つてところか

しらっ?」

「それが満開になるとどうなるっての…?」

「さあ?でもあの桜の下には『誰か』が眠っていて、満開になるとその封印が解かれると古い書物に書いてあったの。興味が湧かない?」

「興味本位で異変起こされちゃ商売あがったりよ!」

「霊夢、貴女商売してたっけ?」

「万年金欠じゃ無かったか?」

「そこ二人嫌い!アンタらどっちの味方よ!!」

仲間内で集中砲火を受けている霊夢を尻目に、幽々子は振り返り西行妖を見つめる。

西行妖の枝には花こそ咲いていないが、少しずつ『満開』に近づいている

「……これだけ進行すればいいかしらね」

幽々子は小さく呟き、死者を蘇生させる『反魂の術』の術式を組み上げ始めた

「縛道の六十一『六杖光牢』」

「!？」

幽々子の胴体に六本の光の帯が突き刺さり、その動きを封じた

「……幽々子、久々に会ったってのに少々おいたが過ぎるんじゃないか?」

——隼斗は嘗ての友、そして西行妖と再び対峙する



## 74話 死を呼ぶ桜（前編）

六杖光牢により、拘束されたままの幽々子を微弱な妖気が覆う  
フツ

「隼斗……何故貴方がここに……」

幽々子は自身を縛る縛道に対して、『死を操る程度の能力』を使用。  
術自体に『死』を与え、その効力を消し去った。

平然と術から抜け出した幽々子は、隼斗を見下ろし、そう問いかける

「……幽々子、お前『アレ』がどんなモンなのかわかってんのか？」

隼斗は目の前の西行妖を顎で指した。

だが幽々子は頭上に？マークを浮かべ、首を傾げた

「妖怪桜って言うのは知ってるけど、それ程危険なものなのかしら？」  
「……」

幽々子には生前の記憶が無い。

故に自分が如何に危険な事をしようとしているかがわからない。

生前の幽々子を殺したのは紛れもなく西行妖であり、幽々子自身だ  
西行妖は生物を死に誘う呪いの桜。一度世に解き放たれば甚大な被害が出ることは明白だった

「悪いがお前の友人として、止めさせてもらおうぞ……！」

隼斗は再び幽々子を拘束する為に縛道を掛けようとする

……ズズツ

「！」

隼斗は異変に気付き、その手を止めた。

周りは誰も気付いていない。勘のいい霊夢でさえも、余程集中しなければ感じ取れない程のごく僅かな変化

「……西行妖から妖気が漏れ出していた

「ツッ！」

隼斗が其れに気付けたのは、以前にその肌で感じ、その身に受けたものだからなのか……

「霊夢ツッ!!」

「……!? な、何よ……!?」

突然怒鳴り気味に自分を呼ぶ隼斗に、霊夢は珍しく吃りながら答え  
た

「直ぐに結界の準備をしろ!! とびきり強力なヤツだ!!」

「は、はあ? いきなり何言つて……ツ!」

(気付いたか……! 今ならまだ抑え込める……その為には……)

隼斗はこの場にいる面々を見て、即座に策を考え始めた

「咲夜! お前の能力で時間の流れを遅く出来るか?」

「え、ええ……あまり広範囲は無理だけど」

「だったらあの桜の木にソレをやってくれ!! 大至急だ!!」

「隼斗! 一体なんだってんだよ!」

未だ事態を呑み込めない魔理沙が叫ぶ。

隼斗は簡潔に説明を始めた

「全員聞け! 目の前の桜を見ろ!……アレは数百年前に俺や紫が苦闘の末に封印した西行妖つつう強力な妖気と『生者を死に誘う』力を持った妖怪桜だ」

『!?』

幽々子含め全員が耳を疑った。

それは勿論、『死に誘う』なんて言う物騒極まりない力を持っている事もそうだが、何より『あの隼斗と紫が苦闘した』という事実が信じられなかった

この二人は幻想郷でもトップクラスの実力者。その両者を苦しめた真正正銘の『化物』が、世に解き放たれるかもしれないのだ

「その封印が今解けかけてる。すぐに封じ込めなきや取り返しが付かなくなるんだ。……幽々子、それでも続けるか？」

「……ゴメンなさい、まさか……そんな危険を孕んでいたなんて……」

事の重大さを理解したのか、幽々子は謝罪の言葉を口にする

既に霊夢は西行妖を囲うための結界を練り上げている。咲夜も同様だ

「……既にやっちゃった事だ。無かった事には出来ない。だったらお前は どうする？」

「隼斗……西行妖を封じ込めるにはどうしたらいいの？」

それは罪滅ぼしか、はたまたケジメをつける為か……幽々子はすぐに切り替え今自分が成すべき事を見出した

「……霊夢と一緒に結界を張れ。封印は俺がやる。魔理沙、お前は二人のサポートだ」

「わかったわ……」

「任せとけ！」

西行妖を見れば先程よりも気配が濃くなっており、その周囲に黒い霧の様なものが発生していた

「……そう簡単にやらせてはくれねェか」

やがて黒い霧は人の形へと変わり、西行妖を護るように配置された。

その手には同じく霧を纏った剣や槍を構えている

……と此処で霊夢達から声が掛かった

「隼斗……っちは準備出来たわよ!!いつでも行けるわ！」

「よし。お前ら、気引き締めて掛かれよ。行くぞ…！」

隼斗の号令に合わせ、霊夢と幽々子が結界で西行妖を囲い、咲夜が能力による時間の遅滞を行う。これは覚醒の進行を遅らせる為、そしてその邪気を他所に広げない為の処置だ

ゾワツ

西行妖はそれでも抵抗をやめない。自らの妖力を波の様に拡散させ、内側から結界を破ろうとしている

「くっ…結構強いわね、コイツ…！」

「これがまだ流れ出てる力の一部だって事が信じられないわ…！」

「空間作用のある私の能力すらも抵抗するか…！」

早くも苦戦を強いられている三人に、控えていた複数の黒い兵士が襲いかかった

「恋心『ダブルスパーク』!!」

魔理沙は二つの巨大レーザーを放ち、黒い兵士を纏めて吹き飛ばした

「あの黒いのは私に任せてお前達は自分の事に集中しろ！…って何っ!？」

魔理沙は驚愕した。

自身の代名詞とも言える『マスタースパーク』、しかも二つ同時に打ち込んだにも関わらず、黒い兵士達は立ち上がった。

所々欠損箇所はあるものの、妖気が供給され元通りになる

「…面白エー！根比べといこうぜ…!!」

再び攻撃を行う魔理沙

「……」

隼斗はそんな戦闘が繰り広げられている上空にて、封印術式を組み上げ始める

(戦況はあまりよくねエか。もう少し保ってくれよ……！)

封印術式を組むには多大な集中力が求められる為、どうしても戦場から離れる必要があった

「！」

見ると、黒い兵士の数が徐々に増え始めていた。魔理沙も必死に迎え討つが、倒したそばから復活する為、単なる消耗戦になってしまっている

「はあ、はあ……つたく……キリがないぜ……！」

黒い兵士は一息つく間も無くワラワラと集まって来るため、魔理沙は魔力を回復させる事が出来ず、疲弊と魔力の枯渇で倒れるのは時間の問題だった

「！魔理沙、後ろ……！！」

「!?」

霊夢が声を飛ばす。

動きの鈍くなった魔理沙の攻撃の隙をついて複数の黒い兵士が眼前まで迫り、その鋭く尖った鋒を突き立てようとしていた

「しまっ……！！」

「魔理沙……っ！」

最早回避は間に合わない。

隼斗は組み上げ途中の術式を打ち切り、助けに入ろうとした

『『マスタースパーク』』

ゴオツと、魔理沙の目の前を極太レーザーが通過する。目前まで迫っていた黒い兵士は跡形もなく消し飛ばされた

「全く、中々来ない春を求めて来てみれば……随分賑やかじゃない」

突然の乱入者。

赤いチェック柄のスカートに癖のある緑髪、真紅の瞳を輝かせ、突き付けている日傘からは硝煙が上がっている

「いつまでも春が来てくれないと、ウチの子達が咲いてくれなくて困るの。だから可及的速やかに春を返しなさい」

笑顔の裏に殺気を貼り付け、『風見 幽香』は淡々と言い放った。  
つと同時に上空にいる隼斗の元まで飛翔した

「……貴方にしては珍しく苦戦している様ね、隼斗」

「幽香……何でお前が此処に……ツいや、この際理由はいい。お前の力を借りたい」

「それは下の連中に手を貸せという事かしら？」

「そうだ。あの妖怪桜を止めねえと被害は幻想郷だけじゃ留まらない」

「…被害？」

幽香はその単語に反応し、改めて西行妖に視線を向けた

「……一つ教えなさい。あの桜の木は花々にも影響が出るの？」

「間違い無く、な」

「……そう」

幽香は隼斗に背を向け西行妖を見下ろした。

その表情から笑顔は消え、標的を前にしたハンターの様に鋭く睨みつけている

「それは許せないわね……！」

その声は殺気を帯びており、『彼女にしては珍しく』明確な怒りを露わにしていた

## 75話 死を呼ぶ桜（後編）

幽香は地に降り立ち、西行妖に向けて歩き出した

「あの、さつきは助けてくれてありがとうな」

その途中で魔理沙が声を掛け、礼の言葉を述べると、幽香は立ち止まることなく視線だけを向け

「別にいいわ。貴女が死ななかつたのは偶々だから」

「…どう言う事だ？」

「初見の貴女を敵が味方が判断できる訳無いでしょ？…って事よ。巻き込まれて死にたくないならそこを動かないことね」

「なっ…!?!」

驚く魔理沙に冷やややかな瞳でそう言い放った幽香は、前方の西行妖に日傘の先端を突き付ける

「くだらない茶番は此れまでよ。さつきと消えなさい…!」

その言葉に反応するかのように西行妖を取り巻く黒い兵士は一斉にその矛先を幽香に向け、襲いかかった

「お、おい…!」

それを見た魔理沙が慌てて助けに入ろうとした瞬間、一番前を走っていた黒い兵士の集団の首が刎ねられた

「あら、意外に脆いのね♪」

いつの間にか集団の真上まで移動していた幽香が、内の一匹に日傘を突き刺しながら着地する。見ると、今の今まで魔理沙の前に立っていた幽香は、植物で模った分身であった

「来なさい、一対多勢は大歓迎よ」

続く群衆を薙ぎ払いながら幽香は舌舐めずりをする。その光景に魔理沙は茫然と眺めるしかなかった

霊夢等も同様に、遠目から幽香を観察していた。此れも西行妖の意識が幽香に向いているからこそできた余裕である

「あの『妖怪』……急に現れたと思ったら黒いのと戦い出すなんて、一体何者かしら？」

「……アレは確か花の妖怪ね。幻想郷内でも相当力の強い大妖怪だってお嬢様が言ってたけど……聞いてた通りだったわね」

「あつ、また一角が吹き飛んだ」

「あの戦いっぷりからして余程の戦闘狂かしら？怖いわ〜」

「嘘つけ亡霊」

（よし出来た……！紫のと比べて大分時間が掛かっちゃったが、幽香が来てくれて助かったな）

漸く封印術式を組み上げた隼斗は、下の様子を伺った。幽香は相変わらず集団相手に一步も退く事なく寧ろ善戦している

隼斗は霊力の足場から飛び降りると、幽香の真横に着地した

「……封印術式とやらはできたのかしら？」

「ああ、今し方な。……そっちの様子はどうか？」

「愚問ね。私がこの程度の奴らに負けるはずないでしょう？」

「そりや悪かったな。……後は野郎に封印術式をぶち込んでやるだけだ。サポート頼むぜ」

「……まっ、仕方ないわね。この借りは大きいわよ？」

二人は西行妖を前に再び身構える。

隼斗の掌には封印術式の印が浮かび上がっており、それを西行妖本体に叩き込むことで、再封印が完了する。



故に隼斗は、その術式を保ったまま本体に接近する必要がある為、無駄な戦闘は出来なかった

ーゾワツ

「!!」

その瞬間、西行妖から発する妖気の質が変わった。今まで至る所に散らばっていた意識が、纏めて一点に向けられたようなプレッシャー「な、何だ？黒いのが一箇所に集まってやがる…!」

次に隼斗等が目にしたのは、現在数十匹にまで増えた黒い兵士が、二つの形を成す様に集まり始める異様な光景

「……おいおいマジかよ」

ゴキゴキツと鈍い音を発しながら黒い兵士は、二匹の巨大な巨人兵となった。

身の丈はざっと見ても十間はあり、腕は両腕合わせて計六本。其々剣や槍に加え、盾も持っていた

「……何がどうあっても封印されたくないようね」

「……やるしかねエ。行くぞ…!!」

ブオオンツ!!

同時に駆け出す二人は、早速飛んできた一匹目の剣による斬撃を、身を屈めて躲す。

だがその速度は巨大な見た目に反して極めて速く、二人とて余裕を持って躲し続ける事は困難だった

「チツ…!」

幽香は舌打ちして一匹の斬撃を弾くと、その頭部まで一気に跳躍し、日傘でぶち抜いた

「…!?抜けない…?!」

だが刺し入れた日傘を逆に絡め取られてしまい、横から盾による殴打を受け、吹き飛んでしまった

「幽香アア!!……ッ!」

下手に攻撃する事が出来ない隼斗は、吹き飛ばされた幽香に駆け寄ることも出来ず、唯巨人兵の攻撃を躲すしかなかった

(くそッ! 普段ならこんな奴ら……だがここでハマしたら全てがパーだ。何とか隙を見て接近しねェと……!!)

隼斗が必死で感情を押し殺しながら策を見出そうとした時だった

「恋符『マスタースパーク』!!」

「人鬼『未来永劫斬』!!」

宣言と同時に、巨大レーザーと無数の斬撃が巨人兵二匹を捉えた

「やっぱり黙って引き下がるなんて出来ないぜ……隼斗! デカブツは私が何とかするから隙を見つけて一気に畳み掛ける!!」

「誰だか知らないけど、これ以上幽々子様のお屋敷で好き勝手させない!!」

魔理沙と銀髪の少女は其々巨人兵の前に躍り出た

「魔理沙……銀髪抜刀齋……!」

「誰が抜刀齋よ! 私には魂魄 妖夢って名前があるんだから、何処ぞの人斬りと一緒にしないでくれる……!」

何だかんだ初めて名前を明かした妖夢は、隣で吹き出している魔理沙に若干の殺意を向けながら尋ねた

「この黒い巨人は何なの?」

魔理沙は二カつと笑い一言で答える

「敵」

「なら斬り捨てるわ」

魔理沙は箒で飛び上がり距離を保ちながら、得意のパワー弾幕を放つ

妖夢は呼吸を整え、振られる攻撃の一つ一つを見切り、そして斬撃を加えていく

だが二匹の巨人兵の狙いは飽くまで隼斗一人。二人の攻撃など二の次にその猛威を振るった

「おい白玉娘！しつかり止めろ!!」

「貴女こそ！……って言うか白玉娘って何!?!」

「お前ら喧嘩してねエで集中しろっての!!」

巨人兵は頭が吹き飛ぼうが、身体に風穴が空こうが本体を黙らせない限り永遠に倒す事が出来ない。魔理沙も妖夢も、何とか足止めするものの、後一步足りなかった

「はあアア!!」

ズガアアアツ!!

一匹の巨人兵の腰から上が、横一閃に両断される。更にその力無くズリ落ちる上半身に日傘の先端を突き刺し、そのまま『マスタースパーク』を照射、バタバタと動く下半身を残して一瞬で消し炭になった

幽香は額から流れる血を拭いながら隼斗に向け叫んだ

「今よ！行きなさい隼斗!!」

「!」

隼斗は足裏に力を込めて一気に跳躍する

もう一匹の巨人兵が打ち落とそうと腕を振るうが、魔理沙と妖夢が同時に攻撃を行いそれも阻止した

「行けええ！隼斗オオ!!」

「…………あばよクソツタレ!!」

そして隼斗はガラ空きになった西行妖本体に向け、封印術式の組まれた掌底を叩き込んだ

カツ!!

その瞬間西行妖を中心に眩い光が発し、同時に辺りを包んでいた禍々しい妖気も途絶える。黒い巨人兵は先程までの猛攻を止め、煙のように消え去った

光が晴れ、その場には再び封印された西行妖が佇んでいた

## 番外編2 妖夢の憂鬱

西行妖を封印した隼斗は白玉楼にて、幽々子と共に茶を啜っていた。つい数刻前までの奮闘が嘘のように辺りは静かで、庭の池から鯉の跳ねる音さえ聞き取れた。

「いや……まあ、落ち着いて茶なんて飲んでるけどさ。お前反省してんの？一応さつきまで世界の危機っぽい状況だったんだけど」

「ふふっ、美味しいでしょ？そのお茶は毎回妖夢が買って来てくれるの♪」

「……………ああ、確かにな」

早速話を大幅に脱線させた幽々子に、何だかツツコミを入れるのが面倒に思った隼斗は茶を再び含み、同意した。

幽々子のマイペースっぷりは昔からだ

「なあ幽々子。一つ気になってる事があるんだけど」

「なあに？」

「妖忌は？」

「幽居したわ」

「へえー、そうなのか……………はっ？」

そのまま流れで納得しかけた隼斗は呆気にとられた

「幽居って……………どこ行ったんだよ…!」

「さあ？其処まではわからないわね」

驚く隼斗とは対照的に、幽々子は大して気にしていない様子だった。

すると部屋の襖が開き、妖夢が一礼して入って来た

「幽々子様、お茶請けをお持ちしました」

「あら、ありがとう妖夢」

……………?

ふと、隼斗は視線を感じ顔をあげた。

今し方茶菓子を卓上に置いた妖夢が、盆を抱きながら此方を見つめていた

「…何？」

「えっ、あっ…いえ、何でもないです！」

隼斗が目を細めて低音で尋ねると、妖夢は少したじろぎながら弁明を始めた。

尤も隼斗本人は怒っているわけではなく、怪訝に思った為の行動だった訳で、それを見ていた幽々子がクスクス笑いながら妖夢に耳打ちで囁いた

「妖夢駄目よく。無闇にお客様を睨みつけちゃく。隼斗なんて短気なんだから噛み殺されちゃうわよく」

「ひっ…！」

「両手に団子装備してデタラメ吹き込んでんじゃねーよピンクボール擬き」

尚も団子を頬張る幽々子の頬を掌で強引に押しやった隼斗は、立ち上がり部屋の外へと歩き出した

「…：気になることがあるなら、聞いてやるよ」

「！」

それだけ言い残し、隼斗は部屋を後にした

↳ 白玉楼・庭

「よお、来たな」

「あの、隼斗さん…！」

隼斗は屋敷の縁に腰掛けながら後からやって来た妖夢に声を掛けるたが、何故か妖夢の表情が固い

「何だよ、急に畏まっちゃってどうした？」

「…：幽々子様の御友人とは露知らず…：…：先程は…：その、斬りかかってしまい…：…：申し訳ありませんでした!!」

妖夢は謝罪の言葉と同時に姿勢をピンと張り、90度に腰を折りな

がら勢い良く頭を下げた。そのせいで腰に差していた刀の先端が跳ね上がり、傍に居た半霊をかち上げてしまった訳だが……本人は気づいていない

「いいよ」

「そ、そうですよね……本当に何とお詫びして良いk……へっ?」

「特に気にしてねーし。寧ろ挑発したのは俺だしな」

「でも……!」

尚も食い下がろうとする妖夢も気にせず、腰掛けたまままで横にズレた隼斗は、自分の隣をポンポンと叩いた

「まあ座れって。んなトコで突っ立ってないでさ」

「……は、はあ」

・  
・  
・

ザアアアつと微風が桜の木を揺らし、庭中の桜の木から花卉が舞い上がる

「いい景色だな。此処が冥界じゃなかったら俺も越して来たいよ」

「そうですね。此処は毎年春になるとそれは見事な桜が咲きますから。でも掃除するとなると大変なんです。どうしても人手が足りなくて……」

「はははっ、そう言やこのデカイ屋敷に幽々子と二人だけだもんな。妖忌もよく長い間やってたもんだ」

「…隼斗さんは師匠とは何度か?」

「まあな。色々と厳格な爺さんだったけど、腕は確かだったぜ」

「……そうですか。それに比べて私はまだまだですね」

途端に妖夢は落ち込んだように俯いてしまった

「さつきからよくへこむ奴だな。今度はなんだ?」

相変わらず空を見上げたままの隼斗が尋ねると、妖夢は立ち上がり庭の方へ歩き出した

隼斗は視線だけ落としてその後を追うと、何故か腰の刀の鞘口を強く握りしめているのが見えた

「隼斗さん、私ともう一度戦って頂けませんか？」

妖夢は此方に振り向き、隼斗に勝負を申し込んだ。隼斗は今度こそ顔を妖夢へ向けた

「……俺の質問どこいったよ？」

『「真実は斬つて知る」。師匠の教えです』

「その解釈通りならとんでもない教訓だな」

やれやれ…と隼斗は立ち上がり、妖夢の元へ歩き出した。気だるそうにする隼斗に反して、妖夢は真剣そのものだ

「なんだか知らねーけど、戦うつてのは『遊び』の方か？」

『「本気」で！お願いいたします！』

隼斗の言う遊びとは勿論スペルカードを用いた決闘の事であり、妖夢がその言葉をどう受け取ったかは定かではないが、確かに自身の口で『本気』の勝負がしたいと言った

ー否、言ってしまった

「……そうか。なら開始の合図はお前がしてくれ」

隼斗は大して構えることなく妖夢と対峙した。妖夢も刀の柄に手をかける

「では………始m…ツツ!?!」

妖夢は開始と同時に抜刀しようとしたが、それは叶わなかった『遊び』じゃねエなら……仕切り直しなんざねエぞ？」



——隼斗は掌で刀の柄頭を抑え、妖夢の喉元に貫手を突きつけていた

『本気』ってのはこう言う事だ。お前は腕試しのつもりだったか知らんが、その意味を軽く見ないことだな」

「……………戦うどころか、刀すら抜けないなんて……………私は未熟ですね」

そう言って妖夢は刀から手を放した

「……………単純な力量差もあるが、お前さんは些か真っ直ぐ過ぎるな。まあ師匠が師匠なだけに無理もねーけど。もう少し柔軟な戦闘が出来ようになりな。まだ若いんだし伸び代だってあるだろ」

「……………でも、どうすれば……………」

「おいおい、こういう時こそ師匠の教えを思い出せよ」

「あっ……………」

再び抜刀する妖夢。

今度はその手に二刀を握り構えた

「もう一手お願いいたします!!」

「いや、俺そろそろ帰ろうかと……………」

「参ります!」

「……………話聞かねーのは師匠そつくりだな」

ガキインツッ!

キインツッ!

ズガガガガガッ

・  
・  
・  
・  
く屋敷内

グキュルルルル……………

「妖夢くくご飯まだくく」

グキユルルルル……ゴゴゴゴゴゴゴゴツ!!

「ん?雷か?」

「あっ、幽々子様のお腹が……」

「腹の音っ!?!」

## 76話 繰り返す宴

『かんぱーい!!』

カコーンつと景気良くグラスとグラスのぶつかる音が鳴り、博麗神社にて宴会が始まった。面々を見れば、人間から妖怪、オマケに亡霊まで揃っている

本来妖怪退治も兼ねている巫女が住まうこの神社に於いて、妖怪等が集まる事はないのだが、何とも不思議な光景である

「幽々子様、この場にある宴会料理全種を装ってきました。お召し上がりください」

「あら、ありがとうございます。さっ一緒に食べましょう〜!」

ヒュオオオオオオオオオオツ!

大皿山盛りに積まれた料理を物の数ともせず食べ始めたのは、冥界の主である幽々子だ。

まるで掃除機のように食べ進めていくその様は、以前に隼斗が例えた『桃色の悪魔』の様であった

「あつー咲夜アレーアレをとって頂戴!!」

此方では、見た目幼いロリータ吸血鬼がメイドに眼前の食べ物を取るよう強請る

「畏まりましたお嬢様。……どうぞ、お召し上がり下さい」

そう言って差し出されたのは、小さな器に入ったプリン。受け取った幼j……レミリアは嬉しそうにスプーンを手取る

「〜♪」

「あつーお姉様ズルいよー咲夜、私にもお願い!」

その妹であるフランも負けじとプリンを注文した。

よくよく考えれば、宴会料理の中にプリンが混じっているのは可笑しな話であるが、誰もその事を気にする様子はない

「むぐっ!? な、なんだコレー!? 喉が熱い! ど、毒かー!?」

「だ、大丈夫? チルノちゃん!?」

急に喉を抑えて苦しみだしたのは、⑨キャラでお馴染みのチルノ。その傍で大妖精が驚きながら声をかける

「お、おのれ〜! 何処のどいつか知らないけど、このアタイに毒を盛るなんて…! これがお前のやり方かアアア!!」

「……何やってんだお前は」

そんな様子を見かねた隼斗が呆れつつも水の入ったグラスを差し出した

「チルノ、それは毒じゃなくて焼酎な。…まったく飲めねーのに直で飲むからだ馬鹿」

隼斗は焼酎入りのグラスを取り上げ、その中に手渡した水とは別のグラスに入った水を入れた

「ほれ、これで幾らか飲みやすくなったろ」

「……コクツ。! ホントだ!! 隼斗凄い! 流石アタイの子分ね!」

「……焼酎飲んでひっくり返ってちゃ格好つかねーですぜ親分」

適当なツツコミでそう返した隼斗は、本来自分が座っていた席に戻った。

そこには紅白巫女と白黒魔女、七色人形師がそれぞれ酒を片手に談笑していた

隼斗が席に着くや否や、ほろ酔い状態の霊夢がニヤつきながら話しかけてきた

「あつ、お疲れ隼斗。親分の調子はどうよ?」

「異常無く馬鹿だった。いつも通りだ」

「って言うかいつから氷妖精の子分になったんだよー?」

「俺が聞きてーわ」

「それにしても貴方子供の扱いに慣れてるわね。将来良い父親になるんじゃない?」

「何それ口説いてんの?」

「えっ!? 違っ: / / /」

続いて魔理沙、アリスも被せて質問してくる。特にアリスに至っては隼斗の返答に赤面気味だ

「いや冗談だよ。そんなマジに赤くなんなって」

「あははは、アリス何照れてんだよー!」

「て、照れてないわよ!!」

「でも顔赤いじゃない」

「こ、これは……お酒の所為よー!!」

宴会開始から三時間程経ち、そろそろ周りのムードも落ち着いてきた頃。

紅魔館組の面々、特にレミリアとフランからは寝息が立っている。

酔い潰れたチルノと大妖精も、同様に大の字になって眠っていた

魔理沙やアリスも帰る支度を整えている

「そろそろお開きだな。吸血鬼二人は兎も角、その妖精はどうするんだ?」

「放つとけば勝手に帰るでしょ。一応布団だけ掛けて寝かせとけば?」

魔理沙の質問に、珍しく霊夢が介抱を引き受けた。

その言葉を皮切りに他のメンバーもゾロゾロと帰り出す。妖夢がいつの間にか背負っていた風呂敷には、恐らく宴会料理の余りがパツク詰めされて入っているんだろうな……つという事は敢えて誰もツツコマなかった

「いやー今日も飲んだぜ。じゃあまたな!」

「今日はありがとう。また誘ってね」

魔理沙とアリスもそれぞれ別れの挨拶を済ませ帰宅した

「……」

「?……どうかしたの隼斗?」

そんな中、隼斗は一人考えに耽っていた。

怪訝に思った霊夢が声を掛ける。

すると隼斗は不思議な事を口にした

「……なあ、今月に入って宴会って何回目だ？」

「はあ？何よ急に」

「いや、お前違和感無いのか？ここ最近ずっと今日みたいな宴会やってんだぞ？」

「んー、まあ……よくよく考えると確かにそうかも知れないわね……。でも隼斗だって今の今まで普通にしてたじゃない」

「そりゃ、周りが誰一人としてその事を気にしてなかったからな。一回俺が可笑しいのかと思っちゃまったよ」

「…………『異変』ってこと？」

「多分な。まあ、別に害のあるモンじゃねーからその辺該当すんのか微妙だけど」

すると霊夢はため息を漏らし、気だるそうに片目を瞑った

「はあー、長い冬が明けたと思つたら……次から次へとキリが無いわね」

「…………」

……この時、隼斗だけがこの場に漂う微量な妖気に気付いていた

……

↳翌日

霊夢は昨日発覚した異変？の調査の為、幻想郷の空を飛び回っていた。

その間、昨日隼斗から聞いた『幻想郷を漂う妖気』を念頭に置きながら、思い当たる節を探る

「漂う妖気……って具体的に思いつかないわね。…………『妖霧』とか？」

霊夢は進路を決め、霧の湖方向に飛び去った

）

「と言うわけで、御宅のお嬢を懲らしめに来たわ」

「……どう言うわけで？ 一体何なの？」

要領を得ずに放たれたカチコミ宣言に、呆れ半分の咲夜は、霊夢の前に立ちはだかった

「ここんところろずつと宴会が続いてるでしょ？ 流石にこれは只事じゃないと踏んで調査に乗り出したって訳。それに隼斗が言うには幻想郷を妖しい霧が漂ってるって話だし」

何故か『幻想郷を漂う妖気』から、『妖しい霧』に変換されてしまっているが、霊夢の中では似たようなものなのだろう

「妖しい霧……もしかしてそれでお嬢様を？ 幾らなんでも決め付け過ぎじゃない？」

「前科って知ってる？」

「……貴女こそ言い掛かりって知ってるかしら？」

既に戦闘モードに入った両者がぶつかり合う

・  
・  
霊夢等が抗争している時……

「おぼちゃん、みたらしる本追加してー」

「ハイよー！」

隼斗は甘味処で団子を摘んでいた

「漸く出てきたわね！ さあお仕置きの時間よ!!」

「あー？いきなり怒鳴り込んできたと思っただら何を言いだすのやら」

咲夜を倒した霊夢は館内へと進み、レミリアと対峙していた。

相変わらずの無茶苦茶な口ぶりに眉間に皺を寄せるレミリア

「メイドにも言ったけど、ここ最近の宴会は明らかに不自然。何者か  
が意図的に起こしているとしたか思えないわ」

「それが私だと？」

「少なくとも容疑者には当選してるわよ。おめでとう」

「これ程嬉しくない当選も珍しいわね。それで？弁護士は呼べるのか  
しら？」

「呼べるわけじゃないでしょ！」

「相変わらず勝手な奴ね！」

最早ヤクザ巫女と化した霊夢に、割と乗り気なレミリアが爪を立て  
て臨戦態勢をとった

その頃隼斗は……

「隼斗、まだ出来ないのー!？」

「待て待て、もう少しで完成する……よし出来た！」

「うわー！凄いや！氷のチルノちゃんだー!!」

霧の湖で氷像の造形に勤しんでいた



## 77話 旧友との再会

「で、収穫は？」

「不作」

霊夢はため息を漏らし、机に突っ伏したまま答えた。

今夜も今月に入って何度目かになる宴会の為にいつものメンバーが集まっている

「フランから聞いたぞ。紅魔館に殴り込みに行ったんだってな」

「うーん……今回は勘が外れたわ」

「はははっ、霊夢の勘でも外れる時あるんだな」

「皆がガヤガヤと酒を飲み交わす傍、隼斗と霊夢は、徳利に入った酒を口に運ぶ。

既に顔が赤い霊夢は現在に至るまでに、ヤケ酒と称して結構な量を飲んでいるため、隼斗が仕方なく付き添っているのだ

「はあー、後どこ探せばいいのよ」

「……案外、答えは身近な所にあるかもな」

霊夢の愚痴に、隼斗は開いている襖を眺めながらそう言った。

その視線の先には月明かりに照らされた境内の庭が見える

「…何よ、心当たりでもあるわけ？」

「多分な。ちよつとついて来い」

隼斗は立ち上がり、宴会場から庭に出た。

霊夢も渋々後に続き、既に当たりを付けていた隼斗に対して、やや不機嫌気味に質問した

「一体何だったのよ？」

「縛道の五十八『摺趾追雀』」

隼斗は答えることなく翳した掌を中心に陣を形成し、周辺に意識を張り巡らせた

「……………」

集中する為に目を閉じる事数秒。

何かを捕捉した隼斗は、開眼と同時に神社の屋根の上を見た

「……やっぱりな」

「？」

「霊夢、ここで待つてな。今異変の真犯人を引きづり出してやる」

隼斗はニヤツと笑いながらそう告げると、屋根の上まで跳躍。そのまま何も無い空間に向けて語りかけ始めた

「ずっと姿見せねーと思ったたらこんな形で紛れ込んでるとはな」

未だ霊夢の頭の上には？マークが上がる中、隼斗は確信を持ってその名を呼んだ

「随分久しぶりじゃねーか、『萃香』」

「ひひっ、よくわかったね……！流石私が見込んだ男だ」

突如何もない空間へ急激に妖気が集まり、一つの形を成した

隼斗の胸より下辺りの背丈。頭からは大きめの捻れた角を生やし、腰には色々な形をした分銅の様な物をぶら下げている

「……嘗て妖怪の山を牛耳り、強大な力を持って天狗達をも支配下に置いた『鬼』。その鬼達を纏め上げていた長の一人」

『百鬼夜行』伊吹 萃香

「異変を感じた時から正体不明の妖気は感知してた。最初は何者かが誘導効果のある術か何かで操ってるのかと思ってたよ」

目の前に着地した萃香に対し、隼斗は動じる事なく続けた

「……でもまさか、自身を霧状に変えて幻想郷中に散布してるとは思わなかったよ。……お陰でウチの巫女さんもお手上げだ」

下では二人の様子を警戒しながら伺っている霊夢の姿があった。

萃香は一見すると再び隼斗に向き直り、

「ね、ねえ……『ウチの』って事は、まさか隼斗のコレ？」

恐る恐る古典的に小指を立てて聞いてくる萃香に、隼斗は即答する「アホか。ありや弟子の霊夢だ。お前さんが何度も宴会開くたびに場所を提供してくれてたんだから後で謝っとけよ」

「ふーん、なら良かった。よし隼斗、久々の再会だし手始めにチューから……」

「やんねーよ」

隼斗は、口を尖らせて迫ってくる萃香の頭を鷲掴みにして引き離れた。

よく見ると酔っ払っているのか、足元がフラフラ覚束ない。

「つれないなく」っとおちやらかながら離れた萃香は、途端に堂々とした風貌へと変わった

「それで、どうする？確かに私は異変を起こしたし、こうして正体も突き止められた。……彼処にいる嬢ちゃんど戦おうか？」

再び霊夢を視界に入れながら、既に戦闘態勢に移りつつある萃香に、隼斗は笑いながら答えた

「…俺を差し置いてか？」

隼斗から漏れ出す力に、足元の瓦にヒビが入る。その力を肌で感じたのか、萃香は心地好さそうに笑みを浮かべた

「そこなくちや。鬼は酒と喧嘩が大好物ってね……！」

「…ん」

隼斗は顎で庭を指すと、屋根から跳び降り、萃香も直ぐに続いた。

中で宴会中の者たちも、只ならぬ雰囲気を感じ取り、ワラワラと廊下に出てきた

「おっ、見ろよアリス。隼斗の奴ひと勝負するみたいだぜ！」

「アレは、角が生えてる所を見ると鬼かしら？少し前に姿を消したはずだけど……？」

「あら、今夜の宴会は余興付きなのね。咲夜、ワインを持ってきて」

「そう仰ると思ひまして、既に用意してあります」

「ん？アレは……!?す、萃香さん!？」

内何人かはこれから始まるであろう戦闘を楽しむ気マンマンである。

しかし烏天狗の新聞記者だけは、嘗ての上司を前にして驚愕している。

霊夢もいつの間にか縁に腰掛け、酒を飲み直し始めた

「宴会の演し物はなるべく派手な方がいいだろう？」

「だな。いい感じにギャラリも集まってきた事だし。但し境内の物壊すなよ？後で俺が怒られんだから」

「くははっ！喧嘩を前に心踊るのは何年振りか…!!存分に楽しませてもらうよ!!」

「…合図だ」

チャリンツ

隼斗は酒瓶の王冠を指で弾く

ゴオオツツ!!

宙を舞った王冠が地に触れた事を合図に、両者一瞬で間合いを詰め、拳と拳がぶつかり合った

78話 VS 小さな百鬼夜行

「破道の五十七『大地転踊』!!」

隼斗の周囲に岩石が浮かび上がり、一齐に萃香へ向けて放たれた  
「いきなり小細工か…?」

萃香は避けるでもなく、只構える。

すると飛来する岩石は徐々にその形を失い、砂の様に飛散した

「残念、囧だ」

「わかってるよ!」

飛ばした岩と同時に駆け出していた隼斗が目の前に躍り出て拳を振り下ろす。

対する萃香もそれを見越してか後方に跳躍して躲した

隼斗は地面に突き刺さった拳を引き抜き、再び空中の萃香目掛け振るった

ガッ!! と拳の先に萃香の足裏が合わさり、下から上へ向かう撃力が殺される。

そのまま隼斗の拳を踏み台にもう一度後方に一回転した萃香はふわりと地面に着地した

「ありや残念。決まったと思っただけだな。やるじゃん」

「そっちこそ。普通なら拳が潰れてる筈なんだけどね」

萃香は先の攻防時に拳の勢いを利用するのではなく、『一度完全に止めて』から自らの力で跳んでいた

「…ッ!!」

再びぶつかり合う両者。一瞬で間合いを詰められる二人にとって、その場に留まっている時間は1秒にも満たない

ヒュガガガガッ!!

大地から空中、また大地と移動しながら激しい打ち合いが行われ

る。

今夜は無風なのにも関わらず、辺りに小規模は突風が巻き起こり、観戦者達を驚かせた

「うわっ……！……隼斗と渡り合うなんて、何モンだあのチビ」

「コホッコホッ、埃を舞わせないでほしいわね」

「あらパチエ、涼しくていいじゃない。ねっ、咲夜」

「そ、そうですね（ウチじゃなくて良かった……）」

「ちよつとく神社に傷付けないでよー？」

「そらあっ!!」

「……！」

萃香は乱暴にわかりやすく、隼斗の頭部目掛けて大振りに腕を振るった

「なん……ぶっ!？」

隼斗は怪訝に思いながらも軽く反って躲すが、その直後に同じ軌道から伸びてくる何かが顔面にヒットした

「ひひっ、引つかかったなアホめ！」

「おまつ……それ武器だったのかよ！」

隼斗が鼻を押さえながら指差したものは、萃香の腕に括り付けられた瓢箪だった

「コイツは只の瓢箪じゃないよ！何と少量の水さえあれば酒を生成できると言う素晴らしい伊吹瓢箪のだ！」

「……いや、それは聞いてねエよ」

「ほれほれ、余所見してていいのか？」

「！」

隼斗はふと脚に違和感を感じ、視線を下げる。

そこには一尺にも満たない背丈の、ミニマム萃香が何人も纏わり付いていた

「なっ……!？」

「スキあり!!」

意識が足元に向いた隼斗に向け、跳躍からのドロップキックを見舞う萃香。

隼斗は辛うじて腕を挟み込みガードしたものの、吹き飛ばされ後方の木に背中から激突してしまった

「痛ウ〜くそっ……!」

痛みを堪えながら立ち上がると、また脚に萃香の分身が纏わり付いてきていた

「ソのチビ……踏み潰してくれる!!」

隼斗はその内の一人を引き剥がし、地面に投げ捨てる。

そして大きく足を振り上げた

「ウエエエエエン!!」

「……」

途端に泣き出す小萃香に対し、(……流石に気の毒だな)と思った隼斗はゆっくりと足を戻した

「トリヤー!!」

「ぐっ!？」

しかし他の小萃香が隼斗の身体を這い上がり殴りつけてきた。

手のひらサイズの見た目からは想像も付かないほどの力で殴られ、その表情を歪ませる

「わはははは……どうだ!ちっこいとは言え私の分身だ。舐めてかかると怪我するよ!!」

「お、おい!隼斗の奴押されてないか!？」

「あの小さな分身一人一人が鬼の怪力を持つてるみたいね……!流石にキツイんじゃないかしら……」

「隼斗……こうなったら私が能力で……!」

「やめなさいフラン。一騎打ちの戦いに水をさすのは無粋よ」

隼斗が袋叩きにあっているのを見兼ねたフランが、能力を使用する為掌を翳すが、レミリアがそれを制止した

「で、でも……!」

「いいから見てなさい。私達に勝った男はあの程度じゃやられないわ」  
「！」

「……破道の五十八『嵐』」

ゴオオオオツ!!と隼斗を中心に竜巻が発生し、分身を纏めて空の彼方へ吹き飛ばした。

天高く吹き荒れる竜巻は隼斗の手の動きに合わせてウネリ、萃香本体へ向かう

「オマケだ」

更に隼斗は『赤火砲』を練り合わせる事で、竜巻に炎を纏わせた

「甘いよ隼斗……せいやあ!!」

萃香は掛け声と共に思い切り地面を殴りつけた。その衝撃に地盤は一気に捲れ上がり、竜巻と萃香の間に壁を作った

「お返しのオマケだ♪」

更に捲れ上がった地盤に前蹴りを加える事で、竜巻ごと地盤を押し返した

「縛道の八十一『断空』」

隼斗は目の前に防壁を張り、その攻撃を遮断する。ここで初めての戦いに『間』が生じた

「……腕を上げたな、萃香。数百年前と比べても動きが大分良くなった」

「そりゃあ私は一度負けてるからね。無闇に霧に変化して戦おうものなら、あつという間に結界で捕まっちゃうとか、同じ轍は踏まないよ！」

そうやって萃香は前方に手を翳す。

すると隼斗の周囲に急激に砂塵が舞い上がり、あつという間に巨大な岩へと変化、隼斗を拘束した



「……ッ！」

隼斗はすぐに抜け出そうと力を入れるが、中々岩は剥がれない。「さっき隼斗が飛ばした岩だ。粉々にした後ずつと周りに漂わせていたのさ。それに岩も一つ一つの密度を濃くしてある。簡単には振りほどけないよ!!」

そして萃香は自身に能力を使用する。

両手を天高く掲げた萃香の身体が、みるみる巨大化していき、神社の本殿よりも大きな、マクロ化を果たした。

流星にその光景には観戦組含め、隼斗すらも驚愕した

「……おいおい、ウ○トラマンかよ」

「さーて隼斗。降参するなら今の内だよ。負けを認めるかい？」

萃香は巨大化したまま隼斗を見下ろしそう言った。『いつでも岩石ごと隼斗を打ち砕く準備はできている』と言わんばかりに拳を固く握り締めて

未だ岩石に捕らわれたままの隼斗は、微笑を浮かべてから口を開いた

「はははっ、萃香。そりや些かなメすぎ」

「？」

ゴパアアアンツ!!

突如、隼斗を捕らえていた岩石が砕け散った

「……瞬間」

バチバチツと隼斗の身体を電気の様なもの覆い、上着の背と肩部分に弾け飛んだ。

それは肉眼で目視出来る程にまで圧縮された高濃度の霊力。以前に隼斗が吸血鬼姉妹と対峙した時に見せたモノとは違い、手足以外に

も其れを纏っている

「なっ…!?!」

そのあまりの圧力に一瞬たじろぎ一歩下がる萃香。逆に隼斗は一歩詰めながら、先と同じセリフを口にした

「さアて萃香。降参するなら今の内だぜ。負けを認めるか？」

「!」

萃香は拳にあらゆる力を集約させていく。その高密度のエネルギーはかなりの高熱を帯びているのか、周りの空気が揺らいでいる

「……降参させてみな、隼斗!!」

最早神社どころか、山一つ粉々に出来てしまうのではないかと言う程の力が溜まり、萃香は言葉と同時に其れを振り下ろした

トンツ

「!?!」

刹那、身体に拳の先が軽く突き付けられている事に気付いた萃香。しかし、反応するよりも速くそれは放たれた

「無窮瞬間」

凄まじい轟音と衝撃により、萃香はマクロ化も解かれ、踏ん張る間も無く足が地面から離れた。

そのまま一度も地に触れることなく、後方の木々をなぎ倒しながら弾丸の様に吹き飛んでいく萃香。

薄れゆく意識の中、その勢いを自力では止めることが出来ずにいた萃香を、高速で回り込んだ隼斗が受け止めた

「大丈夫か？」

「……大丈夫なわけないだろ？……はあ、負けたよ……降参だ……」

掌をヒラヒラと振りながらそう言った萃香は、今度こそ意識を手放した

「……とりあえず一件落着だな」

ガシツ

「ん？だれd……」

突然肩を掴まれ、振り返った隼斗は固まった

「……」

そこには楽園の素敵な巫女が、にこやかな笑顔で立っており、無言でボロボロになった神社を指差していた

「……いや、まあ落ち着け霊夢。まずは茶でも飲んでだな」

「……」

飽くまで無言のまま、笑顔を絶やすことなく立ち続ける霊夢

「……この酔っ払いと一緒に直します」

「お願いね」

何事も無かったかのように戻っていく霊夢の後を、萃香を引き摺りながらトボトボと続く隼斗。

そしていつの間にか再開してる宴会を見て、ため息を漏らす

「……結局変わってねーじゃん」

「はいコレ」

縁に腰掛けた隼斗に、霊夢は大きめの盃を手渡すと、酒を注ぎ始めた

「霊夢からお酌してくれるなんて珍しいじゃねーか」

「一応異変を解決してもらったわけだしね。お疲れ様」

「ありがとよ。……でも神社はチャラにはならないんだろ？」

「当たり前でしょ？」

「……はい」

79話 ○年△組 隼八先生く!! (前編)

夏の宴会騒動から数日経ったある日。

隼斗は人里近くの広場にて、弟子である妹紅の修行に付き合っていた

普段から迷いの竹林の案内人・人里の外での護衛等を行っている妹紅は、時々こうして隼斗を訪ねては稽古をつけてもらっている

「破道の三十一 『赤火砲』」

「縛道の八十一 『断空』!!」

隼斗の掌から放たれた火球を、妹紅は縛道を使って防いだ

「ツー」

パキイイインツ!

しかし展開された防壁は数秒持ちこたえた後、音を立てて崩れてしまふ。

防御を突き破って迫る火球に対し、反射的に後方へ跳ぶことで直撃は免れたが、爆風で軽く吹き飛んでしまった

「妹紅、大丈夫か…?」

「痛つつ…やっぱ駄目か」

隼斗が駆け寄ると、悔しそうに頭を摩りながら起き上がる妹紅。

身体には若干火傷が見られ、今日の修行で何度目かになる治癒術を

師匠から施される

「…つたく。本来なら八十九番以下の破道を防げる『断空』が、三十番台に負けてどうすんだ」

「うっ…そうだけど。…師匠、何かコツとかない?」

「コツ…?…つっても基本的に破道も縛道も原理は同じだぞ。唯一の違いは靈力のコントロール法。破道なら一撃の威力を高める瞬発性、縛道なら効果を保つ持続性。妹紅は瞬発的過ぎるんだ」

「…じゃあどうすればいいの?」

「見てろ」

隼斗は掌に靈力を込める。すると直径一尺程の球体が形成された。

しかし妹紅はイマイチ理解できず首を傾げて質問する

「……………それが？」

「絶えず流動的に放出される霊力を、一定の形に保ち続ける。簡単に見えて、慣れてない内は意外と苦戦するからやってみな」

妹紅は言われるがままに掌に霊力を集中させる

「むむ……………ってあれ？」

しかし球体どころか形を保つことさえ出来ず、ただ霊力を垂れ流すばかりであった。

それでもなんとかコントロールしようと必死に粘るが、出力が強まるばかりで一向に球体が出来上がらない

「くっ……………ううっ……………」

終いには霊力を過度に消費し過ぎた為はその場に膝をついてしまった

「な？意外と難しいだろ？」

「はあ…はあ……………師匠は初めから出来たの？」

「心配すんな。俺だって昔は霊力すら満足に扱えずに大苦戦したし、霊力の使い過ぎでぶっ倒れた事だってある。そうやって自分の身体で覚えて、何度も訓練してやっと使えるようになったんだ。大事なのは向上心！」

「……………よし!!」

再び熱が入った妹紅は勢いよく立ち上がり、修行を再開する。

相変わらず歪な形を繰り返すと同時に、さっきより出力が弱い。

隼斗が空を見ると太陽は真上を過ぎており、時刻は昼下がり。

朝からぶっ通しでの修行の為、無理もなかった

「妹紅、ちよいと休憩。人里で飯でも食おうや」

「…あつ、そう言えば朝食も食べてないや」

丁度腹の虫も鳴った妹紅は、修行を中断し隼斗と共に人里へ向かった

人里

「お婆ちゃん、2人なー」

「あら隼斗さんじゃないか。誰かと来るのは珍しいね、娘さんかい？」  
「娘!？」

「おいおいお婆ちゃん、呆けるにはまだ早いだろ」

人里の馴染みある食事処に着き、適当な席に座る二人。

あつけらかんとしている隼斗に対し、妹紅は少し落ち着きがない  
「どした？」

「……ねえ師匠、私達親子に見えたのかな？」

「んん?……ああ、さっきのか。どうだろなー、俺だって外観年齢は二十歳位だし、妹紅も十六、七だろ?どっちかつーと兄妹の方が近いよな」

「きよ、兄妹……」

その単語を聞いた妹紅の頭に、一つのビジョンが浮かぶ

「……………隼斗お兄ちゃん」

「はあ?」

「あ、やつ……／＼／＼なな、何でもない何でもない!!」

小声とは言え思わず口に出してしまった言葉にハッと我に返った妹紅は、赤面しながら手を前でバタバタと振った。

するとタイミングよく先程のお婆ちゃん店員が注文を取りに来た

「ご注文は決まりましたか?」

「俺は旬の焼き魚定食。妹紅は?」

「……………同じのでもいい」

最早隼斗の顔を直視出来ない妹紅は、最後の方消え入りそうになりながら答えた。

「かしこまりました」と厨房に向かう店員の後ろ姿に、恨みの念を送りながら見送る

「これ美味しいなー!」

しかし注文が来てからはそんな事も忘れ、夢中で食べ始める妹紅。朝から何も食べていない為、羞恥心よりも食欲が勝ったようだ

「まいどありがとうございます。またのお越しをー」

「師匠、ホントに奢ってもらってよかったの?」

「ああ、気にすんな。これも師匠の務め……ん?アレは」

定食を食べ終え店を出た二人は、ふと目の前の通りで知り合いの顔を見つけた

「……あつ、二人共こんにちは」

少し元気の無い声で挨拶してきたのは、寺子屋の教師、上白沢 慧音だった。

見るとマスクを付けており、心なしか顔も赤い

「どうしたの慧音。風邪?」

「ああ、普段滅多に引かないんだが……夏風邪のようだ」

「苦しそうだな。永琳のところ连接到ってやろうか?」

「ありがとうございます。でも八意先生には今し方診て頂いたので大丈夫です」

見ると、手には処方されたであろう薬の入った袋を持っている。

この会話間も咳が止まらないようで、大分まいっているようだ

「慧音は普段から寺子屋で忙しいもんね。暫くは休んだ方がいいよ」

「しかし……子供達が」

「妹紅の言う通りだ。どの道その状態じゃ寺子屋には行けねーだし、一刻も早く治せ。それまでの間は何とかしてやるから」

「えっ?師匠って先生も出来るの?」

「いや、代行を探す」



「私が不甲斐ないばかりにご迷惑を掛けてしまつて……：……：本当に申し訳ありません。どうかよろしくお願いします」  
「おう任せとけ」

これが少し前の会話。

現在隼斗は幻想郷の賢者、八雲紫の屋敷に来ていた。理由は言わずもがな、寺子屋の教師の代行を頼む為だ

「紫ー、いるかー？」  
隼斗が知る限りでは、教師の役を務められる程の知識を持った人物は三名。

その内の二人が、この屋敷に住んでいる紫と、その式神の藍である。後の一人は過去に家庭教師を務めていた経験もあり、何より月の頭脳とまで言われた、八意 永琳であるが、彼女の場合医師としての仕事がある為、隼斗が候補から外した

戸を叩き、ついでに呼びかける。  
程なくして戸がゆっくりと開くと、中から藍の式神である橙が顔を出した

「隼斗様？…どうかしたんですか？」

「よお橙。紫か藍はいるか？」  
開いている戸の隙間から中の様子を伺いながらそう尋ねる隼斗に、橙から衝撃の事実が告げられる

「紫様と藍様でしたら年に一度の結界調整に向かわれたのでお留守です」

「えっ……？」

予想外の事実思わず間拔けな声が出る隼斗

「マジで!?!いつ帰って来るんだ!?!」

「えーとお……そうですね。いつも通りなら丸三日は帰らないと思います」

「マジでエエエエエ!?!」

――

紫の屋敷からの帰り道。隼斗は頭を抱えていた。候補の二人が揃って不在。流石に予想だにしていなかった

(どーすっかな……他に頭良さそうな奴は……幽香?イヤイヤ、なんか子供の教育上宜しくない授業とかしそうだ。じゃあパチユリーは……アイツ人前に出たがらねーし、高確率で断られる気がする。アリスも同様……。他には……!!)

脳内で必死に候補を探す中、一人の人物を思い付く

「そーいや霖之助がいたじゃねーか! アイツも頭良いし大丈夫だろ!」

隼斗は早速迷いの森に向かった

・  
・  
・

「……」

霖之助が営む道具屋、『香霖堂』の前で佇む隼斗

『本日商品調達の為、臨時休業します

店主』

「……………こうなりや仕方ねーな」

隼斗は、何かを決心したようにそう呟いた

↳翌日

寺子屋の教室では、慧音が珍しく風邪を引き、数日間寺子屋に来られないと子供達が噂していた

「けーね先生でも風邪引くんだな」

「授業とかどーするんだろう」

「皆でお見舞い行く?」

すると教室の戸が開き、一人中に入ってきた。見慣れない人物の登場に、子供達の視線が一斉に向く

「うーし、朝のHR始めっぞー」

臨時教師、柊 隼斗。 i n 寺子屋

80話 ○年△組 隼八先生く!! (中編)

人里にある寺子屋。

そこに今日、風邪で休んでいる上白沢 慧音の代行として、臨時の教師がやって来た

「……その名も……」

「ハイ、と言うわけで慧音が休んでる間の臨時教師を務める事になった『終 隼八』だ。気軽に隼八先生でいいぞー。もしくはGTHでも可」

いつも無造作に後ろへ流している髪をキツチリ固めたオールバックに、伊達眼鏡。

現代で言うところのスーツを意識したであろう黒の羽織り。

これら全て特に意味はないが、隼斗は形から入るタイプなのだ

黒板にデカデカと自身の名前を書き、自己紹介を済ませた隼斗もとい隼八は、早速出席を取る為に出席簿を手に取った

「じゃあ出席とるぞー……………相川」

シーン

「相川ー? 今日休みか?」

「あの、先生…………」

「ん、どした?」

「けーね先生はいつも苗字じゃなくて名前前で出席を取ってます…………」

一人の生徒がオズオズといった感じで指摘を入れた

「ああ、そうなのか。じゃあ名前と呼ぶな。えーと……………柚花」

「はい」

「健二」

「はーい」

「タカシ」

「うんち!」

その返事に隼斗は出席を止め、たった今返事をした少年を見た。坊主頭の如何にも腕白坊主な少年タカシは、隼八の反応を見て笑っていた

「タカシ、いつも慧音に言われてるんじゃないか？返事はちゃんとしろ」

「へっへーん。じゃあウンコー!!」

隼斗が軽く叱るが、タカシは更に巫山戯て大声を出した。

周りを見れば、呆れている者もいれば、一緒になって笑っているものもいる

「そうか、じゃあ今日からお前の事はウンコタカシって呼ぶから。わかったなウンコタカシ」

「ええー！？」

「あははははー！ウンコタカシだつて！」

流石にヘンテコなアダ名を付けられると思っていなかったのか、周りの反応も相まって、驚きの声を上げるタカシ

「それが嫌ならちゃんと返事しろ。もう一回呼ぶぞ？タカシ！」

「……はーい」

不貞腐れて返事をするタカシを他所に出席を取っていく隼八

「くっそー！アイツ新入りのクセに生意気だ！」

「タカシ、いつものやるか？」

「あつたりまえだ！ヤスも手伝えよ？」

「ひひっ、わかってるって」

やがて本日最初の授業の時間。

寺子屋切つての悪戯小僧、『丸刈りタカシ』と『悪巧みヤス』が見守る中、教室の戸が開けられた

戸に仕掛けられた黒板消し……

ではなく、どうやって仕掛けたのか大人の頭部程の石が落下する  
「よし授業始めっぞー」

しかし落下した石は隼八の指の上でバスケットボールの様にクルクルと回っており、隼八は何事も無かったかのように石を、開いている窓から外へリリースした

「ぐぬぬ……！」

「次だ！」

・  
・  
・

「歴史つてのは真面目にやるとややこしいし、面倒くせーから覚えやすくいっぞー」

「……先生なのになんて事言ってるんだ」

「ほっとけ。今に地獄を見せてやるぜ……！」

ヤスがセッセと制作しているものは、普通の紙で折った所謂紙飛行機

「はい、1549年『イチゴよく』食うザビエル来日」

「後はコイツを付けてっつと♪」

「おおっ！」

紙飛行機の先には裁縫などで使う長めの針がセットされていた

「1582年『いちごパンツ』に本能寺騒ぐ」

「喰らえ！」

針で武装した紙飛行機が、真っ直ぐ背を向ける隼八へ向かっていく  
「1680年『ヒーローはオレ』です、綱吉ですッ！」

カンッ

「!?」

黒板に年号を書き終えた直後、チョークを持つ手にグツと力を入れる隼八。

その力にチョークの先は折れ、高速で回転しながら、後方より飛来する紙飛行機を弾いた。

軌道がそれた紙飛行機はユラユラと教卓の上に着陸する

「そこ二人、授業中になに遊んでんだ。5分間廊下に立つとれ!」

「げっ、しかもバレてるし……」

「くそー、今に見てろよ!」

く昼食

「タカシ、それは?」

「へへっ、ウチの店に置いてある特性ワサビだ!これをアイツの弁当の中に入れてやるんだ。めちやくちや辛いからアイツもイチコロだぜ!」

「毒殺か……お前将来忍者になれるんじゃねーか?」

「ふっ、自分の才能が怖いぜ……!兎に角奴の気を引いてくれ。……でござる」

そう言つて特に意味のない印を結びながら教卓に置かれている弁当の包みへと忍び寄るタカシ。

その一方で厠から戻ってきた隼八をヤスが足止めに向かう

「先生ー、外の方で妹紅の姉ちゃんが呼んでたぜ」

「妹紅が?わかった、態々ありがとな」

外へと歩いて行く隼八を笑みを浮かべながら見送ったヤスがタカシの元へ戻ると、丁度弁当への異物混入中であった

「こっちは大丈夫だ。さっさと済ませちまおうぜ」

「くつくつく、おにぎりか。たつぷりと味わうがいいぜ！」

おにぎりの中にこれでもかと言うくらいワサビをねじ込んだタカシ等は、そそくさと席に戻る。

やがて帰ってきた隼八が、ヤスに対して文句を言いながらワサビ入りのおにぎりの前に座った

「おいヤス、妹紅なんて何処にも居なかったぞ。ホントに見たのか？」

「本当ですか？あれー、俺の見間違いかなー？」

「……つたく」

隼八は徐におにぎりの入った風呂敷を摘んでタカシへ突き出した

「ほれ、さつきお前の母ちゃんが忘れ物だつて届けてくれたぞ」

「……………へっ？」

「そ、それ……先生のじゃ？」

そして教卓の下から新たに取り出された包み。表面には『団子』の判が押してある

「……いや、俺のこれだから」

隼八はおにぎりをタカシの卓上に置いた。

それを見てワナワナと震えるタカシとヤスに対し、ニヤツとほくそ笑みながら一言

「詰めが甘ェんだよ悪ガキ共」

――

時刻は夕暮れ時になり、この日の授業は終了。子供達が帰り支度を整える中、隼八は慧音から申し受けていたある事項を告げた

「えー、最近里の外で妖怪の群れの目撃情報が相次いでる。無いとは思いますが一人で出歩く事がないように」

『はい』

注意喚起をした隼八は、生徒達と共に寺子屋の外に出る。

そこには事前に呼ばれていた藤原 妹紅が欠伸をしながら待っていた



「あつ、師匠。終わった?」

「おう、悪いな。いきなり頼んどじまつて」

「気にしなくていいって。護衛くらいお安い御用だよ」

「あつ、妹紅のお姉ちゃんだ!」

子供達も、妹紅に気付き周りに集まる。

慧音との付き合いが長い妹紅は、時々遊び相手になったり、炎術を教えてくれとせがまれたりと昔から子供達にも人気があった

そういった意味でも、隼八は妹紅に子供達の引率兼護衛を頼んだわけである

「じゃあ後は頼むな。俺はあと少しやる事があるからよ」

「了解。……大変だね、先生ってのは」

短く別れを済ませた妹紅は子供達を引き連れて歩き出した。それを見送った隼八も残りの仕事を片すため寺子屋へと戻った

――

帰り道。ふと妹紅の隣を歩く女子からこんな質問が出た

「ねえねえ、妹紅お姉ちゃんとう隼八先生は恋人なの?」

「うええ!?!ち、違うよ／＼／＼……コホンツ!……あの人は私の師匠」

子供らしい直球な質問に、妹紅は赤面しながら訂正した

「ししよう?」

「あつ、俺知ってる!なんか必殺技とか教えてくれる人だ!」

「うーむ、強ち間違っちゃいないけど……」

「確かに只者じゃ無いのはわかるけど。なつ、タカシ」

「うん、結局一回も成功しなかったもんな」

「一回も?……ってなんの話?」

タカシとヤスが今朝からの経緯を話すと、妹紅はクスクスと笑った  
「はははつ、そりや無理だよ。師匠相手じゃ私でも敵わないんだから」

「妹紅姉ちゃんでも!?!マジかよ……」

普段から妹紅の強さを知っている子供達は驚きの声をあげた

「まっ、拳骨が飛んで来ないうちに悪戯はやめるんだね。師匠の拳骨は痛いからな」

・ ・ ・ ・ ・

とある人里内の民家

「なあヤス」

「ん？」

「行ってみないか？里の外」

「はあ？タカシお前あの先生が言ってた事忘れたのか？妖怪の群れが出るから出歩くなって言われたろ」

「少しくらい大丈夫だって。それに言われたのは『一人で』だろ？ちよつとくらいあの先生をビビらせてやろうぜ」

「うーん……それもそうだな！」

「そうと決まれば早速今夜だ！」

――

「よーし、やつと終わった。もうすつかり暗えし、さつさと飯食って帰ろ」

隼八は片付けを済ませ早々に寺子屋を出て里の食事処に向かおうと歩き出した

（やれやれ、珍しく疲れたな。これなら咲夜にやらされたら肉体労働のがマシに思えてくるぞ……慧音もよくこんな事毎日出来るぜ………ん？なんか人が集まってやがるな）

丁度里の住宅地を通りかかった隼八は大勢の人が集まっている光

景を目にした。

見ると何やら不穏な空気が立ち込めている。

怪訝に思った隼八はその大衆に近づき声をかけた

「なんかあったのか？」

「……ああ。なんでも子供が二人行方不明だそうだ」

「子供？……その二人の名前はわかるか？」

『『タカシ』と『ヤス』だ。さっきその両親が近所中に聞いて回ってたからな』

「！」

——隼八の額を、冷ややかな汗が伝った

81話 ○年△組 隼八先生く!! (後編)

すっかり日が落ちた夜の平原。

辺りに人の気配は無く、闇夜を照らすのは手持ちの小さな提灯のみ  
「なあ、まだ行くのか？ 里から大分離れちまったぜ？」

「大丈夫だって。まだ見える所にあるし、いざとなったら走って逃げれば捕まんないよ」

夜の道を進む二人の少年は、軽い悪戯心から禁止されている里の外へと出て、最近噂になっていいる妖怪を一目見ようとしていた

「でもそろそろ戻んねーと親に怒られるぜ？」

「うーん、まあ確かに……」

人里の少年、タカシとヤスは飽くまでも親に怒られたくないからと  
言う自制心から、その歩みを止めた

「しよーがない、戻るか！」

「だな、結局妖怪なんて現れなかったし」

この時、二人は気付いていなかった

「俺たちの気迫にビビったんじゃないか？」

「かもなー！」

ザザザザ……

……既に複数の気配から狙われている事に

.....

く騒ぎが起こる少し前

藤原 妹紅は子供達を家に送り届け、風邪で寝込んでいる友人の慧音を訪ねていた

「……とまあ、こんな感じで案外順調みたい」

「そうか……隼斗さんと妹紅には迷惑を掛けてしまったな……すまない」

「気にすることないって。困った時はお互い様でしょ?」

「……ありがとう」

額に乗った濡れ手拭いを抑えながら、慧音は軽く頭を下げた

「どういたしまして。今日は私泊まっていくから、何かあつたら言つてね」

「いやいや!そこままでして貰うわけには……ゴホツゴホツ……」

やや興奮気味なつた慧音を、妹紅はやんわりと寝かせた

「ほら、病人は寝た寝た。安静って言われてるんでしょ?」

「……し、しかしだな」

コンコンツ

「ん?誰か来たみたい」

「こんな時間に?…隼斗さんかな?」

「私出てくるよ」

妹紅は寝室を出て玄関に向かい戸を開けると、どこか不安気な面持ちの二組の夫婦が立っていた

「どうかしたの?」

「あの、もしかしたら此方に……」

――

闇夜の平原を、妹紅は飛び回っていた

「くそっ……どこにいるんだ!？」

『寺子屋から帰ったはずの子供二人が行方不明』

先ほど訪ねてきた夫婦は、家に居るはずの息子の行方がわからないとして、教師である慧音を訪ねてきていた。

それを聞いた妹紅は直ぐさま飛び出し捜索に向かった。

人里内ならば問題無いが、里から一步外に出れば安全など一切保障されない。それが夜ともなれば、ある種の妖怪が活性化する危険な時間帯となる

慧音には心配を掛けられない。

夫婦には里の中を探すように指示してある

更に速度を上げて突き進んでいくと、道端に小さく燃える破れた提灯が落ちているのを発見した

「これは………ッ！」

提灯を拾い上げたのも束の間。

ナニかの気配を察知した妹紅は、直ぐさま身構え辺りを見渡した

カサカサッ カサカサッ

それらはゆっくりと妹紅を囲むように近づいていた。

既に臨戦態勢を取っている妹紅は、掌に炎を灯す

(前にもこんな事あったな。確かあの時は茂みから勢いよく……)

そこで妹紅は思考を切った

「キシヤアアア!!」

それは人の半身程ある巨大な蜘蛛だった。

毒々しい見た目のそれは、群れをなして妹紅を取り囲んでおり、その内の一匹が襲い掛かってきていた

「タイミングもバッチリだな」

掌に灯した炎を火球にして投擲。

飛びかかってきた蜘蛛は火達磨になりながら吹き飛んだ

「……こう言うの、デジャブって言うんだっけ？」

妹紅は涼し気な物腰のまま、今度は自身の周囲に炎を展開していき、やがて大きな火柱を作り上げる

「失せろ!!」

足を振り上げて地面を踏みつけると同時に、火柱は拡散。周囲に炎弾を撒き散らしながら的確に蜘蛛の群れを吹き飛ばした

「ってしまった……! タカシ達が近くにいたかもしれないのにやり過ぎたか……!?!」

「……探し物はこれかえ?」

「!!」

声のした方へ勢いよく振り向く。

先まで気配を全く感じる事が出来なかった為か表情が強張っていた  
た

「何をそんなに動揺しておる? 人間」

闇から現れたのは、上半身は着物を纏った女の姿。しかし下半身は一丈を有に超える巨大な蜘蛛の姿をした『女郎蜘蛛』であった

傍には糸で拘束された子供が二人。

意識は無く、衰弱しているのかグツタリしている

「タカシ! ヤス! ……ツ!!」

妹紅は激昂し駆け出した

だが頭は冷静に。

至近にいる二人に被害が及ばぬ様、範囲を最小限にとどめ、拳に炎を纏わせて直接攻撃を仕掛けた

「芸がないわ」

「なっ!?!」

しかし妹紅の拳は届き切ることはなく、片足が何かで固定され、態勢を崩し転倒してしまう。急いで足元に目をやると、直径三分程の糸が絡まっていた。

糸の先には先程の巨大蜘蛛が茂みに身を潜めており、口から糸が伸びている

引き千切ろうと力を入れるが糸はビクともしない。

妹紅は脚から炎を噴射して糸を焼き切った

「くっ……！」

「ふふっ、随分活きの良い人間じゃな」

その様子をただ静観していた女郎蜘蛛は、滑稽だと嘲笑う

「テメエ……！」

「ふっ、下劣な言葉使い……所詮は下等な人間よのう」

「巫山戯るな!!二人を放せ!」

女郎蜘蛛はその言葉に応じるどころか、拘束している二人を下僕の蜘蛛に渡し下がらせた

「馬鹿を言うでない。此奴らは妾が捕獲した大事な食料じゃ。子を産むためには何かと養分が必要でな。悪いが一足先に巢へと持ち帰らせて貰うぞ?」

「……ッ!」

その言葉を聞いた妹紅の中で何か音が立てて切れる。

…と同時に自身の身体から巨大な炎が巻き上がり、やがて炎の鳥を形成した

「……最終警告だ。二人を放せ」

この警告にも女郎蜘蛛は鼻で笑う事で返答した

「なら消し炭にしてやるよ……!!」

背後の炎の鳥が羽ばたき一気に女郎蜘蛛へと向かった

そして着弾。ゴオオツ!と激しく燃え上がり黒煙が上がる

「……」

妹紅は警戒しつつ子供達を連れて行った下つ端蜘蛛を追おうとし



た

「どこへ行く?」

「!?」

声のした方へ目を向けた妹紅は驚愕した。

黒く焼け焦げた塊の中から、まるで殻を破るように女郎蜘蛛が現れたからである

「馬鹿な……そんな『繭』なんかで防いだって言うのか!?!」

「……確かに繭ならば主の攻撃全てを止め切る間も無く焼却されていたかも知れぬな。しかし、その炎の動力源は主の霊力じゃ。それを『消して』しまえば勢いを無くしたただの炎。先程のように繭で止めることは可能と言うもの」

「霊力を消す……だと?」

「妾の糸には人の力、即ち霊力を奪い去る効力がある。つまり……」

女郎蜘蛛が指を何本か動かすと、それに合わせて糸が妹紅に巻き付いた

「主もこうしてしまえば唯の人じゃ」

「ぐぐっ……!」

妹紅は必死にもがくが、霊力を封じられ、肉体強化すら出来ない今の彼女には到底振り解けるものでは無かった

「くくっ、糸に掛かった獲物はいつ見ても滑稽よのう」

（くそっ……!完全に油断した……これなら師匠に声を掛けてから来るべきだった……!過信していたんだ……自分の力を。馬鹿だ、私は……!!）

「畜生ツツ……!」

今更悔やんでも仕方がないのはわかっていた

しかし悔やまずにはいられなかった

自分への怒りや悲しみ、様々な感情が混ざり、出た言葉がそれだった

「そう悔やむでない。すぐに主も妾の養分にしてやろう」

糸を手繰り寄せられ、ズルズルと引き摺られていく妹紅

「しかしこのままでは些か大き過ぎるな。少し削ろうか」

女郎蜘蛛は手元まで引き寄せた妹紅の首筋に牙を立てた

「ごめん……助けられなかった……!」

自然と悲痛な言葉が漏れた。これから自分が喰われる姿を想像しながら。不死である自分が再び蘇った頃には全て手遅れなのだと思ひながら

妹紅の頬を、一筋の涙が伝った

「妹紅、俺がお前に教えたのはそんな脆弱なモンだったか？」

その声に女郎蜘蛛は牙を止め、目を細めながら尋ねた

「!……何奴じゃ？」

「あ？先生だよ」

隼八は淡々答えた

——その声色に静かな怒りを含ませながら

「……師匠」

力なく答える妹紅。

先程の子供達同様、糸が振れている間は霊力が消失していく為、力を入れる事が出来ない

そんな状態の彼女を視野に入れながら、隼八は続けた

「おい、二つに一つだ。大人しく妹紅と悪ガキ二人を返して無傷でウチに帰るか、俺にこの場でぶっ潰されるか……………選べ」

「はっ…何を言うかと思えば……………人間と言うのはどうも物分りが悪いとみえる」

女郎蜘蛛は口から一気に糸を射出すると、隼八の腕を絡め取った

「あっ……………」

「ふふっ……………これで四匹目」

勝利を確信した女郎蜘蛛はニヤリと笑う

しかし隼八は黙って糸を見つめた後、それを片手で掴んだ

「無駄じゃ！その糸の前では人間は無力！まんまと捕まった時点で主は……………いいんだな？」はっ？」

「選択の答えは、後者でいいんだな？」

「……………まだ言うか小童めが」

女郎蜘蛛は捕らえた獲物を引き寄せなるべく糸を勢いよく引いた

「……………!!？」

しかし隼八は引き寄せられるどころか、不動のまま。

糸が巻きついている腕すらも微動だにしていない

「何故じゃ！何故動かぬ!!？人間が妖怪の力に敵うはずが……………」

「……………そりゃ随分偏った見解だな」

今度は隼八が糸を掴む手に力を入れてゆっくりと引いた

「な、なにっ!？」

すると女郎蜘蛛が徐々に隼八の元へと引き寄せられた。

驚愕する女郎蜘蛛を他所に隼八はどんどん手繰り寄せていく

「どんな気分だ？自分が逆の立場になったのは」

八本の脚で踏ん張るも、ガリガリと地面に跡を残しながらそれすら

も抵抗にならない

「ま、待て……！主は人の雄であろう！？雄ならば雌に尽くすべきじゃ！それが手を挙げるなどと……！！」

「心配すんな。戦闘中、俺は男女平等だからよ」

そう言つて固く拳を握りしめた。

そして手繰る手を止め、ここぞとばかりに勢い良く引いた。

女郎蜘蛛は地から脚が離れ、一気に引き寄せられる

「ひっ……！」

ゴオオオオンツ！！

隼八の拳は女郎蜘蛛の顔の直ぐ横の地面に突き刺さった

「……これが最後だ。三人を解放するか、今のを頭に喰らいてエか。

……選べ」

拳を突き刺したまま、その言葉に殺気を乗せ、隼八はそう告げた

・ ・ ・ ・ ・

「父ちゃあああん！！母ちゃあああん！！」

「この馬鹿息子が！！皆様にこんな心配かけて！！」

「あれ程行くなど言っておいただろ！心配かけさせるんじゃないよこのバカタレ！！」

ゴチンツ　ゴチンツ

「あ痛えー!?」

二人の子供に拳骨が落とされる様子を、少し離れた所で見守る隼八と妹紅。

鉄拳制裁を見て笑っている隼八に対し、妹紅はどこかどんよりとしている

「何を落ち込んでんだ？」

「……………何でもない」

そう言って立ち去ろうとする妹紅の頭に、ポンっと手を乗せる隼八

「今の俺は先生だ。教え子の悩みくらいいくらでも聞いてやるよ」

「……………」

妹紅は俯いたまま肩を震わせ、拳を固く握り込んだまま答えた

「……………うん」

――

「うーし、お前ら席つけー。朝の出席とるぞー」

教室の戸が開き、ややテンション低めの教師が、出席簿片手に現れた

「柚花」

「はい」

「健二」

「はい」

「……タカシ」

「はああああい!!」

寺子屋の外にまで響く音量で返事をするタカシ。周りの生徒は何事かと耳を抑えながら注目した

「へっへーん!どうだー?これなら文句ないだろー」

「次、ヤス」

「スルー!」

「ぶっ……!……はい」

オマエ ナニ ワラツテンダヨー!!

ナンダヨ キノウ ナイテタクセニ

オマエモ ナイテタダロー!

「おら、うるせーぞ馬鹿二人」

翌日風邪を治した慧音が復帰。

当然先日の事件は彼女の耳に入っており、タカシとヤスの二人は重い頭突きを喰らったという

「そう言えば師匠。隼八ってなに?」

「教師になる上での心意気だ」

「？」

因みに隼八の碎けた授業スタイルは割と好評で、また風邪を引いてくれなどと頼んだ数人の生徒にも、同じく頭突きが炸裂した

## 82話 月の陰謀

???

「重罪人、蓬萊山輝夜を地上へ追放してから千年と三百……未だその行方は掴めぬか」

「その数年後に姿を晦ました八意永琳も共に行方不明のままだ」

「ふむ……これだけ長い時間見つからないとなると地上にいるのかも怪しいのでは？」

「いや、以前から地上を覆っている術式がその二人を捉えた様子はない。少なくとも『地球上』にいる事は確かだ」

「だが一概に確実とは言えないのではないか？」

『……………』

——暫しの沈黙

「……そう言えば、軍の玉兔が一匹逃げ出したのではなかったか？」

「玉兔？それがどうしたと……！」

「どうかしたのか？」

「……その玉兔が向かった場所は地上。そうだな？」

「……成る程な」

騒つく会議室で、数名の重役達が顔を見合わせる

「これは極秘に行く。呉々も、上に勘付かれる事がないようにな」

——

「はあ……またか。懲りねーな、てるも」



気怠そうに突っ立ちながら、隼斗は迷いの竹林中程にて、ポツカリと空いた穴を前にしてため息を吐いていた

彼が歩いてきたであろう道を辿れば、所々穴だらけであり、全て故意に仕掛けられた落とし穴である

「毎度ここ来るたんびに仕掛けられてるな。熱心なこつた………ん？」

本日何度目かになる不発に終わった落とし穴を流し目で見送りながら先に進んでいく隼斗は、前方に『地面から生えている兎の耳』を見つけた

「……………なんじゃアリヤ」

目を凝らしながら近づいていくと、それは生えているのではなく地面に埋もれているのだとわかった。

落とし穴に兎がハマリ、そのまま埋もれたか？と思った隼斗は、一先ずその兎耳を鷲掴み……

……にはせず、手をズブズブと地面の中に突き入れ、本体を掴んで引っ張り出した

プラーン

「……………」

「……………」

隼斗はそのままフリーズした

何故なら、薄紫色の髪に女子高生の様な格好をした、兎擬きを鷲掴みにしていたからである

それは相手側も同じな様で、自分は今頭を掴まれて持ち上げられている。

謂わば殺される一歩手前の様な状態だ

この現場を他者が見れば完全に『狩る者』と『狩られる者』にしか見えない。

知っている人は某生ける屍ゲーの、タ○ラントを想像するであろうシチュエーション。

隼斗はゆつくりと地面に降ろした

「……なんかゴメン」

「……いえ」

・  
・  
・  
・  
・

「えっ、じゃあお前永琳の弟子なの？」

「はい、以前から永遠亭の方でお仕えしてます。尤も、主君は輝夜様ですけど」

なんとか気まづさの壁を越えた隼斗と兎耳少女は、同じ目的地である永遠亭を目指して歩いていた。

隼斗はそこで医師をしている八意 永琳から呼ばれ、少女は薬を人里まで売りに出た帰り道で、それぞれ落とし穴の被害にあってしまっ  
た

暫く歩いていると、漸く永遠亭の一角が顔を出した。ここまで来るのに酷くボロボロの少女と、衣服に汚れ一つ付いていない隼斗。

前述のそれぞれの被害とは、単に落とし穴含め、トラップによる物理的ダメージか、精神的ダメージかの違いである

「じゃあ、俺は永琳のトコに用があるから」

「はい。私も着替えたなら報告の為に向かいます」

少女は一礼すると、屋敷の裏の方へ消えた。

隼斗はそのまま玄関を潜り奥へと進み、診察室の立札を確認して中に入った

「隼斗、来てくれたのね」

「おう。久しぶりだな」

「あら、半年くらい私達にとっては微々たるものでしょ？」

「ははっ、それもそうか。……そんで話つてのは？」

「ここでは何だし、居間に移動しましょうか」

永琳は立ち上がり机の上を片付けると、診察室を出た。隼斗も後に続き、長い廊下を歩いて行くと、丁度先程別れた少女が着替えを終えて自室から出てきた

「あつ、師匠……！」

「あらウドンゲ、帰っていたの？」

「はい。すいません、帰つてすぐ報告に向かおうと思つていたんですが……その……」

少女はそこまで言いかけ、恥ずかしいのか渋り出したので隼斗が続けた

「落とし穴にハマつて埋まつた」

「うっ……」

「……またてゐね、全くあの子にも困つたものだわ」

永琳は頬に手を当てて溜息を吐いた

因みに、その様子を廊下の陰でニヤつきながら眺めている兎耳幼女がいた訳だが、隼斗と永琳は気付いていた為、後に肅清された

「そう言えばまだ名前聞いてなかったな」

「はい？……あの、終 隼斗さんですよね？」

「えっ？」

「えっ？」

『……………』

——暫しの沈黙

「…………もしかして覚えてませんか？私の事……」

再び二人の間に気まづい空気が漂い始めた時、隼斗は少し考え思い出したかのようにこう言った

「あ…………もしかして前にゼ○伝の話題で盛り上がった服部君？やっぱ井戸の見えない床って初見だとビビるよな！」

「いや服部君って誰!?覚えてないならそう言ってくださいよ！」

「まあまあ、落ち着きなさい服部君」

「師匠までー!？」

・  
・  
・  
・  
・

「…………鈴仙・優曇華院・イナバです。以前月で柊教官に指導して頂きました」

「ウドンゲは元々月の軍に所属していたの。でも事情があつて月を逃亡。この幻想郷に流れ着いたという訳」

少女はムスツとしながら自己紹介し、永琳が補足として付け足した  
「あー、はいはい完全に思い出したわ」

「…………ホントですか？」

「アレだろ？稽古に遅刻した理由が、故障した自動ドアに挟まって抜け出せなかったって言うおつちよこちよいの…………」

「わあああああああ！思い出さなくていいです!!それにアレは偶々運が悪かっただけですから！」

・  
・  
・

### ――閑話休題

「二人とも、これを見て頂戴」

そう言って永琳は、居間の卓上に一通の手紙を置いた

「……これは？」

「差出人は不明。でも出処はわかってるわ」

「あの、どうして私まで？」

一緒に連れて来られた少女がそう尋ねると、永琳はやや表情を険しくして告げた

「それはウドンゲ。届け先が貴女だからよ」

「へっ…？」

「……」

隼斗は黙ったまま手紙を開いた。

内容は地上の者には読む事が出来ない月の言語でこう書かれていた

『地上へ逃れた蓬萊山 輝夜と八意 永琳の居場所を突き止めよ。従えば其方の逃亡の罪は帳消しとする。抵抗は無意味である。次の満月の夜、迎えに行く』

その場の空気が凍りついた

「そ、そんな……」

「差出人は言わずもがな、月の連中よ。しかもある程度位の高い重役ってところかしら」

「次の満月……っってもうすぐじゃないか？」

「ウドンゲ、正直に答えて頂戴。貴女はこの事を知っていたの？」

「知りません！そもそもどうして私が……!?!」

少女の訴えに一度頷いた永琳は、隼斗に尋ねた

「……隼斗、貴方はこれをどう見る？」

「……………少なくとも永琳や輝夜に理解のある月読や依姫達がこれを出したとは考えにくい。だとすればそれより下の、重役とやらの独断だろうな」

「……………そう」

——地上に、そして幻想郷に脅威が迫っていた

## 83話 水面下の脅威

永遠亭では前の面子に加え、輝夜とてゐるも参加して緊急会議が開かれていた

「……博麗大結界？」

「そうだ。本来幻想郷はその結界によって外の世界から隔離される。つまり月の連中は此処に辿り着く事が出来ねー筈なんだ」

「……その『筈』って言うのは？」

輝夜の質問に、隼斗は鈴仙宛ての手紙を凝視した後説明を始めた  
「どういう訳か鈴仙に宛てられた手紙が届いちまつてる。……いや、それ以前に鈴仙の正確な居場所まで特定されてるって事の方が問題だな」

「鈴仙……発信機でも仕掛けられてんじやないの？」

「ええっ!?!いやそんな訳ないでしょ……!そんな訳……無いと思う……多分」

てゐの指摘を否定したい鈴仙だが、強ち否定仕切れない為少しずつ声のトーンが小さくなつていく

「大丈夫よ。発信機なんて付いたら私か隼斗がとつくに気付いてるから」

「サラツと凄いこと言ったわね」

再び考え込む一同。

一先ず重点を博麗大結界に置き、永琳がある提案をした

「名前から察するに、その結界を張ったのは博麗の巫女でしょ？原因を聞いてみたらどう？」

「……まっ、それが一番手っ取り早いよな」

隼斗は立ち上がり、部屋の襖を開けて外に出た。空を見上げれば微妙に欠けた月が、竹藪の隙間から地面を照らしていた

(……今夜は十三夜月か。昔は満月の次に美しいってんで、よく月見酒とかやったもんだが……今は月見どころじゃねーわな)

月はまだ昇り始めたばかり。満月まで二日無いとは言え、策を講じる時間はあつた

「兎に角、結界の方は俺が調べてくる。そつちはそつちで策を考えといてくれ」

「わかつたわ。気を付けてね」

適当な調子で手を振った隼斗は、その場から跳躍し夜の空へと消えた

――

「……博麗大結界に外から干渉する方法？」

「そうだ。例えば外の世界から中の奴の居場所を特定して手紙を送るみたいな事とか」

隼斗は紫の屋敷を訪れていた。

博麗大結界についてなら霊夢でも良かったわけだが、今回は特異な事例の為、紫を訪ねることにしたのだった

「……随分具体的な例ね。でも無理よ。仮に居場所がわかつたとしても詳しい場所まではわからないし、手紙が結界を越える事もない。……普通わね」

「何か例外があるのか？」

「その前に何が起こっているのか教えなさい。話はそれからよ」

紫にあつさりと見破られた隼斗は、「まっ、バレるわな。こんな聞き方したら……」と内心思いつつ事情を説明した。

それを聞いた紫は少し考えた後思い当たる節を語る

「考えられる要因は三つ。一つは相手側に私と同等クラスの術者がいて、結界の仕組みを上書きされた場合。そうすれば結界は結界の意味をなさなくなる



二つ目。月と幻想郷内を何らかの手段で繋げる、もしくは行き来できる力を持った者がいる

そして三つ目。その鈴仙とか言う玉兔に何らかの細工がしてある。現状で思い付くのはこれぐらいかしら」

「……………」

隼斗は暫く黙り込んだまま思考を巡らせた。

挙げられた三つの仮説は全て隼斗自身にも思い当たる節があったが、そこから更に絞り出していく

「……………今のトコ有力なのは三つ目だな」

「あら、どうして?」

「まあ、アレだ。一つ目も二つ目も、そんな事が出来るなら態々鈴仙を使って回りくどく探させるより直接乗り込むか、術式でも使って探知した方が手っ取り早いだろ。丁度それが出来る奴を二人知ってるが、どっちも永琳達の味方だしな」

特に根拠がある訳ではなく、かと言って誰が聞いても信憑性を得られるものでもない唯の憶測。しかし隼斗には一つの確信があった

「ふふっ、大分抜け目のある推理だけれど……………貴方が言うならそうなのかも知れないわね」

普通なら此処で問題点を指摘して一蹴するところだが、不思議と隼斗が言う言葉には信憑するに足るナニかがあった

「じゃあ早速その線で調べてみるわ。ありがとな紫」

返事を聞くわけでもなく、早々にその場を立ち去った隼斗に対し、紫は笑みを浮かべて一言呟いた

「どういたしまして」

「おーい鈴仙！」

永遠亭に戻った隼斗は、真っ先に鈴仙を呼んだ。その声に彼女だけでなく他の住人まで出てきた

「はい………どうかしましたか？」

「お前服脱げ」

「………へっ？」

唐突な要求に一瞬思考が停止した鈴仙は、数秒後に顔を真っ赤にして後退った

「ななななな、何言い出すんですかいきなりいいい!？」

「だから服を脱いで（異常が無いか）調べるんだよ！」

「し、調べるって／＼／＼あわわわわわわ……」

遂には頭から湯気が立ち上り、周りもそのやり取りに驚き、捲し立て、呆れた

「えっ………何？隼斗そんなに溜まってたの……!？」

「イイゾーモットヤレー」

「何赤くなってんだ。別に此处でやれとは言ってねーだろ。別室でやりゃあいいじゃねーか」

「よ、余計卑猥です!!」

「………やれやれね」

次第にパニック状態に陥る一同を（特に鈴仙）、終いには永琳が收拾をつけるハメになった

「全く……貴方も言い方を考えなさい。アレじゃ誤解されても文句言えないわよ?」

検査を終え、別室から出てきた永琳が呆れ半分にそう言った  
隼斗は変わらぬ調子で謝罪すると、早速本題に入った

「ワリいワリい。時間無いと思って遂急いじまった。……で、どうだった?」

「……当たり前よ。あの娘の体内から追跡術式を見つけたわ。そして軍服仕様のブレザーには支給品転送用の小型端末が仕込まれていた」  
「……解除は出来たか?」

「二応ね。……でも多分無駄よ。転送装置は特に警戒する必要は無いと思うけど、術式の方は既に記録を取られてるはずだから今更消したところで連中にはバレているわ」

(……でもそれだけじゃ奴らが幻想郷内に進入する手立てにはならねエ筈だ。鈴仙へのメッセージにしたって術式の存在がバレちまう可能性を考慮して無い訳が……)

どれだけ考えても、出てくるのは有力とは言えない仮説ばかり。  
隼斗はそのもどかしさから頭を掻いた

既に日付は変わり、外はボンヤリと明るくなりつつある

――満月まで後一日

???

「報告します。追跡術式の解除を確認しました」

「……場所は?」

「それが……地上である事は間違いないのですが……」

「なんだ?」

「地上のとある一点に不可思議な場所が存在しており、その先からは衛星術式をもつてしても辿ることができないのです」

「…何っ?」

「…如何致しましょう」

「…ならばその奇怪なエリア全域に例の術式を掛ける。恐らく釣れるはずだ」

「はっ!」

「精密に施した術式を発見・解除ができるという事は当たりと見て間違い無いようだな」

「…ふん、生意気にも小細工を施していたか。道理で長年見つからぬ訳だ」

「くくっ…月の戦力はもうじきひっくり返る。今に見ていろ…!」

## 84話 太古の月

——その昔、空に浮かぶ月には強大な魔力が秘められていた。月に一度の満月の日にはその力が地上へと注がれ、あらゆる生物に力を与えたという

しかしそのあまりに強大過ぎる力をその身に宿した者は理性を失い、力に支配され暴れ回った

それを見兼ねた月の神が、当時の月を封印し、新たな月を創り出した。

再び安寧を取り戻した地上では、以前の月をこう呼んだと言う

——『狂月』と……

.....  
「……………いよいよか」

隼斗は永遠亭の一室で薄暗くなりつつある空を眺めながらそう呟いた

結局月側の真意を見出す事が出来ずにいた彼等は、来るべく満月の夜に向けて備えるしかなかった

残された時間で隼斗は、万が一が一月側が攻め入ってきた時のために各地域を回って警戒を呼び掛けていた。

各々が持ち場の防衛ラインを築く中、隼斗は一番狙われる恐れのある永遠亭に残った

張り詰める空気の中、バンツと襖が開き、てゐが中に入ってくる

「隼斗、ご飯できたってさ」

「ん、後で貰う」

「……………朝からずっと気張りすぎじゃない？来るかもわかんない敵に  
対してさ」

「ご心配どーも。でもな、こういう時は警戒し過ぎる位が丁度いいん  
だよ」

「ふーん、お師匠様の言った通りだね」

「あん？」

「ほい。もし来なかったら渡せって」

てゐは背中に隠していたおにぎりの乗った皿を差し出した。

全部で四つあり、それぞれの形が違う。

内二つは綺麗な三角刑、残りの二つはやや丸みを帯びた形をしてい  
る。

そして何故か、てゐはそそくさと退室していった

「……………まっ、いいか」

程なくして、香辛料たっぷりのおにぎりをおにぎり口にした隼斗は珍しくむ  
せ返った。

てゐは粛清された

・  
・  
・

時刻は間も無く深夜。

幻想郷を照らす月は、普段通りの輝きを見せていた。  
相変わらずの面持ちで警戒を続けていた隼斗だが、一度気晴らしの  
ために庭に出た

時間帯的に辺りはシンツと静まり返り、月光に照らされた庭が広  
がっている何時もの風景

「？」

この時隼斗は違和感を感じていた

(気の所為か？今夜の月明かりは何時もより明る過ぎるような……満月だからか？)

そして徐に空を見上げた隼斗の表情が、驚愕のものへと変わる

空に浮かんでいるのは間違いなく月であり、色も形も大きさまでも同じ物だった

「……なんだよ、アレは……!?!」

ただ一つ違うものを挙げるならば、それが発している『力』だった。本来月の光には魔力が宿るとされており、満月の夜にはその影響を受けて自身を強化する種が存在する。

それは吸血鬼であったりワーハクタクと言った代表的な妖怪から、力の強い妖怪ならばその殆どがその影響を受ける

しかし今日の前にある月が発している力は普段とは桁違いに強く、本来ならば影響がない人間の隼斗にまで感じ取れる程だった

——そして異変はすぐに起きる

「!?!」

ついさつきまで静まり返っていた筈の世界が一気にザワつきだした。

幻想郷のあちこちで、過剰な魔力を浴びた妖怪達が身体に異常をきたし始めた

「……ッッ」

隼斗は予め用意してあった念話用の札を取り出して、各地に呼び掛けた

「おい！これが聞こえてるやつは応答しろ!!」

『隼斗!?!』

「霊夢か！そっちの状況はどうなってる?」

『どうもこうも無いわ！一緒にいた萃香が苦しみだしたと思ったら急に暴れ出したのよ！今魔理沙と二人で交戦してるところ！』

「萃香が!?……わかった、今から俺も加勢に……」

『……やめた方がいいわ。多分ここ以外でも同じ様な事が起きてるだろうし、持ち場を離れるとかえって危険よ……!』

すると今度は別の声が割って入ってきた

『…隼斗……隼斗、聞こえるかしら?』

「紫!?お前無事なのか?」

『私なら大丈夫よ。ギリギリ能力で防いだから……でも藍は間に合わなかった。今力尽くで押さえ込んだところ』

「……そうか。兔に角助けがいるなら言ってくれ。すぐに向かう」

『……ええ、貴方も気を付けて』

そして念話を切り、一旦屋敷内へ戻ろうとした隼斗はハツとする

中の兔娘二人もまた妖怪であることに

「……くっ!」

フワリッ

急いで駆け出す隼斗の後方で、ナニかが降り立った。

隼斗は立ち止まり、ヒシヒシとその存在を背中で感じ取りながら、険しい表情のまま叫んだ

『『お前ら』もかよ!クソツタレ!!』

隼斗の咆哮にも一切反応を示さず、不気味に光る紅い瞳が『標的』を見つけ、輝きを増していた



1人は手に持った日傘を突き付け

1人は真紅の槍を構え

1人は真紅の大剣を携え

1人は漆黒の翼をはためかせ

友人である筈の隼斗へ、一斉にその矛先を向けた

……ゾワツ

『断空』ツ!!」

隼斗は反射的に防壁を展開した

同時に放たれた攻撃は全てスペルカードではなく、明らかに『殺す為』の威力で、防壁をいとも容易く破壊した

(…詠唱破棄とは言え断空を簡単にぶち抜きやがった……。月の影響化で力も上がってんのか…!)

爆風から逃れながら駆ける隼斗の目の前に、『幻想郷最速』が立ち塞がった

「!………文」

「………」

名前を口にしても返ってくるのは殺気の込められた視線のみ。

彼女の『風を操る程度の能力』により、圧縮された空気の弾丸が射出された

隼斗は頭を傾けて躲し、後方の竹に空いた弾痕を見ると、遙か遠方の竹にまで達していた

立て続けに放たれる弾丸の雨を、大きく横に跳ぶ事で回避した隼斗の頭上に影がうつり、風切り音と共に日傘が振り下ろされた

「幽香……!」

それを霊力で覆った腕で防いだ隼斗の呼び掛けに反応するかの様

に、口角を吊り上げた幽香は隼斗の顔へ手を翳した

「ツッー」

咄嗟にその照準を上を蹴り上げる事で、放たれた魔砲は竹林の一角を消滅させながら空の彼方へと消えた

「破道の十一 『綴雷電』！」

日傘を掴み、そこから電撃を流すことで感電させる。

一瞬怯んだ幽香の隙を突き、その場から離れた

「次から次へと……！」

今度は隼斗の前後左右から、四体に分身したフランが襲いかかる

「ふっツッー」

短く息を吐き、ほぼ同時に四方向から迫るフランを迎撃する隼斗

「！」

その直後に頭上と足元に魔法陣が浮かび上がり、無数の紅い槍が降り注いだ

隼斗はその範囲外へ逃れる為に後方へ下がるが、一本の槍が彼の目の前に突き刺さった

「!?……身体が……！」

途端に身体が何かに固定されたように動かなくなる。

見るとまるで地面に縫い付けられているかの様に、隼斗から伸びる影を槍が捕らえていた

幾ら力を入れても指先一つ動かす事の出来ない隼斗の頭部へ、鈍い音と共に吸血鬼の拳が打ち込まれた

そのまま吹き飛ばされる隼斗の視界に、拳を突き出したままのフラント、真紅の槍を投擲するレミリアの姿が映る

「……………ぐっー」

隼斗は無理やり身体を捻りながら着地し、拳と脚に『瞬間』を纏いながら槍の一撃を弾いた

目の前の四人はジリジリと距離を詰めてくる

「やめろつつつても無駄っぽいな」

頭部から血が滴り、平衡感覚に若干の支障が出ていたが、それでも何とか構えをとった

「……上等だ。だったら纏めてかかって来やがれ!!」

幽香、文、スカーレット姉妹の四人はその言葉と同時に一気に突っ込んできた

隼斗はその場の全員を上回る速度で回り込むと、掌底を突き出して纏っている霊力の波動を打ち込んだ。

しかしそれに被弾したのはレミアとフランのみ。

幽香と文は驚異的な反応速度で回避すると、それぞれ魔砲と風砲を放った

『『双蓮蒼火墜』』

両手を上下に開き、掌から強化された蒼火墜を放つ隼斗。

両者の技はぶつかり合い、力と力が均衡する。

だが二対一、更に詠唱破棄の即席で打ち出した術の為か徐々に押し始められた

「……君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ  
蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ……」

『!?!』

隼斗の後付けの詠唱により、押されていた筈の破道が飛躍的に膨れ上がった。

これにより一瞬で二つの砲撃ごと幽香と文はのみ込まれた

「……………まだ立つか」

砂塵が舞い上がる向こう側に人影が複数

月の魔力は妖魔の力を増大させるだけでなく、その治癒力さえも上昇させていた

(消耗の激しい瞬間で長時間の戦闘は難しい……………かと言って本気でやれば殺しちまうかもしれないねエ……………どうする?)

『ツ!』

何とか打開策を考える隼斗へ再び襲いかかろうとする四人

「貴女達、人様の敷地内で何をしているのかしら?」

ヒュツツ

突如側方より飛来した矢が足元に突き刺さり、その動きを止めた

「!……………お前ら」

「ごめんなさいね隼斗。てゐを取り押えるのに手間取ったわ」

「隼斗く、暇だから助っ人に来てあげたわよ!」

「…あの四人もてると同じ状態に……………!」

そこに現れたのは二人の不老不死と月の玉兔だった

## 85話 誰を殴りましたよ？

「ウドンゲ、彼女達の容態はてると同じとみていいのかしら？」

永琳は視線を前方から外すことなくにそう尋ねる。

鈴仙は赤く輝く瞳で幽香等を一見した後ゆっくり頷いた

「……ならやる事は一つね。隼斗」

「……？」

「彼女達を正気に戻したければ戦うしかないわ」

「それならさつきからやってる。だが一向に戻る気配は無いぞ？」

「ただ戦うだけならね」

永琳は視線を上げて不気味に浮かぶ月を見ながら続けた

「貴方もわかってると思うけど、この異変はあの月が原因よ。どういう訳か現代の月と遙か昔に存在した強大な魔力を持った月『狂月』とすり替わってる。この月は地上の、特に妖怪や魔族と言った者たちに多大な影響を及ぼして……」

…と、そこまで言いかけて隼斗から声がかかった

「なあーその話長くなりそうか!？」

見ると痺れを切らした幽香等四人の攻撃を必死ながらも器用に受ける隼斗の姿があった。

漫画のようにヒーローの変身間は空気を読んで待っていてくれる怪人とは違い、現実はそのようなもの御構い無し

「縛道の六十二『百歩欄干』!!」

隼斗は手元に光の棒を形成し、後方に下がりながら前方へ向け投げ

放たれた棒は空中で分散、一気に視界一面を埋め尽くす程の光の雨となり、幽香達に降り注いだ

『……………!』

その弾幕を避け切れず、何本か棒が突き刺さっていき、身体を自由を奪う。

永琳達の元まで下がってきた隼斗が流れる血を拭いながら尋ねた

「これで少しの間大丈夫だ。……それでさっきの続きだけど、要は月をどうにかしねエと駄目って事か？」

「ええ。これは私の推測だけど、あの月を呼び出したのは月の連中。大方地上を混乱に陥れて私達を炙り出す魂胆かしら」

「相変わらず懲りない連中ねー。こっちは偉い迷惑だわ」

「……鈴仙は影響を受けてねエけど、月の出身って事と関係してんのか？」

「まあそれもあるわね。彼女の能力は物の波長を操る事が出来る。狂気作用のある月の魔力から身を守る事も、狂気に堕ちた者を正常に戻す事も可能よ」

その言葉を聞いた隼斗が口角を吊り上げてこう言った

「OK。異変解決の算段が浮かんだ」

「あら、聞かせて貰えるかしら」

「月が出る限りは正常に戻したって無駄だ。だったら一度意識を刈り取って無力化してから月を何とかすりゃあいい」

「……えーと、月を壊すとか？」

「いや、それは最終手段だ。なるべく月本体に刺激を与えねエ方がいいだろうからな」

「こ、壊す事は可能なんですね……」

そうこう言っている間に縛道を力尽くで解除し始めた幽香等が暴れ出した。

瞳の輝きは一層紅く、鈍くなっていく

「……あの娘達も余り時間が無いわね。月の魔力を過剰に取り込み過ぎている」

「……兎に角さっき言った通りだ。なんやかんやアイツ等を気絶させて、なんやかんや俺が月へ乗り込む。それで馬鹿共をぶん殴って異変解決だ」

「そのなんやかんやが重要じゃないですか？」

「まあ何とかなるでしょ。さっさと片付けてゲームの続きがしたいわ」

「丁度人数も同じだし。さあ、誰が誰を殴りましょうか？」

——四人は各々の相手へと歩き出した

「貴女幻想郷最速なんですってね。それがどれ程のものか見せてもらおうかしら♪」

蓬莱山 輝夜 VS 射命丸 文

「一番幼げに見えるけど……大丈夫かな……」

鈴仙・優曇華院・イナバ VS フランドール・スカーレット

☒ 「前々から吸血鬼については興味があつたの。少し診察させて貰うわね」

八意 永琳 VS レミリア・スカーレット

「お前には前助けてもらった借りがあるからな。今日はその礼だ」

終 隼斗 VS 風見 幽香

## 86話 それぞれの戦い（前編）

輝夜 side

「神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』!!」

輝夜の前方にカラフルな弾幕とレーザーが放たれる。

文は空中を縦横無尽に飛び回りながら持ち前のスピードで、不規則に動く弾幕の間をくぐり抜けていく

一通り弾幕が止んだ後、手刀を作った文は輝夜に向けて斜めに振るった

「!」

眼前の笹が真っ二つになったのを見て、輝夜は咄嗟に横に跳んだ。

着物の端に切れ込みが入り、後方の竹が音を立てて倒れた

「今の、見えなかったわね。もしかして鎌鼬ってヤツかしら?」

視認出来ない攻撃にも大して慌てる様子のない輝夜は、逆に興味深そうに尋ねた

「…」

文は無表情のまま続けて手刀を振るった。

あらゆる角度から連続で鎌鼬を飛ばしていく

「……ツレないわね」

輝夜の目の前に障壁が展開され、風の鎌を遮断した

「見えなくとも、狙いがわかれば防ぐ事は簡単よ」

障壁には傷一つ入っておらず、やがて攻撃の手を止めた文はゆっくりと浮かび上がり、次の瞬間には周囲に烈風を巻き起こしながら高速で飛翔し始めた

「攪乱する気?……神宝『サラマンダーシールド』!」



輝夜の周囲を回るように二つの光玉が現れ、全方向に向けて火炎弾が放たれた

しかし驚異的な速力を誇る鴉天狗を捉えることは出来ず、今度は四方八方から空気の弾丸が雨のように降り注いだ

「いくらやっても同じ事……!?!」

障壁を張って防ぐ彼女の身体に異変が起きる

(…息が……まさか…辺りの空気を…!?!)

周囲の酸素濃度が下がり始め、輝夜は酸欠状態に成りつつあった

輝夜は堪らず障壁を解き、その場から大きく離れたが、それを狙っていた文に一瞬で追いつかれ、鎌鼬により背部を斬り付けられた

「……っー」

ギリギリで身を捻った為に両断は免れたが、艶やかな着物に赤い染みが広がっていく

輝夜は追撃を防ぐ為にすぐ様障壁を展開した

「くっ……油断したわね……はあ、折角の着物が台無し」

再び輝夜の周囲から酸素が除外されていく

「また同じ手?……少し侮りすぎじゃないかしら」

そんな言葉を聞いてか知らずか、文は飛び回りながら『次で確実に仕留めるために』掌へ力を溜め始めていた

「……仕様が無いわね。『少しだけ本気出しましょうか』」

輝夜は微笑を浮かべつつも、障壁を解き、酸素の失われていく空間から飛び出した

ゴオオオオオツ!!

凄まじい轟音を発しながら背を向ける輝夜に向けて放たれた巨大竜巻は、周囲の物を削り取りながら着弾した

「……」

砂塵が舞い上がり、クレーターの出来た地面を無表情のまま赤い瞳で見下ろす文。

対象は塵すら残っていないかった

そして何故か文の視界がブラックアウトする

「だーれだ?」

「!?」

文は自身の目を覆っていた物を払いのけ大きく距離をとった

見ると今し方殺したはずの標的が、両手を広げ、払いのけられた姿勢のままクスクスと笑っていた

「あら、殺したと思った?残念。私殺されても死なないの」

彼女は「それと」と付け加え、ゆっくりと歩みを進めた

「いくら死なないって言っても貴女の思惑通りに喰らうのは癪だから、『キツチリ避けといたわ』」

「……!」

文は再び輝夜の周囲を高速で飛び回り始める。先程よりもスピードが速く、常に弾幕を展開して彼女をその場から動かさない様に立ち回った

「いい加減落ち着きなさいな」

直後、飛び回る文は小さな弾幕に被弾する

「!?」

思わず停止した文は表情こそ変化が無かったものの、驚愕した

「うふふ、お久しぶり」

目の前には先程まで自身が翻弄していた筈の標的が笑みを浮かべながら、『同じ高さ』に浮いていた

文は確かに地上で立つ輝夜の姿を目撃していた。

それがほんの一瞬。方向転換のために視線を外した刹那の瞬間に

『追いつかれていた』

「止まってていいの？私の攻撃、始まってるわよっ。」

その言葉に文が反応した時には既に遅かった

「……否、初めから反応出来ていたとしても避けられる筈が無かった

彼女の能力の一部。『極限の加速』により、幻想郷最速すらも置き去りにその技は放たれた

「神宝『蓬莱の玉の枝——夢色の郷——』」

虹色に輝く弾幕が迫り、辺り一帯も同様の色に染まった

「——」

鈴仙 side

「わっ!?!」

ガゴンツツ!!と吸血鬼の拳が振り下ろされ地盤が砕き割れる。

鈴仙はバックステップで下がりながら躲し、手を銃の形にして目の前の敵に照準を合わせた

「くっ……速い……!」

しかし、見た目幼かろうと吸血鬼。鴉天狗程では無いにしろ、それに近い速力を有している為、攻撃を当てるのも容易ではない

フランは四体に分身する技『フォーオブアカインド』を使い、更に場を掻き乱しながら鈴仙へと迫った

「波符『赤眼催眠』!!」

宣言と同時に弾幕が四方八方にばら撒かれる。更に物の波長を操

る能力の一部である『狂気の瞳』を発動させ、弾幕を次々分散させる事によりフランの進路を塞いだ

フランは一瞬速度を緩めるも、手にレーヴアティンを構えると、アカインドと共に弾幕を撃ち落としながら突っ込んだ

「!」

鈴仙は身構え瞳を紅く輝かせる。

目の前まで躍り出たフラン等は、一斉に攻撃を行った

ズシヤツ!と鮮血が飛び散り鈴仙の身体が四つに裂ける。

地面に血溜まりが広がっていき、重力により、その上にズタズタの身体が落ちてきた

「……」

フランはアカインドを解き、尚も無表情で血溜まりを眺めた

「……狂視『狂視調律』!!」  
「!?!」

突然フランの後方から壁の様に配置された弾幕が押し寄せた

フランは慌てて上空に飛んで躲すが、突如目の前に現れた新たな壁弾幕をモロに受け、吹き飛びながら竹藪に突っ込んでいった

「ふう……上手くいった」

自分の狙い通りに攻撃が決まり、一先ず安堵の息を漏らす鈴仙。

いつの間にか消えた血溜まり、そして不可視にしていた弾幕も、彼女がフランに見せた幻視であった

(あの娘、力は物凄いくけどあんまり戦い慣れてない感じだった……このまま押し切れば……!)

そう思ったのも束の間。

次の瞬間には竹林の一部が爆散して消滅した

「……」

「…ツ!？」

そこから拳を身体の前で握り込んだまま近づいてくる少女。

瞳が鈍く輝き、発するプレッシャーが大きくなっていく。

鈴仙は悪寒を覚え、反射的に後方へ跳んだ

ボンツツ!!と弾ける音が鳴り、一瞬前まで彼女が立っていた空間が爆ぜた。

地面には丁度一人分の穴が開いている

(何っ…!?!竹林の爆発といい、対象を爆発させる能力?!)

その場の状況だけでは決定的な見解は出せないが、一つだけ言える事があった

(あの娘に狙いを定めさせてはいけない…!)

鈴仙は走り出し、同時に狂気の瞳を発動させる。弾幕と合わせて幻視による分身を幾つか作るだけでも攪乱する事が出来る

(てると同じ要領で正気を取り戻すなら、多少危険だけど急接近して瞳を合わせれば……!)

長年軍に所属していた過去があつてか、敵に対する立ち回り方や、戦闘中に於いて自身を冷静に保つ訓練を受けてきた鈴仙は、飽くまで倒すのではなく無力化を狙っていた。

それが一番被害を最小限に抑えられる選択だとわかっていたからだ

しかし彼女の行動が最善策とは言えなかった。相手は手数で押されようがそれを力押しでひっくり返す事が出来る吸血鬼……

フランは迫り来る分身を含め弾幕に応戦すべく高密度の魔弾を周囲に打ち出した。

更にはその手に真紅の大剣を構え、近づく者全てを薙ぎ払った

「ならこれでどう……！——『幻朧月睨』!!」

鈴仙は跳躍し、自身を中心に不規則に停止と消失を繰り返す大量の弾幕＋幻覚作用によりフランの五感を狂わせた

「……………!!」

フランは平衡感覚を狂わされ、視覚・聴覚すらもグチャグチャの中、せめてもの足掻きとして渾身の魔力を込めた、今までの物とは比較にならないほどの、超巨大な『レーヴァテイン』を形成し、デタラメに振り回した

大剣が通過した箇所には高熱と同時に弾幕がばら撒かれ、今まで竹林だった景色が一瞬で更地へと変わる

フランは息も絶え絶えに辺りを見渡すと、地面に横たわる標的の姿があった。辺りには何もなく、ひたすら荒野の様な景色が続いている

標的はピクリとも動かず、自身の感覚が戻っていた

——つまり

『死んだのかアアあ?』

「!？」

頭の中で声が響いた

『どこを見てるの?こっちだよおお……』

フランは反射的に振り向いた。

そして狂気化により表情の変化が無いはずの彼女の顔が、驚愕に染まる

『——』



・ ・ ・ ・ ・

「あちやー、やり過ぎたかな？」

パチンツ

指を弾く音と共にフランは目覚めた

「えっ……う……えっ？」

状況が飲み込めず放心状態のフランは周囲を見渡した

自分は竹林に囲まれた場所に横たわっていた

次に目にしたのは、申し訳なさそうに頭を下げる兔耳の少女

「……誰？」

「大丈夫？ごめんね……少し『幻覚』が強過ぎたみたい」

「……幻……覚……？」

微かに震える声と身体。

徐々に先程見た悪夢の記憶は薄れていった



## 87話 それぞれの戦い（後編）

永琳 side

知性を持たぬ一匹の魔獣が、眉間を射抜かれ倒れ伏す

「……49匹」

永琳は弦き弓を引き絞った。弦には新たに形成された光の矢が当てがわれ、前方の魔法陣より飛び出してくる魔獣に狙いが定められた。

風切り音が鳴り、更にもう一体の屍が積み上がる

「これで50匹目……ねえ、いつまで続ける気かしら？」

永琳は目の前の吸血鬼に対し、溜息を吐きながら尋ねた

レミリアは特に反応するわけでもなく、左右に展開されている魔法陣に魔力を供給し始める

「……諄いと言ってるのよ」

永琳は弓を構え、再び魔獣を召喚しようとしている魔法陣を同時に打ち抜いた

パライインツ！と硝子が砕け散るように魔法陣は崩れた

「……」

小さな手に紅い槍を二つ出現させたレミリアは、一瞬で姿を消した後、永琳の正面と背後からほぼ同時に心臓へ向け投擲した

（召喚術に高速移動、光の槍……吸血鬼は多彩ね）

対する永琳も矢を射った。

正面、そして背後に至っては振り向きと同時に。

矢と槍はお互い弾き合い空中をクルクルと舞う。レミリアは内の一本を再び掴み取ると、ジグザグに動きを加えながら一気に突っ込んだ

ガキインツ！と甲高い音が鳴り、直接突き立てられた槍は永琳の張った障壁により、へし折れた。

すぐ様後方に下がったレミリアは指を鳴らす

「！」

すると障壁の内側に魔法陣が展開され、一瞬後に大爆発を起こした

「……魔女に匹敵するほどの魔力の高さ。でもそれが仇になって月の影響をモロに受けてしまうわけね」

黒煙の中からゆっくりと歩み出てくる永琳の身体の表面には、薄いベールの様な膜が覆っていた

「長年生きてきた私はその過程で『あらゆる術』を習得してきた。でも貴女はその歳で高度な魔法を使いこなす。……ある意味才能かしらね」

永琳は興味深そうに微笑みながら手を翳した

『この術』も一応、『あの人』程では無いにしろ、私なりに考察して最近使えるようになったの」

掌に赤い球体が形成され、徐々に大きくなっていく

「――破道の三十一『赤火砲』」

紅蓮の火塊がレミリアへ向け放たれた。しかし本来の赤火砲とは違い、ある一定の距離で炸裂。回避行動をとったレミリアの翼の一部を焼いた。

焦げた翼から黒煙が上がるも、彼女の表情は変わらない

「……痛みすら感じないか。それとも精神が肉体を凌駕している？

………まあ、どちらにせよこのままじゃ貴女本当に死ぬわよ？」

「……」

レミリアは水平に両腕を伸ばし、その身体を紅い光が包む。  
光は次第に輝きを増していき、一挙に拡散。  
波紋状に押し寄せる真紅の波は、辺り一帯広がった

「……驚いたわね」

波が通過した箇所に見えた魔法陣。

しかし両手の指では足りない程の数が一度に展開されていた

直後に攻撃は始まった。陣の中心から使い魔が次々飛び出し、別の陣からは永琳に狙いを付けた魔弾が打ち出される。

更にレミリア自身も攻撃を行った。

最早、一つ一つを撃墜していたのでは到底間に合うものではない

「秘術『天文密葬法』」

この戦闘において初のスペル宣言。

永琳の周囲に大量の球体が配置され、迫り来る使い魔や魔弾に応戦すべく弾幕を放ち始めた。

永琳自身は突っ込んでくるレミリアに狙いを定め、弓を引き絞る

「中々興味深い戦いだっただわ。……でもドクターストップよ。貴女はもう寝なさい」

一筋の光の矢が迫り来る吸血鬼を射抜いた

――

隼斗side

ドガッ!!!

そんな衝突音が辺りに響く。

両者の拳がぶつかり合った音だった

地盤を踏み沈めながら風を切る音と共に回し蹴りが側頭部を狙う。

しかし一方は日傘を挟み込みつつそれを払いのけると、返す刃もとい日傘で相手の胴を打った

「……そんなになっても動きのキレは変わらねエ。流石だよお前は」

隼斗はそう言いながら掴んでいる日傘を手前に引いた。それによりバランスを崩した幽香が前のめりになり、その下顎目掛けて脚が振り上げられた

直後に日傘を手放した幽香は紙一重で蹴り上げを躲すと、後方にステップして間合いをとった

「……」

一拍置いて両者は地を蹴った

隼斗は踏み込みつつ日傘を一度手元で回し、その遠心力のまま突き出す。

幽香はその突きに対し、側面から掌底で受け流すと、そのまま回転して裏拳を放った

もう片方の手でその一撃を受け止めた隼斗は、拳を掴んだまま、突き出していた日傘を振り上げてから斜めに落した

「……ッ!？」

しかし日傘の柄の部分から棘が飛び出し隼斗の手を突き刺した。

思わず日傘から手を放す隼斗へ、再び所有権を手にした幽香が一閃。彼の身体を後方に吹き飛ばした

「痛つつ……とんでもねエ機能付いてんなその傘。盗難対策か?」

軽快に体勢を立て直した隼斗は、刺された手を振りながら、拳に靈力を乗せて腰だめに構えた。

更にもう片方の手で拳を覆い、次第に密度が濃くなっていく霊力はボンヤリと鈍い光を発し始める

「俺流『すごいパンチ』!!」

「!?」

その場で振り抜かれた拳は前方の空間を押し出しながら離れた位置にいる幽香を吹き飛ばした

「……………」

幽香は立ち上がり、再び構えた。

鈍く光る赤い瞳が目の前の友人を殺す為に輝きを増している。よく見れば左肩が垂れ下がっており、肩が外れていることがわかった

「……………」

痛みを感じていないのか、少し遅れて肩の違和感に気付いた幽香は、乱暴に左肩を掴んだ

ゴギンツと鈍い音が鳴り、外れた肩は元通りになった。

しかし彼女は顔色一つ変わらない。眉一つ動かない

「幽香…………お前は確かに強えし、ちよつとやそつとの事じゃ弱みを見せねエ奴だつて事も知ってる。…………でもお前だつて褒められて照れたり、馬鹿にされて怒つたり、悔しくて泣いたりした事だつてあるだろうが…!そんなカラクリ人形みてエにただ淡々と戦う奴は風見幽香じゃねエだろ!」

幽香は日傘の先端に魔力を溜め始める。

徐々に身体を侵食していく月の魔力は、コントロールを困難にしているのか綺麗に纏まらず斑が出来ていた

「…………すぐ助けてやる」

ゴオツ！と隼斗は本日二度目の瞬間を発動させる。  
しかし出力は1度目より大きく、形状は雷の様に彼の周りを迸っている

先手を打ったのは幽香。

月の影響か、普段より赤黒い『マスタースパーク』は空間を揺るがしながら真つ直ぐ隼斗へ向かった

『双骨』

隼斗は両拳を合わせ、その魔砲へと突き出した。

ガガガガツ！と力と力が均衡し、その余波で竹林全体が激しく揺れた

「ッー」

魔砲に対し、隼斗は真つ直ぐ当てていた拳をズラし、下から上へ思い切りカチ上げた。

更に地面を踏み付け、一気に接近する。

踏み付けた地面を見れば、足型に深く陥没しており、周囲が焼け焦げていた

幽香は迎え撃つ為弾幕を放つが、今や天狗をも上回る速度で移動する隼斗には掠りもしない

轟ッ！と互いが衝突する。

しかし一瞬で幽香は後方に押し負け、尚も距離を詰める隼斗に対し、無数に拡散させたマスタースパークを弾幕として打ち出した

「ふんっー」

隼斗は構わず行く手を阻む弾幕全てを叩き落とした。

そして幽香まで10メートルの距離まで緊迫した瞬間、彼女の身体が残像の様にブレ始め、隼斗の一撃は空を切った

辺りには花の香りが立ち込め、幽香自身の気配もあやふやになる

「……俺は回りくどいのは嫌いなんだ」

そう呟いた隼斗は、真下の地面を拳で叩き割った。衝撃波は周囲に漂う芳香を吹き飛ばし、崩れた地盤は幽香の足を止めた

「……」

幽香は日傘を捨て、両手を前方に添えると、莫大な魔力を溜め始めた

「そんなスキのデカイ技を目の前で打ち出そうってのか？」

長時間にわたり月の魔力を浴び続けた為か、既に思考能力すらもコントロールを失いつつあった

「……」

「……次で終わらずぜ」

隼斗は腰を落とし、片側の掌を前方に突き出し、拳を胸付近に添えるように構えた

『マスタースパーク』

『無窮瞬間』

カッ！と辺り一帯が光り、凄まじい轟音と共に竹林の一角が吹き飛んだ

## 88話 夜明け

時刻的には深夜をとうに過ぎているにもかかわらず、相変わらず月は真上に位置している。

月に変化がなければ、夜も明ける事がない

幻想郷に狂気の月光が降り注ぐ中、隼斗は紫の屋敷を訪れていた

「準備はいいかしら？」

「ああ、頼む」

庭の池に映る月。

しかしそれは幻想郷の空に浮かぶ月ではなく、外の世界に浮かぶ本来の月であった

「夜明けまで時間がないわ。事を済ませたらすぐに戻ってくることにいいわね？」

そう釘を刺した紫は、水面に映る月に能力を使用。

幻想郷から外の月へ、そして月の裏側へと境界を繋げた

「……じゃあ行ってくる。その間頼むわ」

「ええ、いってらっしゃい」

隼斗は月へ続く池へと姿を消した

.....



「あら？……隼斗は？」

「月へ行くと言って紫の所へ向かいました」

「流石、やる事が早いわねー。隼斗も貴女も」

輝夜の視線の先には、結界と術により拘束された襲撃者達が横たわっていた

「ねえ、私は貴方達の言う狂気には堕ちてないと思うんだけど？」

その中でただ一人意識のある金髪赤眼の吸血鬼が、仰向けの姿勢のまま永琳に向けて抗議する

「そうね、でも念のためよ。他の娘達と違って貴女は怪我が少ないよ  
うだし、私としてもこれ以上怪我人を増やしたくないもの♪」

ニコやかにそう語る師の姿を、恐る恐る伺っていた鈴仙は、大人しくするようフランにジェスチャーを送った

「……貴女、大変な上司を持ったわね」

「後は頼むわね、隼斗」

――

「八意永琳と蓬萊山輝夜はまだ捕まらんのか？」

「そう焦るな。……術式が発動してから大分経つ。狂乱の舞台となった地上から逃れる為に尻尾を見せるのは時間の問題だろう」

「くくつ、もうすぐだ。『不老不死になる術』さえあれば無敵の軍が手に入る。そうすれば力関係は一気にひっくり返し、月の権力は我々のものとなr……」

「……ゴオオオツ!!」

唐突に粉々になった扉に、その場の全員の視線が集まった  
「な、何事だ!?!」

「も、申し訳ありません……! 侵入 s y …!?!」

扉と共に部屋に飛び込んできた見張りと思われる兵士は言葉を途中で切り、その頭を地面にめり込ませ、動かなくなった

「……よオ……」

靴裏に付着した血を床に擦り付けながら、その男は淡々と続けた  
「随分楽しそうな話してるじゃねエか……俺も混ぜてくれよ」

「何者だ! どこから入った!?! 警備の連中は何をしている!!」

重役の一人が部屋の外に向かって声を荒げる。周りに居るものも通報する為に警報機を鳴らす、誰一人駆けつけてくる様子はない

「兵士は来ねエよ。俺の手で血袋に変えといたからな」

見ると身につけている衣服には返り血と思われる染みがベツトリと付いていた

「き、貴様ツ!!」

一人が銃を手に取り、男目掛けて引き金を引いた

.....

「春雨隊長、此方です」

「…！これはっ…！！」

「鳴りっぱなしの警報装置に気付いた我々が駆け付けた時には既に…」

「…人的被害は？」

「重症者が多数出ておりますが、警備を含め1人も死傷者はおりません」

「1人も？襲撃者は一体何の目的があつて…？」

「それと…もう一つ問題が…」

「？」

「別室より禁術による『狂月』の召喚術式が確認されました。軍専属の術師によるものです」

「!?」

「術式自体は既に解かれた後でしたが…どうしますか？」

「…：…：兔に角、彼らの意識が戻り次第話を聞く必要がありますね」

・  
・  
・

月に広がる海。

水面に映る星々に混ざり、地上のとある景色が波に揺られながら映し出されていた

（夜明けまで時間が無い。さっさと戻らねーと）

「もう行くのか？隼斗」

背後から掛かった声に、隼斗は足を止めた

「…：…月読か」

隼斗が振り返った先には、この星の神である月読命がやや高めの位置から見下ろしていた

「ひっそりと帰る割には随分派手に暴れたようだな」

「それを知ってんなら当然月の異変にも気付いてた筈だよな？何でお前の手で止めなかった…？」

隼斗は若干の怒りを含ませながら威圧的に尋ねた

「…………… 反逆因子の特定、並びに目的を図るためだ」

「反逆因子だと？そんなもんお前ならどうとでもなったんじゃねエのか…？ 他を餌にしてまで凶らねエといけねエ事だったのかよ…！」

「…………… そうだな。確かにお前達には迷惑を掛けた。すまない」

地に降り立った月の神はそう言っ頭を下げた。それを見た隼斗もハツとなり口を噤む

「…………… 奴らが狙っていたのは八意永琳と蓬莱山輝夜だった」

「!!」

「理由は明白だ。月の戦力比は私や綿月姉妹がその殆どを占めている。それを覆すのは決して容易ではない。そこで彼女等が用いた不老不死になる手段に目を付けた」

「…………… 兵士を不死身にして武力強化を図ろうとしたのか」

「浅はかな考えだ。だが奴らの中には軍の参謀もいた。仮に兵力全てを味方に付けられでもしたら間違いない厄介な存在になる」

「…………… あの二人は俺が知る中でも相当の実力者だ。そう簡単に奴らの手に掛かるとは思えねエけどな」

「それも今回の陰謀が失敗に終わった要因だろうな。目先の事しか見えていない悪い例だ」

「…………… くだらねエ」

「同意見だ」

隼斗は背を向け再び水面に向けて歩き出した

「…………… 隼斗」

「悪かったよ。俺も言い過ぎた」

「……」

次の瞬間にはその場に月読だけを残し、隼斗の姿は消えていた

――

――

――

↳ the next day ↳

「結局入院したのはレミリアだけか」

永遠亭の病室で患者衣に身を包むレミリアを見て、隼斗はからかい交じりに指摘した

「何よ！この医者が容赦無さ過ぎなんでしょ!!」

「お嬢様、あまり叫ばれますとお身体に響きます」

「まあまあ、良かったじゃない。生きてて」

「師匠が言うとお洒落に聞こえないです」

「どうもー、毎度お馴染み『清く正しい射命丸です』。先日の異変の取材に参りましたー!」

「いや貴女も当事者じゃない。私と戦ったわよね?」

「お姉様ー、お見舞いに来たよー!」

「ちよつ、病室では静かにして下さーい!」

魔の夜が明けた幻想郷。

騒がしい風景が日常の世界では、病室ですら賑やかになる

## 89話 百花繚乱

「異変だー!!」

突如として扉を開け放ちそう叫ぶ白黒魔法使い。睡眠中叩き起こされた隼斗は、ベッドからムクリと起き上がり時計を見る

「……『まだ7時』じゃねーか。起こすなら後2時間後にしてくれ」

『もう7時』だよ……ってそんな事言ってる場合じゃないってば!」

「はあ?朝っぱらから何騒いで……:異変つつったか?」

寝起きで頭が回っていない隼斗は、ついさっき彼女が叫んでいた事を思い出す

「いいから外出てみろって。エライことになってるぜ」

「……わかったわかった」

気怠そうにベッドから這い出た隼斗は、適当な下駄を履いて寝間着のまま外に出た

「……………」夜明けて随分華やかな景色になったもんだ」

玄関を出てすぐに欠伸をしながらそう呟いた。

目の前に広がっている光景は、寝起きの隼斗から見ても異常だと思える程

そこには皐月や稷萩、菊や露といった、同じ季節間では揃って見ることが出来ないはずの花々が咲き誇っていた

「確かにこれは異常だな」

「だろ?兎に角原因を探って……」

魔理沙はそう言って振り返ったが、隼斗の姿はなかった。

そして視線を家の中へ向けると、いそいそとベッドに潜り込む隼斗の姿を見つけた

「じゃ、おやすみ」

「おおおおおイイ!!」

青空の下、箒に跨り空を飛ぶ少女と、それにぶら下がりながら便乗する男。

隼斗は今朝から何度目かになる欠伸と溜息を繰り返しながら文句を垂れていた

「ハア……かつたりーな。なんで俺まで駆り出されなきやならねーんだよ。かつたりー……」

「二回も言うなよ……。いいじゃんか、どうせ暇だろ？いつもは張り切って異変解決してるじゃん」

「別に張り切ってはねーよ。それに今回は唯花が咲いてるだけで害があるわけじゃねーんだから別にいいじゃんほっとけば」

「何があるかわからないだろ？乗っけてやってんだから文句は無しだぜ」

「……これ乗っけてるって言うの？」

風に揺られながら、隼斗と魔理沙は博麗神社を目指した

――

く博麗神社

「おーい霊夢ー！」

「あーあ、降りる時もうちよいスマートに降りてくれよ。最後の方足先が、ガガガガガツてなってたろうが。靴の先微妙に削れちゃったよ」

「私はいつも通り着地しただけだぜ。霊夢ー！いないのかー？」

「賽銭投げたら来るんじゃない？」

「そっか。ほいっ」

キンツと指で硬貨を弾く魔理沙。

隼斗の財布から抜き取られた硬貨は、放物線を描きながら賽銭箱の中へ吸い込まれていった

「……おい、なんで俺のチャリ銭投げた？つーかいつの間にとった」

「細かい事は気にしちゃダメなんだぜ」

「細かくねーよ窃盗だろーが」

そして待つ事数分。未だ巫女の姿はない

「あれー？可笑しいな……金にがめつい霊夢ならすぐ飛んでくると思ったのに」

「留守なんじゃねーの？とつくに異変解決に向かったとか」

「そうかもな。じゃあ私達も行くこうぜ……！」

「いや、俺帰って寝たいんだけど……」

「さあ、レッツラゴー!!」

再び等に跨った魔理沙は、隼斗の襟首を掴んで飛翔した

「……強引な子に育ったもんだ」

隼斗は宙吊りのまま呟いた

――

「太陽の畑？」

「ああ、幻想郷内で『花』つついたらそこだろ。丁度その奴とは友達だし」



「へー、なんて言う奴なんだ？」

「風見 幽香。前にお前も会ったろ。桜異変の時だ」

「げっ、アイツか……」

「なんだよ、幽香となんかあったのか？」

「いや、まあちよつとな。大した事じゃないぜ」

「ふーん。まっ、悪い奴じゃねーからよ」

暫く幻想郷の空を飛んでいると、前方に鮮やかな花々が密集している区域を発見した2人。

入り口の立て札には『この先太陽の畑』と書いてあり、隼斗と魔理沙は高度を落としながら畑上空を飛んだ

「……そう言えばさ」

「うん？」

「魔理沙も幽香もデカイレーザー撃つ技を『マスタースパーク』って呼んでるよな。あれは本来そう言う名前の魔法なのか？」

「いや、あれは私がそう呼んでるだけだぜ。元は違う人の技だったんだけどな。」

……昔妖怪に襲われてた処を助けて貰った事があるんだ。その時にその人が使ってた技がマスタースパークってんだ」

「へえ……じゃあ案外ソイツが幽香だったりするかもな」

「うーん……そうか？前に会った時は私の事知らないみたいだな事言ってたしな……」

「おっ、あそこだ。幽香の家」

隼斗の指差す方向には、広大な花畑に佇む一軒の家があった

魔理沙は高度を更に落とし、開けた場所に着地する。

隼斗も足が地面に擦れる前に箒から飛び降りていた

「おっ、学習したじゃん」

「……うっせ。おーい幽香ー！」

先の博麗神社同様、今度は隼斗が家に向かって幽香の名を叫んだ。すると前回とは違い、ガチャリと扉が開き、中から緑髪の女性が出

てきた

「あら、隼斗いらつしやい。そろそろ来る頃だと思ってたわよ」

「ん？って言うど？」

「ちよつと前にも紅白の巫女がやってきたのよ。今回の異変に心当たりはあるかってね」

「そんで？」

「面白そうだったから態と含みのある言い方をしたら戦闘になったわ」

「……………そんで？」

「博麗の巫女だけあって、人間にしてはそこそこやるんじゃないかしら？でも残念。暫く戦いを楽しんだ後、『やっぱり違った』って言ってどこかへ行ってしまったのよ」

「……………じゃあ幽香はやってないんだな？」

「当然よ。花つていうのは季節毎に色々な姿で咲き誇るのが美しいの。それを一変に咲かせてしまうなんて邪道だわ」

幽香は周りに咲く花々を一見した後、ふと自身を見つめる魔理沙に気がつく

「……………何かしら？」

「あつ、いや……………何でもない」

どうにも煮え切らない返事をする魔理沙を、幽香は暫く見つめた後、日傘を畳んで家の戸を開けた

「…………『アレから』少しは上達したかしら？小さな魔法使いさん」

「！」

そう言い残し、家内へと戻っていった幽香を、魔理沙は黙って見送った

「…………聞かなくてよかったのか？」

「まあその内な。…………今は異変に集中だ」

魔理沙は再び歩き出し、隼斗も後に続いた

## 90話 楽園の閻魔

太陽の畑を後にした隼斗等は、異変解決の為に此処まで引っ張ってきた魔理沙と共に幻想郷の空を飛び回っていた。

相変わらず空の飛べない隼斗は、箒に片手だけ引っ掛けて樹上生活をする猿のようにぶら下がっている

「なあ、連れてくならせめて俺も乗っけるよ」

「乗っけてるじゃん」

「違うね。今の俺はスーパーの帰りにチャリンコに引っ掛けられてる買い物袋状態だ。俺が言ってるのは箒の上に乗せろってこと」

「悪いな はや太。この箒は一人用だ」

「誰がはや太だ」

「それに隼斗の体格じゃくっ付かないと乗れないだろ？乙女の身体にそう簡単に触れられると思わないことだなー」

そう笑い飛ばす魔理沙に、隼斗はある一点を見ながらツツコミをいれた

「なーーにが乙女だ。さっきから風に煽られてスカート捲れあがってるクセに」

「……へっ?」

魔理沙はゆっくりと後方に目をやった

「…お前もうちよい色気のあるヤツ履くだぶっ」

そこで言葉は途切れ、顔面に入った後ろ蹴りと共に空中へ投げ出される隼斗。

魔理沙は顔を真っ赤にしながら八卦炉を構えていた

「おいっちよ…待っ…!?!」

「問答無用…!!」

同時に放たれた思い出のマスターパークは、至近距離にいた隼斗を飲み込み地上へと激突した

「ふん…!」

未だに赤面状態の魔理沙は、八卦炉をしまい何処かへ飛び去ってしまった

「……………つたく。たかが下着見られただけでムキになりやがって。しかもマスパって俺じゃなかったら怪我してるっつーの」

地面にあいた穴からブツブツ文句を言いながら出てきた隼斗は、砂埃を払いながら辺りを見渡した

(……………位置的に妖怪の山ら辺か。まあ折角だしもうちよいと搜索した後適当に帰ろ)

空に意識を向けると、何やら天狗達が騒がしい。当然原因は先程山に打ち込まれたマスパ or 自分である為、隼斗はそそくさとその場を離れた

ある程度進んで行くと、辺り一帯が霧に包まれている場所に出た。

いつの間にか山を下りつつ裏側まで来ていた隼斗は、すぐ近くから僅かに聞こえてくる川のせせらぎを耳にした

「……………えーと、確か前に紫から聞いた事あったな。妖怪の山の裏に流れる川。名前は……………」

『『三途の川』。この世とあの世を別ける境界線です』

川のせせらぎ以外何も聞こえない静かな場所に凜とした声。

振り返ると二人の少女が此方に歩み寄って来ていた

一方は赤い髪を二つに纏めたツインテールと、身の丈程ある鎌が特徴的な長身の少女

もう一方は片側だけ長めの緑髪に紅白のリボン、手には笏のような物を持った少女

『『お久しぶりですね』、 柊 隼斗』

「……映ちゃん?」

「ぶっ……」

途端に吹き出した赤髪ツインテールは、顔を覆いながら肩を小刻みに震わせて笑いだした

「……小町」

「……………ゴホンッ」

態とらしい咳払いを尻目に、少女は再び向き直った

「……その呼び方はやめて下さいと前から言っていた筈ですが?」

「……マジで映ちゃんかよ。前と、何て言うか……雰囲気変わったな」

「……」

飽くまで直す気のない隼斗に、溜息を吐く少女。その横で小町と呼ばれた少女が耳打ちする

「四季様、お知り合いですか?」

「……昔の知人です」

「そこはせめて友人って言ってくれよ。っつーかそっちの娘は?」

「あたいの事かい?コホンッ、あたいは小野塚小町。四季様の部下で、主に死神として彼岸への船頭をやってるよ」

「死神……! って事はその鎌はまさか斬魄刀か…!」

「は、はあ?」

やや興奮気味に食い付く隼斗に困惑する小町は、手に持っている鎌を隼斗へ投げ渡した

「見ての通り刃の付いていない飾りモンさ。その『ざんぱくとう』ってのが何なのかはわからないけど、死神のイメージって言えば大きな鎌だろう? だから死者の奴らは大抵イメージ通りだって喜んでくれるよ」

「なんだ、『命を刈り取る形』をしてるからってつきりそうなのかと」

「アンタは確か隼斗って言ったかい?」

「ああ、映姫とは昔馴染みだ。それより映ちゃんって地蔵だったろ? こんな所で会ったのも驚いたけど、部下に死神まで持つなんて閻魔に

でもなったのか?」

「そうなりますね」

「……………えっ?」

「この方は四季 映姫様。役職はヤマザナドウで、わかりやすく言う  
と幻想郷を担当している閻魔様ってわけさ」

「閻魔…!?閻魔ってあの嘘ついたら舌引っこ抜くつうアレか!」

「舌を抜く……………などと言う処罰は聞いた事ありませんが、偽りを口に  
した者は当然罪状が増えるでしょう」

只々驚く隼斗とは対照的に、淡白に答える映ちゃんもとい映姫は、  
幻想郷を訪れた本来の目的を口にする

「さて、そろそろ本題に入りますでしょうか。今現在幻想郷に起きている  
異変については知っていますね?」

「まあな、さつきまでその調査に当たってたところだ。つつつても原  
因はさっぱりだけど」

「原因ならばわかっています」

「ううっ…………」

映姫は隣に立つ部下を一睨みした後答えた

「幻想郷の外、つまり外の世界で一定周期に起きる幽霊の増加。並び  
に時同じくして起きる幻想郷を覆う結界の緩み。これらが合わさり  
幽霊が異常発生したのです」

「それと花が咲き乱れる事が関係あるのか?」

「本来幽霊は死神の先導の元冥界へと送られます。しかしこの地域を  
担当している『何処ぞの死神には仕事をサボる癖があり』、その結果幽  
霊等は途方に暮れ、幻想郷の花々に身を寄せてしまった為に今回の様  
な異常が発生しました」

「……………す、すいません」

「あつ、お前か」

「もう少しでクビにするとこでした。しかし幽霊の数が許容量を超  
えていたのも事実。仮に真面目に働いていたとしても同じ様な事が  
起きていたかも知れません」

「で、ですよね……!」

「…………小町、私は貴女がサボっていた事を咎めているのですよ？」  
「きやんっ」

「…………そんで？解決する方法はあるのか？」

「ええ。このまま順当に靈魂を彼岸へと導いて行けば時期に収まるでしょう」

「なんだ放つときや解決すんのか。じゃあ安心だな」

「……………ところで終 隼斗」

「あん？おいおい映ちゃん、いい加減堅苦しくフルネームで呼ぶのやめないか？せめて苗字か名前、どっちかにしてくれよ」

「貴方自身私への呼称を変える気は無いのでしょうか？それなのに其方だけの要望が通るとでも？貴方は昔からそうでしたね」

「いや…………まあ。って言うか、えっ？なんか説教モードに入っていない？」

視線だけを小町の方へと向けると、ウンウンと頷く返答が返ってきた

「…………そう、貴方は些か自由奔放過ぎる。此れまでも…………」

「悪い急用ができたまたな映ちゃん今度飯でも食おうぜじゃあな！」

早口でそう言い残し、土煙を上げながらスタコラと駆けて行ってしまふ隼斗を、眉をヒクつかせながら見送る映姫

「話の途中で逃げるとは…………。今度会った時覚えていなさい…………！」

「あつ、食事は行くんですね」

——

「いやあ、危ねー危ねー。映ちゃんの説教癖は昔からだもんなー。しかもやたらと長いし」

「あら、隼斗？」

「ん？おおっ、霊夢。どうしたこんな所で」

「どうしたって、異変解決の為に一肌脱いでんよ。この先が怪しい  
と思ってる」

霊夢は隼斗の後方、妖怪の山の裏側にある三途の川を指差した

「いや、もうほぼ解決したぞ」

「は、はああ？どういう事よ!?!」

「何でもこの異変は大量に発生した霊魂が花に憑いたのが原因なんだ  
と。だから時間が経てば徐々にあの世に運ばれてって自然解決する  
らしいぜ?」

「何よそれ！結局無駄足じゃない！今日一日中飛び回ったって言うの  
に!!」

「らしいな、お疲れさん」

「むきー!!こうなったら隼斗！せめてもの気晴らしに勝負しなさい  
！」

「勝負しなさいってお前は何処ぞのツンデレ中学生か。俺は帰って二  
度寝できなかつた分昼寝するんだ。他を当t……」

「霊符『夢想封印』!!」

轟ッ!!つと隼斗の顔数センチ横を弾幕が通過する

「あつぶねーな!!ちよつと誰か！誰か警察を呼べエエ!!」

「それより異変起こした責任者呼べエエ!!」

「俺に言うなアア!!」



### 番外編3 笠地蔵

今は昔、とある雪の降る山道には一尊の地蔵があった

山には妖怪が多く生息しているにもかかわらず、その被害を受けていない事から、近隣の村からは守神として崇められていた

しかし時代と共に村は寂れ、次第に村人は減退。

終いには積雪により半分ほど埋もれた地蔵だけが残った。

身につけている雨風や雪を凌ぐための笠も傷み、所々裂けてしまっている

「ありやー、この地蔵随分ボロボロだな。こんな山の中に置かれてたんじゃ無理ねーけど」

吹雪の中、これと言って防寒着の類いを纏っていない男は、唯一身につけている笠の先を持ち上げて呟いた

「……」

・  
・  
・

「いれでよっ」

雪山より少し離れた場所に位置する集落近くに着くや否や、背負っていた地蔵を降ろした男は、一人でやり遂げた感を出しながら自身の被っていた笠とボロボロの笠を取り替えた

「そんじやな。礼って訳じゃねーけど、俺が死んだ時は地獄の閻魔への口利き頼むわ」

「待ちなさい」

「!?」

その場を立ち去ろうとした男は、突然掛かった声に振り返った。

しかし周りには誰もおらず、あるのは今し方自分が持つてきた地蔵だけだった

「……誰だ?」

警戒しつつ周囲の気配を探るも、特に当たりは無い

「此方です」

「へっ?」

——声は地蔵からだった

「えーと……今喋ったのお前か?」

「はい」

(……あれかな? さつき山で食ったキノコに幻聴作用でもあったのか? いやでも俺毒は効かねー筈だし)

「ああ、姿を見せていませんでしたね。……これでどうでしょう?」

一人頭を悩ませる男に、声の主が納得した後、地蔵を淡い光が包んだ

片側だけ長い緑髪に、白装束。

パツと見の特徴を挙げるならば、そんな感じの少女が地蔵から具現した

「なっ!? お、お前……!」

「人間の貴方が驚くのは無理ありません。私の名は——」

「その髪型、床屋で失敗したのか…!？」

「……………」

薄っすらと笑いを堪えながらそう言った男の前に、少女はその表情に影を映しながらこう言った

「先程の閻魔様への発言然り、貴方は少々物事を軽視する傾向にあるようですね。自己紹介の前にお説教といきましょう」

――

「……………以上で話を終わります」

「……………おいどうなってんだよ。さっきまで『ちよつと早いけど朝飯食うか』って時間帯だったのにもう昼だよ。これじゃあ『ちよつと遅いけど昼飯食うか…………』になっちまうだろーが」

ブツブツと独り言を垂れる男はすっかり真上にまで移動した太陽を仰ぎながら呆然としていた

「申し遅れましたね。私は四季 映姫と言います。貴方は？」

「……………柊 隼斗だ」

既に目が死んでいる隼斗は、若干項垂れ気味に返した

「では柊隼斗。貴方には礼を言わなければなりませんね。……………ありがとうございました」

「気にすんな。……………説教の方が倍疲れたから」

「あのまま彼処に放置されたままだったら私という存在は消え、唯の置物と化していたでしょう」

「あ？人間が作ったもんだし元々そうなんじゃねーの？」

「いいえ、地蔵に限らず信仰等が集まれば私のように神格化する物もあります。存在が消えると言うのもそれに付随して」

「…じゃあつまり『映ちゃん』は神って事か？」

「そうなりますね……………ちよつと待ってください。サラツと言ったんで流しそうでしたけど、『映ちゃん』って何ですか？」

「何って、愛称…的なの？」

「いやだから仮にも神に大して軽率な言動は控えなさいとさつき言っただばかりでしょう!! 私ならまだしも、万が一他の神々に同じ事を言ったら大変な事になるんですよ!」

「大丈夫だって。実際友達で二人いるから、神が」

「は、はあ?」

「さて、そろそろ行くわ。気が向いたら菓子でも持って来てやるよ。団子好きか?」

「……………好き、ですけど」

「そっか。じゃあ楽しみにしてな」

少女の頭をポンポンと叩いた隼斗は村の方へと消えていった

「……………終 隼斗」

—————

—————

—————

—————

「四季様ー、お茶とお団子を用意したので一息入れてはどうですかー?」

「ありがとうございます。キリがつかいたらいただきます」

・

・

「そういうえば四季様、前から気になってたんですけど、部屋に飾ってある笠って四季様が被るにしては少し大きくありません?」

「ああ、あれは…………」

―― 『友人からの貰い物です』

## 91話 もう一つの社

幻想郷の東には寂れた神社がある。

古くから存在するその場所は、『博麗神社』と呼ばれ、代々博麗の巫女が受け継いできた由緒正しき神社であった。

しかし、現博麗の巫女である博麗 霊夢は頭を抱えていた

理由は言わずもがな、今や人間だけで無く、妖怪の溜まり場と化している神社への参拝客がからつきしであり、については信仰心も不足していたためだった

そしてある日、博麗神社に一人の少女が訪れる

――

「隼斗ー、入るわよー!」

相手の返事を待たずに、霊夢は戸を開け放った。

隼斗は不機嫌そうに布団から顔を出すと、玄関口に立つ少女へ不満の声を漏らす

「……なあ最近流行ってんの?人が寝てる時に問題持ち込むやつ」

「まだ何も言っていないじゃない」

「お前とか魔理沙がウチに来る時なんて何かしら問題が発生した時位だろ」

「よくわかったわね、正解よ」

「わーいやったー(棒)。……正解者には安眠の為の時間をプレゼントして下さい」

「5秒あげる。……3、4、5終了。はい起きて」

「悪魔かお前は。俺は魔人ブウじゃねーんだよ」

「で？つまらん内容だったら即刻叩き出すからな」

「まあそんなにブスツとしないですってば。……実は今朝神社に客が来たのよ」

「参拝客か？珍しい事もあるもんだ」

「いや、参拝はしてなかったわ。なにせその客って言うのは巫女だったのよ。別の神社のね」

「えっ、博麗神社の他に神社ってあったっけ？」

「最近出来たみたいよ？よく知らないけど。それでその巫女から、ウチの神社を譲渡するよう言われちゃったのよね」

「いきなりか？随分強引だな……：：：：勿論断つたんだろ？」

「その場ではね。後日また来るみたいなさ言ってたけど」

「んー、諦める気は無いって事か。仕様がねー」

「行くの？」

「行儀の悪い新人君に挨拶して来るわ。お前は神社で待ってる」

隼斗はそう言い残し家を出て行った

――

「……あつ、しまった。神社の場所聞いてねー……：：：」

自宅を出て少し経ち、隼斗はそんな事を呟き足を止めた

（んー、まだ寝起きで頭が回ってねーな。今から聞きに戻るにしても面倒だし……：：：：そもそも霊夢は場所知ってるのか？）

暫く考え込んだ後、ふと視線をあげた彼の目に、空を駆ける烏天狗の姿が映った

「ふんふーん♪さーて、何かいいネタは無いかしらーつと」

「おい文」

「うひゃあつ!?……ツツ、つて隼斗さん?」

鼻歌混じりに飛行しているところに真後ろから声がかかり、思わず素つ頓狂な悲鳴をあげた射命丸 文は、飛びながらにして飛び退いた「よ、悪いな突然。早速だけど最近出来たって言う神社について何か知らないか?」

「神社……ああつ、最近幻想郷にやって来た神様と巫女の事ですね」

「神様?」

「はい。どうもウチの山を自分のものにしようとしている他、麓の方でも信仰を集めようしているらしいですよ。私達天狗も手を焼いています」

「博麗神社と言い、随分横暴な連中だな。そいつらの居場所わかるか?」

「妖怪の山の山頂付近に社を構えています。近くまで行けばわかると思いますよ」

「そっか、サンキュー」

妖怪の山へと進路を変えた隼斗は、その言葉を最後に空中を蹴った「後で取材させて下さいねー!!」

既に米粒大になった後ろ姿に文はそう叫んだ

・  
・  
・  
・  
・  
・

玄武の沢。

妖怪の山にある岩壁に囲まれたこの場所には、河童が生息している



その内の一人である河童の少女、河城にとりは、今しがた出来上がった発明品を試めそうとしていた。

幻想郷に於ける河童は、その多くが高度な技術力を持っており、こうして発明品を生み出しては実験を繰り返している

「よーしー！ ついに出来たぞ、遠距離飛翔爆弾。名付けて『ステイングレイM1』!! 無縁塚で拾った設計図を元に作り上げたこの鉄砲の威力、レッツ・試射!!」

にとりは天高く砲口を向け、景気良く引き金を引いた

轟ッ!! つと空気を裂くような爆音が鳴り、高速で射出された砲弾は、天高く一直線に射出された

「やったー! 大成k……あり?」

発射成功に浮かれる少女は、しかし目を疑った。

砲弾の直線上に空を走る人影らしきものが一つ

「ん?」

ドガアアアアン!! と見事に命中。

運悪く撃ち落とされた人影は業火に包まれながら沢へと落下した

「うわああああ!? ゴメエエエエン!!」

にとりは慌てて、未だ黒煙を上げながらプカプカと浮かぶ人物に駆け寄った

「……………」

「たたたた、大変だー!! えーとこういう時どうすんだっけ!?! ……177? 天気予報聞いてどうすんだ馬鹿!! いやいやそうじゃなくて落ちて着け私…!!」

勝手に慌てふためく少女を他所に、墜落した男は静かに立ち上がった

「あつ、生きて…た…？」

「……ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だ、クソガキ」

「／（＾o＾）／」

妖怪の山に消え入りそうな悲鳴があがった

「いや〜ゴメンね？当てる気は『さらさら』無かったんだよ？」

「……河童だけにか？」

「ぷっ！上手い「あゝっ？」スイマセンナンデモナイデス」

濡れて垂れてきた髪を掻き上げながら、隼斗は不機嫌そうに近くの岩に腰掛けた

「……俺も此処では長い方だけだよ。流石にロケットランチャーに被弾したのは初めてだわ。くっそ痛エなアレ。っーかなんであんだよ……！」

「うっ……拾い物の設計図から作ってみたんだけど……なんかアルファベットでE・D・Fって書いてあったかな…？」

「………なんかどっかで見たとあるぞそんな感じのヤツ。侵略者から地球を守る系のゲームとかで」

「本当にゴメンね……。お詫びと言ってはなんだけど、私の発明品『マジック・アームくん2号』をあげるよ」

ヌツと背負っているドデカいリュックから取り出されたのは、棒の先に付けられた手を手元のレバーで操作するタイプの、百〇に売ってそうな機械だった

「いらんわ……！いつ使うんだそれ」

「ほら、木に引つかかった風船を取る時とか、箆笥の裏に落ちた印鑑を取る時とか」

「どっちも自力でなんとかできるっての。それに急いでんだよ俺は」

「急いで……って、そういえば隼斗は人間でしょ？此処にどんな用があるか知らないけど、危ないから入らない方がいいよ？今新しく来た神様とやらのせいですべて的にピリピリしてるし」

「その神様に用があつて来たんだ。幻想郷で色々と悶着起こしてるみたいだからな」

「押しかける気？私の発明品が直撃してもピンピンしてるあたり唯の人間じゃない事はわかるけど、流石にやめといた方が……」

「気にかけてくれるのは有り難いんだけどな。まあなんとかなるだろう」

にとりの制止をやんわりと受け流した隼斗は、山頂に向けて歩き出した

## 92話 VS 現人神

### 妖怪の山・山頂

此処に堂々と建つ社は、最近外の世界から神々と共に幻想郷へやって来たものだつた。

近隣には大きな湖が広がり、此れもまた時同じくして移動してきたものらしい

「ふんっふんっ♪今の所順調に進んでいますねっ♪」

神社の石畳に散った落ち葉を竹箒で掃きながら、鼻歌混じりに緑髪の少女は呟いた

「このままいけば此処の住民全てがウチを信仰する日もそう遠くないかも♪頑張らなきゃ」

そう意気込み、一層掃除に精を出す少女は、ふと視線の先に一人の男の姿を捉えた

「こんにちは。どうかされましたか？」

「あー……此処は守矢神社で合ってるのか？」

「はい！えーと……御参拝ですか？」

「……此処の神様とやらへ挨拶にな」

男は前方の本殿を見据えながらそう口にした。それに若干の不信感を覚えた少女は、静かに警戒の色を濃くしながら尋ねた

「……………失礼ですが貴方は？」

「一応博麗神社の関係者だ。今朝方ウチに来たんだってな。神社を明け渡せって」

「……………それを知って此処へ来たって事は、ウチの神様を勧請しに来たという事でしょうか？」

「ホントにそう思ってるなら随分おめでたい思考回路してるよお前さんは」

今度こそ少女は身構えた。

目の前の男は間違っても参拝客などではないと知り、竹箒を脇に捨てると、お祓い棒を手に取った

「つまりカチコミってヤツですか？」

「さあな。そっちの出方次第だ」

「……私達は此処の信仰心全てを手に入れる！そうすれば信仰を失いかけている幻想郷は救われます」

「それで博麗神社も妖怪の山も抑えるってか？そっちの神つてのは随分強欲なんだな」

「っ！あの方達への侮辱は許しませんよ…!!」

「……どちらにせよ今のお前たちのやり方は気に入らねエ。話し合いが出来ねエならやる事は一つだ」

言葉は淡々と、纏う空気は重々しく男は答えた

「私とて現人神の末裔。神に仇なす貴方を通すわけにはいかない……!!風祝『東風谷 早苗』参ります！」

「現人神……通りで神力を感じる訳だ。いいぜ、此処のルールで遊んでやるよ……！」

空中に飛ぶ事で隼斗から距離を取った早苗は、その頭上に白昼にもかかわらず煌めく星を出現させた

「奇跡『白昼の客星』!!」

星から降り注ぐレーザーが一挙に隼斗に向かった

「障撃『血霞の盾』」

隼斗とレーザーの雨を遮るように真紅の障壁が展開され、弾幕全てを遮断。

更に障壁は砕け散り、その破片は弾幕となって早苗へと撃ち出された

「ツツ!？」

予期せぬカウンターに紙一重で躲した早苗の袖先を鋭利な破片が切り裂く。

指向性を持った弾幕であったなら、全弾被弾していたと青褪める早

苗の真上から声がかかった

「ポーっとすんな、現代っ子」

連続で突き出された拳から放たれた『唯の拳圧』が、弾幕となり降り注いだ

「現代っ子でも根性はあります!!」

半身が隠れる程度の小さな障壁を展開しながら弾幕を受けつつ躲し、再び距離を離れた早苗は、重力に従い落ちていく隼斗の周囲を回りながら弾幕を撃った

隼斗も同様に両掌にコンパクトな障壁を貼り付け、身体を回転させながら優雅に弾幕を受け切り着地する

「狙いは良かったけどな。お前自身が俺の動きに追い付けないんじゃないぞ。ハナっから周囲を囲むように弾幕を配置すべきだったな」

「何を偉そうにツ！稽古でも付けているつもりですか……!!」

「おいおい人の助言は聞いとくに越したことは無いぜ？此れでも博麗の巫女含め弟子は多い方なんだ」

「！……貴方が？」

パチンツ！と隼斗が指を鳴らす。

次の瞬間には早苗の周囲に弾幕が取り囲むように配置された

「……そら、一回目だ」

「くっ!!」

隼斗の合図で一気に押し寄せる弾幕を躲す手立ての無い早苗は障壁を展開して凌ぐしかなかった。

それを見越してか障壁越しでも衝撃が響く程の威力で次々着弾してくる弾幕に、歯を食いしばり耐える早苗

やがて弾幕が止み、肩で息をしながら早苗は地面に降り立った

「い、いつの間に……？」

「お前が弾幕撃ち終わって動きを止めた瞬間からだ。術で不可視にしてたとは言え、よく意識を凝らして見ればわかるようにしといたん

「だけどな」

「!?……………ここまで力の差が…!」

お祓い棒を握る手に力が入り、体全体を強張らせる早苗を見て、隼斗は一言告げた

「黙ってやられるだけなら誰でも出来る。……根性、あんだろ? 窮地に立った時こそ食らい付け」

「!」

相変わらず早苗は強く固く力を込め続けた。

しかし震えは無く、握り締めた拳は解かれ、体全体に力を浸透させていく

「お名前伺ってもいいですか?」

「あん? 何だよ急に」

「いえ、何となくです」

「……………柊 隼斗だ」

「……………隼斗さんの言った通り思い切り食らい付きます! 覚悟はいいですね?」

「さっさと来い、『早寝』」

「『早苗』です!!」

早苗は飛び出し、すぐ様弾幕を放つと、隼斗の足元を吹き飛ばした

「!」

「……『……』!」

砂塵が舞い、一瞬の目くらましになったと同時に早苗は攻撃に移る為のスペルを口にする。それらは事前に放った弾幕の着弾音により掻き消され、隼斗自身もスペル名を聞き取れなかったが、土煙に紛れ

て現れた新たな弾幕には反応することが出来た

(星型に連なった赤青弾幕……密度はそれ程濃くはねエな)

バックステップを交えながら一つ一つ正確に躲していく隼斗は、応戦する為にスペルカードを発動させる

「破道『三ノ龍』」

赤・黄・青の三色の焰玉を龍の姿に変え、其々動きをバラけさせながら前方に放った

これは彼のスペルカード、破道『三ノ火』の上位版であり、又、彼の持つスペルカードの中ではかなり強力なモノだった

弾幕を撒き散らしながら突き進む龍は早苗の弾幕を一瞬で飲み込み、その大口を開けるかのように三頭が対象へと向かった

(さあどうする？ 生半可なスペルカードじゃコイツは破れねエぞ……)

早苗は回避行動を取ることなくその場に立ったまま、その圧力に押しされながらも微笑を浮かべ、この戦い最後のスペルを口にする

「……大奇跡『八坂の神風』」

突如辺りに烈風が吹き荒れる

それは小さな台風のように辺りに渦巻き、辺りの木々を揺らしながら、前方に拡散

「……正しく神風の如く、三匹の龍を一瞬で掻き消して隼斗すら飲み込んだ

再び守矢神社の石畳の道に紅葉した落ち葉が弧を描きながら舞い



落ちる

「……」

「あっ……！」

以前と変わらぬ場所に立ち、彼の周囲を囲うように展開された障壁。

早苗はその光景を目の当たりにし、この勝負は決した

「……参りました。どうぞ、お進み下さい」

早苗は深く一礼すると、端に避けて道を開けた。

隼斗は黙ったまま歩みを進め、彼女の横を通り過ぎる瞬間一言呟いた

「上出来だ、『早苗』」

「！」

本殿へと歩いていく隼斗へ、もう一度一礼した早苗は一言呟いた

「ありがとうございます！」

### 93話 守矢の神々

「中に神力が一つ、湖の方にも一つ…か」

隼斗は守矢神社本殿を前にして立ち止まり、内部の神力を探った（…強エな。少なくともそんなじよそこの神じゃ比較にならねエ程の力だ）

再び歩き出した隼斗は、特に警戒するでもなく堂々と近づいて行く

「なあ、なにも『お互いを知らねエ訳じゃ無エ』んだ。顔くらい見せたらどうだ、『諏訪子』」

『ありや、やっぱりバレてた』

幼げな声が響き、目の前の空間が揺らぐと、具現化するかの様にヘンテコな帽子を被った少女が現れた

「此処にやって来た新しい住人ってのが、まさかお前達とはな」

「私もこうして再会するとは思わなかったよ。よく私らの正体がわかったね」

「んなもん神力を感じ取った時から気付いてたよ。…尤も、此処の名前が守矢神社だって聞いた時もある程度の当たりは付けてたけどな」

「そっかそっか。…それで？久しぶりに会った友人に言う言葉はそれだけなのかな？」

「そりゃあ偶然再会したとかなら話も弾むだろうな。だが、生憎と今回は博麗神社の使者として来てるんでな。そっちを片付けてから

だったら幾らでも話してやるよ」

「うー、隼斗……今回は仕方ないんだよ。外での信仰が激減した今、私達が新たに信仰を集めるには幻想郷しかない」

「だからって博麗神社に地上げ屋紛いな要求持ち掛けたり、この山を支配するってのはやり過ぎじゃねーのか？住人から侵略者呼ばわりされても文句言えねーぞ」

「たははー、それを言われちゃうとね……」

見た目相応のあどけない表情を見せた諏訪子は、帽子の鍔を持ち上げて空を見上げた

「……空は外の世界と変わらない。不思議な所だね此処は」

「……まっ、幻想郷だからな」

同じく空を見上げた隼斗は、ある気配を感じ取り視線を元に戻した

「来たか、神奈子」

「！……やっぱり隼斗だったのね」

疾風と共に現れたのは、嘗て大和の国に軍神として座していた神、『八坂 神奈子』だった

神奈子が到着した事を確認した隼斗は、自身が垂れ流していた霊力を引っ込めた

「久しぶりね、隼斗。少し老けたかしら？」

「ああ、最後に会ったのは幻想郷が出来る前だったか……歳のせいとか百年単位になると記憶が曖昧になっていけねーや」

「ふっ、積もる話もあるし、中でゆっくり話したいところだけど……」

そう言いつつ隣の小さな土地神に目をやると、少女は困ったように

苦笑を浮かべた

「……どうやら、先に別の話をつけなきゃいけないみたいだね」

「互いの為にもな」

三人は中へと消えていった

――

「……まさか隼斗が博麗の関係者とはね」

「別に直接の関係者じゃねーけどな。一応初代から世話焼いてきたからよ」

「あはは、世話焼きなところは変わってないんだね」

「今回に至ってはお前らが原因だけだな」

茶を啜りながら不満を垂れる隼斗へ、いつの間にか戻って来ていた早苗が御茶請けを並べながら質問する

「でもびつくりしました。隼斗さんが神奈子様と諏訪子様のお知り合いだったなんて。あの、昔のお二人はどんな感じだったんですか？」

「ちよ、ちよつと早苗……」

「あー……そうだな。取り敢えず喧嘩が多いのなんのつて、毎回俺に飛び火してたっけか。酷え時なんか頭から味噌汁被った時もあったぜ？」

「み、味噌汁……？」

「い、今はそんなだよ！昔ほど喧嘩してないと思う……多分恐らくきつと」

「……そう言えば昨日沢庵漬けの取り合いで喧嘩してませんでしたか？」

「こ、こらつ早苗……！」

くく

昨晚

「ぐぐぐつ……！神奈子、此処は私に譲りなよ」

「ぎぎぎつ……！ふん……軍神として、一度取ると決めた勝負は引くわけにはいかないわね……！」

「お二人共、沢庵でしたら追加で切りますから………箸で取り合わな  
いで下さい」

「もう歳でしょ？塩分控えたら？」

「アンタも大差無いでしょうが！」

くく

「……つて事が」

「ガキかお前ら」

「諏訪子を見た目もだけどね」

「なんだどう!？」

「言ったそばからおつ始めてんじゃねーよ」

二人の脳天に昔懐かしき拳骨が落とされた

「「ふぎゃつ!？」」

……閑話休題

「分社を建ててる?。」

「そつ。これならお互いに損は無い筈でしょう？」

神奈子等が持ち掛けた提案。

博麗神社への譲渡要求を取り下げ、代わりに博麗神社へ守矢神社の分社を建てるのはどうか、という内容であった

「まあ、それについては俺から口出し出来ねーし、後日ウチの巫女と直接対談でもして決めてくれ」

「ありや、案外あっさりだね」

「平和的に解決出来るなら俺は御役御免だよ。それに帰って昼寝してーんだ。最近叩き起こされる事が多くてな」

欠伸をしながら立ち上がった隼斗は、襖に手を掛けながら一言、「またな」と言い残し部屋を後にした

・  
・  
・

『『またな』か……ホントに変わらないね、隼斗は』

「そう？昔は今程ダレてなかったと思うけど……」

「ははっ、案外歳なのかもね。……さて」

神奈子は庭に出ると、後の二人もそれに続いた

「今度はもうちよつとフランクに信仰を広めてみようかしらね。手始めに天狗のところにも繰り出すか」

――後に天魔との会談を行った守矢一行は、その末に和解。幻想郷に君臨する神の石柱として受け入れられた

## 94話 異常気象く博麗神社倒壊く

「最近晴れ続きでまいっちゃうわ。この暑い季節に……」

季節は夏。

博麗神社にて、庭の掃除をする紅白巫女はぶつくさと文句を垂れる。

彼女の頭上には雲一つなく、正しく快晴であった

「おう、霊夢。…なんかテンション低いな。どした？」

「隼斗……ハア、別に大した事じゃないわ。唯『良い天気』過ぎてウンザリしてるだけ」

「?……なんだよ吸血鬼みてーな事言つて。別に特別日差しが強え訳でもあるまいし。ほれ、雲だつてちゃんて流れてんだろ」

「はあ?何言つてんのよ。今日は朝から雲一つn……あら?」

霊夢が空を見上げると、適度に流れる雲と青空が広がっていた

「おかしいわね……普通の天気になってる」

「いやいや、さつきからずっとこんな感じだったろ」

「いいえ、確かに貴方が来る前は雲一つ無かったわ。日差しだつてもっと照りつけるような感じだったし、それが異常な程長く続いているのよ」

「あー、日差しの暑い暑くないは兎も角、俺の家と此処はそんなに離れてねーから、そこまで変化はねー筈だけどな」

「……まあ、土砂降りの雨が続くよりマシだけどね。ところで今日はどうしたの?」

「ん?ああ、今日人里まで足を運んだんでな。偶にはと思つて差し入れ持つて来たんだ」

隼斗は手に持つていた包みを霊夢へと手渡した。丸印に『甘』の文字、長年隼斗が通っている人里でも有名な老舗の甘味処だった

「えっ、いいの?」

「おう食え食え。お前チビの時から好きだったろ。彼処の饅頭」

「ありがと♪良かったら上がって行ってよ。すぐお茶淹れるから」

パタパタと室内へと駆けていく霊夢を見て、隼斗は微笑ましく呟いた

「……途端に上機嫌になりやがって。わっかりやすいなあ、アイツも」

――

博麗神社を後にした隼斗は、自宅のある魔法の森を歩いていた。

そしてつい先程霊夢の言っていた『異常な天気』について思い出していた

「アレは……雹か？」

そのキツカケとなったのが、少し離れた場所で降り続けている雹。季節的に可笑しくないとは言え、自身の頭上には青空が広がっている。

……にも関わらずあの一点にだけ降り注ぐ雹に不信感を覚えた隼斗は、その場所に急行した

(アリスん家か。なんで此処ら一体だけ雹が降ってんだ?)

辿り着いた場所は、魔法の森の住人『アリス・マーガトロイド』の住む家。

隼斗は一先ず話を聞こうとドアをノックした

「はーい、何方? って隼斗じゃない。どうかしたの?」

「いや、どうかしたの? って、屋根の上見てみるよ。今頃天井がギシギシ言ってるじゃねーか?」

指差した先を見ると、屋根の窪みに溜まった雹が溢れている状態だった

「はあ、これで何回目かしら。朝から嫌になるわね」

「ちよつと待った。朝から? 朝は普通に晴れてたろ」



「何言ってるの、朝どころか此処最近ずっとこんな調子じゃない……ってあら？急に止んだわね」

アリスの言葉に隼斗も気がついた。先程まで喧しい音を立てながら降っていた雹が止み、天候が落ち着いてきていた

「どうなってるんだ？」

「ホントに貴方が来るまでは降っていたのよ？」

「いや、それはわかってるよ。だからこそ気になってアリスん家を訪ねたんだから。可笑しな天気だなー」

「……そういえば魔理沙が言ってたわね。最近異様に雨が多いって。突然の雹と言い、何か異常が起きてるんじゃないかしら」

「……異変って事か？」

「そこまではわからないけど……でも一度調べた方が良くんじゃない？」

「そうだな……明日もつかい霊夢のトコ行ってみるか」

別れの挨拶を交わし、再び自宅へと進路を戻した隼斗が去った後、アリスは空を見上げて溜息を吐いた

「また雹……はあ、どうなってるのよ一体」

．．．．．

「あん？ヤケに風が出てきたな。それにパラパラと雨が混じってやがる」

「そうなんですよ。此処最近風雨に見舞われて飛びにくいっいたらありゃしない」

ナチュラルに独り言へ乱入した幻想郷の新聞記者である射命丸

文は、翼に付いた水滴を払いながら答えた

「突然現れんなよ。どうした急に」

「どうしたも何も、記者としてネタは無いか飛び回ってたところですよ！」

「要はいつも通りって事な。悪いけど雨降ってるから帰るわ」

歩みを進めようとした隼斗の眼前に文が回り込み、ある情報を口にする

「それなんですよ！此処最近各地で異常気象が発生してるみたいで、聞くところによると雪まで降っているようですよ」

「雪ー？この真夏にか？……それがホントなら確かに『異常』だな」

異常即ち異変。いよいよその線が濃くなってきた現状に、隼斗は思考を凝らした

「つつても心当たりなんて無えしなー。現に今日までその事に気がつかなかったわけだし」

「気がつかない？そんな筈ありませんよ。現に今も……あや？」

「……………晴れてるな」

風は止み、雨音も消え、雲の切れ間からは日の光が差し込んでいた

――

隼斗が異常気象を認めてから翌日の事。

ここ最近各地で起こっている異常気象を『異変』として調べる事にした隼斗は、霊夢のいる博麗神社へと向かっていた

(……霊夢のトコでは快晴、アリスは雹。魔理沙が霧雨で、文が風雨か。まあこれが異変だとするなら何かしらの関連性があるんだろうが……………何で俺には起きてねーんだ?)

試しに空を見上げるも、特別日差しが強いと言うわけでもなく、雨が降っている訳でもない。適度に雲が流れ、時折心地いい風が吹く普通の天気だった

「はあ、サツパリだな」

頭を掻きながら石階段を上がり、博麗神社の入り口に立った

「……は？」

隼斗は目の前の光景に呆然とした

「……う、嘘だろ……？」

思わず駆け寄った隼斗の視線の高さにあるのは、博麗神社本殿の『屋根』

——博麗神社は見るも無残に倒壊していた

## 95話 天界へ

倒壊した博麗神社を前に隼斗は状況が飲み込めずにいる

境内で爆発でも起きたか？はたまた何処かから砲撃でも受けたか？それとも隕石が降ってきたか？

いくら考えても現場を見ただけではその程度の憶測しか浮かばない

(爆発だろうがなんだろうが、そんなモンが起きれば流石に気付くはずだ。だが今朝からそんな感じは無かった………つて霊夢！アイツはどうなった!?)

ハッと我に返った隼斗は周囲を見渡し気配を探った

「霊夢ならここよ」

突然の声と共に開いたスキマ。

中から現れた紫は、傍にいた霊夢と一緒にスキマから地上に降り立った

「紫……？つと霊夢！お前無事だったのか!？」

「え、ええ……何とか。神社が潰れる前に紫がスキマを開いてくれたから」

「潰れる………つて何があったんだ?」

「……地震よ。しかもかなり大規模なね」

「地震?………朝からそんなもんは感じなかったぞ?」

「そうでしょうね。地震が起きたのは博麗神社の建つこの場所だけなもの」

崩れた神社を一見しながら紫はそう答えた。

よくよく辺りを見渡せば建築物が倒壊する程の地震があったにしろは被害が小さいように見える

「仮にそうだとして、地震つてのはそんなピンポイントで起きるものなのか?」

「自然現象では考えにくいわ。……『誰かが故意に行なったのなら』話

は別だけど」

各地で相次ぐ異常気象、意図的に起こされた地震、博麗神社の倒壊  
これだけ条件が揃えば異変として博麗の巫女が動き出すには十分  
だった

「何処の何奴か知らないけどこのままじゃ済まさないわ！何がなんでも見つけ出してとっちめてやる!!」

「霊夢にしては珍しくやる気ね」

「そして！再建築費用を踏んだ食ってやるわ!!迷惑料込みで三倍よ!!」

「おっ、いつもの霊夢だ」

うつすらと背後に般若を浮かべ、全身に殺気を漲らせる霊夢を見て  
紫と隼斗は顔を見合わせる

「……お願い出来る?」

「……しゃーねーな」

互いに一言交わし隼斗は霊夢の横に並んだ

「……何よ?言っとくけど異変の主犯は私がシバくからね!」

「心配すんな、流石に今回は自重する。まあ露払い程度に考えてお供  
させてくれ」

霊夢はそれ以上何も言わず一度だけ頷くと、一気に飛翔した。  
後に続くこうとする隼斗へ紫が助言する

「妖怪の山の頂上に緋色の霧が集まっているらしいわ。怪しいとする  
ならそこじゃないかしら」

「どーも」

隼斗は上空に向けて跳躍した

「ねえ、いつも疑問に思ってたんだけど」

「?…なんだよ改まって」

妖怪の山へ向け空を駆ける隼斗と霊夢。

自身と並走して空中を走る隼斗を見て、霊夢はとある疑問を投げ掛けた

「何でいつも飛ばずに走ってるの?」

「飛べねーからだ」

「……はあ?冗談でしょ?」

「俺からしてみりや空飛べる方が不思議でしょうがねーよ。一体全体どう言う力が働いて飛んでんの?」

「どうって……私は能力で飛べるし、魔理沙とか咲夜は魔法とか使ってるんじゃない?」

「……いつの間にか妹紅も飛べるようになってるしよー。もしかして幻想郷で飛べねー人間って俺だけなんじゃね?まあ別に支障が出てる訳じゃねーし良いんだけどさ」

「ふーん。逆に私は霊力で足場を作る技術の方が難しいと思うけどね」

「そうか?もう慣れちゃったよ」

雑談もそこそこに、前方に妖怪の山が見え始めた。

その頂上、正確に言うならば上空に緋色の霧が集結している

「紫が言ってたのはアレの事か。もうちょい近づいて………なんか風が強くなってきたな」

「雨も降ってきたわね。はあ、傘持って来てないんだけど……」

近づくとつれて段々と悪くなる天候。

そして二人は霧の真下で止まった

付近を漂う黒雲の為か周囲は薄暗く、激しい突風が眼下の木々を揺らしている

「……此処だけまるで台風だな。余計な被害を被る前にさっさと抜けちまおう」

風が吹き荒れる中、黒雲へと突っ込む二人。

確証は無かったが、この先が怪しいと二人の勘が告げていた

視界の悪い雲内を進んで行く中、進行方向に一つの気配を感じとった隼斗は後続する霊夢を止めた

「…おや?こんな所に人間なんて珍しい」

雲の中を優雅に泳ぐソレは、二人の前に舞い降りた

「こんな天気の良い中普通に泳いでるなんて……アンタ誰?」

「私は永江 衣玖。竜宮の使いとして幻想郷に起こるであろうある異変を伝えるに参りました」

「異変だあ?生憎と色々起こりすぎて今更な気がするけどな」

「今現在緋色の霧が空を覆っているでしょう?緋色の空は宏観現象の兆しとして近い内に震災に見舞われる事を示しています」

「震災ですって!?!それならとつくに起きたわよ!お陰でウチの神社がペチャンコになったんだから!」

激しく憤慨する霊夢。しかしその言葉を聞いた衣玖は怪訝な顔をした

「……それは可笑しいですわねえ。本来なら地震が収まれば緋色の空も元に戻る筈なんですが……もしかしてあの方が?」

「……あの方?お前はどの異常気象、もとい地震起こした奴を知っているのか?」

「はあ、この先の天界に住まわれていますけど……恐らく貴方を襲ったと言う地震は前震であり、この先更なる大規模な地震が起こるでしょう」

隼斗は思索した。

地震含め、自然災害なんてモノを自在に起こせるのだとしたらその者の気分次第で幻想郷は壊滅してしまう。

人一人の力とは違う。自然の力とは彼とてそうやすやすと抗えるモノではない

「……霊夢、先に行け」

隼斗は更に前へ出ると、霊夢に指示を出し竜宮の使いと対峙した

「約束通りメインはお前に譲ってやる。だが忘れるなよ。今回は幻想郷の危機かもしれねえんだ。……やるからには必ず解決して来い」

「……！」

顔すら向けることなく背中を向けたままそう告げると、一度息を呑んだ霊夢は黙って頷き先へと飛んだ

「……いいのですか？お一人で行かせても。これより先の天界にはそれなりの強者が数多くいらっしやいますよが」

「構わねえさ。アイツは俺の弟子だ」



## 96話 天界の我儘娘

「……此処が天界って場所かしら」

黒雲での戦闘を隼斗に預けた霊夢は、ひたすら上空へと突き進み晴れた場所に出た

遙か地平線の向こうにまで広がっているのではないかと思える程の雲海に加え、どういった原理かその上に点々と島が浮いている

霊夢は一先ず近場の島に降り立ち周囲を探索した

「これは……桃？なんでこんな所に沢山実ってるんだか」

目の前に立つ桃の木。よくよく見れば浮かぶ島々の至る所に桃の木が立っている

「貴女が下界の解決屋ね」

「！」

後方とやや上空。

声のした方を見上げると、注連縄の張られた要石に座りながら此方を見下ろす少女『比那名居 天子』の姿があった。

靡く青髪の上には、桃の装飾が付いた黒帽子を被っている

「此処の住人は余っ程桃が好きなのね」

「そりゃあそうよ。この桃は伝説に残る程の仙果。食べ続ければ霊力や不老長寿を与えるとされる私達の主食だもの。オマケに身体も頑丈になるらしいわよ？」

「へえー、なら高く売れそうね。幾つか持って帰ろうかしら」

「残念、この実は唯の人間が食べても意味は無いのよ。って言うか自分が食べるより売る方を先に思い付くなんて貴女がめついわね」

「長生きしても貧乏生活のままだったら意味ないでしょ」

「ふーん、下界人の考える事はよくわからないわね。まあいいわ、貴女が来たことでこの退屈な生活にも刺激が生まれるでしょ」

霊夢はその言葉に反応し、怒の籠った声色で尋ねた

「……つまりアンタは退屈凌ぎに私の神社を潰したわけ？」

「アレは試し打ちよ。本番はこれから。ほら、貴女って下界で異変が起こった時に解決するのが役目なんでしょ？」

だから神社を潰したの。貴女が確実に此処へ来るためにね」

天子は傍らから刀身が緋色に揺らぐ剣を取り出し霊夢へと向けた

「……そうね。そこまでわかっているなら此れから自分が退治される覚悟くらい出来てるわよね？きっちり神社も元通りにしてもらおうから！」

「ふふっ、貴女自分が負ける姿を想像しないタイプでしょ？その慢心がどこまで続くか楽しみね！」

その言葉を皮切りに両者は同時に動き出す

要石の上に立ち上がった天子は、気質を操る剣『緋想の剣』を振りかざしながら要石ごと突っ込み、霊夢はソレを先読みしてか後方に飛んだ

轟ッ!!

大地に要石が叩きつけられ、周囲に砕けた地盤が飛び散る

土煙が舞う中、霊夢は身体の周囲に札を展開しながら真上に飛翔、そして敵の頭上を取りながら弾幕を放とうとした

「！」

直後、土煙から勢いよく複数の何かが飛び出した

「はい、囲んだ」

やがて視界の晴れた大地から天子が現れ、自身の指をクルクルと回している。

それに合わせ、霊夢を囲むように旋回する複数の要石が、徐々に光を帯び始め弾幕を放ち始めた

「いくら何でも舐め過ぎよ」

霊夢は自身も動きながら躲し、札を四方にばら撒きながら撃ち落とすしていく。

更に直ぐさま体勢を立て直すと、天子に向き直り印を結んだ

「……………結界!？」

天子の足下から彼女を拘束する為の結界が浮かび上がる

「足元がお留守よ。傲慢な天人さん」

結界はやがて光を帯び始め瞬いた

『『夢想封印』』

色とりどりの巨大な光弾が炸裂し、辺り一帯が眩い光に包まれた

「……………へえ、流石解決屋ね。少し驚いちゃった」

声と共に風切り音が鳴り、辺りを舞っていた砂埃が一瞬で両断された

「そんな煙みみたいな剣で夢想封印を防いだって言うの?」

霊夢は眉を細め、柄から揺らぐように伸びる刀身を指差した

「正確には『斬った』のよ。この『緋想の剣』は気質を見極め、そして斬り裂く事で対象の弱い部分を突く事の出来る剣。此れを前にして貴女に何が出来る?」

「これから見せてやるわよ!」

直ぐさま前方に向けて放たれた弾幕。

しかし天子はその場から動かず、自身を護る様に配置した要石でその全てを遮断した

「火力が足りないわね!打ってくるならこれ位打ちなさい!!」

要石が瞬き、一つ一つから大量の光弾がばら撒かれる。

対して霊夢は自身の周囲に陰陽玉を複数配置し、応戦するかのよう  
に弾幕を打ち返した

弾幕が飛び交う中、徐々に距離を詰めた霊夢はオプシヨンである陰陽玉を動かし直接天子に向け振るう。それに合わせ天子も要石を操り、迎え討ちながら緋想の剣を構えた

「剣技『気炎万丈の剣』!」

振るわれた剣撃は一見滅多斬りの様にも見えたが、常人では捉えること  
の出来ない速度で繰り出された

「くっ……!」

次々と破壊されていく陰陽玉。

要石に加え、緋想の剣による斬撃は中・近距離に於いて霊夢を防戦  
一方に追い込んでいく

「あははは!どう?手も足も出ないでしょ?悔しかったら反撃してみ  
なさいよ」

「一々癪に触る物言いね……!だったらお望み通り!!」

嘲笑う天子に向けて投擲されたのは数枚の札。札には其々異なつた術式が書かれており、天子の周りを囲うように配置された

「何？弾幕を打つ気なら労力の無駄よ？」

「残念。そんなヤワな物じゃないわ」

「霊夢の手元にも札が一枚あり、そこに霊力を流し込む事で術は発動した」

「師・直伝『結界破道』」

「周囲を漂う札が円を結ぶように繋がり、一つの結界を形成、更に書かれた『詠唱が浮かび上がる』と、それぞれに封じ込められた霊術が解放される」

「!？」

カツ!!

「結界内で同時発動された様々な破道が混ざり合い、凄まじい爆発を生んだ」

「反則じゃないわよ？結界で困うまでは時間があつた」

「原則として決闘ルールにおける弾幕戦は、ある程度相手が避けられる様、逃げ道を作る必要がある」

「慢心だったのはそっちの方だったわね」

「スペル仕様とは言え、逃げ場の無い近場での破道による一斉照射。霊夢は静かに構えを解いた」

「……慢心？何のことかしら？…これは『余裕』と言うものよ」

「!?」

突如として結界が崩れ去り、中から平然と現れた天子は、一瞬にして霊夢の周囲を要石で包囲した

「要石『カナメファンネル』。本来なら私の周囲に配置して外側に弾を打つ技なんだけど、特別に貴女の真似を試してみたわ♪」

「結界をどうやって…!」

「あら、さつき説明した筈よ？緋想の剣は気質を見極める。貴女の術もその源は霊力で出来ている。って事はその気を私にとって無害なものに変換してしまえばどれだけ高火力だろうと関係ないって訳♪」

「…さつきは火力が足りないとか言っておきながら………やっぱリアンタは癩に触るわ」

「ふん……博麗の巫女っていうのも案外、取るに足らない相手だったわね」

天子が指を鳴らす

其れを合図に一齐に放たれた光弾は、一瞬の内に霊夢を呑み込んだ

「まっ、退屈凌ぎにはなったわ。死にはしないだろうから目が覚めたら帰っていいわよ。……って聞こえてないか」

——背を向けた天子が違和感を感じたのはその一瞬後  
自身の放った弾幕は確実に着弾した。  
爆発が起きたのも目にはしている

天子は静かに振り返り驚愕した

「ど、どうなってるのよ……!?!」  
「……………ふん」

霊夢は何事も無かったかの様に『浮いていた』。その衣服に埃一つ付けずに先の攻撃を凌いでいた

しかし天子が驚いたのはそんな事では無く、目の前に居るはずの霊夢を『視覚でしか認識出来ない』事だった

「目の前にいるのに気配を感じない…? 気味が悪いわね…!! ———— 気性『勇気凛々の剣』!」

緋想の剣の斬撃に合わせて放たれた弾幕を前に、霊夢は避ける動作を取らなかった。

かと言って結界を張って護るわけでも、弾幕で応戦して打ち落とすわけでも無い

———ただそこに留まり、迫る弾幕は霊夢の身体を透過した

「はっ!?!」

「無駄よ。今からアンタは、『私の攻撃をただ防ぐしかなくなる』」  
「ッ!」

途端に放たれた複数の陰陽玉に天子は初動こそ遅れたものの、緋想の剣で全て打ち落とし霊夢へと急接近。そのまま剣を振りかざした

「大方身体を霊体にでもして透過させただけでしょ? でも気質を見極めるこの剣の前では無意味よ!!」

一閃ッ！

……しかし天子の一撃は空を切った

「!?そんな馬鹿な…!？」

「……今の私は『あらゆる全てから浮いている』。逃げ道の無い弾幕だろうが、弱点を突く剣だろうが、あらゆる事象は私に干渉する事が出来ない。……故に」

——『夢想 天生』

「そ、そんな無茶苦茶な……」

「言ったわよね？アンタはこれから防御に回るしかなくなるって」  
「!!」

気付けば大量の札が周囲を取り囲み、使用者の霊夢ごと天子を狙っていた

(マズいッ！防御を……！)

「警告を無視して攻撃に回った時点で、既に手遅れよ」

依然として不動の霊夢は、淡々と口にした

——大結界 『博麗弾幕結界』

多量な弾幕が一箇所に集中し、この闘いは決した



## 97話 もう一つの企み

博麗神社倒壊から三日後のある日。

八雲 紫は進捗状況の確認の為、博麗神社を訪れていた

あの一件から此処の巫女である霊夢は異変の犯人である比那名居天子を破り、神社の復興を命じていたのだが……

「……あまり進んでいる様には見えないわね。本当に直しているのかしら？」

「一応工事はしてるんじゃないの？ちよこちよこ天界の連中が降りてきてるのを見たし」

その隣では同じく頭を傾げる隼斗が、未だ足元にある屋根を目にしながらかえした

「なら天人って言うのはよっぱどのんびり屋なのね。このまま黙ってる霊夢も霊夢だけだ」

若干の苛立ちを漂わせ扇子で表情を隠した紫を横目で流しながら、隼斗はある事を口にする

「アイツら天人は神通力だかが使えるんだってな。神社の修復も術を使ってやってるらしいが、その現場を誰も見てねー（霊夢は知らんが）。つまり何かしら『細工してても』バレやしねーって事になる」

「……それは貴方の勘？」

「まあな」

「……はあー、どうやら調査が必要な様ね」

「俺がやろうか？」

「いいえ、偶には私が動きましょう。このままじゃ埒が明かないしね」

紫はスキマを開き中へと消えていった。

隼斗は一人思索し、ある人物を思い出す

「……竜宮の使いを当たってみるか」

結局彼も、独自に動き出した

・  
・  
・  
・

妖怪の山上空を駆ける隼斗は、以前異変時に対峙した永江 衣玖の活動場所を目指していた。

……つと言ってもあの時以来会っていないため、その場所にいるかは不明だったが

詰まる所、普段通り勘で動いていた

「ん、この辺か」

「あら、貴方は……」

そして行き当たりばったりでも出会えてしまう。これも普段通り

「よお、丁度探してたんだ。ちよつといいか？」

「私を？何でしょうか」

「お宅んトコの『とんでも娘』が何処にいるか知らないか？」

「総領娘様でしたら地上に降りている筈ですが………何分自由気ままな方ですので私も把握しきれないんです」

「ん、そうかー。(…となると、敢えて俺たちを避けてるのか？ますます裏がありそうだな)」

「あの、総領娘様がまた何か？」

「まあ、神社の再興を任されてる筈なんだが姿が無くてな。……そろそろウチの賢者がブチ切れそうだから早めに手を打とうと思って探

してんだ」

「ふーむ……しかしそれはそれでいい機会かも知れませんね」

「ありや、意外な言葉が出たね」

「あの方は些か身勝手過ぎます。ここらで一度お灸を据えられた方がいいでしょう。」

……あつ、私がこう言った事は内緒にして下さいね？」

「……お灸で済めばな」

――

「……貴女は何処にでもいるのね、萃香？」

「ん〜？ああ、紫か」

何だかんだで進行している神社の修復。

時刻は夕暮れ。紫は出来上がった博麗神社の縁で横になり、酒を飲む小鬼の隣へ腰を降ろした

「お前が出歩いてるなんて珍しいな。どーした？」

「調査よ。此処を壊してくれた傍迷惑な天人が何か企んでないかね」

「天人なら作業終えてさつき帰ってったぞ？作業ペースもそこそこに短時間で此処まで直せるのは大したもんだ」

「可笑しいわねえ。私が見にくると毎回いないのよ？」

「ははーん。だから何か企んでるんじゃないかって探してんだ？」

「私はさつきそう言ったわ。全く、酔っ払うのも程々になさいな」

「なんだよヤケに機嫌悪いじゃん。こりやまた珍しいや」

ケタケタと笑いながら瓢箪を口へと傾ける萃香とは対照的に、相変わらず紫は表情を扇子で隠したままだった

八雲 紫等が調査に乗り出してから更に数日後。  
博麗神社は元の形を取り戻していた

「はあ？落成式…？」

「そうよ。折角工事が終わったんだもの。新しく生まれ変わった神社として皆に知ってもらわないと！」

これを機に今まで何処にいたのか比那名居 天子は神社を訪れ、霊夢に提案を持ち掛けた

「知ってもらおうって……この神社は元々人が寄り付かないトコだったし、態々公にしなくてもいいんじゃない？」

「いいからいいから。ちゃんと最後まで私が責任持って仕上げてあげる！」

半ば強引に話を進めていく天子

するとその場の空間に一筋の切れ間ができ、中から伸びてきた白い手が天子の肩を掴んだ

「によわー!?な、何っ!？」

「漸く捕まえたわ」

次にスキマから紫が陰のできた笑顔を浮かべながら現れると、天子の表情が驚愕から狼狽したものへと変わる

「迂闊だったわね。今まで通り姿を眩ませていれば良かったものを……計画達成を前に浮かれていたのかしら？」

「な、何のことよっ！」

「惚けても無駄。既に調べはついてるの。お前の家系には神社がある事も、博麗神社を利用してこの地に領土を広げようとしている事もね」

「ふ、ふん。だから何？良いじゃない別に。地を這う妖怪風情がこの私に説教垂れる気？」

「……貪欲・慢心・傲慢。お前に限らず天人はいつもそう。『だからこそ余計に腹が立つのよ』」

紫は振り返り、天子の手によって再興した博麗神社に手を翳す

「ちよっ……！」

——止める霊夢には目もくれず、紫は神社を再び倒壊させた

「なっ!?なんて事してくれたのよ!!」

声を荒げたのは霊夢ではなく天子の方だった

「……お前が神社の修復の際、小細工を施した事は知っている。だから壊したの。此処は幻想郷よ。地に足を着けもしない天人なんぞに渡しはしないわ」

「この……ツツ!?!」

激昂した天子の首を、まるで上下で分けるようにスキマが開く

「いつ迄『その立ち位置』にいる気?まだ自分の立場がわかってないよ  
うね」

普段の落ち着いた物腰とは明らかに違う、明確な怒りを露わにした紫は殺気を発しながら続ける

「此れだけの事をしたんだ。それ相応のもので償いなさい」

「ひっ……！」

「……『美しく残酷にこの大地から住ね！』」

紫はスキマを閉じるため、掌を翳した

ガシッ

誰もが息をのむ状況下で、その腕を掴む者が一人

「その辺にしといてやれ」

「……隼斗」

隼斗は穏やかな口調のまま続ける

「お前の怒りは尤もだ。制裁を加えなきや治らねエってんなら止めやしない。……ならなんで俺は止めたか、紫ならわかるだろ？」

「……………」

静かに消えるスキマ。

解放された天子は緊張の糸が切れたのかその場にへたり込んだ

紫は一度深く息を吸い込み、思いつきり吐いた

「ふう……私とした事が大人気なかったようね。でもこれは最終警告よ。次は無いと思いなさい」

先程とは違い殺気が消え、落ち着いた様子で忠告をした紫は「我ニ投ズルニ桃ヲ以ツテスレバ、コレニ報ユルニ李ヲ以ツテス」と言う言葉を残し、スキマを開いてその場から姿を消した

「……さて」

地べたに座り、未だカタカタと震える天子を見下ろす隼斗

「今回初めて命の危機ってヤツを感じてわかったろ？アイツは普段滅多に怒らない。お前さんは自分が考えてるよりもとんでもない事をしちまったんだ」

「……そのようね」

「よく反省しろ。それで周りとも、もうちよい仲良くしてみろ。考え方も変わると思うぜ？」

天子をその場に残し背を向けて歩き出す隼斗。それと入れ替わるように永江 衣玖が天子の元に降り立った

「それとな、アイツが去る前に残した言葉。『接し方を考えてくれるなら、仲良くしよう』……って意味だぜ」

「多分な」っと笑いながら、霊夢を連れてその場を後にする隼斗を、天子は無言のまま見送った。

衣玖は天子の肩に手を添えて優しく起こした

「さっ総領嬢様、帰りましょう」

「……………」

「はい？」

「だからありがた………何でもない！」

「……………あらあら」

――

「今日は珍しいものを見たわ」

「だなー。紫のヤツ瞳孔ガン開きだったし」

「それもあるけど……………優しい隼斗も何だか気味が悪いわ」

「あんだとコラアアア!？」

この後、再び倒壊した神社を前に呆然としたのは言うまでもない。  
神社については後日、隼斗に怒られた紫が萃香に頼み込んで修復されたという



## 98話 地底の底から

季節は冬。

毎年順当にやってくるこの季節は、当然幻想郷でもお馴染みであり、人・妖怪それぞれ外を出歩く事が少なくなる

此処、博麗神社ではコタツに入り、頬杖をつけて蜜柑を頬張る巫女の姿があった

「はあ……参拝客が来ないのは毎度の事だけ……この時期は特に人が無いわね」

毎年来る季節、毎年恒例の悩み。

しかし彼女自身が外に出るのを渋っている為、仕方ないと言えば仕方ない

「ん〜。あつ……表の雪掻き忘れてた」

閉め切った部屋の外には雪が降り積もり、膝下近くまで達していた

「うう〜寒いから外出たくないけど……このままじゃまた去年と同じだし……うーん」

五分間の葛藤の末、なんとかコタツから這い出た霊夢は雪掻き道具を手に外へと出た

「あー寒っ。こんなに寒い中作業しても儲かるわけでも無しに……虚しいわね」

一人神社の庭で悟る霊夢だが、別に悲しいBGMなど流れていない

「二層の事隼斗に支援頼もうかしら」

霊夢がそう眩いた時だった

ーードオオオオオオンツツ!!

大地が揺らぐ程の衝撃と大音響が鳴り、博麗神社近辺の大地が上空へ勢い良く吹き飛んだ

「ななな、何事よ一体っ!?まさかまた地震じゃ…っつて冷たっ!?!」

思わず雪の上に尻餅をついた霊夢は、覚束ない足取りで現場へと向かった

「えっ……」

そして彼女はその場に立ち尽くした

目の前で空高く噴き出す『間欠泉』を目にしながら

ーー

「……霊夢、お前温泉でも掘り当てたのか?」

異変を聞きつけ駆け付けた隼斗は、一定周期で噴き出す間欠泉を前に呆れながらそう尋ねた

「私じゃなくて勝手に吹き出したのよ。隼斗も聞いたでしょ?あの轟音」

「あんだだけデカけりやな。俺はまた神社が吹き飛んだのかと思ったよ」

「全く、こっちは雪掻きの最中だったのに……!」

「……厳密に言えば俺がな」

両手にシャベルを持ちながらサラリと文句を言うも、当の本人には

態とかマジなのか聞こえていない様子

「まあでもアレだな。一層此処に温泉地でも造りや、ちつとは参拝客も来るんじゃないかねーか?……なんてな」

「あつ……それ名案ね! だったらまず萃香呼んで設計してもらわないと!!」

「本気にしちゃったよこの人」

張り切る霊夢とは対照的に、ある事に気付いた隼斗は静かに嘖き出す間欠泉を見据えた

「……霊夢、温泉造る前にやる事が出来たぜ」

「えっ?……あつ、お土産も用意しないと?」

「お前は一旦温泉から離れる!……じゃなくて、アレ」

「何よっ……!?!」

二人の視線の先では間欠泉と共に地面から這い出る怨霊の姿があった。

何故それが怨霊だとわかるのかと問われれば、二人は揃ってこう答えるだろう

『邪気を孕んでいるから』と

地下深くから流れ出る怨霊。

放っておけば生者に悪影響を及ぼしかねない為、霊夢と隼斗は一先ず結界を張った

「ちよつと、どうなってるのよ! 温泉は兎も角何でコイツらまで……!」

「間欠泉と同じ場所から出て来てるって事は、何か関連性はあるんだろうけどな」

先の嘖き出した間欠泉により、地面に大きく開いた穴を見つめる二人。

底の見えない真っ暗な世界が広がっており、そこから嘖き出す数多

の怨霊が、より不気味さを醸し出している

「……いや待てよ？なんかコイツら大人しくないか？」

「……………本当ね。邪気を纏ってはいるけど悪意を感じない。…………もう訳がわからないわ」

「兎に角このままじゃ埒が明かねーし、一度紫に相談してみようぜ」

「ハア、一難去つてまた一難か…………」

・  
・  
・

博麗神社居間にて、冬眠期間中に偶々起きていた紫を交えての緊急会議が行われた

「そう。それは少し良くないわね。よりによって地底への入り口が開くなんて」

「地底？なんだよ、幻想郷にそんなトコあったのか」

「昔は地獄の一部として使われていた場所よ。今は旧地獄として物好きな妖怪が住む都となつてるけど」

「そんな所から間欠泉や地霊が出るの？」

「地霊は残留した霊が間欠泉のタイミングで湧き出てきたと考えるのが有力だけど…………間欠泉に至ってはわからないわね」

「つまりその地底で何か異常があつたって事か？」

「恐らくは。本来地上と地底が干渉し合う事はない筈なのよ。…………霊夢、今回は立派な異変。原因を突き止める必要があるわ」

「うう、やっぱり…………。折角温泉でゆつくりしようと思つたのに」

「心配いらないわ。これから向かうところは昔『火焰地獄』と呼ばれていた場所。きつと暖かいわよ？」

## 99話 地底の奥へ

「……改めて見てみると気味悪いわ」

地面にポツカリと開いた穴を覗き込みながら率直な感想を述べる  
霊夢。

穴の底は見えぬ、何処までも続いているのではないかと言う錯覚に  
陥る程

「……俺が先に降りる。霊夢は後から来い」

そう言うや否や、何の躊躇もせず穴へと身を投げる隼斗。

あつという間に闇へと消えた彼の姿を見て、霊夢は呆れたように呟  
いた

「命知らずね」

そして彼女も後に続いた

・  
・  
・  
・

隼斗は自由落下によりグングン穴の底へ向かって行く。

落下を始めて既に十数秒程経っており、この穴は相当深い事がわか  
る

「破道の三十一『赤火砲』」

隼斗は掌サイズに調節した赤火砲を落下先へと放った。

数秒の灯火と共に、炎弾は底へと着弾した

「よつつつとおー!!」

空気抵抗等を考えなかった場合の落下速度だけでも優に500km/hを超えている状態で、隼斗は足裏から瞬間的に靈力を放出させる事で衝撃を緩和し、着地した

早速周囲を見渡すも、光は一切なく完全な闇が広がっていた

「なんも見えねー。此処に住んでる奴らは暗視ゴーグルでも付けてんのかな」

「そんなハイカラなもんは無いよ」

隼斗の独り言に返答。

周りは洞窟の様になっているのか、やや反響気味に聞こえた

「……お前さんはアレか？地霊的なヤツ？」

「いんや、唯の妖怪だよ」

今度は真後ろから聞こえ、隼斗は首だけを其方に傾けた

「……随分落ち着いてるんだね。こんな暗闇でいきなり声掛けられたのに」

「目が見えなくても気配でわかる。それにもう暗闇で泣き叫ぶような歳でも無えしな」

「歳食つっても怖い奴は怖いんじゃないかねえ」

「まあでもいい加減見えねーのは不便だから明かりつけるわ」

そう言つて手元で再び『赤火砲』を灯す隼斗。あつという間に彼の周囲は照らされ、声の主の姿も照らし出された

「第一地底人発見」

「だから妖怪だつてば。アンタ等人間の天敵、土蜘蛛の黒谷 ヤマメ

「さんだよ」

「そうか。柊 隼斗だ、よろしくな」

「これまた意外。土蜘蛛と聞いて怖がらないなんて」

「土蜘蛛だと何かマズいのか？」

『土蜘蛛は病を操る』ってんで昔から恐れられてきたもんさ。かく言う私もブイブイ言わせてた時期があつたかねえ」

「へー、そりやまた。でもどの道俺がビビる要因にはならねーな」

その言葉にヤマメの眉がピクリと動く

「……ほう。そりやまたどうしてだい？」

「生まれてこの方、病気とは無縁なんだ。丈夫いからな」

「隼斗って言ったかい？地上ではどうか知らんが、此処ではあまり大口叩かない方が身の為だよ？これは挑発でもなんでも無くね」

「だが事実だ。なんなら試してみるか？」

「……………言つたね？えいっ！」

ヤマメは隼斗に向けて能力を使用。

隼斗の身体を毒々しい色の靄が包む

「一応警告の意味も込めて致死性のモノは使わないよ。…………調子はどうだい？」

ヤマメの質問に、隼斗は変わらぬ調子で答えた

「至って健康。地上まで崖登りが出来るレベルで元気だ」

「…………こりや驚いたね」

――

「悪いな、道案内頼んじまって」

「いいっていいって。私も暇だったし。それよりも連れがいるんだろう？待たなくて良かったのかい？」

ヤマメの案内により洞窟内を進む隼斗。

共に来た筈の霊夢がこの場に居ないのは、単純に『隼斗の着地地点に現れなかった』為である

「逸れちゃったもんは仕方ねーよ。まあ進んでりやそのうち会えるだろう」

軽い調子で答える隼斗に、ヤマメは若干呆れながら尋ねた

「……大雑把なんだね隼斗は。それよりも此処へは何しに来たんだい？」

「連れが温泉と怨霊を引き当てちゃったからその調査だ」

「……そ、それは運が良いのか悪いのか」

「ヤマメは此処には結構長いんだろ？どんな場所なんだ？」

「そうだねえ。このままもう少し歩くと旧都と呼ばれてる大都市がある。元々は地獄だった場所さ。更に奥には今でも漂ってる怨霊と火焰地獄の跡地があるから、案外そこが原因かも知れないよ？」

「……いや案外って言うかそこで確定っぽくね？こりや思いの外早く解決出来そうだな」

「火焰地獄の上には地霊殿って屋敷が建ってる。その『古明地 さとり』って妖怪から話を聞いた方がいいんじゃないかしら」

「誰だそれ？」

「旧地獄跡の管理を担い、実質地底を取り仕切ってる妖怪さ。その能力故に『地上からも地底からも嫌われている』、ね」

「……」

暫く歩いていると、視線の先に幾つもの灯りが見えてくる。

それは数々の提灯や松明と言った、人工的な灯りであり、そこに文



明が築き上げられている事がわかった

「驚いたかい？アレがさつき言ってた旧都だよ」

その質問に、何故か隼斗はジト目で答える

「ああ、確かに驚いた。――早速彼処でドンパチやってる『連れ』にな」

「……へっ?」

前方に見える、洞窟側と旧都の間に架かる橋。

その上ではチカチカと閃光が瞬き所々炸裂音が聞こえている

「ええい！そのスイスイと私の攻撃を躲す様……妬ましいわ!!」

「じゃあ当たれってか！無茶苦茶言ってるじゃないわよ!」

口論も交えながらの弾幕戦を繰り広げていたのは、言うまでもなく後続していた筈の霊夢だった

「何でアイツが俺より先に此処に着いてんだよ。つーか誰だアレ」

「あちやく、パルスィの嫉妬に触れちゃったか。どうする?」

パシツと額を軽く叩いたヤマメは、加勢すべきでは?と言う意味を込めて隼斗に尋ねた

彼は冷ややかに答える

「ほっとけ」

## 100話 鬼の住む町

旧都へ続く橋上で弾幕戦を繰り広げていた少女二人。

当初は見守るスタンスだった隼斗も、いい加減長引きそうだと判断したのか、只単に待ちきれなかったのか無理やり割って入って止めた

「……落ち着いたか？ 霊夢」

「私は初めから落ち着いてるわ。吹っかけてきたのは向・こ・う！」

霊夢は未だ此方を睨みつけている金髪緑眼の少女を指差し、向こうは新たに現れた隼斗を見て表情を険しくしている

「男連れ…？ ますます妬ましいわ！」

「パルスイも会う人会う人嫉妬してたらキリないよー。本来は橋姫でしよ？」

一先ず両者を落ち着かせる事に成功した隼斗とヤマメは、互いに溜息を吐く

・  
・  
・

「へえ、結構賑わってんだなー」

「見渡す限り鬼がいっぱい……私萃香以外で鬼見たの初めてかも」

ヤマメの案内により旧都内を歩く隼斗等は、地上と変わらぬ賑わいに驚いていた。

ただ違うものを挙げるならば、その住人の殆どが鬼であり、やたらと酒屋が多い事くらいだろう

「まつ、驚くのも無理ないかもね。でもこの旧都を発展させたのは鬼なんだよ。酒屋が多いのはそのせいだね」

「どの酒屋に入っても大抵どんちゃん騒ぎしてるから、ゆっくりお酒も飲めやしないのよ。妬ましい」

「……なんか悪いな、そっちの娘まで案内に付き合わせちまつて」

「……水橋 パルスィよ。別にいいわ。あんな所で立ってても暇なだけだし」

「おやパルスィが余所者に優しいなんて珍しいね。今日は雪でも降るんじゃないかい?」

「雪って……地下にそんなもの降らないでしょ」

——思わず呟いた霊夢のツツコミに、横から答える者がいた

「ところがどっこい。此処にも雪は降るんだよ。不思議な事にね」

その場の視線が一斉にそちらへ向く

「おっ」

「あっ」

隼斗、そしてその女性は同時に声を漏らした。

金髪のロングヘアに、星マークの付いた一本の赤い角。手には大きな盃を持っている鬼

「隼斗じゃないか!!アンタ今までどこ行ってたのさ!中々会いに来てくれないから心配してたんだよ!」

「いや、どこ行ってたはこっちの台詞だったの。妖怪の山から消えたと思ったらまさか地底に居るとはな。勇儀」

嘗て伊吹 萃香と同じく鬼の四天王の一人であった鬼、『星熊 勇儀』は豪快に笑った後、隼斗に詰め寄り肩を組んだ

「まあ色々あったんだよ色々！それより久しぶりの再会だ！その飲み屋で一杯やろうじゃないか！」

「オヤジか。相変わらずだなお前は」

「ちよ、ちよつと隼斗!?!」

「あー、悪い霊夢。旧友と再会しちまったから少し付き合う事にするわ。先に行くか、どつかその辺で時間潰しててくれ」

「そうこなくつちやねー！さっ、行くよ！」

「わかったわかった。わかったから運ぶな、運ぶなつて」

半ば連行される形で酒屋へと消える隼斗を

呆然と見送った霊夢は、ヤマメの計らいにより最寄りの茶屋へと御招待された

――

「……昼間つから随分客の多い飲み屋だな」

「いつも通りさ。私ら鬼は茶屋感覚で酒を喰らうからね」

店内は既に鬼の客でごった返していた。よく見れば店員の鬼までも、ちよこちよこ酒を口に運んでいる

「よし隼斗、此処座りな！」

隼斗が店内を見渡している間に逸早く席を確保した勇儀が叫ぶ。すると店内の鬼が隼斗の存在に気付き一斉に視線が集まった

「ありやあ人間か？鬼の酒場に入つて来るなんて命知らずな」

「人間ってのはすぐ潰れるからなー。酒も喧嘩もからつきしだ」

「おい待て勇儀さんの知り合いみたいだぞ。羨ましい！」

「死ね」

途端に店内は隼斗の話題でザワつきだした

「はっはっは。早速人気者だな、隼斗」

「なんで酒屋入っただけで肩身の狭い思いしなきゃいけないんだ……あと死ねつつつた奴後で殺す」

「まあまあ。この店は比較的若い連中が多いから隼斗の事を知らないんだろう。でもほら、店主は違うみたいだよ？」

勇儀が顎で指した方向を見ると、厨房入口の暖簾から顔を出して会釈する店主の姿があった

「ほれ隼斗。まずはグイツといきな」

「おっ、サンキュ」

再び勇儀の方へ視線を戻した隼斗が、御猪口を手に取った瞬間、店内に笑いが起きた

「くくくつ、おいおい兄ちゃん！一杯ってまさか『ソレ』でつてきたあねーだろ？」

「いくら酒が駄目だからって、勧められたら初めの一杯くらい豪快にいかねーとなー！」

「そう言つてやるなよ可哀想に。人間と俺たちじゃ身体の作りが違うんだぜー！」

所々からヤジが飛び交い、若い連中が隼斗を捲し立て始める

「……はあ。いくら知らないとは言え、命知らずはどっちなかね。どれ、一つ喝を入れてやるか」

そう言つて立ち上がろうとする勇儀を、隼斗は引き止めた

「……………いやいや別ニ？若者が言った事だ。全然キニシテナイヨ？」

「……………瞳孔開いたままの笑顔で言われてもねえ。夢に出てきそうだよ」

勇儀は「それに…」と付け加え、隼斗の手に視線を落とした

「御猪口粉々だけど…………？」

粉々と言うか最早粉末状になった御猪口だった物を、なんとも言えない表情のまま指摘した

「こうなりや俺が酒の飲み方つてのを教えてやるとするかあ！」

そこへ現れた空気の読めない若き鬼が一匹。

彼も酔っているのか凶々しくも隼斗の正面に座ると、一升瓶を卓上に置いた

「酒つてのは飲まなきや強くならねえ。だから俺が鍛えてやろうつてんだ。どうだ？」

「アラ、嬉シイ…………是非御教授願エマスカー？」

(…………最初はコイツらの為にも止めてやろうかと思っただけ……………なんか私もムカついてきたし、もう知らね)

遂に唯一のストッパーにまで見放された鬼は、そうとも知らずに瓶の栓を抜いた

「いいか？ちよびちよび飲んだって酒が勿体無え。こう言うのはガブツと一気n…………」

刹那、彼の持っていた一升瓶の飲み口から下が消失する

「ゴクんっ」

消失した酒瓶は目の前で見つかった。

一瞬にして中身を飲み干した人間の手に握られていたザワついていた店内が静まり返る

「……………へっ?」

「お前の言う通りだ。確かにちよびちよび飲んでちや勿体無エわな」

空になった酒瓶を静かに卓上に置いた隼斗は、店主のいる厨房へ入り、『酒樽を二つ』抱えて出てきた

ドンツ!と目の前に置かれるかなり大きめの酒樽に、鬼は呆然としたまま隼斗を見た

「それお前一人分な。俺の奢りだ、遠慮せず飲め」

言い終わると同時に指を突き刺し一口大の穴を開けた隼斗は、そのまま豪快に飲み始めた

周りが唾然とする中、1分とかからぬ内に酒樽は空になり、コトツと言う軽い音と共に床に置かれた

「どうした?早く飲めよ。一気な」

「いや、その……………流石にこの量を一気は……………」

最早完全に酔いが冷め、酒とは関係無しに顔を青くする鬼に対し、隼斗は容赦なく言い放った

「『勧められたら最初の一杯は豪快に』……………だろ?」

「……………うっ」

その傍らではいそいそと帰り支度を始める鬼が数名

「待てコラ。誰が帰っていいつつた？」

隼斗は一瞬で回り込むと、纏めて鬼達を掴み上げた

「痛てててっ!?こゝ、こいつどんだけ馬鹿力だよ…!?本当に人間か!？」

「そうか、そう言やお前ら人間は喧嘩もからつきしとか言ってたな。なんなら表出るか?ん?」

すると一人の鬼が静観している勇儀に助けを求めた

「ゆ、勇儀さん……お助け」

「……喧嘩を吹っかけたのはお前らだ。まったく揃いも揃って情けない。お前らも鬼の端くれなら売った喧嘩くらい自分で責任持ちな！」

「……そ、そんな〜」

「とりあえず外行こうか」

色々悲鳴が混じり合う中、外へと連行される鬼達。

隼斗の申し出により一対全員を許可され、再び調子に乗った若者達は皆、3秒後に地面に頭から埋まっていた

一人酒樽を抱えて残された鬼は、勇儀監視の元酔い潰れるまで飲まされたと言う（余りは隼斗が飲んだ）



101話 地霊殿

「隼斗……貴方ヤケに酒臭いわね」

「……ありがとよ」

茶屋で時間を潰していた霊夢を迎えに来た隼斗は、彼女から開口一番にそう告げられた

「まあ色々あって酒樽一杯半を空にしたから無理もないね」

「いやこの短時間でどれだけ飲んでるのよ!?……あっ、失恋でもしたの?」

霊夢は同情の眼差しを送った

「ヤケ酒で酒樽かつ食らう訳ねーだろ。勇儀の言った通り色々あったんだよ。……あと少しすれば完全にアルコールが抜けるから待ってろ」

「樽二杯近くの酒をたった数分じや無理じゃないかい?」

「さつき言った通りだ。お前の能力が効かなかった様に俺の身体は他とは違う。本来一升程度のアルコールなら5秒と経たず分解できる。今回は量が多すぎたから時間がかかっちゃうだけ」

隼斗はそう言って茶屋の長椅子に腰掛けた。その隣に座っている霊夢を勇儀は凝視した

「……何?」

「ふーん。アンタ人間にしては強い力を持ってるね。隼斗の連れみただけでど何者だい?」

「地上の異変解決屋よ。貴女の名前、どっかで聞いたことあると思ったら前に『萃香』が言ってたわね」

その名前を聞いた勇儀は口角を上げて微笑んだ

「ほお、これは驚いた。萃香まで知ってるのか」

「最近よくウチに入り浸ってるのよ。まあ悪ささえしなければ別にいいんだけど」

「……戦ってみたかい？」

古きからの友。今となつてはフラフラと行方知らずの彼女の居場所を勇儀は知らなかった。再開する事を楽しみにしているのも事実。しかし勇儀の口から出た質問は『それ』だった

「……おい霊夢」

嫌な予感が脳裏をよぎった隼斗は、霊夢に忠告しようとしたが……

「ええ。勝ったけどね」

「そうか…!!」

彼女は見事に勇儀のツボを捉えてしまった。

例えばそれが弾幕戦（遊び）だったとしても

「なら私と一勝負してくれないか？」

「はあ？どうしてそうなるのよ……」

「理由なんて単純さ。アンタと戦ってみたくなつた」

「……そつちの都合じゃない」

チラツと隼斗へ助け舟を求める霊夢だが、当の本人は既に面倒になつているのか茶を啜っている

「まっ、酒が抜けるまでもうちよい掛かる。修行も兼ねて相手しても

「ええ。モウシラネ」

「……そんな。はあ、今日は厄日だわ」

項垂れる霊夢とは対照的に、上機嫌になった勇儀は敢えて彼女を挑発する様な言葉を掛けた

「心配ないさ。一応ハンデとして、この『星熊盃』を持ったまま戦う。中の酒が一滴でも溢れちまったら私の負けでいいよ」

勇儀の手には通常より大きい目の盃があり、中には一升分の酒が入っていた

「……ハンデですって？幾ら何でも舐めすぎじゃないかしら？」

「ククツ、そうである事を願ってるよ」

「程々にな。……おい団子くれー」

「地上の住人も負けず劣らず血の気が多いねえ」

「ねえ、私もう帰っていい？」

――

戦闘もとい弾幕戦は、当初隼斗が予想していた時間よりも長く続き、霊夢の勝ちに終わった

「はあーあ。無駄に疲れたわ……！」

「いやー、やっぱり強かったねえ！負けたよ」

勇儀はそう言いつつも尚盃を口へと傾け、それを見た霊夢は皮肉っぽく返した

「それを持ったままアレだけアグレッシブに動き回っつといてよく言うわ。萃香もそうだったけど、鬼って言うのは手加減が上手いのね」

「いんや、本気だったさ。確かに全力では無かったけど、手を抜いた覚えはない。私は確かに『負けたんだ』」

「霊夢、勇儀含め鬼つてのは嘘を嫌う。コイツが此れだけ言うつてのはお前の力にそれだけ驚かされたって事なんだ。もっと自身持て」  
「……うう、わかったわよ」

霊夢を納得させた隼斗は、勇儀に近づき腰を低くして小声で告げた

「……………こんな感じの解釈で宜しいでしょうか、勇儀さん？」

「はははっ、悪いね」

「あの二人も相当仲良いね。昔馴染みって言ってたけど、隼斗って幾つなんだろ？」

「妬ましい……………」

旧都を抜け、更に奥へと進んで行く一同を出迎えたのは、元々地獄として機能していたであろう灼熱地獄跡地。未だにマグマが流れ、辺り一帯は高温に包まれている

この状態で暑いと感じているのは霊夢ただ一人だった

「何よコレ。途端に暑くなったわ」

「霊夢、身体の周囲に薄く結界を張っつけ。この先人間にはキツイ場所になるだろ」

「ああ、その手があったか。今度から夏場暑い時は使お」

周囲に熱気が漂うその場所に、高々とそびえる屋敷。その正門付近で猫車を押す人影が見えた

「あつ、丁度良いところにお燐がいた！おーい、お燐ーっ！」

それに対しヤマメが大声で叫ぶと、お燐と呼ばれた少女が此方に気付き近付いてきた

「ありや、ヤマメじゃないか。それに鬼と橋姫まで。今日はどうしたの?……つと後ろにいるのは見ない顔だね」

「この二人は地上から異変調査の為に降りてきた人間さ。私は此処までの案内で、勇儀とパルスイは成り行き……かな」

「そつかそつか。あたいは火焰 猫燐。でも長つたらしくて好きじゃないから『お燐』って呼んでね!」

「俺は柊 隼斗。『シルヴェスター・スタローン』と呼んでくれたまえ」

隼斗は何処から取り出したのか、葉巻を咥えてそう言った。

当然霊夢がツツコミも兼ねて、弁慶の弱点へ爪先を叩き込んだ

「長えし原型ないじゃない!!まったく、いきなり巫山戯ないでよね。

……コホンツ、博麗 霊夢よ」

「あはははっ!地上人って案外面白いね!気に入ったよ」

自己紹介を済ませて早々に、ヤマメ含め同行して来た三人は別れを告げた

「じゃあ後はお燐に任せた。隼斗・霊夢、事が済んだら私の友達を紹介するよ。いつも桶に入ってる娘だけど」

「ちやつちやと片付けて今度はゆっくり飲もう。ちゃんと店は選定しておくからさ」

「じゃあね。……ああ、妬ましい」

去っていく三人を見送った隼斗らは、お燐の先導の元正門前まで歩き出した

「アイツ終始『妬ましい』しか言ってなかったな」

「それより飲みに誘われてたけどまた飲む気?」

「言つとくが霊夢、お前もだぞ?」

「貴方達随分仲が良いね、羨ましいわ。……さて」

急に立ち止まったお燐は、ゆっくりと振り返った

「どした？」

「霊夢、スタスタロン……実を言うとね、二人を此処へ招いたのはあたいなんだ」

「！」

「……どういう事？」

「……」 「……私の友達を助けて欲しいんだ」

「？」

「おい、スタスタロンってなんだ」

「そっちはどうでも良いでしょうが！」

102話 古明地 さとり

地霊殿を訪れた隼斗と霊夢は、其処の住人であるお燐に案内され、その先にいるこの屋敷の主人に会う為に屋内を進んでいた

「能力の余波？それで間欠泉が噴き出したってのか？」

「うん。元々はそんなに大した能力じゃなかったんだけど、ある日突然強力な力を得たみたいで……：終いには地上を侵略するなんて言い出したのよ」

「そりゃあ……まあ単純と言うかアホだな」

「地上と地底の妖怪はお互い干渉するのは好ましくない事。掟に背く様な事があれば地上の妖怪どころか鬼やさとり様の手によって友達は始末されちゃうかもしれないでしょ？」

「んー、なんかその結論も極端過ぎる気がするけどな」

「兎に角！私は異変を嗅ぎつけてやって来た貴方達にあの娘を止めて貰いたいの！出来ればさとり様にバレル前に」

「そんなおっかない奴なのか？さとり様ってのは」

「……ううん。確かに怒ると怖いけど、普段は優しいよ。……でも……！」

「ちよつとー？二人で何コソコソ話してるのよー。案内がないと先進めないんだから」

「……ゴメンゴメン、今行くよー」

お燐との会話はここで切れ、先を歩いていた霊夢と入れ替わるように先頭を歩き出した

「ねえ、何を話してたの？」

「ん、大した事じゃない。世間話だ」

隼斗は敢えて霊夢には話さず、話題を変える為に窓の外を見た

「ほお、この屋敷マグマの上に建ってんのか。此処の主人ってのは怖いものしらずだな。その内容けて無くなりそうだ」

「でも不思議と中はある暑くないわね。外の景色は最悪だけど」

「…………二人とも住人を前にして結構言うね。ちゃんとそうならないように処置してあるよ」

ステンドグラスで彩られた窓が外の灯りを通し、虹色の光が射し込む廊下を歩いて行く。

すると突き当たりに一際大きな扉が現れた

「ほい着いたよ。此処が『さとり様』の部屋だ。ちよっと待っててね」

お燐は一度隼斗達を部屋の前で停止させ、数回扉をノックした

「さとり様、お客様をお連れしました」

「…お客様？…まあいいわ、どうぞ」

中から応答があると、お燐は一言添えて扉を開けた。

室内は小さな図書館のようになっており、部屋の中心には一人分のソファと机が置いてある

そこへ腰掛けていた少女は立ち上がると、入室者を一見した後お燐を諭した

「お燐、普通は先にアポを取ってから部屋に通すものよ？」

「あはは…すみません」

「都合悪かったか？」

「…いえ、大丈夫ですよ。ただ急だったのでお茶の準備もしてなかったから。お燐、お願いできる？」



「はい、さとり様！」

ビシツと姿勢を正したお隣は、そそくさと部屋を後にした

「此処では難だし、客間に案内するわ。どうぞ此方に」

隼斗と霊夢は促されるままに同行した

部屋を出てから特に会話がある訳でもなく、数メートル進んだ先の部屋へと案内された二人は、大きめのソファへと腰掛けた

「はじめまして。私はこの地霊殿の主『古明地 さとり』です。貴方方は？」

「ああ、ジェイソン・ステイス『ドゴオツ』……柊 隼斗です」

「何回やる気？……。コホンツ、博麗 霊夢よ。私達は……」

脇腹に小気味のいい肘鉄を入れられた隼斗に対してノーリアクションな少女は、自己紹介だけ済ませると早速本題へと入った

「言わなくとも既にわかっています。地上で突然吹き出した間欠泉について調査しに来たのね。そして地底で得た情報から此処が怪しいと」

霊夢は事情を説明する前にスラスラと目的を言い当てたさとりを不思議そうに見つめた

「……私まだ何も言っていないんだけど？ いや、言いたい事は当たってるけども」

「失礼ながら貴女の心を覗かせてもらったわ。それが私の能力なの」「へえー、態々話さなくても伝わるなんて便利なモンじゃない」

「ただし、後ろめたい事がある場合でもそれを知られちゃう。なるほどな、ヤマメが言ってたのはそういう事か」

「あら、貴方ヤマメの事知って……?」

隼斗へ意識を向けたさとりは、突然黙り込み怪訝な表情を浮かべた

「どうなってるの…？貴女の心が読めない」

彼女には相手の思考を覗き見ることの出来る『第三の目』というものがあ

る。へアバンドから伸びる管の様なものと直結しており、胸の高さに浮

いついる目玉は隼斗を凝視するが、何も見ることが出来なかったのだ

「ああ、俺の中身を覗こうとしたのか。無駄だよ。俺に精神系の能力

は効かねーからな。体質的に」

「……体質って。でも初めてだわ。相手の心が読めないなんて」

「……貴方ともっと早く会っていれば、妹も違ったかしらね」

「あん？」

そう呟いたさとりはそれ以上続けなかった

「そんな事より異変について…」

「何か知ってる事はない？……そうね、もしかしたら私のペットが原因かも知れないわ」

「ペット？犬でも飼ってるのか？」

「まあ犬もいるわね。この屋敷にはありとあらゆる動物を飼っているの。貴方達を招き入れたお隣だってその内の一匹よ」

「って事はさつきn…」

「『さつきの猫娘が犯人か？』。いいえ、あの娘にそんな能力は無い筈よ」

「じゃあs…」

「『そのペットを呼べばいい』。残念ながらあの娘は今この屋敷内には居ないの。居場所に心当たりはあるけどね」

言葉の先読みによりセリフを途中で切られてしまう霊夢は、釈然としない表情をつくった

「……アンタがなんで嫌われてるかわかった気がするわ」

「あらゴメンなさい。ついやってしまう癖みたいなものなの。悪気はないのよ?」

「だつてさ。そうカリカリすんなよ霊夢。……そしてお前の次のセリフは『アンタは読まれてないでしょうが!』と言う」

「アンタは読まれてないでしょうが!……ハッ!」

隼斗のイジリがトドメとなり、霊夢はソファの上に体育座りしたまま黙りこくってしまった

「……」

「拗ねんなよ悪かつたつて。……そんで?さつき言つてたペットが屋敷に居ないなら何処にいるんだ?」

「屋敷の中庭にある穴が灼熱地獄の最深部へと続いている。居るとしたらそこね」

## 103話 八咫鳥を宿した少女

「……………か」

地霊殿の中庭に存在する灼熱地獄最深部へと続く通り穴。  
隼斗は一度内部を覗き込むと、意外と中は明かるく見通しも悪くなかった

「定期的に管理を行ってるから、ある程度は照明等も設置してあるわ。ただ穴を抜けてしまえばそれも必要なくなるけど」

「やっぱり暑いのか？」

「そうね。人間の貴方達は長く居たいとは思わないでしょう」

「……………取り敢えず俺が先に降りる。今度は逸れるなよ、霊夢」

「別に逸れてないわよ失礼ね！」

背後でがなる霊夢をスルーし、以前と同様躊躇うことなく灼熱地獄へと飛び降りた隼斗は次第に周囲の気温が上がっていることに気が付いた。

そしてものの数秒で穴を抜け、一気に開けた空間に出た

周囲一帯に熱気が漂い、幾つかある岩場の下には川のようにマグマが流動している

(……………流石にアレに落ちたらヤベーな)

マグマを避けながら空中を蹴り、広めの足場へと着地した隼斗はすぐ後に現れた霊夢に声を飛ばす

「霊夢、さっきと同じだ。身体を結界で覆うのを忘れるな」

「もうやってるわ。って言うか本当にこんな場所あったのね」

今異変の影響か灼熱地獄一帯が活発になっており、時折足場からマ

グマが嘔き出ししている

「きやつ!? ちよ、ちよと……! 危ないわね此処!」

「今は下手に足場へ降りない方が良さそうだな」

早急に空中へと避難した二人は改めて周囲を見渡した。  
よく見れば所々に地上でも見た怨霊が漂っており、此処が昔地獄として機能していた事が伺えた

「こんな所さつきと出ましょ。チーズみたいに溶けちやいそう」  
「……………ああ。丁度『彼方さんも来た』みたいだしな」

新たに声が聞こえたのはそのすぐ後。  
二人は接近している気配に目を向けた

「あれ? こんな所に誰か来るなんて珍しい」

漆黒の翼をはためかせながら現れたのは一見異彩な少女。

右脚には象の足の様なゴツゴツとした形状の具足、左脚には電子の様なものがスパークし、右腕は多角柱の筒の様な物がはめられている。

そして何より目立つのが、胸の中心に付いている大きな赤い瞳

「とつくに寂れた地獄に落とされるなんてよっぽどお間抜けさんなんだね」

「落とされたんじやなくて自分で来たのよ。アンタが上の主人が言っていたペットよね?」

「さとり様を知ってるの? でもまあ、そうだよ。さとり様含めて皆んなは『お空』って呼んでる」

「…ならお空。力を使って間欠泉を起こしたのはお前さんか?」

「間欠泉? ……ああ、それで貴方達は来たの?」

お空は不敵に笑うと、自身の目の前に眩く光る球体を形成した

「残念だけど間欠泉は私の持つ究極の力の余波。この力を使う度に間欠泉が出るから止められないの」

「……気を付けろよ霊夢。理由はわからんが、アイツから神力を感じる」

「神力？じゃあアイツは神様なわけ？」

「んー、どっちかつつーと憑依させてるって方が正しいな。アイツ自身からは妖気も感じるから、認識的には神を宿した妖怪ってかんじか」

「猫の言ってた強大な力つてきつとその事ね。そう言えば地上を侵略するとかなんとか言ってたわね」

「ふふふつ、その通り。貴方達は私を止めに来たんでしょ？だったら私は貴方達を倒して地上を新しい灼熱地獄へと変えてみようかな」

お空が力を解放すると、周囲の岩石が持ち上がり所々から一層強くマグマが噴き上がった。

右腕の筒の先に高圧のエネルギーが蓄積されていき、その砲口が霊夢達へと向けられる

「八咫鳥様の力！究極の核融合の力を得と味わうがいい!!」

ー轟ツ!!

多角柱から圧縮されたエネルギーが一気に照射され、巨大なレーザーが迫る

「縛道の八十一『断空』」

レーザーを遮断する様に展開された琥珀色の障壁。

進行方向を遮られた事で四方に飛び散ったエネルギーは、周囲の地形を吹き飛ばした

「最近の火遊びは進んでんな。ロツ○バスターまで用いるとは。斯く言う俺もガキの頃はダンボールでよく自作してたもんだ」

霊夢を護るように前へ出た隼斗は、そんな事を言いながら悪戯好きな子供を前にした時のように軽快に笑った

「霊夢、一先ずアレを止めるぞ」

「……二対一で？」

「向こうは一人どころか一柱が憑いてる。それに今回も俺はサポートに回らせてもらうから実質戦うのはお前だぜ」

目の前の障壁を解除し、霊夢に道を開ける隼斗。その先では既に臨戦態勢に入っている神を宿した少女の姿があった

「……はあー。(私はただ温泉に入ればそれで良かったのに)あわよくば一儲け。どうして毎回こうなるのかしら」

「セリフと心の声逆」

「あーもう、わかったわよ！隼斗、出遅れないでよね！」

「了解ですBOSS」

二人は駆け出す。

それと同時に球状となった核エネルギーによる弾幕が照射されるが、弾幕戦に慣れている二人には掠りもしない

「爆符『メガフレア』!!」

大気が震え、霊夢達の進行方向から爆発の連鎖が起こった。

一旦上空に逃れた霊夢は、陰陽玉を周囲に展開しながら弾幕を放つ

「夢符『封魔陣』！」

「七星『セプテントリオン』！」

安定性の取れた乱れの無い弾幕

————— VS

不安定ながらも高密度の弾幕

「！」

火力の差はすぐに出た。

霊夢の放った弾幕は瞬く間に核エネルギーに飲み込まれ、それでも尚勢いが緩まず迫る

「『七連白雷』」

後方から七つの青白い閃光が放たれ、お空の弾幕とぶつかりその軌道を逸らした

「霊夢、相手は火力が高い分コントロールは不安定だ。馬鹿正直にぶつかっても押し負けちゃうぞ」

「……火力特化。どっかのお騒がせ魔法使いでお馴染みね」

お空は左手に二つの球体を形成。次第に膨張するそれは小さな太陽の様な形となり、霊夢等を上下で挟み込むように配置された

「『ヘルズトカマク』!!」

配置された球体からその場の空間を侵食する様に次々と弾幕が生み出され、一瞬で視界一面がエネルギー弾で埋め尽くされた



当初回避行動をとっていた二人も、徐々に逃げ場が無くなっていきその足を止めた

「二つの太陽に飲まれちゃえ！」

それを見てかお空は高らかに叫んだ。

過分な力を手にして、高ぶった感情のまま勝利を確信した

「……仕方ねエ。『合わせろ』霊夢」

「…ハイハイ」

二人とも迫る弾幕には目もくれず、弾幕を吐き出すエネルギー体の方に其々狙いを定めた

「共鳴『師弟・夢想封印』!!」

二人の霊術が合わさり、巨大な光弾が二方向に放たれエネルギー体へと着弾

——文字通り封印するかの様に打ち消した

「嘘おっ!?!」

「さあ畳み掛けるわよ」

「覚悟はいいか鳥頭」

## 104話 沈静化

「星符『巨星墜つ』!!」

お空の頭上から青白い弾幕が霊夢へと降り注ぐ

「霊夢、そのまま行け!」

隼斗は後方から叫ぶと、飛翔している霊夢の周囲を護るように幾つもの障壁を配置。

弾幕の雨を正確に弾いた

「宝符『陰陽宝玉』!」

霊夢は掌から巨大な霊力弾を放ち、そのすぐ後を追う様に突っ込んだ。

対するお空も退くことなく前進し、右腕の筒から熱線を放射。そのまま形状を刀身型に留めた

「光熱『ハイテンションブレード』!!」

振りかぶり一刀。高温・高圧の剣の一振り、霊力弾は真つ二つとなり掻き消された。

更に振りかぶり、弾幕の陰に隠れていた霊夢へも突き立てられた

「神技『天覇風神脚』!!」

空中で身体を後方に回転させた霊夢は、勢いそのままサマーソルトの要領でお空の腕を跳ね上げた

「おつ、ガキの頃ノリで教えてやった技じゃん。……あつ、今もガキか」

「余計な事言っていないで手伝いなさいよ!」

「この…! えいつ、えいつ! 当たれー!」

接近した事により白兵戦を繰り広げる事となった霊夢は、普段から弾幕戦に慣れていたこともあり攻めあぐねていた

しかし当たれば火傷どころでは済みそうにないブレードも、力任せに振るうだけでは決定打に欠ける。微量なりとも格闘戦の修行を受けてきた霊夢でも避けられる程に

結局のところ、お互いグダグダに立ち回っているだけ。

その光景に隼斗は笑いながら助言を入れる

「はっはっは。霊夢、お前は一旦距離を取れ。えーと…お空、そんなの間合いが近いなら範囲攻撃に切り替えた方が効果的だぞ」

「ちよっ!?!」

「うん、わかった!!」

霊夢は思わず飛び退き、同時にお空は周囲一帯にエネルギー弾を撒き散らせた

結界でカバーしながら隼斗の元まで下がって来た霊夢は苦情を申し立てる

「ちよっど! 何で敵にまでアドバイスするのよ!」

「怒んなって、仕切り直したただけだ。っーか素直だなアイツも……つと」

周囲の温度が上昇し、気が付けば次の攻撃が始まっていた

「爆符『ペタフレア』!!」

ゴオオオオオツ!!

二人を包み込むように巨大な爆炎が楕円形に広がり、灼熱地獄全体が激しく揺れた

「……今のは中々良かったと思っただけだなー」

「威力はな。ただ起こりが著明過ぎる」

「ちよつとー、此処つて崩れたりしないでしょうねえ？」

「……」

余裕を残しての回避行動。

それを見たお空は一度、先のように高ぶっていた感情を抑えた。この間、激しく脈動していたマグマもフツと静まり返る

「……なら私も『必殺技』を使うからね!!」

刹那の静寂の後、再びマグマが脈動を始める。眼下の足場からは溢れ出た溶岩が所々から噴き出した

お空の身体を包み込むように光が集束され、その体内でエネルギーが循環、増幅されていく。やがて彼女自身も光を浴び、眩く点滅し始めた

（ー……明らかにさつきより出力があがってやがる……不安定のまま限界値まで上げる気か?）

やがて出力の上昇に比例して点滅が速くなっていき、一定の速度に落ち着いたところでボンヤリとした光へと変わった

「うっ……意外とキツイ……」

コントロールが不完全のままの大出力は、お空の身体に負担を掛け

ていた。

よく見れば早々に、微量ながら身体に馴染んでいない分のエネルギーが漏れ始めている

「霊夢、結界の準備しとけ。結構強力なのが来るぞ」

「！」

（今の内に縛道で拘束するか？……いや、下手に動きを止めればコントロールを失って暴発するかも知れねエな）

そしてお空は翼を一層大きくはためかせ、力の影響か瞳を赤く光らせながら内に溜めたエネルギーを解き放った

「……『アビスノヴァ』」

激しい閃光と共に押し寄せる波。

高圧エネルギーの塊である其れは周りの岩盤を抉り取りながら、まるで空気を押し出すように霊夢等へと迫った

「くっ、何て圧力よ……！」

「集中を緩めるなよ。アレをお前が食らったら一瞬で消滅しちまうぞ」

「洒落になってないわよそれ！」

最初の波が過ぎ去った直後、新たなエネルギーが充填され第二波が打ち出された。

お空を中心に波紋状に広がる波は、最早霊夢達だけでなく灼熱地獄全体を崩壊させかねない程の威力を秘めていた

「このまま打たれ続けたら此処が崩れるな。……霊夢、次にアイツがエネルギーを吐き出した瞬間が攻撃のチャンスだ。充填中は迂闊に手が出せねエからな」

「でもそれってアイツの攻撃と相打つタイミングじゃないと間に合わないわよ?」

「心配無用、俺がなんとかしてやる。お前は攻撃に集中しろ。次来るぞ」

続く第三波。

眩い光の波が押し寄せた

二人は結界を解き、霊夢は霊力を溜め、隼斗は一点に掌を向けた

『重撃白雷』

白雷よりも巨大で貫通力のある閃光が一直線に迸り、エネルギー波の一部をかき消した

「ツ！まだまだだ……！」

エネルギー波の反動か、若干フラつきながらお空は次の充填に入った

「いいえ、これで終わりよ」

「!?」

フツと自身に掛かる影。

見上げれば霊夢が印を結びながら急接近していた

「神霊『夢想封印』!!」

ーーーカツ!!

充填が始まるまで刹那の差。

霊夢の繰り出した霊力弾はお空を巻き込み空中で炸裂した。

隼斗はその閃光に瞳を覆いながら安堵の息を漏らした

「一先ず安心だな。……さーて、じゃあ『黒幕』とやらを暴き出すかねえ」

## 105話 お騒がせな神様

先の激しさが嘘の様に静まり返り、静寂を取り戻した灼熱地獄跡。漸く降りられる様になった足場で今異変を起こした犯人に対し、取り調べが行われていた

「そんで？お前さんに力を与えたのは何処の神だ？」

「……アレ？力を神様に貰ったって私言ったっけ？」

「一妖怪が神クラスの力を容易に手に入れられる訳ねーだろ。そんな事が出来るのは同じ神位だ」

「当たり前。私に力を授けたのは神様だよ。ある日此処にやって来て聞かれたの。『この辺の地獄鴉で一番強い者を捜してる』って。だから『それなら私です』って答えたら貰えちゃった♪」

「貰えちゃった♪ってアンタねえ……お陰でこっちはこんな恐ろしく暑い所に来る羽目になったって言うのに……誰よ、その神様って」

「……さあ？」

「なら特徴とかは？格好とか容姿とか」

「……うーん……忘れちゃった」

「……やっぱ鳥頭だったか」

「どうする？上の主人に頼んで記憶とか読んでもらう？」

「いや、本人が忘れてるのに記憶って読めるもんなのか？」

だが次の瞬間、お空の口から聞き覚えのある言葉が飛び出し、隼斗と霊夢は眉を顰めた

「あつ……でもなんか『その二人は山から来た』って言ってたような……」

「……山？」

「……二人？」

その二つの単語から連想される人物……



該当者は二人、いや二組と言うべきか

一組目は秋を司る神の『秋姉妹』。毎年夏が終わると妖怪の山を中心に紅葉を広げたり、人間の作る穀物や果実を豊作にしたりと、戦闘が苦手な秋限定の神様である

しかし二人の頭の中に出てきた神は彼女等ではなかった。

神として強い戦闘能力を持ち、妖怪に神を宿らせることが出来るほどの力を持った神……

二人は口を揃えて言った

「……………また守矢か」

――

――

――

「お疲れだったねえ、隼斗」

「どーも。ってか随分静かな店だな」

異変解決を終えた隼斗は、旧都の酒屋にて勇儀と共に酒を仰いでいた。前回入った店とは違い、何処か落ち着いた雰囲気のある店だ。

「二見、表通りからはわからない隠れ家的酒屋さ。以前の隼斗の要望通りね。悪くないだろ？店も酒も」

「まあ、な。他の連中はどうした？」

「ヤマメ達の事かい？一応誘おうとしたんだけど、普段から一緒に居

るわけじゃないしね。そつちこそ連れの巫女は？」

「霊夢なら先に帰った。疲れたから早く温泉に入りたいんだと」

「ありや残念。まつ、飲む機会くらい後々出来るだろ」

「なんなら勇儀も地上来いよ。歓迎するぜ？」

「!……そ、それつてもしかしてプロP「違えよ」

即座に差し込まれたツツコミに勇儀は調子の良い様子で笑い、隼斗も釣られて微笑を浮かべた

「まあ冗談抜きでよ、地上の連中だってお前らに危険が無いとわかりや危険視もしなくなるだろ。面倒くせー蟠りなんてさっさと解消しちまおうぜ」

「そうだねえ……地上にいる旧友の事も気になるし、今度出てみようか」

「その代わり暴れんなよ？お前を止めるのは骨が折れる」

「はははっ、なんなら今からやるかい？」

「おいおい勘弁してくれよ」

・  
・  
・  
・

未だ地上は白銀の幻想郷。

異変によつて湧き出てきた地霊も収まり、博麗神社近くには間欠泉のみが残った

「……まつ、温泉が出来たって言っても参拝者が集まるとは限らないか」

博麗神社居間では霊夢が溜息と愚痴を漏らしていた。

当初の見立て通りにはいかず、集まったのはいつもとお馴染みの連中のみ。

何処から嗅ぎつけたのか白黒魔法使いや、自分を地底に送り込んだスキマ妖怪まで勝手に温泉を堪能している始末

すると突然襖が開き、今の今まで地底にいた隼斗が現れた

「あつ、やっと帰って来た」

「おつす、遅くなつたな」

「何っ？結局一晩中酒盛りしてたの？」

「ああ、昔話で盛り上がりがちまって、ついな」

「隼斗も酔い覚ましに温泉入ってく？」

「いや、また今度入らせてもらおうよ。酒なら店を出た瞬間から抜けるし」

「あら残念。今入れば紫と魔理沙と混浴できたのに」

「知ってるよ。さつき此処へ来る前に鉢合わせたからな」

「えっ、それでそれで？」

「なんで食いついてんだよ……。まあ、二人共赤面して動かなくなつたな。特に魔理沙はテンパって「ここ、ここは土足厳禁だぞ！」って。ソコじゃねーだろって思ったけど」

「あはははははっ何それ、今度酒の席でイジってみようかしら」  
「？」

普段とは違い、ヤケに腹黒い霊夢を見た隼斗は軽く察した

「アイツらお前の怒りを買うような事したのか？」

「……ふん、図々しきはバチが当たるのよ」

「……っで、結局俺が行くのかよ」

妖怪の山を登山中の隼斗は、愚痴を交えながら雪道を進んでいた。目的は当然、守矢神社のお騒がせ二柱を咎めに行く事だが、霊夢からは『とっちめる』様に言われている

その本人が同行しないのはどうかと一度考えた隼斗だったが、途中で面倒になり考えるのをやめた

空を見上げるといつも通り警備に当たる天狗達が巡回している。

隼斗は以前、友人である犬走 椀と将棋を指した際、彼女が『冬場の警備は霜焼けができて大変』と愚痴っていた事を思い出した

(天狗も大変だなー)

「天狗も大変だなー、とか思ってる?」

隼斗は視線を空から自身の腰ほどの高さへ落とした

「こんにちは!」

「おう」

突然挨拶してきた少女に対し、隼斗はいたって冷静に答礼した。

その様子に、少女は少し驚いた顔をする

「普通いきなり現れて挨拶されたら驚くと思んだけど?」

「いきなり? さつきからあんなだけ堂々として来てた癖にか?」

「!……へえ、お兄さん『私の存在を意識できるんだ?』」

少女は楽しそうに隼斗の周りを回った。

まるで珍しいものでも見つけたように好奇の目を向けて

「何？お前幽霊？」

「違うよー。ほら、足あるでしょ？」

「知り合いの亡霊も足あるけどな」

そして気は済んだのか少女は目の前に立ち止まった

「まあ幽霊でも何でもいいがあんまり長居するなよ？警備中の天狗に職質されちまう……」

隼斗はそこに違和感を覚えた。

自身が今いる場所は妖怪の山山頂付近。近場に天魔の屋敷のある此処ら一帯は特に警備が厳しく、顔パスのできる自分でさえ確認の為声を掛けられる程だ

「……因みに、この山には何しに来た？」

少女は笑顔で答えた

「ふふっ、山の神様に会いに♪」

・  
・  
・  
・  
・

東風谷 早苗は目を細め、遠方より歩いてくる知り合いの男を凝視していた

「…………えーと、確かにアレは隼斗さんだよな〜?」

瞬きし、よく目を凝らして見てみるも、結果は同じ。

間違いなく『柊 隼斗が少女を肩車して』歩いて来ていた

やがて早苗の目の前で歩みを止めた隼斗は、やや疲れ気味に挨拶をした

「…………よお」

「…………どうも。…………えと、お子さん居ましたっけ?」

改めて隼斗の頭上に目をやると、楽しそうに周囲を見渡す少女の姿があつた

「はあ、俺はさあ…………俺はだよ?タダ異変解決の仕上げの為に山を登ってきたんだ。ウチの巫女は人使いが荒いからな。…………それが何で子守しながら登山する羽目になるんですかねえ?教えて下さいよ早苗さん」

半ば八当たり気味に早苗へモヤモヤを向ける隼斗。

早苗は少し考えた後、掌にポンつと拳を乗せて二言

「成る程、この幻想郷では常識に囚われてはいけないのですね!」

「…………よくおわかりで」

隼斗は肩の上に跨っている少女を両手で掴むと、ゆっくり地面に降りした

「…………あれ?肩車はもう終わり?」

「終わりだ。目的地に着いたからな。…でだ早苗、神奈子と諏訪子はいるか?」

「はあ、お二人でしたら今留守にしていますけど…………」

「はい骨折りパターン！」

隼斗は顔を手で覆い、天を仰いだ。

そのままヤケクソになって意味も無く最大火力の破道をぶっ放したくなる衝動に駆られたが、何とか僅かな自制心で押さえ込む

「……『こいし』、残念ながら互いのターゲットは不在だよ」

「みたいだねー。うーん、どうしようかなー？……あつ、そうだ。ねえ隼斗」

「ん〜？」

無気力状態で雪道に突っ伏している隼斗へ、少女はゆっくり近づき見下ろしながら言った

「私と勝負しない？」

「……」

普段なら即答で「なんでだよ」っと一蹴している隼斗も、この時ばかりは迷った

「お姉ちゃんから聞いたよ。昨日地霊殿でお空を倒したんでしょ？」

「……知っててついて来てたのか？」

「うん。私も山の神様にペットを強くしてもらおうと思って♪」

でもその前にお姉ちゃんでも手に負えなかったお空を倒したって言う人間に興味が出てきたの」

相変わらず表情は和かながら、見た目に似つかわしくない力の質を、隼斗は感じ取った

「そゆことね。……いいぜ、丁度俺も不満を発散したいと思ってたところだ」

「やった♪じゃあ早s」ただし…」

「俺に勝てなかったらペットの件は諦めな。また異変解決に行くのは御免だからよ」

その条件にこいしは不満の声を漏らす、と同時に無意識なのか挑発めいた言葉を口にした

「ええー!? ……うーん ……でも『勝てばいいんでしょ?』」

「ああ、勝てればな」

「ちよっ!? 神社の前でやらないで下さーい!!」

ーカッ!!

早苗の悲痛な叫びは両者の繰り出した弾幕によって掻き消された

・  
・  
・

ーー後にこの戦いを茫然と眺めていた東風谷 早苗（巫女）はこう語った

「勝ったのは隼斗さんです。まあ大体予想はしてましたが…。」

それはもう開幕直後から激闘でした。何しろ人外同士の戦いですからね。

…:…はあ、その割には周囲にあまり戦跡が見当たらないって?」

皆さんスーパーパーアーマーってご存知ですか? そうですね、如何なる攻撃を食らおうと『ダメージを受けたモーションが起こらず、一方的に攻撃ができる』アレです。

…:…正にスーパーパーアーマーを纏った隼斗さんは、飛び交う弾幕を物ともせず、生身で叩き落とし始めました。

…えっ?。弾幕ごっこは被弾したら負けではないか、ですか。



確かにルール上ではそうなります。

でもそれはどちらかが『敗けを認める』と言った形で行う自己申告の様なものなので、戦える状態であるならば継続する事もあるんです。

……話を戻しますね。そんな『半無敵状態』となった隼斗さんとはどんどん少女との距離を詰めます。最初は少女も負けじと弾幕を打っていたんですが、段々と狼狽の色を見せ始めました。

無理ありません。止めようにも自身の攻撃が全て力技で完封され、尚且つ確実に距離を詰めてくる六尺男。私だったらトラウマものです。

そしていよいよ少女が戦意を喪失した頃、勝負は決まりました。隼斗さんは一発の小さな霊弾を放ちコツンツと少女に当てて一言。

『参ったか?』

……最後こそ優しく勝ちましたが、戦闘中の彼の姿は鬼神そのもの。余程苛立っていたんでしょうねえ。そんな時に少女は勝負を挑んでしまった……と。気の毒に。

最後になりますが、私はこの戦闘を見てこう思ったんです。

……『大人気ないなあー』つと

・  
・  
・  
・

昼過ぎ頃、守矢が一柱・洩矢 諏訪子、カエル

「あれ? 隼斗来てたんだ?」

「確保」

ガシツと面と向かって頭を掴み上げられた諏訪子は、宙ぶらりんのまま苦笑いで尋ねた

「あ、あれあれ？もしかして隼斗、怒ってる？」

「そう思うか？」

冷やかな返答。

諏訪子は何故か無意識の内に、掴み上げられたまま気を付けの姿勢を取っていた

）

「産業革命……？」

「うん。……ほら、此処で科学的な事が出来る所と言えば『河童の工場』でしょ？」

「……ああ、前にロケランで撃たれたの思い出した」

「ロケラン？……でも外の世界と比べても技術とか遅れてるじゃん？それで神奈子は資源を得るために核エネルギーに目をつけたって訳。神奈子はそう言うの好きだからねー」

「はあー、それで異変にまで発展してたら世話無えだろ。こちとら灼熱地獄に観光行く羽目になったんだからな」

「あはははは……、お騒がせしました」

隼斗はそれだけ聞くと、早々に踵を返した

「……よし。じゃ、帰るわ」

「神奈子には会っていかなくていいの？もうすぐ帰ってくると思うけど」

すると隼斗はある一点を指差して叫んだ

「八坂 神奈子！きさま！見ているなッ！……なんてな」

そして帰路につく隼斗

指された方向へ振り返り、ひそかに笑う諏訪子

柱の陰で狼狽する神奈子

## 106話 空を漂う船

冬のあの日、地底から間欠泉が噴き出した。

それは誰かが意図したものではなく、偶々強大なエネルギー放出の副産物として生まれた現象だった

「……だがそれは同時に、地の底より封印されし者達を呼び起こす引き鉄となっていた」

「本当に地上だね。……この日を何年……いや、何百年待ったか……」

地上に立つ二人の妖怪。

内の一人である水兵服姿の『村紗 水蜜』は、小さめの船長帽を被り直してそう呟いた

その言葉に『雲居 一輪』は空を見上げながら応える

「感傷に浸ってる暇はないわ。すぐに動きましょう」

噴き上がる間欠泉によって打ち上げられた木造の船に乗り込んだ二人は、そのまま雲の中へと消えた

……

季節は変わって春。

野山に再び緑が戻りつつある今日此の頃、東風谷 早苗はいつものように境内の掃き掃除を行っていた

「神なのに掃除するんだな」

その側で、適当な石の上に座りながら白黒魔法使いこと、霧雨 魔理沙は暇そうに呟いた

すると早苗は胸を張って誇らし気に言う

「なんて言ったって私は巫女ですからね！これ位当然です」

「いや、そういう意味じゃないんだが……まあいつか」

「そもそも貴女は何の用があつて来たんですか？参拝？」

「暇だった。偶々空飛んでたら視界の端にこの神社を見つけた。OK？」

「……要するに暇潰しですか。まあ拒むつもりはありませんが、物とか壊さないで下さいよ？」

早苗はそう言つて掃除に戻つた。

魔理沙は朗らか春空を眺めながら大きめの石の上に寝転んだ。

適度に雲があり、今にも天空の城とか出てきそうな風景だ

「……………なあ早苗」

「はい？」

不意に名前を呼ばれ振り返えると、寝転がっている魔理沙が天に向けて指を指していた。

釣られてその方向を見た早苗は驚愕する

「……………ええっ!？」

「…………あれが『飛行船』つてヤツか？」

二人の視線の先にあつたのは、囊にガスを詰めて飛ぶ様な近代的な乗り物ではなく、正しく船と呼ぶ以外に無い物体が空を飛んでいた

「あ？何だありや……」

場所が変わり魔法の森。

終 隼斗は空を見上げて思わずそう呟いた  
彼もまた、いつも通り薪を拾いに森の中を出歩いていたところ、  
偶々雲の中から現れた船を発見したのだった

「ホント、次から次へと飽きんね。此処は」

雲海へと消えていく船を、隼斗は静かに見送った

・  
・  
・  
・

「やれやれ何処にいったのかねえ」

幻想郷上空を一人飛び回るのは、頭に鼠の耳、腰から伸びる長い尻尾が特徴的な妖怪鼠の少女『ナズーリン』。

彼女はその手に持っている奇妙な形をした鉤型の棒が示す方向を行ったり来たりと繰り返していた

(うーむ……ダウジングに間違いはない筈なんだけど。反応はしてるのに物が見つからないってのはどういう……、)

ナズーリンはそこで思考を切り、前方を凝視した。

今までよりも強い反応を示したダウジングロッドが、その方向を指していたからだ

「ちよつと退いた退いた！折角見つけた宝の船が逃げちゃうじゃない  
!!」

「何だ人間か……。暫く使ってなかったしダウジングも鈍ったか？」

落胆するナズーリンの前に現れたのは、少々息の荒い奇抜なデザインの巫女服に身を包んだ博麗の巫女だった。

その視線の先には最近目撃情報が相次いでいる謎の空飛ぶ船が浮いている

何故か瞳に銭が浮かび上がっているとところを見る限り、金に対する欲が強いんだな……っとナズーリンは思った

「何処で仕入れた情報か知らないけど、本当にアレが宝船に見えるのかい？」

「少なくとも人里ではその噂で持ちきりよ。『突如現れた空飛ぶ船は宝船』ってね」

「やれやれ、人間はすぐに挙って妄想を掻き立てる。それが良い事であれ、悪い事であれ、自分自身の目で確かめて初めて真実だと言えるのに」

「だからこうして遙々飛んできたんじゃない」

「……なら好きにするといい。唯、あの船の邪魔をするなら痛い目見るかもしれないよ？」

ナズーリンはそれだけ言うと、霊夢に背を向けて飛び去ってしまった。

一人取り残された霊夢は、慌てて船のあった方向に視線を戻した

「ああっ!? 余計な事話してる間に見失っちゃったじゆない！」

すると立ち往生する霊夢のやや上空から声がかかった

「船なら三時の方向に消えていったぜ」

見ると箒に跨りながら自身を見下ろす白黒魔法使いと、緑カラーの巫女の姿があった

「魔理沙さん！早くしないと私達も見失っちゃいますよ」

「おっとそうだな。霊夢、お前もあの船を追いかけてるんだろ？意外と速いからさつきと追いかけないと駄目だぜ！」

「言われなくてもさつきからそうしてたわよ」

噂を聞きつけての宝目当てか。はたまた単なる興味からか……。

巫女・神・魔法使いの三人は、それぞれの目的を持ちながら船を追いかけた

だが雲居を抜け、ひたすらかつ飛ばすも中々距離が縮まらない。

一見木造の船でも、三人が全力で飛行する速度より若干速いらしい

「一体何を動力源にしてるんでしょう……ロケットエンジンを積んでるとか？」

「あんなボロつちい船にそんなもん付いてるわけ……、ん？霊夢、その腰に付いてるのって……」

「腰？……ああ、これは今朝ウチの境内に落ちてたのよ。珍しい形してるから一応拾ったの」

霊夢が手に取って見せた物。それは薄い円盤型の所謂『UFO』の様な形をしていた

「あつ、私それ妖怪の山で拾いましたよ！」

「私も魔法の森で拾ったぜ」

それぞれが同じ型のUFOを取り出し、見比べる。

僅かに光を帯びている其れは、互いに共鳴している様だった

「よし。二人とも箒に掴まれ」

「……何する気？」



魔理沙は懐から八卦炉を出し、箒の後端に取り付けた。すると後方に魔砲のエネルギーが蓄積されていき、その過程で箒がガタガタと震え出した

それを察した霊夢と早苗はしつかりと両腕で箒の柄にしがみ付く

「彗星『ブレイジングスター』!!!」

魔理沙の十八番『マスタースパーク』を推進力に、三人は急激に加速した

――

さきの追跡者の事など露知らず、高速で飛行する船の船長である村紗 水蜜と、その同志である雲居 一輪は頭を悩ませていた

「一輪、『破片』の事についてナズーリンから連絡は？」

「…まだ一度も。どうしたんだろうねえ、見つからないなら見つからないで一回くらい戻ってくればいいのに」

「彼女の探索能力でも難しいとなると、いよいよ奇跡頼みになってくるね。この船だって後どれだけ保つか……」

「……はあ、少し風に当たってくるよ」

一輪はそう言って甲板へと出た。

吹き抜ける風で被っていた頭巾が捲れ、空色の髪が靡く

「確かに時間がないね……」

静かに呟いたその言葉に応答があった

「何の話だ？」

「!?」

不意に聞こえた声に一輪は驚愕しながら振り返った

「悪い、勝手に乗り込んだ」

「……貴方誰？何処から入ったの？」

突然の侵入者に警戒の色を強める一輪に対し、隼斗は飽くまで敵意がない事を示す様に両手を見えるように上げた

「俺は終 隼斗。空飛ぶ謎の船が気になって下から飛び乗ったんだ」

「……飛び乗った？この船結構な速度が出てると思うんだけど？」

「ああ、でも出来た」

「……」

出来るだけ相手に悟られない様に、一輪は攻撃態勢を取った。

懐に隠している金の輪をそつと両手に一つずつ持ち、姿勢を落とさない様に慎重に

「……貴方人間よね？宝物を狙って来たならもう既にないわよ……!」

「へっ？……いやいや俺は」

弁解しようとした瞬間だった

「……ガシィイツ!!と何かに掴みあげられ隼斗は空中で宙吊りとなった

それは桃色の巨大な手。煙のように靡く腕は、一輪の後方から伸びていた

「えーとっ……取り敢えず話し合いから入らねーか？」

「残念だけど、賊と話す言葉はないの。……情もね」

身体を掴んでいる腕はそのまま振りかぶり、隼斗はそのまま空中へとリリースされた

107話 法界に囚われし僧侶（前編）

風を切り、猛スピードで突き進む影。

ほぼ一瞬にして、飛翔する船を捉えたソレは、勢い余ってか甲板に突っ込んだ

「我ながら見事な速度調節。一瞬で追いついたぜ！」

「ちよつと魔理沙！着地くらいもつとスマートにしてよね…！」

「まあまあ、絶叫マシンみたいで面白かったじゃないですか」

特に悪びれる様子のない魔理沙を霊夢が窘め、早苗が宥める。

甲板には大きな溝が出来ており、停止した際の摩擦熱で煙が上がっていた

「次から次へと何なの？」

その光景を間近で見っていた一輪は、呆れ返った様子で立ち尽くした。

今し方侵入者を摘み出したばかりだと言うのに……と肩をすくめ、新たな侵入者を対処するため歩み寄った

「一応聞いておくわ。貴女達も宝目当ての盗人さん？」

「失敬だな。私は永久に借りる事はあっても盗むなんて事はしないぜ！」

「魔理沙さん、世間一般的にはそれを盗人っていうんですよ。……コホンッ。私達はこの船の調査に来……」

そう弁解しかけた早苗の言葉を、己が欲を隠そうとしない紅白巫女が遮った

「決まってるでしょ！宝と聞いて食いつかない人間はいないのよ……！」

「……素直な事ね。まあいいわ、『雲山』」

直後、一輪の背後から桃色の雲が出現する。

その雲は形を変え、巨大な人間の様な頭部と、腕の形を形成した

「申し訳ないけど、貴女達には即刻ご退場頂くわ」

そう言つて拳を引いた彼女の動きに合わせ、後方の大男も連動するかの様に拳を引いた

轟ツツ!!と身の丈を優に超える拳が突き出され、霊夢等は思わず空中へ逃れた

「いきなり危ないわね！」

「……ご心配なく。今のは避けられる様打ったわ。あわよくば怖気付いて帰ってくれると思つて」

「あれは……入道?ご老人みたいな風貌をしますけど……」

突如現れた入道、そして侵入者を前に身構える両者。

しかし張り詰める空気の中で、魔理沙はフワリと甲板に降り立った

「パワー勝負なら受けて立つぜ！」

八卦炉を構え、自身に向けられている拳と対峙する

「霊夢、先鋒は私が貰うからな」

「よし！早苗、行くわよ」

「早っ!?!いいんですか置いていって!?!」

「魔理沙なら大丈夫よ。ほら、お宝が待ってるわ！」

「別に私はお宝目当てじゃありません〜！」

忙しくその場を後にする二人を、魔理沙は呆れ顔で見送った。  
同様に一輪も視線だけを向け、溜息を吐いた

「騒がしい連中ね」

「ああ、私もそう思う。」

って言うより対峙してる私が言うのもナンだけど、素直に通して良かったのか？」

「別にいいわ。船員は私だけじゃないし、元より盗られる物もないしね」

「そうなのか？じゃあ霊夢の奴後でガツカリするだろうな」

「あら、貴女も宝が目的じゃないの？」

「私は面白そうなモノがあれば何処でも現れるんだぜ！」

・  
・  
・  
・

船内へと侵入した霊夢と早苗。

中は意外にも広く、質素な造りとなっていた

「空を飛んでいるから機械的な仕様かと思えば……、何か不思議な力が働いているんでしょうか？」

「不思議なんて幻想郷じゃ日常茶飯事ですよ。それよりお宝は何処かしら？」

まるで廃屋の様な船内を、適当に彷徨う二人。しかし霊夢の言うような金銀財宝など見当たらず、ひたすら何もない空間があるだけだっ

た

「貴女達は誰？」

そんな声が響き、二人は同時に視線を向けた。薄暗い通路の先から足音が一つ。

シチュエーション的には幽霊船の様な状況に、二人は思わず身構えた

足音はコツコツと近づいてくる

「幽霊……でしょうか？」

「だとしたら足のある幽霊ね」

「……お察しの通り、私は舟幽霊だよ」

船内に漏れる光の下で立ち止まった少女は、両手首を体の前で折りながら舌を出して答えた

「随分血色の良い幽霊も居たものね。アンタ誰？」

「それ私が先に聞いたんだけどなあ……。コホンツ、私は村紗 水蜜。この船の船長をしてr……!？」

船長帽の鍰を摘んで被り直しながら自己紹介をした村紗は、ふと霊夢の腰に吊るされている物を見て目を見開いた

「『飛倉の破片』……貴女、それを一体どこで？」

「どこって、ウチの庭に落ちてたから拾ったのよ」

「そのUFOなら私も拾いましたよ、ホラ」

「!!」

暫く二人の取り出した謎の光る物体を見つめた村紗は、一拍おいて

表情を変えた。

当初の軽いものから険しいものへ

「貴女達見たところ人間みたいだけど何しに此処へ？」

「昔からこう言う古臭い船にはお宝が眠っていると聞くわ！だったら目的は一つ。トレジャーハントよ!!」

「それは沈んでる方なんじゃ…？」

「……そう、宝物目当てなのね。だったらこの通路を進んだ先の『私の部屋にある』わよ」

村紗は視線を二人から外さずに、指だけを後方に向けた。

そちらを見れば、確かに薄っすらと扉のようなものが見える

「……『どうぞ此方に』って空気じゃないわね」

「えーと、こういう時のお決まりのセリフは……」

「『此処を通りたければ私を倒していけ』!!」

――

甲板で行われているパワー対決。

魔理沙は常に空中を飛び回りながら、雲入道に捕まらないよう間合いを測る……。

そうしている内に生じた隙を見つけては高火力の技を放っていた

「恋符『マスタースパーク』!!」

敵方へ向けて一直線に伸びる魔砲。

対して一輪はその細い腕を前方に突き出しストレートを放った



「拳固『懺悔の殺風』!!」

ブオオオオツツ!!と風を切りながら繰り出されたのは、一瞬遅れて放たれた雲山の拳。その一撃はマスタースパークと均衡し、やや押され気味になりながらも相殺してみせた

「!.....そんなフワフワした奴にマスタースパークを防がれるとはな」

「そう思うなら受けてみる?・雲山の拳」

「.....」

一輪の動きに合わせて魔理沙へ拳を突きつける雲山は、ふとある事に気が付く。

そしてゆっくりと構えを解き、一輪へ耳打ちするように身を屈めた

「.....!?あの白黒が...?」

次の瞬間には驚愕した様子で魔理沙を見た。

まるで意外なものでも見たかのように口を少し開いたまま凝視している

「なんだ?・独り言始めたと思ったたら固まって?」

「貴女が『飛倉の破片』を持っていると雲山が言ってるんだけど.....本当かしら?」

「飛倉?...何だそれ」

「一定条件で光を発する法力の込められた破片よ」

「光.....?ああ、もしかしてこのUFOの事か?」

魔理沙の帽子はちよつとした収納スペースになっており、いつも八卦炉などはそこから取り出している。

魔理沙は帽子の中に手を入れて謎の拾い物を取り出した

「!……間違いないわ。飛倉の破片よ……それを渡してもらえないかしらっ。」

「渡すと何かあるのか?」

一輪は一呼吸おいて答えた

「姐さんを……、『聖 白蓮』を復活させることが出来る……!」

## 108話 法界に囚われし僧侶（後編）

その昔、肉親を亡くしたばかりの僧侶が居た。

僧侶は最愛の家族の死から、『死そのもの』を極端に恐れるようになり、その日から彼女の死に対する抵抗が始まった。

元来学んでいた法力を捨て、妖力・魔力による術を身に付ける事により、彼女は晴れて不老長寿を手に入れた

ある日一匹の小妖怪が僧侶の住む寺へ現れた。

事情を聞けば、近隣にある村に立ち寄ったと言うだけで武器を手にした村人から追い回されたらしい

僧侶は妖怪を寺に匿った。

それは善意からではなく、飽くまで自身の魔力を維持する為に。

以降、僧侶は己が欲のためにそう言った妖怪を救済し続けた

・  
・  
・

そうした日常を送る中で、僧侶はある事に気がついた

――助けた妖怪は皆身体に傷を負い、悪意のある無しに関わらず人間から迫害を受けている事に……

彼女に心境の変化が訪れたのはそんな妖怪達を見て来たからなのかも知れない

いつしか僧侶は本心から妖怪を護りたいと思う様になった

――

静まり返った船内。

しかし壁や床に付いた弾痕を見れば、つい先程まで弾幕戦が繰り広げられていた事がわかる

その中で壁に寄りかかるのは、この船の船長である村紗 水蜜。  
目の前に立つ二人の巫女との弾幕戦に敗れたのだ

「全く、手間かけさせないでよね！」

「二対一とは言えここまで強いとはね。参った……降参だよ」

村紗は両掌を目の前で上げた後、埃を払いながら立ち上がった

「そつ。なら先に進ませて貰うわね」

そう言って立ち去ろうとする霊夢だったが、村紗の言った次の言葉で再びその足を止める事となった

「どうぞ自由に。宝は元より、この船には私の仲間と貴女達以外何も『載ってない』もの」

「……………へっ？」

素っ頓狂な声を漏らし、時が止まったかの様にその場に静止した霊夢へ、村紗は片手を立てて謝罪した

「いや〜ゴメンゴメン。あれ、貴女達二人をこの船に留まらせておく為の方便なんだ」

「……………OK、遺言はそれで良いわね？早苗、追加であと百回コイツぴちゅらせるわよ」

「落ち着いてください霊夢さん、瞳孔開いてますよ。…………えっと、何故そんな事を？」

霊夢を羽交い締めにしなが、早苗は事情を尋ねた。それは彼女も

一巫女として、村紗の軽い言葉の中に含まれていた、とある想いを感  
じ取ったからなのかも知れない

そして二人は、村紗の口からその目的を告げられる

「二千年前……魔界に封印された僧侶、『聖 白蓮』を助け出す為だよ」

）

僧侶はその人柄からか人間からの人望も厚く、妖怪問わず多くの者  
から親しまれていた。

ある日村の外で道に迷ったと言う少年を保護した。少年は寺で平  
穏に暮らす妖怪達を見て大層驚いていたようだ

少年は僧侶に問うた

『何故妖怪と暮らしているの？父ちゃんが言ってたよ。妖怪は人間を  
食べちゃうんだって』

僧侶は答えた

『皆が皆そうではありません。中には争いを好まない妖怪もいる。人  
間と同じなのです。こうして歩み寄ることだって出来るのですから』

少年は純粹にその話を聞き入っていた。

彼女が村まで送り届ける仕度を整える迄の間、寺の妖怪達とも打ち  
解け、共に遊ぶ程に

――明くる日、寺に数名の人間が訪れた

編笠に独特の法衣、印の書かれた札が巻きつけてある錫杖……

『……ッ』

僧侶は悟った。この連中が挙って現れる時、それは即ち『妖怪退治』を意味している事を

『……聖 白蓮だな？』

――彼らは近隣の村で雇われた陰陽師だった

偶々どこかで見られたのかも知れない。

昨日助けた少年から此処の話聞いたのかも知れない。

元々目を付けられていたのかも知れない

要因となるべき事項はいくら考えても霧が無く、妖怪との関係が露見すると一転、これまで築いてきた人望など無かったことの様にひっくり返ってしまった

『……ふん、妖怪に加担する悪魔め』

死を拒み、人の道をも捨てた

元人間の身でありながら妖怪との共存を望んだ僧侶は、この日を持って人間界から追放された

）

「私は嘗て人から恐れられて妖怪となった身。そんな念縛霊だった私をあの人解放してくれた。だから何としても助け出したいんだ」

「恩返し……ですか」

「でも、私達をこの場に足止めする理由は何？」

村紗は、霊夢等の持っているUFO型オブジェクトを指差して答えた

「貴女達の持っているその破片は、聖の封印を解くために必要な物。だから『魔界に着くまで』時間を稼ぐ必要があった」

「ふーん、このヘンテコな物体がねえ……ん？魔界に着くまで？」

一度間を置いて反復する霊夢へ、村紗はまたも軽い調子で謝罪を入れた

「この船は元々魔界に向かう様自動操縦にしてあるの。だから……ゴメンね？」

――

法力の力を使って幻想郷を飛び回っていた船は、『飛倉の破片』を持った霊夢達が乗船した事により、自動的にその進路を魔界へと変えていた

異次元の壁を越え、瘴気漂う魔界へと到着した船の甲板では、魔理沙が呆然と一変した景色を眺めていた

「凄えなー。此処が魔界かあ……」

人間界とは大きく異なる緋色の空。そこに太陽や月は無く、しかし  
そう言った明かりが無くとも大地はしっかりと目視できた

周囲に建造物も無ければ誰かが生活している集落すら無い。ある  
のは岩場と荒野の様な景色ばかり

隣に立つ一輪も初めての魔界には少なからず驚いている様で、興味  
深そうに眼下を眺めている

「！、見つけた……！」

「んん？……おっ、大それた結界が張つてあるな」

一輪の視線の先を追うと、地上からドーム状に広がる浅葱色の結界  
が展開されていた

「このままじゃ船が降りられないな。さっき言つた何とかの破片が  
あれば解けるんじゃないのか？」

「うーん、その筈なんだけど……。『星』が言うにはそれで封印を解く  
ための法力が溜まるって」

「星？」

「元妖怪の毘沙門天。まあ代理だけだね。彼女も聖を助けようとして  
いる仲間の一人なの」

「……『大事な物』を失くす位のそそっかしい性格が玉に瑕だけだね」

二人の会話に割って入ってきた声。

振り返れば船内から現れた妖怪鼠が甲板に上がって来ていた。

怪訝な顔をする魔理沙を他所に、一輪は慣れた様子で話し掛けた

「ナズーリン、戻って来てたの？」

「うん、今し方。……中で巫女二人に会ったよ。飛倉の破片を集めて  
くれたみたいだね。ありがとう」

「でも結界とやらは解けてないぞ？」



「心配ないよ。ご主人がその為の準備をしている。後は君の持ってる破片を合わせれば完成だ」

「なんだ、合わせないと駄目なのか。じゃあ霊夢達と合流するかな」

「……にしても、折角捜索に出て貰ったのに無駄足になっちゃったわね」

「いんや、案外そうでも無かったよ」

「？」

船内へ駆けて行く魔理沙を見送ったナズーリンは、やれやれといった感じで笑った

――

霊夢達の持っていた飛倉の破片が合わさった事で、飛倉の本体である船が光を帯び始めた。

船首の上では、何処と無く虎をイメージさせる風貌の僧侶『寅丸星』が、その手に宝塔を持ち、合わさった飛倉の破片に翳した

ピカッ！ピカッ！と結界と船が共鳴するかの様に数回瞬き、やがて結界は淡い光に包まれた

「……これで封印は解けた筈です。地上へ降りましょう」

村紗操縦の元、船は魔界の地へと降り立った

・  
・  
・

先程まで物理的干渉を阻んでいた結界内部は瘴気など無く、驚く程に空気が澄んでおり、法力の力なのか清浄な場所となっていた

そして奥へと進む一同を出迎えたのは、一人の女性。

長めの金髪に紫のグラデーションが入った髪、黒を強調したドレスに裏地が赤色のマントを羽織っているため、一見してみると寺の僧侶と言うよりも教会の修道女の様な見た目であった

イマイチ反応の薄い霊夢等三人とは対照的に、彼女を慕う面々は歓喜の声をあげた

「永らく見ていなかった。この世界に光が満ちている」

## 109話 魔界の獣

ほんのりと明るい光を纏いながら現れた聖 白蓮。

既に感極まった乗組員達が、彼女の周りに駆け寄って各々の言葉を述べている

『……！！』

それを遠目で見ている巫女・魔法使い・神の三名は、自分達が空気になりつつある事を自覚しながら、今後のことについて思索していた  
「どうする？一応今異変を起こした連中の親玉はあの僧侶っぽいけど」

「別に何か悪さしたわけでも無いですし、このままでも良いんじゃないですか？」

「兎に角事情を聞いてみないことには何とも言えないわね」

そうこう話している内に聖が目の前まで歩み寄り、深々と頭を下げてきた

「貴女方が私の封印を解く為にご援助して下さいました。まずはお礼を申し上げます。ありがとうございます」

「あついえ、どうも」

釣られてお辞儀を返す早苗を尻目に、霊夢は後方に視線を移した。既に村紗含め他の乗組員が運航の準備に取り掛かろうとしている

「既にご存知かも知れませんが、私は聖 白蓮と申します。もし宜しければ貴女方のお名前を伺っても？」

「東風谷 早苗です」

「霧雨 魔理沙だけ」

「博麗 霊夢よ。……結果的にそうなたただけだし気にしなくていいわ。それより一ついい?」

「はい、何でしょう?」

「貴女、人間も妖怪も平等な世界を望んでるんでしょう? 私は異変解決屋である前に妖怪退治も受け持つてる訳なんだけど……もし後ろのアイツ等を退治するって言ったらどうする?」

「……」

その質問に聖は表情を変えた。和やかなものから真剣な顔付きへ。しかし決して敵意を出さず、飽くまで話し合うスタンスを保ちつつ話し始めた

「……私は彼女等を護ります。以前はそうしなかったが為にあの子達まで地下深くに封印されてしまった。あの子達は千年間もこんな私を慕ってくれていたのですから」

「なら妖怪側について、『人間の敵』になるって言うのね?」

「私とて元人間の身。人間の味方でもあります。唯、今まで虐げられてきた妖怪達を護る為なら戦う覚悟もある……というだけです」

「……そう」

霊夢はそれ以上何も言わず、暫しの睨み合いが続く

「ん?」

そんな空気の中、魔理沙は結界内部のある変化に気が付き、周囲を見渡した。

それを見た早苗も同じ様に見渡すが、特に異常は認められない

「どうかしたんですか?」

「……なんだろう、此処の魔力が強まってる気がする」

日頃から魔力を扱っている者だからこそわかる僅かな変化。それは同じくして聖も感じ取っていた

「このまま睨み合いを続けていてもキリがありません。それより皆さん、早く船に乗って下さい」

「……どういう事？」

「説明は後で。どうやら良くないものが作動した様です」

その言葉に怪訝な顔をする霊夢と早苗。しかし魔理沙は二人の肩を叩いた

「二人とも、ここは素直に乗った方が良いでしょう。『此処は何かヤバイ……!』」

・  
・  
・

ドーム状に広がっていた結界はいつしか薄れ、徐々にその形を失いつつあった。

それと並行して、結界の外に漂っていた瘴気や魔力と言った魔界本来の成分がその場に一気に流れ込み始める

既に誰が見ても視認できる程に魔力の渦が法界を覆っていた

「さっき言ってた良くないものってアレの事？言っとくけど瘴気程度ならどうとでもなるわよ？」

「瘴気や魔力自体はさしたる影響はありません。皆さん何らかの手段で防護しているのでしょうか？」

「だったら……一体何が？」

聖は険しい表情を浮かべながら答えた

「……問題なのは、この場に今まで無かった魔力が集束している事なんです」

——新たな異変が起きたのは次の瞬間だった

『グオオオオオオオオオオツ!!!』

「!?」

突然響き渡る獣の様な咆哮。

乗船した一同は目を見開いた

「やはり集まってきましたか……ムラサ、速やかに離陸を！」  
「りよ、了解！」

聖はすぐ様声を飛ばし、村紗も舵輪を握るが、途端にその表情は愕然としたものに変わった

「駄目だ聖……！船を飛ばすだけの法力がもう残ってない……!!」  
「!?………そんな」

「おい、彼処！何か色々出てきたぜ……!!」

魔理沙はそう叫ぶと、その方向を指差した。

先程まで聖が封印されていた法界の謂わば中心部……

「何っ……アレ!?!」

誰かが思わず声を漏らす

『グルルルッ!!』

鋭い眼光で此方を睨みつけている数多の影。

『三首の獅子』を始め、『火炎を纏った怪鳥』、『体表が岩の鱗に覆われている大蛇』。更には船と同サイズの『火龍』など、様々な魔獣が法界に集結していた

「これって……もしかしなくてもヤバい展開だよな？」

「わ、私初めて見ましたよ。本物のドラゴン」

「でも何で急に……さっきまでこんな殺気立った気配は感じなかったわよ……!」

狼狽する三人は、自然と聖の方へ視線を向けた

「……恐らくは先程湧き出した魔力に釣られて集まって来たのでしよう。この世界の獣は皆、魔力を喰らって己の糧としていますから」

「仲間に船の準備をさせたのはその為ね。何故言わなかったの？」

「確証がありませんでした。……ただ妙に胸騒ぎがしたのは確かです」

「聖! マズイよ……! アイツ等この船を狙ってる……!!」

一輪が叫び、見ると魔獣達が牙を剥き出しにジリジリと迫って来ていた

「おいおいどうするんだ……! 船が動かなきゃどの道帰れないぜ!」

「……私が船に動力源たる法力を注げば再び動き出します。しかしそれをするだけの時間が無い……!!」

既に臨戦態勢に移りつつある魔獣等を見て、聖は決心したかのように拳を握り締めた

そして隣に立つ霊夢へ、そっと呟いた

「……霊夢さん。身なりからして貴女を巫女とお見受けしますが宜しいですか?」

「……何よこんな時に」

「私が何とかあの獣達を追い払います。その間、皆さんと船に被害が及ばぬ様結界を張っていただけませんか?」

「……一人で戦う気?纏ってる力にしたってアイツ等相当強いわよ?

しかも理性が無い獣だから手加減なんてしてくれないだろうし」

「ええ、わかっています。しかしもうこの方法しか無いんです」

『クエエエエエエエエエツ!!』

数匹の巨大な怪鳥が翼をはためかせ迫る

「……死ぬわよ?」

「それでも私は、皆を護り抜くと決めたんです」

——迫る脅威に立ち向かう為、聖は足裏に力を込め跳んだ

「聖!?!」

後方では自身を呼ぶ声がした。

聖は振り返らない。退く訳にはいかなかった。千年前救えなかった彼女等を、もう失いたくなかったから

聖はそのまま真っ直ぐに怪鳥へと向かう

「霊符『夢想封印』!!」



「恋符『マスタースパーク』!!」

「秘術『グレイソーマタージ』!!」

ドオオオオオツツ!!

両者の間に挟み込まれた弾幕は、大口を開け迫る怪鳥を吹き飛ばした

そして霊夢・魔理沙・早苗の三人は、聖の前に躍り出る

「この方法しかないですって？妖怪退治の専門家を前によくそんな事言えたわね」

「船に力を注げるのはお前だけなんだろう？だったらアイツ等は私達に任せとけ!」

「さあ、今の内に!」

「……ッ!」

聖は三人を引き止めようと言葉を発しかけ、しかし口を噤んだ。

自分でもわかっていた事だ。この場における最良の選択肢は、一刻も早く船を動かし此処を離れる事。

わかつてはいたが、他者を巻き込みたくないと言う自身の思想が其れ等から掛け離れた選択をしてしまったのだった

「……頼みますッ!」

そう一言残し、再び船へと戻った聖は、すぐ様準備に取り掛かった

「皆、聞いて下さい。これから私は船に法力を注ぐため此処を離れられない。どうかその間彼女等の手助けをお願いします……!」

船員達は口を揃えて答えた

『了解!!』

・  
・  
・

「うわっ熱ちちツ!? アイツ火吐いたぞ!」

「流石にドラゴンは強いですね! かく言う私も、モンスターをハントするゲームでは何回も落ちましたか……」

「何の話よ! それよりしつかり戦ってよね!!」

「わかってます!」

次々と襲い来る魔獣。

人間界の生物とは比較にならない戦闘力に加え、生半可な弾幕など物の数ともせず弾いてしまう頑強な身体を持つ彼らに、霊夢等は苦戦を強いられていた

「こうなりや纏めて吹っ飛ばすぜ! 二人とも下がってろ!!」

魔理沙は八卦炉を構え叫んだ。

魔界には豊富な魔力が大気中を漂っている特性上、普段よりも強力な力が充填されていく

「恋符『マシンガンスパーク』!!!」

——轟ツツ!!

多方向に打ち出されたマスタースパークは、広範囲に及んで周囲を吹き飛ばした。

当然近場を飛んでいた魔獣は地上に叩きつけられ、地上を走る魔獣もその衝撃に足を止めた

「うわあ……凄い威力ですね」

「へっへーん！どうだ見たか!!」

声高らかに笑う魔理沙。しかしフツとその身体を影が覆った

「!?……魔理沙！上ツ!!」

霊夢が叫び攻撃に転じようと動き、同時に魔理沙も振り返るが、既に眼前には竜の鉤爪が迫っていた

「あっ……」

ドグシャアアアツ！、

## 110話 聖輦船の守り人

刹那、魔理沙の感じる時間が緩やかになる

『ゆつくりと迫る強靱な爪は、掠めただけで自身の頭を原型無く砕き割るだろう』。

魔理沙はそんな事を冷静に考えていた

ドグシャアアア!!

「!!」

——激しい衝撃と共に目の前を桃色の拳が通過する

「お前等……!!」

「ふう、間一髪。怪我はない?」

「油断大敵だね、魔法使いさん」

一輪は突き出した拳を引っ込め、それと連動して雲山も巨大な拳を戻す。

村紗が柄杓を振ると、周囲にアンカー型の弾幕が配置された

「……ッ!」

一瞬の空白から我に返った魔理沙は、気を張り直すため頬を叩く

「……悪い、助かった」

「お互い様よ。貴女達のお陰で聖の封印を解くことができたんだから」

互いに背中合わせの緊迫した状況。  
周囲には小型の飛竜種が群れを成して取り囲んでいる

「奴らの攻撃は全て私達で防ぎ切るわ。貴女はお得意の火力で存分に攻めなさいな」

「贅沢言えば舟幽霊らしく水場で戦いたかったけど、偶にはキャプテンとして船を守る為に戦わないとね！」

「へへっ。じゃあ、頼むぜ!!」

再び八卦炉を構え、同時に飛竜の攻撃が始まる。

四方八方から牙や爪を剥き出しに襲い来る飛竜を雲山が薙ぎ払い、村紗のアンカーが絡め取る。そして魔理沙の高火力を持って一つ一つを正確に迎撃していく

「嵐符『仏罰の野分雲』!!」

「湊符『幽霊船永久停泊』!!」

「流光『シューティングエコー』!!」

――

未だ地に降りたままの船目掛け、攻撃を仕掛けんとする地上の魔獣に対して奮闘する早苗・星・ナズーリンの三人。

その猛攻を止めるため弾幕を放つが、一時怯ませる事は出来ても中々有効打を与えられずにいた

「全く、どいつもこいつも無駄に頑丈だな……！」

「ナズー下がっていなさい……!!」

そう悪態づくナズーリンの隣では『宝塔』を手にした星が、その先端より無数のレーザーを放った

ゴパアツ!!と一瞬の爆発音が発せられ、足場諸共吹き飛ぶ魔獣。

星はその場に留まり、まるで固定砲台の様に接近する敵を薙ぎ払った

「流石」主人もとい宝塔の力だね。ただインターバルを気にかけてないとお……」

「！」

ゴツツ!!

レーザー照射直後の一瞬の間隔をつき、大蛇が大口を開けて地中から飛び出した

「守符『ペンデュラムガード』！」

星を囲うように配置された五つのペンデュラム。内の一つが牙を遮るつかえ棒代わりとなった事で動きを止めた蛇。

その頭上に一瞬にして現れた早苗が御幣を振りかざした

「開海『モーゼの奇跡』!!」

ゴガアンツツ!!と縦一文字に振り下ろされた一撃は、岩で覆われた鱗を叩き割り、蛇自体をも昏倒させた

「ありや、見かけによらず豪快だね。これも神様の力ってヤツかい？」

「勿論！なんて言ったって私には心強い神様が二人もついてますからね!!」

「二人とも助かりました。どうやら今の一撃は牽制効果もあったようです」

一際大きな体躯を持つ大蛇が倒された事により、魔獣の多くは警戒を強め、先と比べて猛攻が薄れつつあった

「つて事は今が攻め時ってヤツだ。一気に畳み掛けるよ!」

――

法界上空。

霊夢は高速で飛び回りながら対象から逃げるように立ち回っていた

「もう！何で私だけあんなデカいの相手にしなきゃいけないのよ!!」

後方を振り返りながらそう文句を垂れたのも束の間。視界一面を覆い尽くすほどの火炎の波が押し寄せた。

即座に結界を展開し炎から身を守る霊夢だが、その圧力に踏ん張りが効かず、勢いのまま押し流されてしまう

『ゴアアアアアアアアアアッ!!!』

耳を劈く様な咆哮と共に、大翼を広げ迫る巨軀

―― 『ドラゴン』。

体表が紅蓮の鱗に覆われ、ある地方では邪悪の象徴とまで言われている魔獣切っの強者

その巨体からは考えられない様な速度で霊夢を追尾する

「神霊『夢想封印』!!」

霊夢は体制を立て直し突っ込んでくるドラゴンに向け大粒の弾幕を放った。

普段よりも高威力の夢想封印。普段通りの生半可な攻撃など敵は涼しい顔で受け切るであろう事は容易に予想できた

ドオン!!ドオン!!と次々と炸裂音が霊夢の耳を叩く。

しかしドラゴンは一切その勢いを緩めること無く、その身体に傷一つ付けること無く、爆煙の中から飛び出した

「ツツ!!」

霊夢は全力で横へ飛んだ。

強靱な身体を持つ相手に対し、自分はほんの少しでも掠めてしまえば瞬時に肉塊だ。

霊夢が一瞬前まで浮いていた空間を、ジェット機のような風切り音と共にドラゴンが通過した。

その風圧でさえソニックブームのような衝撃波となり、霊夢の体制を崩す

(長期戦はマズい…!出し惜しみしてる場合じゃないわね!!)

ドラゴンは旋回し霊夢へと向き直ると、その口内へ灼熱の息を溜め始めた

「霊符『博麗幻影』」

宣言と同時に周囲が不可思議に歪み、ドラゴンの目の前に『新たな博麗 霊夢』が現れる





強者としてのプライドを傷付けられた火竜は吼えた。その眼を血走らせ、ギョロギョロと霊夢を睨み付ける。

爪を立て、牙を鳴らし、口から吹き出る炎を纏いながら襲い掛かった

ズガガガガガガガガガツツ!!!

——瞬間に複数の霊夢は八つ裂きとなった。例えその中に本物が混じっていたとしても判別出来ない程に、次々と振るわれる火竜の武器は、周りの空気さえも消し飛ばした

・  
・  
・

『……フウ……フウ……』

その全てを消し去ったドラゴンは、荒い息を整えるためその場で静止していた。

もうあの忌々しい声は聞こえない。新たに現れる気配もない

——だが、ドラゴンは次の瞬間、再びその身を強張らせる

ピンツ……と突然ドラゴンの周囲に円柱を粹取る様な線が張られた

「アンタが動きを止めるのを待ってたわ」

やがてその線は橙色の巨大な結界へと変わり、ドラゴンを閉じ込めた

『ゴアアアアッ!!』

途端に暴れるドラゴンだが、念入りに組まれた結界を容易く破壊する事は出来なかった

「喰らいなさい。」

——神技『八方龍殺陣』!!!」

カツ!!!

結界内を同色の光の柱が包み、のまれたドラゴンごと一挙に炸裂した

「……」

最早敵の唸り声も悲鳴すらも結界の外にいる彼女には聞こえない。下方に目を転じれば、いつの間にやら落ち着きを取り戻しつつある地上。肝心の船にも力の注入が終わったのか既に何人か乗り込んでいるのが伺えた。

もう一度結界に視線を戻すと、光の柱は次第にその光を散らせながら窄んでいくところだった

「はあ、終わってたんなら手伝ってよね……。こっちはもうクタクタ……」

その瞬間、霊夢の背筋に悪寒が走った

別に油断していたつもりはなかった。ちゃんと気配も探っていたし、結界だってまだ解いていない。彼女なりに安全を確保した上で一呼吸置いたつもりだった

パキツ……パキキキキツ……

背後で聞こえてくる音が死の音色に聞こえた。自然と呼吸が荒くなり、心音がやけにくつきりと認識できた

『グルルルツツ……!!』

唸り声をあげるドラゴンは冷静だった。

先の攻撃を受け、一気に頭に昇っていた血が下がった彼は、静かに術が止むまで待っていた。その瞬間こそが、獲物を確実に仕留める事の出来る好機だとわかつていたのだ

「しまっ…!?!」

彼にとって……目と鼻の先にいる人間が振り返り態勢を立て直すまでの時間など、欠伸が出る程緩やかなものだった

口を開き、思い切り喰いちぎる。

ドラゴンは一瞬で間合いを詰め、その単純な動作を行った

——此処までは常人である霊夢の感覚であり、それを完全に見据えた上での彼の慢心だった

ドガアアアアツツ!!!

瞬間、飛び出した一つの影。

その影は素手の一撃で火竜の顔面に殴打を叩き込み、文字通り『殴り飛ばした』

「お怪我はありませんか？」

優しい声色。

靡くグラデーシヨンのかかった髪を押さえながら、『聖 白蓮』は霊夢の手を取って尋ねた

「あつ……えつ、船は？」

「貴女方の御蔭で無事終わりました」

霊夢は未だ緊張したままの身体を動かし、ぎこちなく船を見た。そこにはゆっくりとはあるが、確かに宙に浮き、此方へ向かってきている船の姿があった

『グルルルルツツ!!』

「!?」

安堵から一瞬忘れていた。

例え船が動いたとしても此奴をどうにかしなければ忽ち撃墜されてしまう

「顎を打ったつもりでしたが……、やはり魔界の獣は頑丈ですね」

「……どうするの？」

「なんとか動きを封じる事が出来れば良いのですが……。私も船の復旧に力を使い過ぎてしまった為にそれも容易ではありませんね  
……」

「………今回ばかりは結構ピンチね」

ゴオオオツ………!

「!?」

ドラゴンが大きく息を吸い込む。

何をするかは明白だった。

その射線上には自分たちの他に浮上中の船がある。下手に避けることが出来ず、最悪の事態を回避するには『受け切る』か、『火竜を倒す』かしかなかった

下方では異変に気付いた村紗が何とか避けようと舵を切っている。加勢しようと魔理沙達が飛び出し向かってきている

……だが『間に合わない』

ドラゴンは目の前の標的を焼き尽くす為口を開けた

「縛道の六十三『鎖条鎖縛』」

『ツツツ!?!』

突如として、蛇のように絡みつきながらドラゴンの口を強制的に縛り付けた光の鎖。

一瞬、その場の誰もが何が起こったのか理解できなかった

「悪い、遅れちゃった」

スツと霊夢の横に現れた『柎 隼斗』は軽く欠伸をしながら謝罪の言葉を述べる

「隼斗……!?!なんで魔界に……」

「話は後だ。まずはアイツをなんとかしねーとな」

隼斗は巻き付けられた鎖を外そうと暴れるドラゴンを顎で指し、空中を踏みつけながら前へと歩き始めた。

それを見て慌てて引き止めようとする聖を、霊夢が制止する

「……はあ、来るならもっと早く来てよね。あのバカ師匠」

「良いのですか!? あの方一人で……!」

「心配ないわ」

ツカツカと距離を詰めていく隼斗は、暴れ回るドラゴンの目の前で立ち止まった

『……ツツ!!』

「よお、デツカイトカゲ野郎。調子はどうだ?」

『……ツツ!!……ツツ……ツツ……ゴガアアアアアツツ!!』

ドラゴンは爪を使い力技で鎖を引きちぎると、殺気立った瞳で睨み付け、怒りの咆哮をあげた

「そう怒んな。別に殺しやしねーよ。ちよつと大人しくして貰うだけだ」

その殺気を受け流す様に隼斗は軽い調子を崩さなかった

『グ……ツツ!』

野生の世界に於いて弱肉強食は絶対。

獲物や雌の奪い合いにしても『殺し、殺され』の関係が成り立つ自然界で生きてきたドラゴンは、殺気に向けても臆せず、また一向に殺





## 111話 大脱出

空の障害が無くなった事で漸く霊夢達のいる上空まで上がってきた船は、足下で停船する。それと同着で魔理沙と早苗が霊夢の下までやって来た

「おーい、霊夢ー！大丈夫だったかー？」

「ちよつと魔理沙！早苗！終わってたんなら手伝ってよね。こっちは危うく食べられそうだったんだからー！」

「すいません……、一回加勢に向かおうとしたんですが、魔理沙さんが『霊夢なら大丈夫だろう』って」

「……魔理沙……？」

「あははは、悪い悪い。でも隼斗が来てくれて助かったぜ。正直アイツが炎吐きそうになった時は焦ったもんな」

「そう言えば隼斗さんはいつの間に魔界へ来てたんですか？」

「さあ？後で説明してくれるみたいだけど、兎に角今は休みたいわ」

霊夢はそう言って肩を回しながら流し目で隼斗の方を見ると、丁度聖 白蓮が深々と頭を下げている場面だった

「良いって別に。礼なら今まで戦ってたアイツ等に言ってやんな」

「それは勿論です。貴方が居なかったら今頃どうなっていたか……。本当にありがとうございました」

「律儀だなーアンタは。ウチの巫女にも見習わせたいよ」

「まあ……では貴方は住職の方なのですか？」

「いや、そういう訳じゃねーけど……」

既に霊夢達含め、隼斗と聖以外は全員乗船している。

今は村紗が最終チェック中であり、ほぼ出発準備が整った状態だった

「さつ、隼斗さんも船に乗って下さい。後は魔界の空を少し飛ばば人間界へ戻れる筈です」

「…ん、わかった」

聖はそう言つて隼斗へ乗船を促した。

すると隼斗から帰つて来たのはどこか曖昧な返事だった

「どうかされましたか?」

「……いや」

隼斗は船とは逆の方角を一見し、聖と共に船へと降りた

・  
・  
・

魔界上空を飛行する聖輦船の船内では、一同が集まりそれぞれが積もる話に花を咲かせていた。

そんな中で遅れて現れた男、終 隼斗はいつものメンバーから取り調べを受けていた

「…で、そもそも何で隼斗がいるのかつて事よ」

「いる分には別に良いじゃねーか」

「場合にもよるわね。もし初めから付いて来てたのなら、あの状況になるまで影で見ってたつて事になるもの」

「あつ、確かに。そこんトコどうなんだ隼斗?」

「流石にそこまで意地悪くねーよ。魔界に来たのだからお前らと会うちよい前くらいだしな」

「えっ?つて言う事は隼斗さん、自力で魔界まで来たつて事ですか?」

「!」「!」

隼斗の言葉に早苗が突っ込み、他の二人も気になるという反応を見せた。

そもそも先の戦いは『人間界と魔界を行き来する手段』を死守する為の戦いだっただから

「まあ、少し手間をかければ手段なんて幾らでもあるぞ。そもそも幻想郷って場所自体が人間界にギリギリ収まってるようなトコだからな」

三人はその手段については聞こうとしなかった

……何となくわかる

『少しの手間』という表現は、目の前の男だからこそ使えるものであり、自分達が実行しようとしても同じ様にはいかないだろう

「じゃあこの異変の事を知ったのもその時なの？」

「いや？初めから」

あつけらかんと答える隼斗に、スマイルのまま勢い良く立ち上がった霊夢。ガタガタツ！と二人掛かりで押さえ込みながら宥める魔理沙と早苗

「まあ聞けって。そもそも俺はお前達より先にこの船に乗り込んだんだ。そしたら有らぬ誤解を生んで、空の彼方へFly awayだよ」

隼斗は、楽しそうに歓談する一輪の背後で仏頂面を作る桃色雲オヤジをチラ見しながら続ける

「で、そっから『今異変の黒幕』に会った」

『ちよっと待て』

思わず出たツツコミは、珍しく息ピッタリだった

「隼斗はアレか？私達を長年付き添ってきた妻か何かと勘違いしてないか？いきなり展開すつ飛ばし過ぎだろ」

「いやマジなんだって。俺もいきなり放られると思ってなくてさ。暫く無心で飛ばされてたらある妖怪とぶち当たったんだ」

早苗は首を傾げて尋ねる

「えーとっ……つまりその妖怪が黒幕だと？」

「ああ。で、何か怪しかったから職質した。そしたら襲い掛かってきて、返り討ちにしたら口を割ったって訳だ。

なんでも悪戯目的らしいぜ。お前らが集めてたっていう飛倉の破片が散らばったのも、元を正せばこの妖怪の仕業なんだとよ」

「……何処の何奴よ？その傍迷惑な妖怪」

霊夢が怒り気味に尋ねると、隼斗はスツと人差し指を指した

「さつきから其処にいるぞ」

『えっ!?!』

三人が一斉に振り返ると、其処にはボンヤリとした光の玉が浮いており、突然注目された事に驚いたのかやや後ろに飛び退いた。

そして未だにその光が何なのかわかっていない三人を見た隼斗は、呆れ気味に告げた

「……お前、もしかして『また正体ボカして』んのか？……ぬえ」

「ちよっ！何で言っちゃうんだよ!?!」

その思わず発した叫び声に、霊夢達だけでなくこの場にいる全員の視線が集まってしまい、再び沈黙する謎の光玉

「……はあ、取り敢えず正体明かせ。元々俺には通用しねーし、お前の

存在はたった今自分で暴露しちまったろ」

「…………ちえつ、わかったよ」

一言呟き、光の玉がその姿を変え始めた。

短めの黒髪に黒地のワンピース。背中には左右非対称の奇妙な羽を生やした少女は、隼斗を恨めしそうに睨みながらその姿を現した。すると村紗と一輪は、顔見知りを見つけた様に驚いた表情をする

「ぬえじゃない…！貴女どうして此処にいるの？」

「あら二人とも、彼女を知っているのですか？」

聖の質問に村紗と一輪はコクリツと頷いた

「うん、地底に封じられている時に少し」

「彼女も同じく封印されていたみたいだけど……、私達と同じタイミングで出たって事かしら」

「…………合ってるよ、それで。悪戯仕掛けたのもその時」

「悪戯？」

「貴女達飛倉の破片を探してたでしょ？アレ、私がやったの」

「えっ？でも破片が散らばったのは間欠泉で打ち上げられた衝撃で…………」

「私が能力でそう見える様に認識を変えたのよ。昔から『鶴(ぬえ)』って名前は有名でしょ？人間が嫌い、夜な夜な人間達を脅かしては恐怖を与えていた妖怪。まっ、その所為で封印されちゃったけどね」

「…………」

やや不貞腐れ気味のぬえは、壁にもたれ掛かりながらそっぽを向いてしまう

「……だがそれは次の言葉を言う上での照れ隠しだった

「…………でも誤解してた。ごめん」

「!」

相変わらず聖達の方へは顔を向けずに、ぬえは続けた

「聖って言ったっけ?……アンタ妖怪の為に尽力した結果、封印され  
たんだって?」

「……何故それを?」

「さっきその人間が言ったでしょ。正体を誤魔化して船に紛れ込ん  
でたって。その時アンタと村紗達の会話を聞いてたんだ」  
「……」

聖は立ち上がると、ぬえの前に座り、その手を取った

「ありがとうございます」

「!!」

ぬえは思わず聖の顔を見た。優しくそうに微笑むその表情は、彼女の  
瞳にどう映ったのか。暫くの間見つめ合いが続いた

その様子を側から見ていた隼斗は、霊夢に向かって良い笑顔で告げ  
た

「アレを見たな霊夢?まずは包容力を養え」

「よくわかんないけど殴っていい?」

——そんな時だった

ゴガアアアンツツ!!という轟音と共に、激しい衝撃が船を襲った。

「なっ、何だあ!?!」







それで船長。人間界との境界まであとどれくらいだ？」

「……うーん、このまま行けば早くて五分位かな」

「ならその時間を凌げばいい訳だな。……よし、お前ら下がってな」

周りが注目する中、隼斗は火竜の大群に向けて掌を翳した

「千手の涯 届かざる闇の御手 映らざる天の射手 光

を落とす道 火種を煽る風 集いて惑うな我が指を見よ」

詠唱を口にする隼斗の背後に霊力が集束されていく

「光弾・八身・九条・天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔 弓引く彼方

皎皎として消ゆ」

た 霊力はやがて無数の巨大な光の矢となり、その矢先を前方へと向け

「破道の九十一……」

「……『千手皎天汰炮』!!!」

ドドドドドドドドドドツツ!!!と轟音を発しながら、音速を有に超える光の矢が一挙に放たれた。一発の大きさが火竜一匹を覆い尽くす程あり、その威力は絶大。

ドラゴン達はあつという間にその大半が撃墜され、残ったのは偶々運良く矢の軌道から逸れた10匹程であった

「……………」

隼斗と付き合いの長い霊夢や魔理沙含め、この場の全員が、彼の圧倒的な力を前にして軽い放心状態に陥っていた。

それ程までに容易く、たった一度の弾幕で絶望を塗り替えてしまったのだから

隼斗は振り返り言葉を発した

「さて、大分楽になったろ。後はあの残党から船を護り切るだけだ」「!!」

その言葉に皆ハツと我に返った。

魔界を脱するまで残り数分。前方からは激昂し、火炎を撒き散らしながら突っ込んでくる火竜の残党

——全員が武器を取った

・ ・ ・ ・ ・

穏やかな気候の幻想郷。

その上空では清く正しい新聞記者の射命丸 文が、空飛ぶ船の目撃情報を元に捜索を行っていた

「うーん……、船どころか飛行物体すら見当たらない……。大体空飛ぶ船なんて本当にあるのかなー?」

一日中幻想郷の空を飛び回った結果、全く尻尾を掴めなかった為か

半ば諦めモードに入りつつある文は、ある地点で停止した

(この辺りが船の最終目撃地点だけど……………、やっぱり見当たらないか)

文は溜息を吐きながら帰路に着こうと踵を返した

轟ツツツー!!

背後で突如激しい風圧が起こる

「……………へっ?」

思わず振り返った先には、異空間らしき場所から今まさに飛び出してきた木造の船

「よっしやあー! 抜けたー!!」

聞き覚えのある声。船上に目を転じれば両手を高らかに掲げて歓喜する白黒魔法使いを始め、博麗の巫女や守矢の現人神の姿があった

「ツ!!」

文はその瞬間を逃すまいとシャッターを切った。目の前を通り過ぎる船をコマ送りの様に連続でカメラに収めた文は、満面の笑みを浮かべた

『幻想郷を飛び回る船、空間をも飛び越える!? 船上には巫女の姿も…!!』。よし、見出しはこれで決まりね! 後日、本人達の所へ取材に行かなきゃ!」

既に飛び去っていく船を見送りながら、文は呟いた

「?……でも何で皆んなボロボロだったんだろう?」

後日、暫く幻想郷上空を漂っていた聖輦船（聖が元々住んでいた寺が既に無くなっており定住する事が出来なかった為）だったが、聖の申し出により、元の飛倉の姿、そして仏教寺へと改装された

場所は人里近くの更地であったが、隼斗や早苗の協力もあり、その地は洩矢 諏訪子の力によって整地された

寺の名前は『命蓮寺』。聖の実弟であった命蓮の名を肖ってつけられたと言う

## 112話 銀髪の剣豪

――『魔界』

無限に広がる広大な土地や、瘴気や魔力と言った本来生体に有害とされる成分が空間を漂う異世界。

魔力を扱う者にとつては絶好の修行場となる反面、そういった環境に適応できる者でなければならぬ。

……となれば、必然的にこの世界に住まう者は皆、強大な力を持った者と言うことになる。

「……相変わらず殺風景な場所だ」

そんな魔界の中でも辺境の地へ、一人の老境の男が訪れた。

視線の先では『根元から上が存在しない』大木の物と思われる根が、地上に浮き出ている

その中心に突き刺さっている古びた刀を見つめ、男は頭髪同様に銀色に靡く髭をなぞりながら呟いた

「さて、お前が枯れ果てるのはいつになる？」

――

晴れ渡った昼下がりに。

此処、冥界に於いて天候の変化の有無があるのかは定かではないが、日差しが見えると言うことは少なくとも洗濯物は乾くのだろう

そんな事を思いながら白玉楼に訪れていた隼斗は、目の前で自分が持参した菓子を食い漁る西行寺 幽々子を呆れた視線で眺めていた

「……………そんなに美味しいか？ 『ポテチ』」

「ええっ、とつても!!本当にこれジャガイモから作ったの!？」

「ああ。薄く切つて油で揚げたんだ。丁度幽香からジャガイモの差し入れがあつたからな」

「へえー!隼斗つてお菓子作りなんてするのねえ。ちよつと意外だね」

そう言いながらも、ポテチを口へと運ぶ動作を止めない幽々子

「普段はしねーよ。久しぶりにポテチが食いたくなつたから作っただけだ」

「あつ、そうだね!このお菓子の作り方、あの子に教えてあげてもらえないかしら?」

「妖夢にか?まあ別に良いけども……、この屋敷のジャガイモ消費量がハンパ無い事になりそうだな」

徐に中庭へ視線を移すと、妖夢が刀の素振りを行つてるところだった。

隼斗はそんな様子を頬杖をつきながら眺め、ふと幽々子へ質問した

「なあ、前に妖忌はどうしたかつて聞いた時、幽居したつったよな?」

「ええっ。言つたわね」

「実はさ……最近妖忌らしき奴の気配を感じ取つた」

「!」

ピタツ……と今の今まで忙しく動いていた幽々子の手が止まる。

一時の静寂。庭で刀を振るう音が強調的に聞こえてくる

「……そう」

幽々子は一言漏らし、湯呑みを口へと運んだ

「……何処で、とか聞かねーのか？」

「あら、教えてくれるの？」

「別に隠す気はねーよ。今日此処に来た理由の一つはそれを話す為でもあんだから」

隼斗は茶を一口含んだ後言った

「魔界だ」

「……………」

「……驚かないんだな」

「……………」隼斗

「ん？」

暫しの沈黙の後、幽々子は自身の手元を見つめながら静かに呟いた

「……………ポテチ、もう無いのかしら？」

「だと思ったよこの野郎」

既に卓上にあつた山盛りのポテチは姿を消しており、指を咥え、上目遣いでおかわりを要求してくる幽々子に対し、隼斗は呆れながら保存パックに入ったポテチを差し出した

「持って来たのはこれで最後だかな。後は妖夢に作ってもらえ」  
「ありがとう♪」

再びパリッポリッと小気味の良い音が部屋を包む中、幽々子は先の返答を口にする

「あの人は昔から自分の成すべき事に忠実だった。今回も何らかの事情があるんでしよう」

「……お前や孫をほっぽり出してか？」

「大丈夫。きつとそのうちフラツと帰ってくるわ」

「……………寛大な主人だねえ」

そう言つて立ち上がり、庭で素振りを続ける妖夢の元へ向かう

「隼斗さん！……………どうかされましたか？」

「急用思い出してな。これから帰るからレシピだけ渡しとこうかと思つて」

「へっ？で、ではすぐお見送りの仕度を！」

「あー、いいっていいって。そんじゃ、お邪魔しましたー」

隼斗はポテチの作り方が適当に書かれた紙を妖夢へ渡し、2人に見えるように手を上げてそそくさと門の方へと歩き出した

「あつーえつと……………またいらして下さいー！」

突然の事で戸惑う妖夢を尻目に、幽々子は静かに微笑んでいた

・  
・  
・

幻想郷で唯一魔界と同じ特性を持つ魔法の森。白玉楼から帰宅した隼斗は、印の書かれた札を決められた場所に配置し、隅から全体に行き渡る様靈力を流した

ズズズツツ……………と陣の中央の空間が裂け、『擬似的なスキマ』が開か



れる。

内部は進入する者を躊躇わせるような虚空が続いていた

(んー、準備に時間が掛かるのが難点だな)

隼斗が中へと入った数秒後、大口を閉じるように空間は閉ざされた

ー

スキマを抜けると空気が一変。

瘴気はより濃くなり、肌で感じ取れるほどの魔力が漂っている世界へ隼斗は降り立った

(……そう遠くねーな)

隼斗は一方を見つめた後、その方角へ駆けけた。

岩場を超え、見たことも無いような植物が生い茂る森林へ。途中、幾つもの魔獣の群れの横を通り過ぎるが、気配を最小限にとどめ回避する

「！」

ただ一つの気配を頼りに駆け抜け、林内の大きく開けた場所に出た。

隼斗はそこで立ち止まり、その広場の中央に立つ人物を凝視する

「！……これは、随分とお久しぶりですな」

銀髪のを後ろで纏めた男は、振り返りながら貫禄のある声でそう言った

「やっぱ此処にいたのか……、『妖忌』」

「近いうちにお会いする事になるのではと思っておりました。柊殿」

「……此処で何してんだ？」

「……」

妖忌は黙ったまま、地面から浮き出ている根を見つめた

「……言うなれば『監視』、と言ったところでしような」

「監視？一体何の……」

隼斗の質問に対し、妖忌は中央の根を指して答えた

「此れは『西行妖の根』です」

「!？」

隼斗は一瞬身構えた

「……?？」

しかしその根からはあの禍々しい気配は感じられなかった。実際、アレが西行妖の根っ子だと聞いた今でも彼の目にはその辺に生えている根っ子と相違なく映っているのだ

「尤も、今は沈静化しております故、危険はありませんが」

「………どういう事だ？そもそも何で魔界にアレの根っ子がある？」

疑問が尽きない隼斗は眉をひそめながら尋ねた

「……西行妖は元々『魔界の植物』なのです」

「!？」

「本来森の中央に当たるはずのここが、根を中心に広範囲に渡って荒地となっていてるのは西行妖の影響によるものでしょう。事実、私はここ数十年に渡りこの場所を訪れていますが、草木が生えている瞬間を一度も目にしておりません」

「……仮にそうだととしても、何故それが西行妖のモノだとわかるんだ？」

「……………私はある日突然力を手にした。『本質を見極める力』です」

妖忌は一度自身の掌に視線を落とし続けた

「本来ならばこの力は長期の修行を積んだ者だけが身につけることのできる力。私はこの力を使い西行妖の新たな脅威を突き止めました」

「……………脅威？」

「人間界にある西行妖と此処にある根は元々一つの生命。どちらか片方を封印したとしても、もう一方が力を取り戻せば封印は不完全なものとなる。……………取るべき行動は一つだった」

「根っ子の方にも封印を施したってわけか。だがどうやって？」

根に深々と突き刺さっている刀の柄に触れながら、妖忌は答えた

「この刀は妖力や魔力を抑え込む力が宿った魂魄家に代々伝わる宝刀です。私が定期的に監視している限り此方の封印は心配ないでしょう」

「……………成る程な」

その言葉を聞いた隼斗は、とある疑問を投げ掛けた。西行妖や封印についてでは無い。

それは彼が妖忌の元を訪れた本来の目的でもあった

「……………白玉楼には戻らないのか？」

「……………そうですなあ」

急な質問に、妖忌は髭をなぞりながら回答を思案しているようだった

続けて隼斗は言う

「さっきの言い方だと常に監視してる訳じゃないんだろ？今何処に住んでんのかは知らねエけど、幽々子や妖夢はお前の事心配してんだ。差し支えねエなら俺だって手伝うし、戻ったって良いんじゃないか？」

あわよくば此処で妖忌に同意してもらいたかった。別に深い思い入れがある訳じゃ無い。同情している訳でも無い。

ただ過去に妖夢が、幽々子が彼の話をする時に見せる寂しげな表情が隼斗の脳裏に残っていたから

しかし妖忌は首を縦に振らなかった

「これは私の挑んだ戦い。他者を巻き込むわけにはいきませぬ。……少なくとも決するまでは戻るつもりも……。」

「……………そうか。なら仕方ねエな」

隼斗はそれ以上何も言わず、踵を返した。

当初の目的は達した。元々本人の意思を聞くために訪れたのだから

「柊殿」

不意に名前を呼ばれ立ち止まる隼斗。

振り返らず、頭だけを妖忌の方へ向けた

「…弟子は……、妖夢は元気にやっとりましますかな？」

今までの様に厳格な声ではなく、柔らかい声色だった

「気になるなら、偶には会いに行行ってやれよ」

隼斗は頭を戻し、再び歩き出す。

その表情に僅かな微笑を浮かべ、一言添えた後広場から姿を消した

「心配ない」

一人残された妖忌は、既に誰もいない空間に頭を下げた

「かたじけない」

## 113話 隼斗の魔界探索記・序章

紅魔館地下にある大図書館。

莫大な量の書物が保管されており、ある程度の知識や情報は此処を訪れれば手に入る

室内には窓が無いせいaka若干カビ臭く、健康に悪そうなものだが此処の管理者であるパチュリー・ノーレッジ（病弱）は気に止める様子はない

「えーと、魔界の本は……っ」と

迷路の様に連なる本棚の一角に、この場に似つかわしくない男が一人。

終 隼斗は目当ての本が見つからず、かれこれ小一時間程探し回っていた

「貴方さつきから何やってるの?」

ウロウロと館内を徘徊する隼斗へ、閲覧中の書物を卓上に置いたパチュリーが尋ねる

「いや、目当ての本が見つからなくてさ」

「何て本?」

「魔界関係」

「それなら回れ右して左手に見える棚の上から二列分がそうよ」

「あっさり!?!……もっと早く教えてくれよ!!」

「だったら何故すぐ聞かなかったの?」

「……………」

隼斗はストレートで飛んできた指摘に、ぐうの音も出ないまま素直

に回れ右をした後目的の棚へと向かった

「何だよマジで速攻見つかったじゃん。何だったんだ…？俺の一時間は……」

項垂れつつも本のタイトルを指でなぞりながら目的の本を探す。そしてあるタイトルが目にとまった

——『魔界の創造神』

「……」

徐に手に取りパラパラとページをめくる。

一見適当に流し読みしている様に見えて、常人離れた視力によってある程度の内容は読む事ができる隼斗は、目線を忙しなく動かし読み漁っていく

そして一通りの内容を読み終え、パタリと本を閉じ棚へ戻した

「……『魔界の全てを創造した神』、か」

そう呟き今度は次から次へと棚へ手を伸ばす。

気が付けば足元に大量の本を積み重ね、ひたすら本を読み漁る隼斗の姿を、遠目から怪訝な表情で見つめるメイド長

「……パチュリー様、彼…大学でも受験するんですか？」

「さあ？」

パチュリーは運ばれてきた紅茶を口に含みながら適当に流した

紅魔館の帰り道。

結局あれから図書館で小一時間過ごした隼斗は、知り合いの中で唯一魔界出身だというアリス・マーガトロイドの住む家へと向かった。

(……相変わらず小綺麗な家だなー。俺ん家とは大違い)

適当な感想を思い浮かべ、ドアのノッカーを数回叩く

(……?)

しかし応答は無く、再度同じ様にノックするも結果は同じだった

(……留守か?)

改めて家内の気配を探ってみるも、やはり誰もいない。

普段はあまり外出をしないアリスも、買い出しの際や自作した人形で人形劇を開く時などは人里に足を運ぶ事がある。

隼斗は勝手にそう結論付け踵を返した

(……出来れば魔界について聞きたかったが、仕方ねーな)

――

翌日、隼斗は博麗神社を訪れていた。

茶の間では霊夢が淹れた茶(極薄味)に加え、彼が持参した団子が並べられている



「って訳で、少しの間魔界に行ってくる」

「……いや、どういう訳で？って言うかそんな所に何しに行くのよ？」

「ちよいと野暮用がな。別に大した事じゃない」

「ふーん」

「……なんだよ？」

「別に？隼斗がそう言うなら特に問題は無いんでしょ」

お茶（極薄）を啜りながら、霊夢は特に気に留めていない様子で答えた

「俺不在の間何かあったら頼むぞ。一応紫にも頼んであるから緊急を要する時はアイツを頼れ」

「はいはい。旅行前のお母さんみたいになってるわよ」

「土産には濃いーお茶っ葉買ってきてやるよ」

隼斗はそう言って立ち上がり、ふと昔の事を思い出す

数年前。

先代の巫女である博麗 暁美が行方不明になったあの日……、当時幼かった霊夢は一人神社で泣いていた

――身内の突然の失踪

最後に立ち会ったのが自分であった為か……以降、霊夢は誰かを見送るという行為を極端に恐れるようになった。

成長するに連れて少しずつ改善されていったものの、それまでは留守番も碌に出来ないほどであり、先代に代わって世話をしていた隼斗や紫は頭を悩ませていた

「……霊夢」

「んー？」

隼斗は懐から一体の御守りを取り出し、霊夢へと投げ渡した

「何これ？」

「見ての通り、御守りだ。いざって時に役に立つかも知れねーぞ」

「は、はあ？」

ケラケラと笑いながら部屋を出て行く隼斗を、霊夢は怪訝に思いながらも見送った

114話 隼斗の魔界探索記 ①

隼斗は今年何度目かになる魔界の地へと降り立った。……と言っても普段から魔法の森で暮らしている為、この環境は慣れたものだしそろそろ魔法の一つでも使える様になってもいいんじゃないか……？と考えるようになった今日この頃

「……」

目を凝らし、その超人的な視力を持って地平線の彼方にあるであろう目標を探す

「……………」

ぐると360度見渡し、やがて隼斗は目を閉じた  
……視力では見つけれられない。ならば次に取るべき手段は霊力を拡散させての波紋探知

「ふっ……！」

隼斗の足元から広がっていく波は一挙に地平線まで達した。  
やがて引き潮の様に返って来た波の情報を読み取る

「……………見つけた」

隼斗は体の調子確かめる様にストレッチをした後、その方角へ向けて思い切り跳んだ  
轟ッッ!!風を切り、一步で数百メートル単位の距離を一気に駆け抜ける。

しかし彼が目指す目的地との距離は一向に縮まらない。

それだけ魔界という場所は、人間界と比較にならない程の広大な地が広がっていた

(考えてみりやあ、直線距離を全力でこれだけ長い時間走った事無かったな……。よし！)

バチチイツツ!!と隼斗の身体を稲妻が走り、その背から高濃度の霊力が吹き出す。

そして破れぬ様予め脱いでいた上着をアメフトボールの様に小脇に抱えた

「おっしやあああ!!」

掛け声と共に隼斗の姿が消失する。

瞬間の爆発的なエネルギーにより、急加速した隼斗の身体は音速の数十倍にまで達した

(……………見えた！)

隼斗は荒野を青白い閃光となって突き進む中、目標を目視出来る距離まで近付いている事に気が付く

(驚いたな……。予想以上に速度が出てたのか?)

遙か前方にはビル群の様な建造物が立ち並ぶ都市があった。

現在出ている速度ならば、物の数秒で到着する距離……………。

……ここで隼斗はある重大なミスを犯していた

「あつ……………」

今まで出した事のない自身の速度に浮かれ、『余裕を持って減速し、停止する』事を考えていなかった。

都市は既に目の前まで迫っている。

この勢いのまま突っ込めばその一角を吹き飛ばしてしまうだろう

「やっべツツ!!」

隼斗は衝突を回避する為、反射的に飛び越えようと前方へ跳んだ。

「フウ……、危ねえ危ねえ。もうちょいで激突するところだった……」

ギリギリ空中へ逃れた隼斗は後方を確認しながら安堵の息を漏らす。

そして十分過ぎる助走を付けての跳躍は、ほぼ数秒で都市を飛び越してしまった

（勢いつけ過ぎたか。取り敢えず着地して再度向かうk……ドゴオオオツツ!!）

それは目先の危険を回避した直後の一時の油断……。

再び前方へ視線を戻した隼斗の目に飛び込んできたのは『巨大な壁』。そのまま避ける間も無く激突し、壁を粉碎しながら内側へと転がり込んだ

「くっそツ……!、………何処だここ?」

瓦礫から這い出た隼斗は周囲を見渡した。

左右に続く長い廊下があり、天井には洒落た装飾の室内灯がその先まで照らしている。壁には幾つもの扉がありその数だけ部屋があるようだ

(……………どっかの屋敷か何かか?……………にしても……………)

隼斗は今一度風穴の空いた壁に視線を戻した。崩れた壁の向こうには緋色の空と先程飛び越えた街並み広がっている

(……………やっちゃまったな。よりによってお偉いさんが住んでそんな屋敷に突っ込んじゃまった……………。謝ったら許してくれっかな)

カツンツ……………

隼斗が壁の弁償費用その他諸々に頭を悩ませていると、廊下の先からブーツの様な乾いた足音が一つ鳴った

「ああ、何てことなの……………!」

続いて若い女の声。心なしかその声色は震えており、怒が込められているかの様だった

隼斗がその方向を向くと、廊下の先から赤いメイド服を着た金髪の女性が歩いて来ていた

(……………どう見てもこの屋敷の人だよな)

まだ謝罪の言葉をまとめ切れていなかった隼斗は、兎に角謝ろうと頭を下げた

「えーと、御宅の壁を壊してしまいました。誠に申し訳……………」

ヒュツツ!!!

頭を下げた彼の頭上を、風切り音と共に何かが通過した。

ハラハラツ……と落ちる自身の黒髪。

隼斗は恐る恐る顔を上げた

「チツ……外したわね。その首を落としてやろうと思ったのに……!!」

いつの間にか距離を詰めていたメイドは、振り抜いた剣を返しながらそう言った

115話 隼斗の魔界探索記 ②

メイドはその手に構えた西洋風の剣を再び隼斗へと振るった。華奢な見た目に反し、鋭い風切り音と共に、身を引いて回避した隼斗の鼻先を通過する

「ちよいタンマ……！一旦落ち着けて！」

「私は落ち着いてるわよ？落ち着いて貴方を八つ裂きにするの」

「いやだから……つとお！」

弁解しながら後退する隼斗に対し、メイドは容赦なく剣撃を繰り出していく。

その剣速は隼斗の目から見ても速く、素人の振るう剣術とは違い、確実に急所を狙ってきていた。

何とか話し合いの場を設けようと隼斗は後方へ大きく跳び、鬼道を放った

「縛道の八十一『断空』」

「！」

二人の間を遮る様に障壁が展開され、ここで漸くメイドの動きが止まる

「ふう……、取り敢えず話聞いてくれよ」

未だ剣を下げようとしなないメイドに、隼斗は今一度謝罪を試みようと話し掛けた

「……………」

しかしメイドは目の前の障壁を凝視した後、何を思ったのか再び駆



け出し突っ込んできた

「お、おい……危ねーって!!」

予想外の行動に慌てる隼斗に構わず、メイドは障壁を『すり抜けるように』通過する

「!?」

「無駄な抵抗はやめて大人しく斬られなさい」

首元目掛けて振るわれる刃を身を屈めて躲す隼斗だが、それを追撃する様にメイドは何もない空間から新たな剣を抜き放った

「……っ」

下から上へ跳ね上げるように隼斗の腕を斬り付ける。

腕から血が滴るが、動脈を庇う様に即座に腕を捻った為かそれ程派手な出血はしていない

(断空をすり抜けやがった……!?それに戦闘能力も並みじゃねエ。………本当にメイドかよ)

刃に付着した血を一振りで払い、メイドは鋒を隼斗へと向けた

「貴方は在ろう事か城壁を破壊し城内へと侵入した。それだけでも万死に値する事だけれど、まずはその目的を吐いてもらおうわ」

「目的つつつても……、此処へ突っ込んだのは事故みてエなもんだしな……。いや、10:0で俺が悪いんだけども」

「問答無用よ」

「どっちなんだよ」

ガッツ!!と、互いの武器が重なる。

隼斗は霊力で防護した腕を体の外へ払い、鏢迫り合う剣先をズラしながらもう一太刀を屈んで躲す

二剣は両方共空振った。この至近距離ならば返す刃より直接縛道を打ち込む方が早いと判断した隼斗は、メイドの額へ手を伸す

(多少罪悪感はあるが、これで眠ってもらおうぜ…!)

しかしメイドは薄く笑った

「残念」

スウ……と隼斗の指先はメイドに触れることなくすり抜ける

「何っ!？」

目を見開く隼斗の首元目掛け、両側から剣が振るわれた

「くっ…!」

隼斗は全力で回避行動に移った。

後方ではなく敢えて前に。床を踏み締め、半ば飛び込む形でメイドの体を擦り抜ける

「よく躲したわね。確実に殺ったと思ったんだけど」

メイドは振り返りながら冷たい瞳を向けてそう言った

「さっきの断空といい、物体を透過する能力か……?」

「透過?」

メイドは再び構え駆け出す。

隼斗は先程と同様、腕に霊力を纏わせ防御態勢をとった

「……それは少しニュアンスが違うわね」

剣は振り上げられ、袈裟懸けに向かって振り下ろされた。

隼斗の目にはしっかりとメイドの動きも剣の軌道も見えていた。例えもう一方が振るわれても反応できる

そう確信持つて剣の軌道上に腕を置いた

スウ……

「!?」

刃は一切軌道を変える事なく、盾として構えていた腕を擦り抜けた

「私は『触れる物を選ぶ』事が出来るの。防御は無意味よ」

ザシユウウツツ!!と、腕を透過したばかりの刃が身体を斬りつけた。

血飛沫が舞い、鋭い痛みが走るが、構ってられない。既にもう一方の剣が迫っている

隼斗は足裏に力を込め瞬時に間合いを切った。兎に角メイドとの距離を離し、思考するだけの時間を確保したかった

(……こりゃあ、思ったたより強敵だな!)

傷口から流れる血は、衣服に赤い染みを広げ、床に血だまりをつくる。

しかしギリギリで身を引いた為か見た目ほど傷は深くはなかった

(傷は大したことねエ。斬られたのも俺の油断。……なら問題視すべきは、アイツ自身のスペックか)

若干劣りながらも隼斗の動きについてくる身体能力に加え、意のままに防御や障壁を通過し、攻撃を仕掛けることができる能力。

それだけでも十分過ぎる程の脅威であるのにも関わらず、此方の攻撃まで通じない

珍しく隼斗の額から一筋の汗が流れた

「……観念しなさい。それ以上床を汚す前に」

「じゃあその物騒なモンしまってくださいや」

「貴方の息の根を止めたらね」

メイドはそう言って高速で距離を詰めた

触れられないという事は、当然受け止めるどころか、受け流す行為さえも封じられたと言うこと。

隼斗は次から次へと振るわれる斬撃を躲していく中で、打開策を思案する

「縛道の三十七 『吊星』」

「！」

隼斗は目の前に視界を遮る為の障害物を配置し、メイドが一瞬動きを止めた隙を突いて背後をとった

「『六杖光牢』」

メイドの胴体目掛けて突き刺さる六つの光の帯。成功していれば

対象の動きを封じる事が出来るが…………

「…………あら、後ろにいたの」

「ちっ…!」

ヒュツツ!!、と振り向きざまに一閃。

六杖光牢は何もない空間で不発に終わった

「淑女を背後から狙うなんて……、デリカシーに欠けるわよ」

「……生憎と剣振り回して襲って来る奴を淑女とは呼ばん。サイボーグ忍者と呼ぶ」

「…………?」

メイドはどこか余裕の感じられる様子の隼斗を怪訝な表情で見つめ後、再び剣を構えて言った

「これが最後の忠告よ。大人しく斬られるなら楽に殺してあげる」

「いや忠告になってねエだろ。どの道斬られんならお断りだ」

「…………あらそう」

メイドは自身の受ける重力量や空気抵抗等、運動の妨げになる物や能力により除外すると、先程とは比べものにならない速度で隼斗へと詰め寄った

「!？」

「さようなら」

ズツ…………と、抵抗する間も無く刃が隼斗の身体を貫く。

肉を裂き、鈍い感触を感じながら背部より血に染まった鋒が顔を出す

「がっ…………ふッッ…………ゲホッ！」

隼斗は口から血反吐を吐いた

「一応すぐに死ぬる様心臟を狙ってあげたのに……。無闇に狙いをズラすからそうやって苦しむ事になるのよ」

グリグリと突き立てられた剣を捻り周囲に損傷を与えていく

「…………つぐ…あ…あ…ッッ…………!?!」

激痛がはしり更に多くの血を吐き出す。

止めようと剣に手を伸ばしても掴むことが出来ずにすり抜けてしまふ

『「一思いに殺してくれ」と懇願なさい。そうしたらすぐにでも首を刎ねてあげるわ」

メイドは冷たい声色でもう片方の剣を首元に宛てがいそう言った

「……………」

肺を貫かれ、呼吸すらままならない中、隼斗はゆっくりと口を開いた

「……………やっと捕まえたぜ」

「!?!」

ガクンツ……とメイドは体勢を崩し床に膝をついた。身体の力が抜け、急激に意識が遠のき始める

「な……なに……を……ツツ!?」

「ゴホツ……! あー、痛てエな……」

隼斗は一度咳払いをする様に喀血した後、倒れ伏すメイドを見下ろしながら言った

「心配ねエよ、術で麻酔掛けただけだ。直に意識が混濁して一時的な昏睡状態になるが、まあ許せ」

「……!」

メイドは何とか視線を落とすと、自身の身体が白い光に包まれていることに気が付いた

「お前言ったよな? 触れる物を選べるって。『選べる』って事は自動で発動してるんじゃないかと、飽くまでお前の意思でON・OFFを操作してるって事だ。

つまり、少なからず攻撃する際にはその部位に触れなきやいけねエよな?」

「まさか……! 傷口から剣を介して……術を……ツツ」

メイドは既に焦点の定まっていない瞳で隼斗を睨んだ後、消え入る様に意識を手放した

「……さて、此処の家主様に詫び入れに行かなきゃな」

116話 隼斗の魔界探索記 ③

隼斗はだだっ広い城内を、勘を頼りに進んでいた。

ついさっきまで風穴の空いていた胸の傷は『回道』により多少は回復させたものの、完治には至らず歩いたたびにズキズキと痛んだ

「……痛てて。まったくこんな事なら態と受けるんじゃないかなあ」

階段を見つけては上がったり下がったり。

新たな通路を見つけては行ったり来たりと、ひたすら歩き回っている隼斗だったが、ここに来て先のメイド以外誰一人として出くわしていない事に不信感を抱いていた

（おいおい、幾ら何でもこんなデカイ屋敷に召使いがさっきのメイドだけって事はねーだろ……。人の気配もしねーしどうなってんだ？）

そんな中、隼斗はとある扉の前で立ち止まる。別にラスボスが中で控えていそうな禍々しく厳つい扉では無く、飽くまで普通の扉

「――『神綺の部屋』」

扉からぶら下がる札にはそう書かれていた

漸く誰かが居そうな部屋を発見した隼斗は、安堵の息を漏らしつつ部屋の扉をノックした

「!?」

ゾワツ……!!と、扉に触れた瞬間伝わる悪寒。隼斗は反射的に飛び退いた



(何だこの魔力ツツ！………何でこの距離まで気がつかなかった!?)

廊下の壁を背にしながら暫しの間黙ったまま扉を凝視する。しかし扉から離れた途端再び気配は消えていた

「……」

その沈黙を破ったのは柔らかい声だった

「どうぞぐ、開いてるわよお」

———女の声。

発生源は扉の向こう側

隼斗は部屋の主から入室を許可されたわけだが、先程感じ取った魔力を思うとあまり気が進まなかった

(今は気配も何も感じねエ……。言うまでもなく不自然だな。此処の部屋自体に気配を外部へ漏らさない細工がしてあんなのか、はたまた態とあの瞬間に威圧してきたかは定かじゃねエが……。このまま突っ立っててもラチが明かねエ事だけは確かだ)

再び隼斗は扉の前に立つとドアノブに手を掛けた

「……ッ」

その瞬間体全体にヒシヒシと伝わる莫大な力。それは確かにこの部屋の『ナニか』から発せられている。

隼斗は意を決し、一気にドアノブを捻ると中へ足を踏み入れた

「いらっしやい。ようこそ人間さん」

出迎えたのはピョコンツと、たくましく飛び出たサイドテールが特徴的な白銀色の髪的女性だった

「……………ん？」

想像していたモノと180度違っていた為か隼斗は少しの間思考を停止させた。

現在進行形で伝わってくる力は間違いなく目の前の者からなのだが、どう見ても雰囲気と合っていない

・  
・

隼斗はイマイチ状況が飲み込めない中、促されるまま席に着いた。目の前で優雅に紅茶の入ったカップを口へと運ぶ神綺を警戒しつつも話を切り出す

「…………俺の存在には気付いてたのか？」

「ええ、貴方がこの地に降り立った瞬間からね。でもまさか、一直線にこの城へ突っ込んでくるとは思わなかったけど」

「うっ…………、この度は誠に（ry…………」

「うふふっ、それももう三度目じゃない？一度目の時に言った通り大した被害じゃ無いんだし気にしないでいいわよ」

「いや、でも此処のメイドはマジで殺しにかかって来たぜ…………」

「夢子ちゃんね。あの子って結構真面目過ぎる所があるから貴方を襲撃者とも思ったんじゃないかしら。…………普段は良い子なのよ？」

「いや寧ろそれが本来の反応じゃないか……………つっても謝罪と弁明するだけの余地くらい欲しかったけど。…………あっ、そっぴや眠らせたま

ま放置してきちまった！」

ハツと思い出したように扉の方へ向かおうと立ち上がった隼斗の喉元へ鋭い剣先が突き付けられる

「貴様、神綺様との会話中に席を立つとは何事だ？」

「おおオ…ツ!?おまつ、何で……」

「夢子ちゃん、その辺にしてあげなさい」

危うく鋒を押し込みかけた夢子を神綺が宥め、隼斗はそんな彼女等の様子を怪訝な表情で見つめる

「勝手に入ってきた俺が言うのもなんだけど、何モンだよアンタら」

すると夢子は一度冷たい視線を送った後答えた

「……神綺様は『魔界の全てを創造られた』御方だ」

「……！」

その瞬間、隼斗の脳裏に大図書館で見た本のタイトルが浮かび上がった

——『魔界の創造神』

魔界と言う世界から始まり、その世界に存在する全てを創り上げた神。

隼斗は目を見開き神綺を見た。

本当に目の前の女がそうであるならば、あの莫大な魔力も、自身の存在を初めから認知していたと言う事実も領ける……と

「夢子ちゃんは優秀よー。私が創り上げた魔界人の中ではトップクラ

スの強さを持つてるしね ♪」

「……身に余るお言葉です」

「…だろうな。この短時間で俺の術から復帰してるわけだし」

「『あの程度』で私を倒せたと思ったか？浅はかな」

「…………結構辛辣にくるね」

隼斗は一度咳払いすると、表情を真剣なものに一変させて神綺に向き直った

「……俺が今回魔界へ来た目的は一つ。えー、神綺さん？アンタに会うためだ」

「あらー神綺さんなんて照れるわねえ。一層の事『神綺ちゃん』でも構わないわよ♪」

「し、神綺様……流石にそれは……」

「ウオツホン……！あー、つまり俺はアンタn……」

「ふふつ、偶にはそんな感じでフランクに呼ばれてみたいじゃない」

「しかしですね……、それでは神綺様の尊厳が損なわれるといえますか……」

「ウオツホン……！ゴオツホンツ!!実は聞きたい事g……」

「そんな堅苦しい事言わないの。夢子ちゃんだつてもつと砕けた話し方でもいいのよ?」

「とんでもない！主君に対してそんな軽率な……！」

「ウオツホン……！ゴオツホンツ!!ゲエホツツ!!ゴホツ！ゴホツ!!…ンツ!!」

「もう、夢子ちゃんつたら相変わらz…」

「テメエら人の話聞けやコラアアアア!!!」

117話 隼斗の魔界探索記 ④

「……話戻すぞ?」

「はいはい、悪かったわよ。ちゃんと聞くからそんな眉間に皺寄せないでっつてば」

「ったく……!」

隼斗は自身の眉間を指でなぞりながら続けた

「本題に入る前に一つ確認だ。疑ってるわけじゃねーけど、アンタがこの世界の創造神って事でいいんだな?」

「ええ。他には覚えが無いわ」

「魔界にある全てを創ったつてのも?」

「本当よ」

神綺の口から確認をとり、隼斗は一拍置いて切り出した

「……『他者の生命力を奪う桜の木』について聞きたい」

「……」

ほんの僅か一瞬、神綺の表情が固まった。今では元の穏やかな表情に戻ったが、徐々に纏う空気が変わっていくのがわかる

「……その桜の木について、何処まで知っているのかしら?」

『何処まで』つてのが何を指してんのか知らねエが、凡その事は知ってるつもりだ。

魔界と人間界に分離した状態で存在し、人間界では『西行妖』って呼ばれてる。生者の生命力を糧に成長する妖怪桜で、今は封印によって何方も力を抑えられてる状態だ」

「……それだけ?」

「…………なに？」

神綺は淡々と続ける

「それだけじゃとても『凡そ』とは言えないわね」

「……………どういう事だ」

「その前に、貴方が何故『アレ』について聞きたいのか教えてもらおうかしら？」

その言葉を皮切りに今迄『唯の威圧だった』覇気に明確な殺気が混ぜられた

――返答次第では殺す

言葉で言わずとも神綺から発する空気がそう物語っていた。

最早彼女の穏やかそうな表情や仕草と言った視覚的情報などは宛にならない。

そう言った類のモノを感知する能力に優れている隼斗は、額から一筋の汗を流しながら唯一言述べた

「…………『力』を、取り戻したい」

「…………」

神綺は何も言わない。

……………かと言って行動を起こすわけでもなく、黙って隼斗を見つめている

『話を続けろ』

そう受け取った隼斗は過去に起きた西行妖に纏わる事情を話した

……犠牲となった人々

……友人の死

……犠牲の元に成し遂げた封印

……失った力

……龍神の出現

……魔界で見つけたもう一方の西行妖

「……………こうして振り返ってみると確かにアンタの言う通りだ。俺はあの妖怪桜について知らないことが多過ぎるし、人間界にある封印だつて一時的な停滞が続いてるだけで現状の解決にしかなくてない。もしそう遠くない未来、何かのキツカケでアレが復活しちまったら今の俺じゃ止められねえんだ。」

だからアンタに…………、『魔界に存在する全て』を創造したって言う神に会いに来た」

「…………あの妖怪桜を創つたのは私だと?」

「少なくとも、アレが魔界産だつてんならそう言う事になるだろ?」

「……………」

両者の暫しの沈黙が続き、やがてフツと部屋を包んでいた圧力が消え失せた

「…………いいわ。話しましょう」

一度瞳を閉じ、ゆっくりと開眼した神綺は話し始める

「まず初めに言っておくと、あの桜は私が創つたものではないわ」

「だが現に根っこが魔界に…………」

「そう。確かに魔界の土より誕生したのは事実。言うなれば魔界の地はアレの『育ての親』つてところかしらね」

「……？」

「アレは遠い昔、外部の者が魔界に持ち込んだ厄災なの」

神綺の表情から微笑は消え、心なしか険しい顔つきになった

「さつき貴方も言っていたように大勢の犠牲が出たわ。当時のアレの力は『死に誘う』なんて言う生易しいものじゃなかったわ。

……『無差別に自身を認識した者の命を奪う』事であつという間に成長していった」

「まさか、それで西行妖を人間界に……！」

一瞬で頭に血が上りかけた隼斗を、神綺は手を前に出し制止する

「落ち着いて最後まで聞いて頂戴。

……確かに被害を抑えるため、結果としてあの桜を分担する形で片割れを人間界に送ったわ。そちら側の創造神……、『龍神』と協力した上でね」

「!？」

「それ程までにあの桜の持つ死の力は強大だった。放っておけば被害は魔界だけに留まらなかったでしょう。……だからこそ龍神も手を貸してくれたんだと思うわ」

そして神綺は先程隼斗が言っていた目的について口にした

「さつき力を取り戻したいって言って言ってたわね。媒体となってるお友達に影響が出ないよう、封印には手を出さずに」

「……ああ。だがいくら考えてもそんな方法思いつかねえんだ」

しかし神綺はあっさりと言い放った

「単純な事よ。『魔界にある本体』を叩けばいい」



「…本体……だと？」

「そもそも人間界にある西行妖とやらは唯の桜の木にアレの『気』が取り付いて変化を遂げた妖怪桜よ。言い方を変えれば分身のようなもので、その役目は吸収したエネルギーを魔界にある本体へ供給する事なの」

「……………供給が済んだ後は、どうなる？」

答えはわかりきっていた。

だが次々と明らかになる事実に動揺する自身を落ち着かせるため、少しでも口に出して確認したかった

「……『あの化け物が本当の意味で復活を遂げるわ』」

118話 隼斗の魔界探索記 ⑤

紅茶のお代わりを要求した神綺の為、新しく淹れたての紅茶を手に部屋を訪れた夢子は一礼した後周囲を見渡した

「……神綺様、あの男はどこに？」

「行ったわ。……一応、止めたんだけど、焚きつけたのは私だしね」

その場に隼斗の姿は無い。

主人が客として接していた為、仕方なく用意したもう一つのカップを夢子は呆れ顔で下げた

「あの男に例の桜をどうこう出来るようには思えません……」

「……ええっ。『殺される』わ」

「！」

「……」

神綺は窓の外を見つめ、静かに紅茶を口へと運んだ

――

隼斗は荒野を駆けていた。

前回とは違い、無駄な消耗を防ぐため瞬間のエネルギーを脚のみに留め、ひたすら走る

既に都市とは目視できない距離まで離れており、周りに見えるのは岩場や少しばかりの植生だけ

(……あと少しか)

「隼斗はある一方を凝視する

」

…少し前

「……『本体を叩く』ってのはどう言う意味だ？」

「そのままの意味よ。アレと戦って討つ事が出来れば貴方の力は元に戻るでしょう」

「いや、だけど……！」

「封印の事を気にしてるの？ だったら問題ないわよ。さっき言った様に人間界にある化け物桜は唯の分身。それに掛けた封印なんて精々表面上くらいにしか効果を発揮していない。……つまりコツチの本体とのリンクは切れてないってこと」

「！」

「更に言うなら……貴方、一時的とはいえ過去に何度か特殊な方法で力を取り戻していたって言ってたわね？」

「……ああ。霊力と引き換えに俺に掛けられた封印を抑え込む形だな」

「やってみなさい。今ここで」

「あ？……だがよ、時間切れになった後は暫くの間霊力が使えなくなっちまうんだ。それに意識だって……」

「いいから」

まるでどうなるかわかっているかの様に神綺は淡々と告げた

「……………マジかよ。ったく……！」

隼斗は溜息混じりに渋々立ち上がると、ゆっくり瞳を閉じた

「……………」  
あれ？」

思わずそんな声が出た。

現状、胸の痛み以外身体に不調は無い。傷は塞がっているし靈力だつて十分残っている

しかし身体に力は戻らない。

どれだけ試しても一向に変化が表れない

「…………どうなってんだ？」

「やっぱり」

隼斗は一人納得する神綺に若干の苛立ちを覚えながら尋ねた

「自分だけ納得してねエで教えてくれ。知ってんだろ？」

神綺は言った

「貴方が力を取り戻せていたのは『内に潜んでいた西行妖の影響だった』のね」

「はあ？何言つて…………」

「まだわからない？貴方が封印を抑え込んでいたんじゃないわ。『西行妖が注がれた靈力を喰い終わるまで』の間、一時的に『奪われた力』が戻っていただけのことよ」

「ツツ!？」

「そもそも接触していたからと言って対象外の者まで封印の影響を受けると思う？貴方は力を封印されたんじゃない。西行妖に奪い取られたのよ」

隼斗は完全に言葉を失った。

自身の鼓動が煩いくらいに耳に響く

「貴方の中にいたヤツの一部も又、本体とのパイプ役。あわよくば力の全てを奪うつもりだったのかも知れないけど、龍神の介入によってそれは叶わず消滅。その瞬間から晴れて奪われた力は本体へと送られたってところね」

「……………だから、本体から奪い返せば力は戻る……………か」

「言うは易く、行うは難し。……………いいえ、限りなく不可能に近いわね」

事実だった。幼子でもわかる程の紛れも無い事実……………。

それをわかった上で隼斗は言った

「……………一ついいか？本体をぶつ潰した後幽々k…封印の媒体になった奴はどうなる？」

「……………本体が死ねば分身とのリンクも切れる。西行妖は唯の桜の木へと戻るでしょうけど、封印自体は桜を対象としているから問題ないはずよ」

「それを聞いて安心した」

隼斗は踵を返し部屋の出口へ向き直った

「ここまで話した私が言うのも何だけど、戦う気ならやめておきなさい」

「……………」

黙ったまま歩みを進める

「力の大半を奪った相手に本気で勝てると思ってるの？逆に殺されるだけよ」

扉を開け、隼斗は一度神綺の方へ振り返り言った

「ありがとな。それと壁に穴開けて悪かった」

「……………」

・  
・

神綺は窓の外に視線を向けたまま、ゆつくりとカップをテーブルへ置き、呟いた

「馬鹿ねえ……。貴方も私も」

（（

都心から大分離れた頃、段々と魔獣等の気配が濃くなってきた。こちら一帯は人間界で言う所のサバンナやジャングルと言った野生の獣が生息する場所に当たる様で、魔界人の様に安定した気配は一つも無い

以前とは違い少々大胆に進行している為か、隼斗の気配を嗅ぎつけた魔獣等が後を追って来ている

「！」

しかしそれも束の間。

突然後方の魔獣達は追跡を止め、蜘蛛の子を散らす様に去っていった。

それを合図に隼斗は一層足裏に力を込め、一気に前方へ跳ぶ。

生い茂る木々の切れ間を抜け、パツと景色が開けた場所へと変わった

「アレが……本体……」

――草の根一つないその場所の中心に存在する『悪夢の根』。  
隼斗は拳を握りしめ、ゆっくりと近づいて行く

119話 隼斗の魔界探索記 ⑥

半径僅か数百メートルに渡って、『生命』という存在が消滅した土地。

その中央には不気味に根だけを残した姿で元凶が大地より顔を出していた

その根の中心に深々と突き立てられた刀は封印の役目を果たし、長年『死の侵食』を抑え込んでいる

(……妖忌はいねエか。丁度いい)

隼斗は根の前まで来ると、突き立てられた刀の柄に手を伸ばした。そしてその刀が展開している封印術式を読み取りながら干渉を行う

――封印を解くためではない

自身を『因縁の元へ送るため』、柄頭に触れながら力を流し込んだ

グンツツツ!!

その瞬間身体全体を強い力で引き寄せられる様な感覚に襲われる。徐々に身体から力が抜けていき、刀を支えにしなければ立ってられない

「……ッ！」

そして視界も暗転を始め、ゆっくりと意識を手放した



――  
――  
――

真っ白な世界。

その場所を一言で表すならば、誰もがそう答えるであろうだっ広い空間が広がっている

(……何もないな)

隼斗は静かに歩き出した。

周囲には障害物どころか、足先を引つ掛けるような出っ張りや、窪みすら無い。

空気の流れも無ければ、気温の変化も感じられない。  
遠くに目を凝らしても、地平線すら存在していない様に見える

しかし隼斗は此処が何処なのか理解している。自身が望んで訪れた場所だ

「……いつ迄隠れてやがんだ」

隼斗は立ち止まり、そう呟いた

ピチャツツ……

刹那、水面に雫が落ちたように、真っ白な空間全体へ波紋が広がった

空間が不可思議に揺れ、やがて波が治まると、天と地が水鏡の様に変化し、隼斗の姿を映し出した

「……漸くテメエの面拜めると思ったら……」

ズズズツツ……、と水面から浮き出る様に一人の男が現れ、それを見た隼斗は溜息混じりにこう吐き捨てた

「まさか『自分』と対面する事になるとはな」

そこには髪色や身に着けている衣の色こそ異なるものの、確かに『柊 隼斗』が立っていた

《此処へ何しに来やがった?》

白髪の《柊 隼斗》は、エコーの掛かった声でそう尋ねる

「驚いたな。喋れるのかお前」

《……難聴か? 質問の答えになってねエが》

「成る程、出来はそこまで良くねエってワケだ。口の悪リイ野郎だぜ」  
《お前が言うかよ》

——直後だった

隼斗の背部から高濃度の霊力が吹き出し、その推進力のまま《隼斗》へ拳が叩き込まれた

轟ツツツ!!と凄まじい衝撃波が生じる

「テメエをぶっ飛ばしに来たぜ……!」

《そうか。……まあ知ってたけどな》

隼斗の一撃を片手で容易く受け止めた《隼斗》は、拳を掴んだまま

掌に妖力を集約させる

《『蒼火墜』》

「！」

隼斗は咄嗟に腕を蹴り上げ離脱する。

狙いが上空へ逸れた爆炎は通常の数倍の威力で炸裂した

《何だよ、片腕吹き飛ばしてやろうと思ったのによ》

「野郎ツ……！、人の技まで真似やがって」

そう言つて一足前に出し、同時に瞬間の推進力を合わせながら高速で《隼斗》の背後をとつた

ただ回り込んだだけではない。

一度正面で『赤火砲』を放ち、挟み撃ちにする形で更に破道を錬つた

「破道の八十八『飛竜撃賊震天雷砲』」

術は互いに衝突し、威力の高い後者の破道はそのまま前方の彼方へ消えていった

《……結局よオ、互いに使える手は同じだからある程度はわかっちゃうんだよな》

声は後方から。

振り返れば宙に浮いたままポケットに手を突っ込み気だるそうにする《隼斗》の姿があつた。

その行為に苛立ちを覚えながら、隼斗は向き直る

「こちとら長い年月を掛けて修得した技術だ。テメエの猿真似と一緒にすんじゃないよ」

《いや、だからよオ……》

指先が隼斗へ向けられる

《その年月とやらも同じ様に経験してきたって》

隼斗の周囲から六つの光の帯が迫る

「チツ……！」

……無詠唱。しかし精度は完全詠唱と変わらぬ『六杖光牢』が打ち出され、隼斗はギリギリのところまで上へ逃れた

そして隼斗はハツとする。

これが自身を上方向へ誘導する為のフェイクだと言う事はわかっていた。

だから腕に瞬間を纏わせ、迎撃態勢を整えていたのだ

視界の先にはドス黒い瞬間を纏った《隼斗》が、踵を振り上げていた

《同じ技術を持った者同士が殺り合った場合、勝敗を決するのは単純に『力の差』だろ？》

ズドオオンツツ!!と、踵が振り下ろされた。両腕を構えガードしたものの、その重い一撃にメキメキツと音を立てる。

隼斗は空中で踏ん張る間も無く地面に叩きつけられた

「つつ……!!」

受身はしたが、一時呼吸が止まるほどの衝撃が身体全体を襲う。ガードした腕は痺れ、鈍い痛みが走っていた

蹴り落とした勢いそのまま空中で一回転した《隼斗》は、膝をつく隼斗の目の前に降り立った

《テメエに勝ち目は無エよ。柊 隼斗》

容赦なく振るわれる。

拳が。蹴りが。

どれも自信が扱う戦闘技術の筈なのに、相手の攻撃を受け切る事が出来ない

何が繰り出されるかはわかっているのに、力で押し負けてしまう

そして防戦一方で後退る隼斗の土手っ腹に隙をついた拳が突き刺さった

「ぐっ……、あっ!？」

隼斗の身体はくの字に折れ、吐血しながら吹き飛ばされた。

しかしそれでも《隼斗》は距離を詰め、次の攻撃を仕掛けようと迫る

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!！」

激痛に悶えている時間は無い。

隼斗は吼え、迎え撃つため地を蹴った

背に纏う瞬間の出力を最大まで跳ね上げ、僅か百メートルにも満たない距離を、音速の数十倍の速度で突っ込んだ

《!》

その勢いのまま、すれ違いざまに顔面へ拳を打ち出した

ズジジジジジツツツ!!と地面との摩擦で速度を殺しながら、スケートの様に身体を回転させ停止する。異空間であるためか地面に焼け焦げた痕は無いが、通過地点には白煙が上がっていた

《……今のが全力か?》

《隼斗》は頬から流れる一筋の血を親指で拭いながらも片方の手に黒い瞬間を纏わせてそう言った

フツ……

「!?」

蝋燭に灯る火が消える様に《隼斗》の姿が消失し、一瞬で目の前に現れた

《弱エな。お前》

——振り上げられた手刀は、殆ど反射的に出された隼斗の左腕を斬り落とした

鮮血が迸り、隼斗は傷口を押さえながら力無く膝をつく

《次、首いつとくか?》

《隼斗》は手刀を水平に構え、首筋へ狙いを定めながら冷たい声色でそう尋ねた

「……、……。」

《あ？》

「…………詰めが…甘エよ」

斬り落とされ、宙を舞う腕が赤黒く焼き焦げ始める

《まさか……！》

この戦いで始めて《隼斗》の表情が強張った

「破道の九十六

————『一刀火葬』」

左腕を媒体に放たれたその破道は『刀身のように天高く聳える巨大な業火』を生み出し、《隼斗》諸共広範囲を包み込んだ

120話 隼斗の魔界探索記 ⑦

天高く燃え上がる紅蓮の刀身は、周囲に凄まじい熱気を撒き散らしながら徐々に四散していき、再び元の何もない空間へと戻った

天も地も水鏡の様な世界で隼斗は膝をつき、切断された左腕から流れ出る鮮血が映し出される光景を視線で流しながら、霊力で創り出した糸を上腕に巻き付けた

「……ツツ」

止血はしても痛覚は誤魔化せない。

息が詰まる様な激痛が続く中、なんとか治癒術を施し傷の断面を塞いだ

——そして見つめる一点。隼斗は深く息を吸い込むと、一気に立ち上がった

「少しは効いたかよクソ野郎」

隼斗は笑い、そう悪態づいた

《……『犠牲破道』か。確かにそれは読めなかったぜ》

視線の先で宙に浮く《隼斗》の右袖は焼け焦げ、右腕からは一筋の血が流れていた

「お前にも血が通ってるみてエで安心したぜ」

傷を与えることができた。

力の差は絶望的じゃない。ほんの僅かだとしても勝機はある

隼斗は今一度構えた。片腕を失ったことで状況は更に劣勢になっ



てしまったが、その事実が彼に再び活力を戻した

《……ああ、もしかして勝てる気でいやがんだのか?》

そんな言葉が発せられた直後、既に視界一面を覆う程の破道の波が押し寄せていた

「くっ……!」

瞬間を纏い、即座にその場を離脱するため側方へ跳んだ。

僅かに擦りながらも範囲外へ逃れ、体勢を立て直し《隼斗》を見る

「……いない

《さっきまで本気だと思ってたのか?》

声は後方から。

姿を確認している余裕はない。隼斗はその気配を頼りに背部から瞬間を噴射する形で打ち出した

途端に正面から迫る拳……

「ツツ!!」

咄嗟に頭を横へ振り紙一重で躲す。同時に拳圧により生じたソニックブームの様な衝撃波によって聴覚に異常をきたした

《だとしたら相当ハッピーな野郎だぜお前はアア!!》

最早視覚的察知も、気配による探知も間に合わない。容赦なく突き

刺さる《隼斗》の爪先が、隼斗の身体を上空へとカチ上げた

「ぶっ……ゼエ……ヒュー……」

体内の空気が押し出され、同時に血を吐き出した。やがて勢いが止まると重力に従って落ちていく身体。

眼下では《隼斗》が掌を向けていた

《おら、避けねエと死ぬぜ？》

ドドドドドドドドドドドドドドドドツツツ!!!

次々と打ち出される光弾は、狙らいを定めたというよりも乱射に近かった。

それは相手に『躲す』といった回避行動をさせないため、自ずと受けて凌ぐしかなかった

『断…空………!』

隼斗には詠唱は疎か術番号すら口にする余裕がなかった。

そんな状態で障壁の反対側へ跳んだのは殆ど反射の様なものだろう。

光弾は一瞬で断空を砕き、連鎖する様に炸裂していった。その様子を退屈そうに眺める《隼斗》は、呆れ顔で呟く

《あー、もう駄目だなありや》

まるで壊れた玩具を見つめるように溜息を吐いた。視線の先では全身ズタバコとなった隼斗が、息も絶え絶えに立ち上がろうとしている

《……》

《隼斗》は無言で歩み寄り、その脇腹を蹴り飛ばした

「がふっ…!?…あ…」

隼斗の身体はサッカーボールの様に何度も転がり力無く停止する

《どうだ？淡い希望は失せたか？》

両手を広げ、嘲笑うような笑みを浮かべながら《隼斗》は距離を詰めていく

片腕を支えにしながら、ガクガクと震える身体を無理やり起こす隼斗。

先程まで背に纏っていた高濃度の霊力はいつの間にか消失しており、最早戦える状態にない事は火を見るよりも明らかだった

「……」

それでも立ち、構えをとった。

亡くした左腕側を前に、右拳を顎元に。若干姿勢を落とした至って基本の武道の構え

《産まれたての仔鹿ちゃんよオ。そんな霊力も使い果たしたズタボロの身体で何生意気に構えてやがる？》

その行動が癪に障ったのか《隼斗》は拳を引いた。なんの小細工も無いただ握りこんだだけの拳。だが目の前の男は霊力で防護する事すらできない瀕死の状態。そんな男の頭を首から千切り飛ばすには十分だった

《終いだ。次はあるかもわからねエ地平線まで飛ばしてやるよ》

興味をなくした声色でそう言うてから、なんの躊躇もなく振るわれた

迫る拳

……この時隼斗に意識は無かった

だが、

《……あ？》

——その一撃は止められた。

ゴボゴボと音を立て、『再生した左腕』によって

《……んだよ、おい》

一瞬理解が追いつかず、《隼斗》の思考が停止する

そして拳を打ちっぱなしの姿勢のまま硬直していた事に気付いた時には、隼斗の右拳が顔面を捉えていた

そのまま足裏が地を離れ、ノーバウンドで数百メートル吹き飛ばされた

《チツ……！》

唇から流れる血を拭い、速攻で体勢を戻した《隼斗》は、前方を睨みつけ地を蹴った。

未だ自身を殴り飛ばした男は同じ場所で突っ立ったまま構えすら

とっついていない

《……野郎、いつの間に再生させた……？そもそも俺を殴り飛ばすだけの力がどこに……》

その背に高濃度の妖力を噴出させ、急加速しながら、すれ違いざまに隼斗の首を斬り落とすため手刀を振るった

「……」

ガシツ、と飛んできたボールをキャッチする様な動作で、隼斗はいとも容易くその手を掴み取った。

同時に速度まで殺された《隼斗》は、腕を引っ張られる形で体勢を崩す

《テメエ……、つつ?!》

掴まれた腕に視線を移した《隼斗》は思わず目を見開いた

自身を捕まえているのは間違いなく隼斗の左腕。しかしその腕は『人間のモノではなかった』

獣の様に発達した爪。腕の表面には肩口に向かい逆立って生える体毛の様な鋭い突起物。

再生した上腕部から指先にかけては、ふた回り程肥大化した真っ白な腕となっていた

《……何だよ、そりやア……？》

「……」

言葉による反応はない。

光の灯っていない冷たい視線を向け、隼斗は右手で《隼斗》の顔面を掴んだ

《！》

顔を掴む掌にドス黒いエネルギーが蓄積されていく。霊力とは違  
う、《隼斗》と同じ性質を持ったその力は、やがて淡く瞬いた

《ツツ!!》

ギリギリで《隼斗》はその右腕を斬り落とした。同時に瞬閏を纏い、  
左腕を蹴りつけ離脱する

《………おいおい、マジかよ》

軽口とは裏腹に、《隼斗》は明らかに動揺していた。  
瞬閏を纏わせ、全力で蹴りつけた左腕には傷一つ入っておらず、斬  
り落とした右腕は先と同じ様に再生・変異していた

——力の侵食は止まらない。

白い体表はそのまま隼斗の顔半分を覆い、まるで欠けた仮面を被っ  
ているかの様に見えた

《………テメエ、いつの間に俺の力を取り込みやがったんだ……!》

返ってくるのは鈍く光る冷たい視線のみ

121話 隼斗の魔界探索記 最終章

白い体表の侵食は少しずつ進行し、徐々に隼斗の身体を覆っていく。

獣の様に発達した両手を広げ、ゆっくりと《隼斗》を見据えた

《ツツ!?!》

目前に迫る白い爪。

いつの間に接近したのか……。

まるで移動する過程をすっ飛ばしたかの様に隼斗は一瞬で距離を詰めた

しかし腕の動きは見える。

左右から爪による横薙ぎ。

右の方が若干速い

《隼斗》はそこまで思案すると、スウエーの様に上半身を大きく逸らし両爪を回避。

更に攻撃後の一瞬の硬直を見計らい、背中から瞬間を噴射。

その推進力を使って勢いよく上体を起こしながら、隼斗の顔面へ拳を叩き込んだ

「……」

その凄まじい衝撃にもかかわらず、隼斗の身体は後方に仰け反っただけだった

《……オーケー。テメエには手加減しちやいけねえんだな》

《隼斗》はそう言うと、まだ強化されていない生身の左足へ回し蹴りを放った

ゴギツゴギツブチイイツツ!!と鈍い音が鳴り、隼斗の左足は膝から下が滅茶苦茶な方向へ折れ曲がり、千切れ飛んだ。

「……」

痛がる素振りこそ見せないものの、片足を失った事でバランスを崩した隼斗へ、《隼斗》は複数の術を練り上げ一挙に放った

まず『六杖光牢』が身体を奪い、それと重ねる様に『鎖条鎖縛』で縛り上げる

《もう一つオマケだ》

更にその上から九十九番の縛道『禁』をかけ、《隼斗》はこの戦いで初めて詠唱を口にした

《滲み出す混濁の紋章　不遜なる狂気の器　湧きあがり・否定し　痺れ・瞬き　眠りを妨げる　爬行する鉄の女王　絶えず自壊する泥の人形　結合せよ　反発せよ　地に満ち己の無力を知れ》

掌より渦巻く漆黒の塊は直方体の黒い箱となり隼斗を囲った

《破道の九十『黒　棺』》

ギシ……ツと軋む様な音が響き、黒い箱に囲われた空間ごと重力の奔流によって圧碎された



やがてゆつくりと消えゆく箱を見つめながら《隼斗》は笑みを浮かべる

《再生する奴を倒す時は跡形もなく消滅させるのがセオリーだよなア？》

「……しかし、

ゴギギギギ……ツツツ!!

空間に硬いものが擦れ合う様な鈍い音が響き渡った。出処は言うまでもなく《隼斗》の目の前から

《……おい、マジか》

「思わずそんな言葉が出た。

そして《隼斗》は、先程自身が唱えた言葉を自身で訂正することになる

その説が通るのは飽くまでも、相手をちゃんと『消滅させきる』ことが出来ていればの話だと……

「アアアア……」

息を吐いた時に自然と漏れた様な小さな唸り声。だがその声を聞いた《隼斗》は全身に悪寒を覚えた

《……はっ》

そして知った。

今の自身の力は目の前の男から奪った仮初めの力。しかしその男が纏っている力もまた、自分の力なのだ。

互いに相手の封じられた力を使って戦っている

………にもかかわらず、

《俺には扱いきれてねエってのか？お前の力が！そんな力に溺れてる様なテメエにすら劣ってるってのかッ!?》

「………」

返事はない。

既に顔半分以外は白い体表に覆われ、新たに腰下から生えた爬虫類の様な尻尾を揺らしながら、隼斗はのそりと爪先を二本、《隼斗》へと突きつけた

ヴウ……ンと赤黒いエネルギーが溜まっていく。

それは水鏡の様な空間全体を真っ赤に染める程の眩い光を発生していた

《上等だぜクソ野郎……!!》

《隼斗》は背中から発する高濃度の妖力を拳一点に凝縮させた。こちらでも同質の禍々しい光を放ちながらも、その精度を高めていく

《オオオおおおおおおおおお!!》

《隼斗》は咆哮し、両者の一撃が交差する。

同質の力の均衡に、エネルギーの余波が周囲に飛び散り轟音が鳴り響いた

だがそれも最初の一瞬だけ。

隼斗の指先から放出される赤黒い閃光が、《隼斗》の拳に集中してい

る妖力を削り取り始めた。

徐々に押され始め、身体が後退し始める

《ぐっ……アアアアアアアア!!!》

拳から腕、肩口から背中がミシミシと悲鳴を上げ始めた。だが一瞬たりとも力を緩めれば途端に押し潰されてしまう。

《隼斗》は姿勢を落としながら拳にもう一方の手を翳し、更に力を流し込んだ

ゴオオオオツツ!!

「!」

先まで表情の無かった隼斗は目を見開いた。

瞬間的に増大した《隼斗》の妖力が逆に自分の出力を上回ったのだ

隼斗の白い身体は赤黒い波に飲み込まれた

《はっ、はっ………ったく、手こずらせやがって》

ダラリと《隼斗》は腕を降ろした。限界に達した右腕は皮膚が裂け、所々出血している。

妖力を使いすぎた為か本来の治癒力も弱々しい

視線の先では『右半身が消し飛び』、倒れ伏す隼斗の姿があった

《はあ………。『負け』、か》

その言葉が示す様に隼斗の身体がピクリと動いた。

全身全霊を込めた一撃。

だが目の前の『怪物』を消し切る事が出来なかった

《……ムカつく野郎だぜ。俺の力が全盛期であったなら、態々テメエの力を奪うまでも無かったのによオ……。それがあのクソ忌々しい神二匹の所為で……!》

傷口からゴボゴボツと音が鳴り、欠損した箇所が凄まじい速度で修復されていく

《チツ……、いいさ。今回は負けを認めてやる。事実、どうやって手に入れたかは知らねエが、俺の力をそこまで引き出しやがったわけだしな。……まあ、力に飲まれちゃいるが》

再び隼斗の瞳が開かれた。

倒れた姿勢のまま、眼球をギョロギョロと動かした後、勢いもつけずに立ち上がる。

そして、完全に再生した手足の調子を確かめる様に細かに動かし始めた

《だが忘れんじやねエぞ。その力がテメエの中にある限り……、俺はいつでもテメエの身体を乗っ取る隙を窺ってるってことをなア!》

ふと隼斗は動きを止め、《隼斗》を凝視した。

カチャカチャと鎌の様な爪を鳴らし、心なしか笑みを浮かべている様に口角を上げた

――隼斗の姿が消失する

《……………まつ、その状態から復帰できね工事には、テメエも終  
ザシユウウツツ!!

言葉は途切れ、魔界の神でさえ『厄災』と称した死の化身は原型を  
とどめることなく斬り刻まれた。

その残骸は煙の様に消失した

「……………」

一人その場に残された隼斗は、掌を見つめたまま停止する

「アッ、アッ、アッ……………!!?」

途端に頭に鋭い痛みが走った

「ガツ……アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ……  
!!!?」

まるで頭の中を百足が這いずり、掻き回しているような苦痛に隼斗  
はのたうち回った。

叫び、爪を地に突き立て、頭を何度も打ち付けた

痛みは引かない。

気が付けば目や口から血を流し、視界も黒く染まっていく

「!!」

唐突にガクンと膝をついた。

見ると膝から先が砕かれたブロックの様に崩れている。

視線を転じれば、掌の先からも徐々に崩壊が始まっていた

「……………!?!」

次に身体感覚が失われた。

隼斗は目を見開いたまま仰向けに倒れ伏した。

身体は確実に崩れていく。

既に四肢は殆ど残されていない。

後は頭が先か、胴体が先かだ

「……………消えろ」

力に飲まれ、理性が失われた筈の隼斗は確かにそう口にした。

存在が崩壊していく中で、本来の自分と、力に飲まれた自分の意識が混濁していたのかもしれない

———そんな彼の頭にとある声が響いた

『そのまま壊れていくつもり? 戻りたくはないの?』

女性の声。

だが隼斗はその言葉に反応しない。

そもそも意識があるかさえもわからない状態だ

直後、隼斗の頭上にこぶし大の光の玉が現れる。

声の主は続けた

『貴方にまだ戻りたいと言う意思があるなら、その手を伸ばしなさい』

「……」

「……」

「……」

「……」

目を覚ました隼斗の視界には緋色の空が広がっていた。暫くボンヤリとした後、冷んやりとした土の感覚が身体の背面に伝わっているため、此处でやっと仰向けに寝ているのだと気付いた

「気が付かれましたかな？」

聞き覚えのある声が耳に届いた。

隼斗は頭だけを動かしその人物を見上げる

「……妖忌か」

そう言っつて一度視線を空へと戻し、のっそりと起き上がった。衣服についた土を払いながら改めて周囲を見渡すと、すぐ目の前に西行妖の根があつた

「……」

黙ったまま根を眺めている隼斗へ、妖忌は隣に立ちながら尋ねた

「……決着は、つきましたかな？」

「……ああ」

「そうですか」

妖忌はそれ以上何も言わず、西行妖に刺さっている宝刀を掴むと、ゆっくりと引き抜いた。

長年封印の役目を果たしていたその刀の刀身は、すっかり錆びてしまっていた

「いいのか？ 抜いちまって」

「役目は終わりました故……。」

妖忌はそう言って、鋒から刀身を指でなぞる

キン……ッ

そんな軽い音が鳴り、錆びてボロボロになっていた刀身が白銀の輝きを取り戻した。

妖忌は『予め用意していた』のか、空きの鞘を取り出し刀を納めた

「……………終わった」

隼斗はある一方を見つめ、静かに呟いた

「……………助かったよ、魔界神」

隼斗は踵を返した

――



魔界に高々と建つ城。

いつもと変わらぬ緋色の空を見上げながら、魔界の創造神である神綺は、その背に生える六枚の翼を引っ込めた

「どうやら、何とかなつたみたいだな」

背後から掛けられた声に、神綺はにこやかに返した

「あらあら、貴女がこんな所に来るなんて珍しいわね」

「本意ではないがな。にしても、相変わらず似合わんなその羽」

頭から鹿のような角を生やした赤髪の女は、今さっきまで神綺の背に生えていたデビルチックな翼を指摘して笑った

「何よー、いいじゃない可愛いから」

「……自分で言うか？」

「それはそうと、今日はどうしたのかしら？」

「いや、わかれよ。あの桜の件に決まっているだろう。それともう一つh…」

「その件なら片付いたわよ」

「うん、だからね？最初に言ったよね？『何とかなつたみたいだな』って私言つたよね？」

「まあまあ、そう怒らないで『龍神』ちゃん♪」

龍神は一度咳払いをすると、改めて話を本筋に戻した

「…………正直、危険な賭けだった。百年前、奴の存在だけを消し去り、『力だけをあの人間の内に残す』。自我として芽生えた奴を倒すにはそのベースとなった株 隼斗でなくてはならなかったからな」

「結果的に飲まれてしまったけどね。何とか助け出せて良かったわ」

「すまん。お前と終 隼斗には悪い事をしたと思っている」  
「……何にせよ、これで一先ず安心ね」

そう言っつて安堵の息を漏らす神綺とは対照的に、龍神は険しい表情を作ったまま首を横に振った

「……………実は今、人間界で問題が起きていてな」

「……………問題？」

「先日、『死の天使』が降り立ったと思われる形跡を見つけた」  
「!？」

神綺は表情を強張らせ、目を見開いた。

その言葉を聞いただけで一瞬翼を展開しかけてしまった。

しかし予想していた反応なのか、龍神は静かに瞳を閉じ、告げた

「神綺……、我々クラスの神が介入する時は、原則として世界が崩壊の危機に陥った場合のみだ」

だが、と龍神は付け加え

「例え被害が世界の一部分だったとしても私は動くつもりだ。……………奴はそれだけの存在なんだ」

「……………その口ぶりからして、『おおかた出現場所に見当』はつけているんでしよう？」

本来であれば、世界を創り出した神に対してこんな質問はありえない。

その世界の事象を把握し、万が一の事態には掌握して改変することさえ可能な彼女等にとって、不確定要素など存在しないのだ

ただ一つ、例外をあげるのであれば、それは人間界にも魔界にも属

さない異世界の住人。

更に、龍神の探知すら掻い潜る程の存在という事になる

た  
龍神は視線をある一方へと移し、ある人物を思い浮かべながら告げ

「――『幻想郷』だ」

## 幻想郷 激動篇

### 122話 不吉の再来

この日の幻想郷はいつにも増して静かだった

朝方に聞こえてくる小鳥のさえずりや、風の吹く音。段々と気温の高くなってきたこの頃、いつもなら自然と聞こえてくるはずの虫のさざめきまでもが、今日は不思議と止んでいた

そんな小さな変化など気付きもしない人々で賑わう人里。

時刻は昼過ぎという事もあり、食事処や茶屋といった飲食店の店員は表に出て呼び込みをしている。

荷車が地面を進み、車輪が軋む音から、金物屋が刃物を研ぐ小さな音

人里はいつもの如く活気に溢れていた

寺子屋の教師、上白沢 慧音は生徒である腕白な子供達に手を焼きつつも、授業を進めていた

「こらタカシ、授業中にパラパラ漫画を描くんじゃない。ヤス、眼鏡で光を反射させて遊ばない。のび大、寝るな」

貸本屋を営む『本居 小鈴』と、本の返却に訪れた九代目稗田家主『稗田 阿求』は、里の賑やかな様子を耳にしながら、雑談に花を咲かせていた

「うーん、偶には本の趣向を変えてみるのもいいわね。漫画とかは置いてないの？ 異世界の歴史書でもいいわ」

「外の世界のならば少しはあるけど…、それだったら此処よりも吸血鬼

の館にある図書館の方が良いんじゃない？」

表の通りを行き交う人々は、里の外にある嘗ての危険など忘れてしまったかの様に、子供から老人まで普段と変わらぬ平和な日常を送っていた。

これも幻想郷に決闘ルールができた事や、昔に比べ友好的な妖怪が増えた事、里の警備を守護者たる上白沢 慧音が担っている事……、そして何より博麗の巫女の存在が人々に安心と余裕を与えたのかも知れない

「んん？」

そんな時、一人の住民の男がとある異変に気が付いた。

通りと隣接する店々の屋根に不自然な影が広がっている。大きさは凡そ直径3メートル程だろうか

「？」

男は、上に何かあるのか？と思い空を見上げるも、特に何かあるわけでも無く首を傾げた

「一体何なん……………」

男の言葉はそこで止まった。

再び戻した視線の先を凝視したまま、その場に立ち尽くした

——影からは真っ黒な人の手の様なナニかが伸びていた

それは行き交う人々に反応しているのか、はたまた風に煽られているのか、ゆらゆらと揺れている。

その細い指一本一本が、尺取虫の様な動きで不気味に動いている

「……………あつ」

短く漏れた声。男はいつの間にか持っていた荷物を地面に落とし、  
ていた。

その様子を目にした老人が、不自然に立ち尽くす男の様子を怪訝に  
思い、徐にその視線の先を追った

「!?」

老人は言葉を失った

…………それは屋根に出来た影から這い出る様に、ズルズルと姿を現し  
た。

まるで体毛の様な黒い手に身体を覆われたソレは、左右対称に生え  
る六本の巨大な虫の脚で屋根の上を這いずり始め、やがて停止すると  
顔と思われる部位を持ち上げ、耳を劈く様な金切り声をあげた

「キイイイイイイイイイイイイイイイツツツ!!!」

その咆哮は里中に響き渡った。

人々は一斉に動きを止め、先程まで賑わいを見せていた人里は一瞬  
で静まり返った

……直後、

民家の屋根や壁、大通りや路地裏などの至る所に円形の黒い影が出現した

そして人々が呆然と立ち尽くす中、次々と這い出てくる無数の黒い手で覆われた化物

カサカサと虫の様な動きで暫く蠢いていた化物は、突発的に里の人々へ向き直った

「……っ」

その場にいる誰一人として、蛇に睨まれた蛙の様に動く事が出来ずにいた

「ギイイ……」

そんな小さな鳴き声が聞こえ、ダンツ！と一匹の化物が屋根から飛び降り、着地した

偶々通りに立っていた少女の前に

「……」

化物は少女の顔を覗き込んだ。

無数に生える黒い手の向こう側から、薄っすらと見える赤い瞳がギョロギョロと忙しく動いている

「ああああああ!!」

そう叫び、一人の男が渾身の力で化物を蹴りつけた。

その手にしっかりと少女の手を握り、自身の後ろへ引き寄せながら

彼女の父親だった

「!?……ぬ、抜けっ」

しかし、蹴りつけた足は化物を覆う無数の手に絡め取られてしまい、逆にバランスを崩した父親はその場に倒れ込んだ。

ゆうに大人の二倍はあるであろう体格差から、化物は怯むどころか獲物を少女から父親へと変えた

「と、父さん！」

少女から発せられた叫び声が、その場の人々の硬直を解く引き金となった

『うあああああああああー』

悲鳴をあげ、一斉に逃げ出す住民達。

それと同時に虫の様な化物達もそれぞれの標的を選定して動き出した。

強靱な後ろ脚で跳躍し、逃げ惑う人々の背中に飛び掛かっていく

……一時だけの静寂は碎かれ、今までの平穏が崩れ去った瞬間だった

周囲は逃げ惑う人々の悲鳴と、化物の不気味な咆哮で埋め尽くされた。

そんな中、少女は必死に父親の袖を引っ張り、なんとか助け出そうとしている

「父さん！頑張って！」

「父さんの事はいいから逃げろ！お前も捕まってしまうぞ!!」



既に身体の半分程を化物の触手の様な手に拘束されながらも、父親は娘に逃げる様叫んだ

しかし少女は首を横に振り、父親を放そうとしなかった

「駄目え！一緒に逃げるの!!」

——背後から、カサカサッと這いずる音が鳴った。父親の袖を握る少女の動きが止まる

「あつ……ああ」

その震える身体にゆっくりと伸びてくる無数の黒い手。それをみた父親は表情を歪ませ、力の限り叫んだ

「娘に触るんじゃない化物おお!!!」

ボオ……ツと、一瞬その場が熱気に包まれ、少女の背後にいた化物は炎上しながら吹き飛んだ

「大丈夫？」

優しくかけられた声

だが次の瞬間には、父親に覆い被さっていた化物を蹴り飛ばす白髪の少女の姿があった

「……今のうちに早く逃げて」

その言葉で、倒れたまま呆気に取られていた父親は我に返った。急いで起き上がり、娘を抱き寄せながらその少女を一見した後、一礼して駆けて行った

その様子を横目遣いで見送った少女は、掌に靈力を集束させると、一言口にした

「害虫駆除の時間だ」

新たに目の前に降り立った複数の化物を前に、『藤原 妹紅』は怒りを露わにしながら対峙する

――

里中がパニックとなり、小鈴の貸本屋もその混乱に巻き込まれていた。た。

カサカサツと不快な音を立てながら這い回る化物は、人の気配を探れるのか、屋内に身を潜めていた小鈴とその両親、偶々訪れていた阿求の気配を嗅ぎつけ集まってきた

小鈴達は一箇所の部屋に追い込まれ、護身用の手斧を持った小鈴の父親が前に出て戦おうとしていた

しかし実際に戦闘が起こる事はなかった

「お怪我はありませんか？」

グラデーシヨンのかかった髪を靡かせ、不可思議な光を放つ巻物を

手に、ほぼ一瞬で複数の化物を一掃した女性は、仏の様に穏やかな表情を浮かべながら微笑んだ

「貴女……、命蓮寺の……」

そう口にした阿求を含め、全員が軽い放心状態となっている中、その女性の元へ紺色の頭巾を被った女性が駆け寄ってきた

「姐さん、やっぱり里全体が襲われてるみたい」

「……わかりました。私は引き続き住民の方々の救護に向かいます。

一輪、彼女等の事を頼んでも？」

「任せました」

二つ返事で了承した一輪は小鈴達の元へ。

そして戦う僧侶と化した『聖 白蓮』は、疾風の如くその場を後にした

## 123話 拡散する凶変

この日、紅魔館の門番である紅 美鈴は居眠りをしていなかった

普段から役職上、一日中立番する事すらある彼女は、度々メイド長の際を見つけては昼寝をしている。

しかし、睡眠中であっても周囲に気を集中させている為か、門の出入りがあった場合や、接近する気配等即座に察知できる為、例えば寝ていようが門番として最低限の職務はこなすことができる

……これはいつも通りの日常であったならの話

「……何処の誰かは知りませんが」

人里では比較的安全な妖怪として認知されている美鈴。時には人間とも親しく挨拶を交わす程穏やかな彼女が、唯一見せる威圧的な一面……。

——己が主の座する紅魔館を護る時である

「お帰りを。さもなれば此処で迎撃します」

鋭い眼光で正面を睨み、警告する。

目の前にある小さな林にできた木陰から顔を出す複数の対者

「ギ……、ギギ……」

梟の様に首を震わせながら、影から現れた人型のソレは、まるで傀

儡を思わせる動きでカタカタと揺れ始める。

身体全体を黒い靄に覆われ、僅かに垣間見えたその顔は、『髑髏』の様な容姿をしていた

(確実に人間じゃない。……かと言って妖怪って訳でも無さそうだけど……。一体なに……。っ!!)

美鈴は新たに現れた気配に、思わず意識を周囲へ向ける

目の前の傀儡と同じ気配は、まるで紅魔館を取り囲む様に次々と出現していた

(この数っ！最初から狙われていた…!?)

「ギギ……」

目の前の傀儡は腕の形状を刃の様に変化させ、ジリジリと距離を詰めてきていた。

刀身を振り上げ、三匹の傀儡は三方向から美鈴に向けて刃を振るった

「……」

しかし、美鈴の意識は既に目の前の傀儡達には無かった

「ギ?…」

傀儡は美鈴の流れる様な足の運びを目で捉えることができなかつた

気が付いた時には右方にいた傀儡は打突を受けて吹き飛ばされ、中心にいた傀儡は背後から自身を貫く刃に首を傾げた後、力なく崩れ落

ちた

「此処に攻め入るからには相応の覚悟をして貰うぞ」

美鈴は冷ややかにそう告げると、突き刺していた左方の傀儡の『腕』を引き抜いた

（入口は正門と裏門……。まあ、礼儀正しく入ってくるわけないか）

地に転がっている傀儡には目もくれず、美鈴は正門に常備してある魔法陣を軽くなぞった。

普段は滅多に使う事がない、館内へ危険を知らせる警報装置の様なものだ

再び美鈴の元へ集まってくる複数の気配。

新たに動員された傀儡は敵陣に攻め入る上での優先順位を選定したのか、湯水が湧き出る様に増殖していく

美鈴は怯まない。

全身を闘気が覆い、紅いオーラを纏った龍はゆっくりと構えをとつた

「此処は何人たりとも通すつもりはない。命が惜しくない者だけかかって来い」

――

哨戒を主たる任務としている白狼天狗の犬走 椀は、自身率いる隊をもって、侵入者を迎え撃っていた

「何なんだコイツ等…ッ!?!」

生い茂る木々の間を自由に駆け抜け、枝から枝へ跳び回る身体が黒い靄に覆われたトカゲの様な化物。

大木を深々と抉り取る程の鋭く発達した爪を武器に、警備に当たる白狼天狗へ次々と襲い掛かって来ていた。

天狗とまともに立ち回る程のスピードを有し、その髑髏の様な頭部から覗く赤い眼光は同色の軌跡をつくった

「犬走隊長、敵の数が徐々に増加しています!このままでは……………」

「既に伝令は出してある!増援が来るまで持ち堪えろ!!」

「カロロロ……………」

「!!」

ギイインツツ!!と、椀の盾に化物の爪が突き立てられた。

堅牢な造りになっていく鋼の盾だが、思わず耳を塞ぎたくなる様な不快な金切り音と共に、表面に残された鋭利な爪痕がその威力を物語っていた

「はああッツ!!」

椀は盾を引き、その交換作用をもって刀をトカゲの胸部へ突き刺した。

致命傷を与えたのかトカゲは身体に纏う靄を散らす様に四散していったが、そんなもの大した損耗にはならないとばかりに、周囲に浮き出ている影から次々と飛び出してくる

「くっ、ジリ貧か…!」

既に負傷者も多数出ている。

その負傷者等を搬送する為に割く人員すら今は容易ではない。

明らかに敵の数が自軍を上回りつつあった

代わる代わる襲い来るトカゲの群れを斬り捨てながら、椀は最悪のケースを想定していた

現状、その正体も規模もわからない侵略者の存在は、彼女に僅かな気落ちを与え、その動きを鈍らせていた

「カアアアアアツツ!!」

鋸のような牙を剥き出しに向かってきた一匹が、椀の刀に噛み付く

「しまっ…!?!」

途端に動きの止まった標的へ、トカゲ達は一斉に襲い掛かった

「旋風『鳥居つむじ風』!!」

ビュゴオオツツ!!と、突如発生した二つの竜巻が、群がるトカゲを吹き飛ばした。

更に竜巻は周囲の木々に反射する様に、しかし的確に侵入者を巻き込んでいく

「しっかりしなさい、椀。戦闘中に気を緩めるなんて貴女らしくもない」

次に自身を諭す声。

椀はその人物に若干の悪態を付けながら振り返った



「文さんこそ……、少々到着が遅いのでは？」

黒い翼を広げ、射命丸 文は微笑を浮かべながら言う

「これでも可愛い後輩が心配で急いで飛んで来たんですけどねえ？」

「……………調子狂う事言わないでください」

椀は一度咳払いした後、敵方へ向き直った。

その隣へ降りてきた文も、率いてきた部下へ指示を飛ばす

「何としても此処で食い止める！これ以上の侵攻を許すな!!」

その命令に応える様に、背後では増援として駆け付けた烏天狗達が一斉に侵入者へと攻撃を開始した

「……………」

前方で繰り広げられる合戦を前に、椀は先輩に一言呟き、飛び出した。

それを聞いた文も、やれやれと溜息を吐き、一拍置いた後続く

「……………どういたしましたってっつ」

## 124話 遭遇

異変が起きてから一時間にも満たない僅かな時間で、幻想郷の各地は化物達の襲撃により混乱状態に陥っていた。

影から出現する正体も目的もわからない謎の侵略者は、その数をもって住民達へ襲い掛かった

此処、地底に於いても状況は同じだった。

鬼によって築き上げられた都市を、周囲から囲むように押し寄せる影の化物。

地上とは違い、陽の光が差さない洞窟内は化物達にとって絶好のポイントなのか夥しい数が押し寄せていた

発達した巨大な爪を食い込ませ、洞窟の壁や天井を自在に這い回るその化物は一見したところ、獣と爬虫類を合わせたような悍ましい形態をしていた。

だからだと涎を垂れ流す口内には、獲物の肉を抉り取る為であろう鋭利な牙が見え隠れしている

この異常事態に、都市に住む妖怪達は皆、『一人の鬼の指揮の下』、臨戦態勢を整えていた

都市の入り口を護る橋姫の水橋 パルスィは、隣に仁王立ちで立つ指揮官へ、溜息を吐きながら囁いた

「……囲まれてるわね」

「見ればわかる」

「あの数が一斉に襲って来たらいくら貴女でも些か分が悪いんじゃない?」

一本角を生やした鬼、星熊 勇儀は高らかに笑う

「かっかっかっ！心配無用！何匹来ようがちゃんと護ってやるから大船に乗った気でいな!!」

「頼もしい事だけど……、後ろ」

パルスイは片目を閉じ、囁くように告げた。

内壁に張り付いていた一匹が音もなく勇儀の頭上へ飛来する。それに対し、勇儀のとつた行動はいたってシンプルだった

特に見向きもせず、自身の元へ降ってくる化物へ裏拳を放つ

グシャツ!!と肉の潰れる音と共に、顔面が陥没した化物は高速で回転しながら後方の民家の壁へ突き刺さった

「……今のが開戦の合図と受け取るがいいかい？」

勇儀は口角を吊り上げ、ギラギラと光る瞳で化物達を一見した後そう言った

『おおおおおおオオオ!!』

彼女のそんな様子を目にした後方の鬼達も拳を鳴らし、舌舐めずりをしながら吼える

『キシャアアア!!』

呼応する様に、牙を剥き出しにしながら威嚇する化物達。同時に壁や天井に張り付けていたその脚を離し、一斉に都市へ降り立った

「さあ、喧嘩しようか!!」

嘗ての鬼の四天王は大地を踏み鳴らし、その一声で大気を震わせた

――

数年前、幻想郷に異形の怪物が現れた。

当時の被害状況は人里の一部の者が噂で知る程度の小さなものであったが、先代博麗の巫女はコレを軽視しなかった。

彼女は自身が住まう神社が襲撃された直後、神社裏の湖が怪しいと睨み、一人調査に乗り出した

――当時幼かった霊夢を残し、以降戻る事はなかった

そして現在。

再び幻想郷に怪異が訪れた。以前よりも大規模に、各地で被害を出す程の異変

……現博麗の巫女である霊夢はこの異変に見覚えがあった

各地で出現した化物達は、当然博麗神社をも襲撃してきていた。

身体が黒い霧に覆われた異形の姿。そして頭部に共通して確認できる『髑髏』……。

倒した化物を見下ろしながら、ある一方を見据える

「……」

霊夢は思い出していた。

自身の先代であり、姉の様に慕っていた博麗 暁美が失踪したあの

日。異変解決の為、彼女が最後に向かった場所を…。

「神社裏の……、湖」

「何だつて？」

ふいに眩かれた言葉に、隣に立つ魔理沙が尋ねる

だが霊夢は答えず、凝視した方角へ飛び去ってしまった

「お、おい霊夢……！」

魔理沙も一瞬遅れて後に続いた

・  
・  
・

時同じくして、幻想郷のとある場所に存在する小さな湖。その中心の空間が裂け、二人の姉妹が降り立った。

背から天使の様な翼を生やした少女は、辺りを一見して眩く

「此処が奴らの巣？随分のどかな場所じゃない」

片や、青いメイド服を着た少女は興味無さ気に囁いた

「姉さん、早く親玉殺して帰ろうよ」

「慌てないの夢月。出迎えてもらえるならまだしも、探さない事には出てきてくれないわよ。それに親玉を潰したところで奴らが治るとは限らないしね」

「じゃあ皆殺しにすればいいんじゃない？」

夢月と呼ばれたメイド服の少女は、自身の手を巨大な鋏の形に変化させ、ジヨキジヨキと開閉しながらそう言った

「どれだけ数があるかもわからないのにそんな面倒臭いことはしたくないわ。まっ、『頭を潰して即解決』って流れになってくれることを願うか」

翼を生やした少女は瞳を閉じ、指先でこめかみを軽くノックしながら周囲の気配を探り始めた。

そして静かに開眼した後、妹へ向けて告げた

「夢月、どうやらお見えになったわよ？」  
「！」

その場に一筋の風が吹く。

姉が指した方向を見遣った夢月の視線の先には、湖のほとりに降り立った二人の少女の姿があった

開口一番、紅白の巫女は言う

「アンタ達が元凶かしら？」

その質問に翼の少女はやや首を傾げながら返し、続いて夢月も口を開いた

「……それは此方が言うセリフじゃないの？」

「貴女達が親玉？なんだ、やっぱり出迎えはあったのね」

「親玉ー？なんだかよくわからんが、怪しい奴らだな。少なくとも此処らじや見ない顔だぜ」

白黒魔法使いはそう言うと、帽子の中からミニ八卦炉を取り出し、早くも戦闘態勢をとった。

隣に立つ巫女も、既にお札とお祓い棒を握っている

「あら、やる気ね。……いくわよ夢月」

「ええ。幻月姉さん」

姉妹は不敵に笑い、ゆつくりと構えをとった

「気をつけて魔理沙。多分強いわよ」

「ああ、わかつてる。霊夢こそ油断するなよ」

## 125話 悪魔の姉妹

対峙する両者。

相手の出方を窺っている霊夢と魔理沙に対し、二人の姉妹のうち、白い翼の少女『幻月』は、前方に手を翳した

ザパアアアンツツ!!!と湖の水面へ、一つの光弾が撃ち込まれる。衝撃で打ち上げられた大量の水飛沫が、両者の間に壁を作った

だがそれも束の間

水のカーテンを斬り裂き、両腕を刃に変化させた『夢月』が突っ込んできた。

冷たい視線で見下ろしながら、霊夢へ狙いを定める

「魔符『スターダストレヴアリエ』!!」

宣言と同時に発射された星型の弾幕は、横合いから夢月を呑み込み吹き飛ばした

「ちよつと魔理沙。アレくらい助けはいらなかったわよ」

「へへっ、礼ならいらないぜ?アイツは私に任せな!」

「……聞いてないし」

畔の先にある林へ消えていったメイドを追って飛翔する魔理沙を尻目に、霊夢は目の前の敵へ向き直った。

未だ湖の中心から動いていない幻月は、余裕を崩さず語りかける



「あら、二人きりになっちゃったわね」

「お仲間が心配なら追いかけたら？ 勿論、背中を見せた瞬間打たせてもらうけど」

「必要ないわ。『あの程度』ならね」

「なんですって？」

幻月は翼を広げ、静かに微笑んだ

「どこいったー？ アイツ」

吹き飛ばした夢月を追って林へ入った魔理沙は、箒から降りると周囲を見渡した。

しかし、これといって気配は感じない。

元々そうだったスキルに長けていない為か、特に何も感じ取ることができず、一旦視線を前方へ戻した瞬間だった

——— 槍の鋒が。自身の瞳に吸い込まれるように向かってきていた

「ツツ!？」

不意を突かれた事により、魔理沙の身体は強張ってしまう。しかしそれが幸いしてか、バランスを崩して尻餅をついた事で、槍の一撃を回避する事ができた

「ちえ、外しちゃった」

魔理沙の後方にある木の幹に突き刺さった槍を元の腕へと戻した夢月は、冷たい声色でそう呟いた

「お、おまつ……！危ないだろ!!マジで死ぬかと思っただぜ!」  
「?。……殺す気だったけど?」

夢月は不思議そうに首を傾げながらも、腕から変化させた斧を振り下ろした

「どわあああつっ!?!」

ギリギリで地面を転がり回避した魔理沙の身体数センチ手前を大きく抉り取った一撃。

メイド服の少女には、一切の躊躇いなど無かった。表情を変えることなく、逃げる標的へと視線を動かす

「……逃げないでよ面倒臭いなあ」

「いや逃げるわ!お前頭のネジ飛んでんじゃないのか!?!」

「あんな『緩い攻撃』しかできない、頭の緩い奴に言われたくないわ」  
「……何だと?」

魔理沙は少女の身体へと視線を落とす。

確かに傷という傷は無く、身につけている衣服には汚れこそ付いているものの、破損箇所は見られなかった

「貴女ホントに親玉?これじゃあ簡単に終わっ……」

ゴオオオオツツ!!!と、夢月のすぐ隣を巨大な閃光が通過する

「聞き捨てならないな。私の攻撃が緩いだと?」

硝煙が立ち上る八卦炉を構え、魔理沙は静かな怒りを露わにしながら続けた

「だったら見せてやるぜ。大火力の魔法をな!!」

夢月は殆ど変わらぬ表情のなかで、唯一瞳を大きくした後、僅かに口角を上げた

「…………へえ」

湖を眼下に、宙に浮かび上がる霊夢と幻月。

相手を警戒し、凝視する霊夢とは対照的に、幻月は相変わらず優雅な振る舞いを崩さなかった

「来ないの？待っててあげてるんだから仕掛けてきなさいな」

霊夢は静かに指で印を結びながら言う

「…………もうやってるけど?」

直後、真下の湖から色とりどりの光弾が飛び出した。

その全てが指向性を持っているのか、一斉に幻月へと向かう

だが。

フツと幻月は掌を軽く振るった。

それだけで光弾は軌道を変え、明後日の方向へ飛んで行った後、消滅してしまう

「ふーん」

幻月は『水面に浮かぶ複数のお札』に目をやりながら微笑を浮かべた

「さつき湖の水を打ち上げた時にちやつかり仕込んでたという訳か。意外と抜け目ないのね」

『夢想封印』が逸れた？一体何をしたのかしら？」

今の攻撃により、両者による開戦の狼煙は既に上がっていた。

幻月は掌に球状の光を発生させ、頭上に掲げる

カッ!!!と一瞬目がくらむ程の光を発し、次の瞬間には視界一面を覆い尽くす程の弾幕が打ち出された

「ちよっ！多すぎよ!?!」

霊夢は慌てて周囲に陰陽玉を展開しつつ、光弾の雨を躲していく。身体のすぐ横を通過した弾は強大なエネルギーを持っているのか、その一瞬でもわかるほどに高熱を帯びていた。

事実、回避しきれず被弾した陰陽玉の一つが、跡形も無く碎け散ってしまったのだ

「へえ、躲し切るなんてやるじゃない。いきなり死んじやうと思つたのに」

「死んでたまるか!」

残された陰陽玉を回転させながら、四方八方に弾幕をばら撒く。だ

が出鱈目に打っているわけではない。幻月の周囲の空間を弾幕で埋めることで退路を潰し、霊夢は真っ直ぐ突っ込んだ

敵は明らかに外の住人。決闘ルールについて説いたところで、相手は一ミリも守る気は無いであろうことは先の言動等からわかっている

だからこそ、霊夢は敢えてルールを破り、本気の弾幕で逃げ道を塞いだ

「宝具『陰陽飛鳥井』!!」

続けて放つ巨大な陰陽玉。多大な霊力が込められたソレは、幻月を押し潰さんと迫る

「ふふっ」

幻月は余裕を崩さない

それどころか、最初の弾幕から躲す素振りすら見せず、一切の防衛態勢をとろうとしていなかった。

そして迫る陰陽玉を見つめ、再び掌を振るう

「ッ!」

霊夢は思わず目を見開いた。

先程放った夢想封印が不可思議な力によって軌道を変えられたことから、今回も同じ様に防ぐのだろうと踏んでいた。その力を見極めようと敢えてわかりやすい攻撃を放ったのだ

しかし、あろうことか陰陽玉は自身へと返ってきた。幻月の掌の動きに合わせ、その軌道が『捻じ曲げられた』かの様に180度向きを変えた。

次なる攻撃を放つため、前進していた霊夢は急ブレーキを掛け、力

の限り上へ飛ぶ  
ヂツ!!とスカートの端を掠めながら、陰陽玉は空の彼方へ消えて  
いった

「さて、私もそろそろ『動こう』かしら？」

## 126話 悪魔の猛威（前編）

緊迫した状況下で、幻月は薄く笑った

「貴女がどこまで付いてくれるか、楽しみね♪」

一瞬、その背に生える白い翼がぴくりと動いたのを霊夢が視認した直後だった

突如頭上に影が掛かった。

思考に空白が生じる。反射的に顔を上げた霊夢の表情が固まった

「あはっ！」

視線の先では悪魔の様に口角を吊り上げ、赤く光る瞳をギラつかせた幻月が、拳を振り上げている瞬間だった。

一瞬遅れて彼女が通過したであろう湖の水上が一直線に巻き上がる

「ッ!!」

凄まじい衝撃と共に振り下ろされた拳を咄嗟に張った結界で受け止める。

しかし空気が破裂する様な甲高い音が響き、結界は一撃で砕かれてしまった

「はあああッ!!」

霊夢はすぐ様霊力を纏わせた複数の御札を前方へ放った。

それは博麗の巫女に代々伝わる退魔の術が込められた護符。相手が『人ならざる者』であるならば、大小あれど効果は十分にある

しかし悪魔はそれらを涼しい顔で回避した

まるで子供がふわふわと空間を漂うシャボン玉を目で追う様に、しつかりと御札の軌道を眺める余裕すら見せながら、霊夢の顔へと手を伸ばした

「!?」

ボツ!!と空間が爆ぜる

悪魔の掌から放たれた光弾は、零距离から霊夢の頭部を吹き飛ばした

――

林の中を駆ける二つの影

一方は箒に片手で掴まり、低空飛行で木々の生い茂る見通しの悪い空間を器用に潜り抜ける

もう一方はそんな悪路などお構いなしに、両手から生える鋭利な刃で障害物を斬り倒しながら突き進む

「森林破壊もいいとこだな。自然はもっと大事にしなきゃいけないぜ  
!」

「私には関係ないわ。それより早く殺られてよ」  
「嫌なこった!!」

距離を詰められぬ様、魔理沙は星型の弾幕を放ち牽制する。しかしメイド服の少女は顔色一つ変えず、被弾などお構いなしに突っ込んで



くる

「鬱陶しいなあ。攻撃も周りの木も。一層の事全部刈り取ってスッキリさせようか」

「声のトーン変えずにおつかないこと言いやがって…!!」

魔理沙は箒に跨ると、急ブレーキを掛けるように身体ごと横に捻った。

そして八卦炉に宿った魔力を解放し、一直線に向かってくる夢月へ狙いを定める

「恋符『マスタースパーク』!!」

「!」

今の今まで魔理沙を追跡する形で疾走していた夢月は、進行方向から迫る巨大レーザーを躲すことが出来ず、そのまま呑み込まれた

「おっと、周りの木も巻き込んだか。でも私の場合は意図してやったわけじゃないから所謂事故ってやつだぜ」

魔理沙は立ち込める土煙の向こう側へそう告げた

返答はない

だが今の攻撃で勝敗が決したとは彼女とて思っていないかった。だからこそ警戒は解いていない。八卦炉を構えたまま、静かに前方を凝視する

——直後だった

ボゴオツ!!と足元の地面が吹き飛び、地中から巨大な鋼の手が飛び出した。

指先には鋭利な爪が付いており、運良く指の間を擦り抜けた魔理沙の衣服の一部が巻き込まれる

「ツツーなんだよ一体!？」

獲物を捕らえ損ねた手はゆっくりと地中へ帰っていく。そして前方からは淡々とした声

「あつ、また外しちゃった。やっぱり煙で見えない状態から捕まえるのは難しかったかあ」

煙が晴れ、まず初めに見えたものは人一人分が隠れる程の鋼の盾。やがてその形状を腕へと戻した夢月は、同時に地中に突っ込んでいた片腕を引き抜いた

「今のが大火力の魔法？全然強くなかったんだけど」

そう言い放った夢月の身体が、鋼色に染まっていく。華奢なシルエットを一変させる様に、文字通り『鋼の肉体』へと変化した

「いい加減つまらなくなってきたからコレで終わらせるわ。だから動かないでね」

ボツ!!!と爆発音が響く

それは夢月が距離を詰めるため、地面を蹴った音。蹴りつけられた地面は爆ぜ、後方に大量の土砂が巻き上がった

「はい、お終い」

夢月は拳を固め、魔理沙の脳天へ振り下ろした

127話 悪魔の猛威（後編）

頭部を吹き飛ばされた霊夢は、力無く膝をついた。その手に持っていた数枚の御札がはらはらと落ちる

「……」

幻月はそんな様子を黙って見つめた後、徐に意識を背後へと向け、口を開いた

「あら、殺ったと思ったんだけど」

返答があつた

「あら、夢でも見てたんじゃない？」

その瞬間、足元に転がっている『霊夢の姿をしたもの』は煙の様に飛散した

（分身……、いや幻影？……どちらにせよ私の目を一瞬欺く程の精度か）

幻月は後方へ向き直ると、自身を見下ろしながら笑みを浮かべる霊夢へ掌を向けた

「……私相手に『様子見』なんて粹なことしてくれるじゃない」

「気に障ったかしら？さつきまで気味悪く貼り付けてた笑顔が消えてるわよ？」

「ほげげ」

幻月の掌から光弾が発射された。

視界一面を覆い尽くす光の弾幕に躲すだけの隙間はない

霊夢は結界を多重に展開させた

「…ッ」

あまりの衝撃に表情が強張る。

着弾し、轟音が響き渡る度に結界に亀裂が刻まれていく。

確実に破壊されていく自身の命綱。しかし霊夢は印を結んだ

「霊符『夢想封印 集』!!」

展開されている結界を擦り抜け、放たれたカラフルな光弾は空中で一度停止すると、幻月に引き寄せられるように全方位から襲いかかった

「無駄よ!」

先程と同様、幻月は正体不明の力を振るう。

光弾は彼女の手前で方向を変え、あらぬ方向へ逸れていったが、

「!」

光弾は空中で停止した。

そして再び幻月へ向かって動き出す

「残念。それはアンタに当たるまで止まらないわ!」

ふと、幻月は自身の肩口に目をやった。

いつの間にか一枚の御札が淡い光を発しながら貼り付いていた

(……あの時か)

それは先程霊夢が『出鱈目に投げた札』の中に忍ばせていた本命。動物的となった幻月は、すぐさま『目印』を剥がそうと札に触れるが、まるで反発するかの様に弾かれてしまう

「くだらない小細工ね」

しかし、白翼の悪魔はそう吐き捨てた。

翼をはためかせ、一度上空へ飛翔する。当然標的を追って同じ様に上へと向かう光弾を前に、幻月は掌を翳した

空間が歪む。

まるで渦潮の様に掌の先で生じた異空間は、次々と着弾する光弾を呑み込んだ。

同時に幻月の肩に貼り付いていた御札が風に揺られて剥がれ落ちる。

それは夢想封印の消滅を意味していた

「……ますますわからないわね。アンタの能力」

「わかったところで同じことよ」

幻月は片手を掲げる。その先に紅いエネルギーの塊が発生し、バチバチと稲妻が迸る。

そしてエネルギー球は直径5メートル程の大きさに落ち着いた

「……ッー！」

霊夢は直感で察した。あれ程の莫大なエネルギーが炸裂すれば、ここら一带ごと吹き飛んでしまう

「いっちょよ!!」

そう叫び、幻想郷の大地をエネルギー球の射線上から外すため、全力で上空へと飛翔する。

だがそれを見越してか、幻月はその場にエネルギー球を残し、霊夢の目の前に躍り出た

「!?」

「遅い」

自信へと伸びてくる悪魔の掌。霊夢は即座に陰陽玉を展開し反撃に移ろうとするが、その動きは悪魔にとって遅すぎた

直後、霊夢の身体は金縛りにあつた様に動かなくなる。陰陽玉の制御は勿論、身震いどころか眼球すらも微動だにできない

意識はあつた。明確にくつきりと。

五感も残っている

(身体が固定された!?!……ツツ呼吸が……!!)

呼吸運動ができない。即ち、肺を動かすことができていない。

だが今もこうして意識を保っているのだから、少なくとも心臓や脳のような自律神経で動く器官は正常に働いている

……つまり、意識的に動かすことのできる機能のみが停止していた

「私のお手製空間は気に入ってもらえたかしら?これが貴女が最期まで解けなかった力の秘密よ♪」

(?!)

今や苦悶の表情すら作れない霊夢へそう囁いた夢月は、今迄にない

微笑みを零すと、ゆつくりと停止させていたエネルギー球を霊夢の元へ誘導する

「さよなら」

数秒後、凄まじい轟音と閃光が炸裂した

――

周囲の木々が薙ぎ倒された場所で、身体を鋼に硬質化した夢月は、むくりと起き上がった。

そして辺りを見渡す

「びっくりした。まさか『自爆』するとはね」

能天気な調子でそう呟く。

その言葉が指す通り、先程この場所で小規模な爆発があった

――原因は、至近距離でのマスタースパークだった

それを放った霧雨 魔理沙の姿はない。

衝撃で吹き飛ばされてしまったのか、はたまた消し飛んでしまったのか。夢月はその程度に考えて探索を開始する

(いくら避けられないからって無茶するな。ああいう子には武器持たせたら駄目だよ)

夢月は一人頷きながら身体の硬質化を解いた。

腕を巨大な鎌に変化させ、カチカチツと鳴らす



「およう？」

ふと、道端に落ちている小瓶を見つけ立ち止まった。中には如何にもな色の怪しい液体が入っている

「あの白黒の落し物かな？それとも……」

夢月はそこで言葉を切り、後方へ向けて鎌を振るった。

刃の部分に弾かれ、地面に落ちたのは何の変哲もない拳大の石ころ。

怪訝な表情を浮かべ、石の飛んできた方向を凝視した夢月は、倒れている木の幹へ鎌の先端を引つ掛けた

「そこか!!」

叫び、引つ掛けた幹を勢いよくぶん投げる。

木々がへし折れる乾いた音と共に、土煙を上げながら木の幹は地面へ突き刺さった

「はーん。さてはこの小瓶を割って中の液体を浴びせる気だったのかな？」

摘み上げた小瓶を振りながらほくそ笑む夢月へ、反響気味に声がかかった

「それ、時限式だぜ」

声と同時に、ボンツツ!!と音を立てて小瓶は破裂した。中身の液体が飛び散り、空気に触れた瞬間同色の気体が発生する

「うわっ……、汚ったないなあ。服にかかっちゃったよ」

夢月は付着した液体を不機嫌そうに払うと、掌を地面へ押し付けた  
「今のはちよつとムカついた」

直後、夢月を中心に地面から鋭い突起物が飛び出した。辺り一帯を纏めて串刺しにすることで、少なくとも声の届く範囲にいるであろう標的を巻き込むため

あつという間に森林を更地へと変えた夢月は立ち上がり、聳え立つ突起物を目にしながら呟いた

「さーて、当たってるかな？」

パチンツと指を鳴らす。突起物は形を失う様に、『元の土』へと戻った。

周囲には土塊と木々の残骸が散乱し、最早この中に死体が一つ転がっていたようが、発見困難な状態だった

「……」

暫しの静寂が続く。微風が髪を靡かせる中、夢月はある異変に気付いた

（あれ？風の音ってこんなに静かだったっけ？）

直後だった

唐突に背後から悪寒を覚えた夢月は、反射的に身を屈めた

ギョーンツツツ!!と、頭上を凄まじい速度で何かが通過する。それは辺り一帯の土塊や木の残骸を吹き飛ばしながら、急激な減速によって夢月の前方20メートルの位置に停止した

「まさか今のを躲すなんてな。中々やるじゃないか」

白黒魔法使いは、箒に取り付けた八卦炉から上がる硝煙を息で吹きながら言った。

「夢月は怪訝な顔をする

それは唐突に現れた魔法使いに対してでは無い

「可笑しいなあ。『耳が聞こえない』んだけど?」

小指で耳の穴をほじくり返すも、今の夢月には先程の轟音も、魔理沙が口にした言葉も、自身の発した言葉さえ聞き取れていなかった

「ああ、今は聴覚か」

「!?」

聞こえた。最初の部分は聞き取れなかったが、ハッキリ『聴覚』という言葉を耳にした

代わりに『視覚』を失いながら

「おつ、今度は視覚か?心配するな。次期に戻るさ」

「……何をしたの?」

「お前がさつき浴びた小瓶の中身。アレには発生した気体を吸い込む事で吸引者の五感をランダムに遮断する成分が含まれていたんだよ。魔法の森に群生してるキノコから抽出した魔理沙さんお手製だよ」

魔理沙は普段から魔法の森を探索しては調合によるマジックアイテムの生成を研究していた。

元々魔法の森に存在する動植物には人体に有害な成分を含んだ素材が数多く存在する。

その中には人間だけでなく、妖怪にすら影響するものである

「まっ、正直中々効果が現れないから心配ではあつたけどな」

「あつ、見える」

瞳を開閉しながら、身体の異常を探る。

音は聞こえる。嗅覚もある。

潰されたのは触覚か味覚か……

身体に触れ、触覚だとわかった

「ウザいなあ。これじゃあ変化させ辛いじゃん」

『変化』ねえ。さつきから見てたが、お前の能力は物質を変化させるものだと思うんだけど、どうだ？」

「おいしい。『物質を創り変える』のが私の能力」

「……言っちゃうんだ」

会話もそこそこに、両者は構えた

若干歪ながらも、両腕を剣に、身体全体を鋼に変化させた夢月は、静かに重心を落とす。

八卦炉を握り、箒に跨りながら懐の魔法瓶に手を添える

「卑怯者め！成敗してやる」

「真剣勝負に卑怯なんて言葉は無いんだぜ！」

――

幻月は目を見開いた

多少なりとも力を込めたエネルギー球。

大地に着弾すれば、ここから一帯を吹き飛ばすには十分な威力を有している

それが至近距離で炸裂したというのに、目の前の人間は先程と変わらぬ姿で浮いていた

「これ使うと疲れるからあんまり使いたくなかったのに……」

紅白巫女は何食わぬ顔でそう呟いた

彼女の奥の手。

『夢想 天生』を発動させながら

「無傷……。一体どうやって防いだのかしら？」

「防ぐ必要なんてないわ」

霊夢は懐から数枚の御札を取り出し、上へばら撒いた。

宙を舞う札は、規則性のある動きで霊夢等を囲うように動きだす

「夢境『二重大結界』」

ギシツツ……と、浅紫色の直方体が二重に展開され、双方を一つの空間へ閉じ込めた

「……何の真似？」

「夢符『夢想封印』」

霊夢は返答を弾幕で返した。

真つ直ぐ打ち出された色鮮やかな光弾に対し、幻月は溜息を吐きながら掌を翳す

「何度やっても同じ……」

幻月の言葉はそこで切れた

「……」光弾は次々と彼女へ着弾し、結界内で轟音と衝撃波が発生した

「……ッ!?!」

幻月は驚愕の表情を浮かべ、霊夢を見た。

「……ありえない。確かに光弾の軌道を逸らした筈だ、と」

「この中ではアンタの能力は使えないわよ?」

霊夢は淡々と口にする

「アンタの能力はどうも空間に作用する能力みたいだったから、この通り。結界で囲わせてもらったわ」

「……どういう意味?」

「結界って言うのは一種の『空間支配術』なの。囲った空間はそれまでの理から外れ、外界の変化を受け付けない。多くが封印や防護壁として使われているのはそのためよ」

「ッ!」

夢月は言葉を聞き終わる前に霊夢へ向けて突進した

要はこの空間内では能力が封じられている。

それだけ解れば十分。この程度の相手、力押しで殺せる……!

夢月は視認できないほどの加速力を持って霊夢へ爪を突き立てた

「!?」

しかし一撃は空を切った。躲かれたわけではない。明らかに擦り抜ける形で霊夢の身体を通過した

「今の私には触れることはできない。この空間に閉じ込められた時点で、アンタは詰みよ」

## 128話 魔法の可能性

すっかり更地となった森林内を、二つの影が高速で飛び回る

魔理沙は周囲に複数の球体を展開し、小型の魔法弾をマシンガンの様に打ち出す。

夢月は腕を変化させた剣でそれらを弾きながら、俊敏な動きで距離を詰めていく

「照射!!」

魔理沙が叫ぶと、弾を打ち出していた球体は一度止まり、次の瞬間には白光のレーザーを撃ち放った。

夢月は同じ様に剣先を当てる

「!?!」

しかし予想を超えた出力に思わず動きが止まってしまう。

瞬時にジグザグにステップし、次々と照射されるレーザーの雨を躲してゆく。

そして全ての照射が終わっての一瞬のインターバル。

チャンスとばかりに片腕をスライムのように軟化させ、上空の魔理沙へ向けて勢いよく伸ばした

「…つとおー!」

魔理沙は鞭の様に振るわれた腕をギリギリのところまで降下して回避する。……と、同時に地上の夢月へ向けて高速で突っ込んだ

「ちよこまかと!」



夢月の掌が地面に触れ、そこから複数の鋭く尖った土の槍が飛び出した。

だが魔理沙はスピードを緩めない。更に加速し、確実に土の槍を躲しながら、夢月の頭上を駆け抜けた

「プレゼントだぜ!!」

「!」

そう言って懐から取り出した複数の小瓶をすれ違いざまにばら撒く。

宙を舞う魔法薬の入った小瓶は、落下した衝撃で割れ、手榴弾並みの爆発を起こした

だが全身を鋼の様に硬化させている夢月は大してダメージを負っていない。

寧ろ爆発で舞い上がった土煙を鬱陶しそうに払いながら、魔理沙を追って空中へと飛び出す

「げっ…」

視界の晴れた夢月の目に飛び込んできたものは、自身を包囲する様に待ち構える複数の球体だった

「大サービスだ!!」

カッツツ!!!と、一斉にレーザーが照射される。一点に集中したエネルギーは高熱を発生しながら大爆発を起こした

一瞬遅れて爆発の中から夢月は離脱する。

その鋼の身体に損傷は見られない

「少しは効いたか？私の魔法は」

身体の硬質化を解き、どこまでも冷たい瞳で魔理沙を凝視しながら、あっけらかんと答えた

「別に?」

夢月の身体を黒いオーラが覆い始める。

それは燃え上がる炎の様にも見え、彼女の感情の様に底の見えない不気味さがあつた

「紅魔館の門番もそんな感じの気を纏ってたな。……感じる気配とか色は全く別物だけど」

「……」

夢月は徐に腕を手前に引いた

「!!」

連動するように身体を纏うオーラが巨大な腕へと変化する。

それは夢月の腕の動きに合わせて、風を切りながら一気に伸びた

「速いが直線的だぜ!」

普段から弹幕戦に慣れている為、ある程度の速度があろうと単発ならば避ける事は難しくない。

魔理沙は伸びてくる腕の横を擦り抜け、再び八卦炉を構え反撃に移ろうとした

「!？」

次の瞬間魔理沙は目を見開いた。

自身の真横で伸びている巨大な黒い腕の一部分から、少々サイズダウンした新たな腕が生え、伸びてきたからだ

「コレに決まった形なんて無いよ」

一本だけじゃない。

主軸となる巨大な腕から、次々とトコロテンの様に無数の腕が飛び出す。

しかも至近距離。間合いを空けようと側方へ切り替えした時には既に逃げ場などなかった

あつという間に魔理沙を呑み込んだ黒い手は集束し合い、再び主軸の腕と一体となった。

そのまま形を変え、魔理沙を取り込んだまま球体となる

夢月は突き出している掌を握り込んだ

「キュツ」

バキバキバキツツ!!!と、破壊を伴う音が辺りに響き渡る。

それは直径5メートル程あった球体が、握り拳サイズにまで収縮し、中に取り込んだものを圧砕した音だった

無残に砕け散った筈だったであろう木片だけが吐き出される

「一応親玉倒した証って事で姉さんに見せようかな」

今の今まで戦っていた敵をミンチした。

だが夢月は表情を変える事無く、まるで捕まえた虫を親に見せに行くような気軽さでそう呟いた

夢月から伸びる黒いオーラは再び巨大な腕へと変化する。…が、別にこれと違って意味はない。強いて言うならば、この形が彼女の決めたデフォルトなのだ

「そう言えば変な液体の効果、いつ消えるんだろ？……それだけ聞いとけばよかった」

魔理沙の生成した薬品を被った事で、未だに夢月の五感はランダムに遮断されている

今は『触覚』。

自身の纏う気を変化させ、創り変えた黒いオーラは、身体感覚と繋がっていた。

黒い手で何かに触れれば夢月も同じ様に感覚が伝わる様になっている

「……本当に潰せたか？」

頭の中でそう過ぎた夢月は、一度黒い腕を元のオーラへと戻した

「……………あれ？」

……腕の中には肉片どころか、血の一滴たりとも見当たらなかった

「……そして。」

立ち尽くす夢月の目の前に、八卦炉を構えた白黒魔法使いが突然現

れた

「ドンピシャだぜ……!」

ゴオツ!!と、視界一面を埋め尽くす極太のレーザーが放たれ、夢月の身体は一瞬で上空へ打ち上げられた

「がっ……ぐツツ……な、なんで…!?!」

鋼を纏っていない生身の状態で受けてしまったダメージに顔を歪めつつ、夢月は上空で停止し、後を追ってきた魔理沙を睨みつけた

魔理沙は懐から空の小瓶を取り出すと夢月に見える様に顔の横まで持ち上げた

「五感を狂わせる薬があるんだ。『身体を虫並みに小さくする』薬があっても良いだろう?」

「……は?」

言っている意味がわからなかった。自分の投げ掛けた質問との関連性が見えない

「まあ、捕まった時は流石に焦ったな。最初は隙間が塞がり切る前に小さくなって脱出しようと思ったのに、間に合わず閉じ込められちゃうし」

「……何が言いたいの?」

表情こそは変わらない。しかしその声色は明らかに苛立っていた

魔理沙は構わず続ける

「わからないか？小さくなるだけになって、成す術が無かった私を『箒の残骸と一緒に解放した』のはお前自身だってことさ」

「!!」

「例え偶然だろうと外に出ればこっちのもの。後は効果が切れる頃合いを見計らってお前に接近すれば、ナイスなタイミングで意表を突けるってわけだ」

魔理沙は得意げにそう告げた

「……」

目の前の魔法使いを仕留めきれなかったこと。そして不意打ちとはいえ痛撃をくらわされた事が気に食わなかったのか……。

夢月の中で明確な怒りがふつつつと湧いていた

「調子にのるな……ッッッ！」

全身を鋼に硬化させ、尚且つ黒いオーラを無数の巨大な刃へと変化させた

マスタースパークの直撃にも耐える鋼の身体に、変幻自在な刃。

例え不意打ちを受けようとも関係ない。確実に仕留め切ると、夢月は躍起になっていた

対する魔理沙は余裕を崩さない

「最後に……、もう一つ自信作のお披露目だ」

帽子の中に手をつ込み、緑色の薬品の入った小瓶を取り出す。それは現時点で彼女の所持している最後の魔法薬だった

——栓を抜き、一気に飲み干す

「……待たせたな。『大火力の魔法』だ！」

全長20メートル強の無数の刃が、一挙に振り下ろされる。退路を潰すように全方向から殺到する

魔理沙は静かに八卦炉を構えた

「魔砲『ファイナルマスタースパーク』!!!!」

直後、煌びやかな閃光が空間一帯を虹色に染める。

それは霧雨 魔理沙が八卦炉に宿る火力を『最大出力の上限を超えて』引き出した瞬間だった

仮に、通常のマスタースパークの威力が一般女性の平手打ちと例えるなら、この時放たれた魔砲は『プロボクサーのストレート』並みの威力を持っていた

魔砲は一瞬で巨大な刃を消し飛ばし、鋼の装甲ごと夢月の身体を呑み込んだ

……その日、幻想郷の空は一瞬だけ虹色の閃光に包まれる

最大火力を上回って酷使した八卦炉からは黒煙が上がり、大きな亀裂が入っていた

それを握る使用者の腕には火傷が見られた

しかし魔理沙は笑う

「最大火力を超えたのは最初の一瞬だけか……。『運が良い』な、お前も」

徐々に熱が冷めていく八卦炉を帽子へとしまい、既に誰もいない空間に語りかける

「『緑のクスリ』は魔力活性薬ってね。まっ、とある恩人の受け売りさ☆」

霧雨 魔理沙 VS 夢月

――勝者『霧雨 魔理沙』



## 129話 悪魔との決着

結界によって限られた空間内。先程とは打って変わって幻月の衣服はボロボロだった。

天使の様な純白の翼は煤汚れ、ワンピースの裾は所々解れ、焼け焦げていた

だがそれだけ。

——幻月の自体には傷一つ無かった

「その嘘みみたいな反則技はいつ解けるのかしら？」

「その馬鹿みたいに俊敏な動きを止めて大人しく退治されてくれたらよ」

結界内の中央で腕を組みながら呆れ顔で霊夢は返した。その言葉通り、空間ごと能力も制限された状態でかれこれ30分近く、目の前の悪魔は攻撃を避け続けている。

偶に反撃をする余裕まで見せながら

「……まあいいわ。そんな反則技ならどうせ長くは続かないでしょうから」

「何故そう思うのかしら？」

「貴女、さつきからあまり強力な攻撃をしてこないもの。力の消費をなるべく抑えたいんでしょ？ソレを維持するために♪」

穏やかに微笑みかける表情に反し、その瞳は全てを見透かしているかの様な圧力があつた

事実、霊夢は見た目以上に疲労していた。

外見上は何事もなく振舞っているが、『ありとあらゆるものから浮く事で、完全な無敵状態となる』この奥義は発動するだけでも多大な量の霊力を消費する。

時間制限付きのスペルカードルールに於いてはある程度抑えられている為かその限りではないが……。

発動したからにはこの戦いは早急に決めたかった

(コイツ、予想してたよりもずっと強い……。参ったわね、結界で囲っちゃえばある程度はイケると思ったのに)

ここで、霊夢は『余裕振る』のをやめた

(どのみち向こうは気付いている。なら下手に節約してる場合じゃないわね……！)

身構え、傍に二つの陰陽玉を展開する。

札を何枚か取り出し、結界内へばら撒いていく

「あら、やる気になった？」

「悪いけど話してる時間が勿体無いわ」

直後、霊夢の姿が煙の様に靡き、不鮮明になる。周りの空間も同様、陽炎の様に揺れ動く

「幻術……ってやつかしら」

幻月はすぐ様凜とした表情となり、周囲に意識を向ける。元々夢想転生の発動によって霊夢自身の気配は断たれている為、視覚の外へ動かれると聴覚や攻撃直前の殺気を読むしかない

隙無く構え、いつでも動き出せる態勢を整えた幻月は静かに待つ

「！」

直後、側方より大量の弾幕が殺到する。

これを前方へ飛び出す事で躲すと、今度は正面と後方から同様に弾幕が打ち出された

未だ巫女の姿は見えない

幻月は一度その場に留まり、自身も弾幕で相殺させながら死角の弾幕まで確実に回避していく

次いで前後左右から迫る大粒の光弾。少し前にあの巫女が何度か放っていた封魔作用のある霊術だろうと判断し、一層強力な力を込めて光弾を打ち出した

回避しなかったのはこの攻撃は追尾性能があると知っていたから

ズドドドオオンツツツ!!!と、轟音が響き渡り、次々と相殺されていく

「！………下ッ！」

噴煙も消えぬ内に幻月は直感で真下からくる攻撃を察知し、その場から大きく離れた。

その一瞬後に、橙色の光の柱が空間を囲う二重の結界を突き抜け天に伸びていった

「これも結界？器用なものね、巫女って言うのは………ツ!？」

突如、幻月の動きが強制的に止まった。

縛り付けられた様に固まった身体に力を入れ、首だけをぎこちなく動かし足元を見る

「な、に……？」

足元には陣が浮かび上がり、その部分に触れている足裏から膝辺りまで鎖の様に連なった札が巻き付いていた

一枚一枚が光を発し、札に触れている対象の動きを封じる拘束術だった

「捕まえた」

その声に反応し、再びぎこちない動きで前方を見る。

いつの間にか現出していた紅白巫女は、手元に一枚の札を携え目の前に浮いていた

「ホントによく動くわね。アレだけ攻撃を躲されたのは久しぶりよ」

「……なら、よっぽどこの世界は平和ボケしている様ね。その反則技が無かったら貴女を何回殺せていたかしら？」

身動きの取れない状況にも関わらず、幻月は落ち着いていた

事実、彼女の化け物じみた力を持ってしてもこの拘束は解けなかった。

博麗の巫女が扱うその多くの霊術には、退魔の力が宿っている。

従って、大なり小なり人ならざる者の力を抑制してしまう為、力技で抜け出すことができない

しかし、

「……やるならやりなさい。但し、生半可な攻撃じゃ私は倒れないわ  
「よ」

余裕を崩さず吐き出された挑発めいた言葉。

暗に『強力な攻撃を撃て』と言っているのか、不気味に開かれた口元を尻目に霊夢は言った

「端からそのつもりよ」

瞬間、その手に持つ護符が光を帯びる。

目の前の悪魔が発した言葉に若干の懸念も残るが、漸く作り出した攻撃のチャンスを逃す手はなかった。

霊夢はありつたけの霊力を護符へと注ぎ込む

そして札から発する光が結界全体を満たした時、霊夢は静かに詠唱を口にした

「~~~~~、~~~~~。~~~~~」

まるでお経の様な聞き慣れない言葉の羅列の直後、護符に注がれた霊力が飛躍的に上昇し、霊夢の身体に浸透していく

「――『神降ろし』と言う霊術がある

神霊をその身に降ろし、その力を借りる事で擬似的に神の力を行使する事ができる難度の高い降霊術であり、それを扱える者は多くはない。

降ろす神の位（人々の信仰などによる強さや知名度）によって成功する難易度は変わり、当然強力な神であるならば、より高度な神降ろしが必要となる

現状、霊夢の霊力を増幅させたのはこの神降ろしによるものであり、術の発動は成功した。

後は効力が切れる前に撃ち放つだけ

「神霊『夢想封印』!!!」

翳した掌を中心に急激に膨れ上がった霊力の塊が炸裂した。

それにより生じた光は幻月含め、一瞬にして辺り一帯を呑み込み、空間は轟音と衝撃波によって激しく震えた

先程まで穏やかだった湖の水面がまるで嵐の海の様には波打つ。

円形に広がる光は数秒後に縮小していき、空中には既に結界は無く、肩で息をする霊夢と、身体中から煙が上がりダラリと俯く幻月だけが残った

「出来れば倒れててほしかったけど……、」

弱々しく霊夢の口からそんな言葉が漏れる

「ツツ……、く、ふふふ。私の勝ちね」

幻月は顔を上げ、傷付いた身体を意に介さず笑った。

その言葉が指す通り、霊夢は力を使い果たしていた。最早夢想転生は疎か、唯の弾幕を打ち出す事でさえ厳しい状態。

先の攻撃を耐えられた時点で既に万策尽きていた

ゆつくりと悪魔の掌が向けられ、禍々しい光の弾が充填される。

空気を介して肌でピリピリと感じ取れるほどのエネルギーの塊……。

「……はあ、『遺言くらい聞いてあげるわ』とか無いわけ?」

実戦による明確な敗北……、即ち『死』を前に、霊夢は不思議と軽い口調で尋ねていた

「あら、聞いて欲しいの?」

「遺言って言うか……まあ、質問かな」

「……………」

相変わらず死の銃口を向けたまま、幻月は少しの間黙り、やがて口を開いた

「いいわ。答えられるかは別として、聞いてあげる」

「どうも」

霊夢は一度瞳を閉じ、幻想郷全体へ意識を向けた。

……伝わってくる。

普段の平和な日常から逸脱した邪悪な気配が

そして瞳を開け、静かな怒気を込めながら言う

「アンタ達が此処へ化物を寄越した目的はなに? 幻想郷を侵略でもしようって言うの?」

「……………はあ?」

返ってきたのは、そんな間の抜けた声だった

「…………何かと思えば、随分巫山戯た質問ね。化物を寄越したのはそっちでしょうに」

「……………はあ?」

全く同じ声が漏れる。

話が噛み合っていない。互いに認識している事柄が違っているのか暫しの沈黙が続く、霊夢は新たに生まれた疑問をぶつけた

「ちよつと待って。アンタ等のところにも奴等が来たの？」

「だから今更白々しいと…。」

「いいから答えなさい！不気味な姿をした髑髏頭の化物よ。来たの？来てないの？」

殺されかけていると言う立場も忘れ、霊夢は距離を詰めながら捲したたてた。

その剣幕に若干気圧されながら幻月は答えた

「……………来たわ。今貴女が言った特徴と一致する化物共がわんざかと」

「!!」

霊夢は心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

胸騒ぎがする。それも飛び切りの

「そいつ等を倒しながら進んでいたら行き着いた先がこの世界だった。だから貴女達がこの件の犯人だと思ったんだけど……………、違うのかしら？」

いつの間にか突きつけられていたエネルギー弾は消えていた。幻月も、何やらこの一連の異変に違和感を感じているようだった

「もしかして……………、これって」

霊夢がその先を口にしようとした瞬間だった



「あらく、もうバレちゃった ♪」

ズツツツ!!と幻月の片翼を貫く閃光と同時にその者は現れた

「ぐっ……………だ、誰…………ツツツ!？」

「…………ツツ」

痛みを堪え、振り向いた幻月は言葉を失った。

同様に霊夢も固まる

「はじめまして。二つの世界の住人さん」

にこりつと微笑むその笑顔はあまりにも禍々しく、この場に於いて間違いなく強者として数えられる二人を愕然とさせた

やや濁りのある長めの銀髪に、青白い肌。大きく開かれた六枚の翼が特徴的な女がそこにいた

「早速だけどこの世界、壊すわね ♪」

舞い降りた『天使』は狂気に満ちた笑顔でそう言った

## 130話 死の天使

天使は微笑みながら目の前に佇む少女二人を見つめていた。ゆつくりと背から伸びる六枚の翼をはためかせ、小さな波紋を広げながら水面上を進んでくる

それは消灯後の暗い廊下や底の見えない古井戸を覗き込んでいる様な感覚。

その纏っている空気、貼り付けたような笑顔からは、言いようの無い恐怖や不安が掻き立てられた

「…っ」

静かに、確実に距離を詰めてくる得体の知れないナニか。霊夢はその姿を目にした瞬間から臨戦態勢に入っていた

……だが現状、霊夢は直立不動のまま立ち尽くしている  
蛇に睨まれた蛙の様に身が竦んだわけでは無い。  
反射的ではあったが、確かに戦う為の態勢を整えようとしたのだ

原因は霊夢本人にもわからなかった。  
力を込めようとも、指先がふるふると震えるだけで首から下が全く動かなかった

まるで見えない力で縛り付けられている様に…

「そんなに怖い顔しちゃって、どうしたのかしら?」  
「ツッ!!」

尚も接近してくる女に、再び視線を戻した霊夢の横を、一筋の影が

風を切りながら駆け抜けた

ギヤリンツツツ!!と金属を擦り合わせた様な甲高い音が響き、悪魔の一撃が天使をすれ違いざまに捉えた

(チツ…い)

幻月は僅かにヒビ割れた自身の爪へ視線を落とし、次いで打ち込んだ部位に展開されている青紫色の障壁を睨み付ける

「……あら、貴女も『動けない』筈なんだけど」

天使はそう言って顔だけを幻月へと向けた

「!」

次の瞬間には幻月の周囲を囲むように無数の閃光が殺到していた。それは一発で、博麗 霊夢の全力の霊術をも耐え凌いだ自身の身体を容易に貫く威力がある

……だが音速を超えて迫る閃光が幻月の身体を貫く事はない。

彼女の『間合い』に入った閃光は一斉に停止し、その矛先を天使へと向けた

「お返しするわ。二つの意味でね」

一瞬後に発射速度が数倍に引き上げられた閃光が次々と着弾していく。

爆発したかの様に湖の水が吹き飛び、舞い上がった水柱が天使を包

み込んだ

そして幻月はその水柱へと突っ込む。

彼女はわかっていた。この程度の攻撃は先程の障壁で防がれてしまっているだろうと。

不意打ちとは言え自身を『容易に殺せる』力を持った相手に最早手加減は不要だった

——幻月の能力は『一定範囲内の空間の掌握』

その間合いにある空間、及びそこに干渉している物を自身の思うままにコントロールすることが出来る。有機物には効果が無いなどの例外はあれど、相手が張った障壁などを強制的に打ち消す事で防御を無効化させるなどの使い方もできる

得体の知れない相手に対して接近戦は危険だが、水柱で視界が塞がれている今がチャンスだった。

正確な位置は今も尚感じている不気味な気配を探ればいい。

両手にありつただけの魔力を込め、その気配に向けて至近距離から叩き込んだ

ゴバアツツツ!!!と湖の水が津波の様に吹き飛ぶ。突き出した掌の直線上を烈風が舞い、吹き飛んだ水塊と合わせて前方の大地を抉り取った

「ちよっ…!?無茶するわねえ!!」

いつの間にか原因不明の拘束が解けていた霊夢は、離れた位置からその光景を目にしていた。

余波で飛び散った水を腕で庇いながら文句を垂れる

徐々に治まっていく水のカーテンを前に、幻月は更に警戒を強める……まだ倒してはいない。

気配がどうこうよりも、直感でそう悟った

そして天使は不敵に笑う

「中々面白い『水遊び』だけれど、生憎と今はそんな気分じゃ無いの」

声は……、背後からだった

ズツ……!と一筋の光の線が視界に映る。

光は前方の岸辺に野球ボール大の穴を開けると、次第に縮小し消えた

……幻月は光の直線上にいた

ゆつくりと自身の身体へ視線を落とし、腹に開いた風穴を認識したと同時に大量の血を吐いて崩れ落ちた

「あぐっ……ううー!」

傷口を押さえ、その痛みに耐えながら振り返る。流れ出た血が、足元の水面を赤く染めていく

「!？」

そして幻月は目を見開いた。

眼前には掌をこちらに突きつけ、笑みを浮かべる天使の姿があった。

とどめと言わんばかりに、新たな光の弾が作り出されている

だがそんな事はどうでもよかった。

そもそも幻月は天使を見ていなかった  
視線の先には……、

「やめなさい!! 夢月!!」

重傷を負った身体に構わず叫ぶ

次の瞬間、天使の身体を背後から一本の剣が貫いた

「姉さんに何してんだクソ婆ア……!」

ボロボロのメイド服を着た少女は普段と一変し、怒のこもった低い  
声を発した。

ギリギリと突き刺した剣を捻りながら損傷を広げていく

「夢月! そいつから離れなさい!! そいつは……!」

しかし幻月は続けて叫んだ。

一見勝負は決した様に見えるその光景を目にしながら

「……あら」

何気なく呟かれた声。

一瞬にしてその場が凍り付いた

「もう一人居たのね。悪い子が」

……天使の身体を貫いた筈の剣の刃には、一切の血痕が付着してい  
なかつた

再び幻月が口を開くよりも早く、天使は自身を貫いている夢月の

『腕』に触れた

「あっ……」

——鮮血が迸る

夢月の右腕の先から肩口、更にやや胴体を巻き込む形で、彼女の右腕は消滅した。

時間が緩やかに流れる様な感覚に陥り、何が起こったかわからないまま夢月は倒れ伏した

眼前には、嘔きあがった血の雨で顔を染めながら、穏やかな笑みで見下ろす天使の姿があった

「あああああああああああッッッ!!」

最早悲鳴とも咆哮とも取れない叫び声をあげ、幻月は天使に飛びかかった

もう力が残されていない身体で。

今にも意識が飛びそうな身体を無視して。

飛びかかる勢いのまま、怒りに任せて拳を振るった

……だが天使の姿は煙の様に揺れ、消失する

拳は空を切り、態勢を立て直す間もなく後方から放たれた三本の光の矢が、幻月の身体を貫いた

「む……げ……っ」

妹の目の前に倒れ伏し、力無く名を呼ぶ。

言うことを効かない手を伸ばし、妹の左手を握りしめた

「姉妹揃ってお休みなさい」

すぐ近くから聞こえた悪魔の様な天使の声。

幻月は振り向かず、這いずる様に夢月へ覆い被さった

天使は微笑み、掌を翳す

カツ!!と、光が瞬いた

「どいつもこいつも此処で暴れすぎよ」

博麗 霊夢の発動した結界術により、天使の身体に護符で連なった光の鎖が巻きつけられる。

掌を突き出した姿勢のまま固まった天使は、徐に足元から伸びる鎖を見つめ、冷めた調子で言った

「……折角後回しにしてあげようと思ったのに」

「!!?」

その瞬間、霊夢は心臓を貫かれた様な感覚に陥った。

今まで悪魔の姉妹だけに向けられていた意識が、自分に向いた。

天使は此方を向いていない。ただ言葉を発しただけ。

それなのに。

上から物凄い力で押さえつけられている様なプレッシャーが襲う

「……」

現状、霊夢に残された霊力は僅かばかりの戦闘が可能な程度。

自身を此処まで追い込んだ悪魔【ばけもの】を、軽く捌り殺そうと



する天使【ばけもの】。

消耗した状態での拘束術など効果は無いに等しかった

……それでも。

押し寄せる圧力を振り払い、霊夢は空に向かって声を飛ばした

「ナイスタイミングよ、『魔理沙』…!!」

「ゴオツツツ!!と空気を裂きながら、湖のど真ん中に巨大な閃光が放たれる

——それは上空から

八卦炉を構え、霧雨 魔理沙は高らかに叫ぶ

「状況はさっぱりだが、助っ人に来たぜ!!」

そして静かに、『黒煙の混じった』硝煙を立てる八卦炉を見た

(……流石に無茶させ過ぎたか？マスターsparkは撃ててあと1発ってところか)

再び視線を湖へと戻す。

駆け付けたばかりの彼女でも理解できる程に、あの場には邪悪な気を放つナニかがいた。

傍らには瀕死の状態で倒れ伏す二人の少女と、明らかに疲弊の色が見える友人の姿

これだけ条件が揃えば、最大出力の魔砲をぶつ放すには十分だった

……だが魔理沙の表情は険しくなり、こめかみに一筋の汗が流れる理由は明らかだった

「次から次へと忙しない子達ねえ」

視線の先には何事もなく湖の上に浮く天使の姿。周囲に展開されていた青紫の障壁が揺らぐ様に消え失せる

「貴女も、死ぬ？」

魔理沙を、再び霊夢を……、死のイメージが襲う。言葉を発しているだけの天使に対し、全身から嫌な汗が噴き出す

天使は掌を上に向け、先程の障壁と同様、青紫色のエネルギー球を生み出した。

直径3メートル程あるその球体の表面は、死霊の様な禍々しい顔が幾つも入り混じって見えた

………わかる。

『アレに触れたら死ぬ』

「ツツ……魔理沙!!」

「くそ、おっ!!」

二人は同時に動いた。

策なんて無い。考える余裕など無い。

目の前の死に向かって反射的に動いてしまった身体に頭ではブレーキを掛けながら、なんとか食い止めようと『残り僅かな力』を、『残り1発の力』を放つ為、全力で動いた

「……皆んな仲良くさようなら ♪」

天使は微笑み、怨霊渦巻く死の爆弾を投下した

「結界『魅力的な四重結界』」

ギシツツ……、と氷が軋む様な音が響き、死の爆弾は赤紫色の結界に封じ込められた

同時に、霊夢の目の前の何もない空間から日傘を差した人物が現れる。風に吹かれて靡く金髪を押さえながら、その妖怪は言う

「危機一髪ね。霊夢？」

「紫…!？」

驚く霊夢を他所に、八雲 紫は上空にいる『友人』へ声を飛ばす

「今よ！」

「ええ」

今度は落ち着いた調子の声と共に、上空に開いたスキマから冥界の主・西行寺 幽々子とその従者が飛び出した

「妖夢、貴女ならいけるはずよ。お願いできる?」

「お任せを!...はああああツツ!!」

主人の言葉を受け、魂魄 妖夢は二本の刀の内、迷いを断ち切る短刀『白楼剣』を抜き放った。

そのまま急降下し、結界ごと邪悪な気を放つエネルギー球を一刀のもとに両断する

「幽々子様!」

「彼岸へお還りなさい」

幽々子は手を翳し、白楼剣によってこの世の未練ごと断ち斬られた怨念の塊へ能力を行使する。

淡い光に包まれた怨念は、弱々しく瞬いた後、立ち上る煙の様に消失した

「凄え...、アレを一瞬で...!?!」

目の前で起こった出来事に目を丸くして呆然とする魔理沙。その様子を後目に見ながら、幽々子は優しく微笑んだ

「大丈夫?少し来るのが遅れちゃったかしら?」

「...いやそんな、怯えきった子猫を見る様な目で見るなよ。確かに助かったけども。私は大丈夫だ!」

「でもその様子じゃ碌に戦えないでしょう?...それ」  
「!.....っ」

ヒビ割れた八卦炉を指摘され、魔理沙は押し黙った。

事実、幽々子達の介入が無ければ自分達は確実に死んでいたのだから

「随分賑やかになってきたわねー」

その声が再び耳に入った瞬間、霊夢と魔理沙は思わず身構えた。

仲間が駆け付けた事により、一瞬にも満たない僅かな時間、意識から外していた存在。

……否、外していたかった存在【ばけもの】。

天使は新たに現れた紫達を見遣り、指をぱちんつと鳴らした

ズズズ……ツツ!!と虚空より巨大な扉が出現する。

高さにして全長100メートル程の漆黒の扉からは、先程の怨念と同じ様な禍々しい気配が漂っている

紫は霊夢を後ろ手で下がらせると、険しい表情で天使を睨み付け、言った

「幻想郷へ何の用かしら? 『死の天使』を歓迎した覚えはないのだけど?」

「あら……。此処の管理者は随分と冷たい事を言うのねえ。お姉さん悲しいわ」

「巫山戯てるの? すぐに幻想郷中で暴れている獣どもを連れて出て行きなさい」

「その事なんだけど……」

天使は困った様な仕草をした後、上空に浮かぶ扉を指差して続けた

「『あの子達』、まだまだ遊び足りないみたいなのよ」

「!……、紫……扉が……!!」

「!?!」

霊夢の声に反応し、扉に視線を転じた紫の目に飛び込んできたもの……、

「……『僅かに開いた』扉の隙間から、今か今かと顔を覗かせる化物の群衆だった」

それを目にした紫と幽々子はすぐ様天使へ向けて攻撃態勢を取る

「ツツ！廃線『ぶらり廃駅下車の旅』」

「蝶符『鳳蝶紋の死槍』」

紫の背後に開かれたスキマからは巨大な鉄塊もとい廃棄となった列車が……、

幽々子の背後には巨大な扇子が展開され、蝶形の弾幕とレーザーを撃ち放った

「ふふふっ」

天使は短く笑い、もう一度指を鳴らす

そして。

「……ゴゴンツツ!!! と鈍い音が鳴り、巨大な扉が開放された」

「さあ、貴女達の『絶望』を教えて頂戴」

131話 いざ、倒れ逝くその時まで

天使の合図と共に天高く聳える巨大な扉がゆっくりと開き始め、その振動に合わせて大気が震える。

加えて、紫と幽々子の放った攻撃が天使へ着弾し、大地をも揺るがした

視線が一斉に扉へと向けられる。

今しがた攻撃を行った二人でさえも、既に着弾地点を見ていなかった

ズンツ……、と重量のある何かが大地へ落ちてきた。

皆、同タイミングでその方向を見る

「ヴヴウウ……」

猛獣の様な唸り声をあげ、立ち上がったその生物には顔が無かった。

……正確には顔の部分だけ白骨化しており、頭部が黒い靄に包まれている、優に3メートルは超えるであろう背丈の巨人。

『人型の其れ』の頭には捻じ曲がった二つの角が生え、全身が強靱な筋肉と体毛に覆われている。手は人間と同じ形状だが、足には蹄がついていた

「……まるで『ミノタウロス』ね」

それを見た紫がボソリと呟く。

ギリシヤ神話に登場する牛の頭を持った巨人を指し、気性が荒く残忍な性格に加え、人肉を好んで食らう化物の名だった

「ヴ オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、ツツ!!」

……咆哮。

遠間においても内臓が震える程の雄叫びに、霊夢や魔理沙、妖夢の3人は顔を顰める

「!」

そして牛の化物は標的を見据える。

今この場にいる者の中で『一番消耗している』獲物に飛び掛かる為、姿勢を落とし地を蹴った

ゴバアツツ!!と地面が抉れとび、ほぼ一瞬にして『霊夢』の前へ躍り出た化物は拳を握り締める

「ツ!」

霊夢は咄嗟に身構えるが、それよりも先に目の前を一筋の線が走った

シュコンツ!と竹を斬った様な軽い音

「ヴオ……オ……?」

……化物の首から上がスライドし、重々しい音を立てて地面にズリ落ちた。

頭部を失った胴体は力無く倒れ伏す

「霊夢、下がってなさい。今の貴女には手に余るわ」

冷ややかにそう告げた紫は日傘を畳み、周囲に複数のスキマを展開させる



「わかってると思うけど今幻想郷は各地に出現した化物達の所為で混乱状態よ。元凶は言わずもがな、あの天使の仕業」

そして…と、空に浮かぶ開け放たれた扉を一見しながら続けた

「あの扉の先は人間界にも魔界にも存在しない世界が広がっている。恐らくあの天使独自で創り出した世界なんでしょうね」

「……何者なの？アイツ」

「……通称『死の天使』。天使の中でも神に近い存在とまで言われている大天使の一人よ。私も実際に対峙したのはこれが初めてだけど」

ふと霊夢と天使の目が合う

「サリエルよ。遅くなっちゃったけれどよろしくね」

サリエルはスカートの裾を持ち上げながら穏やかな表情で微笑んだ

「天使って言うより悪魔にしか見えないんだけど……。」

『悪魔』なら……、まだ可愛い方だったでしょうね」

紫の頬を一筋の汗が伝う。常日頃から目にしていた余裕ある面持ちが目に見えて険しくなっている。

幻想郷の賢者ですら本気で挑まねばならない相手が目の前にいる

そいつは幻想郷を、この世界を壊すと口にした

――正真正銘の『異変』

これ迄解決してきた異変の様にスペルカードルールに守られた遊

びとは違う。間違っても勝敗の末に和解など存在しない。

勝った者が生き、負けた者は滅びる。至極単純にして残酷な、幻想郷が長らく忘れていた概念だった

「…だ、大丈夫なの？」

「さあ…。どうかしらね」

直後、けたたましい轟音が霊夢等の耳を叩いた。

それは空中に佇む扉から。

数百単位のミノタウルの群れが、雄叫びを上げながら次々と飛び降りてきていた

続いて凄まじい振動が周囲一帯に響く。

幻想郷の地へ放たれたミノタウルの群れは、仲間の死によって極度の興奮状態にあった。

近場にあった大木に指をめり込ませ、片手で軽々と引っこ抜くと、棍棒のように肩に担いだ

「貴女達の相手をするのも面白そうだけれど……、まずはこの子達と遊んであげてちょうだい ♪」

湖上空へ飛翔しながら、高みの見物と言わんばかりにサリエルは空中に腰掛けた。

それを合図としたのか、ミノタウルの群れが一斉に動き出す。

一步踏み出すごとに、その数からか地響きが爆音の様に押し寄せ

る。  
木々を薙ぎ倒し、周囲の地形を変えながら四人の獲物へと殺到した

——そして襲い来る喧騒は一瞬にして静寂へと変わる

「今日は死神達が大忙しになるわねえ」

既に『息をしていない』ミノタウルス達を見下ろしながら、冥界の主は静かに囁いた

「……」

サリエルはその穏やかな表情を一瞬だけ固め、再び和かに微笑むと幽々子へ語り掛けた

「貴女は冥界のお姫様ね。西行妖は気に入って頂けたかしら？」

「え？」

「!!？」

その言葉に誰よりも反応を示したのは、幽々子当人ではなく紫の方だった。

頭の中を様々な思考が駆け巡る

西行妖は幽々子の生前から存在していた

『気に入ったか』とはどういう意味か…。

隼斗は西行妖が元々人間界で生まれた存在ではないと言っていた意図的に送り込まれた…？

悪魔の少女と幻想郷、二つの世界を壊そうとしている天使

本来ならば神の元に使える筈の存在が、『死の天使』と呼ばれている理由

……つまりそういう事か。

ズアツツ!!!と紫から天使に向けて縦一文字の光が走る。光は空中

を凄まじい速度で突き進み、直線上にある空間を斬り裂いた  
サリエルは掌をかざし青紫色の障壁を展開させ防ごうとした

……だが。

「！」

次元をも斬り裂く『境界の斬撃』は、いとも容易く障壁を両断し、サリエルの身体を突き抜けた。

脳天からへソ辺りに掛けて一筋の線が入り、まるでチーズの様に左右へ裂けていく天使の身体

「やった！」

それを見た魔理沙が叫ぶ

しかし紫は依然表情を険しくしたまま別の方向を睨み付けて言った

「つまらない茶番は止めなさい」

それに応答する様に、地上の何も無い空間から無傷のサリエルが現れ、入れ替わる様に身体の裂けた水人形がバシヤリと湖に落ちた

「あら、お気に召さなかった？」

「……『お前』だったのか」

「……？」

天使の言葉を無視して、紫は爆発しそうな感情を抑えながら震える声を洩らす。

あの惨劇を怒りに任せて叫ぶ訳にはいかない。その真実を、生前の記憶が無い友人に聞かせてはいけない

だから……、

「……………数年前、幻想郷を襲った怪異は貴女の仕業ね…？」

敢えてズラした。

怒りの生じる要因を。

一連の悲劇の原因が目の前の存在ならば、その他にも追及すべき事は腐る程ある

「賢者の貴女にしては今更な事聞くのね。規模は違えど、手口は同じなんだし態々確認するまでもないと思うけど？」

あつけらかんと返ってくる言葉。

紫は一度後方にいる霊夢を一見し、ある疑問を口にした

「あの日を境に当時の博麗の巫女が失踪している。異変解決に向かったつきり戻ってこなかった。……黒幕の貴女が知らないわけが無いわよね？」

「!!」

そのやり取りは当然、後方の霊夢の耳にも入っていた。生死不明のまま行方不明となっていた身内の存在。

自然と足が一步前に出てしまう程に知りたい答えだった。

その反面、最悪な答えが待っているかも知れないという恐怖にかられながら……。

「巫女？居るわよ、今『此処』に」

「……………えっ……………」

思わず聞き流してしまいそうになった。

そのあまりにも軽く、簡単に告げられた事実には、霊夢の思考が一瞬停止する

「会いたい？…なら少し早いけどお披露目といこうかしらあ」

サリエルは上空の扉へ向けて指を鳴らした。

直後、扉から一つの影が飛び出した。

それは今までの化物達と比べてあまりに小さく、華奢なシルエット。

50メートル強はあろう高度を重力に従い落ちてくる影は、一切の音を立てずに着地した

「あっ……………」

思わず唇が動く

「暁美……………お姉……………ちゃん？」

霊夢と同じく紅白色の巫女服を身にまとった人物は着地姿勢からゆっくりと立ち上がり、俯いていた顔を上げた

「!？」

——それは白い仮面だった

半分程欠けている髑髏の様な面をつけた『博麗 暁美』がそこに立っていた。

仮面から覗く眼球は闇の様に黒く、瞳は血の様に紅い。

「驚いたー？久しぶりの再会だもんね？嬉しいよね？」

「……曉美に、何をしたのツ……？」

紫は沸々と湧き上がる怒りを抑え、何とか冷静を保っていた。自分が冷静さを欠けば、不測の事態から霊夢を守れない

「何って……、ちよこつとだけ弄っただけよ？身体の中に私の力を埋め込んで兵士になってもらったの。処置が終わって顔を仮面が覆うまで『悶え苦しんで』いたけどね ♪」

一瞬。

そのワードが、ほんの一瞬だけ紫の怒りを引き上げ、思考に空白を生じさせた

「…、ツ」

再び意識を取り戻した紫は頭をクールダウンさせようとした……。させようとしたのだが、ほんの僅かにある感情が漏れ出てしまった

……天使に対する『殺意』。

その殺意に兵士は反応した。

一瞬前までサリエルの隣にいた曉美の姿が消失し、『完璧な攻撃態勢を整えた状態』で紫の前に現れた

腰だめに構えられ、最速で放てるように脱力された拳。ドス黒い力の塊を纏った拳は、刹那の瞬間に放たれた

……拳の先が、遠方に掛けて消し飛ぶ。  
まるで空間を丸く切り抜いた様に、直線上の大地や木々が抉れ、消滅する

パァンツツ!!!と、数瞬遅れて空気が破裂した

「……ッ!!」

紫は殆ど視認できなかつた攻撃を、紙一重で回避していた。

空中から紫達のやり取りを冷静に見ていた幽々子の咄嗟の介入（駄目元での能力使用）により、一瞬にも満たない僅かな時間、暁美の動きを遅らせた事でスキマを開く事が出来たのだった

「紫……ちよつと、大丈夫……!?!」

慌てて霊夢が駆け寄る。

紫のドレスの背中から脇腹に掛けてが出血で赤く滲んでいた

霊夢を抱えてスキマに飛び込む。

『これだけ』の事を実行するには、あの時間は短過ぎたのだ

「紫、動けそう?」

決して前方から視線を外さずに幽々子は尋ねた

「……ええ。助かったわ幽々子」

身体中に広がる鋭い痛みを堪え、立ち上がる。

相変わらず穏やかな笑みを崩さないサリエルの隣には、人という存在から脱した瞳を此方に向ける博麗 暁美の姿があった。

追撃してこないところを見ると、先程の一撃は単純に殺意にのみ反応したという事。



まるで殺意を感知して動くロボットだ

幽々子は普段のおっとりとした性格から一変し、冷静な物腰のまま囁いた

「あの二人には私の能力が通じない。此处は撤退した方がいいわ」

尤もな意見だった。

負った傷自体は気力でどうにかなる。

だが、この場にアレとまともに戦闘が出来るのは自分と幽々子だけ。

最大の強みでもある幽々子の能力も、雑兵にしか効果がないのであれば意味がない。

天使は暁美を兵士だと言った。

もしもあのレベルの奴がまだ出てくると言うのであれば圧倒的に分が悪い

何より霊夢や魔理沙を狙われたら守り切れる余裕が無かった。従者の妖夢も恐らく太刀打ち出来ないだろう

「つつー！仕方な……ッ」

紫の選択を、天使の言葉が遮る

「逃・げ・た・ら、その瞬間この世界を終わらせるわよく？」

「ッ!!？」

退路は潰された。

もう戦うしか道が残されていない

「……………幽々子、ごめんなさい。私の読みが甘かったわ」

「私は亡霊よ？元より死の恐怖なんて無いわ」

幽々子はそう言つて笑い、従者の隣に並んだ

「妖夢、貴女はあの娘達の支援に回りなさい。気を緩めては駄目よ」

「……………しかし！私は幽々子様をお護りする為に此処へ……………いえ、すいません」

妖夢とてわかつていた。

あの天使と巫女は明らかに次元の違う存在だと。

こんな日が来た時の為に毎日刀を振つてきた。

師である祖父の教えを忠実に守り、絶え間無い努力をしてきたつもりだ

わかつていた。

自分は未だ主君を護れる程強くは無い。

祖父には到底及ばない。

強者が強者の相手をする。適材適所だ。

……………ならば自分は弱者か？

そんな葛藤があり、出た言葉だった

「……………だから幽々子は否定した

「貴女は強いわ妖夢」

「!!」

それ以上の言葉は不要だった

「お願いできる?」

「……はい!!」

戦う意思を見せる面々を眺め、死の天使は不敵に笑う

「では改めまして、『開戦』といきましょうか!」

サリエルは陽気に言い放った。開戦という言葉を強調気味に。それはこの戦いに於ける本当の幕開けを意味していた

『グ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ  
オ オ ツ ツ ツ!!』

巨大な扉から咆哮が響き渡る。

先程のミノタウルの比ではない、幾千もの数の化物が、あの中で雄叫びをあげている

次の瞬間、空が黒色に染まった。

それは雨の様に降り注ぐ化物の大群であり、次々と大地を埋めていく

魔理沙は過去に、もしも弾幕で自信の分身を作れたら相手はどんな顔をするだろうか?と考えた事がある。弾幕の数だけ敵が増える。勝負になる訳がない。すぐに馬鹿馬鹿しいと思い取っ払った

……今自分はどんな顔をしているだろうか?

ズズツ……、と重々しい音が響く。

未だ開いたままの巨大な扉から、その『サイズに合った』巨人が姿を現した。

体色は白く、人の形状はしているが所々人間離れした部位が目立つ  
体長80メートル程の巨人

「うひゃん」

絶望はすぐそこまで来ていた

## 132話 死地

周囲から化物達の息巻く音が鮮明に聞こえてくる。陸上は勿論、湖も空すらも異形の化物で埋め尽くされていた。

まるで閉鎖空間に定員一杯まで押しかけた様な状況に加えて、その全てが敵。

数千数万といる化物達に対し、此方の陣営は五人。内、まともに戦闘が出来るものは三人しかいない。

上空の扉には此方を監視したまま動かない100メートル近い巨人。

地上には一拳で景色を削り取る力を持った巫女まで控えている

その全てを統率する天使は無慈悲に言い放った

「やあ、いきなさい」

その瞬間、周囲を包む空気が一気に重圧へと変わる。まるで飛瀑の音が間近で炸裂しているかの様な轟音と共に、化物達が雄叫びをあげて殺到した

「幽々子！能力は効かないの!?!」

「……瞬間的には無理みたい……!」

個体差はあれど、幽々子の死を操る能力は効いていた。だが先程のミノタウルスの様にはいかず、僅かに耐えられてしまう。それでも掛け続けていれば発動から数秒のタイムラグの後に倒れるのだが、それではこの数を相手取るには効率が悪い

そして、目の前に赤く光る二本の閃光が走った

ガキイイツツ!!と、甲高い音が響き渡る

厄介な能力を持つ幽々子を逸早く仕留めようと飛び出してきた暁美。

その拳の一撃を紫が障壁で防いだ音だった

「紫……!」

あまりの衝撃と重圧に顔を顰めつつ、紫は言った

「久しぶりに会ったと思ったら挨拶の一つも無いなんてつれないじゃない? 暁美」

「……」

返ってくるのは沈黙のみ。

人形のように表情一つ変えない暁美は、障壁に押し当てている拳を瞬間的に打ち付ける事で、いとも容易く障壁を砕き割った

「隼斗直伝の技は健在ってわけね……!」

後方に飛び退く紫目掛けて五発の突きが打ち出される。どれも身体を中心である正中線を狙ったものであり、速過ぎる連打は全く同じタイミングで飛んできた

対して紫はこの追撃を予期していた。

そして反応する。

『加速と停止』、『エネルギーと衝撃』の境界を操り、インパクトの瞬間に発生する撃力を極端に弱めた

そうして手応えを殺された事で、違和感を感じた暁美は僅かに残心の動作を鈍らせてしまった。その一瞬の隙を突き、紫は指先を水平に振るう

ゾンツ!!と、暁美の足下に六芒星の陣が浮かび上がり、赤紫色の光を発しながら天高く伸びた

「……………」

光の柱に閉じ込められた暁美は抜け出そうと結界の内側に手を伸ばすが、触れた途端拒絶するかのように弾かれてしまう

「その場の空間だけ周りから切り離れたから流石の貴女でも簡単には抜け出せないでしょ？」

紫の指先が淡く光を帯びる。すると結界の内壁に無数の目が現れた。目玉は全て、結界を壊そうと拳を打ち付ける暁美を凝視し、結界内をスキャンする様に瞬き始めた

（あの白い仮面……、入り込んだ天使の力が表面上に浮き出ているのね。……………まだ間に合うか……!）

暁美が放つ力の質は、天使によってその殆どが侵食され、妖力と化していた。

僅かに残留する霊力も、いずれは妖の色に染まってしまう。

だからこそ、まだ助け出せる可能性も残されていた

——暁美の魂に取り付いた妖としての部分を切り離す

成功する確証はない。

そもそも暁美がこの状態になってからどれ程の時間が経過したかもわからない。

もしかしたら僅かに感知できる霊力も、残留思念の様に表面を漂っているだけで、妖としての力が完全に魂と融合してしまっているかも知れない

……解析完了。

結界内に現れた無数の目は閉眼し、消失する。結果を知った紫は一層気を引き締めた

「貴女には帰って来てもらおうわよ。 暁美……！」

暁美には人間としての力が残されていた。

まだ助けられる。

その為に紫は本腰を入れる必要があった

過去に藤原 妹紅に取り付いた妖怪『牛鬼』を引き剥がした時の様に、暁美の体力を極限まで削り、抵抗力が弱まったところを断絶する人の身でありながら、妖怪をも圧倒する力と技を合わせ持つ歴代最強の巫女を相手に、最早手加減などと言う気遣いはしている余裕がない

「！」

先程と同様、暁美の拳にドス黒いエネルギーが溜まっていく。空間ごと切り離れた結界は容易く突破出来るものではない

しかし。

背筋に急激な悪寒がはしり、紫は反射的に横へ飛んだ

ゴオツツツ!!!と、身体の真横を黒い靄の混ざった空気の塊が通過する。

圧縮された衝撃波は、地形を変えながら通過地点にいる化物諸共粉砕した



(境界を貫いた!?…マズイ!次がくる!!)

粉々に砕け散った結界の破片が降り注ぐ中で、暁美の赤く光る瞳と目が合った。

構えが突きを打つ前に戻っている。

体勢を立て直していない今の状況では回避が間に合わない

再び破壊の一撃が放たれる。

拳から発生する衝撃波は放射状に広がり遠方まで及ぶ為、後方は勿論、最早側方に逃げるだけでは躲し切れない

「…!」

だから紫はその場から動かなかった。

そして一つのスキマを展開する。

次元を捻じ曲げ、『入口と出口を繋げた』スキマの口へ、黒い衝撃波が吸い込まれる様に消える

「返すわ」

直後、暁美はスキマから吐き出された衝撃波をその身に受け、後方の化物達を巻き込みながら大きく吹き飛ばされた。

湖の上を水切りの様に何度もバウンドし、対岸で漸く足で踏ん張り減速する。

そして唇から流れる血を拭いながらゆらりと立ち上がった

(カウンターでモロに入ったのに効果が薄い?…いや、そもそも今の暁美の状態ではダメージを認知出来ているのかも怪しいわ)

紫は暁美の腹部に視線を転じた。

たった今反撃を受けた腹を黒い靄が覆い、傷の治癒を行っている

(痛覚を感じない上にある程度のダメージは修復できるって訳ね……。つまり段々と侵食の進行速度が増してきているという事。あまり時間も残されていないか……！)

修復が終わり、暁美は姿勢を落とした。

紫との位置関係は湖を挟んだ対岸側だが、今の彼女ならば一足跳びで事足りる

「……」

周囲からは扉から溢れ出た化物達の雄叫びが聞こえ、仲間達が其れ等と対峙している。

現状はまだ持っているが、此処にあの天使が加われば状況は一変。忽ち惨劇の舞台と化してしまう。

一刻も早く暁美を無力化して加勢に回る必要があるが、此方も一筋縄では行かない

(……隼斗)

一瞬脳裏を過ぎった人物

振り払い、意識を集中させる

……同時に対岸から博麗 暁美が砲弾の様に飛来した

「ふうふう」

サリエルは不敵な笑みを浮かべ、目の前に広がる光景を楽しんでいた。

圧倒的な数の暴力を前に、対抗するたった数人の少女達。今のところ劣勢の色は見られないが、彼女にとってそれを覆す事など造作も無い事なのだ

(まあ、あの子達がこの状況下で未だに生き延びられているのは亡霊のお嬢ちゃんの方が大きいかしらね。一応強い個体を集めたつもりだったのだけど……。)

現在扉から現れた化物の数は、全体の2/3まで減っていた。だが同時に化物達の攻撃も苛烈なものになってきている。

四方八方から迫り来る化物の先頭を走っていた一角が、糸の切れた人形の様に倒れ伏す

「……」

その中心に浮遊する幽々子は、心なしか表情に疲労の色を浮かべ、後続を走る化物の群れへ弾幕とレーザーを放ち牽制していく

(……流石に余裕が無くなってきたかしらね。数が多過ぎるわ。………それに)

幽々子は上空に聳える扉を見上げた。

そこには何故か待機したまま動かない白い体表の巨人。

天使の指示を待っているのか、唯の気まぐれなのか。恐らく前者の方だが、それならば何故天使は指示を出さないのか。

あの巨人が介入してきたら、間違いなく自分は巨人に集中するしか無くなる。能力が通用するかもわからない。

それほどの巨人と周りの化物達との戦力差は開いていた

(…………何故?)

「正解は、…………『私の気まぐれ』でした ♪」  
「!？」

念頭で呟いた疑問に応答があり、幽々子は思わず天使へ向き直った。

天使は笑う。

悪戯好きの子供が、新たな遊び【悪戯】を見つけた時の様に

ゆっくりと。

焦らす様に。

伸びる。

天使は掌を上空の扉へ向け、お辞儀をするかの様に前へ倒した

ガゴオオンツツ!!!と、凄まじい大音響が響く

その場の誰もが。

化物達ですら、その動きを止めて一齐に上空にある扉を見上げた  
それは半分程開いていた扉に巨大な白い腕が宛てがわれ、荒々しく  
開け放たれた音だった。

今まで地上の様子を静観していた巨人。

赤黒く光る二つの目玉を幽々子達にそれぞれ向けた

「…………」

この瞬間、巨人は『静観する者』から『兵士』へと成り替わった。それまで鳴りを潜めていた圧力が一挙に押し寄せる

そして。

巨人は何の躊躇も無く扉から飛び降りた。

地上に在るであろう主君や、同胞達に構わず

ゴオツ!!!と、凄まじい衝撃の波が地上を襲う。巨人の着地と同時に、『肉片』の混ざった土が舞い上がり、周囲一帯に土砂の雨を降らせた

「あらあら、この子っただらはしゃいじやって。仕様がないわねえ」

サリエルは母親の様な穏やかな笑みを浮かべ、飛散した泥によって汚れた自身の衣服に視線を転じた

「……………んく、お仕置ぎー」

サリエルはそう言って軽く指を鳴らす。

同時に大木がへし折れた様な鈍い音が響き、巨人は膝をついた。

片足の膝から下が本来曲がるはずの無い方向へ曲がり、今にも捻り切れそうな状態となっている

「何よ……………、一体……………」

霊夢は思わず目を反らし、そんな言葉を漏らした。

すぐ近くにいる魔理沙や妖夢の表情を確認する余裕は無いが、きつと同じ様な心境だろう

「……………」

だが対照的に巨人は痛がる素振りを一切見せること無く、捻れた足を無視してもう片方の足で立ち上がった

そしてビニールテープの様に揺れる下腿部は、ある瞬間を持って軟体動物の様に畝り、小気味の良い音を立てながら元の状態へと戻った  
「あの巨体に加えて再生まで……。いよいよ本格的に困った状況ね。差し詰め今のはそれを見せつけるデモンストレーションのつもりだったのかしら」

幽々子はそう呟き、妖夢等の前に出た。

紫の手が塞がっている今、この巨人と戦えるのは自分だけだ。

戦闘の経験値は少ないながらも、伊達に人より長く生きてはいない。  
い。

飽くまで冷静に自身を保つ

……例え、『能力が通じない』強敵と対峙する事になっても

「幽々子…様…？」

不安気な声を漏らす妖夢へ、幽々子は振り返り、

「大丈夫。貴女達は死なせないわ」

何処までも優しく、温かい声色でそう言った。

だがそれでも妖夢の胸騒ぎは治らなかった

見てしまったのだ。

飄々としており、常にペースを崩すことの無い主君の『固く握られた拳』を。

周囲では巨人の参戦により、一時は様子を見ていた化物達が再び動き始めていた

「…………ツ」

刀を握る手に力が入る。

今自分が命じられているのは、主君と肩を並べて戦うことでは無い。

化物達から後方の少女二人を護衛する事だ

『切り替えろ、意識を乱したままでは足元をすくわれる』

剣の修行中、師である祖父からよく言われていた言葉だ

自分が足を引っ張るわけにはいかない

仲間を守る為、そして幻想郷を守る為。

同じ信念を持って戦っている主君とその友人に代わり、自分にしか出来ないことを成し遂げる

「…………二人とも私から離れないで。向かってくる奴は全て斬り伏せてみせるわ……!」

そう言つて構えをとる妖夢の隣へ、それぞれ陰陽玉とビットを展開した霊夢と魔理沙が並ぶ

「…………魔理沙、無理して倒れても知らないわよ?」

「…………お前が言うな。大して回復してないのはお互い様さ」

「…………貴女達大丈夫なの?」

妖夢の問いに、二人は親指を立てながら同時に答えた

「助かったわ(ぜ)」

ジリジリと距離を詰めてくる化物に臆する事なく、三人の少女は背中合わせで構えた

「今日は厄日だわ」

「ホントだぜ。幸運の神様とやらの職務怠慢じゃないか？」  
「同感」

頃合いを見てか、一匹の化物が急に加速し襲い掛かる。それを皮切りに他も一斉に押し寄せた。

三人の身体と表情が自然と強張る

……だが前に出た。

『『夢想封印』!!』

『『オーレリーズサン』!!』

『『迷津慈航斬』!!』

退魔の力が宿る巨大な光弾が、マシンガンの様に打ち出される魔法弾とレーザーが、妖力の注ぎ込まれた巨大な刀身が、殺到する化物の群れへ叩き込まれる

炸裂し、粉塵が舞う。

三人は一斉に飛び出した



## 133話 二人の師匠

暁美の回し蹴りが、スキマから飛び出した廃列車と衝突する。

周囲を爆風と衝撃波が襲い、ぐしゃぐしゃにひしゃげた列車が錐揉み状に回転しながら遠方までぶっ飛ばされた

そのまま爆発的な脚力で瞬時に紫の前に躍り出た暁美は、手先を尖らせ、胸の中心に向けて突き出す

紫は後方に飛びながら移動先に開いたスキマへ飛び込む事で此れを回避。

同時に暁美を囲む様にスキマを配置し、カウンターとなるタイミングで一挙にレーザーと弾幕を放つが、暁美はいとも容易く包囲から脱した

(躲した!? タイミングは完璧だったのに……いくら何でも身体的スベックが高過ぎる!!)

紫がスキマの空間へ逃れた事で、暁美はその場に立ち止まった。

そして仁王立ちのまま、やや俯き加減の状態で静止する

(止まった……?)

ゆらりと。

暁美は頭だけを動かし、別次元に身を隠している筈の紫を見据えた。

同じ場所、同じ座標でも次元が違えば干渉することは出来ない。紫はそれを逆手にとり、スキマを移動手段かつ安全地帯として使用している。

詰まる所、紫本人が意図して行わない限り、普通なら視認は疎か存在を認識する事すら不可能なのだ

別次元で紫が存在している場所へ、瞬時に移動する暁美

(しまった！暁美の能力は……！)

黒い靄に覆われた腕が伸びる。

暁美は虚空から次元の壁を越え、紫の頭を鷲掴みにして引き摺り出した

「放しなさい……ツツ!？」

抵抗しようと腕を掴み返す紫の頭に、万力の様な力で暁美の指が食い込む。

みしみしと嫌な音が脳内で響き、徐々に視界が揺らぐ。

更に暁美は一度空中に持ち上げ、そのまま地面へ叩きつけた

「ぐっ…!？」

凄まじい衝撃が襲う。

チカチカと暗転を繰り返す視界に続き、それまで腕を掴んでいた手から力が抜け落ちた。

暁美は腕を脱力した状態から短く、一瞬だけ息を吐き、紫の胴目掛けて振り下ろした

「がっ、あぐふっ……うあ……っ!？」

呼吸が止まり、口から大量の真っ赤な液体を吐き出した。今の一撃で内臓全てが均等に叩き潰された様な感覚が鈍痛として広がっている

嘗て、師である終 隼斗から教わり、独自で昇華させた『内臓破壊』と言う技だった。

身体を痙攣させ、意識を手放しかけながらも、なんとか踏み止まる。

反撃に出ようと展開しかけていたスキマは保持出来ず消滅した

(思考が……定まらな……い……。兎に角……動かないと)

策を講じようとも思考が働かない。固めた側から崩れていく。

頭部に極度の負荷が掛かった為か、全身の感覚が空気を吐き出す風船の様に抜けていく

僅かに映る視線の先では、片方の腕を視界の上部に伸ばし、もう片方の腕を振り上げている暁美の姿があつた

朦朧としている中でもわかる

……とどめだ。

次に紫の脳内に浮かんだ言葉は「呆気ない」、だつた。

それは今まで作り上げてきた『生涯』などと言う大それたものではない

……今この瞬間、この戦いに於ける自分が、だ

決して勝てない戦闘ではなかつた筈だ。

自分とて長年生きてきた大妖怪の一人。

遣り様などいくらでもあつた

無意識の内に、暁美をなるべく傷付けない方法を模索していたのかも知れない。

その結果がこのザマだ

……人と妖怪の動乱の時代に生まれ、共存を目指しつつも時には冷酷になれた時代が懐かしくすら思えた

「……あ……け……、美……」

名を呼び、ゆっくりと紫の掌が暁美の頬に触れる

「……」

返答はない。表情も変わらない。  
赤く光る瞳には、紫の声は届かなかった

(……………後は頼んだわ。……………隼斗)

．  
．  
白い巨人を前にして、肩で息をする幽々子。だが巨人は地上に降り立ってから現在まで、幽々子達に一切の攻撃を行っていないかった。そう、巨人『自体』は…。

巨人は身体を少し反らし、大きく息を吸い込んだ

「……………もうこれ以上は…!!」

背後に大量の妖力で形成した死蝶を形成し、一斉に打ち放つ

同タイミングで巨人の口から吐き出されたモノ…………。

———化物達の卵だった

卵は空中に吐き出された瞬間から羽化し、地上に到達する頃には完全な状態で誕生を迎える。

唯でさえ数の多い化物が、巨人によって半永久的に増え続けてしま  
うのだ

今となつては幽々子等が減らしてきた分を大きく上回る数が補充され、最早一方的な消耗戦になりつつあった

少しでも新たな増兵を減らす為、千単位で吐き出される卵に向けて、幽々子は能力を反映させた死蝶の弾幕で応戦する

勿論、初見で化物を生み出す能力持ちだと分かった瞬間から、巨人には最優先で倒さなければならぬ相手として持てる全ての攻撃を行なった。

だが圧倒的な巨体と再生能力によって、その全てが唯力を消耗するだけの結果に終わってしまった

(やっぱり全ては殺しきれない……！)

大部分は相殺できた。しかし掬った水が指の隙間から零れ落ちる様に、確実に討ち漏らしが発生してしまう。

その何度目かになる討ち漏らしが、化物達の勢力を飛躍的に上げていく

「くそーゴキブリみたいに湧いてきやがって!! 限度ってあるだろ!!」

そう悪態づく魔理沙は、懐にある壊れた八卦炉を握りしめた。

十八番である魔砲は、恐らく後一発は撃てる。撃てば続々と群がってくる化物の一角を吹き飛ばす事が出来るだろう。……が、逆に言えばそれで打ち止めだ。

工場で大量生産される機械部品の様に増え続ける化物には、さしたる被害にすらならない

そうして尻込みしている魔理沙の死角から、化物達は容赦なく己の武器を振るう

ガツ!!と、間に割って入った霊夢の障壁と化物の爪が衝突する

「魔理沙！集中して!!」

「す、すまん」

ここで霊夢が防御に回った事で、三人分の防波堤に綻びが出来てしまった。

その部分を狙って化物達は一齐に攻撃を集中させていく

「ちよ、ちよっと！タイム！タイムツ！」

障壁越しにくる怒涛の攻撃に堪らず叫ぶ霊夢

『『未来永劫斬』!!』

化物の雑踏へ向けて、一筋の影が飛び出した。

影は疾風のように化物の間を駆け抜け、擦れ違いざまに斬撃の乱舞を叩き込んだ

「半霊……！」

「止まるな!!」

魔理沙の言葉に妖夢は叫び返す。同時に背後から爪を振り下ろす化物を、身体を駒のように回転させながら側方に回り込み斬り倒した

「死にたくなかったら動きなさい!!」

続けて叫ぶ。

こうしてる今も、化物達は四方八方から襲い来る。一瞬たりとも気を許す時間が無い程に。

魔理沙と霊夢は一瞬だけ互いに顔を見合わせて頷き、すぐ様背を向けて駆け出した

……直後だった。

ゴツ!!と、少女等三人の視界の端で、何かが地面に打ち込まれた。三人とも足は止めず、瞬間視線を横へ向ける  
そして。

「……………えっ?」

先程まで勇猛果敢に戦場を駆けていた銀髪の少女はその場で『立ち止まった』。

砂塵が晴れ、目の前に広がっているものは、少女にとって余りにも……………、

「あ……………、ああ……………」

先程まで仲間を激励していた少女は震える唇を必死に動かしその名を叫んだ

「幽々子様アア!!」

……………余りにも過酷な光景だった

「あああああああッッ!!」

周りの化物には目もくれず、妖夢は地に倒れ伏す主君の元へ駆け出した

その瞬間、ついさつきまで妖夢が立っていた地面が直径5メートル程爆ぜ飛び、そこにいた化物は凄まじい衝撃を受け吹き飛んだ

「な、何が……………」

霊夢と魔理沙は思わず上へ視線を転じる

指先から赤黒い光を放つ白い巨手が見えた

光はやがて光度を増し、その先の空間が揺らぎ始める

「!?」

二人は咄嗟に全力で横へ飛んだ。

そして目の当たりにした。一瞬後に、赤黒い力の塊が高速で自分達のいた地面を吹き飛ばす瞬間を。

余りにも速過ぎる為、よく見ていないと何が飛んできたのか分からない程だ

「……………ここに来て、今更攻撃してくるのかよ…っ!?!」

魔理沙は絶望の混じった声色で呟いた

先程まで立ち尽くし、化物共を生産していた巨人は、虫の様に冷たい瞳で見下ろしていた。

人間は虫を殺す時、態々全力を出すまでもなく指先の力だけで簡単に潰す事できる。

それは生まれつき持っている力や技ではなく、単純に圧倒的な体格差故。

巨人にとって足下で蠢いている小さな命など、最早敵として相対する事すら馬鹿らしい存在なのだ。

故に、妖夢や霊夢達への攻撃を『外した』のも、単に的が小さ過ぎて狙い辛かったから

妖夢は横たわる幽々子の肩を揺すり、必死に呼び掛けた



「幽々子様！しっかりと下さい！幽々子様!!」  
「うう……」

僅かに発せられた呻き声。

幽々子は流血する額を押さえながら上体を起こした

「……………大丈夫…。少し貰っちゃったけど直撃はしてないわ。殆ど余波で吹き飛ばされただけ……」

「少して……！そんなにぐったりしてるじゃないですか……………っっ！」

一見、外傷は額の傷だけに見えるが、それとは別の要因によって幽々子は弱っているようだった

(これは…、肉体的ダメージじゃない……。まるで魂を喰われたような……………まさか、あの巨人は……………！)

幽々子は自身の違和感に気付き巨人を見上げた

巨人は首を傾げ、今度は掌に赤黒い光を集中させ始めた。指先と掌では格段に攻撃範囲が広がる。放たれてから回避行動を取っていは確実に間に合わない。

霊夢達の表情が見る見る狼狽したものへと変わっていく

「あらあら、可愛い顔しちゃって。ふふっ」

その光景を楽しそうに静観しているサリエルは、一興とばかりに幽々子を指差し告げた

「次は亡霊のお姫様を狙うから頑張って避けてね？」  
「!？」

直後に放たれる赤黒い光。

だが同時に幽々子の目の前に複数の護符が投げ込まれ、光との間に障壁が出現した

「きゃっさと立って!!」

一拍遅れて霊夢は障壁の内側に滑り込みながら叫んだ。

しかしこの障壁は押し寄せる赤黒い光を防ぐ為のものでは無かった。横合いから閃光が奔る

「打ち止めだこの野郎オオオ!!」

真上から降って来る赤黒い光に対し、斜め下の角度からぶつける形で魔砲が放たれた

仮に障壁で防御しようものなら、コンマ一秒足りとも持ち堪える事は出来ない。

仮に魔砲を正面から衝突させていれば、均衡すら成立せず一瞬で押し負ける

だから防ぎ切る必要など無かった。

全力で横腹にぶつかり、その軌道を逸らすことさえ出来ればいい。軌道が逸れ、近場に着弾した際に生じる余波から身を守ればいい

ガガガガガガガッツ!!!と、魔砲が光にぶち当たり、筒花火の様に弾けたエネルギーが飛び散る。

そして魔理沙の全力の魔砲は、ほんの僅かに光の軌道をずらし、それに合わせて霊夢は障壁の向きを変えた。

直後に轟音と共に凄まじい衝撃波が襲い、すぐ近場の地面に巨大なクレーターが出来上がった

「次は今のを百発くらい撃つから頑張つて避けてね？」

間髪入れずに、先のトーンと変わらない声色で、気軽に、天使の言葉はその場の全員の思考を停止させた。

生きるか死ぬかの局面を乗り切り、安堵の言葉さえ口にしていない少女達の頭上では、辺り一帯を照らす程の赤黒い光が集束されていく

完全に焼け切れ、熱を帯びている八卦炉を魔理沙は気に留めず掴んでいた

何とか立ち上がろうともがく幽々子の前に立ち、力無く刀を握る妖夢の姿があった

数日前、師から投げ渡された『御守り』を、霊夢は無意識のうちに握り締めていた

(……幕引きね。賢者の方も間も無く片が付きそうだし。こっちは折れちゃったかな?)

サリエルは少女達の絶望しきった顔を満足気に眺めた後踵を返した。

その際、攻撃準備を終え、命令を待っている巨人に向けて目配せで合図を送った

「さようなら。貴女達の『絶望の味』、中々良かったわよ?」

振り返りもせず立ち去って行くサリエルの背後では、どうする事も出来ない少女達に向けて数多の光の塊が降り注いでいく

その一瞬前の出来事だった。

魂魄 妖夢は確かに聞いた

「最後まで刀を握っていた事だけは褒めておこう。……だが、まだまだだな」

優しくも厳格な声を。

揺らぐ視界の中で、とどめの拳が振り下ろされる瞬間、八雲 紫は確かに見た

「ギリギリセーフか？紫」

振り上げられた拳を掴み、此方を見下ろす男の姿を

直後、霊夢達の頭上に殺到していた大量の赤黒い光の塊が、一つ残らず塵へと変わった

紫にとどめを刺そうと拳を握っていた博麗 暁美の身体が、一瞬で上空に放られた

——その二人は。

「お久しぶりです。幽々子様」

「ありや、ボロボロだな。大丈夫か？」

「――師である二人の男は優しく語り掛けた

「師匠っ……嘘……、おじい……ちゃん？」

「何とか生きてるわ……。出来ればもう少し早く来て欲しかったけど」

「――二人は、ゆつくりと少女達に気骨のある背を向け、目の前の敵と対峙する

「後は私が引き継ぎましょう」

「後は任せな」

絶望を塗り替える言葉がその場を包んだ

## 134話 反撃の狼煙

空中へ放られた暁美は地上から100メートルの位置で漸く体勢を立て直すと、そのまま落下し、綿毛の様にふわりと着地した。『気が付いたら』上空で空を仰いでいた暁美の前方には、『恐らく』自分を投げ飛ばしたであろう男が此方に背を向けて立っている

「治癒術を使うだけの余裕はあるか？無理そうなら俺がするぜ」

隙だらけ。

男は意識すら暁美に向けていない

「……大丈夫よ。それより暁美を……っ!」

紫の視界に飛び込んでくる黒い影。

拳に莫大なエネルギーを集束させた暁美が、今も尚自信を眼中に留めていない男に向けて、破壊を叩き込む為迫っていた

一瞬遅れて空気の破裂する轟音が響く

拳の先を遠方に亘って消し飛ばす程の衝撃波を生み出す一撃は、しかし、男の背で止まっていた

「……暁美、てめエ何やってんだ？」

柸 隼斗から静かに、そして重々しい声が響く。

途轍もなく『堅い』壁にぶち当たった衝撃は、それより先へ突き進むこと無く、すぐ下の地面を抉るだけに留まった

「…」

暁美の目線が自然と足元へ向く。

唯その場に立っていた男は微動だにしていない

寧ろ…、

拳を放った暁美の方が僅かに押し下げられていた。

それは障壁による防御でも、能力的な要因によって反射された訳でもない。

単純に、身体的な耐久力によって、暁美の渾身の一撃は弾かれていた

「初めに言つとくが、『それ』に取り込まれてるからって仲間に拳を向けた事はチャラにはしねエぞ」

隼斗は徐に中指を曲げ、親指を添えて暁美の頭部へ突き付けた

「目エ覚ませ馬鹿たれ。ついでに中に居座ってるクソ野郎に言つとけ。『てめエにくれてやる身体は無エ』ってな」

そのまま、所謂デコピンで暁美の額を弾いた

ゴガンツ!!!と言う最早デコピンの音とは思えない轟音と共に、暁美の身体は一瞬で上空に打ち上げられた。

衝撃で頭部を覆っている仮面に大きな亀裂が入り、更に同時に掛けられた縛道の中でも最下位の番台である『塞』によって、身体の動きが完全に封じられる

暁美は微動だに出来ないまま地面に落下した。

損傷した頭部が音を立てて修復に向かうが、それに構わず隼斗は人差し指を頭部に押し当て、躊躇無く力を掛けた

「発勁」

ゴゴンッ!!!と大地が揺れ、暁美を中心に大きなクレーターが出来上がる

「……………!?!」

暁美の身体が打ち上げられた魚の様に跳ね、遂には頭部から広がる亀裂が全身に及んだ。

隼斗は徐に立ち上がり、後方の紫に向けて振り向かず声だけ飛ばす

「……………後は頼む」

「……………ええ、お願い」

互いに短い言葉を交わし、その場に紫と倒れ伏す暁美を残して、隼斗の姿は消失した。

未だ鈍痛の停滞する身体を起こし、紫は暁美の隣に膝をついた

「ギリギリで帰って来たと思つたら結局良い所持つてちやうのねあの人は。ホントにもう……………」

――

新たな戦士の参戦により、巨人は再び大量の兵士を口から生み出した。

上空80メートルから降り注ぐ化物達は、地上に降り立つと同時に臨戦態勢を整えて妖忌達を取り囲んでいく

「また面妖な」



次々と増えていく化物を尻目に、妖忌は腰に差す一本の長刀の柄に手を掛けた。

その隣には妖夢の肩を借り、なんとか復帰した幽々子が不穩の混じった表情を浮かべ並んだ

「妖忌…、あの巨人と戦うつもりなら攻撃は出来るだけ受けては駄目よ。まだ確証は無いけど…、多分、生体エネルギーを奪われてしまおうわ」

亡霊である幽々子に生体エネルギーと言うものは存在しないが、彼女にとつて直接的なエネルギー体である魂を削り取られた様な感覚。そして言いようのない虚脱感から、対象が存在を維持する為に必要なエネルギーを奪い取っているのでは？、と推測していた

「承知致しました。では、そうなる前に斬り伏せるとしましょう」

妖忌がそう言って刀の鏢を親指で数センチ持ち上げると、鞘との間から白銀の輝きを放つ刃が顔を出した。

それを目にした周囲の化物達が、僅かに後退る

「お、おい爺さん。こいつらそう簡単に倒せる様な雑魚じゃないぜ…？」

その事に気が付かない魔理沙含め数名が、先程の言葉に耳を疑った。

何より数による不利が大き過ぎる。

紫や幽々子クラスともなれば、周囲を取り囲んでいる化物をいずれは掃滅出来るだろう

だがそれは数が有限である場合の話。  
単体で脅威を發揮し、無尽蔵に兵力を増加させる『難敵』が目の前にいる

加えて、それら全てを統率する正真正銘の化物までいては、彼女等の反応も当然であつた

……だが銀髪の剣客はこの場の状況を冷静に観察した上で、たった一言呟いた

「心配無用」

キンツツツ!!と甲高い音が鳴り、僅か数センチ持ち上げられていた刃が鞘に納められた

そして……、

「!？」

目の前に巨大な白い腕が落ちてきた。

自然と集まった視線の先では、巨人が茫然と先の失くなった肩口を眺めていた

「脆いな。そして……」

即座に再生が始まる肩口の傷を見て、妖忌は吐き捨てた

「その程度の再生速度で安心したぞ」

再び、妖忌の指先が刀の柄に触れる。

それに真つ先に反応したのはサリエルだった

「一斉に行きなさい」

眩き、呼応する様に化物達は動き出す。

その表情を焦燥や狼狽と言った『恐怖』に染めながら。

頭上では辺り一帯を照らす赤黒い光の塊が展開されていく

妖忌は一度だけ妖夢へ振り返り眩いた

「妖夢、いずれお前に教えるつもりでいる技だ。よく見ておけ」

——抜刀。

その瞬間、妖忌の姿が前方に消え、青白い無数の残像が化物達の周囲を駆け巡った。

同時に金属が軋る様な甲高い音が鳴り響き、白銀の閃光が迸る

一瞬と言う速度が何倍にも引き上げられたと錯覚してしまう程、化物達の動きが緩やかに感じる中で、刃を残り数センチまで納刀した妖忌が姿を現した。拡散していた残像も一斉に彼の身体へ戻っていく

小さく、鏗と鞆口の触れた固い音が鳴った。

……直後、

ガガガガガガガガガガガガガガガガッ!!!と一拍遅れて連続した斬撃音が響き渡り、その瞬間、巨人含む周囲の化物達は一斉に塵と化した

「……!」

死の天使から穏やかな表情が消える。

目を見開き、降り注ぐ化物の塵を暫く眺めた後、自身の身体に入った一筋の刀傷に目をやった

「他愛無い」

妖忌が天使へそう吐き捨て、同タイミングでその場に終 隼斗が現れる

「てめエが親玉か」

135話 VS 死の天使

隼斗は静かに、明確な怒りを露わにしながら天使の前に現れた。彼の姿を見た彼を知る者達が、口々にその名を呟く

「……は、はははは。遅いって、隼斗」

極度の緊張状態が切れた事で、間の抜けた声を漏らす魔理沙

「隼斗……、いつから?」

次々と起こる予想外の状況に、頭を整理しきれない霊夢  
それらに対し、概ね接近に気付いていたのか、幽々子の心情は周囲の者よりも落ち着いていた

隼斗は未だ霊夢が手の中で握りしめている御守りを指し、

「そいつには所持者の危機に反応して発動する一種の転送術式を組み込んでおいた。試作段階だから転送位置が微妙にズレちまったし、発動時期もギリギリだったが……、なんにしても持つてて良かったろ?」

天使へ向けていた憤怒の感情を抑え、気さくな物腰で笑いかける。  
そこで漸く安堵した霊夢は、若干むくれながらいつもの調子で返した

「……なら事前に教えといてよ、馬鹿!」

「悪い悪い。俺も杞憂であって欲しかったんだ……。まさか……。『こんな事』になつてるなんてな」

視線をすっかり地形の変わってしまった景色へ向ける。あれだけ長閑だった世界は爆撃でも受けた様に戦場と化している。至る所から絶えず殺気の混じった喧騒が押し寄せてくる。湖の畔では血塗れの少女二人が抱き合って倒れている。片方は著しく生命反応が弱まっていた

(なんだ此処は?)

別に完全なる平穏を求めていたわけではない。穏やかな日常の中にも争いがあったっていいとも思う。

仲良しこよしの退屈な世界よりかはその方がよっぽど現実味がある

しかし、それが紛争に傾き過ぎれば途端に魔道へと成り下がる。人は武器を取り、元の自分達にとって都合の良い世界を取り戻そうとする

謳っている事は都合の良い理想、身勝手な願望なのかも知れない

……だがそんなものだ。彼が拳を握る理由なんて

「妖忌、手を出すな。こいつは俺がぶつ潰す」

再び眉間に皺を寄せてそう言った隼斗に対し、妖忌は刀を下げつつ、

「私の分は既に済ませてあります故、御安心を」

天使の身体に刻まれた刀傷を指して答えた

同時に、傷跡を指でなぞるサリエルの表情が怪訝なものになっていた

(傷の治癒が著しく遅い?……唯の刀じゃないってことか)

一つ、足音が鳴った。

サリエルがその方向へ視線を向けると、僅か3メートルの位置まで黒髪の男が接近していた

「やってくれたな。どう落とし前つける気だ？」

「あら、怖い顔しちやって。見てみなさい、後ろの娘達、怖がってるわよ？」

「……『西行妖』」

「！」

その名前にサリエルの眉が僅かに動く

「アレの元凶、お前で間違いねエな？それだけ確認取つときたくてよオ」

「そうだと言ったら？」

「……ああ、そオだな」

……刹那、サリエルの身体は跡形も無く消失した。

背後の地面に赤い染みが飛び散り、一瞬遅れて空を漂っていた雲が吹き飛んだ

「お前の身体が残るか消し飛ぶか。……それだけの違いだ」

……吐き捨てられた言葉に、当然の様に返答があった

「なら、あまり変わらないわね」

赤い染みの広がった地面が人の形に盛り上がり始め、先程と寸分違わぬ姿のサリエルが現れた

「酷い男ねえ。女を本気で殴るなんて」

「アホ言え。俺が本気で殴ったら結界諸共幻想郷が吹き飛んじまうぞ」

隼斗はあつけらかんと言いつち、再度拳を握る

「お前が粉々になっても再生出来る事は分かった」

ゆつくりと、唯普通に歩みを進めてサリエルへと近づいていく

「なら、お前の身体が再生を諦めるまで何度でもぶっ飛ばしてやるよ」

「……」

六枚の翼を広げ、サリエルは後方へ飛んだ。

同時に悪魔の姉妹の強靱な肉体をも容易に貫いた閃光を、大量に前方へ放つ。

勿論男に回避行動をとらせない為、閃光の射線中には疲弊してまともにも動くことが出来ない少女達も入れていた

だが隼斗は立ち塞がらなかった。

サリエルの後方へ瞬時に移動した隼斗は、『これからお前を殴るぞ』と誇示する様に分かりやすく拳を引いた。

まるでサリエルに防御するだけの時間を与えるかの様に

(仲間を庇わない!?!いや、まずは障壁を……!)



即座に身体を青紫色の障壁で覆ったサリエルに向けて、至ってシンブルな右ストレートが炸裂した

「!?」

ゴバアツツ!!と、障壁が一瞬で碎け散り、サリエルは血飛沫を撒き散らしながら砲弾の様に吹き飛ばされる。

そして何か硬い壁に衝突し、その衝撃で更に身体の幾つかの部位が押し潰れた

「な……に……が……!?」

揺れる視界で目にした物は、少女達を守る様に展開されている橙色の障壁だった。

先程放った閃光全てが着弾したであろうその障壁には傷一つ入っていない

(いつの間に……それに私は『絶対に防ぐ事が出来ない』攻撃を実行した筈なのに……)

後方から鳴る足音に反射的に振り返ったサリエルは、改めて自身を見下ろす男を見つめた

(この男には私の力が効いていない? 一体何者……)

男は冷めた口調で言った

「茶番はやめろ」

隼斗は目の前で膝を付く天使に背を向け、指先から上空の一点へ雷の閃光を放った

バリント!!と、硝子が砕け散った様な甲高い音が響き、空間そのものがバラバラと崩れ落ちる

「あら、お気に召さなかった？ 案外ノリノリだった様に見えたけど」

死の天使は笑顔でそこに浮いていた。隼斗の背後では、『天使の姿』をしていた泥人形が形を保てず崩壊した

「乗ってやったんだよ。偽物とは言え、その薄気味悪いにやけ顔が驚愕に染まる瞬間に興味があったんでな」

「奇遇ね。私も貴方に興味が湧いてきたわ。即席の分身とは言え、『同じ力』を持った私をいとも容易く叩きのめすなんてね」

「力？ キモいデザインの獣を生産する能力か？」

「とんでもない。自分で言うのも何だけど、結構すごい力だと思うわよ？」

「あ？」

徐に、サリエルは天に向けて掌を翳した。

急激に空が瞬き始める

「何しようってんだてめエ」

「私からのプレゼント ♪」

「隼斗!!」

突然背後でスキマが開き、血相を変えて飛び出してきた紫に、隼斗は頭だけを動かし返した

「どうした？」

「厄介なものが結界を通過してきたわ!!」

「はあ?」

紫の差した方向へ視線を転じた隼斗の目に飛び込んできたものは、巨大な影。

それは旭光の様な眩い光を発しながら、激しく燃え盛り、隼斗等の頭上へと落下して来る

「嘘……、隕石!?!」

珍しく、幽々子の口から狼狽気味の言葉が漏れた。その場に居る大半のものが思わず後退り、そして立ち尽くした

「幾ら何でも……、デカ過ぎるぜ……」

魔理沙の手から無意識に力が抜け、握られていた八卦炉が地面に落下する

「こんなの、どうすればいいのよ……!」

霊夢の表情が焦燥したものへと変わっていく

まるで月でも落ちてきたかのような、圧倒的規模と質量を持った『絶望』がすぐそこまで迫ってきていた

「素晴らしいでしょう? 貴方達の思い描く絶望がそのまま形となって体現されるの。どう足掻いても打破する事の出来ない、絶対的な力よ」

「『絶望の体現化』、と言う訳か。中々に厄介な能力を持っている」

ある一定の確定要素から本質を導く事の出来る妖忌は、サリエルの能力を目の当たりにし、額から一筋の汗を流した

それはつまり、敗北が確定している消化試合の様なもの。

此方が幾ら思考を巡らせ策を練ろうとも、相手は絶対的な力でその全てを覆してしまう

……当然だ。

『どんなに尽力しようとも倒せない敵』とか、

『如何なる最強の盾を持ってしても防ぐ事の出来ない必殺の攻撃』とか、

『守りたかった人や世界を、手も足も出ない様な圧倒的戦力差によって悉く破壊し尽くされ、最後まで無力感に包まれながら共に消し去られてしまう』とか……、

絶望に繋がるシナリオなど幾らでも思いつく。

希望を求める者の数だけ、無限に分岐していく

それが死の天使。

嘗て二つの世界の最高神をも脅かした、絶望を体現せし者

「さあ、貴方はどんな絶望を見せてくれるの？」

死の天使は不敵に笑い、目の前の男へ語りかける。

巨大隕石の接近による影響か、周囲では烈風が吹き荒れ、立て続けに地鳴りが響き渡っている

隼斗は暫く頭上の隕石を見上げた後、呟いた

「くだらねエ」

心底呆れ果てた様な口振りで

「何が絶望だ。何が絶対的な力だ。この程度でのぼせ上がんじゃねえよボケ」

心底苛ついた様な表情で

「……ならこの状況、どうする気？」

「おい、お前ら！」

天使の言葉を無視して、隼斗は後方の紫達に向かって叫んだ

「少し派手に行く。怪我したくなかったらその場から動くんじゃねえぞ!!」

言うや否や、返答が返ってくるよりも速く隼斗の身体は上空へと飛躍し、一拍遅れて彼が蹴り付けた地面は何重にも亀裂が入り波紋状に砕け散った

「俺達の幻想郷に……!!」

風を切り、高速で上昇しながら、隼斗は拳を固く握り込み隕石へ突っ込んでいく

「落ちてんじゃねえっ!!!」

豆粒大も無い人影と巨大隕石が衝突する

……そして。

カッ!!!と、思わず目を覆いたくなる程の閃光が辺り一帯に降り注ぎ……、

「なっ…!?!」

死の天使の驚愕した声が聞こえる

……巨大隕石は粉々に打ち砕かれた

## 136話 死闘の幕開け

砕かれた隕石の残骸が、流星群の様に降り注ぐ。遙か上空まで跳び上がった隼斗は、その様子を見下ろしながら軽く空中に作った足場を蹴った

……瞬間、隼斗は地上と空中を最早視認できないレベルにまで加速しながら駆け回り始めた。

僅かに映る残像を残しながら、唯足場とした地面や空中を連続して蹴りつける音が響き続け、降り注ぐ流星群は削岩機にかけられた様に粉々になっていく

時間にして数秒程。

けたたましく鳴っていた轟音は止み、身体を回転させ減速した隼斗は再び一同の前に着地した

『動くな』ってそっちの方だったのね」

「……派手だったろ？」

紫との軽口もそこそこに、既にその表情から笑みを消したサリエルへ向き直る。そこに焦燥や狼狽と言った感情は無く、冷静に目の前の男を分析していると言った感じだった

「少し、見誤っていたわね。このレベルの戦士が二人も控えていたなんて」

「だったらなんだ。今更泣き入れようつてののか？」

「いいえ、とんでも無い。これから面白くなりそうだと言うのに。こんな事なら私が『直接行けば』良かったわ」

「……なに？」

思わず聞き返したのも束の間、徐にサリエルの足下が青い炎で燃え始め、同時に彼女の身体が蜃気楼の様に揺れる

「貴方はその戦闘力もそうだけど、何より私の能力に抗えるナニかを持っているよね。後ろで此方の隙を窺っている剣士さん同様に『特記戦力』の一人、その筆頭として数えておきましょう」

「なにが特記戦力だ。最後まで高みの見物決め込んでたヤツが抜け抜けと偉そうにしゃがって。此処に居ないってんなら今すぐ出て来たらどうだ?」

「ふふっ、まあそう慌てないで。折角戦うなら貴方の全力を出せる場じゃないと勿体無いでしょう?」

青い炎によつて胸下まで燃え尽きたサリエルは再びにんまりと笑みを浮かべ、宣言する

「近い内にもう一度、この世界を滅ぼすために私は現れる。兵力も今回の比じゃないレベルのものを用意するつもりだから楽しみにしていてね」

隼斗の耳に、皆の騒めく音が背後から届く。

同時に今の今まで幻想郷を覆っていた喧騒が嘘の様に止んだ。目の前で焼滅していく天使の気配も次第に薄れていく

「全力の出せる場?…分からねエな。同じ幻想郷でやるなら今と何が違うってんだ?」

力を取り戻した彼の全力を振るうには、幻想郷という場、もつと大きく取るならば人間界は脆すぎる。本当にサリエルの言った事を実現するならもつと頑丈な世界に場所を移す必要があるのだ

……例えば魔界とか。



「それも、その時のお楽しみ ♪」

サリエルはたった一言の回答を残し、遂にその全てが青い炎に包まれ消えた

その場で暫く口を開く者がいないまま、不吉な風が一同の間を吹き抜けていった

・  
・  
・

最早幻想郷基準の異変のレベルを超えた一連の騒動は、煮え切らない結果を残して沈静化した。

皆口々にため息を漏らし、疲労困憊と言った感じでその場にへたり込む

その中で隼斗は目に見えて弱っている紫の側に立ち、怪我の具合を見がてら言った

「……暁美はどうなった？」

「あれから意識を失ったままだし何とも言えないけど、蝕んでいた根源は取り除けたはずよ。怪我の方も永遠亭に送っておいたから心配ないわ」

「そうか。………何にしても怪我人が多い。一先ず全員永遠亭に行くぞ」

隼斗は周りの者に呼び掛け、同時に背後で突然開かれたスキマに意識を向ける

「紫様っ……無事ですか…!!」

紫の式、八雲 藍だった。

今回の一件に於いて、賢者たる紫に変わり、幻想郷全体の管理を担っていたのだ

「多分この中じゃ一番重傷のはずだ。一足先に永遠亭に連れてってやれ。紫、全体の被害状況についてはそこで藍から聞け」

「……ええ。……悪い…わね……」

「紫様!？」

「ちよつ、ちよつと…!？」

意識を手放した紫に、霊夢や幽々子が駆け寄るが、隼斗はそれを制止した

「今は治療が先だ。お前らも一緒について行け。妖忌、念の為同行頼んでもいいか？」

「勿論です」

式として、使用を許可されたスキマを開いた藍と一同は、その場に隼斗だけを残し永遠亭へと向かった。

スキマが閉じきった事を確認した隼斗は、踵を返して幻想郷上空へ跳躍、そのまま空中に足場を作って着地する

(……『近い内にもう一度』、か。漸く力を取り戻したと思ったらコレかよ……。いい加減ウンザリだぜクソつたれっ！)

深呼吸をし、一瞬漏れかけた殺気を鎮める。今はぶつけようの無い怒りに浸っている場合ではない。

被害状況の詳細については後で藍から聞けばいいが、一度自身の目で確認しておきたかった

隼斗は空中を蹴りつけ、幻想郷の空へと消えた

――

永遠亭の病室で、此処の薬師の弟子である鈴仙・優曇華院・イナバは慌しく亭内を走り回っていた

……理由は今日起こった異変。

「うう〜！師匠から今日は患者が沢山押し寄せて来るだろうとは聞いてたけど……、まさかこんなにもいなんて……！」

当初人里から大量の怪我人がなだれ込み、ついさつき物凄い剣幕で割り込んできた『九尾』他数名の診察を、現在師である八意 永琳が行っているところ。

はつきり言って患者全員にまわすだけのベッドも部屋も圧倒的に足りていない状態であるため、出来ることなら霧の湖に立っている目に悪そうな外観の館から、部屋を幾つか貸してもらいたいくらいだ

「鈴仙〜、また入院患者追加だつてさ。全身包帯グルグル巻きのミイラ」

「ええーッ、またあ!?!もう空きベッドどころか空きスペースすら厳しい状態なのにー!?!」

「その事でお師匠様から伝言。『軽傷のクセに重傷人面して寝そべってる』馬鹿共の尻蹴り上げて追い出せつてさ」

「……へっ?もしかして師匠機嫌悪い?」

「さあ?顔は笑ってたけどね。……深い影を作りながら」

「それ怒ってるよね!?!短時間の内に続けて舞い込んできた激務でストレスがマツハに達しちやってるよね!?!」

顔を青ざめる鈴仙を他所に、凶々しくイビキをかく中年オヤジをベッドからズリ落としていく妖怪兎のてゐ

「はいはい、『擦り傷組』は帰った帰った」

「おおっ!? な、何しやがんだ!」

「さつきと其処空けたほうがいいよ? 軽傷が本当の重傷に変わる前に」

妖怪特有の威圧に当てられ、シブシブ帰っていくオヤジ達を見送り、今し方てゐの運んできた包帯に身を包んだ少女に目をやる鈴仙

「あれ? この人なんか天使っぽい翼みたいのが……」

「鈴仙、もう一体ミイラ追加あー」

続いて容姿のよく似た少女を隣のベッドへ寝かせ、後は任せたと宣言わんばかりにそそくさと部屋を後にするてゐ。

此方の少女も同じくミイラ姿だ

「……はあ、休憩は当分無理ね」

・  
・  
・

永遠亭の庭先で適当に腰掛けている藤原 妹紅は、亭内から聞こえてくる色々と騒々しい物音を耳にしながら空を仰いでいた

「なーに黄昏てるのよ」

横合いから声を掛けられ、視線だけを向けた妹紅は小さく息を吐き、

「……輝夜か。別に」

素っ気なく答え、視線を空へと戻す。

輝夜は遠慮無しに隣へ来ると、動きにくそうな着物を手で押さえながら腰を落とした

「隣、お邪魔するわね」

「邪魔するなら帰れ。後座ってから言うな」

「何よー、ただそうやって座ってるだけじゃない」

特に目的無く天を仰ぐ妹紅に合わせ、同じ様に視線を向けたまま、輝夜は呟いた

「気にしてるんでしょう？怪我人を出してしまったこと」

「……」

「貴女はそれ以上に怪我だらけだったのにね」

所々包帯や絆創膏の貼ってある身体。

その内の一つを剥がし、妹紅は言った

『私達』はさ、傷の大小ってあんまり関係ないんだよ」

絆創膏程度で収まる傷など、有って無いようなもの。彼女らにとって、身体が動く程度の怪我であるならば、差し当たって気に留める事ではない

「……ええ、そうね」

「死なない身体ってのは時に不便でさ。多少無茶しても構わず戦闘を続行できちゃうから、『怪我』って言うものに鈍くなる」

「……」

「ヤケクソになってたのかもな。この身体になってから。無茶が出来るのは自分だけなのに」

しかし、不死の身体と言っても痛みを感じないわけじゃない。幾ら治癒が早いと言っても、足を負傷すれば動きは鈍るし、その分体力だつて奪われる。ゴリ押し戦法が実行出来てしまうが故の、そう言つた一時の『死』が、時に思わぬ被害に繋がってしまう。死んでいる間は何も出来ないのだから

「そのことでさつきから落ち込んでるの？」

「落ち込む？」

対して、妹紅の口から返ってきた答えは疑問系だった。互いにキョトンとしたまま数秒の沈黙が続く

「……ええ。そう見えただけど？」

「……ふっ、ははは。そうか、そんな風に見えてたか」

妹紅は笑いながら立ち上がり、輝夜を見下ろしながら言った

「心配御無用。これからはもつと慎重にやらなきゃって思ってただけさー！」

肩をポンポンつと数回叩いた後、素っ気なく手を振りながら竹林へ歩いていく妹紅を見つめ、輝夜は小さく呟いた

「……別に心配してないし。何よ、ちよつとからかってやろうと思つたのに」

悪態とは対照的に微笑を浮かべ、亭内へと入っていった

――

異変の翌日、隼斗はすっかり静まり返った永遠亭の一室を訪れていた。

部屋の前で門番の様にして立番する銀髪の剣士に、呆れ顔で声をかける

「何やってんだ妖忌」

「御淑女が居られる部屋に何時までも入り浸るわけにもいきませんので」

「淑女ねえ……。一応確認するけど入ってもいいよな？」

「はい。中で紫様がお待ちです」

「どーも」

適当な挨拶を交わし、襖を開ける

「あら隼斗。漸く来たわね」

室内のベッドで横になっていた紫は、付き添っている藍の補助の元、上体を起こした。

その隣では林檎を剥く妖夢を急かす冥界の主が、手をひらひらと振っている

「元気そうで何より」

「そう見えるかしら？」

「なんならリハビリ手伝ってやろうか？」

「……遠慮しとく」

挨拶代わりに掛け合いもそこそこに、隼斗は見舞い様に持ってきたフルーツバスケットを棚の上に置いた。この部屋には『三名』が入院患者として居るが、早速瞳を光らせた食いしん坊のために、通常よりもデカめのサイズだ

そしてもう一つのベッドに向かって呟く

「……ウチの馬鹿弟子はまだ目え覚まさねーか」

視線の先では、今異変の最中に助け出した先代博麗の巫女が眠っていた。

その身体に点滴以外、特に目立った処置は見られない

「優秀な先生の話だとこれと言って酷い外傷等は心配ないそうよ。唯、人としての生命力が著しく弱まっていたから回復するまで時間が掛かるみたいだけど」

「ああ、俺もさつき聞いてきた。多分身体の中に入れてた天使の力の影響だろうな。俺も同じだったからよく分かる」

「…」

紫は隼斗の何気なく発したその言葉に表情を曇らせた。

戦闘中、駆け付けた際にも、既に天使の力の事を知っている様な口振りで暁美に話しかけていたからだ

「隼斗…、『同じ』ってどういうこと？……まさか貴方も」

「……もう心配ねえ。自己解決済みだ」

「ーッ!!そういう事じゃ……!!」

声を荒げ、思わず立ち上がろうとした紫を、藍が組み付いて制止させる



「紫様……あまり叫ばれてはお身体に障ります。……落ち着いて」

その様子を見た幽々子は怪訝な表情を作り、妖夢は驚いて剥き終わった林檎を落としかけた

「……私は野暮用で魔界へ行くとしか聞いていなかったわ。どうして黙っていたの?」

「……俺が自分でケリをつけなきゃならなかったんだ。巻き込むわけにはいかなかった」

「だからってっ!せめて話してくれても良かったじゃない。……昨日今日の話じゃ無かったんでしよう!」

隼斗は紫の肩に手を置き、なるべく柔らかい口調で宥める

「……紫、その事も含めて後日、『集会』で話すつもりだ。だから今は安静にしてろ。治癒力が低下してるのも天使の力の影響なんだからよ」

ハツとなった紫も、煮え切らないと言った感じで顔を伏せながら言った

「……………、わかったわ。その代わりにちゃんと話してもらおうよ」

ここで一連の掛け合いを見ていた幽々子は、部屋の外にいる人物へ声を飛ばした

「貴方も、ちゃんと説明してね?ー妖忌?」

ガタタンツ、と部屋の外で物音が鳴り、隼斗は一人納得した

(だから外にいたわけか)

## 137話 幻想郷首脳会議

幻想郷・某所。

異変から数日経ったこの日、各地の代表がとある一室に集められていた

室内は空間ごと引き伸ばされた様な不自然な広さがあり、中心に配置されている長机以外何も置かれていない殺風景な部屋となっている

部屋全体が重々しい空気を纏っている中で、主催者である八雲 紫の口から集会の始まりが告げられた

「全員揃ったみたいだからそろそろ始めましょうか」

「…………その前に一ついいかの?」

開始にストップをかけた声は紫の真向かいから。室内は薄暗く、明かりは机の中心に置いてあるキャンドルのみであるため、夜目の効く者で無い限り互いの顔を確認することが難しい

「何かしら?…………天魔さん?」

声の主は妖怪の山を治める天狗の長、天魔の位を持つ『陽高 彩芽』。

その口からやや不機嫌気味の声色で、幻想郷賢者の言葉を遮った理由を告げる

「何で話し合うというのに部屋がこんなにも暗い?何故カーテンを全て『閉め切って』部屋の明かりを消しているのじゃ?意味あるのか?」

「……………」

古風な口調で捲し立てられ、沈黙の賢者。

両肘を机に乗せ、組んだ両手で口元を隠した圧迫面接中の試験監督がやってそうなポーズのまま固まってしまった

(いや誰でもツツコミ待ちかと思うでしょ)

そう心の中で呟いた幽香を始め、此処に集まった殆どのものがウンウンと頷いている。

だがここで、スマイルのまま眉だけがひくひくと痙攣している賢者の横合いから幼さの残る声で援護射撃が入った

「そんなもの決まっている。暗い部屋でやった方がなんかこう悪の組織みたいでミステリアスだし、カリスマチックだし。緊張感ある厳粛な話し合いの場では必要不可欠な演出だろう?」  
「……………」

残念ながら自称カリスマを語るちびっ子吸血鬼の援護射撃は誤射に終わった

より深くなつた沈黙を破る様に、部屋一面に光が差し込む

「カーテンくらい開けろ」

そう言つて完全に部屋と同化していた、『赤い』カーテンを開け放つた長身の男はどかりと席についた

「だってこの方が集会らしいってレミリアが言うから……」  
「間に受けんな。話し辛いつつーの」

此処は幻想郷・某所。

霧の湖に建つ館、――『紅魔館』。

此処の主であるレミリア・スカレットは不機嫌そうに机をコツコ

ツと指先でノックする

「何よ、折角城を集会の場として使わせてやってるのに私の案にケチつける気？」

「それについてはありがとう」

視界の外でブーイングを垂れるレミリアを尻目に、一度咳払いした紫は改めて話し始める

「今異変のあらましは前もって伝えていた通りよ。首謀者は本気で幻想郷、そしてこの世界を落とすつもりで襲撃してきている。各地域でも襲撃による被害が出たみたいだけど、次に来る時はより強力な兵士を導入すると言っていたから現状よりも戦力を固める必要があるわ」  
『地底』の住人である私達も呼ばれたのはそう言った理由ですか。でも確かに多くの負傷者を出してしまったのは事実。勇儀さん達がいなければ危なかったでしょうね」

「……まだまだ若い連中とは言え、鬼相手に張り合う奴らだからね。喧嘩は好きだけど、今回ばかりは後味悪いよ」

地底に存在する地霊殿の主、古明地 さとりに続き、頭に一本角を生やした鬼、星熊 勇儀は腑に落ちないと言った感じで髪を乱暴に掻き上げた

更に地上の鬼である伊吹 萃香も心境同じくして呟く

「私が妖怪の山に駆け付けた時には既に山中化物だらけだったよ。最初の化物発生のお知らせを聞いてから10分と経ってないのに、だ。お陰で彩芽の所へ行くのに時間がかかっちゃった」

「ふむ、とは言え萃香殿、その節は助太刀に感謝致しますぞ。……化物達が現れたのは各地での証言を聞く限り、ほぼ同時刻のようじゃ。つまり、」

天魔の言葉に被せるように紫は言った

「敵は任意の場所に化物を投入する事が出来るうえ、此方側は時期も場所も予測する事が出来ないと言うこと。今この瞬間にも、この館を取り囲まれていても不思議じゃないわ」

一同、光の指す窓の外に視線をやる。小鳥の囀りさえ聞こえてきそうな長閑な風景が広がっていた。この景色が、一瞬にして戦場へ変わるかもしれないのだ。

太陽の畑の妖怪、風見 幽香は想起する怒りに心なしか赤眼をぼんやりと光らせながら低く呟く

「だったらもう一度捻り潰すまでよ……!」

今回の一件で太陽の畑はその四分の一が壊滅的な被害を受けていた。

踏み荒らされた花々、見るも無残にひっくり返された畑。彼女の憤怒は花の妖怪である以前に、丹精込めて育て上げた『子』達を奪われた親の怒りのそれだった

化物達は根絶した。爪一欠片足りとも残す事なく、虐殺も交え、完全に消滅させた

「勿論、その時が来たら貴女の力も必要になるわ。其れまで太陽の畑は私の結界で囲っておくから安心してちょうだい」

「……その体たらくで張った結界が役にたつのかしら?」

「風見幽香!! 貴様アツ!!」

主君への暴言に思わず席を立ち、幽香へ詰め寄る藍。

幽香も無言で睨み返すが、数秒の睨み合いの後、掌で顔を伏せ、溜息を吐きながら言った

「……………悪かったわ。でも今は恩情とか美辞麗句を口にする気分じゃないの。私に非があるから噛み付かれても何も言わない。お好きにどうぞ」

「…………ツ、」

複雑な心境のまま、齒噛みしつつ席に着く藍を流し目で見送りながら、守谷の神々は周囲が聞き取れるかどうかの音量で呟いた

「…………死の天使か。本来神に仕えるべき天使が神に匹敵する力を持ち、世界を破滅へと導こうとは…………」

「…………私達が全盛期の力を得たとして……………、神奈子、勝算は？」

諏訪子の質問に、神奈子は即答した

「ほぼ無し。話を聞く限りじゃ、かの龍神様や魔界の最高神ですら打つ手がなかった奴よ。高々神話『程度』の力しか持ってない私達じゃあね…………」

「あれま」

二柱は異変が終息した丁度その日に、様子を見に来た隼斗と会っていた。軽くではあるが、そこで今異変の黒幕について見聞いた時には流石に茫然としたものだ

『ほぼ』と表現したのは飽くまで可能性が0では無いと言うだけ。幼児とレスラー程の圧倒的力の差があったとしても、同じくして人（この場合は神の力を持つ者どうし）であるならば傷を負う条件は同じだ。奇跡が起きれば万が一にも勝てるかも知れない、と。

唯これはまだサリエルの力の正体について聞かされていない神奈子個人の見解であるため、事実勝率は0%となる

「…………だからって黙ってやられるわけにもいかないけどね。あの子の為に」

脳内に浮かぶ、頭に白蛇と蛙の髪飾りを付けた緑髪の少女を見つめ、二柱は静かに決心した

「もしも、今後各地で防衛線を引くのであれば、やはり懸念が強いのは人里だ。あそこにはまともな戦闘を行える者が殆どいない。今回は私や妹紅、そして命蓮寺の協力があつたからこそ運良く死者だけはずさずに済んだが、より激化が予想される次回では、な」

「確かに。可能であれば里の方達を命蓮寺でかくまう事も一つの案として考えていましたが、先程の話を聞く限りでは実質的に安全な場所など無いようですし、少なからず結界を張ることは有効な防護策なのでしょうか?」

人里で寺子屋の教師を務める上白沢 慧音、そして同じくして共闘した聖 白蓮は、先程の『太陽の畑を結界で護る』と言う話を聞き、ならば人里も同様にと考えていた

しかし紫は首を横に振った

「恐らくだけど、貴女達がいくら強度の高い『唯』の結界を張つても効果は無いわ。結界とは外部との干渉を断つ一種の世界形成のようなものだけど、奴らはその世界間を飛び越えて出現してくる。完全に侵入を拒むには特殊な処置を施す必要があるわ。例えば境界を操る能力とかね」

「なら、人里にも頼めないか?」

「ええ、お安い御用よ」

二つ返事で了承する紫。

そして、続け様に集会の流れを進める為次の議題に移った。

それはある意味、この集会に於けるメインイベントだった

「隼斗、約束の時間よ。そろそろ聞かせてもらえるかしら？」  
「妖忌、貴方もね？」

た  
ピタツ、と周囲の流れが止まり、その場の視線が二人の男に集まっ

「……わかった」

「……むう」

隼斗は困った様な表情を作ると、渋々と言った感じで口を開いた

「どっから話したもんか。」



## 138話 それぞれが背負うモノ

「始まりは、太古の魔界で生まれた小さな種だ」

僅かな間を置いて、隼斗はそう切り出した

「突然現れたそれは、急激な成長と共に魔界の生態系を大きく崩した。それこそ、魔界だけでなくいずれは他の世界をも侵食する勢いだっただらしい」

この場にいる何人かは早くも彼が何を指しているのか気付いた。

数人が眉をひそめる中、さらに隼斗は続ける

「一刻も早く事態を収める為、動いたのは魔界の創造神。そしてこの世界の創造神も交えて、その『厄災』は封じられた。魔界と人間界、二つの世界で分担する形でな」

「……ッ」

この会に出席している二柱の表情が強張る

『創造神』が二柱も動いた。

動かなければならなかった事態

それは言うまでもなく、天変地異や世界改変レベルの…、下手をしたらそれ以上の異常事態だと言うこと

「その厄災こそが、数百年前に俺が力の大半を失うハメになった直接的な要因、『西行妖』だ」

「!?」

「……『力の大半を失う』」

その言葉に、これまでの彼を知る者。更に昔の彼を知る者の表情は

驚愕に染まった

隼斗がその事実を隠していたのは、当時西行妖の一件に関わっていた紫や幽々子を気に掛けての事。そして力を失っても尚、今まで切り抜けて来られた事が主な理由であったが、現状となつてはそんな甘つたれた事情は切つて捨てる他ない

「紫、俺がここ数日幻想郷を留守にした理由はこれだ。この話はその時に魔界で会った創造神から聞いた。……悪かったな、黙つてて」  
「…………その様子だと無事取り戻せたみたいね」  
「ああ」

無事では無かったが……、と胸の内ではそう思いながらも即答して見せた隼斗。

紫や永琳と言つた、古くからの付き合いがある者達がそれを100%鵜呑みにする訳がないことくらい、彼とて分かっている。

……少なからずそんな空気を察してか、間髪入れずにレミリアは尋ねた

「じゃあ何か？その西行妖つて言うのが今回の異変を起こしたとか言う天使の正体だとも？」

「いや。西行妖は天使が生み出した力の極一部に過ぎない。……多分、奴にとっては挨拶代わり程度だったんだろうがな」

極めて容易く、

それこそ挨拶代わりに、

威嚇射撃でもしてやろうか位の感覚で、

世界を滅ぼしかねない存在だと言うことをこの場の全員が改めて再認識させられた

再び沈黙が続く中で、幽々子の隣に座っている妖忌は静かに語り始

めた

「幽々子様。誠に勝手ながら、私が白玉楼を弟子に任せ、魔界へ足を運んでいたのはそこにあつた西行妖の本体を監視するためでした。魔界と人間界。二つの世界に存在しているあの桜の木はやがて互いに引き合い、自力で封印を解いてしまう可能性があつた。そうなる前に何とかしなければならなかつたのです」

「……それは貴方なりの考えがあつての上で？」

「……はい」

「なら、これ以上の追及はしないわ」

亡霊である幽々子には生前の記憶がない。

したがって、西行妖の下で封印（その媒体となつている）されている亡骸の正体が自分自身だと言うことを知らない。知らされていない。

その存在を知つたことで、万が一封印が解けてしまうきっかけに繋がってしまったてはいけないからだ。そうなれば幽々子の存在そのものが消滅してしまう

「ふむ。天使の力量については未知数か……。その目的は？」

「分からん。だがどんな正当な理由であろうと受け入れる気はサラサラ無いけどな」

「では対抗策は？」

続けて質問した彩芽に対し、

「彼よ」

答えたのは紫だった。

再び皆の視線が隼斗へと集まる

「天使の能力はあらゆる『絶望を体現』すること。如何なる策を講じようとも此方側が望まない結果が現実となつて反映されてしまう以上、いくら戦力を増そうが私達では戦闘にすらならない。だから概念的な力の影響を受けない隼斗が唯一の対抗手段であり、天使にとつての『天敵』と成り得るのよ。…事実、天使は去り際に隼斗と、この事実を導き出した妖忌の二人を『特記戦力』として数えていたわ」

その言葉が意味することを、この場の全員が深く受け止める必要があつた。

柊 隼斗と言う男は唯一、死の天使と対峙する事が可能な存在。

それはつまり、今集會に集まつた者だけで無く、彼の仲間と呼ぶべき者達は皆、彼と並んで戦う事が許されないとのこと。

その場にいるだけで、例えパーティの回復役に徹しようとも、天使の力の影響を受けて彼の足を引っ張ってしまう

……… 確実に打破するには、隼斗一人に任せる他無かつた。幻想郷の……、世界の命運を彼一人に押し付ける形で

「何てことねー。任せときゃいい」

各々の背徳感を払拭する様に隼斗は言い放つた

「その代わり頼むぜ。俺は天使を、お前達は幻想郷への進撃を食い止める」

天使が去り際に口にした『全力の出せる場』とは、恐らく『互いに邪魔の入らない何処か別の場所』という意味合いだろう、と隼斗は踏んでいた

(端から奴とは一人で戦うつもりだったしな。それをどう切り出したもんかと思つてたが)

ふと、真向かいに座る妖忌と目が合った。特に会話がある訳でも無く、交わっていた視線はすぐに外れた。

その僅か一瞬の内に行われたアイコンタクトに、周りの者達は誰一人として気付いていなかった

## 139話 嵐の前の静けさ

目を開いて最初に映ったのは見覚えのある天井だった

「……」

起き上がろうと力を入れるが、まるで自由が効かない身体は首から上を起こしてすぐ枕へ突っ伏した。

記憶を辿ろうと思いを辿るが、イマイチ集中出来ず手で顔を覆った。

すると間髪入れずに腹から間の抜けた音が漏れる

「……………、お腹……………、空いたわね」

博麗 暁美はそう呟くと、部屋の外から聞こえる小さな足音に耳を傾けた

(敵なら…、為す術無くやられちゃうわね)

足音は丁度部屋の前で止まり、ゆっくりと襖が開けられた

「……………あっ」

「……………霊夢？」

暁美は部屋の入り口で立ち尽くしている少女を見て思わずその名を呼んだ。

自信が記憶しているのはもつと幼い少女であった筈だが……………、つと目をパチクリさせながら。

「起きたんだ。調子はどう？」

「んー、頭がクラクラすること以外は特に大丈夫かな」

「…そう……。あつ、何か食べる？」

「あらホント？じゃあお願いしようかな」

ぎこちない会話はそこで切れ、台所へ駆けていく霊夢。

暁美は未だ消えぬ虚脱状態の様な症状に苛まれながら、今一度天井を見上げた

(……霊夢、いつの間にあんなに成長したんだろ……う……？)

ジジ……ツ、と。

……思考が一瞬止まり、頭の中でノイズが走る

(えっ……、あれ？私……、あの時……？)

徐々に、ノイズの音が大きくなっていく。

それと並行して記憶の中にある映像が浮かび上がり始めた

里の噂。妖怪とは違うナニか。夜間の襲撃。化物。髑髏。異変。  
湖。神社。結界。一人で？不気味な女。敗北。被験体？実験、苦し  
い。実験、痛い。実験、実験、実験、実験、実験、実験……。

——怪物になった自分

「ーッッッ!？」

瞬間、暁美は両手で頭を抱え蹲った

ノイズが……、頭の中を這い回る虫の様に彼女の思考を掻き乱して  
いく

(……そうだ)

思い出した。

この幻想郷で博麗の巫女としての役を継承し、本来ならば守護を担う筈の自分が拳を向けた、……向けてしまった相手を。

(意識はあつた。でもまるで別の自我が私の身体を動かして…、私自身は蚊帳の外でその光景を眺めるしかなかった…！)

唯一幸いだっただのは意識だけ起きていた為、拳の感触が伝わらなかったこと。

だがその脳裏には焼き付いてしまった。自身の拳が突き刺さり、吐血する友人の姿が。

変貌した自身を見つめる義妹の姿を…。

「暁美、姉さん……？」

いつの間にか軽食を持って立っていた霊夢に、暁美はハツと顔をあげた。

カタカタと震える身体に加えて、本人は気付いていないが大量の汗を掻いていた。顔色も目に見えて悪い

「あ、ありがと霊夢……。そこ…置いていてくれる？」

気さくに振る舞おうにも、声が終始震えていては説得力に欠ける  
霊夢は言われるまま椀に盛られた粥を置くと、暁美の隣へ腰を下ろした

「大丈夫」

そう言って、未だ震える身体を上から抱き寄せる



「私は誰よりもずっと姉さんの姿を見てきた。普段は楽観的で自由奔放だけど、異変が起これば真っ先に駆け出して行ってた。自分がどれだけ傷付こうと、身体に生傷を増やそうと、雨の日も嵐の日も、ずっと」

異変の爪痕なんてとつくに修繕された。

傷はちよくちよく顔を出しにくる師が度々治してくれた

……形としての勲章なんて残っていない

「だから大丈夫」

しかし少女は区切るように

「私は知ってるから。隼斗も紫も皆、姉さんを敵だなんて思っていない。多少は心無い事を言ってくる奴もいるかも知れないけど…、そうなたら私や隼斗がとつちめてやるんだから」

暫く黙っていた暁美はやがてぽつりと言った

「……でも私の中にある罪の意識は消えないわ」

「消す必要なんてない。それを引きずったまま周囲の視線を気にして隠居生活送るくらいなら、堂々としてればいい。ちゃんと謝って許してもらって、元の生活を普通に過ごせばいい」

霊夢は即答した

「……………そっか」

頭を抱えているか細い腕に手を添え、暁美は瞳を閉じながら眠気の混じった声で呟いた

「大きくなったね、霊夢」  
「……………おかえり」

ポツポツと垂れてくる水滴に温もりを感じながら、暁美の意識はゆっくりと途切れた

「……………」

部屋の外では二つの人影が佇んでいた。

その内の一人、艶やかな雰囲気醸し出す幻想郷の賢者は小さく言った

「結局逃しちゃったわね。お説教タイム」

「…………しやーねーな。また今度にしてやるか」

縁から庭先へ降りた男は参道方向へと歩みを進めていく

「あら、どこに行くの？」

「ちよいと野暮用」

次の瞬間、吹き抜ける風と同時に男の姿は消えていた

『野暮用』、ね」

その場に一人残された八雲 紫は既に誰もいない庭先を見つめた後、未だ全開には至っていない身体でスキマを開いた

(必ず阻止してみせる)

――

人間界某所。

正確には人間界の中に存在する異世界

赤髪に鹿のような角を生やしたこの世の最高神である龍神は、背後に現れた存在に振り向かず言った

「やれやれ本来は如何なる者であっても此処には入って来られない筈なんだがな」

『手段』がではない。この異世界で存在を維持するには、その創造者と同等かそれ以上の力を持たぬ者で無くてはならない

侵入者は大して気に止める様子も無く、

「用件はすぐ終わる。そっちの返答次第だけどな」

「相変わらず無礼な奴だ。この龍神に対して用件とは」

溜息混じりに振り返った視線の先で、終 隼斗は立っていた

「頼みがあつて来た」

## 140話 暗躍する英雄

龍神は怪訝な表情を作りながら、髪を掻き上げつつ答えた

「頼み、か。まっ、一応私とてお前には悪い事をしたと思っっている。聞くだけ聞こう」

どのみち龍神クラスの神に『自分から会いに来れる』レベルの男に対し、帰れと一蹴したところで素直に応じるとは思えない

「死の天使を倒す上で力を借りたい」

「はあ？」

隼斗は思わず呆れた声を漏らした龍神に構わず続けた

「アイツは間違いなく、アンタ等クラスの神が動かなきゃならないレベルの奴だ。俺も特記戦力なんて言われちゃいるが、正直今のままじゃお手上げ状態…、いくら力で勝つてようが、暖簾に腕押しじゃ意味がねエ」

その言葉の意味を理解した上で、龍神は鼻で笑う

「はっ、お前が奴を倒す？確かにこの世の人間にしては規格外の力を有しているが、だとしてもッ、……そいつは些か高慢ちき過ぎやしないかね？更に手を貸せと？」

捲し立てる様に言葉を連ねる龍神に対し、隼斗は一言で返す

「そうだ」

龍神の眉が動く。

その一言で僅かに持ち上がっていた彼女の口角は下がり、同時にジリジリと周りの空気にかかる圧力が強まっていく。

既に常人なら心身ともに押し潰されてしまうであろう力の奔流を無視して隼斗は続けた

「前に言ってたよな？この世界で起きる事象は俺達の問題…、本来は自分が干渉するべきじゃねエって」

「……こうも言った筈だ。世界のバランスが崩れる危険性がある時が私の動く時だと。今がまさにそうだろう」

「いいや。まだグレイゾーンだ」

「……………おいおい、いい加減にしておけよ人間」

ここにきて、苛立った口調を隠そうともせず龍神は吐き捨てるように言った

「分をわきまえろ。お前達に任せて世界が奴の手に堕ちてしまったらもう取り返しはつかないんだぞ。そうなる前に私が……」

遮る様に隼斗は言った

「例え『世界ごと無に帰した』ところで同じ事だ。奴は平然と復活してくるだろうな」

「……」

音も無く、何の予兆も無く飛び出した真空の刃が隼斗の喉元へ突き付けられる

「なら貴様に何ができる？」

躊躇は無かった。

突き付けられた刃は、その者が返答するよりも速く押し込まれた  
だが聞こえてきたのは……。

「……仕方ねエな。そんなに信用ならねエなら……」

——瞬間、爆風が発生し、真空の刃は掻き消された

目の前の男からドス黒い力の塊が一気に噴き出し、周囲を包んでい  
た龍神の気が塗り替えられる

「ッ!? 柊 隼斗……、お前」

一歩、龍神は後ずさった。

《証明してやるよ》

エコーのかかった声はその場に重々しく響く

——

迷いの竹林・深部。

人気の無いこの場所で、白髪の少女 藤原 妹紅は全身から滝の様  
な汗を掻き地面に突っ伏していた

身体の外へ放出しようとする霊力を、繊維に負荷を掛ける事無く  
通過させる特殊なインナー。

その背部は凄まじい熱気により、陽炎の様に揺らいでいる

「くそ……駄目か……」

妹紅はいつも着ている白いワイシャツを傍に置いていた  
理由は単純。

着たままで弾け飛んでしまうから

「やっぱり簡単にはいかないか」

彼女は修行中だった

くくく

数日前

妹紅は師である終 隼斗から久々に修行を見てもらっていた。  
今異変によって大きな被害と今後の危機を抱える事となった幻想  
郷で、『戦える者』の側にいる妹紅は、近い内に訪れるであろう戦闘に  
備えて『更なる力を付ける方法は無いか』と訪ねたのだった

「瞬間？あの師匠がよくやるやつ？」

「そうだ。短期間に力を付けたいなら修得しといて損はないぞ」

「そっか。よしやろう」

何の疑いも無く袖を捲りストレッチを始める妹紅を見て、隼斗は微  
笑ましく思いながら軽く瞬間を発動させた

ズンツ!!と、竹林全体が震撼する

隼斗の背から噴き出す高濃度の霊力は、一見すると荒々しく描かれ  
た羽のようだった

「おおっ……!」

「瞬間は圧縮した霊力を炸裂させる事で、爆発的な火力を生む技法だ。  
鬼道を僅か数年で使えたお前なら修得自体は難なく出来るだろ」

隼斗は『だが』と付け加え、

「問題なのは発動してからだ。こいつはやたら燃費が悪いから、余程靈力量に自信のあるやつじゃなきゃ数秒と維持出来ねーだろうな。それじゃあ、とても戦闘への導入は無理だ」

「じゃ、じゃあどうすればいいの？」

首を傾げる妹紅へ見せるように、隼斗は背から噴き出す靈力の『形を変えた』。

「!?」

「これが瞬間の『最終系』。力の無駄な放出を抑え、洗練された形を保ちつつ、力の漏れの一切を無くす。こいつが修得出来れば上々だ」

くくく

妹紅は立ち上がり、改めて身体中に靈力を循環させる

(これで8回目。絶対物にしてやる！)

その数が表すものは、瞬間を発動させた回数ではない。

靈力の過剰消費により、『死亡した回数』だった。不死の身体を逆手にとった、とんでもない荒修行…。

少女の両肩と背に高濃度の靈力で形成された火炎が噴き出す

(……イメージだ)

……僅かに、不安定で纏まりの無い炎が、鳥の翼の様な形状に変化した

――



人間界某所に出来た異空間で、創造神である龍神は地に膝を付いていた。

その様子を見下ろす人影は、静かに言う

《悪いな。今回ばかりは俺も引けねえんだ》

肩で息をする龍神は、これでもかと言うほどの大きな溜息を吐いた  
「そんな哀れんだ瞳を向けるな戯け。こちとら本当に負けるとは思っ  
てなかったんだぞ、まったく！………その不愉快な物をさっさと  
外せ」

目の前に佇む『髑髏状の仮面』を被った男へ、そう悪態付いた  
男が仮面に手を当て顔の外へ払うと、仮面は散る様に消失した。  
中から現れた隼斗は小さく呟く

「約束だ龍神。今回の件、俺に一任させてもらうぜ」  
「強引に話を進めといてよく言う。…はあ、勝手にしろ」

俯き、片手をパタパタと振る龍神を見つめ、隼斗は踵を返した。そ  
して懐から札を数枚取り出し目の前に放る

ズツ…！と、宙に浮いた数枚の札が結ぶ区間がぱっくりと割れた。  
隼斗はそこへ片足を乗せ、最後に一言呟くと空間の向こう側へ消え  
た

一柱、残された龍神は頭をがしがしと掻き、吐き捨てた

「馬鹿者め」

## 141話 引いた波は再び迫る

魔法の森入口付近。

瘴気が漂う森の中でも、比較的安全に訪れる事ができるこの場所に建つ道具屋 『香霖堂』

ここの店主である森近 霖之助はいつも通り日差しの差す窓際で読書に勤しんでいた

一見平和に過ごしているように見える彼だが、数日前に起きた一連の騒動を知らない訳ではない。

被害も出た。不気味な風貌の化物の襲撃も受けた

「……！」

ふと、店の外から誰かの気配を感じた霖之助は、徐に隣の壁に立て掛けてある古びた刀に視線を落とした

(……いや、この気配は)

『化物の軍勢を薙ぎ払った』刀から、再び扉へと視線を戻した霖之助はゆっくりと本を閉じる。

同時に扉は開き、黒い三角帽子を被った金髪の少女が入ってきた

「霖之助ー、いるかー?」

「見ての通りだよ魔理沙」

霖之助は陽気な第一声に肩を竦めながらも立ち上がると、一応店主らしく店の奥に並ぶ商品を指し、

「ようこそ香霖堂へ。日用品から掘り出し物まで何でも揃ってるよ」

「長年此处に来てるけどそんなセリフ初めて聞いたぜ」

「……これくらいやらないと商品が売れなくてね」  
「今更」

挨拶もそこそこに二人は本題に入った

「で、今日はどうしたんだい？」

「……ああ、こいつがな」

魔理沙は大きな三角帽子に手を突っ込み、中から手の平サイズの八卦炉を取り出して霖之助の前に差し出した

「……これはまた派手にやったね」

表面どころか内部まで焼け焦げ、大きな亀裂が入ってしまったっている八卦炉を見て、溜息交じりに感想を漏らす霖之助

「何をしたらこうなるんだ？例え山一つ吹き飛ばしたってこうはならないよ？」

「答えは単純。山一つどころじゃない奴と当たっちゃまったんだ」

あっけらかんと答える魔理沙だが、その手に巻かれた包帯がその戦況の激しさを物語っていた

（熱を遮断する安全装置がイかれてる……。限界を優に超える火力を立て続けに解放した証拠だ）

一度目を伏せ、改めて少女の顔を見た。  
その瞳から伝わる意思を読み取る

（まだ…、戦う気なのか）

八卦炉を受け取り、黙ったまま店の奥にある作業場へと踵を返した  
霖之助は、その丁度通路にある刀『草薙の剣』に目をやった

(一層の事、この場で破壊してしまった方が彼女のためか……)

ゆっくりと。

背後の少女に気付かれぬよう、自然な形で刀へと歩いていく。

一度後方へ意識を向けるが、少女は特に気にしている様子はない

そして刀まであと一歩。

「頼むぜ、香霖！」

何の気なしに発せられた言葉。

霖之助は刀まで伸ばしかけた手を止めていた

「……」

改めて、破損した八卦炉へ視線を落とす。

まだ成人にも満たない少女が、己の手を焦がしてまで戦わなければ  
ならなかった戦い。

例え八卦炉を取り上げたところで、少女は戦へ出て行くだろう。

危うく身を守るための武器を奪ってしまうところだった

「魔理沙」

名を呼ぶ。

ある決心を秘めた顔付きで振り返りながら

「んー？」

店に並ぶ商品を弄りながら返事をする少女へ、霖之助は言った

「今度戦う時は僕も同行させてもらう。承諾するなら、修理代はチャラにしよう」

「……へ？」

間の抜けた声を背に受け、香霖堂の店主は奥へと消えた

――

その日、博麗神社からは巨大な光の柱が上がっていた。

全部で六つある角には印の書かれた札が配置されており、内部での事象を外界へ漏らさないように特殊な仕様になっている

六角柱の結界の中で、先代博麗の巫女である博麗 暁美と、現博麗の巫女 博麗 霊夢は対峙していた

武器や呪具の類を一切持たず、素手の状態で構える暁美に対し、霊夢の手には数枚の護符。そして周囲には三つの陰陽玉が展開されている

「……ッ！」

数秒の沈黙の後、暁美の姿が踏み込みも何も無いノーモーションで消失した

バギンツ!!!と、真後ろからの破壊音と共に展開していた陰陽玉の一つが碎き割れる

「ボサツとしない」

正面から声。

続けて二つ目の陰陽玉も砕け散った。

霊夢はすぐにその場から離脱し、周囲に弾幕を拡散させながら真横へ飛ぶ

同時に、霊夢の真横を疾風が駆け抜けた。

直後に聞こえる破壊音

(陰陽玉が一瞬で全滅させられた…!?牽制で撃った弾幕も掻い潜られたか!)

この時既に、暁美の動きは弾幕慣れしている霊夢の動体視力をもつてしても捉えることができなかった。

別に残像が見えるほどの速度は出ていない。寧ろ暁美の動きは緩やかだった

緩やかに、完全に霊夢の動きを読んで死角へと先回りしていただけ暗殺者の使う歩法技術の応用。洗練された武術も加わり、最早視認不可能なレベルにまで引き上げられた移動術を、暁美は弾幕の雨をすり抜けながら実行していた

即座に霊夢は護符を四方に投げ、特殊な詠唱を唱え始める

「~~~~、~~~~!~~~~!!」

空中の護符が光を帯びる。

同時に4枚の護符は光の線で連なり、霊夢を中心に四角形の陣を形成した

「神降ろしか。でも貴女のソレはまだ不完全よ」

連なる護符の間に一枚の札が投げ込まれる。するとエラーでも起こしたように陣を作っていた光は消失した

「くっ?」

「捕まえた」

そうして丸腰となったところへ伸びた手は、夢想天生を『発動している』霊夢の身体を容易く掴んだ。

成す術なく引き寄せられた霊夢はそのまま地面へ仰向けに倒される

「はい、貴女の負け」

間髪入れずに放たれた拳が顔の数センチ手前で寸止めされ、この実戦稽古は決着を迎えた

大の字に転がる霊夢を一見か細くも鍛え上げられた腕でいとも容易く起こした暁美は、自身の弟子であり後継者の少女へ今稽古の所感を述べた

「霊夢、その夢想天生つて技は強力かもしれないけど、これから先の戦闘では心許ないわ。少なくとも丸一日は継続して発動してられないと。それに神降ろしだって発動までにあれだけでもたついたら格好の的よ」

「うっ……、確かに」

「それと最初に私の姿を見失った時点で動かず突っ立ってるだけだったのはいただけないわね。直接本体を狙ってたら貴女死んでたわよ？」

「でもそれは姉さんが…」

「言い訳しない!」

「……はい」

暁美とて霊夢の言わんとしてることは分かっていた。

歴代最強とまで言われていた自分が、それなりに本気で動いたのだ。博麗の巫女としてまだ未完成な霊夢では、対応できないのも無理はない

それに曉美自身の能力、『実体を捉える力』の前では、曖昧な形であらゆる物から浮いて無敵となる夢想天生は相性が悪い。

更に言うならば、夢想天生と曉美の能力は矛盾対当の関係にあたるあらゆる物から浮くことができるという事は、実質何もかも触れることができないということ

実体を捉えることができるという事は、この世に存在している限り、触れられないものが無いということ

結局のところ、相反する二つの力は使い手の実力次第で優位性が変化する。

つまりそれは、今の霊夢の実力では病み上がり状態の曉美にすら敵わないということを示していた

「兎に角、まずはその夢想天生を完全なものにしなければ。持続時間及びその本質を全て引き出せるようにね。でなければこれから先の戦いにはついてこれないわ。貴女が本気で幻想郷を護るために戦いたいのなら尚更ね」

「……わかってる」

この特殊な術式の組み込まれた結界は紫と隼斗によって作られていた。

内部の事情を外部へ漏らさない。即ち、結界内の『時間の流れ』等を含めたあらゆる事象を外部から切り離してある。

結界とは、大きく取れば術者によって元の世界から切り離された小さな異世界。時間を掛けて綿密な術式を組み上げれば、ある程度なら時空間の流れを弄することもできる

今回のように、いつ戦が起こるかわからない状況下での修行にはうってつけの場であった

(結界の効果が切れるまであと『小半年』残ってる。外の世界では大体



1日くらい?……その間で何としても修得してやるわ!」

――

博麗神社に聳える巨大な六角柱の結界は、もう一つ、遠く離れた場所に展開されていた

ギイインツツ!!と、言う甲高い音響が一つ、また一つと聞こえてくるのは庭園から。

その様子を 此処、冥界の主である西行寺 幽々子と、幻想郷の賢者である八雲 紫が、屋敷の縁に腰掛けながら微笑ましく?見守っていた

「相変わらず息の詰まりそうな稽古風景ねえ。片や死に物狂いで剣を振ってるのに師匠の方は涼しい顔で容赦ない扱き方してるし。つて言うか剣速が速すぎて見えないんだけど、この賢者の目にも」

「妖忌ったら久々の修行だから張り切っちゃってるのねえ。何か奥義的なのを教えるんですって」

「奥義……つて響きはかつこいいけど、妖夢に修得できるの?あの妖忌が奥義つて言うくらいだから相当なものなんでしょう?」

「うふふ、妖夢だって凄いのよ?」

幽々子はそう言つて、傍にある山積みにした団子の一つを口へと運んだ。

紫がもう一度稽古風景へ視線を戻すと、ギリギリではあるが確かに妖忌の剣閃に少女は喰らいついていた

「時に紫、これが例の?」

幽々子は天高く伸びる緋色の結界を指して尋ねた

「ええ、幻想郷での被害を抑えるための結界。でも実戦投入は難しいわね」

「？　と言うと？」

「これだけ高度な術式を組み込むとなると相当な力の消費に加えて時間がかかり過ぎる。まあ、力の方は隼斗が担当してるからあまり問題ないんだけど、幻想郷全体を覆う程の結界となるとねえ」

「……今張ってる結界でどれくらいかかるの？」

「早くて半日。次の襲撃までのリミットがわからないこんな状態じゃあ、悠長に組み上げてる時間はないわ。現状では最優先で人里の結界を組み上げるところ」

「その割には此処でのんびりしてるわねえ」

「……別にサボってるわけじゃないわよ。術式の構成自体は藍と交代でやってるし、…それに今はなるべく消耗を抑えたいの」

そう言つて徐に立ち上がった紫は、ギリギリ結界の範囲内である縁から室内へ踵を返した

「あら、もう行くの？」

「此処にいと無駄に歳を取っちゃうわ。それに、のんびりしてるって指摘も受けちゃったしね」

一歩、結界の外へ踏み出した途端、紫の姿は消失した。一人残された幽々子は、相変わらず聞こえてくる稽古音を耳にしながらポツリと呟いた

「お団子くらい食べてけばいいのに。…余裕がないのは貴女も同じね」

……数日経った幻想郷は、いつ訪れるかもわからない襲撃に対して恐怖や焦燥といった声が上がっていた。

今日も、各地域では其々が次なる戦に備え、張り詰めた空気を保つ。己の鍛錬に費やす等住民達は躍起になっていた

そして翌日。

——幻想郷に再び動乱の時が訪れる

## 142話 甦る喧騒

ふと、ある切っ掛けから不吉な出来事の予兆ではとされる事象が存在する

買ったばかりの靴紐が切れる。

目の前を黒猫が横切る。

突然食器が割れる。

鴉の群れが忙しなく鳴く。

鼠が客船から逃げ出す。

だが所詮は人の作り出したジnkス。それを迷信だと言って信じない者もいるだろう

少なくとも、余程ナイーブな者でない限りそんなレベルの話ならばその場だけの不快感で終わるはずだ

ならば、全ての者が一斉に不吉や恐怖を感じるものはなんだろうか

……その日の幻想郷の空は赤黒く染まっていた。

空には幾つもの『穴』が開き、穴を中心に不気味な黒い靄が渦巻いている

前回とは違う。

人々は気付いていた

それは不自然すぎるほどに。

この日の幻想郷は静寂に包まれていた

――

人里の住民がこの異常を感じ取るのに十分と掛からなかった。次の瞬間には一斉に避難場所へと駆け出し、普段は賑わっているはずの

大通りはあつという間に無人となる

「……来ましたか」

命蓮寺の僧侶、聖　白蓮は人里の真上に開いた空の穴を見上げつつ  
呟いた。

その隣で腕を身体の前で組み、入念にストレッチをする白髪の少女、藤原　妹紅は上を見上げたまま尋ねる

「守備はどう？」

「ご心配なく。住民の警護は慧音さんや星達に任せてあります。私達は大本を叩きましょう」

「そっか。こんな事言うのも何だけど…、退がるなら今の内だよ。どんな奴が出てくるかわからないし」

「お気遣い感謝します。ですが、私も戦えますので」

「巻き込まれて死んでも知らないよ」

「ふふ、では僭越ながら足手纏いにならぬよう尽力します」

「…もう」

調子を狂わされたといった感じに呆れ顔を作った少女は、次の瞬間には眉間に皺を寄せ一言呟いた

「……来る！」

上空に開いた穴の入口から一層強い邪気が噴き出し、中心から狩人の装束に身を包んだ男が姿を現した。

その手には身の丈程の弓を携え、背には矢の入っていない矢立を背負っている

男は空中で停止し、眼下に立つ妹紅等を心底詰まらなと言った表情で見下ろし、吐き捨てた

「チツ、ハズレか。一番戦力の無いこの場所に特記戦力が集まると思ってたてのによお」

次いで大弓をクルクルと回し、人気の無くなった里の住居を一見していく

「あいつ…、一体何して…!？」

直後、妹紅は目を見開き掌に霊力を集束させた。突如として目の前を通過し、住居へと向かっていく『矢』を撃ち落とすために

『白雷』!!」

一筋の雷の閃光が、高速で突き進む矢を横合いから弾き飛ばす。

破壊こそされなかったものの、失速した矢は宙を舞い、そのまま重力に従って民家の屋根に突き刺さった

「あ?…何だお前」

男は不快な表情を作りながら再び眼下の妹紅を睨みつけた。

構わず妹紅は叫ぶ

「何だはこつちのセリフだ!いきなり私達を無視して好き勝手出来ると思うなよ!!」

間髪入れずに男の後方から声がかかる

「動かないで下さい」

白蓮は静かに囁いた。

その手に数多の魔法を集約させた巻物『魔人経巻』を握り、もう片

側の掌から伸びている光の刀身を男の背へと向けて

「……………その剣は飾りか？何故刺さない？」

「誰も傷付かずに争いが終わるに越したことはありませんから」

「……………あんまりがっかりさせんなよ人間」

男の溜息と同時、突然一軒の民家が一瞬で火達磨になった

「なっ!？」

「サリエル様の言った通りだな」

驚愕に染まる白蓮へ向け、既に弓を構えた状態の男は、彼女の背後を取りつつ言った

「!？」

「背後を取つてもつまらん虚仮威し。かと言って高々家一軒燃えたくれえで標的から視線を外す」

キリキリと矢を引き絞る音が止まる。

「そんな弱者が、狩人の前に立ち塞がるな」

矢は男の指を離れ、白蓮の首筋へと向かう

「白蓮……………ツツツ!!」

続け様に新たな矢が現れ、加勢に向かおうとした妹紅にも幾十もの矢が放たれた

【天使軍『レラジエ』】

――

一面に向日葵を始めとした花々が咲き誇る太陽の畑。

以前の襲撃によってその四分の一の被害を受けた畑には、次なる襲撃から花々を護るために強力な結界が展開されていた。

その陣前に立ち塞がる風見 幽香は、吐き捨てるように言い放つ

「穢らわしい。誰の許可を得て此処に踏み入っているのかしら？」

紅く光る眼光で目の前の敵を睨みつける。

その背に蝗の羽を生やし、体表を昆虫の様な甲殻に覆われ、頭には金の王冠を被った男

「お前が特記戦力か？」

「違うと言ったら？」

「……………此処は良い場所だな」

「？」

男はそう言っただけで周囲を見渡すと、口角を上げて

笑った

「絶好の『餌場』だ」

直後、男の身体から大量の黒い霧が噴き出した。霧は瞬く間に周囲を覆う

「何をやる気…………ツ!？」

幽香は周囲の霧を睨み付け、そして驚愕する

――それは通常よりもふた回り程大きな『蝗』だった。



その姿は異形そのもの。

頭部は悍ましい表情をした女の顔を貼り付け、蠍のような尾からは鋭い針が見え隠れしている

その姿を見て、幽香は先程男が口にした言葉の意味を理解する

「殺す…ッ!!」

日傘の鋒に集束された莫大な魔力が、男に向かって一直線に放たれた。

男は一步も動かさず軽く指を鳴らす。

すると周囲を漂っていた蝗の群れは男と魔砲の間に割って入るように集まり、円形状に展開した

そして衝突。

一見魔砲は蝗の盾を突き破るかに見えた

「喰らえ」

男はそう呟いた。

直後に魔砲はその出力を落とし始める。

まるで蝗の盾に吸収されていくように少しずつ消滅していく

そうして魔砲が消滅し切った瞬間、幽香は蝗の群れが忙しなく顎を動かしている光景を見た

「……魔力を…、食べた？」

「中々美味いなお前の力」

「……チツ、面倒ね」

【天使軍『アバドン』】

――

レミリア・スカーレットは従者と門番を下がらせていた。

普段は館の王室に座し、侵入者等の処置の一切を任せている彼女も、この時ばかりは館の屋根まで出向いていた

「中々、良いセンスしてるわね」

言葉を発したのはレミリア

「……何がだ？」

「態々この紅魔館を選んで現れたのだろうか？まあ無理もない。これだけ見事な館は幻想郷のどこを探しても無いからなあ。なんなら観賞して……」

遮る様に男は呟いた

「確かにどこもかしこも紅い……、お前はセンスが無いな」

「……」

ばつさりと言い放たれ、途端に黙りこくったレミリアは俯き、肩を小刻みに震わせる。

次の瞬間その小さな手に強大な魔力で形取られた神槍を形成して顔を上げた

「前言撤回。死にたいらしいわね」

「涙目で言っても迫力でないよ、お姉様」

その様子を冷めた目で見ていたフランは呆れ顔で横に並ぶ。姉と同様、その手に魔力で形成された真紅の大剣を構える。

レミリアは一度咳払いをして呟いた

「フラン、私達が直々に戦わなければならない相手よ。呉々も油断の

無い様にね」

「わかってる。跡形もなく破壊してやるわ！」

「吸血鬼の姉妹か。お前たちも本来ならば魔族に値する種だろうに。……まあいい」

天使の翼を黒く塗りつぶした様な漆黒の翼をはためかせ、男はゴキ  
ゴキツと指を鳴らし、

「子供だろうと容赦はしない。皆殺しだ」

淡々と高揚の無い言葉で言い放った

【天使軍『アスタロト』】

――

妖怪の山。

来たる襲撃に向けて、日常的に行っている警備を更に強化して  
いた。

一切の侵入者を出さぬ様、例え幻想郷の賢者であっても幾つかの手  
順を踏まねばならぬ程に

「折角嚴重な警戒線を築いたと言うのに……。ここまで堂々と来られ  
ると逆に清々しいのお」

伝令からの報告を受け、屋敷にて控える彩芽は薄く笑った。

屋敷内においても既に始まっている喧騒、そして殺意が肌にチリチリ  
と伝わってくる。

既にこの屋敷の防衛を務める一部隊を残し、全ての部隊が襲撃者駆  
逐の為に出払っていた

「……私も、久々に戦さ場へ出るかの」

既に、妖怪の山の三分の一は天使軍によって侵攻されていた。

その軍の前衛には、幾十もの軍兵を引き連れた一人の男。

鴉の頭部に翼、手には鋭利な剣を持ち、巨大な狼に跨った異形の悪魔。

後方の兵士達は、以前幻想郷を襲撃してきた髑髏顔の化物だった

それらに対峙する大天狗率いる天狗軍。

幻想郷内では珍しく組織化された天狗達も、それを上回る兵力に苦戦の一途を辿っていた。

兵力だけじゃない。更に天狗達を追い詰めるもう一つの要因があった

「こいつら何なんだ！痛みを感じてないのか!？」

そう叫ぶ鴉天狗の一人は、自身の持つ刀を一体の化物に突き刺しながら思わず後ずさった。

しかし化物は怯むどころか鴉天狗の盾に喰らい付き、我を忘れた様に暴れ回る。

その背には他の天狗達が突き立てた刀や槍が突き刺さっている

「離れて下さい！」

白狼天狗の犬走 椀は、その化物目掛けて急降下しながら刀を振るった

ゴドンツ！と、切断された化物の頭部が地に落ちる。そうして漸く化物の身体は攻撃を止め、倒れ伏した

「た、助かった」

「こいつらは…、一体」

疑問を口にする樵へ、鴉天狗は返答する

「こいつら最初はこんな異常じゃ無かったんだ」

「どういうことですか？」

「あの化物達を率いてる指揮官…。アイツが奇声を発した瞬間急に化物達は正気をなくしたみたいに暴れ出したんだよ」

【天使軍——『アンドラス』】

## 143話 統率者

天狗と天使軍との抗争が起こる中、同じく妖怪の山に位置している守谷神社にも被害は及んでいた。

周囲には骸骨頭の化物達が倒れ伏し、それらを見下ろす様に立つ二柱と一人

「今ので全部か。早苗、怪我はない?」

「はい、大丈夫です!」

「はは、神奈子つてば私らがいれば基本大丈夫でしょ」

「邁進はよくないぞ。今の私達には昔程の力は無いんだから」

「やだなあ、別に邁進なんて……」

洩矢 諏訪子はそこで言葉を止めた。

怪訝に思った早苗が首を傾げ尋ねる

「諏訪子様? 一体どうされたのですか?」

徐に隣の神奈子へ視線を向けると、同様に真剣な表情のまま固まっていた

「神奈子様?」

「早苗、下がってなさい」

神奈子は片手を早苗の肩へ乗せ、自身の背後へ押し下げた

「……来るよッ!」

諏訪子が空に向けて叫んだのと同時だった

何も無い空間に突如黒い渦が発生し、続いて大気を震わせる程の咆哮が響き渡った

「な、ななな何ですかコレ!？」

次の瞬間、大地すらも震撼する咆哮はぴたりと止み、黒い渦はその口を広げる様に割れる

「おお?ワシの担当は此処か」

野太い声と共に、穴から身の丈が屋根を優に越える巨躯の男が姿を現した。

六本ある腕にはそれぞれ柳葉刀の様な刀や、メイスと言った重々しい武器を持っている

大男は周囲に倒れている化物の群勢を一見して笑い声を上げた

「がははははっ!そうかそうか。あの鳥男の一個部隊を潰したか。ざまあ無いわい」

ぎよろりと、その大きな目玉が眼下の神奈子等を見下ろす。口角を吊り上げたままの大男は声高らかに宣言した

「儂は天使軍・強襲部隊筆頭『ラーヴァナ』。宣言しよう。お前達では絶対に儂は倒せん」

ラーヴァナは大木の様な腕を上げ、巨大な刀身を振り上げる様に構えた

…直後、辺り一带に烈風が吹き荒れ、大地が沸騰した湯の様に盛り上がる

「不快な男だ」

押し黙っていた二柱は、これまで内に秘めていた神力を爆発させる

「身の程を弁えろよ下郎」

そこに以前程の力はない

しかし、その眼光にやどる覇気は衰えず

「…ほう」

ラーヴァナは薄い笑みを浮かべ、刀を握る手に力を込めた

「では、始めようぞ…!」

直後、巨大な刀身は刹那の瞬間に振り下ろされた

【天使軍『ラーヴァナ』】

――

「ぐあっ?!…いい、いきなりどうしたってんだ! 勇儀の姐さん!」

一体の若い鬼は苦悶の表情を浮かべながら叫ぶ。

此処、旧都の鬼達を束ねる頭、星熊 勇儀は鬼の青年の肩に指を食い込ませながら軽々と持ち上げ、呟いた

「だって…、仕方ないじゃないか。『あのお方』の敵は私の敵だからねえ」

「な、何言って、ツツ!」

ゴキリツと、青年の肩は外れた。そのまま落下し、更に自重によつ



て外れた肩から鈍い音が響く

「がっ、ぐあああああああ!?!」

「勇儀さん!?!」

「何やってるんだ頭!!そいつを放してくれ!!」

堪らず悲鳴ををあげる青年と、その異常な光景を目の当たりにした周囲の鬼達は一斉に制止しようと詰め寄った

「ほっほっほ。無駄、ですねぇ」

後方から聞こえる不敵な笑い。

その言葉が示すように、勇儀は掴んでいた青年を外れた肩など御構い無しに横薙ぎに振るい、周囲の鬼達ごと吹き飛ばした

「同じ鬼でもその頭領となるとここまで違うのですか。成る程成る程、やはり貴女を先に引き込んでおいて正解でしたねぇ」

今異変の明確な『敵』であるその男は、当たり前のように勇儀の隣へ歩み寄った。

しかし、対する勇儀には敵対性の欠片も無く、逆に男に従うように頭を垂れた

「勇儀…さん…?…何で、其奴なんかに!」

鬼達は混乱せずにはいられなかった。

先程まで肩を並べ、目の前の男と戦っていた筈の自分達の頭が、今ではその敵側についている。事実、たった今仲間の数人がやられたのを目の当たりにしたばかりだ

「さてさて、お集まりいただいた皆さんは非常に残念ですが、生きて帰ることはできません」

男は再びにんまりと不気味な笑みを浮かべ、ゆっくりと勇儀の肩に手を置き呟いた

「殲滅しなさい。その手で、肉を裂き、骨を砕いて、一人残らず…ね」  
「ああ」

その残酷な指示を、二つ返事で承諾した勇儀はゆらりと鬼達へ向き直った

「ちよつ、待ってくれよ頭…、冗談だろ？」

「私は嘘が嫌いだ。知ってるだろう？」

言うや否や、石畳の道に足型が残る程の踏み込みで一気に詰め寄った勇儀は、最初の一人を手にかけるべく拳を握った

「ひっ…!?!」

反応できないまま鬼は小さく悲鳴を漏らした

「妬符『グリーンアイドモンスター』」

突如、勇儀等の間に割って入るように出現した巨大な緑の蛇は、勇儀の腕や胴に巻き付きその動きを制止した

「あ、ついスペカ名で言っちゃったけど必要なかったわね。技名叫んだみたいで気恥ずかしいわ」

「いえ、颯爽と駆け付けたこの局面に於いてはアリだと思いますよっ」

二つの声の主は同時に皆の眼前に現れた。  
それを見た男は興味深そうに目を細める

「ほほう、どうやらお目当の獲物が釣れましたねえ」

右手に持つ本をぱたりと閉じ、男は勇儀に向けて再び指示を出した

「先程の命令に訂正を入れます。ピンク髪の妖怪以外を皆殺しにしない  
さい」

「ああ」

勇儀は身体に巻き付いている蛇の拘束を力尽くで解こうと掴み掛  
かった

それを見た金髪ショートボブの少女、水橋 パルスィは隣の少女へ  
囁く

「どうなってるの？彼女」

もう一人の少女は暫く勇儀を一見した後答えた

「……妙ですね」

「何が？」

「勇儀さんの思考がちゃんと読み取れたんです」

「は？」

「わかりませんか？『読み取れた』という事は、彼女の意識があるとい  
うこと。つまり勇儀さんは操られているわけではないんです」

「……ますますわからないんですけど。じゃあ何？勇儀は自分の意思で  
私達の敵になってるってこと？」

質問に、少女は一度思考を巡らせた

「恐らく洗脳の様なものでしょう。何等かの方法で勇儀さんは私達を敵だと認識させられてしまっている」

「…何でそう言い切れるの?」

「今、彼女の心の中は私達への敵対心。そして傍に立つあの男への忠誠心で満たされているからです」

『敵対心』、ね」

ブチイツツ!!と、拘束を無理やり引き千切った勇儀は肩を鳴らしながら臨戦態勢を取り始めた。その隣へと移動した男は閉じていた本を開くと左手でさとりを指し、

「お初にお目にかかります、地底の主よ。私、『ダンタリオン』と申します。貴女には一度会ってみたかったですよ」

「(……思考が読めない?) 何故私に?」

その問いに、ダンタリオンは狂気染みた笑みを浮かべ、言った

「覚妖怪古明地 さとり。『同じ力』を持つ者を一度翫ってみたくてです  
すねえ…!」

【天使軍『ダンタリオン』】

――

普段は罪なき靈魂等が漂う冥界。

霊の中には、自身の成り行きなど気にせず暢気に過ごしている者までいる比較的長閑なこの場所も、今日だけは鋭い空気に満ちていた

「…師匠」

「来たか」

白玉楼庭園。

突如現れた侵入者の前へ、二人の剣士が立ち塞がる

「……………」

早くも二刀を抜き放った妖夢は、周囲を警戒しつつ臨戦態勢をとった。

そんな彼女へ、侵入者は厳格な声色で言い放つ

「案じずとも我一人だ。鋒はそのまま向けておけ」

侵入者は歩みを進めながら、右腕を水平に伸ばすと、何も無い空間から三叉に分かれた槍が出現した

(……………強いな)

一歩後ろでその一連の所作を見ていた妖忌は、一度視線だけを弟子の背中へと向けた

「!」

気配に気付いたのか、意識は前方に残したまま、頭だけを傾ける妖夢。

そして静かに頷いた

「この蚩尤相手に、その娘だけにやらせる気か? 『強き』 剣客よ」

柄から手を離れた妖忌を見て、侵入者は歩みを止めた。

そしてその言葉に返答したのは妖夢だった

「私では力不足とでも？」

「お前からは殺気を感じない」

瞬間、蚩尤から殺気が漏れ出す。

まるで突風を真正面から受けた様な圧力と、肌をチリチリと叩く感覚が押し寄せた

しかし少女は以前の様に怯みはしなかった。

刀を握り締め、迎え討つ態勢を整える

「妖夢」

「はい。…っ！」

その頭を大きな掌が包んだ

「今一度、お前が背負っているものを思い返せ。それでは任せられんぞぞ？」

「！」

次いで強く、そして優しく頭を撫でたその手はゆっくりと離れた

「力み過ぎだ。いつものお前の剣を振れば良い」

「……はい!!」

今一度柄を握り直し、大きく息を吐いた妖夢は再び正面の敵を見据える

「ーそして

「はあッ!!」

ズアッ!!と、辺り一帯の落ち葉が宙を舞い、蚩尤の持つ槍の穂先が僅かに震えた

「……ほう、大した剣気だ」

蚩尤は槍を構えた

直後、空気を裂く鋭い衝突音が鳴り響いた

シユウ

【天使軍『蚩尤』】

――

魔法の森。

幻想郷で森と言ったならば此処をさすほどの著名に広がるこの場所は現在、その四分の一が甚大な被害を受けていた。

木々は薙ぎ倒され、地盤は所々ひっくり返されている

その地に立つ魔理沙、アリス、霖之助の三人は、半ば啞然としながら上空を見上げていた

「私さ、二回目なんだよな。ドラゴン見るの」

「あらそうなの？私の地元では普通にいるわよ？」

「僕も実物を目にするのは初めてだな。魔界の龍と言うのはあんなにも禍々しいのかい？」

「まさか」

一筋の汗が頬を伝い、若干引きつった表情でアリスは答えた

「……魔界のはもつと可愛気があるもの」

「ゴアアアアアアアアアア!!!」

耳を劈く程の咆哮。

三ツ首の竜は血走った眼光を向け、周囲に凄まじい衝撃波を撒き散らした

「……よし。生まれ変わった『コイツ』を試すのに不足はないぜー」

「はあ、私達って結構な外れじゃないかしら」

「……さて、僕はどこまで戦えるかな？」

三人は掌の魔具を、指先から伸びる西洋人形を、腰に下げる剣を構えた

【天使軍『アジ・ダハーカ』】

――

今朝方は快晴だった空が、黒雲によって浸食されていく。

同色の雷が迸り、上空に空いた数多の穴からは絶えず襲撃者が降り注ぐ光景を目の当たりにしながら、悪魔の姉妹は今し方片付けたばかりの敵を地面に放った

「段々骨のある奴が出てきたわね」

「そう？ 呆気なく壊れちゃうけど。ほら」

夢月はそう言っ腕を真横に薙いだ。

途端に血飛沫が舞い、首から上を切り落とされた魔獣は力無く崩れ落ちる

「うえっ、不っ味……」



「止めなさい。変な病気になるわよ」

刃に変化させていた腕に付着した血を舐めとり勝手に顰めつ面を作っている妹を嗜めつつ、幻月は後方に視線を転じた

「此処も大体片付いたし良いでしょ。夢月、そろそろ戻るわよ」

「えー、またあの巫女の所行くの?」

「文句言わない。また拳骨貰いたくないでしょ?」

姉妹の現在地は博麗神社近隣の湖。

過去に因縁のあるこの地に於いて、防衛線を張るよう半ば無理矢理巫女二人に押し付けられたのだった

「まったく、こっちも退院したてだって言うのに」

そんな文句も垂れつつ飛翔した二人は、博麗神社へ向けて加速した  
そして見えてくる緋色の結界。

これは博麗神社を囲っている幻想郷の賢者特製の結界であり、外部との干渉を遮断する仕組みになっている

『激化が予想される場所』、か。あんな小さな場所が一体どんな  
……ツツツ!？」

言いながら結界内へ侵入した幻月は、思わず急停止を掛けた

「な、なん……!?!この魔力って……!？」

結界内は尋常じゃない力の奔流に埋め尽くされていた。今の今まで薄い結界一枚にこれだけの圧力が閉じ込められていたのかと疑う程に。

後方ではいつも饒舌な妹も押し黙っていた

先程から冷や汗が止まらない。  
自分達でさえこれなのだ。この世界の人間が魔力を直接浴びれば  
一瞬で命を奪われる

眼前には博麗神社。

その正面には既に臨戦態勢に入っている巫女が二人

……そして。

「!?」

その視線の先。鳥居の上にそいつは座していた。

全身が白い体表に包まれ、巨大な四枚の翼を生やした人型のそれは、静かに眼下を見下ろしていた

博麗 暁美は隣に立つ霊夢へ、静かに言った

「全力でかかりなさい霊夢。多分コイツ、私や紫より格上よ」  
「うん、何となくわかる」

——白い悪魔は静かに立ち上がり、呟く

「さて、消すか」

【天使軍—— 『サタン』】

## 144話 猛威との対峙

妹紅によって生み出された火炎が壁のようにそそり立ち、民家を守るように展開されていく

同時に次々と打ち込まれていく発火作用のある矢の連射。

それを阻止する為に接近戦に持ち込もうとする白蓮を上回る速度で、レラジエは人里を駆け巡った

「くそーあいつ私らを見殺しして里全体を燃やす気か!? ふざけやがって!!」

「妹紅さん！もう少し里の守りに集中してくださいください!!」

白蓮は手にしている魔人経巻を掲げ、魔法による詠唱を省く。直後に爆発的な加速でレラジエの前に躍り出ると、鋼鉄の如く硬化された拳を放った

「!」

ボツ!! と空気が弾け、音速の域に達した拳は空を切った。

不意をついた筈の一撃を、首の移動だけで躲したレラジエは、大弓の標準を白蓮の眉間に合わせ躊躇なく矢を放つ

「緩いんだよ、お前の動きは」

レラジエはギリギリで身を逸らして矢を回避した白蓮の真上を取るように、再び矢を構える。

だが待ち構えていたように、白蓮は両の手を合わせた

「!」

次の瞬間、凄まじい閃光と同時に、白蓮を中心に拡散する光線が放たれた。

最初に出た閃光によって、一瞬目が眩んだところへのまさに虚を突いた攻撃、

「だから、甘えつて」

「ぐっ!？」

声は真後ろから聞こえ、途端に髪を掴まれた白蓮は地面へ向けて投げつけられた。

激突すんでのところで態勢を戻し、着地した白蓮の眼前に、既に放たれた矢先が迫る

ギイーン! と、矢とは思えない甲高い音が鳴り、ギリギリ挟み込まれた障壁によって防がれた

「反応速度だけは中々だが、狩人の俺からしてみれば格好の獲物だ。大体お前らは……」

「赤火砲ツ!!」

動きを止めたレラジエへ、横合いから特大の火球が打ち込まれる

「つたく、話してる途中で打ってくんじゃねえよ」

レラジエは迫る火球を鬱陶しそうに睨むと、即座に一本の矢を射つた

「!？」

……そして矢は一瞬で火球を突き破り、速度変わらず妹紅の肩部へ突き刺さる

「痛ッッ……！」

矢はそのまま肩の肉を抉りながら貫通し、後方の地面へ深々と食い込んだ

「妹紅さんー！」

「はあ、少し強く射っただけでこれか。言つとくが、さつきから無駄に張ってるその炎の壁じゃあ、『今』の矢は防げねえぞ？」

言つて、レラジエは弓を上空へ構え射った。

矢は一定の高さまで登ると放物線を描く様に下降し、そして幾千もの矢の雨へと変貌する

「ッッー！白蓮!!！」

「わかつています!!！」

咆哮と同時に、妹紅は特大の炎をドーム状に展開させ、更に炎へ重ねる様に白蓮は障壁を張り巡らせた

ドドドドドドドドドドッ!! と、最早矢とは思えない、それこそ砲弾や土砂のような轟音が立て続けに鳴り響く。

だが魔力によって練り上げられた障壁はあつという間にぼろぼろとなり、通過過程で矢を焼き尽くす数千度の炎はその一つ一つの風圧で文字通り風穴を開けられていく

容易く二つの防壁を突き破った矢は次々と民家に突き刺さり、その余りの威力に炎上する間も与えず倒壊させていった。

地中深く食い込んだ矢は時間差で発火。

瓦礫となった家屋はあつという間に燃え広がった

「くっそオオ!!！」

「妹紅さんまずは回復を！その傷では無茶です！」

憤怒の形相を浮かべる妹紅の肩からは夥しい量の血が流れ出ていた。先程食らった矢によって骨まで砕かれているのか、左腕は唯肩口から垂れているだけになっている。

彼女の身を案じ、更に障壁を重ね掛けした白蓮は、ありつただけの魔力を身体に纏いレラジェへと突っ込んだ。

右手には光の剣、左手には魔人経巻を持ち、音速の数倍の速度で攻撃を仕掛けるが、レラジェは相変わらず涼しい顔で回避していく

「さっき俺が言った緩いって言葉の意味を理解してねえみたいだな。碌に隙も作らねえ内からそんなもん当たるか。見え見えなんだよ」

(剣を振るう前から避けた…!?動きが読まれてる…っ！)

「ついでに言うが、あの白髪の女が受けた傷が癒えることはねえぞ?」  
「!?」

その言葉が指す様に、後方で自身の傷口へ回道を施していた筈の妹紅は、がくりと膝をついていた。止めどなく流れ出てる血が、地面に赤い波紋を作り上げていき、出血多量によってデッドゾーンに入りつつあったのだ

(…傷が塞がらない…?…一体、どうなって…)

朦朧とする意識の中で、既に回道が出ていないことにも気付かず掌を何度も翳すが、その命は風前の灯火だった

「ツツ!!妹紅さんに何をしたんですか!!」

吠える白蓮を尻目に、レラジェは一度視線を妹紅へと向け、徐ろに手にした矢をそのまま白蓮の太腿へと突き立てた

「あぐっ…!?」

「気になるなら自分で体感しろ」

一瞬で機動力を奪われた白蓮の腹に、容赦なくレラジエの足裏が食い込み、瓦礫の山へと叩き込まれた

『治癒の阻害』。一見地味だが、お前らみたいな脆い人種には致命的な能力だろ?」

弓の照準が、出血によりショック状態に陥っている妹紅へと向けられる

「クソつまんねえハンティングだったぜ」

矢はレラジエの指を離れ、無慈悲にも彼女の頭部を打ち抜いた。

それもただ風穴が開いたわけじゃない。大口径の弾丸に撃ち抜かれたかの如く、脳漿を撒き散らせながら弾け飛んだ。

身体は力無く地面に転がり、欠損箇所から大量の血溜まりを広げていく

レラジエはかったるそうに溜息を吐き、人里奥の命蓮寺方向を一見した

(住民はあそこだな。とつともう一匹始末して向かうか)

瓦礫を払いながら立ち上がる白蓮に向き直り、狩人はとどめの矢を引き絞った

「狩猟完了」

……直後だった

「勝手に終わらすな」

ゴツ!! と、鈍い衝突音。

レラジエのこめかみ目掛け、火炎を纏った爪先が突き刺さった音だった

「……確かに仕留めた筈だがな」

「なんだ、案外甘いんだね。狩人つてのは」

身体中を炎上させたまま、魂起点の元『蘇った』妹紅は鼻で笑った。不意をついた一撃は、爪先とこめかみの間に挟み込まれた掌によって防がれてしまったが、白蓮へ向けられた矢の軌道は大きく逸れ明後日の方向へ突き刺さった

未だ炎上する足を涼しい表情で掴み返したレラジエは、腰から小刀を取り出すが…

「!」

突如、妹紅の突きつけている足の踵からジェット噴射の様に炎が噴き出し、爪先は更にガードごとレラジエを側方へ押しやった

「ツツ!」

倒れたのは妹紅の方だった。

今し方蹴りつけた脚を地面に降ろした瞬間、崩れ落ちる様に力が抜けた

「…な…に……っ!」

視界が暗転を繰り返す中、斬り裂かれた自身のアキレス腱を目にしたのを最期に、ぷつりと意識は切れた



「刃に塗ってある毒は一瞬で全体に回る。致死性も十分だ。残念だったな」

血の滴る小刀を払い、レラジエは冷めた調子で吐き捨てた

だが、既に物言わぬ骸となっている筈の少女は応答する

「致死性？ 好都合だ馬鹿野郎」

瞬間、妹紅の身体から膨大な炎が噴き出す。

正確にはその背から、約5メートル程に凝縮された炎の翼が形成された

「……何だそれは？」

妹紅は返答するよりも早く、地面を踏みしめる

「……『瞬間』、

直後にレラジエは目の前の空気が弾ける爆音を耳にした

次のアクションが起きる

一瞬でレラジエの眼前に迫った妹紅は、握り込んだ拳に高濃度の霊力を集中させた。

そして、拳を中心に炎の渦が発生する

「気になるなら自分で体感しろ」

「!？」

圧縮された力は一挙に解放された。

突き出した拳と同時に前方を放射状に埋め尽くした炎の奔流は、レラジエに回避の時間を与える事なく人里上空に火柱を作り上げた

「白蓮、大丈夫？」

「はい……。妹紅さん、貴女は一体…ツツ！」

言葉を続けようとした白蓮は脚に走る鋭い痛みで顔を顰める。

妹紅同様に治癒術を阻害するナニかが働き、先程矢が刺さった箇所は出血と激痛に襲われていた

「白蓮、すぐに止血して。あと出来れば里への障壁の準備も…」

せめてもの救いは突き刺さった矢が射られたのでは無く直接突き立てられたこと。

ギリギリではあったが大腿動脈は逸れていた。

白蓮は頷くと、光の念糸を形成して足の付け根を緊縛するが、改めて思考を巡らせ慌てて顔を上げた

「…まだ、終わってないから」

妹紅は静かに言った。

この戦闘が始まってから漸く生じた間。

その僅かな時間の中に、白蓮は無意識の内に安堵を覚えてしまっていた

冷静に考えれば、敵の能力が消えていないこと以前に、自分達二人がかりでも苦戦を強いられた相手がこんなにも呆気なく退場するわけがなかった

「流石にそこまで馬鹿じゃなかったか」

声の直後、空中を漂っていた黒煙が一瞬で吹き飛んだ。

それは急な突風によるものではなく、今まで押さえ込んでいたものが解放され弾けた様な衝撃波だった。

半分程欠けた髑髏の仮面を不機嫌そうになぞり、レラジエは更に悪態を垂れる

「とは言えさっきのはムカついた。俺は用心深いんでな。半分だけとは言え、つつい『仮面』まで出しちまったよ」

「用心深い？ビビリの間違いじゃないの？」

妹紅はそう悪態を返し、鼻で笑ってみせた。

それが挑発とわかっていながら、しかしレラジエは敢えて乗った

「そんなに寿命を縮めてえのか？」

次の瞬間、レラジエの周囲に黒い影の様なものが出現した、空中を一定間隔で浮遊するそれは、形を変え、分裂していく

「本来は大型の獲物を狩る時に使うもんだ」

影はその全てが、指向性を持ったかの様に妹紅に狙いを定める幾千もの矢へと変化した。

いや、それは矢と言うよりも両端の尖った杭と表現した方がいいか

ゴオツツ!! と妹紅の背から噴き出る炎の霊力が一層強まった。

この際目の前の男がどんな武器を使おうと関係はない。

相手の攻撃は一発でも喰らえばアウトの反則能力付きだ。

不老不死の身体を持つ自分でも、そうほいほい復活に力を奪われるわけにはいかない。

いくら甦ったとしても、そこに戦う為の力が残っていなければ意味がないのだ

よって攻撃は避けるか撃ち落とすしかない

「無窮瞬間」

背に纏う炎の翼が肥大化し、妹紅の身体全体を包み込んで鎧の様な姿をとった

「そんな薄っぺらい外皮で俺の矢を防げるとでも?」

「残らず灰にしてやるよ!」

後方にいる白蓮は障壁を張っているとはいえ足の負傷によって満足に動けない状態だ。

だが、彼女がいなければ人里の被害は今現在の比でなかつのも事実。

妹紅に残された選択は、必然的に矢全てを受け切ることだった

妹紅の背の翼がジェットエンジンの様に炎を放出し始める。

両手を翳し、迎え撃つ為の態勢をとった

「お前が死しても尚甦るカラクリはわからんが、それは神に背くかの如し行為だ。代償も無し、と言うわけにはいかないだろうか?」

ズンツツ!!! と、何千・何万本以上ある内の一本が、妹紅等の前方の地面に打ち込まれた。

それは矢一本の威力を誇示する為だったのか。

矢は地中深くまで食い込み、地面に開いた穴の周囲はひび一つ無く焼け焦げていた

「さて、これでお前は何回死ぬ?」

……一斉に。

空を覆い尽くす量の矢が雨の様に降り注いだ。

矢は猛スピードで飛来するも、風を切る音も無く無音で迫る

「はあああああああ!!!」

妹紅の両掌から大砲をぶつ放した様な爆音が鳴り、莫大な出力の火塊が打ち出された。

余りの炎圧に、妹紅自身も後方へ吹き飛びそうになるが、背から噴き出る翼がその体勢を制御する

無数の矢の束と高出力の炎が衝突し、削岩機にかけた様な大音響が耳を叩いた

……しかし、

「!!」

均衡したかに見えた両者の激突は、一つの血飛沫によって崩れた

「ぐっ…」

炎を抜けた矢の数本が、妹紅の身体を貫いた。

更に矢は次々に火塊や炎の鎧を突き破って妹紅へと降り注ぐ

「あぐっ…いぬ、があ…っ…おおおあああああッ!!!」

妹紅は咆哮し、身体に走る激痛に耐えながら放出する炎を一層強めた。

「無駄だ」

それでも矢は進行する。

その内の何割かは炎によって融解するも、容赦無く白髪の少女を赤く染めていった

――

幻想郷に侵攻した天使軍は、対峙する各地の強者等を嘲笑うかの様に、その猛威を振るっていた

…太陽の焔

「どうした花妖怪、もうバテたのか？」

「黙れ!!」

風を切り、高速で振るわれた日傘は次々に飛来する蝗の大群を薙ぎ払った。

だがバラバラになっていく蝗は皆、直前に日傘へと牙を立てていた。

その一匹一匹が魔力を喰らう異界の蝗であり、喰らった魔力は蝗を介して主であるアバドンへと送られる

魔力を攻撃に転換している幽香は、アバドンにとって格好の獲物だった

「あと蝗の毒にも気を付けな？刺されたら痛いじゃ済まないぜ？精々ぷすりとやられねえ様に……」

「ベラベラとよく動く舌ね、引き千切ってやるわ……!」

幽香の意思に反応し、地中から勢いよく飛び出した巨大な蔓が、アバドンを捕らえるべく伸びる

「無駄あ!!」

不敵な笑みと同時に、両者の間に展開された蝗の大群は、突き進む蔓を先端から齧り、瞬く間に喰らい尽くした。

アバドンは戦闘が開始されてから一步も動いていない。  
無限に湧き出る蝗の群れを操り、着実に獲物を追い詰めていく

「……無駄？ 案外そうでもないんじゃない？」

「あ？」

ぼとりつ　と、周囲を漂っていた蝗の何匹かが地に落ちた。

ピクピクと痙攣し、やがて動かなくなつた蝗を暫く見つめたアバドンは、先程までの陽気な調子を崩して言う

「……毒、か」

「御名答」

幽香は掌を下にして横に振るう。

するとその軌道上からキラキラと細かい何かが舞つた

「人間界にはない魔界の毒花。それから取つた花粉は一吸いで巨大な魔獣すらも昏倒させる。そんなちっぽけな虫けらが耐えられるわけがないわよね？」

「さつき飛び出した蔓もその類の物つてわけかい。……小癩な真似を」

「心配しなくても貴方は直接私の手で叩き潰してあげるわよ」

幽香から一挙に殺気が漏れ出る。そのプレッシャーを受けてか否か、今戦闘で初めてアバドンは動いた

## 145話 蹂躪

天使軍襲来により、幻想郷の空は不気味な程赤黒く、瘴気のような空気に包まれている。

過去に起きた紅霧異変に類似する現象が起きているが、唯一異なる点は、その霧が日の光を遮る為に発動されたものではないということだ

紅魔館上空を高速で飛行する三つの影が激しい衝突音を響かせていた。

燃え上がる紅蓮の大剣と、魔力が凝縮された魔槍を手にした二人の吸血鬼の猛攻を、敵対するアスタロトは平然と対処していく

本来最強の種とされる吸血鬼は、圧倒的な膂力・速度・魔力を持っている。

事実、スピードに於いてはレミリアとフランが上回っていた  
……にも関わらず、

(コイツ……! 明らかに死角からの攻撃にも反応している……っ!?)

振るう魔槍は空を切り、回避地点に先回りしようと、既に対応すべき構えを取っている。

アスタロトの動きは、明らかに二人の少女の行動を掌握しているものだった

だがいつまでもあしらわれている訳にはいかない。レミリアはアスタロトを挟み込むように動き、丁度フランと敵との位置関係が直線上になった瞬間叫ぶ

「フランツッ!」

『『フォーオブアカインド』!!』

フランの身体がぶれ、三体の分身が飛び出した。分身は即座に分かれ、アスタロトの左右及び下方へと移動すると、一斉に掌を翳す



ゴオツツ!! と、弾幕とレーザーが一斉に放たれた  
これにもアスタロトは当然のように対応し、回避行動を取るが、飛  
んだ先から小さな掌が伸びる

「まあ、上に逃げるよな?」

レミアアはにんまりと笑みを浮かべ魔法陣を展開、アスタロトの視  
界が眩い閃光で埋まる

ゴバアツツ!! と、魔力を大量に注ぎ込まれた巨大な魔弾は、先程  
まで自分達がいた空間諸共飲み込み、眼下の地面を吹き飛ばした

「上手くいったね」

事前に回避行動を取っていたフラン及び分身がレミアアの元へ並  
び、土煙に包まれた先を覗き込もうとした

「やっぱりな」

「えっ?何が…ツツ!?!」

言い掛けたフランの襟首を、レミアアは強引に引き寄せた

突然の事に一瞬状況が掴めず目をパチクリするフランの真横を赤  
黒い閃光が通過する

その閃光に三体の分身は身体を貫かれ四散した。

攻撃は真上から。

反射的に見上げた先で、アスタロトは平然と見下ろしていた

「子供にしては勘がいい」

「舐めるなよ下郎が。その程度見抜くくらい造作もないさ」

「…ッ!」

フランは奥歯を噛み締めた

視界の端に映る、姉の肩口から流れる血は、先程の閃光を掠めたもの。

不意の攻撃に反応できなかったこともそうだが、何より…、今確実に姉の足を引っ張ってしまった事に対して苛立ちを覚えていた

「どうやらお前は私達の動きを読む術を持っているようだな。さつきまでののは兎も角、今のは明らかに不自然な避け方だった。一体なんだけ？ 歴戦の戦士の勘とやらか？」

「……。確かに長年培ってきたモノはあるが、例え経験等無くとも俺にはお前達の動きが『視えて』いる。いくら策を講じようと所詮無駄な足掻きだ」

「足掻きだと？ 言ってくれるな、天使の犬めっ！」

掌に再び魔槍を作り出そうとしたレミリアは、後方にいる妹の気配に思わず振り返った

「ツツ、なんで…!？」

「どうかしたのフラン？」

「……………あいつの『目』が見えない…！何か、靄みたいな霧状のものが重なってて邪魔してるって言うか」  
「……………」

フランは全ての物に必ず存在すると言う『目』を捉えることができる。その目を破壊することで、同様に対象を破壊することができるわけだ。

だが……

勿論、この能力が通じない終 隼斗という様な例外も存在する。

彼は能力の恩恵で概念的な異能の力を無効化している。だから当時対峙した際『目』を破壊することはできなかったが、それを視認し、手元に掌握することができたのだ

今回の様に『目』そのものを捉えることすらできない事態に、フランは驚愕していた

しかし、レミリアが感じた違和感は別にある

フランは『目』に霧状のものが重なっていると聞いた。

つまり掌握されない様に隠されていると

本来フラン以外は視認することができない筈の『目』を、事前対策として処置していたとしたら。

先程アスタロトが口にした言葉を思い出す

（『みえている』って言うのは、単に予測できるといった意味合いではないのか？フランの力についてはそれこそ予め目撃でもしない限り認知は不可能の筈だ）

「！」

レミリアは小さく手招きをして、近寄ってきたフランに対し、敵方を向いたまま囁いた

「試したいことがある」

――

天狗軍と対峙する鴉頭の男『アンドラス』は、妖怪の山全体に行き渡らせるかの如く、甲高い奇声を発した。

声は特殊な音波となり、天狗達によつて倒された髑髏型の化物の身体を震撼させる。

…そして、

「くそッ、まただ！また蘇りやがった!!」

天狗の一人が叫び、その言葉通りに化物等はのそりと起き上がった。

身体中 刀傷や欠損箇所があるにも関わらず、明らかに致命傷を与えた奴等まで再び瞳をギラつかせて…。

開いたままの口からは血反吐が零れ落ちるが、そんなものは御構い無しに化物は咆哮した

途中で合流した鴉天狗の文へ、椀は警戒しつつ囁いた

「……………どう思いますか？文さん」

「うーん…、あの鳥頭の奇声で蘇ってるのは間違いないとして、プラスアルファで別の何かも絡んでる気がするのよね」

「別の？」

「なんて言うか……………、怒りとか闘争本能って言えばいいのか…、ハツキリとはしないんだけどそれらを煽ってる感じ？」

椀は周囲の化物に視線を移す。

確かにあの奇声に晒された化物等は、まるで煽動された様に凶暴化していた。

その衝動に駆られているせいか、一撃で息の根を止める攻撃以外では、怯むどころか痛がる素振りすら見せない

「ならば奴を先に仕留めねばならないと言うわけか」

後方から大柄な男が一步前へ出た

「大天狗様…！」

大天狗と呼ばれた男は身の丈ほどの大刀を抜き放ち、刀身に目視でききるほどの高圧の風を纏わせながら言った

「奴は儂が屠る。お前達は周りの雑兵を頼むぞ」

大天狗は構え、直後に足下の地面が爆ぜた

土塊を巻き上げるほどの脚力と速度で間合いを詰めた大天狗は、上段に構えていた大刀を振り下ろす

ドゴオオツツツ!!! と、爆発でも起きたのかと錯覚してしまうほどの轟音が響く。

圧縮された風の塊は斬撃となつてアンドラス諸共周囲一帯を吹き飛ばしたかに見えた

「ふん、唯の狂人ではないということか」

大刀を肩に担ぎ直した大天狗の視線の先には、空中に降り立った狼と、それに跨るアンドラスの姿があつた。

アンドラスは腰に下げている剣を抜き、氷の様な瞳で大天狗を見据える

「!」

それは矢の様に射出された。

ガギイイイインツツツ!! という甲高い音が聞こえたのはその一瞬後。

大刀の腹で刺突を受けた大天狗は、眉間に皺を寄せつつ振り払った

(速いな。それも我々に引けを取らない速度だ。……いや、速いのはあの狼の方か?)

通常の狼より巨大な身体以外は何ら変わりない外見の獣だが、周囲の化物同様、その瞳は狂気に染まっていた

(何より油断ならん相手だ。もう様子見は不要だな)

再び風が刀身を、そして大天狗自身も其れを纏う。

小規模な竜巻の様に刀身を漂う風の刃は、身の丈ほどの大刀を更に巨大なものへと変える

「お前達！下がっておれ!!」

大天狗は叫び、返答待たずして地面を蹴った。

爆発的な加速に加え、身を捻りながら繰り出す横薙ぎ。単純に見えて、その威力は一振りでも周囲の地形を変えるだけの破壊力がある

この時、大天狗のトップスピードは、アンドラスの移動速度を大きく上回っていた。

回避するだけの時間を与えず叩き斬る

「終いだ」

慌てて退避する天狗等を横目に、一閃はアンドラスの首筋目掛け容赦なく振るわれた

「~~~~~!!!」

直後、3メートル圏内まで接近した大天狗に向けて、アンドラスは耳を劈く様な奇声を発した

「ツツ!?ぬう…あああああツツ！」

奇声は超音波となって大天狗の耳から脳へ走り、平衡感覚を狂わせた。

その状態でも尚、剣筋を狂わせることなく振り抜いた大天狗の手腕は賞賛に値するものだろう

だがほんの一瞬。

剣速は僅かに落ち、アンドラスに回避する為の時間を与えてしまっ

た

空を切った一閃は周囲の木々を薙ぎ倒し、前方の地面を抉り飛ばして砂塵を巻き上げた

「ぐっ……！」

頭が割れそうな激痛と目眩が襲うが、大刀を地面に突き立て、杖代わりにして何とか耐えた。

止まっている時間などあるわけが無い。直ぐに反撃が来る

……後方から殺気。

続いて襲う凄まじい衝撃と共に、アンドラスの剣先は大天狗へと放たれた。

援護に入ろうと大天狗の元へ向かっていた天狗等の動きが止まる

「だ、大天狗……様……！」

口々にその名が漏れる。

皮肉なことに、彼等を遠ざけたのは他でもない大天狗なのだ  
だから大天狗は言った

「構うな！」

アンドラスの剣は、間に挟み込まれた大刀の腹で止まっていた。  
片膝をつき、ギリギリ踏ん張っている状態であったが、何とか一撃を防いでいた

「舐めるなよ侵入者。儂はこの程度で……！」

……大天狗の言葉はそこで途切れる

「~~~~~!!!」

無情にも、再び発せられた超音波は容赦無く大天狗を襲った

「ぐっ、あああああああああああああああッッ!!」

しかし苦痛に耐え、大天狗は踏み止まった。

ここで引いたら確実にやられてしまう。

脳を揺るがす音波に、目や鼻、耳からは血が流れ出るが、大天狗は  
吼え、逆に押し返そうと力を込めた

ドスッ！ と、鈍い音が鳴る

「……なん」

超音波は消え、周囲を静寂が包む中、大天狗は徐ろに視線を落とし  
た

「くるくる……」

鳥が喉を鳴らした様な小さな声が鳴る

アンドラスが突き出している剣先は、大刀を貫いて自分の左胸に突  
き刺さっていた

「き、貴様……！ 刃に振動……ッ」

血飛沫が舞う。

躊躇なく抜き放たれた剣には鮮血が滴っている

大刀はその堅固な手を離れ、力無く崩れ落ちた主人の横へ、共に倒  
れた



「大天狗様アアアッ!!」

悲痛な叫びがこだまする

「..~..」

## 146話 不死鳥の焰

決戦前夜、少女は尊敬する師と共に人里の一角を歩いていた。

いつか来る襲撃に備え、多少慌ただしくはあったが、それなりに賑わっている大通りが前方に続く

「相変わらずこの連中は呑気だな。いつ襲われるかわからねーってのに」

「それはほら、師匠とかがいるし安心できるんじゃない…?」

「そりゃ、俺がいるタイミングで現れてくれりゃあ叩き潰してやるとこだが…、」

少女より頭一つ分程高い男は、雲一つない空を見上げて溜息を漏らした

「今更ながら厄介な事になったな。こうしてる今も気が気じゃねーや」

「大丈夫だって。私だって強くなったんだからあんな奴らになんて負けないよ」

「確かにお前があそこまで力を付けるなんて思ってたよ。大したもんだ、いやホントに」

「にひひ」

ポンツと頭に乗せられた掌を誇らしげに受け入れる少女へ、男は釘を刺すように告げる

「……いいか?意固地にはなるな。頼れるもんは全部頼ったつていい。怖いなら戦場から身を引いたつて誰も責めやしねエ。だから……」

「ッ!師匠……!私は!」

頭に乗った手を振るい落としようになる程の勢いで振り返った少女へ、掌に少しだけ力を込めて男は言った

「此処を頼むぞ、妹紅」

「…………へ？」

思わず足を止めた少女から間の抜けた返事が漏れる。

それとは対照的に、男は手を離してどんどん歩いていってしまう

「ちよ、ちよつと師匠!?…………今っ！」

「ん？」

「…………あつ、いや…、何でもない」

「？」

(頼む、か…………)

自然と笑みの零れる表情を隠しながら、急ぎ足で追いついた少女は再び男の隣を歩く

くくく

人里の通りに出来上がった針山。

シルエツトで見れば奇抜なオブジェに見えなくも無いその正体は、無数に突き刺さった矢の塊だった。

すぐ下の地面には赤い染みが広がり、一層その惨状が強調されている

「妹紅…さん…！」

その瞬間を目の当たりにしていた白蓮は、地に倒れ伏しながら力無

く声を漏らす。

立ち上がろうともがくが、彼女の頭を万力の様に押さえつける足がそれを許さなかった

「結局何もできなかつたな、お前ら」

レラジエはそう言って足裏の圧力を更に上げた。

白蓮の耳に頭蓋の軋む音が走る

「がっ、あああああ…!?!」

悲痛な悲鳴が漏れるが、それを実行している悪魔の表情は変わらない。  
い。

そのままキリキリツ　と弓を引き絞り、確実に被弾部位ごと弾け飛ぶであろう至近距離から矢を構えた

「本来俺は獲物を捌る趣味はない。獣つてのは一撃で仕留めねえと面倒くせえんだ。今回のお前達みたいに噛み付いてきかねない」

それに……と付け加え、未だ民家を護るために展開されている障壁を睨み付けた。

術者同様に効力は薄れつつあるものの、魔人経巻から引き出した多彩な術式の組み込まれた障壁はレラジエの強大な力から人里を守っていた。

貫かれ、崩壊しようとも術者の魔力供給で再び再構築されるが、逆にそれが白蓮自身を防戦一方に追い込んだ一番の要因かもしれない

「つまらん時間を食った」

レラジエの指先から筈が離れる。

矢は真っ直ぐに白蓮の頸椎へ放たれた

「あら？あれ位で『時間を食った』だなんて……」

その声は何処からともなくレラジエの耳に入ってきた。

狩人である彼のセンサーにすら引つかからなかったその声の主は、目と鼻の先に立ち、優雅に靡く黒髪を押しえクスクスと笑う

「随分生き急いでるのね？貴方」

「…あ？」

その者の足下には今し方仕留めようとした獲物がへたり込んでいるが、当人も何が起こったのか理解できていないようだった

(……何が起きた？)

矢を射った瞬間、レラジエの眼は白蓮の姿を捉えていた。

当たれば確実に即死するであろう神経の束が通う急所を狙ったのだ。生きて助け出すには被弾する前に搔っ攫う必要がある

……普通、そんな事が可能だろうか？

仮に可能だったとして、それ程の速度で滑り込んだならば凄まじい風圧が発生する等、何らかの痕跡が残らなければ可笑しい

何の予兆もなく、気が付けば事が済んでいたなんて言う、まるで事象の過程のみをすつ飛ばした様な現象に、レラジエは疑問を抱かずにはいられなかった

「誰だお前は？」

返答を待たず、レラジエは一挙に大量の矢を射ち放った。

視界一面を埋め尽くす程の密度だが、レラジエは当てるつもりで射ってはいない

(まあ、躲すよな)

クスクス と、再び後方から聞こえてくるせせら笑い。  
今度は冷静に振り返った。

あの一瞬で起きた出来事を分析する為に放ったデコイであったが、  
またもその姿を視認することは疎か感じ取る間もなく回避されている

「蓬莱山 輝夜」

余裕を見せつけ、先の不意打ちなど無かったかの様に、輝夜はその  
名を口にした

「いつまで寝てるの?……貴女」

続いて側方の針山へ声を飛ばす

それは針山の底から…、

小さく弾ける様な、燃え焦がす様な音が聞こえた瞬間だった

ゴオツツツ!!! と、突然発生した爆炎によって、針山は一瞬で灰塵  
と化す。

その中から、鳳凰の如く鮮やかな烈火を纏った藤原 妹紅が現れた

「……勘違いするな」

妹紅は低く、静かな怒りの籠った声で吐き捨てる

「少しばかり力を溜めるのに手間取っただけだ」

「あら、私が来なかったらこの人死んでたわよ? 感謝くらいしてほしいものね」

「……………ならついでに頼まれてくれ。多分、『里ごと』吹き

飛んじまう」

既に眼光の先を敵へと移した妹紅は、溢れ出る炎を抑える等の、周囲への配慮を放棄していた

「とうとう顧みなくなつたか。もつと早くにそうしてりやあ、少しは手傷位負わせられたかも知れんが、生憎とお前の手の内は知れていゝる」

「……知れている？」

視界の端でやれやれと言つた感じに肩を竦めている輝夜を捉えつつ、妹紅は一呼吸おくように溢れ出る火勢を一瞬だけ沈めた

「お前に手の内を見せた覚えは無い」

——直後だつた。

周囲を凄まじい衝撃波と熱風が埋め尽くした。

上空高くに上る巨大な火柱は、空を覆う赤黒い靄の一部を突き抜け、吹き散らしていく

『瞬 関・鳳 凰 戦 形』

その背部に瞬間による高密度のエネルギーで形成された、巨大な翼と孔雀の様な尾羽を展開した妹紅は、今戦闘間で初めて驚愕の表情を浮かべたレラジエに対し、淡々と言ひ放つた

「これは蘇る度に強大になる不死鳥の炎だ。私の体力が尽きるまで解除はしない。ここから先は一切の加減は無いと思え」

踏み込みはなかつた。

ただレラジエの視界には、突然発生した爆風のみが映る。  
それとほぼ同時に、レラジエの横腹をソニックブームが突き抜けた

「!?」

一瞬遅れ、レラジエは手元から大弓が消失している事に気付く。  
そして無意識に後方へ視線を転じたその先に、既に燃えカスとなつた弓を握る妹紅の姿があった

「…」

ザリツ と、踵を返す為に少女の靴底が地面に擦れる

「ツ…」

次の瞬間、レラジエは新たな弓を生成し、矢を射っていた。  
それこそ、不意に飛んできたボールから、思考が追いつく前に手で顔を庇う様な、反射的な行動に近い  
矢は寸分違わず少女の眉間に向けて飛翔するが、その矢尻が突き刺さることはなかった

『赤火砲』

妹紅はノーモーションで放つ  
それは先程まで、翳した掌から火塊を打ち出す霊術だった。  
レラジエも一度目にしてこの術は、決してこんな…、目の前の空間ごと飲み込む炎の津波を発生させる術ではなかった筈だ

「……チツ」

レラジエの身体が火炎の渦に包まれていく刹那、



「！」

その顔が髑髏の様な仮面に包まれていく様を、妹紅は目撃した

そして確信する。

「……敵を本気にさせた、と

確信は直後に現実となる

進行する炎は一瞬で掻き消された

内側より溢れ出た、乱気流の様に渦巻く黒い力の余波が、衝撃波となつて押し寄せる

「……特記戦力以外には使う必要は無いと言われてたが、仕方ねえ」

空中に浮かぶ四つの大弓と、顔全体を覆う髑髏の様な仮面を指し、レラジエはそう吐き捨てた。その声からは、明らかな苛立ちが含まれていることが伺える

「こうなつた以上楽に死ぬると思うなよ」

「お前頭悪いだろ」

妹紅の背から伸びる両翼が、数十メートルにわたつて肥大する。

圧倒的なリーチを持った紅蓮の翼は、人里の大通りを埋め尽くす勢いで振り下ろされた。

その際に生じた爆炎によつて、天高く昇る巨大な火柱が発生するのだが広範囲的攻撃に構わずレラジエは突っ込んできていた。

具体的に言えば、周囲に展開している四つの大弓が自律的に矢を发射し、翼の一部に風穴を開けていた。

自律砲台を常備したレラジエは、自身の手にも弓を出現させ、弦を

引いた

「お前を本当の死に追いやるのに肉体的損傷は関係ねえってことはわかった。ならその起点になってるお前の精神を破壊し尽くす。要は燃料切れになるまで狩りまくればいいんだろーが！」

そう吐き捨てたレラジエ本人の持つ弓から放たれた矢は、極太のレーザーとなり、ドス黒いエネルギーを撒き散らしながら飛翔した。妹紅は即座に広げていた翼を戻し、正面から巨大な矢と衝突させる。

瞬間、凄まじい轟音と衝撃波が発生するが、両者は足を止めず、連続で苛烈な攻防を繰り返していく

その一発で強固な障壁をも貫く矢を無尽蔵に打ち出す四つの大弓と、一振りで見界一面を爆炎で埋め尽くす翼は、何度も何度も人里の中心で衝突し合った

「ッ！」

しかし、一発の矢が妹紅の左肩を貫いたことにより、均衡したかに見えた攻防戦は崩れ始める。

火力と範囲に長けた妹紅に対し、加えて機動力と手数がプラスされたのがレラジエの戦闘力だった。

寧ろ、戦闘経験に於いても圧倒的に高い水準にいるレラジエを相手にここまで戦えただけでも、妹紅は間違いなく強者のカテゴリーに区分されるだろう

「終わりだな。次に復活してきたとしてもお前が態勢を整える前に再度息の根を止めてやる。その術だってそうだ。何度も発動する力が残ってるかどうかも怪しいよな？」

「……よく喋るようになったな。その仮面のせいかな？」

矢が身体を掠め、徐々に痛々しい傷が刻まれていく状況下でも、妹の表情は崩れなかった

「？」

激化する戦闘の最中で、ふとレラジエは違和感を感じた  
確かに両者の均衡は崩れ、今では目に見えてレラジエの方が押し  
きている。

白髪の少女は治癒の許されない傷を負わされた。戦況が悪くなる  
のは当然のことだ

戦闘の主導権は掌握しつつある。  
此方に比べて相手はボロボロだ

……この場所だって、

「!？」

レラジエは思わず動きを止め、周囲を見渡した。

そこに広がっていたものは、半壊した家屋や所々抉れ、穴だらけの  
大通り

その風景に見覚えはあった。

何よりレラジエの手で破壊したものばかりなのだから

レラジエが驚愕していたのは、その光景そのものに対してだ

大木のようなサイズの爆炎を振り回して、一発で建築物を倒壊させる  
矢をあれだけ射っておいて……、

況してや人外クラスの二人が本気を出している戦場で…

——目の前に広がっている惨状では余りにも被害が小さ過ぎた

「今更、そんなことに驚くの？」

「ツツ！」

心情を見透かした様な囁き声が、耳のすぐ近くから発せられた。即座に振り返るが、そこには誰も居らず、再び視線を戻したその先で、長い黒髪を靡かせる少女と目があった。少女は微笑み、手を振る余裕さえ見せる

(……あいつツ!!)

この戦鬪に於ける被害を抑制しているのは間違い無く彼女だと確信はしたものの、何をしたのか見当がつかなかった。

事実、目立った行動などしていないのだから

「戦鬪中に余所見か？」

バキンツツ!! と、大弓の一つが音を立てて砕き割れた。

そして視線を転じる間もなく、急接近していた妹紅の右拳がレラジェの顔面をとらえた

「がっ…!?!」

肘から噴き出す炎が更なる推進力を生み、華奢な身体からは想像もつかない様な撃力によって、レラジェは弾丸の様に民家へ叩き込まれた。

妹紅は足を止めず、三つの球体を展開していく

『赤火砲』!! 『黄火閃』!! 『蒼火墜』!!

続けざまに打ち込まれた三つの炎術は、瞬間によって格段に威力が向上されていた。

咄嗟に回避しようにも屋内であった為か、行動に制限がかかり次々と被弾、その身を焼き焦がしていく

「クソ人間がああッ!! 舐めてんじゃ……ッッ」

激昂したレラジエは民家ごと吹き飛ばそうと先程放った極太レーザー級の矢を射った

…だが矢は民家の壁を突き破るところか、針の穴ほどの傷すら与えられずに床に落ちる

「……は？」

「破道の七十二……!」

そうして思考に空白が生じたレラジエへ、妹紅の火炎を纏った掌が伸びる

『双連蒼火墜』!!!」

民家全体を包む凄まじい閃光の後、開いている窓や入口から莫大な量の爆炎が噴き出した

瞬時に民家から脱した妹紅は、傍に立つ輝夜へ向けて言葉だけを飛ばす

「相変わらずとんでも能力だな、お前」

「とんでもとは失礼ね。それでも速度だけなら隼斗より上なんだから」

「お前のは速度とは言わないだろ、……っ」と

踏ん反り返る黒髪少女に呆れつつ、妹紅は会話をそこで切り再び意識を家中へと戻した

漂う白煙を抜ける人影が一つ。

だがその足取りは明らかに痛手を負った者のそれだ。

狭隘な空間に於いて、ゼロ距離から放った高火力の破道は、確実に

レラジエへダメージを与えていた

だからなのか…、

「……やめだ」

今のレラジエには、最早天使軍としての任務など関係なかった。

大きく亀裂の入った仮面を掌で覆い、ひたすら湧き上がる憎悪を抑え込むかの様に、仮面の表面に爪を立てている

「今俺はお前達を殺したくて仕方がない。今なら、ムカついたからつてすぐ相手を縊り殺す頭のイカれた殺人犯の気持ちがよくわかるぜ。さぞ気持ちいだろうなあ？お前等を縊り殺せたら。焼き殺せたら。今この場で無惨な死体に変えられたらあああああああッッ!!」

最早そこに『レラジエ』と言う天使軍の狩人は存在していなかった。レラジエの感情と共鳴するように、仮面の亀裂からドス黒いナニかが漏れ始める。

まるで仮面自体が彼の憎悪を煽っているかのような、なんとも形容しがたい悪寒を感じた

(思えば、仮面を出した時からあいつの口数が増えだした。感情を昂ぶらせる作用でもあるのか、程度にしか考えていなかったけど……。)

妹紅は後方で呑気に突っ立っている殺し合い仲間を一見した後、ぼそりと囁いた

「……、いいの？隼斗が聞いたら怒るわよ？」

「……仕方ないさ。あいつ相手に生半可なものは通じない。さっきので倒れないならこれしかない」

「……それで決めきれなかったら？」

妹紅は即答した

「いいや、決める」

一歩前へ出る。

歩みを進めるごとに、身に纏う炎が一層強く燃え上がっていく

「うう……、あ」

敵対する狩人だったモノは意識が混濁しているのか、言葉にならない呻き声を漏らしながら周囲に矢だけを出現させた

「どうした？…とうとう弓すら出せなくなったか？」

「！」

妹紅の問いかけに、レラジエは矢を射出する形で応じた。

だが矢先は妹紅の横をすり抜け、やや後方の地面へと突き刺さる  
続いてもう一本。

今度は真つ直ぐ標的の眉間へと飛翔するが、

「遅い」

ゴツツ!! と、それよりも速く振るわれた炎の翼が、正面のレラジエごと真横へ薙ぎ払った。

大通りを何度もバウンドしながら吹き飛ぶレラジエの身体は、突き当たりの民家の壁に激突して漸く止まる

「がっ…、ぐばあ…ッ！」

「少しはわかったか？…追い詰められる獣の気持ちってのが」

顔を上げたレラジエを見下ろすように、既に距離を詰めていた妹紅は冷めた声色で吐き捨てた

「このまま帰るなら見逃してやる。金輪際幻想郷に手を出さないと誓えるならな」

完全に立場が逆転していた。

だがこの状況が……、

今まさに追い詰められている自分の様が……、

力に飲まれかけていたレラジエの意識を再び戦争へ引き戻した

「……が。………獣……ときがッ」

レラジエは仮面を乱暴に掴み、亀裂の部分から一挙に引き剥がした。

ボロボロと碎き割れる仮面は、それまで蓄積していた怒りや憎悪といった負の産物を、破裂した水風船のように放出し、レラジエの身体を包み込んだ

「俺に楯突いてんじやねえぞおおおおッ!!!」

咆哮し、その手に大弓を出現させる。

黒いオーラを纏ったそれは、レラジエの感情に呼応するように一本の矢を形成した

ズズツ……! と、矢を中心に時空が歪む。

余りにも強大な力は引力を生み、周囲の物を引きつけ取り込もうとするらしい。

一番身近な物で言えば地球などの惑星であるが、目の前の矢はそれを凝縮したような存在感と圧力を発していた

弦をキリキリと引くたび、強大な力そのものが、解放される瞬間を今か今かと待ちわびているような凄まじいプレッシャーが襲う



「小さいな」

それを前にして、妹紅から出たのはそんな言葉だった。

一見、見た目相応の華奢な腕が伸び、莫大な力が奔流する矢を、番えている弓ごと掴みとった

「馬鹿が！そんな小技で止められるほどコイツは……」

被せるように妹紅は言った

「だから、小さいっての。そんな程度の力なら昔から見てきてる」

とある人物の顔が浮かぶ

「それ以上に強い背中を知ってる」

何度も救われた大きな背中が映る。

そんな『彼』が、自分にこの場所を頼むと言ってくれた  
だから退くわけにはいかない。

例えその人から逃げろと言われても決して踵は返さない  
だから妹紅は叫んだ

「お前達の好きにはさせないツ!!此処はあの人が大好きな場所なんだ  
!!!」

妹紅から溢れ出ている瞬間のエネルギーが消失し、同時に身体が赤  
黒く変質していく。

全身がまるで焼け焦げたようにひび割れ、その隙間から赤い閃光が  
漏れる

「……破道の九十六……」

レラジエの指先が筈を離れ、矢尻が妹紅の掌に食い込んだのと同時に、最後の術は発動した

『 一 刀 火 葬 』

その瞬間、周囲全ての音が消失する。

次に来たのは凄まじい閃光と爆発だった

妹紅を中心に広がった爆炎は里の外にまで達し、輝夜能力が及んでいない周囲の自然物を一瞬で消し去った。

そうして人里全体を埋め尽くす超巨大な焔の刀身が天高く伸びる

それは術者の身を触媒に発動する。

犠牲破道とも呼ばれる禁術であるため、本来は腕の一本を引き換えにする位の覚悟がなければ、詠唱を口にする事さえ許されない

爆炎を操る妹紅の瞬間は、炎系最大の鬼道である一刀火葬の威力を何倍何十倍にも引き上げていた

……当然その代償も。

爆炎は瞬く間に消え去った。

これは一刀火葬の効果時間が短いわけではない

……術への霊力供給が途絶えたからだ

爆心地中心では、焦げ跡一つない通りが続いていた。

そこには立っている者も、倒れている者もない唯の道

「……」

輝夜は何も言わずにその場所へ歩み寄った

「！」

徐ろに見上げた先で、灰の様な粒が舞っていた。

その内の一つを掌で優しく掬った輝夜は、着物が汚れるのも構わず  
地面に膝を着いた

そして、

「安心なさい。貴女は確かに里を守ったわよ」

その言葉は……、

―――傍で眠る白髪の少女へ贈られた

## 147話 夢幻の狭間に咲く花

太陽の畑上空を高速で飛行する二つの影は、鉄と鉄を打ち付ける様な甲高い音を響かせ何度も衝突する

互いの武器は、異界の堅牢な植物を元に作られた日傘と、甲虫の様な外皮に守られた腕から振るわれる鋭利な鉤爪

「おいおい！こうやって空中に出てきたって事はよっぽど下の花共が心配なんだなあ？なんなら戦いに集中できる様に俺が全部散らしてやろうか？」

畑を覆っていた結界は、既に蝗の群れによって食い破られていた。強固に張られていた結界だが、崩壊に繋がったのは構築過程で魔力を使ってしまったことか…。

「喋るな虫けら」

幽香の怒声に合わせて地中から何本もの巨大な荆棘が飛び出し、太陽の畑全体を覆う即席のシエルターを作り上げた。

突出している棘からは絶えず外敵から身を守る為の毒霧を散布している。

そんな荆棘の上へ、幽香は平然と着地し日傘の先で足下を叩いた

「ほら、ステージを作ってあげたわよ。降りてらっしゃい」

挑発めいた言葉に、アバドンは周囲に漂う蝗の大群を指してにんまりと笑った

「毒の噴き出すステージとは、随分嫌われちゃったみてえだな。こいつらもよく見たら可愛いんだぜ？」

「ならここにきてよく見せて頂戴。それとも何？いくら蝗の王とて殺

虫性の毒は怖いのかしら」

「怖い？」

アバドンは笑みを崩さぬまま徐ろに身体を丸め、次の瞬間空中を蹴りつける様に急降下し、荆棘の上へ勢いよく着地した。

荆棘の表面に凄まじい衝撃が伝わったが、依然傷一つない堅牢な防御力を示した

「ほう？随分頑丈なステージだな。毒さえなきや蝗共に喰わせてるところだぜ」

(……この子から噴き出す毒はさっきのよりも猛毒の筈なんだけど……。毒そのものに耐性があるのかしら？)

荆棘上に立つアバドンの頭上では、蝗の大群が慌ただしく飛び回っている。

主人を守る様に命令されているのか、毒に阻まれそれが実行できず混乱しているのかも知れない。

知能の低い虫ですら本能的に避けようとする危険な毒。

幽香にこの毒が効かないのは、この荆棘が彼女の魔力によって育てられたものであり、荆棘自体も親を殺す毒を生成しないから

——アバドンはその事実を知っていた

「なんつってな ♪」

パチン と、指を鳴らす音が一つ。

思わず身構える幽香に対し、アバドンは相変わらずおちよくった様に笑った

「!？」

直後、幽香は左腕に激痛を感じ日傘を落とした。

ざわりつと気持ちの悪い感触が伝わる腕に視線を移すと、一匹の蝗がその尾から飛び出ている毒針を突き立てていた

「ツツツ!?……毒に構わず刺しにくるなんて…!!」

しかし腕に纏わりついた蝗は毒気に晒せれても落ちる事は無かった。

寧ろ、より攻撃的に刺し口をグリグリと捻る様に広げ始めた

「づつ!?……このツツ!!」

幽香は苦痛に顔を歪めながら、残る左拳を全力で叩きつけ蝗を粉碎した。

傷口は見た目の割に出血は少ないが、それを幸運と思わせぬ程の激痛と高熱を発していた

「はい残念。可愛い蝗ちゃん達はとつくに毒を克服してました」

いつの間にか、アバドンの周囲には蝗の大群が降りてきており、鋭い牙と毒針を剥き出しにいつでも襲いかかる為の態勢をとっていた

「ほら、早く構えろよ。一気に襲っちゃうぜ」

幽香は急いで日傘を拾い上げ、片手で構えた。

刺された右腕は既に感覚がなく、痛覚だけを残し痙攣を続けている。

身体中から嫌な汗が流れ出る中、痛みを堪える様に言った

「……毒は、効いていた筈よ。何をしたの?」

確かに毒によって死んだ蝗を目にした。

例え迅速に抗体を作れる力があつたとしても、新たに生み出したこの荆棘はより強力な毒を発する。

初見でそんなことが出来るとは思えなかった

「何言ってやがる?」

アバドンはこれ見よがしに棘から噴き出す毒を手で扇ぎながら小馬鹿にした様に言う

「この毒が対象によって有害と無害に分けられてることはお前自身が証明しちまつてんだよ!!」

蝗の大群は幽香がその言葉を理解する前に放たれた。

しかもさつきまでとフォーメーションが違う。

正面、上下左右から取り囲む様に分散していく蝗は、確実に逃げ道を塞いでいった

(これ以上食らうわけには…!)

毒針を一発でも貰えば耐え難い激痛と刺傷部位の麻痺に見舞われ、戦闘どころではなくなるだろう。何よりそれは自身の右腕で実証済みだ

幽香は傘の柄を口に咥え、残る左手をフィールドとなっている荆棘の表面に押し付けた

ズツ… と、荆棘表面が盛り上がり、幽香を守る様に一人分サイズの小さなドームが形成された。

間髪入れずに次々と蝗の毒針が突き刺さっていく。だがどれも分厚い壁に阻まれ幽香まで達していなかった

「おいおい結局それかよつまんねーな。……喰らえ」

言葉に反応し、蝗等は一斉に毒針を抜くと、荆棘の壁に牙を立て始めた。

ガリガリと石畳を金属の棒で搔くような音と共に、強固な荆棘の表面は見る見る削り取られていく

ものの数秒でその名の通り虫食いの穴だらけになった荆棘の壁だが、その内部に幽香の姿は無かった

「あん？」

次の瞬間、怪訝に思い首をかしげるアバドンの両足を、足場となっていた荆棘が沼の様に飲み込み拘束した

更に背後の荆棘が盛り上がり、花が咲く様に開かれる

「やつと無防備になってくれたわね」

声と共に飛び出した幽香は、漸く訪れた勝機に瞳を紅くギラつかせ、日傘に充填していた魔力を解放する。

伝家の宝刀である魔砲は、視界一面を閃光で埋め尽くした

……しかし声は、

「……こう言うの、何て言うんだっけか？」

放出されている光のその先で、アバドンは雑談でもしているかの様な感覚で言葉を発した

「ああ、そうだ。『飛んで火に入る夏の虫』……だったな」



魔砲の放出を無視して、光のカーテンを突き破る様にアバドンの鋭利な手が幽香の首を掴んだ

「ッ!？」

「確かに不意に後ろからってのはいい考えだったぜ。現に気づかなかったしな。だが、だからって魔力を含んだ攻撃を仕掛けたのはナンセンスだ」

刺々しい甲殻に覆われた外皮と、指先から伸びる鋭利な爪が首筋に食い込み鮮血が滲む。

抜け出そうと掴み返すが、指先に至るまでビクともしない。

そのまま幽香の身体は宙に浮いた

「魔力の直接的な吸収。あいつ等蝗にできて俺にできないとでも思っ、ッッ！」

鈍い音と共に、幽香の膝がアバドンの顎へ打ち込まれる。

衝撃で拘束が緩んだ隙について即座に後方へ跳んだ幽香は、咳き込みながらも次の攻撃へ移る

「…つたく、セリフぐらい最後まで言わせろよ。危うく舌嚙むところだったぜ」

アバドンは顎を摩りながら目配せで蝗へ指示を送る。命令を受けた蝗の群れが此方に飛翔してくるのを確認後、直様視線を前へ。

…だが幽香の姿は既にそこには無く、仄かに花の甘い香りがその場を包んでいた

「貴方には『慢心』って言葉がぴったりね」  
「？」

その歩みに足音は無い。

目で捉える事はできても、追う事はできない。

周囲に舞う花弁に紛れ、幽香は緩急のついた動きでアバドンの意識の外へと移動した

…返答がある。

「そう言うお前は『無用心』って言葉がお似合いだぜ？」

背後から心臓めがけて突き出された日傘の先端は、アバドンの背を貫く事はなかった。

幽香の視界のすぐ横に高速で動く影が映り、周囲を横一線に薙ぎ払った

ギリギリで反応し、無理やり上体を反らした幽香の鼻先を横切ったもの、

「なんだ後ろにいたのか。危なかったぜ」

アバドンは臀部から伸びる蠍の様な尾を腰に巻き付けつつ振り返った

(……今のは危なかった)

額から一筋の汗が流れる。

蝗の毒でさえ四肢の一つを潰す程強力なのだ。

あのサイズの毒針はまずい。絶対に受けてはならないだが、後手に回れば相手の思う壺だ。

幽香は此方に向かってきている蝗等を横目で流しながら、日傘を軽く上へ放り、中指と親指を合わせた  
パチンツ と小さな破裂音が鳴る

「少し本気でやってあげるわ」

走り出しと同時に日傘を掴み、再び特殊な歩法『桜舞』によってその存在を不鮮明にした幽香は、目前まで迫っていた蝗の大群の間をすり抜けた。

直前に目標を見失い、右往左往する蝗とは違い、アバドンは冷静に周囲を見渡す

(さっきの指鳴らしは何かの合図か？ 大方戦闘用の植物を呼んだとかだろうが、今んとこ動きはねーな。…それに)

一つの風切り音。

その僅かな空気の乱れを感知したアバドンは、視線を動かすよりも早く毒針のついた尾を振るった

「！」

だが返ってきたのは鋭い痛み。

見れば突き出された日傘の石突きが、尾の末端にある毒腺を貫いていた。

幽香はそのまま流れる様な動きで左手で軽く日傘の柄に触れ、小さく囁く

「マスタースパーク」

眩い閃光が走る。

魔力を吸収する暇を与えない。

直様柄から手を離れた幽香は、魔砲の反動を殺さずその勢いのままアバドンの側頭部へ裏拳を叩き込んだ

更に魔砲の矛先はそのまま近場の蝗群へ。

命令を受けていない為か、一匹として魔力吸収を行うこと無く爆ぜ飛んだ

アバドンの身体は殴打を受け、更に尾の半分程が吹き飛んだことにより、身体の重心が大きくズレる。

幽香はそのまま胸倉を掴み、踰れめき思わず後ずさった身体を引き寄せながら思い切り頭を突き出した

ゴガンツツ!!! と石同士をぶつけ合った様な鈍い音が響く。

体表を甲殻で覆われているアバドンへの頭突きは、逆に幽香の額を流血させる強度を持つが、今回彼女が狙った部位は額では無く顎。

衝撃は脳へと伝播され、更にアバドンの動きを鈍らせる

「ツッー」

初めてアバドンの表情が歪み、反撃に出ようと鉤爪を振るうが、力が入りきる前に幽香の左手はその腕を押さえていた

「魔法を使う私が肉弾戦は苦手だと思った？その道では最強の場所にいる男と長年戦ってるのよ。お前みたいに素人臭い動きなんて簡単に先読みできるわ!!」

叫び、不安定な姿勢にあるアバドンの腕を引き寄せ、前につんのめったその顎先を今度は上へ蹴り上げた。

アバドンの身体は一瞬浮き、姿勢が一直線に伸びる

追撃を加える絶好のチャンス。

だがその身体は甲殻に包まれているため、素手による打撃では効果が薄い

幽香は後方へ左手を伸ばす。

まるでそこに何があるかわかっている様に掌を握り締める。

その手には日傘の柄が握られていた

「終わりよ」

狙うは可動部位のためか比較的甲殻の薄い喉。  
未だ仰け反った状態から復帰できていないアバドンへ、花妖怪全力の突きが放たれた

ゴギンツツ!! と、衝撃音が響く

「ツツ!？」

一瞬、時が止まったかに思えた

幽香は目を見開いたまま、日傘を突き出した姿勢のまま、ただその光景を前に、固まった

「……あーあ、やっちゃまったな花妖怪」

若干くぐもった声。

アバドンは口で受け止めた異物にギリギリと牙を立てながら、血走った瞳を向けていた。

その顔を髑髏の様な仮面で覆い、口の部分だけが大きく裂けた異形の姿で。

身体から溢れる邪気が、桁違いに上がっていた

「もう楽に死ねねえぞお前。っーか楽に殺さねえし」  
「!？」

直後、幽香の視界は大きくブレた。

次に訪れたのは不自然な浮遊感。  
思考が停止し、呼吸が止まる

ジワリと自身の腹部から生暖かい感覚が広がっていく。……目線は自然と下へ

「あ」

巨大で鋭利なナニかが、自身の腹から突き出ていた。

それを『蠍の毒針』だと認知するのに数瞬、背中から貫通していると気付くのに数瞬。

……尋常ならぬ激痛が襲ったのはその数秒あと

「ツツ!!はっ…あ!!が、あ…ツ!?!」

呼吸が止まり、最早叫び声すら上げられぬ程の痛みが身体中を駆け巡る

「痛えだろ?痛えよな?早く楽になりてえか?だが残念く。お前はその傷で死ぬ事はできねえんだよ。……俺の毒針にはそういう呪いが込められてっから、さあツ!!」

叫び、アバドンは尾を乱暴に振るった。

その衝撃で毒針は抜け、幽香の身体は血飛沫を撒き散らせながら地面へと転がる

(身体が……、言うことを……)

血溜まりを広げ、身体を内側から焼く様な激痛が徐々に増していく。

麻痺した様に動かない身体に無理矢理力を込め、なんとか立ち上がろうと歯を食い縛るが、身体を起ここしたそばから再び血溜まりの飛沫が上がった

「俺の毒針を食らってまだ動ける事には驚きだが、それも時間の問題だ。時期に増していく苦痛はお前から気力すらも削いじまう」

アバドンの広げた両手から黒い靄が噴き出す。靄は拡散し形を変え、大量の蝗を生み出した

主に現れた仮面の影響を受け、ふた回り程巨大化した蝗の群れは、幽香を取り囲む様に上空を覆った

「哀れ、力無え花の末路は……、虫食いだ」

その言葉を引き金に、蝗は一斉に獲物へと群がった。鋭く発達した牙をカチカチと鳴らし、その音は次第に惨たらしい咀嚼音へと変わる。

数秒後にはざわざわと蠢めく黒い塊へと変貌した獲物を、アバドンは楽しげに眺めていた

「へっ、呆気無え幕切れだな。ご馳走さんでしたっ」と

蝗の騒めきが止み始めた頃、既に興味を別へ向け次の算段を思案し始めたアバドンは、未だ群がったままの蝗等を一見して吐き捨てる

「おい、いつまで食い散らかしてんだ。その程度の餌ぐらいさつさと……」

言葉をそこで切り、僅かに表情を曇らせた

（時間が、掛かり過ぎてる？）

そんな疑念が浮かんだ直後、アバドンは鉤爪を虫玉へと振るっていた。

別に確証があつた訳では無いが、まだ死んでいないならこれで確実に終わらせるため。

鉤爪は一瞬で群がる蝗諸共微塵に斬り裂いた

「……」

「……灰が吹く様に四散する残骸の中に、あるべき血肉は混じっていないかった」

「チツ、やっぱりか。お前いつの間に抜けてやがった…？」

「丁度、バラバラと崩れ落ちる残骸の向う側。」

「挽回になるはずだった目標はほんの目と鼻の先、十メートルも離れていない場所にいた」

「その姿は血に濡れ、誰が見ても戦える状態にはない」

「アバドンが変化に気付いたのはその姿を目の当たりにしてからだった」

「あ？お前そんなに髪長かったか？」

「幽香はその質問に言葉では返さなかった」

「たった一つの、タンツ」と言う軽い音が鳴る。

「アバドンがそれを目の前の女が爪先で足場を叩いた音だと認識した瞬間、周囲の景色は一変した」

「ドオオオツツ!!!」と、莫大な振動が一带を揺さぶり、大量の土塊が上空へ打ち上げられた。

「荆棘のドームの外、畑に達していない地面が丘の様に盛り上がり、下から突き出てくる異物によって吹き飛ばされたのだ」

「な、に…？」

「アバドンの目から見ても、其奴は異形の怪物だった。」

「地中から飛び出てきたそれは、決して人間界には存在しないも」



の。

かと言つて魔界にもこんな禍々しい姿の生物がいたのだろうか  
怪物は言葉を発しない。

鳴き声すらない。…当然だ

『植物』に声帯など存在しない。

その風貌は花にも大木にも当てはまらず、巨大な蕾から複数の隆々たる莖が伸びており、その先にはハエトリグサと蛇の頭を掛け合わせた様な葉が付いている

ざっと見ても樹齢数百年を迎える大木と変わらない巨軀の怪物草が、次から次へと幻想郷の大地を突き破り出現した

「お前が呼んだつてのか…! 『こんな』レベルの奴らを?!」

アバドンは焦りの色を隠さず叫んだ

対して、幽香は囁く様に、

「私は普段、この世界に適した力を振るっている」

腰まで届く長い髪の間隙から、紅く光る瞳と同色の軌跡が走る

「この世界は四季と、それに合わせて咲く花々のあるとっても居心地のいい所よ。でも同時に退屈な世界でもあるの。この世界は弱過ぎるわ」

「……………俗に言う『強過ぎる自分の力をセーブしている』ってやつか？  
解せねえな。なら何でさっさと使わなかった？俺に殺されかけてまで力を隠しとかねえといけなかった理由はなんだ？」

「……………その質問こそ解せないわね」

「あ…」

「単純な理由よ。実力を出さない内から相手が屍になってちや戦いが詰まらないでしょう？」

幽香は嘲笑う様に吐き捨てた

「……でも駄目ね。強者との戦いを求める反面、こうやって花々の咲き誇る安息の地を壊されたくない自分がある。こつちの世界に来て私も毒気が抜けちゃったみたい」

「こつちの世界……、さつきから引つかかってたが、お前何モンだ？」

それは現状知り得たところで意味のなさない質問。得体の知れない幽香に対し、少しでも時間を稼ぎ、算段する為の会話に過ぎなかった

しかし、幽香は敢えて答える

好きなだけ考えればいい

それで少しでも戦いが楽しくなるなら

少しでもこの戦いを楽しむため、意味のない質疑に応じた

「人間界と夢幻世界の境にある館の主。私の正体はそれが全てよ」

「……ならアレはその館で育ててるお花か？悪趣味なもんだぜ」

太陽の畑を取り囲む様に出現した怪物草を指してそう吐き捨てた。  
幽香の応答は続く

「あの子達はね、番人なの」

「番人……、お前んところは植物なんぞを門番に雇ってんのか」

「いいえ？ウチにはちゃんとした門番がいるわ」

「は？」

どうも話が噛み合っていない。

アバドンは頃合いを見計らい、いつでも動き出せる態勢を取っていた。

大した情報は得られなかったが、要は目の前の女の首を刎ねればそれで終いだ。

確かに外見が変わってから、纏う力の質はより重く、冷ややかなものに変質したが、特段脅威と感じる程でもない

そして正に動き出そうとした瞬間の出来事だった

「ーー 『ユグドラシル』。数多の世界を支える世界樹の名よ」

アバドンは思わず身体を硬直させた

「私の力は『花を操る』能力。その名の通り、とても戦闘で活かせる力ではないわ。だから今まで出してきた戦闘用の草木や、今貴方の足下にある荆棘だって私が召喚魔法で使役した異界の植物ってこと。：でもあの子達を呼ぶにはさつきまでの姿じゃ駄目なのよ」

(何を…、言ってるやがる)

「逆に言えば、この姿になっても私が使役できるのは番人まで。それも下級のね。例えほんの僅かな一部分だったとしても、その極小の力で世界を支えている存在を使役することなんて出来るはずがない。そんな事が出来たら神話の一面を飾ってしまうわ」

(だから…、何言ってる…ッ！)

「あつ因みにね、あの子達が制御下から離れたら私でも止められなくなっちゃうから、その時は人間界が滅んじゃうかも知れないわ ♪」

……その言葉を皮切りに、

「!？」

完全に覚醒した花妖怪の、今まで抑えられていた全ての圧力が噴き出した。

幽香の身体から溢れる魔力は、陽炎の様に周囲の空間を歪めていく

「さあお話は終わりよ。たっぷり作戦を練る事が出来たでしょ？お願いだから少し強めに叩いたくらいでツブレナイデネ？」

刹那、アバドンの目は完全に幽香の姿を見失った

「クソがあああッツ!!」

この瞬間、アバドンからは立ち止まって様子を伺うと言う選択肢が消失していた

銃弾飛び交う戦場で一人取り残された様な、『足を止めたら死ぬ』…、そんなイメージが脳裏にべったりとこびり付く

アバドンは周囲に大量の蝗群を出現させ、四方に分散させた。

『近づく者は全て排除しろ』、という命令を送る

それは少しでも生存率を上げるための、最早侵攻とは程遠い消極的な行動を実行していた

「あらあら、急に慌ててどうしたの？もっと機敏に動かないと……」

声のした方向と、掌が伸びてきた方向は一致しなかった。

幽香の掌はアバドンの左腕を掴み、次の瞬間にはトマトを潰したような音が聞こえた

「が、あぐあああああつ!!」

仮面によって強度が飛躍的に上がった腕の甲殻は、発泡スチロールの様に碎け散った

「これで腕の借りは返したわよ」

幽香は掴んだ手を離さず、先程まで使用不能となっていた右腕を一杯引いた

「痛いなら反撃したら？」

ゴグチャアツツ!!! と鈍い音が鳴り、アバドンの身体は砲弾の様に吹き飛んだ。

意識を手放しかけながらも、何とか空中で踏みとどまる  
殴られた頭部全体が高熱を帯び、視界がガクガクと揺れる

「あり、得ねえ…!!」

視線の先では一方的な蹂躪が行われていた。

花妖怪は四方八方から襲い掛かる蝗の群れの波状攻撃を見向きもせずに躲し、視認できない速度で潰していく。

その様は剥き出しの扇風機の羽に巻き込まれ弾け飛ぶ蠅のよう。

最早魔力の吸収云々など、この選択肢から消え失せていた

力を得てから今日に至るまで、魔法と呼ばれる力を振るう者に敗北を喫した事などなかった

幾ら強大な術師であろうと、その力の全ては自身の餌でしかなかった

(俺は……、何に手を出したんだ…?)

——『撤退』と言う言葉が頭を過る

「別に逃げてもいいのよ？」

そんな悪魔の囁き。

RPGゲームでもお馴染みの選択肢へカーソルが動く

「ただし、あの子達には外へ出ようとする虫は食い散らせて命令し

てあるから、気を付けて逃げなさい」

選択肢は強制的に書き換えられた。

『たたかう』『たたかう』

『たたかう』『たたかう』

花妖怪はそんな心情を刺激する様に、

「あ、そうそう。貴方魔力を食べるのよね？」

「！」

「折角だから恵んであげるわよ？それなら少しはやる気も出るかしら？」

魔力を有する者でありながら、その一切を使わず自身を圧倒する戦闘能力。

世界樹なんて言う、あまりにもスケールの桁が違う存在の提示。

自ら相手に助力を持ちかける余裕

全てがアバドンの理解を越えていた

「は、はは」

意思とは関係なく笑みが零れる。

魔法を使ってくれるなら願ってもない好機だ

だが、全く勝機へ繋がるイメージが湧かない

寧ろ自分は次で…。

アバドンにとって最悪なイメージが浮かび上がったその時、幽香は何の気なしに実行する

「はい、どうぞ」

会話の一部として放たれた魔砲に轟音は無かった。

それは周囲の空気を弾き飛ばし、一瞬真空を作り上げる  
当然遅れて轟音が響き渡る訳だが、当のアバドンにはその音は届か  
なかった

「？」

アバドンは何が起きたのかわからず掌を開閉して動かした。

魔砲が放つ閃光があまりに強すぎた為か、視界が黒い。轟音で聴覚  
もやられたか、何も聞こえない

……頭部の『消失』した身体は、数秒前と違わぬ姿勢で立ち尽く  
していた

「……はあ」

心底つまらないと言わんばかりの溜息が漏れる

「その状態で動くなんて、まるで蜚言ね」

幽香は身体の末端をぎこちなく動かすアバドンへ歩み寄り、静かに  
吐き捨てた

「喰らえ」

バグンツツ!! と、畑の外から一瞬で伸びてきた怪物草の頭がその  
身体に喰らいつく。

骨と肉の潰れる音と共に、この世界からアバドンという存在は完全  
に消滅した

「はあ」

暫しその場で立ち止まり、再び溜息を吐いた幽香は人間界での姿に戻った。同時に太陽の畑周囲に出現していた怪物草も地中へ帰って行く

どこか虚しさを感じる表情のままたった一言呟いた

「弱過ぎる」



## 148話 スカーレット・デビル

「お姉…さま…?」

フランから弱々しく、悲痛な声が漏れる。

目の前でその小さな身体を貫かれた肉親の少女は、夥しい量の鮮血を滴らせ、力無く項垂れていた

「くだらん」

一言そう吐き捨てたアスタロトは、毒蛇に変化させた右腕を力任せに引き抜いた

ズリュツ…と、支えを失った身体は重力に従って館の屋根に墜落し、小刻みに痙攣を続けながら血溜まりを広げていく

「そんな…いやっ！お姉さまああああ!!」

掌で顔を覆い、泣き崩れる少女へ、アスタロトは表情一つ変えずに毒蛇を伸ばした。

大口を開け、牙を剥き出しに飛び出した毒蛇は容赦なく少女の喉元へ喰らいつく

「がっ…!?!ひゅっ……ツツ!!」

少女は咯血し、先に落ちた姉と同様に身体を痙攣させ、目鼻口から夥しい量の血を吐き出し絶命した。

そのままゴミのように空中へ放られた身体は姉の亡骸と並ぶように屋根へ転がり落ちる

姉妹揃って血袋に変えた悪魔は、冷めた瞳で見下ろした後、呆れた声色で呟いた

「くだらん茶番はやめろ」

視線は正面へ。

その言葉を向けられた相手は薄く笑うと、興味深そうに言った

「ああ、ヤツパリバレタカ。割と良い完成度だったと思ったんだが。だとするとやはり視えているようだ。私達の本当の死が」

「俺の力を試す為にこんな茶番を組んだのなら時間の無駄だ。所詮運命は確定付けられている。俺の視る未来に外れなどありはしない」

「……その前にお前の能力を見破った私の観察眼を称賛すべきではないか？」

「別に隠していたつもりはない。寧ろ気付くのが遅いくらいだ。お前、鈍いな」

「ツ!?……いい、いちいち癩に触る物言いだなこの下郎め!!」

「お姉さま、このやり取りにデジャブを感じるんだけど」

――

レミリア達の眼下に転がる二つの亡骸は、透き通るように消失した。

その様子を館の内部から見守る人物は、冷静な面持ちで呟く

「まったく、ネタばらしが早いわよレミィ。……でもまあ、敵も勘付いたようだし同じだったかしら」

紅魔館内部の大図書館の主、パチュリー・ノーレッジは、水晶玉に映る自身の魔術で作りに出した囿用の人形が消える様子を、興味深そうに眺める。

その隣では小間使い兼司書を勤めている、使い魔の小悪魔（通称こあ）が、不思議そうに主人の言葉に耳を傾けていた

「あの、パチュリー様。差し出がましいようですが、この男の能力が未来で起こる出来事を視る事が出来るものなら、今の作戦に意味は無かったのでは…?」

「そうとも言い切れないわ。その能力がどのレベルの予知なのかが分からなければね」

「と、言いますと?」

「予知がこの男の主観によるものなのか、全てを理解した上での予知なのかで対策も全く異なるってことよ。……前者なら、まだ勝機はある」

「…では、後者なら……」

パチュリーの表情が僅かに曇る

(……レミィ。貴女の力なら、或いは……)

——

未来の予知能力。

これから起こる事象を知ることのできるこの力は、単発や直線的な攻撃はもとより、範囲を広げて逃げ道を塞ごうと即座に安全圏へ先回りされてしまう

ならばと吸血鬼姉妹は手数と速度で攻めた。

例え此方の手の内が知れていようと、先行的に攻撃の及ばない圏外へ逃れようとも、『躲す』という選択をしている以上、当てる事が出来ればダメージに繋がられると言うことだ

攻撃の間に空白を与えない。

仕掛けること全てを予見できるならば、それを理解し、処理して動きに繋げる前に次の攻撃を仕掛けるまでのこと

数多の弱点を有する代わりに、圧倒的な戦闘力でそう言った小手先の技術を覆ってきた吸血鬼の武器を最大限に發揮し、二人の少女は魔法陣を展開しながら空中を駆け巡った

(……左の魔法陣から魔獣が数匹。回避先に金髪の分身二体と側方からの魔槍。…2秒後だ)

アスタロトは至って冷静だった。

一瞬よりも早く思考を組み立て、ほぼ同時に行動に移していく。

右腕が再び毒蛇へと変化し、大剣片手に突っ込んできていた分身二体を纏めて食い破ると、そのまま溶解液を噴射し、魔法陣から出現した魔獣を腐蝕させた

読み通り真横から飛来した魔槍を僅かな首の動きだけで回避する。計四方向からの攻撃を、その場から殆ど動かず対処してみせた

「貫い!!」

腹を食い破られ、貫かれたフランの分身の一人が、身体の半分程消失しかけながら蛇の胴体目掛け、炎の大剣を振り下ろした

同時に。

アスタロトの顔の真横を通過した魔槍が光を帯び、弾けるように弾幕へと変化した

蛇に変化させているとは言え、腕を焼き切らんと振るわれたギロチンと、顔面から僅か数十センチの位置で炸裂した爆弾。

一見すると、どちらも吸血鬼姉妹から仕掛けた攻撃に見える。

今まで通り読まれているだろうし、回避されてしまうだろう。

だが、そこに一つの『狙い』があった

この不意を突いたかに見えた攻撃にも、アスタロトは的確に対処する

大剣の一撃は、蛇に変化させ伸ばしていた腕を解除して引っ込める事で空振りに終わった

間近で放たれた弾幕は、炸裂する直前に後方へ離脱、その後軌道を

完全に見切った動きで追従する弾幕の間隙を縫うように回避した

「……成る程な」

その光景を目にしたレミリアは眉を細め、一人納得する。

たった今行った攻撃はアスタロトにダメージを与える為のものではなかった。……寧ろ、回避させるのが目的だった

(今のは明らかに『後手』、だ)

そもその話として、大剣に対して腕を引っ込めたのも、直前に弾幕から逃れたのも、事前に分かっていたならば分身を直接攻撃しなければよかつたし、弾幕を抱えた魔槍は弾くか大きく回避していればもっと余裕を持って対処できていたはずだ

つまり、

(自発的に誘導した未来は予見できない、と考えるべきだな)

飽くまで自分以外の事象に依存する能力であるならば、打開する方法はある。

どんな攻撃が来るかわかっていても、それをどう対処するかを選択を誤れば、そこから先の未来を再検索しなければならず、次の動作への移行が遅れる

更に言うならば、

(多分あいつの視てる未来は断片的な主観によるものってことね。：ならお姉さまの言った通り……。)

例えるなら、これから起こる出来事が記録されたビデオを再生して確認する事はできるが、視ることができるのは飽くまで視覚的情報ま

での為、その映像の裏で何が起きているかはわからない、と言った具合に。

フランは目配せでレミリアとコンタクトを交わす。互いに頷き、その手に再び真紅の大剣と魔槍を出現させると、今度はがむしやりに攻め始めた。

敢えて、出たところ勝負で攻め続けることこそが、アスタロトとの戦闘に於ける攻略法だ

だが、言うは易く行うは難し。

それはつまり、己の戦闘センスを問われる戦いとなる

吸血鬼とは言え、弱冠500年のまだまだ未成熟な少女二人。しかもフランは姉との稽古こそあれど、命のやり取りをする戦闘経験が殆ど無い状態だ。

そんな二人が、天使軍の中でも上位に位置する練達の士を相手にノープランで挑むなど、無謀の一言に尽きる

その事実を証明するように、アスタロトは的確に二人の猛攻を捌き、あしろうように痛撃を加えていった

「狙いは確かにいい。だが、飽くまで俺の能力は未来を視ることであつて心を読むことでは無い。考え無しの攻撃が通用するなど努力思わないことだ」

「このっ、…ッ!!」

「わっ…！お姉さま!?!」

敵に集中し、飛び回っていたレミリアへ同じく動いていたフランの身体がぶつかり一瞬動きが止まってしまった

(ツ！しまった、逆に誘導された!?)

直後に伸びてきた毒蛇が二人の身体を纏めて縛り上げる。

猛毒を分泌する牙先が首筋に突き付けられ、アスタロトは言い放つ

「どうした？今がまさに反撃に出るチャンスだった筈だが…、こうして縛られてはそれすらもできんか？」  
「ッ！」

二人への緊縛が徐々に強まっていく。  
力を込め、身体を強張らせれば、その分だけ肉へ食い込む為、ろくに抵抗することができない

「がっ……ぐっ」

次第に聞こえ始める骨の軋む音と平行して、二人の身体は上へ逃れようと伸びていく。大口を開ける毒蛇の牙へと

「先に骨の砕けた方を楽にしてやる。当然その時が最後のチャンスになるだろう。もう片方は反撃に出る準備でもしておくことだ」

見え見えの誘導だった。

敢えて隙を晒し、選択肢を絞らせる。

アスタロトは自身の能力における盲点を使い、相手をコントロールすることで能力の欠点を補ってきた。

況してや締め付けられ、呼吸も儘ならない上にいつでも殺せるような喉元に刃を突き付けられている現状の吸血鬼姉妹に、冷静な分析・判断をする余裕などある筈がなかった

次の動きがあったのは、アスタロトの言葉から数秒後…。

「……………なに？」

一切緩めていない筈の拘束から、二人の少女は忽然と姿を消してい

た

――

「…………ふう」

大図書館中央フロアで、館の従者の十六夜　咲夜は安堵の息を漏らした。

傍で既に術式を組み上げたパチュリーが、膝を突く二人の少女へ向けて掌を翳す

「特に痛む箇所は？」

「左の上腕と肋骨がやられたわ。軽くでいいわよ、すぐに治るから」

「私は大丈夫。ありがとパチュリー。あと咲夜も」

一礼する咲夜を尻目に、レミリアは机上の水晶玉へ視線を移した。その石の向こう側では、紅魔館上空で周囲を見渡すアスタロトの姿がある

「結果は？」

質問は咲夜とパチュリーへ。

両者は互いに頷き、口を揃えて言った

「的中（です）よ」

その報告を受けたレミリアの口角が上がる

「咲夜、美玲を此処へ」

「かしこまりました」



命令を受けた咲夜の姿が消失し、瞬時に美鈴を連れて現れた。  
突然連れてこられたにも関わらず、既にその意図を読み取った美鈴は、静かに主の傍に立つ

「さて、余裕綽々な奴の鼻っ柱をへし折りにいこうか」

――

赤黒い暗雲が立ち込める空の下、一人残されたアスタロトはその夕イミングで口を開いた

「逃げたと思ったが…？」

再び現れた対峙者は薄く笑い、腰に手を当て得意げに吐き棄てる

「あら？それで無いことはお前が一番わかっているだろう？」

「…」

アスタロトは左右交互に視線を移し、新たに現れたメイド服とチャイナ服の女を一見した後、怪訝な表情を浮かべた

「その銀髪は人間だろうか？」

「だったらなんだ？」

答えるのは飽くまでレミアアだった。

後方で控える二人の従者は主人の命令を待っているのか、アスタロトを睨み付けたまま動かない

「気付いている筈だ。今空を覆っている靄はお前達にとって『有害』  
…、況してや種族として脆い人間が長時間外気に晒されれば命はな

い。それでもお前はそいつを出すのか？」

「…なんだ？親切に解説までして、そんなにコイツを遠ざけたいのか？」

「さあな」

「それにしてもお前は随分大袈裟だな。確かに人体には有害かも知れんが、流石に死ぬとまではいかない。精々脆弱な奴らが体調不良で仕事を休む程度のものだ」

「何を言っている？」

上空を覆っている赤黒い靄は天使軍侵出と同時にアスタロトが展開したものだっただけだ。

当然のその靄が含む成分や効果についてもアスタロトが作り出し、計算したうえで広げている。

少女の口振りもそうだ。

明らかに靄の効力を断定している物言いだった

ふと、アスタロトの視線の先に眼下の館が映る。

ものの数秒、深紅色に染められた洋館を凝視していたアスタロトは、何かに気付き勢い良く上空を見上げた

「まさかッ…、空のあれは…！」

レミリアから思わず笑い声が漏れる。

やっと気づいたか とでも言うように、一笑の余韻を残しつつ赤黒い空を指して言った

「あれは『私が広げた紅霧』だ」

「!？」

常に冷静な面持ちだったアスタロトの表情が驚愕に染まった。その反応を楽しむようにレミリアは続ける

「まあお前が気付かなかったのも無理はない。なにせ見た目は殆ど同じだし、何より元の霧がお前にとって害を成さないものなら余計に変化にも気付きにくかっただろう」

つまり『最初』から。

天使軍が現れ、アスタロトと言う悪魔がこの地に有害な霧を振りまくことを予見していた。

それと重ねるように紅霧を展開することで被害を『死への直結』から、『若干の体調不良を起こす』程度に抑え込んでいた

対天使軍として構える各地の人間等が満足に戦えたのも、皮肉なことに嘗て異変にまで至った紅い霧による影響だったのだ

「……予知能力」

「名答」

妹の『ありとあらゆるものを破壊する』能力のネームバリューよって隠れがちだが、紅魔館が主であるレミア・スカーレットにもそれに匹敵する力があつた

――『運命の操作』

言葉だけで見れば、運命を操り何でも出来てしまう正に最強の能力と言えるだろう。

だが、この能力はそんな理想的な力とは言えない。何故ならレミア自身、この能力を自在に発動することができない上、能力の発動によつて運命がどのように変化するかが本人にもわからないのだ

現状、彼女にできることは能力のほんの一部である未来の予知と、それに反する行動をとることで矛盾をもたらし、僅かに運命を変える程度のものであつた

その垣間見た運命でさえも、記憶の層と呼ばれる確率に邪魔され、

必ずしも起きるとは限らない

「だがそれを戦闘に反映させていないな。いや、できないと言うべきか？つまり能力の発動には特別な条件若しくは制限があると見るかどうか？」

「どうだ？」

「どちらも当たっていた。能力発動の条件として、レミリア自身が深い眠りにつくこと、加えて人間の生き血を取り込む必要があった。」

「そうして見た夢が、未来の出来事として現実に起こりうる。」

「更にもその精度は、取り込んだ血液の保持者が持つ力の大きさに比例する」

「条件を満たし、深い眠りにつく明け方から夕暮れに掛けて見る夢が、未来予知の効果を発揮するため、使用限界は一日に一度まで。」

「厄介なことに、日が経てば経つ程記憶の層は薄れ、それが起こりうる確率も下がってしまう」

「つまり最も鮮明で確率の高い前日に発動させるのがベストであった」

「未来を主観でしか捉えられないお前よりかはマシだ。第一、お前の能力にも穴は幾つかある」

「パチンツ と、レミリアが指を鳴らした瞬間、傍にいたメイドの姿が消失し、次の瞬間にはその手に黒い羽を摘んで現れた」

「！ 成る程な」

「アスタロトは己の翼に意識を向けて納得する。」

「そんな彼の露見した穴をレミリアは嘲るように指摘した」

「停止した時間の中では未来が進むことはない。お前の未来予知はお」

前自身の意識とリンクしている」

言い終わるや否や、アスタロトの後方から背部に向けて凄まじい衝撃と爆発があった。

僅かによろめき、後方を見るでもなくアスタロトは理解する

前方にいる金髪の少女の手から伸びる炎の大剣が、時間を超越して後方から叩き込まれたのだ

「お前が意識できないことは未来予知に反映されない。今のは挨拶代わりだが、次は容赦はしないぞ」

「…そうか」

レーヴァテインによつて、アスタロトの背中は焼け焦げていた。

徐ろに、その手が頭部へと伸びる

(認めよう。子供とは言え大したものだ。一党の主と言うだけはあ  
る)

「お姉さま！あいつ何かする気だよ!!」

「咲夜!!美鈴!!」

主の声と同時に、二人の従者は攻撃に転じる。

アスタロトの周囲を幾十にも及ぶナイフが取り囲み、ナイフの飛翔に合わせて『気』が込められた光弾が発射された

ゴツツ!!! と炸裂した光弾が閃光を発し、続けて光を掻き消すようにドス黒い力の波が辺り一帯に拡散する

「お嬢様、奴を覆う気の質がより洗練されたものへと変化しました。

『例の場所』も同様に…!」

美鈴の報告を受け、後方のフランを一見した

「！」

視線が変わる。

僅かに不安気のある瞳だった

「心配ないわ。貴女ならやれる」

そう勇気付け、再び前を見据える

今戦闘の要はフランだ。

紅魔館で最高の火力を有し、目を捉えることさえできればどんなに堅牢な防御も無視して破壊することができる

「美鈴、お前の力も必要だ。しっかりとフランへ繋げてちょうだい」

「……かしこまりました！」

ぱしつと拳で掌を叩き、武の構えに移った美鈴は、目前に佇む人影の様子を伺いつつ、側方で同じく身構えている咲夜と視線を交わした。

互いに頷き、タイミングを合わせる

そして、黒き靄に包まれたアスタロトは、その頭部に髑髏の仮面をつけて現れた。

外見上の変化はそれだけだが、先んじて美鈴が気付いたように、その力はより強大なものになっている

アスタロトはゆっくりとした動作で彼女等を一見した後、不思議そうに呟いた

「どうした？ 時を止められる強力なアドバンテージがあるんだ。躊躇

せずつに向かつてこい」

仮面出現前と比べ、やや饒舌となった男は余裕のある態度を崩さず手招きした

だが二人の従者は迂闊に動かない。

時間停止を使わなければ此方の動きは筒抜けであり、尚且つ不意打ちのレーヴァテインを受けても平然としていた化物相手に、そうやすやすと接近するのは危険だ

『『スピア・ザ・グングニル』!!!』

出方を伺っていた二人の間を高速で飛翔する魔槍が突き抜け、アスタロトの心臓へと向かう。

だが、まるで歩行中の障害物を避けるような軽い動きで回避されてしまう。

やはり攻撃を当てるには、予知能力の穴を突くか、時間停止による不意打ちしかない

……だが、

「安心しなさい、まだ予知夢の範囲内よ。でも此処からあの状況に持っていくには腹を決めなきゃね」

主であるレミリアは、自身の覚悟を示すように前に出た。

その小さな体躯に纏う魔力を最大限に解放し、手には再び魔槍を握り締める

周囲に展開した魔法陣からは、止めどなく配下の魔獣等が召喚されていく。

手数で押すつもりなのか、将又隙を作るための人柱としてか。

どちらにせよ、アスタロトはそんな作戦など平然と叩き潰すだろうだがそれでいい。

例えこの身が減びようとも、要は目の前の悪魔自身が反撃のために

動いてくれればなんでもいい

——そこに勝機がある

だが覚悟とは対照的に強張る身体。

少女は身に迫る死への恐怖と、紅魔の主としての使命感に駆られていた

……そんな緊張を解すように、凜とした声が届く

「お嬢様、もう一步後ろへ。前衛は私達が務めます」

ナイフを構え、片手に懐中時計を握り締めたメイド長が前に出る

「ご心配なく。この命に代えても役目を全うします」

拳を握り、闘気を纏った門番は勇ましい背中で主を覆った

「絶対勝とう、お姉さま」

最愛の妹は、一層強く燃え上がる紅蓮の大剣を握り締め、隣に立った

(……とつくに、決まっていたってことか)

紅魔の主は少しばかり生き急いでいた自分に対して、小さく失笑する

「覚悟するんだな、天使の犬め。こうなったら私達は強いぞ?」

肩の力が抜け、心にゆとりを取り戻した少女は今一度目の前の悪魔



へ宣言した

だが、仮面の下から冷たい視線を向けるアスタロトには、その強い意志が逆に浅はかに思えた

何を根拠に？先程から同じ結果を辿っているだけだと言うのに、何故それ程までに強気でいられるのか？

「強いかどうかは俺を倒すことで証明してみろ」

その瞬間、アスタロトが動いた。

狙いは彼にとつて最も厄介な能力を持つメイドへ。

毒蛇をトライデントの様な矛に変化させ、猛毒が滲み出る鋒を突き出した

「…ッー」

魔力で身体の強化をしているとはいえ、ベースが人間である咲夜には、吸血鬼に匹敵する程のアスタロトの動きを捉えることができず、回避するための時間停止が僅かに遅れた

ギイイインッツ!! と、紅魔の武人は下から上へ矛の上把を蹴り上げた。

鋒が上へ逸れ、続いて把尖による殴打が迫るも、同じく足裏を合わせ撃力を殺して止める

咲夜の時間停止はそのすぐ後に発動した。

次の瞬間には、アスタロトの両脇から魔槍と炎の大剣が振るわれる

「おっと、逃げようとしても無駄よ」

後方に跳びのき躲そうとしたアスタロトだが、その進行方向の空間は弄られ、僅か数メートルの移動が何十キロにも及ぶ距離に拡張されていた

しかし、アスタロトは表情一つ変えず、両側からの二撃をその場で  
コークスクリューの様に身を捻り回避する

「……この姿になると反応速度も上がるのでな」

そのまま回転の勢いを殺さず、遠心力によって猛毒のトライデント  
の鋒から周囲に毒液を撒き散らした

「咲夜さん!!」

美鈴は叫び、同時に前方へ等身大の気弾を発射した。気弾はその衝  
撃波で飛散する毒液を弾き飛ばし、アスタロトごと目の前の空間で炸  
裂した。

後方では咲夜と共に離脱したレミリアがすかさず叫ぶ

「やれ!!」

主君の言葉に反応し、周囲で待機していた魔獣等が一斉にアスタロ  
トへ飛び掛った。

一匹のレベルはそう大したものではない。

召喚魔術の前提として、召喚者の力を超越した魔獣は使役すること  
ができず、従えるにはある程度力の差が開いてなければならぬ

だから数で押す。

その影に紛れて攻撃したとしても、未来を見通せるアスタロトには  
容易く見破られてしまうだろう

だが、狙い目は別にあつた

「咲夜、次のフェイズよ」

そう一言残し、妹と共に魔獣が群がってできた蜂球へ突っ込んでい  
く主の背中を見送り、紅魔のメイドは時空間へ消えた

――  
――  
――

周囲に鮮血が舞った。

同時に肉が爛れ、腐り落ちる異臭が漂い、猛毒の矛によって屠られた魔獣等が次々と墜落していく

「結局、何がしたいんだお前達は」

その中心で佇む悪魔は飛びかかってくる残党を容易く突き払いながら吐き捨てた。

視線の先では肩で息をする紅魔の少女達が、未だ闘志に満ちた瞳を向けている

「お前達も気付いている通り、この仮面は俺達の力を大きく上昇させるものだ。今では唯一劣っていたスピードでさえもお前達を凌駕している。……あのメイドの姿が見えないのも反撃のチャンスを探っているからだろうが、今迄の傾向から、時を止めている最中での攻撃は不可能とみた」

当たっていた。

咲夜の時間停止の能力は、空間に作用させる部分が大い。

空間の運動を凍結させ、咲夜以外の全ての物質をその空間に縛り付けている。

彼女だけが動けるのは、身体の周りに熱を帯びた膜をはり、凍結した空間を溶かしながら進める、と表現すればわかりやすいか。

だから咲夜の身につけている衣服やナイフも同様に空間を移動でききるが、その手を離れた瞬間、熱は冷め、再び凍結する

「直前とはいえ兆候があるならば回避は可能だ。もうお前達の攻撃が俺に当たる事はない」

アスタロトの持つ矛先が少女等に向けられる

「二人ずつ、確実に仕留める。回避は無意味だ。既にお前達が逃げる方向はわかっている」

回避不能の刺突。

恐らく魔槍や大剣で受けることも不可能だ

「お二人は後ろへ」

紅魔の門番は、身構えるレミアアとフランを庇う様に前へ出た。その手にありつたけの気を集束し、迎撃態勢を整える

「相打ちを狙っているなら無駄なことだ。お前の未来は視えた」

矛は、瞬く間に打ち出された。

「ッ」

……数秒後、美鈴は猛毒の矛で心臓を貫かれ絶命する。それは反撃する間もないほど一瞬で、長きに渡る修行によって鍛え上げられてきた肉体はあつけなく腐り落ちる

「!？」

これはアスタロトの視た未来。

「漸く、捕まえた」

貫く筈だった女は突き出された矛を擦り抜け、アスタロトの腕を掴み取っていた

「な、ん……」

アスタロトの、冷静沈着だった表情が崩れる  
視えていた筈の未来が急に切り替わった。  
直前に挟み込まれた異物によって

「列車の走る線路を急に作り変えることはできない」

レミリアは淡々と言い放つ

「だが停止しているならば、元々の線路を打ち壊し、新たなレールを引くことも可能だ」

「……『停止した時間の中では未来が進むことはない』。

そんな言葉が脳裏にはしる

「お前の視た未来も！時間停止という異物をはさみ込めば改変も可能なんだよ馬鹿め!!」

瞬間、掴まれていた腕から急激にナニかを流し込まれる感覚が襲った

「チツ……!」

すぐに振り払い、その腕を確認するが、特に変わった様子はない

「……何をした？」

「んん？お得意の能力でもわからないか？」

「……………つ!？」

驚愕に染まる表情。

同時に、今の今まで使用不能だった力が再びその脅威を取り戻す

「捕まえた ♪」

可愛げのある声でそう口にした金髪の少女は、掌を上に向け、何かを手に取っていた

「馬鹿な……！『その力は』真っ先に対策した筈だ！」

「ああ、お陰で手間取った」

全ての物体に存在する最も緊張した部分。

その『目』を掌握し、力を加えることでいとも容易く対象を破壊することができる能力。

その最強とも取れる能力の対策として、自身の『目』を覆っていた邪気だが、流し込まれた『気』によってその纏まりが乱れ、散らされていた

「手間取っただと……？つまりお前は端からこうなるよう仕組んでたというわけか……?!」

「……確かにお前の言う通りだ。私の能力は直接戦闘に反映できるものではないし、事前に知ることができても、確実には起こり得ない。所詮は自分の力でその未来に近づけていくしかできない」

だが、と付け加え、レミリアは吐き捨てた

「お前は、『起こるかもしれない』運命に負けたのよ」

バギンツ!! と、硝子が砕かれた様な音が一つ

「……………ツ!!」

アスタロトの身体が、糸の切れた人形の様に項垂れる。

……勝敗は静かに決した

## 149話 包容する大空

頭部が鴉と梟を掛け合わせた様な容姿の男、アンドラスは地面に力無く倒れ伏す大天狗を機械の様な瞳で見下ろした。

その手が乱雑に大天狗の髪を鷲掴み、項垂れる身体を引き起こす

「くるる…」

梟の様に首を傾げ、アンドラスは掌に黒い靄を出現させると、靄はその手を離れ、大天狗の周囲を漂い始めた。

それを目にした白狼天狗の隊長、犬走 椛は剣を握り締め叫ぶ

「貴様ああ!!大天狗様を離せツツ!!」

「椛?!待ちなさいツ!!」

怒りに身を任せ、敵へと突っ込んだ部下を引き止めようと、鴉天狗の文も後に続いた。

アンドラスは血溜まりを広げる大天狗に構わずその口を開く

「~~~~~!!!」

……轟く奇声。

その鳴き声は意識の無い大天狗の身体を揺るがし、間合いが開いている周囲の天狗達の耳をも劈いた

「がっ…ぐう…ツ!」

「くツ…!!椛、迂闊に近づくのは危険よ!」

「ツツ、でもあの出血では!早く手当てしないと…!」

「わかってるツ!!」

椛の言葉が示す通り、瀕死の重傷を負い、既に意識の無い大天狗に



は早急な止血と創傷の保護が必要だった。

何より、刺し貫かれた場所が左胸であるため、心臓に達していないとも限らない。

ぐったりと動かないあの状態では視認での生死が判別しにくい為、生きているならば一刻も早く助けださねばならない。

だが、既にその鼓動が止まっているならば……。

これは遊戯や訓練などではなく、隊を率いた戦争だ。一度感情的に行動を起こせば隊は崩れ、負の連鎖は次第に広がってしまう。

時として冷酷な決断を下さなければならぬこともある。

例え『死者』の優先順位を後回しにしても

(私の速度ならすれ違いざまに搔つ攫えるか？運良く大天狗様を救出できたとして医者まで運べる人員は何人いる……！)

文は周囲を見渡し、深く息を吐いた。

今一度気を引き締め、傍らの椀に耳打ちする

「椀、私が………」

そこで文は言葉を止めた。

椀も同様に固まる

「大天狗……様……？」

ズンツ……と、重々しく地面を踏み締める音があった。

本来ならば立ち上がることは疎か、身動きすら危険な状態にあるその身体を起こしたのは、他でもなく大天狗本人だった

「お、おい……、何か様子がおかしくないか……？」



「だ、大天狗様?!何を……!」

言葉を発した天狗が次のターゲットだった。

そして破壊の連鎖は立て続けに広がっていく

その光景に呆気にとられていた文と椀は、数秒経って自分達が立ち  
尽くしていたことに気が付いた

「何が、起こってるの……?どうして大天狗様が……?!」

「わからない!……でも、唯一確かなことはこれがアイツの仕業だっ  
てこと位か……ッ!」

「!まさか、さっきの黒い霧が……?!」

「多分ね……。あの髑髏の面も私達を襲ってきた獣と同じ形状だし  
……ッ!」

文は言葉をそこで切り、椀を抱えて空中へ飛んだ。

その一瞬後に、自分達の立っていた地面へ大刀が振り下ろされる

「……作戦を練る時間はないみたいね」

「あつ……」

椀の口から漏れた声が表示するように、この場で立っている者は自分達  
と大天狗、そして元凶である鳥男だけになっていた

「くねね」

地形がすっかり変わってしまった眼下では、此方を感情の無い瞳で  
見上げる鳥男と大天狗が最後の獲物を狩るべく武器を構えている

だが二人が驚愕したのは別にあつた

「……椀、後方へ離脱を」

「……この状況で何を言ってるんですか。私が離脱したら文さん一

人になるんですよ?」

地上は黒い霧に包まれていた。

瀕死の大天狗を狂戦士へと変貌させたそれは、同じく倒れ伏している天狗達にまわりついていく

「……どの道この状況じゃあ二人いても同じことよ。だから、援軍を呼んできて」

「無理ですよ!今は山中が襲撃されてて兵士も出払ってる。此方に回す余裕なんて……!」

「そんなことわかってるわよ。……だから、『あの方』に頼るしかない!」

地上ではアンドラスが深く息を吸い始めていた

……あの咆哮が来る

「早く!私だって死にたくないんだから!行きなさい!!」  
「ツツ!」

椀は背中を向け、奥歯を噛み締めながら一気に飛び去った  
背後からはけたたましい奇声が響き渡る。

数秒後、新たに覚醒したであろう狂戦士達の咆哮が耳を叩く中、椀は小さく呟いた

「……無事で……文さん!」

耐え難い奇声に表情を歪めながらも、文はその手に葉団扇を握り締める

「頼むわよ、椀……!」

団扇は横一線に振るわれ、直後に前方を凄まじい烈風が突き抜けた  
「ヴオオオッツ!!」

狂乱する天狗達の殆どが風によって動きを封じられる中、大天狗だけはお構いなしに突き進んでくる。

混濁した瞳で文を捉え、重々しい大刀を頭上に掲げ一挙に振り下ろした

「大天狗様！そんなキレのない動きじゃ擦りもしませんよ!!」

大天狗の一撃が地面を割る頃、文はその脇をすり抜け元凶であるアンドラスへと突っ込んでいた。

葉団扇へ自身の能力から生み出した鎌鼬を纏わせ、振り抜く

ゴバアアアッツ!! と地面を捲り上げながら放たれたのは鎌鼬による斬撃を纏った竜巻だった。周囲にいる同胞を巻き込まぬよう、極限まで圧縮された破壊の弾丸が、音速を超えて突き進む

「~~~~~!!!!」

対するアンドラスは咆哮で迎え撃った。

発せられた音波は空気を振動させ、自身の前方に衝撃波の壁を作り上げる

「遅い!!」

竜巻の弾丸が衝撃波と接触した時点で、文の声は既に前方にはなかった。

気配を感知したアンドラスが頭上へ向き直る前に文は葉団扇を振

るう。

彼女の持つ葉団扇は、本来ならば大天狗クラスが持つことを許される風を巻き起こす団扇だ。

一振り、二振りと重ねるごとに発生する風はより強いものとなる。更に文自身も風を操る能力に秀でているため、二つの風を操る力に加え、天狗最速のスピードも相俟って、彼女も幻想郷に於ける屈指の強者に数えられるのだ

「！」

新たに打ち出された二振り目の風は、アンドラスの衝撃波を吹き抜ける。

それは発生した烈風を文が掌握し圧縮したもの。一纏めに凝縮された風の力はまるで徹甲弾のように防御壁を容易く貫いていた

決壊した音波の壁は、堰き止めていた竜巻の弾丸を再びアンドラスへと向かわせ、そして炸裂。バラバラに斬り刻まれた肉塊が宙を舞った

「……しっかり躲すかッ！」

「くるるる」

視線の先でアンドラスは今の一撃を回避していた。自身が跨っていた大狼から離脱し、更に狼を竜巻の弾丸へ蹴り出す非道なやり方で…。

だが相変わらず首を傾げる動作からは、感情らしきものは全く感じられず、仲間を捨て駒にしても大して気に止めていない様子だ

「でもこれで機動力は奪った。次で決めるわよ!!」

葉団扇を構え直し、再び突撃の姿勢を取った文の頭上に、大きな影

が映る

「ヴウ……！」

「あーもうっ！空気読んで下さいよ大天狗様!？」

ここで漸く追い付いてきた大天狗は、文の脳天目がけて大刀を振り下ろしてきた。

よく見れば刀の握り方から構え方まで技術的な面が一切感じられない。だが一番酷いのは刃と峰の向きが逆なこと。これでは唯の打撃に終わる

(飽くまで破壊衝動によって動いてるってことか。周りの天狗達もやっと私の姿を視認して動き始めてる。つまりあの狼が消えた今、私の動きについて来られる奴は一人もいないってこと……！)

ならば彼女が取るべき行動は一つだ。

今のような不意に死角から来る攻撃にのみ注意を払い、スピードで攪乱しつつ元凶を叩く。

唯一天狗の速度とタメを張っていた狼も倒した。あの鳥頭を捉えるのも時間の問題だろう

……少なくとも、この時点で文はそう思っていた

「く〜evenen」

コキリツ と、乾いた音が一つ鳴り、アンドラスは首を今まで以上に傾けた。

本来は眼窩によって眼球を固定された梟などが視線を変える為に行う動作だが、彼の180度近く回転したその頭部は見ていて気持ちの悪いものではない

「最早 加減ハ皆無」

初めて発した言葉と同時に、アンドラスの頭部が髑髏状の仮面に覆われた。

同時に身体から噴き出した黒い靄が、周囲の空間を暗黒に染める

「ツツ！これは狂気作用のある靄!?こんなに大量に出せるなんて…！」

咄嗟に口元を手で覆う文だったが、特に身体に異常は見られない。だが視界一面が黒一色となり、このままでは周囲の位置関係が掴めない判断して靄の外に向けて飛翔した

「才前 逃亡 不可能。既ニ包囲シタ」

まるで機械のような淡々とした声がすぐ間近で聞こえた直後、文の身体を真正面から強い衝撃が襲う。

ひゅっ と息が押し出され、一瞬呼吸が止まる。

次に身体を誰かに驚掴みにされている感覚を残したまま地面に叩きつけられた

「がっ…はツツ!？」

内臓にまで響く激しい衝撃に悶える間もなく、彼女の身体は再び宙を舞った。

視界の悪い中、僅かに見えた巨大な体躯の男は片手に持つ大刀を後方へ引いていた

「ヴウオツツ!!」

まるで野球のノック練習のように、重力に従い落ちてきた文の身体



目掛けて大刀が振り抜かれた

「ツツ!!」

文は大勢の崩れた状態から無理やり身体を捻った。ミシミシと背筋から嫌な悲鳴が上がるが、そんなことかまっていられない

ボツツ!! と、空気が弾け飛ぶ轟音と同時に、風圧で靄が一瞬晴れ、力任せに振るわれた刀身は頭襟を引っ掛け、弾き飛ばした

「……すいません大天狗様」

攻撃後の硬直を狙い、大天狗の顔面へ風の圧縮弾が放ちこまれ、その巨軀を大きく吹き飛ばす。

周囲からわらわらと群がってくる天狗等の気配から逃れるため、文は勢いをつけて上空へ飛翔した。

だが集まってくる複数の気配達は彼女程ではないにしろ、先程までの緩慢な動きが嘘のように高速で接近してくる

(……ツ・きつきの大天狗様に追いつかれた事といい、あいつが仮面を出したから?)

だが後続する気配ばかりに意識を向けていられない。

あの瞬間、彼女の速度に追いついた者がもう一人いる

「逃亡ハ不可。二度目ダ」

またも文と並走するように靄の向こう側から声だけが聞こえた

「まあ、来るわよ、ねツ!!」

その方向へ向けて、待つてましたと言わんばかりに左手から巨大な

鎌鼬を放つ。

再び風圧によって一瞬靄が晴れるが、しかしそこに声の主はいなかった

「無駄ナ抵抗。今ノ我、才前ヨリ速イ」

音は無かった。

ただ一つの殺気に反応し、殆ど反射的に飛び退いた文の背部を剣の鋒が斬り裂いた

「あぐツ……！」

白いシャツの肩先から腰上に掛けてが赤く染まっっていく

傷自体は深くはないとは言え、天狗最速の彼女が攻撃を当てられた。

その唯一つの事実が、彼女の精神を揺さぶり、先程まで抱いていた勝機を崩壊させる

「才前ハ動キヲ止メタ。ソノ時点テ詰ミダ」

「ツツ！しまっ……！」

一瞬とは言え思考に空白が生じ、態勢を立て直すのが遅れてしまった文の周囲を追い付いてきた天狗達が包囲した

「制圧」

その言葉で周囲の天狗達は一齐に文へと掴み掛かった。

天狗最速の速度を持っている彼女とて、四肢に組みつかれ、機動力の糧となっっている翼をも抑えられては、自力で拘束を解くことは不可能だった

「ぐっ…！仕方ないッ、悪いけど加減出来ないわよ!!」

文は纏わりつく天狗達を吹き飛ばそうと、身体に掌握した風を集束させようとした

『制圧』ト、ソウ言ツタ筈ダ」

ゴツツ!! と鈍い音と衝撃が文の腹へ打ち込まれた

「えうツツ…!？」

視界が暗転する。苦痛を認識するのに数瞬の時間を有した。

次に彼女が目にしたものは、自身の腹に打ち付けられている大刀の柄だった

「大…天狗…様…!?!げほっごほ!ぜえ…ッ」

息が吸えず、途端に咳き込む文を見下ろす大天狗の瞳は、アンドラス同様に感情が込められていない氷のようだった

「今才前ハ霽ノ中。此レデ終ワリ」

アンドラスはぐったりと項垂れる文の髪を無造作に掴み上げる。頭部を覆う仮面の口部分が大きく開き、狂気作用を含んだ奇声を至近距離で放った

「~~~~~!!!!」

「あつがッ…！あああああああああああああああああああああああああ  
ああああ!!」

頭をかち割られる様な凄まじい激痛が押し寄せる。あまりの苦痛に意識を手放すことすらできず、ろくに身動きも出来ないまま、文は人格を内側から蝕まれる様な感覚に襲われた

これが狂気。

理性すらも上書きして満たしていくこの感覚は凄まじい破壊衝動か。

最早、『誰に』ではない。最早、目の前の憎むべき鳥男だけに衝動を向けられない。

……全てが憎い。

そんな感情を煽る様に周囲の靄が、響く奇声が、憎悪となって文の身体を染め上げていく

「…すみません、天魔…様…」

意識すらも侵食が始まった文から、消え入りそうな声が漏れる。

せめてもの抵抗に、今後アンドラスの配下になった際の武器になりうるであろう葉団扇を手放した

ひらひらと落ちていく葉団扇を視線の先で捉え、文の意識は闇に埋もれていった

だが、ほんの一瞬前

彼女の耳にはとある声が聞こえていた

「なんじゃ？…さつきから喧しくてかなわん」

闇の中で光る金色の瞳を一点に向け、天魔である日高 彩芽は煙たがる様に言った

その傍らでは今にも飛び出しそうな白髪犬耳の少女が襟首を掴ま

れて制止させられている

「は、離してください！文さんが!!」

「落ち着かんか。不用意に飛び込めばどうなるかくらいわかるだろう？全く、優秀だが感情的になりやすいのが玉に瑕かの」

突然の乱入者に、アンドラスは仮面の口を閉じつつ言った

「何者？」

「天魔」

妖怪の山の統率者は端的に答え、片手に持った扇を水平に振るう

ビュゴオオオツツツ!!! と、凄まじい突風が辺り一帯に吹き抜け、周囲を包んでいた靄を一瞬で吹き散らした天魔は、晴れた視界の先に浮くアンドラスを見て嘲諷する様に吐き捨てた

「おや、随分趣味の悪い仮面をしとるんじゃない。しかもその下に覆面まで付けて」

「……仮面ノ下ハ自前」

「んん？そうかそうか自前か。それは失敬」

「才前 天魔ト言ツタ。ツマリ此奴等ノ長。才前ヲ倒セバ任務終了」

アンドラスの意思に呼応するように天狗達も一斉に天魔へと向き直った。

拘束の解かれた文は落下することなく、項垂れたままその場にとどまっている

「……ふむ、少し間に合わなかったか」

「文……さん……!?!」

「ヴウ……!」

「やれやれじゃな。椀、お主は下がっておれ」

彩芽は一步前へ出ると、何の気なしに敵陣との間合いを詰め始めた。それこそ近所を散歩するような気軽さで。

一瞬怪訝そうに首を傾げたアンドラスは、構わず一言命ずる

「……討伐」

一斉に押し寄せる狂気の軍勢。

中でも速度に秀でている烏天狗の少女と、大刀を携えた大天狗が先行的に向かってきた

天魔は風を巻き起こす扇を振らなかつた

――直後、

「!?」

烏天狗の少女と大天狗が力無く倒れ伏したと気付いたのは、その身体が地に向かって落下を始めた時だった。

遅れて、後続する天狗達も同じ地点に踏み入った瞬間に次々と墜落を始める

「……何ヲシタ?」

「さあの」

天魔はすつとぼけた様に不敵な笑みを浮かべた。その後方で控えている椀でさえも、何が起こったのかわかっていない様子だ

「ダガ無駄ダ。我ノ兵士ハ負傷デハ倒レナイ」

「ツツ!」

権は思わず耳を塞ぎ、身構えた

あの奇声がかかる。何度も見てきた。

アンドラスの兵士となった者は致命傷を与えるだけでは止まらない。完全に殺し切るまで動き続けるゾンビのような耐久力に加えて、狂暴化までする

先程天魔が何をしたかはわからないが、恐らく仲間である天狗達を殺してはいないだろう。

つまり、再び動き出す。再び、仲間を剣に向けなければならない……少なくとも、権はその覚悟でいた

「~~~~~!!!」

轟く奇声は、忽ち周囲の空間を埋め尽くす。

地上で伏せる傷だらけの兵士の身体を容赦なく揺さぶった

「？」

アンドラスは奇声を止め、口を閉ざす。

耳を劈く音波は止み、静寂が戻り始めたその場に存在していたのは先の三人だけだった

「ハ？」

「無駄じゃ。既にあの者達の呪縛は解いてある。幾ら叫ぼうが近所迷惑な騒音にしかならんわ」

耳栓代わりに突っ込んでいた指を抜き、天魔はあっけらかんと言いつつ放つ。

未だ理解の追いつかない鳥男と白狼天狗の少女は同タイミングで首を傾げた

「呪縛？我ノ力ハ呪イデハ無イ。体内ニ侵入シタ我ノ力ノ一部ガ共鳴

ニヨツテ……」

「だから、それを『解いた』と言っている」

「有り得ナイ。我ノ力ハ一度取り込マレレバ身体ト同化スル。取り除クニハ生命活動ヲ止メルシカ無イ」

「それはお主の主観だろう？ 事実この場で出来ているのだ。疑うのは寧ろ主の認識の方ではないか？」

「有り得ナイ。理解不能ダ」

アンドラスはその手に持つ剣を構え、鋒の照準を天魔へと定めた。力を解放した彼の速度は天狗最速である射命丸 文をも凌ぐ。

天魔が反応する前に心臓を刺し貫きさえすれば、それで終いだ。

得体の知れない力の解明は済んでいないが、自身に定められた最終討伐目標が自ら現れたのだ。見す見す逃す手はない

アンドラスは空中を駆けた

「~~~~~!!!!」

牽制として響き渡る奇声には、間近で聞いた者の平衡感覚を狂わせる効果がある。

天魔の周囲を取り囲む様に飛び回るアンドラスの姿は残像によって不鮮明となり、声は彼方此方に木霊しているため、音による探知も不可能だった

「のう、天使軍の指揮官よ。何故天狗の長所である速度すら部下に敵わぬ私が、天魔なんぞと言う肩書きを与えられていると思う？ 勿論、兵の指揮能力やカリスマ性なんてものは後付けだぞ？」

耳を劈く程の超音波を受けて、まともに視認することも儘ならない敵と対峙して尚、余裕の姿勢を崩さず天魔は言い放つ

「天狗のもう一つの力。『神通力』に秀でていたからだ」



ガクンツツ と、高速で飛び回るアンドラスの身体に急ブレーキがかかった

「ナ、ニ……?」

錆びついた歯車の様な動きで自身の身体を一見したアンドラスの声色には、僅かに動揺が含まれていた

「何ヲシタ!? 貴様ツ!」

自身の機動力を支える両翼、そして接合部位である背面から腰下に掛けてが、土色に変色して固まっていた。

パキパキと氷が軋む様な音と共に、変色した肌は徐々に広がっていく

「言つたろう? 神通力つてやつさ」

天魔は言葉を短く切り、一帯に広がる景色を指して続けた

「この山は大昔に大地が盛り上がってできたものだ。

色んな歴史がある。権利を求めて争いあった時代。互いに和合し、共存を目指した時代。数々の歴史を繰り返し、今の調和のとれた山に落ち着いた」

「其レガツ、何ダト言ウノダ……!」

「共存とは調和。争いとは中和を意味する」

対立するものは和合し、共存する様になる

相対する二つの力は互いに打ち消し合い、消滅する

「私の神通力はその二つの力を体現したものでな。さつきお前の能力を打ち消したのは中和、今まさにお前の身体に起こっている現象は調和によるものじゃ」

「ナ、ナラバ……此レハ……!?」

「調和の力は二つの存在を同化させることで一つの共存を実現させる。お主には、この山と同化してもらおう」

身体の九割程まで同化が進行したアンドラスを憐れむでもなく、寧ろ彩芽はシビアに言い放った

「ヤ、止め……」

「私は調和を乱す者には容赦はしない。何より主達が仕掛けた戦争じゃ。末路も受け取れ」

ビシツツツ!! と石に亀裂が入るような乾いた音が一つ

「皮肉にも、私が久しく忘れていた感情を主が呼び覚ました。――『怒り』だ」

一流の風が吹く。

それは重力に従い落ちていく土の塊を、塵が舞う様に吹き散らした

「……天魔様、もう時期信号を送った救護班が到着する頃かと」

「うむ。では私達も応急処置に当たるぞ」

「はっー!」

直様地上に倒れ伏す仲間達の元へ向かう権を視界に捉えつつ、彩芽は心の中で一つの約束を浮かべた

(すまぬな隼斗。応援を出すのは難しいようじゃ)

## 150話 神と人 (前編)

天使軍の侵出と同時期、終 隼斗は幻想郷の地に立っていないなかった。

正確に言えば、座標自体は幻想郷で間違いない。だが誰かが彼のいる座標を特定し、そこを訪れたとしても彼はその場に存在していないのだ

「予想はしてたけどよオ……、真っ先に俺を抑えにくるとはな」

ひたすら暗黒の広がる黒一色の異次元空間に隼斗は立っていた。

不思議なことに光一つ無いこの空間は彼と、その対峙する敵の姿を鮮明に映し出している

そこへ舞い降りた青紫髪の天使は微笑みながら言った

「あら、前に約束したじゃない。貴方の全力の出せる場を用意するつて」

死の天使、サリエルは「それに」と付け加え、互いの間に巨大なモニターを出現させた。

幾つかに分割しているモニターには幻想郷の様子が中継されているようで、今まさに幻想郷へ降り立った天使軍と住人たちが対峙した場面だった

「折角連れてきたこの子達も貴方が相手では分が悪いと思ったのよ。だから開幕早々貴方に動かれないように此処へ御招待したつてわけ」  
♪

「そいつは残念だな。3秒ごとに三匹は挽肉にしてやれたつてのに」

早くも戦闘態勢に入った隼斗は拳を鳴らす、対するサリエルは戦闘どころかこれからティータイムでも始めるかのように空中へ腰掛

けた

「……何の真似だ？」

「まあそう慌てないで。お互いの勢力がどんな結末を迎えるか一緒に見届けるのも一興だと思わない？」

「……」

次の瞬間、何もない空間は凄まじい衝撃によって震撼する。

特別なことは何もやっていない。前方へ踏み込み、天使の頭を掴んで地面へ叩きつけたただけだ

だが、そこらの大妖怪や魔人が同じことをしてもこうはならない。妖術や魔法と言った自身の強化を全く行わずに、身体能力だけで一コ世界丸ごと揺るがす事など不可能だ

「地面にヒビ一つ入らねエか。確かに頑丈な空間だ。……なあ？サリエルよオ」

メキメキと頭蓋の軋む音が鳴る中でも、天使は不敵に笑っていた

「ふっ、くくく。本当に手が早いよねえ。せつかちさんは嫌われるわよ？」

「生憎と気が短エもんでな」

隼斗は振り上げた拳を躊躇なく落とした。

再び轟音と衝撃が一带を包み、足下には血溜まりが広がる。

仮に此処が人間界であったなら、その一撃は都心を難なく崩壊させる破壊力が込められていた

「！」

不意に、隼斗の側頭部へ高速で飛来するナニかが打ち込まれ、その

身体を側方へ押しやった。

挟み込んだ掌からはチリチリと煙が上がり、一瞬遅れて空気の弾ける音が響き渡る

「あら凄い！ちよつと強めに打つたのに防がれちゃった」

「随分癖の悪い羽だな」

隼斗がそう吐き捨てて睨み付けたのは、鞭のように空気を裂きながら蠢く一枚の翼。

その速度から察するに、先端の威力は容易に大地を分断する域に達していた。

普通なら防御ごと薙ぎ払われ、一瞬で肉塊へと変貌する。それを喰らって尚軽口が叩けるのは、規格外の耐久力を持つ彼だからできるとだった

「悪い、思わず筆つちまった」

今しがた翼の一撃を受けた掌からはらはらと真っ赤に染まった羽毛が舞い落ちた。

だが、一部を大きく抉り取られている翼を目にしたサリエルの表情は変わらない

「うふふ。本当に、素晴らしいわあ」

――

曰く、その大男は神や悪魔をも恐れぬ無敵の力を有していた

曰く、長きに渡る苦行に耐え、手に入れたその力は神でさえも太刀打ちできないとされていた

……曰く、その男は『羅刹の魔王』と称された

「もう終わりか？守矢の神とやらは」

野太い声が、静かに守矢神社を包む。

嘗ての清らかな聖地は消え失せ、真ん中からへし折れた数多の御柱が突き刺さり、所々突起した地面がその場の惨状を物語っている

その場に立っているのは、六本の腕に其々刀や鈍器を携えた巨人、ラーヴァナただ一人。

ボロボロの身体の二柱は、その後ろにいる人物を庇うように膝を突き、鋭い眼光を向けていた

「私は大丈夫ですから！もう私を庇いながら戦うのはやめて下さい！！このままじゃお二人が…！」

緑髪の少女、東風谷 早苗は若干嗚咽の混じった声で叫ぶが、当の二柱は首を縦に振ろうとしない。振るわけにはいかなかった

「ははは、私達も零落したね。守ろうとして逆に心配されるなんて」「そだね。でもまだ本気出してないし。こっからが本番だかね！」

まるで子供の様な強がり。それは早苗から見ても一目瞭然だ。全力でないと言えばそれは本当なんだろう。

だがそれは自分という枷が、より形勢を不利にしていますのである。二柱自体は『本気』を出している。

自分さえいなければなんて言う事情は、この際あまり関係がないのかも知れない

……それでも少女は、

「でも……」

早苗の言葉は視界の端から乱暴に振るわれたメイスによって遮られた。

技術よりも腕力任せによる一閃だが、戦闘慣れしていない少女の目で捉えるにはあまりにも速過ぎる

ドゴオオツツ!!! と鈍い轟音と衝撃が響く。

続いて樹木がへし折れる様な乾いた音が耳に入り、早苗は思わず閉じていた目を開けた

「つつとに馬鹿力だねコイツは…!」

何重にも束ねられた御柱を盾に、目の前で立つ神奈子の姿があった。

掌を翳し、ギリギリ貫通しかけた衝撃を盛り上げた土で緩和しつつ、二柱は交互に告げた

「早苗が何を言いたいかはわかるよ」

「……ああ。でもそうじゃない」

「えっ?」

ボロボロと崩れ落ちる土塊の先で、新たに刀を振り上げたラーヴァナの姿が映る

「自分達の戦いにむぎむぎ子を巻き込む親はいない。理由は単純。何よりも大切だから」

「これが親心ってやつかね。早苗って言う存在が、いつしか私達にそんな心を植え付けた。……だから」

振り上げた刀を握る腕目掛け、一点に集束された光線が複数の御柱より発射された。

突如地面が勢いよく変化し、その巨体を突き上げる様に隆起した

大したダメージはなかった。しかし、ラーヴァナはこの戦いで初めて自身の攻撃を止められたことに目を丸くする。

その姿を見遣った二柱は口を揃えて言い放った

『守らせて』

嘗て、大和・洩矢を治めていた二大神は、苦戦を強いられる現状を嗤った

「面白い」

ラーヴァナからそんな言葉が漏れる

「最初があつという間にケリがつくもんだと思つとつたが、いや中々に楽しめそうだわい」

「それは随分舐められたもんだね。崇つてやろうか」

「まあ待て。お前達はどうも後ろの小娘が気掛かりで全力が出せてないようだ。折角楽しめそうだと言うのにそれは勿体なからう?」

「何が言いたい?」

神奈子と諏訪湖に其々武器を突きつけ、ラーヴァナは静かに宣言する

「このラーヴァナ。これより狙うはお前達のみとする」

「は?」

「そうすれば集中できるだろう?なに、心配はいらん。お前達が立っている間はその小娘には指一本触れぬと約束しよう」

「だが」と付け加え、ラーヴァナはその言葉を口にする。

神奈子等二柱を憤慨させる言葉を。



「お前達が力尽きた場合、小娘には一番惨たらしい死を遂げてもらうがなあ」

にんまりと、二柱の反応を楽しむように。その戦意を煽るように。直後、その場を膨大な神力と殺気が包み込んだ

「不快だと…、そう言ったはずだぞデカ物ツツ!!」

その瞬間、守矢神社上空の雲が渦を巻いて降りてきた。渦は次第に分裂し、幾つもの巨大な竜巻を創り上げる

「……早苗、『地上』にいると危ないから飛んでな」

言われるがまま地上から離れた少女を確認した瞬間、足下の地面が大きく沸騰した。

地面は次第に溶岩のように赤く染まり、所々から超高温のマグマが吹き出し始める

「ほお、これは中々」

「覚悟しておけ天使軍。私達はあの子を守るためなら悪魔にすら身を落とすぞ!!」

神奈子の周囲に展開された複数の御柱に、其々発生した竜巻が接続された。

竜巻を纏った御柱は神力によって充電された光のエネルギーに包まれ、神々しい輝きを放つ

そして、周囲の音が消えた

視界も光の一色に染まり、ラーヴァナの身体は同色の竜巻によって埋め尽くされた

轟く破壊の怒号は他所に被害を出さぬよう、今一度上空に向かって舞い上がった。

複数の竜巻が一点に集中して無理やり上へ進行方向を変える。大抵のものならその時点で原型を留めてはいない

続いて、竜巻が収まらぬ内にラーヴァナの足下が爆ぜた。

それも唯の爆発ではない。今まで蓄えられていたエネルギーが一気に解放されるように、文字通り『噴火』した

吹き荒れる烈風が周囲へ広がりかけたマグマや溶岩を上空へ打ち上げ、再びラーヴァナの頭上へと加速させ、炎弾の雨を降らせた

「ぬううう、おおおあああッッ!!」

ラーヴァナのそれはあまりにも丁寧な力技だった。

六本ある剛腕で振るう刀やメイスは甚大な風圧を生み出し、纏わりつく猛攻を振り払った

「があーはっはっはあー!!まだまだ生温いわい!」

荒れ狂う竜巻や灼熱の溶岩地帯に構わず、重々しく地面を踏み鳴らし接近する巨人を前に、諏訪子は更に地盤を叩いた

「おおっ!?!」

ボゴツツ!! と足場が陥没し、ドロドロに融解した地面がラーヴァナの足を絡め取った。

優に千度を超える灼熱の底無し沼は、その巨体を腰下まで引きずり込み、巨人の復帰を待たずして神奈子は六つの御柱をその頭上へと配置する

「見た目通り、神の裁きをくれてやる」

六角形に展開された御柱は円を描くように回転を始める。  
そして円の中心に蓄えられたエネルギーが巨大な光の柱となって  
ラーヴァナの頭上に降り注ぎ、今日何度目かになる閃光と衝撃が、妖  
怪の山全体を震撼させた

「……す、凄いつーこれが、お二人の……」

感服する早苗をよそに、未だ険しい表情の二柱は互いに視線を交え  
る

「……やったと思う?」

「……………せめて痛手でも負っててくれれば儲けもんだね」

舞い上がった砂塵の向こう側でちらつく気配は、より濃く、より強  
大なものへと変化していた。

……野太い声が、彼女等の表情をより強張らせる

「ふーむ。これは中々どうして、良い意味で期待を裏切らんかったか」

……無傷。

その頭部を髑髏状の仮面で覆った巨人は、神の力を真正面から全て  
受け切り、その全てを弾き返していた。

最早、タフネスがどうか言う問題ではない。

絶縁体にひたすら電気を流すような、はなから効果など無かったか  
のように、ラーヴァナという巨人は嘗ての二国のトップに立っていた  
神の力を難無く凌いだ

「しかし、同時に残念でもある。儂がこの仮面を出してしまった以上、  
お前達が耐え得るような加減が出来んのでな」

「!?…神奈子ッ!!」

一瞬だった。

悲鳴すら無かった。

見上げる様な巨体の男の身体は消失し、瞬きするその瞬間で、神奈子の身体はくの字に折れ曲り、後方の本殿へと叩き込まれていた

「んん、やはり耐えられぬか」

六本ある内の、どの腕を使った？

いや、そもそも何で攻撃された？

諏訪子は思考をそこで止め、反射的に地面を巨大な壁へと変化させていた

直後、岩が砕き割れる衝撃音と共に、その小さな体軀はゴム毬の様に地面を転がった

「神奈子様ツツ!!…つつ諏訪子様ああ!!」

一拍遅れて、早苗の悲鳴が木霊する。

少なくとも彼女の目には、二柱がほぼ同時に吹き飛ばされた様に見えるはずだ

そして、

「お前一人になってしまったなあ？小娘」

びくんつ、と少女の身体が跳ねる。

拒む思考とは裏腹に、反射的に後方を向いてしまう身体を必死に両手で抱くその姿は、ラーヴァナの加虐性を煽った

「んん、なんだ？お前は戦わんのか？このままでは確実に殺されて

しまうぞ？ん？良いのか？」

「あつ……いや……つ」

言葉が言葉として出てこない。

完全に竦んでしまった身体は、後ずさるといふ選択肢すら消してしまっていた。

現状彼女にできることは、ひたすら強く御幣を握り締めることくらいだった

「まあ、抵抗したところで無駄と判断してのことなら仕方あるまい。では、誠に心苦しいところではあるが、約束は約束だ。手始めに四肢を挽ごうか？それとも五臓六腑を引きずり出した方がいいか？お前は どう思う？」

悪魔の笑顔だった。泣き叫ぶ少女の姿を想像してか、若干呼吸が荒い。

その全てが、一層早苗の恐怖を煽った

ゆっくりと、巨大な掌が少女の頭上から迫る

「……………触るな」

地獄の底から轟く様な、小さな怒号が聞こえた

「その子に、触るなツツ……!!」

本殿の瓦礫から飛び出した御柱が。

突如ラーヴァナの身体に巻き付いた極太の蔦が。

彼女等の感情を表すかの様に、強く、堅固に巨人の身体に食い込んだ

「神奈子様…っ、諏訪子様…っ…!!」

再び少女の前に立った二柱は、それぞれ掌で少女の頭を撫でた

「大丈夫。早苗は絶対守り切るから」

「危ないから少し下がってね、早苗」

掌は少女の頭を離れ、目の前の巨人に向けられる。

不意を突いたはずの攻撃すらも、動じずに引き千切る化物は呆れた声色で吐き棄てる

「さっきので倒れなかったのは立派だが、お前達との戦いは少々飽きてしまっただけ。続けるのは構わんが、手心無しで殺すぞ?」

その言葉に誰よりも反応を示したのは早苗だった。

殺される?二人が?

どうして?

自分達が何か悪いことをしたのか?

そもそも、何か殺されなければならない悪行を働いたと言うのか?

…冗談じゃない。

守られてきた。

今までだって、現状だって。ずっと二人が自分を守ってくれていた  
いつしか思ったことがある。

もし、万が一強敵が現れて、もし、そいつが二人より強かったら。  
自分はただ見てるだけで終わるのか?

目の前で二人が痛めつけられるのを、ただ震えてへたり込むことしかできないのか?

…冗談じゃないツツ。

早苗は先程まで震えていた身体に爪を立てる。

打って変わって湧き上がる感情を、最愛の二人を傷付ける男に向け

るべき感情を、彼女は受け入れた

現人神として、いつまでも守られる立ち位置に座しているわけには  
いかない

いつしか消えた震えは、少女を前に進ませる

「私も、戦います」

「えっ、早苗…?」

「何言って…ッ」

最早、二柱がなんと言おうと関係なかった。  
強い意志で。固く込められた思いを内に秘めて、

「今度は私がお二人を守りますから!」

握り締めた御幣を突きつけ、早苗は能力を解放する。

どんな逆境だろうと関係ない。

それが起きてしまえば覆すことだってできる。

——奇跡を。

閃光が走った。

先の神奈子が照射した光のレーザー程ではないにしろ、全く同型の  
レーザーが打ち出された。

その一筋の光が、

「ぬっ…!?!」

その攻撃は、余裕綽々で受けたラーヴァナの腕を焼いた。

二柱も、ラーヴァナ自身も。そして何より攻撃を仕掛けた早苗です  
らも驚愕に表情を染める

「効い…た…?」

その時点で、何故早苗の攻撃がダメージに繋がったのかは誰もわからなかった。

威力自体は大したことはないものだ。腕の表面を少し焦がした程度。後にも先にも引きずる様な傷ではない。

しかし、だからこそ。その程度の攻撃が通った原因がわからない

「……………小娘、お前は神ではないのか?」

「…えっ?」

そしてたった今、ラーヴァナは理解した。

一番脆弱で、警戒すらも馬鹿らしいと思っていた少女が、一番の脅威になりうる存在だと言うことに。

「二柱の神よ。その小娘も参戦すると言うなら、先程の約束は成立せん。今の内に締めさせてもらおうぞ」

六本の剛腕をそれぞれの位置に構え、踏み込む態勢をつくったラーヴァナに、一同は思わず身構えた

「あーもう早苗! こうなったら私達から離れるんじゃないよ!!」

「勿論です! お二人は私が守りますから!!」

「うーん、そう言うことじゃないんだけどなー」

気の抜けた会話とは裏腹に、緊張が走る

早苗の力が最も有力だとしても、圧倒的に火力が足りない。神奈子や諏訪子が力添えをすることで補うこともできるが、目の前の巨人がそれを許すはずもない。



そもそも何故なのかが判明しない以上、迂闊に仕掛けるのはリスクが大きすぎる

た  
……………だが、そんな緊張した空気を崩したのは、第三者の声だった

「うわっ、何あれ。デカくてごっつい男がいるんだけど……」

「総領娘様、もう少し言葉遣いに気を使ってください、はしたない」

腰まで届く青髪に、桃の付いた帽子を被った少女と、その少女を宥めるように付き添う羽衣を纏った女は、一同の前に降り立った

「誰？」

警戒しつつ諏訪子が尋ねると、青髪の少女は声高らかに言い放った

「私は比那名居 天子。知人がどうしても言うから助太刀に来てあげたわよ。感謝なさい！」

## 151話 神と人 (後編)

比那名居 天子は挑発するように、その手に持つ緋想の剣をチラつかせ呟く

「中々斬り甲斐のありそうな巨人ね。どこからいこうかしら？ やつぱりその無駄に多い腕？」

対して、その言動に溜息を漏らす六腕の巨人、ラーヴァナは呆れた声色で返した

「新手ならば丁度良いと思つとつたが…、どうやら期待できそうにないな」

巨大な体躯に見合った刀とメイスを振り上げ、姿勢を低く落とす。後は蹴り足一本で接近し、六つの内どれかを振り下ろせば、目の前の少女は肉塊に変わる。

次いで、そのまま足を止めることなく緑髪の少女を叩き潰せば、この場に於ける危険因子は消え、後は確実に二柱を殺せば任務完了だ

「あんたみたいな脳筋に期待されても嬉しくないわよ」

天子の握る剣の刀身が煙の様に揺れ、緋色の光が発生する。

光はラーヴァナを含む周囲を数秒照らし、緋想の剣に秘める能力を発動させた

「！」

ラーヴァナの身体から黒い気が出現し、蒸気のように揺らぎ始めた。

突然発生した黒い気体に一瞬警戒の色を示したラーヴァナだが、す

ぐに無害であると判断する

「なんのつもりか知らんが、虚仮威しなら止めおけ。無駄に儂をイラつかせて惨たらしく死にたくないならな」

「虚仮威しかどうかはすぐわかるわ。そのちっこい脳味噌でもね」

「……ならば、脳味噌ぶち撒けて死ねいッッ!!」

地面が爆散し、巨体は高速で射出された。

僅か十数メートルの距離。刀やメイスを振り下ろすと言うよりは、殆ど打ち噛ましに近い

しかし、ラーヴァナの足は少女へ行き着く前にその動きを止める。

……いや、正確には突如出現した落とし穴によって、片足が地中に埋まっていた

がくんつ と体勢が崩れ、手を突こうと前のめりに崩れ掛けたその顔先へ、緋色に光る刀身が走った

「ッ！」

神の本気をも正面から受け切ったラーヴァナが身を引いたのは、単に反射によるものではない。本能的に…、その剣を受けてはならないと判断したため。

何より、それを証明する事実がそこにあった

「んー？浅かったかしら」

髑髏の仮面に入った一筋の傷。

今しがた表面を掠めていった緋色の刃によるものだった

「……ほお、儂に傷を付けるか。小娘」

常人には視認できない速度で動くラーヴァナを即席の穴にはめる

反応速度。

そして、『傷』と言う明確な有効打を与えることのできる攻撃力。その二つを『同時に有する存在』を、ラーヴァナは知らなかった………だが、

「知っているぞ。お前は天人と言う元は人間が神格化した種族だろうか？」

「だったら何？言つとくけど、今更心入れ替えて崇めたって無駄よ。巷じゃ不良天人なんて呼ばれてるし」

……つまり、人ならざる存在。

ラーヴァナにとって重要なことはその一点のみだった

（ならばカラクリはあの妙な剣にあると言うわけか。効力は色々考えられるが、今はそれだけわかれば良い）

ラーヴァナは構えを変えた。

左半身を前に出し、同側に持つ武器を盾のように重ね合わせる。残る三つの武器は上段から下段まで対応できるよう構えた

「あら、ちょっと斬られただけで随分慎重になったわね。デカイ凶体とは裏腹に肝が小さいのかしら？」

「口が達者なのは結構だが、儂がこの構えになった以上軽口は叩けんようになるぞ？」

瞬間、ラーヴァナの巨体は起こり無く天子の眼前に移動した

「っ！」

「言ったそばからだ」

思わず飛び退いた少女を追うように、メイスが横一閃に振るわれ

る。

天子は後方宙返りの要領でメイスをやり過ぎすが、更に距離を詰めてきたラーヴァナの『盾』による体当たりで後方へ大きく吹き飛ばされた

(痛っ…、所詮力任せな輩と高を括ってたわ！)

ラーヴァナの不可解な接近の正体は、所謂摺り足だった。

身体を上下すること無く、構えを崩さずに最短で踏み込む歩法。

それに加えて、盾技術を交えた接近戦まで繰り出してくる。先程の言葉通り、単に慎重になった訳ではなかった

「上等じゃない!!」

天子が腕を水平に振るうと、注連縄の巻きついた大量の要石が浮かび上がった。

要石は周囲をビットのように飛び回り、一つ一つが光を帯びると、瞬く間にレーザーを打ち放った

閃光と爆音が耳を叩く中、天子は構わず爆風の中へ飛び込み中心に向かつて緋想の剣を振り下ろした

「ぐっ!?!」

だが返ってきたのは敵を斬り裂いた感触では無く、手首に伝わる鈍痛だった。

見れば振り下ろした緋想の剣の鏝元に、巨大な剣先が打ち込まれていた

前提として、緋想の剣は刀身が存在しない。

能力によって丸裸にした相手の弱所を斬るために、質を変える気の塊こそが刃を構成する物質なのだ

つまり、定めた対象以外には唯の刃に成り下がるため、間に対象以

外の物を挟み込めば受けることが可能。

「痛みで剣を離さなかったのは見事。…が、動きを止めてしまったな」

ラーヴァナは砂塵の向こうから剣を捻り、緋想の剣を横に弾くと、新たにメイスを振り下ろした

ゴガアアアツツ!! と、轟音が響く。

飛び散ったのは血肉では無く砕き割れた要石の破片だった。

天子は構わず接近し、新たに複数展開した要石を盾にしながら巨人の懐へ飛び込む

身体に纏わりつくように動く要石を鬱陶しそうに振り払い、ラーヴァナの目はしっかりと少女の姿を捉えていた

「!?」

がくんつ、と再びラーヴァナの体勢が崩れた

そして理解する。

足下に深々と突き刺さった要石が淡く光り、地盤を極端に脆くしていた

ラーヴァナは追撃を警戒し、盾を構えつつ身を引いたが、その目に飛び込んできたのは凄まじい閃光と衝撃だった

「今です!!」

「ナイス衣玖!!」

身体に溜めた電撃を放った羽衣の従者、永江 衣玖はそのまま放出を止めること無く叫び、それに合わせて天子は緋想の剣を振り抜く

そして、

必殺の刃は咄嗟に構えた巨人の武器の間を擦り抜け、六腕ある内の一本を斬り飛ばした

「す、凄い……！」

その光景を後方から目の当たりにしていた早苗は率直な感想を漏らした。

傍に立つ二柱も同様に目を見開いている

神である自分達の全力が通じなかった巨人の腕が、文字通り落ちた。

自分達は腕どころか傷一つ負わせることができなかつたと言うのにだ。

しかし、遺憾を感じるよりも先に一つの疑問が浮かび上がる

(…いくら弱点をつけるからと言って、火力では明らかに私達が上だった)

単純な火力だけで見れば、臂力だけで振るう剣よりも、山一つを焼き払える火力を打つけたほうが強いに決まっている。

だが目の前の光景はそんな子供でもわかるような物理法則を覆している

つまり…、

(私達の攻撃を阻む何かがあつた…？いや、もつと根本的な…、力そのものを無効化する何か…？)

神奈子や諏訪子が振るう力。即ち、神の力

早苗がせめてもの抵抗に打った攻撃が巨人の腕を焼いた事実。

現人神である彼女の振るう力には……。

「！」

一つの仮説が立てられた直後、前方の戦況は動いた

「腕一本で満足か？戦場でその欲の無さでは生き残れんぞ小娘」

振り抜かれたメイスは空気を裂いた

「あ……………」

短く漏れた悲鳴なのかどうかもわからない声と同時に、青髪の少女は凄まじい勢いで薙ぎ払われ、地面を何度も跳ねて転がった。

一拍遅れて彼女が被っていた丸い帽子が地に落ちる

「総領嬢様…っ!？」

直様駆け寄った衣玖が力無く倒れ伏す身体を抱き上げた

「がはっ…!?!げほっ……………う、ぐッ！」

血反吐の混じった咳を繰り返し、飛んでいた意識から復帰した少女は腹部を押さえ、その苦痛に表情を歪めた。

吐血量から察するに、内臓に痛手を負っている。肋骨も何本かやられていよう

それでも、直撃だけは避けていた

「は、ははは。咄嗟に要石を挟み込んで後ろに跳んでみたけど…、おとぎ話の英雄みたいに上手くはいかないわね…！」

「強がってる場合ですか…？その状態でこれ以上は……………」

「…そうね。ちよつと私一人じゃ危なくなってきたかも知れないわ」

天子は徐ろに後方の緑髪の少女を見遣った。



心配そうに此方を見つめるその姿からは、この場の誰よりも『かくく』見える

「衣玖、耳を貸しなさい」

「は、はあ？」

「いいから早く。痛いから叫びたくないのよ」

時間にしてほんの数秒。たった一言呟いた少女は再び緋想の剣を握り立ち上がった

若干呼吸の荒い自身を落ち着かせ、今一度目の前の巨人を睨み付ける

対する巨人は先程と打って変わって溜息を漏らしつつ吐き捨てた

「その状態では大して持つまい。……まあ、少しは楽しめたか」

盾として固めていた左側の武器の構えを解いたラーヴァナは、再び低く腰を落とした

「小細工で止めたければ好きにせい小娘。だが次は攻めの一手でいかせてもらう。易々とは止まらんぞ？」

「何？腕落とされて焦ってるの？手負いの女相手に随分必死じやない」

逆に、心の内で焦燥にかられているのは天子の方だった。

唯でさえ体格やリーチといった戦闘ステータスは相手の方が上であり、その上額に汗が滲むほどの手傷を負わされ、更に攻撃が激化するのであれば形勢的に不利なのは火を見るよりも明らかだ

しかし、そんな中でも彼女は一人で巨人と対峙する。後方にいる二柱や、従者の力を借りれば決定打は無いにしろ、幾分かは戦いやすくなるはずなのに。

何より、先程従者へそうなるように指示したのは彼女自身だ

「……はあ、こんなことなら引き受けるんじゃないかかしら」

天子は小さく漏らした本音を捨て置き、周囲に大小様々な要石を出現させ、空中に浮島のようなフィールドを作り上げた。

その内の一つに飛び乗った少女は挑発を交えた手招きで吐き捨てる

「ほら、お望み通り小細工してあげたわよ？」

「なるほど、考えたな」

ラーヴァナは構わず近場にあつた浮島へ跳躍し、天子と同じ土俵へ飛び込んだ。

数ある浮島の中で、その巨体で乗ることが出来る大きさのものは限られてくる。

勿論高さもバラバラだ。立ち位置によっては浮島が視界を遮り、死角が生じてしまう

ラーヴァナはその内の一つを横薙ぎに振るったメイスで叩き割り  
眩く

「まさか、破壊されないと思っていたわけではあるまい？」

「どかんっ」

その一言の後砕かれた要石が点滅し、炸裂した。飛び出したのは爆炎ではなく色とりどりの弾幕で、ダメージを与えると言うよりも目眩しに近かった

「ちっ……！」

鬱陶しそうに弾幕を払い、直様天子の脳天目掛けて剣を振り下ろす

べく踏み込んだラーヴァナを、唐突な浮遊感が襲う。

視界が上下逆さまになり、身を捻って地面に着地した先で、180度回転した浮島を見た

「ぶつ、ダツサっ！小細工にまんまとハマったわね！」

「……」

その子供のような悪態に、ラーヴァナが青筋を立てることはなかった。

寧ろ逆に、自分が殺すつもりで動いたにも関わらず、ここまで凌いだ少女に感心さえしていた

「いいだろう！ならば出せる手は全て出すがいい！！儂はその全てを粉碎してやる!!」

ラーヴァナの叫び声は衝撃波となり、辺り一帯の木々を揺らした。巨体全体を黒い邪気が包み、羅刹の王は地を蹴った

くく

その瞬間、大地が揺れた。

目先の巨人が勢いよく跳躍した余波で、小規模な地鳴りが起きていた

「ツツ、とうとう本気になったかあの巨人っ!？」

「あの娘もそろそろヤバイんじゃない？神奈子、傷も少しは癒えたし私達も！」

「お待ち下さい」

飛び出しかけた二柱を引き止めたのは、先程まで青髪の少女と共に戦っていた羽衣を纏った女だった。

怪訝な顔をしつつ、神奈子は目の前の戦況を見て言う

「待つだつて？悪いけどこれ以上あの巨人に好き勝手されるわけには  
いかないのよ。あの娘だつて十分戦ってくれた。後は私達が……！」

しかし天界の従者は首を横に振る

『傷が癒えた』、と言うのは気休め程度でしょう？失礼ですが、貴方が  
たが加勢したところで状況は進展しないかと」

「ちよつ、仮にも神に向かつて戦力外通告なんて言つてくれるじゃん  
！あの娘には有効手段があるみたいだし、私達が隙を作れば……！」  
「では、あの大男の弱点を……存知ですか？」

その言葉に逸早く反応した神奈子は、憤慨する諏訪子を掌で制し、  
その先を促した

「お前達は知っていると？」

「はい。そしてその事実を伝えろと、あの方から言付かりました」  
「！」

衣玖は傍らに立つ早苗を見遣り、頼まれた言伝を告げる

「あの大男は魔の力も、神の力でさえも受け付けない特異な体質を  
持っています。∴打破するには人の、『人間』の力を使うしかありませ  
ん」  
「!?」

早苗の攻撃が通じた訳∴、それで合点がいった  
現人神とは、神であり人でもある存在だ。

100%神力で構成されていないその力の質は、人の力と配合して  
いる。つまり、あの巨人は純粋な神の力のみを無効化するということ  
だ

「……どうやら今回の主役は早苗みたいだね」

「えっと、つまり…、えっ、私が…っ!？」

「確かにお伝えしました。私はこれで。」

永江 衣玖は一礼し、帯電させていた雷を身体中に巡らせて瞬く間にその場から消えた

残された二柱と一人は互いに顔を見合わせ、未だ混乱している少女へ、神奈子と諏訪子は優しく、力強い声色で諭した

「早苗、よく聞きなさい。今から私達が貴女に持てる限りの力を授ける。受け取ったら、あの巨人に向かってその力を打ち込みなさい」

「持てる限りのつて…、私ではそれだけの力を制御できるかどうか…！」

「大丈夫。急ぎ足ではあるけどなるべく早苗に負担が掛からないよう浸透させていくから」

緊張と不安から震える少女の手を、二柱の温かい掌が包む。

今更、「本当は戦場に出すべきではなかった」などと言う、謝罪や惻隠の情を並べる気はなかった。

今すべき事は、一人の少女に全てを託すことでは無い

「私達がついてるんだ。早苗なら必ずできるよ」

「一緒に守ろう、私達の家を」

見据えるは、後悔ばかりが立つ過去ではなく、こうであって欲しいと願う未来でもない

——今、この現状を。

膨れ上がろうとする不安を振り払うため、風祝の少女は思いつきり

両手で頬を叩いた

小気味の良い音が鳴り、顔を上げた少女は言葉を紡ぐ

「私に、お力添えをお願いします!!」

くく

「あつぷ…!?!」

剛腕から振るわれた刃は鋭い剣閃を描き、咄嗟に屈んだ天子の頭上30センチの位置を通過した

本当の意味で、殺しにかかってきたラーヴァナの動きは、浮遊する要石を障害としていない。

壊れれば弾幕の目眩しが飛び出すギミックも、火の粉を払うように突っ込んでこられては効果が薄い。

唯一の対抗手段である緋想の剣も、圧倒的なリーチの差によって阻まれつつあった

「どうした小娘え！小細工はもう終わりか?!足場を回転させたり消したりするだけではあるまい？手品はネタが多くなければつまらんぞ!!」

「急におっさんがテンション上げて張り切ってるんじゃないわよ!…つて言うか絶対さっきの根に持つてるでしょっ!?!」

天人として、人間から神格化した身体機能を持つ彼女の目でも、ラーヴァナの腕の動きを追い切れていなかった。一度間合いの中に入れば、回避し切れず瞬時に挽肉になる。

膂力で勝てるわけもなく、緋想の剣で受けることもできない。運良く受け流せたとしても、反撃に出る前に次の攻撃が飛んでくる

(…ジリ貧ね。このままじゃいつか貰う。……………、だったらッ!)

天子は意を決して前に踏み込み、迫り来る巨人との体格差を逆に生かしてその股下へ滑り込んだ

削岩機のように動く剣やメイスに身体中撫でられながらも、直撃だけは避け巨人の下を潜り抜けた

「痛ッッ！、うああああああ!!」

鋭い痛み表情を歪めながら、天子は跳躍し緋想の剣を振り上げる。

ギチツ、と骨に食い込む感触が伝わり、緋色に光る刃は新たに巨人の腕二本を斬り裂いた

「うあ…ッ!?!」

だが天子の口から、無理矢理空気を押し出されたような悲鳴が漏れる。

今しがた斬った腕の内、骨に阻まれ断ち切れなかった二本目の腕が空中で動きの止まった天子を乱暴に掴み取っていた

「放しなさい…ッう、ぐ…ッッッ!?!」

言葉すら詰まる激痛が襲う。

ゆらりと、巨大な鋒が首筋に宛てがわれた

「終いだ、小娘…ッッ!?!」

剣を引くよりも先に、眼前で閃光が走りラーヴァナの目を眩ました。

雷を纏った従者は、一瞬僅かに緩んだ拘束から掻っ攫うようにして滑り込み、天子の身体を抱き留めて離れた位置へ着地する

「総領娘様、大丈夫ですか？」

「い、今まさにあんたの雷に感電してるところよ」

既にズタボロの身体を起こし、自身の力で立ち上がった天子は他方へ意識を向け呟く

「で、どう？」

「……さあ？」

「……さあ？、って何よ！この私がこんなになるまで時間稼ぎしてあげたって言うのに！」

「申し訳ありません。答えを聞く前に総領娘様がピンチに陥りそうだったので、早々に飛び込んだ次第です」

「うっ…、悪かったわね…ツツ痛つく…！……もうちよつと慎重にいくべきだったかし……」

天子の言葉は突然吹き荒れた突風によって掻き消された。

それは自然に発生した風とは思えない程不自然で、ある一点に向かって渦を巻くように集中している

「……さて、大詰めね」

言つて、比那名居 天子は緋想の剣を頭上に掲げた。不鮮明だった刀身が緋色の光を帯び、数倍の大きさに膨張していく

「……成る程、足りない火力はその二柱に借りるといふ訳か。それに二手に別ればどちらか一方は当たるかも知れんなあ」

少女二人による、攻撃に転じる前の『溜め』の間にラーヴァナは敢えて攻めなかった。

自身の油断や虚を突かれたこともあったが、確かにダメージを負わ



された事実と、少女等の覚悟を秘めた表情から迂闊に動くよりも、迎え撃つ方が得策と判断したためだ

（青髪の方は攻撃判定が刃の長さ分のみ。間合いに入られぬよう気に掛けておれば脅威にはならん。…となればやはりあの小娘の方が）

残る四腕を構える。

刀傷が骨にまで達している一本を捨て石として、天子の方へ置く。ラーヴァナの邪気を纏った三つの武器は、その一つで周囲一帯を更地に変える程の威力を生み出していた

早苗の翳した掌の先へ、神力を帯びた風が球状になって集束していく。

その手に添えられた力強い二柱の手が、極限まで高めた神力が四散せぬよう制御しつつ、自身の身体を触媒として、東風谷 早苗という戦士に力を授けた

「いくよ早苗」

「さあ、見せてやれ」

ふっ、と通り雨が止んだように、吹き荒れていた風は止まった

『守 矢 の 神 風 』

黄金色の烈風が吹いた。

それは押し寄せる津波のように、景色そのものを飲み込みながら、ラーヴァナへと突き進む

「なめるな小娘え!!この程度の微風なんぞに…!!」

後方で控える天人の少女はまだ動く気配がない。ラーヴアナは三つの武器を重ね、姿勢を低く構えた

しかし、

「!」

押し寄せた風は、ラーヴアナに何の被害も齎すことなく、その身体を吹き抜けた

思考に空白が生じ、反射的に振り返ったラーヴアナは目を見開く

「ありがたく、使わせてもらおうわよ」

その緋色の柱は、羅刹の王でさえ見上げる程に。

神々しく伸びる刀身は金色の光を放ち、それを握る天人の少女は、傷付いた身体を意に介さず振り下ろした

『全 人類の緋想天』

音さえ消えた。

衝撃も生まれなかった。

一挙に伸びた金の混じった緋色の刃は、天を隔てるように一文字の軌跡を作った

ただ一つ、凝縮された神の風は、緋想を形成する気質となって、ラーヴアナの身体を両断していた

「!?……………っ……………見事っ」

髑髏状の仮面が碎き割れ、羅刹の王は砂のように四散した

「終わっ……た……？」

緊張の糸が切れたのか、将又力を酷使し過ぎたか、途端に崩れ落ちた早苗を両脇の二柱が支える。向かい側でも同じく膝をついた青髪の少女と目が合った

「……っ」

力無く取られたガッツポーズに、早苗も小さく掌を振り返した

152話 心理と真理（前編）

その瞬間、旧都全体が震撼した。

元々地中にできた巨大な洞窟のような場所である地底は、衝撃をダイレクトに伝播する

衝撃の正体は音だった。

たった一人の鬼から発せられた咆哮が、音の爆弾となって一帯を揺るがしたのだ

「〜っつ！耳が馬鹿になるわ…！」

「流石鬼の頭領だけはありますね。速やかに正気を取り戻してもらわなくては」

「簡単じゃないわよ。あいつ、既にモード入っちゃってるし。って言うか一番びっくりなのが……」

さとりと共に空中へ飛び出したパルスイは、ある一点を見て言った。

戦闘前のストレッチでもするように身体の調子を確認める勇儀の傍には、未だ酒が残ったままのそれが置かれていた

彼女が普段手加減の意味も込めて持っている『盃』が。

「…確かに」

さとりも納得した。

普段の彼女ではあり得ない行動だ。

喧嘩と同等に好物である酒を飲み干さずに捨て置くなど…。それだけでも勇儀の身に起きている異常が見て取れる

「あまり逃げ回られると面倒なんでね。大人しく捕まるなら苦しまずに済むよ」

「こっちだつてマジもんの鬼ごっこに身を投じる気はないわ。今の貴

「女は危険なもの」

「パルスイさん、何とか勇儀さんの相手を頼みます。私はあの男を。」  
「出来るだけ早くね。私が殺される前に…!」

額から一筋の汗を流し、パルスイは表情を強張らせたまま一步前へ出た。

今まで敵対したことがなかったせい、いつもより勇儀の姿が大きく見えた

「ほっほっほ、畏縮しているのが見て取れますねえ。それでは長く持たないでしょう」

「貴方の相手はこっちです」

言葉と同時に複数のレーザーが放たれた。

勿論弾幕ごっこレベルではなく、本気の出力で。

対して、ダンタリオンは手元の本を開き、文字の羅列を指先でなぞった。するとレーザーは忽ち指向性を失ったようにあらぬ方向へ飛んでいく

「ええ、ええ、勿論ですとも。貴女は私の手で葬らなければ戦果になりませんからなあ」

「戦果？そんなものが設けられていると？」

『各拠点の長を潰せ』。これが我々天使軍に命ぜられた任務でしてねえ。私自ら貴女を選ばせて頂きました。何せ似通った能力をお持ちなんだ、ぜひ試してみたいではありませんか？」

「…は？」

にちっ、と不気味に吊り上がった口角を隠そうともせず、ダンタリオンは舌舐めずりをして言う

「嗚呼、早く貴女が身も心もズタボロになる様を拝みたいですねえ」

「……………控えめに言って、超キモいです」

本当に冗談抜きで、その拳を掠めただけの家屋が音を立てて崩壊した。

技術云々より力任せに振るわれる手足は、皮膚の周囲に鏝でも纏っているのかのように、軌道上の物体を破壊していく

「なんだパルスィ、逃げてるだけかい？」

「ええ、その通りよ」

常に勇儀との距離を開きながら立ち回るパルスィは、既に旧都の入口付近まで移動していた。

彼女が普段、地底の番人として立つ橋へ。

「追いかけてここは終わりかい？」

「ええ。ここなら別に暴れてもいいわ」

「態々此処へ移動したってことは、橋姫として戦ってくれるってことか」

「私が橋姫であることと、この橋で戦うことは関係ないわ。たださっきいた場所の近くには行き付けの酒屋があったってだけ」

長く、横幅のある橋の中心に立ち、勇儀は周囲に視線を移しつつ、

「理由はそれだけか？」

眩かれた言葉に反応するように、橋の裏側から吹き出したものがあつた。

その白い繊維の集合体は同質量で鋼鉄をも凌駕する強度を持ち、鋼鉄にはない柔軟性をも併せ持つ最も優れた糸。

「あれ？敵が来るからって聞いてたのになんで勇儀が？」

糸と同じく橋の裏側から現れた土蜘蛛の少女、黒谷 ヤマメは、今まさに糸によって緊縛された勇儀を見て首を傾げた

「私も現場に行つて吃驚よ。彼女、子分の鬼達をフルボッコにしてるんだもの」

「え、ちよつと待つて。勇儀を縛っちゃつたのは事故じゃなくて、正解だつたてこと？」

目をパチクリさせるヤマメへ、パルスィは面倒くさそうに囁いた

「地霊殿の主が言うには洗脳を受けてるらしいわ。今の彼女からすれば敵の親玉が主人で、私達はそれに仇なす敵つてこと」

「うっそ……、よりによつて一番厄介なのを取られたか。……敵も頭良いね」

「親玉の方は覚妖怪が相手してるわ。そいつを倒して洗脳が解けるまで鬼さんを足止めしておくのが私達の仕事」

「とんだ貧乏クジじゃないか！あの勇儀相手に長期戦は御免だよ!？」

視線の先で絡みついた糸を力尽くで引き千切る鬼を見たヤマメは、思わず顔を強張らせた。

「あまり手間取らせるな。大人しくしてればすぐに済む」

「！、ヤマメっ……」

パルスィは自身の発した言葉よりも早く、傍に立つヤマメを突き飛ばした。

直後に眼前を通過した鬼の腕は、間近にいた二人の少女の身体を吹き飛ばす程の凄まじい衝撃波を生んだ

「！」

二人が体勢を立て直すよりも速く、ヤマメに急接近した勇儀は拳を振り上げる

「ッああ!!」

ヤマメは受け身すら不完全なまま、闇雲に糸を放った。だが半ば取り乱しながらの抵抗であった為か、勇儀は不規則に動く糸を躲し切れず、反射的に顔を庇ったことにより拳の動きを止めてしまう

「ちっ…！」

一拍遅れて拳は空を切った。

直後にその背中へ弾幕が着弾し、爆音が耳を叩いた

「……鬱陶しいねえ！」

煙を払い、苛立ちを隠さず後方で掌を向けるパルスィを睨み付け、叫ぶ。

…と 同時に、この程度の事で怒りを露わにする自分自身に違和感を覚えた

「……『煽った』な？パルスィ」

自分より優れている相手に悪意を抱き、憎らしく思う、又は劣等感を抱く。

思い通りにならないもどかしさ、怒りや無力感、嫌悪感といった負の感情を引っ括め、人は『嫉妬』と呼ぶ

それは橋姫である彼女が忌み嫌われ、地底深くまで潜る要因となった『嫉妬心を操る』能力。



「あら、妬ましいかしら？勇儀」

嫉妬と言う感情が増幅すればする程、彼女は力を得る反面、戦闘という場面では相手の攻撃性をも煽ることになる

「わかっているのか？その分私の手心も消えるってことだ。力を得る前に肉塊に変わっても知らないよ」

「何を今更。貴女が盃を置いてる時点でそんなもの無いに等しいじゃない」

「……言つとくが、私は怒りに任せて集中を乱したりしない。ただムカつてる分、執拗に殴りつけるかも知れないけどね」

瞬間、勇儀の身体は爆発的な脚力によって砲弾のように射出され、衝撃で舞い上がった橋の木屑が再び地に着くよりも早く、パルスィの前に躍り出た

(……まあ、勝てないわよね)

本来パルスィの持つ能力は、人間か力の弱い妖怪に対して行使する。嫉妬と言う概念を感じるのは、基本的に自分より優れている相手に対してだからだ。

この場合、格上である勇儀の感情を煽ったところで、対した嫉妬心は生まれない。寧ろ逆だ

(『妬ましい』)

パルスィは自信が嫉妬を抱いたとしても、力に変換することができ

る。ここまで圧倒的な戦闘力を見せつけられれば、否が応でも抱かずにはいられない

……だが、

(……貴女が本心から、洗脳とか関係無しに私達を裏切って敵に寝返っていたなら、そう思っていたでしょうね)

その瞬間にパルスイは失敗していた

星熊 勇儀と言う鬼を、旧都創設以来の昔馴染みを、唯の酒飲み仲間を……。

彼女は心の底から憎むことができなかつた

更に、当初の手筈ではこうして正面から対峙することは計画になかつた。

接近されればそれで終い。

パルスイとて名高い大妖怪ではあるが、目の前の鬼は更に別格な、日本三大妖怪にも数えられる種族の頭だ。

例え万全な状態で迎え撃つたとしても、一瞬で殺される

それだけ戦力差の開いた相手に対し、戦うと言う意思を行動に反映してしまつた時点で、彼女達は失敗していた

ポツツ!! と、拳によつて押し出された空気が破裂した風船のように爆ぜる。

パルスイは寸でのところで、上体を後方へ倒し、半ば倒れこむ形で打ち出された拳を躲した。

同時に、至近距離で炸裂した空気の爆弾によつて、全身を強く打ち付けたような衝撃が襲う

「つづ……勇儀……。」

視界の先で、新たに拳が振り上げられ、昆虫のように冷たい眼球と目が合った

「じゃあな、パルスイ」

ハンマーのように打ち下ろされた拳は、容赦なく少女の額へ落ちてきた

「ぎ・せ・る・かあぁッ!!」

叫び声と同時に傍らの欄干へ勢いよく何かがつ込み、ぐしやりと鈍い音が鳴った

脳天へ向かうはずだった拳は直前で止まり、パルスイはぎごちなくその方向へ首を動かした

「ヤマ…メ…?」

そこには衝撃でへし折れた鉄製の欄干の端で、ぐったりと倒れ伏すヤマメの姿と、彼女から伸びる数多の束ねられた糸が、今しがた振り下ろされた勇儀の手首に巻きついていていた

「たった一発の拳を止めるにしちゃあ、ちと身体張りすぎたね、ヤマメ」

手首に食い込み、僅かに赤く染まった糸を引き千切りながら、勇儀は冷めた声色で吐き捨てる。そして同じく冷ややかな瞳はそのままパルスイへ向けられた

その掌が、乱雑に彼女の胸倉を引き寄せる

「随分抵抗が無いな…、まだ何か企んでるのかい？今度は誰が出てくる？」

此処の悪霊共か？さとり所の所のペットか？でもどれだけ連れて来ようが無駄さ。視界に入った奴は皆殺しって言われてるんでね」

「……わよ」

消え入りそうな声が漏れる

「……なんだって？」

弱々しく伸びた指先が、とある一点を指す

「……涙、出てるわよ？」

「……あ？」

指摘されて初めて気が付いたのか、当の本人は不思議そうに頬をなぞる

一筋の雫が、鬼の頬から落ちていった

――

それは幻影と言えば聞こえはいいが、今さどりの眼前で起こっていることは紛れもなく現実だった

「お燐…、お空…」

開戦と同時に駆け付け、今の今まで主人と共に戦っていたペット二人が、その敵意を自分に向けている

火焰猫 燐は周囲に展開させた『妖怪に取り憑かせることで死に追いやる』怨霊を指向し、

霊鳥路 空は右腕に構えた制御棒の砲口に多大なエネルギーを充電し始めた

「中々面白いペットをお持ちのようで。お陰様で良い勢力となってくれそうです」

虚ろな瞳を向ける少女二人の後方で、不敵に笑うダンダリオンの体には埃一つ付いていない。

それどころか、当初の位置から一步も動いていなかった

対して、肩で息をするさとりは蔑んだ瞳を向け、第三の目を開眼させる

瞬間、周囲を眩い光が放射状に奔った。

やがて光は形を成し、何もない空間から目の前の少女達と瓜二つの分身を作り出す

さとりは間髪入れずに攻撃に移った

『『アビスノヴァ』、『死灰復燃』』

本来はチャージに時間を有するエネルギー波を一瞬で放ち、連発すれば即座に燃料切れを起こす核エネルギーを再び復活させる

この組み合わせは目の前の少女達が独自に編み出した連携技であるが、主人であるさとりは彼女等の頭の中からその記憶を読み取り、再現してみせた

核エネルギーをチャージ無しで放てたのも、技のイメージを再現したためである

「ほお、ペットと言えどお構いなしですか。いや、寧ろ所詮はペットだからこそ？」

「……」

さとりは答えない。

幾重にも連なる破壊の波は、少女等二人を巻き込む形で押し寄せた

ズアツツ!!! と、最初の一波が容赦なく少女等を薙ぎ払い、ダンダリオンの遙か後方へ吹き飛ばした  
だがそれだけ。

立て続けに押し寄せていた残りの波は忽然と消える

「!？」

「主人に牙を剥いたペットに仕置きをするのは当然です。……しかし、」

漸く口を開いたさとりは普段の落ち着いた物腰とは違う、明確な怒を含んだ声色のまま続ける

「私の大切な『家族』を誑かした下郎に、加える手心などありません！」

再び、消失していた破壊の波がダンダリオンを囲むように出現した

(事前に調べた情報では、地霊殿の主は相手の記憶から心的外傷等を呼び覚ますことができるとあった。つまり、私が一度攻撃と認識した先程のエネルギー波を……！)

にちりつ と、湿った音と共にダンダリオンの口角が上り上がった

「いいですねえ……早く、貴女の心を壊したああい」

この瞬間、旧都の一角は轟音と凄まじい衝撃波によって、跡形もなく吹き飛んだ

~~~~~

「あれー？鬼のお姉さん、どうしたの？」

その声は何の前触れもなくその場に響いた

「ここらちビ助、迂闊に近付いたら危ないぞー？」

声はもう一つ。

今度のは明確に後方から聞こえてきた。酔っているのか若干間延びした声色だ

「どっちかって言うて貴女の方が小さくない？」

「お？なんならこの場の誰よりもでっかくなつてやろうか」

勇儀はその声に覚えがあった。

かつては妖怪の山のパワーバランスを担っていた、鬼の四天王の一人。

「それで？ちよつと目を離れた隙に随分暴君になつちまったもんだね。歳食えば丸くなるつて定説の逆をいったか」

「……萃香」

頭部から伸びる鹿のように捻れた二本の角と、腰から垂らした三つの分銅が特徴的な、見た目幼い鬼がそこにいた

「まあお前のことだ。何か理由があるんだろうけど」

萃香はフラフラと覚束ない足並みを止め、今の今まで口へ運んでいた瓢の栓を閉めて言い放つ

「ここは友として止めなきやだなー！」

小さな体軀を思わせぬ闘気を放ち、百鬼夜行は対峙する

153話 心理と真理 (後編)

水橋 パルスィは傷付いた土蜘蛛の少女を抱え、橋の袂で立ち往生していた。

何故態々、大橋の真ん中にいた彼女が其処へ移動したのかは言葉に出すまでもなく、火を見るよりも明らかだった

もう何度目かになる轟音が耳を叩く

完全に崩壊した大橋の木片が未だ宙を舞う中、高速で動く二つの影は、消え失せた足場など御構い無しに、谷底と空中で縦横無尽に衝突し合う

互いに手加減の表明である酒を置き、轟音が伴う拳は一振り直線にあるものを破壊する

「萃香、拳から血が滲んでるぞ。まあ、嘗てから『力の勇儀』と称されている私と正面から殴り合ってるんだ。『非力』なお前じゃ些か分が悪いか？」

「へっ、なら同じ鬼として言わせてもらおうよ、この馬鹿力!!」

赤く染まった手の甲を拭い、改めて拳を握り直した萃香は一度身を屈めて大振り飛んできた勇儀の拳を躲す。

そうしてできた隙だが、今の今までは力不足により、大したカウンターを入れることができずにいた

……飽くまで地力による衝突なら、その二つ名が示す通り勇儀に軍配が上がるからだ

「いやなに、私も鬼として力には力でぶつかつたときたかっただけさ」

ここで、萃香は握り込んだ拳を突き出した。

その瞬間、両者の間に熱気にも似た高温の空気が漂い、それに勘付

いた勇儀は思わず腕を突き出して防衛姿勢を取る

ボゴツツ!! と、挟み込まれた腕へ、高密度のエネルギーを纏った拳が突き刺さった。

地面へ着いていたはずの足が離れ、踏ん張る間も無く勇儀の身体は百メートル程後方へ吹き飛ばされる

「つつづーそうだな、そうだったよ。お前にはそれがあるよな」

じんわりと腕に広がる痛みと痺れを振り払い、勇儀は視線を上へと向ける

そこには直径五十メートルは下らない球体を持ち上げる萃香の姿があった。

よく見れば所々凹凸のあるそれは、周囲の鉱物が集まってできた岩塊だ

まるで磁力によって引き付けられた砂鉄のように結集した岩塊は、外側から凄まじい圧力を受け、当初の半分程の大きさに留まった

「もう分かっているとと思うけど、こいつはこの世のどんな鉱物よりも堅牢に押し固めてある。逃げたきや逃げていいよ。こんなもん叩いちまったら拳も無事じゃ済まないだろうし、ねッ!!」

言い終わりと同時に投げられた岩塊は、勇儀の頭上へ巨大な影を作りながら迫った。

一見安い挑発に聞こえるその言葉も、鬼が相手なら時として十分に効果を発揮する

案の定、勇儀は避けなかった

「……萃香お前それ、誰に向かって言ってるんだい？」

彼女は構えない。見向きもしない。

唯、迫る岩塊に合わせて、力の鬼は拳を突き出した

ゴツツツ!!! と、まるで鋼鉄同士がぶつかり合ったかのような、轟音が響く

瞬間、岩塊は衝突した場所から扇状に亀裂が入り、砕き割れた。つまりそれは、単純な物理的破壊力によって成されたことを意味する

「……『語られる怪力乱神』か。相変わらず出鱈目だね」

出血どころか、擦り傷一つない拳を目の当たりにして、萃香は今一度息を飲むと、静かに手を翳す

「まっ、碎かれるのは想定済みってね」

砕け散った岩は一度砂となり、再び一つの塊を形成するように密集し始める。近場にいた勇儀を軸にして、その四肢に纏わりついた

「四肢は潰させてもらおうよ」

萃香が掌を握り締めたの同時に、殺到した砂の密度が飛躍的に上昇…、覆っていた手足を圧碎するプレス機となった

「はっ！緩いよ。これじゃあ按摩にもなりやあしない」

ギチギチと締め上げる砂の圧力を跳ね返すように、勇儀は身体中に力を込めて抗う。

笑みすら溢れるその表情からは余裕すら感じられた

「……ありや？」

「つあああツツ!!」

短い咆哮と同時に、纏わり付いていた砂は爆散した。

荒々しく息を吐き、周囲を闘気の渦で震撼させる勇儀の姿は、正しく鬼と言う種族の伝承と一致する

「……………楽しいか？勇儀」

「ああ？何を言ってるんだい萃香」

軽く地面を拳で触れた勇儀の姿は、次の瞬間、爆発的な脚力をもつて萃香の眼前に現れた。

一拍遅れて、踏み付けた地盤が丸ごとひっくり返る程の衝撃が、地底全体を揺らす

「楽しいに決まってるじゃないかツツ!!」

言葉が切れぬ内から振り下ろされた破壊の拳へ合わせるように、高温・高密度の拳が衝突する

「そいつは良かったツツ!!」

正面からぶつかり合った拳圧は衝撃波となり、辺り一帯を大きく薙ぎ払った

——

凄まじい爆風によって埋め尽くされた旧都は、再び静寂に戻りつつあった。尤も、今ここで起きた核爆発については、古明地さとりが再現した幻覚のようなもの。術中にはまった対象者に被害があっても、周囲の建造物等には何ら影響はない

「ほっほっほ。人の記憶から技を再現する瞳術に加え、先程のペット

二匹の洗脳を相殺しましたか。仕置きと言つてもやはり可愛いがつていた犬鳥は大切ですか？」

何事もなくその場に立つ天使軍指揮官の一人、ダンタリオンはにんまりと呟いた

「…」

傷を負った形跡すら見えないその身体を一見し、さとりは怪訝な表情のまま分析する

（先の攻撃は脳に直接技のイメージと威力を送り込むことで作用する幻覚。例え視覚などの情報を遮断しても、ちゃんとダメージとして通る筈、なんだけど……。やはり読心が通じないのと同じ、何らかの方法で相殺されている？）

「おや、思考を凝らしてますねえ。なに簡単なことですよ」

ダンタリオンは人差し指を立て、自身の顛顛付近を軽く叩いた

「貴女と同系である私の能力は、貴女の能力を大きく上回っている。……所謂上位互換、と言ったところででしょうか？」

「解せませんね。仮にそうだとしても私の能力が効かない理由になるかと。」

「貴女は普段、対象の表層意識を読み取り、それを能力の主としている。表層意識とは心の中で常にさらけ出している剥き出しの記憶のようなもの。言うなれば、読心術入門編です。心を読む能力意外にも、知識と話術に長けた者ならある程度の思惑を読み取ることができ」

表面化している意識、自身が最も理解している意識だからこそ、逆

に蓋をして遮断することも容易い、と言いたいのか。

未だ疑問が残るさとり構わず、ダンタリオンは続ける

「私が操るはその更に奥、『深層意識』と言うもの。仮に、表層意識を氷山の一角と例えるなら、深層意識とはその大半を占める隠れた意識。自分自身でも自覚の薄い、その者自身が本当に感じている心理なのです！」

「だからそれが何だと…。」

「貴女は心の奥底で私を恐れている」

「！」

被せるように呟かれた言葉に、さとりは一度押し黙った。

疑問は更に深まり、無表情だったその顔に困惑の色が見える

「貴女にとって！正体も！力量も未知数な私はその第三の目ひともにどう映っていますか!?不安はやがて恐怖を呼び、恐怖は次第に形となり、知らず識らずの内に貴女自身の能力を鈍らせるのですう!!」

狂った様に頭を振り回し、引き裂けそうなほど吊り上がった口角は、悍ましい笑みを強調させていた。

その仕草一つ一つが、さとりには言いようの無い不信感を抱かせる

(落ち着いた物腰かと思いきや、途端に狂人じみた仕草をする。この男の意図が掴めない…!)

負のイメージを振り払い、再び正面を見据えたさとりの眼前に飛び込んできたのはダンタリオンではない巨大なナニかだった

「二度取り付いた恐怖を振り払うことなど不可能です」

声は何処から聞こえてきたのか…。ドス黒い影の様な体表に覆わ

れた其れは姿勢を落として四つん這いになり、その全貌が露わになる異様に手足が長くて細い、人の形をした巨人だった。その頭部と思われる部位には、顔の7割を占める単眼と、余りにも不釣り合いな小さい口が付いている。

胴は細長く、腹部が異様に膨らんだ奇怪な出で立ちをした巨人だ

「なに…、これは…!?!」

さとりは無意識に第三の瞳を向けていた。

…と、同時に流れ込んでくるイメージに、視界が大きくぶれる。

我慢出来ず片膝をついたその身体を、凄まじい悪寒と嫌悪感が駆け巡った

「うっ、ぐ…!?!」

鳥肌が立つレベルではない。最大級のトラウマをほじくられたような感覚に、さとりは頭を抱えて悶えた

「深層意識で捉えた恐怖を何倍、何十倍にも増長させていただきました。これで貴女の心は私の手の内。このまま粉々に砕くことも容易いですよ?」

(これが恐怖…? 私は目の前の化物を恐れているとっ?!)

「しかし、まだ持ち堪えているところを見ると、貴女にはあの鬼族と違って些か耐性があるようですねえ」

「……………勇儀さんに何を…!?!」

ガクガクと震える身体を抑え付け、少女は必死に声を絞り出した

「……………まだ喋れますか、しかしそれも時間の問題。数分後には心が崩壊し、唯呼吸をするだけの人形へと変貌する貴女に私も少しばかり情

が湧きました。…良いでしょう」

「…」

「深層意識とは本能と強く結びついている。つまり、その者が本当に求めているものもまた、深層の中に潜んでいるのです。私は能力でそこに刺激を加え、増長させることができます。そしてその者は崇拜するのです。自分の欲望を理解し、与えてくれる私を。本能的な服従とも呼べます」

それはカルトチックな宗教団体等が、信者に施しているマインドコントロールに近いが、この場合は元々ある思想へ、新たに上書きすることでその者の人格すらも変えてしまう心理術である

対して、今回の事例は……

(…ちよつと待つて！求めているものを増長つてことは…ツ!?)

我に返ったさとりは先程仕置きをしたペツトかぞく二人と、旧都で暴れ回っていた星熊 勇儀の真意を思い浮かべ、青ざめた

「おや、気付いたようですねえ。……貴女は普段から彼女等の心の内を理解しているようで理解出来ていなかったのです。その深層に！明確な敵意を抱かれていたことを!!」

高らかに笑い、勝ち誇ったように言い放ったダンタリオンを前にして、さとの心は大きく揺れていた。

この一瞬で、今までの記憶を何度辿ったかわからない
いつの間にそのような感情を抱かれていた？

今まで自分に見せた笑顔は嘘だったのか？

皆、表では笑顔を振りまき、ずつと共通の怨敵として自分を見ていたのか？

何時しかさとりは頭を抱え、膝を着いてへたり込んでいた

だが、次に少女が口にした言葉は、

「なんちやって☆」

「……………はっ？」

淡泊でいて、少しばかりの茶目つ気のもりか舌を出して顔を上げた少女の前に、ダンタリオンは大口を上げた笑顔のまま固まった。

少女は膝についた土を払いながら立ち上がると、何事もなかったかのような涼しい表情で呟いた

「その笑顔、控えめを通り越して超キモいです」

「なっ!？」

少なからずショックを受けたのか、一步後退ったダンタリオンは、わなわなと肩を震わせて言う

「その程度の事など自分には然したる障害にはならない、と？ず、随分冷酷なんですねえ」

「……そうやって口にする時点で、貴方が先程語っていた能力は嘘である」と証明できますね」

「!？」

さとりはその反応を楽しむように続ける

「確かに深層意識は私の能力も届かない未知の部分。洗脳はもとより、意識を読むことすらできません。でも、だからと言ってその事について全く理解がないというわけではない」

「…、」

「貴方は言いましたね？相手の深層意識が読めると。深層意識は表面

化している意識と違って、嘘で隠すことが出来ない。其れなのに貴方は私の心が折れたと思つたのでしよう？ 表層意識を100パーセント嘘で塗り固めた私の演技を見破れず、散々声高らかに勝利宣言を決め込んでいたのだから。深層意識なんてものが読めるなら、私が本当に壊れてしまったかどうかなんて一目瞭然の筈なのに」

「……解せませんね。例えそうだったとしても、先程貴女を襲つた恐怖心は本物だった筈だ。初めに攻撃を無効化したのだから……」

「つまり『深層意識を弄る』、と言つた点に於いては事実だと？」

「！」

「まあ、私の読心術や幻覚攻撃が効かなかつた理由は別にあるのでしよう。例えば先程から手にしているだけで大して使用されていないように見えるその『本』とか」

「……………」

額から汗が伝い、しかし、全てを見透かしているかのような凜とした瞳を向ける少女に、ダンタリオンは小さく舌打ちをすると、徐に持っている分厚い本を開いた

「……………もう少しで、貴女の能力を奪えたんですがねえ」

(開いた途端魔力が……？あれは、魔道書ツ!?)

異変に気付いたさとりは、前方のダンタリオン……の側方に向けて
叫ぶ

「そこから離れなさい！こいしツ!!」

くくく

旧都の一角で、小規模な爆発と閃光が奔る少し前。地形が爆散してひっくり返るほどの嵐は止んでいた

この場で戦闘していた二つの鬼。しかし、その勝敗が決した訳ではない。

一振りで大地を震撼させる剛腕も、熱を帯びた高密度の拳撃すらも、嘗ての鬼族最強を争っていた両者に膝を付けさせるには至らなかった

一方が口を開く

「しづといね、いい加減倒れなよ」

一方は笑って返す

「ははっ、お互い様だよ」

血の伝う口元を拭い、星熊 勇儀は拳を固く握り込むと、後ろに体重を掛けて振りかぶった。

戦闘においては致命的とも言える、大きな隙。

しかし、対峙する伊吹 萃香は狙わない。理由を問われれば、彼女は一言で一蹴するだろう

「――『無粋』だ、と。」

彼女もまた、構えを崩して拳を後方へ引いた。

ぐるぐると肩を回し、やがて腰上で拳を止め、徐に片側の掌を翳す

直後、

ズンツツ!!! と、地底全体が音を立てて沈み込んだ

正確には、体感的にそう感じた

「づっ!?」

数百メートル後方で様子を見守っていたパルスィは、思わず表情を歪ませて倒れ込んだ。

頭上から押し寄せる凄まじい重圧は、目先の鬼二人から発せられているのか。

それとも彼女等が発する妖力に、地底全体が悲鳴を上げているのかは定かではない

「いいのか? 此処が壊れるよ」

「じゃあ止めるってか? 冗談じゃない! 喧嘩こいつもいよいよ大詰め、今の私はとつくに籠が外れてんだよ!!」

「……はあーあ、我ながら鬼っていう種族は難儀なもんだ。高鳴りが最高潮に達してるのは私も同じだったのにねえ!!」

高密度のまま掌握された二つの妖力は、両者を中心に空間を歪め始める。

周囲を飛び交う砂塵が、そうして視覚化された空気の渦となって岩肌や地面を削り取っていく

(さて、これで正気に戻ってくれば良いんだけど。……戦闘衝動せんとうしょうどうから!)

最中、萃香の耳に僅かに入った言葉

「悪いね、萃香」

既に平地と成り果てたその空間で、勇儀は一步踏み出した。対峙する萃香も、ほぼ同タイミングで踏み込む

「……ああ」

二歩目。

踏み込んだ地面が波紋状に砕き割れ、通過した空間に烈風が吹き荒れる。

破裂しそうな程肥大していた妖力の塊が、拳へ圧縮されるように縮まった

——『 四 天 王 奥 義 』

両者の三歩目。

数メートルの至近距離に迫った両者の間で、水蒸気爆発が如く円形に拡散する衝撃波が巻き起こった

『 三 歩 必 殺 』!!!

『 三 歩 壊 廃 』!!!

発生した余りの高熱に、周囲に転がっていた岩山の残骸が融解する
今度こそ、地底の一角は音を立てて崩壊した

くくく

ダンタリオンの開いた魔道書から飛び出した火炎が、旧都の家屋を
炎上させたのは一瞬前のことだった。

空を自在に泳ぐ影は、炎によって身体を形成された、四つ脚で立つ
西洋の竜^{ドラゴン}。

一匹だけではない。炎の他に、水・雷・毒を纏った計四匹の竜が、旧
都上空を飛び回っている

「これは私のお気に入りですねえ。魔界の四大精霊を捕獲して、竜
を触媒に術式化したものなんです」

ダンタリオンは得意げに嘲笑したかと思えば突然真顔に戻り、とある疑問を口にする

「そう言えば、先程貴女、誰かの名前を呼んでいたようですが？可笑しいですねえ？気配なんて微塵もなかったのに」

「……」

さとりは黙ったまま、横目で旧都を飛び回る竜を目で追っていた。恐らく、術式として召喚された竜ということは、無生物のカテゴリーに入るのだろう。

となれば、トリガーである心も、記憶も有していないあの竜等には彼女の能力が通じない

（このままでは旧都が……。幸いまだ戦える鬼達が子供やお年寄りを匿ってはいるけど、長くは保たない……！）

「無視、ですか？」

声がすぐ近くから聞こえ、ハッと前に向き直ったさとりは、髪を乱暴に掴み上げられ宙吊りになる

「……」

「私の質問に答えなさい。まだこの近くに仲間がいますね？上手く隠れているようですが、炙り出されるのは時間の問題です。身を焼かれ、切り裂かれ、猛毒に侵された無惨な亡骸を見たくなければ早々に呼んでいただけますか？」

（……！）

さとりは宙吊りのまま徐にその方を指し、

「既にいるわ」

その言葉にやや被せるタイミングで、ダンタリオンの側方からハート型の弾幕が殺到した

「!？」

目標へ吸い込まれるように、次々と着弾していく弾幕だが、直前に挟み込まれた念の壁によって阻まれていた。

即座に距離を取ったダンタリオンは、その方向を見据えて叫ぶ

「姑息な！誰です、隠れてないで出てきなさい！」

応答があつた

「それ、貴方が言う？」

その少女は其処にいた。

付近の建物の陰に隠れていたわけでも、地中から浮かび上がってきたわけでもなく、始めから其処に立っていた

「ごめんねこいし。出来るだけ貴女の内容は悟られないようにしたかったのに」

「ううん、平気！」

詫言を述べるため隣に並んだ姉へ、古明地 こいしはある方向へ意識を向けて耳打ちする

「……鬼のお姉ちゃんの洗脳は解いてきたよ。唯ちよつと厄介なことになっちゃったけど、萃香ちゃんがなんとかしてくるって」

「…えっ、どういこと!？」

「えーつとね……」

指先で頭を叩いて事情を話そうとするこいしの頭上へ、縦軸上に走る鋭い影があった。

逸早く視界にとらえたさとりは、半ば体当たりをするように妹の身体を抱えて横へ跳んだ

ズバアツツ!!! と、影の軌道上にあった家屋が両断される。

次に彼女らに降り注いだのは、重力に従い落ちてきた水飛沫だった……つまり今のは、

「水と言えど侮るなかれ。超高压で噴出された水は刃となって金剛石すらも斬り裂くことができるのですよ」

笑いながら、しかし次の瞬間には表情から笑みを消した状態で淡々と呟かれた

「二度目の無視は流石に傷付きますねえ。貴女がどこにいたかは分かりませんが、姿を現した時点で……」

「どこに？ ずっといたよ」

男の言葉を遮って少女は言い放った

「……は？」

「そうね、この場で気付いていたのは私くらいかしら」
「は？」

理解できないと言った風に仰々しく首を傾げる男の姿は、傍から見れば不気味の一言に尽きるだろう

ダンタリオンの額に、僅かな青筋が浮かび上がる

「貴女方は先程から……、私を馬鹿にしているのですか？」

「いいえ微塵も。だって貴方がこの子の存在に気付かなかったのは仕方
方の無いことだもの」

「……、」

ビキリッ と、男の額にくつきり青筋が浮かび上がる

だがさとり本人は挑発したつもりはなかった。

気付けなかったと言う言葉も、事実そのままを示している

『無意識を操る』こいしにとって、例えそれが唯の散歩だとしても、周
りは彼女に気付かない。

目の前を横切ろうが、至近距離に立たれようが、無意識の中にいる
彼女を認識することは困難である。

彼女を認識するには、本人から話し掛けられるか、物理的干渉に
よって、彼女の存在を意識下に置くしかない

それは姉と同じ種族でありながら、第三の瞳を閉ざし、覚妖怪とし
ての能力を捨て、新たに開花した能力ちからだった

わなわなと肩を震わす男の表情は、先程とは打って変わって怒の感
情が滲み出していた

「貴女達、どこまで私を馬鹿にするば気が済むのですか？そうですか
そうですか。わかりました。では！何よりもまず先に！貴女方を無
惨な死体に変えてあげましょう!!」

ダンタリオンの頭部が邪気を孕んだ禍々しい靄によって包まれる。
次に現れたのは髑髏状の仮面で、以前地底を襲撃してきた化物達の
頭部と形状が似通っていた

「最早慈悲はなし！慈悲はなし!!」

男は叫び、魔道書の開かれたページへ勢い良く掌を叩き付けた。
その瞬間魔道書が光を帯び、連動して宙を漂う竜達の矛先が一斉に
さとりとこいしへ向けられる

「あひゃひゃひゃひゃひゃあああ!!焦げて!裂かれて!血反吐を撒き
散らせて死ねええい!!」

奇怪な笑い声を上げ、即座に障壁で身の安全を確保したダンタリオ
ンは間近で叫んだ。

さとり額の汗が伝う。

能力が効かない以上、自分には対抗手段がなく、こいしの能力もそ
のまま攻撃力には加算できない

「っ…こいし!逃げ…」

決断した少女が妹に向かってそう叫び掛けた瞬間、事態は一変する

ゴバアアアツツ!!! と、炎龍の半身が凄まじい風圧を受けて消し飛
んだ

「ちっ、再生するか。なら…」

身体を修復しようと四散した炎を集束し始めた炎龍の身体へ、一拍
おいた集中砲火が炸裂する

ドドドドドドドドドドドドドドドドドツツツ!!! と、まるでマシンガ
ンの速度で大砲が発射されるような轟音が耳を叩く

時間にして数秒。

再び静寂に包まれた頃には、炎龍の姿は跡形もなく消失していた

「あつ、一匹仕留めた。何だ、竜つてのは呆気ないね」

さとり達がいる旧都とは正反対に位置する、出入り口付近の丘の上。

幼さの残る声色でそう吐き捨てた二本角の鬼は、拳を打ち終え余韻に浸る一本角の鬼の隣へと並ぶと、残る三匹の竜を無視してその奥を睨みつけた

「あれが親玉か？つて、ちよつとちよつと勇儀、あんなのを主人と呼んでたのかい?!無いわー」

「う、煩いな！気が付いたらお前と戦つてて、その辺の記憶は曖昧なんだよ!!」

頭をガシガシと搔き上げ、深いため息を吐いた勇儀は小さく漏らす

「……でもまあ、私が旧都の仲間達に手を挙げたのも事実だ。頭として、この落とし前はきっちりつける。彼奴を倒した後でねッツ!!」

勇儀の怒りに呼応し、身体から漏れ出た闘気は赤い蒸気のように立ち昇っていく。

ミシリつと言う鈍い音が鳴る程握り込まれた拳を見て、萃香も同様に怒りを露わにした

「私も、あんな貧弱な奴に友を弄ばれたと思うだけで、こんなにも怒りが湧いてくるとはね」

鬼が、明確な『怒』を剥き出しにした瞬間だった

「あの蜥蜴が邪魔だね」

「ああ」

ドンツツツツツ!!! と、砲弾の様に射出された二人の身体は、一足飛びで旧都の半分まで達した

勇儀には雷竜、萃香には毒竜がそれぞれ立ち塞がったが、

「邪魔だああああああああ!!!」

勇儀から発せられたのは、力任せに発せられた唯の咆哮。

その声は音の爆弾となり、凄まじい衝撃波となつて雷竜の身体を一瞬で爆散させた

「鬼の住処に汚物を撒き散らすな」

萃香が軽く拳を握ると、毒竜は毒の息を吐く間もなく、マイクロサイズ以下にまで圧搾され、塵と化した

二人同時に其々家屋の屋根へと着地後、新たな力を持って蹴り付け、再び空へ。

当然家屋が衝撃に耐えられる筈もなく、一瞬遅れて倒壊した

「な、なん…っ!?!」

時間にして数秒。

最初の地点からさとり達の位置までノンストップで（竜との衝突があつたにも関わらず）跳んできた二人の鬼は、地面を踏み碎きながら着地した。

その光景は、目の当たりにしたダンタリオンが思わず立ち尽くすほど

「随分好き放題やってくれたな。覚悟は出来てるだろうねえ？」
「言つとくけど今更謝罪なんてつまらない真似するなよ？こっちはそんなもんじゃ気は治らないから」

「ぐっ、水竜!!」

その余りの圧力にたじろぎながらも、ダンタリオンは魔道書へ掌を翳して叫んだ。

同時に、魔力を供給された水竜の身体は倍の大きさに膨れ上がっていく

「調子に乗らないで頂きたいですねえ鬼風情が!!幾ら馬鹿力とてこの攻撃は防げませんよ!!」

絵に描いたようなテンプレ台詞だが、事実、五ツ頭に変化した水竜は、其々の口から超高压の水のレーザーを発射できる。

そう…、高压の。

「河童から聞いた話だが、水つてのは二つの気体の集合体らしいねえ。……どれ」

発射された五本のレーザーに対し、小さな掌が翳される
それだけで。

「……………はっ?」

それだけで五本の水の刃は出力を落とし、やがては霧散してしま

う。
更に分解の能力ちからは水竜自身にも及び、数秒後にはその身体を保てず
四散した

「ば、馬鹿な…!?!」

仮面越しからでもわかる、焦燥が伺える声色。
その眼前へ、怪力乱神は容赦なく踏み入った

「情けない」

心底苛立ったように

「洗脳とか蜥蜴とか…、ちったあお前自身で向かってこれないのかい
?」
「!」

ぎりぎりぎりぎりぎりぎり…:ツ!!

ダンタリオンの奥歯が砕けそうな勢いで軋る

「舐めるのも大概になさい…!!」

そのまま魔道書のとあるページを鷲掴み、引き千切りながら頭上へ
放った

宙を舞う紙切れが闇に包まれる。

空間が歪み、巨大な綻びが生じたことよって開いた穴から、先程
の竜より五倍はあろう漆黒の竜が姿を現した

「大口もここまではです！この竜は魔力・妖力・霊力、そして神力までも
喰らう悪食でしてねえ！それらを用いた攻撃は勿論、いかなる物理攻
撃も吸収…:」

捲し立てるように意気揚々と語る言葉を遮るように、ダンタリオンの
真横を突風にも似た衝撃が突き抜ける

そして、

直後に炸裂した轟音と衝撃波が、ダンタリオンの身体を背後から前方へ吹き飛ばした

「うぐっ！な、なに……が……ツツ!？」

後方を直視したまま固まった。

男の思考に、空白を生じさせるに足る光景が広がっていた

許容応力を大きく超えた闇の竜は、土手っ腹に風穴が開いた状態で機能を停止していた。

やがて末端から砂の様に崩れ落ち、呆気なく霧散する

「……物理攻撃も、なんだって?。」

ゴキリツ と拳を鳴らし、平然と竜を粉碎した鬼は鋭い眼光で見下ろした

「あ、ありえない……あの竜がドラゴン一瞬で!!い、一体なにをしたのです!？」

「なにを? 唯普通に殴っただけ。拳こいつでな」

「ツツ! そんな、馬鹿な……!？」

「馬鹿なものか、単純な話さ。神力を喰らうだの、攻撃が効かないだの、其方の常識なんて通用しないんだよ。『怪力乱神かいりよくらんしん』の前ではね」

「かいりよ……?! 何を、何を訳のわからないことをお……!？」

「まあ理解出来ないならそれでいいさ。元々怪力乱神こゝいは人知の外にある力。まだ私でも不明な点が多い」

「人知い!? この私を脆弱な人間と同格に並べるなど!!」

「……あ?。」

一歩、鬼は踏み込んだ

「ツツ!？」

一歩、男は後退った

(ま、不味い！今の私にはこの鬼を殺す手立てがない……！残る手は洗脳か、転移魔法による離脱か、だ。し、しかしなんの成果もなく離脱すれば、サリエル様も御怒りに。やはりもう一度こいつを洗脳して……！)

ふと、ダンタリオンの中で一つの疑問が浮かぶ

(……そう言えば、何故この鬼にかけて洗脳が解けている?)

ピタリツと、勇儀との間合いを開けようと後退っていたダンタリオンの足が止まった

「なんっ……ツツ!？」

一歩、男の足は前に踏み込んでいた

「はっ!?!えっ、な、何故足が勝手にい!?!」

その様子を見ていた、緑がかった灰色髪の少女は無邪気に口を開く

「逃げちゃ駄目だよおじさん。ちゃんとお仕置きを受けなきゃ」

一歩、男は後退った

「な、何をしたあ!?!」

一歩、男は踏み込んだ

「うふふ、秘密 ♪」

一歩、男は後退った

一歩、男は踏み込んだ

一歩、男は後退った

一歩……………

(ど、どうなっている!? 私は確かに退がろうとしているのに、気が付いたら一歩踏み出している!?)

ジャリツ、と地面を踏み締める音が間近で聞こえる。

錆びた歯車の様なぎこちない動きで顔を上げたダンタリオンは、胸倉を凄まじい力で掴み上げられた

「お前と人間が同格だあ? ふざけた事言うもんじゃない」

沸々と込み上げる怒りを噛み締めるように、星熊 勇儀はそう口にする、固く握り込んだ拳を引いた

(ま、不味い! これは非常に不味い! こうなれば! 再度洗脳するしかない!!)

ダンタリオンは静かに能力を発動させ、思想を書き換えるべく、勇儀の脳内へ力を流し込んだ

「無駄だよおじさん。鬼のお姉ちゃんの中は私が守ってるから」

「!？」

その言葉が指す通り、ダンタリオンの能力は見え^{ちから}ない壁に阻まれ、弾かれた

「……………
は？」

今度こそ。

今度こそ本当に、彼の思考回路は停止する。

少女の言っている事が、何一つ理解出来なかった…、いや、受け入れられなかった

「……………なんなんだ」

絞り出すような声で囁かれた

「なんなんだ、お前はあ……………!？」

少女は、

「じゃあね」

狂気にも似た、感情の入っていない言葉を最後に、その場からその気配は薄れていった

「歯ア食い縛りな」

呆気にとられている男の胸倉を掴む手に、一層力が込められる

「ひっ…!?ちよ、ちよつと待っ…」

「お前程度の根性の欠片もないへナチヨコと、たった一人でも私達に立ち向かおうとした人間を！一緒にするんじゃないよ!!」

「くあwせdrftgyふじこーlp」

ボツ!! と空気が弾け、血飛沫と一緒に粉々に砕き割れた仮面だか頭蓋だかわからない欠片が飛び散り、男は激突した壁の染みへと成り果てた

「ふう、終わったね」

こびり付いた返り血を払い、誰が見ても満身創痍な身体を無視して振り返った勇儀は、深々と頭を下げた

「勇儀さん？」

「此度の被害の多くは私にある。すまなかつた」

旧都を中心とした人的被害の多くは、紛れもなく勇儀が出したものだ。

しかし、此度の敵将を討ち取ったのもまた、彼女である『洗脳を受けていた』『記憶にない』と弁明すれば、情状酌量の余地は十分にあるのかも知れない。

しかし、そんな余裕など勇儀自身が許さなかつた。プライド云々の話ではない。持って生まれた真理だ

僅かな沈黙の後、さとりは言葉を連ねて口にした

「私に謝罪は結構です。それよりも、洗脳された貴女を必死になって止めてくれた方々への礼と、蟠りを早く解消して下さい」

ふと、ガヤガヤと騒がしい声が聞こえる。

振り返れば加勢に来たのか、鬼の衆が拳つて向かってきていた。

その中には橋姫や、土蜘蛛の少女の姿もある

「勇儀さん、私は貴女方が好きですよ？だからケジメだとか負い目を感じて地底こごを出て行くなんて考えないでくださいね？」

「！」

再度振り返った先で会釈をした地霊殿の主は、先に吹き飛ばしたペット及び、放浪癖のある妹を探しに行くと言ってその場を後にした

「…………敵わないね、全く」

「たはあー、鬼の頭領が貸し作っちまったね」

「萃香」

「んー？」

「ありがとう」

「良いってことよー。でも本能のまま、戦闘衝動に駆られたお前さんを止めるのには苦労させられたのも事実…………」

「…うっ、わかったよ。私の行きつけでいいかい？」

「流石っ！」

154話 劍豪 VS 武神 (前編)

交閃が瞬き、鋭い衝突音が響き渡る。

既に打ち合った回数は覚えていない。先程から一切止めていない足から疲労を感じ取る間もない程の、壮絶な打ち合いが繰り広げられていた

銀髪の少女、魂魄 妖夢の手にはそれぞれ長刀と短刀を握られ、続け様に鋭い剣撃を叩き込んでいく

対するは三ツ又に分かれた槍を構える武神 『蚩尤』。

左半身で腰元に構えたオーソドックスな構えから、手首の僅かな動きだけで、その穂先や柄が少女の連撃を払っていく

「魂魄『幽明求聞持聡明の法』!!」

妖夢と常に行動を共にしている半霊が、彼女と瓜二つの半人へと姿を変える。

そして二人の少女は互いが邪魔にならぬ様左右へ跳び、蚩尤を挟み込む様に移動した

(一方が駄目と見るや、直ぐ様多方への攻めに切り替えたか。狙いは悪くない、判断もだ)

「しっ!!」

短く重なった掛け声と同時に、四刀による剣閃が疾る

「だがそれでも足りないものがあるとすればそれは……」

蚩尤は悠長に呟き、しかし身体は神速をもつて動く。槍をコントロールする為に用いる右手のみに柄を託し、そのリーチをふんだんに

使った回転技が繰り出された

「ぐッ!？」

後一步まで踏み込んでいた妖夢（本体）へ、槍の穂先が側面から打ち込まれる。

槍はそのまま勢いを殺すことなく、少女の身体を巻き込みながら、反対側の分身へ叩きつけた

「……力の差だ」

二人の少女が重なったその一瞬で、蚩尤は更に横へ薙いだ。

踏ん張る間もなく地から足が離れた少女等は、そのまま白玉楼庭園にある池まで吹き飛ばされ、大きな水飛沫を上げる

「……両断するつもりで振るったが」

槍を返し、穂先に血痕が付着していないことを確認した蚩尤は、静かに少女を見遣った

「妖夢……ッ!」

その憂慮すべき事態を目の当たりにした、白玉楼の主である西行寺幽々子は思わず傍の男を睨み付けた。

少女と同じくして、銀髪の剣客である魂魄 妖忌は首を横に振る

「加勢は致しません。私は万が一の事態から貴女を護らなければなら
ない」

「……ッ、その万が一の事態があの子であつても?」

「……」

妖忌は黙ったまま前方を見据えた。

池の中で身体を起こし、立ち上がる少女を。

先の一撃で、分身である半霊は元の白い魂魄へと戻っていた

(…ギリギリだった)

今手にしている刀が名刀でなかったなら、その身体は刀ごと真つ二つになっただけかも知れない。刀からじんわりと痺れの伝わる腕を払い、妖夢は前方を睨み付ける

「確かに、この蚩尤に剣を向けるだけはあるな。…小娘」

天使軍の武神は確実に距離を詰めながら呟く。

急速ではなく、飽くまでゆっくりと…。

別に少女を未熟だからと舐めてかかっている訳ではない。

その行為は寧ろ、少女が如何様に動いても冷静に対処する為か…、

或いは、彼も『武』を振るう者として、少なからず少女の秘めたる力に興味を示したのか

「一つ、忠告しておく。今この場に於いては自身の腕を試す遊びの場ではない。実力を出し切る前に死にたくなければ足を止めぬことだ」
「!」

蚩尤が徐ろに動かした槍の穂先を、妖夢は自然と目で追った

次に妖夢の耳に入った音は急速な風切り音。

反射的に身を引いたその眼前を、今しがた間合いの外で見ていた筈の穂先が通過していく

「耳元を狙うのはこれが最後だ」

既に槍を引き戻した蚩尤の穂先が、後方へ跳び退いた少女へ突き出される

「…ッ！」

ギャリンツツ!! と、金属同士が擦れ合う甲高い音と共に、挟み込んだ短刀で軌道をズラした妖夢は、改めて一步踏み込む

「……『未来永劫斬』!!」

彼女の持つ剣技の中で、特に手数が多い連続技。それを突き出された槍の懐に飛び込む形で繰り出した

（槍はリーチがある分戻りは遅い。一撃目さえ凌げば刀にも分がある!!）

だが……、長刀が一閃を描き初撃が入る瞬間、妖夢は自身の過ちに気が付いた

前提として、槍にも至近距離での刺突は存在する。

槍という武器は刀と違い、刃だけが武器ではない。柄の長さを変えられるだけで、戦法を多種多様に変化させることができる

通常よりも柄を短く構えることで、まるで巨大な棍棒のついた短剣の様に扱うことも可能であるが、その戦法は槍自体の長さに依存する為、必ずしも使い勝手のいいものではない。

万が一外した場合の反撃手段を自ら封じてしまっているからだ

……だからこそ間合いを急速に詰めた

……しかし、この時蛭尤がとっていた構えは、

「そう言った固着した考えは感心できぬな」

ドゴツツツ!!! と鈍く、重い衝撃が妖夢の身体を再び空中へと放つた

「えうっ…ツ!？」

呼吸が止まり、視界が暗転を繰り返す中で、ノーバウンドで吹き飛んだ身体は屋敷の外壁へ激突して止まる

「がっ……はあ……ぐツ!？」

壁に礫になったまま、数秒の時間差で地面に落ちた妖夢は、身体中に広がる痛みに構わず大きく息を吸った。そして呼吸が正常に戻り、改めて感じる激痛に顔を顰める

(っ、柄による殴打!?!?!?! いや、あれは打ち込んだと言うよりも……、単に柄で突き飛ばしただけ…ツ!?)

「槍を使う者と戦い慣れていないのか、そもそも戦の経験自体が少ないのか。……この際どうでもいいことだ」

蛭尤の構えが変化する。

全長2メートル越えの槍を軽々と片手に持ち、頭上に掲げた

「今までののは人の身であっても成せる技だ。寧ろ、その程度で死んでもらっては拍子抜けだが」

「!」

打突、薙ぎ払い、打ち払い、左半身の構え

言われてみれば、今までの蚩尤の槍術や構えは一般的に目にする基本的なものばかり。

人間であるならば未だしも、その域に留まらない人外による戦闘ならば、ある程度は身体能力や特殊能力でカバーできてしまう為、軽視されがちだ

そして戦場では型に忠実な動き程、相手に予測され易い。
詰まる所、蚩尤の見せた槍術基本の型は、妖夢への手心様子見だった

「……次からは型を崩す」

風が、蚩尤の掲げた穂先へ集束していく。

そうして生まれた竜巻が、高々と聳える塔のようにも見えた

「私の膂力で生み出した風圧を、魔力で固めて出来た産物だ。詰まらぬ幕引きを迎えたくなければ、反応してみろ」

ゴツツ!! と、凄まじい風圧で周囲を抉り出しながら、竜巻が接続された槍は少女の頭上へ振り下ろされた

「……確かに、私にはそんな大それた事はできない」

囁くような言葉と同時に、杖を軽く振ったような風切り音が二つ

「!!」

——それは斬撃だった。

十文字に、竜巻がパツクリと割れる

その光景は切れ味の悪い包丁で、半ば潰しながら野菜を切るのとは違う。

刃に止まった羽虫が両断される程の切れ味を誇る名刀で、紙を撫で斬りしたように滑らかだった

「剣士は、水を斬るのに三十年、空気を斬るのに五十年もの月日を費やす」

霧散する猛威の中で、少女は強く続ける

「私は何処ぞの白黒みたいに魔法が使える訳でもない。かと言って、紅白巫女のように靈術に長けてもいない。――……私が使えるものは、『剣術』唯一っ」

二刀を握る手に一層力が入る。

……と同時に、今の今まで傍に漂っていた半霊が、片割れである少女へ寄り添う様に重なる

そして、

「如何なる理由があろうと、勝負の場に於いて手を抜かれるのは心外です」

「！」

音も無く、蚩尤の間近から声が届く。

音も無く、しかし鋭い剣閃が奔る

今戦いで初めて、武神は少女の剣撃をまともに防いだ

(魂魄である分身と一つに……成る程、面白い種族だ、が)

一瞬の硬直を待たず、続け様に斬光が迸る。
その剣速は、先程攻めあぐねていた少女の其れではなかった
二刀から放たれる連撃は蚩尤に去なす暇を与えず、流れる様な足捌
きは後退りや体当たりと言った間合いの調整を封じ、常に一定の間合
いを保ち続ける

――『妖夢が発動させたのは魂魄との融合』

妖忌や妖夢のような『半人半霊』は、生まれた瞬間から分身となる
魂魄と自分で力が配分されている。

そして生まれつき分かれている力を一つに融合させる事は容易で
はなく、修行の末に修得する事は可能であるが、故意に融合させた魂
は長時間持続させることができない、正に諸刃の剣と言える

(長くは保たない！相手が反撃に出る前に…!!)
「!!」

遂に少女の振るう長刀の鋒が武神の手甲を捉え、身体の外側へ大き
く弾いた
必然的に槍の保持が緩む

「はああああああああアア!!」

妖夢は叫び、短刀を逆手に持ち替えると、間髪入れずに踏み込んだ

――『奥義・西行春風斬』

桜色の剣閃が奔る。

行き交う二つの刃は神速をもって、至近にいる武神へ斬撃を叩き込
んでいく

その衝撃は武神の身体を後方へ押し下げ、姿勢が僅かに崩れる

(……っ！)

妖夢は一度両腕を交差させ、一拳に腕を振り抜くことで、甲冑を纏った身体を斜め十文字に斬り付けた

その勢いに、蚩尤は後方へ大きく押しやられる

(まともに入った。……でも)

瞬間的とはいえ全力の『奥義』。

大きな負荷のかかった身体は節々が軋み、消耗した体力は普段から振るっている刀すら重く感じさせた。

未だ硬く握られた槍を視野に入れ、肩で息をしながら構える

「……お前は二つ、思い違いをしている」

「!?」

思わず鳥肌が立つほどに周囲の空気が張り詰めた。

亀裂の入った胸部を意に介さず、天使軍の武神は静かに言い放つ

「二つ、我は純粹にお前の実力を測りたかっただけだ。力量差を見ていい加減にあしらっていた訳ではない。」

二つ、お前は先程『勝負』と口にしたが、戦に於いて勝ち負けなどさしたる意味を成さない」

黒い靄の混じった殺気が溢れ出す。

槍の穂先がゆつくりと妖夢へ向けられる

「ツッー」

身体中から嫌な汗が噴き出し、心臓の鼓動がけたたましく響く

「『生きる』か『死ぬか』、『殺す』か『殺されるか』。そう言った生殺の末に勝敗は付いて来るものだ」

武神は槍を水平に振るった

漆黒の波動が視界一面を覆い尽くした

155話 剣豪 VS 武神 (後編)

「……のまれる、

目の前の武神から噴き出したドス黒い力の波が、妖夢の身体を地の底へ引き込んでいく

「……沈む、

足裏から伝わる気持ちの悪い浮遊感は、底なし沼に落ちたような感覚に似ている

「……染まる、

自身の意思とは無関係に、視界が闇一色に変貌していく

「ツツあああああ!?!」

叫び、振り払うように銀髪の少女は横へ跳んだ

その直後、彼女の立っていた空間が飛来した何かによって貫かれた。

一連で何が起こったのか理解するよりも早く、視界を巨大な影が遮る

ゴツツ!!! と、冥界の地が震撼する。妖夢は地面を転がり、体勢を立て直しながら地面に打ち付けられた槍の石突を目にした

「……………投げた槍を掴んでから打った…っ!?!」

「……………見えていたか」

ぽつりと呟いた蚩尤は、クレーターの出来上がった地面から石突を抜き、まるで棍棒の様に槍を逆手に持ち替えた

「威圧に繋がる殺気とは、戦闘に於いて相手を萎縮させる牽制技だ。お前が並の精神であったならば、先の一撃で死んでいた」

逆手に持った槍を振り上げ、蚩尤の姿は消失する

「……ッ」

半霊との融合で飛躍的に上昇した身体能力をもっても、僅かにしか捉えられない残像が真後ろから襲い掛かる

ゴバアツツ!!! と、振り下ろされた逆手持ちの槍は、一撃で地面を爆ぜさせる。続け様に何度も振り抜かれる。

それは棍棒……、と言うよりも鞭の様に少女の身体を粉碎せんと殺到した。見た目金属製の槍が竹竿のようにならなる

(……なんて猛襲ッ、受け流すだけで痺れがっ！)

例え避けたとしても、まるで砲撃の様な爆音と衝撃波が身体を叩く。

だが堪らず後退すれば直ぐ様『槍の間合い』となり、少女の身体に一瞬で風穴が開けられるだろう。

だから、その荒々しくも一撃一撃の間隔が殆ど無い殴打の雨へ、妖夢は更にふみこんだ

「！」

決死の覚悟で突き出されたのは長刀による刺突。狙いは喉や心臓と言った急所ではなく、槍を振り回す右肩へ

そうして肩当ての隙間へ吸い込まれるように放たれた鋒は、鈍い音と共に蚩尤の肩口を抑え込んだ

(……止まった。でもいくら踏み込みが足らなかつたとは言え生身の身体に刺さらないなんて……ッ！)

「…………『足を止めるな』と、」

蚩尤は低い声で呟き、抑えられている右肩を引きながら左拳を握る。

「しまっ…!」

ハツとなった妖夢は、すかさず刀を抜いて後方へ跳ぶが…、

メキメキツメリツ……

「…………そう言った筈だ」

凄まじい速度で打ち込まれた鉄拳が、少女の身体をノーバウンドで外壁まで吹き飛ばした。

今度は壁に留まらず、一瞬で瓦礫と化した外壁を突き破って白玉楼の外まで叩き出された妖夢は地面を何度も転がる

「っ……!あ、かつ……ツツ!」

最早痛覚を緩和させる効果のある叫び声すらあげられなかった。身体の末端を痙攣させ、口からはひたすら浅い呼吸音が漏れる

……そして、

「あ……………」

今の今まで固く握り締めていた二刀の内、長刀がその手を離れて、視線の先にあった

正確には、刃のみが地面に刺さり、柄部分が少し離れた位置に転

がっていた。

周囲の音が異様に小さくなり、一瞬少女の時間は停止する

自身の扱う二刀の技の要となり、長年家宝である短刀『白楼剣』と共に戦ってきた彼女にとって半霊とは別のもう一つの分身だった

「……………楼観剣」

……ぼそりと呟かれた刀の名。

その刀が今、無残に根本から折損している

「妖夢っ!!?しっかりして!!」

間近で主君の悲痛な声が聞こえ、ハッと我に返った妖夢は改めて視線の先で折れた楼観剣を見遣った

「……ッ！」

妖夢はガクガクと震える身体を無理やり起こし、残った短刀を握り締めて立ち上がった

「もう止めなさい!!私や白玉楼のことはもういいから!それ以上貴女が傷付く必要は……………」

「……幽々子様」

遮るように少女は呟く

「主君である貴女にそれを言わせてしまうなんて、私は従者失格ですね」

一步、ふらつく足取りで幽々子の前に出る

「ツツ！そんなことつ…！」

「それでも…ツツ！」

先程殴打を受けたであろう腹部から鋭い痛みがはしる。

臓器を痛めたか、肋骨をやられたか。正常に判断が付かないくらい身体中傷だらけの少女は、眼前の敵を睨み付け、言葉を紡ぐ

「それでも私は貴女を護ります。私は白玉楼の庭師であり、幽々子様の剣術指南役を務める『剣士』だから！剣士は、例え対峙する相手がどれほど脅威的であっても！決して背を向けることはない！！一度護ると決めた人を見捨てて逃げる者など、剣士であっていい筈がない！！」

「……」

その言葉を、男は静かに聞いていた

「……妖夢」

「幽々子様、私は従者としてはまるで駄目かも知れません。でも、ここで本当に逃げてしまつて生き残つたとしても、私の中の剣士いのちは死んでしまう。私は、剣士としてすら駄目になる訳にはいかないんです…！」

「……」

その言葉を、男は静かに聞いていた

「お願いします幽々子様。どうか私を殺止めないでさないで下さい…ツ！」

「でも、貴女刀が…！」

徐ろに、男は前へと踏み出した

「妖夢」

「!!」

その声に反応し、妖夢は思わず目の前の敵から視線を外した

「……」

その『隙』に反応し、武神は大きく踏み込むと槍の穂先を少女の眉間へ突き出した

「水を差すように申し訳ないが……、」

「!？」

ぞわり、と

「暫し待ってもらいたい」

槍が僅か数センチに迫った瞬間、唐突に感じた悪寒に、蚩尤は思わず飛び退いた

直後、

キンツツツ!! と、甲高い音が一つ。

それは抜刀した刀を再び鞘へ納めた際に生じた音。

蚩尤のいた空間に複数の剣閃が走ったのは、それとほぼ同時だった

(…………間合いの外にある空間に斬撃を?)

柄の先に付いた一筋の傷を目にしつつ、再び槍を構え直す蚩尤を尻目に、一度は前に出た魂魄　妖忌は意識だけを少女へ向ける

――そして徐ろに、自身の腰へ下げていた刀を差し出す

「…………解禁だ」

差し出されたのは、柄頭と鍔は黒、柄巻は雪の様に白く、鯉口から鎚までが銀色に塗られた打刀だった

「ッ！」

把持し、僅かに鞘をずらすと、白銀の輝きを放つ刀身が顔を出した

「師匠、これを…………私に？」

「頃合いだ。今のお前にはその資格がある」

妖忌はそれ以上何も言わず、後方の主君の元まで後退った。

今まで厳格で、隙なんて一切見せたことのない師が、自身の唯一の武器を託して後方へ下がった

「……………」

その意味を、妖夢は重く受け止めていた

「幽々子様！お師匠様！どうか見ていて下さい!!」

短刀^{白楼剣}を納め、新たに手にした刀

『銀嶺^{ぎんれい}剣^{けん}』を抜き放った妖夢は、再び武神と対峙する

「いいのか？短刀それも使わなくて」

「……、」

蚩尤の諫言に対し、妖夢は静かに納刀する

『次元 斬』

キンツツツ!!!

その瞬間、蚩尤を中心に斬撃の渦が炸裂した。

金属同士が擦れるような甲高い金属音が連続して響き渡り、周囲の地面には幾本もの滑らかな筋が走る

「…ッ」

その強靱な肉体を包む鎧に深い傷が入り、僅かに蚩尤の表情が強張る

再び納刀したまま柄に手を掛けた所謂居合の姿勢を取った妖夢の一刀流構えは、明らかに仕上がったものだった

「……成る程な。その為の二刀か」

……それが何を意味するか。

普段から二刀を振るっている彼女が、既に一刀の戦い方を修得している理由わけ。

その理由を蚩尤はわかっていた。彼も武を極めた者として、その『境地』に辿り着いた一人だ

「……」

くくく

「あつ、おじいちゃん！」

左右で長さの違う二刀を握り締めたまま、まだ見た目幼い少女が慌ただしく駆け寄る

「これー！」

ポカリツ と、小気味の良い音が一つ

「師弟の関係を忘れたか。剣士たるもの、そういったところから気が張っていかねばならぬぞ」
「うう……」

涙目で頭を摩る少女へ、半ば呆れつつ男は諭す

「……で、どうかしたのか？」

「は、はい！あの、お師匠様！確かに剣術の修行とは聞いていましたが、どうして刀が二本なのですか？お師匠様のように一本の方が、その……、重くないし振りやすいと言うか……」
「………………。初めに説明をした筈だが、お前にはちと難し過ぎたか」

男は肩を竦めつつ、縁から庭へ出ると徐ろに帯びていた刀を抜いた

「よいか。一刀剣を極めようとするならば、一刀剣を鍛えるだけでは駄目だ」

「？」

首を傾げる弟子に対し、男は刀を片手に持ち替えて振るった。風を裂く鋭い音が鳴る。弟子である少女は疎か、並の剣客では視認できない速度が出ていた

「見ての通り、片手で振るう剣は両手の構えに比べ速度や威力が劣る。それが二刀剣ともなれば刀一本に注ぐ集中力も二分されることになる」

(い、今ので…?)

男は「しかし」と付け加え、改めて両手で握りなおし、上段に構えた。

…、そして少女が息を呑む中、一枚の葉が頭上より舞い落ちてきた瞬間

ボツ!! と、何かが弾けた様な音と共に男の肩から先が消失(少なくとも少女の目にはそう見えた)する。…そして、目の前にあった筈の葉は跡形も無く霧散した

(す、凄い…!葉っぱが爆発した?!—)

「—」などと思つとるのではあるまいな?」

「ひゃいっ!?!」

納刀し、新たな落ち葉を拾い上げた男は少女の目の前にそれを突き出して見せた

「よく目を凝らして見よ。細かい網目状の線が見えるだろうか?」

「んん…、はい」

「それは葉脈と言う。人間で言うところの血管と同じ様なものだが、この際それはどうでもよい」

男はそのまま葉を少女へ手渡して続ける

「先程私が斬ったのはその葉脈だ。跡形も無く散る程細かくなってしまったがな」

「!!」

容易く言い放ったその言葉が示すものを実行することがどれ程のことなのか、幼いながらも少女は理解し、同時に衝撃を受けた

葉脈と言う、間近で目を凝らさなければ見えない様な細かい繊維一つ一つを、あの一振り分の時間の中で全て断ち斬ったと言うことだ

……一体、あの一瞬で何回斬ったのか？

「二刀剣の修得とは、『柔軟な体捌き』・『巧妙な間合いと太刀捌き』、そして『戦に於ける己の勘』を磨くのにこの上ない修行法と言える。二刀剣を極めることで初めて、一刀剣は達人の境地に達する」

「……………」

少女は自身に授けられた二刀を改めて凝視する。左右で長さの違う『白楼剣』と『楼観剣』。それぞれ長さの違うこの二刀を極めた先にある未来を想像した

「私にも……………」

「んん？」

少女の中で、二刀剣に対する疑いが消失する

「私にも、出来るでしょうか!!」

少女の中で、一刀剣に対する憧れが膨れ上がる

「私に聞いても答えなど出ない。己自身で、こたえ 眞実は斬って知るがよい」

「はい!!」

——それは、少女の長い長い剣術修行の始まりだった

~~~~~

ジリジリと互いの間合いが狭まる。

やがて長物である蚩尤の得物の間合いの一步外まで迫った瞬間、両者は大きく動く

先に仕掛けたのは蚩尤の槍。

身体ごと消失する程の爆発的な踏み込みは、一瞬で妖夢の側面、つまり刀を帯びている方向から既に攻撃を繰り出す体勢で侵入する

空気が爆ぜる。

突き出された穂先は空間に歪みを表示させ、直線上の外壁に罅一つない三つの風穴を開けた

「!」

その刺突を身体を僅かに引き、紙一重で躲した妖夢から神速の居合が放たれる。

先程と同じく蚩尤を中心に、且つ攻撃の座標が蚩尤自身には無くその空間へ向けられた正しく次元ごと斬り裂く剣技。

『次元斬』と呼称されたこの剣技は、抜刀から納刀までの間隔が極めて短く、その間に幾十もの斬撃を繰り出す為か、多大な集中力と疲労が伴う大技。

……連発は出来ない。繰り出すからには必中させねばならない

斬撃の渦は蚩尤の身体を呑み込み、金属を削る様な音と風を裂く音

が入り混じる。

武神はその様子を冷静に見ていた

(……抜刀から時間差で襲ってくる斬撃が回避や防御のタイミングをズラしている。螺旋を描く様に生じる太刀筋も軌道に法則性がなく見切り辛い。威力も……)

自身の身体に刻まれていく斬撃は、武神として名高い強靱な肉体に深い刀傷を与えていた

「成る程な」

僅か一秒にも満たない斬撃の渦は、後に静かに佇んだ蚩尤を残し消え去った。

一言発した言葉に、妖夢は怪訝な表情を浮かべる

「……成る程、とは？」

返答は、猛撃となって襲いかかった

再び加速した蚩尤の動きは移動過程が省かれ、攻撃に転じる一瞬のみが僅かに残像が映っている様に見えるほど。

四方八方から殺到する槍技は先程までと違い、一切の加減がない苛烈なものになっていた

妖夢は直ぐ様抜刀し、『八相の構え』で迎え撃った

踏み込みなど見えてはいない。

残像を目で追うことも不可能だ

それでも、

(……わかる)

「!?」

攻撃前の一瞬の殺気。

次に転じる行動パターン。

どの角度で受ければ去なすことができるか

それら全てを己の直感のみで対応していく。

無駄な動きを極力省き、緩やかな体捌きはまるで舞い落ちる木の葉のように。

「……………っ！」

「終わりですか?」

途端に止んだ猛攻に、しかし妖夢は澄ました表情で蚩尤を見据えていた

(……………攻撃全てに手応えがなかった)

当初から引き出そうとしていた彼女の实力は、蚩尤の予想を大きく越えていた。

いや、そもそも初めに使っていた二刀が仮初めで、現在の一刀剣が彼女の本来の实力なのだ

その結果が現状を示している。

これまでの少女の動作を観察し、分析する為に攻撃を敢えて一度は受け切り、その上で攻め立てたにも関わらず、先の攻撃は全て往なされてしまった。

地力や魔力では圧倒的に勝っているはずの自分が、『武』と言う自分が最も長けていなければならぬ分野に於いて、遅れをとった

澁してや、少女が握っている武器は刀。  
長物の特性を十分に熟知していなかったことも相まって、其れを振るっているはずの自分が圧倒的に有利であったはずだった

「認めよう」

蚩尤は一度構えを解いて告げた

「お前は強き剣客だ」

「……ならば、此処で止めますか？」

「……………いや。」

片側の掌が、ゆつくりと頭部へ伸びる

「お前と言う剣豪に敬意を表し、我も本気で相手をしよう」

武神は、『戦』でのこだわりを捨てた

——その瞬間、

ゾンツツ!! と、周囲を包み込んだのは殺気の入り混じった悪寒。  
その場の全員が、発生源を見遣り目を見開く

「……此処からは、任務を優先させてもらう」

妙にくぐもった声と、禍々しい気を放つ髑髏の仮面に覆われた頭部、絶えずドス黒い力が漏れ出る身体は、常人ならば近づいただけで魂を抜かれてしまうだろう

「妖忌」

「はい」

その様子を目の当たりにした幽々子は、静かに、それでいて凜とした声色で呟く

「もし次にあの子に死の危険が迫れば、私は迷わず飛び出していくわ。貴方もその時は私じゃなくてあの子を護りなさい」

それでも傍の従者は首を縦に振ろうとしない

「私が片割から受けた指示は貴方を護ることと、妖夢に刀を託すことの二点のみ。それに、今の私にはあの者と十分に戦うだけの霊力が残されていない」

「それでもあの子を連れて逃げることもくらい出来るでしょう？ 貴方にとってもあの子は大事な孫娘ではないの？」

「申し訳づきありませんが、」

被せるように、胸倉を引き寄せて幽々子は叫んだ

「答えなさい!!」

「……………」

僅かな沈黙の後、銀髪の剣客は重い口を開く

「私は、あの子を信じています。決して偽りや綺麗事ではなく、私はあの子の強さを知っている。それは剣の師としても、祖父としても、もう一人の私も、同じ思いで妖夢にこの戦いを任せた」

「でも！」

「大事でないわけがない」

「!! ツ……」

両者それ以上は何も言わず、再び視線を戦場へと向ける。禍々しく変貌した敵と対峙する少女の背中を、妖忌は黙って見つめた

(…妖夢)

――

溢れ出る黒い靄が蛇のように三又の槍へ纏わりつき、蚩尤の腕と同化するように形態を変化させた。

取り込まれた槍の見た目は、中世時代のランスを思わせる程肥大し、その一部が生き物のように蠢いている

「最後に聞いておこう。此処の主を差し出す気は？」

「ツ！巫山戯るな!!」

妖夢は叫び、大きく踏み出した

二刀が一刀に還ったところで、桁違いな脚力が生まれるわけではない。

繰り出す剣技に驚異的な斬れ味が付与されるわけでもない

ただやることは変わらない。二刀を振るっていた時と同じ感覚で一刀を握ればいい

そうすれば、自ずと剣は走る。

その足は、自然と敵の懐へ飛び込む

「六道剣『一念無量劫』!!!」

二刀を振るっていた頃は、余りに速度が求められるが故に集中力が

追いつかず、完成し得なかった剣技の一つ

すれ違いざまの一閃。その刹那の間に、八芒星を描いた斬撃が黒い霧に覆われた胴体へ刻まれた

斬撃を受けた蚩尤の身体が、くの字に折れ曲がる。

妖夢は踵を返し、地面に深々とブレーキ痕を残しながら、再び蚩尤へ突進する

「っ!？」

次の剣が触れる一瞬前、唐突な悪寒を覚えた。

反射的に剣を振るう手を止め、その場から離脱しようと、方向変換の為ほんの一瞬足を止めた

「なんだ」

その一瞬が、

「さっきより動きが鈍っているぞ」

時に揺るがない優勢を覆す

ドツ!!! と、凄まじく重くて速い何かが少女の身体へ打ち込まれた。

だが肉を打つ湿った音が鳴ったのはその一瞬のみ

「あっ」

まるで砂山の一部を指で掬い取るように、それが触れた部位が刮き落とされた。

その光景は、端から見れば突然少女の腹部が消失したように映ったかもしれない



「！」

明確な致命傷を負った少女の身体は、倒れ伏すことなくその場に停滞していた。

表情から体勢までがその時のまま、不鮮明に揺らぐ少女を目にし、一瞬の空白を経て、死角からの攻撃に蚩尤はワントンポ遅れて反応した

ガキインツツ!!! と、甲高い衝撃音が鳴り響く

「質量を残した分身まで作れるとはな」

「そつちこそ、槍が自立して動くなんて非常識です！」

先程攻撃を受けたのは、僅かな霊力を分身として形にした即席のデコイ。

分身を抉り、今し方少女の刀を弾いたのは、びちびちと魚の様に蠢く触手の様な槍。

「自立というのは半分不正解だ」

蚩尤が右腕を引き、連動して槍もバネを縮める様に収縮する

「ッ！」

少女の直感が警告を鳴らし、事が起こるよりも一瞬速く身を屈めた。

直後、弓の弦のように引き絞られた槍が一気に伸長した。穂先は屈んだ妖夢の頭上を通過し、その際ソニックブームにも似た衝撃波を発生させる

「私の意識下に於いてはその限りではない」  
「!？」

今し方伸び切っていた槍が、既に収縮状態に戻っていた。  
どんなに鈍い者でも、次に何がくるかくらい分かる。  
そして考えた。伸縮間のインターバルを一瞬で実行できるならば  
？

答えは、横殴りの槍の雨となって襲いかかった。  
全力で側方へ走る。

だが、最早足捌きだけでは躲し切ることが出来ないほどの密度で殺  
到する、触れただけで肉を削り取る槍の嵐に対し、数ある回避行動の  
中から妖夢は敢えて攻撃を選んだ  
全力で駆け出した身体にブレーキをかけ、追尾してくる槍を意に止  
めず放つ

—— 『次元斬』

「!」  
(先程言っていた言葉の意味。それが本当なら!)

狙うは槍ではなく、それを操作する本体。  
視認出来ぬ斬撃の渦が、蚩尤を取り囲むように炸裂した

ズガガガガガガガガガガガガガガガッ!!! と、連続で響く轟音は、  
直前に挟み込まれた槍が次元斬を防いだ際に生じたもの。

しかし会得して日が浅いとはいえ、己の奥義とも言える剣技を弾か  
れて尚、妖夢は思惑通りだと笑った

「やっぱり、その槍は自立して動いている。それも、貴方の意識の外か  
らの攻撃限定で」

「……ほう？ならばとその特性を逆に利用して攻撃を中断させたわけか」

この時、仮面越しでは判別しにくいだが、蚩尤は確かに笑みを零していた。

まるで、教え子の成長を喜ぶ様に。

「だがそれでは後手に回るばかりでジリ貧だ。どう打開する？」  
「私には貴方のように手の内を曝け出す余裕はないので」

だが言葉とは裏腹に、妖夢は行動に移した。

流れるようなモーシヨンで納刀し、再び居合の構えをとる

「またそれか？芸がない」

「剣術に芸など不要です」

スツ…… と、少女の発していた剣気が鎮まる。

その間に深い呼吸音が聞こえた

(溜めが長い?)

蚩尤はすぐに違和感を感じた。

少女を中心にピリピリとした空気が広がり始める。その様子から、尋常ではない集中力が伺えた。これまで彼女が放ってきた、次元を斬り裂く居合ですらここ迄の『溜め』はなかった

つまり、

「若き剣豪よ、それをやるには隙を見せ過ぎだ」

蚩尤は槍が同化した腕を伸ばし、横一線に薙ぎ払った。

その威力は地平線を斬るが如く、衝撃波が直線上の物体を両断したのはその直後だった

この時、白玉楼が倒壊の末路を辿らなかつたのは、その余りに凄まじい斬れ味によって、だるま落としのように直立を維持出来ていなかったのではない

蚩尤は白玉楼に背を向けて攻撃していた

「私が言うのも難ですが……」

直前に屈んだ妖夢がむくりと起き上がりながら尋ねる

「何故今ので幽々子様達を狙わなかつたのですか？」

ふっ、と笑った蚩尤はこう返した

「……狙っていたら、お前は不完全なまま放っていただろう？」

「完全なものが見たいなら少し待って頂ければお見せできますよ？」

「生憎とただで食らってやる義理はない。お前も剣豪ならば、我の隙を突いてみせよ」

額から流れる汗、肩を上下させての呼吸。

半霊との融合から既に10分が経過している。

多大な集中力を有する剣技の多様。

現状、妖夢の疲労は肉体的にも精神的にもピークを迎えつつあった

(打てて、あと3回……。でも、)

その計算式は飽くまで『次元斬』を基準にしたもの。その先を出すならば……。

融合の強制解除まで時間も迫っている。

考えている余裕などなかった

「すう……」

もう何度目かになる納刀。

一見居合に移行できるこの構えは、隙が無いように思える。だが実際は多大なストレスも同時に負ってしまう簡単な話だ。

武器を持つて戦う場で、敢えて武器を納めなくてはならないこの状況は、一度タイミングを逃せば命を落とす諸刃の剣と言える。

況してや、蚩尤ほどの強敵を前に敢えて無防備になるなど、並々ならぬ覚悟と精神力を有する。更にはその中で多大な集中力を必要とするのだ。構えをとるだけでも容易である筈がない

「見せてもらおうぞ、若き剣豪よ」

今度は蚩尤から仕掛けた。

槍を触手の様に畝らせるのではなく、腕に固定した状態で、リーチを変えることなく構える

一瞬で眼前へ踏み込んできた蚩尤の前に、妖夢は居合の構えのまま身体を横軸に回転させて背部をその巨体へ押し付けた

衝撃自体は些細なものであったが、予想外の行動に一瞬蚩尤の動きが止まる

「何の真似……」

言い終わる前に少女は前方へ駆け出した。

一瞬呆気にとられた蚩尤だが、その程度の虚をついたところで時間稼ぎの一つにもなりはしない。

直ぐ様追撃する態勢を整え、槍の照準を小さな背中へ合わせる

だが、またしても蚩尤は目を見開いた

「な、に？」

それは蜃気楼や吹き散らされた煙の様に一部から徐々にはなく、初めからそこに居なかつたかの如く、前方を駆けていた少女の姿がぱったりと消えた

……直後、

「はあああああああつ!!!」

背後から発せられた喊声と共に、銀嶺剣を振り上げる少女の姿があつた。

当然気配には気付いていた蚩尤は、その方向を見向きもせず、槍が同化した腕を軟化させて後方へ放つ。

妖夢は直前で動作を切り替え、突き出された穂先に上手く刃の表面を滑らせるように受け流した。そのまま勢いを殺さずに身体をコマの様に回転させ、蚩尤の横腹へ銀嶺剣を叩き込んだ

ギイインツツ!!! という金属音と硬い手応え

「態々声を上げて斬りかかるとはな」

見れば、今し方後方へ受け流した槍が急速に曲がり、瞬時に主である蚩尤と銀嶺剣の間に割り込んできていた

「槍自身の動きより、貴方の動きの方が見慣れてますので！」

「……言ってくれる」

鏢迫り合いが続く中、槍は不規則な動きで少女の身体を押し下げた。

最早体勢的に優位であろうと、力の均衡は成立しない。

此方は次元斬のような大技を使わなければ、薄皮一枚程度のダメージしか入らないのに対し、向こうの攻撃は皮膚を掠めただけでその周辺の肉が消滅する程の力量差がある。

まともなぶつかっていれば一秒たりとも生きていられない

今更正面から迎え討つだのなんだのと、正攻法を実行する余裕などない。

『力』で大きく下回っている自分の立ち回り方はこれでいい

だから、妖夢は今一度大きく距離をとった

「どうした？ 我に隙を作るのではないのか？」

「……」

…… 『納刀』。

「……………なんだと？」

再び、その場の空気が張り詰める。

心なしか肌に微弱な振動さえ伝わってくるかのような感覚。

蚩尤の声色から笑みが消えた

「貴方は言いましたよね？ 『それを使うには隙を見せ過ぎだ』、と」

「理解しているならば、それは何だ？ この状況で隙を作ったとでも？」

「はい」

ズアアアア…ツツ!!! と、蚩尤から膨大な力の奔流が噴き出し、白玉楼全体にまるで彼の感情を体現したかのような、凄まじい重圧がのしかかる

「我を愚弄するか…！ そのような詰まらぬ選択は、一か八かの大博打

にも劣る唯の自暴自棄に過ぎん!!」

この戦闘で初めて声を荒げた蚩尤とは対照的に、妖夢は冷静を保ちつつ答えた

「いいえ。寧ろ私は、貴方に敬意すら感じます。……そして、私は貴方に勝ちます」

互いの目があった。蚩尤は感情に任せて相手に烙印を押ししたりはしない。

その瞳から、明確な決意を感じ取った

「良いだろう」

まだ準備の整っていない少女へ、瞬時に槍を突き付ける。

『彼女の決意が本物か否かは、次の行動で分かる』、と言いたげに。

「行くぞ」

蹴られた地面が大きく抉れ飛んだのはその一瞬後。

間隙はなかった。

突然巻き起こった突風が身体を吹き抜けていくように、蚩尤の槍は少女の身体を突き貫いた。

余りにも一瞬過ぎるその有様は最早、肩から上、膝から下のみがその場に残り、空中で停止しているかのようなだった

その場が一齐に静まり返る。

静観していた幽々子と妖忌も、その光景に声すら上げていない。ただ、目を見開いている

蚩尤も同じだ。

端から見れば、仮面のせいで表情が読み取れないが、その顔は確か



に……、

——『動揺』

「ま、さか……！」

ギリギリ……と、錆び付いた歯車の様に振り向いたその先に、答えはあった

「お待たせしました」

構えも、脱力も、集中も、何もかもが完了した状態で、魂魄 妖夢は立っていた

両者の間で静かに消失していく分身を尻目に、蚩尤は全力で地を蹴った

それは少女に技を出させまいとしているのではない。

それは待ち侘びた瞬間を噛み締めるように、最大の力を持って迎え討つ為に。

『次元斬』——

その瞬間、妖夢は別次元の速度を手にする

——『絶』

妖夢の身体が複数の残像に別れ、前方へ消える。残像の消失と入れ替わるように、空間全体を白銀の剣閃が埋め尽くす。

その動きは蚩尤の体感速度を大きく振り切り、槍による自動迎撃すらも置き去りにした

一瞬と言う時間が長くすら感じる程の次元を経て、刃を残り数センチまで納刀した妖夢は再び姿を現した。

拡散していた残像がその身体に取り込まれるように戻り、一つの金属音を鳴らして刃を納めた

「……………」  
「見事」

べしやり、と粘着質のある音と同時に、天使軍の武神は地に伏した。

仮面に亀裂が入り、音を立てて砕き割れる。

力の抜けた掌から槍が転がり落ち、根元からヘシ折れた

「隙を作る…か、してやられたものだ。…………何をした？」

仰向けに倒れ、天を仰ぐ蚩尤は、既に確定した最期を意に介さず尋ねた

「……………」

妖夢は黙って銀嶺剣を軽く水平に振ると、魚の身をおろすようにその場の空間が捲れ上がり、そのまま重なっている妖夢の身体を周囲の景色と同化させていた

「次元斬は次元を斬る剣技。攻撃から転換させれば、こう言った応用も利くんです」

「……………成る程な。ならばその後には戦っていた分身は以前より<sup>靈力</sup>力を多く供給していたわけか」

徐々に、蚩尤の身体から止めどない赤色の池が広がっていく

「確かに、これは芸と言われても仕方がないのかもしれませんが」

「……謙遜するな。剣術に、芸などないのだろうか？」

「……、」

呼吸が浅くなり、視界が黒く染まっていく感覚にとらわれながら、

「……些か、私情を挟み過ぎたか。我の敗けだ」

弱々しくも振り絞る

「……さらばだ。互いに、名の知らぬ…、劍豪よ」

……武神がそれ以降口を開くことはなかった

「ありがとうございました」

深々と頭を下げた妖夢が起き上がることはなく、限界に達した身体は重力に従い地面へと向かった

「お疲れ様、妖夢。ありがとう、護ってくれて」

西行寺 幽々子はその身体を優しく抱きとめた

「……」

妖忌はその場で安堵の息を漏らすと同時に、ある方向を見つめ、僅かに表情を険しくした

(……………頼みまずぞ。柊殿)

## 156話 戦闘の背景で

天使軍侵攻が迫る幻想郷。

いつもなら活気溢れる人里でも、常にピリついた空気が漂い、行き交う人々の中には小刀や手斧と言った護身用具を肌身離さず持ち歩く者まで散見される。

里のはずれにある命蓮寺からはその面々が交代で巡回し、異変の兆候がないか常に気を張っていた。

そんな殺伐とした空気を醸し出す人里に、寺子屋の教師、上白沢慧音は深い溜息を漏らす。

(これではまるで紛争地帯だ)

今異変があつてからというもの、寺子屋は閉鎖している。

子供達には日中夜間問わず極力外出を禁じ、単独での行動は縛り付けてでも止めるよう各家庭に伝達してある。

そして事が起こった際には住民を速やかに命蓮寺へ避難させなければならず、その誘導と護衛を兼ねるのが彼女の役目だ。

今回の一件で攻め込んでくるのは『死の天使』率いる軍勢。いくら彼女が半妖とは言え、稀に退治する野良妖怪とはわけが違う。

「……………どうなってしまうんだ、幻想郷は」

――

迷いの竹林深部にある診療所『永遠亭』。

この場所は前回の襲撃で唯一被害を受けなかった場所であるが、それは異常な成長速度で伸びていく竹藪や、常に立ち込めている濃霧等、迷宮チックな地形の特性によるものではない。

過去に異変と言う形で露見するまでは、月の追手の監視をも欺いて

きた存在を悟らせぬ結果。

永遠亭の薬師、八意 永林が施したこの大規模な術式は、幻想郷に侵出した襲撃者から幻想郷最大の医療施設を護る結果に繋がっていた。

そこへ易々と辿り着いた長身の男、柊 隼斗は周囲を見渡しながら呟く。

「しかしあれだな。実際こうなってみると、あいつてゐの罫も無いよりかはマシって思えてくるよ」

その傍らで縁に腰掛けている艶やかな着物擬きを身にまとった少女、蓬萊山 輝夜は庭先に足を投げ出しながら小馬鹿にしたように笑う。

「あれに引っ掛かるほど間抜けなの？天使の軍勢とやらは」

「だと助かるんだけどよ。……っーか、仮にも姫様名乗ってた奴がそんな座り方していいのか？」

「あら、お姫様だつて欠伸をするし縁で寝っ転がることだつてあるわ。ただそれを人前ではしないで。こんな姿、気心の知れた相手にしか見せないわよ。それにほら、最近よく言うでしょ？隙のある女性はモテるって」

「お前の場合隙だらけだけどな。特に私生活」

その言葉が示す通り、視線の先の部屋では無造作に置かれている絵巻や、煎餅の包み紙等が散乱していた。

「まあまあ。それで？……最近何度か訪ねて来てるのは、なにも永林と××する為じゃないんでしょ？」

「……ん、まあな。あと意味深に言うのやめろ」

「……でも実際は？」

「食いつくなアホ」

隼斗は一言で一蹴し、脱線しかけた話を戻した。

「はつきり言つて今回ばかりは各地から協力を仰がねエと被害を抑えられそうにねエ。……輝夜、お前の力も必要だ」

「何よ改まつて。水臭いじゃない、勿論協力するわ。場所は？」

快く了承した輝夜を前に、隼斗はある人物を指して続ける。

「今回、妹紅が人里の防衛にあたることになってる」

「へえ、じゃあそこへ加勢に迎えばいいのかしら？」

「ああ。……だが加勢と言つても飽くまで戦闘は妹紅に任せてやつてほしい」

「は、はあ？」

輝夜は隼斗の発した言葉の意味を計り兼ね、肩透かしを食らつたように首を傾げた。

介入はするが、戦闘自体は控えて里の防護にでも徹しろということなのか。

「妹紅はな、優しいんだ。お前や素行の悪い妖怪なんかと戦闘になった時は多少なりとも口調やらなんやらが乱暴にはなるがな。だがそれとは対照的に周囲へ被害が及ばねエよう、力にセーブを掛ける傾向にある。悪く言えばまだまだ甘い」

「私が枷になるってこと？」

「悪く言えばな」

「なら初めから私が戦つた方が得策じゃない？」

「……確かにお前は幻想郷内じゃ上位に食い込む実力の保持者だが、戦闘に特化してるわけじゃねエ。第一天使軍が相手なら、俺や妖怪が出ない限りそこに大した差はねエよ。俺以上の速度が出せるメリツトを考慮しても、単騎火力なら今の妹紅の方が上だ」

「……まあ、結構ズバツと言ってくれるわね」

いつもの言葉選びという配慮が薄れた鋭い指摘、見解を告げた隼斗の瞳は、いつしか見た軍人のそれに戻っていた。

その表情一つにしても、今回の戦闘が苛烈を極めるものだということをより濃く示している。

「あの子が最近竹林の深部で何度か死んでるのを見たわ。死因は明らか、力の酷使よ。いくら肉体の再生があるからと言っても些か無茶し過ぎな気もするけど」

「ああ、知ってるよ」

「おまけに今回あの犠牲破道まで教えたのよね？」

……、少しの間があった。

「……少なくとも愛弟子に教えるべき術じゃねエわな。非人道的って言われりやそれまでだ。俺が彼奴にさせてるのは、身体にかかる負担を無視して戦闘での勝率を上げる為の修業だ」

前提として、妹紅が行っている荒修業は隼斗が指示したものでない。

今回は飽くまで『瞬間』や『犠牲破道』といった、より戦力を上げる為の術すべを教授したに過ぎない。

だが言い方を変えれば、そうなることが分かった上で、“不老不死でなければ殴ってでも止めさせていたであろう修業法”を黙認していた

「今回ののは最早、異変だけにとどまらない命の取り合い。生半可な情や道理を振りかざしたって勝てる戦いじゃねエ。やるなら徹底的に、半端なら戦線から引かせる、それだけだ。無駄な犠牲が出ちまう前にな」

冷酷な見解に見えて、その実先々を見越した合理的な解答だった。国を護りたいけど自分も傷付きたくない。

仲間が死ぬのは嫌だけど、相手も殺したくない。

犠牲が出るのは間違ってる。

誰も傷付かないほうが良いに決まってる。

——そんな平和一択の理想郷など存在しない。

二つの内どちらかを選択するならば、もう片方を手放さなければならぬのが世の常だ。

住民を護ろうと戦えば、兵士は死ぬリスクを負う。かと言って住民を見捨てれば、兵士は命懸けの戦いは避けられる。

そのどちらも救いたいならば、それに伴うだけの実力が求められる。

ならばその『力』はどこから持ってくる？

常人はある日突然、山一つ消し飛ばすだけの力は得られない。

蜜蜂が単身攻撃を仕掛けたところで、雀蜂に咬み殺されるのは火を見るよりも明らかだ。

自身の理想を叶えたいなら、それ相応の代償を払わなければならない。

その事情を知ってか、輝夜はパタつかせている足を止め、庭先へ若干勢いを付けながら立ち上がった。

「二つ言っておくけど、私は隼斗を批難してるわけじゃないわ。今回の異変が常軌を逸したものだって言うのも分かるし、蓬萊人わたしたちの特性をフル活用した戦法が合理的なら、どんどん使ったって構わない。唯、貴方の真意を測りたかっただけ」

昔と変わらぬ無邪気さの混じったその笑みは、同時に頼もしさすら



感じた。

表情こそ見せなかったものの、隼斗はそっぽを向きながら眩く

「……悪いな。ロクでもねエ作戦で」

「いいわ。私だって何もしないで引き籠もってるより、多少の刺激を入れたほうがいいもの」

「……………、彼奴妹紅は自分の死を前提にした戦い方を選ぶ傾向にある。犠牲破道教えた俺に言う資格は無いのかも知れんが……………、頼むぜ、輝夜」

囁くように、それでいて力強い返答があった

「任せて」

――

向日葵を代表とする、季節ごとの様々な花が咲き誇る幻想郷最大の畑。

此処に陣取るは、太陽の畑の主である風見 幽香唯一人。

先の異変によって畑はその四半が被害を受けたことにより、次なる襲撃に備え、強固な結界を張り巡らせていた。

強者として数えられ、戦闘では魔法と体術を主軸に使う幽香だが、結界と言う分野に於いてはその限りではない。

普段は単独での行動を好む彼女も、今回ばかりは第三者を頼っていた。

幻想郷でその分野に長け、同時に外界との境界をも結界によって管理する妖怪、八雲 紫。

「少なくとも強度は問題ないはずよ。貴方の魔力も加えてあるしね」

「ええ、助かるわ」

「でも気を付けさない。この結界が侵入を跳ね除けられるのは飽くまで雑兵くらい。天使クラスかそれに近い力を持った奴らには効果を

発揮できないかもしれない」

「元より頭から爪先まで貴女に頼り切るつもりはないわ。前回よりも強敵が来るのは容易に予想できる。それを私が潰せば問題ないわ」

言葉とは裏腹に赤をベースとした花柄のガーデンエプロンを着用し、手にはそれぞれ如雨露とスコップを装備した幽香は片手間に言った。

その姿を見た紫は聞こえるかどうかの音量で、

「……………のうかりん」

「……………今、凄いやかな呼び方しなかった？」

「別に……………」

作業の手を止めて急速に頭を傾けた花妖怪もといのうかりんに対し、紫はそっぽを向いて口笛を吹くと言うベタなシラの切り方を実践しつつ話を切り替えた。

「それはそうと、本当に貴女一人で大丈夫なの？此処が大切なのは分かるけど…………、他の勢力と共同戦線を張った方が良くないかしら？」

「……………意味がないのよ」

幽香は手にしていたスコップを土に刺し、立ち上がりながら畑全体を一見して言う。

「此処を失ってしまったら、私が幻想郷を護る理由がなくなる。自分の家族を捨てて他所を優先する家主はいないでしょう？」

前回の襲撃で幽香はその力を十分に見せ付けた。雑兵とはいえ、向かってきた敵を皆殺しにしたのは、隼斗等を除いて彼女のみに。

当然、居を構える太陽の畑にもより強大な戦力が投入されるだろ

う。

「でも誤解しないで。私はこの地を提供してくれた貴女に感謝してるの。だから、心配は無用よ」

僅かに大気が震える。

今しがたほのぼのとしたアダ名で呼んだ花妖怪から漏れかけたそれは、微量ながらも幻想郷賢者に悪寒を与える程の鋭さを併せ持っていた。

「必ず殺す」

――

『紅魔館』。

名前にもある通り、外観が紅一色に統一されているこの屋敷は、長時間見ていると目がチカチカする、趣味が悪いなどと不評を買っている（近隣又は通行人談）。

しかしこの屋敷の主は美的感覚が世間一般のものより少しばかりずれている。

当の本人は屋敷を見て顔を顰めた相手に対し、「あまりのセンス抜群な造形美を前に、直視出来ないんだろう」とでも思っているらしい。

「相変わらず凄エ（ずれた）センスだな、この屋敷」

来訪者は遠慮なくずばりと言い放った。

これでもかと言うくらい眉間に皺を寄せながら。

しかし、小洒落たティーテーブルを挟んで座している屋敷の主は、微笑ましく「そうだろそうだろう」と勝手に頷いている。

「お前は見る目があるわね」

「……人並みにはな」

「？」

それが貶し言葉であることに気が付かない見た目幼い吸血鬼、レミア・スカーレットは首を傾げる。

彼女の対面に座り、今まさに横合いから金髪の少女に袖を引かれて  
いる仏頂面の男は、今異変に於ける要であり、とある件でこの場所を  
訪れていた。

「ねえ隼斗ー、暇だから遊んでよー」

「フランちゃん、おじさんは君のお姉ちゃんと大事な話に来たんだ。  
つーか500年近く生きてるのにその幼げな仕草は正直イタ……………」

突然高速で打ち出された拳が彼の喉を捉え、言葉の先を中断させ  
た。

「アハツ☆手が滑っちゃった！」

普通なら喉どころか首から上が吹き飛んでいるであろう威力の吸  
血鬼パンチを受けた男は、平然と会話に戻る。

「……………弾幕ごっこならまた今度付き合ってやるから、ちよつと落ち着  
け」

「むー。大体今日隼斗は何しに来たの？」

姉であるレミアアがやや食い気味に答える。

「私の食事になりによ」

「……………えっ？」

途端にフリーズしたフランを尻目に、呆れ顔の隼斗はすかさず修正

を加えた

「血の提供な。誰がお前の飯になるか。一億年早エよ」

「??…:…なんでまた?…って言うか隼斗の血なら私も吸ってみたいかも!!なんか強くなれそうだし!!」

隼斗は勝手に舞い上がっているフランの帽子を軽く指先で小突いた。

「俺の血は栄養ドリンクじゃねーよ。大体その形で吸血シーンとか絵面的にアウトだし、そもそもお前らごときの牙が俺の皮膚に刺さるかよ」

「えー、じゃあお姉さまはどうやって血を貰うの?」

「既に採取してるんでしょ?」

「ああ」

そう言つて懐から取り出されたのは、札の貼られている小瓶に入れた少量の血液だった。

札には達筆な漢字で『清』と書いてあり、中の血液の鮮度を保つ特殊な術がかかっている。

「足りるか?」

「ええ、十分よ」

小瓶を受け取ったレミアは、いつの間にか傍らに立っていた銀髪のメイド長へ其れを手渡した。

「寝室へ」

「畏まりました」

瞬く間に姿が消失したメイドを尻目に、今の今まで脳内に?マーク

が浮かんでいたフランもやっと理解できたようだ。

この瞬間に用件を終えた隼斗は早々に席を立つと、去り際に釘を刺した。

「永林からの伝言だ。摂取する時は100倍まで希釈しろってよ。じゃねーと身体が持たねーそうだ」

「……んん？あの医者がなんでそんな事わか……、ってそう言えば前に殺されかけた挙句身体を調べ尽くされたんだったわね。……わかったわかった気をつけるわよ」

了承を確認し、その場を後にした男を見送ったレミリアは、背伸びをしながらポツリと呟いた

「さて、寝るか」

――

見渡す限りの雲海と、そこに浮かぶ島々。

此処は地上の人間が苦行の末に辿り着く事の出来るユートピアであり、住民も皆『天人』と呼ばれる種族へ昇華している。

そんな天界にある一つの大きな屋敷に、幻想郷の賢者はいた。

「私が何の為に此処へ来たのかわからないって顔ね」

向かい側に腰を下ろしている青髪の少女、比那名居 天子は引きつった表情のまま口を開いた。

「な、何よ。別に最近は地上にちよっかい出してないしアンタに文句を言われるようなことは何も……」

「ええ、私も心当たりはないわ」

「……………じゃあ、何しに来たのよ？」

ぱちんつ、と扇子を畳んだ八雲　紫は静かに尋ねる。

「最近になって恐らく、此処にも一報くらいは入ってるであろう異変のことは認知しているかしら？」

「異変……って、あの変な化物が湧いて出たあれのこと？知ってるものにも、当時私は下界に向いていたから直接見てるし、襲ってきたから撃退もしてやったわ」

「……………なら、話は早いわね」  
「？」

いまいち相手側の意図が飲み込めない天子の表情が怪訝なものに変わる。

「単刀直入に言うわ。貴女に協力を要請したいの。来るべき天使軍再来に備えてね」

「……………はい？」

唐突な申し出に、危うく口に運んでいた饅頭を落としかけた天子の反応をスルーして賢者は続ける。

「理由は二つ。一つは貴女が天人にしか扱えない武器である緋想の剣を所持していること。前回よりも激化が予想される今戦闘に於いては、弱点を突くことのできるその剣は非常に有効的な手段と言えるでしょう」

視線の先で無造作に置かれている柄のみの緋想の剣を一瞥する。  
気質を斬る場合にのみ刀身が出現するこの剣は、勝手に天子本人が持ち出し私物化しているものであり、悪く言えば横領の罪でしょうっぴかれても可笑しくなさそうだが……。

「か、仮に緋想の劍これが必要だとしても……、何で私が……？」

まあ当然と言えば当然の反応なのかも知れないが、何故彼女がやや遠慮気味に質疑をしているのかと言えば、以前に彼女自信が起こした異変にある。

紫もその点を強調気味にして答えた。

「それが理由二つ目よ。貴女もそろそろ前回の罪滅ぼしをしたいだろうと思つて」

「……………」

未遂に終わったとは言え、目の前の大妖怪を一度本気で怒らせた上、仲裁が入らなければ殺されていたかも知れなかったその異変が思い起こされる。

「更に一つ付け加えるなら、貴女も次の襲撃時には狙われる可能性も考えられる。何故だかわかるわよね？」

理由は単純。

戦争に於いて、戦闘を行える者を残しておく理由はない。

「奴らは場所を選ばず出現する。いずれは此処も狙われるでしょう。貴女の匂いを嗅ぎつけてね」

「……………」

「……………」

押し黙つたままの天子の傍らには、表情にこそ出していないが、僅かな敵意を紫へと向ける従者の姿があった。主君と客人との対談で口を挟むべきではないと理解しているのだろう。紫は心の内で、仮にこれが自身に仕えている式神ならばとつくに手が出ていたかも知れない、と羽衣を纏つた従者を賞賛した。



「……………そうね、我ながらタチの悪い申し出だわ」

紫は間近で僅かなスキマを開くと、中から術式が印された一枚の札を取り出し、卓上へ静かに置いた。

「これに念を送れば此処とも幻想郷とも繋がっていない異空間へ続くスキマが現れる。その場凌ぎではあるけど、襲撃間は安全地帯として使えるはずよ」

目の前に差し出された護符には『博麗』の文字と、強力な霊力が封じ込めてあった。

作成者は他でもない、幻想郷に於いて最も大きな力を持ち、博麗の代を初代より育ててきた男によって練り上げられたもの。彼とは一度きりの面識しかない天子は知る由もないが、その効力は折り紙付きだ。

「結果的に此方幻想郷の都合で巻き込んでしまったのは事実。だから強制もしないし、協力が得られなくても非難するつもりもない。ただ、一つ  
の選択肢として頭の片隅に留めておいて頂戴」

紫は立ち上がり、片腕を水平に振るうと、今度は等身大サイズのスキマが口を開いた。

「突然お邪魔して御免なさい。それとお茶、御馳走様」

そして地上へと続くスキマに足を踏み入れた瞬間、意を決したように声がかかる。

「……………待ちなさいよ」

――  
隼斗は幻想郷と外界の境に来ていた。

住民にはあまり知れ渡っていないこの場所は、幻想郷の賢者とその式神が住まう屋敷が建っている。

尤も、場所が知れたところで発見できるかと言われれば定かではないが…。

「……で、首尾はどうよ、そっちの」

そう切り出した隼斗は湯呑みに入った茶を啜りながら尋ねた。

同じくして、席に着いている紫は端的に答える。

「最低に順調よ」

「どつちだよ」

「結果的に協力をこじ付ける形になってしまったと言うだけ。此方の話よ、問題ないわ。そっちは？」

「……まっ、似たようなもんだ」

何も無い天井を見上げ、仕事に一区切りつけた様に溜息を漏らす両者。

時間にして数秒の沈黙が続き、隼斗から先に細部の報告に移った

「俺が回った人里、紅魔館、妖怪の山、それで最後にお前と合流した地底共に喚起は済ませてきた。当日の戦闘人員の配置と非戦闘員の処置も問題ないはずだ」

「私の回った各所も同じく問題はなさそうね。……それより、あのおちじさんの予知夢で出たのはいつ？」

「明後日だ」

「……そう」

「不安か？」

「……………そんなこと、」

そう言つて一瞬視線を外した紫を、隼斗はジツと見つめた。  
やがて観念した様に、

「……………そうね。ちよつとどころか大分…、凄く不安、かな」

困つた様に、紫は笑つてそう答えた。  
誰が見てもわかる。明らかな作り笑いだ。

例えそれがやつと絞り出した虚勢だったとしても、彼女は幻想郷を担う賢者として、他者に己の心情を晒すわけにはいかなかった。

「……………色々、あり過ぎちゃったわね」

……………そう、目の前の男以外には。

「……………だよな」

以降、弱々しく項垂れていくその頭へ、徐に隆々たる腕が伸びる。  
その大きな掌は、やや粗雑に彼女の頭を撫でるでも無く、力強く包んだ。

「隼…斗…?」

その言葉自体には何の根拠もない。  
見知らぬ誰かが発したところで、悩みの種は微動だにしないであろう一言。

しかし信用に足る人物が口にして、初めて効力を発揮する一言。

「大丈夫だ」

「……………あ……………っ、」

小さく、響もしない悲壮の音が、ほんの一瞬だけ一室を包んだ。

〜

〜

「いい加減にしろ、何時までこんな茶番続ける気だ」

返り血を払い、隼斗は食傷気味に吐き捨てた。

足下には無数の亡骸が転がっている。

どれも圧倒的な打撃によって一撃の下葬られた死の天使の分身体……………、だけではない。

衝撃で吹き飛んだであろう欠損箇所こそあれど、その姿形は異なっていた。

『狩人』の様な装束、砕け散った『甲虫』の様な外殻、血に染まった『黒翼』、破砕した『梟の頭部』、風穴の空いた『巨軀』、焼け焦げた『魔道書』、へし折れた『三又の槍』……………、

「あら凄い！あつちで貴方のお友達が散々苦戦した相手をこうもあつさり倒しちゃうなんて！……………どうだったかしら？対戦ゲームの勝ち抜き戦みたいで面白かった？」

死の天使 サリエルはその光景を楽しむ様に語りかけた。それこそ手品を成功させた時の様な気軽さで。

「ほげげ」

次の瞬間、轟音が周囲一帯を揺るがした。

サリエルが空中で腰掛けるようにして浮遊していた場所に隼斗が立ち、拳を突き出している。

遙か前方では赤黒い何か米粒大になり吹き飛んでいく光景が見える。

「んもう、貴方の攻撃って距離を詰めるとかの過程がなくなつて、気が付いたら攻撃されてるから防ぐのが難しいのよねえ」

声のする方では、当たり前のように地面から浮き出てくる天使の姿があつた。

その様子を心底冷めた様子で見下ろす隼斗の表情には、明らかな苛立ちが垣間見える。

「逆にこっちも聞きてエんだけだよ、お前どうやったら倒せんのだ？」

「あら、それは自分で見つけなくっちゃっね。簡単に答えがわかつたら面白くないでしょ？」

間近で返答。

「もう飽きたつってんだよ」

再びサリエルへ向けて放たれた視認できない速度の拳。……だが此処で戦況に変化があつた。

ゴグシャアツツ!!! と、湿った音と共に、挟み込まれた六枚の翼がトマトを潰したように爆散する。

……だが、

「あつ、反応できた♡」

木っ端微塵になった身体の一部を意に介さず、サリエルは満面の笑みをこぼした。

「…………ツ」

小さな舌打ちの後、隼斗は拳を更に押し込み今度こそ本体の身体に風穴を開けた。

だが返ってくるのは粘土細工を指で押し広げるような感触と、後方で聞こえるせせら笑い。

これだけ身体を粉碎されても尚、死の天使は会話の続きを楽しむように口を開く。

「私は寧ろ楽しくなってきたわ。ふふっ……、だって、貴方の攻撃に応じられるようになってきたんですもの♪」

狂気の笑みだった。

己の死を、『死』だと認識していない。

最早戦闘を楽しむための一環として自身の命すらも扱っていた

「それにね、お楽しみはまだ終わってないわよ？あの子達も大半がやられちゃったけど、まだとっておきの子達が残っているもの♪」

両者の間で映し出されているモニターに視線が移る。

既に勝敗が決した七つの画面は消え、残り二つの状況が現在進行形で中継されていた。

『ゴアアアアアアアアアアア!!』

耳を劈く程の轟音。

画面の向こう側で傍若無人に暴れまわっている三ツ首の竜ドラゴンと、その周囲を飛翔し応戦する白黒魔法使いが彼の目に止まった。

(……魔理沙)

一方で博麗神社が映し出されている画面では、全身白い体表に覆われた人型の悪魔と、弟子である二人の巫女との苛烈な近接戦が繰り広げられていた。

(………異界に飛ばされてるこんな状況じゃ直接力は感じ取れねエが……、)

先程死の天使が口にした『とっておき』が示す通り、現在幻想郷に残る二体の天使軍の力量は……、

(比較になんねエぞっ……！今までの奴らとは！)

隼斗の額から、一筋の汗が伝う

## 157話 三ツ頭の竜

天使軍再来の前日。

魔法の森では比較的安全な入り口付近にポツリと建つ道具屋。

此処の店主である森近 霖之助は、併用家屋の居室で小難し気な本を片手に紅茶を啜っていた。

「……」

ふと視線を上げたその先で、アンティーク風の壁掛け時計が静寂な空間に一定のリズムを刻んでいる。

(……明日、か)

ほんの数秒の間において、再び視線は文字の羅列へと戻った。

今日は、天使軍再来の前日だ。

「……」

……にも関わらず、別段慌てた様子も無ければ、表立って戦慄する素振りは見られない。

紅魔の主が告げた日時まで、残り半刻。

こうして普段通りの一日を終えようとしている彼だが、その傍らには一振りの抜き身の剣が立て掛けられていた。

「……」それは数年前のある日、顔馴染みの少女が此処へ持ち込み、汚い剣と称して彼へ押しつけていった剣<sup>もの</sup>。

外見は少女の言葉通り、薄汚れた翡翠色をしており、両刃ではあるが下半分は間隔の広い波刃。刀身は柄と一体化しており、左右に僅かに突起した一部が、鏢の役割を担っている。



そんな、見た目彫刻の様な剣を手にとった瞬間から、森近 霖之助は知っていた。

日本古来、伝説の怪物の亡骸より出でし三種の神器が一つ。

その剣を、香霖堂の店主は敢えてこう呼んだ。

……『霧雨の剣』。

くくく

魔法の森中央より、烈風が吹き荒れる。

周囲の木々が外側に向かって煽られ、今にも地面から引き剥がされそうに靡く。

この風が台風などの気象によるものではないと知っているのは現場に居合わせている者くらいか。

「ゴアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

空気を震わせる咆哮が響く。

「……参ったな、羽撃くだけでこれかよ！」

思わずそう漏らしたのは、吹き荒れる風に耐えながら周囲を飛行する霧雨 魔理沙。

『魔理沙、出来るだけ彼奴の斜め後方へ張り付く様に飛んで。決して向かい合っては駄目よ』

少女の頭の中でそんな言葉が響く。

眼下に視線を向けると、同じ様に此方を見上げる金髪の少女の姿があった。

『わかってるよ。魔界でその危険性については学習済みだぜ！』

『こら、余所見しない！』

親指を立ててニカツと笑った少女を咎めたのは、現在暴風吹き荒れる状況下での意思疎通を容易にする為、念話の魔法を発動しているアリス・マーガトロイド。

七色の魔法使いと称される一方で、凄腕の人形師でもある彼女の周囲には、両手に剣を装備した約一丈程の巨大な人形が複数展開されていた。

「スペルカード風に言えば、完成版『ゴリアテ人形』ってところかしら」

人形の四肢には魔力で練り上げられた糸が接続されており、それを手繰るアリスの指の動きに合わせて、巨大人形兵士・ゴリアテは飛翔した。

まるで本物の人間の様に滑らかな動きで剣を構え、宙を漂う巨影へと向かっていく。

「！」

三ツ頭アジ・ダハーカの竜は迫る気配を感じ取り、ギョロリと紅く光る眼光をゴリアテへと向けた。

そして、その三ツ頭の内の一つが大口を開ける。

カツツツ!!! と、閃光が走った。

周囲の音が掻き消され、一瞬遅れて凄まじい轟音が響き渡る。

「ツツ！……なんっ!？」

魔理沙の目が見開かれる。

途端に立ち込める黒煙。

眼下の森では一番背の高い樹木がぱっくりと割れ、炎上していた。地上のアリスから念話が入る。

『驚いたわね。自然界でも中々お目に掛かれない雷だったわよ』

「アリス……！無事か!？」

念話に対して思わず叫んだ魔理沙とは対照的に、アリス落ち着いた物腰だった。

「運良く頭上には降ってこなかったわ。でも早速一体は消し炭よ」

供給先との接続が途切れた指先から糸を捨て、近場に置いていた新たな人形を手繰る。

更に、先の一撃の間に生き残ったゴリアテ人形を操作し、空中で敵を追蹤する魔理沙と合流させた。

『もしもの時はその子の後ろに隠れなさい』

言つて、新たに繋ぎ直した人形を再び飛翔させる。人形達は特殊な技法と操作方法によつて、其々が複雑な動きを実現している。

それらを全て把握し、操作しているアリスの手練もそうだが、それ以上に求められる集中力も膨大である。

(……さっきの雷は莫大な魔力を含んでいた。つまり魔法……！普通なら高度な技術が求められるあのレベルの魔法をあんな竜ドラゴンが!?)

その手に戦闘の基点となる八卦炉を握り締め、魔理沙は今一度気を

張り直した。

一度は焼け焦げ、森近 霖之助の手によつて再び彼女の手に戻つた、相棒とも言うべきマジックアイテム。

「……………やっつてやるぜ!!」

少女は跨がる箒の頭を持ち上げ、三ツ頭アジ・ダハーカの竜の背部へと移動すると、八卦炉を突き出し魔力を集束させる。

今や、風見 幽香と並び彼女の代名詞とも言える攻撃特化の魔法。

『『マスタースパーク』!!』

視界が閃光に包まれ、極太のレーザーが射出された。

その出力は以前のものより大幅に強化されており、それを放つ八卦炉の耐久値も飛躍的に上がっていた。

魔砲は狙い通り三ツ頭アジ・ダハーカの竜の背を捉え、まるで巨大な手筒花火が間近で炸裂している様な熱気と火花を撒き散らしていく。

「グルル……………」

轟音に、低い唸り声が混ざる。

それはどこか不機嫌そうな、それこそ顔の周囲を飛び回る蠅に苛立ちを覚える様に。

徐に振り返つた三つの頭、その内の中央が大口を開けた。

「……………ッ!?!」

口内を中心に、凄まじい熱風が吹き荒ぶ。

何が来るかは容易に想像できた。

ドラゴン 竜と言われれば、誰もが真つ先に思いつくであろう攻撃手段。

『魔理沙、下がって!!』

アリスの言葉の後に視界一面を大きな影が覆い、自身に追従していたゴリアテ人形が背負っていた円形の盾を構え、竜との間に割って入ってきた。

「……」

魔理沙は一瞬だけ躊躇した。

敵の魔法は発動間際。

先程の雷撃の威力から見て、幾ら盾で防御したとしても目の前の人形が耐えられるものではないだろう。

ならば自分が取るべき行動は二択。

一つ、此方も魔砲を放って相手の威力を削りながら安全圏に避難する。

二つ、人形に一秒でも多く耐えてもらい回避に全力を注ぐ。

(……どっちも似た様なもんだ!!)

魔理沙は間髪入れずに八卦炉を真横に向けた。

本来ならば筈の後端に取り付けて加速する移動技だが、生憎とそんな猶予は残されていない。

ゴオツツツ!!! と、八卦炉を通して凄まじい衝撃が少女の細腕を伝う。

だが出力を調整して打つ暇などなかった。

結果、魔砲によるブースターが功を成し、直後に放たれた極大の火炎魔法の軌道から逸れることができた。

その業火によって立ち塞がったゴリアテ人形は灰塵へ変わり、直線上の地形は瞬く間に焦土と化した。

(……なんて威力だ!?こんなのとまともに衝突してたら命が幾つあっても……)

視界の端の光景に狼狽しつつも、態勢を立て直すべく出力を弱め始めた瞬間、再び魔理沙の身体は熱気に晒された。

「!?」

敵の背後に回る様に退避した魔理沙の周囲に浮かぶ無数の球体。

まるで小さな太陽の様なそれは、ボコボコと沸騰しながら膨張していく。

(やばい)

その今にも炸裂しそうな爆弾に合図を送ったのは、ガチンツ！と  
言う牙と牙が衝突する音だった。

——直後に魔法の森一帯を大規模な爆発の嵐が襲う。熱風と衝撃波は一瞬で木々を薙ぎ払い、爆心地を中心に巨大なクレーターを作り上げた。

「……まったく、無茶をしてくれる」

黒煙と砂煙が周囲を包む中、冷静でいて悠然とした言葉が発せられた。

……男の声だ。

声の主は抱えていた白黒魔法使いの少女を自身の背後へ降ろした。

「……………」

少女から思わずそんな声が漏れた。

傍らに立つ人形師の少女も同様に目を見開いている。

「魔理沙、少し前に出過ぎだよ。これ程の相手なんだ。もっと慎重に行かなくてはね」

諭す様に言葉を発した銀髪眼鏡の男が立つ線から後方は、あれ程の爆発があつたにも関わらず、一切の被害を受けていなかつた。

その手に持つ彫刻チツクな剣を前方へ掲げ、森近 霖之助は静かに構える。

「前衛は僕が引き受けよう」

## 158話 魔を払う

森近 霖之助は三ツ頭アジ・ダハーカの竜を見上げながら、ゆっくりと間合いを詰めた。

その手に握られている彫刻チックな剣は、武器と呼ぶには心許ない。

「こ、香霖……！」

そのあまりにも大胆極まる行動に憂慮な面持ちで構える魔理沙へ、霖之助は振り返ることなく、ただ一言呟いた。

「大丈夫」

直後だった。

周囲は再び熱気に包まれ、三ツ頭アジ・ダハーカの竜中央の口が開かれた。

アリスと魔理沙は途端に身構え、いつでも飛翔する態勢を整えたその瞬間――。

「二人共、次で攻撃だ」

飛び立つ筈へ飛び乗る様にその場から脱した魔理沙の瞳はその瞬間を捉えていた。

今まさに吐き出された火炎の渦へ降り抜かれる翡翠の剣を。

周囲に複数の人形兵士を展開しながら空中へ飛び出したアリスは、その光景に目を見開いた。

それは、男に迫る業火を迎え撃つ様に出現した、同出力の炎の波だ。

「!？」



結果、ぶつかり合った二つの炎は、互いに相殺し合いながら消失した。

その光景に、目に見えて三ツ頭アジ・ダハーカの竜は驚愕した反応を見せた。

「今だ!!」

間髪入れずに霖之助が叫ぶ。

その言葉へ続く様に、左右から回り込んだ二人の少女が其々反撃の火蓋を切った。

『ダブルスパーク』

『キューティ大千槍』

三ツ頭アジ・ダハーカの竜の背部へ、二つ同時に放たれた魔砲が。

鱗の薄い腹部へ、複数のゴリアテ人形による無数の刺突が、それぞれ炸裂した。

そして強固に覆われた竜鱗が砕け、赤紫色の血飛沫が舞う。

「ギツ…!!」

「効いてるぞ!!」

「ええ!!」

漸く明確なダメージが入った。

魔理沙とアリスは宙を舞う返り血に構わず、更なる追撃のために前へ出た。

ぽつりつ、と。

箒の柄の先端に、先行していたゴリアテ人形の一体に、赤紫色の血液が付着した。

ゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾツツツ!!

その瞬間、二人の視界一面を黒く蠢めくナニかが覆った。

それは瞬く間に増殖し、血の染み込んだ箒や一丈もある人形兵士を呑み込むと、跡形もなく溶解させた。

「ツツ!?!」

——もしも咄嗟に箒から飛び退いていなかったら。

——先行していたのが人形ではなく自分だったら。

そんな起こり得た未来に青ざめながら、二人の魔法使いは改めて眼前でぐねぐねと蠢めく黒い物体の正体を知った。

「蛇……ツ!?!」

対象が消滅し、重力に従い落ちていく蛇球は、役目を終えるかの様に四散していく。……それも同時に高濃度の瘴気を撒き散らしながら。

「冗談じゃないぜコイツ! 返り血が毒蛇に……ツ!?!」

『僅かな量でも命取りね! 魔理沙、一旦距離を取って態勢を……、』

念話は、割り込む様に発せられた咆哮によって掻き消される。

「ゴアアアアアアアアアアアアアア!!!」

凄まじい轟音は、やがて魔法陣を形成した。莫大な量を練り込まれた魔力から成るそれは、最早魔法のエキスパートである魔理沙やアリスですら判別し切れない程の数だ。

そして凄まじい眩耀。

まるでスポットライトを浴びているかのような圧迫感は、落雷、燃え盛る星、鋭利な風鎌、雪崩れ落ちる氷塊等、様々な魔法の雨へと変貌して殺到した。

『むかひび  
向火』

そんな苛烈な嵐へ再び割って入った男は、先程と同様翡翠色の剣を振るった。

狙いは周囲を薙ぎ払う様に撒き散らされた魔法全体では無く、飽くまで眼前に迫る一部へ。

その魔法が『隕石』だろうが『氷塊』だろうが関係はない。  
重要なのは、種類が一つに絞られていることだった。

結果、一箇所に集まった3人の下へ飛来してきた落雷は、全く同じ雷撃によって相殺された。

周囲では次々と数多の魔法が着弾していく。  
それはまるで、爆撃地の真っ只中に置かれている様だった。

「……………香、霖…？」

半ば放心状態の魔理沙は、ふと自分の身体に巻き付いている物を目で追った。

糸は自身の胴体から目の前の男の手に。そして反対側で同じくその光景を眺めている人形師の少女にも巻き付けられていた。

アリスはその糸に見覚えがあった。

日常から、そして今戦闘間でも自身の指先と人形達を繋いでいる、魔力で構成された糸だ。

「二人共、よく聞いてくれ。今から奴に関する僕の見解を述べる」

霖之助は背中を向けたまま語りかける。  
今も尚押し寄せる雷撃を防ぎながら。

「まず特筆すべきは、扱う魔法の数と魔力の高さ。実際に見て分かる通り、一切の詠唱もなしにこれ程大規模な魔法を連続して使える者は早々いるものじゃない。……まあ、精度はあまり高くはないみたいだけどね」

正に一国を滅ぼしかねない規格外の魔力量。

しかし霖之助の言葉通り、強いのは飽くまで『銃』と『弾』であるということ。

大量の魔法を一括で叩き込まれていたら、今頃彼女らは原型をとどめていないかも知れない。

「併せて耐久力も恐ろしく高い。少なくとも、正面切って打ち込むならマスタースパーク二発分で漸くダメージが入ると言ったところか」

霖之助は「それに」と付け加え、先程少女等が負わせた胴体を指した。

「君達は確認する余裕がなかったようだけど、奴の傷口が塞がったのは蛇の出現と同時だった」

つまりものの数秒。

二人が攻撃に成功し、次の一手に移ろうとした瞬間には修復されていたことになる。

更に厄介なことに、与えた傷口から猛毒の蛇まで飛び出して来るのだから、自ずと戦い方が限定されてくる。

「……間も無く攻撃が終わる！二人共準備してくれ！」

「じゅ、準備ってどうすればいいのよ!?迂闊に近づいたらそれこそ

……！」

「待てアリス！……香霖、何か作戦が？」

次第に薄れていく爆撃の様な衝撃と轟音の中で、霖之助は力強く頷いた。

大気を震わせる咆哮が幻想郷の空へ響く。

この地に放たれた数多の天使軍も、残すところ二体にまで迫っていた。

弓を射る者、未来を見通す者、智によって敵を惑わす者、武を極めし者。

其々が各地に攻め入り、激闘を繰り広げた結果、敗れた。

しかし…、その散っていった者達の中に『将』、つまり統率者を名乗る者はいなかった。

……時同じくして、既に現出しているのに、だ。

その者は其々の地で指示を出すこともなければ、後方地域で命令を送るわけでもない。

『彼』にも、任務はあった。

「……特記戦力を除けば、この地の守護者はお前達なんだろう？」

全身が白い体表で覆われた悪魔は、大きく広げた天使の様な翼を折り畳みながら、退屈そうに尋ねる。

「いいのか？これ程あっさり膝をついて」

深紅色に染まった瞳を動かし、眼前で蹲る標的を見据えるは、天使軍の統率を一任された魔の根源。

「……………霊夢。彼奴の『眼』……………」

震える四肢に一層力を込め、後方の少女を護るように立ち上がったのは、博麗の名を継ぐ武闘派巫女、博麗 暁美。

「……………わかってる。これだけ晒されればね！」

同じくして、現博麗の巫女である少女、博麗 霊夢は、懐から数枚の護符を取り出して視線の先の悪魔を睨み付けた。その視線に応える様に、白い悪魔は口を開く。

「……………わかってる？何をだ？」

淡々とした声色。

「アンタのその、命をゴリゴリ削いでくる眼のことよ……………!!」

吐き捨てる様に言った霊夢の手から、先程取り出した護符が離れる。

その一枚一枚が光を帯び、二人の巫女の身体を包んだ。

「《浄化》、か。……………聖女らしいことだ」

白い悪魔は此処へ来て初めて臨戦態勢に入った。

「常人なら、命が尽きるまで一瞬だ。……………俺が『待った甲斐があった』  
と思える様、精一杯足掻いて見せてくれ」

汗が伝う額を拭い、暁美は空気を含む様に拳を握った。

「わかってると思うけど、奴の吐く息も最悪よ。あれ程濃い瘴気は無  
い」

霊夢は黙って頷いた。

そのまま相手の出方を伺いつつ飛翔する。

暁美の身体全体を、霊力によって視覚化された『気』が覆う。

「楽しませてみる」

白い悪魔<sup>サタン</sup>の背後で複数の魔法陣が出現し、大規模な爆発が起こったのは同時だった。

「いきなり無茶苦茶やるわねコイツっ!!」

爆炎を振り切り、急加速で躍り出たのは、先代博麗の巫女だ。

霊力の凝縮された拳を突き出し、サタンの顔面へ向けて打ち放つた。

ボツツツ!!! と、拳の直線上の大気が裂け、凄まじい衝撃波が突き抜ける。

「人間にしては、速いな」

空虚な手応えを感知するよりも早く、暁美の視界を白い掌が覆い、それを突きつけられている額は熱を帯びた。

「……ッ!!」

暁美は未だ態勢の整っていない身体を無理矢理捻り、寸でのところで反り返した。

瞬間、見上げた視線上で閃光が走った。

(ぐっ、しまった……！目を……！)

黒い影の様な残像が視界一面に広がる。

そのあまりに強い光度は暁美の視界を一時的に潰し、そんな隙を見逃すはずのない悪魔の腕が頭部に向けて振るわれた。

「つつああああ!!」

叫び、暁美は碌に見えていない瞳を閉じた。

そして正確に、横薙ぎに振るわれた腕を側面から足裏を合わせて斜め上へ弾いた。

「……ほう？」

「なめるなよ化物。これでも近接戦闘能力は歴代でも指折りだつて言われてるのよ！」

未だ目が眩んでいる中で、暁美は姿勢を低く構える。

そして一瞬の脱力。

——『内臓破壊』。

トップスピードが音速に達し、空気を破裂させながら、身体の内部に衝撃を伝播させる防御不能の拳がサタンの胴体へ打ち込まれた。

だが返ってきたのは……、

「音速程度では遅すぎる」



「つが……ッ!？」

凄まじい衝撃が身体全体を巡った。

何が起こったかを感じる前に、暁美は血反吐を吐きながら吹き飛ばされ、石畳へ叩きつけられた。

(……殴られたのか？あの一瞬で!？先に出した私の拳よりも速く打撃を……!!)

石畳が砕き割れ、クレーターが形成される程の衝撃を受けても尚、痛みに悶えている暇などない。既に次が来ている。

(今ので壊れんか。この世界の奴は中々に頑丈で……)

手負いの巫女目掛けて高速で接近していたサタンはそこで思考を切り、横合いから飛来してきた陰陽玉を片手で砕き割った。

「暁美姉さん!!」

常軌を逸した戦闘速度に漸く追い付いた博麗 霊夢は、無数の御札を射出しながら両者の間に割って入った。

その身体は不鮮明に揺らぎ、心なしか透化している様に見える。

既に、『夢想天生』は発動していた。

霊夢の指先が空を走り、一拍遅れて煌びやかな文字が浮かび上がる。

カッツ!!! と、サタンを中心に直径20メートル程の円枠が地面に出現した。

『八方龍殺陣』

光そのものが間欠泉の様に上空へ伸びる。

そうして形成されたのは、何重にも重ねられた緋色の結界。

これは博麗に代々伝わる強力な結界術であるが、以前の霊夢ならば発動までに戦闘に於いては致命的な時間を要し、幾つかの『御札』を配置しなければ発動できなかった。

「捕まえたわよ」

霊夢は額から一筋の汗が伝いながらも、僅かに口角を上げて言った。

現在の発動にかかる所要時間は一秒にも満たない刹那の所作で終わる。

強度とて以前とは比べ物にならないほど飛躍的に向上していた。

これ程の速度ならば、発動を確認してから抜けられる者などこの幻想郷にはそうそういないだろう。

「そうだな。……で、この後のことは考えているのか？」

……そう。幻想郷では、だ。

パキツ と、陶器にヒビが入る様な乾いた音が鳴った。

白い悪魔は対象の行動を抑制する結界の中で、静かに掌を内側の壁へ押し当てながら呟く。

「開通だ」

次の瞬間には砕き割れた結界の残骸が宙を舞った。

その最初の一欠片が地に着く前に、白い悪魔の貫手は霊夢の胸を貫いていた。

「……………なに？」

貫手が少女の身体と重なっているのに貫通していない。

そんな視覚と触覚による矛盾に、サタンの動きが一瞬停止する。

「本命はこっちよ!!」

今度は霊夢とサタンを中心に霊力で形成された巨大な陰陽玉が炸裂する。

既に書き終えていた『印』が、霊夢の背後で浮かび上がっていた。

零距离で高威力の霊術をその身に受けたサタンの身体は、反発する様に後方へ押し下げられた。

「……………」

直前に挟み込んだ掌は、焼け付く様な痛みと灰の混じった煙があがっている。

(……………退魔の力か。中々に厄介……………)

掌から視線を戻そうと再び前方へ目を転じたサタンの眼前に、高濃度の霊力を纏った武闘派巫女が迫っていた。

—— 『瞬 関』 ——

博麗暁美渾身の拳が、統率者の腹部に突き刺さった。

## 159話 穢れと浄化

三ツ頭の竜アジ・ダハーカによる破滅の雨が止んでから一秒と待たずして二人の魔法使いの少女は飛び出した。

三ツ首の内、向かって右側の頭が白黒カラーの少女を、左側が巨大な人形を従えた西洋ドレスの少女をそれぞれ捉えている。

対して、中央の頭は残る銀髪の男を視てはいない。その大口を僅かに開け、喉を鳴らすように顎を上げた。

その直後、両側の二つの頭が魔法を使う為に大口を開けた。

『『司令塔』……、君だな』

不意に聞こえた男の声に、中央の頭はハッと顔を上げた。

ズンツ……!! と、眉間に鈍痛が広がる。

思わず瞳を閉じた中央の頭は、霞む視界の中で己に剣を振り下ろす男の姿を捉えた。

しかし、刃の整っていない剣では肉を裂くには至らない。

……だがそれでよかった。

「やはりね」

『三種の神器』の内の一つを振るう道具屋の店主 森近 霖之助は、いつの間にか発動仕掛けていた魔法を止めて無意味に口を開閉するだけの両側の頭を見遣り、口角を上げた。

「よしー退いてろ香霖っ!!」

魔理沙は八卦炉を構え、三ツ頭の竜アジ・ダハーカの左上方から叫んだ。

それと同タイミングで、右側から大きな影が高速で動く。

大剣を構えたゴリアテ人形が、猛毒の血飛沫に構わず横一線に三つ

並んだ巨首を切り裂いた。

「魔理沙っ!!」

アリスは巧みに指先を操り降り注ぐ毒血から人形を回避させると、もう片方の手に握る物を力強く引いた。

それは人形を操っている糸とは別の『糸束』。末端のもう一方は今し方攻撃の為に飛び出していったゴリアテ人形の片腕に繋がっており、鋼線のように張り詰めた糸束は、首を裂かれて文字通り首の皮一枚で繋がっている三ツ頭アジ・ダハーカの竜の首を三本まとめて括っていた。

バツンツツ!!! と、今度こそ三ツ頭アジ・ダハーカの竜の首は三本まとめて宙を舞う。

再び毒蛇へと変貌する血飛沫が飛ぶが、その場にいた全員が既に回避行動を取った後だった。

『ドラゴンメテオ』!!!」

上空より極太の魔砲が降り注ぐ。

一見光の柱の様にも見えるそれは、一瞬で宙を舞う三ツ頭アジ・ダハーカの竜の首を飲み、空中の胴体部を巻き込んで地上へ叩きつけた。

「追撃だ!!」

「わかってる!!」

魔理沙は八卦炉に一層魔力を込め、両手と全体重で支えながら更に魔砲を打ち放つ。

——『マシンガンスパーク』。

立て続けに光の爆発が二度三度炸裂した。

……視界一面を砂塵が舞う。

「グル、ルルルルル……！」

後、  
地の底から響く様な、憤怒の混じった唸り声とその場を包んだ直

「ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアア!!!」

咆哮は砂塵を吹き飛ばし、上位の風魔法を思わせる程の突風を巻き  
起こした。

「ッ!?そんなのアリか……!?」

上空で逸早くその姿を捉えた魔理沙は額に汗を浮かべて呟いた。

一拍遅れて霖之助とアリスも同様に目を見開く。

「黒い……鱗?」

まるで黒曜石の様な光沢のある体表に加え、赤黒く光る眼光が  
アジ・ダハーカ  
三ツ頭の竜の動きに合わせて軌跡を描いていた。

断ち切られた筈の首は繋がりに、その風貌は以前よりも禍々しさが増  
している。

「体表を硬化させたのか?あれだけのマスタースパークで傷一つ入っ  
ていないなんて……!!」

アジ・ダハーカ  
三ツ頭の竜中央の頭が喉を鳴らし、今度は三ツ首全てが大口を開け  
そうして驚愕する間もなく次の動きがあった。

る。

キイイイイイツツ!!! と、それぞれの口に赤黒いエネルギーの塊が蓄積されていく。

三つのエネルギー体はやがて一つの巨大な球体を形成し、空間全体を震撼させた。

(マズイツ!?)

霖之助が直ぐさま二人を呼び戻そうと口を開いた瞬間、既にその少女等は後方まで下がってきていた。

「あとよろしく!!」

示し合わせたような見事なハモりっぷりに、やや表情を引きつらせながらも霖之助は剣を構える。

(……アレだけの規模、返せるか?)

思考する余裕はない。

一定の大きさに膨れ上がった赤黒いエネルギー体は、一拍置いて発射された。

その瞬間周囲の木々が薙ぎ払われる。

そして凄まじい圧迫感が押し寄せる中で、霖之助は剣を振るった。刃の軌道上から同色の波動が打ち出される。

波と球体が衝突し、間近で大規模な爆発が起こった様な衝撃波と轟音が少女等の耳を叩いた。

「くっ!?!やはり強い、な……ッ!!」

本来ならば同様の性質と出力をぶつけて相殺する『霧雨の剣』固有

の力。

しかし、三ツ頭アジ・ダハーカの竜の放った赤黒いエネルギー体はまるで対象を侵食する様に蝕む特性があるようで、互いが互いに侵食し合い、中々打ち消すことができない。

何より『打ち負けることは無く』、『打ち勝つこともできない』、『同等の力』が仇になっていた。

「…の、野郎オ!!!」

真後ろから衝撃が突き抜け、『霧雨の剣』の黒い波動と並ぶように魔砲が打ち出された。

頭上で炸裂した魔砲に髪先をチリ毛にされた霖之助は文句を言うとうとしたが、彼女の行為が功をなし、出力を上回った『向かい火』は赤黒いエネルギー体を打ち消した。

「……………まあ、結果オーライか。それと魔理沙、マスタースパークそを打つのは良いけど、ちゃんと使用回数の上限から逆算してるかい？」

「へ?……………あ、ああ勿論!…この霧雨 魔理沙、同じ轍は踏まないんだぜ」

そう言ってひっそりと使用回数を数え始め、危うく同じ轍を踏みかけた少女を尻目に霖之助は今一度思考を凝らす。

(あの硬質化は魔法によるものか?…どの道マスタースパークを跳ね返す防御力は厄介だ)

しかし、そこに一つの確証があった。

(だがあの瞬間、硬質化を使ったことは少なくとも有効ではあるらしい。……………奴の再生能力にも限度はあるっ!)



となれば、当面の課題はあの体表を貫く手段だ。

現状ではマスタースパークを幾ら打ったところで傷一つ付けられないのだから。

ふと、アリスは白黒少女の持つ八卦炉を見つめながら尋ねた。

「ねえ魔理沙。貴方お得意の魔砲、『スパーク』って付くくらいだから物体を伝導することは可能かしら？」

「伝導……？さあ、どうだろうか」

「二人共、作戦会議は一旦中止だ」

視線を変えずに耳だけを貸していた霖之助は会話を遮った。

ハツとなった二人の少女は、今にも魔法を発動せんと大口を開けている三ツ頭アジ・ダハカの竜を見遣り、直ぐさま離脱態勢に入る。

「続きは念話で知らせるわ!!」

「えーい畜生め!!」

直後に魔弾の嵐が殺到した。

再び弾丸飛び交う戦場の真っ只中へ飛翔した魔理沙等は、狙い撃ちにされないよう不規則に弾幕の隙間を潜り抜けていく。

「!？」

弾幕の一つが間近の木々に触れ、その部分が一瞬で消し飛んだ。……かと思えば被弾した地面の一部がどろどろに融解した。

（おいおい、今までの弾幕ごっこ感覚でやってたらあつという間にお釈迦だぞ……）

『魔理沙、霖之助さん』

唐突に入ったアリスからの念話。

正直言ってあまり悠長に聞いている余裕がない魔理沙は、半ばヤケクソ気味になりながら返答する。

『ああもう！何でも来いやアア!!』

砲弾でもぶつ放したかのような轟音と同時に、凄まじい速度で白い悪魔の身体は地面へ叩き込まれた。

博麗 暁美は拳を振り抜いた姿勢のまま深く息を吐いた。

未だ拳に残る確かな手応え。

防御はされていない。確実に決まった。

……にも関わらず、

「……外された」

小さく吐き捨てられたその言葉が示す様に、舞い上がった砂塵から一つの影が立ち上がる。

影は当たり前の様に歩みを進め、再び博麗の巫女二人の前に現れた。

「凄まじく速い、そして重い一撃だった。さっきまでの軽い打撃とは別物だな」

サタンは淡々と口にする。

腹部には確かに『瞬間』が炸裂した形跡がある。

だがそれをダメージとして数えていない。

「白々しい。だったらもう一発打ち込んであげるからちやんと受けてみる？」

「おや、気付いたのか」

その隣で怪訝な表情を見せる霊夢へ、暁美は小さく呟いた。

……『博麗の加護が効いていない』、と。

暁美は背部から高濃度の霊力を発生させ、態勢を低く構えた。

それを見たサタンは薄く笑う。

「上、中、下段、どれが来ても対応できる構えということか。今更そんな対人用の武道ゆうぎが通じるとでも？」

「遊びかどうか決めるのは後にしなさい」

言い終わるや否や、暁美の足下が凄まじい衝撃を受けて爆散した。『瞬間』による加速が彼女の身体を音速の数倍にまで引き上げ、振るう手足に大地を割る程の撃力を与えているのだ。

一瞬にして目の前から消失した暁美は、周囲に烈風を纏いながらサタンの背後をとった。

パパパパンツツツ!!! と、立て続けに空気の弾ける音が木霊する。

だが音速を超えて動いている彼女の姿は既にそこにはない。

サタンの周囲を回り込む様に、しかし一切の姿を見せず、残像だけを残して徒手による弾幕を打ち込んでいく。

「しっ!!!」

次の瞬間には白い悪魔が顎を打ち抜かれ宙に浮いていた。

刹那、宙に浮いたサタンを追い越し空中へ先回りしていた暁美の拳

がその腹へ深々と突き刺さる。

——『四連発勁』。

サタンの身体がくの字に折れ曲がり、凄まじい速度で地面へ叩き込まれた。

「……………遊びかどうか決めるのは後にしろと言ったな？」

地面に身体をめり込ませたまま、サタンは淡々と口にした。その声色にはこれといって消耗した様子は感じられない。

やがて何事もなく上体を起こしたサタンは、静かに立ち上がると溜息を吐きながら身体についての砂埃を払った。

「未だ考えは変わらないが、それで終いか？」

言葉と同時にサタンの姿が消失する。

暁美の脇腹に鋭い一閃が走った。

「がつ!？」

急激に視界が振れ、気がついた時には身体が錐揉み状に吹き飛んでいた。

「俺は『武』を知らんが、こうして武を極めたであろうお前を力任せに蹴り飛ばすことができる。故に、戦闘に於ける武道が理解できない」

脚を振り上げたままサタンは吐き捨てた。

視線の先では地面を何度も転がりながら、息も絶え絶えに態勢を立て直そうとする巫女の姿があった。

……………突如視界の端が瞬く。

『夢想封印』!!!」

隣に立っていたもう一人の少女が巨大な陰陽玉を複数打ち出した。煌びやかな光を発しながら殺到したそれは、間近にいた少女を巻き込む形で炸裂する。

「そこで転がっている巫女が言っていたらう?」

サタンは未だ終わらぬ光の爆発の中を構わず歩く。

「既に加護が切れている、と」

言って、少女の目の前に立った。

か細い首筋へ容赦なく鋭利な爪が振るわれる。

しかし、『夢想天生』の効力により一撃は透過して空を切った。

その余波によって、背景の木々や地面が碎き割れる。

「面白い術を使う。だが先程もう一人を蹴り飛ばせた、となればそれはお前固有の能力ちからと言うわけだ」

徐に白い魔手が伸び、掌から黒い炎が湧き出した。

唐突に冷ややかな汗が背を伝う。

「っ!」

霊夢は反射的に飛び退いた。

そして異変に気付く。

髪飾りのリボンの一部が黒く変色していた。

『あらゆる事象から浮く』という影響は、身体だけでなく身に纏っている衣服にまで及んでいるはずなのに、だ。

「お前達程度では払うことはできんさ」

サタンが掌を掲げた。

瞬間、手中に収まっていた黒い炎が一気に20メートル近くまで膨れ上がる。

間隙はなかった。

まるで会話の一部と言わんばかりに、少女を確実に死に追いやるであろう火球が打ち出された。

「霊夢っ!!」

少女と火球の間に割って入ろうと暁美は全力で地を蹴った。  
だがその直後……、

「!」

目が合った。

今まさに死が迫っている筈の少女と。

「……………ああ、わかったよ霊夢」

暁美は急遽方向を変えた。

伸ばしかけた掌が握り込まれる。

その矛先は……、

……………衝撃が走った。

この場で起きたことは二つ。

一つは少女に差し迫っていた火球が、蠟燭の火を吹き消した様に消  
失したこと。

二つ目は悪魔が血飛沫を上げて吹き飛んだこと。

「な、に……ッ!？」

サタンは受け身を取ることも忘れ、仰向けで倒れ込んだ。頬がじん  
わりと熱い。その感覚自体、久しく感じていなかったものだ。

「漸く『1<sup>ワン</sup>ダウン』、貰ったわよ」

顔を刺す痛みと自身を見下ろす女の言葉で漸く気が付いた。

——殴られて傷を負った。

(……加護は、打ち消した筈だ。何が……)

上体を起こした視線の先で、淡い光に包まれている少女の姿があっ  
た。

その背後では薄っすらと人の形をしたナニかが佇んでいる様に見  
える。

「!」

ハツとなって掌を見遣る。

答えはすぐに出た。

『かむなおびのかみ神直毘神』

ふと、霊夢が口にした名前。

それはサタンのとある力を弱めた『神』の名であった。

「そつちだけ何時までも無傷じゃズルいでしょ？」

霊夢は自身の『夢想天生』を柵に上げて言い放った。

彼女がその身に纏うもう一つの力。

『神』を己が身に降ろすことで、力の一端を使役・借りることの出来る  
神霊術。……その名を、

——『神降ろし』。



## 160話 神の魔剣

体表の硬質化によって最も火力の高い魔砲ですらダメージの通らない中、魔理沙は必死にそのチャンスを伺っていた。

あらゆる手段を思考した。

『鱗』で身を護る蛇や蜥蜴などの爬虫類は比較的腹部が軟弱だ。

目の前の竜ドラゴンにその様な部分は見られない。

外殻が堅牢であるということは、身体の内部は脆いと吐露しているようなもの。

となれば一番手っ取り早いのは、魔法を発動するために大口を開けた時……、つまり自分から弱所を曝け出した瞬間を攻撃すればいい。だがそれは、今まさに弾が発射されようとしている銃口の前に飛び出していくのと同じこと。

一か八かを仕掛けるにはあまりにリスクだ。

霖之助は人形師の少女が操る巨大なゴリアテ人形と並ぶ様に立ち回っていた。

その手に握る三種の神器が一つ、『草薙の剣』から所有者と認められている彼の攻撃手段だが、別段強力無比な技が放てるわけでも、全てを斬り裂く切れ味を持っているわけでもない。

元々戦闘で扱う武器としての逸話が少ないこの剣は、『向火』の様な返し技ができてでも先行的に攻撃する術が欠けている。

だからと言って、現状並走している人形に攻撃を代替わりさせているわけではなかった。

(……やれやれ、上手いくく保証はないんだけどね)

視線の先で人形を操る西洋ドレスの少女と目が合った。

(あまり私好みのやり方じゃないけど……)

アリスの繊細な指先が器用に動く。その先に繋がる複数のゴリアテ人形が、三ツ頭アジ・ダハーカの竜の周囲を縦横無尽に飛び回った。

すると、視界の端でちよろちよろと動く目障りな人形へ敵の狙いが向くのは必然。

まるで大木の様な尾を振るい、巨大な鉤爪をもって打ち落とそうと暴れ始めた。

(思った通り。まとりつく様に動き回れば魔法は使われない。)

簡単な話だ。

目の前を飛び回る羽虫を相手に、態々銃を使う者はいない。

単純だが、相手が獣の類であるならばこの作戦は有効だろう。

『魔法』という最大の脅威を封じることができた。思い付きの作戦としては十分過ぎる成果だ。

——だが、彼女等の思惑は別にあつた。

「ゴ、ア……ッ!？」

突然、三ツ頭アジ・ダハーカの竜の動きが鈍くなった。

まるで錆びついた歯車の様に、自由の利かなくなつた身体をぎこちなく震わせる。

その巨軀に、先程動き回っていた複数のゴリアテ人形の背から伸びる幾十にも束ねられた魔糸が網目状に纏わりついていた。

三人は一斉に身構えた。

指先に力を込めながら、アリスが叫ぶ。



の背を視線で追う。

そして確認した。

その手に握られている剣の形状が変化していることを。

霖之助は身体中に掛かる負荷を無理矢理抑えつけながら、上空へ向けて叫ぶ。

「魔理沙ア！準備だツ!!」

「ああ!!」

上空で三ツ頭アジ・ダ・ハーカの竜の頭上を取るように旋回していた魔理沙は力強く叫び返す。

その手にありつただけの魔力を充填した八卦炉を握り締め、来たるべきポイントへ照準を合わせた。

視線の先で、形状変化した『霧雨の剣』を振りかざすゴリアテ人形の姿があった。

人形は身体の半分以上が灰となつて崩れ落ちる中、飛翔した勢いそのままに三ツ頭アジ・ダ・ハーカの竜の背部へ剣を突き立てた。

そして、

黒く硬質化した体表から赤黒い液体が散った。

くくく

くく

く

遡ること数分前。

アリスから念話を通して伝えられた作戦に、霖之助はすぐさま訂正を入れた。

『作戦自体は悪くはない。でもアリス、恐らく君の武器ではその役を担うのは無理だ。例え一点集中の攻撃であつてもね』

『なら狙う場所を、』

『口内に絞るつて？それこそ悪手だ』

『ッ』

『……むう』

遮るように指摘を入れられ、アリスは押し黙った。魔理沙も同様に良案が浮かばず念話の中で唸る。

と言うより現在進行形で戦闘中なのだ。

机を囲んでの会議と違い、集中して思案できるわけがない。

そんな中で、霖之助はぽつりと呟いた。

『……僕の『剣』なら、いけるはずだ』

二人の少女は一斉に霖之助を見た。

正確には彼の持つ、鈍器と言つても差し支えない、刃物としては粗悪品の剣を。

発言した当の本人は淡々と言い進める。

『時間もないから端的に言うよ。霧雨の剣はある特殊な条件下に於いて変化する。——あらゆるものを斬り裂く魔剣にね』

まるで以前から練っていたかのように、計画の一つ一つを繋げ、言葉にしていく。

まるで以前からこうなることがわかっていたように、不自然な程冷静沈着に構える。

……だが違う。

彼は『今』この場でそれらを組み立てていた。

『二人共、僕の言う通りに動いて欲しい』

〽

〽

〽

背に剣が深々と突き刺さったことによって、三ツ頭の竜はより一層  
暴れ出した。

そして霖之助とゴリアテ人形で縫い付けている糸が一気に緊張し、  
いよいよ束縛も決壊寸前を迎えた瞬間、魔理沙の持つ八卦炉が魔力を  
解放する。

「チエックメイトだぜ!!」

——『ファイナルマスタースパアアアアク』!!!

音が消えた。

凄まじい閃光が視界一面を覆う。

一拍遅れて発生した衝撃波と轟音が、周囲の木々を根元から引き剥  
がした。

上から下へ真つ直ぐ打ち下ろされた巨大な魔砲は、三ツ頭の竜の背  
に刺さった剣の柄頭へと着弾する。

まるで毎秒数千トンもの水量を叩き出す滝のように、光の波は  
三ツ頭の竜を一瞬で呑み込んだ。

魔砲が剣を介して体内へと伝播していく。

「ガ……、カ………ツツ!?!」

三ツ頭の竜の目鼻口から同様の閃光が漏れ出し、雷に打たれたような  
衝撃が走った。

更にそこへ、剣の能力『向火』が発動する。

立て続けに体内へ同量の魔砲を打ち込まれた三ツ頭の竜の身体が

垂直に伸びる。

最後に、魔砲の質量で押し出された剣が、硬質化した身体を貫いて地面へと突き刺さった。

……………吹き荒ぶ風。

その中に、消し炭と化した竜の残骸が散っていった。

「……………終わった」

片膝を突き、肩で息をしながら霖之助は呟く。その傍に二人の少女が降り立ち、心配そうな表情で駆け寄ってきた。

「お、おい、大丈夫か香霖……！」

「……………ああ、なんとかね」

「……………霖之助さん、あの剣の変化は一体？」

全員の視線が地に突き刺さった剣へ向く。

お世辞にも秀抜とは言えなかった外見は一変していた。

鳥の翼のように広がった鏝。

ふた回りほど大きくなった刃には二本線の赤黒い模様が浮かび上がり、両刃にはそれぞれ鋒に向かって、鬼の角を思わせる刃が幾つも突出している。

柄はまるで血の付いた布を無造作に巻き付けたような、なんとも言い難い悍ましさを感じさせた。

「霧雨の剣は認めた者しか振るうことを許さない。それ以外が振るおうとすれば、剣は機嫌を損ねて使用者を青い炎で燃やし尽くす。それが誰であれ、全てを拒絶し、斬り裂く魔剣へと変貌してね」

「な、なら……、今剣は別のナニかなのか？」

「……………そう、確かこう言っていた。」

——『都牟刈の太刀』、と。」

意味深に口にした言葉。

霖之助は次の質問が来る前に立ち上がると徐に歩き出し、地に刺さる『都牟刈の太刀』を抜いた。

その瞬間、禍々しい外見は再び元の彫刻チックな翡翠の剣へと戻った。

「何はともあれ、これで一段落…、」

——ぞわりつ、と。

「!？」

その場の全員が、背中を虫が這うような悪寒を感じた。

「……………ツツ」

振り返る。

何もない。

目線が自然と上を向いた。

「まさか、か……………」

ドス黒い靄が、三ツ頭の竜の形を成して浮いていた。



## 161話 博麗を担うと言う意味

サタンは呆然と掌へ視線を落とした。

そこにあつた筈の…、正確に言えば全身に纏っていた『ちから』が消失していた。

原因は目の前にある。

(…：祓つただと?)

そして理解した。

魔の根源である自身の『ちから』を打ち消し得る存在。

「……『神』、か」

サタンから表情が消えた。

今一度『ちから』を溢れさせ、掌がドス黒い炎に包まれる。

直後、半透明な神を背にする少女の前に一瞬で移動し、心臓目掛けて貫手を放った。

「!」

横合いから閃光。

紙一重で離脱したサタンは、無言でその相手を睨みつける。

「王手には早いわよ」

暁美は掌底を翳したまま、両肩と背から噴き出す高濃度の靈力を今一度炸裂させた。光の波が前方の空間を押し退けて突き進む。

だがサタンは両腕をクロスさせて踏み止まった。

閃光が着弾し、僅かに後方へ押し下げられるが、大したダメージは

ない。

「こんなもの向かい風となんら変わりは……」

遮るように、光の波は連続で打ち出された。

「ええっ、なーに？普通のトーンで喋られても爆音で聞こえないっつーの!!」

打ち終わりと言わんばかりに一層強い波がサタンをその場に縫い止める。

その一瞬で暁美は背に纏った霊力を噴出させ、がら空きの懐へ飛び込んだ。

続け様に神速の拳がマシンガンのように叩き込まれる。僅か1秒にも満たない浮遊感の後、サタンの身体は後方へ吹き飛んだ。

ダンツツツ!!! と、地面を踏み抜く音。間近で聞こえた。

直後、サタンは空中で身を翻す前に脚を掴まれ引き寄せられる。視界の中心で迫る拳。

暁美の鉄拳がサタンの顔面を捉え、そのまま真下の地面へ向けて振り抜かれた。

地響きが神社全体を揺るがし、打ち付けられた身体は衝撃と慣性の力によって地面へ礫となる。そこへ暁美は追撃の為に手刀を振り上げた。

その矢先、白い悪魔は一言呟く。

「気はすんだか？」

「!?」

深紅の瞳が暁美を捉えていた。

一切の反動を使わず起き上がったサタンの魔手が、反射的に飛び退こうとした暁美の速度を上回って伸びる。

バチイツツ!!! と、強い反発があった。

見れば、暁美とサタンの間に緋色の障壁が展開されている。

今までのものとは違い、神霊『かむなびのかみ神直毘神』の加護が付与された浄化の力を纏った結界。

弾かれたサタンの掌からは黒い炎が消失していく。

——だが次の瞬間、頭上に巨大な黒炎が浮かび上がった。

「今まで本気だと思ったか?」

サタンは指先をくるくると回し、徐に前へ倒した。

再び衝突する『穢』と『聖』。

「ツツ!? 暁美姉さん、下がってツ!!」

「!」

途端に叫んだ霊夢へ振り返ることなく、暁美は後方へ離脱した。

その最中に、黒炎が浄化の障壁を侵食して迫る様を目にする。

（『神霊の加護』が打ち負けてる…っ!? 一端とは言え使役した神の力をいとも容易く…ツ!）

背後へ意識を向けると、未だ障壁を保つために踏み止まっている霊夢の姿があった。

だが駄目だ。

直にあの黒炎は結界を突き破る。自分なら兎も角、それから回避し

ていては間に合わない。

暁美は霊夢を抱えて横へ跳んだ。

その直後に結界は消失し、本来の速度を取り戻した黒炎が一瞬前まで立っていた足場を抉り取っていった。

「ほう、お前はその娘に触れることができるんだな」

振り向くよりも早く衝撃が走った。

反射的に身を捻った暁美の背中へ、力任せに振るわれた魔手が食い込む。

背中を中心に、まるで出血毒を打ち込まれたような熱と激痛が広がっていく。

だが痛みにも悶えている余裕はなかった。

「づつつつ、あああッ!!」

暁美は殴打の衝撃が完全に伝わり切る前に、背部から瞬間のエネルギーを噴射して前へ飛んだ。

そうして半ば打ち上げられるようにして飛翔した先で、石造りの灯籠へ叩きつけられた。

その腕の中で抱えられた少女から不安気な声が漏れる。

「暁美姉さん……、大丈夫……夫？」

「勿論……、大丈夫よ」

なるべく憂心を抱かせぬよう、間を空けずに答えた暁美の口からは一筋の血が流れていた。

「……ッ！」

『実戦』の経験が浅い霊夢にもわかった。

背中側だったとは言え、殴打を受けて吐血しているのだ。少なくとも、内臓のどこかは損傷している。

それに暁美はあの黒炎を直にくらってしまった。

神の浄化すらも蝕む『穢れ』を人の身である彼女が浴びれば、どのように作用するかなど最早想像もつかない。

だが確実に悪影響は出る。

気さくに振舞ってはいるが、額から流れる滝のような汗がなにより  
の証明だった。

(私が……、もっと、しつかり……ッ！)

博麗 暁美は歴代の中でも特に戦闘能力の優れた巫女だ。共通の師である柊 隼斗の戦闘スタイル、『体術と霊術の併用』を若くして実践レベルにまで昇華させている。

昔からその背中を見て育ってきた。

いつか彼女と同じ様に立派な巫女になりたいと思いつつも、心のどこかでは敵わないと感じながら。

そんな彼女が、自分と二人掛かりで挑んですら苦戦を強いられる相手。

新たに習得した『神降ろし』でさえも、敵の力を抑え込むには至らなかった。

——だが、事情はどうあれ現博麗の巫女は自分なのだ。

先代の暁美が行方不明となり、博麗としての身分を継承したあの日から、

守られる側から守る側となったあの日から、

「私が……ッ！」

膝を付く暁美を背に、霊夢は立ち上がった。

少しでも『神降ろし』の効力を上げる為、周囲にはありつたけの護符を展開する。

「霊夢……？」

後方で名が呼ばれる。

振り返らない。

代わりにたった一言呟いた。

「大丈夫」

暗黒の異次元空間で、もう何度めかになる轟音が炸裂した。

だが、音が一つ鳴り止むごとに一つの肉塊が出来上がっていた今までと違い、後には男の舌打ちだけが残される。

「……面倒臭エ」

睨みつけた先で、死の天使は重ねていた六枚の翼を展開した。

翼の骨組はひしゃげ、欠損箇所こそあれど六枚とも形が残っている。

「やーっと耐えられた ♪」

サリエルは嬉笑を浮かべながら指を弾いた。

ゴキゴキゴキイッツツ と、湿った音と共に元通りになっていく翼を、隼斗は心底不機嫌そうに眺めていた。

「それにしてもー、貴方の力強過ぎない？その一発で小惑星程度なら

粉碎できちゆうわよ?…ってそう言えば前にも私が落とした隕石を  
砕き割ってたっけ」

呑気に話し始めた天使とは裏腹に、隼斗は険しい表情を崩さず言っ  
た。

「…………つまり上げたわけだな、その強度まで」

「そうよ?前に言ったわよね、私の能力ちからについて。それが直接的であ  
れ間接的であれ、あらゆる『絶望』は思うがまま ♪」

その先は聞かなくともわかった。

例えば、小惑星を粉碎する一撃にも耐え得る盾と、その一撃を凌駕  
する矛の実現。

例えば、地上から一切の文明が消失し、人類は原始的な生活を強い  
られる。

例えば、数秒後に太陽が寿命を迎える。

多分こうすれば周りは恐怖に慄く。

多分こうすれば阿鼻叫喚の地獄絵図が出来上がる。

——そんな『曖昧な』絶望すらも創造してしまう。

つまり物は言いよう。

自分が不死身の身体を持っていることが全世界共通の絶望だと定  
めてしまえば、それが実現してしまう。

『間接的に再現した』なんて言葉で片付けるには、余りに横暴で、途轍  
もない反則だ。

「…………」

しかし隼斗は拳を振り抜いた。

瞬間、サリエルの身体は跡形も無く爆散する。  
血の塊が宙を舞い、遅れて響き渡った轟音が空間全体を叩いた。

「確かに俺はお前を『本気』でぶつ倒すつもりで拳を振るってたが、『全力』を見せた覚えはねエぞ？」

後方へ声を飛ばす。

サリエルは相変わらずの笑みで答えた。

「勿論わかってたわ。……だって、」

暗黒の空間を凄まじい速度の影が横切った。

その余りの速度に、軌道上の空気が弾かれ真空となる。

「！」

影は真っ直ぐに隼斗へと向かい、鞭のような動きで身体を薙ぎ払った。

一瞬、隼斗の足裏が地を離れた。

直ぐさま踏みとどまり急停止を掛ける。

その背後へ流れたエネルギーが莫大な衝撃波となって炸裂した。

「ほら、こうして貴方の攻撃を再現したのに、貴方にはまだ傷がない。それってまだ全力を出してないからでしょう？」

触手のように畝りながら収縮していく『翼』を一瞥し、隼斗は答えた。

「要は手探りだろうか」



打たれた箇所など意に介さず、幻想郷最強の男はそう吐き捨てた。その表情に別段切迫した様子はない。

——ただ、隼斗は突き付ける。

「所詮はお前の想像だ。此奴は『こうすれば傷を負う』、『こうしたら勝てる』。結局お前は能力の通じねエ俺に対して、そういった自分の『希望』を押し付けることでしか戦う術を持ってねエんだ。その程度の薄っぺらい絶望なんかで俺を殺せると思ってるのか？前にも言った筈だぜ。この程度でのぼせ上がんなッ!!」

「……、」

僅かな沈黙。

やがてサリエルは口を開いた。

「そう。……どうやら貴方自身を追い込むのは難しいようね」

直後、サリエルは徐に指を鳴らした。

その背後では巨大なスクリーンが出現し、現在の幻想郷の様子が中継されている。

「なら、別の方向からならどうかしら？」

もう一度指を鳴らす。

その瞬間、幻想郷中に複数の『巨大な扉』が出現した。

各所で戦場になっていた場所だけじゃない。

非戦闘員である人里の住民が避難している命蓮寺や、負傷者の多数出た妖怪の山や地底に至るまで全てに、だ。

「あの扉、覚えがあるでしょうか？この戦いを盛り上げるためのちよつとした余興よ」

「！」

隼斗はハツとしてスクリーンを見上げた。

視線の先では巨大な扉がゆっくりと開かれていく光景が映し出されていった。

「今回ののは前回と違って無限に湧き出る軍勢を用意したわ」

完全に開放された扉からは、夥しい数の化物等が顔を出している。

まるで爆薬のスイッチに指を掛けて自分の優位性を誇示するように、サリエルは指を重ねて隼斗へ突き出した。

「これは謂わば、一方的なデスマッチ。現状、巫女と魔法使いのお嬢ちゃん達も窮地に追い込まれている。他の子達も負傷した身体でどこまで保つかしらね？」

パチンツ と、爆弾を投下する合図が送られた。

一斉に幻想郷の地へ飛び降りていく化物の軍勢を前に、隼斗は立ち尽くしていた。

その様子を見たサリエルは、口角を吊り上げて嘲笑う。

「あははははははははははははははははっ!!この『絶望的な状況』、貴方はどうするのかしらあっ!!」

何もない空間で天使の笑い声が響く。

無情にも、ここはサリエルの支配する異空間。

此処に入れられた時点で、隼斗に出来ることは残されていないかった。

「ホントにお目出度い奴だな、テメエは」

「……は？」

それは予想だにしていなかった。

「俺が何の準備もせずには此処へ来たと思ったか？」

異変は、スクリーン内で起きた。

「此処が地上ですか」

腰に刀を帯びた、薄紫髪の女はポツリと呟いた。

その傍らには特殊な配色の服を着た女医が立ち周囲を見渡しながら答える。

「良い所でしよう？」

「はあ、『穢れ』さえなければ褒め言葉の一つも出てきたのでしようが」

身体を特殊なベールで包みながらそう返したのは、『月の民』と呼ばれる暦れつきとした月の住民である。

「依姫様、各軍戦闘準備整いました。御命令があればいつでも」  
「ご苦労様です麻矢」

敬礼し、静かに下がっていく部下を視線で辿る。

近代的な武器を携え、縦横均一に並んだ総勢5万人の兵士達が、今か今かと総帥の命令を待っていた。

「八意様、後は我々月の軍が『穢れ』の駆逐に当たります。……お早く  
「ええ、ありがとう」

永遠亭の医師 八意 永琳は、手に持っていた弓を背負い、胸元から液体の入った瓶を取り出した。栓が抜かれ、空気に触れた液体が煌びやかに光り始める。

「始めるわよ、離れていて」

その言葉を皮切りに依姫はその場を離れ、軍の下へ駆けて行った。  
永琳は懐中時計を取り出し、時間を確認する。

針は丁度正午を指していた。

(頃合いね)

手に持っていた瓶を足元へ傾けた。

そうして規則的な動きで撒かれていく液体は、地面に六芒星の陣を形成していく。

最後の一滴が終わり、永琳は片膝を突いて陣の中央に触れた。

禁術『狂月』——発動!!

白昼の幻想郷に、眩い月光が降り注いだ。

## 162話 月の増援 ①

扉は突然現れた。

重々しく巨大で、空中に浮かぶそれはゆっくりと開かれる。

中から顔を覗かせたのは無数の化物。

顔を覆う髑髏が、そいつらを天使の軍勢だと認識させる。

「……………来たか」

紅魔の主は上空を見上げて呟いた。

今の今まで激闘を繰り返していたその身体には痛々しい傷が刻まれている。

傷口には邪気が残留し、吸血鬼の治癒力をもつてしても即時回復には至っていない。

傍に立つクリスタル状の翼を生やした少女は、同じくして負傷した傷を抑えながら臨戦態勢を取る。

「アレがお姉様の見た敵の大群？多いね」

「フラン、油断しては駄目よ。『数で押しってくる奴等は、個体の力は弱い』って定説があるけれど、彼奴らはそこそこ強い個体の集まりだ」

音も無く…………、紅魔のメイド長、門番、居候の魔法使いが付き従う様に並ぶ。

「レミイ、魔力の方は？」

「ふむ、疲弊に反して消費は少ない。…………と言っても大半は残っちゃいないか。これも『奴』の血を取り込んだお陰かもしれないわね」

レミリアは紅霧に覆われた空を一瞥した。

時刻は昼時。

本来吸血鬼である彼女が活動するにはあらゆる制限を受ける時間

帯であるが……、

「後は、アレがくるのを待つだけね」

十六夜 咲夜は手元の懐中時計に視線を落とし、一言告げた。

「お嬢様、間も無くです」

「……そうか」

紅魔の主はその体軀に不釣り合いな翼を広げ、周囲に攻撃用の魔法陣を展開させると、口角を吊り上げて笑った。

「お前達、もう少し付き合ってもらおうわよ。紅魔の力を奴等に示せつ!!」

直後に、空を覆う程の影が降り注いだ。

各地で出現した扉だが、霧雨 魔理沙含む『魔法の森』の面々はそれどころではなかった。

空中に浮かぶ巨影、奮闘の末に倒したかに見えた大敵が、今まさにバラバラになった身体を再構築しているのだから。

「あれだけやって復活するのかよ……ッ！こちとらリミット超えてるってのにっ!!」

魔理沙の握り締めてる八卦炉は森近 霖之助の手によって改良されている。

以前と比べ、より多くの火力を発揮するだけでなく、八卦炉自体に掛かる負荷を軽減させることに成功していた。

基本状態は台座の付いた八角柱のフォルムだが、使用限界を迎えた際は上部が花卉状に開く。これは使用者の安全面を考慮したセーフティ安全装置だ。

「できれば安全装置前に決めたかったね。流石にバラバラになっても再生するのは予想外だったよ」

霖之助は額の汗を拭い、今一度『霧雨の剣』を握り直しながら呟いた。

先の疲労もあつてか剣を握る手が僅かに震えている。

その傍ら、アリスから弱々しい声が掛かる。

「……他に、手立ては？」

見れば、その表情は明らかに狼狽している。

無理もなかった。

基本的に自作した戦闘用の人形を操り戦ってきたアリスだが、その殆どが再起不能レベルの損耗を受けている。

また、彼女は魔法使いでもある為、魔法による戦闘ができないわけではない。……が、逆を言えば魔理沙の様に火力に長けた魔法は使えない。

障壁や治癒魔法の心得はあるものの、目の前の敵が相手では効果は薄いだろう。

「あるにはある」

「！」

その言葉に思わず此方を向いた少女に対し、霖之助は冷静に見解を述べた。

「……そもそも再生と言うものは元の形から部分的な損失があつた場

合に行われるものの筈なんだ。だが彼奴の再生能力は常軌を逸している。それこそ、身体がバラバラになっても元通り修復してしまう程にね」

つまり、と霖之助は続ける。

「彼奴に勝つには消滅させるしかないと思うんだ。例え塵一つだろうと残さず完全に消し切る。その為には…、」

彼は一旦そこで会話を切り、上空の魔理沙に向けて指先を行き来させた。

その意図に気付いたアリスは直様『念話』を用いて三人の脳内を繋ぐ。

『魔理沙、もう一度君に魔砲を撃ってもらおう。それもさっきのより強力なやつをね』

突拍子もない言葉だった。

第一に、魔理沙の持つ八卦炉は使用限界を超えて安全装置が掛かっている。

魔力の供給が絶たれている為、今となっては調理用の火すら起こすことができないのだ。

『ま、まさか今から八卦炉こいっを弄って安全装置を外すとか？幾ら何でも無茶だぜっ!?!』

『いや、その必要はない』

霖之助は一度深く息を吸った。

此処は魔法の森。

空気に混じった濃度の高い瘴気を身を以て感じるができる。

尤も身体には有毒故、唯の人間には耐え難い場所ではあるが、その



瘴気が魔法使いの魔力を高める力も秘めている。

『間も無く発動するはずだ。八卦炉に施したもう一つの仕掛けがね』

ガチンツツ と、何かが作動する音があった。

発生源は魔理沙の手元から。

「これは……ツ?!」

—— 先程まで安全装置が掛かり花開いていた八卦炉は、淡い光を発しながら元の形状に戻っていた。

『詳しい仕組みについては割愛させてもらうよ。簡単に言えば其れは周囲の魔素、つまり瘴気を吸収して魔力源とする八卦炉のもう一つの形態だ』

一度三ツ頭アジ・ダハーカの竜へ視線を転じると、既に身体の大半が修復を完了しつつあった。

霖之助は若干の焦燥感も交えながら次なる指示を飛ばす。

『魔理沙、よく聞いてくれ。その形状になった八卦炉は取り込んだ魔素の量に応じて火力を上げていく仕組みになっている。最大まで溜まれば黒い光を帯びるだろう。それまではなるべく耐えてほしい』

『そ、そいつを打てば勝てるってことか?』

『……わからない。でも最大火力は通常時の出力を大きく上回る筈だ。………後は、』

徐に、『霧雨の剣』の鋒が三ツ頭アジ・ダハーカの竜へ向けられた。

見た感じでは身体の修復は完了してる様に思える。動かないのは爪先・鱗等の細部、或いは体内組織の再生が終わってない為か。

いつ動き出しても可笑しくはない状態……、  
霖之助は一步、二歩と前に出ながら言った。

『後は魔砲の威力を少しでも発揮できる様、奴を消耗させるだけだ……っ!!』

『な……っ?!まさか一人でやる気かっ?!』

当然と言えば当然の反応だった。

彼の持つ『霧雨の剣』にできることは、相手の攻撃に合わせて同出力の技を打ち出す返し技のみ。

唯振るっただけでは『都牟刈の太刀』のように三ツ頭アジ・ダハカの竜の硬化した鱗を斬り裂くことはできない。

『彼奴にギリギリまで接近し、敢えて技を受ける。後は向火の矛先を奴自信に向けてやれば、大なり小なりダメージは入る筈だ』

『無茶だっ!!お前が無事じゃ済まないだろっ!!』

『霖之助さん、もうまともに機能するゴリアテ人形もないわ。立ち回るにしたってそれじゃリスクが……!』

しかし遮るように、

『リスクの一つでも冒さなきゃチャンスは生まれえないよ。彼奴に勝つには、これしかない』

彼の覚悟は折れなかった。

心の内で、いつも異変が起これば真っ先に飛び出していく男の姿が浮かぶ。

今回の異変前、ただ一言『頼む』、と握手を交わした友人との約束が思い出された。

昔から負けず嫌いで自信家、何をするにしても危なかしくて気が気

じゃなかった少女と目があつた。

(僕は、君が誰よりも努力家なのを知っている)

まだ幼い年頃の内から、大人でも危険とされるこの森に単身挑み、魔法使いを目指した少女。

切っ掛けこそ与えたものの、魔法の習得はその殆どが彼女の独学によるものだった。

そのたゆまぬ努力の日々を、彼はずっと見てきた。

だからこそ引けなかった。

そんな少女に武器を与え、勝敗を握らせているのは自分なのだから。

—— 命のリスクを冒してでも、この戦いを勝利へと導いてみせる。

それは断固とした決意だ。

「……、」

後方では、アリスも一つの決心をしていた。

(ごめんね、もう動けない貴女達を今一度戦わせることになる)

彼女の指先から伸びた糸が、力無く横たわるゴリアテ人形へ接続されていく。

その手には武器がない。腕そのものが消し飛んでいる個体まである。

其々が操られていると言うよりも、クレーンで吊り下げられているように浮遊する。

少しでも目の前の男のリスクを減らす為に。

(ちくしょう…ッ！)

魔理沙は八卦炉に視線を落としながら歯噛みした。別に魔砲以外の攻撃手段がないわけじゃなかった。だがそんなもの、あの巨体にとっては蚊の刺すような刺激にしかない。

だからこそ彼はこう言っていた。

『使用を控えろ』ではなく、『耐えろ』と。

つまりそれは、どんな結末を迎えようとも好機が訪れるまでは攻撃に加わるなどということ。

(早く、溜まってくれっ！)

ひたすら八卦炉の充填を待たなければならない現状が、どこまでももどかしかった。

本当なら今すぐにでも怨敵に向けてぶっ放したかった。

それでこの戦いが終わるなら。犠牲を出さないと済むなら。

「ちくしょうッ!!もし万が一の事があつたら許さないからな…ッ!!!」

……直後、

霖之助は『霧雨の剣』を手に駆け出した。

(硬直している今の内に接近させてもらおうっ!!)

アリスは複数の人形を飛翔させ、同時に自信も魔法陣を展開した。

(彼奴相手に幻視や障壁が通用するとは思えない。でもせめて混乱く

「はいはさせなきや……っ!!」

そんな二人の様子を目にした魔理沙は、未だ魔素を吸収し続ける八卦炉を敵に向けて突き出した。

(……悪い香霖、アリス。もしもの時があつたら私は、八卦炉こいつの充填を待たずに発射するかも知れない。だから……、死ぬなっ!!)

再び、三人の時は動き出した。

三ツ頭アジ・ダハカの竜の合計六つの目が先頭を走る霖之助へ向けられる。

「グルルルッ!」

中央の頭が喉を鳴らすように唸った。

瞬間、複数の魔法陣が展開された。

続いて魔法の嵐が迫る。

そして、

其々が覚悟を決めたその瞬間、三人の脳内へ唐突に割り込んできた声があった。

『手を貸しましょうか』

直後に連続的な爆発が起きた。

それは三ツ頭アジ・ダハカの竜の打ち出した弾幕が着弾していく音。

「グ、ガ……ッ!」

しかし、被弾したのは三ツ頭アジ・ダハカの竜自身だった。

「なっ、香霖…ッ!？」

魔理沙は真っ先に霖之助の姿を探した。

今相手の魔法がそのまま返ったように見えただからだ。

そんな芸当ができる人物は、この中では彼しかいない。

周囲を見渡し、三ツ頭の竜の前方100メートルの位置で、目印の銀髪頭を見つけた。

だが彼もまた、同じ様に立ち往生している。

『あら、貴女達まで困惑させてしまったかしら?』

再び脳内に響く知らない声。

なんの前触れもなく、その者は一同の中心に立っていた。

『初めまして、地上の皆さん。私 綿月 豊姫と申します』

腰まで届く金髪を靡かせ、白シャツの上に着ているサロペツトスカートの裾を持ち上げながら、豊姫と名乗った女性は頭を下げた。

霊夢はありつたけの護符を展開し、白い悪魔の前に立ち塞がった。  
背後に佇む神霊『神直毘神』に意識を向ける。  
この神は元々、黄泉の国から帰った伊邪那岐が行った禊により誕生した浄化の神だ。

本来ならば穢れが神格化した神『八十禍津日神』と『大禍津日神』の穢れを清めるだけの力を持っているのだが…、

(飽くまで神降ろし。私に付与される力は『増加』や『減少』と言った力の量に変化が生じない恩恵。だから奴の穢れを祓うためにより多

くの力を要求することは出来ない)

しかし、現状の彼女にも戦う手段は残されていた。

いくら力の供給量は変わらないとて、強度を変えることはできない。浄化の力を結界内の空間に充満させれば、それだけ強度は薄く、分散してしまう。

障壁や身体に纏わせれば、穢れの侵食から護ることはできるが、……『纏わせる』とは飽くまで物の表面上に膜を張ってコーティングしているのと同義である為、やはり強度的には薄いものになってしまう。

だからこそ、霊夢は『護符』を選んだ。

博麗の巫女である彼女が使用する護符は、魔を退け・厄を祓う力が付与された退魔の札。

同系統である『神直毘神かむなびのかみの力』と合わせることで、より強く浄化の力を引き出すことができる。

「それが唯の紙切れじゃないことはわかる。……が、当てられるか？ お前に」

だがサタンは嘲笑い、ゆっくりと歩み寄る。

わかりやすく両の掌に黒炎を纏わせ、見せ付けるように横へ広げた。

「理解してないのなら教えてやる」

霊夢の視界からサタンの姿が消失する。

刹那、背中から心臓を刺し貫かれるような殺気が迫った。

「ッ!!?」

少女は振り向きざまに博麗の護符を射出した。  
わかつている。

姿も気配も碌に捉えられずに撃った弾が当たるわけがない。  
唯、牽制的にその場を離脱し、態勢を立て直す為だった。

「霊夢っ！…後ろっ!!」

暁美の叫び声。

しかし今度は振り向く時間すら与えられなかった。

「この戦い、お前達のどちらかが欠けた時点で勝機は無い」

背後から霊夢の顔を覆うように、黒炎纏った魔手が回される。

触れば最後、少女は頭部から『穢れ』に侵食され、一瞬でその命を奪われてしまうだろう。

「…………ツ」

正に喉元へ刃物を突きつけられた状態。

しかし霊夢は諦めていなかった。

手元で小さく印を結び、四方からサタンと自信を取り囲むように退魔の護符が配置させる。

「相打ち覚悟か？お前が死んだ後も札の効力が続くとは思えんが  
…………、まあいい」

次の瞬間、護符が高速で射出された。サタンにとっては実に緩やかな速度だろう。

札が彼に届く前に何回死の魔手で少女の顔に触れられるか。なんなら『穢れ』の侵食を待たずして握り潰すこともできる。



視界の端ではもう一人の巫女が駆け出しているのが見えた。だが急所ではなかったにしろ、その身に受けた『穢れ』によって、身体機能が以前の半分以下にまで落ちている。到底間に合わない。

サタンは、確信を持って一人呟いた。

「任務完了」

その言葉と同タイミングで。

キンツツ!! と、神社の石畳を叩く一つの音が鳴る。

—— 直後、地面を突き破り、無数の刃がサタンを取り囲むように飛び出した。

突然の事で思わず動きを止めたサタンだが、

「しまっ…」

既に殺到してきていた札の弾幕が次々と着弾した。

光の爆発が何度も走る。

拘束の緩んだ隙を突いて、霊夢は前方へ転がるように離脱した。

「チツ…い」

まだ手を伸ばせば届く。

サタンは反射的に少女の背中へ魔手を振るった。

「動けば祇園様の怒りに触れる」

凜とした声。

その言葉が示す通り、自らの意志で動いたサタンの身体へ、突きつけられていた無数の刃が一齐に食い込んだ。

「……！」

しかし、鋒が彼の皮膚を貫くことはなく、結果的に上空へ押し出す形となった。

「すざのおのみこと神須佐能袁命の垣が通らない、か。ただ単に頑丈という訳ではなさそうね」

その者の足下には、地面へ突き立てられている刀があった。

「誰だ貴様」

空中で静止したサタンは、新たな乱入者に若干の苛立ちを覚えながら問いかけた。

「月の使者」

薄紫色の長髪を後ろで束ね、白シャツの上からサロペットスカートを着た女性は端的に答え、徐に地面から刀を抜き放った。

すると突出していた刃は地中へ引っ込むように消失する。

「更に言うなら…、貴方の『敵』で、この子達の『助っ人』ってところかしら」

163話 月の増援 ②

砂塵舞う戦場に降り立った月の民、綿月 豊姫は興味深そうに周囲を見渡した。

一帯にかけて薙ぎ倒された大木、抉られた地面、自分のことを怪訝な表情で見ている地上人。

最初に言葉を発したのは銀髪の男だった。

「…………綿月さんと言ったね。貴女は何者なんだ？」

「先生やお師匠様の味方。となれば、貴方達の味方でもあるわね」

「せ、先生？」

困惑する霖之助を余所に、豊姫は振り返りながら手にしていた扇子を視線上に掲げて言った。

「とりあえず、あれが『敵』ってことでいいかしら？」

扇子が突き付けられた先で浮遊する巨体。

魔法の森の面々を苦しめてきた天使軍の邪竜、アジ・ダハーカ三ツ頭の竜。

未だ襲ってこないのは、突然の乱入者を警戒しているからか。

「…………ああ。だが奴の生命力と再生能力は驚異的だ。例え粉々にしたとしても、元通り身体を修復してしまう」

そう言った霖之助に対し、豊姫は扇子を振り上げながら一言呟く。

「あらそう」

一つの風切り音が鳴った。

直後に起こった現象を、当初の面々は誰一人理解できなかった。

魔法の森全体に、凄まじい衝撃と轟音が走った。

乱気流のように入り乱れた空気が炸裂し、爆縮状の球体となって三ツ頭の竜を飲み込んでいく。

正確に言えばそれは、圧縮された極大の風だ。

例えば大型の台風のエネルギーを一箇所に固めたとしたらこんな感じだろうか？

「な、なん……っ!？」

共に巻き込まれた大樹が一瞬で塵と化す。

それは岩が削岩機に掛けられ砂粒になるのとはわけが違う。冗談抜きで、それこそ素粒子レベルにまで分解されていた。

時間にして数秒。烈風の塊は小さな微風となって消えた。

「あら」

豊姫は扇子を畳みながら前方の巨影を見遣った。……動いている。

「グ……、ガ、ルルツ!!」

先程とは違い弱々しい唸り声。

三つあった首の内一つは千切れ飛び、残された二頭もズタズタに引き裂かれていた。

身体に刻まれた夥しい数の傷口からは大量の毒蛇が溢れ出ている。

(あわよくば今ので勝てると思ったけど……、彼の言ってたことは本当だったのね)

視線の先で、早くも三ツ頭の竜の身体は再生を始めていた。

傷口は塞がり、消失した首は徐々に元の形を取り戻していく。

「ねえ、さっきの貴方達の会話に出てきた、『はっけろ』とか言うのは上にいる金髪の子の奥の手よね？それは今し方私の出した『風』よりも強力なのかしら？」

豊姫の声色にこれと言って動揺の色は混じっておらず、只単に興味本位で尋ねているだけのような気軽さだった。

例え質問の答えが意にそぐわなくとも、別段気に止めるつもりはないのかも知れない。

「确实……、とは言えない。しかし、より多くの魔素を取り込めば或いは……」

「その『魔素』って言うのは此処に漂ってる醜悪な成分のこと？」

やや嫌悪感を露わにしながら、豊姫は扇子で顔の前を仰いだ。

尤も、霖之助等を知る由も無いが、彼女を始めとする月の民は地上の『穢れ』を取り込まぬよう、身体を特殊なベールで包んでいるため、身体に有毒な瘴気の影響も受けていないのだが。

「ああ、そうだ。魔法の森は特殊な胞子を散布する茸が群生している他、一部の場所が『魔界』に限りなく近い点から魔力を含んだ瘴気が非常に多い。だから魔理沙の持つ八卦炉にとって絶好のエネルギー源になるんだ」

「ふーん」

豊姫は周囲に漂う瘴気に意識を向けながら、霖之助の話にも出てきたとあるポイントに注目した。

「その『一部の場所』ってあっちかしら？」

徐に畳んだ扇子で方角を指した。

「……あの、私の家がそうだけど」

答えたのはアリスだった。

豊姫の質問は続く。

「私は古い書物でしか知らないんだけど、『魔界』って魔が蔓延る欲界の内の一つよね？ 貴女そこの出身？」

「え、ええ」

次々と言い得ていく彼女に少なからず不信感を覚えつつもアリスは頷いた。

豊姫は再び話し相手を霖之助へと変えて、

「素朴な疑問なんだけど、もしも今この場所がまるっと魔界に変わったら『はっけろ』はより強力な力を得るのかしら？」

「……………はっ？」

霖之助は思わず言葉を詰まらせた。

流石の彼も言葉の意味を理解できずに、一瞬思考を停止させる程の突拍子も無い質問だった。

「それは飽くまで可能性の話をしているのかい？」

しかし彼女は変わらずの調子で、

「どうなの？」

……答えを促すようにほんの一瞬だけ漏れ出た圧力。  
霖之助含む一同は息を飲んだ。

「……ッ、破壊力・充填速度共に人間界とは比べ物にならない程跳ね上がるだろうね」

やがておずおずと答えた彼の額からは一筋の汗が落ちた。

「そっ」

豊姫は微笑を浮かべると、上空で待機する少女の元へ一瞬で移動した。

「うわっ!？」

「ふふっ」

彼女は、その光景に思わず飛び退いた少女の反応を楽しむように告げる。

「準備しなさい。景色が変わった瞬間、貴女の八卦炉そくわは莫大な力を得るわ」

「な、何を言っ……」

返答待たずして豊姫の姿は消失した。

高速移動とは異なるその動きは、過去に見た紅魔のメイド長、十六夜 咲夜が使う時間停止を彷彿させる。

再び霖之助の前に現れた豊姫は、眼前で傷を完治させた三ツ頭の竜アジ・ダハカを一瞥し、静かに告げる。

「始めます」

直後だった。

その場の空気が、地形が、景色が……、  
—— 瞬く間に別世界へと変貌した。

青々と生い茂っていた大樹は消失し、一面岩だらけの荒野。  
地平線の向こう側まで永遠と続いているような広大な世界。  
周囲すべての物が、人間界の常識それと逸脱れしていた。

「これはっ!?!」

魔界出身者であるアリスが思わず呟く。

「嘘ッ、—— 『魔界』 ……っ!?!」

肌を通じて感じ取れる尋常ならざる魔素の量が、既に此処が魔法の森ではないことを裏付けていた。

そしてその中でも確定的だったのは……、

「!」

その場を強い光源が包んだ。

発生源は上空、光色は何処となく『闇』をイメージさせる紫。

霧雨 魔理沙の持つ八卦炉の充填が最大まで溜まった合図だった。

「馬鹿な……、こんなに早く……っ!?!」

先程から驚愕の連続である霖之助は小さく漏らした。それを隣で聞いていたアリスもその禍々しい光に視界を覆っている。

だが一番驚いているのは八卦炉の所有者である魔理沙本人だろう。

「お、おいおい………。これって明らかに『悪役側』ダークサイドが放つ光じゃないか……?」



魔理沙はまるで起爆寸前の爆弾でも扱うかのように、出来るだけ八卦炉を身体から離して持った。

「グルルルッ!!」

直後に少女の視界一面を巨大なレーザービームのような閃光が覆う。

「ほらほらボーっとしない。それだけ強い『妖力』を放ってたら彼方さなんだって警戒するに決まってるでしょ?」

真横から諭すような言葉。

視線の先では上空に消えていく光の柱が映った。

いつしか魔理沙の身体は、上空から地上に立つ豊姫の隣へ移動していた。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

豊姫は和かに返答し、空いている掌を霖之助へと差し出す。

「その剣、借りるわね」

「えっ?」

何の前触れもなく、霖之助の手にしていた『霧雨の剣』が消失した。だがそれは抜き取られたのではなく、『握り込んでいた柄が彼の手の中で消えた』と表現した方が適切だ。

「ガ、ッ!？」

直後、三ツ頭アジ・ダハーカの竜に異変が起きた。見れば、今し方消失した『霧雨の剣』が深々と胸に突き刺さっている。

「構えておきなさい。仕上げよ」

豊姫は一步前に踏み出しながら言った。

「ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

三ツ頭アジ・ダハーカの竜の憤怒を孕んだ咆哮が響き渡った。

同時に展開された複数の魔法陣は、間隙を待たずして一挙に放たれる。

ズアアアアツツ!!! と迫り来るは、『地』・『水』・『火』・『風』・『空』の五大元素を始めとする、多種多様の属性が入り混じった魔法の嵐。それは魔界の荒野をまるごと殺風景な平地に変えてしまえそうな規模で迫る破壊の波。

「あっ…」

アリスは思わず後退った。…だが、すぐにそれは意味のないことだと気付く。

傍にいる魔理沙や霖之助も、同様にその時が来るのを待っていた。

絶望とは、自分の見出した未来が実現しないと分かった時点で起こる一種の『諦め』だ。

例えば、丸腰で猛獣に囲まれた時。

例えば、残り僅かの余命宣告を受けた時。

例えば、失ったものは戻らないのだと自覚した時。

あらゆる場面に潜む絶望。どうあがいても未来を変えることができないのだと悟った時、人は諦める。

——だが彼女らが逃げることを止めたのは、迫り来る絶望に対してではない。

「良い演出をありがとう」

そう一言呟いた豊姫は、全くのノーモーションで『それ』を実行した。

慌てず、或いは怒りに任せずに冷静になって思い返してみれば予測できたはずだ。

最初に彼女が一同の前に現れた際、既にそれを実行している。

カツ!!! と、閃光が走った。

続いて発生した轟音と衝撃が、魔界の広大な大地を揺るがす。  
三ツ頭の竜は改めて驚愕しただろう。

——自身の放った大魔法がそのまま返されたのだから。

「ゴ、アアア……ッ！」

しかし彼とて何も学ばなかったわけではない。

バラバラにされ、再生した際に、より硬度の高い鱗へと作り変えていた。

その結果、地形をゴツゴツそり変える規模の攻撃を受けた身体は、僅かばかりの亀裂が入るダメージ量に留まったのだ。

(……やはり、『空間転移』っ!?)

霖之助は豊姫の能力に心当たりがあった。

いつしか目にした魔導書に記されていたその魔法は、『空間ごと又

は個を一時的に別次元へ飛ばし、任意の場所へ瞬時に移動させる』、というもの。幻想郷の賢者 八雲 紫の能力もこれに類似している。だが、仮に霖之助の予想した能力であったとしても、彼女はあれ程の規模を一瞬で移動させたことになる。

(次元が違う…っ！)

霖之助は改めて息を飲んだ。

そしてあまりの出来事に忘れていた。

三ツ頭の竜アジ・ダハーカに刺さったままの『霧雨の剣』……、その能力を。

再び大規模な魔力爆発が空間を震撼させる。

今度こそ、三ツ頭の竜アジ・ダハーカの身体に大きな亀裂が入った。

「お膳立てはここまでよ。後はよろしくね ♪」

いつの間にか後方へ移動していた豊姫は、一仕事終えた後のように肩をぐるりと回して言った。

一同の視線が、八卦炉を構えた少女へと集まる。

「いくぜツ!!」

—— 妖器『ダークスパーク』

ゴオツツ!!! と、黒紫色の閃光が前方で炸裂した。

過去に魔理沙が放った魔砲とは比較にならない出力で吐き出されたそれは、瞬く間に三ツ頭の竜アジ・ダハーカの身体を飲み込んだ。

「ガツ!?……ゴ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

着弾の瞬間、三ツ頭アジ・ダハーカの竜は身体の硬化を更に高めた。  
本能的に『これはヤバイ』と悟ったのだ。

凄まじい勢いで放射された黒紫色の魔砲と、ありったけの魔力によつて固められた鱗がぶつかり合い、均衡する。

その様は川の流れを分断する岩のようだ。

三ツ頭アジ・ダハーカの竜の後方へ漏れた魔砲の余波が、失速することなく広大な大地を抉り進んでいく。

「ぬ、ぐう…ッ！」

余りの出力に少女の顔が歪む。

何とか耐えてはいるが、その身体は後方へ崩れかけている。

「もう一息だ！」

「頑張つて魔理沙!!」

そんな少女の肩を、霖之助とアリスは両側から支えた。それでもジリジリと押し下げられていく。

「ツツ正念場だぜ…っ！気合い入れろよ『八卦あいぼう炉』ツ!!」

バギインツツ!!! と、三ツ頭アジ・ダハーカの竜を包む鱗の破断が更に広がった。

魔砲によつて削り取られた部分から血飛沫が舞い、毒蛇に変化した傍から消し炭と化していく。

「グ…ッ、ガア、アアアアアアアアアアツ!!」

「おおおおああああアアああああアアああああアアツツ!!」

響く両者の咆哮。

——— そして、

「!!」

遂に三ツ頭アジ・ダハーカの竜の黒い体表一帯が砕き割れた。

直後、その巨軀は黒紫色の雷によって内側から燐光を発し、徐々に灰塵と化する。

更に放射される魔砲が、塵となった三ツ頭アジ・ダハーカの竜の身体を完全に消滅させた。

「あら、予想以上」

その光景を静観していた豊姫から率直な感想が漏れる。

だが続いて、白黒魔法使いの少女から焦燥の混じった声が上がった。

「お、おい香霖！これどうやって止めるんだっ!？」

見れば、魔砲の止め方が分からずにあたふたしているようだ。

だが開発者が隣にいるし大丈夫だろうと、後方から見ていた豊姫は銀髪の男に視線を移す。

「あつ、そうか！これは魔素がある限り自動で魔力が供給されるから…っ」

「止まらないってツ!? 欠陥品じゃないかツ!!」

「い、いや……、そもそもこれは幻想郷内で使うことを想定していたわけ……。丁度魔素を使い切った辺りで敵に勝つのが理想的だったと言うか」

「何でもいいから早く何とかしてええ!?! そ、そろそろ腕が限界……っ」

豊姫はぎやーぎやー騒ぎ立てる三人へ冷めた視線を送りつつ、徐に能力を使用した。

瞬間、今の今まで止め処なく流れ出ていた魔力の波が止み、魔砲はぷつりと途切れた。

当然前に体重を掛けて踏ん張っていた三人が、ドミノ倒しのように転がったのは言うまでもない。

「まったく、何をやってるのよ貴女達」

呆れ顔の豊姫へ、魔理沙はひっくり返った姿勢のまま尋ねる。

「……えーと、何したんだ？」

「八卦炉<sup>それ</sup>の周りの空間だけを人間界の魔素が存在しない場所に繋いだのよ。一度供給が途切れれば止まると思ってる」

「は、ははは。ナイス！」

豊姫は親指を立ててガッツポーズを取る少女を引っ叩いてやろうかと思いい、踏み止まった。

一度咳払いをし、次の瞬間には周囲の景色が元の瘴気漂う森へと変わる。

団子重ねの状態から脱した霖之助は、衣服の泥を払って豊姫の前に立つと、深々と頭を下げた。

「御助力感謝します。ありがとうございます」

「いいえ、私も丁度退屈してたところだったから良い刺激になったわ」

和かにそう返した豊姫は、空を一瞥してこう続ける。

「綺麗なお月様ね」

「？」

その言葉に違和感を覚えた霖之助は、自然と空を見上げた。

今は昼前だった筈だが、と。

「!?」

空に浮かぶ満月。  
発する光に、霖之助は異様な寒気を覚えた。



164話 月の増援 ③

素性の知れぬ乱入者にサタンは暴虐で応じた。空中を蹴りつけ、人が視認できるレベルを大きく凌駕した速度で横合いから黒炎を纏った魔手を伸ばす。

「その程度なら先生の方が速い」

依姫は身体に『雷』を纏いながら、振り向きざまに刀を振るった。突き出された魔手と鋒が重なり、一瞬の均衡を破って弾き飛ばす。

「——『建御雷』」  
たけみかづち

「!!」

後方に押し下げられ、体勢を立て直す前のサタンへ再び迫る雷を纏った鋒。

そのまま閃光と共に眉間を突かれ、悪魔の身体は天を仰ぐような形で更に後方へ吹き飛んだ。

だが、依姫は刃から伝わってきた感触ですぐに判断する。

(……貫通していない)

先の彼女の踏み込みは確実に頭部を刺し貫いていた筈だったのだが、返ってきたのはまるで見えない力によって阻まれたような感覚だ。

「……た、唯の攻撃は効かないわよ」

依姫は掛けられた声に意識だけを向ける。

後方で紅白巫女の少女が、漸く追い付いたとでも言わんばかりに肩で息をして立っていた。

「心当たりが？」

「そうね、彼奴の身体は……ッ!？」

言いかけた霊夢は思わず身を強張らせた。

彼女の言葉を阻むように黒炎の弾丸が射出され、眼前まで迫っていたからだ。

バシユウツ!! と、黒炎の弾丸は霊夢の手前一メートルの位置で炸裂した。

見れば、少女を庇うように突き出された刃が水平に構えられている。

「……」

そんな不意打ちにも反応してみせた依姫は、斬り落とした際に付着した黒色の炎を凝視した。

長年『それ』を忌み嫌ってきた月の民だからこそわかる。

「これは『穢れ』、ね。それも飛び切り達が悪い」

「ちよ、ちよつと待っててー!」

慌てたように霊夢は一枚の札を取り出すと、恐る恐る黒炎の付着した刃に貼り付けた。

「……………成る程、『穢れ』だから浄化したってわけ」

途端に鎮火された黒炎を目の当たりした依姫は一人納得した。……と、同時に先程少女が言いかけた言葉を思い出す。

「彼奴の身体は『穢れ』によって護られている。さつきそう言いかけたのよね?」

「……うん」

「なら話が早い」

依姫の身体が淡い光を帯びる。

続いて鈴の音が鳴り、背後から巫女姿の神霊が出現した。

「!？」

霊夢は驚愕した。

この際、目の前の女が何を呼び出したかなんて関係ない。

『神霊』を使役するその術を、自分以外の人間が扱っていること……、そして何の手順も踏まずにそれを実行したことに對してだ。

「神降ろし……！私と同じ能力を——」

依姫は端的に答える。

「この身を依代にすることで神霊の力を使役する——、それが私の能力」

彼女は背後で浮遊する巫女姿の神霊へ、周囲を一瞥しながら命じる。

「祓いなさい『伊豆能売』」

言霊に反応し、神霊『伊豆能売』は手にしている神楽鈴かぐらすずを一連の動きに基づいて振るっていく。

透き通るような鈴の音が連続的に響き、空間全域を瞬く間に埋め尽

くした。

「これは…っ！」

表情こそ読み取り辛いのが、サタンの声色は僅かに焦燥していた。現状この場を包んでいるのは『神直毘神』と『伊豆能売神』の二柱による浄化の力。

単純に見て、サタンの力を阻害する存在が二倍に増えたのだ。だが数で勝っていて尚、彼の力を抑え込むには至っていない。驚愕しているのは依姫も同じだった。

「穢れを浄化する神霊の力が二つ合わさっても祓い切れない、か。もしこの戦いが私一人であったなら或いは…」

「でも好機よ。今なら私の霊術だつて…」

『通じる筈』と、言いかけた霊夢の頭上に影が掛かる。

改めて正面を見遣った先に、居たはずの白い悪魔の姿がなかった。

「わっ!？」

霊夢は不意に胸倉を掴まれ、引き倒された。

一瞬何が起こったかわからないまま、頭上で甲高い音が炸裂する。

「私の後ろへッ！」

叫んだのは依姫だ。

次いで、うつ伏せだった霊夢の身体が引き起こされ、今度は襟首を掴まれて後方へ放られた。

「！」

『夢想転生』を発動させている自身の身体を容易く掴んで投げた事実にも驚いたが、それ以上に驚愕だったのは現在依姫に降ろされている神霊の方だった。

間近で連続的な衝突音。

人外レベルで振るわれる悪魔の手足に対し、雷を纏った依姫の刀が何度も交差する。

彼女の背後には緑の衣を纏った厳格な風貌の男神が降ろされている。

「あの神霊って、まさか……！」

先程は常人離れた戦闘速度からよく視認出来ていなかった霊夢は目を見開いた。

——『建御雷神』

日本神話に於いて、伊耶那岐命が息子である火之迦具土神を斬り殺した際に、付着した返り血から生まれたとされる武神、又は雷神。剣の神でもある建御雷神は、劣勢に追い込まれた神の御子へ自らの力が宿った太刀だけを授け、見事戦況を覆したとされる、八百万の神の中でも屈指の強さを誇る神だ。

このレベルの神霊を、依姫は何の手順も踏まずに降ろしている。それがどれだけ反則的な能力か……、霊夢は思わず息を飲んだ。

だがそんな彼女としてその身に降ろすことのできる神霊は一柱まで。先程降ろしていた『伊豆能売神』の浄化を維持しながら『建御雷神』の戦闘力を併用することはできない。

『浄化』を取れば『戦闘力』は失われ、その逆を取れば『有効打』を失う。

故に先程彼女は口にしたのだ。

……『自分一人では勝てないだろう』と。

ミシツ!! と、金属の軋む音が鳴る。

サタンの魔手が突き出された依姫の刃を素手で掴み取っていた。

「当たっているのに斬れない感覚というのはもどかしいものだろうか？」

サタンの邪気に触れ、『斬る』という選択肢を奪われた刀では引き抜くこともできない。

『穢れ』が刃を介して刀全体を侵食し始める。

「ッ！」

「逃げなくていいのか？」

サタンは徐にもう一方の魔手を依姫の顔へと伸ばしながら言った。攻撃の起点と思われる刀を自ら手放させる見え透いた誘導だ。

「くっ……！」

だがその誘導に依姫は引っかけからざるを得ない。『穢れ』の侵食が柄を握る手に到達しかけている。

どのみちゆつくりと迫っている黒炎纏った腕も、刀を離した瞬間を狙ったものだろう。

『刀を掴み取る』と言った単純な行為一つで、依姫の選択肢は奪われた。

「どうした？」

翔るような視線で笑みを浮かべる彼の様は、正しく悪魔と呼ぶに相

応しい。

だがそんな最中、両者の間に割って入ってきた影があった。霊夢と同じ紅白の巫女服…… —— 先代博麗の巫女だ。

「油断大敵ッ!!」

暁美は刀を掴み取っている腕の『手三里』<sup>てさんり</sup>へ向けて中指を突出させた拳を打ち込んだ。

「……………ぬ、ッ!?!」

一瞬サタンの表情が歪み、万力の様に握りこんでいた刃から手が離れる。

綿毛の様な動きで着地した暁美は、至近距離から『瞬間』のエネルギーを解き放った。

砂塵を巻き上げ、サタンの身体が後方へ押し下げられる。

「貴女は……!」

「良いから、ちよつと耳貸してくれる?」

目を見開く依姫に対し、暁美は短く囁くと、すぐ様前方へ向き直った。

今度はその方向へ悪態付いた言葉を飛ばす。

「効いたでしょ? 貴方みたいな化け物にもツボが存在してるなんて笑えるわね」

「貴様……………俺の気に当てられてまともに動けなかった筈だが?」

「私だって『博麗』を名乗ってた巫女よ。神霊には遠く及ばないまでも、邪を清めるだけの力はあるさ」

だがサタンはすぐに気が付いた。威勢良く立ち塞がった巫女の肩

が僅かに上下しているのを。

「……見え透いた虚勢だな。確かに当初よりかは動けるみたいだが、それでもお前の身体から消えたわけではない」

「はて、なんのことやら」

「大方、小娘と紫髪の女が出した神の力が合わさって漸く蝕んでいた力が弱まったと言ったところだろう？今更弱った身体で何ができると言うんだ？」

一方的に、サタンは敢えて長々と言葉を発した。それは相手を軽視し、余裕を見せつけているわけではない。

悪魔の一瞥は人の魂を抜き取り、漏れる吐息はあらゆる生命を蝕む。故に彼の通った大地からは未来永劫、新たな生命いのちが芽生えることはない。

人の身である彼女等がこうして対峙出来ていること事態が、サタンにとつては物珍しい光景なのだ。

事実、暁美の疲弊と並行してその身を包む『博麗の加護』も弱まってきた。

そんな状態で、もしもこの場から神霊による浄化の力が消失した場合、彼女は悪魔の呪いから身を護る術がなくなる。

本当ならば今すぐにでも戦場から離脱すべき状況なのだ。

「べらべら煩いわね」

それでも暁美は拳を握った。

高熱にも似た倦怠感と、骨から軋む様な痛みが広がる身体を抑え付けて立ち塞がる。

「御託はいいからかかって来なさい。師匠仕込みの博麗武術はこれか  
らが見せ場よ」



彼女は、後方に託した希望を護る。

「死に損ないが」

意外にも、先に動いたのはサタンだった。

放っておけばやがて命を落とすであろう人間の頭上へ高速で飛び、力任せに魔手を振り下ろした。

そして暁美の頭頂部へ掌が触れるか否かの瞬間に、視界が反転する。

ゴドントツツ!!! と、石畳が碎け散る。

迫る魔手をいなし、流れる様な動作でサタンを脳天から叩きつけた暁美は、その喉元へ足刀を打ち下ろした。

「ちっ……」

サタンは喉へ食い込んでいる足裏に構わず力任せに上体を起こした。

瞬間、のしかかっていた圧迫感が消失する。

目の前に居たはずの巫女の姿がない。

振り返る間も無く後頭部に衝撃を受けて、今度は前のめりに吹き飛ばされた。

「脳天から叩きつけて、急所を二度も蹴りつけたのにその反応？少し傷付くわね」

そう漏らした暁美は、視線の先で平然と立ち上がる悪魔に対して肩を竦めた。

「今、漸くわかった」

サタンは淡々とした口調で呟いた。

「触れられぬ筈の小娘を抱える。浄化の力無しで『ちから』を纏った俺に物理的に干渉する。——それがお前の能力ちからだな」

しかし、一切のダメージ無し。

「確か、こ・う・だ・つ・た・か？」

サタンの背からドス黒い陽炎が噴き出す。

それは高濃度の『邪気』。

言うなれば、暁美が今戦闘の主軸として発動させている『瞬間』と瓜二つだ。

「……嘘っ」

徐に突き出された掌。

次の瞬間、邪気によって視覚化された力の塊が空気と共に打ち出された。

「はあああッ!!!」

凜とした掛け声。

暁美の傍から雷を纏った依姫が飛び出し、縦一文字に『穢れ』の波動を断ち切ったのだ。

「先程の借りは返しました」

「随分強引な返済なこと」

改めて歩を進めた暁美はその傍へ並ぶと、小さく呟いた。

「首尾はどう？」

依姫も同じ声量で返す。

「もう少し掛かるわ」

ぱしりつと、暁美は拳を掌に打ち付けた。

刀を中段に構えた依姫は、柄をやんわりと握り直した。

「私の動きについて来られる？」

「愚問よ」

瞬間、二人の姿が前方へ消失する。

僅か十数メートルの距離を音も無く突き進み、目標となる悪魔を前後で取り囲んだ。

轟音と衝撃が響き渡る。

サタンを挟む様に前後から拳を、刀を振り押したことによって、地面が破断されたのだ。

「上!!」

同時に叫び、跳躍する。

先の攻撃の直前に上空へと逃れていたサタンは、掌を其々向かってくる二人へと向けた。

連続して打ち出される『穢れ』の波動。

その間を縫う様に飛翔する依姫の刀が、悪魔の身体を真下から突き上げる。

「お前も学ばないな」

サタンはその鋒を不動のまま受け止め、吐き捨てた。

だが依姫は変わらぬ調子で返す。

「……そうでもないわ」

直後、サタンの側頭部に衝撃が走る。

打ち込まれたのは爪先。

弾幕の影から上空へ移動していた暁美からだ。

「三度目の足蹴にて失礼つと」

「くだらん」

蹴り足をぱたつかせて煽る暁美に対し、サタンは冷めた口調で続ける。

「時間稼ぎも此処まで露骨だと呆れて付き合う気にもなれん。今度はなんだ？今は姿が見えないあの小娘に何かさせてるのか？」

サタンは掌を眼下の神社へと向けた。

集束されれドス黒いエネルギー球。——狙いは明らかだ。

「ちよ、待っ——!!」

慌てて飛び出した暁美だが、不意に空から降ってきた水滴に、動きを止めた。

サタンも同様だ。怪訝な表情で上空を見上げている。

ぽつりぽつりと落ちてくる水滴は、瞬く間に激しいスコールとなつて降り注いだ。

雷鳴が轟き、空を駆けるそれはやがて七匹の炎の龍へと変貌する。

『炎雷神』ほのいかづちのかみ

——神に仇なすその者に天の裁きを」

依姫がそう口にするると、七匹の龍は一斉にサタンへと殺到した。周囲を取り囲む様に群がり、火災旋風を思わせる巨大な火柱を形成する。

「神に仇なす、か。的を得ている」

燃え盛る業火の中から、空気が膨張する音に混じって声が聞こえた。

それは次第に相手を揶揄するような嘲笑へと変わる。

「悪魔とは本来、『神の敵対者』を指す言葉だからな」

炎の渦が内側から黒く染まっていく。

その様は朽ちていく枯れ木のように、末端からぼろぼろと崩れ去り、消えた。

「お前達生者が神の創り出した産物なら、俺はその全てを破壊し尽くすだけだ」

サタンは上空へ向けて掌を翳した。

暁美と依姫の二人は自然とその先を目で追って、背を刺すような寒気を感じた。

「!？」

いつしかその頭上には黒い霧のようなものが立ち込めていた。それが唯の雨雲ではないことは火を見るよりも明らかだ。

「やめろ……!」

直感で理解した。

あれはこの世の安寧を崩すもの。

『朽廃』或いは『老い』、『厄災』或いは『病魔』、そして『死』。

全ての負の事象が丸ごと凝縮された、この世に終焉を与える絶望の塊だ。

サタンの手が、やがて渦を巻くように降りてくる靄を静かに掌握した。

彼は眼下の神社を中心に展開されている博麗結界を見下げながら告げる。

「これは薄ぺらな結界程度では防げん。一刻の内に地上は死の世界へと変貌するだろう」

暁美は動けなかった。

あの靄がどういった形で撒かれるのかは分からないが、サタンの構えから見てそのまま地上へ振り下ろすのだろう。

その前に接近することは恐らく可能だ。

だが接近した後はどうする？

長年鍛え上げてきた自身の拳は、体勢へのノックバックは狙えても、攻撃を中断させる程のダメージは与えられない。

あれだけ濃い『穢れ』だ。下手をすれば接近しただけで命を持つて行かれる。

(……………現状、万事休すってやつね)

依姫の脳裏には真っ先に神霊『伊豆能売』が過ぎっていた。

……………が、十中八九効果は無いと悟る。

元々浄化を司る神は三柱いる。その内の一柱が『伊豆能売』だ。

強大な力を持つサタンを相手に、一柱では精々此方のダメージを通す程度、二柱でもその力全てを打ち消すには至らない。

(せめて、あの一柱を降ろすことが出来れば……！)

そんな二人が共通して願っていたことがあった。

地上の、もう一人の博麗の巫女へ――。

『早くっ!!』

―― その願いは、突然出現した光の柱によって実現することになる。

地上から天に掛けて伸びる光線は、一同の中心へ『その者』を導いた。

「お待ちせ……!!」

博麗 霊夢はそこへ一瞬で現れると、額から流れる汗を拭いながらサタンを睨み付けた。

その顔色はあまり良くはない。

まるで長距離走を走り終えた後のような疲労感が滲み出ている。

そんな少女を見たサタンの表情は、以前のような軽侮したものではなかった。

「貴様っ！それは……!?!」

サタンは驚愕の声を漏らした。より正確には少女ではなく、その背後に佇む四柱の神霊に対して。

「……………成功ね！」

暁美は目を見開き、同時にほっと胸を撫で下ろした。

「まさか、本当に……………」

依姫の脳裏にその四柱の名が浮かび上がった。

浄化を司る三柱、

『神直毘神』  
かみなおびのかみ

『大直毘神』  
おおなおびのかみ

『伊豆能売神』  
いづのめのかみ

——そして。

八百万の神々及び生命の祖神、

『伊邪那岐命』  
いざなぎのみこと

…………その身に降ろすことの出来る神霊は一柱のみ。

そんな定説を覆したかのように四柱を引き連れた霊夢に対し、サタ  
ンは焦燥の色を隠そうともせず叫ぶ。

「そいつら全て貴様が使役していると言っても言うのか!? ならば先程まで  
出さなかった理由はなんだ! 何をした…………!?!」

「何よ、途端にお喋りになっちゃって」

霊夢はサタンと同様に掌を翳した。

すると後方の浄化の神三柱から眩い光が発せられ、瞬く間に結界内  
全てを包み込んだ。



「……ッ！」

二度、三度の瞬きの後に……、悪魔を包む邪気が、空中に漂う黒い靄が、この場に存在する『穢れ』全てが一瞬で浄化された。

暁美の身体を蝕んでいた黒炎の効力も、毒気が抜けるように消失する。

やがて静かに腕を下ろした霊夢は端的に言う。

「私が降ろせる神は一柱だけよ。後にも先にもね」

「……なん……だと……?」

未だ沈黙を保つ一柱 『伊邪那岐』を一瞥しながら彼女は続ける。

「……この神様は『天照大神』や『須佐之男命』、その他多くの神々を生み出した『祖神』と言われている凄く偉い神様なんだって。だから私の代わりに生み出してもらったの。後ろにいる浄化の神様達をね」

少女はあつけらかなと話した。

だがその身に掛かる負荷は相当なものらしく、呼吸が若干荒い。

神降ろしとは、飽くまで神々の力の一端をその身に降ろして借りる儀式のようなもの。

人の身でありながら神の力を振るうことがどれだけの行為か……。況してや『伊邪那岐』は、八百万の神の長である『天照大神』を生み出す程の存在なのだ。

今の霊夢のレベルでは、降ろす為の儀式に時間を取られ、況してや他の霊術を展開している余裕などなかった。

そんな無防備状態な彼女の前へ、暁美と豊姫は立ち塞がる。

「建御雷」  
たけみかずち

「瞬間」

全身を覆う雷が、背部から噴き出す霊力が、この瞬間を待ちわびていたかの様に膨れ上がる。

「他で被害が出ぬよう、此処で仕留めさせてもらおうわ」

「今までやられた分ははきっちり返させてもらおうわよ」

今まではこの場を包む邪気によって、此方の攻撃全てが無効化されていた。

『穢れ』が立ち込めた空間は、徐々に彼女等の生命力を削いでいった。

だが今――。

空間全体に浸透した浄化の力により、無敵を誇った鎧は剥がされ、『穢れ』さんそを取り込めなくなった黒炎ほのおが灯ることはない。  
完全に立場が逆転していた。

「貴、様等ア……ッ！」

ビシツツ!! と、乾いた音が鳴った。

見れば、塗装が剥がれるように、サタンの掌に亀裂が生じていた。『穢れ』という存在が彼を強化するのとは対照的に、清められた空間は邪悪な者から力を奪う。

その中心で振り絞るように。

肩で息をする少女は力強く言い放つ。

『人間』を、舐めないでよね……!」

二つの閃光が走った。

最早背後へ回り込んで挟み討ちにする等の巧妙な動きは必要ない。

真っ直ぐに。

ミシリツ と、固く握り込まれた拳が爆発的な推進力を得て悪魔の顔面に突き刺さった。

周囲を青白い光が駆け巡り、集約された力が乗せられた一太刀は、悪魔の身体を縦一文字に斬り裂いた。

「人間、風情……がッ!」

戦いが始まって初となる負傷。

その最初で最後の傷が、白い悪魔の致命傷だった。

「……………申し訳ありません、サ  
リエル……様……ッ」

幻想郷と月。

其々を代表する守護者を苦しめた白い悪魔の身体は、まるで日の光を浴びたアンデッドが灰に変わるように崩壊した。

## 165話 蘇る月光

古来より、闇に包まれた地上を照らす月には特別な力……、即ち『魔力』が宿つていると言ひ伝えられてきた。

地方によつては『月を凝視すると気が狂う』とまで言われ、月光を浴びて変身することで有名な狼男もこの伝承からきているのかも知れない。

……まあ尤も、そんなジンクスが生まれたのは現代の月が創造うまれてからの話だが。

『月』と言うからには、その効果が発揮される時間帯は夜だ。更に言うなれば、満月の昇る十五夜が最も魔力を放出する時期となる。

しかし高すぎる魔力を放つ月光は浴びた者の気を狂わせた。

満月の欠けるその時まで無尽蔵に力が供給される為、力の弱い者は身体がついていかずに終いには自らを滅ぼしてしまう。

故に封じられた。

月の神の手によつて。

斯くして、地上には安寧の月光のみが残された。

月の神は古来の月を禁術として閉じ込め、月の民に管理させてきた。

今となつてはこの月の存在を知る者も古参のものに限られ、万が一発動できる者となれば更に限定されてくる。

それこそ月の軍上層部に属する一部の術師か、或いは……

命蓮寺の大部屋。

黒髪ショート少女、封獣 ぬえは血相を変えて戸を開け放った。室内を見渡し、そこに座している人物に向かって叫ぶ。

「星！来たよ、敵の大群だ!!」

その瞬間、大きく騒つきだした室内を見て、ぬえは思わず口を紡いだ。

現在此処命蓮寺では、非戦闘員である人里の住人を保護している。法術による結界が外面を囲うように張られ、拡張された室内には命蓮寺の面々を始めとする多くの住人が身を潜めていた。

途端に狼狽が広がり始めた室内に、凜とした声が響く。

「皆さん、どうか落ち着いてください」

そうして立ち上がったのは、髪色と腰巻の配色が虎をイメージさせる僧侶、寅丸とらまる 星しやう。

彼女は現在戦いに出ている住職の聖ひじりびやくれん 白蓮に代わり、この場の主導を一任されていた。

星は未だ興奮気味のぬえを諭すようにして、報告の先を促す。

「ぬえ、慌てずに報告を。外の状況を正確に教えて下さい」

「えーっと、空にどでかい扉が出てきて……、そっから骸骨頭の奴らがうじゃうじゃ湧いてきた」

「……その者達は貴女が掛けた術に気付いていましたか?」

「うーん、どうだろう。でも上手く言えないけど……何かこう、敵意みたいなのは集中せずに分散してる感じだったかな」

ぬえは首を傾げつつ答えた。

現状彼女が命蓮寺に仕込んだ『種』により、外観に対する認識を弄っている。

過去に聖救出の為に向かった魔界から脱出する際にも使用された、一種のカモフラージュだ。

尤も、溢れ出た髑髏の化物等にどう見えているかは定かではないが。

星の傍に座る妖怪鼠の少女、ナズーリンは、外の気配に耳を傾けながら思案する。

「ご主人様、認識を誤魔化せているなら今の内に」  
「そうですね」

星は大部屋の外と内に配置していた命蓮寺の面々を呼び出した。  
新たに集められたのは、水兵服姿の少女、紺色の頭巾を被った僧侶、桃色の雲で構成された老人、小豆色のワンピースを着た犬耳少女だ。その中でも犬耳の少女、かそだにきようこ幽谷 響子は、敵の襲来に萎縮しているのか小さな身体を小刻みに震わせている。

「響子、大丈夫ですか？」

「は、はい……！あの、やっぱり戦わなくちゃ駄目です、よね？」

俯く犬耳少女の頭へそつと掌が置かれた。

少女がはつと顔を上げると、目の前には雲男を従えたくもい雲居 一輪いちりんがいた。

彼女は穏やかな表情のまま告げる。

「安心なさい。貴女は大部屋ここでこの人達に付いていてあげればいいわ」

「まっ僧侶の私達が言うのも難だけど、戦闘の方は任せときなさい。寺の中には一匹たりとも入れはしないから！」

小さめの帽子を被り直し、むらさみなみつ村紗 水蜜も続けて響子の頭を撫でた。

徐々に命蓮寺周辺の空気が重くなるのを一同は感じ取っていた。  
いくら外観を誤魔化したところで、寺内に身を隠している住民の気配までは消すことは出来ない。

化物の軍勢が匂いを嗅ぎつけ、襲撃してくるのも時間の問題だ。

「例の月が現出するまで残り僅か。それに不鮮明にしている命蓮寺<sup>ぼしよ</sup>から私達が出て行けば敵の注意も誘導できる。戦闘が始まったら各人必ず二名以上で動くことを忘れないように」

まるで作戦前に命令を徹底する軍人のように、星はてきぱきと指示を飛ばした。そして懐から手の平サイズの『宝塔』を取り出すと、いの一番に大部屋の扉を開け放つ。

「聖の留守は私達が守ります」

「……………ッ！」

部屋を出て行く皆の背中を、響子は黙って見送っていた。その光景が最後にならないことを祈りながら。いざとなったら自分も飛び出していく覚悟で。

幻想郷全域に魔狼の如く咆哮が木霊する。

各地域に出現した巨大な扉は既に開け放たれ、中から無尽蔵に湧き出る髑髏の化物達が次々とこの地に投下されていく。

仮にこれが空襲のような物言わぬ爆弾であったならまだマシだった。

各地に展開された結界がそれ等を跳ね除け、屋内で身を潜めているだけでやり過ぎることが出来る。

だが化物共は自分の意思で動く。其々が天使からの勅命を受けており、明確な指向性と悪意を持って獲物へと迫るのだ。

更に今回投下されていく化物の個体による強さも以前と比べて飛躍的に上がっていた。

少なくとも、並の妖怪程度では歯が立たないレベルの大群だ。

各地の猛者達も、先の戦闘で傷付き疲弊している。大なり小なり消耗戦を強いられるだろう。

そんな最中、幻想郷の名医である八意 永琳は地面に展開された六芒星の陣、その光の中に佇んでいた。

(少し、手間取ったかしら)

彼女が展開中の術式は、あるものを召喚する秘術だった。

それは以前幻想郷中を混乱に陥れた狂気の象徴。月の軍の上層部、その一部の者が目論んだ計画の核となった術式。

魔を秘めたる者に力を与え、代償として理性を狂気の渦に引き込む古来の月。

——『狂 月』

今まさに永琳が行っているのは、狂気の月を呼び出す為の召喚術式だ。

(幻想郷勢力の大半を占めるのは妖魔の類。戦闘によって消耗した力も、『狂月』の影響で補強される。目には目を、力には力をつけてとこかしら)

一時の力を得る為に身体を酷使し、受け入れた力によって食い潰される。

理性の弾けた獣に敵も味方も関係ない。

目に映るもの全てを拒絶し、壊して、蹂躪する。只々溢れ出る己の力に酔いしれながら、命尽きるまで闘い続ける狂戦士<sup>バーサーカー</sup>へと成り下がるのだから。

(貴方達には悪いけど、もう少し戦ってもらおうわよ)

永琳は躊躇せず、最後の術式を組み上げた。



後は上空に続く光の柱を介して発動させるだけだ。

(幻想郷の戦士として)

永琳は一拍おき、凜として天を仰いだ。

直後、地上から天に掛けて聳える光の柱を、一層強い閃光が上騰した。

空を妖艶な光が覆う。

それは幻想郷を起点に発動した為か、普段のものよりやたらと巨大に見える天体。

しかし、この月の事を知る者、初見の者共にもしこの場に居たならば感じるであろう疑問がそこにはあった。

『狂』月などと呼ぶには些か狂気が足りないのではないだろうか？

それこそ本能に直接訴えかけるような、欲望や衝動といった感情の高ぶりが抑制されているような、もつと言えば狂気へ引き込もうとする干渉力が弱い……？

………時同じくして、上空に現出した月を見上げていた地上の妖怪達は、湧き上がる力をその身に受け、不敵に笑った。

………月光が届かぬまでも影響が大地に浸透して降り注ぐ地底にて、星熊 勇儀を始めとする鬼達はじんわりと広がっていく活力に、高揚を覚えた。

その誰もが自我を保ち、迫り来る絶望の使者に臆する事なく言い放つ。

——『かかって来い』と。

本来月は夜に輝くもの。

夜にこそ、本来の効力を発揮するのだ。

ならば昼間に見える月に輝きはあるか？

それは答えるまでもなく、今この瞬間に現実となって体現された。

## 166話 背負った重み

顔面が髑髏に覆われた化物は、爆発的な脚力を持って地面を踏み砕き迫る。

一度加速すれば天狗にも引けを取らず、振り降ろす腕や脚の一撃は大木をへし折り、岩盤を砕いた。

幻想郷全体を標的とした無差別殺戮。

それが彼等に与えられた唯一無二の命令だった。

「!」

化物の一体が前方に人影を見つけて足を止めた。

視線の先では金髪のメイド服を着た少女が背を向けて立っている。

それは彼がこの地に降りて最初に発見した獲物だった。

にちりと湿った音が鳴り、化物は髑髏の内側で加虐的な表情のまま口角を吊り上げた。

「……………」

化物は我慢出来ずに地を蹴った。

後続の仲間に蹴り上げた土砂が掛かるのも構わず、我先に少女へ飛

び掛かり……、

「あっ、来た」

聞こえたのはそんな間の抜けた声だった。

「？」

突如、頭部に浮遊感を覚え、首から下の感覚が消失する。何が何だ

か分からないまま、化物の意識は永久に闇へと沈んだ。  
ごごとりと地面に落ちた頭を、少女は乱雑に掴み上げて呟く。

「なーんだ、弱っちい」

「夢月、汚いから素手で触らない」

その傍らに立つ天使の様な純白の翼を生やした少女は、妹の行動を咎めつつ周囲を見渡した。

「とは言え囲まれたわね」

既に両の指では数え切れない量の気配が、二人の少女を取り囲む様に散在していた。

その様子を知ってか知らずか、夢月と呼ばれた少女は『鋼鉄の刃』に変化させていた腕を元に戻しながらぼやく。

「でも幻月姉さん、折角あの丸っこいやつでパワーアップできたんだからもっと試したい」

「はいはい、別に我慢しなさいとは言っていないでしょう?」

周囲の空間を歪めながら、幻月はぱきりと指を鳴らした。

此方はたった二人なのに対し、敵は多勢。

思わず背後の神社へと意識が向く。

つい先程まで轟音が絶えなかったあの場所も今では静寂に包まれていた。

あのとんでもない魔力を放っていた悪魔も倒されたのだろう。空高く聳える結界もあつてか、巫女の少女等の下までまだ化物達は到達出来ないでいる。

今一度、自分達に与えられた使命を思い出した。

(全く、私達を番人に使うなんて……)

不満気な表情を作りながら、幻月は飛び出してきた一匹を空間ごと破裂させて物言わぬ骸へと変える。

その光景がより一層化物等を興奮させた。

鬮體の向こう側で血走った瞳をギラつかせ、ほんの少しの物音で一斉に殺到しかねない緊張感が漂い始める。

(でもある意味重要ポジよね。なるべくなら攻撃して欲しくないんだけど……、)

「よっしや」

傍では小さく呟いたメイドもどきの妹が、刃に変えた両腕を頭上でがちがちやりながら何かを叫ぼうと大きく息を吸っている。

「ばっちっ(おおおおいッ!!)」

斯くして、化物等は濁流の様に押し寄せた。

それは膨大な量の水だった。

どこからやって来たのでもなく、虚空より突如生み出されたそれは、国一つを軽く丸呑みにせんとする規模で襲い掛かる。

「…」

標的となった一人の男がとった行動は、その場から一步も動かず、ドアをノックする様な動作で巨大な津波へ裏拳を放っただけ。

瞬間、押し出された拳圧は凄まじい破壊力を持った空気の弾丸へと

変わり、天高く伸びる水の壁の中心へ風穴を開けた。

左右へ割れるように退いていく圧倒的水量はその場に止まることなく、遙か遠方まで流れていく。それだけでこの異空間の広大さが伺えた。

「ちっ」

天変地異クラスの猛威を何気無しに退けた終 隼斗は、津波によって濡れた衣服を鬱陶しそうに払った。

「ふっふっ」

その頭上をとったのは、対峙する死の天使サリエル。不敵な笑みを零し、青白く迸る掌を隼斗へと向けた。

耳を劈く轟音が聞こえたのは事が起こった一瞬後。

隼斗の脳天へ落とされたのは大規模な落雷だった。凄まじい雷光を放ちながら、水で湿った身体を容赦なく突き抜けていく。

「眩しいっっの」

声はサリエルの後ろから発せられた。

彼女が振り返るよりも早く、男の指先が顛顛こめかみに触れる。

——『白雷』。

先程と同様青白い閃光。

唯一違うのは、それが一直線に伸びる雷の光線だったという事だった。

詠唱の破棄どころか、無詠唱での破道。

それも数字が大きくなればなるほど強力になる、一から九十九まで

ある内の僅か四番台。

通常なら精々人の腕程度の幅の雷を放つ術であるが、彼の放ったそれは大木を縦に丸々飲み込んでしまうほどの規模。

当然、零距离から受けたサリエルの脳内は一瞬で沸騰し、身体中から青白い光を放ちながら消し炭と化する。

「！」

宙を舞う灰。

だがその一つ一つが元の形を取り戻すべく膨張し始めた。

「はぁいっ」

おちやらけた様子で手を軽く振り、一瞬で増殖した死の天使は、間髪入れずに再生した六枚の翼を振るう。

「六枚……、掛・け・る五百は？」

そう問いかけた瞬間には、既に音速の数十倍の速度で殺到する三千の翼が攻撃を開始していた。

「三千五百でいいか？」

そう返答があつたのもまた、反撃が全て終わった直後。

サリエル本体、そして一人頭六枚の翼、計 三千五百 個の的へ、的確に一発ずつの拳が打ち込まれていた。

「嘘っ、さっきより断然速い……」

「いい加減終わらすぞ」

隼斗は痺れを切らしたように吐き捨てた。  
肉塊となって消失していく分身に混じり、未だ再生途中のサリエルへ一気に詰め寄る。

「うっ……」

天使の腹を再び拳が貫通した。  
そして隼斗は腕を引き抜く際、縛道ばくどうによる封を施す。

「縛道の九十九『禁』」

サリエルの風穴が開いた腹部を中心に、術で生み出されたベルトと鋏が出現。その身体を縛り付ける。

「何を……？」

「……」

その問いに彼は答えない。  
口にするのは天使を封ずるための言霊のみ。

「縛道の九十九 第二番

—— 初曲 『止縛』しりゆう」

霊力で構成された带状の『布』が、サリエルの身体に巻き付き地面へと縛り付ける。

「式曲 『百連門』ひやくれんもん」

地に落ちた身体へ幾十もの杭が突き刺さり、完全に縫い止める。



そして続く最終局面、隼斗は掌を合わせて地面へ叩きつけた。

「――終曲『ばんきんたいほう卍禁太封』!!!」

空中に卍模様の刻まれた巨大な四角柱の碑石が出現。

それは重力とは違う力に引かれ、拘束したサリエルへ降り注いだ。一つの轟音。

ここが大地の存在しない異空間でなければ、地中深くまで食い込んでいたであろう衝撃が走る。

「こいつは『縛道』だが、封じる力が強過ぎて対象を圧殺しちまう。博麗あいつらにも教えなかつたとおきだ」

隼斗は血溜まりの広がっていく碑石を眺めながら呟いた。

そして徐に空間に浮かび上がっているモニターへ視線が動く。

幻想郷の中継映像だ。

巨大な扉から無尽蔵に湧き出る異形の存在。

対峙する幻想郷の住民達。

「……」

博麗神社の様子もあつた。

戦いを終えたばかりなのか、巫女二人の疲労の色は濃い。特に暁美は辛そうに膝をついている。

今戦闘に於いて、幻想郷を護る要となるあの場所は、賢者である八雲 紫と共に彼が作り上げた結界によって護られている。

結界にはとある特殊な細工が施されており、それは『境内に侵入することの出来る人数を限定し、それ以外を弾き出す』と言ったもの。

これによって外からの援護が受けられない代わりに、敵に増援を呼ばれることもない。

だが飽くまで結界。外からの強い圧力を受け、許容応力を越えれば

忽ち破壊されてしまう。

その為の悪魔姉妹だ。

襲撃前に彼女らには隼斗が直々に作戦を伝えていた。

内容は単純明快。

—— 博麗神社周囲の敵の殲滅。

尤も、本来なら幻想郷とは無関係の彼女等には協力する筋合いはないのだが、直々に作戦を伝えに行つた隼斗の説得により、協力を仰ぐことができた。

詰まる所、幻想郷を覆う結界は博麗神社を起点に展開されている。

彼処が落とされれば、博麗大結界は崩壊する。そうなれば幻想郷はその存在を保てず、天使による被害は幻想郷外部にも雪崩れ込むことになるだろう。

だからこそ彼は救援の要請を惜しまなかつた。

モニター内で高速で動く影が二つ。

それは蔓延<sup>はびこ</sup>る化物等の間を駆け抜け、その全てを斬り伏せていく。将又その身に雷を纏い、近付く怨敵を消し炭に変えていく。

(頼むぜ……、妖忌、依姫)

隼斗はモニターから視線を外し、再び碑石を睨みつけた。

先程と変わらぬ惨状。だが彼の反応は至つて冷め切つたものだ。

「……で、いつまでそうしてる気だ？」

ぐちゃりと、湿った音が聞こえ、沈黙は破られる。

地面に広がった血溜まりは一瞬にして消失し、後に残つた碑石が音を立てて崩れ去つた。

「あら、てつきり勝つた気でいると思つてたからもう少し余韻に浸ら

せてあげようとしたのに」

くすくすと嘲笑を零し、死の天使は隼斗の背後を取っていた。

振り返ることのないその背中へ、何がそんなに楽しいのかサリエルは笑みを絶やさず続ける。

「大体貴方が言ったのよ? 『終わらせる』って。まっ、結果は残念だったけど」

「……」

隼斗から反論は返ってこない。

代わりに懐から一枚の護符を取り出して見せた。

「?……何かしら、それは」

たった一言、彼は眩く。

「『終わり』だよ」

直後だった。

その場の二人以外何も存在しない筈の異空間に、眩い光が差し込んだ。

まるで卵の殻を破るように、空間全体が音を立ててひび割れていく。

「なっ……!? これはッ!」

サリエルから初めて狼狽気味な声が漏れた。

「ふっ」

その様子を隼斗はほくそ笑んだ。  
天使が崩壊を止めようと動き出した頃にはもう遅い。  
—— 既に彼の術中にハマっていた。

幻想郷上空。

そこに降り立つは一柱の神。

彼女の名は『龍神』。

頭に鹿のような角を生やし、髪と瞳が真紅色に包まれたこの世界の創造神だ。

「頃合いか」

眼下から沸き立つ殺気の混じった喧騒に耳を傾けながら、彼女は掌を翳した。

そしてこの世界とは遠く離れた場所、即ち『魔界』へと念を送る。

『準備は？』

『いつでも』

聞こえてきた若干陽気混じりの声。

彼女も龍神と同じくして魔界の創造神、名は『神綺』。

世界を統べる彼女等にとって、互いの距離などあつてないようなもの。

二柱の神は其々の『創造神』たる力を注ぎ込み、一つの球体を創り出した。

『本当にいいの？』

『何が』

『彼、戻れなくなるわよ』

『知らん、奴が決めたことだ』

龍神は鬱陶しそうに念話を切ると、掌に浮かぶ球体を握り込んだ。

……先程から不機嫌気味な彼女の心境は定かではないが、たった一言呟かれた言葉があった。

「……馬鹿者め」

「ハハハは……？」

自身が創り出した異空間が崩壊し、彼女が瞬きした瞬間には景色は変わっていた。

何もない、ただ只管何も存在しない真っ白な世界が広がっていた。

「！」

不意に違和感を覚え、サリエルは掌へ視線を落とした。

「なっ…」

ぴしりっ……と、まるで欠けた陶器の様に指先から亀裂が入っていた。

掌だけじゃない。僅かではあるが、その影響は確実に身体全体に及んでいる。

「この世界では常に崩壊が付いて回る」

ぴしゃん と、水面に水滴が落ちる音が異様に響き渡った。  
直後、白一色の世界に波紋が広がり、天も地も水鏡の様に変化する。  
彼も同様にその場に立っていた。

「言ったはずだぜ、サリエル」

隼斗の足元からドス黒い力が昇り始め、身体に巻き付いていく。  
その光景に見覚えがあった。

(まさか……っ!?)

まるで、

それはまるで……、

《――終わらせるってな》

エコーのかかった声。

そう吐き捨てた男の顔は、髑髏状の仮面に覆われていた。

## 167話 一騎打ち

この真っ白な世界には何も存在しない。

正確に言えば何も存在することが出来ない。

この地に存在した物は全て、その瞬間から崩壊していくのだから。ぱきりぱきりと手足の末端から乾いた音が伝い、サリエルの身体は崩壊へと向かっていた。

だが所詮は小規模な破壊が連鎖的に起こっているに過ぎない。

あらゆる絶望、即ち彼女の願望そのものを実現させる能力は<sup>ちから</sup>この程度の損傷など意に介さず再生させることが出来るのだ。

「ここが何処だかは知らないけれど、これ位で私を終わらせるだなんて……………」

《そのまま、》

隼斗は遮るように、

《精々そのまま治すことに集中しとけ。そうすりゃ、少なくとも繋ぎとめてられるだろうよ》

エコーのかかった声でそう言い放った男の身体には一見崩壊は見られない。

髑髏状の仮面、そして身体全体を包み込むように浮かび上がる黒い気は、宛らサリエルの配下たる軍勢のそれと酷似する。

「…………信じられないけれど、間違いない」

彼女はその力の質に覚えがあった。

『それ』は…………、これまでサリエルが創り出してきた数々の絶望の中でも異彩を放つ存在。

特に猛威を振るっていた時期に於いては、一つの世界を滅ぼしか

け、創造神二柱をもつてしても消滅させるには至らず、結果二つの世界を巻き込む形で封印された絶望<sup>せんぞい</sup>。

名前など付けた覚えはなかった。

当時の自分とてほんの気まぐれだったのだろう。

唯の暇潰しか、或いは新しく出来上がった玩具の誇示がしたかったのか。

少なくとも、彼女にとってはお遊びの範疇だったにせよ、その存在一つで今回の異変に匹敵するレベルの力は持っていたはずだ。

「人間界<sup>そつち</sup>では『西行妖』……、なんて呼ばれていたわね」

—— その植物は例え神であろうと無差別に命を喰らう桜の木。

「そうそう、そうだわ。忘れてた」

まるで久しぶりに会った知人の名前を思い出したかのような気軽さで、天使は一人納得したように手を打った。

つまり、彼女にとってはその程度のことなのだ。

絶望を与えることこそが、彼女自身に於ける至高の娯楽、喜び……、生き甲斐と言ってもいい。

そして死の天使はある日ふと思に至る。

『そうだ、世界を滅ぼそう』、と。

そんな周期的に訪れる発作とも言うべき衝動が、今回の様な……、或いは過去に起きた『死の桜』による世界崩壊レベルの危機を生み出していた。

「貴方を含めて対象が生命体である以上、アレに抗う術は無い。況してやその力を取り込むなんて真似は不可能の筈よ」

《例外もあるってことだ。現に俺はこうして生きてる》



隼斗が肩を竦めながらさも当然の様に言い返すと、サリエルは此れ迄繰り広げてきた彼との戦闘を思い返し、呟く。

「……そうね。確かに貴方には私の能力は及んでいないみたい」

「でも」と、付け加えたサリエルの身体から隼斗と同質の黒い力が漏れ始めた。

同時に、その体表が青紫色に染まっていく。

「底を見せてないのは私も同じなのよ?」

純白だった翼までもが青紫色に染まり始めた直後、サリエルの頭上に直径20メートル程の光の輪が出現した。

光輪の表面には黒い雷が這うように迸る。

その様は神々しくも底知れぬ悍ましさを孕んでいた。

「さ、時間が惜しいわ。始めましょうか ♪」

柔らかい口調とは裏腹に、地の底から滲み出るようなおどろおどろしい笑みを浮かべ、サリエルは宙を漂い始めた。

徐ろに両の掌が地面へと向けられる。

直後、サリエルの眼下に複数の陣が形成された。

当初は掌が指向されていた二箇所。

そして見る間に地面に出現した陣の数が急増していく。

隼斗はその光景に見覚えがあった。

何時ぞや異変での戦闘で、吸血鬼の姉が使っていた魔法。

陣を介して己が契約を交わした魔獣又は使い魔を呼び出す為の術式、つまり。

《テメエも懲りねエ奴だな》

彼が吐き捨て、睨み付けるその先。

召喚術式によって生み出された数多の異形達が、理性の欠片も感じられない表情で、血走った瞳を向けていた。

だがこの場所は早くも彼等に牙を剥く。

脳天から、或いは爪先から始まる肉体の崩壊。

視線を転じれば、身体が融解し、ドロドロに崩れていく個体も散見された。

隼斗は一度視線を伏せ、再びサリエルを見遣る。

《……》

この場に召喚された化け物達は皆、僅かな種類の個体が複製された同種が殆どだった。

今も幻想郷を襲っている、髑髏状の仮面に覆われた雑兵とは違う。

天使軍として、幻想郷各地に構える一騎当千の猛者達を倒す為に単騎で送り込まれた、天使側の特記戦力達だった。

前の世界で隼斗が葬った者達に加え、博麗神社に降り立った『白い悪魔』、魔法の森で猛威を振るった『三頭の竜』。

それらの精鋭達が、身体を崩壊させながら、凄まじい速度で増殖を続けていく。

広大である筈の世界も、視界一面が埋め尽くされつつあった。

そんな光景を目にした男から発せられたのはたった一言……、

《……憐れだな》

表情の読み取れない髑髏の仮面を傾けて、隼斗は周囲を一瞥した。続く言葉に有りつ丈の情を乗せて言い放つ。

《よオ、聞こえてる奴からでいい。さつさと楽になりてエ奴から向か

つてこい》

それだけ言うと、隼斗はサリエルの元へと歩き出した。既に彼の瞳には崩壊にもがき苦しむ化け物達の姿は映っていない。

仮面の向こう側で光る赤い眼光が、サリエルの姿を睨み殺すように捉えていた。

「今更そんなお情けを口にするなんて、どう言うつもりかしら？」

《テメエはもう喋んな》

憤怒の籠った声に続き、刹那の一瞬で叩き込まれた拳が空中で炸裂した。

その拳撃に一切の配慮は無く、発生した余波は凄まじい衝撃波となって辺り一帯を爆ぜさせる。

間近にいた化け物達の残骸が飛び散る中、笑みを浮かべていたのはサリエルただ一人。

全てを破壊する筈の拳は、二枚の重なった翼によって阻まれていた。

「滑稽ね。それが偽善だと思わないの？」

《くだらねエか？元より善行なんざに興味はねエよ……！》

会話は切れ、同時に力の均衡も崩れ去る。

隼斗はそのまま翼を鷲掴みにし、後方へ転じながら放り投げた。

一瞬で人型の弾丸となったサリエルの身体は、進行上の配下を撃ち抜きながら、遙か遠方まで吹き飛んでいく。

だがその刹那、死の天使は配下達へ文字どおり死の宣告を下す。

『あの男を討ち取れ』、と。

そして、最早一万やそこらでは効かない数にまで増えた狂気の瞳

が、一斉に隼斗へと向けられる。

間隙はなかった。

ドーム状に密集する軍勢のほんの一角で囁かれた命令を、既に全員が実行しようと動き出していた。

ある者は指がまともに揃っていない腕で弓の弦を引き絞り……、

ひび割れた甲殻に覆われた腕を振り翳し……、

毒液と共に血反吐を吐き散らす蛇腕を伸ばし……、

剣を構え、死に体の獣に鞭を打って迫り……、

崩れ落ちた巨腕に構わずメイスを振り上げ……、

半分ほど朽ち果てた魔導書から、各々の龍を呼び出し……、

砂となり四散していく肉体と武器に臆せず、妙技を繰り出し……、

死滅した一頭を捨て置くように残り二頭が其々の魔法陣を形成し

……、

唯一無二の標的へ向けて殺到した。

その中でただ一種、能力ちからの恩恵により崩壊を遅らせている白い体表の悪魔もいたが……、

《……上等だ》

呟いたその瞬間、彼の周囲で血の雨が降り注いだ。

一拍置いて轟音と衝撃が鳴り響いたが、遠巻きで見ている連中ですら何が起こったか理解できなかつただろう。

しかし彼らが疑問を抱くよりも早く、目の前の出来事を理解する間もなく、破壊の連鎖は広がり迫った。

繰り出された拳は衝撃波となり、衝撃波は弾丸の如く直線状の化け物を貫き、破壊する。

的確に頭部を打ち抜き、『三ツ頭の竜』のような高度な再生力を見るや、即座に連撃へと切り替え塵も残さず蒸発させた。

「へいっ」

その最中に、亡骸へと変わっていく配下の間を潜り抜けて、溢れる笑みを隠そうともしない死の天使が迫る。

ビキビキと筋骨を軋ませながら、極大にまで硬化、研ぎ澄ませた翼の先端を超高速で突き出した。

《↑!》

翼は吸い込まれるように化け物等の合間を縫って、背後から隼斗の心臓部へ突き立てられた。

それでも勢いは止まらず、伸長し続ける翼は、振り抜かれた拳撃のように隼斗の身体を吹き飛ばす。

「逃がさないわ」

サリエルは青紫色の翼二枚を地面へ突き立て、弓なりに上体を反らした。そして収縮したバネを解放する様に、前方へ向けて一挙に加速する。

そうして一瞬で追い付いた天使の翼が、触手の様に隼斗の脚を絡め取ると、容赦無く地面へ叩きつけた。

一つ、二つと世界が震撼する。

ひたすら只管乱雑に叩きつけられる肉の音が連続し、やがて挽肉状の血の塊と化した。

「あら」

翼による折檻を止めたサリエルは、最早原型をとどめていない亡骸に、赤く染まった白翼を見た。

「いつの間に、カワ……ッッ」

ぐるりと反転する視界。

突如横合いから振り抜かれた拳を顛顛こめかみに受け、首から上のみが錐揉み状に吹き飛ばされていた。

しかし、

「見事な変わり身ね。一瞬気付かなかったわ」

《ちっ、まだ復活する余裕がありやがるか》

さも当然の様に復活する天使に対して、隼斗の対応も淡泊なものになっていった。

先程翼による刺突を受けた背には衣服の損傷こそあれど、傷一つ負っていない。

その様子に好奇心な眼差しを向けるサリエルは、硬質化した自身の翼を軽く撫でた。

「ふふ、まだ貴方を傷付けるには力が足りないか。それとも、今の貴方はそもそも傷すら負わない無敵の存在にでもなっているのかしら？ だったら少し困るわねえ」

身体を舐める様に凝視する天使に対し、隼斗は眉間に皺を寄せながら言い放つ。

《馬鹿言うな。俺はお前みたいに傷を瞬時に治す能力を持ってゐるわけじゃねえ。当然、脳や心臓を潰されれば死ぬ》

「それが難しいんじゃない。試しにさつきからこの世界の空気を排除したり濃度を弄ったりしているのにケロツとしてゐるし」

《んなもん息止めりや問題ねえだろ》

「…………その発言が既に可笑しいのよねえ。貴方種族は人間の筈でしょう？ 既に、と言うかとおつくの昔にそんな域から飛び出してしまっ

「ているわよ？ 強大な力を得た為に神格化でもしたのかしら」  
《俺が神ってか？ 世も末だな》

軽口とは裏腹に隼斗とサリエルは幾度も衝突を繰り返していた。  
当初は彼の一撃を前に呆気なく粉微塵になつていた天使の身体も、  
徐々にその威力を理解し、一度や二度では壊れない耐久力を持ち始め  
つつある。

ぶつかり合うは拳、或いは蹴と翼。

リーチで勝るサリエルは、隼斗が懐に入れぬ様、遠間から四枚の翼  
を高速で打ち出し、それでも潜り込まれたならば残る二枚が対応する  
形式を取っていた。

現状、隼斗の攻撃と均衡する程にまで強化された翼の一突きは、死  
角からの不意打ちとはいえ、彼が受け損じた程の性能を誇る。

《ちっ》

隼斗の軽い舌打ちに、サリエルの口角が笑みの形に吊り上がって  
いく。

その顔が見たかった。

優勢から徐々に余力が削がれ、次第に焦燥へと変わる表情が見た  
かった。

慌てることはない。

膨大な彼の強さは上限からのスタートであるのに対して、此方は際限  
無く強化することができるのだ。  
焦燥先はいつ見れる？

もつと見せつけた方がいいか？

先程はその身体を貫けなかった翼の強度も今では更に跳ね上げて  
ある。そろそろ傷の一つでも付けられる頃か……。

一層の事翼の数を増やそうか？ なんならまた分身を創り出して  
も  
いい。

何れにせよ、彼が血を流すのは時間の問題だ。

(…………でも思ってたんだろうな)

怒涛の如き打ち合いの最中、湿った音を立てて天使の翼が千切れ飛んだ。

サリエルがその事実気付いたのは、自身の背に唐突な脱力感を覚えたからだ。

《漸く気付きやがったか》

エコーの掛かった低い声を唸らせ、隼斗は返り血のついた掌を払った。

もう一方の手には、いつの間に挽ぎ取ったのか、更に二枚の翼が握られている。

千切られても尚、びちびちと跳ね回る様は、宛ら陸に打ち上げられた魚を思わせた。

「……………」

そして再びサリエルの意識は己の背に、欠損した翼に向けられたが、ここにも明確な異常が生じていた。

普段ならこうして自分が意図せずとも即座に再生へと向かっていった筈の傷口が、一向に修復されない。それどころか徐々に欠損部分が広がっていく。

それはまるで虫喰いの映像を早回しで見ている様な光景だった。

「何故……………」

《最初に警告したよな?》



突き付けられた男の掌。

サリエルは徐ろに顔を向け、丁度視線が彼と重なった瞬間、視界一面が黒い波に包まれた。

それは妖力が入り混じった破壊の閃光。

周囲に漂う配下諸共、死の天使の身体は遙か遠方へと消えていった。

## 168話 干渉不能の隔離空間

白一色の世界を塗り潰さんと漆黒の波が走った。

放射状に広がっていくそれは、人間界に存在しえない力の込められた虚無の閃光。

繰り出した当人、終 隼斗は掌を突き出したままその先を睨み付ける。

何も存在しない空間に、閃光によって消し飛ばされた化け物等が折重なり形取った円形状の風穴が一つ。

ばらばらと崩れ落ちる残骸を前に、隼斗はその者へ淡泊に告げる。

《残りの翼を犠牲にしたのは良い判断だぜ。じやなきや今頃塵になつてた》

「何を、したの？」

声のみが、彼の言葉に応じた。

直後、地べたに血だまりを広げる化物の亡骸が盛り上がった。

一度ばらばらになったそれは粘土の様に混ざり合い、やがて人型を形成していく。

死の天使サリエルは、既に笑みの消え失せた表情のまま、隼斗を眼光鋭く睨み付ける。

《珍しく察しが悪いな。そうだったのが俺の仕業だとも思ってたのか？》

隼斗は、サリエルの背にあつた筈のものを顎でしゃくってみせた。

……………六枚全てが消失した背部を。

《何故俺が態々こんな場所に連れてきたと思ってる？……………そう言やお前は、此処の特性を軽く見てたな》

「！」

思い起こされた記憶。

彼の言った通り、軽視していたこの異界の特性。

——『この世界では常に崩壊が付いて回る』

サリエルは徐ろに掌へ視線を落とした。

「…」

この世界へ転移した当初は小さな亀裂だった。

別段気にとめる程でもなく、自身の再生能力によってすぐ様修復されるレベルの極僅かな崩壊。

「……………」

まるで乾燥によってひび割れた大地の様だった。その中で一際大きな亀裂は掌を飛び出して腕へ、そして肩口へと向かっていた。

「く、くくっ……………」

一度は消え失せたサリエルの表情に、再び笑みが零れる。

彼女にとつて、その様がどうしようもなく可笑しく映った。

人体に降りかかった過度なストレスや刺激を緩和させる為に起こる生理現象的な笑いとは違う。

どこか、滑稽なものでも見下ろしているかの様な、下卑た笑み。

《何が可笑しい？》

目の前にした彼がそれを疑問に思わない訳がない。その質問に、死

の天使は口角を吊り上げたまま答える。

「だって、可笑しいじゃない！私が！私以外の全ての存在に絶望を与えるべき私が！今まさに、理解不能な崩壊に見舞われているのよ？治る筈の傷は一向に塞がらず、それどころか悪化の一途を辿っている。この亀裂だってそうよ！この世に誰か一人でも存在している限り！『絶望』の根源たる私が高々崩壊によって消え入る訳がないのに！」

狂気染みた笑みのまま、サリエルは捲し立てた。

絶望と希望は対照的であり、その関係性は緊密だ。

一人の希望が他の誰かの希望とは限らない。

一人が幸せを掴むことで、他の誰かの幸せが崩れ去ることもある。

……希望の裏に潜む絶望。

その理屈を極論化したのが彼女の能力だ。

死の天使の存在は、人間界、魔界問わず全生物共通の『絶望』であり、彼女はその絶望を核として、新たな絶望を創り出している。

即ち、彼女の降り立つ世界に一つでも生命が存在している限り、死の天使と言う存在が消えることはないのだ。

《……》

隼斗は一度瞼を伏せ、徐ろに溜息を吐きつつ、

《此処には……、絶望を感じる者は一人も居ねエよ》

低く、そう言い放った。

依然、天使の笑顔は絶えない。

「この場所に居る居ないは関係ないのよ？要は人間界だろうと魔界だ

ろうと……、もつと言えはこの世に存在している限り……………」  
《だから居ねエってんだよ》

今度こそ、サリエルは口を噤んだ。

《此処はとある奴等の協力を得て創りあげた、『外界との干渉を断つ』  
異界だ。お前の厄介な能力ちからを封じる為のな》

ついには形を保てず霧散していく天使軍の戦士達を一瞥しつつ、隼斗は突き付ける。

その言葉が示す通り、それ以上の意味を持たぬたった一つの、『残酷』な事実を。

「何を言って……………」

《気付いてんだろうが》

有無を言わず隼斗の低い声が被さった。

そう、彼女は気付いている。

気付いた上でその事実に疑いを持っていた。

だってそうだ。

もし本当に外界との干渉を断ってしまったら、目の前の男はどうやって帰還する？

仮に帰る為の『出口』を後から作れるとして、再び外部と此処が繋がった瞬間、自分は再び能力ちからを取り戻すだろう。

そうなれば、例えばそれが一瞬にも満たない刹那の時だったとしても、脱出することは容易い。

彼にとって、そうなつてはいけない筈だ。

「そう、あり得ない」

自分へ言い聞かせるようにぼそりと呟いたサリエルは、能力の間接的行使により、ズタボロになった身体を修復していく。

これは飽く迄、サリエル自身の脳内で描かれる絶望を体現しているに過ぎない。

つまり、彼女が脳内で処理し切れる範囲でしか効果を持続出来ないのだ。

そして今は激闘の中に出来た間隙。

一時的に戦闘と言う動作が抜けた分を回復に充たす為か、身体は見る間に再生していった。

(確かに彼の言った通り、回復にさえ集中していれば肉体の修復速度が崩壊を下回ることはないわね。……とは言えこれでは埒があかない。なんとか、)

先の言葉が事実であるならば、少なくともこの場にいる両者を永久に閉じ込めておかなければならない。

(なんとか、脱出する……算段、を………)

そう、両者を永久に、だ。

そしてその予想を見透かしているかのようにして、再び滑り込んできた言葉。

《気付いてんだろ、そいつは現実逃避だ》

「!」

……………そうだ。

この場所では、今まで湯水のように湧いてきていた絶望の気配を一  
切感じることができない。

今までそんなことはなかった。

人間界や魔界は勿論の事、先に柊 隼斗と言う特記戦力を外界から切り離し、閉じ込めておく為に用意した異界でさえも、絶えず無限に湧き上がる力の存在を己が身に感じていた。

その感覚が、此処へ来てはぱたりと途絶えたのだ。

彼が口にした事実を裏付けるには十分な要素が既に展開されていた。

「なら、本当に？」

サリエルはまたも小さく呟いた。

その一度の認識が、いつしか彼女から笑顔を消失させていた。

対して、柊 隼斗が口にしたのは、淡々とした冷酷な現実。

《此処では時の流れすらも崩壊からは逃れられねエ。まっ、時間は腐る程あるんだ。決着つけるにや丁度良いだろ》

ぱきりっ、と音を立てた仮面の一部を、隼斗は反射的に掌で覆った。そして歩き出す。

本当の意味で、『絶望』を突き付けられた天使の元へ、固く拳を握りながら。

## 169話 使命がもたらすモノ

その瞬間は唐突に訪れた。

幻想郷各所に出現した巨大な扉。  
まるで壊れた蛇口のように、死の天使の配下が無尽蔵にばら撒かれていた。

—— そんな異界への入り口が、音を立てて破断したのは、ほんの一瞬前の話。  
皆、一斉に空を見上げた。

ばらばらと崩れ落ちる扉の残骸は、地面に触れる頃には塵となって散っていく。

戦闘の最中、足下に転がした敵兵の喉元にナイフを突き立て、止めを刺した春雨 麻矢は、怪訝な表情のまま呟く。

「何が……、！」

そして異変は続け様に起こった。

それは上空の扉が突如として崩壊したことによるものなのかはわからない。

だが明らかに……、あれだけ苛烈を極めていた天使軍の動きが、この瞬間をもって緩慢になっていた。

「……………」

誰もが目を見開く状況下で、彼女に言える事は二つだった。

一つは、化物らに起きた異変に、麻矢固有の能力である、『対象の体感速度を下げる』力は関係していないこと。

この能力でも、今日の前で起きている異変同様に対象の動きを抑制



にすることはできるが、効果が現れるのは飽くまで『彼女が認めた対象にのみ』。

つまり空間全体を彼女が能力で埋めることはできないのだ。

そして二つ目。

文明の発達した月の軍に加えて、異形の力を持つ幻想郷の住人達を相手に、一歩も引くことなく物量で攻め入る化物達。

—— その供給が今、絶たれた。

麻矢は即座に左手首に付けている小型の端末を操作し、

『一番隊及び各隊へ！——』

それが通信機であるにも関わらず、声を張り上げて命令を飛ばす。

『—— 今が好機だ!! 隊列を立て直し、敵軍を掃滅せよ!!』

数秒の間を置いて一斉に応答があった。

『……了解ッ!!』

通信は切れ、同時に周囲からは喧騒が溢れ出した。

それは耳障りな穢れ振りまく化物等の咆哮とは違う……、彼女等が信頼せし月の軍、その兵士達によって上げられた勝鬨かちどきであった。

「安心してください、隊長」

麻矢はぼそりと呟いた。

既に彼女が直接率いてきた分隊の兵士達は、眼前の敵に向かって駆け出している。

右手には小型の電子銃、左手には軍用のナイフを握り締め、現・一番隊長もその後が続く。

(……………必ず護り抜きますッ!!)

巨大な扉が崩壊した同時刻。

幻想郷内に位置する異次元空間に八雲 紫はいた。

「……………はっ、はっ、ッ！」

普段は端麗でいて妖艶な空気を醸し出している彼女だが……………、その白く透き通った肌はじつとりと汗が滲み、呼吸が荒い。

「紫様っ、間も無く戦況も落ち着きます。どうか堪えて…ッ！」

そんな主人を前に、式神である八雲 藍は幻想郷の様子を観測しながら告げた。

彼女等の足下には煌々と光を放つ陣が展開されている。

その蜘蛛の巣のように複雑に入り組んだ陣形は、両膝を突き、掌を翳す紫から力を循環させて幻想郷全土を支える結界へと繋がっていた。

今回の異変が始まってから今迄、天使軍の力の奔流に晒され続けている幻想郷の存在を維持し、且つ外界へ影響が漏れないように押し留めることが、賢者に課せられた最低限の使命だった。

故に、この任は高度な結界術と境界を操る能力ちからを持った紫にしか出来ない……………。

(……………紫様にしか、出来ないことはわかっている。わかっている、が

それでも、傍に立つ藍の表情は苦悶に歪んでいた。  
彼女に主人程疲労の色は見られない。だが従者として、八雲 紫ただ唯一の式神として、これ程の負担を主人に担わせてしまっている自身を責めてしまう。責めずにはいられなかった。

彼女が主人の為にしてやれることと言えば、幻想郷の状況を逐一報告することと、こうして手拭いで汗を拭ってやることくらいだ。

治癒術では傷は塞がっても疲労までは取り除くことが出来ない。

「藍………、集中しなさい」

主人から弱々しくも凜とした言葉が飛んだ。

荒い呼吸を整えるように深く息を吸い、再び眼下の陣へ向き直った幻想郷の賢者は、絞り出すように続ける。

「他に回す余力のない私に代わって戦況を把握する。信頼してる貴女だから任せているのよ」

それっきり、紫は押し黙った。

以前の戦闘による傷が開いたのはもう何度目か。いくら人間と比べて治癒力が高い妖怪と言えど、準備の為にあの日から殆ど休む間も無く力を使い続けてきたのだから、こうなることは目に見えていた。

意識を巡らせ、全神経を結界維持の為に注いでいく。

次第に膨れ上がっていく苦痛を押さえ付け、自身に課せられた使命と向き合うために。

「紫様……っ」

藍は瞳を閉じた。

結界を介して流れ込んでくる幻想郷の映像。

今も尚天使軍の残党と戦いを繰り広げる幻想郷の住民達が映る。  
其々が使命の為に死力を尽くしていた。

(……馬鹿だ、私は)

幻想郷と外界の狭間。

そこへ残してきた式神の少女の姿が浮かぶ。

「死の天使の残党も全体の3割以下です。各地の被害状況の確認も急ぎます！」

幻想郷を落とされる訳にはいかない。

嘗て日本三大妖怪が一つ、『九尾の妖狐』として名を轟かせた大妖怪は、己が使命と向き合う。

「動けば酷いわよ?」

綿月 依姫はぼそりと呟いた。

直後、彼女の警告を聞かずに襲いかかろうとした周囲の化物等が、地面から飛び出していた無数の刃によって八つ裂きとなる。

尤も、相手は言葉を持たぬ者達だ。端から警告自体意味のないものなのかも知れない。

それでも尚言葉にしたのは、彼女なりの情か。

「元が絶たれたとは言え流石に多い……、」

愚痴を零す依姫が地面から刀を引き抜くと、化物等を串刺しにしていた無数の刃は跡形もなく消失した。

と、同時に視界の端で空中を舞う血飛沫をとらえた。

見れば、四方から爪や牙を剥き出しに迫り来る化物等を柳の様な動きで捌き、的確に斬り捨てていく初老の剣士の姿があった。

その剣捌きを視認するには彼女とて難しく、一振りの内に何匹もの化物等が血の噴水を上げていく。

(何者かしら、あの御仁は)

あれだけ敵を斬り捨てておきながら、衣服には一滴の返り血すらも付いていない男を興味深そうに観察する依姫。

……と、背後から、飛行型の化物が音も無く飛来する。

『愛宕様の火』

依姫はまるで羽虫でも払うかのような動作で、振り向きざまに空いている手の甲を化物にぶつけた。

「ッ?!?!」

途端に火達磨になった化物は、生涯味わったことのない業火の中で、灰となり消えた。

「……」

その様子を目にした銀髪の剣士もとい魂魄 妖忌は、同じくして此方を見ていた依姫と視線が交わったことに気が付いた。

「……互いに素性が知れぬ故、気に掛かることはありませんが

——」

妖忌は一度納刀し、居合の構えを取りつつ周囲の化物等を一瞥する。

そして、抜刀。

だがしかし、彼が抜いた刃を目にすることが出来た者が、果たしてこの場にいたのだろうか。

気付けば再び鞘に戻されつつある刃が、小気味の良い金属音と共に納められた。

「!!」

依姫は目を見開いた。

その瞬間彼の、そして自分の周囲にいた化物等が、一瞬にして斬撃の渦に巻き込まれ、塵と化したのだ。

「互いの目的は同じであり、少なくとも私が其方に鋒を向けることはない」

妖忌が先の言葉の続きを告げると、依姫は申し訳なさそうに口を開く。

「……し、失礼しました。ただ少し、貴方の剣技に興味があったもので……」

「なに、所詮は老いぼれの剣術。これでも衰えるばかりで若い頃程のキレはありません」

そうは思えなかった。

男は謙虚に振舞いながらも、隙なく周囲に意識を向けている。

剣士なら誰もが持つ、所謂間合いによる結界を、張り詰めた弦の様に展開しながら。

普通なら嘘臭く聞こえる年寄りの昔語りも、彼が口にすればその実力をより裏付ける逸話にしか聞こえない。

ふと、彼が腰に帯びている打刀に視線が落ちる。

「……ああ、これは唯の打刀。長年差していた刀は次の世代に譲ってしまいましてな」

視線に気付いた妖忌は、徐ろに柄頭を押さえつつ呟いた。

それが失礼に当たったと思ったのか、再び申し訳ないと会釈を繰り返す依姫に対し、妖忌は軽く宥めながら、遠い空を見上げる様にして心中呟く。

（柊殿、どうやら上手くいったようですな。此方は戦が終息するまでもう間もなくでしょう。後は、貴方自身の決着を残すのみ）

しかし と、妖忌の表情が僅かに曇る。

その結末を彼は知っている。

家族を、仲間を、師弟を、部下を、恩人を失いたくないから。

—— 全ては、幻想郷を護るために。

誰しもが掲げ、彼が強く抱いた使命。

その結末を彼は知っている。

（……………柊殿、貴方なら或いは——。）

いつしか幻想郷から大規模な喧騒は止んでいた。

空を覆っていた邪気は薄れていき、地に伏せる化物等の亡骸は煙のように四散していく。

それは同時に、今異変の終息を示していた。

だが、その幻想郷に『彼』の姿はない。

## 170話 墮落した天使

絶えず崩壊を繰り返す隔離空間。

その異界の中心で、死の天使サリエルは呆然と立ち尽くしていた。

(出られない?)

徐に視線が動く。

視覚によって得られた情報は、四方全てが白一色に塗り潰された世界のみ。

遠方にかけて生物の気配は無く、小石一つ分の起伏すら見受けられない。

だが、地平線の彼方までそれら事実を確認しに行く気は起きなかった。

(……永久に)

絶えず感じていた喧騒、戦場に混じる血の匂い。

その全てが嘘のように消え失せ、自身の呼吸音だけが静寂に音を刻んでいく。

「……………」

視線は再び正面へ。

前の世界では傷一つ負わせることのできなかつた男が、ゆつくりと歩を進めている。

—— 圧倒的質量による圧碎。

それを上回る破壊をもって、正面から打ち碎かれた。

—— 人海戦術。



彼にとって『数』とは、殲滅までにかかる時間の長短でしかない。

—— 有害物質の創造。

一切の効果は見られず。

—— 優れた五感を逆手に取り、それぞれに過剰な刺激を加えた。

僅かに表情が強張ったものの、不快程度にしか感じていなかった。

こんな事ならば、人質の一人や二人でもとって、『自害しろ』とでも命じればよかったか。

少なくとも、彼が本当に人間としての枠組みにいるならば、他者の犠牲に過剰な反応を示したかも知れない。だとすればそれが一番有効な手段だったのだろうか。

前の世界でならそれが実行可能であったし、もっと他に名案を導き出せたかも知れない。

—— 今となつては後の祭りだ。

(……ああ)

サリエルから言葉にならない、諦念にも似た感情が漏れ出た。

別段、再認識する程のことでもなかった。

わかつていた筈だ。

外界との隔離は、そのままサリエルの力の消失を意味している。

間接的な能力ちからの行使など、所詮は彼女自身が脳内で処理しきれる事象を、それっぽく再現しているに過ぎない。

そんな曖昧な能力では、目の前の男に通じる筈もない。

そんな現実から目を背け、この感情が一体何なのか模索していた。

(……そうか)

誰よりも、その感情を彼女は知っていた。

知った上で、己の私利私欲を満たす為に利用してきた。

本来ならば——……。

嘗て神に仕える天使として授かったこの能力も、本来ならば用途は違っていた筈だ。

いつからだろうか。

目的が『世の秩序』から、『我欲』に変わったのは。

……そんな自問自答を繰り返し、様々な感情が入り混じった心境の末に辿り着いた、至極単純な感情<sup>こたえ</sup>。

(これが……、絶望か——)

その瞬間、サリエルの中で決定的なナニかが崩れ落ちる。

それは古来より、彼女を『世界の脅威』に結び付けてきた矜持<sup>きよつじ</sup>に亀裂を入れ、魂を強く揺さぶった。

身体からは力が抜け落ち、まるで水中を漂っているかのような浮遊感に襲われる。

身体的変化は外見にも現れた。

紫色の体表は次第に薄れ、元の白い肌と翼へと戻っていく。

「……………ああ」

白一色の天を仰ぐ様に倒れゆくその様は、正しく墜落する天使そのものであった。

そして。

「久しく、忘れていたわ」

その銀髪が、純白の翼が、黒一色に染まり上がったのは直後のことだった。

「墮ちる」

この瞬間、死の天使は本当の意味で墮天する。

《!》

異変を感じ取った隼斗が歩みを止めた時には既に、事は起こっていた。

今まさに地に向かっていたサリエルの身体が不自然な角度のまま静止し、力無く伸ばされた手が何もない空間を漂っている。

そして何より異様だったのは、その天を見上げる瞳だった。

—— 黒い。

その表現は色彩を指すものではなく、暗い井戸の底を覗く様な、底知れない恐怖を掻き立てるもの。

「……………」

徐に『天使だった者』が上体を起こし、何もない空間を力無い瞳で見渡し始めた。

その何気無い動作を目にした隼斗は、鼓動の僅かに早まった心臓部に掌を押し付け、眉間に皺を寄せる。

悪寒にも似た、背筋を刺す寒気。

起爆寸前の爆弾を前にしたかのような圧迫感。

あれが一体何なのかはわからない。

だが、彼は長年生きてきた経験則を踏まえて、至極単純な見解を導き出す。

あれは危険だ、と。

警告はやがて、悪夢として現実を染める。

ひよい と、サリエルが頭を傾け、隼斗の姿を視界に捉えた瞬間だった。

彼の力。

正確に言えば、この『絶えず崩壊し続ける世界』に対する、抵抗力が著しく弱まった。

《ッ!?!》

隼斗は殆ど反射的にその場から飛び退いた。

唐突過ぎて何が起こったのか半分も理解できていなかったが、本能的にあの瞳に捕らわれてはいけないと悟ったのだ。

神をも超越する彼の動きは、当然の様にサリエルの捕捉範囲から脱した。

(……………なんだ、アレは)

指標となる物が何も存在しない世界であるため、自分がどれだけ移動したかは感覚的にしかわからない。少なくとも、元いた場所を視覚

によって確認することが出来ない距離を移動したことは確かだ。

《！》

ふと、左手に違和感を覚え、視線を落とした隼斗は目を見開いた。今でこそ黒い気を纏っているものの、透けて見える掌から前腕にかけて、薄い亀裂が走っていたのだ。

直接的な攻撃は受けていない。

そもそも、人体が物理的干渉によって出血も無く唯割れることなどあり得ないだろう。

——それはつまり、この世界の崩壊の影響を受けてしまったことに他ならなかった。

対策はしていた筈だ。

本来ならば『黒い力を纏う強化』を行わずとも、彼の力はサリエルを上回っている。

この敢えての強化は、絶えず続く崩壊から身を守る防護服の様な役割を担うためのもの。

その防護服が一瞬とはいえ、強制的に剥がされた。——原因は明らかだ。

（あの眼に睨まれた瞬間身体に掛かる負荷が一気に強まった。隠してた能力ちからがあったってのか？いや、それにしちや不自然だ。何かこう……、スイッチが入ったみてエに——）

彼の思考はそこで途切れた。

《………面倒くせエもんを起こしちまったか》

隼斗はぼそりと呟いた。

それは白一色の世界に現れた巨大な闇だった。  
遙か遠方、超人的な隼斗の視力によって捉えた黒いドーム状の物  
体。

これだけの距離であの大きさ。  
つまり、近場では空間そのものがどっぷりとあの漆黒の闇に包まれ  
ていることだろう。

全ては崩壊し、何も存在できない筈の世界……、その一部を黒く染  
め上げる十二か。

(見失った俺を探してああなってるのかは知らねエが……)

得体の知れない闇に対し、隼斗は今一度亀裂の入った拳を握り直し  
て吐き捨てる。

《さいごまで付き合ってやるよ》

かくして、彼の姿は闇へと走った。

171話 それは『天使だった者』

崩壊にすら抗い、侵食せんとする漆黒の闇。

『天使だった者』はその中央に立ち、『ソレ』を探していた。

「……………」

周囲には怨嗟振りまく亡霊の様な気体が這いずり、その身体をより深い闇へ引き込もうと纏わりつく。

(……………どいっ?)

闇の中で『天使だった者』の伸ばした手が、ソレを掴み取ろうとしては空を切る。

(……………あんなにすぐ近くにあったのに)

暗がりでも光を求めて彷徨うように、重くのしかかる闇を引きずりながら歩を進める。

(私の……………)

混濁する意識、渦巻く感情が『天使だった者』の脳内を犯していく。底なし沼ににどっぷりと浸かりながら、それでも彼女は手を伸ばす。

(……………私の、光)

感覚が鈍っていく。今自分は立っているのか、寝ているのかすら曖昧だ。

《おい》

その声は、闇の中へと飛び込んできた。

《サリエル》

侵食された脳内から消失しつつある名が呼ばれた。

その瞬間、『天使だった者』は名<sup>サリエル</sup>を取り戻す。

終 隼斗は纏わりつこうとする闇を意に介さず、肩で風を切るように歩み迫り、彼女の目の前で立ち止まった。

《決着をつけに来たぜ》

その瞬間、

「……ああ」

にちりつ、と『天使だった者』の口角は吊り上がった。

徐に、鈍った身体を錆び付いた歯車のように動かしながら首を傾げる。

その視線がゆっくりと声のした方へ移動していく。

「見いーつけたー」

それは途轍もなく無機質で、ゼンマイ仕掛けの人形のような声だった。

闇が、一気に深まる。



《その気味悪い目ん玉を俺に向けんじやねエよ》

そう吐き捨てた隼斗の拳が、音速以上の速度でサリエルの顛顛こめかみに突き刺さった。

一拍遅れて鳴り響いた空気の弾ける音と共に、彼女の身体は地を離れ、吹き飛ばされる。

直後、それまで場を包んでいた漆黒の闇は忽ち消え失せ、元の何もない真っ白な空間へと戻った。

《ちっ》

エコーの混じった声で舌を打った隼斗は、今しがた殴り付けた拳へ視線を移した。

白い世界の地に滴り落ちる鮮血。

所々が裂けた拳は痙攣を繰り返し、碌に力が入っていなかった。

(一瞬、捕まっていたか)

その原因を早くも理解していた隼斗は、もう一度不機嫌そうに舌打ちをすると、直ぐさま負傷部位へ回道を施した。

傷は見る間に塞がり、同時に痙攣も治まった。

だが先ほど生じた腕の亀裂だけは変わらず開いたままだ。心なしか、以前より進行している気さえする。

(流石に二度も体感すりやわかる。……『あの眼』だ)

崩壊が進む世界に闇を生じさせ、あまつさえ彼の身体に傷を付けた元凶。

定かではないが、一連の動作から見て彼女の『視界に捉えられる』こ

とが発動条件だと推測できた。

一度目で彼を覆うこの世界への抵抗力を剥がされ、二度目では一瞬とは言え捕捉範囲に進入した拳が出血を起こした。

どちらも一過性のもので、捕捉範囲外へ逃れれば、元の状態へ復帰することができ、それ以上の事態には陥らなかった。

(だが一度目と二度目で効力が違った。条件によって変化するってことか?)

隼斗はそこで思考を切った。

再び背筋を刺す感覚が、彼の捕捉範囲レリーダに引っかけたのだ。

ソレは凄まじい速度で接近し、殆ど一瞬で隼斗の前に出現した。

《……一応地平線の彼方までぶっ飛ばしたつもりだったんだがな。それに、何だよそりゃあ。》

思わず隼斗は口にした。

何故なら、目の前に俯きながら浮遊する彼女の姿は、数秒前とは掛け離れていたのだから。

青紫色をベースとしていた彼女の色は失われ、脳天から爪先まで闇そのものを纏っているような黒一色。

所々逆立っている触手のようなものは、翼なのか、髪なのか、将又腕なのか、最早判別できない。

何より異様なのは、恐らく『顔』と認識できる部位から不気味な発光を繰り返す目玉だった。

仮に目の前の存在を人型として見た場合、眼球や口のある位置に指標となる三つの点があれば、人はそれを『顔』だと認識するらしい。

しかし、彼女の目玉は本来の形を取っていなかった。

顔と思われる部位の中心にぼんやりと光を放ち、浮かび上がる球体が一つ存在するのみで、その他の顔の部位は見当たらない。

隼斗がそれを目玉だと認識できたのは、既に人ではない何かだと判断したためか。

「z d j t i。に m j t i q t」

サリエルから発せられた、既に言語としての機能を有していない無機質な音声に、隼斗は唯々呆れ顔で返した。

《そうか、やつちまったなお前》

そして僅かに、今の今まで俯いていたサリエルの首が、その目玉がぴくりと微動する。

直後に空気を裂く轟音。

サリエルの初動を逸早く捉えた隼斗が、破道の六十三番 『雷吼炮』らいこうほうを放ったのだ。

雷を纏った光線は一直線にサリエルの元まで突き進み、そこで漸く彼女の目玉は正面を向いた。

—— それは吹き散らされた煙のようだった。

《あ?》

消失。

確実に直撃のコースに乗っていた破道は、着弾の衝撃と轟音を上げる前に霧散したのだ。

そして、今隼斗が立っている場所は、先程放った破道とサリエルの直線上に位置する。

次いで、再び彼からこの世界に対する抵抗力が失われた。

《っ!?!》

ピシリと、足から生じた乾いた音で我に返った隼斗は、地面を蹴つて『捕捉範囲外』へと飛び退いた。

(くそ、迂闊すぎんだろ馬鹿野郎…!想定外の事が起きたぐらいで足止めちまうとはよ)

サリエルの背後を取った隼斗は、彼女が振り返るよりも速く攻撃に出た。

(要はあの目玉を指向されなければいい。常に死角に回り込みながら一気に崩すっ!)

全てを破壊する拳は、しかしサリエルへ届く前に彼自身が止めた。

《ツツ、『断空』!!》

直後に側面へ跳び、彼女との間に隔てる様に靈力で練り上げた壁を展開する。

サリエルは依然正面を向いたままだ。

当然、顔と思われる部位も此方には向けていない。

だから隼斗は安全だと判断し、背後へ回って仕掛けたのだ。

それは飽くまで『人型』に対する固定概念だと気付かぬまま。

——しかし、目玉だけが独立して動くなど誰が予想できたか。いや、それだけならまだ良かった。

危険ではあるが、一つの目玉が動き回るだけなら、幾らでも対処の仕様が あった。

《こいつは……、少しマズいな》

一つ、二つ……、

現状、サリエルを取り巻く目玉が二つと、元来の目玉が一つ。  
計三つの目玉が、ゆっくりと隼斗へ指向されていく。

172話 滅びの『目（まなこ）』

『断空』は、一秒と保たずして砕け散った。

ガラス片の様に舞う障壁の残骸すらも、空中で塵となつて消えていく。

《！》

『天使だった者』から向けられる三つの視線が、その先に立つ隼斗の姿を捉えようと動く。

《ちっ…！》

隼斗は地を蹴り、三つの瞳の捕捉範囲から離脱する。

すると、標的を見失った目玉はぎよろぎよろと忙しく蠢き、四方八方に視野を広げ始めた。

（飽くまで標的は俺一人か）

天使だった者の周囲で小規模の衝撃波だけが連続する。

（眼球一つでどれだけの視野を持つてるかは知らねエが……！）

衝撃はやがて音を置き去りにする。

残像が地面を踏みしめ、一瞬遅れて硬いもの同士がぶつかり合う音が響き渡る。

気配を感知されない隠密な歩法とは違う、隼斗の本気の踏み込み。

周囲に散りばめられた音と衝撃はやがて間断なく地を叩き、残像は天使だった者を中心として、円を描くように展開されていく。

「n x ? : j に g t w q か h f ! ?」

ノイズに阻害された言葉を発し、天使だつた者は円の中心で狂ったように身を振る。

その行為が標的を見失つての焦燥から来ているのかは定かではないが、そんな彼女の身体から、『目』の内の一つが弾け飛んだ。

《貫うぜ、その目玉》

彼女がその言葉を聞いた時には既に、三つ全ての『目』が吹き飛ばされた後だつた。

「y g あ z g m p m g w d ! ?」

遅れてやってきた苦痛に、天使だつた者は頭を抱えるようにして悶えた。

そんな彼女の目の前に、隼斗は拳を構えて現れる。

ぴたり、と。

天使だつた者からノイズの入り混じった悲鳴は止み、苦痛に悶えていた身体が静止する。

《瞬間》

隼斗の背部から凄まじい濃度のエネルギーが噴出する。

しかし元来の性質とは異なり、その色はドス黒く、形状は雑把に形取られた羽のよう。

エネルギーは背から肩へ、肩から拳へと流れていく。

そうして隼斗の右拳に留まった黒い力は、再び天に向けて立ち昇る。

言うまでもなくそれは、今戦闘が始まって以来最も強く、彼女を滅ぼし得るだけの力が込められた拳だった。

《今楽にしてやるよ》

拳は天使だった者へ指向された。

最後の一撃を放つべく、隼斗の脳が腕へ、拳へと信号を送る。

「……………w v j た」

その最中、隼斗は確かに聞いた。

ノイズによって言葉の殆どが聞き取れない中、天使だった者は確かに口にした。

—— 『見つけた』、と。

悪寒が、隼斗の背中を一気に駆け抜けた。

その正体を彼は見た。

天使だった者の背後で無数に蠢く『目』、『目』、『目』、『目』、『目』、『目』、『目』、『目』、『目』、『目』。

全てが、同一の標的を見据えていた。

そして彼女はもう一度言葉を発する。

—— 『見つけたあ』。

《く、》



既に彼の拳を纏っていた黒い力も、この世界に対する抵抗力も失われていた。

《……そッ!!》

足裏に力を込め、一挙にその場から離脱する。

身体中から乾いた音が聞こえた。

恐らくは崩壊の影響だろうが、そんなことを確認している余裕はなかった。

《………ッ》

次いで、右脚から湿った感覚が広がる。先の左拳同様、裂傷を負っていた。

(あの『目』っ……！同じ場所に二度くれば肉が裂けるってか？……いや、そんな単純なもんじゃねエ。そもそも俺の身体は世界レベルの崩壊から身を守るために防護してたんだ。それが強制的に剥がされたっ！一度目は防護膜、二度目は肉体。つまり睨んだ対象に悪影響を生じさせるナニかがありやがるっ！——それに……)

血の滴る右脚を抑え、回道を施しつつ走る隼斗は、その傷の深さに眉を顰めた。

(左拳<sup>こっち</sup>より傷が深い……、つてことは条件によって生じる影響も違ってくるのか？くそ……っ！、睨まれた数か!?時間か!?)

焦りからか、隼斗の額からは一筋の汗が流れていた。

既にこの呪いのような攻撃を四度もその身に受けている。

そう、同じ攻撃を四度もだ。

湧き上がる焦燥は戦闘の各種動作を鈍らせる。

そんなことはわかっていた。  
わかっているからこそ苛立ち、彼は険しい表情を隠そうともせず舌を打った。

《ちっ…》

—— そして、

ふと、それは思い起こされた。

『同じ攻撃を解明できぬまま、何度も受け損じるなど、三流以下のする戦闘だ』

いつだったか、気の遠くなるような遙か昔。

月の軍に所属していた彼が、新兵時代に耳タコで聞かされた教訓だった。

一度目を回避し、生き残れたのは己の運が良かっただけ。だが次は無い。二度目がくれば、今度こそ命を落とすだろう。

それが嫌なら、運良く拾った命で打開策を導き出せ。そして実行しろ。

—— それが劣勢を覆す唯一の方法だ。

《…》

当時から超人としての力を手にし、劣勢に陥ったことのないまだ未熟だった彼にとっては、軽く聞き流す程度の胡散臭い説法となんら変わりはない。

人妖大戦で一人地上に残り、途方もない時間が流れた。  
友がで、友を失い、力を失った。

初めて死にかけける程の傷を負い、改めて自分の置かれた状況を思い知った。

……………もう自分は無敵じゃない。

傷を負えば血が流れる。

脳や心臓を潰されればあっけなく死を迎えるだろう。

だからこそその教訓だったんだ。

自身の力を過信して、胡座をかいている場合ではなかったと気付かされた。

残ったのは後にも先にも立たない後悔ばかり。

あの日を境に戦い方を見直した。

新たな靈力ちからを鍛錬し、戦技の幅を広げ、逆境に抗うためにもがいた。そうして長年積み重ねてきた実績が、今の彼を支えている強さだ。

(……………ざ

まあ無エな)

天使サだった者リエの『目』から逃れるようにして立ち回っていた隼斗は足を止めた。

再び標的を捉えた無数の視線が、一斉に彼の背中を射抜こうと指向されて…………、

「dtは？」

次の瞬間には、その場の『目』全てが花火のように炸裂して爆ぜた。

「gmt d あ m d m w ああ w m ツ!？」

再びノイズの混じった悲鳴が上がる。

《お前にも教えてやるよ。ごく当たり前の教訓をな》

散々見せ付けられた彼女の再生能力や、不死に近い身体という固定概念から、危うく見逃しかけていた。

悲鳴が上がっている。

苦痛を受けている。

—— それなら、

《傷つけられりや痛エだろ？》

「ツツ!!」

ズグズグ と、湿った音を立てながら再生していく『目』を一瞥しながら、隼斗は拳を握り込んだ。

衝撃波が地をかける。

再び飛散する『目』の残骸が、真っ白な世界に降り注いだ。

「k h n w h あ!?!」

苦痛に悶える天使だつた者とは対照的に、裂けた拳から血が滴るのも厭わず隼斗は微笑を浮かべて言い放つ。

《根比べといこうや》

## 173話 絶望の果てに

やること自体は単純なものだった。

『目』が再生した傍から直様拳を叩き込んで潰す。―― 要はモグ  
ラ叩きの容量だ。

だから彼は拳を止めない。

この只管繰り返される破壊と再生の先に、果たして決着は存在する  
のかなど、確証があるわけではない。

だけど彼は拳を止めない。

代償として……、少しずつ、確実に、刹那の一瞥が彼の身体を蝕ん  
でいったとしても。

それでも、彼は拳を止めない。

「pやwmツ!？」

また破壊された。

もう何度目か覚えていない。  
天使<sup>サ</sup>だった者<sup>リエ</sup>は数歩後退った。

当初の位置から見れば、一体どれ程押し下げられたのだろう。  
ぽつりぽつりと、目の前の男から滴る鮮血は、血溜まりを広げる  
ことはなく、蒸発するように消えていく。

ここが崩壊を繰り返す世界でなかったのなら、或いはその血痕が距  
離を測る指標となったかも知れない。

《痛エか？そりやそうだろうな》

淡々とした口調のまま、隼斗はじりじりと歩み寄る。

天使<sup>サ</sup>だつた者<sup>ル</sup>の『目』によって、彼の身体を覆う防護膜は徐々に剥がされていった。

《……俺も痛エよ》

結果、出血は拳や腕に留まらず、裂傷や亀裂は全身に及んでいた。パキリツ　と、一歩ずつ踏み締める脚からは絶えず乾いた音が鳴る。

《泣き言はなしだぜ。お前からふっかけた戦争だ》

どうやらこの『目』には、タイミングよく破壊すれば身体への影響を受けないなんて都合のいい条件は用意されていないらしい。

《とは言え最後まで付き合ってやるつつたしな。今更お前のしたことを説くような真似はしねエよ。そういうのは仏様のすることだ》

彼とて何度拳を振るったかは覚えていないが、一定数の『目』を潰した瞬間から、再生のタイミングを完璧に掴んだ。

故に、今では『目』が再生してから自身の身体を蝕むまでを最短で処理できるようになっていた。

《俺も無駄に長生きの所為か、今の若い奴らからは「考え方が古い」って言われただけだよ……、》

勿論、『目』の補足範囲の外からという選択肢もあるにはあるが、それでは効果は期待できない。破壊した傍から瞬時に再生される為、距離を空けていては一瞬対処が遅れてしまう。

より精密に、より迅速に対処する必要があった。

第一、損傷が即時再生する上に箍たがの外れたような相手だ。本能的に戦意を喪失する程、正面切つて敗北と言うものを突き付けてやらなければ意味がない。

《口で言つてもわからねエ馬鹿は鉄拳制裁つて、なっ!!》

鞭が標的を捉えたような乾いた音が幾十にも重なつて響く。

「g m j p w ツ!?!」

同時に再生しようとも、タイミングをズラして再生しようとも、その瞬間には弾けて消える『目』。

天使サだリつた者エは闇に覆われた頭部に手を当ててたじろいだ。

「……ッ」

ここにきて、明らかな動揺を示す動作、そして『目』の再生速度に著しい低下が見られた。

片膝を地につけ、揺らめく意識の中で天使サだリつた者エは絞り出すように口にする。

「…………… どうして?」

墮天し、闇に飲まれた筈の天使から、感情の一部が言葉となつて漏れた。

「ッあ!?!」

続け様に湧き上がる感情の渦に、サリエルは頭を掻きむしりながら悶えた。

その影響からか、頭部を覆っていた闇の一部が塗装の様にボロボロと崩れ、彼女本来の面が僅かに垣間見えた。

（どうしてよ……それだけ血を流しているのに！今にも壊れそうなくらい崩壊が進んでるのに……倒れてよ！もう諦めてよ!!あと少しで手に入りそうなのに!!その力があれば私はまた——）

再び闇に沈み始めた意識の狭間で、サリエルは激情に任せて叫ぶ。

「どうして貴方は倒れないの！死なないの!!これだけやってるのに!!こんな世界まで用意して!!それだけズタボロになって!!自己犠牲のつもり!?それとも英雄気取り!?くだらない!!それだけの力があってどうしてあんなちっぽけな世界に固執するのよ!!」

彼女にとって幻想郷など、瓶詰めキャンデイの内の一粒と変わらな  
い。

この世には幾つもの世界があつて、それらを転々としてきた彼女は、幾つもの世界に絶望を与え、文字通り味わってきた。

死の天使にとって絶望とは『糧』、或いは嗜好なのだ。

偶々次なる標的となったのが、隼斗の世界だったというだけの話。いつも通り壊し、奪い、死を与え、人々の阿鼻叫喚を耳にしながら心地良い眠りにつくはずだった。

「どうして……っ！貴方だけは……、『絶望』しないのよ……」

最後には蚊の鳴くような声だった。

終 隼斗と言う人間が、どうあつても折れない理由。

それがわかったところでどうしろと言うのだ。

この世界にはサリエルと隼斗の二人しか存在しない。



彼とて元の世界に大切に思う仲間や家族はいるだろう。最愛の者を残してきているのだろう。

—— だがこの世界には誰もいない。

心の支えなんて一切存在しない世界へ、心の支えの為に己が身を投じた男。

だから、彼は当たり前のように言った。

《—— 『希望』を、護る為だ》

彼は知っていた。

世界にたった一人取り残される孤独を。

友を失う悲しみを。

仲間や家族と再会する喜びを。

築き上げていく幸せを。

この場所が、自身の歩んできた一本の道の終着点になったとしても、彼は絶望なんてこれっぽっちも感じてはいなかった。

それも『本望』だと言わんばかりの表情で。

「……………」  
希望？」

ぽつりと零した言葉。

サリエルは目を見開いて隼斗を見上げた。

《！》

それは正に、隼斗とは対照的な、絶望を目の当たりにしたかのような表情だった。

直後、サリエルを覆っていた闇が増大する。

174話 終戦、残るは……。

闇が死の天使を包み込む。

ぼこぼこ膨れ上がっていくそれは、あつという間に隼斗を見下ろす程の巨大な『目』を形成した。

「nagjtxtymag·agjshuwmp twmツ、tipnxt meqwoaymentpln!!」

再び言語の失われた音を捲したてるように発した天使<sup>サ</sup>だつた<sup>エ</sup>者<sup>ル</sup>。

直後、彼女の感情に呼応するように、『目』が周囲の空間を塗り潰さんと闇を広げ始める。

それはまるで物体が腐敗していく様子を早回しで見ているような光景だった。

『目』を中心に押し寄せる闇が、あつという間に白い空間を飲み込んでいく。

(崩壊が作用してない?!……いや、生成力の方が勝ってんのかっ！)

ものの数秒で隼斗の四方全ては闇に閉ざされ、一切の光が断たれた。

その瞬間、隼斗の身体を再び崩壊が襲う。

どうやら墮天使の『目』はこの暗闇の中でもしつかりと彼の姿を捉えているようだ。

加えて、周囲を包んでいる闇の影響だろうか……、身体に伸し掛る正体不明の重圧が、筋肉や関節の可動、並びに五感を妨げていた。

この世に生を受けてから今まで、病というものを経験してこなかった隼斗にとっては、非常に不可解な感覚であったが、これが所謂身体の内側を蝕まれる感覚なのだろう。

「p m m p j、にj d m w p……i・g j t jがm q k m t g!!」

視界と言う最も優れた情報源を断つたにも関わらず、天使だつた者は己の位置を隠そうともせず叫んだ。

只、ひたすらに感情に任せてノイズで遮られた音を並べていく。

《……お前がそこまで希望を嫌う理由は俺にはわからん》

隼斗はそう口にする、血の滴る拳を握り込んだ。

「j d p m p g b!? g a m n a d m!!あj w n w p t j u j m  
w よっ!!」

《ああ、知らねえな。元より他人の過去なんざ知る由もねエ》

「だg k らm t p g j m t p g m!!わk m w こw u k t m d k g t o  
!!」

《おい、サリエル》

「!」

気付けば、彼は天使だつた者の眼前に立っていた。

ミシミシと強く、固く握り込まれた拳が、徐に掲げられる。

《何がお前をそうさせたのかは知らねエし、今更知ろうとも思わねエ。それに、お互い来るところまで来ちまつたんだ。ここらで終止符を打たせてもらうぜ》

「!」

直後、天使だつた者の頭上に浮かぶ巨大な『目』がカタカタと振動

する。

視界の効かない暗黒空間であるため、隼斗が拾えた情報はその怪音と膨れ上がっていく邪悪な気配だけだった。

「t j w あっ!!」

『目』は再び彼女の感情に呼応し、更に夥しい量の闇を発生させた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴツツ!!、と。

地鳴りすら聞こえてきそうな凄まじい共鳴の後、押し迫る闇は火砕流の如く隼斗の身体を呑み込んだ。

《!》

纏わりつく闇は更なる重圧を生み、より一層身体感覚を鈍らせていく。

脳内には無数の怨嗟が侵入し、隼斗の精神を犯そうと暴れ回る。

《……》

パキリッ と、また一つ何処かから乾いた音が鳴り、とうとう隼斗の身体の端々がゆっくりと崩れ落ち始めた。

その様はあたかも燃え尽き、徐々に灰となって散る木炭のよう。

《……………ツ》

その時、隼斗はある人物の顔を思い浮かべ、顔を顰めながら小さく舌を打った。

長年自分を利用し、この身体を苗床として力を蓄えていたもう一人の柀隼斗。

またの名を『西行妖』。

彼が消え行く間際に口にしていた言葉が耳元で再生される。

———だが忘れんじゃねエぞ。その力がテメエの中にある限り……、俺はいつでもテメエの身体を乗っ取る隙を窺ってるってことをなア！

隼斗の内側から、沸々と黒いナニカが込み上がる。

それは身体に纏わり付く闇と共鳴するように少しずつ大きくなり、外へ飛び出す機会を今か今かと待ち侘びているようだった。

《……………ふざけんな》

隼斗は今にも砕け散ってしまいそうな程、亀裂の入った拳を握り締めた。

そして徐に顔の高さまで掲げた拳で、自身の額のど真ん中を叩き割った。

鈍い音が一つ。

最早損傷による出血はなかった。

代わりに額には、硝子を砕いたような蜘蛛の巣状の亀裂が入った。

《もうてめエにくれてやるもんは何も無エよ……この身体も！力も！世界もだツ!!》

途端に、侵食しかけていた闇が動きを止めた。

そして、全身に及んでいる亀裂の一つが、彼の頭部を覆っている仮面の中心に走った。

パキンツ と、乾いた音が聞こえたのはその直後。

———仮面は右半分を残して砕き割れた。

《俺の戦いだ……失せろツ!!》

その瞬間、身体を覆っていた闇が一気に引き、再び天使だつた者の目の前に隼斗は現れた。——同時に、空間を包む暗黒世界を、内側から圧迫する力を放ちながら。

「!?」

思わず、天使だつた者は後退った。

目の前の男の姿は、以前とは異なる。

左半分が割れた仮面の下から覗く瞳は赤い眼光を放ち、同じく晒されている左側の髪は白く変色していた。

そして肩口から指先まで白い体表に覆われた右腕が、この異様な圧力を放っていた。

《……置き土産ってか? ったく》

隼斗は変化した右腕の調子確かめながら小さく零した。

続いて左腕、胴体、両足へと視線は移る。

そしてその全てから崩壊の跡が消えていることを確認し、改めて天使だつた者を見遣り……、

《サリエル》

一歩踏み出すでもなく、その場で右拳を引いた。

ジジジジジジジジジジジジツツ!!、と。

空気を含むように握られた拳へ、赤黒い雷のようなエネルギー体が

集束されていく。

(……………ああ)

あまりの重圧。途轍もなく巨大な惑星を目の当たりにしているような感覚に見舞われ、天使だつた者はただ茫然と立ち尽くす。

(そうだ……、そうだわ)

闇の下で、天使だつた者は静かに笑っていた。

(これが……………、)

くくく

むかし、むかし……、神に仕える一人の天使がおりました。

この天使は神様からある役目を与えられていました。

それは、『罪』という穢れから、人々の魂を護ることでした。

天使は来る日も来る日も罪深き存在から、靈魂を護りました。時には大きな鎌を持ち、悪しき存在の乗り移った魂を狩ることもあったそうです。

そんな一生懸命仕事をする天使でしたが、とても嫌な仕事もありました。

それは、『悪しき魂に取り憑かれてしまった天使に罰を与え、神の国から墮とす』こと。

墮とされてしまった天使はもう神様に仕えることはできず、悪魔として生きていかねばなりません。

来る日も来る日も、天使は仲間を墮とし続けます。

そして時々その瞳からは、赤い涙が溢れていたそうです。

そんな天使さんに神様は言いました。



「人々の『希望』のためだ」っと。

天使は来る日も来る日も自分に与えられた使命の為に働きます。

—— いつの日か、自分が墮とされるその日まで。

くくく

ピシリッ!!! と、周囲を包む暗黒空間に亀裂が生じた。

亀裂は次第に綻びへと転じ、僅かに外の白い空間が顔を出した。

ふうつと、静かに息を吐いた隼斗は、右拳の中に溜まったエネルギー体を握り潰すようにして力を込めた。

ズンツツツ!!!! と、辺り一帯が激しく震撼する。

その中で、天使<sup>サ</sup>だつた者<sup>リエ</sup>は笑っていた。

(これが、『絶望』……ッ！)

《—— 終わりだ》

絶えず崩壊の進む、真っ白で何も存在しない世界に、赤黒い閃光が走った。

——

展開されていた闇の空間は粉々に吹き飛び、その場にはたった一人の男だけが立っていた。

白く変化していた髪と右腕はいつしか元に戻り、半壊した仮面が彼の表情を半分だけ覆い隠していた。

……その寂寞<sup>せきばく</sup>たる表情を。

砂となって吹き散る闇に混じり、宙を舞う無数の白き羽根も、やがて塵となって消えていく。

## 175話 異変の傷跡

それは幻影だったのか。

この地に足を踏み入れた厄災の数々が、音もなく煙のように消失し、未だそんな実感が湧かぬ者達は呆然と立ち尽くした。

後になってその名残を留めるは、無惨に踏み躪られた大地の傷跡。耳を澄ませば、吹き抜ける風に混じって幾つもの呼吸音があった。それは自分のものか、隣にいる仲間のものなのか……、空白の生じた脳内では判別が遅れる。

「……………ん」

やけに高い天井、広々とした大部屋。

そして自身を心配そうに見下ろす人々の中心で、藤原 妹紅は目覚めた。

「……は……？」

ぼやける視界をなんとか広げ、周囲を見渡した妹紅は誰に対して問い掛けるでもなく、ただ呟いた。

「命蓮寺」

即座に入った短い応答。

妹紅がはつと振り向いた先には、短い黒髪の少女が胡座をかいていた。

少女の背中には左右非対称で奇妙な形をした翼とも触手とも取れるものが生えている。

「……………誰？」

妹紅は警戒を解かぬまま声を低くして尋ねた。

対して黒髪の少女はやれやれと言った具合に肩を竦めて答える。

『鶴』。ここらじや封獣 ぬえなんて呼ばれてるこわーい妖怪さんだ。まつ、そんなに警戒しないでよ、人里の英雄さん」

「!!」

その言葉で妹紅は我に返った。

曖昧だった記憶が戻り、あの激戦の光景がフラッシュバックする。

「そうだ、人里は！人里はどうなった!?!あいつはツ!!」

思わず詰め寄り、肩を強く掴みに掛かった白髪の少女に対し、ぬえは相変わらずの表情のまま、足下を指した。

……………正確には、ひらりと白髪の少女から落ちた、羽織り代わりの掛け布を。

「起きたばかりで興奮するのもわかるけどさ……………、とりあえず服着たら?。」

「何言って……………、」

そこで妹紅は漸く気付いたようだ。

一糸纏わぬ姿で、大勢の人々がいるこの空間にぽつりと立っている自分に。

「なっ、なっ、ちよっつ！待っ、なんで!?!ツツ!?!」

あたふたと足下の布切れを拾い上げ、露わになっている前面部を覆った少女の顔は既に真っ赤だ。

「あははははははははは!!何慌ててんのさ今更!」

「ンの……!!」

それを見てケタケタと笑い転げる黒髪の少女を睨みつけ、今すぐ黒焦げにしてやろうかと熱り立つ妹紅だったが、今動くときさらに現状が悪化しそうなので踏み止まった。

「……………まあでも安心しなよ」

一通り笑い終えたぬえは目尻に浮かぶ涙を拭ってそう口にした。

「あんたを此処へ引っ張ってきた自称姫さまの話によれば、人里は無事だとき。さつき私があんたのことを英雄呼ばわりしたのはそういう事だよ」

「……………」

それを聞いても尚、妹紅は胸を撫で下ろすことはせず、恐る恐る尋ねた。

「……………外は今、どうなってる?」

返ってきた答えは端的だった。

「……………終わったよ」

ぬえは胡座で痺れたのか組んでいた足を崩し、後ろ手に体重を預け

る形で足を投げ出しながら天井を見上げる。

「!」

先程まで感情的になつていたためか気付くのが遅れたが、彼女の身体はボロボロだった。

衣服から露出している腕や太腿には包帯が巻かれ、頬にも擦り傷がいくつも見られる。

今の今までおちやらけていたあの態度からは想像し難いが、彼女にも彼女なりの戦いがあつたのだろう。

「それで……、何があつたの?」

一息つき、黒髪の少女は事の顛末を語る。

意識のない妹紅が命蓮寺へ運ばれた後、外で出現した巨大な扉。そこから投下された大量の天使軍。

そして激戦の末、何の前触れもなく扉が崩壊し、消失した天使軍の残党たち。

「ちよつと待つて! だったら私が倒れた後も人里は襲われてたんじや…!!」

「それについても心配なし。妹紅を運んできた自称姫さまが護つてくれたみたいだよ」

「輝夜が……? みたいって言うのは?」

「戦いが終わった後にまた顔出しに来てさ、そんな時間いた。ついでに言うつと、妹紅が気が付いた時に掛け布しか身につけてなかったのはあの姫さまの計らいだよ」

「アイツアトデコロス」

「それと、」

密かに復讐に燃える少女を尻目に、ぬえは続けて蓬萊の姫から頼まれていた言伝を告げる。

意識を取り戻した妹紅が、落ち着きを取り戻してから伝えるようにと念押しされたもう一つの事実を。

「えっ?」

出現した時と同様、天使軍は突如として消え失せた。

そのあまりにも呆気ない幕切れに、博麗の巫女である霊夢は、半ば肩透かしを食らったように首を傾げる。

「終わった……の?」

同時に身体にのし掛かる凄まじい倦怠感に、霊夢はだらりと項垂れた。

傍らには時同じくして地に膝を突く先代巫女の姿があった。此方は既に限界を迎えているのか、息も絶え絶えだ。

「暁美姉さん、大丈夫……?」

「……………ん、ちと無理し過ぎたかも」

普段なら『大丈夫』だと一蹴する彼女も、今回ばかりは弱音を漏ら

した。

そうして痛々しくも残る身体の傷を庇うように、地面へと腰を落とすしてしまう。

……と、不意に横合いから声が掛かった。

「辛いなら治癒の加護を掛けてあげましょうか？」

腰に差した長刀を後方へ回し、暁美の傍らに片膝を突いたのは、月の使者である綿月 依姫だ。

「あははっ、助っ人に来てくれた上に怪我の具合まで心配されてちや世話ないわね」

「なら止めとく？」

「……………お願いします」

力無く突き出された腕をなぞるように、依姫の翳した掌が触れていく。

「！」

すると、暁美の身体を淡い白光が包みこんだ。

優しくも暖かいその光は、彼女の身体から痛みや痺れといった障害を徐々に散らしていく。

そんな最中、痛みが和らいで余裕ができたのか、暁美は無遠慮にも肩が付きそうになるまで身を寄せて依姫に小声で問い掛けた。

「ところでさ、さっきは戦闘中だったし聞きそびれちゃったけど……、貴女は隼斗の知り合いなのよね？どう言った御関係なの？」

「弟子第一号」

「へっ？」



心なしか口角がにっこりと上がっている暁美を横目で流しつつ、依姫は表情を崩さぬまま淡々と応じた。

「……随分昔になるけど、過去に先生から『お前達は俺の弟子第一号だ！』って言われたことがあるのよ。私達からしてみても師匠第一号だったけれどね」

……応じたつもりのようなだが、此方も表情がどこか得意げだった。

「へえ、じゃあ先輩なんだ。………ん？お前『達』って言うのは？」

「私の姉。今は月の軍を帰還させるために一時月に戻ってるわ」

「もう終わったわよ」

声の主は気配なく突然現れた。

「ッ!？」

「……………」

思わず身構える霊夢と、治療を受けつつも密かに戦闘態勢に移行する暁美。

そんな二人の反応を楽しむように笑みを浮かべる突然の侵入者と、その侵入者を見て溜息を吐く依姫。

「子供じゃあるまいし、そういった悪ふざけはお止め下さいお姉様」

「……………お姉様？」

博麗の巫女二人の声が被り、同時にその場の視線は新たな珍客へ集

まった。

「あら、悪ふざけだなんて人間きの悪い。ちよつぴり脅かしただけじゃない」

「それを悪ふざけだと言うんです」

ここにきて、依姫の溜息の数が急激に増えたのは気のせいだろうか。

「ところで、貴女達が地上の巫女さんかしら？」

飽くまで自分のペースを維持し続ける珍客兼ねての依姫の姉、綿月豊姫は、博麗の巫女二人を興味深そうに見つめながら問い掛けた。

「ん、現役はこっちの子。私は先代」

「……な、何で私達のこと知ってるのよ？」

平然とした表情を崩さず、当人を指して答えた暁美に対し、未だ警戒の抜けきらない霊夢はやや気後れ気味だ。

「白黒の魔法使いの子に聞いたのよ。森を抜けた先にある社に、この世界を守護する巫女がいるって」

「魔理沙が？」

「それに聞くところによれば、貴女達も先生の教え子だって言うじゃない？だから一目見ておきたくって！」

「あつははは。結局姉妹揃って隼斗のことになると嬉しそうに話すんだね！」

「……そ、そうかしら」

笑い飛ばした暁美の言う通り、先程師の言葉を誇らしげに語った依姫と、現在の豊姫は同じ表情だ。

「ゴホンっ……、これで一先ず傷は塞がった筈よ」

指摘され、若干はにかみながら治療を終えた依姫の掌から、淡い白光が消える。

すると、先程まで暁美を襲っていた苦痛が嘘のように引いていた。

「これは、随分賑やかですな」

そんな華やかな雰囲気の間へ、一見老齢でいて、物腰柔らかな男が足を踏み入れてきた。

老人は腰に刀を帯びており、静かな足取りで一同の前に立ち止まると、自然と目の合った依姫と軽く会釈を交わした。

「えーと、白玉楼の……その………ほら、  
………んん、『妖夢のおじいちゃん？』」

男の名前を思い出そうとした霊夢は、たつぷりと記憶を辿った挙句にその肩書きへ行き着いた。

「………そこはせめて『師』と呼んでもらいたいものだが」

あまりにも和やかな異名で呼ばれた銀髪の剣士 魂魄 妖忌は、目を丸くしながら咳払いを一つ。

続いて『どうしてここに？』、という質問が投げかけられる前に自己の目的を口にする。

「間もなく此処へ紫殿がお越しになる。私はその護衛役として参った次第です」

「紫が？そういえばずっと結界維持してたのよね。大丈夫かしら」

回復した身体の調子確かめるようにして立ち上がった暁美が、僅かに表情を曇らせてそう言った。

「……ねえ依姫、『紫』ってどなた？」

「ほら、以前月に戦争を仕掛けてきた妖怪の頭目ですよ。八意様が言うには、幻想郷の賢者だとか」

綿月姉妹が耳打ちで話し合っている中、霊夢は会話の中の疑問を口にする。

『護衛』ってどういうこと？」

「……むっ」

一瞬、妖忌はどう言ったものかと言い淀んだ。

「それは……、」

「これから来る神様に備えて私が頼んだのよ」

唐突に割り込んできたのは凜とした声。

一同の視線が、虚空に浮かび上がった『スキマ』へと集中する。

「紫っ!？」

その姿を見た霊夢は、思わず声を上げた。

疲弊し切った身体を式神に預け、息も絶え絶えに漸く立っている姿の八雲 紫に。

「時間がないわ。全員力を貸してちょうだい」

幻想郷の賢者は、力無くそう言った。  
驚愕する一同。

「！」

その中で逸早く気配に気付いた妖忌が、上空を睨み付けた。

「……」

地上の様子を見下ろす影が一つ。

その者は、一同の中心に向けて、高速で飛来する。

「ふん」

—— その者は、この世の最高神と呼ばれている。

## 176話 生じた空白

始めに、この世の創造神はこう言った。

「そう身構えるな」

されどこの場にいる者達の中で警戒を緩める者はいない。

今し方戦を終えたばかりなのもある。

まだ心が幾分かは戦場に残っていて、寧ろこうして臨戦態勢をとっていることの方が自然だと思える程に。

しかし、一同が警戒を解けない理由は別にあつた。

複雑な事情など関係ない、至極単純な理由。

その光景を嘲笑うかのように、赤髪の女は冷たい眼光を周囲に向けて言う。

「なに、私から仕掛ける気はないんだ。もっとリラックスしたらどうだ？」

……そう。

淡々とした口調で警戒を解くよう促している彼女自身が、その身から溢れ出る桁外れの神力を抑えようとしていないのだ。

「…………ツ」

警戒を解くどころか視線すら背けられない状況の中、身体を式神に預けたままの紫が力無く口を開く。

「100年と少し……、と言ったところでしょうか。……………今、このよ  
うな時期に、一体どういった御用件でしょうか？」

紫はその一言にたつぷりと皮肉を込めて言った。

—— 忘れもしない嘗ての惨劇。

一瞬で意識を絶たれた自分に変わり、ズタボロに傷付いて地面に横たわっていた男の姿が思い起こされる。

「ふむ、この幻想郷の長だな？お前とは直接話したことはない筈だが……、ああそうか。あの阿呆にでも聞いたか」

対して、創造神から返ってきたのは、なんの脈絡もない頓狂な答えだった。

かと思えば、一人納得したかのように視線を紫から外し、周囲を一瞥していく。

「ッ!!」

その言動や態度が、弱々しく衰弱した紫の身体に再び熱を帯びさせた。

膨れ上がった感情が後押しするかのようになり、気付けば創造神の周囲に攻撃用のスキマを展開しようと掌を翳していた。

「!?!」

しかし、創造神の姿は忽然と消え、再び皆の眼前に現れた。

「おい」

紫の喉元に白光纏った五指を突き付けながら、創造神は冷たい声色で囁く。

「私から仕掛ける気はない。先程そう言った筈だが？」

白光の周囲の空気が陽炎の様に揺らぎ、振動している。それは高密度の神力が込められた、別次元のエネルギー体。

「ッ」

直感で理解した。

熱した鉄を突きつけられているのとは訳が違う。——触れた瞬間首が消滅する。

そして紫がわかったことは二つ。

一つ。目の前の神はスキマが展開される刹那の一瞬よりも速く動き、容易く紫の命を刈り取ることができること。

二つ目……………。

「その方から離れてもらおうか。ゆっくりとだ」

その速度に反応出来る人物が、こちら側に一人いること。

魂魄 妖忌は創造神の喉元に刀を突きつけ、じりじりとその白い肌に刃を押し当てた。

「牙を剥くか？この『龍神』に対して」

ドンツツツツ!!! と、妖忌の身体へ凄まじい圧力が降りかかった。彼の踏み締める地面は一瞬で陥没し、蜘蛛の巣状に亀裂が入っていた。

「…………ツ、これは…!？」

「ほう、その状態でまだ刀を私に向けられるとはな」



龍神は「だが」と付け加え、右の掌の爪を立てるようにして指を曲げた。

次の瞬間空気が震え、龍神の指先に接続された風の爪が容赦なく妖忌へと振るわれる。

「お爺さん伏せて!!」

「!」

投げ掛けられた言葉に合わせて、妖忌は降り掛かる重圧に身を委ねた。

直後、頭上ギリギリを通過した靈力の砲弾が、振り上げられた龍神の腕を後方へ弾く。

「流石の手際です、お姉様」

「ふふ」

いつの間にか地面に仰向けになっていた龍神は、自信を取り囲むようにして突き出ている刃の中心にいた。

「……」

視線だけをその方向に転じれば、刀を地に突き刺し、はたまた得意げに扇子で仰ぐ二人の女の姿が映る。

「で、思わず打っちゃったけど良かったのよね、紫?」

暁美は視線を龍神へと向けたまま、後方の紫へ問いかけた。

回復したとはいえ、未だ体力の戻っていないその声色には、疲労の色が混じっている。

「……っ」

そんな様子を心配そうに見つめる霊夢から、安堵の息と共に身構えていた護符が落ちる。

「——良いわけがないだろ」

答えたのは地面に縫い止められたままの龍神だった。その表情はひどく不機嫌そうで、はあ、と深い溜息を零しながら、続いてこう口にする。

『お前達、全員塵にされたいのか？』

その言葉は地に伏した龍神に加え、全員の背後から聞こえた。

「いつの、間に……！」

「なんだ、今更分こんなもの身体で驚くのか？」

困惑する紫の背後では嘲笑が溢れた。

更に龍神は先のように消滅の五指を突きつけるでもなく、何でもないように言つてのける。

「どうした？ 私はこの通り増えただけで何もしていないんだぞ？ 誰か反撃しなくていいのか？」

そして両手を広げ、それぞれの眼前へ出ながら挑発的に顔を覗き込む。

だが緊張で満たされたこの場において、唯一あつけらかんとしたその仕草や言動が、一層全員の身体を硬直させた。

「ほれ、もたもたしているから時間切れだ」

そうやって複数に分身した龍神の内の一体が一度指を鳴らすと、周囲に白い光球が無数に浮かび上がった。

チカチカと瞬きを繰り返すそれは、今にも炸裂しそうな焙烙玉ほうらくだまのよう。

「そいつが炸裂するのは私の気次第。一片も残さず塵になりたくないのなら、下手な真似はしないことだ。……特にその二人」

今度は地面に縫い付けられている龍神が綿月姉妹を指して言った。  
……かと思えば、何の気なしに上体を起こし始める。

それはもう緩慢に。動けば無数の刃に斬り刻まれる『祇園様の力』の中心で。

「なっ!？」

一刃とて動かない刃。

驚愕に染まる依姫の視線が、ゆつくりと足下に突き立てたままの刃を確認した。

そうこうしている内に、龍神はまるで背の高い草花を乗り越えるようにして、刃の上を跨いで脱した。

「お前の空間を繋ぐ能力……、不意打ちにしては中々よかったぞ？」

綿月姉妹に付いていた分身体がまじまじと豊姫を凝視する。

「ツツ……は、あつ……!？」

「お姉様!？」

紅く輝く眼光と目が合った直後、豊姫の身体は呼吸という生命活動を放棄した。

「貴様あああつ!!!」

膝から崩れ落ち、途端に青ざめ苦しみだした姉を目にした依姫は激昂した。

地面から刀を引き抜き、その身と刃に『建御雷神』たけみかづちのかみを宿らせ、神速でもって斬りかかる。

「神降ろしか。だが所詮は借り物だ」

龍神の淡々とした、無機質な声が続く。

雷いかずち纏し剣閃は、彼女の二見して華奢な手の中で停止していた。

「ツツ」

「そう怒るな、軽い警告だ」

攻撃を止められても尚、鋭く睨みつける依姫を尻目に、龍神は眼下で苦しむ豊姫の肩を軽く叩いた。

「……………はあ、はあ、はあ……………ツツ」

その瞬間、豊姫の身体は再び空気を吸うことを許された。

深い呼吸を繰り返し、酷く喘ぎながらも漸く落ち着きを取り戻した彼女は、恐る恐る顔を上げる。

しかし龍神の意識は既に周囲に向けられ、

「お前達、聞く耳があるなら聞け」

先程と同じ。

その口調は淡々としていて、どこまでも無機質な声色。  
だが今度は明確な殺意がのっている。

「次にもし、私に対して敵対行動をとったなら、—— その瞬間、全員の息の根を止める。……意味はわかるな？」

最高神たる言葉の重みは、転じて全方位から襲い来る圧力となつて、一同の身体を縛りつける。

そうして生まれた沈黙に納得がいったのか、龍神の指を鳴らす所作で分身体は次々に消失していく。

「とは言え煽ったのは私か。まあ許せ……、少々苛立っていたものでついな」

龍神は風に靡く赤髪を鬱陶しそうに掻き上げると、再び紫の元へと歩みを進める。

「そう言えば、お前は私が何をしに来たのかと尋ねていたな」

対する紫は、身体を預けていた藍の腕から離れ、今一度表情を固めつつ口を開く。

「……少なからず私に用があつたのでしょうか？あれだけわかりやすく結界に干渉してきたのですから」

紫は徐に上を見上げた。

不可視であっても確かに存在する、この地を覆う結界を。

その一箇所に、指紋のようにべったりと付着した神力の痕跡を。

「……………本当はお前だけでよかつたんだがな。変に警戒させ

たのが仇となったか」

龍神は周囲を一瞥した後、やがてその重い口を開いた。

「『終 隼斗』の件だ」

その表情はひどく深刻で、その唇がそつと噛み締められる。

「……隼斗の？」

霊夢は囁くように繰り返した。

皆も同じだ。

この場にいる全員の中で、先程からとある疑問が浮かんでいた。

敵を倒した。

空を包む邪気が消えた。

戦いが終わった。

平和が戻った。

——では、彼はどこに？

正確には『全員』ではない。

その事実を少なからず認めていた者がいる。

「……………」

妖忌は一人、以前に開かれた首脳会議での一件を思い起こしていた。

あの時、彼と交わした一瞬の目配せ。

その意図を、真意を、妖忌は察していた。

「……………隼斗は、無事なのでしょう?」

嫌な予感がする。

紫は自身の鼓動が妙に早くなるのを感じながら尋ねた。

「奴は」

その日、この瞬間……………。

幻想郷が生まれた日より最も激動の時であったであろう彼女らにとって。

その事実を、そう——。

「死んだよ」

最も残酷な『絶望』がそこにあった。

## 177話 英雄の末路

僅か数秒という、途轍もなく長い沈黙が一同を包んだ。  
周囲を吹き抜ける風、それに煽られ揺れる木々のさざめきが、異様に喧しく感じられた。

「な」

誰かが思わず口を開いた。

「霊夢は思考に空白が生じている中で、反射的に視線をそちらに向ける。」

「……………何よ、それ」

「曉美だった。」

「彼女は引きつった表情のまま、力無く呟いていた。」

「今……………何と?」

「つられて口を開いた依姫。」

「その大きく見開かれた瞳と、力無く握られ、今にも手中から零れ落ちそうな刀が、今の彼女の心境を物語っている。」

「……………」

「龍神は一度依姫へ視線を向け、続いて全員を一瞥し、やがて答えた。」

「『終 隼斗は死んだ』、と言ったんだ。より正確には……………」

「そこまで言って、龍神は言葉を切った。」



「……妖忌殿、そこをどいていただきたい」

龍神の眼前には今にも標的を斬り裂かんと開かれた五指と爪……、それを間に割って入り刀の背で受け止めている男の姿があった。

その者と目があった。

九つに分かれた尾を逆立て、凜猛な眼光を向ける大妖怪と。

「藍殿、幻想郷賢者に付き従う式神あなたが冷静さを欠いてはいけない」

「落ち着けと？二度に渡る幻想郷への攻撃に加え……つ、剩あまつぎえ『隼斗が死んだ』などと口にした者を前にしてッ!!……私わたしのつ、私の我慢も限界だッッ!!」

立ち塞がる妖忌を払い除けようと、刃を握り込む手に一層力が込められる。

肉に食い込んだ刃によって鮮血が滴り、そこで漸くといったように後方から声がかかった。

「藍、やめなさい」

幻想郷の賢者は静かに言った。

その顔を俯かせ、僅かに震えた声で。

「紫様つ、しかし、……!?」

瞬間、藍の視点は天と地が逆さまとなり、その背部を強かに地面へ打ち付けた。

驚愕により一瞬思考が止まったが、すぐに自分は組み伏せられたのだと知った。

「無礼を承知でこのような形をとらせていただいた。幽々子様のご友人の式神である貴女の指を落とすわけにはいかぬのでな」

妖忌は藍の上に跨って立ち、擬するように鞘の先端で喉を抑えながら頭を垂れた。

「部下の御無礼をお許しください。罰するのですしたらどうか私を。」

その瞬間、藍の頭は一気に冷めた。

「……………紫…様っ」

そうだ、言っていたじゃないか。次に敵対行動をとればどうなるか、先程警告を受けただばかりではないか。

「ッ」

粗相を働いた自分に代わり、深々と頭を下げる主人。その心情はどれほどのものか……、長い時を式神として付き従ってきた自分ならば容易に想像がつくだろうに。  
忸怩じくじの念にかられた彼女は、血が滴るほど唇を噛み締めていた。

「……………いや、いらん」

龍神の返答は意外にも淡白だった。

それでいて憐れむでもなく、「頭を上げろ」とだけ付け加えた。

「九尾の大妖」

「！」

龍神は視線を向けずに声だけをとばした。

すると銀髪の剣士から拘束を解かれたばかりの八雲の式神は、はつとその方を見遣った。

「そう急<sup>せ</sup>くな。話はまだ終わっていない」

そして周囲へ、心なしか感情のこもった声色が続く。

「お前達も、まずは聞け」

その言葉に誰も何も言わず、相槌すら打たなかったが、沈黙を肯定と受けとった龍神は再び話し始める。

「柀 隼斗は今、とある異次元空間にいる」

—— !!

影を指していた全員の表情に、僅かな光が灯る。

先程『死』を宣告されたばかりの彼が、実は生きているかも知れないという事実、可能性。

「じゃ、じゃあ隼斗は生きてるの!?!」

霊夢は目尻に溜まった涙を人知れず拭い、やや食い気味に問いかけた。

皆も同じ反応だ。

少女の問いに対する回答を、今か今かと待ち受ける。

「だが二度と会えない」

しかし、龍神の返答はその期待に沿うものではなかった。

「先程言ったのは、『死んだも同然』という意味だ」

龍神から短い溜息が漏れる。  
皆、その言葉の意味を理解することができなかった。  
それでも、混乱する頭の中で龍神の言葉を必死に復唱し、繋げていく。

「あの、」

逸早く脳内でまとめ上げたのは紫だった。

「つまり彼は……、その異次元空間から脱することができないために、ここへ戻ってくるのができないと?」

「その解釈は半分正解だな」

「……っ」

その瞬間、豊姫は今まさに自分が言わんとしていた言葉を飲み込んだ。  
だ。

『自分の能力なら彼を救えるのではないか?』、と。

でも何故だかとても嫌な予感がした。

それと同時にこうも思ってしまう。

恐らく龍神は先程看破してみせた自身の能力を前提にした上で、二度と会えないと断言したのでは、と。

「半分正解、とは?」

若干上擦った声。

最早紫とて動揺を隠しきれていなかった。

「厳密に言えば、異界から脱すること自体は不可能なことじゃない。決して容易なことではないが、構造を理解している準斗やっなら出口をこじ開けることもできるかもしれん」

変わらず、龍神は重々しく応じた。

「元より、死の天使を確実に追い詰める為に用意された別世界だ。そこへ飛ぶことが出来た以上、両世界を繋ぐ通路は存在する」

だが次の彼女の言葉は、この場の全員の表情が再び華やぐ前に差し込まれた。

「その事実を踏まえた上で言わせてもらおう」

—— 『柊 隼斗のことは諦めろ』。

意味が、わからなかった。

—— ……………。

未だ頭の中の空白は消えない。……と言うより脳が新たな情報を次から次に取りこぼしていく。

「え」

霊夢は言葉にならない呼気を漏らした。

そうして漸く絞り出した声も、そよ風に混じって消えていく。

「隼斗のいる世界は、『親』……、即ち創造神によってその存在を維持されていらない非常に不安定な世界だ」

仮に藁で拵えた小屋があったとしよう。

藁よりも頑強な木製の家屋があったとしよう。

木よりも堅牢な鉄の城があったとしよう。

用いられた素材によって、耐久力に差はあれど、いずれもその堅強

さを維持する為には人の手による、営繕、保守、管理などが必要になってくる。

でなければ、待ち受けるのは時の流れによる腐朽や崩壊だ。

「管理者のいない『世界』は自ら崩壊へと進み、そこに存在する万物の一切を消し去ってしまう」

「……………ッ!?じゃあ隼斗は……………」

胸の内がズキンと跳ね、紫は思わず口元を手で覆った。

「……………親なしの世界を戦地に選んだのは他でもない奴だ。少なからず対策は持っているだろう。そうでなければ死の天使には勝てん」  
「ちよつと待ってよ!じゃあもしかしたら……………、隼斗は死の天使に負けたかもしれないってこと!」

声を荒げ、食ってかかる暁美の言動を尻目に、龍神は短く唸った。  
少数数とはいえ、やはり賢者だけに告げるべきだったと後悔しながら。

「万が一そうなってしまった場合の措置。……………それこそが、隼斗のことを諦めろと言った理由だ」

核心に迫った龍神の言葉は続く。

「人間界と魔界がそうであるように、本来ならば決して交わることのない二つの世界間を通行する手立ては存在する。それは神のみならず、お前達のような強力な妖怪、果ては一部の人間ですらがそれを可能にしている。『手段』があるならば、あとは用意された『通路』を通して目的の世界へ飛び込むだけでいいからな」

それは、紫の『境界を操る力』で、世界間の出入口をスキマによつ

て繋げることができるよう。

豊姫の『海と山を繋ぐ力』で、通常では認知できない世界間の『通路』を瞬時に通過することができるように。

きつと、世界の数は無数に広がっていて、全ての世界間は繋がっている。

「しかし、あの『親無き世界』では外界へと続く通路は出鱈目に混ざり合い、どこへ続くかもわからず、時間軸すらも一律とは限らない」

龍神は眉間に寄った皺を指先でなぞりつつ言った。

「……………無限に等しい世界へと続く通路の中から、そして今この瞬間の時間軸を選んで帰って来られる可能性がどれほど絶望的か……………、最早考えるのも馬鹿らしいだろう」

本当に偶然、あらゆる可能性が繋がって元の世界を手繰り寄せたとしても、時間軸が違っていればそこは元いた世界とは違う並行世界なのだ。

龍神曰く、並行世界パラレルワールドに為り変わる時間のずれによる判定が、一時間なのか…、将又一秒にも満たない刹那の一瞬なのかはわからない。

だが一つだけ言えることは、万が一並行世界パラレルワールドに迷い込んだ場合、同じ時間軸に同一人物が二人存在するという矛盾が生じてしまい、不味いのだと言う。

「そうなれば、『世界』はその矛盾を正そうと動くだろう。元々いた方が、迷い込んだ方のどちらかを消去する形でな」

龍神は言い終わると同時に、はっとして顔を上げた。

「……………」

放心状態、そして虚ろな瞳で一点を見つめる幻想郷の賢者の姿がそこにあった。

今まで気丈に振る舞ってきた彼女の中で、とうとう限界がきてしまったのか。

他の面々も似たようなものだ。

沢山のことを一度に終えたばかりの今の彼女らにとって、非情な現実を受け止めるには心のゆとりがあまりに不足していたのかもしれない。

(下手な望みを持たせぬよう、早々にと思っただがな)

龍神は遣る瀬無い表情を浮かべ、再び眉間に寄った皺を指先で摩擦した。

こんな時、普段よく喋るアホ毛の創造神がいたならば、もっと気の利いた言い回しができただろうか。

いや、きっと結果は同じだったに違いない。

……………彼女等にとって、あの男の存在はそれ程までに大きいのだ。

(やはりお前は大馬鹿者のようだぞ、 柊 隼斗)



## 178話 託されたもの

「そう言や博麗神社<sup>はく</sup>って結局何の神を祀<sup>まつ</sup>ってんだらうな？」

「何よ、今更興味あるの？」

「別に。ただ、ふと思つてさ。俺は博麗の代を初代から知ってるが、この神社の創立に立ち会ったことはない。紫に聞いてみたこともあったが、いつの間にか建つてたそうだけぜ」

「なにそれ、ちよつと怖いんだけど。大体初代様からここを知ってるなら、隼斗の方が詳しそうなのに」

「そうなんだけどさ……、今よかは信仰があつた昔の代でも神が姿を見せたことはなかったんだ。それどころか気配すら感じ取れなかった。……何つーか、そこに存在してるはずなのに別のところにいるつーか」

「……ますますわからないんだけど」

「まっ、信仰もくそもねえ現状じゃあ、それももうわからねーけど、な？」

「わ、わかつてるわよ！これでも参拝客は来てるのよ!?!……………」  
時々、偶に」

「……の、割には随分寂しい賽銭箱だな」

「うるさいわね！だったら信仰のためにも積極的に賽銭だしなさいよー!!」

「馬鹿お前それ俺の財布じゃねーか!……………つて丸ごと投げてんじやねーよ!?!」

---

……このところ、ずっと同じような夢を見ている。

「……」

それは懐かしい夢だった。

自分が、もう何代目かになる、博麗を担う巫女としての役を継いでから間もない頃の記憶。

幼くして義姉をなくし、一時期塞ぎ込んでいた自分を、おちやらけながらも常に明るく接してくれていた男との何気ないやりとり。

「ん……っ、寒っ」

凝り固まった身体を起こすために背伸びをした霊夢は、突如吹き込んできた隙間風に身震いをした。

「……もうすっかり冬ね」

乱雑に寝間着を放り、枕元に畳んで置いた巫女服を手にとると、緩慢な動きで身につけていく。

季節が変わり、外はいつ雪が降ってもおかしくない気候だと言うのに、年中露出の多い構造をしている巫女服を着用するのは彼女なりのこだわりなのか。

せめてもの気休めに前掛けのような上衣を重ねてはいるが、やはり開くところは開いている。

「ん、しょっと」

最後に襟巻きを回して身支度は完成。

霊夢はもう一度背伸びをすると、縁に立て掛けてある竹箒を手へに出した。

「ひゃっ!？」

びゅうつと途端に吹き付ける北風に、思わず身を縮こませて固まった。

明け方の掃き掃除は彼女の日課だ。

いつも遅寝遅起きの義姉が手伝ってくれるはずもなく、きつと彼女が起きて来る頃にはすっかり日も昇っているに違いない。

まだほんのり薄暗い空へ、ほうつと吐いた白い息がのぼっていく。

「まったく」

そうして、毎日毎日掃いても掃いても、次の日には補充されている枯葉を、恨めしそうに掃いていく。

「……」

ふと、視線の先に神社の本殿を捉えた。

夢の中で、そして古い記憶の中で、彼が言っていた言葉を思い出す。

『そーいやー、博麗神社って結局何の神を祀ってんだろーうな？』

「……………神、か」

思わず呟く。

巫女という立場でありながら、長らく忘れていた。

「……」

いつしか霊夢は掃除の手を止め、立ち尽くしていた。

守矢にいるあの二柱のように、明確な姿形を見たこともなければ、なにか御利益があるのかと言われても思い当たる節はない。

しかし、この時ばかりは思ってしまった。

それは悩みと共に吐き出される溜息のように彼女の口から溢れた。

「……………本当にいるなら、此処へ帰してよ」

寒空の下、また一枚枯葉が落ちた。

季節が変われば、通りを行き交う人々の身に纏う装束も変わるもの。

より厚く上着を着込み、囲炉裏に当たって暖をとる。

通りに目を向ければ、蕎麦屋の幟のぼりには椀に盛られた湯気の立つ蕎麦の絵が。

火鉢あんかや行火などの暖房器具を扱っている商店では、他店よりも多くの客を呼び込もうと躍起になっている。

人混みの中を器用に渡り歩く棒手振りの籠の中には、油や薪の他に、焼き芋や爛酒かんざけなどがこれまたびつしりと並べられている。

人里はすっかり冬季を迎えていた。

しかしそんな中、吹き抜ける風に冷気が混ざるこの時期においても、彼女の格好は変わらない。

白いYシャツに、赤いもんぺ、そして足下まで届きそうな長い白髪。それが藤原 妹紅のトレードマークだった。

『不老不死』という特異な身体を持つ彼女は、例え極寒の雪山に裸で放り出されようとも死を迎えることがない。

さりとて全く苦痛を感じないというわけでもなく、寒さも感じる

し、霜焼けだってできる。

……の、筈なのだが、どうせ死なないのだからと、彼女はそういったことへの対策を放棄してしまっている。

(……そう言えば前に何度か師匠から言われてたっけか。『その自傷癖みたいなの直せ』って)

ふと、妹紅は雑踏の中で足を止めた。

視線の先には一軒の呉服屋。

「あ」

とある記憶が脳裏によぎった。

今より100年以上昔。

季節は今と同じ、雪の降る夜だった。

くくく

「お前まだそんな格好してんのか？いい加減寒いだろ」

「どうせ死ぬことはないんだし、このままでも平気」

「なに強がってんだ。そんだけ鼻真っ赤にしといて」

「むっ」

「大体死ななきやいって問題じゃねーだろ。そうやって寒さを感じてる以上は、それ相応の対策を講じるもんだ。周り見てみる、誰がそんな薄着でいんだよ」

「……………目の前にいるけど?」

「……………。馬っ鹿、俺はいいんだよ。暑い寒いとは無縁だからな」

「なにそれズルい」

「……………兎に角だ。せめて襟巻きでも巻いとけ。会うたびに寒そうにされてちや、こっちとしても心配しちまうだろ」

「それは……、うん。でも……、私は師匠が……」

「強情な奴だな。わかったよ、なら俺も今度から襟巻きするからお前もしろ。それならいいか？」

「……………、うん」

「おっしや決まり。約束な？冬場にはちゃんと襟巻きをすること。修行とかで失くしたとか無しだかな。会うたびに確認すんぞ」

「わかったってば。……その代わり！師匠こそちゃんと着けてきてよ？」

「おう。……ん？おい、これなんて妹紅に合うんじゃないか？」

「早速っ!？」

「ほれ、試しに巻いてみるよ」

~~~~~

「……………、——!」

はつと我に返り、再び周囲の賑わいが耳に入ってくる。

だが妹紅は、呉服屋を凝視したまま動けなかった。

店外に置かれた台の上に陳列してあるのは、色鮮やかな襟巻きの数々。

その一番最上段にある『唐紅からくれないの襟巻き』が、先程から彼女の視線と足をその場に縫い止めていた。

(結局、あの時買ってもらったやつも私の時間にはついてこれなかったっけ)

彼女は不老不死だ。

老いることもなければ、死ぬこともない。

それはこの世に生きとし生けるものが一度は抱くであろう、夢、願望。

死という恐怖から逃れ、永遠に生きる存在としてこの世に在り続ける存在。

だが、果たしてそれが幸せに繋がるのかと問われれば、そんな訳がない。

世にあるもの。

人間にしろ、動物にしろ、勿論妖怪や神にだって命の終わりは訪れる。

『朽ちる』と言い換えれば、それは物にだって当てはまる。

ただ不老不死という存在だけが、その理から外れ、未来永劫変わることなくこの世に存在し続けなければならない。

前提として、元々妹紅は普通の人間の少女だった。

人の身である以上、人並みの生活を送っていく以上、大なり小なり自身と関わりを持つ者は必ず現れるものだ。

しかし、彼女はその者と共に人生を歩もうとは思わない。

—— 何故なら彼女は不老不死だから。

……あの日。

『蓬莱の薬』というものを口にした瞬間から、藤原 妹紅は不老不死という時間の檻に囚われてしまっている。

生まれたての赤子だろうと、長い時を生きる妖怪だろうと、遅かれ早かれいつかは彼女を置いていってしまう。

だから彼女は、今でも求めている。

長い時を過ごし、人間らしきなどつくの昔に捨ててしまっていたはずなのに。

—— 心の支えが欲しかった。

それはずっとそばにいてくれなくたっていい。
月に一度、なんなら年に一度でも顔が見られるなら。

ちやんとその存在を認識できて、確かな支えを感じることができた
ならそれでよかった。

些細なものでもいい。

何か、そのものを感じられるものがあれば、それだけで……………。

「……………！」

気が付けば一筋の涙が頬を伝っていた。

慌てて手の甲で拭う。

「……………冷たい」

妹紅はそう一言呟き、いつの間にか冷え切っていた手を、そつと握り締めた。

(今、師匠に見つかったらなんて言われるかな)

きつと、最初は道の真ん中に突っ立っている私に、怪訝な顔をしながら歩み寄ってくるに違いない。涙は思わず拭ってしまったが、恐らく今の自分の鼻は赤くなっているだろう。だから、彼の第一声は少々嘲笑気味にくるかもしれない。

将又、氣遣わしげにくるだろうか。

そこからちよつとした世間話が始まって、いつもの流れなら、そこから彼は行きつけの団子屋に連れて行ってくれる。そこは冬には温かいお茶を無料たで出してくれる。

実は私の密かな楽しみでもある。

そうして一通り話し終えた後、彼は改めて指摘するだろう。

——
だから。

妹紅は呉服屋へまっすぐ進み、100年前師に買ってもらったものと同じ、唐紅の襟巻きを手にとった。

「あの、これください」

地上から遠く離れた大地、——『月』。

その歴史は生命創生の時代まで遡り、古来から地上の闇を照らし続ける存在。

そして何より、人類が唯一足を踏み入れることのできた天体である。

しかし、それは飽くまで地上からみた『表側』の認識。

地上で生活する者達の殆どが、月の裏側に築き上げられた大国の存在を知らない。

「せいっーやあー!!」

ここは月の裏側。

又の名は月の都とも呼ばれる、月人が住まう別世界。

その一角では、今日も月の防衛を担う新米兵士達が、訓練用の模擬銃を振るっていた。

「動きが単調になってきてますよ。視線は一点に集中させ過ぎず、常に相手の動きを観察しなさい」

その訓練場を取り仕切り、目下戦術指南を行なっているのは、『月の使者』のリーダーの一人である、綿月 依姫。

「依姫様、もう間も無く時間です」

傍には月の軍の隊長格に任じている、春雨 麻矢が立ち、備え付けの時計を指しながら告げた。

「訓練止め！現在時より小休止とする」

依姫の号令により、その場にいた兵士達は一斉に模擬銃を地面に放ってわらわらと休憩に入ってしまった。

「……………はあ」

深い溜息。

模擬とはいえ、自身の身を守るための武器をぞんざいに扱ってしまったのは、新米故の軽率な行動と言えるが、依姫は額に掌を当てて呆れ返っていた。

「彼女等の規律指導を担当しているのはどこですか？」

「えと……………、今期は四番隊です」

「……………あとでキツク言っておく必要がありそうね」

隣で苦笑いする部下と顔を見合わせ、依姫は首を傾げた。

「どうかしましたか？貴女も休憩してきなさい」

「はい……………、いえその……………」

歯切れ悪く返事をした麻矢は、どこか不安げに尋ねた。

「あの……、あれから隊長がどうなったか、地上より連絡はありましたか？……私、心配で」

「！」

ほんの僅かに表情を曇らせた依姫だったが、瞬時に切り替えて応じる。

「いえ、まだ……。もう少しかかるそうです」

「……そう、ですか」

麻矢は俯き加減でそう頷くと、「失礼します」と言い残しその場を後にした。

「……………」

一人、その場に残された依姫は暫く黙り込んだ後、背後の物陰へ振り返り、微笑みながら言った。

「貴女が訓練に顔を出すなんて珍しいですね。お姉様」

その言葉に、物陰に隠れていた豊姫が、肩をびくりと震わせる。

「やっぱりバレてた？」

「この距離の気配に気付けないようでは、今日にでも戦術指南役を降りなければなりません」

やがて物陰から現れた姉へ、依姫はやれやれと肩を竦めて言う。

「…」

しかし、その表情は誰が見ても強張っており、それが作り笑いであ

ることは誰の目にも明らかだ。

そんな妹の表情を読み取った豊姫は、同じく表情を曇らせて呟く。

「言えるわけないわよね……、麻矢ちゃん」

麻矢を含め、『彼』を知る者はあの場にいなかった。

故にあの事実を知る由もなく、あの悲しみに包まれることもない。

「ですが、あの子は賢い。薄々気付いているでしょう」

あれから、地上では季節が変わった頃か。

「無理もない。例の件を告げて早二月^{ふたつき}。その上進展もなしでは……」

『柊 隼斗が異界にて敵の頭目を退けた』

『しかし異界に閉じ込められてしまい、救出する方法を模索中である』

……………それが事実ならば、どれほどよかったことか。

打開策を講ずるだけの余地があれば、どれほど救いがあったか。

彼女らに残された選択肢は、『真実』と『偽り』を織り交ぜることで、自分達と同じく彼の身を案じる者達が悲しまぬよう、取り繕うことだけだった。

なんて浅はかな考えなのだろう。

咄嗟だったとはいえ、心身ともに余裕がなかったとはいえ……。

一度口にした言葉はもう引つ込めることはできないというのに。

「……………いつしか月読様が言っていたわね。一層の事、記憶を改竄すれば楽になるって。お前達が望むならって」

豊姫がぽつりと呟き、依姫は首を横に振った。

「麻矢達は兎も角、事実を知る私達が逃げる訳にはいかない。忘れてはならない」

「……………そうね。その通りだわ」

小休止が終わり、訓練生達の和気藹々とした声が近付いてきた。

訓練場の出入り口付近で彼女らを待ち構え、四番隊に代わり規律指導を行なっている麻矢の叱声が聞こえた。

「……………」

「……………」

綿月姉妹は互いに顔を見合わせ、互いの顔を優しく拭った。

彼女らは月の都の担い手。

故に涙を見せる訳にはいかない。

襖の隙間より差し込む朝日が眩しく感じる頃、博麗 暁美は目を覚ました。

むくりと身体を起こし、半分眠ったままの意識を呼び戻すため、背伸びをする。

背中側からパキパキと小気味よい音が連続し、ようやく彼女は布団から脱した。

「……………夢、だよね」

未だ目に突き刺さる日差しに顔をしかめながら、ぽつりと呟く。そして徐々に視界が慣れ始める頃、自身が寝巻き姿のまま立ち尽く

していることに気が付いた。

冬空の下、日は差しているとはいえ薄着では流石に寒い。

「うー、乾布摩擦でもしようかしら」

などと親父臭くぼやいているうちに、廊下から足音が一つ聞こえ、やがて割烹着姿の義妹が現れた。

「あ、やっと起きたのね。ご飯できてるわよ」

「ん、ありがとう」

前掛けの紐を外しつつ、それだけ告げた霊夢は踵を返し、暁美ものそりと後に続く。

食卓のある部屋まで廊下を僅か数歩。

すぐに朝食の味噌汁と焼き魚の匂いが鼻に抜けた。

「いい匂い」

眩き、重力に身を任せながら食卓へ腰を下ろした。

対して片膝から徐に卓についた霊夢は、隣に畳んだ割烹着を置いて掌を合わせた。

それを見た暁美も同じ様に合掌する。一見ずぼらな挙動が目立つ彼女だが、これでも普段人前ではきちんとしている。

何より、霊夢が幼い頃に作法を教えたのは暁美本人だ。

「いただきます」

コクリと味噌汁を一口。

心地良い温かみが冷えた身体に浸透していく。

冷え切った廊下と違い、仄かな温もりのある室内。火鉢の炭特有の香りが鼻に抜け、火のついた炭が赤々と燃えている。

視線を転じれば、今にも雪が降ってきそうな冬空。

雲の切れ間から僅かに差す日の光が、境内に降り注いでは影の波を立たせる。

それら全てを、又は一部を切り取っても、平穏な情景がそこにあった。

この世に生きる者たちの多くは、普段の生活の中の『当たり前』が、実は非常に繊細な基盤の上に成り立っていることを知らない。

一つの支障、一つの弊害が発生するだけで、その者にとっての『当たり前』は崩壊する。

数ヶ月前の抗争は、そんな『当たり前』を取り戻すための戦いだっ

た。

——では、自分達は本当に『当たり前』を取り戻せたのか？

「……………」

改めて、平穩を目の当たりにした曉美は力無く息を吐いた。

あの日から胸の内に在り続ける寂寥感せきりようが、今でも彼女を苛む。

……………何度も考えた。

あの時、どうすればよかったのか。

もつと自分にできることはなかったのか。

本当に彼一人が犠牲になることが最善の策だったのか。

所詮は後の祭り。

今更何を嘆いたところで過去は変わらない。

……………だからと言って、立ち止まることはできない。

運命は自分達を生かした。

彼が導いてくれた。

唯一変えられるものがあるとするれば、それは未来だ。

「ご馳走様でした」

暁美は両の手を合わせ、颯爽と立ち上がった。

託された未来を担う一員として、彼女らは今日を生きる。

———そこにある『当たり前』を守るために。

179話 幻想郷巡り 一步目

「はい、じゃあ口の中診ますね」

永琳はそう言って患者の口内に明かりを宛てがった。そして喉奥が僅かに腫れ、炎症を起こしているのを見て取り、すぐさま診断を終える。

「風邪ですね。このところ急に寒くなってきたから体調を崩したのかしら」

「いやー先生、その通りだ。なんか最近怠いと思っただらやっぱりかー」

「ここは大事をとって入院……………」

「お薬出しとくので一日三回、食後に飲んでくださいね」

「……………はい」

途端に鼻の下を伸ばして浮かれていた患者が肩を落として診察室を後にする。

永琳はやれやれと再び患者のカルテに視線を移した。

（今月で三度目。どう生活してたら月に三回も風邪を引けるのかしら？）

小首を傾げている永琳には、あの患者が毎夜欠かさず行なっている、『水風呂に入り、薄着でガタガタと震えながら寝て過ごす』等といった、風邪を引くための無駄な努力をしていることなど知る由もない。

そうしてカルテの束をまとめてみると、奥の仕切りが開き、彼女の助手である鈴仙が兎耳を揺らしながら顔を出した。

「師匠、本日受診する予定の患者さんは今の方で最後です。後は――」

「急患だけ、ね。ご苦労様。貴女は裏で休んできなさい」

「はい、あついえ、あとですね……」
「？」

鈴仙はそう言って資料と一緒に持っていた封書を、目を瞬かせる永琳へ手渡した。

「月からです。差出人は月の言葉で暗号化されていましたが、たった一文字、——『玉』と」

「！……そう」

手紙を受け取った永琳は、一礼して下がっていく助手を見送り、やがて徐に封をあけた。

文面の本文は挨拶だったり、此方の安否を尋ねるといった、謂わばいつもの様式に沿った文だった。

そして文の締めくくりとして、決まってこう続く。

『私共月の民一同は、いついかなる時も先生の帰還を信じ続けます』

「……………」

永琳はその文面から逃れるようにして視線を窓の外へ向けた。

さらさらと風によって揺れ、さざめく竹林が広がっている。

緑が鳴りを潜める冬場に於いて、その青さは人々に安らぎを与えるのだとか。

「！」

その中で、一本の竹に入った『傷』が見えた。

獣が爪を立てたのか、将又ウチの妖怪兎達の悪戯か。等間隔で付けられた傷の周辺は変色し、腐敗していた。

「……………」

ふと、永琳はいつかの彼との会話を思い出した。

くくく

「知ってるか？竹って地面の中で繋がってんだとよ」

ある日、彼は目の前に広がる竹林を指してそう言った。

「地下茎でしょ？それがどうかした？」

「いや、似てるなって」

「何に？」

私が問うと、彼は振り返るでもなく、息を漏らすように続けた。

「竹ってさ、一本の傷が命取りになるんだってな」

「？」

私の質問はどこにいったのか。

怪訝な顔をする私を余所に、彼は縁に腰を下ろしてしまふ。

「二見丈夫で柔軟性もある。色んな用途にも使われる。でも案外脆いもんだ」

その話は耳にしたことがある。

確か、地中の根で繋がっている竹林は一つの個体で、地上のどれか一本に悪影響が出ると、いずれは繋がっている竹全てに広がってしまう、と。

「俺にとっては、お前達全員が『竹』だ。一つとして欠けちや駄目なんだ」

彼はそう言って振り返った。

昔から見てきた、決まって私を安心させる時に見せる笑みを浮かべて。

「お前達は何が何でも俺が守り抜く」

彼はいつもそうだ。

面と向かって、普段はそんな臭い台詞なんて口にしないのに。

こういう時だけは、いつも。

「勝つぞ」

なんだか言われているこっちが気恥ずかしく感じて、私は視線をやや下に向けながら応じた。

「そうね。……ええ、勝ちましょう」

それは決戦前日の昼下がり。

どこか寂しげな彼の背中を、私は黙って見送った。

くくく

「……………馬鹿ね」

永琳は思わずそう呟いていた。

(隼斗、貴方はあの戦いに終止符を打った)

あの日。

戦士達は戦い、疲弊した身体が自重すらも苦しみに感じ始めた頃、幻想郷は終戦を迎えた。

永遠亭へ続々と怪我人が運び込まれてくる中、そこに彼の姿はなかった。

妙な胸騒ぎを覚えつつも診療を続け、漸く一息つけると安堵したところへ、見知った顔が訪れた。

そして、彼女等は意を決したように口にした。

——その事実を、胸騒ぎの正体を。

「本当に、馬鹿…ね」

唐突に視界がボヤけた。

永琳は頬を伝うものを指先で拭うと、絞り出すように呟く。

「貴方が欠けてしまつては意味がないじゃない……っ」

竹についた傷は一生消えることはない。

故に、傷のついた竹は伐採するしかない。

他の竹を殺さない為に。

いつの日からか、ここ最近同じ夢を見ている気がする。

「……………」

目が覚め、意識が覚醒した頃には既に不鮮明に形を崩してしまうのが夢というもの。

後になつてからでは、夢の中で自分がどんな感情でいたのかさえ思

い出すことができない。

悲しかったのか、悔しかったのか。

夢から覚めたばかりの今、思い出せるのは、夢の中の自分が涙を流していたことだけだった。

「紫様？」

不意に横合いから声がかかった。

未だ放心状態のままゆっくりとそちらを向くと、寝室の襖から自身の式神が心配そうに顔を覗かせていた。

「藍、…………おはよう」

「おはようございます。あの、紫様……、何かあったのですか？」

「泣いておられるようですが」と、藍は続けた。

「え？」

徐に頬へ触れた指先がしっとり濡れた。

何故涙を流しているのかわからないまま、少しの間放心していた紫は、やがて再び藍の方へ向き直り言う。

「なんでもないわ」

そうして気遣わしげに見つめる藍を下がらせた紫は、寝衣からいつもの紫色のドレスへと着替えた。

（今日は……、いけそうね）

身体の調子を確認め、寝室を後にした紫は、やはり心配だったのか未だ廊下で待機していた藍を見つけると、微笑を浮かべて告げる。

「少し出てくるわ。今日は体調がいいの」

そうやって目の前を指で縦になぞると、何も無い空間からスキマが出現した。

「……紫様」

スキマの入口へ一歩踏み出した紫へ、藍は思わず声をかけていた。

「？」

「あつ、いえ………、お気をつけて」

途端に言葉に詰まってしまい、漸く出たのはそんなたわい無い一言のみだった。

「ええ」

再び微笑んでスキマへと入っていった主人を見送り、一人その場に残された藍は、暫くスキマの消失した空間を見つめていた。

(何をやっているんだ私は)

死の天使の襲撃から数ヶ月。

あの日から今日まで、八雲 紫は力の酷使により殆ど寝た切りの状態だった。

漸く最近になって彼女は自由に身体を動かせるまでに回復したのだが、病み上がりであることに変わりはない。

だから従者として、式神としてあまり無茶をしてほしくなかった。

彼女は寝込んでいる間、少しずつ復興に向かっていく幻想郷の様子をいつも気に掛けていた。

だから身体を動かせる程に回復したら、多少身体を引きずってでも彼女は動き出すだろうと検討をつけていた。

「今は無茶をせず安静にしていってください」と、少し強めの口調で喚起するつもりだったのに。

(早く安心させてあげたいと……、思ってしまった)

どんな些細なことでも、主人が落胆する顔を見たくなかった。

死の天使を打ち倒したあの日……、龍神から『彼』の宣告を受けたあの日から、藍にとつて主人が幾度となく見せてきた悲しげな表情は一種のトラウマになっていた。

その表情を目にするたびに、思い出す。

自身も同じくして絶望に打ちひしがれたあの日の記憶を。

今とて完全に立ち直れた訳ではない。

だが式神である自分がすっかりしなげれば、主人を、そして自分の部下を支えていかなければ……と必死に言い聞かせてきた。

「これも辛いとはな」

そんな言葉が溢れ出る。

「私は今でも信じられないよ……、なあ、隼斗」

一人だからこそ許される弱音を、ぼつりぼつりと吐き出した。

180話 幻想郷巡り 軌跡

冬が訪れた太陽の畑ではその代表格たる向日葵達は鳴りを潜め、寒冷に耐えることのできる花々が咲き誇る。

しかし、彼女の日課は変わらない。

手にはそれぞれ如雨露じょうろや園芸用品の入った籠をぶら下げ、定期的に畑の様子を見て回っている。

「この季節になるとお水をあげる頻度が減っちゃって残念ねえ」

風見 幽香は、まるで知り合いや友達と会話するように花々へ微笑みかけた。

心なしか風に揺られる花々が、彼女の言葉に反応したように靡く。

そうして畑を順繰り回った幽香は、満足げに家の戸に手を掛け――

――途端に表情を曇らせた。

「……………何か用かしら?」

「あら、随分そっけないのね」

問い掛けに返ってきたのは彼女のよく知る声。

特に恨みがあるわけでもないが、昔から兎に角その飄々とした性質が気に入らない相手がそこにいた。

「御機嫌よう、お変わりないかしら?」

幻想郷の賢者はスキマから降り立つと、艶やかな立ち振る舞いで一礼した。

幽香は眉間に皺を寄せ、そちらを睨みつけるように見遣る。

「私は何か用かと尋ねた筈よ?」

「そんなに怖い顔しないでよ。賢者として久しぶりに幻想郷の様子を

見て回ってるだけなんだから」
「？」

そう言つて微笑む紫の表情を、幽香は訝しげに見つめた。

「……………貴女、下手になつたわね。愛想笑い」

「えっ？」

予想だにしていなかったのか、間の抜けた声を漏らす紫を改めて見遣り、幽香は小さく息を吐いて言う。

「今まで寝込んでたつて話だし、体調が優れないなら式神に回らせた方がいいんじゃないかしら」

「……………何故それを？」

貼り付けていた仮面が剥がれるようにして、笑みの消えた表情が現れた。

紫の疑問に対し、幽香は一度視線を外して答えた。

「別に…、風の噂よ」

「心配、させてしまったかしら？」

「ツ、ありえないわー！」

「ふっ……………」

顔を伏せ、やや上擦った声を上げた幽香を見て、今度は本当に笑みがこぼれてしまった。

その反応を鋭い眼光で睨みつける瞳に気が付き、すぐ様咳払いと共に表情を正したわけだが。

「さつきは『賢者として』、なんて言つたけれど、嘘。本当は私自身が気になっているから」

紫は視線を横へ外し、目の前に広がる花畑を一望しながら言った。

「綺麗ね」

「……………」

幽香は何も言わなかった。

彼女自身、花達への賞賛を素直に受け取れない程、八雲紫という存在を嫌ってはいない。

気にくわない存在ではあるが、彼女が賢者としてどれ程の苦渋を味わってきたのか、理解できないわけでもない。

少なくとも、その資質や技量に於いては認めている部分もある。

だから、幽香が口を瞑つたのは、彼女なりの気遣いだった。

暫しの間、色鮮やかに咲き誇る花々を堪能する時間をやろう、と。

再びドアノブへ手を掛け、音を立てないように戸を開けた幽香は、微笑ましげに花畑を見つめる紫を見遣り、満更でもないといった表情で自宅へ入った。

「ふう」

ぱたりと閉めた戸にもたれ掛かるようにして、息を吐く。

あれから、どれ程経つただろう。

いや、『どれ程』なんて表現は大袈裟だったか。

数にしてみれば僅か六十と数日。

寿命の短い人間ですら、『最近』と口にするであろう時間しか流れてはいない。

(随分と一日が長く感じるのよね)

こここの所、幽香はずっと一人で過ごしている。

幻想郷の外れにあり、妖怪ですらも近づかない場所に住んでいるの

だから、当たり前なのだが。

そんな生活を送っていた彼女の家の戸を、月に何度か叩く者がいた。

その者はいつもおちやらけていて、暇つぶしにといざ戦いを挑もうものなら余裕綽々で打倒してくる。

暇つぶしが終わると家に招き、焼き菓子と紅茶を振舞ってやると、子供のように喜んで食べる。

そして一頻り雑談に花を咲かせた後、変わらぬ調子で手を振って帰っていく。

まるで自由気ままな雲のような……、

(私をここまで惹きつけたのは、後にも先にも貴方くらいかしらね)

如雨露と園芸用品の入った籠を置き、幽香は日課の紅茶を淹れる作業に取り掛かった。

「……………」

ふと、手を止めた幽香は、少しの間悩んだ後、徐に戸を開けた。

「ね、ねえ、良かったら貴女も飲んで——」

彼女の羞恥を含んだ呼び掛けは、既に誰もいない花畑へ消えていった。

太陽の畑を訪れ、紅魔の館、妖怪の山、地底の都を順繰り巡って、彼女が休息の場所を選んだのは冥界だった。

縁に腰掛け、同じく傍に座る親友を横目に、茶請けの団子を口へと運ぶ。

「ん、美味し」

「でしよう？丁度さつき妖夢に買ってきてもらったの」

思わず舌鼓を打つ紫に対し、少々食い気味にそう言った幽々子の皿には、既に彼女の十倍の量の串が積み上がっている。

「人里？」

「ええ、『彼』のおすすめのお店」

「……………彼？妖忌？」

「甘いものはあまり得意ではないみたい」

「……………ああ」

合点がいった。

答えつつ、正面に向き直った幽々子に釣られて、乾いた音の響く庭先を見た。

銀髪の剣士が二人、互いに風を断ちながら、木刀で打ち合っている。打つ、避ける、打つ、受ける、打つ、打つ、打つ――。

しかし一見荒々しく打ち合う両者の動きは、空を舞う落ち葉のように緩やかだ。

「前もこんな光景じゃなかったかしら。平和になっても相変わらずね」

「でも強くなったでしょ？あの子」

半ば呆れ気味に言葉を漏らす紫。

しかし対照的に、幽々子はまるで我が子を賞賛する母親のように微笑んだ。

あまりにも誇らしげに言うものだから、何故だか此方まで頬が緩ん

でしまう。

「そうね」

ここでやつと一本目の団子を食べ終え、湯呑みを持ち上げた紫は、一度茶で喉を潤すと、改めて幽々子へ視線を向けた。

「あれから彼は……………、隼斗は冥界こゝこには来てない？」

漸く本題に入ったと言わんばかりの問い掛け。

湯呑みを支える手にぐつと力がこもる。

「……………」

それは生者として？それとも——。

幽々子は態々そんなことを聞くつもりはなかった。しかし一瞬胸の内に浮かんでしまったことに対して自己嫌悪を感じてしまう。

「いいえ。閻魔様の話では彼岸にも来ていないみたい」

彼女は静かに首を横に振り、落ち着いた声色で答えた。

「……………そう」

やや視線を下げ、小さく呟いた紫のそれは、どこか安堵したようで、されど侘しげな表情だった。

……………。

暫しの静寂。

そうして庭先から聞こえていた木を打ちつけ合うような乾いた音

が止んだ時、幽々子は再び口を開く。

『幻と実体の境界』

「え？」

ぽつりと呟かれた言葉に、紫ははつと顔を上げた。

「以前、貴女が幻想郷の仕組みについて話してくれた時にそう言っていたわよね？ 幻想郷は外の世界で存在の薄れたものを引き込むって」

視線の先では、稽古を終えた師弟が歩み寄ってくるのが見えた。

そんな二人へにこやかに手を振りつつ、幽々子はゆつたりと心静かに告げる。

「まだ、諦めるには早いと思わない？」

「……！」

「あれ……？ 紫様とご一緒だったのでは？」

妖夢は額に汗を滲ませ、周囲を見渡して首を傾げた。その横では妖忌が小さく息を吐き、懐から取り出した手拭いを少女へと差し出す。

「せめて汗を拭わぬか」

短く叱責を受け、慌てて下がっていく妖夢を尻目に、妖忌は幽々子の隣に置かれた湯呑みを一見した。

「行つてしまわれましたか」

「ええ。思い立ったように今、ね」

新たに掴み取った数本の団子を手に、幽々子は頷いた。

「はしたないですぞ」と言う妖忌の言葉は右から左らしい。

「ねえ妖忌、貴方の『目』からみても隼斗の事は絶望的だと思う？」

不意に投げかけられた質問に、妖忌は短く唸り、やがて困ったように笑みを浮かべた。

「実のところ此ればかりは私にもわかりかねます」

しかし、と妖忌は続けた。

「強いて言うならば、それこそが答えやも知れませぬ」

番外編 4 誰も知らない『彼』のお話

常世へ続く暗闇。

まるで出口のないトンネルをひたすら進んでいるかのような、長い長い道。

そんな中で、途方も無い時間が流れていた。

身体に纏わり付く得体の知れないナニかが、歩みを進める足を、振り払おうともがく腕を^{から}搦めとる。

あとどれだけ、どの方角にどれ程の時間進めばいいのか。——そんなこと、とつくに頭の中から消えていた。

空腹や眠気を感じることがないのは唯一の救いと言っているのだろうか……、それがこの場所の特性なのか、既に自分の感覚がおかしくなってしまうたのかはわからない。

もう既にどうでもよかった。

頭の中でぐるぐると渦巻き、思い描いていたのは、家族や仲間の顔でも、住み慣れた土地の情景などではなく、『光』と『音』だった。

何も見えない、何も聞こえない。

何にも触れられず、唯一踏みしめているはずの地面も、雪や砂の上を歩いているように不安定で、感触も曖昧だ。

その微小な感覚を頼りに、今自分は歩いているのだと認識できていた。そんなただ一つ残された指標に縋り、一步、また一步と踏み出していく。

『世界』は修正を行った。

この世に紛れ込んできた異物に対し。

本来あるべき形に戻すため。

生じた矛盾を正すため。

『彼』は雨の中にいた。

「…」

大きめの雨粒が地面を叩き、周囲をその音で埋め尽くしていく。

「……どこだ？」

小さく漏らした疑問は雨音に消えた。

『彼』は徐に視線を動かし、周囲を見渡した。

「…」

厚い雲に覆われた曇天、辺り一帯に広がるのは、種々雑多な木々が生え混じった雑木林だった。

緑色の葉、茶系の色をした幹に、灰色がかった雲。——知っ
てる色だ。

「ふう」

思わず安堵の息が漏れた。

金色の木や、桃色の雲が浮かんでいないあたり、少なくとも此処は自分の知らない異世界ではないらしい。

だが胸を撫で下ろすにはまだ早い。

仮に此処が元いた世界だったとしても、更に大きな問題があるのだ。

(……いつだった!?)

時間軸の矛盾。

それが一番厄介なのだと彼女は言っていた。

こうして警戒したところで一体何ができよう？

強大な力を持つ『彼』とて所詮は世界の一部。

——故に、例外などないのだ。

「……………あ」

まるで吹き消された蠟燭のように、彼の視界から光が消えた。

「……………ッ!?!」

続いて消えたのは声——、ではなく音だ。

先程まで鮮明に聞こえていた雨音が嘘のように止んでいる。

がくりと膝から崩れ落ちた。

今の今まで足裏で捉えていた地面の感触が消失した。

「……………」

一瞬にして五感は消失し、やがて意識もゆっくり闇の底へと沈んでいく。

「か……………え……………っ……………あ」

——『帰るんだ』と。

薄れゆく意識の中で、漸く振り絞って出た言葉だった。
せめてもの抵抗に唇を噛み締めようと力を込めるも、いつしか身体
の自由は奪われていた。

既に、『世界』は動いていた。

そこに如何なる事情も入り込む余地はなく、『彼』という存在を、こ
の世に入り込んだ異物として排除するために。

『世界』は、何よりも世界を優先する。

——『世界』にとって、『彼』個人の都合など知ったことでは
ないのだ。

・ ・ ・ ・ ・

「！」

降りつける雨も小降りになってきた頃、不意に彼女は振り返った。

「……」

自分を呼ぶ声なんて聞こえていない。

そこに誰かがいた形跡なんてありはしない。

「……』』?」

ただ、なんとなく振り返っただけの彼女は、小さくその名を呼んだ。彼とは先日冥界で別れたつきりだったが、近くにいるのだろうか？

(気のせいかしら?………まつ、次に会った時にでも報告すればいいかしらね)

一人納得したように前へ向き直ると、艶やかな紫色のドレスを持ち上げ、その場にしゃがみ込んだ。

そして願いを込めるように手の平で地面に触れると、静かに笑みを溢した。

今は名も無き土地だが、約百年後には人や妖怪、果ては神までもが共存する理想郷となる大地へと。

「頼むわね」

そつと託すように呟くと、次の瞬間には突如として空間に開いたスキマへと消えた。

この者は後に賢者として名を馳せる大妖怪。

彼女は『彼』の友人であり、家族であり、——そして……。

181話 幻想郷巡り 再開

博麗神社某所。

「ただいま」

居間の引き戸がすつと開き、若干頬を赤くして博麗 暁美は帰宅した。

「おかえりー、どうだった？」

「んんー」

外が余程寒かったのか、質問に答える前にそそくさと炬燵こたつへと足を突っ込んだ暁美へ、霊夢は黙ってお茶の入った湯呑みを差し出した。

「ありがとう」

暁美は湯気の立つ湯呑みをちびちびと口へ運び、漸く一息つけたとばかりに大きく息を吐いた。

「こればっかりはわからないわね」

卓上に湯呑みを置きつつ、肩を竦めてそう言った義姉の様子を見て、霊夢からも思わず溜息が漏れる。

「なんせ霊夢あなたや私は疎か、歴代の先輩方ですら正体を知らない神様だもの。信仰を集めるにしたって、『どんな御利益があるかもわからない神様を果たして……』ってやつよ」

「ううん」

「それに里からここまで来るには大なり小なり危険を冒す必要がある

わ。立地に恵まれてないのも大きな要因よね」

人里から神社までの道中は見通しの悪い獣道が続き、腕に覚えのない者は妖怪に狙われる可能性が高い。

特にここ最近では、天使軍襲撃の一件もあつてか、人々の警戒心はますます強まってしまっている。

「あつ、一層のこと守矢のどこみたいにウチも引つ越すつて言うのは？」

「……紫に怒られるわよ」

「………今のは冗談」

会話は一旦そこで止まり、二人は唸りながら眉間へ皺を寄せた。

そもそも巫女や神職の仕事を担う者達が、強引に神様を売り込もうなどあつてはならないはずなのだが、此処は幻想郷。彼女らは元より、そのような常識が存在するのもあやふやだ。

よつて今日一日人里へ下り、慣れない布教活動（多少強引な）に勤しんでいた暁美にも、一切の悪気はない。

「でも真に信仰を集めるとしたら、このままの方がいいのかもね」

「………えっ？」

ぽつりと呟いた義姉へ、霊夢は思わず間の抜けた声をあげた。

「ほら、やっぱり無理矢理信仰を集めたところで神様の力にはならないだろし、そしたら神徳なんて発揮されないでしょ？」

「それは…、まあ。だけど………っ」

何もしなければ何も変わらない。

そう言おうとした霊夢の口元を、暁美は指先で制した。

「だからって本当に何もしないでわけじゃなくてね？例えば参拝しやすいように環境を整えるとか、間接的なことなら神様も許してくれるかもしれないじゃない？」

暁美は霊夢の口元からゆっくりと指を離して言った。

まずはやってみよう、それでダメならまた考えればいい。——霊

夢には、そういうった意味合いも込められているのだと感じられた。

そもそも確証があって始めたことではない。

ただ、何もしないまま諦めてしまうことができなかったから。このまま終わってしまうことが、我慢ならなかったから。

「そう、だね」

守ってもらってばかりだった幼少期あのころとは違う。力がなく、義姉を失いかけたあの頃とは違う。

やれることは全部やろう。全てを出し切った上でダメだったのなら、少なくとも今より後悔はしていないはずだ。

周囲が幻想的に呼応する空間。

足場となる床一面には大規模な陣が広がり、淡く瞬きを繰り返している。

「……………」

彼女がこの空間へ最後に訪れたのは、半季前の天使軍進攻以来か。

陣の中心に腰を下ろし、その華奢な指先で幻想郷が刻んできた過去数百年分の記憶を辿っていた。

(……………少々、先走り過ぎたかしらね)

紫は一人溜息を漏らし、ゆっくりと立ち上がると、らしくないとばかりに目を伏せた。

友人から助言を浮け、思わず駆け出したのはつい今し方だ。そんな短時間で数百年分の記憶を読み解くことなどできるわけがない。

それに身体が動くようになったとはいえ、病み上がりであることに変わりはない。

この空間で缶詰で作業をするにしても、体調が優れないのであれば無理をするべきではないのだろう。これではまた従者に心配をかけてしまう。

「……………」

先行する気持ち鎮め、目の前の空間にスキマを展開する。そして入り口に足をかけ、名残惜しそうにこの空間を後にした。

「いれどもっ」

空に昇った太陽が西へ沈む頃、霊夢は寒空の下にいた。その手には手拭いとはたきが握られており、足元には水を汲んだ桶と竹箒。

彼女が今の今までやっていたのは、博麗神社本殿の掃除だった。

特に計画していたわけでもなく、ふと思いつき立ち、気ままに始めたのだが、思いのほか時間がかかってしまった。

「うう……………」

僅かに汗ばんだ身体を、寒風が突き刺すように抜けていく。

つい今し方橙色に輝いていた日の光も、僅かな余韻が残るばかり。既に、周囲は儂い青色へと染まりつつあった。

「あら、精が出るわね—— 珍しく」

せかせかと道具を片付けにかかる霊夢の背中へ、不意に艶やかな声がかかった。

「一言多いわよ、紫」

背中を向けたまま応じた霊夢の口調は、やや尖ったものだった。

「どうかしたの？いきなり掃除だなんて」

そんなことお構いなしに会話を続ける紫に対し、霊夢は小さく溜息を吐いて振り返る。

「……………別に、ただなんとなくよ」

腕が辛くなったのか、霊夢は一度抱えた水桶を足下に降ろすと、ばつが悪そうに顔を伏せて言った。

別に悪いことをしたわけではないが、笑みを浮かべた紫と目が合い、途端に気恥ずかしくなってしまったのだった。

「そつちこそ何か用事？」

紫は質問に対し、いいえ、と一言。

次に差していた日傘を畳むと、密かに目を細めた。

「ただなんとなく、よ」

「……何よそれ」

空を仰ぎ、寂しげに呟いた紫に釣られて、霊夢の視線も徐に上がる。時刻は夕焼けの名残りが消え、藍色の空が広がる禍時に差し掛かっていた。

雲一つない澄んだ世界を視界いっぱいにつえ、二人から一瞬言葉が失われる。

暫しの沈黙の後、口を開いたのは霊夢だった。

「——昔、」

「？」

思わず視線を戻した紫が見つめる中、霊夢は空を見上げたまま続ける。

「昔隼斗に言われたことがあったの。博麗神社には何の神様を祀ってるんだらうって」

独り言のように始まったその呟きを、紫は黙って聞いた。

「あつ、そう言えば知らないやって思ったのと同時に、私よりずっと長く生きてる隼斗ですら見たことない神様って一体どんな神様なんだらうって当時は思ってたわ」

ゆつくりと、しかし確実に暗く変化していく空は、徐々に二人の姿を不鮮明に塗り替えていく。

「そんな記憶、長らく忘れていたけど……、今朝見た夢でまた思い出してね。それで……その、」

途端に齒切れが悪くなった霊夢を、紫は茶化すでもなくただじつと見つめていた。まるで我が子が隠し事を打ち明けてくれるのを、温かく見守る母親のように。

「……こんなこと、柄じゃない——　って言ったら可笑しいか、一応巫女だし。……とにかく、それだったらその神様を頼ってやろうって思ったのよ。どんな御利益があるかもわからない神様だけど……、すこしでも可能性があるならって」

「それで、本殿を？」

「まあ、アレよ。本殿が汚いままじゃ参拝してくれるものもしてくれなくなっちゃうからね」

紫は目を見開いた。

今の今まで妖怪退治以外、巫女らしい言動や考えをあまり持ち合わせていなかった少女の口から、その兆しが垣間見えたからだ。

「明日は雨かしら」

「一言多いつての」

「ならこんな時じゃなくても普段からそうしてなさい」

うぐつ、と見えないダメージを受けた霊夢には、反論の余地はなかった。

そんな彼女の反応に、紫は頬を緩めると、嬉しそうに歩み寄った。

「な、何よ……？」

警戒気味に後退った霊夢の頬に、優しく、華奢な手のひらが添えられる。

「頑張りなさい」

我が子に対する様な温かな言葉と共に、ずっとその手が離れる。
そして、目を丸くした少女を満足そうに眺めた後、背後の空間にスキマを展開させた。

「貴女の勘はよく当たるものね。——その『もしかしたら』に期待するわ」

その言葉に、普段彼女が醸し出している胡散臭さはなく、不思議とそれが本心からなのだと感じ取れた。

故に、霊夢の返答はいつものツンとしたものではなく……、

「任せてよ」

視線を落とし、少し照れ臭そうではあつたけれど。

「うん、頼むわね」

最後に紫は満面の笑みを見せ、小さく手を振ってスキマの中へと消えていった。

182話 おいでよ 博麗神社

吹き抜ける風から身を強張らせる程の鋭さが失せたのは、つい最近のことだ。

冬季には力が失われていた日の光も蘇り、道行く人々も防寒着の類を手放しつつある、そんな季節。

人里で寺子屋の教師を務める上白沢 慧音も、そんな心地よい気候を肌で感じながら、今日も今日とて寺子屋の往路に就いていた。

長年教師として接してきた彼女にとって、道行く人々の殆どが顔馴染みであり、澆刺はっらっと商売に勤しむ若人から、杖を突く老人に至るまでが彼女の元生徒である。

「おや、慧音先生。今日もご苦勞様です」

そんな中声をかけてきたのは、一組の老夫婦だ。

すっかり弱り切った夫の足腰を、傍の妻が補助しつつ、やつとこさ歩いてきたようだった。

「やあ。相変わらず二人共仲睦まじいな」

元教え子の挨拶に、慧音は爽やかに応じた。

「今日も参拝か？」

「ええ、もう日課のようなものです」

老婦が気品ある笑顔で答え、「ね？」と傍の夫を見遣った。

すると老夫は皺だらけの顔でくしゃりと笑い、楽しそうに大通りの先を指差した。

「ほれ、最近神社への近道ゆーのが出来ましたでしょう？博麗の巫女さんがこう不思議な力で神社まで送ってくれる。いやー楽なもんで

すわ！それまでは妖怪やら野盗やらで安心して歩けないどころか、そもそも老いぼれにはちと遠すぎた」

「もちろん知っているさ。……と言うかこの話もう三回目だぞ？」

老夫は「そうでしたか？」と首をかしげると、声高らかに笑い飛ばした。

足腰が弱っても声だけは出るようで、それはすれ違う人々が思わず一瞥する程の音量だ。

慧音も慧音で、元気があつてよろしい！と言わんばかりにうんうんと頷いている。

「これも博麗の巫女の力だつてんで、儂も長いこと……、まあ先生程じゃないにしろ、長いこと生きてますが、あんなことができるんですなー」

ぴくりと慧音の眉が動いたのと、老婦が夫の白髪頭を叩いたのはほぼ同時。

しかし、当の本人は気に止めた様子はなく、相変わらず愉快そうに大口開けて笑っていた。

雑談もそこそこに、慧音は思い出したように大通りの先を見て言った。

「長々と話し込んでしまったが時間は大丈夫か？確かあの『道』は半時に一回しか開かないだろう？」

「あつ、ほれアンタ。もうすぐ次の『道』が開く頃じゃないかしら」

「おおつ、そうだったそうだった」

老夫は懐から年季の入った懐中時計を取り出すと、緩慢な動作でお辞儀をして、夫婦そろってその場を後にした。

「気を付けてな」

二人を見送った慧音は、小さく息を吐くと、博麗神社のある方角を見遣ると、独り言ちる。

(……里と神社の間を瞬時に移動させる『道』と、安全の保障された行路か。考えたものだ)

踵を返し、今日も今日とて彼女は寺子屋へと進んでいく。

幻想郷というものが誕生して、一体どれほどの月日が経ち、何度季節が変わってきたのか、それを一々数えている者など、如何に勤勉な天狗と言えどいないだろう。

何せ彼らは自分達の領土と身内のこと以外には基本的に関心が無い。幻想郷内でも珍しい、高度な技術を有する彼らには、山の外との交流がなくとも十分な生活をおくることのできる力があるのだ。

例外として、彼らが他所の事情にも関心を示すものがあるとすれば、それは各々が自主出版している新聞のネタとして使える、ゴシツプくらいである。

何か事が起きれば、種族特有の俊敏性を活かしてすぐさま現場に駆け付ける様は、正に風の如しだ。

とにかく、年がら年中忙しなく動き回っているのは、幻想郷中どこを探してもこの種族だけだろう。

「ん、異常なしつと」

声に出して一人確認をとったのは、まだ若き白狼天狗の少年だ。

ただ一概に子供と言っても彼の場合は歴とした天狗族の戦士であり、その体軀に不釣り合いながらも、真新しい刀を帯びている。

そんな彼が今し方巡察していたのは、自分達の住処である妖怪の山ではない。

眼下にはそれなりに整地された林道。

ふと視線を左右に向ければ、人間の住まう里と、その反対には博麗の鳥居が見えた。

彼が今見回っているのは、人里と博麗神社を繋ぐ一つの道だった。

「にしても何でオイラが……」

彼は碌に説明のないまま管轄外の見回りを命じられており、つまりないとばかりに息を吐いた。

すると少し離れたところから話し声が聞こえてくる。

「おっと不味い」

白狼天狗の少年が慌てて木の陰に姿を隠すと、程なくして人間の若い男女が林道を歩いてきた。

二人は何やら楽しそうに話しながら、周囲の風景を楽しんでいるようだ。

「ちえ、こっちは見つからないように巡警してるってのに。これじゃあまるで斥候だよ」

小声でぶつくさ垂れつつも、二人組が立ち去るまで待機していた少年へ、どこからともなく声がかかった。

「いらら、仮にも上司の前で不満を垂れるのは関心せんない」
「……へっへっ」

少年は間の抜けた声を上げ、周囲を見渡すが、声の主は影も形もない。

「あー、今は見えないんだったか。兎に角、お互い今は仕事なんだ。お前はさっさと見回りに戻れ。さもないと鬼だけど可憐な萃香様も怒っちやうぞ?」

「お、鬼!?!萃香……様……って!?!」

「ほら、早く行った行ったあ!!」

「は、はいいいい!!」

白狼天狗の少年は文字通り飛び上がり、慌ただしく林道の向こうへ駆けていった。

「やれやれ、奴の上司は私のことを教えてないのかね、まったく」

何も無い空間で声だけが発せられた。

その正体は、肉眼では捉えられないほど微粒化した伊吹 萃香だ。

——より正確にはその分身体。彼女は己の密度を最大まで下げることにより、霧状に変化する事ができる。

こうして自ら散ってこの林道に広がり、外側へ妖力を放つことによつて、力の弱い妖怪を遠ざけているのだ。

(まっ、駄賃^酒貰つてる身だし文句はない、か)

にししと笑い、萃香は意識だけを先程白狼天狗が飛び立っていった方角へ向けた。

(……にしても天狗^{あいつら}達は何貰ったんだろ)

小首(無いが)を傾げて思案する萃香。

如何せん彼女も暇なのだ。

「天狗だし……記事のネタかな?」

などと適当に結論付け、次にやってきた気の弱そうな父親とその子供を見やると、暇潰しとばかりに悪戯を仕掛けた。

「ばあ!!!」

—— この後、人里では少しの間林道に出るお化けの噂が流れ、利用者が減ったとかなんとか。

博麗神社にて寛いでいた本体には当分の間タダ働きが課せられたのは言うまでも無い。

183話 一新！博麗神社

人里の門口には今日も大勢の参拝客が集まっていた。

列の先頭に立てられている立て札には、『こちらからお並びください』との表記があり、そこから並ぶ里の人々が、順に目の前の広場へと進んでいく。

そうして一定数の人数が集まった時点で、列を分断するように暁美は手の平を差し込んだ。

「はい、ここまで。次はまた半時後に開きますからお待ちくださいーい」

言いつつ、暁美は慣れた動作で参拝客をまとめると、懐から博麗の印が押されている札を数枚取り出して空中へ放った。

すると札は光を発し、円を描くように展開され、その空間に一つの穴を形成する。

里の者達には知る由もないが、それは幻想郷の賢者が使用する『スキマ』に酷似していた。

「どうぞお進みください」

暁美に促され、初めての者は恐る恐る、慣れた者は平然とその穴を潜っていくと、現れたのは大きな鳥居だった。

目の前には参道が続き、付近には手水舎が見える。そしてその奥に建つ本殿。

「おおっ……！」

里の者達から、感嘆の声が漏れる。

本当に、一瞬にして人里から博麗神社へと移動したのだと、初見の者は特に目を丸くした。

振り返れば、先程通ってきた不可思議な穴は最後尾で入ってきた巫女によって閉じられてしまった。

帰りはどうするのだろうか？また半時後か？などと思っていると、「お帰りはあちらです」と巫女が笑顔で指した。

その方向を見ると、今し方潜った穴と同様の穴がもう一つ展開されており、すぐ横の立て札には『お帰りは此方』と表記してある。

後々巫女に聞いたところ、あの穴は常時開いており、人里の門口に通じているのだとか。

潜れば一瞬で帰ることができるとは、逆行することはできないと言

う。つまり『入口』にのみ制限をかけ、一方通行の『出口』を開放すること、境内が混み合わぬよう調整しているのだ。

勿論、徒歩で直接参拝に訪れた人々の為の余地も考慮されている。

さて、手水舎で身を清め、本殿の方へ視線を転じれば、そこには人里の者たちも馴染みのある現・博麗の巫女が、爽やかな笑顔でお出迎えだ。

その傍らには、博麗の巫女と同一年くらいで、巫女服（相変わらず脇の開いた）に身を包んだ金髪の少女が、やや顔を赤らめながら並んでいる。

「な、なあ霊夢。やっぱりこの格好恥ずかしいんだが」

「いいから笑顔！」

耳打ちで囁かれた小さな抗議を、器用にも参拝客へ笑顔を向けたまま一蹴した霊夢は、「うう…」と更に顔を赤くする魔理沙へ、諭すように告げる。

「大丈夫よ、これは博麗神社の歴とした巫女服なんだから！どこも可笑しいところなんてないわ」

「そうやってさも当たり前のように言うものだから……」

「……そ、そう言うもん、か?」

魔理沙は頭の中で、言われてみれば守矢のところでも似たような格好をしている奴がいたな—と思い至り、現状の羞恥もあつてか、『巫女服とはこういうものなのだろうか?』と安易に結論付けてしまっていた。

「そう言うもんよ!—— はーい、お賽せ:げふんっげふんっ、御参拝はこちらです。順番に有り金を……ごほんっ、うおっほん!順番にお並びくださいー!」

「…………お前ホントに巫女だよな?」

必死に己の欲望を押し殺す赤白巫女に対し、今さつき思い至った自身の考えに早速不信感を抱いた魔理沙であった。

時刻は昼下がり。

ぽかぽかと陽気な気候が続く今日この頃。

こんな日は庭にでも出て散歩するもよし、近隣に広がる湖を眺めながらティータイムをとるもよし。時たま侵入してくる珍客が、門番によって迎撃される様を、優雅に観賞するのも良い。

但し、本来夜行性である彼女ら種族にとっては、今の時間帯は他の

種族で言うところの夜であり、彼らが寝静まる時間帯こそが、真正正銘の昼下がりであるのだが。

「んー、暇ね」

その小さな体躯で背伸びをし、欠伸を堪えながら呟いたレミリアは、卓上に置かれている紅茶の注がれたティーカップへ角砂糖を一つ二つと落としていく。

最近夜更かし気味の……、と言うより昼夜逆転の生活に入りつつある彼女を気に掛けてか、傍に立つメイド長は、静かに角砂糖の入った器を遠ざけた。

「お嬢様、最近不摂生気味では？」

「……そう？」

頬杖について応じる主人へ、咲夜はやや遠慮がちに首を縦に振った。

砂糖の入れ過ぎだけが指摘の対象ではないことを理解してか、レミリアは日傘によって日光の遮られた空を見上げて言う。

「だってねー……、夜に起きてても特に何かあるわけでもないし。昼間に起きてた方がイベントは起こりそうじゃない？」

「イベント……、とは？」

「ほら、こここのところめつきり平和になっちゃったじゃない？異変らしい異変の話も偶に聞く程度だし、夜になんか起きてたらただでさえ少ない退屈イベント凌ぎに巡り会えないのよ」

それって吸血鬼としてどうなの……？、などと言うツツコミを、咲夜は心の片隅へと追いやった。

「……左様ですか」

「むっ、さてはお前吸血鬼らしくないか思っただろう……！」

「そんなことは、ございま、せん」

「おいこら目を背けるな」

まったく、とレミリアは頬杖をついたまま、不意に自分の頭上を高速で横切った影を捉えた。

その影は瞬く間に遠方へ消え、気が付けば卓上には一部の新聞が置かれていた。

「……」

レミリアはいつの間にかナイフを抜いて戦闘態勢に入っていた従者を宥めてから、怪訝な表情のままその一面を覗いた。

「……………」
ふっ

途端に得意気な笑みを浮かべた主人を怪訝に思いながらも、どうしたのかと尋ねようとした咲夜へ、レミリアは黙って新聞の一面を突き出した。

『一新！博麗神社』

そんな見出しを筆頭に、博麗神社に関する事項が大々的に取り上げられていた。

「これは……」

「ほら見なさい咲夜。昼間に起きてて正解だったわね！」

その小さな胸を張り、自信満々にしたり顔を輝かせたレミリアは、こほんと咳払いしつつ従者へと命じる。

「フラン達をここへ。準備ができ次第博麗神社へ向かうわ」
「かしこまりました、お嬢様」

咲夜は迅速に命令を聞き入れ、一瞬で姿を消した。

彼女はこの館のメイド長でありながら、レミリアが全幅の信頼を置く者の一人。

一度命令とあらば、そこに疑う余地もなく、即座に主人の命令を実行する。

その場に一人残されたレミリアは、改めて新聞の一面に視線を落とした。

(新聞屋め、随分粋な計らいをするじゃないか)

記事には博麗神社への参拝に関する知らせや、神社近辺に湧き出たる温泉への案内などが記されていた。

しかし、彼女の目を引いたのは最後の一文だった。

『——幻想郷を守りし英雄の帰還を望む者達へ』

184話 一つの切っ掛けで

足下に展開された陣が幻想的に瞬きを繰り返す異空間で、紫は額に汗を浮かべて膝をついていた。

「……………」

瞳を閉じ、陣をなぞるように指先を走らせ、まるで巨大な繊維を一本一本ほぐすようにして、その記憶を辿っていく。

これまで幻想郷が見てきた、人間にとっては途方もなく、妖怪にとってははつい最近のような時の流れを。

とは言え、実際に体感する時間が短くとも、それを記録として細部まで辿るのであれば、これまた根気の要る作業だ。

ざっと見て百と数十年分。

凡そ二百年近い歴史の資料の中から、たった一ページ、たった一文の、存在するかもわからない記録を探し出さなければならぬ。

(どこなの……………！)

もしかしたら流れ着いているかも知れない。

元の世界線に。

幻想郷誕生以降の時間軸に。

だってそうだ。彼はいつだって何食わぬ顔で帰ってきたじゃないか。

いつだって困難を打ち破ってきた。

起こるかもしれない奇跡を現実にしてきた彼なら、
『幻想入り』していたっておかしくないじゃないか。

そうして始めた作業は、疾うに一月ばかりが経過していた。

思い立ったのはまだ寒風が吹き荒ぶ季節だったか。

体調が戻ったらやろう。……本調子になってから。

—— 結局、現在も万全とは言い難かった。

病気や怪我をして療養していたのとは違う。

自身の生命に関わるギリギリのラインを削りに削って力を酷使したのだ。

彼女の幻想郷の長たる強大な力が満たされるには、まだまだ時間がかかる。

そうした現状がもどかしく、居ても立っても居られなくなり、ついに調査に乗り出したのが一月前だ。

作業は順調に進んだ。

彼女の頭脳をフル稼働させ、長い時には半日以上この空間に籠り、一つの漏れもないよう繰り返し繰り返し読み解いていく。

そうして、今日。

辿ってきた歴史は、現代に追い付きつつあった。

(お願い……出てきて……っ!!)

終わりが近づくごとに湧き上がる焦燥が、紫の指先を震わせる。

一步、また一步と近づくたびに、言いようのない感情に押し潰されそうになる。

「……………お願いっ」

やがて——。

時刻は夕暮れ。

日中あれ程ごった返していた博麗神社も、この時間になってみれば静かなものだ。

「お疲れ様、魔理沙」

霊夢はそう言うと、人里へと続く『道』の周囲に貼り付けられていた護符を、丁寧に剥がした。

「便利になもんだよな、それ」

瞬く間に消失した『道』を尻目に、魔理沙は物欲しそうな目で数枚の束ねられた護符を見つめた。

「前にも言ったけど、これを扱えるのは……」

「博麗の巫女限定。……だろ？」

「そゆこと」

全ての護符を回収し、表に出していた資材を一纏めに集積した霊夢は、雨風を凌ぐ為の風呂敷でもって包んだ。

そうして漸く彼女も安堵したように息を吐く。

「今日はなんだか参拝客が多かったわね。手伝ってくれてありがとう、お陰で助かったわ」

「なーに、お安い御用さー！なんなら毎日……」

手伝ってやる、と言いかけたところで、あの脇出し巫女服のことを思い出した魔理沙は一瞬固まり……、

「……ま、まあ時々なら手伝ってもいいかな」

「はははっ、と気恥ずかしそうに笑った。
そんな友人へ、霊夢は微笑ましく問いかける。

「ご飯食べてく？もう少ししたら暁美姉さんも帰ってくると思うし」
「そうだなー……」

魔理沙は博麗神社から伸びる参拝道の方角を見やりながら短く思案し、

「じゃあお言葉に甘えちゃおうかな」

殆ど即決で返事をした。

本日最後の参拝客を里まで送り届けた暁美は、里からの行路で異常がないかを、見回りながら帰ってくる。

なので夕飯前に寛ぐ時間くらいあるだろう。何より、終業後の余韻に浸っている内に飯が出てくるなら願ったり叶ったりだ。

「あら？今日の参拝はお終い？」

そんな中、不意に投げかけられた、恐らく新たな参拝客と思われる者の声。

気分は夕飯モードに突入していた魔理沙は、露骨に嫌な顔をつくつて振り返った。

「……あん？」

そして振り返った先に立つ参拝者を見るや、その表情を不機嫌から怪訝なものへと変貌させた。……とは言っても、相変わらず眉間に皺が寄ってはいるが。

「ここから、折角参拝に来てやったのにそんな目をする奴があるか」

腰に手を当て、溜息交じりに一步前に出てきたのは、見た目幼い紅魔の吸血鬼だった。

その後方では、銀髪のメイド、華人服姿の門番、頭から足先までが紫色の魔女、そして天真爛漫に周囲を見渡している金髪の吸血鬼が、それぞれ軽い挨拶を済ませていく。

「参拝い？一体全体どういう風の吹き回しだよ？」

尚も悪態付く魔理沙を宥めるようにして、大方の見当をつけていた霊夢はその手に持った新聞記事を差し出す。

「これ、最後の方読んでみなさい」

「……………んー？博麗神社の宣伝記事じゃないか。これがなんだって……………、——！！」

その一文を目にし、魔理沙は目を見開いた。

「貴女、大図書館の本は勝手に読む癖に新聞は読んでないの？」

そんな彼女に対し、パチュリーは呆れ気味に言い放った。

……………うっ、と普段の行いからくる後ろめたさが出てきたのか、言い淀む魔理沙。

尤も、この記事は今朝配られたものであり、時期同じくして神社の手伝いをしていた彼女が記事に目を通す暇がなかったのも事実なのだ。

そんな中話題を変えるようにして、空気を読む門番こと美鈴が口を挟む。

「まあでもこの時間帯に来たのは正解だったかもしれないね。昼間

に来てたら里の人間達がパニックになってたでしようし」

「?……お昼だと駄目なの?」

「妹様、人間と言うのは自分達とは異なる存在を恐れ、徒党を組んで拒絶する愚かな生き物なのですよ」

フランの質問に人間を蔑む形で答えたのは、同じく人間の咲夜である。

「こつちとしてはもう少し明るい時期に来てくれた方がありがたいんだけどね」

霊夢も昼間とは違い、相手が見知った顔だからか、魔理沙程ではないにしろ、無遠慮気味な態度になりつつあった。

対して、レミリアは至極当然だと言わんばかりに言い放つ。

「あら、夜は妖怪の時間でしょ?」

——そして、まるでその言葉を待っていたかのように彼女らは集った。

「!!」

「ほらね」

レミリアが得意げに指し示すように、博麗神社に近付く複数の気配。

気質はその殆どが『妖』のもの。かと言って悪意の類は感じられない。

——当然だ。

皆、見知った顔であり、それぞれが交流のある者たちばかりだった

のだから。

そして……、後に博麗神社に帰宅した暁美は思わずこう言ったと言
う。

『帰った先に異常があったか』つと。

185話 『彼』の帰還を信じる者達

それは『百鬼夜行』と言うには些かこぢんまりとした集団だった。彼女らが危なげなく進んでくるのは、すっかり日も落ち、視界の悪い筈の博麗神社へと続く参道だ。

参道に等間隔で配置された灯笼に照らされ、その姿が垣間見える。その誰もが見知った顔ぶれで、それぞれが幻想郷の各地域を治める者達で、——皆、『彼』の友人達だ。

ある者は戦いを通じて、またある者は異変を経て。

『彼』のお節介に、悪巫山戯に……、そしてその人柄に救われた者達。

「よお、来たぞ！博麗の……、えーと」

その一団の先頭に行くものが、神社入口に立つ霊夢等の姿を見るや、弾けるような声でそう言うと、思案するように指先で頭を掻いた。

一際目立つ長身で一本角の鬼。地底に住まう鬼の頭目、星熊 勇儀だ。

「ここから飲み過ぎじゃないか？霊夢だよ、れ・い・む」

その隣で脇腹を小突いた、小さな体躯とは不釣り合いな二本の角を生やした鬼の少女。

何故だか足取りはふらふらと覚束ない。

「そうだった、そうだった。つてか萃香、酒のことに関しちやお前さんに言われたかないねえ」

豪快に笑い返した勇儀の手には、これまた大きな酒瓶が握られていた。

「どっちもどっちでしょ。まったく妬ましい」
「だね」

呆れ顔で割って入ったのは、橋姫こと水橋 パルスイ と、土蜘蛛の少女、黒谷 ヤマメだ。

その後方では、対照的に澄まし顔で佇む薄紫髪の少女と、彼女に付き従いながらも、周囲の景色を興味深そうに眺める地獄鴉と火車の少女の姿があった。

「霊夢、知り合いか？あの騒々しい奴ら」

「あーうん……、一応」

地底組とは面識のなかった魔理沙がやや困惑気味に尋ね、霊夢もやや反応に困りながら応じた。

そもそも地底で暮らす彼女等を地上で見ること自体初めてなのだ。

「入っても？」

鳥居の目の前まで来た地霊殿の主、古明地 さとりは、微笑むでもなく淡々と尋ねた。

「暴れなきやね」

「特に」、と既に出来上がっている鬼二匹を顎で指した霊夢は、どうぞと脇に寄って道を開けた。

「心得ました」

そう言って軽く会釈したさとりは、後方で待機していた従者二人と付き添いの少女二人に指でジェスチャーを送った。

内容はさとり妖怪のように心を読まずともわかる。「そいつ等を見

張っておけ」だ。

了解と言わんばかりに動き出した彼女らが、千鳥足の二人組を境内へ引つ張っていく様を見送った霊夢へ、不意に真横から声がかかる。

「はじめまして、になるかのう？博麗の巫女殿」

「！、貴女確か……」

挨拶してきたのは、妖怪の山の最大勢力である天狗族を統括する天魔だった。

「陽高 彩芽じゃ。いつも内の者が世話になっておるそうで。特に毎度の記事のネタ提供に関しては協力感謝しておるよ」

「……………提供？協力う？」

じろり、と彩芽の後方へ睨みを効かせると、天狗特有の俊敏性でもって視線を外した鴉天狗が、態とらしく口笛を吹いていた。

「おいお前だ、そのゴシップ新聞記者」

「ご、ゴシップとは心外ですね！由緒正しき『文々。新聞』は真実のみを記事にしているんですよ……………ただ偶々、偶然、通りがかりに霊夢さんが仕事サボってるところを何回か記事にしちゃったことを根に持つてるなら……………」

「プライバシーって知ってる？」

「うっ……」

笑顔とは裏腹に怒のこもった声色で迫られれば、流石の鴉天狗と言えどたじたじだ。

その横では珍しく弱腰の先輩の姿に唾然とする白狼天狗と、参拜に来たというのに大きな背負袋を身に付けた河童の少女が、何とも言えない表情で立ち尽くしていた。

まあまあと宥めるように魔理沙が霊夢の肩を叩いたのと、彩芽の咳

払いが重なる。

「ま、まあともかく今回我々は純粹に参拝に来ただけで取材をする気は一切ない。今回はそれで許してもらえんかの」

「……………許すも何も、参拝に来てくれた人を追い返すような罰当たりなことはいわよ」

霊夢は「それに」と付け加え、改めて文の方を見遣る。

「そっちの協力で博麗神社も大分助かってるもの」

「ふふん、でしょう？」

途端に息を吹き返し、得意げに返事をした先輩天狗の裾を、犬走椀が強めに引いた。

そして「では後ほど」と言葉を残し、妖怪の山組も境内へ。

「別に順番待つてなくてもスツと入ってこればいいのに」

霊夢はそう言つて目の前で律儀に待つていた緑髪の少女へ視線を移した。

「いえいえ、そこは守矢の神職としてちゃんとしなければ！」

澆刺はつらつとそう返した守矢神社の風祝、東風谷 早苗は、改めて霊夢へと詰め寄った。

「なんだか夜にこれだけ知り合いが集まるとワクワクしますね！」

「知り合いって言つても殆ど妖怪だけだね」

まるで童女のように瞳を輝かせる早苗と、冷静な態度を一貫する霊夢。

対照的な二人の巫女を見比べた魔理沙は、「同じ役職の十代でこうも違うものか」と内心ツツコミを入れつつ、境内に一瞥をくれた。

「それよりいいのか？置いてかれてるぞ？」

「はいっ？」

言葉の意味がわからず首を傾げる早苗へ、魔理沙が、親指で境内を指し、合わせるように霊夢が告げる。

「あんたのこの神様、とっくに入ってたわよ？」

「あれええええええええええっ!？」

今度は素っ頓狂な声を上げ、慌てた様子で境内へ駆けて行く早苗だが、鳥居をくぐる手前ではちゃんと立ち止まって一礼を欠かさなかった。

「おっ、流石巫女。あれだけ慌てても参拝の作法は守るんだな」

「良い意味でも悪い意味でも生真面目なんですよ」

「って言うか仮にも神様が他の神社へ参拝ってどうなんだ？」

「気にしないでいいでしょ。妖怪でも神様でも、参拝してくれるなら大歓迎よ」

「ついでにお賽銭も入るしな」

「ここから、そのように不純な動機をもってはいけません」

二人がその優しく諭すような声に振り返ると、命蓮寺の住職、聖白蓮が凜として佇んでいた。

その後方には、見覚えのある命蓮寺もとい妖怪寺の住人達がひよっこりと顔を出している。

「良いですか？神道と仏教、異なる宗教なれど――」

気がつけば目の前まで詰め寄り、二人の肩にそっと手を置いた（脱出不能）白蓮による説法が始まろうとしていた。

「わあー！聖!？」

これは長くなる！と悟った命蓮寺の面々が、一斉に白蓮の周囲に集まった。

「どうしたのです？今からこのお二方に神職とは何かを……」

「まあまあまあ！それは参拝の後でもいいんじゃないかな？ほら、後ろで待ってる人達もいるわけだし」

「そうですか？では後ほど……」

ほほほつと淑やかにその場を後にした白蓮の後に続き、どこか慈悲の込められた笑みの命蓮寺の面々とすれ違う二人。

「……………ちよつと、今のは私じゃなくて魔理沙でしょ」

「……………私は霊夢の心を読んだだけだぜ」

「あんたいつからさとり妖怪になったのよ」

「えーと、そろそろいいかな」

そうして項垂れる二人へ、やや遠慮がちに声がかかった。

そんな立て続けに現れる、『律儀にも順番を守る参拝者』に、いい加減げんなりとしてきた霊夢だったが、その顔を見るや思わず目を見開いた。

「やつ、こうして面と向かって話すのも初めてだったからさ」

「確か、隼斗の弟子の……」

「藤原 妹紅。こう見えて元人間で、師匠には幻想郷が出来る前からお世話になってるんだ」

「…」

少々照れながらそう言った妹紅を、霊夢はなんとも不思議そうに見つめた。

隼斗と霊夢は直接的な師弟関係ではないにしろ、代々博麗に伝わる霊術や体術の根元は、他でもない彼から初代博麗の巫女へと伝授されたもの。そこに八雲 紫による結界の制御法などが加わったものが、今の博麗の巫女の力となる。

つまり妹紅も霊夢も、元となる師は同じく彼なのだ。

「なら『姉弟子』、ってことになるのかしら？」

「へっ？……あーどうだろう。でもそう考えると不思議な感じかも」

「そうね。私には既に先代の姉がいるけど、よくよく考えたら貴女ももう一人のお姉さんってことになるのね」

「ちよ、ちよつとやめてよお姉ちゃんだなんて」

「照れるじゃないか」と言いかけた妹紅へ、挟み込むように、

「いやいや！お姉『ちゃん』とは言っていない」

と、霊夢もまた焦りながら早口でツツコミを入れる。

そして互いに固まること数秒。

「ぶっ」

「ははっ」

両者、同じタイミングで吹き出した。

「まつ、今日はゆつくり参拝して行ってよ、お姉ちゃん」
「だからそれやめてってば！」

数百年の差はあれど、まるで姉妹のような、はたまた友人のような
気安い掛け合い。

その様子を一步引いたところで見守るは、寺子屋の教師こと上白沢
慧音、と魔理沙。

「私達、完全に蚊帳の外だな」

「私あんな笑顔の霊夢久しぶりに見たぜ」

微笑ましくも、どこか虚しさを感じる二人であった。

妹紅と慧音が境内へ入って行くのを見送った二人は、漸く一息つ
たと言わんばかりに息を吐く。

「しっかし新聞で知らされたとはいえよく同じタイミングで皆集まっ
たよな」

「まあ新聞が配られたのは今朝だし、时期的には可笑しくはないけど
ね」

「これも博麗の徳ってやつ？」

「って言うよりも、これは——」

途端、霊夢は再び階段下に現れた気配を感じ、口を噤む。

「一足遅れたかな？」

声の主は、今夜の面子の中では初の男の声だ。

しかし、二人がよく知る声。

「香霖！」

魔理沙が思わずそう呼んだのは、魔法の森に店を構える雑貨屋の店主、森近 霖之助だ。

「久しぶりね、特に霊夢」

その隣には同じく魔法の森の住人である通称『七色の人形使い』とアリス・マーガトロイドが立ち並んでいた。

「なんだなんだー、二人仲良く手でも繋いで来たのか？」

その光景にどこか不機嫌そうな調子で尋ねた魔理沙へ、霖之助は察したように微笑を浮かべる。

「ははっ、そう言うのではないよ。偶々さ。それに、二人じゃない」

霖之助はそう言つて自身の後方へ視線を移した。

霊夢達側からは暗所になっていて見えなかったが、確かにもう一人いる。

「あっ」

二人の声が揃った。

「いきげんよう」

太陽の畑ただ一人の妖怪。

四季のフラワーマスター、風見 幽香。

「ここに来るのは初めてだったから彼らにエスコートを頼んだの」

幽香は霖之助等の隣に並ぶと、微笑みながら二人を見上げた。

「道すがら偶然ね。君たち二人とも仲がいいんだろ？」

「ね？」

答えは『はい』か『YES』だった。

一体どうやったたらそのにこやかな表情からそれ程の圧力が出せるのか。

少なくとも真横にいる霖之助が気づいていないところを見ると、指向性までコントロール出来るらしい。

「ソウデスネ」

故に二人は息を揃えるでもなく同時に答えた。

(私達何かあいつに悪いことしたっけ?)

(いやいや、心当たりはない)

(って言うか何!?なんであいつさつきから私達のこと威圧してくんの!?)

(何あれ!?覇○色の覇気!?)

「二人ともどうかしたの？」

アリスが怪訝そうに尋ねるが、現在進行形で圧力を出し続けている花妖怪を前に、「なんでもない」としか言えなかった。

「ふふっ、ごめんなさいね。ちょーと意地悪してみただけ。他意はな

いのよ？」

すれ違う最中、幽香は二人の耳元でそう囁いた。既に先程までの圧力は消失しており、二人の間にはひたすら謎だけが残る形にはなったが。

(八つ当たりなんて、少し大人気なかったかしらね)

境内に入った幽香は、『彼』のことを思い浮かべながらそんなことを思った。

そして予てから決意していることを自らに反復させる。

(戻ってきたら引つ叩いてあげないと。……勿論全力で)

目の前に続く参道の先には、既に何人もの、恐らく『彼』の友人が集まっている。

皆、『彼』の帰りを願う者達。

彼女もまた、その一員となるべく歩みを進めた。

186話 前を向く者達

幻想郷と外の世界の狭間に存在する屋敷。

この主人である紫は、重い足取りと力無く項垂れた手を玄関引戸にかけた。

カラカラと戸車が滑る音が鳴り、それを聞きつけた従者が即座に駆け付ける。

「ただいま藍。今日は橙も一緒なのね」

「はい。お疲れ様でした……、紫様」

隣で同じくして頭を垂れる妖獣の少女と共に出迎えた藍は、一見いつも通りに振舞っている主人の異変に逸早く気付いた。

その瞬間、真意を悟る。

しかし焦る気持ちを抑えながらにこやかに告げた。

「まずはお休みください。私はお茶を淹れてきますので」

そう言つて自身の式神へとそつと目配せを交わすと、少女に手引かれて居間へと入つていく主人の背中を見送つた。

（私が結果を急いでは駄目だ……っ！）

台所へと向かう途中で、藍は己に言い聞かせるように心の内で繰り返す。

（……仕方がない。仕方がないんだ。紫様も仰っていたじゃないか。確率はかなり低いと……！）

不意に感じた鋭い痛みには、はつとなつて視線を落とすと、じつとり

と滴る血。

自分の爪が肉に食い込む程に握り締められた手の平は、じんわりと赤みを帯びていた。

湯呑みに手を添えると、まだほんのり温かい。

しかし立ち昇る湯気はとうに消え失せ、玉露本来の旨味も落ちてしまったであろう時間を、3人は同じ空間で過ごした。

紫が——、主君が切り出すまで聞いてはいけない。

橙は主人である藍からの言い付け通り押し黙っていたが、その目線はそわそわと落ち着きがない。

対して隣に座する藍は、凜とした姿勢を崩していない。

「……今日、全ての作業が終わったわ」

そんな静寂を破ったのは、待ち侘びた主君の言葉だった。

しかしその声色は酷く落ち込んでいて、とても朗報を口にする雰囲気ではない。

「あつ、……えつと……」

その様を見て、橙はあたふたしながらも必死に返事をしようとするが、上手く言葉が出てこない。助け船を求めるように己が主人へ視線を向けると、同時に藍は驚く程落ち着いた物腰で言った。

「いかがでしたか？」

だがその実、彼女として焦る気持ちを必死に抑えてのものだ。

その証拠に机の下では、自身の着物の裾を鷲掴むようにして握っているのが見えた。

「…」

紫は一拍置くようにして湯呑みに口を付けた後、徐に首を横に振った。

「痕跡の発見には、至らなかつたわ」

「……………えっ」

「そう、ですか」

二人の胸の内が大きくざわつき、心臓を締め付けるような感覚が突き抜けていく。

隣の橙に悟られぬよう、なんとか平静を装う藍だったが、喉が引きつって思う通りに言葉が出てこない。

覚悟はしていた。

残酷な運命を受け入れる——、受け入れなければならない覚悟を。

でも心の何処かでは未だ決心がついていなくて、ほんの僅かな希望に縋っている自分がいて。

もしかしたら、もしかしたらと。

日を増すごとに……、調査の終わりが近づくことに焦りを感じていたのだ。

それが今、主人の言葉で確定してしまった。

とうとう、受け入れ難い現実を突き付けられてしまった。

「……………」

いつしか会話を続けようとしていた口は固く閉ざされ、真つ直ぐに主人を見つめていた視線は手元へ落ち、九つもの立派な尾は力無く垂れていた。

「……あの、私思うんですが」

静寂を破ったのは、おずおずと差し込まれた声。——隣から
だった。

「紫様も藍様も、隼斗様のことを忘れていませんよね？」

橙は二人の反応を気にしながらそう尋ねた。

「あ、ああ……勿論だ。だからこうして——」

唐突な質問に戸惑いながらもそう答えた藍は、同じくして小首を傾
げた紫と目を見合わせた。

「紫様、今博麗神社では復興に向けての取り組みがなされていると聞
きました。妖怪と人間が協力し合って、一つのことを成し遂げようと
している」と

「……ええ、そうね。以前霊夢から聞いた時は驚いたものだけど」

現在博麗神社が信仰を取り戻しつつあることは、彼女らとて見聞き
していた。

幻想郷中に配られている天狗の新聞は、この屋敷が認知されにくい
場所に建っているためか届いていないが、一度栄えた場所にでも繰り
出せばいくらかでも情報は入ってくるし、何より彼女らは幻想郷の管理
を担っているのだ。大概の事柄はその場になくとも把握すること
ができる。

「ということとは博麗の巫女をはじめ、誰も隼斗様のことを忘れてはい
ないんです」

未だ話は見えず、紫は眉をひそめた。

「つまり、何が言いたいのかしら？」

やや食い気味に、問い質すかのような口振り。

別に苛立っているわけではないが、紫はこんなにも堂々と話す彼女を見たことがない為、内心驚いていた。

藍も同じだ。今の今まで、まだまだ未熟な式神の少女だと思っていた自身の部下の態度に目を丸くした。

途端に主人二人の眼差しが自分に集まっていることに今更ながら気が付き、一瞬たじろいだ橙は、一呼吸おいた後、意を決したように答える。

「……隼斗様はまだ諦めていませんっ！」

今度こそ、二人は言葉を失った。

だが構わず、小さな式神の少女は続ける。

「ずっと考えていたんです。本当に存在自体が消えてしまったなら、隼斗様は初めからいなかったことになるんじゃないかって。でも確かに、——隼斗様のことは皆んな覚えています！」

考えてみれば……、そうだ。

あの時、龍神は言っていた。

矛盾を正す為に『世界』は隼斗の存在を消すのだと。

その矛盾とは？

存在を消すとはどこまでの範囲を指すのか？

同じ人間が二人いるのが矛盾。

その解決策として、どちらか一方をただ死に至らしめるだけでは不十分なはずだ。それでは終 隼斗という肉体を排除できたとしても、魂は残る。彼の生きてきた痕跡を残すことになる。

皆の記憶の中にある。

つまり、概念としてこの世界に存在してしまっている。それでは存在を消し去るには至らない。あまりに不十分だ。

「隼斗様はきつと帰ってきますーだから——」

思わず感極まり、終いには声の上擦ってしまった橙の頭へ、優しく手の平が乗せられた。

「そうだな」

いつしか瞳に溜まっていた涙を拭い、徐に視線を上げた少女へ、藍はただ一言告げた。

そして更に藍の手へ重ねるように、新たな手の平が触れる。

「紫様」

「いつから、ここまで心のゆとりがなくなっていたのかしらね」

可能性が0になった訳じゃない。

たかだか手立てが一つ潰れただけ。それがなんだと言うのか？

今回が駄目だったのなら次を探して試せば良い。人間である霊夢かのじよ等がまだ諦めていないのに、永き時を生きる妖怪われわれが早々に匙を投げてどうする？

こんな体たらくでは、いつしか彼が帰ってきたときに拳骨をもらってしまふ。

失敗が終わりじゃない。諦めた時が本当の終わりなのだ。

紫は胸の内で、何度も自問自答を繰り返した。

「二人とも」

紫はそのまま二人を抱き寄せた。
静かに応じる藍に対し、橙は顔を赤らめて縮こまってしまっているが。

「ありがとう」

それは紛うことなき本心から出た気持ち。

普段の隙を見せぬ、仮面を貼り付けた言葉では決してない。

「あ、あの紫様、藍様」

そんな中、橙は二人の間から顔を出しておおずおずと言った。そして同時にその手に握られていたとある新聞記事を差し出す。

「橙、これは？」

藍の問いに、橙は完全に二人の抱擁から抜け出すと、改めて手にした新聞を広げて見せた。

「今朝私の家に届いてました！」

187話 繋がる一歩

「大分出遅れちゃいましたね」

そう言って早足に歩みを進める鈴仙は、前を行く師の背に語りかける。

「仕方ないわよ。今日は急患も多かったし、何より突発的なイベントだものね」

どこからともなく取り出した一部の新聞記事をひらつかせ、永琳は迷うことなく夜の林を歩いていく。

「にしてもお師匠様、どうして途中から歩きに変えたのさー？あのまま飛んではよかったのに」

一同の最後尾を退屈そうに追従するてゐは、すっかり暗くなった空を仰ぎ見ながらぼやいた。

「いら」っと鈴仙。

同じく弟子の立場であるてゐのその碎けた話し方に引っ掛かり、小さく窘める声を飛ばすが、当の本人はどこ吹く風だ。

「参拝って言うのはそういうものなのよ」

永琳が端的に応じ、続いてやや浮かれた調子の輝夜が、周囲を見渡しながらか告げる。

「ふふっ、私は散歩してるみたいで中々悪くないと思うけどな。『風情がある』、って言うのかしら。まっ、てゐにはわからないかしらね」
「あらあら、普段から閉じこもってる姫様にはなんでも新鮮に見える

羨ましいですわ」

売り言葉に買い言葉……とまではいかないが、今自分は揶揄われたのか、と判断してからのてゐる返しは迅速なものだった。

対して、輝夜はキツと目線を下方の兎耳小女に合わせ、反論を述べる。

「あら失礼ね！私だつてごくたまに外を散歩することくらいあるわよ！あの焼け野原と勝負する時だつて——」

「へっ、それは屋敷の中でやったらお師匠様に叱られるからでしょ。それにごくたまに——」

「はいはい、お話はその辺でお終い！」

危うく白熱しかけた口争を、鶴の一声で抑制した永琳は、歩みを止めて目の前に続く石階段の先を指した。

一同が見上げた先には目印となる鳥居が見え、何やら賑やかな音が耳に届く。

「やっぱり、私達が最後……ですかね」

不安げな様子の鈴仙。

しかし輝夜とてゐはくすりと笑みを溢した。

「なーに心配してるのよ。別に時間の取り決めがあつたわけでもなしに」

「そーそー、皆んな集うべくして集つたつて感じだしね」

鈴仙は互いに意見を同調させ合う二人を見て、先程の口争はやはり冗談だったのかと胸を撫で下ろした。

永琳達が境内に入った時点で、予想通り、既に多くの参拝者が集っていた。

その多くは見知った顔で、もちろんはじめましての者もちらほら。その大半が各地を代表する者達なのだから、参拝にきた面子としては中々に豪勢だ。

月や魔界と比べ、決して広大とはいえないまでも、そこそこ広い幻想郷で長年過ごしてきた永琳でさえ、直接関わりを持つ者は少ない。全ては彼が今まで築き上げてきた絆の結晶であり、自分達もその一部だ――

「なんだかお祭りみたいで楽しそうね」

「うう…、知らない人がいっぱい。ちよつと緊張してきた」

「鈴仙、いつからそんな人見知るようになったのさ」

――何よりそう思えることが誇らしい。

「さつ、私達も行きましょう」

一つ、また一つと繋ぎ合わさっていくパズルのピースは、確実に一つの形を成していく。

誰に命令されたわけでもなく、ましてや綿密な示し合わせを行い、具体的な目標を掲げていたわけでもない。

最初は胸の内ですずかに浮かぶ蟠りわたかまだったものが、一つのきつかけを得て、共通の形へと変化した。

それは使命感だったり、自己満足だったり…、ただ何となくと答える者もいるだろう。

だからきつと、彼女らに後悔はない。

だってこれは彼女達が一步踏み出すための、通過儀礼のようなものなのだから。

188話 此岸と彼岸と……

最初に目にしたのは、辺り一面何もない草原だった。

——いや、正確にはまるで夢の中にいるような、曖昧な景色が頭の中でぼんやりと広がっているだけだったのかもしれない。

そこで何を見ていたのか、何を耳にしていたのか、そもそも何故そこにいたのか。

それらを疑問に思うための意識すら、存在しない。

空には色があった。

最初は赤く、次第にそれは鮮やかな青色へと転じ、暫くすると橙色となり、やがて一面塗り潰したような黒になる。

そして再び、空は赤色に染まっていき、巡るように一定の色を繰り返す。

ただ、時折灰色がかかることもあった。

—— それらの変化を、意識的にとらえることができるようになったのは一体いつからだろうか？

気付いた頃には、目の前にあった筈の草原は消えていた。そもそもそこに草原があったのかどうか、曖昧な記憶の中では定かではない。

さりとて変わったのはその一部分だけ。

空は変わらず、一定の色へと転じては、再び同じ景色を繰り返した。そうやって、何度同じ景色を見た頃だったろうか。

「？」

青色だった空が、突如として紅く染まった。
可笑しい。青の次は橙色の筈なのに。

やがて元に戻る色。

それは一瞬だったのか、暫くその時が続いていたのか、相変わらず記憶は曖昧だ。

その後も周期的に変化は訪れる。

どれも感覚的には一瞬のことで、どれがどうだったかなんて今更わ
からない。

しかしそういった変化が訪れるたびに、どこか懐かしいような、不
思議な感覚が押し寄せた。

尤も、過ぎてしまえば同じこと。

全ては曖昧な記憶の彼方へと消えていく。

桜色の風吹く白玉楼。

「そうですか、やはり其方には行っていないのですね」

普段の飄々とした雰囲気から一変し、幽々子は真剣な表情のまま頷
いた。

傍らに控えている従者の少女は、平静を保とうとはしているようだ
が、そのぎこちない表情が今の彼女の感情を表している。

この話合いはここ数ヶ月の間で何度目だろうか。

「そもそも此岸と彼岸では理が違う。其方では無数に存在する世界が
あろうと、彼岸に於いては存在する世界はただの一つのみ。それが死
者を裁く基準となるからです」

幽々子の目の前に浮かび上がる、青白く揺らめく焰の玉は、凜として告げた。

声の主は幻想郷を担当する閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥその人だ。通信とはいえ、その厳格な気に当てられれば、大抵の者は身体を強張らせてしまうだろう。

「彼岸には来ていない。つまり、未だ彼の魂は其方に存在しているか、本当の意味で存在自体を抹消されてしまったのか。一概に言い切れるものではありません」

閻魔という役職についてから今日まで、自分の中に絶対の基準を持つて職務を全うしてきた彼女とて、今回の様に前例のない不確定要素は断定することができなかつた。

「前者ならば別の世界へ。後者ならばこの世界に帰ってきてそのまま……、と言う訳ですね」

「ええ」

皮肉な話だ。

誰もが彼の生還を望んでいるというのに。

生きているならば、もう二度と会うことは出来ず、帰ってこれたとしても、その姿は見る間も無く消滅してしまう。

ならばと、幽々子は改めて表情を固め、懇願した。

「……では、閻魔様。もし彼が別の世界に流れ着いていて、いずれ彼岸そちらに行くことがあれば、お教えくださいますか？」

「残念ながら、此方の情報を此岸へ無闇に流すことは禁じられています。それにその場合、私の担当から外れている可能性の方が大きい」

だが映姫の回答はばつさりとしたものだった。

理由はどうあれ、規則は規則。

その何者にも左右されない気質こそが、彼女の閻魔たる所以なのだ。

「しかし、もし彼の行き先が冥界であったならば、元いた世界を担当する貴女にも報告をすることになるでしょう」

だからそう続けた映姫の言葉に、幽々子は気落ちする間も無く、目をぱちくりとさせ、やがて一拍遅れて頭を下げた。

「ありがとうございます……！」

「それと……」

それは彼女にしては珍しく、妙に言い淀んだ様子だった。

「閻魔という立場である以上、不確実なことを口にするべきではないのでしょうか……、先程提示した可能性の話です」

映姫は「私個人の見解ですが」、と続けた。

「あるいは——」

幽々子だけでなく、傍らにいた妖夢も、目を見開いて身を乗り出した。

その様子を庭先から目にしていた妖忌は、植木の手入れの作業を止めて、微かに目を細める。

（皆、やれることはやった。……後は——）

彼は僅か数秒の思案の後、再び植木へと向き直った。

189話 闇の果てから

次に目を覚ました場所は、全てが闇に包まれた黒一色の世界だった。

周囲には指標となるべき物も、一本の線すらも走っていない。

しかし不思議なことに、自分の姿だけは輪郭があり、色があった。自分だけが、この不可思議な空間において、はつきりと存在していた。

だがこの場所は不思議と――。

《ここに目覚めがあるのか?》

唐突に投げかけられた言葉に、ぼんやりと振り返ると、いつの間そこにいたのか、白髪の男が立っていた。

男はにやにやとこちらを嘲るように見つめている。

《なんだよその顔は?長年連れ添った仲じゃねエか》

白髪の男は親しげに、不敵な笑みを浮かべながら歩み寄る。

《しかし漸くだなあ。俺とお前がもう一度こうやって顔を合わせるのによオ。長かったぜ。やっと戻ってこられた。……………いや、この場合はお前の方が堕ちてきたって方が正しいか?》

そう言っとうとう目の前まで来た男は、まるでこちらを吟味するように視線を動かした。

《……………あん?》

はあ、と溜息が一つ漏れる。

《情けねエ。まるで抜け殻だ》

次の瞬間、凄まじい衝撃が腹部に走った。

しかし、後ずさる間もなく身体は奇妙な浮遊感に襲われる。

徐に視線を落とすと、白髪の男の腕が自身の腹に食い込み、持ち上げていた。

《眉一つ動きやしねエ。今のお前は痛みすら感じられねエのか？》

心底哀れむように男は呟き、続け様に掴んでいた脊柱を握り潰した。

「……」

途端に全身から力が抜け、『彼』の命はそこで終わった。

—
—
—

《ここに見覚えがあるのか？》

いつからいたのか？

背後には白髪の男が立っていた。

こちらが怪訝な表情を浮かべていると、男は嬉しそうに口角を吊り上げて笑った。

《なんだよつれねエ反応だなア。俺とお前の中じゃねエか》

男はゆっくりとこちらに歩いてくる。

仕切りに値踏みするかのように視線を向けながら。

《で、その様子だとマジでわからねエらしいな》

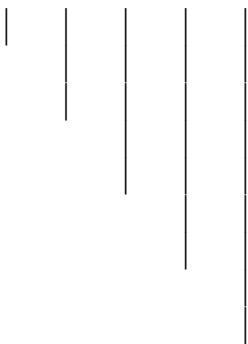
目の前で歩みを止めた男は、こちらの瞳を覗き込むようにして身を乗り出した後、一度顔を伏せた。

《よお、今のお前に死への恐怖はあるのか？》

『彼』は変わらず怪訝な表情を浮かべていた。

ごごとり、と自分の首が落ちるその時まで。

ザザーッと、脳内にノイズが走る。



常世へ続く暗闇。

まるで出口のないトンネルをひたすら進んでいるかのような長い長い道を、『彼』は歩き続けた。

身体に纏わり付く得体の知れないナニかが、歩みを進める足を、振り払おうともがく腕を^{から}搦めとる。

ただ、進まなければと。今の『彼』を動かしているのは、何故か頭の中に刷り込まれている、その一点のみだった。

《そうやって当ても無くただ歩いて何日経った？漸く変化があったと思やア、やってることは亡者と変わりやしねエ。まるでゾンビだぜ》

白髪の男は心底苛立たしげに頭を掻いてそう吐き捨てた。

「……」

その言葉に『彼』は一瞬反応したものの、すぐさま何事もなかったかのように歩き始める。

白髪の男の口から自然と舌を打つ音が漏れた。

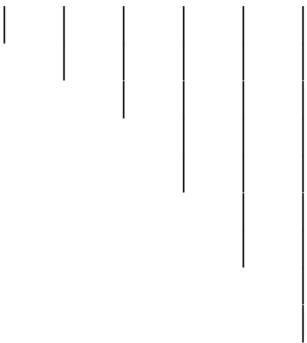
《——あ・と・何・万・回・続・け・る・気・だ・て・め・エ……ツ》

次の瞬間、『彼』の身体は力無く崩れ落ちた。

急激に抜けていく力、次第に狭まっていく視界。

しかし『彼』は尚、這いずるようにして身体を前へと動かす。
数秒後、貫かれた心臓がその役目を終えるその時まで。

ノイズが走る。



あとどれだけ、どの方角にどれ程の時間進めばいいのか。——そんなこと、とつくに頭の中から消えていた。

もう既にどうでもよかった。

頭の中でぐるぐると渦巻き、思い描いていたものは、家族や仲間の顔でも、住み慣れた土地の情景などでもなく、『光』と『音』だった。
何も見えない、何も聞こえない。

何にも触れられず、唯一踏みしめているはずの地面も、雪や砂の上を歩いているように不安定で、感触も曖昧だ。

その微小な感覚を頼りに、今自分は歩いているのだと認識できていた。そんなただ一つ残された指標に縋り、一步、また一步と踏み出していく。

《おい》

途端に飛び込んできた『音』。求めていたものだ。

気付けば、『彼』は動きを止め、その方向に意識を向けていた。

《……あーあー、こりゃ駄目だな》

声の主は嘲るような口調でそう告げると、早々とその場を後にした。

段々と遠ざかっていく足音を感じ、『彼』は呼び止めようと口を開くが、既に枯れ果てた喉は動かず、肉の付いていない腕は持ち上がらない。

それでも何とか呼び止めようと、胸の内で必死に繰り返す。

《『待ってくれ』だア？てめエで立ってるかどうかの区別もつかねエ間抜けはそこできたばってろ》

薄れゆく意識の中で、まるで忌むように呟かれた言葉を耳をした。

《偶にはのんびり観察てんのもいいかと思っただけどよオ、やっぱ次からは殺すわ》

ノイズはより大きく、よりはっきりと『彼』の脳内に響き渡る。

目が覚めてからどれだけの時間が経った頃だろうか？
不意に感じた気配に、思わず立ち止まった。

「——誰だ？」

その声色は力無いものであったが、問いかけられた当人は驚いたように目を見開いた。

《………へエ、漸くか》

まるで漆黒の布を捲るようにして、白髪の男が闇の中から現れた。

「………」

《………》

互いに沈黙が続く。

尤も、白髪の男の方は返答を待っている様子だが。

「………誰だ？」

《おいマジかお前》

眉間に皺を寄せたまま首を傾げた『彼』に対し、白髪の男は天を仰ぐように手を額に当てた。

「すまん、マジで誰だ？」

『彼』は既にふらふらと覚束ない足に力を入れ、体ごと向き直ると、改めて目の前の人物を凝視して言った。

しかし白髪の男は溜息を吐くばかりで此方を見ようとしなない。

《……まあ、自我がはつきりしただけ上等か》

「何?」

《っ……何でもねエよ》

白髪の男は舌を打ち、今度は不機嫌そうに『彼』を見据えた。

《一応聞いとくが、俺が誰だかわからねエんだな?》

「……いや、その……すまん」

《なら今自分の置かれてる状況については?》

「……何も」

《そうかい》

白髪の男はゆっくりと歩み寄る。

その目は既に『彼』を見ていない。

「な、なあ。あんたこの場所について何か——」

そう言いかけた直後、身体を突き抜けた途轍もない悪寒に、『彼』は反射的に身を引いた。

「ッ……!?!」

殆ど倒れ込むように何とか身体を後転させて受け身をとるが——

《何避けてんだてめエ》

そんな中、白髪の男は拳を突き出した姿勢のまま、鋭い眼光を『彼』に向けていた。

「急になにしやが——」

有無を言わせない、と言わんばかりに、白髪の男は一瞬で距離を詰めると同時に、『彼』の腹部へ回し蹴りを放った。

「ぐぼっ…ッ!？」

直撃と同時に『彼』の身体はくの字に折れ、血反吐を撒き散らしながら宙を舞った。

「がっ…!？」

しかしその身体は一度も地に触れることなく、凄まじい衝撃と同時に背部を掴み上げられる。

《あーあーあー、いいんだよそういう後ろに跳んでダメージ減らすみたいなやつは》

白髪の男は心底面倒臭そうな口振りでそう告げると、手荒く『彼』を地へ押し付けた。

《いいか？今のお前に用はねエ》

固く、握り込まれた拳がその額へと向けられる。

上から押さえつける力は凄まじく、抵抗しようにも背部から肺を圧迫されているようで、まるで力が入らない。

「今……の……？」

何とか首を捻り、間近で目にした男の顔。
漸く、『彼』は驚愕の表情を浮かべた。

「お……前……っ」

《今更遅エよ》

次の瞬間、轟音が耳を叩き、『彼』の意識は途絶えた。

《と……ん苛つく野郎だなお前は》

男は舌打ちの後、亡骸を尻目に自身の手の平へ視線を落とした。

《……》

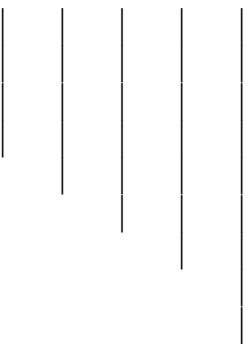
端からほろほろと崩れていく手。

見れば、身体のあちこちから風に散る灰のように消失していた。

しかし、男の表情は変わらない。

そしてその身体がとうとう完全に消え去る直前、男は徐に呟いた。

《………面倒臭エ》



意識が戻った時には、既に歩みを進めていた。
一体いつから自分はここにいるのだろうか。
何故あてもなく歩き続けているのだろうか。
思考は曖昧だが、不思議と足は止まらなかった。
まるで遙か昔から刷り込まれてきた本能に従うように、その先にあるかもわからない——を指して。

帰らなければ。

でも、どこに？

——に。

どこだ？

——だ。

よく聞こえない。

それはお前が——だからだ。

うるさい、お前はなんだ!?

……なあ、おい。

《俺に、見覚えがあるか?》

全てが闇に閉ざされた黒一色の世界。

その中で、二人の男が対峙する。

両者の容姿は瓜二つ。

唯一異なるのは、まるで対照的な色のみだ。

「お前は……っ！」

190話 その者は

《俺に、見覚えがあるか?》

白髪の男は突如として『彼』の前に現れた。

この何もない空間で目が覚めてからどれだけの時間が経ったのかわからない。

一日……、は流石に言い過ぎかもしれないが、体感的には少なくとも半日以上は経過しているはずだ。

意識が覚醒し、あてもなく彷徨い歩いての半日。

そこで漸く声をかけられた。早くも途方に暮れかけた闇一色の世界でだ。

『彼』はまるで砂漠のオアシスでも見つけたかの如く、感極まった心を抑え、その方へ振り返った。

「!?」

しかし、期待は悪い意味で裏切られた。

短めの白髪を後ろに流した髪型。本来白目の部分が黒く、背丈約六尺程の筋骨隆々の体躯に、無造作に羽織られた羽織。

その男の出で立ちには、自分の容姿をそのままに、色だけを反転させたような姿だった。

「お前は……っ!」

一転して、『彼』は低い声で唸った。

その姿、その気配、――、

《「忘れるはずがない」ってか? いい気なもんだぜ》

白髪の男が苦笑をもらすも、その表情がどこか満足気に見えるのは

気のせいか。

「何故お前がここにいる…!? いや、その前に——」

湧き上がる感情に言葉が追いつかない。

そんな自分の様子を楽しむかのように、白髪の男は口角を上げた。

《気になるか? ここがどこだか。まあ、まずは落ち着けよ》

「……………逆にお前のその落ち着きようはなんだ?」

上手くは言えないが、先程目が覚め、訳もわからぬまま途方に暮れていた自分とは気構えが違う気がした。どこことなく、この状況を受け止めているような…………。

《いやいや、同じだよ。俺だって途方にくれてたぜ。少なくともさつきまでではな》

「?…………何を言っ——」

『彼』の返答が止まる。

違和感があった。

白髪の男が言った意味深な言い回しもそうだが、先程から自分の『言葉として出る前の疑問』に対して、この男は答えている。

「いくら多芸の俺でも、読心術は使えねエぜ。お前の元々持ってた能力ちからか?——西行妖」

『彼』はこの状況下において、その名を初めて口にした。

彼の姿を模し、嘗てその力の大半を奪った太古の厄災。死の天使の力の一端にして、恐らく最も『彼』を苦しめたであろう大敵の名を。

白髪の男はやれやれと溜息を吐くと、黒一色の地へ腰を下ろした。

《知ってるだろう？生命力の吸収以外はお前と同じだ》

更に「まあ尤も」、と付け加える。

《西行妖にできることは、その程度だ》

その瞬間、白髪の男の身にまとう空気に変化があったような気がした。

だがそれよりも――。

「……」

話が見えてこない。そしてその要領を得ない返答に、思わず漏らした声に怒気が籠る。

「お前が真面目に答える気がないのはわかった」

『彼』は低く唸ると、既に臨戦態勢に移っていた。

《力尽くか。出来るのか？お前に》

「悪いが無駄話に付き合う気はねエ」

『彼』の手が頭部を覆った。それはまるで仮面を被るような所作だった。

「――っ!?!」

しかしその行為は文字通り、空を切る形で終わる。

驚愕に目を見開く『彼』を見遣り、白髪の男は小さく呟いた。

《仮面なら出ねエよ。俺がここにいるんだからな》

嘲笑うかにみえたその表情は淡然たるもので、言葉遣いはまるで論すように、寺子屋で子供たちに言い聞かせるかのようなゆったりとしたものだった。

《俺の力が具現化したものがあの仮面だ。俺がここにいる以上、同じ存在である仮面あれれが出てくるはずがないだろう》
「ちっ」

舌打ちを一つ。

仮面が出せないことはわかった。ともなれば、目の前の男に見出せる勝機は幾ばくか。

『彼』は動揺を必死に鎮めつつ問い返した。

「……そもそも、何故お前がここにいる？いや、もっと根本的な問題だ。何故実体をもって俺の前に出てきた？出てくることができた？」

未知の空間、行けども行けども変わらない景色、突然現れた大敵。とにかく今は打開すべき状況が山積みだ。

まずは目の前の敵をどうするか……。

『彼』は目先の優先順位を組み始めていた。

《逆だ。お前の方から現れたのさ》

しかし、白髪の男の解はあっさりと『彼』の思考を停止させた。

「何を言って……」

《それに、西行妖とは本来死のイメージを具現化した桜の木に過ぎない。お前の言う『実体』が、こうして意志を持った生命体のことを指しているならそれは間違いだ》

「——だから、何を言ってやがるっ!?!」

《……》

白髪の男は一拍置いた後、やがて淡々とした口調で告げた。

《元の世界の、お前という存在は消えたぞ》

「!?」

薄々勘付いていたことだ。

ここが……、この場所が本当は元の世界のどこにも繋がっていないくて、本当は地獄かなにかで……。いや、存在自体が消えて無くなるのならば地獄にすらいけないのかも知れない。

あの世とかこの世とか、そう言った概念の無いどこか違う場所へ、行き場のなくなった精神だけがここに流れ着いていたとしたら。

「……んだよ」

力無く、ぼつりと呟いていた。

目が覚めてから今迄、常にその可能性は頭の中にあった。視界一面の闇、正確に捉えることのできない地面、鈍った感覚。

半日近く歩き続けてみたものの、実際は歩く真似事をしていただけだったのかもしれない。

今だってそうだ。少しでも気を抜くと、立っているつもり姿勢すら維持できなくなる。

「っ」

途端に身体を支える力が抜け、危うく転倒しかけた。

姿勢を維持するためには筋力がある。だが姿勢を維持しようと思えば、内面的な力がある。倒れまいとする精神力が必要だ。

ぐらつきかけた。

足が、——心が。

そんな『彼』の様子を余所に、白髪の男は続ける。

《ここはお前自身が創り出した世界だ》
「!?」

茫然自失の手前、意識は再び引き戻された。

思わず顔を上げた『彼』を、白髪の男はじっと見つめたまま告げる。

《先に、私の正体を明かした方が良さそうだな——》

そう言うと、先程『彼』が行った動作とは対照的に、白髪の男はまるで仮面を外すように顔の前で手を払った。

パキリツ、と乾いた音が一つ。

光の粒子となって消失していく『仮面』の下から現れた長い髪。

「……………っ！」

『彼』は今度こそ言葉を失ったが、無理もなかった。

自分と瓜二つの男の正体が、女だったなんて、一体誰が予想できるだろう。

「絶句、とは正にこのことだな」

どうにも此方の反応が可笑しかったようで、女は煌びやかな銀色の髪を揺らし、くすりと笑みを溢す。

「ここで改めてお前たちに合わせた挨拶をするならば……、『久しぶりだな』、か?」

女は艶やかな肢体をくねらせ、悩ましげに口元へ指をあてがいなが

ら言った。

しかしその仕草が『彼』の目にはどうにも芝居掛かって映り、一瞬
疑心感を抱いたことで、空白が生じていた思考に再び意識が戻すこと
ができた。

「誰だお前」

湧き上がる数々の疑問を集約した結果、この上なく単純明快な問い
掛けだった。

「んんん？」

対して、女は目を丸くして首を傾げている。

それこそ、「そう言われるとは思っていなかった」と言いたげに。

「まさか覚えてないのか？」

「……銀髪の知り合いはそこそこいるが、お前みたいな女神っぽい格
好してる奴は知らん。新手の詐欺じゃあるめエし、せめて名前を先に
――」

「そうそれ！」

「あん？」

『彼』は「何に食いついたんだ？」と、順に今し方発した言葉を思い返
した。

「詐欺？」

「違う！」

「……女神っぽい？」

「っぽいは余計だ！」

「……」

自ずと眉間にシワが寄る。

「……名前は？」

「生憎だが、前会った時は名乗らなかつた」

「……………」

つまり目の前の女は、自称知り合いで、自称女神で、名前すら明かしていないにも関わらず、さも旧知であるかのように接してきているわけだ。

「……………生憎金の持ち合わせは無いんだ」

「だから詐欺じゃないってばっ!!？」

先程とは打って変わり、銀髪を振り乱して声を上げた自称女神。途端に胡散臭さが消えたところを見ると、どうやら此方が素らしい。

「ならいつ会った？これでも途方もない年月を生きてるが、記憶の中にお前みたいなのはいない。俺との間に何の関わりがあつた？言ってみろ」

『彼』は、埒があかないとばかり捲し立てた。まるで虚勢を張る子供の心を挫くように。

しかし自称女神は意外なほど冷静に表情を切り替えて言った。

「お前がこの世に生まれるよりも前だ。いや一度死んだ後、の方がわかりやすいか？」

関わりは……、そうだな。——力を授けた」

「……………何っ……………?!」

瞬間、『彼』の表情が固まり、それ以上の言葉を発する前に、意識は記憶の奥深くへと飛び込んだ。

——その事実は、誰にも話したことがない。

幻想郷の住人にも、月の仲間達にも。無論両親にもだ。

理由は余計な混乱を招くためだとか色々あるが、この際どうだっていい。

その事実は自分以外知り得ない筈だ。

唯一例外があるならば——。

「っ……っ！」

心音が、やたらとけたたましく感じた。

女神は、徐に口を開く。

「もうわかったな？ 私か誰か」

『彼』がこの世に生を受ける前——時代の話ではない——、『彼』と
いう意識がまだ前世のものだった頃に、最後に会った人物。

「では改めて、私がここに来た目的を言おう」

まだ整理がついていない。

しかし女神は構わず続ける。

「『柀 隼斗』、お前に与えた能力ちからについてだ」

繰り返される女神の凜とした声が、反響するように『彼』の耳をたたいた。

一拍遅れて何を今更？とさえ思ったが、次に彼女が口にした言葉は予想の遥か上をいった。

「お前はまだ、能力の本質を理解できていない」

191話 その能力（ちから）は――。

もう途方もない遙か昔のことになるが、よく覚えている。

まだ何をするにしても両親が付きつきりだった幼少期、唐突に自身の能力が脳裏に浮かんだ。

――『超人になる』能力^{ちから}。

『超人』とは、『身体能力』、『耐久力』、『環境適応力』等、個の持つ生命力において、人並外れた強さを発揮する存在だと…。

少なくとも、そういった認識をもって今日まで生きてきた。

現に想像していたものと、実際に出来ることに大きな違いなどなかった。

だが、今し方目の前の女神から言われたのだ。

お前は能力の本質を理解していないと。

……本質とは？

この能力^{ちから}には何か、自分が認識していたこととは別の使い方があると言うことか？

……理解していないとは？

それを引き出すことができていると言の意味か？はたまた、知識として知らないだけで発現自体はできているのか？

……わからない。

「……………どういう、意味だ？」

何度も答えを探そうと脳内を駆け巡った挙句、漸く絞り出すように

『彼』は尋ねた。

「そのままの意味だ」

女神は突き付けるように言った。

「今お前が自在に引き出せている力は全体のほんの一部のみ。言ってしまうば、本来の力の副産物に過ぎない」

女神の青く透き通るような瞳が、『彼』の奥に潜む何かをじっと見つめた。

「今は……」

絞り出すように、『彼』の口から言葉が漏れる。

会話をしているだけなのに不思議と呼吸が荒い。ひどく動揺しているせいだろう。

「今は深く考える余裕がねエ。……教えてくれ」

その声色に力はなく、目線も徐々に沈んでいく。まるでこれから地獄の閻魔にでも罪の告白をするかのよう。

『世界』は、ある二つの事象によって成り立っていることを知っているか？」

だから女神は、敢えて核心から一步引いたところから話し始めた。

「世界と言っても、人間界とか魔界とか、そんな小さなスケールのものじゃない。この世とあの世、異界や平行世界を含めた全ての世界だ」

女神は『彼』へ見せつけるように掌を掲げると、その上に光の玉を出現させた。

「？」

「創造と破壊だよ」

眉を細める『彼』を他所に、女神の掌の光球が、突如として弾けた。

「この言い方だと超常的に聞こえるか？だが難しく考える必要はない。意味は、今お前が脳裏に浮かべた内容で合っている」

女神は自身のこめかみを指先で軽く叩きながら言った。

弾けた光球は散り散りに霧散し、煙のように天に登っていく。

「二つが消えれば、また新たに創造^{つく}られる」

そうして立ち上った光の粒子は、虚空に新たな光の川を作り出した。

「！」

光の川は、見る間に複数の光の球を出現させていき、やがて役目を終えるように消失した。

新たに生み出された光球は、やがて先程と同じ様に粒子となり、また新たな光球を生み出していく。

黒一色だった世界が次第に光に包まれ始めた。

しかし不思議なもので、これだけ光源に晒されているにも関わらず、『彼』や女神、周囲の見え方は一切変わらない。

「この法則は何に置き換えても同じ。生命でも物体でも、それが何であれ、生まれた以上は次第に消滅の一途を辿るほかない。わかるか？例え半永久的に維持はできても、永遠に不変であり続けることはできない」

女神はそう言って頭上で繰り返される光の変化を一瞥すると、徐に『彼』へと視線を合わせた。

「お前は、そんな理から外れた存在だ」
「!!」

世界の成り立ちを説明し始めたと思った矢先、急に確信めいたことを言われ、『彼』は困惑と驚愕に目を見開いた。

そうした『彼』の思考へ、まるで畳み掛けるように女神は続ける。

「——世界の理から外れ、己の存在を確立させる。それがお前に与えた能力の本質だ」

この瞬間、女神の言った言葉を即座に理解することが出来なかった。そんな茫然と立ち尽くす『彼』を他所に、彼女は漸く一息つけたとばかりに吐息を漏らす。

「……つまり、なんだ……っ？いや、ちよつと待ってくれ……！俺が……、何だつて……っ？」

動揺から言葉が詰まって出てこない『彼』の眼前へ、女神は手の平を突き出し、「もつとわかりやすく説明してやる」と制した。

「お前の身体はあらゆる『死』に対し、常に存在を失わぬように順応していくことができる。それは物理的な事象から、概念的なものまで幅広くだ」

不思議なことに、女神の声が耳に入るや否や、今の今まで混乱の渦にいた『彼』の精神は落ち着きを取り戻し、話を冷静に聞くことのできた。

「物理的な死とは、外傷や心傷を含めた生命活動の終わりを意味する

もの。それらから身を守るために発現したのが――」

「――『超人』……、か」

『彼』は唸るように呟くと、自身の手の平へ視線を移した。次いで手首から肘先、腰から足下へと、まるで自分の身体ではないかのように感じながら。

「他にも覚えがあるはずだ。異能によって起こされる、肉体、精神干渉への絶対耐性。停止した空間でも制限を受けず、身体に有害とされる瘴気や病すらも打ち消してしまう特異体質」

超人とは、その名の通り強靱な肉体を持つ人でしかない。あらゆる環境に順応し、目に見えぬ脅威から身を守るには、別の力が関わっているのでは、と薄々感じてはいた。

しかし、それは飽くまで『超人』という枠組みの中から派生した副次効果だとばかり思っていた。

「……実際は逆だった、ってわけか」

心が落ち着いているせいか、その事実を知っても尚、不思議と衝撃を受けることはなかった。

寧ろ、妙にしつくりときたような気さえする。

「何故俺だけが特別なんだ？」

聞きたいことが山程積もっていく中で、この質問を真っ先にしたのは、今自分が冷静に質問の優先順位を組み立てることができる精神状態だからだろう。

「お前だけではない」

だから、本来ならば目を見開いて驚愕するような返答にも、眉を顰めるだけで済んだ。

『世界』には、その存続を脅かす不穏分子からそれぞれの世界を守る役割を秘密裏に与えられた者たちがいる」

女神が口にした最初の単語だけは聞いたこともない言語だった。

しかしそれが、先程彼女が言っていた『全ての世界』を意味する言葉だと唐突に理解することができた。

尤も、精神の安定化や今のような未知の言語理解が、自身の順応能力なのか、女神がもたらした奇跡的なものなのかはわからないが。

「不穏分子とは様々な形で現れる一種のバグのようなものだ。いつ、どんな時に出現するのは予測ができない上に、対処が遅ければ『世界』の一つを失いかねない。だからと言って、数多の世界を管轄する我々がその度に出払っていたのでは手に余る」

そこで、と女神は『彼』を指し示すように視線を合わせた。

「……仮にそうだったとして、俺はお前からその事を聞かされてないはずだが？」

「秘密裏に、と言ったろ」

『彼』の突き詰めるような問いにも、特に悪びれた様子はない。

「不穏分子ってのは？」

「文明一つを飲み込まんとする異形の大群。死と絶望の権化。どちらも心当たりがあるはずだ」

「っ！」

『彼』は自身の心臓が大きく跳ね上がるような感覚に、顔を顰めた。心当たりどころではない。

女神の言葉が耳に入った瞬間、つい昨日のことかのように、当時の惨状が思い起こされた。

「……………なら、俺と奴らとの抗争は運命付けられたものだったと？」

「そうなるな」

「……………」

その言葉を聞いて、『彼』は全てを悟ったように項垂れた。

自分と不穏分子が対立することが定められていたならば、その先々で起こった惨状は……………。

周囲の者達を巻き込んでしまったのは……………。

—————
全て。

「俺がいなければ……………」

「お前がいなければ、何一つ救われることなく終わっていた」

自責の念にとらわれ、思わず口にした言葉の続きへ、女神は凜とした声で滑り込んだ。

「！」

「お前と不穏分子との因果関係は密接だ。だが思い違いをするな。元々はお前の存在に関係なく、その日、その場所に不穏分子は発生するものなのだ」

女神は『彼』へ向ける視線をやや落として続ける。

「……………お前の運命は、お前自身で選択しているようで其の実、いずれ発生するであろう不穏分子にも対処できるように我々によって書き換えられていた。二度目の人生、そしてその力を与えた瞬間からな」

「……………」

女神の表情や言葉遣いに謝意の形はなく、そこにあるのは飽くまで情に近いものだった。

それはまるで、大いなる力の代償だ、と言わんばかりに。

「何故俺だった?」

『彼』はぽつりと呟いた。

「前世の俺は、そつちの手違いで死んだはずだったよな? それもお前達が仕組んだことだったのか?」

「いや……………」

ここで初めて女神は言い淀んだ。

「……………そうだな。私は嘘をついた」

『彼』の視線が上がる。

真っ直ぐに女神の瞳をとらえた。

その先を、強く促すような圧力を放ちながら。

「お前が死んだのは定めだった。……………そして、魂の器が空いたからと言つて、誰彼構わずというわけにはいかない。魂の用量、素質…、その者を示す基準値が適正值に届かない者には、力を授けるどころか、そもそも転生という選択肢すら与えることはない」

女神は「この言葉に嘘偽りはない」、と示すように、視線を逸らすことなく、真っ直ぐに『彼』の瞳に見つめ返して、その事実を告白した。だから『彼』は、たった一言口にする。

「そうか」

なら、それでいい。

前世の自分は、元々神の存在について無頓着ではあったが、特段疑っていたわけではなかったし、例えその存在を科学者が否定しようが、胡散臭い教徒から説かれようが、まあどちらの可能性もあるだろうと一人納得していたと思う。

どの道、当時の自分には神の存在を知る術などなかったのだ。

それならば、実現するかもわからない科学的な解明を待つよりも、いつそ神秘的ななかで結論付けてしまった方が、悶々とした気分にはならないだろう。

だから真実はこうであつたと、この女神が言うのであれば、それでいい。

仮に疑つたとしても、その真意を確かめる方法などないのだから。

「恨むか？お前の承諾を得ずに事を進めた我々を」

「いいや……」

『彼』は小さく首を振った。

この力を与えることの本当の意味を自分に伝えなかったのは、神々むことやらの事情だ。

それは力を与える上での制約だったのかも知れないし、もし初めから全部話して自分が拒みでもしたら、後々面倒だったのかも知れない。

しかし『彼』にとって、あまりにも今更な話だ。最初こそあまりにスケールの大きな話に驚きこそすれ、目の前の神を責める気にはならなかった。結果論になってしまいが、今までの自分の人生は、この力があつてこそ、歩んでこられたのだから。

少なくとも、目の前の神が自分たちの都合のために人一人の人生を消し去るような外道でないのなら、それでいい。

「なあ、一ついいか？」

だがそれとは別に気になることはあった。

「？」

「さつきから我々がどうのと言ってるが、お前何者なんだ？散々世界がどうとかって言うくらいだ。龍神や神綺みたいな創造神なのか？」

転生前でも『神』としか名乗らず、この場で正体を明かす前は、魔界で決着をつけたはずの西行妖しじぶんの姿をとっていたのだ。

気にならないはずがない。

「創造神、という意味では同じだな。しかしスケールが違う」

女神は『彼』の心を読んだ上で、そう話し始めた。

「龍神とやらは飽くまでお前の世界の創造神。私は、お前達の世界を含めた、複数の世界を管轄する神の支柱だ。そちらの世界の住人は、お前を除いて面識などない」

本来はあってはならないものだ、と続け、次に自分の身体を指して言った。

「これも分身体だ。お前の転生と同時に忍ばせておいた」

「……アフターフォローってやつか？その割には随分と勿体ぶつたな。別にもう少し早く出てきてくれても良かったんだぜ？」

『彼』が皮肉っぽくそう言うと、女神はくすりと笑みを溢す。

「確かに姿を見せたのはこれで三度目だが、もっと早い段階から手助けとしてお前へ干渉していたぞ？」

「はっ。」

思わず間の抜けた声を漏らす『彼』の反応を楽しむように、女神は自身の顔の前に手をかざす。

そして、まるで仮面を被るような動作で虚空を掻いた。

「お前は最初私のことを——《西行妖だと思っていたら？》」
「!?」

途端に声色が変化した。

声だけではない。銀色の長い髪は瞬く間に白髪へと変わり、『彼』と瓜二つの男が現れたのだ。

「……………最初に聞いとくべきだったぜ。そいつは、西行妖が俺の力を取り込んで変異した姿のはずだもんな」

意図してか否か、『彼』の身体は迅速に臨戦態勢へと移行する。

だが対照的に、女神は小首を傾げると、一人納得したように手を打った。

《ああ、そうか。まずはそこから誤解があるのか》

女神はやれやれと肩をすくめると、今度は仮面を剥がすような動作で、自身の顔の前を手で払う。

瞬く間に長い銀髪へと変化し、再び元の姿に戻った彼女は、どう説明したものかと悩ましげに髪を掻き上げると、やがて口を開いた。

「お前は以前、魔界でもう一人の自分と戦ったことがあったな？今、私が見せた姿の男と」

『彼』は黙ったまま、こくりと頷いた。

「いいか？どれだけ強大凶悪な力を持っていようと、前提として西行妖は植物だ。生命力の吸収、根を巡らせ、物理的な攻撃ができたとしても、所詮は植物に毛が生えた程度のものだ。お前の力を吸い取り、自身の力として取り込んだところまでは、まあ、できるだろう。だが、精神世界でお前の姿をとって、果ては戦うことなどできるものか」
「っ……、だが、現に！」

「あの時、戦っていたのは私だ」

『彼』は唾然として息をのんだ。

「何言つて…、だってあいつは、俺を殺そうとしたんだぞ！」

「死ぬ一歩手前まで追い込んだだけだ。順応を促すためにな」

平坦な声で女神は言う。

「結果、お前は西行妖の力を取り込み、その大本である死の天使の能力にも抗う身体を手に入れ、その戦場における悪辣な環境下での行動すらも可能になった」

「……！」

『彼』の中で、まるで点と点が繋がるような、しかしどこか薄気味悪い感覚が駆け巡っていく。死の天使の能力に対して耐性があるなんて誰に言われたわけでもなし。ただなんとなく大丈夫だろうと。確認なんてないはずなのに、どこか自信めいたものが自分の中にあった。

「お前は私が今になって現れた理由を問うたな？」

女神は思い出したようそう言うと、ゆったりとした動作で『彼』を指した。

「先程私は、お前が『世界』の理から外れた存在だと言ったが、そうであるためには一つ条件がある」

「条件?…なんだよ」

『彼』は眉を顰めて尋ねた。

「お前がその能力ちからの継承者であり続けること」

「……………は?」

思わずでた声に怒気がのる。

もううんざりだった。先程からろくに整理もできていないのに、次から次へと予想だにしていなかった真実が明かされていく。

いい加減にしてくれと、怒鳴つてやろうかとも思ったが、そんな行動に意味はない。わかっている。

「使命として能力を扱う以上、それは意思あるものでなくてはならない。人だろうと妖怪だろうと、神であろうとだ。……しかし、その意思が少々厄介でな」

女神は一度言葉をきった。

「意思とは、その者を突き動かす強い原動力であり、同時に綻びにもなる。世界の守護者として、永遠に不穏分子を退け続ける運命に肉体は耐えられるだろう。だが心はどうだ?」

「……………」

『彼』は押し黙ったまま答えない。

——なんとなく、彼女の言いたいことはわかった。

「時期や状況といった個人差はあれど、強靱な肉体とは対照的に、次第

に心はすり減っていく」

そうだ。さっきまでの自分がそうだった。

まるで何百、何千年とこの場所を彷徨っていたかのように、どんよりとした感情が重くのしかかっていた。

「我々は、その時を任期として定め、能力を与えた者のもとへ訪れる。

——意思を確認するためにな」

「……じゃあ」

緊張の面持ちで『彼』は呟く。

女神は凜としたその表情を崩さぬまま、一拍置いて言った。

「終 隼斗。お前の人生の幕をここで閉じるか？」

192話 妖怪) よくよく考えたら参拝のやり方わからなくね？

「えーつと、何だったかな、ほら、参拝に来た時の礼して手え叩くやつ」

「なんだよもう忘れたのか？さとりが言ってたろ。ほれ、二拝二拍手……………えつと……………」

「あつ、あたいたい知ってる！二はい二はくしゅ、人体錬成!!」

博麗神社の社殿を前にして、礼法を酒で飛ばしてしまった鬼二人と、そこへ割り込み、自信満々に答えたチルノ。

我先にと前へ出た3名に、その場にいた全員が苦笑を漏らす。

「ごらごら、参拝で禁忌を犯すな」

「語呂はいいですけどね」

慧音ときとりは半ば呆れつつ、慣れた動作で当人達を端の方へフェードアウトさせた。

「…………阿保妖精は兎も角、あの二人も相変わらずだな」

「威勢の塊みたいな種族なもの。お酒があればどこでもお祭り騒ぎなんだから」

「自分で持ち込んでるけどね」

「じゃあいつでもお祭り騒ぎだな」

運営側にまわっている博麗姉妹と魔理沙は、それぞれ率直な感想を漏らした。

他を見てみれば、紅魔館組や妖怪の山組は先程霊夢から教えてもらった参拝の作法がイマイチ理解できなかつたらしく、様子見を決め

込んでいる。その中でも紅魔の主は何故かお手並み拝見とでも言い
たげに胸を張っていた。

「仕方ありませんねー……ここは一度、私が手本をお見せしますよ!!」

などと言って一同の前に歩み出たのは、守矢の巫女だ。こちらはこ
ちらでどこか誇らしげな表情である。

「いいぞ早苗〜」

「びしっと決めなよ〜」

後方では神奈子と諏訪子の二柱が、まるで子の演劇を応援する親の
ように、彼女の背へ小さな拍手を送っている。

そもそも彼女らは立場的に博麗神社へ参拝にくるのはいいのだろ
うか?などと気にする者はこの場にはいない。

その様子を見ていた輝夜は、くすりと笑みをこぼすと、徐に視線の
先に見つけた妹紅へ歩み寄った。

「貴女は行かないのかしら」

「……もう少し後に行く」

輝夜の問いに、妹紅は振り返ることなく答えた。

「何故?」

「別に」

変わらずそっけない返事。

しかし輝夜は構わず続ける。

「まさか貴女もやり方がわからないとか?」

「……………そんなところだ」

「ここでのんびりと輝夜の口角が上がった。

「あらー？じゃあ里であの仲の良い先生に参拝のやり方教えてもらって、何度も練習してたって言うのは私の聞き間違いだったのかしらー？」

輝夜がわざとらしい説明口調でそう言うと、途端に妹紅の肩が跳ね上がった。

「なんつ、お前…！知つ、おい…！」

わなわなと肩を震わせ、漸く振り返った彼女は、既に耳まで赤い。

「ウチの従者は優秀なのよ。里の大抵の情報なんて筒抜けなんだから」

勝ち誇ったように笑みを浮かべる輝夜だが、実際のところは、定期的に里へ薬売りに出ていた鈴仙が偶々目撃しただけであつた。

「ぐぬぬ…！ちっ」

危うくいつものように沸騰しかけた妹紅だったが、なんとか怒りを飲み込んで舌を打った。

「あら、今日はおとなしいわね」

輝夜も肩透かしを喰らったように首を傾げた。

妹紅は顔を背けながらふんと鼻を鳴らして再び社殿へ振り返ると、

「順番的にはそつちが先だろ」

と、小さく呟いた。

輝夜の目がぱちりと瞬く。

「むかつくけど、師匠との付き合いは輝夜達の方が長いだろ。だから、先に譲ってやるよ」

余程癪だったのか、はたまた恥ずかしかったのか、最後の方は消え入りそうな程小さく、か細い声だった。

すぐにまたふんと鼻を鳴らして俯いたあたり、両方かも知れない。

「……妹紅」

輝夜は一拍置いて口を開いた。

「あんたやっぱりお馬鹿ね」

その言葉に妹紅は勢いよく振り返えると、呆気に取られたように目を丸くした。

恐らくあと数秒後には我にかえって怒鳴りつけてくるだろう。

だから輝夜は制すように続ける。

「付き合いに長いも短いもないでしょうに。大体参拝するだけなのにどうして順番なんて気にする必要があるのかしら？」

「……っ」

妹紅は一度言葉を飲み込むと、顔を赤らめて呟いた。

「……だって、最初に神様に届く願って……、その、重要……じゃん？」

もじもじとそう続けた妹紅の声は、先程よりも更にか細かった。

「……お」

対して、輝夜は面食らったように目を瞬かせた後、今日イチの声で叫んだ。

「乙女か!!」